日本名著全集
江戸文藝之部第四巻

近松名作集 上

この巻の装幀——

背及表紙意匠　黒木勘藏氏案
番附・紋章覆刻
見返し前附　小杉未醒氏畫
同上後附　森田恒友氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

近松名作集 上 目錄

近松門左衛門傳

黒木勘藏

一、作者の氏神、國民的大劇詩人

元祿時代といふ江戸時代の文藝の黄金時代に出て、その文藝の精華ともいふべき演劇と音樂との大改革大集成を成し遂げたわが國空前の大劇詩人は、いふまでもなく巣林子近松門左衛門である。かの傲岸不遜の儒者荻生徂徠をして、その文の妙を歎賞せしめたとか、（太田南畝「一言一話」）靈元上皇がその才筆を御賞美になられたとか、（濱松歌國「南水漫遊」）または雲州松平侯の茶道岸玄知が近松を訪問して出迎へた彼の顔を立ちながら打守り、女子供までも口にする淨瑠璃の名作者の顔を見るを得て宿望を果したといつて飄然として立去つた（「續近世奇人傳」）とかいふやうた逸話は、既に近松の在世時代において、その當時のあらゆる階級の人々から偉大なる作者として尊敬され、景慕されてゐた眞の國民的文豪であつたことを暗示するものである。

この大詩人の名聲は、彼が世を去るとともにいよ／＼高まつた。その歿後四年目の享保十一年に

出版された「今昔操年代記」には、「近松門左衛門は作者の氏神なり……今作者といはるゝ人々皆近松のいきかたを手本として書き綴るものなり。此道を學ぶ輩、近松の像を畫き晝夜これを拜すべし。又あるまじき達人敬ひ畏るべし。」といつて、到れり盡くせりの讃辭を捧げてゐる。

しかも、この「操年代記」の著者西澤一風は、近松の作品を專ら上場した竹本座に對抗して起つた豐竹座の作者で、且またその座の淨瑠璃正本の出版元であるから、いはゞ近松の反對派の首位に立つべき人物とも見られる。その反對派の首腦からかくまで尊崇されたといふ當年の近松の人氣は、やがて作者としての、彼の偉大さを語るものではないか。されば後には、彼の作は一切衆生を化度せんがために作られたもので、彼は人中の龍ともいふべきものである（並木五瓶「戯財錄」）などといふ有がたい說さへ出るやうになつた。

かうして、一方には作者の氏神扱ひされた結果は、竹本座が衰微の極に達した際の如き、その衰運を挽回すべく、櫓下に彼の容名をさへ据ゑるといふやうな事にまで及んだ。勿論、笑ふべき興行上の御幣擔ぎではあるが、近松に對する斯界の人々の尊崇の度を示す一證とはならう。

江戸の末期になつて、近松の著書が、種彦や三馬や豐芥子や達磨屋吾一等のやうな古書蒐集家によつて珍襲されたことや、また明治以後に近松熱の勃興したことなどは今更說くまでもない。要するに彼はその著作の中に永久に生きる國民的の大劇詩人である。

二、出生地に關する異說

然るにこの大劇詩人の傳記は甚だ不明である。本姓は杉森、名は信盛、通稱は平馬、それから平安堂・巣林子・不移山人・日一具足居士などといろ〳〵の稱があるが、一番通つてゐるのは作者名の近松門左衛門で、その名による作品は非常に殘つてゐるが、その私的生涯に關する事柄は、殆ど傳へられて居ないと言つてよい程である。第一、その出生地さへ曖昧で、異説紛紛、その主なるものを數へただけでも次の通り澤山ある。

（近松門左衛門肖像）

一、出雲國大原郡近松村(「増補和漢群書一覽」)
二、三河國(「戲財錄」「南水漫遊」に一說として掲ぐ)
三、肥前國唐津(「戲財錄」)
四、周防國吉敷郡山口(「戲曲小說通志」)
五、近江國三井寺高觀音近松寺(「淨瑠璃譜」)
六、越前(「蓑笠雨談」「南水漫遊」「嬉遊笑覽」)
七、北國(「橘庵漫筆」)
八、長門國大津郡深川村(佐々原某、椙杜某唱ふ)
九、長門國萩(「假名世說」所載、蜀山人碑文)
十、京都(「竹豐故事」)

以上の外にも、叡山の僧であつたとか、伊豫の松山の產であるとかいふ說も耳にしたことがある。そしてこれらの諸說の可否については、在來の近松研究者によつて繰返して論ぜられ、中には越前說に注意した人もあつたが、結局第九の長州萩說と第十の京都說とが有力なものとされて來た。とはいへ、この兩說の可否を決定すべき積極的證據はまだ見出されなかつたもので、私は從來この兩說については、次のやうな推斷を下してゐた。

そも〳〵近松が長州萩の人で、肥前唐津の近松寺に遊學し、後志を立てて上京したといふ說は、

近松の崇拜者たる並木五瓶や野里梅園等によつて寛政以後提唱され、それがいろ／＼に變形して傳奇的色彩をさへ帶びたものの如く思はれるが、これに反して京都説は、最も古くもあり最も信をおくべき「竹豐故事」（一樂子著、寶暦六年刊行）に明記してある。のみならず、西澤一風の「操年代記」や穗積以貫の「難波土産」（元文三年刊）のやうな、近松と時を同じうして互に交遊のあつた人々の著述には、出生地に關して一言も述べてゐないといふことは、前説のやうな傳奇的の經歴の無かつた事を暗示して、消極的に京都説を肯定するものとも考へられ、且また旣に廿歳前後にして淨瑠璃に筆を染めて居るその作者生活の上から考へても京都説の方が無理がない、とかう考へて居たのである。

「難波土産」より

三、家系及び父祖に關して

ところが、近年更に一つの異説が發表された。それは「國語及國文學」の大正十四年八月號に掲載された田邊密藏氏の「近門松左衛門の出所に就て」といふ文である。これは田邊家と昔親族關係のあつた淀藩士杉森家の系譜に基いた説で、同誌にその系譜を載せて解説を加へて居られる。私はその系譜の原本を見たのではないが、信用すべき同誌によつて、それを檢するに、この系譜は頗る注目すべき物ではなからうかと思はざるを得ない。

その杉森系譜の示すところによると、同家の遠祖三條三位中將實次は京都の動亂を避けて、その領地なる近江國神崎郡本庄大門村に住んだ。その嗣の實常が初めて武家となつて佃氏と稱し、その嗣信次がこれを杉森氏と改め、淺井氏に仕へた。その信次の嗣信親の代に淺井氏沒落となり、一時浪人となつたが、その嗣市兵衛信重が豐臣秀吉・秀頼に歷仕し、大阪の役には木村長門守の手について戰功があつた。大阪沒落後は京都に住んだが、のち稻葉美濃守正則に抱へられて祿千石を食んだ。その家を繼いだのが長男の信幸で、杉森家の當主信忠氏はその七世の孫にあたる。次男の市左衛門信義、この人が近松門左衛門の父にあたる人で、別れて越前宰相忠昌に仕へたが、のち浪人して京都に住み、六十七歳で歿し、日蓮宗一致派の本山本國寺に埋葬された。

この信義の子に智義・信盛・伊恒といふ三人があつて、長男の智義は織田侍從長頼に仕へて卅七歳で江戸に歿し、三男伊恒は後に岡本爲竹(一抱)と稱へた。その中の二男の信盛が、即ち近松門左衛門であるとかういふことになつて居る。

即ち從來、出生地や系圖に關して幾多の異說をたてられた近松門左衛門は、この杉森系譜によれば、豐臣氏に仕へて大阪の役に働き、のち祿一千石を以て稻葉正則に抱へられた杉森信重の孫であり、初め松平忠昌に仕へ、のち浪人して京都に住んだ杉森信義の子である。さればその家は淀藩士杉森家の分家で、祖先は近江の淺井氏に仕へた家柄であるといふ事を明かにすることが出來る。のみならず、件の系譜の信盛の條下に「近松門左衛門、仕一條禪閣惠觀公於洛卒」と註記されて居る。田邊氏は近松は杉森家の別家筋の二男であるがために、その經歷の詳しい註記の無いのは惜しいと言つて居られる。

いかにも同感であるが、しかし、この系譜によつて、從來の疑問は大抵解けるやうに思はれる。例へば彼の辭世の文の冒頭にある「代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿に仕へ咫尺し奉りて寸爵なく……」(三頁の挿圖參照)といふ句も、この系譜を見れば成るほどと首肯される。また「竹豐故事」に「元來は京都の産にて、さる堂上の御家に仕へ、本姓は杉森氏にして由緒正しき人なりしが、故有りて浪人となり……」と記してあるのも、事實を傳へつゝ、この大文豪に敬意を持ち、わざと具體的表示を避けたやうな書き方であるとも取ることが出來る。のみならず、その出生地に關する近江・北國・越前・京都等の諸說、いづれも皆全然架空ではなく、根柢を同じうする幹枝に過ぎず、結局杉森系譜に示される事實の一端づつを捕へたものである事が明かになるわけであり、また親の代から日蓮宗であつたといふことも知られる。

故に近松の家系を知る上に於ては、從來の諸說諸文書中では、この杉森系譜が最も確實性を有すると言つてよからうと私は思ふのである。

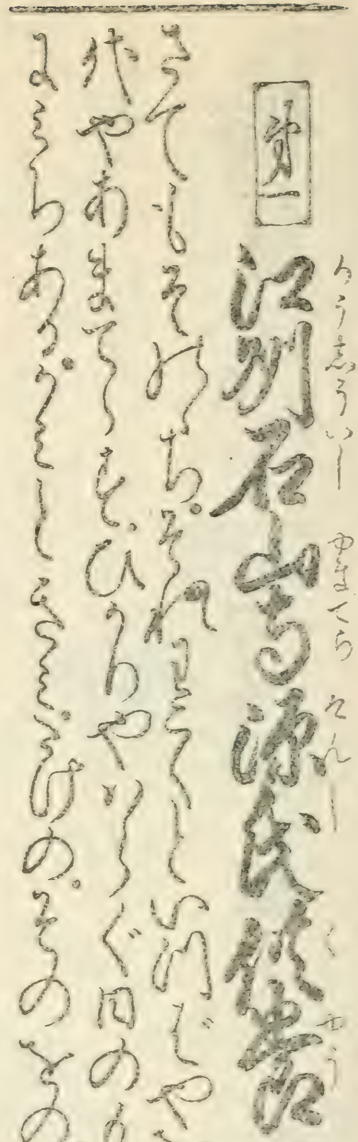
四、作者生活に入る迄

かういふ次第で、杉森系譜によれば、近松の家系は明白になるが、次にその生れたのは越前か京都かは、まだ明かでない。併しこれは左程重大な問題ではない。いづれにせよ、近松は京都で育ち京都で修業したものと考へて差支はないと思ふ。

本名作集に加へてある寶永二年、近松五十三歳の時の作「用明天皇職人鑑」の第三段目、高砂の浦梵鐘引上の場における五位之介諸岩の供の少年の物識なのを怪しむ里人のために諸岩が辯解して「イヤ名もなき土民にて候が、彼は幼少より都の學者へ奉公に出せしが、生れついて覺え強く、一度聽いては一生忘れぬ器用者、却つてそれが仇となり、小賢者とて又しては人に憎まれ候。」と言つて居る。この少年は花人親王が世を忍ぶ手段として從者にやつして居られるのであるが、作者はこの少年に托して自己の少年時代に京都で修學したことや、その際の天才的の鋒芒が却つて身の禍となつたことなどを追憶し告白して居るのではないかと思はれるやうな暗示的の文である。

その作品を通して見た近松は、實に少年時代において「一度聽いては一生忘れぬ器用者」であつたらうと思はざるを得ないほどに、豐富な學殖と、驚くべき聯想力と犀利な洞察力とを具へてゐる。さういふ神童的の秀才が、劇作家となる前に「三槐九卿に仕へ」たのであるが、それは正親町家で

あるとも。阿野家であるとも傳へられるが私は一條禪閤に仕へたといふ說を信じたい。「聲曲類纂」の著者齋藤月岑が、近松の仕へたといふ一條禪閤を文明十三年薨去の兼良と解して時代が相違すると言つて居るのは惜むべき誤解であつた。前述の杉森系譜にも見られるやうに、近松の仕へたのは一條禪閤惠觀である。惠觀は後陽成天皇の第九子で、名は昭良、一條家を繼いで寛永六年關白とな

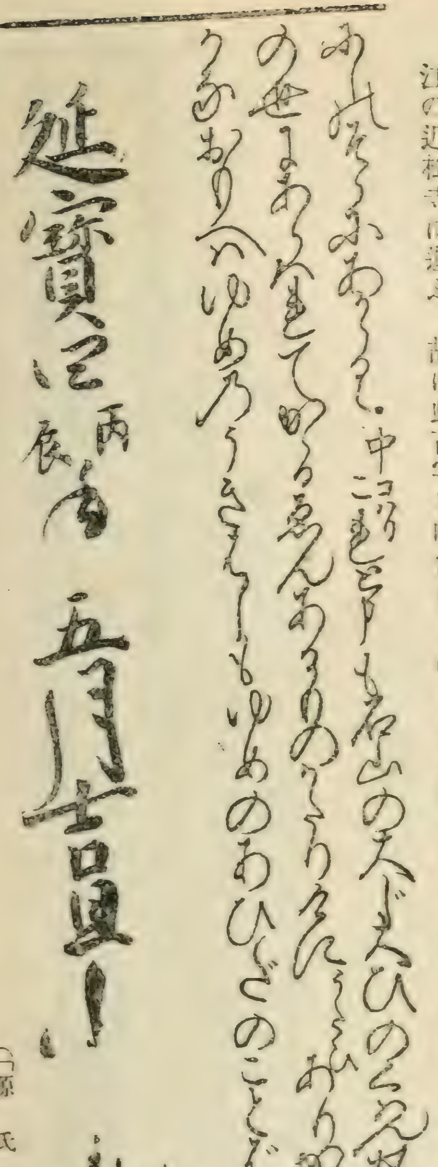


り、慶安四年剃髪、寛文十二年二月、六十八歳で薨去した。近松の仕へたのはこの人である。その薨去の年寛文十二年には近松は二十歳であるが、その前後に一條家を辭したものかと思はれる。

とにかく、この時が近松の生活上の一大轉機であつたかに想像される。惠觀公薨去の前年、山岡元隣の俳書「寶藏」追加に、父信義等とともに杉森信盛の名を以て「しら雲や花なき山の恥かしく」の句を載せてゐる近松は、當年既に他の一方においては、劇作者として一歩を踏み出して居つたの

であらう。

その後、近松は一時近江の近松寺(こんしやうじ)に遊んだらしい。但し幼年の時から唐津の近松寺に學んだといふ説(「淨瑠璃譜」等)もあるが、私は「音曲道智篇」の「此人は近松の始は堂上方に仕官して、其後近江の近松寺に遊ぶ、故に此苗字を呼びけり」」といふ記事の方が信ずべき可能性に富むと思ひ、今は



(「源氏供養」巻尾)

これに從つておく。

勿論、長い年月を、こゝに過したとは想像し得られないが、近松寺遊學は事實であつたらう。その動機、その目的は明かでないが、舊主惠觀公や、俳道の先輩山岡元隣が、年を同じうして長逝したことなども、多感な青年詩人に刺戟を與へ、寺院生活におもむかせる一原因となつて居るかも知

れない。それは兎も角、精神生活の轉機に際會してゐた彼にとつては、周邊には多くの名勝古跡あり、殊に古來音曲に緣故の深い關の蟬丸宮の別當寺たる近松寺の生活は、その氣分を轉換し、詩嚢を裕かにする上に、少からず、效果がありはしなかつたらうか。今はただその前後の消息を明かにすべき材料の無いのを甚だ殘念に思ふ。

五、作者生活の初期

近松の作者生活はいつ頃から始まつたか、その處女作は何であるかといふ事も、近松の傳記を考へる上に頗る興味もあり、また大切な問題である。今日までの研究家の發表を綜合すれば、延寶四年卽ち近松二十四歳の時の作「源氏供養」が最古のもので、自然、この頃に作者として立つたと考へられて居るやうに思はれるが、私は近松廿五歳の時・京都の都萬太夫座のために脚色した有名な「藤壺の怨靈」の原作である井上播磨掾の正本「花山院

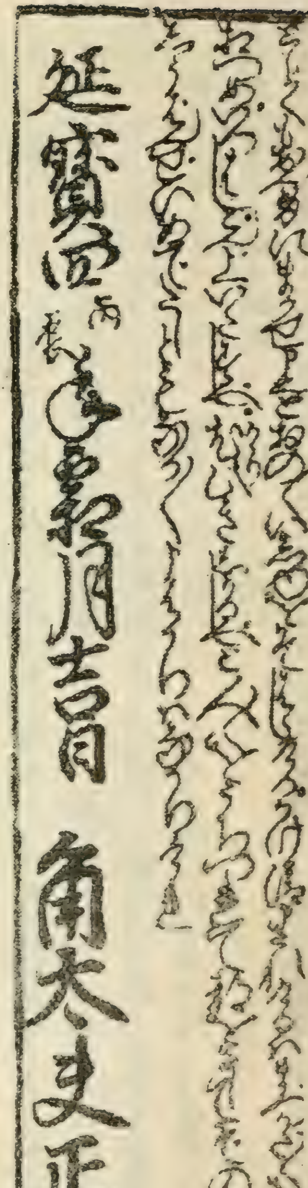
「源氏供養」より

后諍」(寛文十三年正月刊行)を、近松の作なりと考定するが故に、その作者生活は寛文十二年、即ち近松廿歳の時に始まつて居ると考へるのである。その「花山院后諍」の考證については、後の解題にゆづつて、玆には省略する。その後二三年間の著作の有無は、現存の資料では未だ不明である。井上播磨掾のために作つたものがあるかに推測されないでも無いが、確と證すべき材料を缺く。

近松廿四歳、延寶四年五月には、その前年京都に初めて操芝居の櫓をあげた宇治嘉太夫のために書いた「源氏供養」が刊行され、同年十二月には山本角太夫のために執筆した「瀧口横笛」が出版された。

當時、上方の音曲界では、井上播磨掾が大阪の樂壇を代表する名人であり、京都では新進の宇治嘉太夫と山本角太夫とが最も人氣あり、この年十

「瀧口横笛」より



（「瀧口横笛」巻尾）

二月十二日に角太夫が相模掾を、翌延寶五年閏十二月には嘉太夫が加賀掾を受領して、いよ／＼名聲を高めるに至つた。青年作家たる近松は、これらの三名家の操芝居のために淨瑠璃を書いたのであるが、殊に加賀掾との關係は頗る密接であつて、以後約十年間、加賀掾の藝歴中、最も有意義な時代における淨瑠璃中の佳作といふ佳作は、殆どすべて近松の作にかゝると言つても差支ない。かくして近松は、三十歳前後にして既に淨瑠璃作者としての非凡の才能を示したのであつた。

一方に人形劇のために淨瑠璃を作ると同時に、近松はまた他の一方に於いては歌舞伎劇の脚本をも書いた。その脚本の最も古いものとして傳へられるのは、延寶五年都萬太夫座上場の「藤壺の怨靈」である、藤壺の女御の怨念が藤棚の藤の花にのり移つて大蛇と化し、讎敵の弘徽殿の女御を苦しめるといふ趣向で、大好評を博した。（「古今役者大全」）

大阪の荒木與次兵衛座のために、名妓夕霧の追善劇「夕霧名殘の正月」を書いたのはその翌年で、伊左衛門には坂田藤十郎、夕霧には霧浪千壽が扮して大當をとり、これが實に藤十郎の出世藝となつた。元祿劇壇の京阪を代表する二大偉人たる、近松と藤十郎との提携は、實にこの時に始まつたものと見てよい。

かくして劇作者としての近松門左衛門の名聲は、次第に高まると共に、近松はいよ〳〵劇道のために一身を捧げようと決心したものの如く思はれる。それは近松三十五歳の貞享四年刊行の評判記「野郎立役舞臺大鑑」に載つてゐる近松に對する次の評言によつて證明せられる。

或人曰く、よい事がましう淨瑠璃本に作者と書くさへ褒められぬ事ぢやに、この頃は狂言までに作者を書き剰へ芝居看板辻々の札にも、作者近松と書き記すは、いかい自慢と見えたり。この人歌書か物語を作らば、外題を近松作者物語となん書き給ふべきや。答へて曰く、御不審尤に候へども、兎角身すぎが大事にて候。古ならば何とて淺々しく作者近松などと書き給ふべきや、時業に及びたるゆゑ、芝居事で朽果つべき覺悟の上なり。然らばとてもの事に人に知られた事がよい筈ぢや。夫ゆゑ押出して萬太夫座の道具直しにも出給ひ、堺の夷子島で榮宅と組んでつれ〳〵草の講釋も致されけるなり。雙方和漢の評に曰く、此人の作られける近代の淨瑠璃詞花言葉として內典外典軍書等に通達したる廣才の程明けし。」

系圖正しい武門の出であり、しかも當代第一の名門と崇められた一條禪閣に仕へた秀才杉森信盛

は、いよ〳〵傳統の殻を拔け出て一個の民衆藝術家として、その天分を發揮しようとした。ために或る時は河原者の群に投じて、芝居の道具直しにも出た。或はまた天和元年五月開版の加賀掾の正本「つれ〴〵草」の原據とした兼好の「徒然草」の通俗講義を開いたこともある。そしてつひに、世間の毀譽褒貶を度外視して、淨瑠璃本には勿論、歌舞伎の狂言本にも、また芝居看板にも、辻々の札にも作者近松門左衛門と堂々とその名を揭げるに至つた。

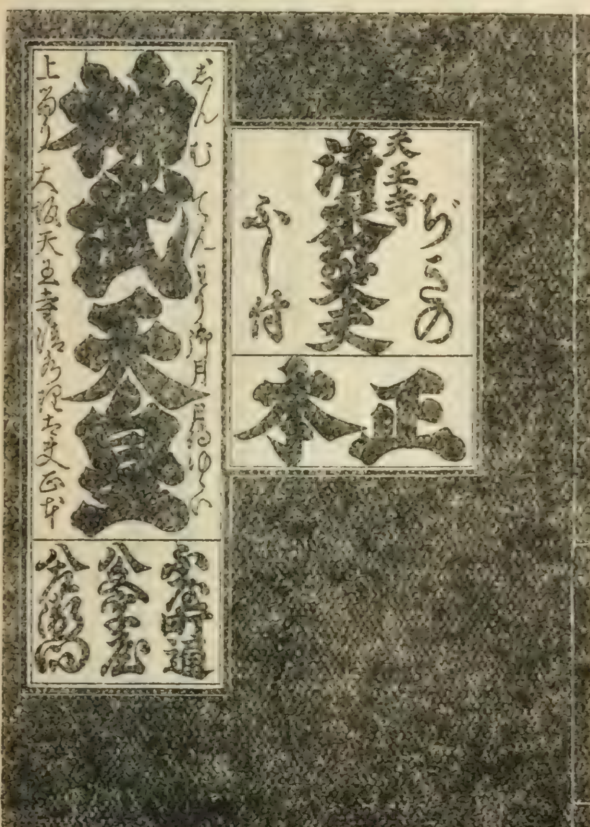
「芝居事で朽果つる覺悟の上」でなくては、これ程まで徹底した態度に出ることは、當時に於ては出來兼ねたに相違ない。して見れば近松は、實に元祿時代といふ民衆藝術勃興時代の生んだ風雲兒であると共に、またその時代を導き出した天才であつたといはざるを得ない。そして近松のこの徹底した態度を毀る者も、辯護する者も共に「內典外典軍書等に通達したる廣才」には推服して、その眞價はいよ〳〵世に認められるに至つたのである。

六、活躍時代

元祿樂壇の最大偉人たる義太夫節の始祖竹本義太夫と近松とが提携するに至つたのも此頃であつた。竹本義太夫は大阪の郊外天王寺村の百姓の子五郎兵衛といつて、天性音曲を好み竹馬に乗る頃から當時大阪に持囃された井上播磨掾の淨瑠璃に心魂を奪はれてゐたといふ。長ずるに及んでも、ひたすら其稽古に熱中して家業の如きは捨てて顧みなかつた。尤も義太夫は直接播磨掾に師事したのではなく、播磨掾の高弟淸水理兵衛に學んだのであつた。此理兵衛は大坂安居天神の南隣に住ん

だ料理屋の亭主であるが、播磨節に堪能で、當時大坂では播磨掾の後繼者と目された井上市郎太夫と並稱された上手で、播磨掾歿後は「今播磨」と呼ばれたほどの伎倆を持つてゐた。此理兵衛が素人天狗連に擁立されて道頓堀に櫓をあげ新作「上東門院」を上演した時後の義太夫の五郎兵衛に、初めて床に直つてワキを語つた。其後京都に上つて宇治嘉太夫の配下に屬し、延寶五年正月廿六歳の時嘉太夫座で「西行物語」の二段目藤澤入道夜盗の修羅の條を語つた。當時の模樣を「操年代記」は次のやうに記してゐる。

「西行物語といふ淨瑠璃の二段目藤澤入道夜盗の修羅を五郎兵衛語られしが、元來大音にて甲乙ともに揃ひ俎板に釘かすがひを打ちたる如く、何程大入にても屆かぬといふことなし。宇止め、字頭の文字消えず、文のあやよく聞えければ見物喜ぶこと限りなし。嘉太夫も五郎兵衛淨瑠璃には心置き、後に我が鉾先のかひになるべきは此男と言はれしは、流石



の嘉太夫ぞと後にぞ思ひ知られぬ……」

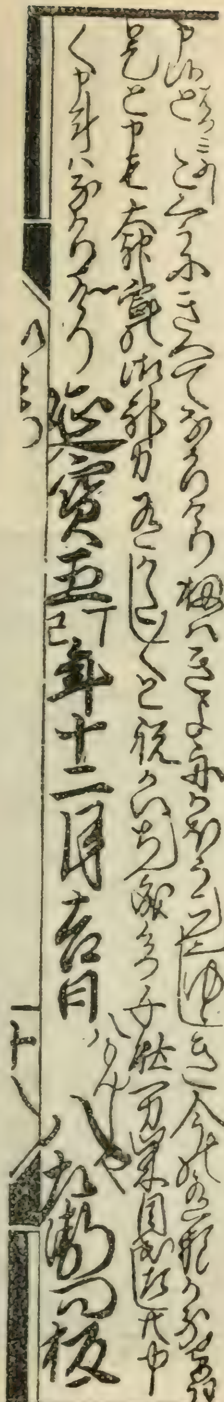
五郎兵衛はこの好評に力を得たものか、清水理太夫と改名して獨立し、この延寶五年十二月には「大阪天王寺清水理太夫正本」と銘打つた「神武天皇」を刊行し、京都の四條河原に櫓をあげて此「神武天皇」や「松浦五郎」などを興行した。併し、天性の大音に加ふるに金平式の剛健なる播磨風の語口を本體とした彼の藝風は修羅場などを語つてこそ成功したらうが、大體に於て纖細婉麗な曲風を味ふことを悦んだ京都の人々の耳には適しなかつたものか、或はまだ彼の藝そのものが山本土佐掾や宇治加賀掾等の先輩を壓倒する程には熟達してゐなかつた爲か、兎に角失敗に終つて「操年代記」の著者をして「出たり引込んだり半年續かぬ芝居、見るに氣の毒の頭をかきぬ。」といふ記錄を殘さしめた。

「神武天皇」より

ところが幸にして理太夫は、當代の興業界の大策士竹屋庄兵衛と提携することが出來た。竹庄は

これまで宇治加賀掾一座の興行主として働いて來たのであるが、たま／＼仲たがひをしてわかれ、清水理太夫に目をつけ、說いて一座を組織したものである。理太夫はこれを機會に名も竹本義太夫と改め、先づ修業のため西國筋へ向ひ安藝の宮島などでも興行して、やがて大阪に歸つて道頓堀に櫓をあげた。

これが貞享元年、義太夫三十四歲の時で、實に竹本座の起原である。京都で失敗してから、これまでに約五六年は過ぎてゐるが、この間が義太夫にとつては藝道練磨のために最も肝膽を碎いた時



（「神武天皇」正本卷末）

と思はれる。その效は空しからず、竹本座旗擧げの興行には、近松が前年加賀掾のために執筆した「世繼曾我」を語るや好評湧くが如く、つゞいて「藍染川」「以呂波物語」と、これまた近松がさきに加賀掾に書いて與へたものを借りて新に作曲して上演し、その度每に好評を得、その年の暮には泉州堺に興行していよ／＼評判よく、義太夫の名は忽ち京阪地方に轟き渡つた。

然るに其翌年正月加賀掾がわざ／＼京都から下阪して義太夫に戰を挑んだ。此時の加賀掾の出し

物は西鶴の作「暦」であつた。義太夫は近松の新作「賢女手習并新暦」を出して之に對抗して好評を贏ち得たので、加賀掾は「暦」を中止して近松の作「凱陣八島」を之に代へた。そこで又逆に加賀掾の方に人氣が立つたが、不幸にも興行中火を失したので加賀掾も旗を卷いて歸京してしまつた。

之が爲に義太夫の名聲は益々高まり、竹本座の基礎は愈々鞏固になつた。かういふ好結果を得たといふことは、義太夫其人の藝の力にもより、又大阪の人々の贔屓の力も與つてゐることは勿論であらうが、作者近松の功も亦、これに勝るとも決して劣るものでないことは、老巧な加賀掾が西鶴作の「暦」を出して失敗し、近松作の「凱陣八島」によつて頽勢を挽回した事實が雄辯に物語つてゐる。

そこで義太夫は更に近松に新作を乞ひ、近松は又彼の前途を祝ふ意味を籠めて新に「出世景淸」を作つて與へた。この作は物語風の敍事本位の古淨瑠璃の舊套を脱して、描寫を重んずる戯曲的形式と內容とを具備する新時代の淨瑠璃となる先驅をなした劃期的のものと言はれてゐる。貞享二年二月、近松三十四歳の作である。

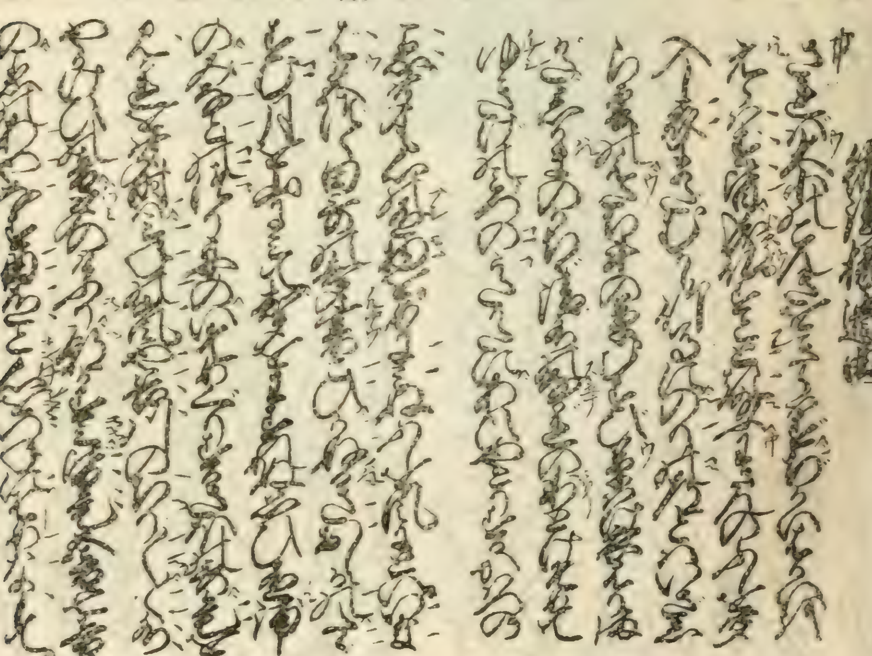
續いて同年竹本座に上場した「源氏移徙鞍」も「三世相」も「佐々木先陣」も皆近松の筆に成つたもので引續き好評であつた。爾來近松は義太夫のために年々作品を提供し、義太夫は又その作品の上演に肝膽を碎いていよ／＼技も進み名聲も高まり、元祿十四年五月、受領して竹本筑後掾藤原博教と名乘るにいたり、名實共に上方樂壇の霸者となつた。近松は當年四十九歳、義太夫の出世を祝して「蟬丸」を新作して與へた。

かういふ風に近松と義太夫との關係は極めて密接であつた、と同時に、他の一方に於ては又前記のやうに「夕霧名殘の正月」を緣として提携した坂田藤十郎との關係も亦義太夫こ勝るとも劣らぬほどの親密さで、近松は此藤十郎の爲に絶えず脚本を書いてゐる。近松の作つた歌舞伎脚本の總數はどれほどあるか、今尚不明であるが現にそれと傳へられるものは廿八篇を數へ得る。其中の廿篇は藤十郎が中心となつて演じたもので、近松の歌舞伎の傑作はすべて此中に含まれて居る。大抵元祿十年前後の作が多いのであるが、此時が即ち上方における元祿期の歌舞伎劇の全盛時代であつた。されば近松は元祿の盛時

竹本筑後掾の像

において、劇作者としては操と歌舞伎との兩方面に對して恰も天日の如き觀を呈したのである。しかしこの偉觀は長くは續かなかつた、やがて近松は脚本の筆を絕つて淨瑠璃の著作にのみ沒頭するやうになつた。

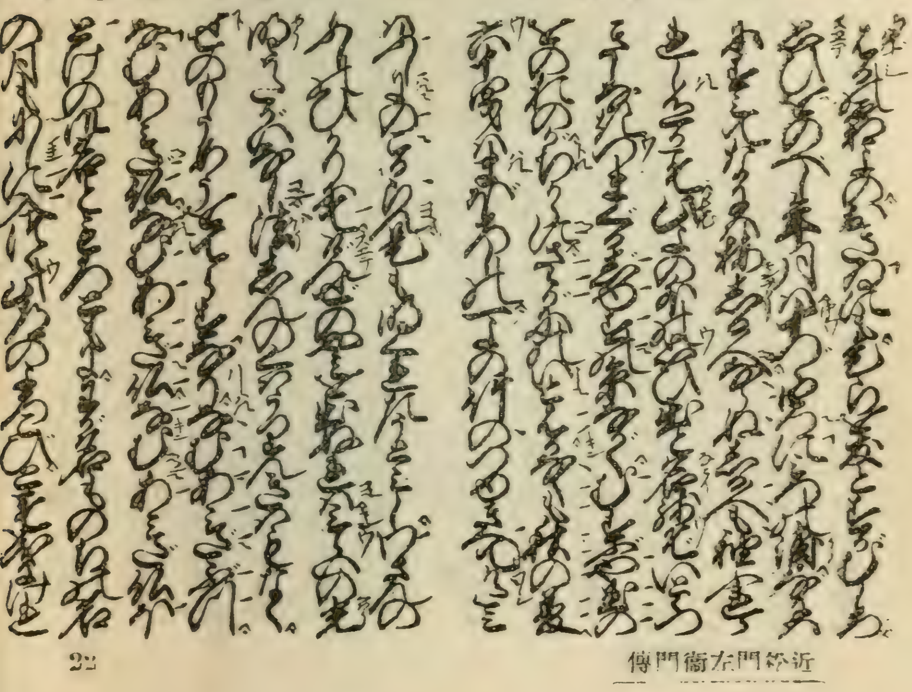
近松が心中物の陳呉として「曾根崎心中」を作り、これを上演した竹本座が空前の大當りをしめたのは元祿十六年で、從來とかく三八の十八で經營難を續けた竹本座は一擧にして全負債をも償却し得た。天才肌で寡慾で門徒宗の信者である筑後掾は、これを機會に引退の決心をした。それが機緣で座の經營は竹田出雲掾の手に移り、筑後掾は爾來興行上の煩累を脫して、單に太夫として抱へられることになつたが、同時に近松は座附作者として招聘された。從來主として京都に在住して著作に從事した近松が大阪に移住することになつたのもこの時である。これが寶永二年のことで、この頃から歌舞伎の脚本は殆ど作らなくなり、ついで寶



永六年坂田藤十郎の死と共に、全く歌舞伎の筆は絶つたやうである。

かくして近松は一意竹本座のために淨瑠璃を作るべく靈筆を振つたが、正徳四年九月十日、近松にとつては最も關係の深い藝術上の好伴侶であつた筑後掾がこの世を去つた、筑後掾は近松よりも二歳の年長者で六十四歳であつた。「筑後掾道曲」「淨瑠璃外題づくし」の二短篇を作つて近松はこの樂壇の偉靈を弔つた。

その後の近松は、筑後掾の後繼者たる二世義太夫一座のために幾多の傑作を與へてゐたが、享保九年十一月二十二日七十二歳を以て長逝して、攝津川邊郡久々智の廣濟寺に「阿耨院穆矣日一具足居士」の碑銘を遺した。筑後掾におくるゝこと十年、その十年の間こそは、作者としての近松の伎倆の最も圓熟の域に達し不朽の名作を多く作つた期間であつた。作者を以て生命とした近松に關する傳記としては、この點は最も重要視す



べきであるが、それを明かにする爲には寧ろその私的生活より眼を轉じて、改めて作品を通してその作者生活を觀察する必要がある。

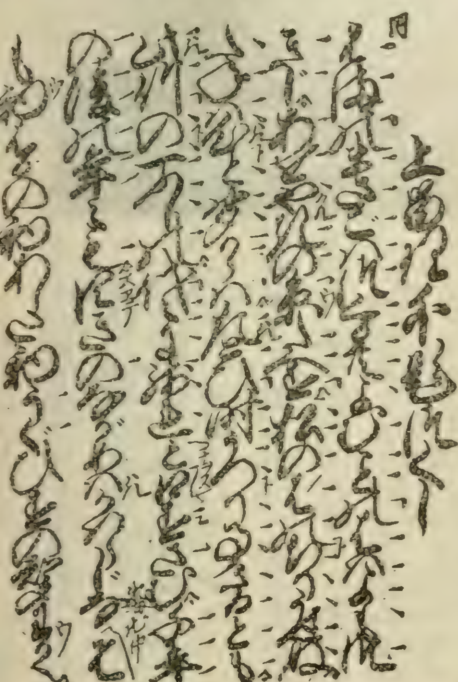
七、作品を通して見た作者生涯

（近松夫妻の墓碑）

近松の處女作ともいふべき「花山院后諍」の刊行されたのは延寶元年正月である故、其前年寛文十二年、近松二十歳の時には既に作者生活に足を踏みいれてゐたと見られる。絶筆の「關八州繫馬」は享保九年であるから其間實に五十有三年の歳月を閲してゐる。半世紀に亙る作者生涯の間に、近松は少くとも淨瑠璃百十篇、歌舞伎脚本卅八篇、通計百四十篇の戯曲を書いてゐる。尤も此作品の總數については、後世の研究家各〻所見を異にして一定しない。といふのは、元

祿以前の正本には殆ど作者名はないので、作の形式・內容乃至傍證を基として推定を下すより外に方法が無い結果で、人によつては其選定の標準が頗る寬大で自然作數も增加するが、徒に作數を多くしようとするのは決して近松の價値を高める所以でなく、却つて最屓の引倒しとなることを注意せねばならぬ。確證も無いいかゞはしい作は篩ひ落す方が、寧ろ此大詩人を景仰する者の執るべき態度であらう。

さういふ立場から嚴選した結果約百四十篇の作品を年次に讀んで見るに、作の內容形式ともに年と共に進步發展の跡を示してゐるが、その中におのづから四期の區別を認め得ると思ふ。今これを便宜上、古淨瑠璃時代、脚本全盛時代、世話物全盛時代、圓熟時代と假稱する事にする。

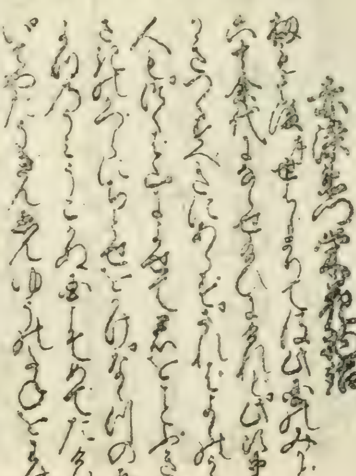


先づ第一期の古淨瑠璃時代とは、近松の處女作から始つて竹本義太夫の爲に「出世景淸」を書いて與へた貞享二年に至るまで、卽ち三十二歲までを指すのであつて、井上播磨掾・山本土佐掾及び宇治加賀掾の爲に淨瑠璃を作ると同時に、歌舞伎の脚本にも筆を染めて數篇を作つた時代である。

此時代の作が幾篇あるかを正確に知ることは殆ど不可能であるが、現存の正本中それと推定する

事の出來る約二十篇を通讀して見るに、其文體は物語風敍事風で、題材を古典に求めてゐるものが多い。「花山院后諍」「源氏供養」「赤染衛門榮花物語」(延寶八)「つれ／＼草」(元和元)「鑓谷物語」(天和三)の如きがそれである。

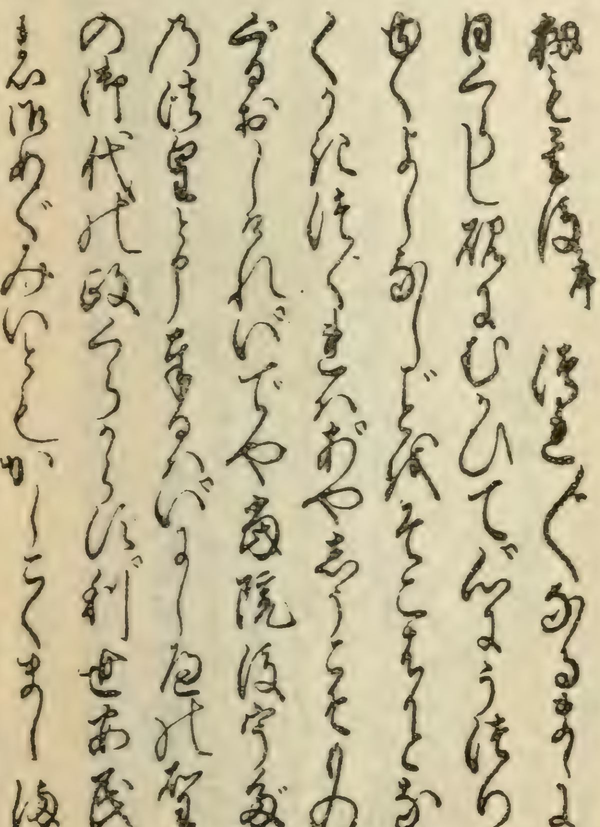
かと思ふと又佛教臭味の非常に濃厚な「以呂波物語」(貞享元)や「舍利」(元祿初年頃迄の作)の如きもある。就中、目につくのは女性の嫉妬を主想としたもので、例へば藤壺の女御型の女が多い。これは作者の青年時代の環境に深い關係のある王朝古典趣味、更にいはゞ王朝時代の物語や、謠曲の源氏物などの影響もあつたことと想像される。



殊に注目すべきは「赤染衛門榮花物語」に扱はれた、僧侶の色慾に溺れた結果の執念による化現であつて、これは女の嫉妬の執念より一歩を進めたもので、人間性の本能の强烈さ、本能と傳統的の敎義の束縛との葛藤を示したもので、後の淸玄物や法界坊の戲曲の原據をなすものである。戀愛について、かういふ强烈執拗な嫉妬を描いてゐると共に、一方においては瀧口横笛の如き、「以呂波物語」のいろはの前の如き、「蘆染川」(延寶末)の辨の君の如き、又は「東山殿子日遊」(元和元)の八雲の前の如き、戀に生きて戀に死ぬ戀愛至上主義の女性をも描いてゐる。この型の女性は後の世話物においていよ／＼活躍するのであるが、その原型は既にこの期間の作に表れてゐる。

尙最後に注意すべきは、當時の公卿生活の大膽な描破を試みてゐる「百夜小町」（貞享元）の如き、又は純世話物とも見るべき「夕霧名殘の正月」（延寶六）「夕霧七年忌」（貞享元）の如き歌舞伎の脚本をも作つてゐる點で、多方面に向つて既に其詩才が發揮しかけて居るのを見る事が出來る。戲曲として整つた作としては「門出八島」「凱陣八島」「世繼曾我」等をあぐべきである。

第二期は近松の三十三歳から五十歳まで即ち貞享二年から元祿十五年までの十八年間である。一方に於ては竹本義太夫と提携して淨瑠璃を作るとともに、他の一方に於ては坂田藤十郎の爲に盛に歌舞伎の脚本を書いた時代である。淨瑠璃は少くとも約三十篇、歌舞伎の脚本で知られてゐるものが十四篇ある。併し脚本は傳本が極めて稀少である上に當代の記錄に乏しいから、現在こ



（「徒然草」巻頭）

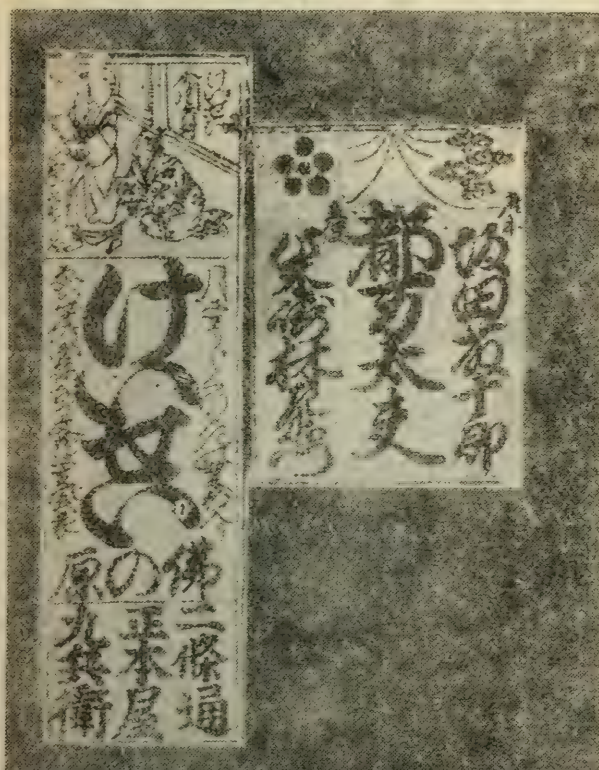
れだけしか擧げ得ないのであつて實際はもつと澤山作つたらうと推測される。のみならず、今日傳はる近松の脚本中の傑作と稱へられる「水木辰之助餞振舞」（元祿三）「傾城阿波鳴門」（同上八）「一心二河白道」（同上一一）「傾城佛の原」（同上一二）「傾城壬生大念佛」（同上一五）等はみな此期間の作であるから脚本全盛時代といひ得ると思ふ。

淨瑠璃の方面にも、色々の變つた作はあるが、代表的の傑作とすべきものは無い。其諸篇を通讀してみるに、如何にして非情の木偶を活躍せしめようかといふ點に少からず苦心すると共に、詩材を多方面に求めて色々の試みをして見た跡がよく觀取される。

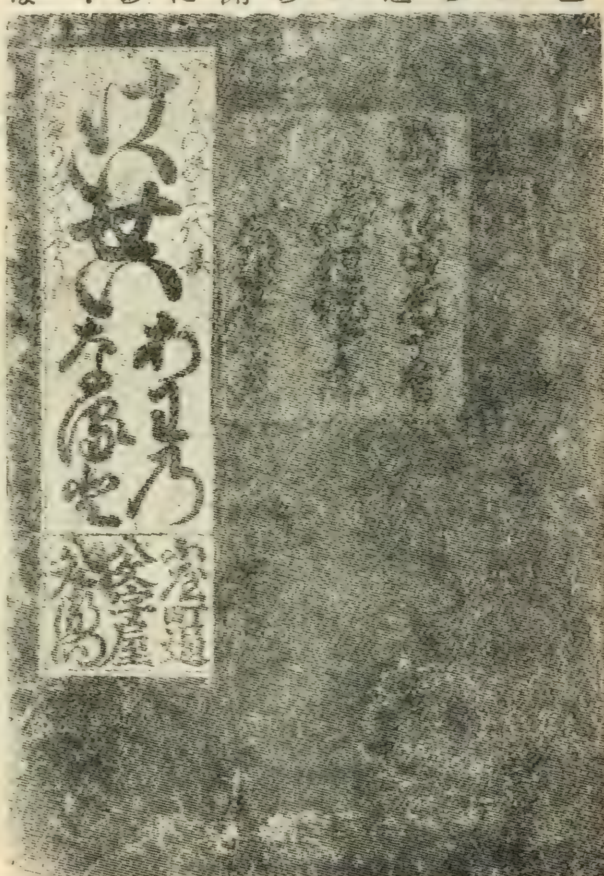
「天智天皇」（元祿二）「日本西王母」（同上五）「松風村雨束帶鑑」（同上七）「一心五戒魂」（同上一一）の如き架空的夢幻的色彩の濃厚な作が多いと共に、

「夕霧七年忌」より

「大覺大僧正御傳記」(元祿四)「釋迦如來誕生會」(同上八)「賀古教信七墓廻」(同上一五)のやうな佛教的色彩の濃厚な作があるかと思へば、軍記物、復讐物に題材を求めた「出世景淸」(貞享三)「本朝用文章」(元祿初)「源氏烏帽子折」(同上六)「賴朝伊豆日記」(同上一〇)「百日曾我」(同上一〇)「曾我五人兄弟」(同上一四)等の如き現實味の勝れて場面の整つた作もあるといふ風である。然るに眼を轉じて歌舞伎の脚本を見れば、其殆ど總てはお家騷動物型である。併し同じくお家騷動を主題とはするものの、同時代のやゝ先輩格であつた富永平兵衛のやうに騷動其物の經過を主眼とし、又はそれに敵討などをからませて筋の複雜と場面の變化とのみを圖つて、わざとらしい義理だてのみを重んじてゐるのとは違つて、其騷動の動機となる事件、又は騷動の中心乃至は騷動に伴ふ挿話とも見るべき場面の描寫、人物の働き、人情の委曲等を描かうとしてゐる。故に大名の若殿を中心としての耽溺生活



や、家を捨て名を捨てての戀愛至上主義の徹底境や、義理を立てぬく遊女の意氣や、空閨を守る女性の忍從の生活や、又其反對に失戀に伴ふ執念の化現や、死靈活動、主家横領を企てる惡人の奸計、忠臣烈婦の苦忠等の配合された脚色が多い。故にお家騒動とはいふものの其内容に於ては一種の世話物であつて、作中の主要なる場面は大抵遊里の生活の寫實であり、濡事口説の描寫であり、遊女の身請の場面であるのが多い。例へば「佛母摩耶山開帳」(元祿六)の第二段が、室の揚屋における若殿と遊女との口説の場である如き、「傾城阿波鳴門」の第二段が、乳守の廓における遊女身請の場面なるが如き、又「傾城佛の原」の第二段が、三國の揚屋における濡事の場であるが如き、乃至「傾城壬生大念佛」の中卷が、鞆の揚屋の活寫である如き卽ちそれである。



これを年代的に考察すると、此種の脚本が卽ち次期における淨瑠璃の世話物の先驅をなすと共に、

来るべき時代物の脚色上に變化と潤ひと現實味とを與へる源泉となつてゐる。のみならず、この期間に作られた淨瑠璃と比較して見れば、作者が歌舞伎劇と人形劇とに對する作劇上の用意の相違を明かに觀取し得るのである。

第三期は初めて心中物を書いて大成功を收めた元祿十六年から竹本筑後掾の世を去る正徳四年まで、即ち五十一歳から六十二歳までの十二年間である。前期に反して脚本は極めて少く、僅に「唐崎八景屛風」(元祿一六)「吉祥天女安產玉」(寶永元)「傾城金龍橋」(同上五)「御曹司初寅詣」(同上六)の四篇をあげ得るに過ぎないが、淨瑠璃の作數は甚だ多く四十篇に及ぶ。

「佛母摩耶山開帳」より

就中、近松の藝術的生命をして不朽ならしめるといはれる世話物を十六篇迄作つてゐる。又注目すべきは、時代物と世話物との中間に位するやうな作もあることで「傾城反魂香」(寶永五)「傾城吉

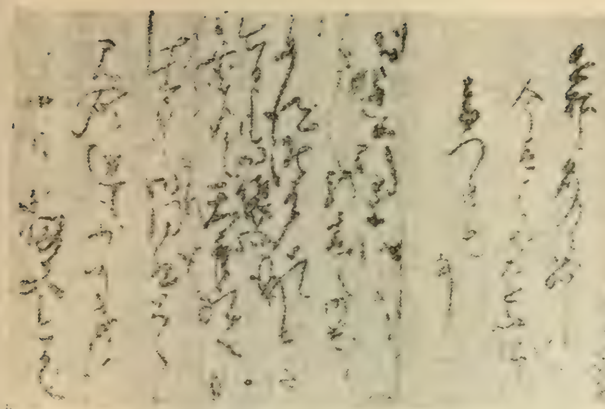
岡染」（正德二）の如きは卽ちそれで、これまでに類例のない作柄であつて、前期の脚本の結構脚色を聯想させられる。

のみならず時代物も亦作風に一變化を來して非常に技巧的現實的となり、後世の竹田出雲・文耕堂・並木宗輔等の如き純技巧派の先驅をなすやうな作が多い。卽ち身代り、愁歎、懺悔の物語、因果の巡り合せ、歌舞伎の名優の舞臺姿を思はせるやうな人物の活動といふやうな場面が特に目につく。かういふ風に、作風に變化を來した原因は、勿論時代の好尚の變遷や舞臺技巧を重んじた座本竹田出雲からの註文の關係などもあつたらうが、前期において近松が、歌舞伎の方面で鍛へた手腕を、人形劇の方面に振つた結果で、人形劇の歌舞伎化が行はれたといふ點を見遁してはならぬと信ずる。「雪女五枚羽子板」（寶永二）「用明天皇職人鑑」（同上二）「碁盤太平記」（同上三）「百合若大臣野守鏡」（同上七）「吉野都女楠」（正德元）「嫗山姥」（同上二）等がその代表作である。

第四期は「國性爺合戰」（正德五）を書いた六十三歲から、其世を去る享保九年までの十年間であつて、年齡から言へば晩年といひ度いのであるが、其作品を見ると實に作者としての圓熟時代といはざるを得ない。世話物としては「鑓の權三重帷子」（享保二）「壽の門松」（同上三）「博多小女郎波枕」（同上三）「心中天網島」（同上五）「女殺油地獄」（同上六）「心中宵庚申」（同上七）といふやうなそれ〴〵題材の異つたもので皆深刻に人生に徹してゐる傑作が、次から次へと發表されてゐる。

又之を時代物の方面について見ても、劃期的の名作たる「國性爺」を始めとして、「曾我會稽山」

（享保三）「傾城酒呑童子」（同上三）「平家女護島」（同上四）「雙生隅田川」（同上五）「津國女夫池」（同上六）「信州川中島合戰」（同上六）の諸作より最後の作「關八州繫馬」に至る迄、文辭結構技巧樣式等の上にそれぞれ特徴を示し、今尚舞臺に生命を有する雄篇大作が澤山作られてゐる。

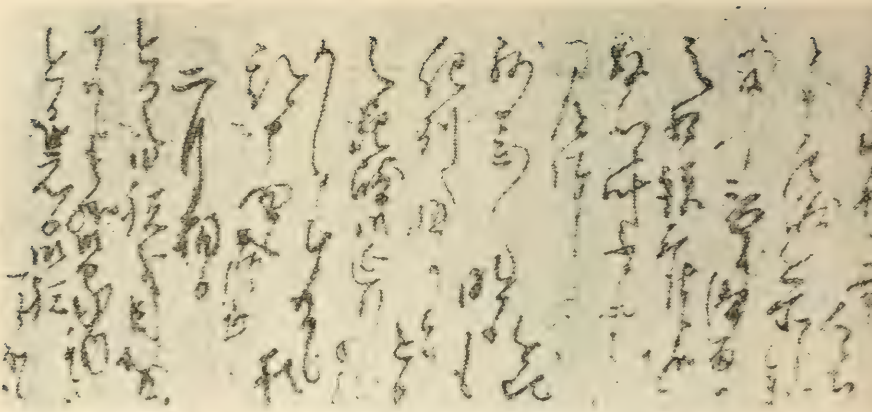


（近松筆蹟）

尚々新春之御
慶今日申候お
袋様へもよく
／＼奉頼候
以上
仰如昨名は得貴
意忝奉存候天氣
相之事此方も御
同然とくと見
合道も少かたま
り候はゞと奉
存候扨又今日之

　されば作者的生涯の上から見れば、實に此最後の十年間が最も油ものり、情熱も籠り、そして血の生き生きと通つてゐるやうな名作を陸續と作つた期間であつて、以前の四十年間は、總て此十年間の傑作を生み出す爲の習作準備の時代であつたといつてよい程である。老いてます／＼壯とは、實に近松の作者生涯であつた。

　要するに、近松は日本が生んだ眞の國民的大劇詩人であつた。幼時に於て既に人々に畏憚された程の秀才であり由緒正しい武門の出でありながら、新興文藝の先頭に立つべく狂言作者として身を捧げた。しかも絶えず修養をつゞけ一和漢儒佛の古典研究に



尼崎私も幸く〻ちと中尼崎近所へも參度候へ共替り淨瑠璃之相談御座候故乍存心に叶不申候不ま〻御同道仕まじく候近比殘念〻〻明日にも紀州へ極り候はゞ今日之尼崎延引なれかしと奉存候猶期貴面候
　　恐惶謹言
　二月朔日
今日之御祝儀目出度奉存候貴樣御承内〇は今日元日御祝可被成候

力をいたすと共に、新刊書をも讀み、當代の學者とも交つて智識を深め識見を高めたと思はれる節は、彼の逸話や作品中に、其暗示を發見することが出來る。此點から見れば、豐かな劇詩人的天分を惠まれてゐたが、それに溺れずしてたえず努力修養の功を積んで精神的に老衰を知らなかつた晩成の大器であつたと言ひ得る。

　又之を、其作品について見るに、正義に與して道義の念に強く、犠牲的精神を强調する點は、實に代代甲胄の家に生れて、其祖先傳來の血を受けた武士的精神の強かつた人であつたことを示す。それと同時に又人間の本然的欲求をも認めながらも、社會の習慣や道徳に背反する惡徳醜惡の事件人物を取扱ふにあたつては、虚實皮膜の藝術觀に立脚して心中する男女、姦通する女性、詐僞横領乃至殺人をも敢てする人物の如きをも美化し淨化して、戀愛の如き人

間の本然的方面に對しては、時に一種の超道徳的內觀の境地を許し、又親子の愛情の如きに至つては涙ぐまるゝまでに濕かに懷かしげに描き出してゐる點は、よく不易の人情を解し藝術の理想を體得してゐた眞の詩人であつたことを示してゐる。かくして「殘る櫻の花し匂はゞ」と自ら歌つた彼の藝術は、短き人生を超越して、とこしへに咲き匂ふのである。

解題

黒木勘藏

近松門左衛門一代の作に係る淨瑠璃百十餘篇中より、その代表的名作として選定した五十四篇を、上下二卷として年代順に收めた。選定の方針としては先づ近松淨瑠璃の精華と稱へらるゝ世話物廿四篇は全部これを收載し、次に時代物に關しては、初作より絶筆に至るまでの範圍に亙つての代表作、即ち題材上注目すべきもの、戯曲の結構上、措辭上勝れたるもの、または前を承けて後を開くやうな歴史的意義の深きもの、乃至はその作品の今尚舞臺に生命を有するもの等を成るべく採ることとした。自然初期の作が少くて、圓熟時代の作が多くなつたのは止むを得ない次第である。今左に本卷に收めた三十篇について簡單に解題を加へる。

花山院后諍

校訂者の見たものに四本ある。いづれも繪入細字本で第一本は寛文十三年（延寶元）正月八文字屋

八左衛門の刊行にかゝる。第二本は第一本巻末の刊行月日を削つたのみで、他は同一版式であるから後刷と思はれる。第三本は宇治加賀掾の正本で山本九兵衛版である、但し刊行年月は明かでない。第四本は「きさきあらそひ」と題し、貞享四年五月江戸のうろこがた屋から刊行されて居る。右四本を比較して見るに第一本が原作で、第三本・第四本は、これに多少の改修を加へたに過ぎない。尤も第四本は段取も文章も相應に改められてゐる（「新群書類從」第九所收）その中の第一本の筋は次のやうである。

花山院の女御弘徽殿と藤壺との嫉妬の爭に、平政盛と源頼光との勢力爭を取合せて想を構へ、五段に仕立てたもので、政盛の後押で、弘徽殿女御を殺さうとした藤壺の女御は、帝の逆鱗にふれて却つて横死する。そしてその怨念が弘徽殿女御の居間の屏風に蛇身となつて現れたり、または青女房となつて庭に出たりして、遂に弘徽殿女御を惱殺する。帝は世をはかなみ給ひて御出家になるが、安倍晴明の祈禱によつて女御は蘇生する。然るに執念深い藤壺の怨靈は鵺となつて法皇の御所に入込んだが、晴明に觀破されると、惡鬼に化して多くの眷屬を引連れて押寄せたところが、頼光四天王等の爲に退治されるといふに終る。

この正本の所屬流派は不明であるが、版式や挿繪によつて見れば同年代の井上播磨掾の正本に酷似する。一樂子の「外題年鑑」の井上播磨掾の語り物外題中にある「花山院物語」（正本未見）と同一物ではなからうかと推測される。

第三本は「外題年鑑」の宇治加賀掾の語り物外題中に「弘徽殿嫉妬打」とあり、齋藤月岑の「聲

曲類纂」に「近松作」と註記されてあるものと同一と考へる。今これを第一本と比較するに、第四段迄は文章迄も殆んど同一であるが、第五段は頼光四天王が藤壺の怨靈を退治する公平式の場面を改めて、女御蘇生・怨靈退散を祝つて、千代松といふ少女に萬歳樂の舞を舞はせるといふやうに和げられて居る。この作の「道行」「神おろし」「萬歳樂の舞」の三章が加賀掾の段物集「竹子集」(延寶六年八月刊)に載つて居るのによつて考へるに遲くも延寶六年迄の作たる事は明かである。尙また注目すべきは、三段目の怨靈出現の場面で、この作では大蛇は屛風にからむのではなくて庭に現れることになつて居るが、併しその現れ方は敍述されて居ない。ところがこの場面を脚色して歌舞伎の舞臺にかけたのが卽ち延寶五年都萬太夫座上場の有名な近松の「藤壺の怨靈」である。「古今役者大全」の所傳では、藤壺の怨靈が藤の花から大蛇になる趣向であつたといふが、當時の繪入狂言本が無いから委曲を知るを得ない。併し大體の筋立は「花山院后諍」の改作たる「弘徽殿鵜羽産家」(正德二年作)の第一段の切によつて推察出來る。

　そこで當然問題となるべきは「藤壺の怨靈」の原作たる寬文十三年正月刊行の「花山院后諍」の作者は誰かといふ事である。私は次の理由によつて、これを近松の作であると推定し度い。

　第一にこの作の主想は藤壺の嫉妬の怨靈出現であるが、加賀掾の正本も、都萬太夫座の脚本も、原作と本質を同じうし、當然同一作者の手によつて次第に展開せらるべき脚色と見らるる事である。

　第二に近松六十歳の時の作「弘徽殿鵜羽産家」の道行に、この作の道行がそつくりその儘用ひら

れて居る事である。「鶴羽産家」は勿論「后諍」の改作であるが、全篇を通じて非常に筋が複雑になり、文章も全然面目を一新して居るに拘らず、全篇中で最も文章に彫琢を加へ、華を飾るべき道行文に大間で古風な四十年も前のものをその儘取つてある、これを何と見るべきであるか、他人の作から借りたとはどうしても考へられないではないか。これは其原作が自己の青年時代の作たる事を裏書し記念する意味を以て他の部分との不調和を忍んで取入れたと解釋するのが穏當ではなからうか。

第三に同じ關係は、延寶四年廿四歳の作「瀧口横笛」と正德四年六十二歳の作「娥歌加留多」との間にもあるのは、第二の理由の有力な傍證である。故に私は「花山院后諍」を近松二十歳の時の作と推定する。少し若過ぎるといふ口實だけで、以上の理由を一蹴するのは天才近松に對してはどうかと思ふ。

本名作集には「后諍」系統の代表作として、又近世戯曲の「うはなり物」の原作として、且又近松初期の作風を最もよく示すものとして、延寶五六年頃の作と考へられる宇治加賀掾の正本を採つた。

校訂用の原本は十七行十六丁の繪入細字本である。また千代松萬歳樂の舞の原本挿圖は「竹子集」から採つたので、節附等に多少の相違がある。

世繼曾我

天和三年九月刊。宇治加賀掾正本。作者三十一歳。曾我兄弟が本望を遂げて相果てた後、鬼王團

三郎虎少將等が朝比奈三郎の後援のもとに、兄弟に恨ある新開荒四郎御所の五郎丸を討ち、賴朝から十郎の遺子祐若に曾我の本領河津の庄を賜つて家を再興するといふ筋、これ「世繼曾我」と題した所以である。曾我兄弟の復讐を材題とした淨瑠璃は近松の作にだけでも十篇からあるが、これはその最初のもので、構想の放奔な、情味の豐かな、如何にも青年詩人の筆らしい感じのする作柄である。復讐後の兄弟に緣故のある人物を中心として脚色した點が普通の曾我物と異る構想であつて、朝比奈の豪俠、鬼王團三郎の義を立て抜く模樣、虎少將の氣轉等がいづれもよく描かれて人物が活動して居る。その上廓情調の出て居ること、舞踊的要素の多いこと、殊に俗謠を豐富に取入れて居ることなどは注意すべき點である。竹本座創立の際（近松傳參照）義太夫が語つて名聲を揚げた曲である。その時の模樣を「操年代記」は次のやうに述べて居る。

淨瑠璃は嘉太夫いたされし世繼そが、これ義太夫出世のはじまり、町中の見物此ふし事になづみぬ。「げに受け難き人の體を受けながら」と二段目待つ夜の恨、「さりとては戀は曲者皆人の」と三段目道行、立つ子這ふ子、此二所の口眞似せぬ者なし。

また此淨瑠璃については、その道行の中へ「馬方いやよほゝん／＼ほ」と踊歌を入れたのは、前後の情趣曲調を破るもので、今聞いても汗を流すといつて、作者自身が三十年後においても氣にかけて居つたといふ有名な話（「鸚鵡が杣」の序文）も傳へられてゐる。「外題年鑑」に「此淨瑠璃の時（加賀掾座上場の時）朝比奈の人形に足を附け初めしより諸流共に立物人形に足を付けたり」とある。

校訂用原本は八行五十六丁本で、十行三十二丁本を參照した。

賢女手習并新暦

貞享二年正月刊。竹本義太夫正本。

貞享二年正月京都の宇治加賀掾が下阪して、この前年初めて櫓を揚げた竹本義太夫と技を競ふべく、西鶴の作「暦」を興行した時に、義太夫がこれに對抗する爲に上演して、當時京阪樂壇の覇者の觀があつた加賀掾を首尾よく破つた淨瑠璃として、義太夫劇史上大いに注目すべき作である。

菊池道清の遺子瑠璃姫・太刀丸の二人が、瑠璃姫の情人左中將藤原實方と共に流離の苦を嘗めつつも、遂に年來姫の信じた愛染明王の加護を得て、父道清の仇敵三位別當安國を蝦夷において討果すといふ筋である。

作の發端に宣明暦を改めて貞享新暦を用ひるやうになつた事を當込んだ仕組があつて、それが動機で事件が展開するやうに作られて居る。「外題年鑑」所載の井上播磨掾の語り物「賢女手習鑑」は未見の書であるが、竹本義太夫も竹本座創立の頃これを語つて居る點から考へるに、この淨瑠璃を本として、「暦」に對抗すべく新暦頒布の事を取入れて改修を加へた作ではなからうかと考へられる。「賢女手習并新暦」といふ熟さない、他に類例の無い外題もそれを暗示するやうに思はれる。

隨分大膽な荒唐無稽の脚色であるが、場面の變化や、操の働きなどを十分に考慮してあつて、舞臺の上では相當に見物を喜ばせ得たらうと思はれる仕組である。また第二段の瑠璃姫内の段に於ける姫の傅平馬之丞述懐の場面は、謠曲「鉢の木」の翻案ではなからうかと思はれるやうな趣向であり、實方が姫の寢所へ忍ぶ條は「十二段草紙」の忍びの段、枕問答の段を原據とする濡の場面で、この頃の淨瑠璃にはよく用ひられた趣向であるが、比較的勝れた情味を示して居る。作者については近松との確證は無いが、その文致といひ、また義太夫との關係といひ、近松の作と推定して差支ないと思ふ。校訂用原本は十七行十五丁の繪入細字本で稀覯書に屬する。その挿繪も全部覆刻して本書に入れて置いた。

門出八島

山本土佐掾の正本。著作年代は明かでないが、天和・貞享頃のものかと考へる。

奥州秀衡の許にあつた義經が、兄頼朝に呼應して十萬騎を引率して平家追討の門出の際、源氏の舊臣志田三郎勝平の推擧によつて、佐藤庄司の二子繼信・忠信を召連れる。八島の合戰に繼信は義經の身代りに立ち、能登守教經の矢先にかゝつて悲壯な最期を遂げる。夫の身の上を案じて戰場へ尋ねて來た繼信の妻早姫は、夫の亡靈に逢つて冥途の物語を聞く。平家滅亡後、繼信の追善供養が

黒谷に行はれ、繼信は修羅の苦患を解脫する。
平家物語の繼信最期の條が重要な素材となつて、これに志田三郎の活動、繼信の妻の愛着の情、念佛の功力などが加味されて居る。敍述に物語風の脈があり、宗教的靈驗を以て大團圓とするなど、古淨瑠璃型を脫しない作柄であるが、筋が通つて段取りに前後の照應があり、人物もよく活動して居つて、近松初期の作中、佳作の一に擧ぐべきである。殊に三段目の戰場跡の夜景より義經本陣の場は、抒情味の豐かな中に、劇的情景があざやかに浮出てゐる。其他第一段の中の志田庵室より、切の佐藤家氏神社頭の場に於ける兄弟出陣を爭ふ爲の小細工を弄する滑稽味や、安西彈正といふ安敵を點出した事や、鷲尾三郎と繼信との間に男色關係を持たせた點など相當に技巧に富んだ作である。
元祿二年五月刊行の竹本義太夫の正本「津戶三郎」はこの作の改題で、作中の志田三郎を津戶三郎と變へ、道行の文句と大團圓とに多少の改修を施したに過ぎぬ。また「外題年鑑」宇治加賀掾語り物に「津戶三郎往生要集」といふがあるが未見の書である。
校訂用の原本には十行廿五丁本を用ひ、十行二十九丁本を參照した。義太夫の正本とは曲節附が餘程變つて居り、また曲節の名稱も隨分異つて居る。

凱陣八島

所屬流派を明示した正本はまだ見ないが、「外題年鑑」及び次に引用する「小竹集」「操年代記」等によつて宇治加賀掾の正本と斷定し得られる。

著作年代は明かでないが、貞享二年八月刊行の加賀掾の段物集「小竹集」の卷頭にこの淨瑠璃の中の「義經道行」「勸進帳」「花子」の三章を掲げ、次に「曆」を載せ以下年代の古い物を配列してあるのによつて考へると、この書所載の淨瑠璃中最新のもので、即ち貞享二年の作ではなからうかと思はれる。加賀掾が大阪へ下つて「曆」を語つて、その名聲が義太夫に及ばなかつたので中止して、この淨瑠璃を上場して評判を取返したとは「操年代記」の所傳である。

作者については「操年代記」は「曆」と同じく西鶴であると言つて居るが、本書の校訂用原本とした鶴屋喜右衞門版の十行三十丁本には卷頭に近松門左衞門作と明記してあるのみならず、文勢筆致亦「曆」に似ず、近松の他の作に類するところから見ても近松と斷定すべきである。

題材上「門出八島」の姉妹篇である。平家を討滅した後の義經が、梶原の讒によつて賴朝の怒を買ひ討手を向けらるゝ事となつたので、山伏に扮して都を落ち、安宅の關を越えて出羽に到り、繼信の母に邂逅して繼信最期の樣を物語り、遂に秀衡の館に入り高館に安穩の日を送つたが、秀衡の死後其子泰衡等四人の兄弟が賴朝に內通して義經を討たうとし、泉三郎一人義を重んじて其妻（繼信の妹）と共に和泉が城に籠つて討死するといふ筋である。

この淨瑠璃は第二段に謠曲「勸進帳」第三段に謠曲「攝待」第四段に狂言「花子」を取入れてお

るので名高い。

源氏烏帽子折

現存の正本に三種の異本がある。その一は山本土佐掾の正本、他の二つは竹本義太夫の正本で、版式の異るものは校訂者の見た範圍だけでも通じて七種に及ぶ。近松の作中最も異版の多いもので、それだけ廣く流布されたものとも見られる。

中でも山本土佐掾の正本が原形であらうと思はれる。義朝が長田庄司に殺された後、常盤御前は澁谷金王丸・藤九郎盛長に助けられて長田の毒手を遁れ、三人の幼兒を作つて大和に落ちようとして伏見の里で雪の夜に惱み宗淸に救はれる。のち牛若丸は成人し京三條烏丸の烏帽子屋五郎太夫方にてその女東雲の情によりて左折の烏帽子を求めて元服し、奥州に下り秀衡による(以上四段迄)第五段は機會到來して義經平家追討の門出に際して、奥州五十四郡の人々よりの出陣祝の獻上物が山と積まれ、秀衡は傳家の軍法を物語つて前途を祝ふといふに終る。

然るに元祿三年正月竹本座上場と考定される竹本義太夫の正本「烏帽子折」は第五段を改めて牛若丸が伊勢大神宮に參詣して源氏の開運を祈り、神主は一萬度の御祓を授け、且その年の惠方や吉凶を語るのであるが、こゝは「はしらごよみ」と題する節事になつてゐる。然るに傳本の多い義太

夫節の正本「源氏烏帽子折」では、この第五段の神宮參拜の條と柱暦の節事を省いて、その代りに「三社託宣」（延寶六年正月刊、宇治加賀掾正本、人によつて近松作と推定する）の「二位中將宮めぐり」の詞章を取つて「牛若宮めぐり」と改めて附加してある。これは元祿三年本にはこの條に元祿二年の秋の御遷宮の事や、元祿三年の干支を當込んだ文句があつて、其時限りのものである故と思ふ。寛政五年板の「外題年鑑」竹本座の部に「源氏烏帽子折、二度目、元祿十二己卯年正月二日、山本土佐掾古淨瑠璃」とある（尤も寳暦の原板及び明和板・安永板の三本には「二度目、山本土佐掾古淨瑠璃」は無い）のは、この改訂本の形によつて興行したもので、以後これが「源氏烏帽子折」の定本となつたものであらう。本集に收めたのはこの廣く流布されて居るものである。

題名は謠曲の「烏帽子折」から脱化した第三段目の烏帽子折名盡しの場に基づくことは明かである。この場面の技巧も隨分面白いが、より劇的で情趣の深いのは第二段の「常盤御前道行」より宗清館の段である。一中節の「妹が宿」も常磐津の名曲「宗清」も共にこゝから出て居るのみならず、今尚佐渡に語り傳へられる文彌節（山本土佐掾の弟子岡本文彌を祖とす）では、この一段がその代表曲で、同流の曲節は、すべてこの中に網羅されて居ると言はれる。

その他第一段の切に「率塔婆」を仕組んであるのは注目すべきである。

山本土佐掾座上演の時藤九郎盛長と瀧谷金王丸との人形に初めて足をつけたと「外題年鑑」にある。

校訂用底本は八行四十丁本で、七行七十二丁本を參照した。

出世景清

貞享三年二月四日より竹本座上場。近松が特に義太夫のために始めて執筆した淨瑠璃。時に作者三十四歲。

第一段は東大寺再建柱建の場で、普請奉行重忠を討つて目指す賴朝の手足を奪はうと企て、人夫となつて紛れ込んだ景淸が見顯されて危く落延びる。第二段は景淸の妾阿古屋が兄伊庭十藏の敎唆と嫉妬とに驅られて景淸を訴人したので、淸水參籠中の景淸は捕へられようとしたが辛くもまた遁れる。第三段景淸の妻小野姬親子の拷問より景淸自首入牢迄。第四段阿古屋の悔悟自殺より景淸牢破りの場面。第五段淸水の觀世音景淸の身代りに立つ事。景淸の八島合戰物語（謠曲「景淸」による）。景淸兩眼を抉つて日向下向に終る。

幸若舞曲「景淸」を粉本とした作といはれて居るが、實は兩作の中間に立つ作があるのを見遁してはならぬ。それは寛文十一年刊行の「かげきよ」と題する古淨瑠璃である。この作は珍しく七段に分れて居て次のやうな筋である。景淸が賴朝を討たうとして大佛供養の場に山法師に扮して入込んだり、淸水觀音供養の時に乞食となつて附狙つたりしたが失敗して尾張に奔る。と、情婦あこわうが密訴する、景淸は怒つて二人の間の兒のいや若いや石を刺殺した上で捕へられて入牢し、梶原に首

を討たれたが、清水觀音が身代りに立ち、日向宮崎の莊を賜り兩眼を抉つて下るといふのである。あこわうが利慾に迷つて景清を訴人し、景清が二兒を殺す事などは幸若の筋を受けて近松の作への橋渡しをなし、阿古屋は近松によつて全く性格を變へられ、後世の劇の阿古屋がこゝから生れるのである。また「景清牢破」も「阿古屋の琴責」もこの作に基づくなど、後世に及した影響は尠くない。十行三十二丁本によつて校訂した。

團扇曾我

宇治加賀掾正本。著作年代は不明であるが、元祿に入つてのものであらう。元祿十年十月十三日から竹本座上場の際「百日曾我」と改題した。「淨瑠璃譜」に「右淨瑠璃（百日曾我）は京宇治加賀掾芝居にて近松氏作りて團扇曾我と申す外題たりしが、大入にて百日餘りも勤めし故、緣起を以て團扇を百日曾我と改る」とある。

富士の卷狩の發向當日、仁田四郎は海野小太郎と共に賴朝の愛馬松島月毛を得んとして功名を爭ふに始まり、仁田は遊女虎の難を救つて、曾我十郎から本望成就の曉は首を授けるとの言質を得る迄が第一段。第二段は裾野において曾我五郎が海野小太郎に怪まれて「傾城請狀」を讀んで免るゝを主眼とする。第三段は曾我兄弟の討入。第四段は虎少將が團扇賣に扮して兄弟の弟なる越後の陸

上禪師を訪ふ道行から、禪師も兄弟の罪に座して刑せらるゝに臨みて三部經を讀誦して母を慰める場となり、仁田が功名の恩賞として賜る松島月毛に代へて禪師の命乞をする。第五段は兄弟の靈が富士の裾野に祀られ盛大な供養を受ける。

朝比奈と仁田の活動を始めとして場面の變化に富み、また「勸進帳」のやつしの「傾城請狀」や、虎少將の道行、三部經讀誦等の節事も多いに拘らず全篇よく纏り、力の籠つた作である。種彥手記の「淨瑠璃本目錄」に

「元祿十三年印本團扇曾我といふ横本一冊あり、此淨瑠璃の行れし事を書ける草紙なり。又元祿十五年俳諧花見車 一名「諸國物語」、西鶴門團水作 の卷尾に俳諧請狀といふ狂文あり、是は百日曾我の曲事傾城請狀を俳諧師にとりなして作るものなり。是等をもてもはら行はれしを思ふべし。江戸半太夫江戸堺町にて芝居興行の時も此淨瑠璃を語りしかば、今も此曲事を江戸節河東節には語れり」

とある。また元祿十四年七月正本屋九兵衛板の「傾城請狀」といふ三卷物の八文字屋風の浮世草紙には、京の卷には「團扇曾我けいせい請狀、宇治嘉太夫正本」大阪の卷には「百日曾我けいせい請狀、竹本義太夫正本」江戸の卷には「關東曾我けいせい請狀、林和宗太夫正本」とそれ〴〵卷首に揭げて居るなど、三都を通じて持囃された作であつた事がわかる。

「百日曾我」は「團扇曾我」に比較すると第四段迄は辭句に多少の相違を見るのみであるが、第五段は書きかへてある。茲には原作たる「團扇曾我」を收めた。

校訂用原本は八行六十二丁本。

蟬丸

元祿十四年五月六日より竹本座上場。義太夫受領祝ひの淨瑠璃（近松傳參照）。

題材を謠曲「蟬丸」に取り、これに蟬丸を中心として其北の方、情人直姫及び芭蕉の前の三女性の戀爭ひを取合せて想を構へた作で、元祿十一年に大阪の岩井半四郞座で興行された「蟬丸」の影響なども見えて居る。次に揭げた同座の繪番附第一段の北の方が袍を二つに切割る場面や第二段の道行・逢坂山の段等がその證である。

大筋をいへば、醍醐帝の第四皇子蟬丸が美男の上に琵琶の名手であつたので多くの婦女に思はれた爲に、その北の方や情人芭蕉の前等の怨念に祟られて失明し、滅罪生善の爲に逢坂山に捨てられた。蟬丸は玄上の琵琶を抱いて草庵に獨り自ら慰めて居たが、情人直姫が蟬丸の傅淸貫と共に尋ね來て艱苦を共にした。のち蟬丸は佛力によつて再び兩眼開き、歸京して子孫繁昌するといふに終る。

第一段の北の方と芭蕉の前とが宇治の橋姫神社の前で悋氣講をする趣向は、加賀掾の正本「葵の上」（元祿四年の作か、その作者は近松ともいはれる）の貴船詣の條の飜案で、北の方が蛇身となる條は、作者の舊作「つれ〲草」（天和元年刊、加賀掾正本）の侍從が丑の時參りの條の踏襲で、謠曲「鐵輪」

元祿十一年岩井座興行

「蟬丸」繪番附

から出てゐる。また第五段の切「懐胎十月由來」の節事は、これまた近松の作とも推定される天和四年正月刊行の加賀掾の正本「甲子祭」の第五段の文を取つてこゝに斂めたに過ぎぬ。

享保九年十月豐竹座新榮の祝賀淨瑠璃として興行した「女蟬丸」(西澤一風・田中千柳合作)はこの曲の飜案で、蟬丸の代りにその妃直姫が失明する事になつてゐるが、これは純然たる反逆物となつて居て、作柄は遙に劣つてゐる。

校訂用原本八行五十九丁本。

最明寺殿百人上﨟

元祿十六年三月四日より竹本座上場。作者五十一歳。

北條時頼の嗣子天女丸(時宗)を義經の再誕とし、これに義經含状、佐々木先陣、逆艪の遺恨等を取合せて想を構へたのが上卷である。最明寺時頼、禪定に入ると稱して政治視察の爲に諸國行脚の途に上る。弟の冠者時定が梶原の怨念に憑かれて、義經の再誕たる天女丸を敵視する源藤太經景と謀つて、天女丸を討つて政權を奪はうとして伊豆の三崎に據つたが、却つて天女丸及びその傅宇都宮友平、佐々木廣綱等に滅さるゝ迄を上卷とする。

下卷は謠曲「鉢の木」の飜案で、佐野源左衞門の代りにその妻をシテとして女鉢の木の趣向に改

め、結末「女勢揃へ」の場において、經世は叔父經景に横領された本領に安堵する事となる。題名は「女勢揃へ」の節事の章に因む事は言ふ迄もない。

近松の作としては佳作とは評し難いかも知れないが、女鉢の木の趣向は享保十一年豐竹座で大當りを取つた「北條時頼記(ほうでうじよりき)」(西澤一風・並木宗助・安田蛙文合作)を始めとして、後の戲曲や淨瑠璃に及した影響が大きい。また「南水漫遊」拾遺二の卷に

「近松氏の作多き中にも、元祿十六年未三月四日初日竹本座の操にて最明寺殿百人上﨟といへる院本(後年豐竹座の操にて大當せし北條時頼記雪の段の原本是なり)おほけなくも靈元法皇叡覽ましく、其頃歌人の聞えある公卿を召させ給ひ、いづれも秀才なりといへども近松とやらんには劣れり、とて彼院本を取出し給ひ、最明寺が道行ぶりに蝶の翼のおしろいを草にこぼして、梢には鶴の霜毛をぬぎかくる雪は花より花多きと書けり、是なん間機活法雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して書ける處、石曼卿が雪を詠ぜし詩に、蝶遺二粉翅一輕難レ拾、鶴墜二霜毛一散未レ轉、といふ此句を和語に移せしならずや、かゝる才智を以て和歌を詠じなば秀逸數多有りぬべしと御感ならせ給ひけるとなん」

とあるので世に知られた淨瑠璃である。かたがた採つて本卷に收める事としたのである。

校訂用原本八行五十五丁本、對校本十行三十丁本。

次に掲げた「北條時頼記」の番附は、延享三年十一月豐竹座興行の時のものである。

太夫

豐竹越前少掾
豐竹上野少掾

北條時頼記 五段續

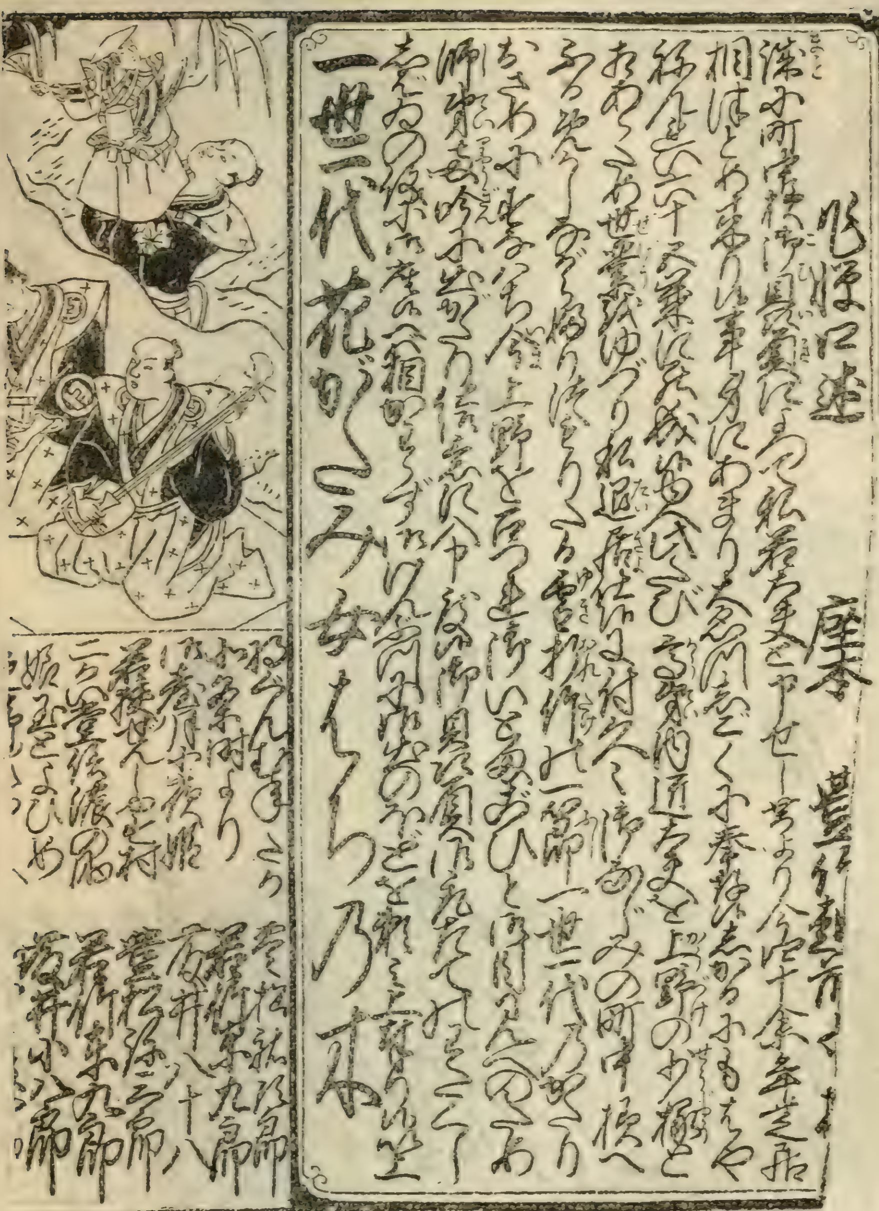
二段目

物語

豐竹上野少掾
豐竹春太夫
豐竹讃岐太夫
豐竹内匠太夫
豐竹伊勢太夫

記　頼　時　條

人形芝居番附



同上 女鉢の木

出語出遣

曾根崎心中

元祿十六年五月七日から「日本王代記」の切として竹本座に上場されたもので、我國近世戲曲史上に一線を劃すべき傑作であり、竹本座は空前の大當りを取つた淨瑠璃である。

大阪內本町の醬油屋平野屋久右衞門の手代德兵衞、北の新地天滿屋のお初と深く契り、主人の妻の姪との結婚を頑强に拒絕するが爲に、絕對的に必要とする金子を惡友油屋九平次に詐取されたのみでなく、彼の爲に新地でさん〴〵誹謗されたのを憤り慨いて、お初と共に曾根崎天神の森で情死の筋。

「心中大鑑」(寶永元年刊)によれば、お初は京に生れて島原で育ち、後北の新地へ下つたのだが、この廓には珍しい戀知りであつた。心中の動機は德兵衞が忠右衞門の女房の姪と夫婦にさせられて江戶の支店へ遣られる事となり、またお初は豐後の客に身請されると定つた爲で心中は元祿十六年四月二十三日であるといふ。「外題年鑑」にもさうあるが、「攝陽隨筆」には四月七日の事としてある。「牟婁古雅志」所載の觀音巡りの口上書によれば、この淨瑠璃に作られる前に旣に歌舞伎でも演ぜられて居るらしいが、すれば四月廿三日では少し間が無さすぎるやうに思はれる。

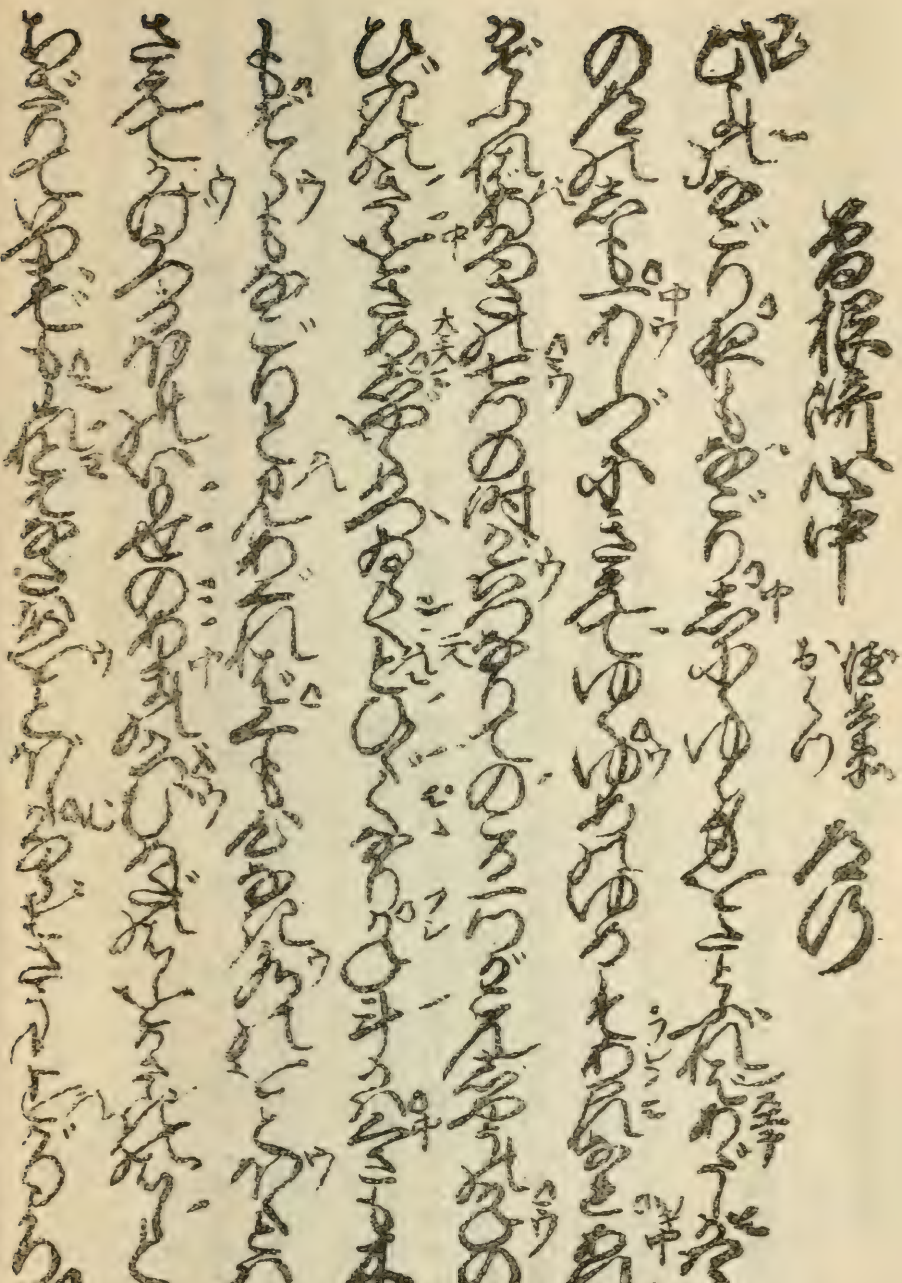
此曲が大好評であつたので、本年七月豐竹座の旗あげをした豐竹若太夫は其上演曲たる「心中涙の玉井」に此淨瑠璃の脚色を摸倣した。又翌年にはお初の朋輩であつた丸屋しげがお初の跡を追て獨心中をし、九平次はお初德兵衞の靈魂に取殺される事を仕組んだ「遊女誠草」といふ淨瑠璃さへ出た。

のち竹本座で享保二年再興行の際、近松は自ら改修して徳兵衛の叔父平野屋久右衛門を情義に富む人物として描き、又悪漢九平次の奸計が露顯して懲しめられるやうにしてあるが、之は近松の心中物の内容・思想の展開及び作者自身の人格の圓熟を知る上には大いに注目を要する點である。

此改修された「曾根崎心中」の道行の題名を「道行ちしごの霜」と變へ、最後の一枚を改めて、お初は死し徳兵衛は追跡者に助けられる仕組としたのが、享保十八年二月に豊竹座に上場された「お初天神記(はつてんじんき)」である。

尚「曾根崎心中」の改作翻案の淨瑠璃としては、お初徳兵衛の心中にお半長右衛門の桂川心中を取合せた「曾根崎模樣(そねざきもやう)」（寶暦十一年五月豊竹座、若竹笛躬・淺田一鳥・中邑阿契等作）徳兵衛お初おしげの三角關係を主想とした「よみ讀三巴(うりみつどもゑ)」（明和五年七月竹本座、近松半二等作）河堀口の段・敎興寺村の段を設けて技巧を弄し筋を複雜にした「往古曾根崎村噂(むかしくそねざきむらのうはさ)」（安永七年九月竹本染太夫座、近松半二等作）等がある。併しいづれも原作に比して文章は言ふ迄もなく、筋にも無理が多く、詩趣も豊かでなく、人物の描寫などの點でも見劣りすること雲泥の差である。歌舞伎の方にもこれを材題としたものは澤山あるが今一々擧げるの煩に堪へない。

此曲の道行の名文たる事は言ふ迄もないが、荻生徂徠が讀んで「殘る一つが今生の鐘の響の聞き收め」に到り、「近松の妙茲にあり」と案を拍つて激賞したとか、或は近松が「……一足づつに消えて行く」とまで書いたがそのあとを續け煩うて居ると、折柄來合せた伊勢の俳人岩田涼菟が「夢の



曾根崎心中道行の原本

夢こそはかなけれ」とでもやり給へと助言したといふ逸話などによつて殊に名高くなつてゐる。
八行廿六丁本によつて校訂した。

源五兵衛おまん 薩摩歌

寶永元年正月十五日初日にて竹本座に「悦賀樂平太」の切として上場したものである。近松世話淨瑠璃廿四篇中第二番目の作であるが、前年の「曾根崎心中」とは異り古い巷說俗謠をもととして想を構へた作である。

此曲の主人公たるおまん源五兵衛の事實については西澤一風の「傳奇作書」後集の下、「中興世話早見年代記」の條に寛文三年さつま源五兵衛お萬心中と明記してあるが、他に傍證を見出し得ない、尤も近松の「薩摩歌」の發端にも「はやり小唄も時につれ時の昔と何處へいく、寛文年の頃かとよ」とあるのによれば、作者自身も寛文頃の事として取扱つたもののやうである。

それに「源五兵衛どこへいく」の流行唄にヒントを得て居る事も件の引用句で推測し得られるのみならず、作中にもそれらしい箇所は見出せるし、第一に外題がそれを告げて居る。本曲と同材題の西鶴の「五人女」の卷五の「源五兵衛どこへ行く、さつまの山へ、鞘が三文下緒が二文……」や、「薩摩歌」の中の「源五兵衛どこへ往きやる、薩摩の山へ、あとはおまんが涙の海よ……」などが即

ちそれであらう。又寶永元年刊行の「松の落葉」卷四の源五兵衞踊の唄に

二上り高い山から谷底見れば、薩摩源五兵衞は目に立つ男のほほんにほ、しやれた髮つき茶筅髮、寢て又起きても茶筅髮、ずんどくぼんだ塗笠・おまんはどこへ、播磨の明石へ蛤ふみに／＼、はまぐり／＼／＼ふみに、てぐり／＼／＼舟にのこの舟に乘せた源五兵衞、きり〳〵と廻つてのぞんだ播磨の明石へ、蛤ふみに／＼はまぐり／＼／＼ふみにてぐり／＼／＼舟にのこの舟に乘せた源五兵衞、一萬八千寶藏えい／＼やえい／＼代の榮え。

とある。かういふ流行の機を利用して、これを材題として劇化を試みたのであらう。

鹿兒島の侍菱川源五兵衞が寺の後住となるべく修行中、同地琉球屋の娘おまんと契つた事が顯れて國を出奔し、京都に出て熊本の侍笹野三五兵衞の許嫁小萬の邸に仲間奉公し、小萬に其蚊帳の中へ引込まれるのが動機で、小萬が年頃こがれて居た三五兵衞は女裝して彼女の侍女林と名乘つて朝夕側に居た事が明かとなり、源五兵衞は三五兵衞が年來尋ねる親の敵の所在を告げて去る。源五兵衞は歸國しておまんと同棲を望んだが繼母に妨げらる〻を怒つてこれを斬る、其時誤つておまんをも傷つけ、已も亦割腹したが、折柄尋ねて來た三五兵衞夫婦に救はれるといふ筋である。

この曲の「源五兵衞おまん夢分船」の一章は、俗謠を大膽に連綴して豐かなる抒情味を漂はせ、縹渺夢幻の詩趣、汲めども盡きざるものがある。

此淨瑠璃の改作に「薩摩歌妓鑑」がある。寶曆七年七月竹本座上場で、元文二年薩摩の侍早田八

右衛門が北の新地曾根崎三丁目大和屋十兵衛夫婦と櫻風呂抱へ菊野と下女二人を殺害した事件を取合せたものである。又安永六年五月北堀江座上場の「置土産今織上布」は「心中天網島」と前記の五人斬とを撮合したものであり、天明八年五月竹本染太夫座の「國言詢音頭」は「妓鑑」の改作である。

一方歌舞伎の方面にも、此五人斬事件が取材されて、まづ「初嵐元文噺」「島廻戯聞書」等になり、並木五瓶の「五大力戀緘」（寛政六年作）に至つて小まん源五兵衛は原作「薩摩歌」のそれとは全く面目を異にする人物に作りかへられた。爾來小まん源五兵衛といへば直にこの「五大力」を連想される程になつて了つた。

加賀掾の正本に同外題のものがあるが、やはり此作を轉用したので、諸國鑓印の一章を省いた上に、語句に多少の改修を加へてある。

校訂用原本は八行五十六丁本。

雪女五枚羽子板

「國性爺合戰」「曾我會稽山」と共に近松時代物の三傑作と稱へられたものである。明和板「外題年鑑」には寶永二年七月十四日より竹本座上場となつてゐるが、作中に正月の景物行事を盛んに用ひて新年氣分が濃厚であるので、盆興行とは受取り難い點、及び竹本座は此頃筑後掾が座本引退の

ため休座中ではなかつたらうかと推測される點などから考へて、著作上場年代に疑問の餘地があるが、未だ確證を得ない。

赤松満祐が將軍足利義教を其邸に招じて「鵜飼」の能上覽の場に於て弑した事件を題材とし、名を赤沼幸満と變へ、將軍義教を節分の夜わが館に招じ酒宴を催してもりつぶした上で弑さうとしたが、將軍は足利家の寶笛小水龍の奇瑞によつて危難を救はれ、幸満は後に管領斯波義將・細川勝秀等に滅されるといふ筋であるが、斯波も細川も一時は將軍の勘氣を蒙つて世を忍んで機會を待つ。其間に義將の臣藤内太郎其弟二郎・三郎・四郎・五郎の五人の同胞をして各得意とする笛・鼓・太鼓・棒等の藝を以て働かしめ、又中川・小晒・玉椿・琵琶前・をだまきといふ境遇と性情との異る女性の活動を配し、それに「藤内樂車(だんじり)」の所作(しよさ)を始めとして松囃し・池拂ひ・追羽子・女の聟入、「もんさく系圖」等の趣向を取入れて目先の變化を圖つてゐる。時代物の三傑作としては異論もあらうが名作には相違ない。

外題名は、藤内太郎の妻中川が赤松邸で雪中に凍死させられ、其亡靈が義將と夫とに赤松の謀叛を告げる事、本阿彌の女玉椿が羽子をつく事、藤内五人の兄弟が一藝に秀でたこと等に因んで付けたものであらう。

大序の「樂車(だんじり)打つて囃した……」は當時の名優嵐三右衛門の「藤内だんじり出端」の歌から取つたもので、藤内太郎は嵐三右衛門をモデルとして、その舞臺姿を人形で見せようとしたのだと言はれる。次に「松の落葉」卷三に載つてゐる三右衛門の六法だんじりの歌と、彼の舞臺姿を畫いた歌

舞伎の番附繪とを掲げて參考に供する。

藤内だんじり出端　　嵐　三右衛門

二上り 藥内次郎殿わいの、笛吹のや役で、紫竹漢竹の、やつこのほこりをさ、さつ〳〵とも拂うての、とうらい〳〵の、笛人の物はとらいの我物はやらいのと、合吹いたるは、さつても吹いた笛吹と、どつとほめて通した。だんじり打つて囃した、だんじり打つた見さいな。藤内三郎殿は小鼓の名人で、あかふの胴に加賀革くれ、紅の調を、千鳥かけにかけさせ、ちゝつち、ちふつぽ〳〵、たつぽゝつたつた〳〵〳〵合打つたるは、さつても打つた小鼓と、わつとほめ通した。樂車打つた見さいな、だんじり打つた見さいな。藤内四郎殿わいの、大鼓の役で、しつたんに、しつたん〳〵〳〵、しつたん作るおん百姓、明年は八たんぢや、三明年は十六たん〳〵、丹波の國のお百姓と、合打つたるは白瀨上の町下の町、どつとほめて通した。藤内五郎殿わいな、太鼓打の役で、大まいの太鼓を、あそこらもとに置かせて、金の撥を手に持ち、つく〳〵〳〵つてん〳〵てれつくには、づんでんどん、これつく〳〵、つゝてん〳〵、とんからつとんとうつほれた。なるかならぬか戀の中の町。なかの〳〵中の町。なかの〳〵中の町を、通りたうはなけれど、生蛸つかんだ天窓を見たか、熊野小比丘尼が、ちとくわん〳〵〳〵くわんともなるは、夜明けの鐘はつん〳〵つらいな、づんでんとうから、櫓太鼓の音に寄り來る。

校訂用原本は八行六十丁本。

嵐三右衛門

だんじり六法

用明天皇職人鑑

竹田出雲が竹本筑後掾に代つて竹本座の座本となつて始めての興行に用ひられた淨瑠璃として有名である。「外題年鑑」に寶永二年三月上場とあるが、之は信じられない。「操年代記」の出雲が筑後掾を説いて竹本座の座本となつた條に「竹田氏參會し、未だ老木といふにもあらず、今町中賞美する所に、思ひも寄らぬ引込思案、二三年勤めて給はらば、拙者座本仕り、萬事の世話を引請け、貴殿內證入用銀御用次第つゞけ不自由させまじと、同行衆を以て賴みしかば、下地は好きなり御意は重し、いか樣ともの詞を極め、盃すんで其暮顏見世淨瑠璃といふを始め、用明天皇職人鑑、作者近松門左衞門を抱へ、太夫竹本筑後掾、座本竹田出雲と看板を並べ三段目の出語り」とある。此文中の「其暮」といふのは寶永二年の暮である。歌舞伎の顏見世と同じく、此作は寛永二年の十一月興行であつた。

尙これを裏書する有力な傍證は「心中二枚繪草紙」の發端の「すでに今年の酉もたち、戊の顏見世……」の句であつて、これは道頓堀竹本座の顏見世芝居の繁昌を寫す場面の發端であるが、その芝居が「用明天皇職人鑑」たる事は文中に歷然たる證句があるから、この曲は戊の顏見世興行、卽ち寶永二酉年十一月興行と斷ずべきである。この點は「心中二枚繪草紙」の上卷を解釋する上にも極めて重要な事項である。(心中二枚繪草紙解題參照)

敏達天皇の皇弟花人親王、後の用明天皇は佛法を信じ伽藍を建立し、天下の諸職人に官位を與へ給ふ。異母兄山彦皇子は外道に溺れ、魔法を以てこれに對抗し、親王の情人たる豐後の眞野長者の女玉世姫を奪はんとし、爲に親王は流離の苦を嘗め給ひ佐渡に漂着して五位介諸岩に助けられる。それから伴はれて播州高砂浦に於て梵鐘引上のことに出會し、其才力を認められて眞野長者に抱へられ草刈山路となつて再び玉世姫と忍び〳〵に逢ふことが出來たが、姫の繼母の爲に苦められ、姫は毒殺される事となつたが、變毒爲藥の佛法の奇瑞により、聖德太子御誕生あり、惡魔外道を滅すといふ筋。二段目佐渡島兵藤太内の段は、後世の「太功記」尼ケ崎の段を聯想させるやうな技巧的の場面であり、三段目尾上の鐘供養の場は謠曲「道成寺」の飜案である事は言ふ迄もなく、四段目には山路の傳說が取入れられて居る。又檢非違使勝舟が鹿島の事觸となつて長者の屋敷へ入込む趣向は、當時年末から年始に門々に立つた鹿島の事觸を例の才筆で描き出したのであるが、後年の歌舞伎劇の事觸、大神樂獅子、鳥さしなどの舞踊劇の藍本となつてゐる。其他、出雲が座本となつた爲に竹田芝居のからくりの舞臺技巧が應用されて居る事は、本書に挿入した表紙見返の繪によつても十分に想像する事が出來る。

此時の座本出雲は二代目淸定、卽ち後の忠臣藏などの作者たる出雲といふ事になつて居るが、彼は此時まだ漸く十五歲であるから、父の出雲であると見るべきである。

底本は八行七十三丁本、對校本は十一行四十一丁本。

心中二枚繪草紙

寶永三年三月廿七日から「本領曾我」の切として竹本座の勾欄にかけられた作。時に五十四歳。

寶永二年十一月十六日、大阪北の新地天滿屋の抱へお島と長柄村の百姓介右衞門の養子市郎右衞門と牒し合せて、女は天滿屋の二階、男は長柄堤に於て殆んど同時に情死した事を仕組んだものである。敵役として市郎右衞門の義弟善次郎といふ無頼漢を點出し、借金に窮した擧句父の預つて居た報恩講金を横領して其罪を市郎右衞門に轉嫁する。市郎右衞門は養父の恩に報いる一端にもと寃罪を身に引受ける、こゝに心中の動機を設けてある。そして其健氣にも亦あはれな心情をお島が酒の醉に乘じて述べるのを聞いて善次郎は改悔し、兄を助けようとしたが及ばなかつた、彼は「せめて兄の報恩と、恥も身體も衣裳につゝみ」負うて一先づ立退くのである。さてこそ世上に此男死んだ風說死なぬ沙汰、生死二枚の繪草紙に戀路の回向を受けるので、題して「心中二枚繪草紙」といふ。

上の卷は「用明天皇職人鑑」の解題で述べたやうに、お島が心中する少し前に明石の貞に伴はれ道頓堀の竹本座の芝居を見ての戻りがけ、今日芝居で聞いた山路の道行を語るのであるが、之は職人鑑が寶永二年十一月の興行である事が明かになつて初めて生きて來る場面で、「竹の紋つく道行」とか又は「佛金色の身上りと聞く外題に引かれ」といふ從來難解と云れた句も容易に解釋されるので

ある。(本文の用明天皇職人鑑の表紙題簽參照)のみならず如何に作者が芝居と事實とを虚實皮膜の態度で結びつけて見物の興味を惹くに苦心したか、又は作と作との聯絡に意を注いだかも分ると思ふ。舞臺上の技巧としては「血死期の道行」で市郎右衛門とお島のまぼろしとが連添ふ處もよいが、それよりは下の卷の天滿屋の二階の窓と下とで柄付の鏡と扇の金物とを星の光にきらめかし合ふ場面の方が勝れて居る。こゝが「國性爺合戰」の獅子が城樓門の場で錦祥女が父の姿を鏡に映す趣向となり、更に轉じて忠臣藏七段目のおかるののべ鏡の技巧と展開する原據であらう。

校訂用原本は八行三十三丁本。

兼好法師物見車

寶永三年五月五日より竹本座上場。

高師直に懸想された後宇多院の皇女卿の宮は、日頃お氣に入りの吉田兼好に其處置を相談される。兼好は侍従といふ女房をして師直の心を轉じさせようとして鹽冶高貞の室かほよの美貌を彼に説かせる。すると師直は侍従に媒介を強請し、侍従がそれを果さないのを怒つてこれを殺し、また高貞を討つてかほよを奪はうとした。

侍従の父又五郎は娘の非業の死を悲しんで發狂し、徒然草起稿中の兼好の庵に來て、高貞の室が

家老八幡六郎に助けられて避難したのに落合ふ。こゝへ師直の侍大将小林民部が追撃して來る。兼好の法力で正氣に復した又五郎は、八幡を助け民部を討つて娘の仇を報じるといふ筋。上・中二段物。

初期の作「つれ〴〵草」の改作で、「太平記」の師直が鹽冶の妻に懸想する條を素材として居る。題名は吉田兼好が卿の宮の爲に加茂の附近で、物見車の傍に立つて都の名所を說明する條に因んでつけたのである。

八行四十七丁本を以て校訂した。

碁盤太平記

寶永三年六月一日から「兼好法師物見車」の跡追として出したもの。

高貞の家老八幡六郎は大星由良之助と名を改め、一子力彌と共に山科に閑居し窃かに同居の士と氣脈を通じて復讐の機を待つたが、いよ〳〵機熟して父子東下しようとすると、由良之助の母と妻とは自刄して二人を激勵する。大星は鎌倉に下着して同志と共に師直の邸に討入つて敵の首級をあげ、光明寺の亡君に手向けて一同割腹するといふに終る。

山科閑居の場で大星父子が、瀕死の下僕岡平實は寺岡平右衛門から師直邸内の樣子を聞きつゝ碁盤に黑白の石を並べ其委曲を領得する條に、世界が太平記であるのを取合せて題名としたのである。

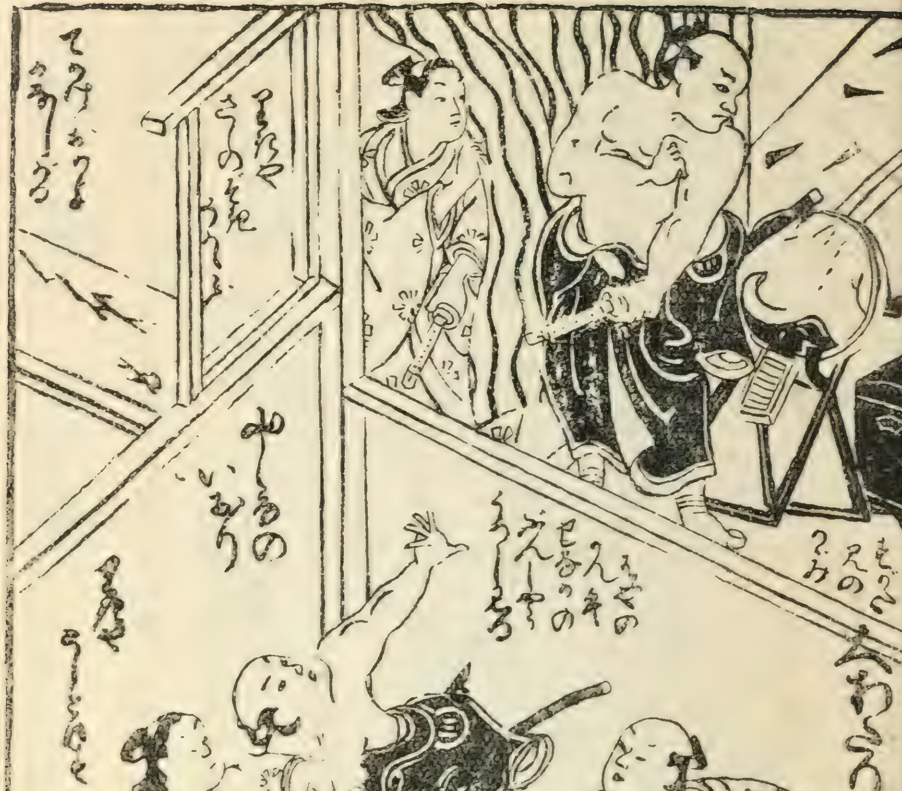
一赤穂義士の復讐を仕組んだ淨瑠璃の嚆矢であつて、「鹽冶殿浪人、初めの名は八幡六郎、今は大星由良之介殿」といふ句を以て「兼好法師物見車」に連絡をつけ、二篇合せて大きく三段組織となつてゐる。兩作の間にはそれ程の深い關係を認め難いといふ人もあるが、段取において、又その世界や重要人物の共通點において、隱微の間に關係が保たれて居る、のみならず物見車の正本の表紙見返しの豫告（本書に挿入して置いた）などによつて考へれば、相當に密接な關係があると思はれるが、それが露骨でないのは事件後まだ五年目でもあり、前に江戸で曾我の世界に仕組んで禁止された例もあるから、座本や作者の頭には官權に對する考慮もあつて、初めから興行政策上切離して跡追とする意圖があつたと見る方が自然ではなからうか。

義士淨瑠璃は、この曲を始めとして、紀海音の「鬼鹿毛無佐志鐙」（正徳二年十二月）から並木宗輔の「忠臣金短冊」（享保十六年十月）と次第に技巧的になり「假名手本忠臣藏」に至つて是等の諸作の長を採つて大成されるのであるが、世界も主要人物の名も、また山科閑居の場も皆この「碁盤太平記」に負ふものである。

又「國性爺」の獅子が城の段の貞烈な和藤内の母は、この曲の大星の母と同型で僅にその名を變へたに過ぎない程に類似してゐる。

八行三十三丁本によつて校訂した。

「忠臣金短冊」



繪盡」より

卯月の紅葉（おかめ與兵衛）

大阪北久太郎町心齋橋の道具屋長兵衛の娘お龜と養子與兵衛との夫婦仲は至極睦しかつたが、長兵衛の姿いまといふのがあつて、自分の弟傳三郎をして家を繼がせようとする下心から、二人で與兵衛を虐待し、長兵衛にも惡口するので、與兵衛は自分の境遇を果敢なみ家にも落着かず、お龜は又これを悲しんで居たが、傳三郎の爲にさんざ侮辱されて長兵衛の怒を買つたので、五月十七日の夜梅田堤で情死を企て、女は死し、男は助かるといふ筋。時に男は二十一歳女は十五歳。

外題年鑑（明和板）によればこの曲は寶永四年四月廿一日より竹本座で「今川了俊」の切に出し、越えて同年六月一日「根元曾我」の切に「卯月の潤色」が演ぜられたとある。併しこれは信じられない。情死未遂の與兵衛がお龜の跡を追つたのは三十五日目だとも七々日の忌日だとも傳へられるが、實說が朦朧として居るから何ともいへないものの、假りにそのいづれかであるとしても「卯月の紅葉」と「卯月の潤色」との實演の距りは少くとも約十ケ月以上なくては「潤色」の方の「去年こなさまの生口を寄せてから近付になり初め」とか「去年一所に死ぬるなら」とか「今日は卯月十七日、此命日の明けぬ間に、今宵の中に自害して來月のむかはりは、未來で一所に附添はん」とかいふ句や、助給が四月十七日に自殺する仕組が生きて來ないと思ふ。

扨て「卯月の紅葉」の著作上場年代であるが、それを考定すべき手がかりが幸に作中にある。上

の巻で天王寺の黒格子から出たお龜が與兵衛に逢つて口說く際に「昨日はわしが氣晴らしとて、父樣と半四郎の心中狂言見たれども、餘の事は耳へも入らず半九郎お染が最期のせりふ、此方の胸に皆こたへ、……四郎五郎が不心中面白いとて笑へども私や一日泣いてゐた」とある箇所で、之は寶永三年の夏、岩井半四郎座興行の「鳥邊山心中」を見に行つて、お染半九郎に同感し、茶屋女に强ひられていや／＼心中に出た男に扮した中村四郎五郎の面白い仕打は目に入らなかつたといふのである(四郎五郎が好評であつた事は寶永五年の「役者稽古三味線」に、「去々年鳥邊山心中いたされ好評」とあるので知れる)是は卽ち此作が寶永三年夏の興行であつた事を證明するに足るものであると思ふ。自然「卯月の潤色」は寶永四年の興行となるが、作中に江州石山寺の開帳へ參詣して歸つた助給の同宿の坊主の言葉に「石山の繁昌京大阪が打ちあける」とあるのは、寶永四年三月七日から六月十八日まで行はれた石山寺開帳を當込んだもので、寶永四年の著作上場たる事を裏書するものである。故に私は「卯月の紅葉」を寶永三年六月興行、「卯月の潤色」を寶永四年四月の興行と考定する。若し强ひて外題年鑑に繰入れれば寶永三年六月朔日よりの「碁盤太平記」の切の「跡追一段物」の場と、寶永四年四月廿一日よりの「今川了俊」の切とに據ゑれば矛盾が無く、且作中の當込文句も生きて來ると思ふ。

八行三十丁本で校訂した。

堀河波鼓

寶永四年二月十五日から「吉野忠信」の切として竹本座上場。時に作者五十五歳。

近松三姦通曲の一として有名なもの。因幡の藩士小倉彦九郎が主君に從つて江戸詰の留守中に、妻のお種が亂醉して養子文六の鼓の師匠宮地源右衛門と思はずも不義の枕を交す。豫てお種に戀慕してうるさく附纏つた磯邊床右衛門に證據を握られた上に藩中に言ひ觸らされた。彦九郎が歸國の日諸方より貰苧を送つてお種の姦通を諷し、お種の妹お藤の苦心もその甲斐なく、お種は姙娠四箇月の胸に九寸五分を貫き夫に向つて「いとしき我が夫を、袖にしての不義ではなし夢見たやうな身の上の、間に憎い奴もあれど言へば卑怯の未練の死」といひつゝ潔よく夫の手にかゝる。彦九郎は緣者と共に京下立賣堀川の源右衛門の家を襲つて首尾よく女敵を討つ。

實說は寶永三年六月七日の事（「月堂見聞集」）で、此事件を綴つた寶永三年八月刊行の錦文流の浮世草紙「熊谷女編笠」によつた跡があるが、其姦通の動機やお種の性格は近松の虛實皮膜の藝術觀に基づいて美化され想化されて居ると見るべきであらう。「堀江川波鼓」といふのは外題替である。

此曲は八行本の原本全部を覆刻して之を載せ、其上欄に校訂文を掲げた。原本の體裁と、校訂文との關係を示す實例にもと思つてである。

卯月の潤色

「卯月の紅葉」の後篇である。著作年代については前の「卯月の紅葉」の條に述べて置いた。

「卯月の紅葉」の末期の道行を、其結末數行を改めて上卷とし、中・下兩卷を新作したのである。お龜の五七日に其伯母は巫女の口寄を聞いて緣者と共にすゝめて與兵衞を出家させた。與兵衞は助給と改め大和の平群谷の庵室に住んでお龜の菩提を弔つた。お龜の死んだ翌年四月十七日に助給はお龜の亡靈に逢ひ、來月の一週忌は冥途で一緒に連添はうと決心し、書置を殘して伯母の情の白縮緬の絎帶をお龜の位牌と自分の左の手とに絡みつけて剃刀で自害して女房の跡を追つた。

お龜のまぼろしが現れて助給と打解けた態度で親しげに物語り、いそ〳〵と立働く場面は文情秀麗にして恍惚夢幻の情趣に富んで居る。

「脚色餘錄」に此淨瑠璃を竹田出雲の作としてあるのは從ひ難い。

八行廿九丁本によつて校訂した。

心中重井筒

大阪六軒町の色茶屋重井筒の抱へ妓おふさと重井筒の主人の弟で上町萬年町の紺屋に聟入りした德兵衞とは深く契りを交して居た。京なるおふさの父は彼女の身を抵當として他人の借金の受人に立つて居たが、いよ〳〵其金を融通しなければおふさは京へ呼戾されて入牢せねばならぬ日が切迫

した。德兵衞は金の才覺に惱んだ舉句女房お辰の判を盜用して金を借りて一時の急を救はうとしたが、お辰の貞實な心に感動してそれを決行し兼ねる、一方重井筒の主人夫婦は二人を逢はせまいとする。彼等は絶望の極高津大佛殿勸進所に於て情死するのである。

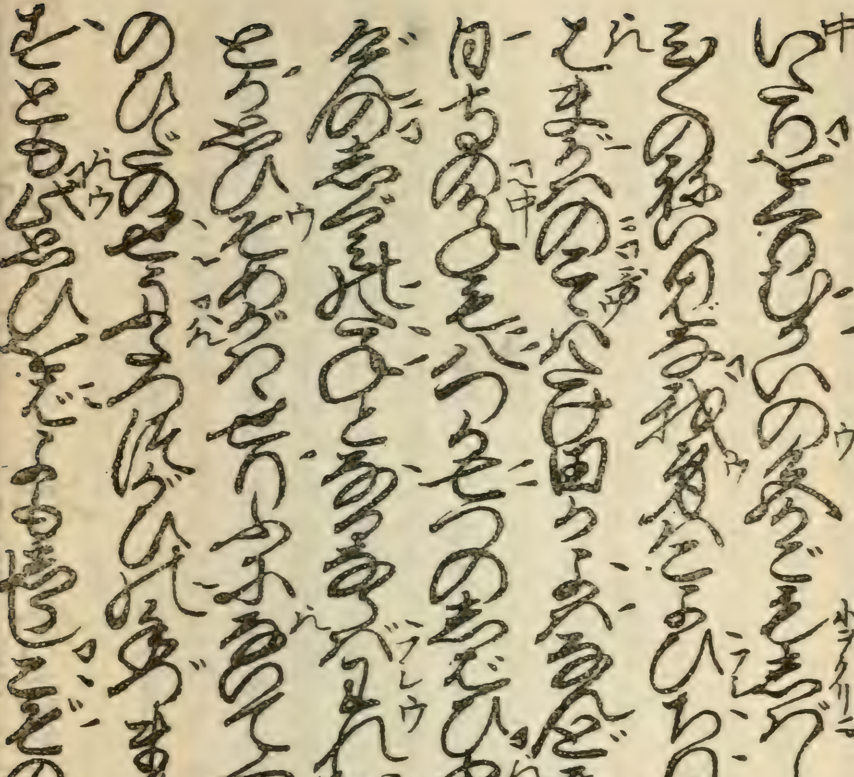
中卷、重井筒の女房がおふさを意見の場の趣向は「八重霞浪花濱荻」（寛延二年三月、通稱おその六三）のかしく新屋敷の段に轉用されてゐる。

「追善重井筒」は此淨瑠璃の外題替であつて、延享三年五月竹本座で竹本筑後掾三十三回忌追善の出し物として上場した時に改題したのである。

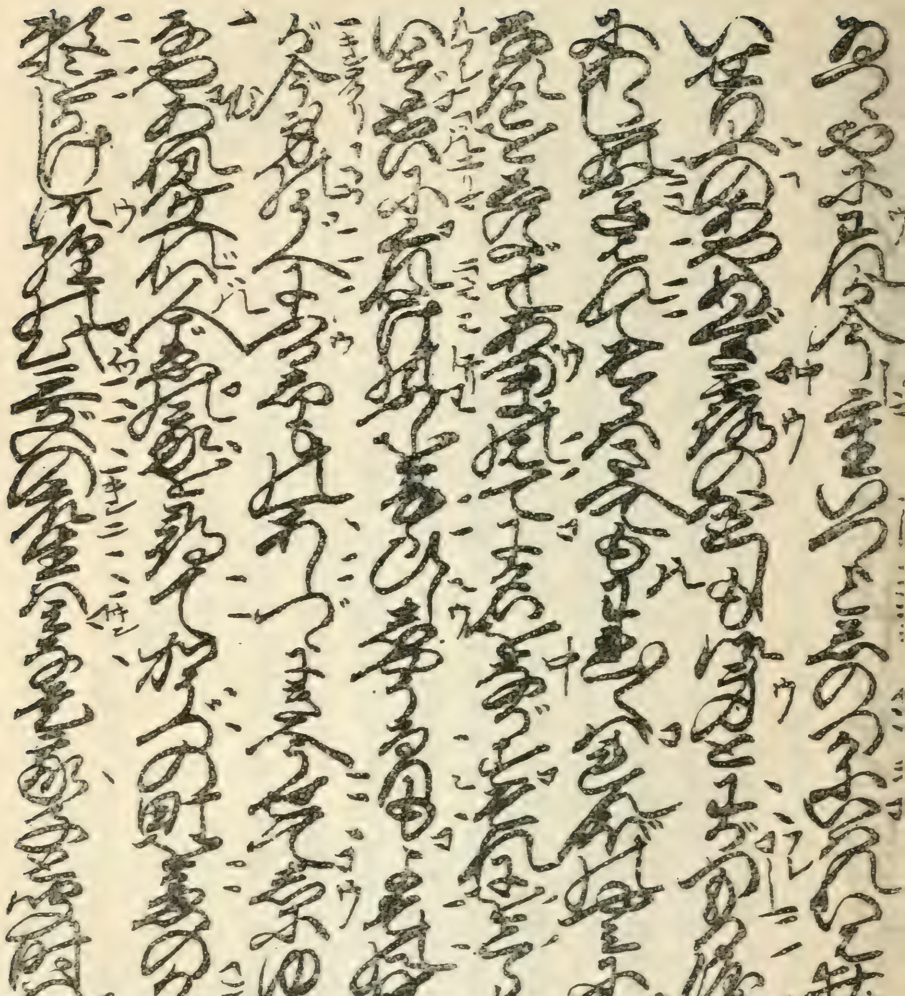
此淨瑠璃の著作上場年代については「外題年鑑」（明和板）に寶永元年四月十六日から竹本座上場とあるが、二人の情死が寶永元年三月廿九日といふ說（關根只誠、戲場年表）と寶永元年十二月十日といふ說（濱松歌國、南水漫遊）とがあるのに關聯して「外題年鑑」の上演日附に對しても疑を抱いた人もあつたが、未だ之に代る定說のあるを聞かない。

併し私は此作の道行文中に綴込まれて居る道頓堀の「七つの芝居」と重井筒のお島の心中を手がかりにして寶永四年末の作と考定する。今其理由を簡單に述べる。道行文中で「名殘盡きせぬ濱側の、こゝは竹川か……我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は……包む袂の飛驒掾……こぞのお島の心中の、その井筒屋に我が今、重井筒と、篠塚に、いはれ岩井の半四郎、憂ひせりふのあやめぐさ、……西に嵐の吹き晴れて……いとゞ思ひに、くれ竹の、節を習ひし淨瑠璃も……」とある中、圏點

を附けた處は濱側の竹田のからくり芝居と片岡仁左衞門座と手妻人形の山本飛驒掾座と篠塚次郎右衞門座と岩井半四郎座と嵐三右衞門座と竹本座とを示すのである。そして是等の人形や歌舞伎芝居の櫓とその座本とは現實のものを取入れて見物の興味を惹かうとした作者の常套手段であつたに相違ない。處で、竹田・出羽・竹本の三座は此頃には引續いて興行されて格別の異動もなかつたが、歌舞伎の四座の座本は交替が頻繁であつた。こゝが手がかりになるのである。今假に「外題年鑑」の說に從つて寶永元年の興行とすれば、時の道頓堀歌舞伎四座の座本は松本名左衞門・岩井半四郎・竹島幸十郎・片岡仁左衞門でなければならぬ（役者舞扇子による）これでは近松の切角の文は生きて來ない。では前の道行文に綴込まれた四人が座本となつた年があるかといふに、それはある、寶永四年と同五年とが卽ちそれである。（役者友吟味・役者稽古三味線による）すると此兩年のうちでなければならぬが、役者の動靜から見ると、芳澤あやめが岩井半四郎座に、染川十郎兵衞が片岡座に勤めたのは、寶永四年十一月から寶永五年にかけてである。さうなると前の道行文の座本當込は、寶永四年末から五年に亘る範圍に限定される事となる。尙此推斷を裏書すべきは「こぞのお島の心中」である。寶永四年の序文のある「本朝濱千鳥」の卷四に、重井筒のお島と新八とが生玉で心中した事が出て居る。そして二人の心中は正月十六日とあるが、序文から考へて、この心中は寶永四年か三年の事であると言ひ得られる。かういふ考證が成立てば、結局作中に年末に關する敍事の多い點から見て、寶永四年末の著作上演と考定するのが最も當を得たものであらうと信ずる。



心中重井筒



道行の原本

八行三十二丁本を底本として、八行三十丁本と對校した。

傾城反魂香

敦賀で名妓遠山とうたはれたが戀ゆゑ賣られて奈良伏見と流轉し、遂に京六條三筋町で舞鶴屋の遣手みやとして名をあげた土佐將監光信の女お光の魂魄が、其戀人狩野四郎二郎元信と契る顚末を主想とし、これに江州高島の城主六角家のお家騒動に伴ふ不破名古屋の鞘當、狩野元信吃の又平兩人の描いた名畫の奇蹟等を取合せて脚色したもので、時代物と世話物との中間に立つやうな作柄で、近松の作中出色の雄篇である。故饗庭篁村翁は「巢林子撰註」の解題中で本曲に次のやうに言つてゐる。

此傾城反魂香は狩野古法眼元信が土佐光信の聟となり土佐氏についで繪所の預となりし事實を本とし、吃の又平が大津繪のことを交へ、遠山が死して後姿を現はしてうつゝに熊野參りするを反魂香の故事にあてて外題とせり。これに名古屋山三不破伴左衞門の二人を出し、三國の歌川敦賀の遠山とて越前に名高かりし兩人のうちの遠山をも光信が子として出したれば人物はよく揃ひ、作も亦妙をきはめたり。元信越前守に敍任し越前法眼とも號したれば、其緣に取りて先づ越前に到りて遠山に出會ひてより事起るは順序あり。元信厄に迫りて虎を描けば眞虎と現じて其難を救ひ、又平死に臨んで形を模せば石面に徹りて苗字を許さる。又平の描ける大津繪脱け出て敵を防げば、元

信の筆の襖の熊野山遠山と手を引きて登るべし。吃の女房に早口あり郎のやり手に氣轉者あり、佐々木の屋形揚屋の座敷、大津街道三筋町の大門口、事も人も所もよし、巣林子傑作中の傑作なり。

肯綮に中つた評である。上巻切將監館の段が今日行はれる「吃又」の原作たる事は言ふ迄もなく、紀海音は此趣向を借りて「鬼鹿毛無佐志鐙」（正德三年十二月）の第一段の切で中間與四郎を吃に仕立てて居るし、近松自身も後に「信州川中島合戰」の輝虎配膳の場で勘助の妻お勝を吃として働かせて居る。中巻三筋町大門口の場は、歌舞伎劇の「鞘當」の轉化たるは言ふ迄もないが、上巻高島館の虎の段は、後の「祇園祭禮信仰記」（寶暦七年十二月）の四段目切雪姫爪先鼠の原據となつたものと思ふ。

享保十七年五月豐竹座上場の「今様傾城反魂香」は本曲の初めに狩野四郎二郎が武隈の松を畫くいはれを大序として五枚書き足し、下巻を省いて其餘を五段に分けたまでの物である。延享元年十二月豐竹座興行の「遊君衣紋鑑」（爲永太郎兵衛等作）も亦改作の一つであるが、吃の又平を元信の養子小四郎重信の舅とし、六角家の若君左京之助と遊女高尾とのいきさつを取合せて趣向を立ててあるが、作柄は原作より遙に劣る。之に較べれば寶暦二年三月竹本座上場の「名筆傾城鑑」（吉田冠子等作）の方が遙に原作を尊重して居る。併し後の作者が筆を加へたものは、いづれも原作には及ばない。

加賀掾の正本にも「傾城反魂香」がある。これも改修の一つであるが、原作の下巻を省き、中巻の四郎二郎閑居の場以下を下巻として、その下巻は文も餘程省略して居るが、他は原作と同じである。宮古路豐後掾に「三熊野かげらふ姿」があり、又富本節の「反魂香名殘錦畫」（安永六年九月中村座

常磐津政太夫
同 若太夫
三弦 岸澤古式部
正本 高砂町
板元
新道
市川八百蔵
中村のしほ
狂言 増山金八
作者 木村園治
都座

「初櫻淺間嶽」表紙

上場、四郎二郎嵐三五郎、遠山中村富十郎）常磐津節の「初櫻淺間嶽」（寛政九年三月都座上場、遠山中村のしほ、元信市川八百藏）もこれから出て、歌舞伎の所作事地として語られて共に好評を博した。

七行八十四丁本を以て校訂した。

高野山女人堂 心中萬年草

寶永五年四月十六日から竹本座で「酒呑童子枕言葉」の切に出したもの。作者五十六歲。

高野山吉祥院の寺小姓成田粂之助は、紙谷の宿雜賀屋の娘お梅と契り、折を得て寺を出でようと望んで居たので、お梅の計らひで播磨なる粂之助の父より迎ひの飛脚と僞つて暇の手紙を法印に屆けさせようとしたのに、粂之助に渡すべき手紙と入違つて居た爲に、祕密が暴露して粂之助は山を追はれた。破戒の咎によつて彼が下山する時全山震動し雷雨物凄じく荒れ狂ふ。粂之助はお梅に逢ひ、二階に忍ぶ。この晩お梅は父に强ひられて、京烏丸の美濃屋作右衞門との婚姻の盃を交さねばならぬ破目となつてゐる。お梅の母の心づかひと苦肉の策とのお陰で、二人は危い場を遁れ出で、女人堂で閾許から尋ね上つた姉に粂之助は餘所ながら此世の暇乞をして情死する。題名は粂之助の姉が高野山に特生する萬年草を採つて水に浸して、弟の安否を卜ふ條に因んでつけたのである。

二人の最期に及んで、心中物によく用ひられる念佛や題目を出さずに、眞言宗の經文を利かせた

作者の働きは昔から稱揚されて居る。また高野山の當時に於ける僧侶の生活風習、特に男色の行はれた模樣などもよく描かれて居るが、全篇の眼目は中卷である。お梅の母の心づかひ、石打にかこつけての混雜に紛れて二人を落す際どい場面の情景など誠によく表れてゐる。

二人の情死事件は寶永三年六月であつたとの說もある。又種彥は「高野山萬年草紙」（文化十四年）の序文の中に「昔この山足に容華絶代の婦人あり、名をお梅といふ。愛童某と通じ女人堂にて情死を遂げ、同穴の塵とならんとす。人あつて死をとゞめ龜鶴の壽を全うせし、其緣故を一條の戲曲に綴り、萬年草と呼びなせるは、かの近松翁が筆なり」といつてゐる。

「高野山萬年草」は本曲の外題替である。改作物に「角額嫉蛇柳」がある。明和八年五月豐竹和歌三座上場で、原作に高野山の蛇柳の傳說を取合せたもので、作者は竹本三郎兵衛である。又寶曆四年四月市村座上場の「我衣手蓮曙」は俗に常磐津の「高野心中」と呼ばれる古曲で、壕越二三治がお梅粂之助の心中に熊谷蓮生坊をからませて趣向を立てた淨瑠璃で、原作と頗る作意が變つてゐる。

八行四十丁本を以て校訂した。

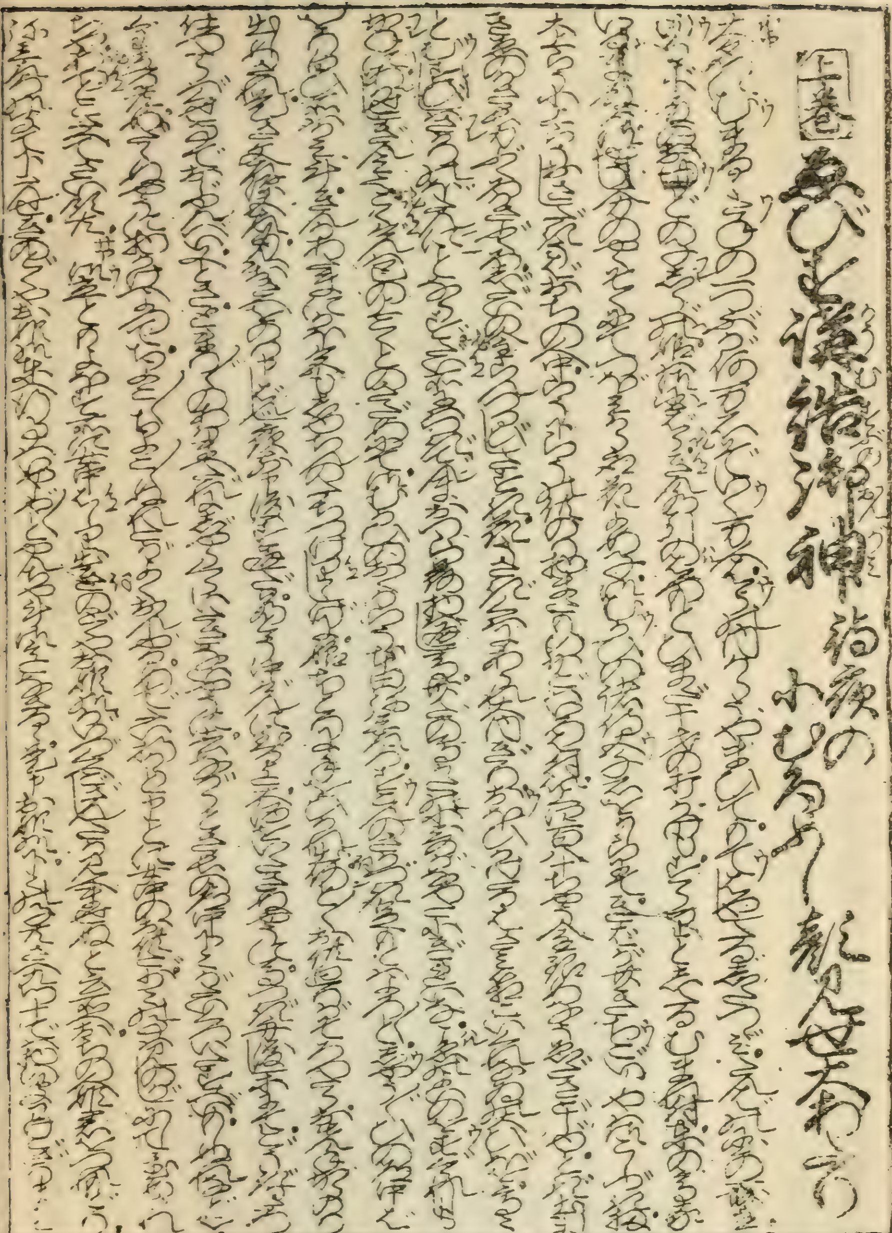
丹波與作待夜の小室節

・外題年鑑（明和板）に寶永四年六月「源氏十二段」の切に出したとあるが、これも從ひ難い。此曲が

「心中重井筒」よりは後の作でなければならぬ理由は、大團圓の「與作踊」のクドキの文句によつて明かである。既に「重井筒」を前のやうに寶永四年末と考定する以上は、此作は早くとも寶永五年でなければならぬ事となる。處が道行の文中に「契りそめしは一昨々年(さきをととし)拔參宮の道連れに、そなた櫛田の、眞中ほどで」といふ句がある。これは寶永二年に非常に流行した拔參宮を當込んだ句であると見られる、併し拔參宮はその前後にもあつたから、これだけで斷定するのは少し早計であらうが、この作を少し改修して寶永五年顔見世に京都の夷屋座で興行して居る（後に述べる）事實があるから、前の「重井筒」との相關問題をも考量して、寶永五年の作と考定してよいと思ふ。

丹波の由留木侯の女しらべの姫は、關東の高家入間殿の養子としていよ／＼出立の間際になつて、未だ十歳の少女の事とて、「山も見えざるかりそめの江戸三界へ往かんして、いつ戻らんす事ぢややら」とお伽小姓共の謡ふ江戸へは行かぬといふ。少年馬子三吉が道中雙六の繪解きをして、又その心を轉じさせる。その縁でお乳の人重の井と哀れな親子の名乘合をする、こゝが「重の井子別れ」の原作。これより先、重の井の夫伊達の與作は浪人して落魄の極、馬方となつて丹波與作といひ、關の宿の白子屋の出女小まんと契つてゐる。姫の一行が關の宿に泊つた夜、與作は小まんの父の急を救ふ爲に三吉を教唆し姫の用金を盗ませたが、三吉は捕へられ且つ己れの實子たるを知るに及んで、愧ぢ且悲んで小まんと共に宿外れの千貫松で死なうとする。重の井の命乞によつて與作は世に出るといふ筋。

丹波與作は早くから俗謡で知られた馬方であるが、始めて劇に仕組まれたのは延寶五年十一月京



「夷講結の御神」巻頭

都北側の芝居で元祖嵐三右衛門が演じた丹波與作であつて、その籠抜けのやつしが大當りであつたと傳へられて居る。降つて元祿三年に京都村山平右衛門座で「丹波與作手綱帶」が演じられた、富永平兵衛の作で、丹波與作の巷說を丹波の國主橋立主膳のお家騒動に仕組んだものである。又「善光寺與作」といふ古淨瑠璃の正本もあつたといふが、未見の書であるから内容は不明である。兎に角是等の諸作を藍本として、之に闘の小萬の巷說を加へ、「與作踊」「馬子踊」(寶永元年刊、松の落葉四所載)等の俗謠を巧に按配して作つたのがこの「待夜の小室節」である。而して丹波與作の戯曲としては本曲が實に劃期的の名作といふべきであらう。宇治加賀掾の正本にも同外題のものがある。下卷の道行以下は文章も大分相違し、與作踊もない。「傾城反魂香」などと同じく加賀掾の手で改修したものと見るべきであらう。「待夜の小室節」が竹本座に上場された寶永五年の顔見世に、京都の夷屋座で此作を借りて筋を少し改め「ゑびす講結御神」の外題で興行した、而も狂言本には原作の淨瑠璃を載せてある。

「待夜の小室節」は正德二年三月に「傾城懸物揃」の切として興行した時「丹波與作」と改められ、後には此外題が專ら行はれた。更に此淨瑠璃は享保十七年六月竹本座で「信田小太郎」の切として勾欄にかけられた時は「伊達染手綱」と改題された。その正本を見るに文章は原作と同一で只道行の外題を「道行戀路の月毛馬」と變へたに過ぎない。然るに寶曆元年二月竹本座上場の「戀女房染分手綱」に至つて大改修が行はれた。作者は人形遣の名人吉田冠子(文三郎)と三好松洛とで、場數を多くし筋を複雜にし、舞臺上の技巧を豐富にして、非常に歌舞伎化した。第十段重の井子別

未二月朔日ゟ

竹本筑後掾

太夫 竹本大隅掾

座本 竹田出雲掾

戀女房染分手綱

全部十三巻

待宵の小室節は相図の三味線をつかふ三筋の八文字

振袖は乳人

留袖は招婦

待合の咎は相図の小鼓 [illegible]

第壱

第弐

第三

第四

竹本 [illegible] 太夫

竹本 [illegible] 太夫

竹本 [illegible] 太夫

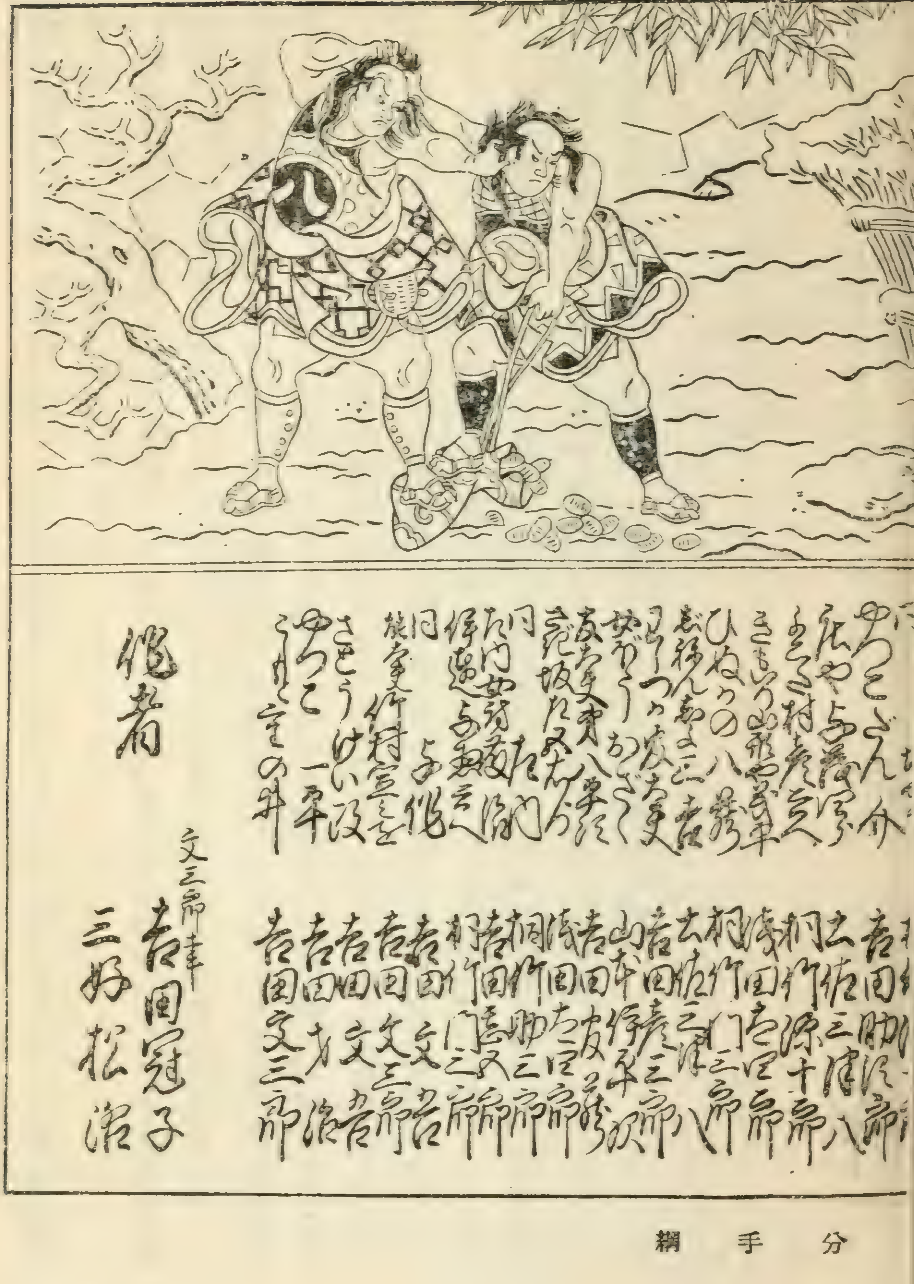
竹本大隅掾

竹本 [illegible] 太夫

さみせん 竹沢 [illegible]

手綱番附

戀女房染



分手綱

れの段が最も名高い。この作は同年秋、江戸の中村座に上場されたのを始めとして、三都の歌舞伎で引續いて何度となく繰返されてゐる。

最後に本曲が他の淨瑠璃に及した影響を見るに、一中節では其道行の詞章を取り外題もその儘「與作小まん夢路の駒」と呼んで居る。豐後節の開祖宮古路豐後がまだ初代一中門下で都半仲と稱へて居た頃の作曲に係るもので、その典雅哀婉なる曲調は、今尚一中節に語り傳へられて居る。又江戸長唄の名曲「與作」も此系統を引くものである。寶暦元年秋中村座で「染分手綱」が初めて演じられた時、その道行淨瑠璃「乘掛娘脊小室節」を佐野川千藏が語つた。千藏は女形の役者であつたが、一中節の名手で義太夫節をもよくし、美聲を以て鳴つてゐた。その後明和元年に市村座で「染分手綱」興行の時その道行「乘掛情の夏木立」を富士田吉治が謠つた、これが即ち江戸長唄の「與作」であつて、吉治は千藏が長唄に轉じての藝名である。また曲は絶えて詞章のみ殘るものに、宮古路豐後の正本「丹波與作夢路駒」、宮薗節の染分手綱十段目「三吉愁ひの段」等がある。

校訂川原本には八行三十五丁本を用ひ、七行五十九丁本を以て對校した。

淀鯉出世瀧德

大阪北濱の富豪淀屋辰五郎が町人不相應の豪奢を極めて遊蕩に耽り、遂に金子借用證僞造の罪に

坐して元祿二年追放を命ぜられ、資財沒收、家屋敷闕所となつた重件を仕組んだもので次のやうな筋である。八幡の富豪江戸屋勝二郎が新町茨木屋の吾妻に溺れて贅の極りを盡し、忠僕新七夫婦の苦諫を憤つて之を土足にかけ、遂に吾妻を落籍する事となつた。然るに惡手代總兵衞は主人の遊蕩に耽るに乘じて私腹を肥さうとして、主人の名を用ひて京都の某公卿の私印僞造迄行つたので、其罪に坐して財産官沒の上追放された。勝二郎は困窮の極吾妻を奈良の木辻に二度の勤めをさせたが、新七夫婦の盡力によつて家名再興を許されるといふのである。作中最も異彩を放つのは忠僕新七であつて、これは淀屋の手代六兵衞をモデルとして作者の理想とする手代を描いたものと思はれるが、結末に於ける彼の述懷は、何人にも感激を與へずには措かない眞實と熱誠とが籠つてゐる。

本曲は外題年鑑（明和板）には元祿十三年四月上場となつて居るが、之も亦誤りである。作中に「重井筒」の噂の出て居る事と、寶永六年十一月歿する坂田藤十郎がまだ在世中である事を暗示する句があるとにより「重井筒」よりは後で、寶永六年十一月よりは前であり、恐らくは辰五郎の父古安の十七回忌を當込んで寶永五年冬か翌年春作つたものであらうといはれる。（高野博士著「世話淨瑠璃詳解」による）

外題名については、大阪を追放されて忠實な元の手代等の情で奈良に逼塞して居た辰五郎が、先祖傳來の御朱印地たる山城八幡の田地三百石頂戴を歎願の爲に寶永六年江戸に下るのを利かせて、淀川名産の鯉の瀧上りに因んで淀屋の前途を祝つて付けたものであらう。

校訂用原本は八行四十丁本。

おなつ清十郎 五十年忌歌念佛

寶永六年正月二日から竹本座上場。作者五十七歳。

實說については西澤一風の「亂脛三本槍」（享保三年刊）や松村操の「實事譚」（明治十五年刊）によれば、清十郎は播州姫路の旅籠屋但馬屋九左衛門の手代であつたが、主人の一人娘のお夏と密通した事が分つて暇を出された故、お夏と謀し合せて大阪へ駈落しようとして船に乘る處を捕へられた。その折但馬屋で金子が紛失したので嫌疑が清十郎にかゝり、且つ主人の娘を勾引した咎によつて死刑にされた。これは寛文二年の事である。（一風は中興世話早見年代記に萬治三年情死としてあるが、これは近松の作から逆算したのかも知れない）お夏は悲しみの餘り一時發狂したが、のち正氣に復したものゝ世の物笑となり聟に來る者もないので、同國片上といふ處に茶見世を出して七十餘歳迄生きて居たと。

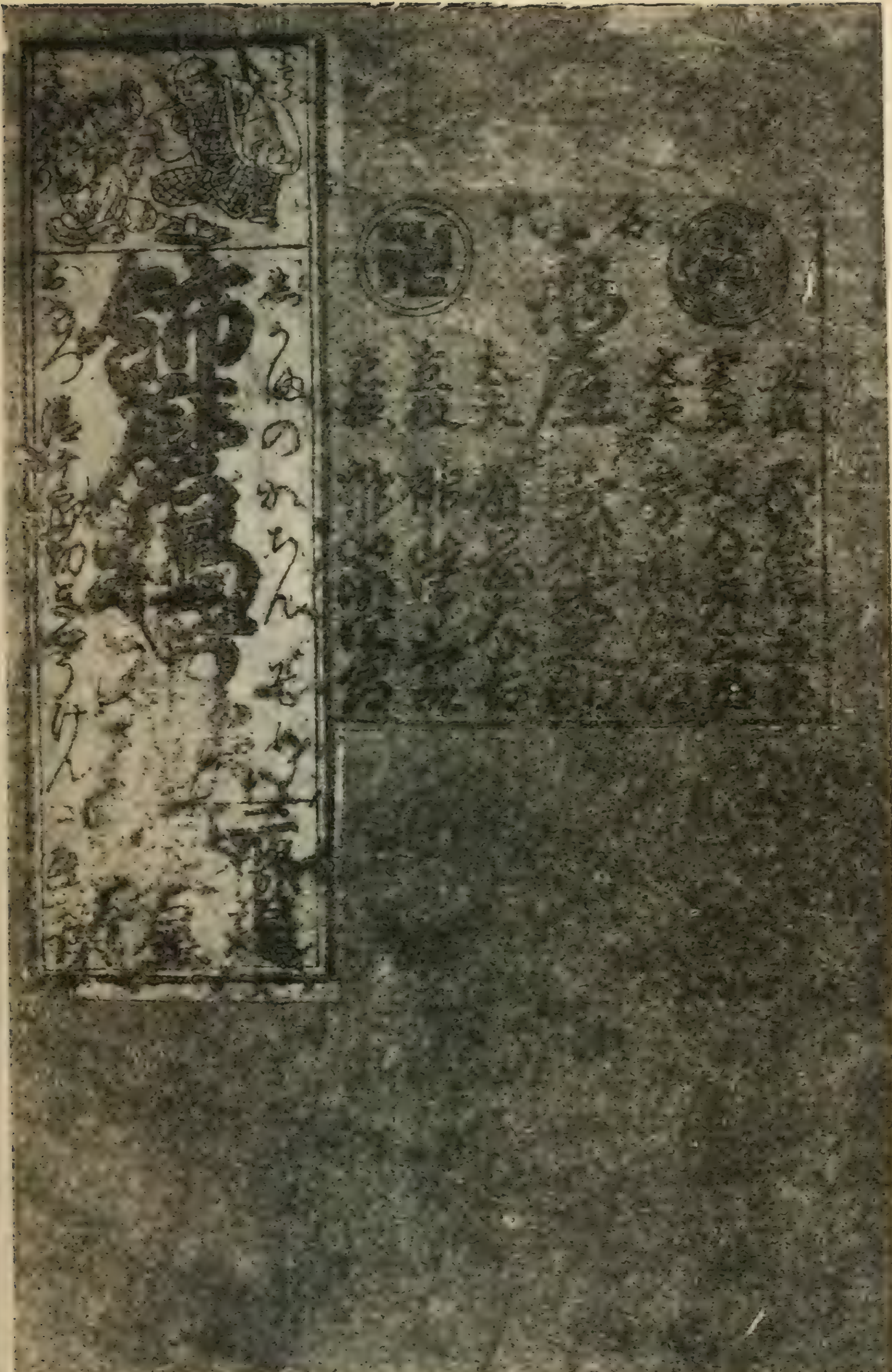
殘つたお夏より死んだ清十郎に世の同情が集つて清十郎節が行はれ出し、「奴俳諧」（寛文七年刊）の題目にもなり、靈元上皇の御吟詠にさへも入り、西鶴の「五人女」の一の筆に描かれていよ／＼有名となつた。歌舞伎でも早く舞臺にかけた事は西鶴の「上方の狂言になし」の句によつて證明されるが他に記錄はなく、又操では寶永二年十一月竹本座で「お夏清十郎笠物狂」を上場したと外題年鑑にあるが、正本の所傳を耳にしないから現存の戯曲としては本曲を最古の物としなければならぬ。

晉に古いのみではなく、又最も勝れたものといつてよからう。

近松は原事實を劇化する爲に「曾根崎心中」の九平次型の惡漢勘十郎を點出し、大阪河口の船乘場で彼が淸十郎の親父佐治右衛門に一杯喰はせて證文を書かせるのが發端で、此證文が種となつて淸十郎は主人の勘當を受けるが、憤りに燃える彼は、暗闇の人違へで勘十郎を殺す積りで朋輩の源十郎を殺し、お夏は狂亂し、淸十郎は刑場の露と消えるといふ工合に事件の大筋を運ばせて居る。「お夏笠物狂」の段に俗謠を巧に連綴して恍惚幻夢の詩美を漂はせた手際は、前に述べた「薩摩歌」の「夢分船」と並べて世話物中の雙絶といふべきであらう。

又本曲中で淸十郎の許嫁おさんが妹おしゆんと共に歌比丘尼となつて夫の行方を尋ねるのは「薩摩歌」のおらん比丘尼から生れ出たものであらう。種さがしの序に、中の卷でお夏が蚊帳の開限をしようと淸十郎を共中へ引張り込む仕打は「心中萬年草」の中の卷雜賀屋の二階でお梅と粂之助が新調の夜具にもたれ合ふ場面の轉化であるが、お夏の熱情的で大膽な仕打は到底お梅の及ぶ處ではない。

この作は「飾間褐布染(しかまかちんぞめ)」と改題されて正徳年間に京都の榊山四郎太郎座と民屋平之助座とで二回演じられた。又「笠物狂」の一章は「丹波與作」と同じやうに都半仲によつて作曲されて一中節の語り物として今に傳へられてゐる。義太夫では改作物としては享保十六年四月豐竹座上場の「和泉國浮名溜池(いづみのくにうきなのためいけ)」(並木宗助、安田蛙文合作)がある。この作では淸十郎は勘十郎にお夏との密通を許されて主家を追はれ鄕里の水間に歸つたが、主家へ返濟すべき九十兩の金策に窮した。養父の佐次右衛門が娘



「飾間褐布染」表紙

おさめを賣つて金を調へる、淸十郎はおさめを請出さうとあせつて、惡人に乘せられ溜池埋立を計畫して失敗するといふ風に作りかへてある。安永七年十二月北堀江座上場の「夏浴衣淸十郎染」は淸十郎とお夏とおしゆん(淸十郎の許嫁)の三角關係を主想とした作である。其他歌舞伎や豐後節にも改作は多いが枚擧の煩に堪へない。

栬狩劒本地

寶永六年九月九日から竹本座上場。

謠曲「紅葉狩」を材題として、これに平國の寶劍の威力を取合せて脚色したものである。平維茂が禁中の妖怪退治の功によつて餘吾將軍に任ぜられて、戸隱山の惡鬼退治の命を蒙り、當座の恩賞として宮中の上臈世繼御前を妻に、又引出物として平國の寶劍を賜つた。橘諸任といふ維茂の競爭者が之を妬んで世繼御前の輿入の夜途上に要して奪はうとした。此騷動の時寶劍を持つて居た雀巢帶刀太郎高房は行方不明となつた。維茂は情人玉ゆら姫と世繼御前とに同文の手紙を與へて寶劍搜索の途に上る。然るに帶刀太郎は寶劍を携へて伊吹山の麓に艾屋となつて居る昔の家來久作夫婦の許を尋ねて之を托して歸京したが、不慮の行違から其妻に刺されて死ぬ。末期の遺言によつて帶刀太郎の妻は一子房若と共に久作の許に寶劍を取返しに來る。久作は二人を殺して寶劍を諸任に捧げて恩賞に預らうとする。女房は一人息子を殺して迄苦諫したが聞入れずして慘殺すると、その首が

寶劍をくはへて虚空に飛去り。久作は房若親子に殺される。寶劍を探しつゝ戸隠山に向つた維茂が雲間より落ちて來た半國の劍の威力によつて惡鬼を退治し、折柄攻寄せた諸任を滅す、房若は維茂に召抱へられて鷹巣小太郎廣文と名乘るといふ筋である。第三段艾屋の段が最も技巧的であり、第四段は謠曲「紅葉狩」の飜案である。

これより先淨瑠璃で「紅葉狩」を材題としたものに大和少掾藤原貞則の「紅葉狩」がある、明暦四年七月京都正本屋九兵衞の刊行である。維茂惡鬼退治の段は謠曲に基づくので本曲と相似て居るが、其他は兩曲の間に左程の關係は見出せない。宇治加賀掾の正本「戸隠山太平御劍」は本曲の改題である。

校訂用原本は七行九十四丁本で、十行四十二丁本と對校した。

二郎兵衞 おきさ 今宮の心中

寶永七年正月十三日から「曾我虎が磨」の切として竹本座に上場された。作者五十八歳。

寶永六年の秋大阪本町二丁目菱屋四郎右衞門の下女きさと手代二郎兵衞とが今宮の戎の森で情死した事件を仕組んだものである。菱屋から暖簾を別けられた由兵衞が菱屋の人々を招いて西横堀の涼船で遊山をする。こゝへおきさの在所の親三田村の太郎三郎が來て緣付かせる爲にきさの暇をもらはうとする。きさは二郎兵衞とねんごろして夫婦約束迄して居るから聞入れない。きさに

心ある由兵衞は自分に氣があるからと己惚れて、太郎三郎が無筆なのを幸におきさの緣談は菱屋隱居貞法任せといふ證文といひながら、自分に都合のよい文句の證文を書かせて判をさせる。陸で見て居た二郎兵衞が宵闇に乘じて石を打つので、由兵衞は亂暴者を捕へようと上陸して人違ひをしてとんだ目に逢ふ滑稽の場面で上卷は終る。中卷は菱屋の內の場で、おきさと二郎兵衞が主人四郎右衞門の眼病療治の灸點をおろす間に、腰の巾着から用簞笥の鍵を竊取して簞笥をあけ、由兵衞が太郎三郎に書かせた證文と思つて破つたのが大事の家質の證文だつたので申譯がないと思ひ込み、且つ隱居貞法に強意見をされておきさを斷念せねばならぬ事となつたのをも悲み、遂におきさと連立つて今宮の森で心中する。その時日野絹一反を松の木に懸け、二人並んで縊死を遂げ、掛鯛心中と世間に評判を殘した。男は廿二、女は五つ年上の廿七歲であつた。

紀海音は之を改作して「丸腰連理松」と題して正德二年四月(或は正德元年か)豐竹座の勾欄にかけた。此作では由兵衞といふ色敵の代りに仕立屋彌兵衞を以てし、その奸計によつておきさは二郎兵衞の手から奪はれようとする。それを兄手代の權兵衞が一時救つてやるが、前途に添遂げる望のないのを悲んで五月廿三夜待の曉に今宮の森で情死するといふ風に作つてある。作意も文章も原作に及ばぬ。

校訂用原本八行四十丁本。

百合若大臣野守鏡

寶永七年五月六日から竹本座上場。

豐後の旗頭太宰太郎和田丸は平城天皇から九州に來寇した蒙古裡軍征討の命を受け、百合若大臣の稱を賜り、且つ天香具山の香取丸・綠丸雌雄の鷹の羽で矧いだ一對の名高い矢の中の甲矢を下さり、又凱陣の上は妻とせよとて禁中一の美人立花姫と婚約を許された。香取丸と綠丸とで矧いだ一對の矢は雌雄相慕うて所を別にして置いても一所に廻寄ると言傳へられた。百合若は出征して敵を敗つたが、其臣別府雲足・雲澄の兄弟が百合若の睡眠癖あるを利用して彼を玄海の孤島に放置したまゝ歸朝して、戰死と復命し其國を横領した。立花姫は都で焦れ死んだが、その魂魄が綠丸の乙矢に乘り移り鷹の精靈と化して立花姫の姿を現し、絕海の孤島で百合若と契り一子還城丸を儲けて四年を過ごした。處が病氣の爲に從軍出來なかつた執權府內秀主の次男秀虎は嚴島明神の冥助によつて玄海の孤島に百合若に邂逅して本國へ伴ひ歸る事となり、こゝに還城丸父子と鷹の精靈たる立花姫との哀れな別離の場面がある。又他の一方に於ては、秀主の嫡子惡文治秀景は酒色に溺れて勘當され駕籠舁と成り下つてゐたが、主家の變を聞き、昔の武士に立還つて忠勤を致す秋と思ひ、有馬の浴客の刀を竊取しようとして圖らず父に逢ひ、こゝに父子協力して主家再興を企て、秀景は其妻松が枝を僞せ盲に出で立たせて別府邸內に入込ませて雲足を誘ひ出し、折柄來會した百合若秀虎と共に惡人を滅すといふに終る。

外題名は三段目切の鷹の子別れの條に「巖の方に飛上り、鳴き交したる敏鷹の對守の鏡目には見

て、手には止らぬ妹背の中思ひやゐにも哀れなり」とあるのによつて、百合若大臣と鷹の精靈と契つた事を利かせたものと思はれる。なほ又「はし鷹の野守の鏡」の出典は「はし鷹の野守の鏡得てしがな、思ひおもはずよそながら見む」の古歌であるが、この歌については「俊頼口傳」に、天智天皇の仰せでそれた鷹を捜し出すのに野守の翁が野に溜つた水面に映る鷹の影によつたので、野に溜る水を野守の鏡と言ひ初めたとあるが、その傳説に因んで姿は見ながら遂に再び同棲は出來ない鷹の化現であるとの意を利かせたものであらう。

この淨瑠璃は百合若の傳説を材題とした幸若舞曲の「百合若大臣」を藍本として居るが、四段目の松が枝僞せ盲の趣向は、幸若舞曲の「鎌足」の末段鎌足が僞せ盲となつて入鹿に近づき、其兒の火中に陷つたのを態と救はずして入鹿に心を許させる條に基づいてゐる。尤も井上播磨の語り物に「百合若麿」があり、又元祿十三年に大阪の竹島座で「今用百合若」を、同年京龜屋座で「百合若唐船」が興行されたといふ風に百合若やばりであつた、この風潮に促されて脚色するに至つたものと思ふ。

趣向について云へば、第一段の山崎關戸院の夢の場は後の「苅萱桑門筑紫𨏍」の學文路慈尊院の夢の場の原作であり、第三段立花子別れの場は、信太妻や三十三間堂の子別れと同型であつて、「蘆屋道滿大内鑑」の狐葛の葉子別れの段の原據となつてゐる。又第三段の有馬の池の坊の場の秀主秀景父子再會の場は最も劇的であり、そして秀景の駕籠舁姿は坂田藤十郎の舞臺姿を思ひ起させる。

七行八十二丁本によつて校訂した。

心中刄は氷の朔日

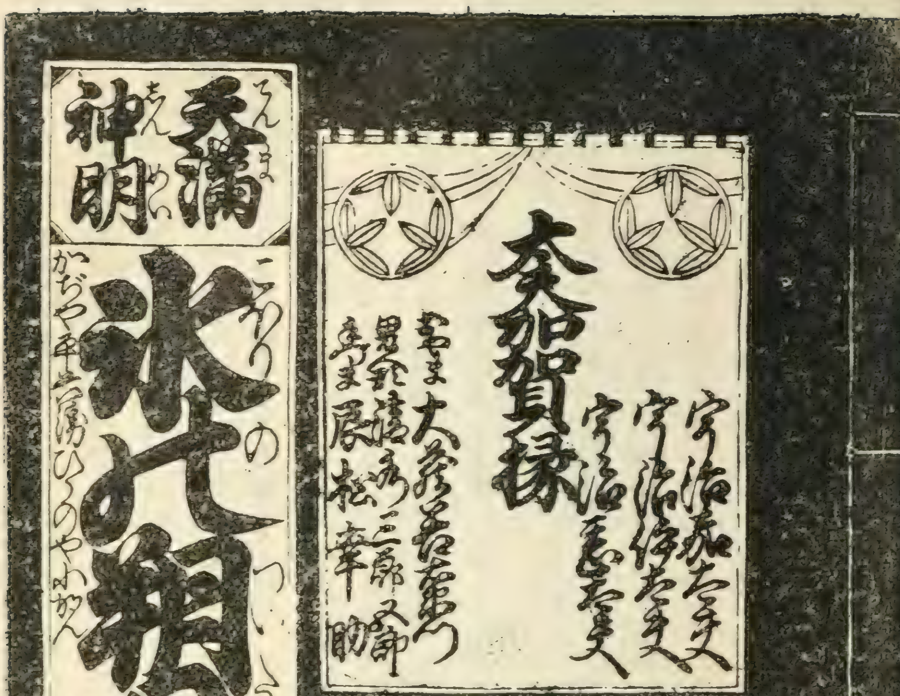
寶永七年六月十六日から竹本座上場。但し作中に「一昨年の大地震」の句があるが、これを寶永四年の地震を當込んだのだと解する時は寶永六年の作となるが、他に有力な傍證が無いから、今姑く「外題年鑑」に從つて置く。

播磨藩の鷹匠の娘つやは、父が浪人となつた爲に大阪の叔母の許に預けられたが、その家の貧苦なのを見かねて曾根崎新地に身を賣つて平野屋の小かんと名乘つた。そして備後町の鍛冶利右衛門の弟子平兵衛と馴染を重ねたが、平兵衛は小かんの身請金の不足額たる四兩二分の金策に窮して、大和の穢多村の者から雪駄の裏金の註文を取つたので主人に勘當された。此時國許から小かんの昔の乳兄弟であつた侍が迎に來て、身請をして連歸らうとして情理を盡して說き、又母の手紙を渡す。小かんは親の情を思ひながらも、男の愛に引かれ、相携へて北野の藍畑で情死するといふ筋。

二人の情死は寶永七年六月朔日の朝の事であつたから。それを利かせて「氷の朔日」と外題につけたのだといふ。

加賀掾の正本「天滿神明氷の朔日」はこの外題替である。

八行四十二丁本により八・九行三十一丁本と對校した。



「天満神明氷の朔日」表紙

以上甚だ不完全ながら解題を終つたが、最後に校訂の方針について一言附加へて置き度い。校訂者は先づ第一に信頼すべき正本蒐集に努力した。正本としては延寶七年に宇治加賀掾によつて八行本が印行されるやうになつてから正徳元年に七行本が行はれ出す迄の正本としては、八行本（多くは山本板）が最も信憑すべきものであると信じ、成るべくこれによる方針を採り、傍ら十行本乃至七行の再板本又は繪入細字本を對校用とする事とした。

次には語り本の原形を存すべきか、全然讀み本とすべきかについて考へたが、淨瑠璃は人形に合せて語られる物として書き下されたもので、その制約に基づく特殊の句法によるものであり、而も一度句法を改め曲節付を省いて讀み本としたものは、原本がなくては語り本に還元する事は絶對に不可能である以上は、原本を尊重する立場にある本刊行會の出版としては、語り本として覆刻するのは當然の事であると考へた。

すると次に問題となるのは正本の曲節墨譜を如何に取扱ふべきかである。墨譜は語り物としては大切には相違ないが、活字本では之を移す事は不可能であるから割愛するより外はない。次に曲節付は曲趣を解し、文勢の轉換を知る上に必要と思はるゝ

地　詞　フシ　オクリ　ナホス　スヱテ　序　キリ　三重

の類、及び他の先行及び並行音曲を取り入れた符標たる

平家　謡　舞　説經　文彌　播磨節　歌　踊歌　鉢タヽキ　歌祭文　歌念佛　順禮歌　木遣

音頭　馬子唄　大黑舞　鳥追等の類はすべて保存した。

それから句切りは、語り物としての特殊の息つぎ語り口を想像する上に於て、極めて必要であると信じてすべて原形の儘とした。但し讀解の便を圖つて、假名遣を正し、漢語佛語又は人名地名等には適當の漢字を宛てた。それが爲には出來るだけの努力をしたが、併し尚不備の點や誤解した箇所もあらうと竊かに恐れて居る。

また場面想察及び當代の風俗研究の爲にもと考へて、出來るだけ挿繪を多くし、正本の樣式を知る便を圖つて、その見本をも挿加へて置いた。

大正十五年十月

校訂者しるす

花山院后諍

二条通 正本屋 九兵衛

殿上之うはなり討

第一

抑も其の後それ天地人の三才を觀するに。天は地に和して萬物生じ。人は夫婦金胎の道を守つて子孫絶えず。されは八雲安積山の言の葉も皆これ妹背の媒なり。然れども其の道に溺る丶時んは必ず家を失ひ身を滅す。茲に本朝六十五代の帝をば オロシ 花山の院と號し。奉る。地 其の頃十二の局の內。藤壺の女御。弘徽殿の女御此の二人を御寵愛なされしが。中にも弘徽殿の御形。世にたぐひ無くましませば。いつぞの程より。弘徽殿に御幸なつて。月に戯れ色香にめで千代をかねたる御契淺からず オクリ とこそ聞えけれ。地 さて又時の關白には太政大臣頼忠公。左大臣源の雅信公。右大臣藤原の兼家公。兩三人萬機の政を執り行ひ給ふ。さて天下の武將をば。源平兩家相守る先づ源氏には。貞純親王四代の孫攝津守賴光。すなはち弘徽殿の御後見なり。同じく郎黨には渡邊の綱。碓氷の貞光卜部の季武。坂田の公時平井の保昌。此等五人は天が下に雙びなき勇士なり。扨又平家の大將には。葛原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤壺の御後見なり。郎黨には。いぎみの源忍貞親主馬の藤太隆盛高瀬の刑部有國別府の五郎俊景とて一騎當千の侍たり。兩家互に立並び君を守護し奉れば。四夷八荒に至る迄治まる御代とぞ 三重 聞えける。フシ かゝるめでたき折節に。地 思はぬ事こそ出來けれ。或時藤壺の女御は白糸の內侍とて。御身近き宮女を近づけて。如何に白糸聞き給へ。昨日迄も今日迄も二世とかねたる睦言のいつしか秋の弘徽殿思ひかへられ剰へ中宮に立ち。一の后に備はるとの風聞なり。もしさもあらば自らも。彼に從ひあらんこと生きては何のかひあらん。思へば〳〵口惜しやと涙乍らに宣へば。白糸は承り。けに御道理自らも。よそにて見るさへ世にも無念に候へば。御恨の數々思ひやられて候なり。詞 自らつく〴〵存ずるには。君の御後見平の正度を賴みつつ。弘徽殿を失ふ策をめぐらすべし。地 幸ひ自らこそ少し好みの候へば。ひそかに賴み申さんと フシ 事もなげにぞ申しける。地 藤壺なゝめに思召し。其の儀にてましまさば。偏に御身を賴むなり。はや疾く疾くと宣へば承り候と。御前を罷立ちやがてひそかに正度を。とある處へ招きつゝ始終を委しく語り。詞 あの弘徽殿一の后に立ち給はば。いよ〳〵源氏のによつて存じたれ。それを意趣討まさん。

地何とぞ智略をめぐらして。弘徽殿を失ふやうに計らひ給へと　フシいとしみ〴〵とぞ頼みける。地元より正度白糸に通ひなれ。色に溺るゝことなれば後の咎も辨へず　おう此の段は何より以て易き事、委細心得候と。事も無げに約諾し我が家をさしてぞ　三重歸りける。フシ自宅になれば。地郎黨の其の中に早見の七郎とて忍びの名人をひそかに近づけ。詞やおかやうかやうの次第なり。弘徽殿へ忍び入り女御を害しえさすべし。此の事仕畢せて有るならば。恩賞は望たるべし。萬事は頼むとありければ早見承り。地こは一大事の仰かな。さりながら善悪は時の運。随分窺ひ申さんと領掌申しお前を立ち。我が家に歸り用意して忍び入るこそ三重あやしけれ去程に。地源の頼光は物事に油断無き心底にて。弘徽殿御寵愛深ければ。いかさま人の嫉みあるべし自然の事のあるならば。某が誤りならんと常々四天王に仰せつけられ弘徽殿をぞ守らせける。折節其の夜は渡邊の綱が承りにて。細殿口に宿直してこそゐたりけれ。詞是をば知らで早見の七郎。細殿内へ忍び入らんとせし處を。渡邊すかさぬ早業なれば。こは狼藉者遁さじと一文字に飛びかゝれば。顯れぬると取つて返し逃げ行くを。いづく迄かやるべきと築地の内をあなた此方と追廻し紫宸殿の下口にて追詰めたぶさを取つて後へどうど引倒し。起きんとするを取つて押へ首かき落しやあ狼藉者を仕留めたりと呼はつたり。北面の侍ども我も〳〵と立出でて松明振立て見てあれば。平家の侍早見の七郎景光なり。人々驚き關白公へ言上申せば。頼忠聞召し。如何さま是は仔細あるべし源平兩家を召せとある。畏つて候とて。既に其の夜も明けければ。やがて使ぞ三重立ちにける去程に。フシかくて兩家の人々は南殿の大床に伺候ある。詞時に關白出でさせ給ひ。今宵弘徽殿へ紛れ者の入りけるを渡邊の綱が討留めたり。見れば平家の侍早見の七郎といふ者なりと風聞す。それ〳〵詮議せられよとぞ仰せける。正度はつと思はれしが騒がぬ體にて罷り出で。さん候其の早見の七郎は某が郎黨にて候が。綱はいづくに候ぞ尋ぬべき仔細ありとあれば。渡邊是に候と御前間近く参上す。正度見給ひ如何に渡邊夜前早見の七郎を藤壺の御方へ警固につけて置きけるが。何たる意趣あつて禁裡にては討つたるぞと申さるる。されば某も頼光の仰にて弘徽殿に御番を勤めありし所へ誰とは知らず細殿内へ忍び入り候故。微塵になさんと飛びかかり候へば。目の早き男子にて取つて返し逃げけるを紫宸殿の下口にて追詰め申して候。早見の七郎とは人々の申されしによつて存じたれ。それを意趣討になし給ふは思ひも寄らぬ次第なり。もし意趣あつて討つならば禁中にて討たずとも。あの早見體のへろ〳〵武者。五十や百は此の。渡邊が手にためず候と。憚り無くこそ申しけれ。正度聞いて。して

又早見が弘徽殿へ何故に行くべきぞ。證據もなき事申すとも。人をあやめし其の罪いかでか以て遁るべき。とう〳〵渡邊が首斬つて渡さるべしとぞ申さるる。其の時頼光進み出で如何に正度。狼藉者を討留めて高名したる渡邊なれば御恩賞こそ賜はるべきに。何ぞや御分達の計らひにて綱が首斬れなんどとは傍痛き言分やとあざ笑つて宣へば。いやこれ頼光。して端喧嘩は兩成敗とは定まらずや。然らずば皆式目は反古たりとぞ申さるる。やあ正度。禁中の制法を反古なりとは推參なりと變色して宣へば。渡邊の綱申すやう。いや兎角夜前の次第を案ずるに是藤壺の女御弘徽殿を嫉み給ひ。正度殿を頼み給ふに疑なし。如何に上をかすめ給ふとも天眼は明かなり。其の上早見體の相手に此の。渡邊は及び難く候はんと氣色變つて申しける。時に關白公兩家の色を悟らせ給ひ。地事の次第は後日の沙汰に及ぶべし。先づ今日は兩家ともに退散あれ畏つて候と。源平とかうに及ばずフシ一度にはらりと立ち給ふ。地時に公時取つて返し。いや是程實否極まりし事を後日の沙汰とはなまぬるし。殊に平家に喧嘩を望むと見えければ。いで〳〵喧嘩に及ばんと駈出づるを人々左右に取付いて。こは不覺なり公時。關白公の仰といひ。ことに天子の御庭にて狼藉は叶ふまじきと引立つる。いやさ。恐るゝも時による。是非一喧嘩致さでは全く以て歸らじと駈出で地ツメ駈出でしけれども。無體に宥め歸りける公時が爲體。凄じかりともなか〳〵申すばかりはなかりけり。

第二

〽かくて平の正度は。急ぎ宿所に立歸り。一門家の子召集め。扨も此の度關白公。後日の沙汰とある上は。重ねて對決遂けん時。藤壺に頼まれて。弘徽殿を失ひ申さんと。早見を忍び入れしこと。遂にはかくれ有るまじき。さあらん時は藤壺の。御身の上はともかくも。我が罪いかで遁るべき。其の上早見を討たせつゝ相手をも取らせずして片手打ちなる御仕置なり。詮ずる所此の上は。源氏と打果し兩家の運をためすべし方々如何にとありければ。一家の人々承り。御憤り至極せり。此の上はとかう申すに及ぶまじ。さあらば用意致さんと。一門以下の諸侍都合其の勢一千餘騎。堀川さしてぞ三重寄せにける此の事かくれ。あらざれば源氏の一門。我も〳〵と馳集り。寄せ來る敵を待ちゐたり。案の如く平家の兵。二條堀川に押寄せて鬨をどつとぞ。揚げにける引鬨の聲も。靜まれば平家の方より。武者一騎進み出で。只今爰許へ罷り出でたる兵を。如何なる者とか思ふらん。正度の後見。城の目重茂なり。早見の七郎景光を。藤壺女御の守護の爲。つけ置かれしを無體に討つ。其の相手を取らん爲。是迄罷り向うたり急ぎ相手を出し首を斬り命が惜しくば降參せよとぞ罵りける。時に源氏の陣よりも平井の保昌進み出で何と申すぞ城の目

此の頃弘徽殿の女御一の御寵愛たる故にそれを嫉む藤壺に頼まれて。早見を忍ばせ弘徽殿を害し奉らんとせし所に。思の外に仕損じて渡邊に討たれし故。後日の詮議を大事と思ひ當座の喧嘩にとりなさん爲。一門を催して押寄せ來る表裏者。ヤアあれ打取れといふより早く我劣らじと切つて出で。火花を散して 三重 戰ひけるかゝりける所に。平家の方より武者一人進み出で。我はこれ早見の七郎が弟同じく九郎景季なり。渡邊殿はいづくにぞ。藤壺の殿へ入り兄七郎が寢首を打ちしとは拔群に違ふべし。其の上兄の敵なれば人手にはかけまじき。見參やつとぞ名乘りける。渡邊立出でこれを聞き。やあおのれ等は面目なき天逆樣なる言分かな。汝が兄の七郎こそ。弘徽殿をあやめん爲細殿脇に忍びつつ某に討たれけれ。兄弟のよしみなれば汝も綱が手にかゝり兄の跡を慕ひ行けとつッと寄つてむずと組み。かさにかかつて押しけれども。九郎も聞ゆる大力。藤の纏ふる如く寄添うて 打倒さん〳〵としたりけり。やあ汝も少々力ありけりと上帶を引掴み搖り上げ四五返振廻し。彼所へかつぱと投棄てて起上らんとする所をやがて首をかき切つて。味方の陣へ引きたりしは潔くこそ見えにけれ。時に寄手の陣よりもいぎみの源惣主馬の藤太別府高瀬を先として大鬪の兵ども綱を目がけて駈出づる。公時保昌貞光季武一度にどつと駈合せ。源平隨一の兵ども渡し合せて切結び。思ひ〳〵に引組んだり。もとより源氏の四天王。易々と取つて伏せ首をかかんとせし所に公時聲を上げ。如何に方々彼奴等は名高き勇士なり。とてもの事に生けながら大將軍への土產にせん尤といふ儘に。縛めんとせし所へ平家の大勢一度にどつと懸りけり。渡邊此の由見るよりも。大長刀を走らかし餘すまじきと振り巡れば。刄向ひたる軍兵ども一太刀も合せずむら〳〵ぱつと引いたりけり。五人の人々聲を上げ。やあ軍はかやうにするものぞ。手並の程をよく見よと。城中さしてぞ入りにける。あつぱれ誠の四天王やと譽めぬ者こそなかりけれ

第三

さる間 地 關白頼忠公源平の戰を聞召し。やがて兩家の人々を召して仰せけるは如何に方々。私の宿意を以て洛中を騷がす條以ての外の狼藉なり。上に紛れなき上は下の怒を押へ。兩方共に穩便たるべきこそ忠臣の道にてあれと。委細に宥めさせ給ひければ源氏はもとより。此の軍に打勝ちたれば別儀なし。平家は事を紛らかさん爲なれば仕濟したりと思ひ畏つてお請を申し。ラシ 兩方異議はなかりけり。地 此の度の濫觴は藤壺の女御。弘徽殿を嫉み給ひ平家を語らひ給ふに疑なし。然れども此の實否を糺しなば。源平の爭鬪。偏に天下の大事と御思案あつて。深く事を糺されず都の騷動鎭めさせ給ふ。關白公の御心底有難がりける 三重 次第なり。ノシ 是は扨置き。地 藤壺の女御

は此の由聞召され。白糸を近づけて。さて
ら無念の次第がな。本望遂げぬのみならず
平家に恥辱を與へし恨み口惜しや。兎角
みづからが敵は弘徽殿なり。此の上は暫し
の内も長らへ胸を焦さんより。弘徽殿と刺
違へ君にも思ひ知らせ奉らん。跡を頼むぞ
白糸と。色詞守刀を押取つゝ駈出で給へば
白糸周章ててすがりつき。地こははしたな
き御有樣。先づ此方へと引止む。女御猶も
せきかねて。いや妾を放せ白糸と。振放さ
んとし給へは 女房達は大勢立寄り奥に誘
ひ 三重申しけり。フシ此の事かくれ。地あら
されば帝大きに逆鱗あつて。内裏には叶ふ
まじ。急ぎ里へ送れとの綸言なり。畏つて
候と。北面の若侍に仰せつけられやがて御
輿さし寄せて。いたはしや藤壺を是非をい
はせず取つて打載せ。里へ送り出せしは
ウレヒ上情。なうこそ 三重見えにけれ。フシ
館になれば。地かやう／＼と引渡し。北面
の者どもは フシ内裏をさしてぞ歸りける。

地爲平夫婦の人々は。大きに驚き給へども
スエフシ綸言なれば力なし。地もとより女御
は胸の焔はいやましに。今はひたすら狂人
の身となりて駈出で。駈出でし給ふ故爲平
詮方無き餘りに一間の獄屋をしつらひて。
うきふし分かぬ御有樣いたはしオクリ〳〵かり
ける次第なり。地然れども藤壺は葉末に結
ぶ露の間も忘られはこそ イロ腹立や。あら
口惜しや無念やと。格子に取りつき悶え叫
び給ひしは身より出せる罪ながらウレヒあは
れと問はぬ 三重人はなし。是はさて置き。
地弘徽殿の女御は。藤壺の御身の上を聞召
し。あゝ恐ろしや何事も皆みづからが故な
れば。人に怨をうけし身の行末何と奈良坂
や。このて柏の二道かくる君故に。我も亦
かくもなん。如何なる憂き目に逢ひもやせ
ん。フシ萠え。出づるも。枯るゝも同じ野
邊の草。何れか秋に逢はで。さて果つべき
身にもあらざれば。今日は人の身の上あす
は又。我が身の上と思召し。浮世の無常を

觀じつつ暫しスクリ〳〵まどろみ給ひけり。然
る處に藤壺の妄念蛇身となり。庭上に現れ
障碍をなすこそ 三重恐ろしけれ。フシさて
其の後に。地藤壺の怨靈又いと艶いたる靑
女房と現れ。其の樣化したる風情にて スエノ
シ妻戸の脇にすご／＼とフシたたずみける
ここそ恐ろしき。詞弘徽殿は夢さめ此の有樣
を御覽じて。やあ是は如何なる人にてまし
ますぞ。其の時女性答へて曰く。こは愚な
る問事かな。地人の怨を受けながら。名乘
らずとても今は早。園生に植ゑし紅の。も
れても色に出づべしとあれば。弘徽殿胸打
騷ぎはつと思召されしが。フシ心を靜めて
なごやかに。げに／＼名乘らせ給はずとも
。大方は推量申して候なり。さりながら人
の怨を受けしとは。みづからには何たる怨あ
るやらん。身には覺えなきものをと宣へば。
詞なう覺えなしとは愚なり。地ありし昔の
雲の上。共に眺めし月影の。うつればかは
る飛鳥川。花紫の藤壺を追出さるゝは誰故

そ。詞あさましや嗚呼あさましや。蓬生のひとり。こがるゝうき身の程思ひ知らせん。引取ノン其の言に藤壺の怨靈これ近現れ出でしぞや。地弘徽殿は聞召し。あらあさましや嫉妬のねたみは人にこそよれ。互に押しも押されもせぬ御身にて。藤壺の女御にはさりとては似合ひ申さぬ御事なり。殊更御身も自ら。中宮后にてもあらばこそスエフシ女御の數は多ければ。わきて誰とか名ざされ。恐れながら我が君をいまや夫と思ひ給ふは愚なり。あさましの御心根やフシはや〳〵歸らせ給ふべし。地藤壺いよいよ腹を立てやあ如何に弘徽殿御身が命を助け置き。君と契を結ばせて。榮花の花を咲かせつゝ。葎の宿に唯一人。弱るフシ蟲の音諸共に泣き聞かさせんと思ふかや。いで〳〵思ひ知らせんといふよりやがて立寄りて。さん〴〵に打散らし少し立退かせ給ひしが忽ち姿を變じつゝ。思へば〳〵腹立や。わが身は獄屋に押込められ、ウタヒオンハ葉末の露と消え果つる。御身は君といやましに、起き臥し小夜の寝覺にも、妻が身の上讒りつゝ。とやある斷くや成り果つると昔語になるならば、なほも思は増鏡其の面影の地つらにくやとする〳〵と走り寄つて。何といふとも命を取らでは瞋恚の焔ははれまじき。思ひ知らずや思ひ知れと散々に打伏せて今は本望遂げたりといふ聲ばかりは有明の雲に紛れて失せにけり凄じかりける三重

次第にいフシあら痛はしや。地弘徽殿今ははや。たえ〴〵に見えさせ給ふ。女房達我も〳〵と立寄りて　こはそも如何に女御樣御心は何と成らせ給ふぞとイロフシ各叫び給ひけり。地折節帝御幸なり。やあ何事やらんと宣旨あり。女房達承り藤壺の怨靈のあらましを奏聞あれば。主上大きに驚かせ給ひ。忝くも女御の御手を執らせ給ひ。やあ心は何とありけるぞや。たとひ限りの命なりとも。まろが日頃の睦言を忘れはせまじさりとては　スエフシ少し心を取直せ。フシ如何に〳〵と仰せける。地今を限りの弘徽殿。勅諚なりと嬉しくて。重き枕をやう〳〵として少し上げ。あら有難の宣旨やな。たとひ此の身は消ゆるとも。かねて交せし睦言の。天に在らば比翼の鳥。地に又あらば連理の枝と契りしを。いかでか忘れ候べき。生者必滅會者定離は。浮世に遁れぬ道なれば。スエフシ必ず歎かせ給ふまじ。もとより假の宿なれば。永き住家の蓮臺を恐れながら半座を分けて待ち申さんとても叶はぬもの故に。大内にて果敢くならば穢多し。未だ今生に息の通はん其の内に、故郷へ送らせて給はれや。フシ我が君樣とぞ申さるる。主上御涙と諸共に。かほどに弱る身ながらも後の穢を思ふかや。お事に別れ何しに位にあるべきや。朕も思ひ定めたりと綸言あるこそ有難き。弘徽殿は聞召し。こは冥加なき宣旨かな最期に玉體を拜し奉れば心にかゝる雲もなし。早々還御ならせ給へ。君のこれにましませば心亂れて迷ひなり。喃そ

れ人々とありし時中納言義懐左中辨惟成還幸なし奉れば主上力及ばせ給はず。名殘惜しくも還幸ある叡慮の オクリ 程こそたぐひなき。地 痛はしやな弘徽殿。幽かなる聲音にて。みづからは最早只今過行くなり。空しき姿を其の儘に。あの花山寺へ送りつつ。土中につき込め給はれと宣ふ聲も幽かにて悲しきかなや十七歳。眠れる花の如くにて。朝の露と消え給ふ。義懐惟成女房達是はく／＼と フシウレヒ ばかりにて各涙を流さるる。地 されども叶はぬことなれば。御遺言に任せつつ。花山寺にて御廟につき込め奉る。弘徽殿の御最期を。上一人より下萬民に至る迄惜み悲み奉るはさて。げに道理とぞ聞えける。

第四

地 然るに二十五有の内何れか生者必滅の理に漏れん。況んや老少不定の境をや。さる程に主上は弘徽殿の御別れ。暫しも忘れさせ給はねば晝はひめもす夜もすがら。悲歎の御涙に伏沈み イロフシ 乾く間もなき御風情。朝政もたえ／＼に。今は早雲の上偏に闇夜に燭消え。涙五更の雨となる。頃は水無月二十二日の夜半ばかりの事なるに。御痛はしや帝は中納言義懐左中辨惟成を召され。それ唐土の漢王は反魂香の煙の内に李夫人の姿を見。又玄宗皇帝は楊貴妃が魂魄を尋ねしも。スエフシ 方士がありし故ぞかし。地 さて我が朝に於てをや。夢にならでは見ざれども寝ぬる間もなき我が思ひ。夢の契りも頼まれず。つく／＼事を案ずるにかく戀慕哀愁の羈にかゝり。位にあつて何かせん是を菩提の種として發心修行の身となつて。彼の者の菩提をも弔ひ イロ 後世の契を頼まんと思ひ定めてあるぞかし。君臣の契もこれ迄なりとの綸言にて。御落涙は頻なり。詞 義懐惟成承りこは勿體なき叡慮かな。哀別離苦の悲みは高き卑きに限らねども。深くこれを執するを輪廻の相とて佛も誡め給ふなり。地 されば聖武皇帝は。光明皇后の御別れを悲み。盧舎那佛を建立し。菩提をとはせ給ふなり。さほどに思召すならば如何なる大伽藍をも御建立ましまして。亡き人の御菩提を弔はせ給ふべし。玉體を棄てさせ給ひては亡者の御爲。却つて罪業の基とやなり申さんと。フシ 樣々諫言申さるる。地イロ 帝叡聞まし／＼て。嗚呼愚なり方々。されば釋尊は淨飯王の都を棄て。達磨尊者は南天竺の王子ならずや。かく大國の主だに。棄つるとあれば塵芥よりも輕くせり。況してや粟散邊土の小國をや喃。さらばく／＼と宣ひて御座を立たせ給ひければ。兩人力及ばず。スエフシ 御衣の袂にすがりつき。地 かくは申しはんべれども是非思召し立つ上は。野の末山の奥。蝦夷が島の果までも。いかでか離れ奉らんと涙と共にぞ奏しける。さあらばいざとの宣旨にて。御年十九と申すには十善帝位をふり棄てて夜半に紛れて貞觀殿の御門より。忍び出でさせ給ひしは例少き 三重 次第なり。是

は扨置き【詞】其の頃天文の博士、安倍の晴明と聞えしは。神變奇異の相人なるが、此の程宿願のことあつて日吉の社に百日籠りゐたりしが。六月二十二日は結願にて、【地】寶殿に立入り湖水遙に見渡して居る所に。あら不思議や水中より滿月一輪現れて。中より二つに割れて雲居 フシ 遙に上りけり。【詞】晴明はつと打驚き、それ日月は天よりこそ出づべきに、水中より出でて天に上るは逆さまなり。さて此の吉凶如何にと暫く考へ。是はいか さま帝王

花山院后諍

位を去り給ふとの天ず
なりと考へ。地大きに
驚きそれよりも取る物
も取敢へず都をさして
ぞ。三重上りける。フシ
都になれば地すぐに内
裏に参内し。事の樣を
見てあれば。月卿雲客
帝の忍び出でさせ給ふ
を夢にも知しめされず
こ紫宸殿に會合してぞ
おはします。詞其の時
晴明右のあらまし言上
申したりければ。關白
公聞召され。されば此
の程は女御の御別れに
御慨きやまずして。夜
の御殿を出でさせ給は
す去りながら。地汝が
申す所覺束なしさあら

ば尋ね奉らんと。左右の大臣諸共に御殿の内を彼方此方と見給へども御幸いづくと知れざれば。人々大きに驚きこはそも如何なる事やらんと スヱフシあきれ果ててぞおはします。詞時に晴明申すやう。是はいかさま女御の御別れをやる方なき叡慮にて。花山寺へ御幸なりしと覺えたり。急ぎ彼所へ御渡り候へと晴明諸共公卿大臣花山寺さしてぞ 三重急がれける。

道行 げにや高きも卑しきも恩愛妹背の別れ程 フシ世に哀なる事はなし。勿體なくも主上は。十善帝位をふり棄てて。召しもならはぬ草鞋に。イロマン御足を痛ましめつゝ。義懷惟成御供にて。戀路に迷ふ泡沫の フシオクリ歸らぬ水の。 フシ泡とのみ消えにし人の。面影は夢にだに見えざれば。なれし昔の手枕に。語りつくせし睦言の。耳に止り懷しや。忘れもやらぬ戀草の露も思ひ亂れつゝ。吾が身はもとの身なれども。契りし人の無き故に。月やあらぬとかこちしは。げに理と思召す。スヱフシ心細き折柄に。寡鶏の浮かれ聲。我を訪ふかと思はれて。哀を催す道の邊に。夜すがらとぼす螢火の。おのが思ひのあればこそ。蟲だに胸をや焦すらん。實に在原の業平か。闇中のながめに飛ぶ螢。雲の上迄往ぬべくば秋風吹くと告げこしも。涙比べて哀なり。いとゞことさへ〳〵身を知る 引取雨の晴るゝ間もなき中空に ハヅミ フシ小田の蛙の鳴き添ひて。 スヱ道も定かに見えざれば。涙を道のしるべにて。やう〳〵運ばせ給ひけれ。横雲亙る東明に今日は散り行く花の山。 フシ御寺に。こそは着き給ふ

地さて花山寺になりしかば女御の御廟に至らせ給ひ。御涙の内にかくばかり フシ打添ひて共に消えなん玉の緒の。後れ先立つ身こそつらけれと。かやうに詠じ給ひつゝ。百千行の御涙は野邊の草葉を染めぬべし。地かゝりける所に。公卿大臣かけつけて。スヱ是は〳〵とばかりなり。地時に關白宣ひしは。世は末世に及べども日月未だ地に落ちす。是は如何なる御事と諫言申したりければ。君敕言もなく道鱗のやうに見えさせ給へば。詞安倍の晴明する〳〵と罷り出で。誠に以てかゝる御事ならずんば如何で玉體を拜し奉らん。所詮遁世の起りと申すも此の御別れ故にて候へば。某が神變にて。弘徽殿を二度蘇らせ奉らば。御修行を止まらせ給はんやと憚なく申し上ぐる。地君を始め公卿大臣やあ申すに及ぶまじ早疾く〳〵とぞ仰せける。承つて候と假に御廟の御前にやがて壇をぞ三重かざられける。

フシ扨て其の後に。地百八の燈明を立てぬれば。只萬燈會の如くなり。五智の如來をかたどりし。五色の幣を五本立て。もとより晴明三國にかくれ無き神變奇異の博士なり。壇上に差向つていら高珠數をさらり〳〵と押揉んで。先づ神降しをぞしたりける。

フシ謹上。再拜。再拜。敬つて申し奉る。上は梵天帝釋四大天王。閻魔法王五道の冥官。下界の地には伊勢に神明天照皇太神宮。

雨の宮風の宮。月讀日讀天の岩戸は大日如來。朝熊が嶽には。福智滿虛空藏。王城の鎭守稲荷祇園賀茂春日。貴船は五社の大明神。スヱフシ鞍馬に大悲多聞天。高きお山は愛宕山。男山には正八幡大菩薩。松尾平野。梅の宮伏見に一品御香の宮。大和に葛城金峰山。吉野は藏王權現なり。塔の峰には大織冠。龍田は木花咲耶媛。熊野は三つのフシお山なり。新宮本宮那智は千手觀音さて津の國に至つては。天王寺に聖德太子住吉オクリ四社の大明神。四國の地には讃岐に金毘羅。同じく志度寺の觀世音。筑紫に彦山出雲の國に大社。杵築の明神。伯耆に大山。丹後に成相切戸の文殊。近江の國に聞えたる日吉山王。二十一社ギンお多賀白髭比良の八講 引取 湖水に現れ給ひしは竹生島の辨財天。美濃の國には南宮高山劔の權現。越中には俱利加羅不動明王なり。越後の國には陸上米山彌彦の權現。出羽には羽黒湯殿大日大靈權現。陸奥に至つては。松島雄島鹽釜六社の大明神。信濃の國には上の諏訪下の諏訪善光寺は三國一の彌陀如來。上野の國に至つて妙義八方赤城の山。下野に日光山。常陸の國に鹿島香取浮洲の明神。武藏に三峰相模は大山不動なり。伊豆の國に三島の明神箱根は兩所の大權現。本地は文殊師利菩薩。富士淺間大菩薩。遠江の國には秋葉駒形苔屋の明神。三河に入つて寶來寺峰の薬師は十二神。尾張の國に一の宮二の宮。三に八劔熱田の明神總じて日本六十餘州に三千七百餘社なり。天におつては日月星辰二十八宿。大地の底におはします。堅牢地神に至る迄三千大千世界の六萬恒河の諸佛神悉く勸請申しおろし奉る。たとひ定業限りの命なりとも今一度蘇らせて賜び給へと責めに責めてぞ三重祈りける。フシ佛神納受。地し給ひけん天地俄に震動し。御廟二つにどつと割れ女御忽ちに蘇らせ給ひ。君は何處にましますぞ君は〳〵と宣へば。こはそも誰か現かと思はず知らず抱きつき イロ 悦び涙はせきあへず。地 かかりける所に。壇の邊に化したる姿現れたり。詞晴明不思議に思ひやあそれなるは何者なるぞ。其の時彼の者つつ立ち上り 地イロ 愚なりとよ晴明。はるゝ思ひの一念又立歸り妄執の雲 スヱフシ はらさん爲に來りたり。詞晴明はつと驚き。さては藤壺の怨靈な。いて〳〵思ひ知らせんと重ねて珠數を押揉んで。東方に降三世。南方に軍荼利夜叉西方に大威德北方金剛夜叉明王。見我身者發菩提心聞我名者斷惡修善。聽我說者得大知慧。知我心者卽身成佛。護摩三曼多縛日羅赧と責めかけ〳〵祈りければ。怨靈大地にイロかつぱと臥し。ウタヒあらあら恐ろしの般若聲やこれまでぞ怨靈。此の後 地 又と來らじと。いふかと思へば忽ち姿は失せにけり。漢家本朝に。かゝる相人有難しと貴賤上下おしなべ感ぜぬ者こそなかりけれ。

第　五

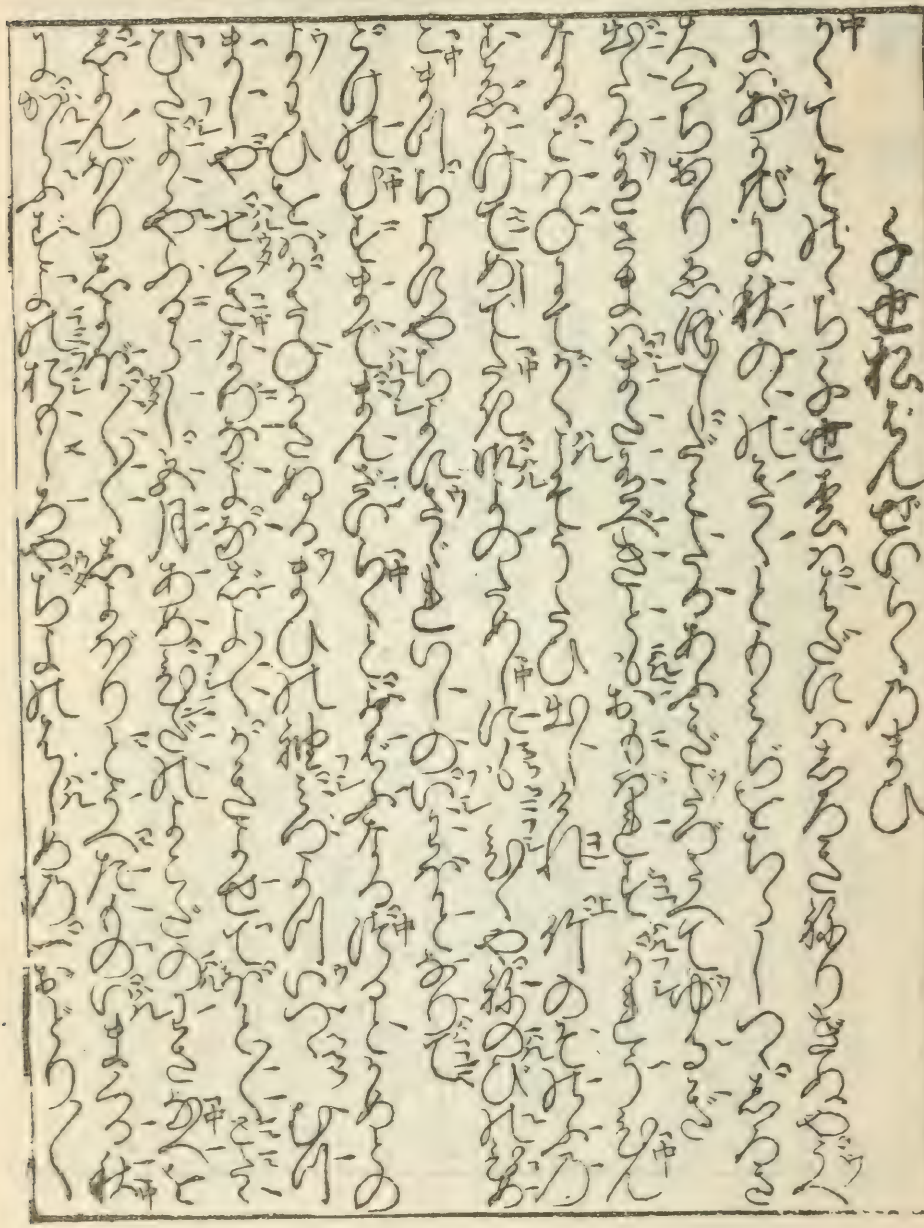
さる程に關白賴忠公左右の大臣諸共に帝の

お前に畏り。かゝるめでたき折柄なれば。此の上は急ぎ還幸あるべき旨奏聞ある。帝叡聞ましまして。朕一たび帝位を去りしより重祚の望更になし。圓融院の一の宮を位に卽け四海を治めよとの宣旨にて。乃ち花山の院と仰かれさせ給ひ月日をオクリ過させ給ひけり。地公卿大臣力なく。やがて綸言に任せ圓融院の一の宮を位に卽け奉り。一條の院とぞ申しけるめでたかりける 三重儀式なりさる程に。地かくて內裏には月卿雲客御前に召され此の度卽位の祝儀として。何にても興あらん事を催し。衣冠の儀は申すに及ばず源平兩家の武士迄も。皆悉く召寄せて慰ませよとの宣旨なり。賴忠謹んで承り。扨て〳〵有難き勅諚かな。誠にかかる叡慮ならずんば。いかで天子の德に備はらせ給はんやと。暫く玉體を拜し感淚を流させ給ひければ。お前にありし公卿大臣 フシ一度にあつとぞ感じける 地ややあつて關白公如何にイロ各。只今宣旨の趣なれば。何にても興あるべきことを奏聞あれと宣へば。右大臣聞召し。さん候こゝに五條烏丸に。櫻井の右衞門と申す者の娘に千代松とやらんあるなる由。彼こそ今様舞の上手と承る。是は如何と宣へば。地賴忠公聞召し尤此の儀然るべしと。やがて奏聞なされつゝ叡慮をうけて其の後に。紫宸殿の御前に。儀に舞臺を飾らせて既に用意と 三重聞えけり。フシ定まる日にも。地なりぬれば卿相雲客五位六位源平兩家の武士迄も殘らず參內申しつつ。上中下段に伺候して フシ今や遲しと待たれけり。地さて刻限になりしかば。役人舞臺に畏り鼓太鼓の音取の笛。調子拍子を揃へつつさも面白うこそ 三重囃しけれ フシ心も詞も。及ばれず。地かくて其の後千代松は。肌には白き練絹や。上には赤地に秋の野の菊と紅葉を散しつつ。白き大口折烏帽子。だみたる扇携へて。搖ぎホオクリ出でたる有様は フシ又あるべきとも思はれず。伽陵頻なる。聲音にてかくこそ謡ひ出しけれ。カンフシ竹の園生の末かけてめでたき。御代の例にも引くや。子の日の姫小松。千代に八千代にさされ石の ホフシいははとなりて。苔のむす迄 ハルフシ萬歳樂と呼ばふなる。鶴と龜との齢をば。重ね重ぬる舞の袖。三つ四つ五つ。睦じや。七草なづなよ。なじよ〳〵。かき寄せてほと〳〵と叩いた。代々やふるらし五月雨。ひんたの横田の早苗をしよんぼり。しよぼ〳〵しよぼりと植ゑたもの。今來る秋に刈らうずよの。面白や。ニ千代の菊の。一踊〳〵。ホフシ面白の花の都や。筆に書くともつきせじ。東にはオクリ祇園。淸水。落ち來る瀧の。音羽の嵐に。地主の櫻はちり〳〵。フシ西は法輪。嵯峨の御寺。ギンオクリ廻らば。廻れ。水車の輪の。井堰々の。川波。フシ川柳は イヅミオドリ水にもまるる。野邊の薄は。フシ風にもまるる。ふくら雀は竹にもまるる。都の牛は車にもまるる。茶臼は挽木。〳〵にもまるる。げにまこと。フシギン忘れたりとよ。四竹は

放下にもまるる。四竹の二つの竹の。代々を重ねて。打治まりたる御代かなと。歌ひ舞ひ納むれは卿相雲客。イロ一同に。皆悦の聲を上けウタヒ本所々々に歸らるる。千秋樂は民を撫で萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風颯々の聲ぞ樂む〳〵。

右太夫直之正本以
節章句寫之者也

山本九兵衛新板



おう御のたちおれらやらやうだくとゞかなほさせし
ひゞにゐてさんきよう行おらうちのあれはれお
らうよむしのがざうあちらくにわかうらんさう
れぬてうまのうかまとれうるまれものいせんい勝き
のりかとゆやうのざうへれよのまのくのもくきかうせ
ぜりまつくらもくわへうけふもすうゑやとれうしわ
ぐるまれのゆ御ちやうすへむらぞくれのまうてけふ
かことうもれうりとみごとうとかうられのまうたこ
ふうとのふうれけのゞくとうるのそしうらおさゆのさう
ぬ代のかしうくひもひおうむまとけしやうえんくし
ぞうれをかうわびのしあとおけかんぶよくおかてたに
せんあうらくへうとかそまんざいらくれいのちとのぶ
おいおひれまりをそりくれしふぞてあめうむく

世繼曾我

序五月闇峯に照射の狩衣。裾野の草の葉末まで。靡かぬ方もあらざりし源氏のオロシ御代こそ目出度けれ。地扨も兵衛佐頼朝卿。淺間三原野那須野の原朝妻の狩座より直に富士野に巻狩あり思ひ／＼に小屋打たせ。君を守護し奉れば。さしもに廣き富士の根にフシ錐を立つべき餘地なし。地爰に一年工藤左衛門に討たれし河津の三郎が二人の子。曾我の十郎祐成同五郎時致は。夜前假屋に亂れ入り敵祐經を討了せ。御所の侍二百餘人に傷を負ふせ祐成は討死し。時致は生捕られ明くれば建久四年 五月廿九日にぞ逢にけるスタリへ御前に引かれける。地頼朝御覽じ曾我の五郎とは彼が事か。誠に親の敵を狙ふ事。理と言ひながら折もこそあらめ頼朝が。狩場にての狼籍甚だ奇怪なりと宜へは。時致頭を下げ上意御尤に候ざり乍ら。此の年月野路山路宿々泊 泊迄心を盡し候へども。敵は小勢で通れども五十騎百騎を召連れ候。我々は兄弟二人連れざる時は只一人。其の猛勢を恐るゝには候はねども、折を窺ひ延引致し只今に至り候と。憚なく申しけり君聞召し。詞ヲヽ實にそれはさもあらん。して又此の事を曾我の母には知らせけるか五郎聞きも敢ず。こは日本の大將軍の仰とも覺えぬものかな。地を走る。獸をこ翔る翼まで子を悲しまぬはなきものを。況してや人の親として只今死に參るといふを悅ぶ親や候べき。地いやはや興がる上意かなとフシ嘲笑し。うてぞ申しける。地理なれば頼朝もしばし頷き宣ふは。詞尤も祐經は敵なれば然もあらん。頼朝には何の意趣ありて側近く亂れ入り。剰へ近習の侍斬散せしは何事ぞ時致承り。さん候祐經を討たぬ間は木にも萱にも心置かれ命惜しく候ひしが。地討了せての後は千騎萬騎をも微塵蠅蟲とも存ぜぬ所に。御所中の侍達やれ夜討こそ入りたれと。狼狽まはるが可笑さに。そつと太刀風をあてたるばかりにて御座候。詞さり乍ら面傷は一人も候まじ。地それにても傷痍えば。面押拭ひ罷出で御奉公や仕らん。詞扨父君の御事は正しく祖父伊東が敵。地其の上日本の大將軍。鎌倉殿を討奉りしと閻魔の廳に訴へば。二つの罪や遁れんと思ひ恐れ乍ら御佩刀の刄と。時致が錆太刀の刄を試して見ん志にて馳け入つて候に。口惜 しや運盡きて。是なる五郎丸を女と思ひ油斷して。やみ／＼と生捕られし君の。御運の目出度 さよの。地五郎丸だになかりせば御首を賜はり。それより切つて出るならば。恐らく關八州に人種は置かじをと。且は怒り且は恨みフシ言葉すゞしく言上す。地頼朝大きに感じ給ひあれ聞給へかた／＼。猛將勇士も運盡きぬ

れば力なし。叶はぬ迄も助からんと恥を捨て丁陣すべきに。つゆちり命を惜まず言葉を飾らぬ心底は。遖武士の本意餘の者千騎萬騎よりはと。雙眼に御涙を浮べさせ給ひければ。伺候の大名諸共に フシ 各々。袖をぞしぼらる ウ 地 其の後仁田の四郎忠綱を召され。詞 兄十郎が首を時致に見せよとの上意、地 畏つて忠綱は村千鳥の直垂に。結成が首を据ゑ時致が前に置く。今迄はさしもに勇む朝顔の日影に萎む如くにて、悄々と押俯き、エヽ暫し涙に咽

びつゝ。地 あゝ情なく早くも變らせ給ふ御有樣やな。幼少竹馬の曉より。敵を討ちし夕まで一所とこそは契りしに。口惜しくも長らへて死出の旅路に後れしよなア、斷くあるべきと知らずして。深入りせし後悔やと言ひも敢ず咽返り。こぼるゝ涙を押へんと ギン すれども繩の強ければ。膝に顔を押付けて消え入るばかり。に泣きにけり

地 君を始め奉り。上下の侍繩取まで フシ 至極の。涙にしづまるゝ。

地 重ねて仰出さるゝは前代未聞の勇士なれ

には。死罪を宥め召使ひたく思へども。傍輩の嫉み梶原が親類の意趣かれこれ以てのがれ難し。構へて頼朝に恨を遺すなはや首討てと宣へば。時致につこと笑ひさも嬉しげにあたりを見廻し。詞 如何に人々。地 親の敵を討了せ。其の上斯る上意を受け何しに命の惜しからん。この縛は孝行の佛の御手の善の綱。青手をかけて結縁あれさらば。さらばと暇乞ひ心静かに引出され。遂に屍は夏の野の草葉の露と消ゆれども。譽は富士の上もなきオクリ雲ゐに〽名こそ揚げにけれ。地 梶原源太景季を御前に召され。明日は鎌倉に歸るべし。就ては此の度供せし武士を花やかに出立たせ。とめたりし鳥獸を名乘らせて見物せん。卽ち新開の荒四郎奉行にて帳に記させよと宣へば。畏つて候と射翳々を 三重〽ふれにけり去る程に。地 頼朝公井樓高くしつらはせ。眞白の幕打たせさも大樣に坐し給へば、左は老中御小姓花を飾りて見え給ふ。地 さて國々の諸侍。思ひくの狩裝束駒の鼻を立て並べ。裾野を狭しと控へたり。中にも新開の荒四郎[illegible]はり大紋の露を結んで肩にかけ筆取一人隨へて。御座の右手に伺候してオクリ次第々々に留めたりけり。舞コハリフシ 先づ一番に春日野や、若紫の裝束白猪の行縢たぶやかに。萠黄の裏打つ竹笠木枯に吹き反させ。陸奥立の荒駒に乘つたる武者は誰人ぞ。狩場の獲物は如何にく。太夫 さん候某は、先年我が君七騎にて敵に襲はれ給ふ時。寄るべ定めぬ泡沫の安房の國龍崎にて。甚だ忠を勵みたる土肥の彌太郎遠平。一昨日の勢子いれに。猪と引つ組んで早速とめて候と。名乘つて通れば筆取はやかて斷くとぞ記しける。ツレ 二番に褐布の裝束錦襴の小手をさし。白熊の敷皮下け鹿月毛の馬に[illegible]を掛けさせしは。あつはれ出立や誰そや誰そ。太夫 誰そやとは人がまし、又申さぬも如何なり。名乘るもさすが恥かしの盛長にて候を。誰にまかへて藤九郎。鹿三頭と答へつゝ。静かにこそは通りけれ。ツレ 地 三番は木賊色。秋の野摺つたる狩衣大口のそは高く取り。尾花蘆毛に片手綱オクリゆられ〽出でたる若侍。假名實名名乘られよ 太夫 名乘れとはなのりその浪のまにまに。藻鹽燒く三浦の。平六兵衛吉村。二つ連れたる飛び兎ほつかけ。ほつかけ峰を分け谷へ下つて馳違へ。其の儘兩手に引つ摑み上覽に入れしかば。汝は褒美や有るらんと御戯 にあづかりし。今更申すも事くどしと フシ さも大樣にぞ打たせける。地 さて其の次に。梨打烏帽子に鉢卷し村濃の袖標。鹿子の行縢くゝり下け足利樣の染手綱。源に取添へ繰りかけし馬上の達者は實に誠、秩父の重安候な 太夫 テヽ、何と包まん隱れなき園生に植ゑし紅の。染羽の矢先に翔鳥を二つ續けて射て落し。見參には備へねど盛人網れ候はす。お帳に賴み存ずるなり。ツレ 〽實に。尤と夕まぐれ。雲立浦の狩衣靑皮の尻鞘掛けたる太刀。雲雀毛の馬に淺黃の厚總かけし

は如何に。太夫 これは信濃の國相澤の彌五郎猪一頭射止めてさふ。ツレ 續きて小松の摺衣。露を含めて絞りあげ。徒歩立の弓杖は誰人の家人ぞや。太夫 さん候上にも兼て知しめす。秩父が郎黨本多の次郎近經去んぬる廿日の朝山に。御厩の德竹が手負猪に追立られ。今を限りと見受けし時。尾上を横に走り着け猛つて威せる荒れ猪の。片腱とつて引伏せ草分を三刀に。突留め申して候ひしをこがましう候へども。御尋ねなればと 地 會釋して。人溜居にぞ入りにける。ツレ地 跡より乘つて出でしほの。流石氣高き亂れ髮。額に滿てる月の顔二八ばかりの若武者は。いづかたの御曹司聞かまほしやとのゝめけば、太夫地 抑これは。村上天皇の後胤木造の忍ぶ丸。富士川の岸行く鹿。跡より追つかけ先へ廻り向ふを射止めて候と高聲に呼ばはつて。手綱かいくりしんづ〱「かつし〱と歩ませしは オタリ ゆゝしへかりける風情なり。ツレ地 八番に絲毛の腹巻斑

の駒に目結の手綱一際すぐれて出立ちしは誰人なるぞ誰やらん。太夫 されば候某は。昨日まで御所の五郎丸。今朝元服御許され荒井の藤太重宗と名乘り候。此の度の狩庭に。さまでの事はあらねども。鬼神といはれつる曾我の五郎を生捕り候。御帳に記し給はれと打つて過ぐれば荒四郎 ツレ ヲヽ。比類なき御手柄。御身は曾我に十倍ぞとやがて帳にぞ書かせける。二人 抑其の外甲斐源氏。三浦の一黨伊勢平氏 坂東坂西北陸道南は紀の路八庄司 在鎌倉は云ふに及ばず大名小名 都合十萬六千餘騎。駒も千年を經ゆれば。我が君の御威勢知るも。知らぬもおしなべて萬々年とぞ 三重〱 祝ひける。かゝる所に 地 朝比奈の三郎義秀遲 侍に控へしが。すか〱と立ち出で新開が傍にむずと坐り 地 これ荒四郎。見れば御身には目も耳もあるが聞えぬか見えざるか。何とも不審晴れずといへば新開氣色を損じ。なに某を聾か盲かとは侮つたる言分かな。聞えぬか見え

ざるか汝が眼に見されよと片膝立ててきゝめけども。朝比奈事ともせずいやさ。なんぼう急かうと儘汝に目も耳もあらんとは先づ此の朝比奈は思はず。合點行かずば語つて聞かせん耳垢を取つてよつく聞け。して今日の結構は何事とか思ふ。此の度御狩にとめたりし猪猿鳥の物數を留めよとこそ上意なれ。何ぞ御所の五郎丸が時致を生捕りしを帳面に記す事。何時の間に時致が猪にはしなりけるぞ。やれ。眼も耳もあらばとつくと聞け。曾我は三浦の一家なれば我々とても逃れぬ中。其の上兄弟が働きは無雙の侍と君も御褒美なされしものを。汝等が分にてよくも〱畜生にはしけるよな。いで人を殺しても猪猿同然なれば。いかな汝を斬り此の。朝比奈も御狩にて新開の荒四郎一疋と記されんと飛んで懸れば。地 人々寄つて押し隔て御前なるにさりとては。鎮まられよと兩人を フシ 先へ雙方へ引分くる。地 若御せ出さるゝは朝比

奈が申し條一々道理至極せり。さり乍らか、ほど目出度き鎌倉入りなれば是非堪忍せよとの御諚にて。兜をさして入り給へばさしもに勇む朝比奈も。御一言にめでやれ汝ば。ら。詞上意なれば先づ只今は免し置く。誠に曾我の五郎は命助かるべき者なれども。君御料簡の上にて誅せらるれば誰に憚はあらざるに。今日の帳面に五郎丸が時致を止めたりと付くからは曾我が敵は五郎丸。地重ねて曾我の所縁あらば此の朝比奈が後見し。必ず狙ひ討たすべし新開とても危しと地ツメはつたと睨んで罵れば。始めは言葉荒四郎後には。わざわざ慄ひつゝ先へ心は急げども。ギン跡も中々氣遣はしく見返り。見返り退出す朝比奈が言葉の末。尤も理もしゝ心地よしとも中々申す。ばかりはなかりけり。

第二

曾我兄弟の郎黨兄に鬼王。弟に團三郎。彼等二人の者どもは。祐成や時致がまだいはけなき頃よりも。影の如くに附き從ひ共に敵を狙ひつゝ。此の度の落着に是非二世迄も御供と。たつて望み申せしかど。祐成も時致も母の御事氣遣はしく。最期の供を許さねばスヱテ力及ばず。兄弟は。地形見の品々取り持つて。空しき駒の口を取り。フシ泣く泣く曾我へぞ歸りける。地斯る處に若侍聲し〳〵と呼びかけ。詞いづれもは曾我殿の御家人鬼王團三郎殿にてましますか。これは朝比奈の三郎義秀よりの御狀なりとぞ出しける。地何事かは存ぜねどもと鬼王押戴き披き見れば。詞何々方々が主人曾我兄弟は。君御料簡あきらかなる上何れに仇を殘さす相果てらるると雖も。仔細ある事にて新開の荒四郎。並に御所の五郎丸今も服して荒井の藤太重宗と名乗り。此兩人曾我の敵に相極まる。御分等兄弟の内一人は曾我へ歸り老母に仕へ。一人は早々鎌倉へ歸らるべし。義秀が手引を以て重宗荒四郎を討たすべし疾く〳〵とぞ書かれける。地兄弟大きに悦び先づ使者に一禮述べ鎌倉に歸し。詞やれ團三郎。此の上は某鎌倉へ取つて返し重宗荒四郎等を討つべし。御邊は曾我へ參り御形見をも奉り。御老母樣を育み申せといへば團三郎聞きもあへず。地いやいやや某は若輩者にて御母君への勞りは。中々かなひ候まじ御身兄の役なれば。おとなしやかに歸り給へ某敵を討たんといふ。詞鬼王重ねていやさ。故鄕の事は內證づく。眼前主人の敵を討たで侍が立つべきか。地是非に御分は故鄕へ歸れ團三郎眉をひそめ。詞ム、何主人の敵を討たでは侍が立たぬとやこれ兄者人。左樣の事を知り乍ら我を故鄕へ歸れとは。ヲ、聞て心得たり。曾我殿の下人こそ兄は心健氣にて主の敵を討ちけれど。弟は臆病者にて逃げ歸りしと人に笑はせん巧よな。地弓矢八幡其の手は喰はぬならぬ〳〵と頭打振つて。フシ歸らん氣色はなかりけり。地鬼王重ねて、ヲ、聞き得た

りさり乍らそれは以て同じ事和殿鎌倉へ歸り某故郷へ參りなば。弟は心剛なれども兄は腰が拔けたりと。世上の人に笑はれんは御邊も同じ恥ならめ其の上此の狀にも。一人は故郷へ歸り御老母を育み。一人は下れとあればは是非此の上は理を非に枉げ。お事歸れと云ひければ團三郞色を變へ。詞はてくどい事身はくだ〴〵に刻まるゝとも故郷へは歸らぬなり。誠左程に思召さば御身も我も連れて下らんとぎぎめけは鬼王今は堪へ兼ね。エヽこれ程事を分けて言ふに兄の言葉を聞入れず二人つれだち下らんとは。必定某一人にては得討つまじきと思ふか團三郞拗者なれば。ヲヽ近頃申し惡けれども御身一人では危し〳〵といへば鬼王肘を張りはつたと睨み。汝兄に向て粗略千萬七生迄の勘當と牙を嚙んで怒りける。いや異な事を力まるゝものかな。御身の勘當が恐ろしいとて男の道を捨つべきか。勘當がしたくばせられよ此の方からも勘當ぞ。地追つ付け敵の首を取り御身が顏に投付けんといへば。ヲヽ其の口を忘るゝな。某が打付けらるゝか汝が眼に張付けるか。此の上は運試し。それ迄は音信不通兄とも思ふなヲヽ弟とも思ふなと。怒つて左右へ別れける。所存の程こそ三重へやさしけれ フシ實にうけ難き。地人の體を受けながら。例すくなき川竹の。流れの身こそ フシ定かならね。思ふも思はざりつるも。夜毎にかはる憂き枕。辛きながらも勤とて。朝な夕なの化粧坂無慚やな少將は五郞に深く相生の。松は根毎に顯はれて。姉女郞や傍輩のさがなき口にかけらるゝ。抱主が聞いて逢はせねば。フシ猶手も足も。なよ竹の虎にかくとぞ。フシ示しける。元より虎は慈悲の。詞地此の身も同じ憂さつらさせめて語り慰まんに今宵や行きて大磯の。勤の隙に忍び出て フシしやらり〳〵と露踏めば。裳緒もぬるゝ濡姿。化粧。坂にぞ着かれける。地折しも少將籬に出でゝ よくぞ〳〵此方へと常のヲクリへ座敷に伴ひて。地妾參りて申さんにお志の程こそ嬉しけれ。扨御存じの如く五郞樣と我が事は。いかなる譯ある挨拶殊に世になき御方なれば。心の僻もあるものと。鎌倉方の大名はふつ〳〵。地逢ひも致さぬ故。外の勤の障とて。内より固く堰かるれど 冷泉遣手。禿の目を忍び。言傳にてか文にてか フシハ月に一度は。音信をせぬ事とても候はず身に代へてもいとほしく。隨分立てて候に。此の四五日は打絶えて御出でとても候はず。フシ文を遣りても。返事なし。定めし是は自らに。持たせ複にてあるらんと少し情うはありながら。戀が因果で候へば。猶し増し來るゆかしさとフシほろと。泣いてぞ。語りける。地虎も涙を流しながら恨も同じ恨思ふ變らぬ思なり。自らも十郞樣とは新造の昔より。馴染を重ね參らせて。指切り髮切り入黑子。人目も恥も憚らず。いつぞや和田の大寄にも。一人の母に思ひかへ。たんと心を盡せしは申さぬとても隱れなし。此の心

庭の我なるに此の四五日は何とてか。否應のよすがも候はず。されども世の中の男の心はかうしたもの。別の事もあるまいによしや氣遣ひし給ふな。起請も反故になるならば。神や佛もいらぬものなう。浮れ女に實なしとは何處の誰かいひ初めし。あはれかし我々が心意氣をお二人に。スヱテ押分けて見せたやな。地今にも來らせ給ひなばいざ言合うて振らうぞや。先づ盃と夕暮にォクリ互の〳〵思ひを語らるゝフシかゝる折節地新開の荒四郎荒井の藤太重宗は。朝比奈が言葉の末氣遣にて夜が寢られず。所詮曾我が所緣とあらば根を掘つて葉を枯らさん。先づ虎少將をたらし所緣のあらば尋ねんと。二人篤と談合しフシ化粧坂にぞ急ぎける。地はや程もなく着きしかば案内乞うて座敷に入る。虎少將は是を見て。やがて座敷を立たんとするを藤太少將が手を取れば。荒四郎は虎が手を取りこは情なし先づ暫くと。よれつもつれつしけれども虎少將はにこともせず。はて先づ放させ御用あらば重ねてと。又立ち上るを引止め。詞これ女郎衆。總じて遊君は全盛して。よき客の數多あるを譽とするとこそ聞いてあれ。和御前達は一風變つて世になき曾我の兄弟に心中立は何事ぞや。いらざる素浪人を不便がらずと我々に懇ろあれ。これこれなるは荒井の藤太といふ人。某は聞きも及び給はん新開の荒四郎といふ者なり。地御身達の意氣地次第。八幡根引にする氣さしとフシ贅かき。撫でぞ申しける。虎くつ〳〵と吹出し。地尤かし皆樣は御大名さうなり殿はよし。何暗からず見ゆれども我々は異な物好にて馬鞍見苦しき曾我殿が。たんといとしく思はれて大名は嫌なり。外をかせぎ見給へといへば藤太聞きもあへず。詞扨々ひよんな物好きかな。大名がお嫌にて浪人が好きならば。易い事身ども等もお暇申し浪人致し。地片に思はれ申さんと抱き付けば振りほどき。詞エヽあた輕薄ななう虎樣。よしない相手に成り給ふなといへば虎も顏を赤め。地しやほになま見られぬと振り切つて立つを兩人取つて捻据ゑ。詞何なま見られぬとは誰が事ぞ。金銀出して買ふからは見たうなくとも見させて見せん。さあ。地びくとなりとも動いて見よと太刀に手をかけぎゝめけば。宿屋一家は膽を消しこは如何にと騷けども。二人が擬勢に恐れうろたへまはりゐる所へ。鬼王形見を持ち涙と共に來りしか。此の體を見て何事ぞと問ふ。亭主慄ひ〳〵あらましを語る鬼王聞きもあへず。地いや推參なり。狼藉者とする〳〵と駈入り。飛びかゝり兩人が髮束摑んで引伏せ。詞方々は歷々さうなが人體にも似合はず。何ぞ女童を捕へ尾籠千萬見苦しし。堪忍ならぬ事あらば某が相手にならんと太刀ひねくつてはつたと睨む。地思ひ寄らねば兩人膽を潰しむづ〳〵と起き。鬼王が顏を怖しさうに打守り。詞扨々世には興がる者あり。身にもかゝらぬ事にづなう力む男かな。地

尤も仕様は多けれども爰はいうても所わるし。あの様な無法者には構うていらぬものなりと。座敷を立てばいやこれお侍。詞無法者は相手にならぬかそれはひけて見ゆるこれさ。地これさと喚けども聞入れもせず吃きて。足早に歸りしをオクリ笑はぬへ者こそなかりけれ。地扨鬼王は虎少將に近付いて。兄弟の人々討死の次第を語ればやれそれは誠か悲しやと。其の儘其處に倒れ伏し聲も。フシ惜まず泣き給ふ。地涙の隙より虎少將。なう神ならぬ身の悲しさは斯くとも知らで様々に。恨み申せしはかなさはアゝあさましや夢ばかりも知るならば。一所にこそは死せずとも何しに浮世にながらへんと。言ひも敢へず鬼王が腰の刀に取付くを押止めこは如何に。詞尤も御歎は理なれども。地我々さへ御最期の御供を許し給はず。況して女性の御身といひ。誠さほどに思召さば御發心ましまし。長く御跡弔はせ給へとさまざまに宥めつゝ。地扨我々は御形見を持ち曾我へ罷り歸る處に。詞朝比奈の三郎殿より斯様斯様の御狀故。新開重宗といふ者を討たんため道より歸りて候。地近頃御難儀ながら此の馬と。御形見の品々曾我へ送り届けてたべ。片時も早く某は鎌倉へ立越えて。二人の奴ばら討ち申さんと語りも敢へぬに虎少將。なう其の荒四郎藤太とは只今の兩人よ。詞なに只今の奴ばらが新開荒井めなりけるとや。地扨口惜しや腹立や天の與を知らずして。やみやみと遁せしかや寶の山に入りながら。手を空しうとは此の事ぞ未だ遠くはよも行かじ。追つ懸け討つて本意を遂げん思へば。思へば無念やと躍り上り飛上り。跡を求めてかけ出づる其の勢は修羅天魔。實に牛頭馬頭の鬼王やと扨恐れぬ。者こそなかりけれ。

虎少將道行　三段目

ハルさりとても。戀は曲者。皆人の。迷ひの淵や氣の毒の。山より落つる。流の身。うき寝の琴の。フシしらべかや。引く手數多に繋けれど。思ひ出すは彼の一人。フシなう戀しゆかしの念力も。かひなき矢先に立つ石の。虎御前少將は形見の駒の口を取り。夫ゆゑ沈む身の行方フシオクリ思ひへやられて哀なり。悉達太子に別れにし。車匿童子が古へは。檀特山の嶺傳ひ。犍陟駒の諸手綱。脆き涙にくれけるも。それは生きての別れぞや我が身の憂さに比ぶれば。フシ立ちも及ばぬハル富士の山。ハルフシ裾野の原の。草がくれ。ハル露の底にや兄弟の死骸のおはすらん。スヱテあの藤澤に啼く雁も。フシやよや哀を知るならば。翼につけん一筆をギンオクリ傳へて。[illegible]暮の鐘の聲寂滅爲樂と響けども輪廻の。花は散りもせず。ハルいつか火宅の。カン門をさへ。伊豆の。三島に鹽木とる。ギンハルフシ浦の煙の。一むすび。又二むすび。縒れて縺れて。解けて亂れて靡き。大磯フシ君よ小磯。の道。すがらさりし。ハル夕の頃迄も。こゝを通ひてフシ來にけらし。障りありやと黄昏は。さこ

そ駒をとせめて扨。アヽ此の駒よ此の駒よ。なれも心のあるならば。鞭を打たれし恨をも。今は形見と思はずやと二人手綱に縋り付き。口說き給へばさすがげに聞入れたりし風情にて諸膝折りて身振ひし。頭をうなだれ耳を伏せ貴なる。涙を流しつゝ。主の別を歎きしは。人間物を識らぬなり。秋霧の。吉野の駒を引く時は。心に乗りて戀しさの昔語となりし世に。たが玉章の箱根山。まだき時雨の椎柴も。涙にそめて赤澤山鎌倉山の。谷々も影けおさるゝか愛鷹山。刈藻かくなる。臥猪の床に石の枕や苔席。二人かはさば憎からじ。待つ人持たぬ徒歩路の旅。すゞの篠原眞葛が原　小オクリ小萱。蓬生玉葛。スクリ押し分け。掻き分けしどろ。もどろに。しるべなく。主なき駒の。小ウタ馬方いやよほほんほ。ほんにほ穂に出でて。逢ふ夜もありほ。鞠子川。其の埋木の埋れ行く。スエテ身の果如何に侘しさよ。御身とても我とても。

花ならば初櫻月ならば十三夜。盛に足らぬ身を持ちて思ふ人には添ひもせず。かゝる憂き目を見る事よ。是も誰ゆゑ紫の一本ゆゑのゆかりぞや。歎き給ふな歎かじといさめられてはいさめつゝ。水もらさじと。袖よりしめて寝し其の移り香も殘るやと。袖に入れかはし。手に手を取りて行く程に曾我の里にぞ。三重〽着き給ふ。フシわきて哀を。地止めしは曾我兄弟の母上なり。祐經を討たんとて二人狩場へ出しより。今日廿日に餘れども兎角の便あらざれば。暫しまどろむ隙もなく明くれば十郎戀しや。暮るれば時致戀しやと　スエテ待つ精力も弱り果て。地萬事限りの病の床頼み。少なく成り給ふ。二の宮の姉御前。女房達は集りて樣々に看病し。富士の御狩も過ぎぬる由。やがて目出度く歸り給はん御心安かれと。すかし慰め申せども八十に近き老の波。打臥しものも宣はず。オクリ守り〽居るより外ぞなき。地かゝる所へ虎少將。門外に佇みて

スエテ涙ながらに案内乞ふ。地折節二の宮の姉出で給ひ。案内はたそと見給へば。あてやかなる女房の悄々として申すやう。これは大磯の虎化粧坂の少將と申す者にて候が。御兄弟の人々敵祐經を討ちは討たせ候へども。斯樣々々の次第にて遂に空しく成り給ふ。御形見を取り持ちてと言ひも果てぬに姉君は。なに兄弟は討たれしとやそれは誠か悲しやと前後も分かず泣き給ふ。二人も涙にくれながらげに御理我々も。斯樣に樣を變へ參らせ是より如何なる山にも入り。香花を取り御菩提を。弔ひ參らせ度き志それにつき。憚り乍ら御兄弟の御形見に。母君樣の御顏ばせ。一目拜み度う候がと思ひ入つて望みける。フシ姉君感じ入り給ひ。地誠に各の御事もかねぐ聞きは及びしが。聞きしに勝る人々の心中。返すぐも賴もしけれ。尤も母君に逢はせ度う候へども。兄弟を戀ひわびて今を限りに候に。斯くと知らせしものならば却々命も候まじ。さり

乍ら各の望も無下になし難し。扨如何せん何とかと。暫し思案し給ひしが。ヲヽ思ひ付いたり在りし世の。形見の烏帽子直垂を。虎少將に打着せて暫く是にましませと。門に佇ませオクリやがて〽奥に。走り入り地なう兄弟こそ敵を討ち祐成歸りて候わ。時致歸りて候と誠しやかに宣へば。重き枕を輕々上げなに兄弟が歸りしとや。扨も〳〵嬉しやなとくとく是へ〳〵とて。身のいたはりも打忘れ勇み給ふぞフシあはれなる。地晝さへうとき。老の目の。黄昏過ぐる檻の。燈に顏をそむけ心までくる憂き涙。押し俯向いてぞ居たりける。母嬉しげに珍しの兄弟や。遂に便りもなかりし故。若しは狩場の流れ矢にも當りて過ばししたるかと。案ぜし憂さの病となり時を待つ間の我が命。ながらへしかひあつて敵討つての對面は。最早や死しても本望ぞや。チヽでかしたりでかしたり。やれとてもの事に祐經を討つたる體を語り。母をも慰め且は又。冥途にまします河津殿にも手向け黄泉を照らし參らせよやと。持佛堂の戸を開きはやとく〳〵とぞ望まるゝ。無慚なるかな人々は。御面影も忘れ形見の母の仰を重んじて。はつと答へて立上り聞傳へしをしるべにて。狩場の小野の物語オクリ聞くに〽袂も濡れぬべし。

虎少將十番斬

地去る程に建久四年五月雨の。あやめもわかぬ闇き夜に今宵限りとしらま弓。引返さじと一筋に思ひ定めて祐經が。狩場の庵に忍び入り松振揚げ見てあれば。ツレ宵の酒宴に醉ひ沈み前後も知らず臥したりけり。太夫浮き木の龜や優曇華の二人地花待ち得たる心地して兄弟思はず打ちうなづき。莞爾と笑うて立つたりしフシ心の内こそ嬉しけれ。太夫地されども寢たる敵を討つては死人を斬るに異らずと。詞如何に祐經。曾我兄弟の者どもなり親の敵見參せよと。地呼ばはる聲に目を覺し起上らんとする所を。左手の肩より右手の肋骨のはづれ迄はらりずんど斬り付けた。地時致すかさず兩膝薙ぎ。二人二十餘年の秋の風今吹き返す葛の葉の。根は盡きじと飛上り躍り上つて斬る程に。歩の板に斬り付けて門外に驅け出づれば。すは夜討こそ入りたれと上を下へと返しけり。ツレかゝる處に武藏の國。大樂の平馬之丞と名乘つて物々し曾我殿ばら。參りざふといふまゝに。四尺餘りの大太刀さしかざしてぞ出でたりける。太夫祐成是に在りやとて小柴の蔭よりつつと出で一文字に斬つてかゝる。ツレ言葉には似ざりけり。搔い伏つて逃げて行く。太夫まさなう候平馬殿。いづく迄もと打つ太刀に。二人押附の外れより繋金かけて斬り込まれ。よろり〳〵と引きにける。太夫爰に平馬が姉聟愛甲の三郎と名乘つて出た。ツレ五郎莞爾と打笑みて。紫燕は柳樹の枝に戯れ。太夫白鷺は蓼花の蔭に遊ぶと二人笑ひながら斬拂へば弓手の腕を打落され跡をも見ずして入つてけり。是を見て安房の國。安西の彌七郎十郎目か

けて渡し合ふ。太夫さしつたりと聲をかけ。ツレ二打ち。太夫三打ち。ツレうつ。二人太刀の音も高紐の外れより。草摺三間切落され。犬居に地どうとまろびしは不便なりけりあさましし。太夫地淺間の嶽か信濃なる舞臼杵の八郎景信時致に。討つてかゝる。ツレ得たりやかしこしあまさじと。三人南無阿彌陀佛の拜み打ち。眞甲二つに割付けられ夕の露とぞ。消えにける。ツレ五番に御所の黑彌吾爰

をば我に任せよと。いかめしげに駈け出づる。太夫請取つたりやと詰成。二人横に拂ふ車斬。四十餘りの髭男。二つに成つて見えければ敵も味方も一同に。さつても斬つたり 地切れ物かないや〳〵どつとぞ褒めにける。
太夫地どよみも未だやまざるに駿河の國し岡部の三郎。ツレ遠江に原小二郎。二人二疋連れたる唐獅子の牡丹にすだく如くにて。隙をあらせず兄弟に電光より猶早く。煙を立てて。飛

んでかゝるをひらりと外しはつしと受け。ひらりひらりちやう／＼／＼。蝶の羽づかひ隼が雉にあひし鳥屋落し。刹那の息をもつかせばこそはら／＼／＼と薙ぎ倒し。太刀振りかたげ汗押拭ひ オクリ しばし 太夫 息をぞつがれける。ツレ 八番には信濃の國海野の小太郎行氏時致に渡り合ひ。膝口割られて退いて入る。太夫 新開の荒四郎此の由を見るよりも。敵は二人でありけるにさもしや方々よ。いで某が討止めて娑婆の暇を取らせんと。小躍りして馳せ向ふ。二人 彼奴が廣言憎ければ。微塵になさんと兄弟は飛ふが如くに切つて出る此の。勢に恐をなし。太刀も刀もいらばこそ。小柴垣を押破り高這ひして逃げけるを。笑はぬ者こそなかりけれ。地 其の外群がる兵を。爰に薙ぎ伏せ彼處に斬り伏せ兄弟の手にかけて五十餘人討たるれば手負は三百八十人。爰に又武藏の國の仁田四郎忠綱祐成に渡り合ひ。火花を散らして 三重へ 戰ひけりされども祐成。地

太刀打折つて力なく指添抜ける其の隙に。忠綱横に薙ぎ拂へば右手の高股切り落され既に最期と見えにける ツレ地 斯くとは知らで時致は御所の間近く亂れ入り。五郎丸といふ童を女と思ひ侮つて。やみ／＼と生捕られ二十九日の曙に。遂に御前に引出され。太夫 宵と。ツレ 朝に。二人 兄弟は一夜を隔てて富士の根の。裾野の草の露霜と消えて果敢なき面影の。太夫 あら戀しの祐成殿や。ツレ なつかしの時致殿やと 二人 烏帽子直垂かなぐり捨てかつぱとまろび泣きければ 太夫 地 母は夢とも辨へずなに兄弟は討たれしとや。是は夢かや夢人かと二人にひしと抱き付き消え入り。消入り給ひけり。地 二の宮の姉涙を押へ。實に御理さり乍ら餘り兄弟を待ち侘びさせ給ふ御歎の痛はしさに。露の間なりと御心を慰めんとの謀に。則ちこれは大磯の虎御前。此方は化粧坂の少將とて兄弟が思ひ人。形見を持つて來られしを。頼みて斯くはしつらひしと語り給へば母上は。

なに方々は聞及びし虎少將にてましますとや。誠に世になき者どもに死後迄不便を加へられ。これ迄訪はせ給ふ事。返す／＼も嬉しけれ。さはさり乍ら昨日にも。母も空しくなるならば今の憂きめは聞かじものを思へば。思へば方々の訪ふに辛さのまさり草葉末の露と消え失せし。もとの雫の我が身かと又たえ ワシ 入りてぞ泣き。給ふ虎少。將も涙乍ら。地 まこと御兄弟の御名殘に。御面影の拜み奉らんと推參致し候處に却つて御歎をかけ奉り候ものかな。さり乍ら御形見の品々此の御文を御覽じ暫し慰み給へとあれば母上文を取上げて。涙ながらに形見の品々扨目錄を披見あり。詞 あら不思議や。十郎が手跡にて守刀は祐若に取らすると書いてあり。此の祐若とは誰が事ぞ虎聞きも敢へず。地 扨は左樣に候かや。恥かしながら自らが腹に三歳の若ましますを。手越の叔母が許に隱し置かせ給ふといへば。何と／＼十郎が忘れ形見の有りけるとや。扨も嬉し

やなつかしや。など伴連れては來給はぬ。なうはや〳〵と身悶えし。兄弟が蘇り來ると聞く程にオクリ勇みて〳〵使を立てらるゝはや程もなく。地祐若を乳母が抱き來りけり。やれ來たか祐若これへ。これへと宣ひ老母膝にかき抱き。扨も〳〵面ざしの能く祐成に似しものかな。嘸や最期に十郎が。此の子の事こそ思ひつらめ。五郎は未だ子もなしとや。何を形見に慰まん。時致とても祐成とも此の孫一人の樂みぞと。歎きながらも祐若が愛らしき手をたゝき。譯も聞えぬうたかたの哀れとも又愛らしゝともフシ云ふ方もなき涙かな。地されども姉君かひ〴〵しく老母に力を付けんと思ひ。詞いづれもよしなき御歎き。それ侍の家に生まれ刃にかゝるは常の習ひ。地誠に彼等は親のための讐を殘し惜まれて本望遂し討たるれば。果報いみじきあやかり者。殊に斯樣の勇ましき世繼のあれば何事も。打捨て悦びおはしませヲヽ。目出度し〳〵と勇めながらも忘られぬ。曾我殿ばらの物語げに。嬉もしゝ健氣なり。あはれとも又痛はしゝとも例稀なる敵討やと惜まぬ。人こそなかりけれ。

第　四

鬼王團三郎兄弟は。武道の意地を言ひ募り同胞の因を切り。立別つて我れ先にとフシ敵を狙ふぞ頼もしき。地ある時朝比奈鬼王を招き。詞御身知らずや今日新開の荒四郎荒井の藤太兩人。鶴が岡の濱邊にて笠懸を射る由聞きはや團三郎は出てあり。尤も義秀が人して討せ度きものなれども。かく兄弟が張合ひの上助太刀ありと云はれては討つたが討つたに立つべからず。是非兄弟が手に餘らば此の。地朝比奈が拵へたり鐵の楯なるぞ。はや急がれよと宣へば鬼王はつと悦び。誠に有難き御懇情生々世々迄忘れ難し。さあらば御馬一疋拜借仕り度くと申せば安き事それ〳〵と。洗ひ轡に裸馬取る物も取り敢へず鶴が岡へと三重急ぎける去る程に。地新開の荒四郎荒井の藤太重宗は。來たりにはかゝらず遠乘してゐる所へ曾我の郎黨團三郎。詞主の敵一人も遁さじと一文字に驅け來れば。地すは朝比奈こそ後見よと一太刀にも及ばゞこそ跡をも見ずして逃げて行く。詞團三郎是を見て憎しきたなし返せ戻せと兩鐙を合せ追つかける。地鬼王遙かに是を見て南無三寶後れしと一散に驅けつき團三郎が乘る馬の。尾筒を取つて引戻す團三郎大きに怒り。詞只今手詰の境をこは狼藉と怒りける。地やれ拙し團三郎。大事の主の敵弟に先を越され某が立つべきか。初太刀は我に討せよと跡へ取つて引戻す。引き違へて團三郎又鬼王が馬の尾筒にすがり。詞いやさ我は兄を持たず。卑怯せられな見苦しと跡へ取つて引戻す。地いやさそれは當座の意地づく平に許せと引戻せば。又すがつて引戻し二三度四五度せり合ひしが。餘りに強く引据ゑられ團三郎が乘つたる馬尻居にどうど伏しければ。眞逆樣にかつぱと

あら嵐に胄を打當てて。うんとばかりに息絶ゆる鬼王見返り南無三寶、こは如何にと乘り返し馬より飛下り抱き付きやれ團三郎。團三郎と呼び生け藥樣々用ゆれば。スヱテ少し心地ぞ付きにける。地鬼王大きに悦びやれ心は何とありけるぞ。兄鬼王なるに氣を取直せといひければ。團三郎眼を開き溜息をほつとつき。詞なに鬼王殿とやして。敵は討取り給ふか鬼王聞いて。地いやとよ如何に敵が討ち洩しとて。目の前でわが落馬してかゝる體を見捨ていかで先へ進まれん。先々御身が心持如何あるぞと云ひければ。兎角もいはず團三郎しばし涙に咽びしが。暫くあつて云ふやうは。詞もく〳〵冥加に餘る御心底。兄上ながらも恥かしや。誠に如何なる天魔が魅入れし。兄を兄とも思はせず。仲違とはいはせけるぞ。はかなき我が心からは。たとへば兄上かゝる仕儀にて死なさせ給ふを見捨てても。意地を意地に立つべきに今某が體を御覽じ大事の敵を振捨てて御看病なさるゝ事さすが兄上なればこそ。近頃面目なきながら只今迄の慮外をば。眞平御免給はれと手を合せ。てぞ歎きける。鬼王も涙を流しナ、理なり何が扨。元より連枝の中なれば少しも意趣を殘すでなし。今より心を一つにし。一緒に敵を討取らん先々和殿が養生せんと兄弟打連れ。隱れ家へ寂しく歸るぞ 三重〽無慚なる。是は扨置き。地新開の荒四郎荒井の藤太重宗は〃團三郎に追ひ立てられ危き所を免かれ大息ついて歸り。荒井の藤太いふ樣は。詞兎角彼奴等は命を捨てて狙へばたとひ一旦延びたりとも。地猶此の上が心許なし如何はせんと言へば荒四郎聞きも敢へず。詞エヽそれにつき能き思案こそ候へ其の趣は。聞けば虎が腹に十郎が一子ある由いさ此の悴を尋ね鎌倉へ參り。曾我が郎黨ども此の子を世に立てんため君を狙ひ申すと僞らば。彼奴等は上より探し出され誅せられんは治定なり。然らば世上も廣くならん此の義如何にと言ひければ。地オヽ言はれたり企まれたり是に過ぎたる智略なし さり乍ら虎が方に若し彼奴ばらや忍び居ん。先づ〳〵御身と某只二人忍び行き樣子を窺ひ尋ねんと。供をも連れず。手引き頼り庵をさしてぞ 三重急ぎける、折節少將。地虎御前祐若を寵愛し。せめては慰み居る所へ新開荒井つつと入り。詞これ〳〵兩人。曾我の祐成が一子これに在る由上聞に達し。急ぎ召取つて參れとのことにて我々迎ひに來りたり。地片時も早くと祐若が小腕取つて引立つる。二人は驚き肝を消し袂や袖に縋り付き。尤も若い上意ならばさもこそあらめさり乍ら。暫く待つて給はれ申し度き事ありと。無體に取付き泣き歎けば流石色には迷ひ易く。詞はて言ひ度き事。地あらばと弱々とする體を見て。虎先づ荒四郎が手を取つて。いや別儀にて候はず。祐成は我が君へ何の仇をか致され子供迄の御尋ぞや。假令少しの科ありとも東西わかぬ水子なれば。各々樣のお

心得にて死に失せたりとも御披露あり。助けさせたび給へ七尊の島に八尋の舟を隠すとかや。今生後生の御恩にとッシ手を合せてぞ歎かるゝ。地本より實なき事といひ殊に名に負ふ虎少將。しつぽと口説くに二人の者たよ〱おろ〱ころりとして。詞いやさ我々も不便に思へば御前は如何樣にも成るまじき事にてなし。さり乍ら。方々の心得次第といへば。少將聞き給ひ。いやなう悟れがましく宣ふが。地其の子だに助けて給はらばわんざくれ比丘尼をやめ。如何樣にも御兩人の御心に從はんと誠しやかにたばかれば。扨通つたり〱。此の上は何が扨隨分我々精を出し。命を助くるのみならず遂には御前を言ひ直し。曾我の家を立てさせん心安く思はれよと。よい加減につもりあひ先づ目出度いに盃と。差いつ差されつ打寛ぎ晋しオクリ〽時をぞ移しける。地酒も半に荒井の藤太いやこれ兩人。して此の庵へ鬼王團三郎は來ざりけるか虎聞き給ひ。されば其の奴ばらは折々爰へ参りしが。兄弟の中をも恥ぢず我我に濡れかゝり何とも迷惑仕り候。近頃むごき事なれども殺してたべと僞れば荒井につこと笑ひ。エヽしやつめらを殺すは蠅蟲より容易し。今にも來りてあるならば此の兩人に任されよと。心は怖く思へども。座敷なりの空虚威ノシよそに聞くさへ恥かしゝ。地荒四郎之を聞き尤もそれはさうなれども、詞彼奴ばら如きの下郎めと太刀を合すも如何なり。どこぞにそつと忍び居てとうぞだまして討つやうやあらんと言へば虎聞き給ひ。さればどこに隱しませう所もなしとあたりを見廻す内少將言ふやう。なう究竟の隱し所こそ候へ。只今にも彼等が來らば是非に酒を強ひ醉伏させ候べし。其の内は御苦勞ながらあれなる二合の唐櫃に御忍びましませ。地よき時分に我々が合圖を致さんとあれば智惠薄き二人の者。ふはとだまされ打頷き是に隱したる事あらじ。時刻移して彼奴ばらに見付けられては如何なり。いざとて二合の唐櫃へオクリ入りける〽心ぞ淺ましき。地虎少將立寄りて。蓋をしめんとする處を藤太しばしと押へ。詞いや〱油斷は怪我の基。兄弟を仕了する迄は方々が心知り難し。先づ其の鍵をこちへこされよ。蓋をも前後へし給へと言へば二人から〱と笑ひ。地さつても用心深きお方かな。兎も角もと云ふ儘に錠を二人に相渡し。フシ蓋をも前後にしたりけり。地さる程に虎少將是迄はしつ此の上はそつと落ちてや退かん。兄弟がな來れかし。兎やせん角やと身悶えし フシ足もしどろに落付かず。地かゝる折節表の方に響の音聞えたり。はつと思ひ虎御前。走り出で見給へば朝比奈の三郎義秀なり。こは天の與へぞと兎角の事は打置きて。右の次第を語らるれば朝比奈横手を丁とうち。詞扨扨女人には過ぎたりし智惠才覺いやはや驚き入つて候よ。地たとひ彼奴等が錠鍵取るとも蓋を前後にしたりとも。此の朝比奈が來る

上はと云ひもあへずあたりの大石えい。えいと引起し両脇にひつ挟み。かろ〴〵と歩み櫃の上にそつと置き。詞やれ横着者ども。仰もなきに上意と偽る其の天罰立所にあたり。女子どもにだまされ扨もよいざま候よ。斯くいふは朝比奈の三郎義秀なり。口惜しくば是へ出され。一太刀合はせ頭を刎ね曾我兄弟が孝養にせん如何に〳〵と罵れば。地二人は箱の内にしてこは無念と騒げども。二三十人して持つ石を蓋の上に置きければ釘付よりも猶堅

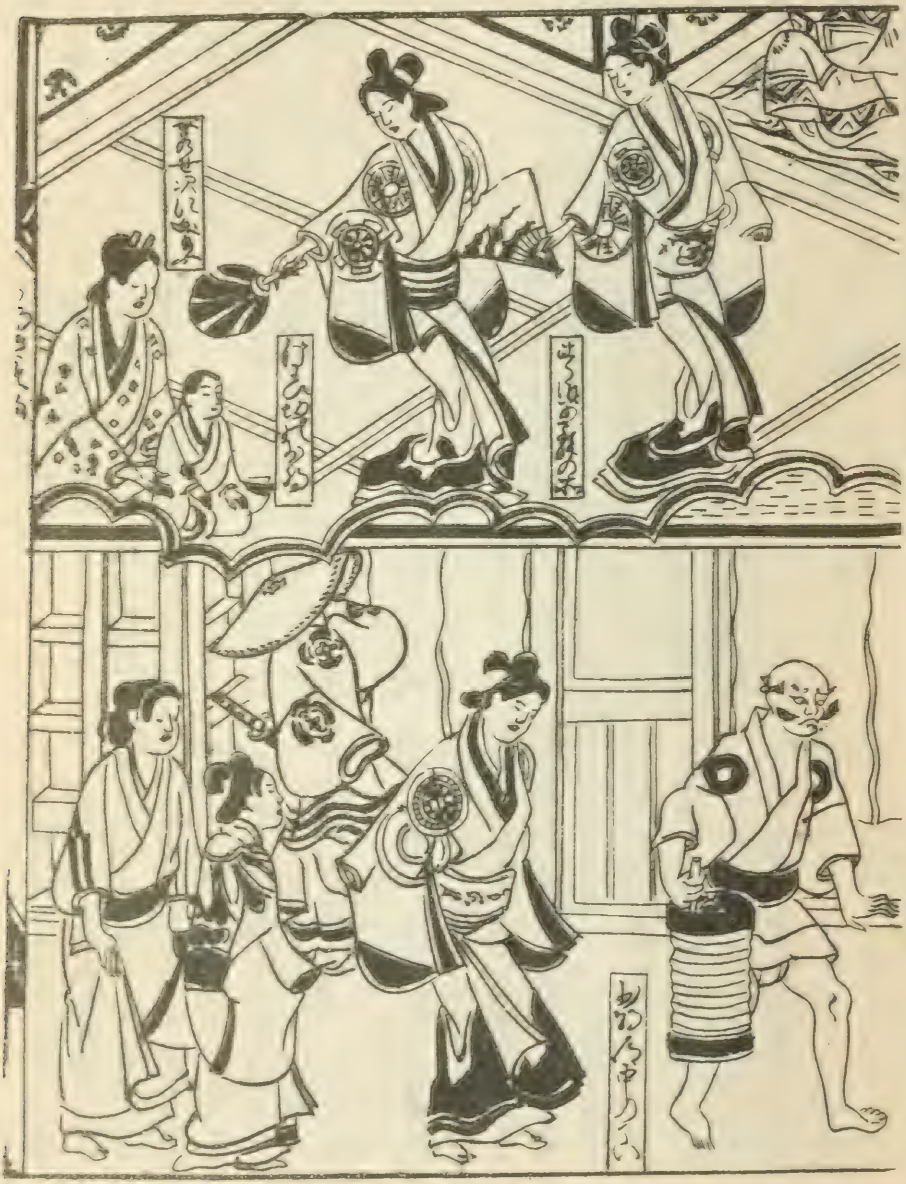
し。されども荒井大力。うんと云うて押し破れば箱は四方へさばけれど。なにが鋭き大石に押し拉がれて鮓魚の　フシ板の如くになりにけり。地荒四郎箱の内より顫ひ顫ひ云ふやうは。詞いやこれ朝比奈殿。某は曾我殿ばらへ敵對したる身でもなし。只今是へ參りしも荒井めに唆はかされ候へば。兎角貴公の御慈悲に　侍一人取立つると思召し密かに命を助けてたべと泣聲にてぞ申しける。義秀腹筋をよつて打笑ひ。なに曾我兄弟に敵對せぬとや。オヽ柴垣破つて逃ぐる程の腰拔が如何で敵對すべき。侮り易き女子供には能くも男だてをしけるな。汝がやうなる腰拔は。侍どものみせしめに殿中にて恥かゝせんと。地若黨どもに云ひ付け縮繩を多く取寄せて。新開が入りし唐櫃を十文字にからげさせ。彼よ是よとする内に鬼王兄弟來りたり。詞朝比奈見給ひやれ方々。論も意氣地も無になつて自業自滅の鼠ども一疋は押にうたれ。今一疋は生捕りたり是こそ曾我の運開き。地いざ此の儘にて御前を經鎌倉中の物笑ひにと死骸と生捕り擔はせて鎌倉さしてえいさつさ。よいさつさえいさつさ。よいさ〳〵よいさつさ　ギンよい侍のなれの果。知るも知らぬもやごゑをかけ手を打拍き。身をよぢ悶えて笑はぬ人こそなかりけれ。

第五

朝比奈の三郎義秀は曾我の祐若虎少將。鬼王兄弟召連れて御前に罷出で。詞是は工藤左衛門を討ちし祐成時致が妻子にて御座候。然るに新開の荒四郎荒井藤太重宗。此の二女が庵へ參り君の上意と僞り。これなる悴を召取らんなどと嚇し苦しめ候故。女童の事なれば當座の難を遁れんとすかしたらし候處に。運命盡きて易々とたばかられ斯樣々の樣子に候と。新開を生捕りの唐櫃。荒井藤太が死骸やがて御前に引出す。地君聞召し扨も憎き仕業かな。先づ其の箱を開き新開めを引出し諸士の中にて面縛させよ畏つて義秀は。唐櫃の掛繩をはらり〳〵と切りほどき。蓋を開ければ新開飛出で逃げんとするを朝比奈とつてあげておとし。脊骨の土をどうど蹈へ。詞此處にても彼處にても逃尻早き男かな。とても事に御前にて生き首引拔き申さんかといへば君聞召し。オヽ侍の面よごし所領盗人國家の弊。地見るも中々腹の立つ早や計らへと宣へば。畏つて髻を取り既に危き折節虎少將引止め。詞尤かし心底の憎さ頭より爪先迄刻みても飽き足らず。地さり乍ら殺せしとて夫の祐成時致の蘇り給ふ道にもあらず。其の上斯樣に殿中にて恥を與へ給ふ上は。討ちたるよりは勝りなん。只我々が望には願はくは出家させ。一枝の花をも摘ませなばせめて利益の便とも。又祐若が祈禱とも嬉しと思ふ其の悦び。何か是にはまさり草。菩提の種ともなりやせんとステテ事をわけて申さるゝ。地君も道理に歸服あり實に尤も理なり。さあらば曾我が孝養にとて。御赦免あれば朝

比奈荒四郎を引立てゝ詞これ程恥をかく上にも未だ命が惜しきかと。地いへども更に返事をせず。袖にて顔を打覆ひ押し俯向いて逃出づればさつても惜しきは命かはと。フシ一度にどつとぞ笑はるゝ。重ねての上意には。曾我兄弟が振舞今かたがたが仁義あつぱれ無雙の者どもかな。則ち先祖の知行宇佐美久須美河津の庄祐若に得さするなり。詞扨時致には子の無きとなっ。然らば兄弟の者どもが假名實名か

たどりて。曾我の十五郎祐時と名乗るべしとしるしの御判を下さる丶。道の道たる御政法有難かりける次第なり。此の事奥に聞えしかば虎少將が志御臺深く感じさせ給ひ。御簾間近く御出あり二人をつくづく御覽じ。誠に傾城白拍子は頼少く僞多しと聞きつるが。彼等が振舞貞女とやいはん賢女とやいふべき。斯くとは知らで今迄は。遊女はさもしき者と思ひゆかしき事もなかりしが。今更彼等が有樣を見



て傾城の戀路のしないと懐かしく見まほししと君へ御訴訟なされ。古への遊女の樣學うで見せよと宣へば。二人は顔を打赤め。今は昔になれ衣かへすぐ\も恥かしと幾度辭退申せども。數々のお望に御意も重荷の力なく。お請を申し立ちければ御所のお前に町づくり。數多の遊君召集めすでに用意を 三重へ したりけり。

風 流 の 舞

フシ誠に目なれぬ。風流やと。上下さゞめきあふ中に。深編笠の目に立ちて誰をしのぶの。ヲハル頼かふり、扇をかざし下を引いて。端格子に立ちかかり 小オクリ 煙草。のめとは。歌かたじけないによほい。よほいよほいほうよほいく\ほやんれ情の君さまたんだ。今宵との字か。底心それ/\地フシ九折を急ぐ賤の男が。駕籠の簾に手をかけて。又のお首尾といふもあり。罪も報いも後の世もオクリ忘れへはてたる。ばかりなりフシかゝる折ふし、思ひ思ひの紋の傘、指し櫛の歯の引きつれて。ひつこき髪の髱なしに亂れて物を思へとや。小褄がいどりほら/\と緋無垢。黄無垢のひまびまに。脛いと白く忍ばしくゆられ。ゆらりと。ゆりかけて。静かに歩み行くぶりは。天津乙女の舞の袖ギンハルフシ裳に羽をのす。天つ雁。月にとわたる風情して道中。いみじく 三重へ 過ぎ越しゝヲン猶古への、物語。今様にこそ謡ひければ歌廓住居は、時雨の中よ降つ濡らしつ。むら村雨の。またひぬ露もまだ干ぬやよや。ギン霽は不斷の伽羅を焚き、蘭にもまさる燈火は。月常住の、夜街かや。宵あら急なりけるも。こゝぞ戀路の揚屋町は風靡月に。言葉をかはす賓客も去つて来る事もなく翠帳紅閨に。枕を竝べし其の人も口説の嵐に誘はれ。親の意見や 三重 山 嘗紙千束に積れども、浮氣の雲の定めなく。雖れはまさらで戀がますよのフシ世の中はつつらき勤の品々に。節句正月色くらべ。春は梅に桃の酒夏は凉しき菖蒲酒秋の、菊酒。冬は雪見に歌咲けや。松風。あかれや簾なきり/\。しやんと結んで空に知られぬ霰酒。つけて押へて。おひにおひ竹欄竹の。竹になりたや篠竹にヲ幾夜重ねて書く文に。切つて巻き込む黒髪の。いふにいはれぬとりなりや 小オクリ 身狭は夜高術短か。裾にはさつと立つ波やばつと立つ波どう/\/\。さら/\さら/\漣や志賀の山道。うらは紅絹うら小オ

ゝ花の、歌花の吹雪より吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、戀しき人は見度いものぢや。言誰ぞ。歌かぶろ。出て見よア丶風が吹くフシそれで寢らせて迷ふ夜の明方告ぐる、鐘の音、袂ひきの櫻枝折りの。やり梅かぶろのうき名殘、なじめば涙のこぼれ梅。駕籠はそなたに飛梅のしのぎかねにし壁さつらさ。昔語とにほひ梅のちは小梅の花盛朽ちせぬ中の契なり。かく定めなき遊女の、ヲ寄せては返へる波枕浮きたる舟にたゝとへしも。今身の上に恥かしや語るも言ふも面ぶせい、さら/\名殘の調子をと、虎少將が調にて拍子を揃へ 三重 奏でける地かくてお暇賜はりて親子伴ひ立歸り、富貴の家となりにけり實に有難き忠孝の、威徳は千秋萬々歳目出度かりともなかなか申すばかりはなかりけり。

大和三癸亥歳九月吉日

右此本者依小子之懇望附秘密
音節自遂校合令開板也

加 賀 掾 國

京二條通寺町西へ入町
正本屋 山本九兵衛板

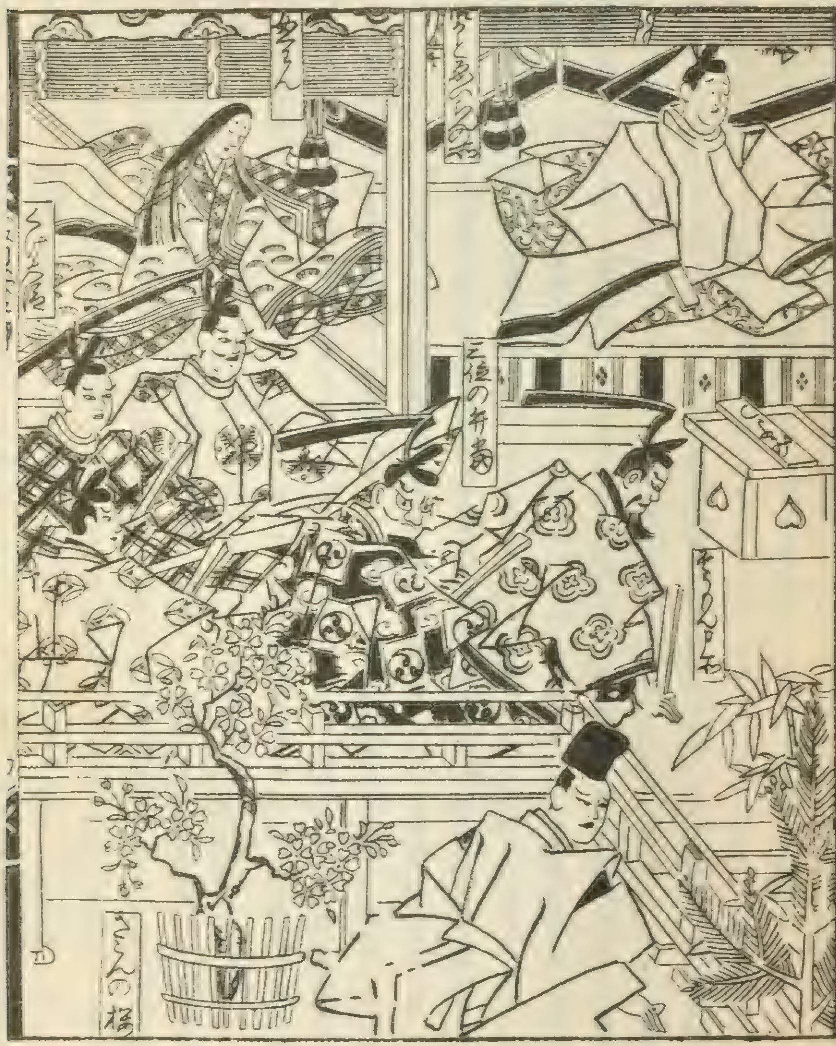
賢女の手習并新暦

第一

抑もその後凡そ三百五十四ケ日の始め。年に輝く天赦日静けき風の復(吹)日に霞の衣鬼(着)宿日。民の納めは萬倍日。御代にかしづく大明(名)日。神によしとや伊勢暦。三島暦の文字ふとき。往暦の動きなき和國の春こそあらたなれ。いでや君が代六十餘りの賢王圓融院の法皇は。蓬が洞に遁れ下りさせ給ひながら。叡慮を四海にめぐらしおさ〳〵君を補ひ給へば。御政事の露國土を潤し。さながら醍醐村上の。跡を追はせ給ふかと。賤が伏屋の假睡にも。枕の都あがまへて足を向けても臥すことなし。既に長徳元年平旦の。御殿の氣色けざやかに鶴の觜額玉簾。御格子几帳も注連縄の。穂長の色を讓葉や。奥は十二の御局に。去年の若水打汲み初めて。初白粉のわか水や。不老不死てふ藥酒。女松男松を門の前。白洲にさしる五緒車。下馬に嘶く春駒に月卿雲客袖くらべ。院の拜禮奏すれば左右の官女侍女くわどの屛風を押遣りて。諸卿少々舞踏して天顔を拜し奉る。大内山の粧ひは世にたぐならぬ御作法なり。爰に参議菅原の輔正は。今年八十五歳朝に杖つく齢を越え。和漢の博識なりけるが。玉座近く畏り謹んで申さるゝは それ大君の宇内をしろしめされ。民安全に治まる事月日の運行旰夜の往來の時を違へぬ政事に習はば百世といふとも知んぬべし。さりながら貞觀この方の暦 宣明暦を用ゆて數百年に及び候推歩天と違へり其の故は。一年の日數大小の増減三百六十四分度の一つに割り四季土用を考へ其のあさすを以て滅日沒日と稱ず時一時一刻一刹那の間髪一筋の違ひめ。積り〳〵て四百年の内に三日の違ひと成り候これ宣明暦の誤りなり。臣つらつら是を鑑み今大統暦を以て授時暦に改め。億萬劫を經るとても變らぬ國の暦を作り。奏覧に供へ候。萬歳樂とぞ奏せらる。院叡感限りなく繰返し叡覧あり。げに春秋の節變り土用八専吉日悪日。方角日取の細やかさ古き暦に勝りたり。いで〳〵天下に普く人をして明らむべしと。御書所に仰せて梓に刻み。公卿太夫國民に下し給ふぞ有難き。重ねて關白兼家を召され。此の新暦の表月蝕の事。東國にて未だ滿たず西國にて滿つるとあり。僅か日本の内にさへ月日のめぐり東西の差別あり。後代の鑑なれば急ぎ東西に勅使を立て暦に合せて天地の運行を考ふべしと。關東へ

は左中將藤原の實方に仰付けられ。陸地傳馬の御判を下さる。又西國へは三位別當安國に勅諚あり。則ち海路船手の御判をなし給ひ。はやとく〳〵との御事にて入御ならせ給ひければ諸卿。さゞめく追風にさらり〳〵と捲き下す。御簾の房や紅の雲井の春こそ 三重 〽ゆたかなれ フシ さる程に。三位別當安國は我が館に歸り郞黨を召集め 詞 さても此の度改りたる曆を東西にて引合せ月日の運行をうかゞはんとて關東へは實方中將。西國へは某に參れとの院宣これ一生の迷惑なり其の故は先年某太宰の少貳にて下りし時筑前の住人菊池先生

道清といふ者を。不慮の口論にて某手にかけ討つてあり。彼が所縁我を狙ふと聞きける故。實方を賺し西國へ遣し。某關東へ下らんと思ひ。陸地と船地の御手判を差換へて得させよと樣々にたらせども實方更に承引せず。敵の國へふかく／＼と下らんは如何にしても危なもの如何はせんとぞ仰せける。落合忠太罷出で。御尤至極せりはや實方は關東の門出に。攝州天王寺へ參詣し直に東に下る由遲なはりては詮らなし。跡を追うては是非々々懇望遊ばされよ是非承引致さずは何の生冠者輩。君と我等が四つの眼で一睨づつ睨めたらば よも



や否とは言はせまじと手に取るやうにぞ申上ぐる。地いしくも言つしものかなと實方の跡を慕うて取る物も取敢ず津の國さしてぞ三重〳〵下りけるフシさる程に。地左中將實方は例稀なる勅使を蒙り。東に赴く門出に都の惠方に當れりと。芽む蘆の難波寺。シ天王寺にぞ參らるゝ。地頃は睦月の中つ頃まだ冴え返る初空は。春ともいさや白雪の振袖しやれて品あまる。二八餘りの上﨟の乳母らしきを誘ひて。勝鬘山の愛染の御寶前に繪馬を掛け南無や愛染明王。三年の念願願はくは。成就圓滿なし給へ。スヱテ自ら畫きし此の繪馬。誠を盡す志。佛は知ろし召さずやと。フシ涙を。流し禮拜し地稍下向とは見えけるが。寒雪に野は暮れて袖打拂ふ蔭もなくアゝ辛氣氣の毒や。あちやこちやとちよこ〳〵走り淺黄の鼻緒しをたれて。姫は餘所目を恥づれども乳母は何の色もなくはね上ると搔取すればはてよいわいのと恥しさうに。芭蕉の蔭に立寄りて赤面したる其の有樣フシ戀を含みてほしや〳〵と。地此の世の人とは思はれず實方も心くれフシうかと。見とれておはせしが。地下人の見る目如何とも思はず側につゝと寄り。日こそ多けれ此の夕。佛も多きに愛染を。しみじみとの御祈誓地殊に繪馬は放れ駒。戀の重荷を乘せてやる我馬方と罷成り。繫ぎとめても見まほしや此の傘に入り給へ。奈落迄も御供とスヱテ袂に。すがり宣へば。地顔打赤め片頰に少し笑窪のため息に。心はせきて見ゆれども乳母を憚る氣色にて。詞いや左樣の事にて候はず心中に深き望の候て斯樣に參詣仕る。地御心ざしは嬉しけれども若い殿御と相傘は。あだ狂ひとや人言はんフシ許させ給へとほのめけば。地實方重ねて。詞いやこれ其方も此方も物詣人が何といふべきぞ。地殊に某は此所の案内知らず。傘貸し申せし代りには此の堂塔の仔細を語り聞かせ給へ。さあいざ〳〵と傘の會釋あどなき品形。袖濡れませう此方へと傘の柄共に持添へて締めつゆるめつ凭れつ寄りつ。語る名所もふるひ聲しどろ。ちどろに三重〳〵歩まるゝ。

天王寺名所

フシ石の鳥居の。代々ふりし雪の深山を今爰に。靈鷲山ともフシ眺むべし。釋迦如來轉法輪所。當極樂土東門中心。そも〳〵地此の額と申すは。小野の道風が筆の跡願ひを西にかけまくも。スヱテ忝しや山越しの。彌陀の御顏を拜むなる。不斷香の。薫は空にむら紫の。ハルフシ雲より朱の廻廊にヲクリめぐれや〳〵めぐれ五重の塔常樂我淨の朝嵐さつと誘へば軒の寶鐸りん〳〵と。フシ二六時中に絶間なく。舍利禮讃の法の聲。金堂講堂六時堂。石の舞臺に極樂の歌舞の菩薩を待ち顏に。小忌の袂を飜すスヱテ彼の伶人の波返し。涅槃の調有難や濁りに。フシしまぬ蓮池の。鯉鮒は鰭振りて。フシ石龜ねぶる水の面。投げ煎餅や撒き麩煎を。爭ひあさるさざら波。青海波の泡沫はフシ八功德池の眺

めかや。龜井の水のせゝらぎに。流れもあへぬ標は經木の筏手向草。弘誓の海と賴もしく。まだ總角の。兒櫻十六歳の御姿。四十二歳の御束帶。フシなほ有難しと。禮拜石。引導石や影向石靡き〳〵て。なよ竹の葉末は同じ。フシ深翠。二股竹の。契りこめたる引裂紙で。雌結ひ雄結ひの諸結び。手に繰る珠の十五社や。和光の塵に交はりてホオクリちりや〽ちり〳〵ちりやたらりの宮社。太しき立てて二王門。阿吽の腮忿怒の勢スエテ殊勝にもすさまじく。心の鬼も怖ぢぬべし。衣になづく狛犬の四つ足門を眺め捨てゝ。はや煩惱の眠を覺す。黄鐘調の鐘の音を。聞けば其の日のやつ。こらやきとも。なるをいの。聞けば別れの。フシ鷄は物かは。折る人つらしと。惜みけん守屋櫻の目も遙に。彼岸櫻の夕至や。幕より幕に色添へてばつとときめく人心。フシ目なれぬ軒の名を問へば。福圓滿の。寶堂いやまだ文殊藥師堂。戀ご積りて子安堂。フシ甍を並べて立ち

給ふ扨又南に庚申。めせや〳〵お土產召せ〳〵。うなゐ兒の四つ五つ。六つ七色は雪の色葩煎フシ櫻葩煎。花を挽木の茶臼山。有栖が山や。坂松山。安井の宮は春闌けて入日を洗ふ西の海。戀を深めて語るにぞフシ岸に生ふてふ姬松の。根問ひくとひのかね言に。地はや雪晴れて空暮るゝ心の糸をフシ苧環に御緣あらばの捨詞。あとになりては猶見送り先に。なりては又見戾りよれつもつれつ歸らるゝ長き妹背の初めとは。後にぞ思ひ知られける不思議なりける契りかなとて皆人。感ずるばかりなり。

第二

地世を秋風に吹きかへて樟葉の里におはします。菊池太刀丸と申すは幼少の時父の道淸を三位安國に討たせ其の敵討たんとて老母姉君諸共に心つくしを忍び出で。柴が軒端の憂き住ひフシ貧しく暮す營みに。地乳人の足井平馬之丞身をやつし野邊に出で。朝菜蕪をあさりつゝオクリやう〳〵〽はぐくみフシ奉る。地母上待兼ね走り出でやれ。平馬之丞。詞扨も姉の瑠璃姬は勝尾山の愛染に。敵を討たせて給はれと月參の願をかけ。昨日早天に出でけるが。いつもは早く歸りしに斯く夜更くる迄歸らぬは。只事にてはよもあらじ如何はせんと宣へば。平馬聞きもあへず。扨も〳〵大事を持つたる御身にて氣遣はし覺束なし。御迎ひに參らんと松明點し太刀おつ取り地駈出でんとせし所に瑠璃姬歸り給ひける。是は〳〵と人々は悦びさゞめき。詞何としてかとありければ雪は降り來る日は暮るゝ。せん方もなき折ふしに。あれなる殿の介抱にてこれ迄送り下されしと。語りも果てぬに人々は扨大膽やして其の方樣はいづくにまします。先づ御禮を申さんに。此方へ是へと實方をオクリ奧にフシ〽請じ奉り。地賤しき者を御介抱遊ばされ。詞御蔭にて夜道恙なく有難き仕合と禮儀正しく申さるゝ。實方御覽じ痛み入りた

る言葉かな。幸ひ夜も更け候へば家來共は何方にも宿らせ。某ばかりは此の侘びたる住居珍しく明かして行かんと宣へば。太刀丸おとなしくかゝる高位の御座所に。勿體なくは候へども仰はいかで背くべき。お寢間にもお居間にも 地 葦引園ふ此の一間。松の焚火を一種にて召させん物も長き夜を明かさせ給ひ候はば。本望に存じ申さんと芹の羹の飯。心をこめてもてなせば御供の人々は思ひ／＼に宿を取り我も／＼と 三重 休みける フシ かくて瑠璃姫。地 何をがなとは思すれども。貧しき身なれば酒參らせん便もなく。我が身は遊の破

紙衣。上着一重を代なして僅かの酒を買ひ調へ。御肴に何かせん　せめて一つとすゝめらる。地實方一つ受け持ちて。詞如何に方々。山路の酒の假枕情わりなくもてなしは身にも餘りて覺えたり。さていづれもは何人ぞ　地打見には山賤の馴れて優じき振舞の。彼方を見れは弓巻藁。糸緋縅の鎧もあり。干菜かけたる庭もせに一輪開く白梅も。心にくけの住家いかさま由ある風情なり。其の昔こそゆかしけれと　世にしみ〴〵と宣へば。詞平馬涙をはらはらと流し。忘れて年を經しものを思ひあへぬ御尋ねに預り候ものかな。地人がま

しくはあらねども。あれなるは御母上是なるは御姉弟かう申す某は乳人子にて候。なう古へは一國一城の主にて荒き風にも當てぬ御身の姫君は四歳。若君は未だ二歳の時。はや十四年は隙行く駒。中しやうぎの口論にて御父上は太宰の少貳といつし者に討たれさせ給ふ。頼みなきは人心御家人譜代の家の子も皆散り果てて枯れ殘る。せめて若木の人々を世に立て參らせ主君の敵を討つて本懷遂せんと。草に起き臥し露にやつれてかゝる侘しく身をなして。つけ狙ひ候へども顔を見知らぬ敵といひ。名をも變へて候へば逢ひし事もなく。月日の行くに從ひて育み申さん術もつき。朝な夕なに君達の無念や平馬敵を討たせよ平馬之丞〳〵と喞ち歎かせ給ふ時は。某はせん方なく見るも悲しく口惜しく。一向に腹切つて憂き事聞かじと存ずれども。なう死なれぬは命にて。見苦しながらも存らへ候。今はかうよと髮み剃り男を止めてと思へども。

御覽の如く此所は。江口神崎牧方の。其の宿々は多けれども。里離れなる道すがら天の河原の岸高く。渚の院の森繁ければ晝ともいはず雨のうちには。山賊夜盗の盜人等旅人を惱まし高荷を下し。下女やはしたの里通ひに打剝ぎ取られ泣叫ぶ。左樣の時は某も錆びたれども此長刀莖短かにおつ取りのべ。爰をば我に任せよと呼ばはりかけて切廻り。追つ詰め追つかけ細首弱腰嫌ひなく諸腕諸膝竪割り横斬り拂ひ斬り。弓手にめぐれば馬手に支へ。右に開けば左に包み。斬つて棄つればげには又一度はさもなき時もあり。左樣の時は此の在所の便りにも成る者ぞと。悦び勇めば今更に。捨てもやられぬ武士の道。よしや此の身は兎も角も蒼める花の若君を。盛りと見せず此の儘に朽ち果てさせ參らせんと。思へば無念口惜しさ思召しやり給へと前後も忘れ泣きければ おの〳〵。涙を流さるゝ。やゝあつて平馬涙を抑へ やあ御機嫌も存

ぜず長物語に夜の更けて侯へば。御休み候へかし。賓方も袖を絞り。げに哀れなる物語に思はず落涙いたしており。明日御目にかゝるべしさらばと言ひて立ちさまに。中將目くばす忍び音は。後にと言はぬ へばかりなり。岩に唐松寢入りもやらできうたゝ寢も。我を忍ぶの戀心。かゝるいぶせ瑠璃姫は情の露のゐとり傘。かゝるいぶせ せば捨て難く。此方よりや音づれん。それも流石恥かしく。彼方をや待受けんとは思へども流石また。親子一所の寢所へ呼び申さんもはしたなし。氣まゝにならぬ我が戀路えゝまゝよふつつと止めう。いや止めまいよあゝ辛氣何どかと。起き返りてはとんと臥し。とつおいつの寢亂れ髮。いとしらしくぞ見えにける。かゝる折ふし奥の障子の彼方より忍ぶ人音聞ゆなり。扨こそ君よ人や目覺めん面なやと。そろ〳〵と起出でて。障子を開くればあゝこは。手飼になづく鼠猫のそれよ何

とて鳴く音なるらん。からよ。〳〵と撫でさすり。フシ身を顫はしておはしける。包み兼ねつゝ實方紙燭に照す戀路の闇。枕屛風を中垣に。これなう。〳〵とありければ。姫は初心にもてなして。何ぞ御用の候か。女子どもの寢所へ遠慮も會釋もなみ枕。しや打ちつけなと獨りごち。起きて往なんとし給へば。實方裾を引止め。脊の情に絆されて只一筋の戀草を。分ちもあらず來りしに。思ひの外の他人ぶり。なほいと〳〵ししんぞ一夜はお許しと フシ縋り。ついてぞ口說かるゝ。姫しげ〳〵と打眺め。身は數ならぬ蜑小舟ほの字とあ

れば自らもお嬉しうは候へども。仕様もやうもあるべきにかゝる女の寢姿に否と言はせぬ御仕掛エ、あられもないあの淫蕩な目わいのと顔打振りし面ざしは　雖も命は惜しからじ。されぱさこそ思ひつゝ我と我が身を諫めても。心の駒の綱切れて胸もせかれて來しものを寢もせでほんに此の儘で。戻られうか往なれうか。情知らずめつれなしと凭れかゝれば振放し。又取付けば、エ、おかしやんせそれは君様の御誤り譯ある身やら御存じなく。人の心も量はでしこなし顔の御忍び。男自慢か粹だてか。歸らせ給へと衣引被き　やをら靜まり臥し給ふ。實方今は呆れはて思ふが故に散亂しいへば言葉の葛の葉のうらみ受けんと思ひきやつれなき松の宿り木も根なし葛は生ふものか。廣大慈悲の愛染に。千日萬日詣うくるとも。却つて地獄の種となり戀で死したる男の一念猛火となつて其の身を燒く。つれなき女の身の果見て。其の時思ひを晴らさんと立歸らんとし給ふ時。姫ずるすると走り出で兩の袂をしかと取り。其のお言葉がつゆ恐ろしくはなけれども。今日見そめし初櫻根からいてゐる殿なれば。弱みを見せじと僞りにもたせかけたる我が心。いふも恥かし言へばえに。どうも〳〵とばかりにておろ〳〵涙になり給ふ。實方少しくせませて。や夜中に人の袖引くは近頃聊爾千萬と。振切つて歸らるゝ放ちはやらじと又引止め。眞實いやか。はていやとは誰か岩代の。松の木折りにたよたよと引いつ引かるゝ〳〵神枕　のべのうがひに。床ぬれて顏と顏とを打合せ。渡りくらべし思ひ川小川小石川ころびようてころび〳〵ころび初音の鳥鐘も厭ふな厭はじ解くな解かじなひつたり。濡れたるそのなかなか申すばかりはなかりけれ。

第　三

三位別當安國は實方に逢んため攝州さして下りしが橋本の宿に着き。急の者ぞ馬借らん馬を出せと罵りける。馬方ども聞きも入れず。今日は勅使のお通り故どなたの御意でも馬借す事はならぬと空嘯いてゐたりける。安國大きに怒り。勅使にもせよ何にもせよ此の安國が通らんに何條事かあるべき。粗言つかば中間どもあれぶて叩け。承り候と飛んでかゝり散々に打擲す。然る所へ太刀平馬走り來つて兩方へ押分けこれこれ。さては何れも様子を御存じなされませぬな。此の度實方中將殿公用あつて關東へ御下向なされ候故道中傳馬滯りなく相通し申せとの御手判これにあり。拜見あつて方々おとなしく通られよと。錦の袋より勅印を出し拜ませらる。本より安國これを望みの事なれば嚇して取らんと思ひ慇懃に立寄つて。扨々左様の事とは聊か存ぜず狼藉を申したり。此の上は誰か違背申すべき。して各は實方殿の御家來か。いやいや我々は樟葉の里の住人菊池太刀丸とい

ふ筑紫浪人。仔細あつて中將殿一兩日私宅に御宿召されしと。言ひも果てぬに安國はつと思ひちやくと思案をめぐらし。ムヽ扨は菊池先生道清の一子よな承り及うだり御邊親の敵は其の實方の中將よ。以前太宰の少貳といつしなり。此の度西國へ下るべしとの御宣旨なりしに其方達がつけ狙ふ由を聞き無體に御訴訟して扨關東へ下るぞや。敵と知らで宿を貸し返討に逢ひ給はん。命知らずや笑止やと フシ誠しやかにぞ語りける。太刀丸平馬之丞聞きもあへず目と目をきつと見合せ ここは有難き御知らせこれ佛神の御加護なり。御諚は重ねて申すべきと言ひ捨てて駈出づる安國抑へてしばらく〳〵。御邊が宿をする上は最早射止めた鹿なるぞ。せいては事を仕損ぜんとつくと心を落しつけ本望を遂げられよ。扨其の持たれたる御手判に血を觸れ汚す事勿體なし〳〵。某預り申すべし。侍のかういふ上は我も引きは致すまじ。跡に控へて下人どもが働かば。命にかけて助太刀ぞや黑鐵の楯なるぞと勇め立つれば兩人は。悅び私宅に歸りしはうたてかりける 三重〽次第なり。フシかくて兩人は。息をばかりに立歸り先づ瑠璃姬を傍に招き。斯樣々々の樣子にてあの客人こそ敵なれ。數年の恨みを今宵ぞ晴らし申さんに悅び給へと申さるれば。瑠璃姬はつと興さめて スヱテ暫し返事もなかりしが。稍あつて涙を流しあゝあさましき事を聞くものかな。近頃恥かしき事ながら敵とは夢にも知らず。情深くのたまひし故本望を遂ぐる便と思ひ假の契りを自らと二世迄の契約し スヱテ堅く誓を立ててあり。さりながら討たではまた道立たず。討てば又言交せし一言のあだとならん口惜しや。尤も不義とは言ひながら妾夫婦となる上は御身とも緣者なり。父の爲に敵ながらも聟ならずや。敵を討つも道を立てん爲なるに。道に背きて討つ事は フシ本意にはなるまじき。あはれ身がな二つほしや夫婦の契りと孝行の。道を道にて立つべきに口惜しの我が身やな。如何はすべきあさましやと或は歎ち或は恨み。フシ口說き給ふぞ道理なり。太刀丸もあきれ果て扨々是非なき仕合今更悔みて益もなし。さりながら其の御契りは內證づく。兎角討たではかなひ難し御思案あれと申さるれば。ヲヽ妾も左樣に思ふぞや其の儀ならば今宵の內に契約を戾し緣を切つて他人になり凉しく敵を討つべきに。今宵一夜は待給へと理を盡して宣へば。いかにも〳〵今宵ばかりは待申さん若し落つる事もあるべきに。必ず必ず油斷すな密かに〳〵此方へと オクリまづ傍にぞ入り給ふ。フシかくとは知らず實方は太刀丸平馬之丞が氣色變りし面魂。如何にしても心得がたし必定彼奴等は此の所の強盜なるが。我を欺き太刀裝束を剝ぎ取らん謀と覺えたり。汝輩やみ〳〵とは取られじと。外面の庇に立隱れ上には眞柴引被き。事の樣子を 三重〽見給ひける フシ夜も

更け行けば。太刀丸姉の案内待兼ねて。勇む心を一筋に槍おつ取つて差足し。妻戸に立寄つて大音上げ。如何に太宰の少貳宵に我が名を語りしに。用心もせず寢入りしは若輩者とて侮るか。天命何とて遁るべき。九州の住人菊池先生道清が一子太刀丸親の敵覺えたかと障子越しにはたと突く。手應して血煙ばつと立つ。やれ仕澄したり嬉しやと呼はり給へば母も悦び走り出で。小躍してぞ立ち給ふ。すかさず止めを刺せやとて障子をさつと引明くれば南無三寶瑠璃姫の右手の肩先突通され朱に染みてぞおはします。母は途方にくれ給ひ。やれ太刀丸お事は氣ばし違ひしか姉と敵を取違へ侍といはれうか。情なや悲しやとスヱテ抱き付きてぞ泣き給ふ。瑠璃姫苦しげなる聲にて。いや太刀丸に科はなしこれ皆妾が誤なり。いかに太刀丸宵にもそちに言ひし如く敵と知らで契りし故。恩愛の緣を切つて後妾も共に討たんと思ひ是迄は來りしが敵は色を覺りてや早や落失せて行く方なし。定めて御身が心には妾が戀にほだされて親の敵を遁せしと蔑まれんも恥しく。母上樣にも平馬にも何とて面が合されん皆我が心一つぞと思ひ詰めての覺悟ぞや。冥途にまします父上に早く參りて言譯せん。せめて妾を敵と思ひ討つて本望遂げよえ。あゝ苦し目まひや。止めを刺してくれよとてスヱテ聲も惜しまず泣き給ふ。太刀丸も涙にくれ暫し返答なかりしが。エ悔むまじ人に恨みは更に無し。我佛神に見放され侍冥加に盡果てたり。是迄と押肌ぬぎ捨て既に自害と見えける時實方物蔭より飛んで出で暫し〳〵とのたまへば兩人はらりと取廻し。餘すまじきと反を打つ。中將少しも騷がずいやこれ聊爾せられな。實否を糺し討たるゝ道ならば神妙に討たるべし。先づ暫くと押鎭め。扨先づ最前より仔細を聞くに。某を方々の親の敵とて狙ふよな。太刀丸は若輩者にもせよ平馬之丞がよい年をして近頃粗忽千萬。して某を敵とは證據やある印やあると。詰めかけ給へば平馬居直りこれお公家今更陳ずるは卑怯。段々證據は三位別當安國殿よといへば中將聞きもあへずから〳〵と笑ひヲヲさぞあらんと思ひつれやれ。思案しても見よ某誠の敵ならば夜前御邊が昔語を聞きながら。うか〳〵と此の所に逗留すべきものか又それ迄もなく郎黨共に申付け返討にも討たすべし。何の思案もなく人の詞を證跡に親の敵を討たんとは是ぞ誠の盲討といふものぞ。これ御邊が狙ふ太宰の少貳といつし者は其の安國よ。狼狽者と大きに恥ぢしめ給へば人々目と目を見合せてフシ赤面したるばかりなり。瑠璃姫今は力を得なう中將樣左樣の事は存ぜず情なやおの樣と。緣を切らんと致せしが未だ諸天も捨て給はぬか何事も御免あり太刀丸に力を添へ安國とやらんを討たせてたべと手を合せスヱテ涙ながらに宣へば。中將も納得あり心安く思はれよ隨分加勢申すべし扨兩人に預

けつる彼の勅印は何と〳〵さん候御御手判安國めがたばかり取つて候と申上る此上は敵討は二段の事。一命をかけても取返さではかなはぬと宿々へ觸をなし若黨中間七十人。太刀平馬諸共に安國が泊りたる橋本へこそ 三重〽取りかけけれ。フシ朧月なる小夜中に。旅寢の宿を押つ取廻し鬨の聲をぞ揚げにける豫て覺悟やしたりけん鎧武者百餘人同じく鬨をどつと合せ安國表に驅出で狼藉者は實方と覺えたり。懇望するに承引せず一大事の勅印を油斷して奪ひ取られ負腹立ててしやれ軍。あれ蹴散らせと下知すれば。我も我もと聲をかけ火花を散らして三重〽戰ひける。安國が郎黨は皆逸雄の強勢ども寄手の小勢は切立てられ殘り少なに討たれにけり。時に澤田竹王と名のつて廿ばかりの若者太刀橫たへつゝと出で寄手は小勢のへろ〳〵武者大分討たれ今四五人と見えたるに。長道中かゝへながら隊入つて何かせん。いで某がおつ散らし夜更けぬ内に一寢入り。ゆる〳〵と寢させんずあつたら酒の醉醒すなと。廣言吐いて切つて出る。中將御覽じ彼奴が推參奇怪なりと打物取つて出で給へば太刀丸押止めあれ體の下郎輩御手にはかけさせじと。小太刀を拔いて渡し合ひつけつ廻しつ切結ぶ言葉には似ざりけり拂ふ刀を受け外し 詞高股かけて切落され犬居にかつぱと伏しければ。太刀丸は薄手も負はずしんづ〳〵と引返す。詞あれ餘すなと大勢群り打つてかゝれば平馬之丞是にありいで物見せんと黃楊の棒水車に振廻し打ちたて〳〵 三重〽追つ拂ひ フシ暫く息をぞつきたりけり。落合忠太隙間なく引つすがうて切つて出で二打三打打つとは見えしがつゝと入つてむんずと組み。金剛力士の力を出しえいや〳〵と押しつ押されつ捻ぢてはひねり取つては縋り上になり下になり。爰を勝負と捻合ひしが平馬力や勝りけん忠太を取つて押付け首をかゝんとせし所に忠太が弟餘さじと上なる平馬が髮束つかんで引つ立つるさしさつたりと右の腕を差伸べ上帶をかいつかみ引付けんとする隙に下より忠太平馬之丞が直中を柄も通れと刺通す南無三寶と取つて投げ。忠太が持つたる太刀おつ取りすかさず首を搔落し。立上らんとはしたれども急所の痛手に目くるめき二足三足たゞよひてかつぱと轉び死しけるを惜まぬ者こそなかりけれ。中將方には色を失ひしどろになつて見えければ。敵はいよ〳〵勝に乘りあれ餘すなと打つて出づれば。此の勢に怖ぢ恐れ フシむら〳〵ぱつとぞ逃げにける。安國此の由見るよりもやれ長追ひすな軍兵ども。たとへ彼奴等は逃げたりとも何程の事か仕出さん先づ關東の門出よしヲヽ心地よし潔し直に打つ立て方々と馬よ輿よとさゞめいて勇みに勇める有樣はあつぱれ非道の人非人放埒無慚のやからかなとて各舌をぞ卷きにける。

第四

地夜もほの〴〵と明けければ既に橋本の軍破れ杖柱とも頼みつる平馬之丞の討死し。敵安國は關東へ押下りしと聞くよりも。母上や瑠璃姫はスヱテ呆れ果てておはしける。地姫君仰せけるは中將樣や太刀丸はなほも敵を狙はんとて行方知らずなり給ふと承る。あるにかひなき我々が何とて此の儘候ふべき。いざや東へ忍びて下り。叶はぬ迄も敵をせめて一太刀と志し候とフシ涙ながらに宣へば。地母もさこそは思ひつれ。いざ〳〵忍びて出でんとて。旅の草鞋菅笠や。杖に切らんと呉竹のよをこめてこそ三重へ出で給ふ。

戀慕流しや。れんぼれゝつえ。唄足駄の笛に來る鹿はたゞハルフシ一方の フシ思ひぞや。戀と歎きを荷ひてぞ。オクリ身涙の玉の瑠璃姫も。さへ細りて二重の帶 フシ三重四重五重九重を。餘所にすてつゝ行くとても。露のわけある旅なれば。フシせめて慰む心あり老いたる母は何故と後姿をつくゞゝもスエテ見上げ見下す影老けて笠うなだれて杖つきのゝの字や誰が手習に ハルフシいろは散りぬる音羽山末ほのぐらき山かつら塒烏の聲こもる關の杉むら立越えて。フシ里の往來も我が中も。橋がなければ渡られぬ瀬多の

水上御覧ぜよ。あれ〳〵よその嵐を帆に帆にかけて。風が潜がする渡舟。ギン露引結ぶ草津の宿軒打つ雨に フシ恋荒れて。玉もり山のいさら水 ホオクリ 落ちて〳〵流れて文織るや。波の響の高宮川にさらす晒布の。さらさらに。はかなき戀に身をさらす。ヤレ名を晒す。さらば浮名を流しもやらで。何にかゝれるさゝがにの。いとほしといふ人もなく。こと問ふものは山彦や ホオクリ 谷に木をこる小野の宿とよ。摺針峠の細道 ハルフシ 身はつたなきに蔦かづら葛の裏吹く秋風に。宿の簾をばんば（番場）とあけて旅行く人をちよいと招く。招く手許は。ふはふは。不破の關彼の野邊の。薄が。フシ我を招けば。スヱテ露打ちこぼす關が原。ギンかさかさ夜ぬか笠寺に木の葉散り〳〵池鯉鮒の宿小夜の。中山小夜ふけて。フシ更けて砧や宇津の山蔦れる世にも清見寺。三保の入江の夕づく日松の葉越しに。眺むれば梢に。船を漕ぎ寄する。波か霞かいや富士の山何を

薪に雪を焚くらん薄煙。見ぬ唐國の仙人も。スヱテ戀路に通や失はん 峯白。妙の フシ愛鷹山尾花が袖の鎌倉山分け行く末は武藏野の フシゐい草より草に出でて入る。月も假庵の露の宿。花の古枝を笄に。黒髪山の白雲は。ヨセ げに山姫の薄化粧。旅の憂き寝の埴生にも。見し面影は添ふれども。枕並べて寢ぬ辛氣さつさ。フシ笹の葉や。根笹旅篠篠の。端山繁山。しげけれど心に。道を分けさせて。日數經ぬれば。フシ秋風の波の白河尋ね越し。いつか故郷に歸る身の 長地 袖に重ねん鵜戸や伊達の薄着の衣川。昔には遠く聞きしかど今目に千賀の鹽竈の煙に結ぶ松山や。足びきしをる籬が島。圍うとすれどまばらなる。月のためには外の濱。とある磯邊に 三重〳〵 着き給ふ。

フシあら痛はしや。地 親子の人渺々たる外の濱是より先は船もなく岩打つ波にとう〳〵として。鳥獸の鳴く聲も人の詞も聞き馴れぬ スヱテ憂きが上なる物思ひ フシ目も當てられぬ風情なり。地 然るに母上長の旅路に氣を破り。五體に風を引入れて今を限りと見え給ふ。地 姫は悲しみさま〴〵に。御額を抱へ足手を膚に溫めて。わりなく看病し給へども藥とても荒磯の。潮を口に注ぐより スヱテ すべき術こそなかりけれ。地 今を限りの御母上。堪へがたき氣色にて如何に瑠璃姫。たとへば妾死するとも構へて心をはふらさず。命全く今一度。中將殿や太刀丸にめぐり逢ひ。敵を討つて自らや父上の。後世の光を掲げよや。平馬之丞は討死す。頼む蔭には中將殿。子供が行方を偏に頼み奉ると。最期迄も遺書しと細やかに傳へてたべあら名殘惜しの瑠璃姫や。なつかしの太刀や。南無阿彌陀佛とばかりにて。四十餘りの春の夢朝の霜とぞ消え給ふ。姫はとかうの辨へなくはつとばかりに抱きつき。スヱテ 前後も分かず。泣き給ふ理 フシせめて。哀れなり。地 かゝる所へ松前より昆布若布を荷ひたる商人ども出で來り。此の由を見

るよりも。する〱と立寄りて如何なる人ぞと問ひければ。さん候自らは都方の者なるが仔細あつて母上諸共是迄迷ひ来りしが。習はぬ旅に疲れてや遂に空しく成り給ふ憐み給へ人々と伏沈みてぞ泣き給ふ。商人ども是を聞き扱いたはしき事どもかないざ〱取置き参らせんと。邊の木の葉取集め母上の御死骸を無常の煙となしにけり。姫は涙の下よりも。なう方々は此の島の人なるか。爰をば何といふ所ぞ若し此の邊へ都より。殿上人のさすらへ下り給ひし人を知り給はぬかと問ひ給ふ。浦人聞いて爰は津軽合浦とて

日本の内なれども國を隔てし離れ島都人は來る事稀しさり乍ら此の二三箇年以前三位別當安國といふ者。帝の御判を持來り。東夷を從へ今は蝦夷が島へ渡り。彼の島の王と成る。其の後彼を討たんとて藤原の中將實方菊池太刀丸といふ人忍びて下りまします由。其の外に都人の。來りし事は聞及ばずと。語り捨ててぞ通りける。姫君辛さいや勝り足迄の陸地さへ生きたる心地なかりしに。蝦夷とやらんは名も知らず。剰へ母上には離れ參らせ此の上は。如何成るべき悲しやと。又平伏ては泣くばかり。せん方もなき風情なり。かゝつし所に俄に荒風颷々として。霧横たはる木の間より。影の如くに黒の駒。一文字に飛び來り姫の袂をくはへつゝ背を差向けて居たりける。不思議に思ひ見給ふに。故郷にて勝鬘山の愛染に自ら畫きて奉りし繪馬の駒の氣色なり扨は疑ふ所なく明王の御加護にて。導き給ふと嬉しさの。信心魂に徹つて。口に眞言呪を唱へ。眼を塞ぎ夢ともなく。現心に駒引寄せゆらりと乗れば自ら。翼生ぜし如くにて風に嘶えて歩みける。己れと勇むのりの駒。彼の周穆の八匹の蹄に任せ翔り行き。四荒八極に到りしもさぞと思ひしら波の國の果しや外の濱。遙に過ぎて見返れば。雲江漢に横たはり。來つらん方も思ほへず。先は霞に朧々と。太虚にゐたる雁がねも袂になつく心地せり。見上ぐれば天近く又見下せば。地遠く手に取る月の片破はわれても水の底にありけり荒磯海。青海原の際もなく。弓手やいづこ名に聞きし磁石の山や北斗の濱。日を見ぬ島の暗きより。是を夜國といふとかや。馬手は南海限りなく。男旱りの女護の島。戀といふ字はよも知らじ。らせんきまんの國遠く越より外の島山を。足蹴に眺め行く空の。駒の嘶き龍の吟。雲起りては風蓬々と。打つ波引く波さつ〳〵〳〵。轡の響障泥の音。雨にたぐへてどう〳〵と乗り靜めては鞭を當て引廻しては乗り戻りくるり。〳〵くる〳〵と。東風に障る諸鐙。心に障る雲もなく駿馬に任せ打つ程に。江南江北邊際なく。滄溟暗々として雲に續く眼に遮る山もなく天にかゝれる日月は海より海に沒するかと。茫然安閑と現なく。磯吹く嵐は濱の眞砂を捲上げ〳〵。捲下し。西に飛入り雲を分け。凡そ萬里の空裡をば刹那に馳せて行く程に。雲に雲路のとだえあり。暫く手綱かいくりて聲をかけて打つ程に。馬は四足を縮めつゝ難なく向ふに飛びあがり又しづ〳〵と勇み行く。達磨大師は。蘆の葉にのりの方便是は又。描く馬の蘆原や難波の寺の勝鬘山。愛染明王愛敬の。信心奇特の其の驗。過現未來未曾有。神變自在の生佛とは是なり只これなるはと拜まぬ。人こそなかりけれ。

第五

そも〳〵蝦夷が千島といつぱ民に當つて一千餘里を隔て。此の國に生ずる者自然に通力自在を得て。振分髮逆まに生ひ眼の光あかねさす。朝日に向ふ如くなり。怒れる聲は忽ちに百獸の身の毛を縮めたり。山野の獸魚族を摑み裂き。旨酒美女に耽つて淫樂肉陣の遊びをなす放埒無法の異國なり。さるにても三位別當安國此の島に到つて彼の勅印を戴かせ。我日本の王孫なりと僞りしかば。鬼神に横道なしとかや島の夷等悉く歸伏し則ち島の大王と崇め。數千の眷屬打從ひ圍繞渇仰斜ならず。今日も濱邊に立出でてすなどり遊び居る處へ。痛はしや姫君は。早離速離が心地して窶れ果てたる旅衣立煩ひてぞおはしける。夷等是を見つけ扨もみめよき女かな。いざ大王へ捧げんと引つ立て御前に出でにける。安國きつと見て此の二三箇年日本の女を見ざる故いとなつかしう思ひしに。出かしたり〳〵。やれ眷屬ども。あれこそ日本の濡れ者といふ者ぞ是へ〳〵と招き寄せ。何として此の所へ來てあるぞと問ひければ。瑠璃姫淚の隙よりもさん候自らは。繼母の讒に浮名立ち空舟に乘せられて。行方もいさや白波に捨て流されて候が。命つれなく是迄ゆられ寄り候憐み給へといふしほの目元に餘る其風情眠れる花の如くなり安國いよ〳〵腰を拔かし。道理道理此の上は某が一の妃にそなへ活計に飽かすべし。扨眷屬共に打向ひ汝等は無人島へ漕ぎ渡り猪狩して遊ぶべし。それ〳〵といひければ承りて眷屬共。舟しつらへて乘出す其身は姫を伴ひて。急ぎ私宅に歸りしは運の極めと聞えけり。思ひきや。我が敷島の道ならで。浮世の中の浮世歌のせて二人が連吹は湘浦の澤の斑竹思ひ寢てもさめても忘れぬは妻の行方や敵の末。忍びてやつす薦笠に墨の掛絡袈裟淺黃無垢。浦々國々行き巡り蝦夷が島にぞ着き給ふ。實方仰せけるは如何に太刀丸是は聞及ぶ蝦夷が島扨も敵安國は。此の島の大王となりたる山あれに見えたる岩窟こそ彼奴が住家と覺えたり。眷屬數多あるべきに早まつて仕損ずな只たばかつて打取れと。とある所に立忍び暫く時をぞ移さるゝかくて安國姫君を伴ひ其の外女房召集め。晝夜酒宴に明かしける。今日も終日飲みくらし如何に姫。餘り醉ひて正體なし閨に入りて休むべし。如何に汝等何事も姫が女房共と遊ばれよ。心に背くなと。云ひすて奥に入りにける。かくて實方太刀丸は夜も更けたる事なるに。門外に佇み先づ一節をぞ鳴らさるゝ。いたはしや瑠璃姫は。巫女扇の花かつ凋み枕に近き波の音。つまなし千鳥しば鳴くも。淚を添ふる媒なり。ただ明暮は中將の御事のみ思ひくづをれ給ひつゝ。伏沈みおはせしが。誠に盡きぬ機緣にや笛の音胸にひし〳〵とそゞろにゆかしく思召し如何に女房たち。今の音色

お聞給ふか。扨面白やちつとちと聞かまほしくとおりければ。女房共承り何をかなと存じしにそれ此方へと表に出で。只今鳴らせし物の音は御達達が吹きけるか。何處の人にて何といふ鳴物ぞ。妃様より御聴聞あるべきとの仰なり是へ〳〵と請ずれば両人共入り給ひ。詞我々は薦僧と申して日本の修行者なり此の竹は尺八とて我等が法の掟にて。地修行の袖のならはしなるが。南風に放されて。此の島に寄り候妃様の御所望ならば。いで一曲と打連れてオクリやがて〳〵奥にぞ入り給ふ。瑠璃姫立出で見給へば。懸しゆかしの中將殿弟の太刀丸。

あらぬ姿に痩せ黒み目も當てられぬ有様なり。こはそも誠か夢なるかと三人目と目を見合せて飛立つ程に思へども。人目の關に忍び音の袂を絞らせ給ひけり。女房達不審をたて御涙の風情いぶかしさよと言ひければ。瑠璃姫さあらぬ振にもてなし。いやなう不審尤なり日本の人と聞きし故故鄕ゆかしく。思はず涙をこぼせしぞや。あの修行者に酒を盛り。方々も酒宴して憂きを凌がんそれ〳〵とありければ。承り候とて銚子土器携へて暫し酒宴ぞ始まれり。中將も上下さざめき打交りさいつさゝれつ飲む程に皆々打解け

各臥所に入りにけり　詞しすましたりと人人ははら〳〵と走り寄り。三人手と手にすがり付き　スヱテ　泣くより外の事ぞなき。詞中將仰せけるは好き時分なり敵はいづくにあるいざ斬入らんと宣へば　詞　瑠璃姫暫しと押鎮め。此の國は人間ならず皆眷屬は外道にて宙を翔り水を潜り睫毛に巣をくふ術を得たり。其の上安國帝の御剣を持ちたる故。眷屬崇まへ奉る。さり乍ら下道共は遙か彼方の無人島といふ處へ猪狩に參りしなり。詞よき折柄にて候へば密に討取り給ふべし。いざ此方へと奥に入り障子をそつと明け見れば。宵の酒に醉ひくたびれ前後も知らず臥してあり。人々悦び太刀拔きそばめ左右に立ち如何に安國。藤原の實方菊池太刀丸なるが大事の敵を持ちながら。かく不覺には見えけるぞといふより早く實方は太刀振上けて弓手の肩先より馬手の乳の下かけて切付け給へば。太刀丸も親の敵覺えたかと首宙に打落し。返す太刀にて止めを刺し。さあ今こそ本望遂げてあり片時も早く此方へと。川邊をさして出で給ふ。然る所に　詞　眷屬の大將大とん外道は内々姫に心をかけ折もがなと思ひ無人島より只一人。密に忍び歸りしが。詞姫君を見るよりも願ふ處と悦び。稻妻の如くにて姫君を引立て行く。人々大きに驚き。騒ぎ。跡を慕うて三重へ追つかけ行くさる程に。詞大とん外道は姫君諸共神通自在の風車に乘り虚空遙に翔り行く。詞然る處に有難や愛染明王虚空に現れ出で給ひ矛を振上げ大とんが眞先に向はせ給へばこは敵はじと取つて返し逃行く處に。實方中將明王の御加護にや。夢ともなく虚空の風車に乘じ給ひ跡を慕うて三重來りしが。姫の車に乘移りやがて肩に打かけて。元の車に移りしは不思議なりける三重へ次第なり。其の後に明王は降魔の矛をおつ取りのべ大とんが胴中を十文字に突き貫き。くるり〳〵と振廻し高々と差上げて。利劍を拔いて首ふつつと切落し。奈落に沈め猛火は光を放つて失せ給ふ。佛法不思議有難き。時刻移さず都より御迎ひの人々雲霞の如く馳來りさんざめかいて御歸洛ある。千秋萬歲萬歲々々めでたしとも申すばかりはなかりけれ。

竹本義太夫直正本

貞享二乙丑歲正月吉日　新　板

門出八島

扨も。その後。詞釋迦に提婆あり孔子に盗跖あり。國に強敵あらずんば名將の譽何を以てかあらはれん。されば亂は太平の始め。文武盛の源氏。九郎御曹司義經は。金賣吉次に從つて陸奥に下向あり秀衡が書狀にて賴朝に加はり　平家の逆徒を鎭めんため。奥勢十萬餘騎を引率し御進發とぞ聞えける。凡そ三軍をつかさどる御器量。天然其の德そなはつて。そなへ行列貝太鼓。地蹤々淒々として　オクリ金鐃。皆鳴る御陣押。地牧童樵夫も頭を垂れ。草木も枝をかたぶけり。詞爰に荒れたる藁屋が軒。奥も限なく見入り給へば。六尺ゆたかの大男。矢の根を磨ぎてかたへには。地二八の娘襤褸さす。　針の孔も指貫も　ハヅミフシ手きき手づまの手もたゆし。詞武藏坊辨慶きつとみて。門外につゝ立ち。今日我が君の御出陣五十四郡の民百姓。渇仰申す折柄。なさめ過ぎたる振舞慮外千萬。罷り出でて一禮せよと呼ばはれば。彼の男くつ〳〵と笑ひ。いやはや長生すれば新らしい事を聞く。主を持たぬ浪人なれば。我が君と崇めん人天が下にはおぼえず。具足着たがこはくもなし。誰に恐れてへちまのかは。わが寺の佛尊いな。志田の三郎勝平といふ浪人者。此の女は我が妹。身こそ貧なれ今日まで人に禮せぬ此の男と。兩足ぐつと投げ出し　カンオトシ膝を叩いて居たりけり。詞辨慶こらへす。詞ふみ折らんと駈け出づる。義經馬より飛んでおり。あゝ暫く〳〵。志田の三郎とは聞及びし源氏譜代の勇士ぞや。我こそ義朝が八男よ。西國へ同道せん。力をそへて得させよや　オスオトシひらに賴むと宣へば。詞志田兄弟走り出で。扨は源氏の御末かと手をつかねて申せしは。誠に源氏の大將の賴むとの御諚。御供申すべく候へども。親にて候志田の兵衞。御父義朝公に仕へ。品々の高名恩賞あるべき所に。讒者のわざにて本領を召上げられ候。父が常々申せしは。源氏の賞罰暗き故。讒者は榮え忠臣は衰ふる。カンイロあゝうらめしの義朝や。此の怨は子孫まで。忘るゝなと申しおき。腹切つて相果てし。親の一言骨髓にこたへ默されず。かく申すとて神八幡平家に從ふ所存なし。土を嘗め水を飲み。餓死せんこそ孝行とも義とも我とも申すべし。御諚を背くにあらねども。御奉公は御免あれと理をたゞし憚りなくこそ申しける。詞義經至極ましまし。然らば汝に劣らぬ武士を賴んでえさせよ。志田承り。こゝに出羽のなにがし佐藤庄司と申す者の悴。繼信忠信兄弟の内一人賴むと宣はば。よも違背は候まじと。言上すれは御大將。其の義ならば軍兵を龜井片岡武藏につけて先へ打たせ

。佐藤が館の案内には汝を誘引すべしとて。地二手にわくる旗の手に。鎧の錦匂はせて弓馬の。花。こそ。三重へさかりなれ　さる程に。詞佐藤兵衛忠信は此の事を聞くよりも。うれしや義經の御供し西國に赴き。高名せんと勇めども。兄弟の内一人とあるからは。兄の繼信御供を望み。よも某は上すまじ。えゝ屈竟の分別あり。是非某が上らんと　オクリ志田が。庵に案内し。詞四郎兵衛忠信お見舞申すをいひ入るる。妹の早姫立出で。兄上は義經公の御供し其の方へといふ。忠信小聲になり。いや三郎殿に用はなし。御身に内證を知らせ申す事のあり。承れば兄繼信とは人しれず夫婦のかたらひ淺からぬ中と聞いてある。何とさうかといへば。早姫顔を赤め。御存じの上はつつみ申さんやうもなし。はや七月の身も重し。して此の事が顯れしか。いや〳〵さやうの義ではなし。義經公より兄弟の内一人具せらるべきとの仰につき。兄繼信軍の供

を望まるゝ。おかぬ別れは武士の道ともおぼさんが、弟の口から兄の惡性申しにくき事ながら。こゝをよつく聞き給へ。繼信上方へ上りなば國へは討死と僞り。京女の妾をこしらへ軍は半分色あそひと、家來信夫の小太郎に談合有りしを確に聞く。しかれば二世の御契すてられ給はん笑止さに。そつと内證を知らせ申す。こゝは平に留め給へ。軍の供には弟の役。不肖ながらは某が參らう迄と　ハツミフシ眞顔になつてぞ語りける。詞女心のはや娠涙も胸に保ちかねよくぞお知らせ恭なや、さやうの事を聞くからは縋りても引止め。西國へやりはせじ。何とぞ繼信殿に　ウレヒフシ逢はせてたべと。泣きければ。詞然らば某逢はせ申さん。、何かなしに取付いてめつたむしやうに泣き給はば。岩木を別けぬ繼信思ひとまるは必定ぞ。たゞ泣き給へ〳〵とつれて宿所に　三重へ歸りけりかくとは知らず。詞三郎兵衛繼信氏神の社に詣で。幣奉り禮拜し。源氏の大將

御出陣。願はくは某を御供に具せられ。神力を以て高名し。譽を殘す雲の上。南無や紫明神と　カンオトシ肝膽碎くゆふだすき。詞優にやさしき女の聲。忌垣の内より繼信樣繼信樣と呼びかくる。はつと驚き何者といへば。立出で袖をひかへ。いや申しお氣遣な者ではなし。妾は當社の神職行春が娘、幾代と申す者なるが。御舍弟忠信さまと。忍びあひにあひ惚の　カンオトシしんぞいとしさかはいさは。地命も磯の海を越え。山を隔てて西國へ。カンフシ義經樣の御供を。望み給ふと承る。詞上方は色所心許なう思はれて。恥をいはねば理がたゝず。悋氣深きは生れつき。兄御さまの御意見にてとめまして給はらば。今生後生の御慈悲と　ウレヒフシ手を合せてぞ。歎きける。詞繼信折に幸ひと。おゝ道理々々。さりながら忠信血氣盛にて兄が意見は聞入れず。御身縋りてかきくどきひたすら泣いてとめ給へ。たゞ泣き給へ〳〵と。教ゆる處へ忠信早姫來

りしが。あれこそ兄よ弟よと。二人の女を面々に隠し置き。やあ兄ぢや人。ふゝ忠信かと。互に知らぬ挨拶は ハツミフシ をかしくも亦殊勝なり。詞 暫くあつて繼信。此の度わが君西國の御供。兄弟の内一人との御諚某罷り向つて高名すべき立願に。參詣せし折から汝は何とて來りしぞ。忠信聞いていや／＼此の度は某御供申すべし。總領の身が討死せば。誰が家を繼ぎ申さん。總じて國を守るは上たる役。一騎武者の働は下たるものの役なれば。是非忠信が御供とぞ申しける。繼信聞きもあへず。おことが詞も一理あり。さりながら其方は若き者なれば核固まらず武者なれず。晴軍覺束なし國に殘つて父母につかへよ。今度は繼信向はうずといへば。忠信氣色をそんじ。秋の木の實などにこそ核固まるといふ事あれ。若き者にて晴軍がなるまいとや。これ勝負は老少によるべからず。兄とは生れ給へども晴軍はあぶなもの。只某を上せられよと ハツミフシ あざ笑うてこそ申しける。詞 繼信腹に据ゑかね。晴軍あぶなしとは。汝は某臆病すべき者と思ふか。否ゝ臆病は目の前よ繼信いよ／＼腹を立て。臆病者の弟なれば汝はなほも臆病ならん。なう恥かしけれど此の忠信は臆病すべき絆なし。貴殿は國に絆されこそ臆し給ふらめ。やいさ狼狽者國に心がひかれんとは。我が親は汝も親。もつては同じ理よ。なう兄ぢや人親に親はかはらねど。此の忠信は志田の三郎が妹。早姫といふ絆持たぬといふ。繼信はつと思へども。さあらぬ顔にて。ふゝそれは誰が事身に覺えなしといへば。忠信ふつと吹出し。必定覺え候はぬかと。姫の手を引いて出でける時。繼信立つて逃げんとす。早姫すがり引止む。忠信悦びそりやそこが泣き所。泣け／＼と呼ばはれば 色 西國へはなう ハヅミフシ やりませぬとぞ泣き給ふ。詞 繼信赤面しながら。幾代／＼と呼びければ。する／＼と走り出で。忠信様妾を捨てて西國へ行かんとは。お心も變りしか。カン オトシ どうでもやらぬと縋り付く。詞 繼信そりやそこが泣き所。早姫泣け幾代泣けと。兄弟顔に袖覆ひ。花に鶯 時鳥。一度に持つ姿かや ハヅミフシ たゞ泣け／＼とぞばかりなり。詞 かゝる處へ父の庄司。君を供奉し志田もろ共來らるる。兄弟驚き二人の女を隠さんとす。あゝ暫く苦しからずと押しとどめ。庄司申されけるは。やれ子供よ。君を御供仕り是まで來る事餘の儀でなし。兄弟の内一人頼みたきとの仰を蒙る。弓矢の冥加庄司が老の悦なり。兄か弟か何れ剛なるを參らせんと思ふ所に。兄弟義を重んじて爭ふ心底。庄司が子供は剛の者。ヲゝ頼もしし／＼と ウレヒフシ うれし涙を。流さるる。詞 扨汝等は忍び妻を持つたるとや。情に迷ふはよき兵の癖ぞかし。二人の上臈嫁に取り。子供と思ひ慰まば。庄司は老の樂みあり。此の上は兄弟共に御供申せとありければ。繼信忠信悦びて ハルオトシ 勇む心のゆ

のしさよ。詞庄司重ねて申さるゝは。彼等兄弟心は剛にて弓矢操ひ打物取り。馬引寄せて打乗つて敵に向ふその時は。千騎萬騎にも劣らぬ者にて候へども。幼きより主を持たず。奉公の道を存ぜず。我が君へ任せ參らする。庄司が心を察し有つて。御目をかけて召使はれ下さるべし引廻してたべ朋輩達　扨汝等も今が親子の別れなり。父が教訓を保つて君に不忠仕るな。今日よりしては庄司を親と思ふなよ。親にも主にも君一人。一命を奉り。身はなき物と心得て。よき敵と見るならば押並べてむずと組み。首取つて名を上げよ。仁義を知らぬは猪武者。兄は弟を介抱し。弟は兄に背くなよ引くとも兄弟つれて引け駈くとも兄弟つれて駈けよ。兄を討たせて國許の父や母が戀しいとて。弟一人歸らうと思ふな。弟を討せて兄歸るな。老いたる親さへ思ひ切る。今を盛りの若武者ども心を殘すな。今日の門出を末期と極め。潔く討死せば。生きて親子の對面より。猶しも嬉しかるべきと。涼しげには勇めれども。さすが老後の親子の別れ。溢る涙堰きあへず。かくいふは不便さ故。花のやうなる若者を。死ねとは更に思はねど。御前をも打忘れ。兄弟に縋り付き暫し。ウノルフシ消え入り泣きゐたり。地御大將を始めとし。在合ふ諸武士一同にハヅミフシ袖を絞らぬ者はなし。詞然る所へ入間郡の武者所。安西の彈正太郎氏繁。あわただしく馳參じ。扨も平家の一門君御發向の由傳へ聞き。四國八島に立籠り。軍の用意眞最中と承り候。片時も早く御出陣然るべく候と大息ついで申しける。判官聞召し。をゝ尤さぞあらん。さりながら幾萬騎こもるとも物の數とは思はぬなり。如何に彈正。是なる者は佐藤庄司が子息。三郎兵衛繼信。四郎兵衛忠信といふ兄弟なり。向後心を合せ。此の度の合戰潔く勵むべしと懇ろに宣へば。彈正承り。扨は聞及びし御兄弟にてましますよな。誠に御器量と申し遖お侍候。されば軍は勢の多少によらず。只一心の勵み第一とかや申し候。貴殿達は未だ不軍にて此の度が初めならん。構へて〱不覺ばし取り給ふな。さあれば君迄の御恥辱ぞと人もなげにぞ申しける。兄弟むつとせき上げしが。押し鎭め。いかにも〱御仰の如く。我々兄弟はつひに軍とやらんは如何やうに働き候も曾て存ぜす候。併しながら貴殿の指圖を以て隨分勵み申すべし若し又軍の次第により先駈生捕分捕高名は仕り勝にて候間。必ず御氣にかけられなと　カシオトシをこがましくこそ申しける。詞彈正氣色を損じやお兄弟。昨日今日侍に交り戰場にて高名せんとや扨も口は重寶な物。いはれたり〱。よし〱いらざる先駈致さんより。只我が下知に任せられ。命大事にせられよかし。惡き意見は申さぬと　カンオトシ嘲笑うてこそ申しける。詞兄弟今は堪りかねをゝこの上は何が扨御邊の下知に任すべし。御出陣の門出なれば兵法稽古仕り。

御傳授に預らんいざ参りざふと太刀に手をかけ詰めかくる。彈正も飛びしさり。刀を抜かんとしける時。志田中へ割つて入り是是此の稽古某貰ひ申さん。最前よりの詰開き皆君を大切に思はるゝ故にてあり。侍たる者はさ程の人ならでは戰場へは出でがたし。をゝ頼もしし〳〵と。わざと座興に取りなして事ゆゑなく鎭めしはハルオトシ誠に文武の侍なり。詞判官御覺じ志田が料簡一々以て至極せりいかに雙方の者ども。構へて意趣を殘すべからず。此の度の出陣は義經が一生の晴軍ぞ。隨分勵め面々とカントメ勇みにいさんでそれよりも。西國さして發向ある門出めでたし千秋樂。目出たかりともなか〳〵申すばかりはなかりけり。

第二

さるほどに。詞九郎判官義經。頼朝卿の代官を蒙り一の谷を攻め破り八島に御陣をめされける。奥州勢の彈正太郎氏繁は。佐藤兄弟に意趣ある中。我が手の者を役所に集め。扨も此の度源氏の勢。我等を始め大名小名歴々多き其の上に。何を不足に佐藤兄弟召出され。此處にては繼信彼處にては忠信と人もなげなる侍だて大將も目があかず。見聞くも無念千萬なり。何卒ひけ付け恥辱をとらせ。小言吐かば打殺せ。彼奴等一騎當千と御頼みある上に。入ざる忠を勵み犬骨折つて鷹にとられな。軍せんよりは佐藤兄弟討つてとれと。濱瀧をさして下りしはキホヒ三重〽振舞なり。ユリ引フシげに思ひても。地思ふにおかぬ親子の中。詞いたはしや佐藤庄司。繼信は小櫻縅。忠信は伏縄目の鎧を常々好みしとて。俄に縅させ。信夫の小太郎同じく小二郎兄弟に取持たせ。地二人が方へ送らるゝオクリ親の心ぞあはれなる。地霞と共にたつか弓。八島の磯に着きけるが。陣所々々を見渡せば。竹束亂杭焚き捨てし。所所の篝火も。夜は燃え晝は消えつゝうす煙。詞陣屋の煙立ちつゞき。詞方二三里が其の間。逆茂木きびしく引きたれば。佐藤殿の御陣所は。いづくと問はん便さへ。地浪打際に來る人を。蠶かと見ればさもなくて。地十六七の小童の。腰に差いたる山刀。さすが品よく大人びて。姉とおほしき振袖に。持つも似合はぬおきなひやハツミフシ草鞋賣には惜しかりし。詞信夫兄弟これ子供。草鞋買はんといへば。いや是は武者草鞋。旅人の御用にはたゝずといふ。ふゝ陣所に商するからは。あれに見えた陣屋々々誰々と知りつらん。概畧語つてきかせよかし。やすき間の御事なり。毎日商致す故御陣所役所は存じたり。教へ申さん聞き給へと東西南北指さして。ねんごろにこそ語りけれ。

役所づくし

地あれ〳〵東の尾上より。南の岡の小松原。雪の山かとひた白のハツミフシ幕を其の麓川。空堀ほつて高櫓。風にうづまく白旗の。かげに軍兵兜をならべ。地鎧の袖をつらねしは。御大將の御本陣。其の旗本に打續

き、抱茗荷抱稲。花うつぼ。浪に兎の印こそ。亀井片岡伊勢駿河。獨鈷に輪寶付けたるは。常陸坊海尊。袰房は右巴。一つ巴三つ巴。五つ輪違六つ雁金。七つ道具を立てたるは。大將の膝元さらず武藏坊辨慶の役所とこそは教へけれ。前は逆茂木巍々として。井樓高く揚げさせ。用心嚴しき勢は先手の大將佐々木殿。揉竹垣に折木戸打ち。ばかりを立てたるは。旗本の母衣大將熊谷。殿の陣所なり。川越が物見小屋。松にかけたる。太鼓鐘。明けゆく床を驚かす。雲に朝日の徽こそ。軍大將畠山。手勢は五千餘騎とかや。揉一重菱入子菱。花菱松皮三階菱小笠原の黨なり。二つ引の大幕は。平山の陣所。澤潟は小山の一瀬立波は小栗黨。北條は後備へ。右陣左陣は土肥三浦開き扇の旗を靡かせ。騎馬の武者二三十。御用心と呼はつて役所々々を觸通るは。佐竹の東小屋巡り。濱の手は鎌倉勢。揉山の手は都勢、垣楯持楯雌羽につき並べ。徒武者騎馬武者弓弦を濕し。すはといはん聲の内。驅出でん氣色にて君を守護し給ひける。誠にゆゝしう候ひし。頃は彌生の空ながら秋に。さえたる月に星。千葉の介の役所なり。滋目結は結城の七郎。龜甲は佐原の十郎。三本團扇鱗形。風にもまれて上り藤。久下り藤揚羽の蝶武藏勢相模勢一二の備と聞えける。揉真中の軍兵は、十萬餘騎を二手に分け陣所は大手搦手。中に立てたる旗の紋。雪折れ竹に群雀出羽の庄司が二人の子佐藤繼信忠信は。日本無雙のつはものと敵も味方も隱れなし。其の外浦々山々も皆白妙に白鷺の群れゐる松見れば。源氏の旗を靡かする多勢は限り知られずと殘らず教へ語りけり。信夫兄弟手を拍つて。揉ちよく覺えたり我々は佐藤殿の家人。父御の方より御兄弟へ此の鎧を奉らせらる。とてもの事に案内してくれぬかといへば。娘悦ぶ色見えて。御案内も致すべし。揉なれ／＼しう候へども。我々は此のあたりの狩人。鷲尾と申す者の子供なるが。源平の兵亂にて獵もかなはず。親を養ふ營みに習はぬ草鞋賣り候。あはれ殿樣へ御奉公させてたべと言ひもあへぬに信夫兄弟。是は幸ひ戰場には一人も便りぞや。吉左右／＼我々に任せよ。よき奉公に肝煎らんと連れて陣所に急ぎけり。明くれば三月十八日。大將軍の御服裝。赤地の錦の直垂。紫裾濃の御着長。鐙ふんばり鞍笠につつ立ちあがり。一院の御使。撿非違使五位の尉。源の義經と高らかに名乘つて寄せくる平家の兵船を今や／＼と待ち給ふ。佐藤兵衞繼信は父が贈りし小櫻縅。綿上高に着流し。今朝まで着せし鎧をば鷲尾に打ち着せて。馬を乘り捨て、御馬の前に畏る。大將御覽じかれは如何に降人か。いや是は繼信が弟にて候。御馬の前にて討死させさせ申さ

ん罵召連れ候と申せば。判官重ねて。繼信が弟は忠信ばかりと覺えしに心得難しと宣へば。繼信謹んでさん候。彼は此の邊の狩人鷲尾の三郎と申す者。人と生れし思ひ出に侍に交はりたきよし。彼が姉たつて嘆き候故。色しらぬ東夷の繼信め。志にほだされ兄弟の約諾仕つて候。あはれ御馬の口に召付けられ候はば。有難く候はんと申し上ぐれば。義經殆ど悦喜あり。遖器量の若者。繼信は果報者あやかりたし。いかにも某召使ひ弓取となすべきが。とても事の序なれば。姉はどうぞなるまいかと。戯れ給へば。鷲尾は鐵の袖を顔にあて。地恥かしさうなる武者振にハヅミフシ敵も太刀をば捨てぬべし。詞安西の彈正太郎後陣よりつつと出で。繼信殿の御弟お近付になり申さん。やあ是は此の頃陣屋にて草鞋賣つたる童なるが是が貴殿の御舍弟か。はてよい弟をもたれたり。向後我等も得意になり。草鞋あつらへ申すべし。軍中に用ふるからは。

百里も二百里も歩まるゝよき草鞋が求めたし。値にはかまはず。明暮の中なれば五錢三錢は。只も取らせてやらうわとハヅミフシさも惡體にぞ申しける。詞繼信はむつとせきあげしがをゝ易い事易い事さりながら百里二百里穿く草鞋何の用に入り申す。ふゝ合點たり〳〵。臆病風に寒氣立ち。大敵に追つ立てられ本國へ一飛びにカンオトシ逃げ行くための草鞋か。詞をゝやすい事といへば。彈正重ねて是さ何にもせよ。我が脛は人に變つて逞し。是に合せて作つてくれと。土足を繼信が膝元に踏出す。繼信太刀に手をかけ。ほゝ見事なだんびら臑。此の足にて逃げたらば天竺までも一飛びならん。養老骨切取つて形に合せて作らせんと。太刀を拔けば彈正も飛びしさつてずばと拔く。土肥佐々木畠山。辨慶なんど左右にすがり。詞是は不吉と顰むれども。放せ〳〵とねぢあふ所に　平家の兵船漕ぎつれて鬨の聲をぞ三重〳〵あげにける其の隙に同士いくさも。

やうやう治め鎭まりぬ。詞三人乘つたる小船磯近く漕寄せ。大將船端に立上り。一品式部卿。葛原の親王九代の後胤。能登の守教經。源氏の大將義經に見參の印に。小兵ながら中差を參らせん受けて御覽候へと大音上げてぞ申さるゝ。判官陣頭に駒かけすゑ。ヲゝもの〳〵し。能登殿の御弓勢關東迄も隱れなし。直中に受留めて。九郎が鎧の札試し度う存ずるなり。こゝの程が所望ざふとカンオトシ胸を叩いて宣へば。詞すはや源平兩大將。安否はこゝぞと敵味方。片唾を呑んで見る所に。小櫻縅に鹿毛の駒。味方の陣を一文字に乘分けて。矢面に駈塞がり抑も是は出羽の庄司が總領。佐藤三郎兵衛繼信とは我が事なり。本國を出でしより露命は君に奉り。屍は八島の魚口に與ふ。能登殿の大矢を某試み仕り。閻摩の帳の巻頭に訴へん。矢壺は君と同然と。弦走を二度撫で。につこと笑うて待ちかけしはオトシ大將眼を驚かす有樣なり。詞教經は仁ある大將

感じて流石放ち得ず。菊王しきつて奨むれば又けにもとや思はれけん。五人張に十五束。からりとつがひ引きしぼり。暫しかためてえいやつと切つて放せば。誤たず繼信が胸板に。羽ぶくらせめてはつしと中り。血煙かばつとたつ。繼信弓矢打番ひ。答の矢を放さん鬱かんと二三度四五度しけれども。魂くらみ息もきれ。左手の鐙蹴放つて。右手へかつぱと落ちけるは カンオトシ 無慚なりける次第なり。詞菊王は首取らんと下立つ所に忠信遙に放つ矢が。左の膝にずはと立ち撞と伏すを能登の守。舟より飛びおり菊王が。上帯攫んで船底へ投入れ給へば。大力に打付けられ。微塵に碎けて死してんけり。地是を見て平家の軍兵。舟を乗捨て我先にと。陸へさつと打ち上る。詞兄繼信が孝養と忠信眞先かけければ鷲尾三郎信夫兄弟彼等につゞいて。源氏の兵駈けちがへ入れちがへ揉みにもうでぞ 三重 戦ひける軍半ばに。武藏坊辨慶は。詞首一二三十珠數繫ぎにして引きずり來り。討たれし者の追善に首珠數を思ひ立ち。今少し足らざれば。奉加に入つて給はれと。長刀取りのべ切つてかゝれば。寄手はさつと引いたりける。詞えゝ吝嗇い事。後生に何が惜しいぞと。逃ぐる敵を追ひ廻し。ねぢ首打首胴ぎり筒抜。牟禮高松を縦横に。おつ返しおひ戻し。討ち立て〳〵斬り廻るは凄じかりし 三重 勢ひなり 地浪に漂ひ失せしもあり。人馬にせかれて死するもあり。かなはじと平家の勢。飛乗り〳〵舟は沖。陸は陣所へさつとひく〳〵。詞辨慶は立歸り。討取る首を繫ぎそへ〳〵。をゝ是でこそ珠數一連。百八煩惱作らんより。後生が大事南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と念佛し カンヽ 本陣さして歸りける。遍韋駄天婆羅門天 鍾馗大臣獅子王の。あれたる姿もかくやらんと皆感ぜぬものこそなかりけれ。

第　三

かくてその後。詞夕霞八島の浦の松暗く。群れゐる鴎立騒ぎ。地と渡る舟の櫓の音。しんしんとして物淋し。鬨の聲矢叫びも ハ サミツン 磯打つ浪に引きかへて。地替りかはれる境界は。明日の身の上思はせし。哀れ催す沖つ風。磯山櫻かつ散るらん カンカリ 心を碎く種となり。地いともの凄き浦曲かな。詞繼信が忠勤義經感じ思召し。今一度對面せばや。尋ね來れと忠信仰を蒙りて。信夫兄弟左右に具し。泣く〳〵御陣を出でけるが。いざ立ち別れ尋ねんと。地鹽屋の辻より主從は三方へこそは 三重 わかれけれ。ヲシまだ宵闇の。地潮ぐもり。浦さび渡る春の夜は。心ぞ秋の夕なるに。淵崎の堂の西東。牟禮高松の北南。奥州の佐藤殿やおはするか。繼信殿やおはするかや。君よりの御諚にて。弟の忠信が。御迎ひに來りしと。地静に呼うで通れども。答ふるものこそなかりけれ。今宵始めて一人行く。八島の浪の音までも。昨日に變る心してなう繼信殿兄上と。呼ば

んとすれど聲立たず。フシ峰にひゞくは松の風。地苫屋の方にかすかなる。手負の聲の聞ゆるを、嬉しやそれかと走り寄れば、群れて友呼ぶつま千鳥。ぱつと立つては亂れ行く。後の山に聲するは、信夫か呼ばふこだまにて。繼信とも佐藤とも、答ふる者はなかりけり。今ぱ力もつき弓の。ゐるかひなさに駈けめぐり。なう兄上はおはせぬか、繼信殿やおはするかと、聲をはかりに呼立て呼立て ウレヒフシ又伏沈み歎きけり 地むざんやな繼信は、詞雜兵に急所を射られ。大事の痛手といひながら死にもやらず。片割舟の片蔭に漂ひ伏してゐたりしが。弟の聲と聞くからに。地痛々に這出で。忠信かと聞くも嬉しく走り寄り。詞未だ存命ましますかと。縋りついて抱き起し。額をおさへ御傷はいかにと問ひければ。地今を限りの繼信は。我が身の事はさて置いて。君は如何渡らせ給ふぞや。御身は傷をも負はざるか。味方は何程討たれしぞと。絶えゆく息の下にさへ、弓矢取る身の一言と傳へ。ノルフシきくだに哀れなり。地忠信涙をおさへ。詞君も我等も恙なく、軍は味方の勝利なり。御供申せとの仰なり。具し參らせんといひければ。おゝ嬉しし。最期に君を拜し御前にて死すべきぞ。つれて參れといふ所へ。信夫兄弟駈來り。兎角しつらひ洲崎の堂の破れ戸に。地繼信を抱き載せ。前を忠信後は信夫が舁き添へて、涙にしをれ。たどたどと行くや。東の中三重〽山の端に。フシ月ほのぼのと 出でにけり。地鷲尾の三郎は。繼信が志血をこそ分けね 兄弟と ハツミフシ結ぶゆかりの草の縁。詞死骸を取置き首を敵に渡さじと。地せき來る涙も武夫の。八島を尋ね巡りしが。面は血に染み俯伏しに。伏したる手負のありけるを。詞是やはと能く見れば、兜の錣草摺まで散り積りたるさくら花、鎧の絲を埋みたり。涙に曇る朧月小櫻縅と心得て、是こそは繼信殿と ウレヒフシ抱きついてぞ。歎きしが 地此の世ならぬ御厚恩。最期のお供と存ずれども。高名もせず相果てば。世の人口も候へば。よき敵と討死し。やがて追つ付き奉らん。今よりは君なくして。誰にか見せん我が姿と。指副拔いて前髪切り。口おし割つて含ませ。二世の契りの印ぞと ウレヒフシ又さめ〴〵と。泣き居たり。詞かくとも知らで彈正太郎。繼信を殺し欝憤を晴さんと。夜半に紛れて歩きしが。この體をきつと見て。やあ鷲尾か、君よりの御諚には、繼信深手を負うたる由。敵に首をとられ見ぐるしき死をさせんより。腹切らせ首討つて參れとの御事なり。そこ立退けと太刀ふり上ぐる。鷲尾手負に立ち掩ひ。カン詞あゝ暫く〳〵。深手負うたらば看病せよとこそあるべけれ。腹を切らせよとは心得す。殊に忠信某をさし置き。遺恨深き貴殿に仰付けられんやうなし。死骸は我々片付け申すといへば。扨は御諚を輕んずるか。いやさ何にもせよ繼信か首御邊には討たせぬと云ふ。えゝわつ

はめ小癪者と。打つて掛るを受けれども。さん〴〵におつ立て。走り返つて首打取り。行方知らずなりにけり。鷲尾續いて立ち歸り。南無三寶。敵にさへ取らせぬ首味方に取られし口惜しさよせめて死骸を葬らんと。引起せばこは如何に。鎧に付いたる櫻花。ぱつと散つて小櫻と見えしはもとの深山木や。黒革縅の鎧なり。袖標をちぎつて見れば能登殿の郎黨。筑紫の孫六安國としるせり。ふゝ扨は繼信殿にてなかりしな。まづ嬉しと

さして行く鹽屋のか。たへぞ キホと三重へ 急ぎける既に夜半の時も過ぎ。詞 御本陣には義經諸大名列坐あり。繼信が噂のみ如何なりける不便やと。大將心を惱し給ふ。所へ佐藤繼信を召具せしと言上すれば。それ此方へと寄せさせ給ひ。御膝を枕とさせさせ。扨も〳〵不便の者の有樣や。いかに繼信。おことは義經が命に代り最早死せしと思ひしに。生顔見たる嬉しさよ。心に懸る事はなきか。國許へいふ事あらば何事なりとも申しおけ。諸侍は多け

ハル二國とも手とも栄を。父の庄司が頼みし故、義經ら今日迄は。命を二つ持つたりしが。只今汝に別れん事の便なさよとウレヒフシ御落涙ぞ有難き。詞稍あつて繼信眼を開き。名殘惜しげに御顔を見上げ見下し涙を流し。カン忝しといふ聲も。しどろに縺れ微かなり。詞忠信涙にくれて居たりしが。手負に力をつけん爲。ええ言ひがひなし繼信殿。權五郎景正は鳥海に眼を射られし。七日が内に答の矢を射返ししと承る。それ程にこそあらずとも。などや御前にて返答は宜はぬぞ。忝くも枕許は相傳の我が君。弓手は秩父馬手は和田。土肥佐々木武藏坊。かう申すは弟の忠信にて候とウレヒフシ聲をあらゝげ。言ひければ。地繼信は枕をもたげ。詞何條其の景正に劣るべきにあらねど。三國に隱れなき。能登守の大矢を直中に受けとめて。地繼信なればこそ物をば申せ。敵味方の目を醒し。しかも我が君の御膝にて死する繼信が。何に心がひかされて。

いふべき事のあるべきぞや。御凱陣の御供して。奧州に下向せば。繼信こそは我が君の御用に立ち。源平の目を驚かし死したれば。雪折竹の道まの。フシ世を歎かせ。給ふなと。隨分孝行つくせよゑ。形見は日頃書き置いて。守袋に殘せしぞや。やれ忠信。男は高きも卑しきも。若きとて人ゆるさす。短氣は未練の初めと知れ。君に不忠存するな。朋輩達に慮外をすな。野中の案山子澪標も。ひとりは立たぬ世の中ぞ。必ず人に憎まれな。やれ妻子をも常々は。ふつつと思ひ切りしかど。恩愛の捨てがたさは。只今のなつかしさ。繼信程の者なれど。かねて覺悟も最期には。變るものとは今ぞ知る。是もおことが手本のため。語り置くとばかりにて。絡え入る眼の中よりも。涙をはら／＼と流し。いふべき事も是はかり。暇申して我が君さま。是迄ぞ弟。秩父和田殿武藏殿はおはせぬか。忠信に目かけてたび給へ。南無や西方彌陀如來と。手を

合せ目をふさぎ。惜しかるべきは年の程。二十三のまほろしも。八島の磯の浪の泡。消えて果敢なくなりにけり。忠信わつと取りつけば。君を始め奉り。近習下部に至るまで。一度に是はと聲を上げ惜み。ノルフシ嘆くぞ道理なる。地判官御涙の下よりも。詞捨果てし身もながらへて。あればある世に如何なれば。惜まるゝ身は止まらぬ。地いかなる緣にか主となり。いかなる者が家人となり。かゝる哀を見る事よ。父義朝は知らねども。兄鎌倉殿蒲殿に別るゝも斯くあらん。來世も必ず主從ぞと。忝くも繼信が。死骸に縋らせ給ひければ。鬼を欺く辨慶も。むせかへり／＼ウレヒフシ聲も惜まず。歎きける。詞かゝる所へ彈正太郎あわたゞしく馳け來り。すは御大事こそ出來候へ。鷲尾の三郎は繼信に離れ。味方に力なき故に平家へ注進と存じ候。其の仔細は只今敵の忍びの者某討留め候所に。却つて某に敵對をいたし既に太刀打に及びしを。兎角切拔け

敵は討留め候と。以前の首を差出す。鷲尾續いて伺候すれば。人々一度にはらりと立ち。鷲尾を取廻す三郎少しも騒がずあゝ是々御騒ぎ候な。全く左樣に候はず。これ安西。一匹の馬が狂へば千匹の馬を狂はすとは御邊が事よ。某を讒するのみか。死したる敵の首取つて忍びの者を討つたるとはいかに。彈正聞きも敢へず。然らば汝は敵の首取る某に。何とて討つてかゝりしぞ。これ二心の證據といへば。一座の人々鷲尾如何にとつめかけゝる。鷲尾涙をはら〳〵と流し。カン詞申し上ぐるも悲しやな。情の兄の繼信が。行衛を尋ね出づるにぞ。詞心も亂れ散る花に埋れし鎧を繼信が。小櫻縅と目も晴み。嘆き沈みし折柄。繼信が首討てとの御諚なりとて。理不盡に斬り取つて歸り候。證據には其の首の口を割つて見給へ。鬢の髮の候べしと。申しもあへぬに忠信。口押割つて見てあれば。一總の黒髮あり。辨慶物も言はず突つと立ち。安西が綿上掴んで。えゝ畜生劣りの惡人。問答するも無益の沙汰と。木戸の外へかつはと投げ。あお構ふな忠信。構ふな鷲尾。まづ繼信を辨慶が地引導してとらせんと。オクリやがて衣を着しける。詞義經をはじめ大名小名殘りなく。死骸に手をかけ給ひける。其の時辨慶珠數おしもみ。汝元來鐵石の如し。極樂もいや地獄もいや修羅道に逗留し。討たれて死する平家の勢と。冥途にても合戰して。釋迦彌陀の睡をさまし。行きたい方へつつと行けと。陀羅尼眞言くりかけ。ヒヤウシくりかけ〳〵よみかけてカントメ野邊に送れる春の夢。覺めての後の末の世まで。ためし稀なる武夫やと皆感ぜぬ。ものこそなかりけれ。

第四

かくてぞ。のゝち。詞佐藤庄司の御館へは嘆きを憚かり。忠信よりわざと便もせざりければ。庄司一家の人々は夢にもかくと知り給はず。胎内にて別れつる繼信の一子。誕生せしを繼若と名付け。地西國よりの便をば明けぬ暮れぬと待給ふ。詞兄弟はつね〴〵作庭を好みしに。凱陣せば見すべしとて。樣々の木草を植ゑ。岩ぐみ遣水心を盡し。伊香保の沼よりよき松を見立てさせ。數多の人夫持來る。庄司夫婦二人の嫁。庭におり居て見給へば。松の枝血に染まり朱になつて見えければ。人々氣にかけ人夫を召し。いかなる事ぞと仰せける。人夫承りさん候。以前は輕く見えし故。人夫二人にして持ちければ。拔群に重くして取落し。先の夫は何事なく。次の夫が打たれて疵を蒙り散々の事といふ。はや興驚きやお何といふ氣がゝりや。いひ直せとありければ。はて何と御聞きなさるゝ。此の松の木を取落し。先の夫は何事なく。次の夫が討たれ候。定めて命はあるまいと。物が言はせし辻占はハヅミツシ後にぞ思ひあたりける。詞人々興さめ顔を見合せフシ誓し詞もなかりしが。詞庄司縁を取りかへおゝめでたし〳〵。

小松は平家の大將維信が討つたるぞ悦びの酒宴せんと奥に立入り給へども。早姫猶も落付かぬ所詮我が兄の志田の三郎殿を頼み。此の子を連れて西國へ下らんと。旅の營みそこ〳〵に。鶴若をかき抱き。兄の庵に忍び行き。兎角誂らひ兄弟は西國。方へ。と 三重 急がるる。。

はや姫道行

フシ なじみの雲の。地 あけぼのや。月に名殘りて思ふには。前に我が夫後に親。思ひ切る瀬と切らぬ瀬の。中に立ちたる澪標。フシ 此の身をつくす哀さよ。地 されども志田の三郎は 妹に力を添へ。地 鶴若を愛しては。目だに覺めたら背にきつとおひの殿。上カン 地 ねん〳〵ねこね。音せでおよれ。神へまゐろ。說經 行くかた。いづこ水莖の。地 岡の葛原風さわぎ。恨みつゝねびつ世の中の。苦は色かへて青葉山。引馬の野邊に立つ鹿も。妻戀ひかねて歸ろとなくはしをらしき。地 男模樣の衣の關。霞の關の七重八重 ギンハ ルフシ 卯の花まかき藤散りて、地 初時鳥はつ聲を。苫屋の煙一すぢを。二つ割なる常陸帶とけて語りし睦言を、地 あだに那須野の春の夢。消えつゝ夢の通ひ路を。我にな來そかね勿來の關。フシ 花の名殘の 淺香山瀧つ。ノルフシ 流は丈長に。地 ひゞきを風にたゝませて。平元結の黒髮山 分け行く末は武藏野の。草にあこがれ露にねて。今日四五日目に馴れし。富士さへあとに三河の國 地 過ぎて尾張の渡舟 セヽユ 乘りて走りて伊勢もはや。地 とまらぬ關の地藏堂 ヒットリ 似合ひ〳〵のつま授く誓くちすな 地 朽ちばくちよわが中の。戀は埋まぬ土山や。地 近江の湖は春ふけて。水のみどりも影うつる。地 禁りし峰は八王子。廿一社の神所。琉璃シ フシ 猿は山王まさるめでたき。地 御代のしる

しは松本の松は鋭く柳は端手に。竹はしなへて伏見の里。江口神崎西の宮。夕日のにしき唐紅にゆく水をくりくくくるくくと水くゝる。筧づたひの里を越え。川を越えつゝ山越えて。谷を越えても一の谷。又二の谷三の谷。こゝも此の度つはものの兵。カン拍子フシ庫の津より追風の船は三つ羽の八島の浦。浦波かけて蘆ふける柴の庵に。三重へつき給ふ。

詞庵の内へ物申さんとあれば。主の女扉をあけ。此處は源平の合戦未だ治らず。他國の人にはむさと宿は參らせず。何方よりと問ひければ。志田聞いて我々は出羽の國佐藤が所緣の者 軍の次第兄弟が有樣聞かまほしく。遙々上り候といへば。彼の女聞きもあへず。扨は左樣に候か。自は此の所の狩人鷲尾の三郎と申す者の姉なるが。繼信樣の御蔭にて弟は源氏の侍となり。御恩を受けし者候。軍は未だ終らねども。平家は大方滅びし由。繼信樣の御事は能登殿の矢にあたり。果て給ふとやらん聞きしかど。女なれば戰場へ出たる事も候はず。委しくは存ぜぬなり。いざ弟の鷲尾が陣所へ伴ひ。直に樣子を問ひ給へといへば。志田悦び。然らば御供申さんと。早姬繼若庵に殘し。彼の女と打ち連れてカハリオクリ陣所を。さしてぞ急ぎける。地痛はしやな早姬は。繼若をかき抱き主の女の物語。もし誠ならばいかゞせん。あはれ僞なれかしと。たより待つ間の待ち遠く袖も心もくづをれてオクリとろとろの仇睡り。詞枕が上に駒の足並。轡の音に夢さめて庵の内に入り來るを見れば。夫の繼信小櫻縅の物の具かため。しをくとして見え給ふ。なうわが夫か繼信殿かと抱き付きウレヒフシうれし涙を。流せしが。詞やゝあつて能登の守

の矢に當り。御最期とも聞きし故いかにかり棄てしが。是は嬉しき御事とあれば。お既に死なんとしけれども。胎内にまき捨てし情の胤のみどり子に。地心ひかれて潮時の。夜に三度日に三度。軍の隙はなけれども。しばしの暇賜はりて。是迄は來りしと ウレヒフシ又さめ／＼とぞ。泣き給ふ。時に山鳴り谷應へ。天地六種に震動して。大地も裂くる如くなり。詞繼若わつと泣きければ。いや苦しからず。又こそ平家が寄せ來る。一軍して驅け散さん。見物せよやと打出づれば。平家は寄せくる波の面に。大將を始めとし一門の月卿雲霞の如く。カヽ サセメ瞋恚の鋒先我慢の劔。刄を揃へあらはれし。空の景色も引きかへて カンオトシ彌生半の春の色。詞今日の修羅の敵は誰そ。お・能登の守敎經よ。あら物々し手並はしりぬ。其の一念の怨の矢先。思ひぞ出づる壇の浦の。其の船軍今ら赤。閻浮にかへる生死り。海山一同に震動し。五體六根の頭立

つて。生死の海の厚氷とくれば味方むすべは敵走りかゝつてはつしと打つ。打たれてさつと引汐の　又さしくるは五逆の太刀。猶妄執の山廻り スカスフシ消えて。形はなかりけり。詞繼信庵に走り入り。見給ひたるかあの如く。地日夜の軍は繁けれど。妹背の契此の若に逢ひた見たさに　來りしと。繼若膝に抱きのせ ウレヒフシ涙にくれて。見えにけり。詞かゝる所へ志田の三郎鷲尾兄弟。忠信諸共歸らるゝ。早姫走り出で。なうおそかりし繼信殿も待兼ねて御入り候といふ。人々驚き。死して程ふる繼信これにありとは夢ばし見たるか現かといへば。はて最前より御出でにて。繼若を寵愛しまします。先づ入つて逢ひ給へといひけるにぞ。猶しも不審晴れねども。庵に立入り見給へば。南無三寶繼信が面影は小櫻縅の物の具に。繼若ばかり抱き付き。ありし形はなかりけり。早姫是はと縋りつき。なう繼信殿わが夫とはなど叫べど。かひぞなき物の。ノルフシ

哀の限りなり。地早姫涙の隙よりも。くどき給ふぞ道理なる。我も／＼自らほど。世に淺ましき者はなし。假初に馴れ參らせ。三歳に足らで別れし事。宿世いかなる報いぞや。せめて恩愛の好みには。今一度繼若か我が妻かと。などや詞をかけ給はぬ。なう繼信殿／＼と。かひなき鎧に抱きつき ウレヒフシ伏し沈みてぞ。泣き給ふ。地誠に故鄕の庄司殿。詞かくなり給ふとは露しろしめされずし。やがて凱陣し給はんと。地明暮待佗び給ふらん。是につけても過ぎし頃。造庭を綺麗にとて　堀よき松をもとめ給ひ。兄弟が歸りなば。馳走に植ゑ置き祝すべしとて。數多の人夫もち來り。重くて過ちしたりしと。いひし詞の氣にかゝり。心許なう思はれて。取りあへず上りしが。空しくならせ給ふとの。扨は告にてありしよな。生は死の基逢ふは別れといひながら。思へは思へば悲しやと。漣漣。ノルフシこがれ泣き給ふ。地忠信涙を止めかね。詞扨伏見

に[illegible]の其子を恋ひ来り給ふか。[illegible]身にら見えさせ給はぬ兄上と。縋にすがり嘆くにぞ。鷲尾兄弟物に騒がぬ三郎も。小手草摺に取付きて。人目もわかず泣叫ぶ ウレヒノ シ目もあてられぬ。次第なり。詞安西の彌正太郎は御前にて恥辱を取り。武士の交りならざるも。いよ〳〵彼奴等がなす業と一味の悪黨引具し跡よりつけて来りしが。扉蹴破り無二無三に込入りける。心得たりと忠信鶴若を抱きとる。吉川表に驅塞り。ふゝ扨は聞及びし安西な。愁に沈みし弱身をくひ我々を討たんとは。己れは命に持ちあぐんだな。軍せまいと誓文は立てたれども。汝を殺すは鼠ぞと。云ふより早く引掴み押つ伏せ。側なる大石おつ取つて。脊骨にどうど押しかけ。さあ鼠殿ちうともいへと。地獄落しに押しつくれば。五體砕けて死してんけり。猶も進む奴ばらを四方へはつとおつ散す。人々悦び立ち重り。日頃の遺恨を散ぜし事。亡者も悦び給ふべし。いざや

菩提を弔はんと。かねて繼信歸依したる都法然上人を。頼み申さん此方へとて ト〃都路さして上らるゝ。源平両家の物語物の哀は多けれど。かゝる例は上古にも。又末代にもあるべからずと皆感ぜぬ。者こぞなかりけれ。

第 五

かくてそ。ののち。詞四海波靜かにて國も治る時つ風。早打の使として源八廣綱院の御所に馳せ参じ。扨も九郎判官義經朝敵追討の院宣を蒙り。八島壇の浦赤間門司が關所々の軍に平家一門悉く討ち滅し。宗盛父子を生捕り。天下太平の御代と罷り成り候條。内侍所璽の御箱。事故なく都へ入御なし奉るべき由謹んで奏しける。法皇叡感淺からず。廣綱に兵衛の尉を賜はり。源八兵衛と召されける。卿相雲客洛中洛外。近邊の民百姓。源氏の御代は萬々歳。ハルオトシ 千秋樂とこそ祝ひける。詞扨廣綱は御簾近く参り。軍の次第御物語仕れとの宣旨なり。

廣綱承り。宣旨もだし難く候へども。出羽の庄司が悴佐藤繼信と申す者。義經の命に代り討死仕つて候。彼が親族新黒谷にて追善の佛事取りまかなひ候故。義經が代参として回向仕るべきよし申し付け候へば。まづ黒谷へこそと申し上ぐれば。尤も殊勝の至りなりと。御暇下さるれば。廣綱悦び。袖にも餘る身の冥加と退出するこそ 三重へ ゆゝしけれ西の迎への紫雲山。詞新黒谷には繼信が追善とて佛前に位牌を立て。樒抹香華をそなへ。四十八夜も結願にて。[illegible]若参詣あれば。老若男女群集して回向をなすぞ道理や。詞かくて法然上人は御弟子あまた左右に具し。高座に上らせ給ひける。源八兵衛廣綱は義經の名代にて。大黒といふ名馬。判官御秘藏ありけるを。繼信度々所望せしが。朋輩の猜みとて遂に下し給はず。御慈愛の餘りにや。亡者に贈り牽かるゝと。葉のめぐりを三遍牽いてめぐりければ。詞馬も毛を伏せ耳を垂れ ハルオト

シしをれし風情ぞあはれなる。詞暫くあつて志田の三郎參詣す。蓮生座を立つて。やあ御分は志田の三郎か。我こそ熊谷入道よ。命あれば逢うたよな。まづ此の度は力落し。して忠信鷲尾などは見えざるか。三郎志田といへども。更に返答せず。心靜かに回向する。蓮生腹を立て。こりや法師と思ひ近付をもどすか。奉加帳も賴むまい。見ぬ顔するな卑怯者といへば。えゝかしまし。卑怯とは和僧が事よ。此の坊主を卑怯者とは何事ぞ。やれ侍はな。親兄に離れても。死骸を押しのけ軍するを武士といふ。忠信鷲尾は繼信が憂ありと雖も。軍終らねば墓へも參らず。斯ういふ志田も仔細あつて侍はやめたれども。安西の彈正太郎といふ惡人を討つたるぞ。敦盛の情があり。いや無常を觀ずるなどとて軍中より出家する。是は何と卑怯ならずやといへば。蓮生大手を叩いてから〳〵と笑ひ。こりや凡夫無常を見ては後生に入り。強きを見ては從へるを誠の侍とは申すなり。花のやうなる敦盛を我が手にかけて討ちし事。なんぼう哀れに存ずる故。侍止めて出家すればその人も佛になり。我が身も佛果に至るが。是が合點がまゐらぬか。こりや志田の三郎といへば。志田は一念發起して。有難し〳〵最早疑心は晴れたりと髻ふつつと切つて捨て。押肌ぬいで太刀を逆手に取直す。蓮生押止め是何事といへば。志田聞いて念佛の功力にて往生せしと聞くからは。見ながら娑婆苦界に片時も存へ何かせん。腹かきやぶり極樂へ早く往かんといへば。おゝ賴もしき大活の佛者かな。さりながら如何に念佛申しても。修行の功積らでは往生はなりがたし。志田聞いて誤つたり〳〵。然らば某出家になり。繼信が菩提を弔はん心なり。はや〳〵出家せさせてたべ。法然聞召し。さて〳〵殊勝の心ざし。蓮生とても其の通り。然らば出家させんとやがて。授戒をなされける。詞則ち志田坊とぞ申しける。如何に蓮生繼信が相果てしより。妻子が嘆き彼是を見るにつけても。いとゞ哀れに候わと ウレヒフシ 涙を流し。給ひける。詞法然聞召し。嘆き給ふも理なり。繼信は君の御用に立ち死したれば成佛は疑ひなし。いで〳〵弔ひ得させんと。虛空に向つて手を合せ。門門不同八萬四千。爲滅無明果業因。利劍卽是彌陀號。一聲稱念罪皆除。南無阿彌陀佛と唱へ給へば。不思議や佛前に立てたる位牌。動くと見えしが忽ち繼信が形を顯し。色あら尊の御弔ひや。只今の功力に依り修羅の苦患を免かれ。今は妄執晴れたりと。忽ち佛體と顯れ西の空へ飛び給ふ。有難し〳〵。佛法繁昌御代繁昌めでたかりともなかなか申す。ばかりはなかりけり

右此本は我等持本の通ちがひなく板行致し候初心稽古のためなりされば こと〳〵く假名がきにしてくきりふししやう三味線のりかたほどびやうし三重をくりのしなじなひみつを殘さずあらはし候なをしん〳〵の口傳は筆紙のおよぶべきにあらず かしこ

京二條通寺町西へ入町
正本屋 山本九兵衛板

凱陣八島

近松門左衛門作

序戯言も思より出で戯動も謀より作る。これ皆人心のなせるところ。爰に人皇七十七代後白河の院と崇め奉る。オロシゆゝしき聖主おはします。地されば保元の春の雪。風に音なき並木の庭右近の櫻左近の橘。詞外は梅に愛でさせ給ひ殊更今朝の白妙に。不老門の朝日影フシ遅きを願はせ給ひける。地然るところにみかはといへる十一歳の女詞童。南面の御簾さら〳〵と下し北の屋陰を見せ奉る。はや消えがての白雪を。しばしと思ふ心ざし深く感じさせ給ひ。其のかみ後一條の御時かゝる曙を見させ給ひ。香爐峰の雪もこれにはと宣はせけるに。清少納言やがて御前の御簾捲き上げけるを。いみじく褒めさせ給へり。此の心は樂天が詩に 遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き 香爐峰の雪は簾を撥げて看るとあるを即座に思ひあはせり今幼きものが心ざし。これにたぐへて優しやと叡感甚だ淺からねば。諸卿一度に冠を下げフシはつと感じて靜まれり。地其の頃源九郎義經は。平家の一族追伐し三種の神寶ことゆゑなく。都に還し奉りオクリやがて〽参内ましませば。地斜ならざる叡慮にて重ねて官祿賜はるへし。彌々京都を守護し逆徒あらば鎭めよと。御暇賜はりて。御前を退出申さるゝ。義經の御威勢たとへていふべき。三重〽やうもなしフシはや堀河の地御所にもなれば武藏坊をはじめ各御前に召され。未だ平家の所緣洛中洛外に忍び居ん。事序に根を絶つへしさりながら。都の騒ぎ如何なれば。何卒密かに探す手だてもやとあれば辨慶承り。詞然らば屈竟の事を思ひ付いて候。何れも勸進物貰に姿をやつし。地家々に入つて旋分仕り候はんといへば各々横手を丁ど打ち。これに越したる事あらじ。さあらば伊勢の三郎は社人こそよからめ。駿河二郎は富士禪定。常陸坊は虚無僧片岡は鹿島の事觸。辨慶は山伏と。夫々に片付けどもこゝに兼房一人何に見立てる役も無し。辨慶つく〴〵見てなう。詞御身には似合はしき事あり。成程見苦しき姿して編笠深くかぶり。筑紫方の船頭なるか。播磨灘にて船を破りし者とて勸進せられよといへば。地扨見立てたり〳〵と各どつと打笑ひ。思ひ〳〵に出立つて手分をしてこそ三重〽出でにけれ。フシ扨義經は。地鷲尾とたゞ二人。浪人らしく態を變へ笠ふか〴〵と君がため。神樂岡のあたりにてまづ花咲かす春雨に。梢の蛙鳴きつれて。フシ飛ぶ蝶宿り求めけり。ハルフシしばし凌がん軒遠く。地佇む野路の後よりも。御所方の女の左に文宮右に傘。さ

すがの義經濡れながら近よらせ給ひければなう誰ぞいの。しやはに見知らぬ人おやかと愛想なげによけにけり。いやなう情の雨宿りこれが情の雨宿りと言葉を重ね宣へども。人の御情の傘ならずとつれなくも押出され。せん方もなき袂の雨かゝる所へ。さも麗しき上臈にさしかけ傘の下道を。靜にゆたかに見えければ又これに移り氣のあとを慕ひて袖笠の打萎れたる御有様。彼の姫見送り御覧じて打連れられし女に此の傘たゝめとありければ。なう輕忽やこれ程降る雨にといへば姫聞き給ひ。餘所の辛さを見て心なく行く事は。憐れ知らずといふものなり。最早宿も程近しそれ彼方へ上の御世話にぞ、力及はず乳母は傘を義經に參らせける。扨々忝しさりながら如何に御志なればとてあなたを濡し參らせてはと。姫君にさしかけ給へばいや苦しからぬに平にさして歸らせ給へ。いやお宿まで送り參らせそれよりさして歸らんと。互に辭儀の媒の傘物言はゞ今ぞかし。後には自と身に添ひて。裳裾にかゝる玉垂も互の思ひ數とりて。運ばせ給ふ御有様辨慶遙の後より見て。やら不思議や。あれは確かに我が君なるぞ。ムヽ又例の持病の濡とやらんか。但しあの女平家方の者と聞付け仔細を問ひ給ふか。いかさま不審と思ひつつ御跡慕ひて〳〵參りけりさる程に。彼の姫の御母上一乘寺の里におはせしが。御妹姫諸共に。何とて姉は遲きぞやと待佗びさせ給ふ所へ姉君歸らせ給ひ。なう御兩人ながらまづ家へ御入り有り。雨を晴らしてお歸りあれとあればさあらば仰に任せんと。打連れて入らせ給へば母上不審晴れ給はず。してあなた方は誰樣ぞと問ひ給ふ姫君聞召し。いや誰樣かは存ぜねども。女ばかりの道覺束なしとて送りて給はり候なり。なうそれは優しき御心入れや。蓬生の宿ながら暫し空の晴るゝ迄と他事なき體に見え給へば。義經うれしく思召し立入つて見給ふに。姉に勝りの妹姫はつと驚き又これに移氣の。こは何人の所緣ぞと暫く見とれておはせしが。必定これは平家方の人と思召し。卒爾ながら見申すにかゝる處におはさん人々とも存ぜず。如何なる故にかと問はせ給へば母上聞召し。されば此の所は久我大臣殿御下館で候ふが。其の一人ましまさねば。斯く變るかな世の中に。悲しきものは自らと涙を。浮べ宣へば。ムヽ扨は平家方の人々よな。御痛はしや去り乍ら。移り變る世の中なればなにとぞ源氏へ緣を求め。姫君達を御片付けなされてはと。あれば。いやなう父上いまだ源氏に捕はれましませば。如何なる憂き目にか逢ひ給はん。其の仕儀次第に我々は兎も角もと存する故。浮世の望なき中にも。若やは神の獎にて恙なき事もやと。それ故姉は祇園の社へ。日參致させ申すなり。義經聞きも敢へ給はず。エヽ祇園殿の御利生はや見えてこそ

様へ其の趣は。我々は堀河殿へ別して出入るものなるが。氏素性よき人ならば。假令平家方の人なりとも容貌次第に北の御方と定め。朝敵なりとも其の罪申し宥められんとの御事なり。姉姫を差置き異な申し分なれども。妹姫こそ必定御氣に入らせ給はめ。何卒媒介致さんや母聞召し。こはそも神の教かや。さもあらば。父上の御命に恙あらじ。さり乍ら妹は妾と繼しき中なれば。其の取沙汰も如何妹に禮儀と申し。姉を申入れて給はれ義經聞召し。いや判官殿の御望の年頃妹姫にて候へば。是非にこれをと宣へども。母上承引ましまさねば何と詮方なほざりに。スエテ思ひの種とぞなり給ふ。辨慶は先刻より垣の外に聞きゐしが。扨も〳〵惡性人かな。さり乍ら。よつく執心なればこそと門外に突つ立ちて。熊野山年籠の山伏。人相八卦相性祈禱何にても御用はなきかと呼ばはつたり。判官ちやくと推しこれ〳〵お山伏。頼みたき事

ありお這入りあれと呼び入れ。なう二十八の男と十八と十六との女二人の内。何れが相性よからん考へてたべ辨慶聞きもあへず。それは考ふる迄もなし二十八の男に十八の女。水剋火とて大きにわるし。十六の女こそ金生水とて大吉なり。此の緣を組み給へば佛神の納受に叶ひ。何事も心のまゝならんといへば母上聞召し。いかに願の違へばとて惡緣は結ばれまじ。此の上は妹を申入れてたべとある。姉君せいたる風情にて。上手の八卦さへ合ふも不思議合はぬも不思議。何あの山伏づれがいふ事誠にばしし給ふな。しやほに水は逆に流れずといふに一生男を持たねばとて。姉を差置く緣やあるとスエテ大きに不興しおはしけり。義經聞召し御理さり乍ら。惡緣を結ぶは災を招くに似たり。誠さ程に思召さば。いざ某と御身夫婦の契約は致すまいか。姉君顔打ちふつてせゝ笑ひ。義經さへ不足に思へど親達の爲と思へばこそ。如何にお

ちぶれたればとて。御身づれの緣組はちと推參ならめとツシ赤面。してこそおはしけれ。扨も移り氣な女郎や。今日道づれのお心入れ情の程を無になして。義經ならばと宣ふはちとさもしく存するなり。よしそれは兎も角も。實正某との緣組はいやの。アヽ聞きたうもな。耳のけがるゝに重ねていうても貰しませじとある。義經につこと笑ひ。アヽ重ねて申さじ扨は思ふまゝの仕合せなり。御身に嫌はるゝ某こそ源の判官よ。此の上はいよ〳〵妹姫を賜はれや。一命に代へても大臣殿の御科は。申し宥め申さんに御心安かるべし。幸ひ今日は吉上日緣組事始めそれ〳〵と有りければ。いたはしや姉君面目なさうにおし俯向き。しを〳〵としてましませば。妹君笑止がり。いや是なう姉君樣。それと知らずば天子の事をも言ふまじきものにてなし。待てば甘露の日和ありとや。自ら斯樣になる上は。御身樣もいかならんやごとなき御

方へ追付け行かせ給ふべし必ず悔み給ふなと。様々諫め給ひぬるフシ心の内こそやさしけれ。地其の内に辨慶堀河へや通じけん。種々の雑餉認め道をつどはせ参りつつ。是はめでたき御事終夜のお酒宴飲めや。謡へや。尤と差いつ。差されつ入れ亂れ君は千代ませ。千代ませと繰言を。祝ひ謡ひつれ堀河殿に歸らるゝ是ぞ義經の武運の盡き。家の亂るゝ始ならんと悔まぬ人こそなかりけれ。

第二

鎌倉におはします。兵衛佐頼朝卿諸大名をお前に召され。扨も義經西國の凱陣以後。都にて榮華を極め色に耽り酒に長じ。武家の政道外になす條これ亂世の基。さるによつて土佐坊を上す所に理不盡に滅す事。彌々逆心疑ひなし事の募らぬ其の前に。多勢を差向け誅伐せん。フシ如何に如何にと仰せけり。地何れも大事の評議なれば押靜まる其の中に。梶原憚りなく申す様。詞ほゞ言上仕る如く今度の戦中にも。船中にて雑盛の御息女と内通あり。それのみならず刎體なくも女院への御戯れ。彼此御本意に候はすと遺恨を含み讒しければ。地頼朝なほ／＼御立腹にて北條の四郎に仰付け。三千餘騎を差添へられ急に打立ち滅せと奥をさして入り給へば。時政おうけを申されて既に仕度と三重へ聞えけり。フシ此の事かくれ。地あらざれば無念ながらも義經は。罪なき御身を隠家の吉野の奥もあらはにて。又都に立ち歸り密に忍びおはせしが。辨慶をはじめ何れも心底を定め。いざ鎌倉勢をこゝに引受け潔く討死し。名を後の世に殘さんと云へば判官聞召し。かた／＼が存念至極せりさりながら。曇なき身を徒に果つべき事も口惜し。一先づ奥州に下り秀衡を頼み。時節を窺ひ見んとあれば。辨慶承りはて兎角は君の御計らひ。誰かは漏るゝ者候べき。とはいひながら我が君の。数萬の敵にも遂に御後を見せさせ給はぬに。

親兄の御禮儀を重んじての御一言。返す／＼も殊勝やとフシおの／＼袖をぞしぼりける。地さあらば片時も早くと末々の者共には皆御暇を賜はり。主従以上十二人山伏姿と相定めぞて北の御方へ此の由かくと語らせ給ひ。とても長旅及び難し。都に止まりおはしませ。追付け迎ひ越すべきとスヱテ涙と共に宣へば。地こは情なき仰せやな何とて殘りあられうぞ。御供かなはぬものならば浮世にながらへ何かせん。命のお暇たまはれと聲も。惜まず泣き給ふ。辨慶御痛はしく思ひげに御道理至極せり。御心安く思召せ御供させさせ参らせん。某次第になされよと兒の姿につくりなし。旅出立の檜笠。まだ夜をこめて今出川明方急がせ三重

義經道行

へ諸共に。フシあはれと思へ山櫻。花に心を蘇民書札の。姿に變ふる人々の。御有様ぞ痛はしけれ。住みて久しき都をば。立つや霞にこがくれて。フシオクリあとにへ見な

すや音羽山ッシ鳥の啼く音も。はら／＼。はらと落つる。涙は。しばしが程も。なう山科の里も過ぎ。今は難しや又いつか。世に逢坂の關の戸を。叩きてあくる空見れば。汝もわりなきがにこそ。花を見捨つる雁も。同じ越路の旅なれど心ことなる憂身とてオクリ見しや　見知らぬ人にさへ。ナヲシ忍ぶ小笠の。深々と深き思ひの種をしも。如何なる世にか蒔きおきて。はからぬ旅の道急ぐ左手は三井の古寺や此の。鐘のつく／＼而を靜觀するに。一葉一落春秋と移り變れる定めなさ。再會にも如夢幻。泡影と法の教ヘは聞き乍ら。など厭はぬや假の世を。いや果敢なくも。悟り得ぬ。流轉生死の海このみオクリ沈みつ。浮いつ／＼沈みつ行く船は。さしもぞ所する漣や　志賀の濱松年古りて誰が代に引ける子の日ぞやこれも皆崎の事問はん。飛交ふ千鳥八つ六つ。七の社を伏拜み　見渡せば花も。紅葉もなかりけり。浦の苫屋のあけ綾のは、夕を秋と。

誰かは思ふ山わきに。嶽あやしき風景は今の物憂き身にフシだにもすこし慰む便りかや。漫々たる湖上の雲。過ぎ來し跡を見返れば。故郷。遙にして際も無く。日暮且遁征と。唐土人の故事迄も思ひ出でつゝ口すさみ。磯道に拾ふ。玉村の。里に立ちぬる薄烟。つゝみ憐なる堅田鮒。文の傳手さへ長濱の。行末守れ白髭の。神の社や和げる光。のどけき。日の出が岬うたゝ寝覺の。床の海路万も無ご敷きには　比べて賴荒乳山舟雨の降りそ。あしより一入に。雫に見ゆる木の芽山のア、。あれ。あれ／＼荒れし。軒端の板取川。苦しき。瀬のみ越えつれば　冷泉いつの　間にかは秋元の　宿の秋風福井とや狹き。袂に。せきかねて。餘る涙や森田の宿。さなきだに憂きを重ぬる旅衣。きて見る事も思ひきや。ハヅミ目馴れぬ村々里々を。覺束なくもたどりぬる。心は猶も細呂木や。大聖寺ぞと聞くからに。スエテ　おの／＼法施を手向け。來ん世を願む道の浦

憂節しげき竹の橋渡るもつらき。身の仇なるは石の燧か。燧ふりて昔。上野の。草にも縹みて道に踏迷ふ。こゝは三國の。港なる　オクリ出船入船數々の。品かはりたる登き業に音信とては小衣嵐。思ひらしのに徐原や。日數を經れば程もなく、名にのみ聞きし加賀の國。安宅の　浦にぞ着き給ふ。

地 然る所に往來の者ども。行違ひ。吾顧も安宅には新關すわり何かは知らず山伏達が堅く改めらるゝ由と言捨てて通りけり。地 何れもはつと驚き一期の浮沈此處なりき。

所詮打破つて通らんといふ辨慶聞いて。詞 いや／＼こゝは大事の所。先も打破つて通らんは易けれどもまた行先の難儀。地 随分陳じて通るべし。若し其の上に異議あらば思ひ設けし事と云へば君聞召し。げに／＼御分がいふ通り然らば陳じての相談ここでらめ。先づ／＼此方へ／＼と。片山陰の森の中へ各打連れ　三重へ入り給ふ。是は揚置き

地 安宅の關を守る富樫の左衛門承り候に就は

り塀をかけ兵具ひつしと立て並べ。備へ厳しき其の氣色フシ鳥も通はぬ要害なり。地さるほどに判官は。辨慶を先達にてさも大樣に來らるゝ。詞番の者ども聲々になう〳〵客僧たち。是は鎌倉殿よりの仰にて山伏達を改むる關なり。地一人も通さじとひしめく辨慶不審がましき顔付にて。詞いや我々鎌倉殿より改めらるゝ科を持たず。但し山伏道の修行が天下の法度にばしなり候か。時に左衛門つつと出で。いや〳〵左樣の事にあらず。頼朝義經御仲不和になり給ふにつき。判官殿十二人の作り山伏となり奥へ御下向の由聞え。改め申せとの御事といふ辨慶聞きて。あら嬉しや仔細承らぬ内は思はぬ氣遣ひ致して候。其の判官とやら此の中に逢に見たる者も候はず。地我々は南都東大寺建立のため。諸國をめぐり候が何と奉加に付き給はぬか。詞左衛門聞いてホヽ。かた〴〵を誠の山伏にしてはうけ取り難く候よ。地殊に同道十二人。疑もなく判官殿ならん。一人も通さじとひしめく辨慶少しも騒がず。詞なに誠の山伏ならじとはして。此の中に其の判官と紛らはしきもの候か。いや紛らはしくもなく正しく御身は武藏坊辨慶。あれなる色の白きが判官殿よ。所詮一人も通さじといへば辨慶から〳〵と笑ひ。さて〳〵嬉しや日本一のつは者に我々が似たるとや。是は好き目利とやいはん不目利とや申さん。地さはさりながら富樫殿御身鎌倉殿を主君と頼みましまさば。義經も共にお主筋。御仲不和なればこそさすがの義經。姿を變へて忍ばるゝを是非に檢め顯さんとは拙さもしき心入れ。悉皆それは武士たるものの所爲ならず。よし又我々誠の義經辨慶ならば。此の關の五百や千の人衆小指の先にもかくべきものか。御身武士の道を知らばたとへ誠の義經と見るとも。かゝる形になり給はゞ哀憐を垂れ通さんこそ本意ならめ。近頃不祥なる所へ來懸つたるものかなと。各一所に立竝び。びくともせば踏みつぶさんと思ひ込うだる其の氣色。如何なる天魔厄神もフシおそれつべうぞ見えにける。地左衛門聞いて尤なりさり乍ら。詞最前東大寺建立の勸進と承り候。定めて勸進帳の候へきを聽聞致し候はん。地もとより勸進帳のあらばこそ。往來の卷物取出し勸進帳と名付け。高らかにこそ讀上げけれ それ。つら〳〵。惟れば大恩教主の秋の月は涅槃の雲にかくれ。生死長夜の長き夢。驚かすべきフシ人もなし。こゝに中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝となづけ。奉り最愛の。夫人に別れ。戀慕やみ難く。涕泣眼に荒く涙玉をつらぬく思ひを。善路に翻して盧舍那佛を建立す。斯程の靈場の。絶えなん事を悲みて。俊乘坊重源。諸國を勸進す一紙半錢の。奉財の輩は。此の世にては無比の樂にほこり當來にては。數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首。敬つて白すとフシ天も響けと讀上げたり。地左衛門聞いて此の上は。たとひ判官武藏にもせよ許し

申すに早々通り給へ。詞なに仔細なし〳〵通れとや。然らば落居のうち暇を取り奉加に後れ候へば。御大儀ながら是非勸進帳に付き給へ。地實に〳〵現世後世の爲とて鳥目百疋出しければ。詞いやなう富樫殿。大儀は一度名は末代。地御身も名ある。侍の爲目づれは見苦しゝなまじ付かずば付かぬまでよ。せめて金十兩といへば富樫ぎよつとして。詞扨々貧しき山伏かな。關を許せば奉加を望む。奉加につけば少分なりと却つて我を恥ぢしむる。地とはいへ判官ならば許さるゝを悦び仔細なく通られんが。誠の山伏知れたりと又百疋取出し。何卒と存ずれども某も貧しければ是にて堪忍し給へと。やう〳〵に詫びければ辨慶苦々しき顔ばせにて。エヽ輕微なれどもといらたか珠數を押し揉んで皆一同に聲を上げ東方に降三世。南方に軍荼利夜叉。西方に大威德北方。金剛夜叉明王中央に。大日大聖不動明王願くは判官殿を此の關守の手に渡し。勲功辯狀に預らしめ給へと高らかに唱へ心中には。南無八幡大菩薩願くは我が君を。事故なく奥州へ送り屆けてたび給へと。腰なる法螺貝押つ取り。押つ取り天も響け。大地も裂けよと吹立て。〳〵暇申してさらばよとて。おの〳〵打連れ通らるゝ虎の尾を踏み毒蛇の口。危かりける次第なりとて聞く人身をこそひやしけれ。

第　三

ワキよしや義經ならぬ身の麻衣。御姿さへあるものを色を變へ。品を變へ。多くの難所を凌ぎつゝフシ出羽の國に入り給ふ。地是に高札の立て有り。詞なに〳〵佐藤の舘にて山伏攝待と候いで御つき候へ。ツレ〽辨慶聞いて。佐藤の舘憚りに候程に直に御通りあれかしと存じ候。甲〽辨慶聞きもあへずいや〳〵。繼信忠信が草の蔭にて怨みん所も有り。地たゞ知らぬ樣にて御つきあらうずるとて。おの〳〵オクリ〽内にござへり給ふ。地辨慶鶴若を見て是は誰の御子息ぞ。子詞〽さん候佐藤繼信が子にて候。ワキ〽扨繼信は御内に御座候か。子〽判官殿の御供申し八島の合戰に討たれて候。ワキ〽あら笑止や此の攝待は誰の御企候ぞ。子〽さん候判官殿十二人の作り山伏と成り奥へ御通りの由承り。祖母にて候者此の攝待を始めて候。見申せば方々こそ十二人御入り候へ。若し判官殿にては御座なく候か。ワキ〽ヽ背く。かゝる疎忽なる事を申さるゝものかなまづまづ内へ御入り候へ。子〽如何に祖母君。山伏達の十二人御着きにて候。シテ〽喧し〳〵。フシ萬里を出でし。鶴の子の。松に歸らぬ淋しさよ。地實にや憚有る身として。御前にまゐりて候へば。且は亡き人の名をも下し。又は子供の古への恥をも。顯すにては候へども。餘りに御懐しき心ばかりにて。御前に參りて候なり。是は故佐藤庄司が後家。繼信忠信が母にて候。實にや親子恩愛の別れの餘りには。包むべき人目も知らず。又は憂身の恥をも。顯すにては候へども。さりながら。此

の攝待と申すに。現世の祈の爲にもあらず後生善處とも思はず。嫡子繼信は八島弟忠信は、都にて失せけるとばかりにて。詳しき事をも知らずして。ひとり悲む身を知る雨の晴れぬ。思ひや慰むと。此の攝待をはじめて候。札を立ててより此の方。一日五人三人。乃至一人二人。絶ゆる事はましまさねども十二人は今が始めにて候何れか我が君ぞ。何れか其にてましますぞ。夜も更けたり人の知るべきにもあらず。この姥が耳に密と御語い候はゞ。此の攝待の利生にて空しくなりし繼信を再び見ると思ふべし。親子より主從は深き契の中なれば。さこそ我が君もあはれと思召すらめ。殊更御爲に命を捨てし郎黨の。一人は母一人は子なり。などこや弔ひの御詞をも出されぬ。斯程數ならぬ身には思ひのなかれかしフシあら恨めしのうき世やな。ワキ詞へ辨慶聞きてこれは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等如きの山伏の。五人三人打連れ／＼今夜十二人

泊りたればとて。判官殿とはかゝる疎忽なる事を承り候。詞さりながらまことに繼信の母にてましまさば。判官殿の御内の人少々見知り給ふべし。所詮そなたより名をさして御覽候へ。シテへ仰の如く我が子は御内にありし者なれば。大方推量申したりとも。さのみ違ひ候まじ。カネへ先づ斯樣にもの申す山伏は何處山伏と御覽じて候ぞ。シテへさん候只今物仰せられつる客僧は。此の御供の中にては一の老歳にて御渡り候な。地いで此の御供の中にて年寄りたる人は誰ぞ。ヲヽ今思ひ出したり。判官殿の御乳母の親。増尾の十郎權の守兼房山伏候な。カネ詞へ年寄りたるが兼房ならば尼公も兼房にて候べきか。シテへ扨是なるは何處山伏にて御入り候ぞ　ワキへ是は出羽の國羽黒山より出でたる山伏にて候　シテへいや是は播磨の人の聲にて候ものを。地されを如何にと申すに姥はもとより播磨者。十三の歳繼母を恨み都に上り故庄司殿と契をこめ。繼信忠信をまう

け今かく憂目を見候へば。只恨めしうこそ候へ。されば我が國の人の聲なればなど聞き知らで候べき。詞いで此の御供の中に播磨の人は誰ぞ。地是も思ひ出したり。判官殿鵯越とやらんの御時。狩人の姿にて參りあひ。其の儘苗字を賜はり。今迄も御供と聞えし鷲の尾の。十郎山伏候な。ワキ詞へ扨又かやうに物申す山伏をば何處山伏と知召されて候ぞ　シテへ是こそ大事にて候へ京の人の聲かと思へば又近江の人の聲にも似たり。いで御供の中近江の人は誰ぞや。地さればこそ始めより。器量骨柄人に優れ何とやらんもの恐しげなる御有樣。天晴是は辨慶山伏御座めれ。それならばもとと近江の人三塔一の惡僧今は我が君の、一人當千の武夫よなう武夫よ武夫も。物の哀は知るものを。などされば餘に御心強くましますと。袂に縋り聲をあげ人目も。フシ知らず泣き居たり。子詞へ鶴若見參らせ如何に祖母御前。詞かほど心も無き人々にさのみ言葉を盡さん

よ今は内へ御入り候へ。判官詞〽是なる童は恰翫きこと申すものかな。まこと繼信が子ならば主君判官たるべき者を擇つて出し候へ　子地〽承りて候と十二人の山伏の。みな御顏を見廻しこれこそ其にておはしませ　判官詞〽扨其にて有るべきいはれは如何に。子地〽いやいかに包ませ給ふとも。人にかはれる御粧ひ疑もなき我が君よ父賜べなうとて走り寄れば。判官〽岩木を結ばぬ義經なれば　スヱテ泣く〳〵膝に抱き取る　地實にや栴檀は二葉よりこそ匂ふなれ。誠に繼信が子なりけりと　フシ皆涙をぞ流しける。ワキ詞〽言語道斷此の上は何をか隱し申すべき。是こそ我が君にて御座候へ近う參りて御目にかゝられ候へ　シテ地〽我が君を拜み奉るにつけて。子供の事こそ思ひ出られて候へ　扨も繼信は八島にて　剛なりとも申し又不覺なりとも申す　最期の有樣承り度く候　判官地〽判官聞召し。如何に辨慶。　詞繼信が最期の仕儀詳しく〳〵兒公に語つて聞かせ候へ　ワキ詞〽畏つて候。御諚と申し御所望といひ、終夜語つて聞かせ申さん近う寄りて御聞き候へ。扨も八島の合戰今はかうよと見えし處に。　地門脇殿の次男能登守教經と名乘つて。小船に取乘り磯間近く漕寄せ。如何に源氏の大將源九郎義經に一矢一筋參らせん受けて見給へと罵る。かう申す各を始めとして。我も〳〵と御矢面に立たんとせしが。何とやらん心後れしたりし所に。繼信は心勝りの剛の人にて御馬の前に駈塞り。義經是にありとて靜々と控へ給ふ。其の時に教經は、引設けたる弓なれば矢坪をさしてひやうど放つ。過たず繼信が着たりける。鎧の胸板押付總角かけすたまらすつつと射通し。後に控へ給ふ我が君の。御着長の草摺にはつたと射留む。扨其の時に繼信は。馬に乘直らん〳〵としけれども大事の傷なればちつとも堪らず馬より下にどうど落つ。やがて我が君御馬を寄せ。　繼信を陣の後に擔せ如何に繼信　如何に〳〵と宣へばたんだ弱りに弱つて終に空しくなる。なんぼう面目もなき物語にて候。シテ地〽なう其の時に弟の忠信は候はざりけるか　ワキ〽あら愚や忠信の御事は。日の下に於てかくれなし能登殿の童菊王丸。繼信の首を目懸け渚の方に走り上るを。忠信取つて放つ矢に菊王丸が眞中射通され。かつぱとまろべば教經船より飛んで下り菊王が。綿上つかんで遙の船に投入れ給へば程なく船にて空しくなる。眼前兄の敵をば。弟の忠信こそ取つて候へ　シテ〽扨は敵も大將に仕へ申せし御童。ワキ〽繼信は又我が君の祕藏に思せし御内の人　シテ〽彼は平家の船の中　ワキ〽こなたは源氏の陸の陣　シテ〽彼も主從　ワキ〽是も主從　シテ〽思も同じ思なれば　ワキ〽餘所の歎を思ひ合せ御慰み候へとよ　シテ〽それは仰までも候はず。御身代りに立つ上は今生後生の面目なり。フシさりながら。命ながらへ。御供申し。御衣をも肩にかけ此の御座敷にあるならば。十二人

の山伏の十三人も連りて。只今見ると思ひなばいかゞは嬉しかるべき。扨なう弟の忠信は都にて死したるとも申し。未だながらへあるとも申す。序に語つて御聞かせ候へ。ワキ詞へされば忠信は君の御行方を尋ねかね。都に忍びある由六波羅より聞付け討手向ひ。遂に六條堀河の御所にて。我が君を拜み奉ると思ひ自害せられたると承り候シテ地へなう聞ふに辛さの増り草葉末に殘る白露と。思へばあさましき長生やな。去年の春忠信わざと人を下し。繼信討たれたると聞きければ。身も絶えなんとは思ひしかど明年の春の頃。忠信下らんといふ嬉しさに。繼信が事は餘所になり。あはれ今年も早く經ち。新玉の春も來て忠信も來よかしと。思ひし事もあだし世に生けて物を思はんより。殺してたべや人々とて前後も。さらに無かりけり。ワキ地へ君を始めおの〳〵誠に道理至極なりとてスエテ共に袖をぞ絞らるる。地由なき長物語のうち夜が明

けて候。奥とは程も近ければ。おつつけ御入りあられうずる間いさ御立ちと勸め奉れば。子へ鶴若是を聞き如何に誰かある。詞馬に鞍置き弓靱おこせ君の御供申さんにワキ詞へやあ御供とは何ごとぞ子へ君の御供申してこそ親の敵に逢ふべけれ ワキへそれは弓矢の道これは修行の山伏道に何の敵のあるべきぞ子地へさあらば小さき兜巾篠懸をこしらへて給はれ。山伏道の御供せん。ワキへ辨慶しばし涙を抑へ。天晴繼信が子かな。謹御供有りたくば。今日は道具をこしらへ給へ明日は迎に參るべし。子詞へまことさうか。ワキへなか〳〵にカネ地へ我も迎に參るべし。ワキへ我も迎にまゐらんと。面々聲々に賺され稚き身の悲しさは。誠ぞと心得て少し詞の弱りたる。折を得て客僧は泣く〳〵奥へぞ下らるる此の人々の心の中。物の哀れは是なたはと聞く人。袖をぞ絞りける。

第四

此處も旅寢の袖の浦 ひそかに出羽の國よりも秀衡が館に入り給へば。入道驚き子供を連れ御前に罷り出で。詞此の度の御下向誠に勿體なくこそ覺え候へ。地其の上北の御方さま道路の雪の憂き難所。夜寒の衣薄き御姿。返す〴〵も御痛はししスエテと涙と共に申さるる。義經聞召し今更の事ならねど。いよ〳〵頼むと宣へば。こは冥加に餘る御諚の趣やあ子供等 只今の御一言たとひ秀衡死したりとも。必ず〳〵忘るなよ。謹に某が長生も思へば天理にかなへり。是非鎌倉へ伺候して。直に言上申し御仲直し奉らん。御心安く思召せと扨人々にも挨拶し。先づ寢殿に移し奉り好きに饗應仕れと。心底殘らぬ有樣は實に賴もしくぞ。三重へ見えにける。頃は卯月の。地初の八日秀衡がこの姬。千種の前とて未だ二八の春も過ぎ。折節に咲く東路の[illegible]が關の花車 欄干に凭かしつ詞奥樣へお取次頼みませんといふ處へ、判官ふつと出で合せや。ム、してこれは何處からぞ。地姬少し會釋して。妾が母の方よ

り奥樣へといふしほらしき顏ばせに義經はうどなづみ給ひ。先づは見事の花車。引手のお名はと問ひ給へば。詞千種と申し候なり。地かゝる田舍の末の松山花の波。色よし振よし濡れの盛りと手を取らんとし給へば。しやほに何の田舍者をと思はせ振して立ち歸る。姿の惜しや雄島の蜑の重ねて便の船もがなと。あとなつかしげに見送り給ふ所へ北の方出でさせ給ひ。さて美しの花車いづかたよりと問ひ給ふ。詞いや秀衡が女房の。地方よりと。宣ふ内にも戀の山。千種に思ひ餘りてや上の空なる御有樣北の方御覽じて。君は御心に懸る事ばし候か。唯うか〳〵と見えさせ給ふがとあれば義經ちやくとよい衛を出し。詞されば此の花を見てふと人界の仇なる事こそ思はるれ。地盛りは朝の露散るは夕の風を待たず。とんく菩提心を起し。一七日坐禪して。心を凝し見んとあれば北の方驚き給ひ。なう今やなど後世の道さりとは思し止まり給へとた

つて歎き給へども。いや先づ靜めて聞き給へ、我年月の合戰に人を殺すこと數を知らず。其の罪いかで免れん修羅の苦み目の前なれば何卒此の苦を遁れたき願。御身とも又後の世を。一つ蓮の望ある故なり。スヱテ惡しく心得給ひそよ。地はて其の御心入れならば兎も角もとは云ひ乍ら。少しの間さへ待遠なるに七日逢はではいかにぞや。あられうものかと宣ふをいろ〳〵偽り宥めさせ。表の座敷に出で給ふ心のオクリうちこそ嬉しけれ。地さて辨慶を近う召され四方やまの御噺の次に。詞何と世の中に止めがたきものは。色欲の道にてあるまいかと宣へば。地隨分堅き武藏坊。誠にそればかりは止むまじき事と打笑うて居たりけり。判官好き首尾と思召し。いやこれ辨慶。詞それにつき近頃言ひかねたれども。地默止がたき戀路ありて奧をば斯樣に遁りし。迷惑ながら其の方我が身に代り。坐禪してくれよとあれば辨慶呆れて御顏を眺め。詞も又止めさせ給へといふ義經

はつと思ひながら。此の度ばかり不承ながら是非に〳〵と宣へば。地はて料簡もなし仰なれば兎も角もと座を占めて。衣引被きし有樣はフシさながら。鬼に衣なり地判官悅喜ましましとかういふはくだなれば。最早行くぞと宣へば辨慶不興氣にて。詞これ〳〵隨分早く歸らせ給へ。遲くば。此の役目斷りなしに引き申さん。地チヽ待たせはせじといひ捨てて。千草の前のおはしけるオクリ妻戶に忍ばせ給ひけりフシ早更け過ぐる。小夜嵐。嘸さこそ。曉の朝明け思ひ遣れて北の方。銚子盃取添へて物靜にさし足し地密と覗き見給ふに。行ひ澄しおはします。扨も〳〵お志のかくも變らせ給ふものかは。さりながら俄に左樣に遊ばしては。お氣詰りもやと煩し宵よりの御心ばらしに。酒一つとより給へば辨慶ぞつと寒氣立ちコン頻りに頭を振りにけり。詞ムム扨は御行の邪魔にばし成り候か。地併し常にお好きなれば。ひらに〳〵と强ひ給ふ辨慶心

に思ふやう。いや／＼こゝは飲んで德。又早く歸すためと思ひ衾の下より手を出し。たぶ／＼と引受け。押俯向いてずつと干し。オクリまた差〳〵出しちやうど。地うけ。飲む中に我を忘れ。頭を撫でては。好い氣味かなと。いふ聲に驚き顔さしのぞきこれは如何な事。扨も憎やと衣引除けなう殿は何處へやり給ふぞ早く言はれよ腹立やと荒氣なく咎められ辨慶ほうどゆきつまり。詞いや未だ讃岐の八島にと地何をいふやらわけもなく。フシ跡をも見ずして逼げにけり。地エヽ腹立や胸の燃ゆるは鹽釜の恨みは君にと衣引被き。武藏が如く座を占めて。今や／＼と待ち給ふ御有樣こそ三重〳〵ただならね。フシ花の錦の。下紐は。解けて詞なか／＼よしなや柳の絲の亂れ心。いつ忘れよ信夫の里のフシ信夫摺。見えすく見えすく。薄き情と思はれず。や。早や鶏が啼くさこそ辨慶や待ち兼ねんと。立歸り見給へばつくつくとして坐してあり。詞さて／＼待ち遠からん辨慶、さりながら先へ行きての首尾いやはや詞に盡されず。とてもの事に君が情の有樣語つて聞かせん。地とはいへぢき／＼には遠慮あれば。綿帽ながら今暫く其の儘衣をかぶりて居よ。詞ムヽなに心得たとて頷くか。地オヽさあらば語るにつけ。かゝる東の果しにも亦あるものぞ優女。しんぞ都恥しく歌にて口說けば歌にて返し。譬喩でなげけば譬喩で受け。どうもならぬをやう／＼と靡け。床の打解け語らひは。いやはや何の因果に山の神めを遙々連れては下りしぞ。扨て來し方行末の物語のうち孀鴉の啼く聲聞ゆ。詞夜や明けぬらんはや歸らんといへば。彼の姫じつと手を取りて。ウヽ鴉が啼けば。も往のとおしやる月夜の。鴉。何時も啼くと唄ひとめられし程に。地いや／＼はや明くるやらあれ。あれ／＼曉の明星が。西へちろり東へちろり。く／＼とする程に。往うよ。戻らうよといへども小腰に抱きついて。往うとも戻らうとも。何とも。其方の御計ひと。フシいうては袂を引留めて。鶏も啼け。鐘も鳴れ。なれなれしけれど。しめてお寢れの夜は夜中と楓の樣な御手にて。某が背をほと。ほとと叩かるれば。何の事が思はれう。わんざくれ命諸共とは思へども。東雲やう／＼明方なれば。御名殘いつまでもつくる。世更に候はじと。是非なく歸れば送りて出で。馴れ參らせずば如何ばかり今の思ひはせまじをと。ステテ怨めしげなる別れの程や。れ辨慶。詞鬼の樣なる其方なりとも心の引かれまいものにてなし。や。嘸窮屈ならんさあ／＼最早衣をとれ。何否とてかぶりをふるか。地さては遲く歸りし腹立ヲヽ。道理さりながら。詞今少し早く歸らんと思ふところに。彼の姫が事を問はせられてな。其處で大きな嘘をついたは。地其の靜めには餘な者ならず。それゆゑ京に捨ておきしといへば。又奥が風情を尋ねられし程に。詞猶々誹つていや／＼。人の交りすまざる者にあらず。地心入れのおし

さ生れつきの可笑さを。譬へて言はば何にかは。とつと深山の其の奥山の。　こけ猿小猿が雨にそほ濡れてひ。ひつくはうてかいつくばうてさうしてかうして物として。どこにひとつの取柄がないぞいのヲドリウタ頭も禿て爲。會釋はなうてチヽ。怖い顔ぞと云ひければ。地それはまた何人の息女ぞとある程に。何の數ならぬ腰原の樵人が娘なりと答へたと。宣ひもあへぬに北の方堪り兼ねとびかゝる。義經周章ててやれ悲しや辨慶。顆みがひなしと振切り給ふを容赦もなくしがみつき。詞して妾が父の何時樵人をせられしぞ。地如何に戀の便とても餘りなる御仕方と。御髪を取つて引きつけ給へばさしもの義經責付けられ。苦しげさうな聲音にて。いや〳〵ひよつと不調法眞平御許し〳〵と。わびさせ給ふを辨慶物蔭に聞き居しが。おつ〳〵立出で。詞先づかうあらうと存じた事。是は奥樣の重々御道理最早堪忍あそばせと。地是非に御手を引放せば。面目無さうに判官はむづ〳〵と起直り。悄々としておはせしはフシ手持無沙汰に見えにけり。地辨慶あまり笑止さに。詞此の上は某隨分御意見申さん兎角堪忍あそばされよ。若し其の上にも止み給はずば。屹度訴人致す儀といへば北の方聞召し。いやこれ悋氣ばかりで申すになし。地今は大事の御身なれば。人の譏世の妬み秀衡殿に聞えても。よからぬ事と存ずる故とフシ其の理を詰めて宣へば。地義經もはうど詰らせ給ひいやなう尤是に懲りぬ者か誰があらうぞと。苦笑ひの御有樣辨慶をかしく思ひ。詞誠に威言の言置きは申されず。我が君は勿論この武藏めも。一生物の怖しいといふ事を知らず地又數萬の敵に逢うても遂に後を見せざるに。今宵奥樣の御氣色には。ぞつと身の毛がよだちて足もなえ心消え。逃ぐるに途方を失ひし。あら勿體なや忌はしや懲りさせ給へ重ねては。此の武藏は存ぜぬと後にはどつと打笑ひ。お暇申して立ちにける彼の辨慶が逃振と。又義經の難儀の體し嫉妬ならずばかくやあらめと皆人。感ずるばかりなり。

第五

有爲無常の習とて佐藤秀衡は。文治四年冬の末。終に空しくなり給へば義經を始め奉り。一家一族諸共にスヱテ憂に沈むばかりなり。地されども日數重なれば。七日〳〵の御弔。オクリ實にも殊勝に見えにけり。地扨も秀衡死去有りて百箇日も過ぎざるに鎌倉殿より御教書下り　泰衡が出居にして兄弟五人拜見す其の文に曰く。詞何とて奥の一黨は悪逆の義經に與し賴朝に敵をなす條其の武名を知らず。早く義經を滅し鎌倉に降參せば。　勳功厚くあて行ふべきものなり賴朝判とぞ讀上げたり。地兄弟暫くとかうも云はず目と目を見合せ居たりしが。地領しきとて泰衡押つ取つていふ樣は。詞何れも如何思はるゝぞ。御教書の如くよしなき義經を主と賴み。下りまじき處にて馬より下る

ゝも無益なり。地いざ討取つて鎌倉に捧げ。動功に預らんいかに〳〵といひければ。錦戸をはじめ四郎元義樋爪の五郎みな尤とぞ同じけり。中にも和泉の三郎涙をはらはらと流し、詞抑々勿體なや幾年生きんとてかゝる事は宜ふぞ、地父上も此の事を。末期迄言ひ置きいづれも。起請を書かせ。世に嬉しげにて死し給ふ其の遺言を空しうし。お主に弓を引かん事生きては家の名を下し。未來の業は如何せん此の事に於ては。思ひ止らせ給へやとヮシ袖を浸して諫言す。地泰衡錦戸等ことばを揃へ。詞なに兄々は勿論弟まで料簡して尤と同ぜしことを汝一人否といふは必定高舘殿と一味と見えたり。しかれば我々に敵せん所存。全く其處を立たせじと膝立直し怒をなす　忠衡居直りいや、事をかしき擧動や、親兄の禮を重んじ諫言するが僻事か。天命をも恐れず悪逆無道のかた〴〵を兄とも人とも思はねば。是より直に高舘殿へ参り御味方申すぞや。兄顔をしていらざる力みさあ。口程あらば留めて見よと。地四人をはつたと睨め廻し。座敷を蹴立て歸りしはオクリ實にたの〽もしくぞ見えにける。地兄弟四人は腹を立て。時刻移さず押寄せ先づ忠衡に腹切らせ。軍神に祭らんと照井金澤鳥海に。三千餘騎を差添へ和泉が城へと三重〽押寄せけるさる程に。地和泉の三郎忠衡は急ぎ宿所に歸り。女房に近づき始終を語りければ。こはそも如何に我が君はなにとかならせ給ふべき。よし此の上は是非もなし。自ら女の身なりとも御身諸共御供し。共に如何にもなり果てん思へば〳〵あさましの浮世の中やと涙を流し申さるゝ。ヲヽよくぞ〳〵頼もしし。さすがは佐藤庄司の娘忠衡が女房程ありけるよ。詞然らば侍の最期に心掛りありては必ず不覺の死有りとや。地いざ二人の子供を害し心よく討死せん。それ〳〵とありければ女房少しもわるびれず。二人の若を召連れてオクリ父なれ〽前にぞ直しける。地無慚やな[illegible]どもは五つと三つに成りけるを。忠衡雙の膝に抱き。後れの髪を搔撫で〳〵。しばし涙に咽びつゝ。ア、さて不便の者どもや。幾程添はぬ間を親となり子と生れ。剰へ父が手にかけ殺さん事前世の因果と云ひながら思へば辛き事どもかな。さりながら殺す父な恨みそゐ。これ叔父どもがなす業ぞ。念佛申せといふまゝに兄花若を引寄せて。胸元を二刀刺殺し押伏する。弟が是を見てわつと叫び怖いぞなう母上樣と抱きつく。忠衡心は消ゆれどもやれ花光よ。汝ばかりは行かぬぞ父も母も行くぞとて。母に其の儘抱かせながら眩のかゝりを一刀。わつとばかりを最期にて同じ枕に押伏せ二人が死骸の其の上に、夫婦諸共倒れ伏し聲も。惜まず泣きにけり。涙のひまより忠衡は。さても〳〵如何なる前世の宿業にて。現在の我が子をば。手にかけ殺すはかなさはア、あさましき武夫の。引くに引かれぬ弓矢の道。南無三寶しなしたり〳〵斯く迄武運盡くるものかとスヱテ又平

伏してぞ歎きける。地女房も猶し心は消ゆれども。男に力をつけんと思ひ。御歎きは理なれどもさり乍ら。子供を殺し我々が。存らふる身でもなし。定めて御身や自らが。過去の敵が子と生れ御手にやかゝるらん。何事も定まる業必ず歎かせ給ふなと。さも潔く宣へど。せき來る涙は白絲の フシ瀧津瀬に増すばかりなり。地忠衡聞て實に後れたり弓取の。心をゆるせば不覺を取る定めて押寄せ來らんと、子供が死骸を隱し置き郎黨どもを召集め。斯樣々々の次第なり用意せよとありければ。さすが和泉が家來とて命を惜む氣色なく。畏つて候と弓鎗長刀太刀刀。思ひ〳〵に腹卷し寄せ來る敵を今や今やと 三重へ 待ちにけり。フシ時刻移さず。地敵の大勢二重三重に押つ取り卷き鬨をどつとぞ上げにける。地城の内にもかくと期したる事なれば。木戸を開き切つて出で。兩方互に入亂れ火花を散して三重へ戰ひけりフシ忠衡は。地其の隙に物具して弓押張

櫓に上れば女房も物具し。フシ長刀提げ續きけり。地扨忠衡は大音揚げ。詞それ〳〵寄せ來るは照井金澤鳥海とここそ見れ。某がいふ事をたしかに聞いて詳しく語れ。我が兄弟ながら汝等が主ども程貪慾無道の者はなし。あはれ命がな今一つ欲し。天命知らざる兄弟どもの成れる果が見屆けたや。今某が放つ矢汝等に射るにてなし。兄弟のものどもに恨の矢。一筋受けて見よといふまゝに。十三束三つぶせ。三人張にとつて番ひよつ引きちようど放つ矢が。一陣に進んだる金澤九郎が胸板をぐつと射ぬいて餘る矢が。うしろに控へし番場の兵衛が兜の左手の吹返に。フシ火煙散して立ちたりけり。地是を始めて差つめ引詰めさん〴〵に射る程に。十七八騎射て落し。扨櫓より飛んで下り打物拔いてさしかざし。夫婦諸共切つて出でこゝを最期と 三重へ はげみけりフシ未だ時も。地移らぬ間に夫婦の人の手にかけて五十八騎斬つて落し殘りしやつばら四方へぱつと追散

らし。手に手をとつて内に入り。いざこれ迄と忠衡は鎧の上帯切解き。心靜に觀念し腹十文字に掻切れば女房やがて介錯し。刀の尖先口にくはへ打伏にかつぱと伏す。女房は二十九忠衡は三十三。惜しかるべき命かは誠にこれらが最期の體。忠とや云はん義とやせん前代未聞の次第なりとて惜しまぬ人こそなかりけれ。

右此本者太夫直の正本をもつて板行致候されば初心稽古のためこと〴〵くかながきにしてふししやうくぎり三味線ののりかたほどびやうし三重おくりの品々ひみつを殘さずあらはし令板行者也

江戸通油町　鶴屋喜右衛門

京寺町通二條上ル町　鶴屋喜右衛門　板元

寶　神　八　島

源氏烏帽子折

序堯風ゆるく吹いて東日おごそかに輝き。舜雨斜に注いで西園花を綻ばす。今此の時かや四つの夷八つの蠻春ら長閑に立浪の。後白河の法皇こそオロシ〽別きて目出度き。賢王なれ。地天つ御國を二條の院に讓りあたへおはしまし。玉體安く仙洞に遁れおりさせ給ひながら。萬機を後見まつりごち聞えさせ給へば。道ある御代と百敷や。詞秋豐に初儀式フシ治まる。國の兆なる。地既に平治二年正月七日。武臣安藝守平の清盛院参し。詞先つ新春の御慶を奏し。別して當年は目出度き事のみ候べき。御悦の表示御座候其の故は。源氏の大將左馬頭義朝藤原の信頼に與し。天下を傾けんとせし所に。衛督清盛待賢門の戰に打勝ち。義朝は野間の内海長田を頼み罷下り候所に。長田譜代の下人なれども勅命を重んじ。當月三日逢に義朝並に婿の鎌田を討取り候段地神妙に存じ長田の庄司忠致。同じく太郎忠澄召連れ参上仕る。義朝が首は獄を偉り。源氏重代の太刀物具白旗を切取つて。これ清盛が御年玉國安全に治まるも。ウタヒ一張の弓のいきほひたり。東南西北の敵を易く平げん。地法皇大きに御感あり。清盛を中納言長田は六位の從上に補せられ。重ねての院宣には。義朝が事は先祖滿仲より累代忠勤の功厚しと雖も。此の度思はずも朝敵信頼に與し。不覺の最期不便なり。內大臣の正一位を贈官し。朱雀の寺に標を建て追善有るべしとの御氣色にて。猶も長田を御階近く召され。汝眹が命を重んずと雖も。正しく主人と婿を討つ事天罰輕きにあらず。其の罪を償はんにも義朝が思ひ者。常盤の前と云ふ女幼き子供有りと聞く。尋ね出し守育てせめての恩を報じなば。妻子を勞る志草の蔭なる義朝も。仇を忘れて自ら汝が冥加となるべきぞと。漏るる方なき院宣の恵は賤が伏屋まで。實に明王の聖德に。譬へて云はば此の春の民こそ。御代の三重〽心なれフシ爪木には。地取殘されてありながら憂さは變らで常盤木の。浮世の力フシ落葉ふる。地下の醍醐に知る由して忘れ形見の涙の種。義朝公の俤は三人の子に慰み。今若は九つ乙若は六歲さて牛若は三歲にて。まだ乳離れぬ懐にスヱテ包む涙の世も狹く。猶も葎に埋れり。地いたはしや今若父の別れの涙の隙。竹馬取つて打乘り。詞歎き給ふな母上樣。あつつけ某平家追討の院宣を蒙り。まつ此の如く馬に乘り大軍を引率し。地父の敵清盛を討取るは今の事。源氏の大將今若が武者振御覧候へと。庭の面二三遍乘廻して立ち給へば。乙若小弓に小

矢をはげ赤き絹を笞に掛け。彼こそ平家餘さじとよつぴいてひやうど放ち。嬉しや平家を射留しと勇み給へば牛若は。母の膝より這下りて彼赤絹を。ずん／＼に引裂き喰裂き兄弟三人打悦び。平家の赤旗打取つたり。勝鬨揚げよぶい／＼おうとフシ手を拍いてぞ笑はるゝ。地此の人々の二葉より剛なるこそ理なれ。成人の後六十餘州を靡かせ源氏の光を輝かせし。右大將頼朝稀の冠者範頼。九郎判官義經とは此の兄弟の生先なり。常盤夢ともわきまへずなう恐ろしや壁に耳。左手も右手も平家方源氏の一家は皆亡び。あるにかひなき世の中に若しも平家へ漏れ聞え。如何なる憂さか重ぬべき。今日より左樣の惡戯せばコレ。つめ／＼するぞと怠狀だて牛若を搔抱き。詞今若も乙若も今日は何とて手習せぬ。未だ手本をあけざるか地はや／＼寺へとの給へば。あつと答へてしを／＼と編笠被き手を取りかはし。立出で給ふ後姿常盤御前は見送りて。

可憐の有様や頭の殿の在まして。世が世ならば供人よ馬よ輿よと云ふべきに。一僕をだに伴れさせぬ彼が源氏の總領の。成る果かと計りにてフシ伏沈み。てぞ歎かるゝ。地然る所へ長田親子大勢引き具しどつと入り。詞夫こそ常盤餘すなと牛若諸共引立つる。地常盤聲を上げ長田とは己れが事か。主を殺し婿を討つ非學非道の罪人よ。汝は鬼畜か木石か妾は命惜しからず。子供を助け得させよや。一つは其の身の祈禱ぞとスエテ前後不覺に泣き給ふ。詞長田打笑ひ。尤も帝より妻子は宥免との仰なれども。清盛公より根葉を枯せよとの御意を蒙る。サア今若乙若を出せ。さなくば命を取るぞといふ。ヲヽ地己れが心に引當ててさもしくも云うたりな。みづからも牛若も殺さば殺せ。今若や乙若が行方はいはじと叫ばるれど聞入れもせず搦め行く。神や佛も無き世かとあさましくこそ。三重へ見えにけれ。フシ是は捨置き。地爰に比企の藤九郎盛長とて

源氏重代の勇士なりしが。去んぬる保元の軍に父を討たせ。幼少より流浪して北國に漂へしが。力強く丈高く今年既に十九歳。源氏亡びぬと聞くよりも夜を日について都に上り。七條朱雀義朝のフシ御墓所に参らるゝ。地向ふを見れば我が年配なる若者の。直垂袴に太刀佩いて編笠傾ふけ盛長を。じろり／＼とまもりゐる。詞盛長不思議とよく見れば。古への寺友達義朝の膝元去らず澁谷の金王丸幼顔疑ひなし。地彼奴は義朝の御最期まで御供と聞きけるが。長田を討たずして逃げ來る卑怯者。詞をかくるも無益なりと見ぬ顏して御墓に。花奉り水手向け。生きたる人に云ふごとく。口惜しき御有樣や人らしき侍がせめて一人御供せば。斯く暗々とは成り給はじ。詞金王とかや云ふ粕丁稚臆病者の腰拔の。人でなしと知り給はず頼みに召連れ給ふ故。地不覺の御最期是非もなしと堪忍ならぬ當言し。尻目に睨む眼よりスエテ涙を。流し申しける。地金

王丸なりとせしがさあらぬ體にて香花を捧げ。卒都婆に向つて口惜しの御有樣や。詞某が諫を御承引なく長田に心を許し給ひ。果敢なく討たれ給ひしよな。當座に腹切つて冥途の御供と存ぜしかども。いや〳〵死は易し存らへて今一度源氏の御代と飜し。御恥辱をすゝがんと斯る體には候へども。地若君達は御幼少御家人どもは散々になり。有るかひもなき藤九郎盛長と云ふ素丁稚浪人して魂くだり。口先の廣言ばかりにて臆病者の大腰抜。何の役にも立ち申さず。源氏の御運の拙さよと。同じく尻目に睨付け〳〵フシ詞をあらし申しけり。地盛長また御墓に向ひ。詞石塔に耳なく卒都婆もの言ねばとて。拔かぬ太刀の高名腕無しの振臊。草の蔭にてさこそ可笑しく思されん。死を易じと申せども命を捨つる程ならば。長田奴に羽はあらじ討つに討たれぬ事や有る。地さりながら武士と思へば恨も有る。牛馬に劣りたる人外と思召せ。本意は某遂げ申さん未來の妄執晴れ給へ。ア、南無阿彌陀佛、と云ひければ金王亦御墓に向ひ。詞卵の中にも巣守あるは尤かな〳〵。親兄弟の兵に似たる方なき孫外れ。夫ほど心剛ならば。地去んぬる軍に今の口ほどなど高名はせざりしぞ。軍と言へば逃足早く。いさかひ過ぎての棒ちぎり木後の廣言腹の皮。逃吠の犬侍 フシ臆病々々とぞ笑ひける。詞盛長今は堪へかね犬侍とは誰が事ぞ。金王聞きも敢ず。又最前より其方が人外とは誰が事ぞ。ヲヽ澁谷の金王が事よ。ヲヽ犬侍とは御分盛長が事よ。盛長腹に据ゑかね。侍を捉へて犬とは如何に。今一言云うて見よと太刀に手をかけ言ひければ。ヤア侍とは人がまし。無益の太刀を拔かんより犬に似合うた尾を振れと云ふ。ヤイサおのれ。侍ならばなど主の敵長田は討たぬ。地五穀つぶしの娑婆塞げ。末を大事に思はずばおのれと爰で死ぬべきに。命が二つほしいな。ヲヽ我も源氏の御末を貢ぐ者の有るならば。御分と爰で死ぬべきに。命がも一つ欲しいな。詞イヤ倅め見事我と死ぬべきか。ヲヽ死にかねうかヤア討ちかねうか。誰をうぬめを。地討ちたいな切りたいな。無念さよ口惜しやと。兩方りきむ居合腰太刀の柄も摧けよと。握りひしぎ身を慄はし。互の心操りあひ兩眼に血筋をはり。齒を鳴して睨み合ふ フシ擬勢の程ぞ頼もしき。詞盛長かッら〳〵と笑ひ。ア、言ひがひなき狼狽者と死して益なし。地名將の御墓を腰拔どもに回向させ。勿體なしと云ふ儘に一丈有餘の高卒都婆。押取つて出でければ。金王續いて飛掛り。君の標は渡さじと確と取つて引きとむる。日本中古兵揃へに選ばれて大力と名にふれし。藤九郎盛長白澤王の怒をなせば。源平の其の中に强力の聞えある。澁谷の金王昌俊獅子王の力を出しゑいや。〳〵と捻ぢあへば腕骨膝骨腰の骨。つがひ〳〵は唐紅血ばしつて節あがり。額の筋は脛へ下り脛の筋は頭へのぼり。五百五十の力瘤九條

の藤蔓に松をからん
で苔むせる巖に生ひ
し如くにて、二人踏
んだる足の下土五六
寸くぼみ入り、左手
もおり右手遣ひ、うん
と云うて捻ければ。
四方八寸の角卒都婆
中よりふつつと捻切
つて。小躍してばつ
と退き、雙方睨んで
立つたるは　フシ人間
業とは見えざりけり。
地しばし詞もなかり
しが、一度に涙をは
ら／＼と流し。ヲヽ
頼もしゝ金王丸、心
底現れたり嬉しゝ嬉
しゝ。疑ひし　フシ
口惜しさよ。許して

くれよ」といひければ。こちが心も見届けたり頼もしし〳〵。最前の雑言も忠節のあまり。免せ〳〵此の上は心を合せ。平家を亡ぼし。頭の殿の鬱憤を休め申さんが。思へば拙き源氏の御運口惜しくは思はぬか。無念には思はずや口惜しや無念やと。卒都婆投捨てつつと寄り袖と〳〵に縋りつき。怒れる顔容引きかへてスヱテ悲嘆の。涙は堰きあへぬ。フシまことの姿ぞ哀れなる。地然る所に六波羅の方より雑色警固

あたりを拂ひ。囚人なりと罵り來る人々木蔭に立隱れ。能く見ればこは如何に常盤御前に牛若抱かせ。敷革に引据ゑ武士四方を取廻し。長田の太郎は太刀取にて瀨尾の七郎檢使と見えて。詞コレ〳〵常盤最早最期は極つたり。さりながら淸盛公の御心に從ひ給はば。三人の若を助け御身の望も叶ふべし。一生の思案所いかに〳〵といひければ。地常盤淚の隙よりも。ヤア自らは女なれども義朝の妻なるぞ。狼狽ごとばしいはずとも。早く首打て彼の長田めに喰付いて。本望を達せんと。あてに氣高きまなじりにてスヱテはつたと睨みはら。〳〵と淚は。フシ玉を貫けり。地今は是非なし首打て長田承るも慄ひ聲。膝わな〳〵と後に廻り。太刀振上げんとせし所を盛長金王飛んで出で。長田が胸板蹴倒し主君の冥罰思ひ知れと。首搔落せば警固ども狼藉者と立騷ぐ。槍長刀おつとり〳〵朱雀の。野邊の草の原露を亂して 三重〳〵切結び 地切りほどき追ひむすび。數十人に手を負ふせ八方へ追つ散し。立歸つてさあ。〳〵常盤御前は子供を具し大和路へ落ち給へ。詞日本國は平家方此の金王は姿をかへ。土佐坊昌俊と名乘り密に勢を集むべし。地出來た〳〵某は關東へ馳下り。武藏相模伊豆駿河上野下野安房上總。源氏譜代の兵どもそれにても叶はずば。八丈大島蝦夷松前鬼が島へ押渡り。蒙古蒙夷の鬼を集めて軍勢とし平家を易く亡さんヲヽ。尤々と約束堅き石塔にいとま申して立歸る風神。雷神厄神も取りひしぐべき勢は。詞鍾馗大臣獅子王の暴れたる。姿もかくやらん。

第二

地前の安藝守淸盛の御前には。嫡子重盛宗盛を始め一門殘らず伺候有り。未だ源氏の末類ども方々に忍び居て。常盤親子を奪ひ行き剩へ。長田の太郎を打取る事。如何なる大事か仕出さんとフシ評定。眉をぞ顰めらる。地時に重盛申さるゝは。詞たとへ源氏の末類神にもせよ。大將義朝を滅す上は日陰者ども寄り集り。たやすく平家を滅す事及びがたし。されば易に曰く亢龍悔有り盈つれば虧く。地此の殘黨を討たれんこと事を好むに似て候。只義朝が三人の子供を密に探し出されて。流罪せらるゝまでに候と穩便に宣へども、淸盛怒り甚しく常盤の前は女なり。子供は幼少遠くは行かじと。難波妹尾を大將にて。三百餘騎の追手を方々へこそ差向けらる。扨また彌平兵衞宗淸に仰せ付け。不思議の者を搦捕れと在々鄕々町小路。殘りなく觸れければ當時平家の勢に。靡く草葉の蔭にだに隱るゝ。方は。三重なかりけり。

常盤御前道行

フシ頃は睦月の。末つ方。春めきながら冴えかへり。袂の氷柱時知らぬ常盤御前は常盤木の。木の下闇に踏迷ふ。スヱテ夜深き空や世にあらば。今ぞ妹背の寢入ばな。フシ今朝はつれなくむく起に。フシ抱き賺して。

牛若の。夢をば母がふところに。フシオクリ泣寝入りせし。フシいとしさよ。今若はおとなしく。地あづまからげに脛巾締め乙若の手を引いて。先に立ちたる歩みぶり。小太刀佩いたる腰つきも。さながら父のフシ御影かと。涙になみだ。果しなく。しのびつけたる顔癖や小オクリいとど。傾ふく笠の雪。打ち拂ひつゝフシ見渡せば。賤が門田に水菜摘む。東寺四つ塚鳥羽畷諸國の秋を積みのせて。御世の貢の牛車京の。なごりに。とゞろかば我が心も。打ちのせて送れ。見おくれ。フシ呼びかへせ。返らぬ水の泡沫に。初歌うたふ。初蛙。梅に。年とる鶯の。ハルフシ囀は雪に。たゝまれて。まだ片言の初音鳴く。己がさまざま春なれや。スエテ人の姿も若緑。竹田の里に來て見れば。小オクリ藁屋が。軒もかざり繩オクリ穗長譲葉。ゐほしにわけて門松。かけの小鼓や。愛敬有りける新玉の。年も若やぐあしたより。水は和ぐ柳は芽ぐむ。里も榮えましま

すフシ萬歳。鳥追とりどりに。ノシ春はにぎはふ。折からの。厄神參り厄拂ひ。ゐる氏子は二つ三つ。まだ一つ身の縫あげに蘇民。將來子孫繁昌頭堅かれと。フシ石の華表の二柱。二人の親の。家苞や。小弓に添へし八幡山道すがらの參詣を。今若は御覧じて。是ぞ源氏の氏神に我が門出の吉相と。スエテ御手を合せ給ひければ。兄を見まねに乙若も牛若も。母君の乳房の上に手をあはせ。左候左候と愛らしさフシ父義朝のましまさば。いかに悦び。給ひなん。たぐひなき若どもを。母が袂の地下にのみ。埋木となすべきかと昔を慕ひ行末を。スエテ思へばつきぬ憂き涙フシ我が身一つの雨ぞかし。古人の浮名たつ。戀の百夜の深草山オクリあまぎる。雪に雲くらくまだ朝あけの心地して。三里にたらぬ玉鉾も。草鞋こほり足こゞえ雪にも。おなじ墨染のさくらの寺の入相に。宿はなけれど里の名は伏見に。行きくれ三重給ひけり

フシ降る雪の。地おと聞く程に靜かなる。竹より奥の一つ庵。猫の通路あと付けし。たゞ一筋の道細く。スエテ油火ほのかに搔立てて。女の業かしどけなき。引きさき紙を結びつぎ。半ばあげたるフシ伊豫簾。嵐ぞ雪を。もて來る。地常盤御前はともし火の影をたよりに尋ねより。詞大和へ下る女なるが。幼き者を召具して雪に道を失うたり。地一夜の情とありければ。十八九なる女房の紙燭かゝげて椽に出で。親子の人をつくづくと打守り。いたはしの有樣やお宿申したうは候へども。此の頃平家の沙汰として義朝のゆかりをつよく詮議の候が。詞人々の有樣咎めんは必定なり。自は白妙とて藤九郎盛長が妹源氏譜代の者なれども。不思議の緣にて平家の侍。彌平兵衞宗清の忍妻となり候。地今にも夫の宗淸殿來り給はば。憂目をこそ見給はん情なしとな思召しそよ。妾が辛きはいとしさゆゑ何處へなりとも落ち給へといとねんごろの詞の色

フシ紙燭。吹消し入りにけり。地常盤も今は頼みきれ。力も落ちて先へも行かれず後へとては戻られず。とても此の上は運に任せて兎も角も。今宵は爰に明さんと少し風よぐ軒蔭に。小袖の褄のうはがひを敷寝の床とかたしかせ。笠をならべて屏風とし昔は翠帳紅閨に。隙間の風も寒かりし。身は習しと身を捨てて兄弟に降る雪を打掃ひ打掃ひ。あはれとぶらふ小夜千鳥オクリないて
へ其の夜を更さる丶 フシ間なく隙なく。心なく。雪はこぼすが如くにて。寒風颯々と烈しくて。人の肌骨にしみ渡り肌を刺す事鋭き刄の如くなり。いたはしや母上は。つかれたる身を寒氣に破られ。悪寒五體を苦むれば。ア丶堪へがたやと伏しまろびスエテ前後。不覺に見え給ふ。地今若乙若驚きなう如何にせん悲しやと。額を抑へ手をさすり。いかに乙若母上の寒からんに。物きせません尤と兄弟帯解き身拵なる。小袖を脱いで母上の。裾や枕に取重ね取重ね。

我は獸はで埋もる丶 フシ雪の裸身あはれなり。フシ母は苦しき。枕を上げ。扱いたはしの子供やな。かばかり母を大切にいかに孝行なればとて。和御前達をこごえさせ。親も冥加に フシつくるぞとよ。地子は息災に生立てて見するぞ深き孝行なれ。風ばしひくな衣着よと着すれば脱いで母に着せ。詞いや我々は寒からず。侍の習ひには如何なる雪にも軍して。地よき敵と組まん時寒し冷たしなんどとて。敵に後を見すべきか。寒いと云ふな乙若。寒いと思すな兄上とかひぐ\しげにいふ聲に。牛若目さまし這ひ出でて見るを見まねに衣をぬぎ。同じく母に着せ參らせ。手足もふるひ凍ゆれど其の色見せず齒ぎしみし。拳を握り堪ゆる體母は氣もたえ目も眩み。ア丶情なやあさましや。百萬餘騎の大將軍とも仰がるべき若どもに。一重の衣を着せかぬるは如何なる神の咎めぞや。いとほしの人達や御身たちが志。綾錦より厚ければ母は着ねども暖か

なり。ふびんの者よこち寄れと三人一所にかき寄せて フシ抱き。伏してぞ泣き給ふ。ことわり。とこそ聞えけれ。地月も夜半に更行けば彌平兵衛宗清。女の庵に忍びしが雪にうつろふ人影は。何者か怪しやと傘かざしよく見れば。常盤親子にまがひなし。網代の魚ごさんなれあまさじと身づくろひ。なほも事をうかゞふにぞ慈母のあはれみ孝子の振舞。さすが源氏の根ざしなりいたはしさよあはれさよ。詞今人々を助けしとて。源氏の運の末ならば終には搜し出さるべし。地たとへ搦捕つたりとて。盡きんず平家の御果報の長久にもよもならじ。なさけ知らぬは匹夫の勇。殊に我が妻の爲には主君なり。彼是助けて落さんと思ひしがイヤ待てしばし。詞主君清盛の御眼識を以て仰を蒙り。助けては道たゝず。地搦捕つては情なしととつまひつ思案して。さあらぬ體にて戸を叩けば。女房待ちかね柴の戸の。雪打拂ひ草鞋もオクリとく\/へ庵へ伴ひけ

○地今宵は殊なう冷え候ふ先づ盃と暖めて。暫くさいつさゝれしが女房申しけるは。詞なう宗清殿。みづからは源氏御身様は平家。若し只今にも義朝の所縁とならば。如何し給はんとよそながらこそうらどひけれ。宗清扨こそと思ひ。ヲヽ云ふまでもなし主君清盛の仰なれば。いかに汝が主なるとて用捨はならず。眼にかゝらば搦捕つて六波羅殿へ引立つる。地只何事も見ぬが佛聞かぬが花と答へしが。親子の人々物ごしの手に取るやうに聞えしを。女房はつと思ふ顔宗清氣をつけ。詞やれ小鳥どもの軒に宿りてかしましきに。あれ追拂へと云ひければ。地なう情なやふくら雀の羽を悩み。雪に折れ伏す篠竹の笹に一夜のかりの宿。さのみにいたくな宣ひそ。はや夜も更けぬ床寒し音せでお寝れとすゝめける。詞いや／＼某は殺生好。鳥の聲を聞けばとらではおかず。是非追拂へと云ひければ女房更に合點せず。夜な夜なとまる小鳥なれば追うても打つても立たぬといふ。宗清心氣を沸しエヽ不合點な。地いで某が追退けんと弓矢取つてかけ出づる。女房は人々の影隠さんと引きとむる。もぎ放し突退けて空矢四五本さしつめ／＼射る音に。常盤驚き兄弟をまへうしろに掻抱き。フシはふ／＼逃退き給ひける。地宗清とつくと見送りて。詞あれ見よ女房雀どもが逃げつるは。其の儘おきて某が殺生し。あの雀を殺させて汝が忠節立つべきか。只何事も見ぬが佛聞かぬが花今合點いたかといへば。地女房とかうの言もなく。あら頼もしやとばかりにてスヱテ袂に縋り歎きしが。地扨過分なる御心とかう詞に及ばれず。連添ふ男に目がくれて主殺しと云はれんも一門の名折なり。又おの様に逆ひても本望にも候はず。如何と案じくづ折れしに有難き御了簡。斯ばかり深き御恩賞親にも子にも兄弟にも七珍萬寶の寶にも。男一人はフシかへぬぞや。若君達も常盤様も此の恩忘れ給はじといへばアヽ／＼暫く。詞常盤と云へる名を聞いては。清盛公の御前にて某が誓文立たず。地いつまでも雀々見ぬが佛聞かぬが花と。うなづき合ひし弓取のフシ妹背のわけぞ頼もしき。地藤九郎盛長は人々に行逢ひしが。宗清が放つ矢は妹が二心か。いぶかしと庵に立ち事のやうを聞居け。横手を打つて涙をはら／＼と流し。爰明け給へ宗清殿。是は白妙が兄源氏の郎等藤九郎盛長にて候。心底によつて妹を刺殺し。御邊と勝負を決せんため是までは來りしが地只今の志生々世々に忘れがたし。一禮のため對面せんと云へば宗清から／＼と笑ひ。詞又斑鳩の雀が來つてよしなし事を囀るよな。某平家の扶持を蒙りながら。源氏方の禮をうけ此の宗清が立つべきか。エヽ狼狽たる羽抜鳥。地左手も右手も狩人の追鳥狩の網高し。鷹にとらるな餌差にさゝれな。古巣の雛を飼育て初音を揚げよと云ひければ盛長悦び合點しヲヲ頼もしゝ田の面の雁。春は越路

に立歸り源氏一味の友千鳥。大將軍の羽翼の下掛けたる旗は白鷺や。群居る鳥の翼を鳴らし會稽の巣立して。上見ぬ鷲の譽を見せん尤。尤急げや急げ山鳥の尾のしだりをの。長居は恐れお暇と夕告の鳥が啼く。あづま路指して飛ぶ鳥の飛ぶが如くに下りける心はさすが大鳥の。千里一はね源氏の運末たの。もしうぞ聞えける。

第三

寶にや三百六十日暦々と卷盡し。既に承安三年と移る月日は程もなし。平家の驕日に榮え。清盛既に太政大臣を經て入道し淨海と法名ある。嫡子重盛内大臣。二男宗盛中納言右大將。其の

源氏烏帽子折

外末子末葉殘らず稀有の官職、攝家華族にことならず。爰に三條烏丸烏帽子屋の五郎太夫とて。烏帽子折の上手を召し。位々の烏帽子冠いひつくれば。則ち出來致せしと フシ 西八條に持參する。地 一門よろこび着し給ひ御悦び事終り。五郎太夫に祿賜はり淸盛入道仰せけるは。詞 先年義朝が子供討つて捨つべかりしを池の禪尼の申すに依つて命を助け。今若を伊豆の國蛭が小島に流せしが。密に元服し右兵衛佐頼朝と名のり。當家追討の院宣をこひ望むよし風聞す。地 又弟牛若も成人し。京近邊に忍び居て院宣を望むと聞く。然らば頼朝

ら牛若も法皇より。密に位を賜はり烏帽子冠求めんは必定なり。隨分氣を付け見なれぬ者烏帽子買はんと云ふならば。早速に注進せよと宣へば。長田の庄司進み出で。詞 これ五郎太夫かりそめの事ならず。油斷なく詮索し某まで知らされよ。此の者どもを注進せば御褒美にあづかり一代浮み上る事。地 長者になるぞせい出せ。エヽ何がさて／＼身の爲といひ御奉公油斷は致さず候と。御請を申し罷立ち宿所に。こそは 三重 立歸れ フシ 春の光を。烏帽子折。地 五郎太夫がひとり娘に東雲とて十五歳。職人なれど烏帽子屋はお公家交はり上びたる。しよざいに連れて氣も至り都は戀の名所とて。自らなる。伊達心 フシ 町には惜しき姿なり。今日は吉日商よし棚飾らせて賣初に。細工の仕初祝儀すぎ乳母婢を招き寄せ。春の遊びも今すこし今日は羽子突き遊ばんと。腰元呼びて遣羽子や。彼方此方へつくばねの オクリ 韓より落つる。歌 籠の白玉ひとふたにみ。

よう舞ふ小羽子。外へきるゝな。それゆくな。ヲドリ 羽子さへも。袖にとまりて情は。厚き羽子板のえにしに似たる我が中よ。夏痩もせず散もくはぬ年の數々 フシ 面白や。地 すむかひもなき世はつらし牛若君十餘年の霜雪を。鞍馬の山にふみわけて十六歳になり給ふ。秀衡を頼み奥州へ下らんと思せしが。詞 わつぱとあらば平家より搦めとれとの沙汰きびし。地 元服して男になり下らばやと思召し。都三條烏丸。太夫が棚に立寄りて烏帽子買はう。なう フシ 烏帽子買はんと仰せける。地 女子ども聞きもあへず。詞 飾りたる烏帽子の内何れか所望候ぞ。よきもあしきも空價なし。望み次第に召されよとしほも無く答ゆるにぞ。地 はや東雲は牛若に引かれて廻る戀車。わりなき思色に出でなうぎごつなの人々や。詞 商といふものは賣るにも買ふにも品ぞ有る。地 御用あらば妾にとちよこ／＼とお側に寄り。烏帽子は何が御所望ぞや御容色はよし風はよし。

見る人我をや折烏帽子戀に意氣地を立烏帽子。此のお妾にわけ知らぬ我も心を懸烏帽子と。背中をとんとうつつなや。しんきとばかりいひさして フシ 顔差入るる襟深し。地 牛若君も色なれぬ鞍馬の山の深山木の。花珍しくむづ折れにくわつと赤らむ顔をあけ。誠にやさしき詞の綠今日が情の初冠り。あはれ人目のすき額風折烏帽子折もがなと。手を取り給へば東雲も氣も魂も揉烏帽子。かけ緒の紐のもろ結び解けぬ思ひとなりにけり。地 かゝる所へ五郎太夫立歸り。こは何事と言ひければ娘は慌てゝうろ／＼と。烏帽子召されよ父上と太夫が頭にかづがせて。フシ うろたへまはるをかしさよ。地 太夫牛若を一目見て。してやつたりと腹をも立てずにつこと笑ひ。詞 ムヽ、お若衆は烏帽子が御望みか。好みはなきかと問ひければ。牛若聞き給ひ扨は御亭主候な。此の童が着ようずる烏帽子は。大鏽の顆を荒らかに一くせみくせませ。ひながたに間をあらせ櫛

形を厳々と。雙眉つけて左折が所望とある。地太夫案にたがはずと思ひながら。猶も試し見んと思ひ。詞あら似合はぬ好事や。當代左折を召さうずる人は。一年野間の内海にて失せ給ひし左馬頭義朝か。其の御子惡源太義平。二男朝長三男頼朝。扨は鞍馬におはします牛若殿とやらんこそ。左折は召されうずれ平人は及びなし。但し少人は由緒ばし候か牛若をかしく思召し。身には系圖のなけれども若しも望むる人あらば。地都の宿に古き烏帽子の有りつるを。所望して着したり。色左折も右折も。此の冠者は知らぬなりと。脱ぎ捨てて。通るならば。御身の難も有るまじ。童が科も。遁るべしひらに。フシ所望と仰せける。地五郎太夫はしすましたり。牛若に紛ひなしと心の内に悦び。詞其の義ならば出來合は候はず。今宵の内に折立てさせん一夜は是にと云ひけれども。地いや只明日參らんと。立ち出で給ふを東雲袂を引留めて。父もお宿と申さるゝこそ幸なれ。烏帽子も折つて御祝儀も取りはやして參らせん。是非にとあれば牛若も。なさけの絲に繋がれて フシ岩木に有らぬ風情なり。地太夫いよ／＼笑を含み。でかいた東雲年の始の商丹那。隨分御馳走申せやと口には云ひて心には。たつた今搦捕り牛若殺して牛の舌。大判小判の摑みどりと。山も見えぬ胸算用六波羅さしてぞ三重急ぎける。フシいつの間にかは。たが掛橋の思川。はや宵の間に深くなり。スヱテもらさぬ水はあひぼれの フシ淵も。磯とぞちぎらるゝ。地其の夜も更けて東雲は左折に小結をゆひ。御烏帽子出來たりみづからは殿始。おの樣は烏帽子始目出度く閨にて御祝儀あれと。瓶子に盃取りそへて フシ御前にこそ直しけれ。地牛若御覽じ扨々うれしき情のほど。詞今は何をか包み申さん某は。左馬頭義朝が八男牛若丸。地平家を滅し源氏の代となし此の恩は報ずべし。さりとても世にあらば日本國の諸大名。悦びの色をなすべきに。口惜しの次第やとスヱテ御落涙ましませば。地扨は左樣に候か。御いたはしうこそとばかりにて共に袖をぞ絞りける。牛若重ねて我が先祖義家は。八幡にて元服あり八幡太郎と名のり給ふ。地我も是をかたどりて烏帽子親は正八幡。鞍馬の大悲多聞天。太刀と刀を八幡多聞と觀念し。床の柱に立て置きて我と烏帽子を取つて戴き。太刀の前にも三々九度。刀の前にも三々九度。直に土器頂戴し。扨名は何と付くべきぞ。チヽ九郎冠者源の義經と付け申さん。源氏の御代は千秋樂萬歳樂とくりかへし。ひとりごととして祝はるゝ フシ御有樣こそあはれなれ。

烏帽子折名づくし

地東雲つく／＼見參らせ。御元服を祝はんと奥の一間につつと入り。かねて用意やしたりけん。あまたの烏帽子掛に樣々の烏帽子を着せ。色々の裝束を打掛け／＼。人の如くに拵へて御前にならべさせ。詞なうお

目出度や關八州の諸大名御味方申さんとて。手勢〳〵を引きぐして御悦に參りたり。地末繁昌の其のしるし御酒一つとぞ祝ひける。ロネ調牛若ほとんど御悅喜あり。實にめづらしや面白や。地頼もしや東路は。源氏よしみの梓弓。取傳はりし武士の オクリ 假名は如何にとのたまへば。シテ地姫は烏帽子を打ちかづき。是は伊豆國北條の四郎時政。一門榮え類ひろし。數ならねども某が。御味方と申さんに凡そ近國に殘る武士は候まじ。手勢は限り知られずと。フシ謹んでこそ申しけれ。ワキ次に

源氏烏帽子折

坐せしは梨打烏帽子。直垂着流し太刀佩いて。さもおほやうに見えしは如何に。　シテさん候某は。畠山のなにがし秩父の庄司重忠。若武者の昔より力業を好んで。大船を蹴返し龍車を留むる勢有り。四相を悟る自然智は　ワシ我さへいさやしらつゆを。玉と欺く。はかりごと。ゐながら萬里の敵を察し。戰はずして勝利を得。天地を動し。鬼神を感ぜしむるなる。文武を雙の翼の臣。手勢合せて六萬餘騎御先手とぞ　フシ答へける。　ワキ續いてなみ居し人々は。態烏帽子に大紋の袖たぶ。〱

とかき合せ。さもゆゝしげに揃ひしこそ土肥か小山か梶原か　フシ其の名ゆかしとの給へば。シテそも／＼是は。宇多天皇の後胤佐々木の太郎。同じく次郎三郎盛綱。四郎高綱五郎吉清候なり。ワキ次に何候す黒折烏帽子。後高に着なしたる。本國實名はいかに／＼。シテコハリこれこそ三浦の旗頭。和田の左衛門義盛年つもつて六十六。軍に逢ふ事十五ヶ度。一度も不覺の名をとらず老木の。枝は　地たゆめども。心の。櫻はなやかに。榮えん君の御出世を。千代萬年と壽きて九十三騎の一類ども召具し參上仕る。ワキ末座に控へし黒烏帽子。素袍袴に大太刀佩き、殊にすぐれて見えたるは。是も三浦の一黨ならめ　シテ實によく御覽じ候ひし。われ義盛が三男朝比奈の三郎義秀。色黒く手足あれ。ワキ聲ざはりの荒男　シテ茶の湯連歌は不得手なれども朝比奈が　ハル癖として。敵と見て勇む事。荒鷹が雉子を見て鳥屋を。潜るにことならず。たとへ平

家くろがねの。城を構へ石門に籠るとも。フシ片手に取つて押破り。地清盛父子を始とし撫斬。胴斬・梨斬。將棋倒しに攻滅し。源氏の御代となし申さんと辯舌に淀みなく。それ／＼に答へしはフシいさぎ。よくこそ聞えけれ。地爰に長田は五郎太夫が注進にて其小冠者何事かあらん。拔連して討取らんといきりきつて來りしが。障子の隙より遙に見れば。烏帽子直垂着流して大の男數十人。地和田よ佐々木よ朝比奈よと云ふ聲に長田の庄司はつとわななき氣を失ひ。空おそろしく胴慄ひ足も腰もわな／＼と　フシ前後を忘するばかりなり。同太夫きつと見おくれ給ふか庄司殿。踏込んで一討に遊ばせといへば。あれを見よ鎌倉勢が雲霞の如し。こちらが細工にならぬと云ふ。太夫驚き嘆きて見れば。地案のごとく兵士數多列坐せり。あつと言ふよりふるひ出し。二人はひよろ／＼うろ／＼とフシふるひて何の埒もなし。地いづくにてか金王丸此の由を聞出し。飛

ぶが如くに駈付け案内まうと呼はつて二王立にぞ立つたりける。同長田味方と心得駈出で見れば金王なり。ハア地南無阿彌陀佛と地にひれふし　フシ穴へも入りたき風情なり。地太夫奥にうろつきしを飛掛つてしつかと捕れば。長田表へ逃んとす同じく取つて伏する間に。牛若殿諸共に奥より立出で給ひける。同太夫聲をあげ我等は何も科は無し。烏帽子が御用に候はゞおまけ申さん召しませいと慄ひ／＼いひけるを。ヲヽサ某が烏帽子は。鐵の五枚兜形うつて龍頭に錣の付いたる烏帽子が所望ぞ。己れ助くる者ならねど娘が心を察し命ばかりは助くると。地腰骨どうど踏み折れば泣く／＼ゐざり助かりぬ。同是長田某は今法體し土佐坊昌俊と名乗れども。金王丸といつし時うぬめを漏せし無念さに其の時の姿を殘し四十になるまで此の前髪。地今こそ落せ是見よと。附髮かづらを取りしより土佐坊とこそなりにけれ。今殺すはあつたらもの關東

へ連下り。頼朝の御前にて弄殺にすべしとて高手小手にからめつけ。扨源氏御出世今日の御祈禱に。千秋萬歳所繁昌ひとさし舞はう日出度やと。三番叟の烏帽子を着し袖をかざして。色詞ハヽアおさへて〳〵。思ふ敵を取つて押へて。源氏の御代より外へはやらじとぞ。地思ふと若君を祝ひ參らせとう〳〵東へ御下りおはしませ。扨某は都のやうだい聞きつくろひ。跡より追つ付き奉らんと勇みに。勇める有様は。只樊噲も斯やらんと恐れぬ。ものこそなかりけれ。

第四

地彌平兵衞宗清は。妻の白妙源氏の由緣ある故に。頼朝兄弟の命を助け參らせしが。其の身平家の譜代なれば生中に事むづかし。源平分ち立つ迄は暫く身を退き世上を見んと去年の秋より病氣といひて奉公ひき。養生の氣晴しとて夫婦諸共京近く。野山巡ればおのづから心浮かるゝ瓢簞に。酒など入れて腰につけ觀音巡り寺社の椽。花の下蔭行暮るゝ其所を其の日の極樂と。物にかまはぬ身の樂は フシ命も延ぶる姿なり。地かゝる折から十五六なる公達。紫縫の大口に左折の小結着て。直垂の袖にて顔かくし忍ぶ振にて通りける。夫婦きつと目くばせしつゝと寄つて袖をひかへ。詞是申し。御姿粉ふ所は候はず。源氏の大將牛若殿と見かけたり。某は平家の兵彌平兵衞宗清申すべき仔細あり。名乘らせ給へと小聲になつていひければ。少人聞きも敢ずアヽ某こそ牛若よ。定めて我を探すらん今は遁るゝ所なし。はや首討つて清盛に見せ。高名にせよと フシ凉しげにして居られけり。地宗清手をうち閑生に植ゑても紅のさすがなる御振舞。詞全く君を討奉る心ならず。是なる者は我が女房白妙と申して御家來藤九郎盛長が妹。其の由緣によつて先年御幼少の時分。伏見の里にても御兄弟を見のがし助け奉りし。今とても某世間の唱へも候へば。御味方こそ叶はずともなどや討取り申すべき。地心安く落し申さんといへば。少人聞き給ひ然らば明けて申すべし。我牛若にて更になし。烏帽子折の五郎太夫が娘東雲と申す女なるが。親にて候五郎太夫慾に目くれ訴人せしを。澁谷の金王入道土佐坊の働にて。若君も恙なく長田も生捕り給ひしを。父の太夫が弟妾が爲には叔父坊主。吉峰の雷玄法師重ねて平家へ訴へ。詞監物太郎頼方が手勢を以て。雷玄法師が加はり東路へ追手をかくるよし。地妾は君が一夜の情。隙に若君様一足なりとも落ち給はん。親叔父の惡心も妾が露の志と スヱテ語りもあへず泣居たり。地宗清夫婦感じ入り。其の義ならば女房そちは此の姫と同道にて。随分追つ付き御供せよ。某は爰に殘つて追手の大將監物太郎に出合ひ。詞長噺を仕かけ邪魔をいれん。其の間に早々落せといひければ。地白妙悦び然らば妾も身を扮さんと。夫の羽織に編笠かづき。東雲を先に立て フン跡

を率して追ひかくる。地案の如く追手の大將監物太郎手勢引具し驅來る。詞宗清乾度見これ〳〵〳〵。監物太郎頼方にてはなきか。あわたゞしき體何處へゆくぞといひかくる。頼方振返りヤア宗清か。我は今日源の牛若が追手の役を蒙り。是なる訴人は烏帽子屋の五郎太夫が弟雷立法師。則ち彼が案内にて只今急に追驅くる。地其の方は病氣とて業をする義ましと。言捨てて驅出づるを先づ待てと押止め。詞夫は近頃太義千萬。さり乍ら侍は息災にて。奉公するこそ手柄なれ。随分ほつかけ牛若を討留めて御加増に預り給へ幸ひ酒を持合せたれば。地門出祝はん先づ一つと腰の瓢簞取り出せば。地是は誠に氣が付いたり然らばお辭義申さぬと。引受け〳〵我も三盃。雷立も三盃御亭主も三盃。合せて三々くどうはた禮申さぬと又驅出づるを。詞はて扨監物呑逃するは手が惡し。地此の頃久敷參會せすしばしは積る物語。今少しとぞ引留むる

監物重ねて。詞時も時折も大事の追手に行く者に。咄せんとは譯もない要を致せと引き放す。はてさう堅ういふな新しき咄ありちよつと咄さん聞けといふ。地監物すこし腹を立て。泣く子も目あけ咄どころか。其方がやうな隙ではなし重ねて聞かんと走けてゆく。詞いや咄掛つて話さでは置かぬぞと。地ねぢ合ひ引合ひとどむれば。監物はうどもてあぐみ。詞さあらや〳〵と咄さば咄せと。不承顔にて聞き居たる フシ心意氣こそをかしけれ。詞宗清どうど座をくみ是は大事の物語。夫なる御坊も軍兵達も聞き給へ。武士たる者は後學と仔細らしく是作ひ。地昔々或所に。爺と姥と有りけるに。爺は山へ柴刈に姥は川へ洗濯にと聞きも果てず。詞エヽ要な者は餘り人をたわけにする。酒に醉うたか宗清 地相手になるな軍兵ども急げ〳〵と振切つて フシ跡をも見ずして走り行く。詞宗清聲をあげ。大事の咄の腰を折る先づさきを聞け監物。猿の面は眞

赤なと笑ひてこそは 三重 別れけれ 地御曹司牛若は江州土山まで落延び給ふ所へ。詞白妙しのゝめ追付いて雷立法師が訴人にて監物太郎追驅け申すを。宗清道にて長物語を仕出さん。其の間に一足も早く〳〵と言ひければ。地牛若げにもと悦び宿を出はなれ給ひしに。頃しも春の雪氷とけて流れて田村川。水嵩増つて波早く越すべきやうのあらざれば。よし此の上は如何せん運は天に有明の月のますがゝ爰にとて。田村の宮の拜殿に フシ暫く休らひおはしける。地監物太郎頼方は宗清が長咄。よしなき隙を入れけると足をも付けず打ちければ。はや土山に着きけるが。田村川の水高し此の邊にこそ在りつらめ。鬨をつくつて脅かし搜して討てや者どもと。十方に入亂れ鬨の聲をぞ 三重 揚げにける フシ今は遁れぬ。地所ぞと源の牛若丸爰にありと駈出で給へば。白妙しのゝめ諸共に。左手右手に引つ添うて面もふらずはせ向ふ。詞彼奴は兵衛天狗の

弟子殊に方人有りけるぞ。地悔つて怪我するなと八十餘人の追手の勢群つて掛りしを三人飛鳥の身も輕く飛びこえ。跳越え踊越え花を亂して。三重へ戰ひける フシ女童と。地云ひながら一人當千の剛の者。入りかへ／＼追立つれば。平家の兵斬立てられ。フシ戰しらんで見えにけり。地雷玄法師たまりかね牛若は鬼も角も、詞親叔父に逆ひたる女めこそ面憎けれ 摑殺してくれんずと大手を擴げて駈廻る。しのゝめ薙刀おつ取りのべ是叔父坊樣衣の手前も有るぞかし一門の惡心を。教化こそせられずとも人の訴人は何事ぞ一子出家すれは九族天に生ると云ふ。御身は引きか八六親を地獄に墮す大惡僧な、結構な御出家ぢや。地口惜しくば寄つて見よと薙刀ひらめかせば 詞雷玄坊甚だ怒をなし。惡心却つて大善根、事も知らで出家をもどく己れこそ罪人よ。地賽の河原の石子詰と神前の栗石を。おつ取り／＼礫打雨や霰と投げかくる。しのゝめ薙刀胸になし。飛びくる石をはら／＼／＼はらりはらり 三重へきり拂ひ 地八方に打拂へば身にはあたらず飛返り。敵の眞甲額口鼻筋首筋頭の鉢。散々に打割られわつというてぞ逃げ散りける。詞白妙少し代らんと逃行く敵を追懸けしに。賴方か郎等卜部の新七取つて返し渡り合せて切り合ひしが。太刀を捨ててむずと組む白妙につこと打笑ひ。女と思ひ侮るな盛長が妹宗清が妻なるぞ。主有る女に抱付くはすこびたる 徒者生けては我が道立たずと 地いふより早く搔潜り褄取りして跳返し 隙なく首を討ちたるは フシ瞬きならぬ早業なり。地討殘されたる兵どももをめいて懸れば牛若丸。ものものし葉武者ども一人も餘さじと。獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手をくだき隱れ。現れ陽炎稻妻水の月手にもたまらず。三重へ防がるゝ 地雷も賴方左右より隙間なく攻めければ。地鳥居の笠木に飛上りから／＼と打笑ひ。なう追手の人々。其方は大勢味方は僅三騎なり。地しばし休み申すぞと左り扇でおはしける。詞賴方あせつてもがけどもすべき樣のあらざれば。遠矢に射取れと打ちつがひ。よつ引いてはたと射れば側なる松にひらりと移る。二の矢を放せば心得たりと元の鳥居に飛びもどり。地梢の猿の枝うつり フシ振舞ふ蜘蛛の如くなり。地雷玄今は堪りかね愚僧か思案候へば。鳥居も松も掘倒さんと土民の家なる鐵おつとり。詞柱の根際に打立つる牛若笠木に兩足かけ。宙に下つて雷玄が眞甲をしたゝかに切り給へば。南無三寶と逃げて行く續いて飛びをり取つて引据ゑ。御坊にくどい教へなれども釋迦に經といふ事あり。生きて恥を曝さんより牛若が引導にて。成佛せよと拜打ち頭より臂まで左手右手へぞ裁けける。大將賴方怒をなし。女童に是程まで切立てられし口惜しさよ。地一騎も殘らず討死せよかかれやかゝれと恥しめられ。むら／＼と寄せかくる夫こそ望む所よと。又三人が引返し捲り立て

捲り立て息をもつがせず追ひ立つれば。四十餘人腰伏せて生殘る者までも。半死半生敵はじと田村川に飛入り〳〵フシ浮きぬ沈みぬ漂ひける。詞牛若御覧じてヲヽ面白し〳〵。詞人様こそさしなれとて三人手に手を取りくみて。流るゝ武者の頭をふみ。肩を踏まへて飛越え。〳〵向ふの岸に駈上りヲヽ骨折〳〵御辛勞。關東勢を引率し重ねて一禮申すべし。門出よし吉凶よし天氣もよし道もよし萬世の中義經が。天下を治ん瑞相と悦び。東に下らるる。

第五

地君が代は千代に八千代に榮えます豐旗雲や伊豆の國。蛭が小島におはします右兵衛の佐頼朝は。盛長一人配所の伽。密に平家追討の御企しきりにて。關東の諸大名内々志を通じ參らすれば。やがて武運も開くべきフシ蕾る花の匂ひ有り。地然る所に上方より遊行の金王參上と申しける。詞頼朝悦び珍しや金王丸。おことは法體しけるよな。法名は何とか云ふと宣へば。さん候昌俊と申す名乘字を其の儘に。土佐坊昌俊とついて候。して上方に別條なきか。九郎は如何にと仰せければ。土佐坊承り。されば候上方は平家の驕十分にて。こぼるゝ水の源の君御出世を松の葉と。萬民祈り奉る。御舍弟九郎殿も御供致せし所に。幸なれば伊勢大神宮へ御參詣有るべきよし。拙者は君への御土産に生肴を持參致せし故損ぜぬ内に一刻も早く御覽に入るべき爲。先づ御先へ下つて候と申せば、地我が君も盛長も。土産の肴は何ならんと〳〵とぞせめ給ふ。詞近頃輕微の至りながら。野間の内海大網にて取漏したる大惡魚。御賞翫遊ばせよと長田の庄司を引出せば。地頼朝大きに御悦喜あり父義朝の命を取りし。北枕の毒の鱸今我が爲には目出鯛〳〵。釣つた所は心地よしと フシどつとどよめき給ひける。地時刻移さず料理せよと長薙刀を賜びければ。承るゝと土佐坊薙刀取りのべ小脇にして 首ふつつと運落し宙に上げてちやうど受け。切先に貫き見參に入れ奉り。鱸は島の水底に榮漬けにせよやとて。下部に下し行はれ御悦びは限りなし。此の事北條へ聞えければ。時政の北の方より女房達を使にて。色々の絹八重がさね御祝儀に進上有り。頼朝御覽じ時政夫婦の志返す〴〵も嬉しさよと若松摺つたる小袖を肩に打ちかけおはしまし。鏡臺引寄せ我が御顏つく〴〵と打守り。詞抑某清和天皇の臺を出で。六孫王經基より満仲頼光に相續いて代々天下の權をとる。地我其の血脈を繼ぐべき人相よのつねに變り。喉骨の生れ有り。左右の眉は八幡の八の字。兩眼の瞳には月日の光。額の黑子は屬星木曜星。頭の辻には天照皇大神五體を守護しおはしまし。一度天下の將軍と仰がるべき相あらはれたり。如何に〳〵と宣へば土佐坊を始め使の女房若黨等。げにも仰に違はじと フシ一度に頭を傾けける。地盛長は返答なく事をかしげに顔しかめ。空

嘯いたる其の風情鏡に映れば頼朝氣色を損じ、詞後きたなし盛長只今の腹つきは、全く頼朝を侮つての[illegible]近頃奇怪千萬なり左程頼みなき頼朝に仕へんより、頼みある人に奉公せよ[illegible]と宣へば、盛長涙をはら／＼と流し。地こは口惜しき御諚や候。未頼み有る主君とて御奉公仕るぞ。忠節と思召さんか。詞頼みなき主君を守立て奉りこそ臣下の道とは申すべけれ 地然れば君の御心には、頼みなき下人とて見放し給はん恨めしさよ 其の御心ゆゑにこそ源家の嫡流として、平家に世をせばめられ。いぶせき配所の御住居。中々末の御出世も覺束なし。[illegible]口惜しの御所存やとてテ涙に咽び申しければ、君を始め人々も[illegible]涙を[illegible]ける。詞頼朝[illegible]い[illegible]は萬事をやめ平家を亡す軍慮に叶[illegible]。詞聞けば牛若は伊勢参宮したる由、地北條が[illegible]

に登るべしとく／＼とのたまへば 盛長仰を蒙りて御返事と 三重へ聞えける。

牛若宮めぐり

フシ是に[illegible]御曹司牛若は 東雲を誘ひさそはれ[illegible]にて参宮有る。フシ[illegible]御宮[illegible]ここそは フシゆゝしけれよの。木綿幣ちらす神風や。伊勢の宮立物古りて。外宮の森はしん／＼と。フシ神さびわたるたゝずまひ。皆覺えて フシやすらかなるこそ殊勝なれ 太夫禰宜宮の御[illegible]禮 [illegible]數の奉幣事終り 太夫是ここそ伊弉諾伊弉冊の尊、御國[illegible] [illegible] [illegible]末社は[illegible] [illegible] [illegible]は[illegible] [illegible] [illegible] [illegible]世界國土を守らせたまふ末社は八十末社なり。ワキさてまた外宮の御社は。太夫此の

神の第一皇子 ワキあひに 三人相殿大神宮。末社は四十末社なり。太夫雨の宮 ワキ風の宮、三人風雨論時のみそらの雲井、月讀日讀 國は豐に民榮えさせ、給ひけるは譲に目出度候ひき。フシ天の岩戸の暗き世も。[illegible]は蛭子の御社[illegible]の折柄に [illegible]太夫難陀が口より ワキおつ湯を出し。太夫跋陀か口より[illegible]湯を出し [illegible]湯をひかた奉り[illegible]が千反 太夫錦が千反 [illegible]金襴 三人綾子の産着を召させ。給ひしかども、フシ三歳足立ち給はねは、天の岩樟[illegible][illegible]手綱くり／＼[illegible]に[illegible]乗せ奉り、[illegible]海原へ流し給ひて海を領りに請取り[illegible]西の宮の、恵美須御神 詞長持[illegible]もかしこき釣針おろし。あら目出鯛を釣り。[illegible]釣つた姿の[illegible]しやりしや[illegible]は。大きにやはらぐ日の本の和歌のはじめ[illegible]御神[illegible] [illegible]

清水。かほど清しき御社を フシ誰か熱田と名付けけん。爰は住吉生玉や。稲荷は五穀の上賀茂や。 フシ又下賀茂に。貴船松の尾平野の神。北野に續く梅の宮。 太夫昔に變らぬ今宮も。 三人太神宮と伏拜む。五靈八社山王は。廿一社吹下しに。白髭の神波はさら／＼。さら／＼ゑいさらゑい。さら／＼さつと漣や漣や滋賀から。さきの御神は。是も八岐の大蛇ぞと伊吹颪に多賀の神。鹿島香取諏訪三島。戸隠神田の大明神。 太夫總じて日本國中に。一萬七千餘社の神。 太夫又吉備の大臣は。 ワキ上には 太夫一萬 ワキ下には 太夫粟。 三人三石の數々の祖神はこれ此の御社わう。／＼／＼／＼往古より。明／＼歴／＼さつ／＼／＼と。五十鈴川に立つ浪の音もしづかに君が代を。千代萬歳と守らせ給へと八拜九拜を 三重へ なし給ふ 地然る所へ盛長は。關東勢を引具して御迎がてら參宮の望にて。夜を日に續いで參りしとざゝめいて來りける。牛若御喜悦まし／＼て兩宮の御飾を召し、太々神樂を 三重へ 捧げらる フシ神も納受 地ましましけん。社壇の屋根に三光現れ。音樂瞋恚の濁りを清め。辰巳の方の神形より源氏の白旗雲となり。光を添へてたな引きける人々あつと禮拜あれば。旗雲の中よりも。伊勢石清水住吉の。三社の御神あり／＼と現じ給ひ。神は神なり神人を離れず誠を以てやどりとす。 神は人の敬ひに依つて威をまし。人は神の惠によつて運の添ふ。源氏の末は萬々歳五穀豐饒民安全。國土豐に守るべしと彌陀釋迦觀音三體の。御本地を現し給へば牛若歡喜の思ひをなし。百拜千拜幣帛をひるがへす小忌衣。東の勢をもよほして怨敵を追伐し。 地源氏繁昌國繁昌治まる。御代こそ久しけれ。

出世景清

序さても其の後。詞妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大乘八軸の骨髓、信心の行者大慈大悲の光明にあづかり奉る。オロシ觀音威力ぞ有難き。地爰に平家の一族惡七兵衞景清は、西國西國の合戰に討死すべき者なりしが、死は輕くして易し生は重くして難し。所詮命を全くして平氏の怨敵、右大將頼朝を一太刀恨み、平家の恥辱を雪がんと落人となり尾張の國。熱田の大宮司に聊か知るべありければ フシ深く。忍びて居たりけり。地元より大宮司は平氏重恩の人なれば。深くいたはりひとり姫に小野の姫と聞えしを景清にめあはせ。子とも婿ともかしづき給ふ フシ志こそわりなけれ。景清大宮司の御前に出で。誠に某無二の御懇志にあづかり長々浪人仕り、身は埋木と朽果てん末頼みなき身ながらも。せめて頼朝を一太刀窺ひ君父の恨を散じ。その後は腹切つて兎にも角にも罷り成らんと空しき月日を送り候。詞然る處に今朝屈竟の事を聞出し候其の故は、鎌倉殿は南都東大寺大佛殿を御再興あるべしとて。秩父の重忠かの奉行を承り。昨日の暮ほどに此の處を打つて通り候よし。たとへば頼朝七重八重の城郭に取り籠り。天地に鐵の網を張つて用心きびしく候とも此の景清が一念にてなどか狙はで候べき。地さりながら重忠常に頼朝の側を離れず、神變不思議を兼ねたれば其の身は都におりながら。心はなほ鎌倉殿の側にあり。詞から申す景清は二相を悟り候へども重忠は四相を悟る。頼朝に出合ひ討たんとせしこと三十四度に及べども。重忠に隔てられ終に本望遂げ申さず。地然らば先づ重忠をさへ打取らば。頼朝を討たん事踵を旋らすべからず、重忠此の度東大寺の奉行に上る事幸ひかな仕合かな。天の時來りたり忍びやかに南都に下り。重忠が首提げて參らんにスヱテはやお暇と申さるる。地大宮司聞き給ひ實に屈竟の時節ござんなれ。構へて人に悟られ給ふな急いで事を仕損ずな。片時も早くとありければ。北の方も悦びて。宗盛公よりたび給ふ痣丸といふ名劍を景清に奉り。首尾よく仕おほせ給ひなば。一日も逗留なく。早く御歸りましませと門出の盃出さるれば。互に千秋萬歲と獅子の勢龍の勢ひ勇み〳〵て行く虎の。尾張の國を立出でて奈良の。都へ三重へ上らるる フシいで其の頃は。地文治五年春過ぎて夏來にけらし白旗の。源氏の大將頼朝公は。南都東大寺大佛再興の御願にて、畠山の重忠奉行職を承り。松にも花を春日野や飛火の野邊に假屋をうたせ。横目帳付勘

[illegible]
り今日吉日の柱立。我が弁は棟数に一段高く村濃の大幕打たせ、つゞいて見えしは本田[illegible]立て弓鎗長刀吹貫に。柳櫻をこきまぜてオクリ花やか〳〵なりける御普請なり。かくて番匠の棟梁。木工の頭修理の亮[illegible]れる出立にて。恵方に打向ひ[illegible]祭文を唱へつゝ御幣をふつて再拝し。手斧はじめのその儀式。厳重にこそつとめけれ。
ウタ むべも富みけりさきくさの。三葉四葉の大伽藍手斧はじめの壽に。千代をかためて柱立。春は東に立ちそむる。是萬物の初なり。夏は南に[illegible]菖蒲が軒。や。かをるらん。秋は西の[illegible]契かたどりて。天の河原の橋柱しらげたつるや突鉋。雲をそなたに遣鉋。冬は北にぞつゝ井筒水こそ家の寶なれ ギンオクリ めでたけれや〳〵まはれ井戸車。かまど賑ふ フシ八つい殿に先づ陰陽の二柱。一本の柱は女春男伸を表に[illegible]四大王。四海泰平民安全に祝ひこめたる[illegible]

[illegible]

君が代は ハヅミフシ 数へつくさじ面白や。然るにこれは大伽藍と申すは。キン[illegible]聖武。皇帝の御建立で 三國無雙の霊場[illegible]の内院を。さもあり〳〵とうつさるる。堂の高さが二十丈 [illegible]御丈は十六丈雲に續けばおのづから。月を後光と[illegible]三笠山。柱のかずは天台の。[illegible]一念三千の。[illegible]はして。三千本と定まれりナホス軒の榱は。法華經の文字の数六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狛。さて正面より四方四面の。扉々の彫物には。松に唐竹牡丹に獅子。豹と虎とが威勢を争ひ百千萬の獣を追つたて。追つたて。くるりくるりと巌に追上げ追下し風に嘯く波間より。紫雲を巻きて登り龍下り龍。玉を摑んで虚空に捧げ、鱗を立てたる 其の勢 手をつくさせて彫りつくし。扨棟瓦軒瓦[illegible]

[illegible]。珊瑚樹の梲をひつしと打つたる臺には。[illegible]に柱を包んで黄金の鋲を[illegible]棟木を負ふの柱をして。南畝の農夫よりも多く。[illegible]梁に架するの椽は機上の工女よりも多く。釘頭の[illegible]たるは[illegible]の粟よりも多く。旦暮の説法讀誦の聲。は市人の言語よりも多からしむ。佛法繁昌四海鎮護の大伽藍。如意満足の柱立めでたし。〳〵。

ヲヽめでたしと。手斧おつ取りてうてうてう。鑓おつ取つてはしつてい〳〵。鉋取りのべさら〳〵。ゑいさら〳〵〳〵てう〳〵てうと。打納め取納め。三々九度の御酒をさゝげ千度百度。祈念して重忠に色代し棟梁座をぞ下りける 手斧始めも事過ぐれば。数千番匠下々まで皆々小屋にぞ 三重〳〵入りにけり フシ遥の後より。 地 四十ばかりの男なるが人足と思しくて。蒼簡の樽をになひ頬被りして通りける。 詞 秩父の執權

本田の二郎きつと見て。ヤアこれなる下郎めは。かゝる晴いの庭なるに頬被は緩怠なり。色代せよと咎むれば彼の男小聲に。作法もしらぬ下々なれば御免と云ひてつゝと通るどこへ〳〵。扨々ぞんざい千萬なる奴めかな。頬被を取らずんば誰かある。それ打て叩けと下知すれば。中間ども承り一度にはらりと取りまはす。番匠の棟梁此の由を見るよりもいやこれ本田殿。彼奴は其の日雇ひの人足にて差別も知らぬ下郎なれば。さぞ推參も候べし。去りながらかゝる目出たき折なれば。たゞ何事も穏便に計らひ給へと申しけり。本田聞き入れず。いやさ彼めはちと人に似たる者の候といへば。扨珍しや本田殿。人が人に似たるとは事新しう候いかに下郎め。己れ大ぶんの錢を取り乍らかだをして働かず。横着ひろぐゆゑにこそ人々にも怪まれ。祝儀に邪魔をなしけるよ。價を損にする迄ぞ罷り歸れと叱りければ。地さ幸と景清は荷ひし櫃を下しおき。迷惑さうにもみ手をして　フシ表にこそは出でらるゝ。地重忠幕の内より御覽じて。暫く〳〵。詞いかにかた〴〵。平家の落人こゝかしこに忍びゐて君を狙ふと聞きけるが。只今の人足はまさしく惡七兵衞と見しは僻目か。彼餘すな言うても是は一大事の柱立の淨めの庭。穢らしてはいかがなり。前なる野邊に追出し討て棄てよと宣へば。地もとよりはやる關東武者我も〳〵と馳向ふ。景清是を見て。になひ棒に仕込みたる件の痣丸するりと拔いてさしかざし。大勢を弓手にうけ頭を叩いてから〳〵と笑ひ。これお侍。詞某は尾羽を枯せし鎌倉の浪人者にて候か。朝夕にせまりかゝる侘しき營みを仕る。さすが人目の恥かしく顔をかくして有りければ。なんぞや某を惡七兵衞とは眼がくらみてありけるか。但しは其の景清が恐ろしさに面影に立ちけるか。よし何にもせよ是程まで雜言せられ。堪忍罷りならず景清程こそあらずとも。地そつと手なみを見せんずと例の痣丸小脇に搔込み。多勢が中に割つて入り火水になれと三重切合ひけるフシ時刻も移らぬ、地其の内に十四五人切り伏せ重忠に見參せんと。此處の詰彼處の隈に駈入り〳〵騷げども。大勢に隔てられ今ははや是迄なり。深入して雜兵どもに手負ふせられては景清が末代の名折なりまたこそ時節あるべけれ。いでおつ拂うて落ち行かんと番匠箱を押開き。大鑿小鑿手斧鋸やり鉋。屈竟一の手裏劍とおつ取り〳〵打立つれば。さしもに勇む軍兵どもわつといふてはさつと引く。なほも寄せ來るものどもを小屋の小柱ひんぬいて。八方無究に三重振廻ればフシ秋の嵐に散る紅葉むら〳〵ぱつとご逃げにける。チヽさもさうずさもあらん此の度は仕損ずとも。此の景清が一念の。劍は岩を徹さんものをと。跳りあがり飛びあがり齒がみをなして行く雲の。月の都に上りける。惡七兵衞が力業。早業輕業神通業たゞ飛ぶ鳥の

ごとくなりとて恐れぬ。ものこそなかりけれ。

第二

さるほどに。地詞や猛き武士も戀に窶るゝならひあり 薪を負へる山人も立寄る花の景清も常に清水寺の觀世音を信じ奉り。参詣の道すがら清水坂の片傍に。阿古屋といへる遊君に。馴初臥のかり枕。地いつしか馴れて今ははや二人の若をぞまうけける。兄の彌石六歳弟彌若四歳にて。世におとなしくぞ見えにける。阿古屋はもとより遊女なれども。妹背の情細やかに世になき景清をいとほしみ。二人の子供を養育し兄には小弓小太刀を持たせ。父が家業をつがせんと。習はぬ女の身ながらも兵法の打太刀し。武道を教ゆる志たぐひ稀にぞ 三重 聞えける フシかゝる所へ。地悪七兵衛景清は重忠を討損じ。やう／＼として清水やッン つ阿古屋が庵に着き給ふ 地女房子供を引連れこは珍しや何として。御上り候ぞ先づ此方へと請じける。詞景清申しけるは内々御身も知るごとく。我平家の御恩を報ぜんため鎌倉殿を狙へども。其のかひなくて一兩年は。尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ空しく月日を送りし所に。此の度畠山の重忠東大寺再興の奉行に上るをよき機と。先づ重忠を狙はんため我が身を卑しき下郎にしなし。すでに間近く付けよせしが運強き重忠にて。地我等が智略現れ本意なくも討損じ一向に重忠と差違へ死なんとは思ひしが。思へば御身がなつかしく。子供が顔をも見まほしく。無念ながらも存へて只今の仕合せなり。詞誠に久しく逢ぬ間に子供もいたう成人し御身もずんど女房をしあげたり。地なんでも今宵はしつぽりと積るつらさを語らんと。しととよればゑゝ。詞榮燿らしい斷、浪人の憂身といひ殊更敵を持つたる身が。せめて一年に一度の便をもし給はず。チヽそれも理よ。地此の頃聞けば大宮司の娘小野の姫とやらんに深い事と承る。尤かな自らは子持筵のうらぶれて。見るめにいやと思すれども子に絆されての御出か。悋氣するではなけれども浮世狂ひも年による。しやほんにをかしい迄 フシよい機嫌ぢやのと有りければ。色詞景清打笑ひ是は迷惑 其の大宮司の娘小野の姫にはしか／＼物をもいはゞこそ。八幡々々さうした事で更になし。地そちならでは世の中にいとしい者が有るべきかと。なほももたるゝ鈍枕阿古屋も心打解けて思ふあまりの戀いさかひ犬が食ふとや是ならん。銚子盃携へて彌石に酌とらせ。三とせ積りし物語。語らひあかし給ひける フシ契の程こそゆかしけれ。地景清宣ふやう我久しく尾州に蟄居して觀音参詣怠たり。在京の間は一先づ日参の志あり。さり乍ら是より毎日往來せば人の咎めも如何なり。黠の御坊にて一七夜は通夜申す。地やがて歸り對面せんと編笠取つて打かづきおもてをさして出で給へば彌石門迄送り出で。さらばさらばの

小手招きオクリしをらし〳〵かりし生先なり。地こゝに阿古屋が一腹の兄伊庭の十藏廣近は。北野詣をしたりしが。大息ついで吾が家にかへり。詞妹の阿古屋を傍に招き。是を見よ誠に果報は寢て待てとや。惡七兵衛景清を打つてなりとも搦めてなりとも參らせたる物ならば。勲功は望み次第との御制札を立てられたり。我等が榮華の瑞相此の時と覺えたり。兵衛はいづくに有りけるぞはや六波羅へ訴へて。地一かど御恩にあづからんいかに〳〵と仰せける。阿古屋はしばし返事もせず。涙にくれてゐたりしが。なう兄上そもや御身は本氣にて宣ふか。詞たゞしは狂氣し給ふかや。地妾が夫にて候へば。御身の爲には妹婿此の子は甥にて候はずや平家の御代にて候はば誰かあらう景清と。飛ぶ鳥迄も落し身が今この御代にて候へばこそ。數ならぬ我々を頼みて御入り候ものを。たとへば日本に唐土をそへて賜はるとてそもや訴人が成るべきか。飛ぶ鳥懐に入る時は狩人も助くるとよ。昨日迄も今朝迄も隔てぬ中をそもやそも。フシのかれう物かさりとては。人は一代名は末代。思ひわけても御覽ぜよと フシ泣いつ。くどいつ止めける。詞十藏から〳〵と打笑ひ。やれ名を惜みて得をとらぬは昔風の侍とて當世は流行らぬ古い事。其の上御邊が夫よ妻よなんどとて心中だてはしけれども。あの景清はな。大宮司が娘小野の姫に最愛し。御身が事は當座の花後悔するとも叶ふまじ。女さかしくて牛賣らぬとは御ぶんが事ぞ。諸事は兄に任せよと飛んで出づれば又引止め。地いや大宮司の娘は人のいひなし惡口ぞや。景清殿に限り左樣の事は候まじ。よし人はともかくも妾が二世の夫ぞかし。さ程に思ひすゑ給はば子供も妾も害して後心のまゝになし給へ。やあ生けらん内はかなはじとスヱテ縋りついてぞ泣き給ふ。詞しかる所へ熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清樣の御旅宿所はこれにてや候やらんとやがて文箱を出しける。十藏出であひいかにも〳〵是は景清殿の旅宿にて候が。宿願あつて兵衛殿は清水參詣致され候。御文を預り置き歸られ次第見せ申さん。明日御出で候へと飛脚を返し。兄弟文を披いて見れば小野の姫の文にてあり。假初に御のぼりましまして否應の便もし給はぬは。かね〳〵聞きし阿古屋といへる遊女に御親み候か。未來をかけし我が契いかゞ忘れ給ふかとこま〳〵とぞ書かれける。地阿古屋は讀みも果て給はずはつとせきたる氣色にて。うらめしや腹立ちや口惜しや妬ましや。戀に隔はなき物を遊女とは何事ぞ。子のある中こそ誠の妻よかくとは知らではかなくも。大切がりいとしがり心を盡せし口惜しさは人に恨はなきものを。男畜生いたづらものアヽうらめしや無念やと。文寸々に引き裂きてスヱテかこち恨みて泣き給ふ。フシことわり。とこそ。聞えけれ。地十藏悦びそれ見たか。詞此の上は片時も早く訴人せん最早思ひ切つた

かといへば。ヲヽ何しに心の残るべき。せめて訴人してなりとも此の恨を晴してたべ。詞 げによき合點と立出づれば又暫くと引きとどめ。とはいひながら如何に恨があればとて、夫の訴人はなるまいか。地 いや又思へば腹も立つ憎いは女めエヽ是非もなやと、或は叱め或は勸め　スヱテ 身を悶えしぞ歎かるる　地 十藏袂をふり切つてエヽ輪廻したる女かな。そこ退けと突きのけて。六波羅さして急ぎしは料簡もなき　三重〽しだいなり　フシ 斯くとは知らで、地 景清は清水寺に參籠し、地 轟の御坊に通夜申し。同宿達に雙六打たせ助言してこそゐられけれ頃は卯月十四日夜半ばかりの照る月に。直甲五百餘騎江間の小四郎大將にて。訴人の十藏まつ先かけ、轟の御坊二重三重に取りまはし。閧の聲をぞつくりける、元來こらえぬ荒法師門外につつ立つて、そも此の寺は田村將軍此の方守護不入の靈地なるに狼藉は何者ぞよ盜人なんどと覺えたり。あれ打ちとれ小僧どもと聲々に呼ばはれば。江間の小四郎驅かけよせ。さないはれそ法師たち御坊に科はなけれども。平家の落人惡七兵衞景清今宵ここに籠りし由、伊庭の十藏訴人によつて義時討手に向うたり　異議に及ばば寺ともいはせじ沙門ともいはすまじ。片端切つて切りちらせといひも敢ぬに惡七兵衞、是に在りと切つて出る常陸の律師叡範此の由を見るよりも。慈悲第一の此の寺にて信心の行者を空しく討たせて。觀世音の誓願はいかならん。防げや防げ法師ばら支へよや下僧ども。承り候と衣の袖を絞り上げ。地 得物々々を提げて三十餘人の荒法師、五百餘騎につつ支へて命を惜まず　三重〽戰ひける　フシ 五百餘騎が四方に分つて隙をあらせず防げども。景清飛鳥の術を得たれば左右なく討れんやうもなく雙方しろみて控へたり。景清椽端につつ立つて、今宵の訴人は妻の阿古屋同じく兄の十藏と覺えたり。おのれ數年の恩愛を振捨てて大慾にふける愚人ども、勿體なくも此の寺に血をあやす奇怪さよ。とても世になき某がおのれらが身のためならば何條命惜しからん。人多く討たせんより女房兄弟下合て搦め取れとぞわめきける。十藏が下人二三太といふくせもの分別もなく飛んでかかる。景清莞爾と打笑ひ側にありける雙六盤。片手に取つて投げつくれば二三太が眞甲に、響き渡つてはつしとあたれば首は胴にぞにえこみける。ヲヽ重五ともせぬ丁稚めが手柄しさうに見えたれど。五四々々となりけるは誠に愚人夏の蟲と戲れて立つ所を。十藏續いて切つてかかる景清薙刀押つ取りのべ。地 同然のこつぱ武者婆婆の訴人は是迄ぞ。閻魔の廳にて訴人せよと受けつ流しつ切り結ぶ。江間の軍兵是を見て、訴人討たすな加はれとどつと連れておし隔つる。心得たりと景清は西門を小楯に取り。入りかへ々々大勢を左右にうけ。眉間眞甲鎧のはづれ嫌はずあまさず　三重〽打ちたつる　フシ

こは敵はじとて。軍兵ども十藏を引つゝみゝ六波羅さしてぞ引きにける。地景清今は是迄と音羽の山の峰を越え。梢をふみ分け巖をおこし飛びこえ〳〵はね越え飛越え刹那が間に飛ぶが如くにあづま路さして落行きしは。誠に稀代の武夫やと扨感ぜぬ。ものこそなかりけれ。

第　三

かくて。其の後。地悪七兵衛景清行方知れずなりたれば。最も天下の御大事と諸國の所緣を詮議ある。中にも熱田の大宮司は現在の舅とて。千葉の小太郎胤が取つて警護嚴しく打ちつれさせ六波羅に引据ゆる。詞梶原源太大宮司に對面し。汝は當家の大敵平氏の落人景清を。婿にとるのみならず剰へ行方もなく落しける。罪科甚だ輕からず。いづかたへ落しけるぞ眞直に申せ。少しも陳ぜば拷問せんとはつたと怒つて申しける。大宮司聞給ひ。仰の如く景清とは緣を結び候へども。去年の春國許を立出で今に便も候はず。土も木も源氏一統の御代なるに。一旦陳じ申すとて隱しとげられ申すべきか。婿に取りしを曲事とて誅せられんは力なく候　行方に於ては存ぜぬと詞すゞしく申さるゝ。重忠仰せけるは尤々。たとへ行方を知つたればとて婿の訴人は致されまじ。たつては此方の不調法いかに梶原殿。かの景清は仁義第一の勇士なれば。所詮大宮司を牢舎させしと傳へ聞かば。舅の難を救はん爲。己れと名乗り出でん事は目前に見え候。此の儀はいかにと有りければ　地おの〳〵評定尤と。六波羅の北の殿に新造に牢を建て。大宮司を押込めさせ嚴しく番をぞ三重へ　上させける

小野姫道行

ハルフシ人につらくは。當らねど。何の報や袖の露　濕れも果てなで小野の姫いたはしや去年の春。夫は都へ去にしより。スヱテ阿古屋の松の夕時雨。染めつけられて若紅葉。戀や散らんとおけくれに、フシオクリ人目つゝみの。くひ〳〵と フシ案じ煩ふ。身の上に。父は都の六波羅へ。擒となりて フシあさましや。憂きめにあはせ給ふとの。その音信をきゝしより。本フシ思ひに思ひつみかさね。ハルフシせめては憂きにかはらんと。乳母はかりを力にて旅の。衣手涙つゆたき紅に フシ紅絹裏濡れて夕されし。フシ空飛ぶ鳥の。歸るさに。物忘れせぬ故郷の。風もわが身にふきかへて今の門出をフシをはりぞと國の。名殘も。つゝましく。身の種蒔きし産の神。スヱテ熱田の宮居伏拜み。父と夫とを安穩に惡魔はらへと取る弓の。桑名の舟に梶枕。スヱテ敷寢の苫のあらむしろ。肌にあれてつらけれど。戀するあまが鴛鴦の フシよるの衾とみる。め刈る。かづく荊藻はなに〳〵ぞオクリ歌に。よまれしひじき藻や。搗布甘海苔作らまほしく。キンハ〳〵若布まじりの目刺はす。フシ鹽屋が軒に竹見えておさな鶯。フシ音をこそなく。花にまがひのさくら海苔天をひたせば。雲のりに

月を。包みて刈るとはすれど。手には取られぬ。桂男のアヽいぶりさは。いつ青海苔も加太海苔と。身の相良布を莫告藻や。詞ギンあらめず。らしと荒布かる。二見の浦ははる〴〵と。フシ松の群立色の濱ノルフシ蒔繪によくも。似たるよな。あとは白雲とばかりを。故郷の夢と空醒めて　詞庄野にいざ〳〵龜山は。誰がため永き萬代とスヱテかこつ涙はせきもせで　フシ何をか。關の地藏堂。せめて未來を頼まばや。上り　下りて坂の下谷の川瀨にからり。ころり。フシころ〳〵と。なるは河鹿の鳴く聲か。小石流れて行く音か。いや水の泡ちる　玉でないよのの　詞駒のひざぶしんからが。ちんからがらりの。鈴鹿山。賤が草鞋の營に。更けて藥打つ槌山や。伊達の旅路に行くならば。貰うてもたもれ水口の。葛小笠に露もりて。おのがまゝなる鬢水は櫛にたまらぬ亂髮スヱテとく〳〵行けば洛陽や　フシ六波羅にこそ着かれけれ。

地扨父上のおはします牢屋は何處なるらんと。こゝかしこに佇み給へば折りもこそあれ梶原源太。町廻りして歸るさに此の體をきつと見て。詞彼奴が有樣たゞ者ならず何者ざふと咎めける。姫君聞召しさん候自らは。尾張の大宮司が娘なるが。故もなきに父をとられ候ゆゑ。我命に代らんため。是迄參り候と言はせもはてず景季チヽ皆迄もいふな。己れが親の大宮司に。景清が行方を云へといへども知らぬといふ。己れは夫婦の事なればよも知らぬ事はあるまじきすでに清水坂の阿古屋は子のある中さへ振捨てて一度注進申せしぞや。ありのまゝに白狀せよと小腕取つて怒りける。地なう恨めしや命を捨てて。是迄出る程の心にて假令行方を知つたればとて申さうか。此の上は水責火責にあふとても夫の行方は存ぜぬなり。只父上を助けてたべとスヱテ臂も惜まず泣き給ふ。詞チヽいふ迄もない事さ。己れ落ちずばたゞ置くべきかと。地高手小手に縛りつけ。六條河原に引出し種々に拷問したりしはなう情なうこそ　三重　見えにけれ。

地梶原親子が奉行にて。方一町に垣をゆひ突棒刺股鐵の棒。兵具ひつしと竝べしはさながら修羅の獄卒か。　八逆五逆の罪人をフシ苛責にかくる如くなり。地いたはしや小野の姫あらき風にもあてぬ身を。裸體になして繩をかけ。十二の梯子に。胴中を縛つけ哀れもしらぬ雜人ども。湯桶に水をつぎかけつぎかけ落ちよ〳〵と責めけるはたゞ瀧津瀨の如くにて　フシ目もあてられぬ氣色なり。地むざんやな小野の姫息もはや絶え〴〵に。心も亂れ目くるめき既に最期と見えけれども。いや〳〵武士の妻となり心弱くてかなはじと。さあらぬ體にもてなしいかに方々。夫の景清つねに清水寺の觀世音を信仰し我にも信じ奉れと深く敎へ給ふゆゑ。今とても尊號を絶えず稱へ奉れば。此の水は觀音の甘露法雨と覺えたり。今この水にて死する命は惜しからじ。夫の行方

は知らぬぞや千日千夜も責め給へ。南無や大悲観世音と苦しき體を押し隠し。潔くは宣へども。さすが強き拷問に聲も濁りて身も顫ひ。弱々となり給ふはスヱテ扨も悲しき次第なり。詞此の分にては落つまじきぞやれ古木責にせよやとて。細首に縄を付け松の枝に打ちかけて。地ゑいや〳〵と引き上ぐる下せば少し息をつぎ。引き上ぐれば息たゆる フシあはれといふも餘りあり。地たとへいかなる鬼神も是れにては落つべしと。二三度四五度責めかければ今はかうよと見えけるが。詞又目をひらきなう梶原殿。此の木の上に吊上げられ世界を一目に見おろせども。夫の行方は見え申さず。方々も慰みに。ちつと上つて見給はぬか フシ是へ是へと有りければ。景時腹に据ゑかね。詞扨々しぶとき女かな。此の上は引きおろし火責にせよと。炭薪を積み重ね 團扇をもつて煽ぎ立て〳〵。天を驚めし黒煙焦熱地獄といつつべし。地すでに責めんとせし所

に悪七兵衛景清いづくにてか聞きたりけん。諸見物の其の中を飛び越え跳ね越え垣の中に躍り入り。こりや景清ぞ見参とはつたとねめ廻はし。仁王立にぞ立つたりける姫君はつと肝潰れ。立寄らんとし給へば人々取つて引きする。地すは景清を遁がすなと一度にはらりと取りまはす。景清けら〳〵と笑ひ。エヽ仰々し此の景清が隠れんと思はば。天にも昇り地をも潜らんずれども。妻や舅が憂目を見る悲しさに。身を捨てて出でたればもはや氣遣ふ事はなし。さあ寄つて縄をかけ六波羅へ連れて行け。妻や舅を助けよとフシ手向ひしてんず氣色なし。地姫君涙をながし口惜しの有様や。自らや父上は生きてかひなき憂き身なるに。御身は存らへ本望遂けんとは思さず何とて是へは出で給ふ。あさましの御所存やとスヱテ又さめ〴〵と泣き給ふ。景清も涙を抑へ頼もしの心底や。人は素性が恥かしし 子中をなせし阿古屋めは夫の訴人をしたりしに。

御身は命に代らんとは頼もしや嬉しやな。さりながら父大宮司の御事心許なう覺ゆれば。御身は是よりとう〳〵かへり菩提を弔うてたび給へと。鬼をあざむく景清もスヱテ不覺の涙を流しける フシ理り。せめて哀れなり。地この事六波羅に聞えしかば。重忠大宮司を同道にて六條河原に馳せ來り。詞さても景清人の難儀を救ひ。我が身を名乘りて出らるゝ段近頃神妙尤もかうこそあるべけれ。此の上は小野の姫大宮司共に御赦免なさるゝ條。景清に縄をかけ急ぎ引立て申すべし。地畏つて人々縄よ縄よとひしめけけば景清悦び。これこそ望む所よと己れと千筋の縄をかゝり 先に進めは小野の姫なう自らも諸共と。馳出で取付き泣き給ふを大勢中を押隔て。あたりを掃つて引つ立て行く。景清の心底勇あり義あり誠あり。前代未聞の男なりとて皆武士の。手本と仰ぎける。

第四

かくてそのゝち。げにや猛き勇士も運盡きぬれば力なし。不便やな景清鎌倉よりの評定にて。六波羅の南表に始めて牢を建てさせらる 櫟白樫楠の木樽の木。長さ一丈にとらせ地へは七尺掘入れ上三尺の詰め牢にしこの木を以て蜘手格子に切組んで。一尺二寸の大釘の末をかへさず打ちたれば フシ劒をうゑたる如くなり。地七尺ゆたかの景清を二重に取つて押し入れ髪を七把に束ねて七方にこそ吊つたりけれ。足を牢より引き出し左手右手へ取りちがへ。山出し七十五人して曳いたる楠にて上げ絆をうたせ。しつ錠詰金。たう唐檑千引の石材木を積み重ね。首には根掘りの大筒を三本迄擔せたり。諸人に見せて恥かゝせよとて。詞も警護も付けされどもスエテなか／＼五體働かず。されば文王は羑里に捕はれ。公治長は刑戮にかゝれり。君がため名のため何ぞ曾て憂へんと。觀音經の讀誦の外。世言口を閉ぢたれば。聲聞耳に鎖せり。働く物は

兩眼のみ、見る目も悲しくあはれなり。地いたはしや小野の姫不思議の命助かり。牢屋近きに宿を取り。酒果物をとゝのへて。牢屋の格子に立寄り フシいたはり給ふぞ哀れなり。やう／＼として景清心地よげに酒を飲み。詞今日は一しほ骨髓に徹つて候。誠に御身の志いつの世にかは忘るべき。地扨かりそめながら某は天下の朝敵さだめて最期も遠からじ。今景清が生きたる顔を形見にて。とう／＼御身は尾張へ下り後世を弔うてたび給へ。これに付けても阿古屋めが心底の恨めしさよ。二人の子供も今は早殺してや捨てつらん。思へば／＼景清が運のつきこそ口惜しけれと。フシ恨みかこちて泣き給ふ。地姫も涙をながし御仰はさる事なれども。とても自らは御最期の先途を見屆け。兎にも角にもなり參らせん。一日も一時も御命のあらん内は。往生の御營みを心にかけて何事も。定まる事と思召し人をな恨み給ひそよ。いつ迄も是にありた

く候へども。人目しげき[illegible]く[illegible]い申さんと。泣く／＼。歸り 三重 給ひける フシ是は扨置き。地阿古屋の前彌石彌若もろ共に。山崎山の谷蔭に深く隱れておはせしが。地景清牢舍と聞くよりも我が身もあるにあらればここそ六波羅に走り着き此の體を一目見て。なうあさましの御風情や。やれおれこそ父よわが夫と。牢の格子に縋りつき フシ泣くより外の事ぞなき。詞景清大の眼に角を立てやれ物知らずめ。人間らしく言葉をかくるも無益ながら。かほどの恩愛を振り捨て夫の訴人をしながら。何の生面下げて今此の所へ來りしぞ。地おのれ指一つかなひなば。摑みひしいで捨てん物をとスエテ齒がみを。してぞゐられける。地實に御恨は理りなれども。妾が事をも聞き給へ。兄にて候十藏訴人せんと申せしを。再三止めて候所に。大宮司の娘小野の姫とやらんより。親しき御文參りしゆゑ女心のあさましさ嫉妬の恨みに取りみだれあとさきの

踏へもなく。當座の腹立フシやるかたなく。
地ともかくもと申しつる後悔先に立たば
こそ。さは去りながら嫉妬は殿御のいとし
さゆゑ。女の習ひ誰が身の上にも候ぞや。
申譯致す程皆言ひ落ちにて候へども。今迄
の好みには道理一つを聞分けて。只何事も
御免あり今生にて今一度。詞をかけてた
び給はばそれを力に自害して。わが身の言
譯立て申さんとスエテ地にひれ伏してぞ泣
き居たり。地むごんやな彌石父が姿をつく
づく見て。詞なう父上様の顔のものかなぞ
やみやみとは捕はれ給ふぞ。いで押し破つ
て助け奉らんと。地柱に手をかけるいや。ゑ
いやと押せども引けども。ゆるがばこそ。[illegible]
不便なりける所存かな。地弟の彌石様の[illegible]
に抱きつき。詞いかに父上様。[illegible]
むかと撫上げ。撫下げさすり上げ。兄弟わ
づと叫びければ思ひ切つたる景清もスエテ不
覺の涙せきあへず。地やゝあつて涙をおさ
へやれ子供よ地父かかや[illegible]

皆あの母めが惡心にて縄をも母が掛けさせ
つ。牢にも母が入れけるぞ。地邪慳の女が給
内より出でたる者と思へば汝等迄が憎いぞ
ゑ。父とも思ふな子とも思はじ。はやはや
歸れと叱るにぞ。子供は母に縋り付きなう
父をかへしや父上かへせと。ねだれ歎きし
有様は。フシ目もあてられぬ次第なり。地
阿古屋は餘り堪へかねて。よし此の上は自
らは兎も角も。可愛いやな兄弟に優しき詞
を只一言。さりとてはかけてたべなう。子
は可愛いふは思さぬかとスエテ叉せき上げて
こ歎きける。詞景清重ねて。お事がやうな
る惡人に返答もせじとは思へどもな。今の
悔みをなど最前には思はざりしぞ。されば
天竺に獅子といふ獣あり。身は畜生にて
ありながら。智恵人間に超えたれば。獣人
[illegible]取り食ふ。されど
[illegible]腹中に蟲[illegible]
[illegible]
は女の嫉妬の仇。人を恨むと思へども夫婦

はおなじ體なれば。皆是わが身をせむる理。
和御前がやうなる我慢愚痴の猿智慧を。獅
子身中の蟲に譬へて佛も戒め給ふぞや。汝
が心一つにて本望遂げずまよつさへ。恥辱
の上の恥辱を取り。今言ひ譯して妻子が歎
くを不便よとて。日本一の景清が再び心を
かへすべきか。何程いうても汝が腹より出
でたる子なれば景清が敵なり。妻とも子と
も思はぬと思ひ切つてゐたりける。地扨
は如何程に申しても御承引あるまじきか。
チヽ詞くどいくどい。見苦しきに早々かへ
れ思ひ切つたぞ地なう最早ながらへて何
方へ歸らうぞ。やれ子供よ母が誤りたれば
こそかく詫言致せども。つれなき父御の詞
を聞いたか。親や夫に敵と思はれ[illegible]
[illegible]も生きかひなし。此の上は父親もつたと
思ふな母ばかりが子なるぞや。自らもなが
らへて非道の浮名ながさん事[illegible]かけて
情[illegible]共に死出の山にて言譯せ
よ詞いかに景清殿。[illegible]心底地[illegible]

と彌石を引寄せ守刀をずはと抜き。南無阿彌陀佛と刺し通せば。彌若おどろき聲を立て。いや／＼我は母樣の子ではなし。父上助け給へやと。牢の格子へ顔を差入れ／＼逃げ歩く。エヽ卑怯なりと引きよすればわつというて手を合せ。許してたべこらへてたべ。明日からはおとなしう月代も剃り申さん。灸をもすゑませう。扨も邪慳の母上樣や。助けてたべ父上樣とスヱテいきをばかりに泣きわめく。地ハル理よさりながら。殺す母は殺さいで助くる父御に殺さるゝぞ。あれ見よ兄もおとなしう死したれば。お事や母も死なでは父への言譯なし。いとしいものよよう聞けと。すゝめ給へば聞入れてあそれならば死にませう。父上さらばといひ捨てて。兄が死骸によりかゝり打仰きし顔を見ていづくに刀を立つべきぞと。阿古屋は目もくれ手もなえて。フシまろび。伏して歎きしが。エヽ今はかなふまじ必ず前世の約束と思ひ母ばし怨むるな。追つ付け行くぞ南無阿彌陀と心元を刺し通し。さあ今はうらみを晴し給へ迎へ給へ御佛と。刀を咽に押し當て兄弟が死骸の上にかつぱと伏し。共に空しく成り給ふ。ノリ扨も是非なき風情なり。景清は身を悶え泣けど叫べどかひぞなき。神や佛はなき世かの去りとては許してくれよ。やれ兄弟よ我が妻よと鬼をあざむく景清も。スヱテ聲を上げてぞ泣きゐたり。フシ物の。哀れの限りなり。地かくとは知らで伊庭の十藏。梶原がとりなしにて。少々勳功にあづかり若黨小者あまた連れ。遊山より歸りしが此の體を見て肝を潰し。詞是は扨しなしたり／＼。不便の事を見る物かなこれ侍ども。我が此の如く御恩賞を受け。榮耀榮華に榮ゆるもきやつ等を世にあらせんため。この頃方々尋ねしかども行方のなかりしが。扨は何者ぞ偏執を起し害せしか。但しは大宮司が計ひと覺えたり。よし何にもせよなは景清に言ひぶんあり。先々死骸を取りおけと傍らに葬ぶらせ。牢屋に向つて立ちはだかり。是さ妹壻殿。いつかに怨あればとて。現在の妻子を目前に殺させ。腕かなはずばなどいきほねでも立てざるぞ。内々は某御邊が命を申しうけ。出家させせんと思ひしが最早ほつてもならぬならぬ。侍畜生大だわけといかつはいて申しける。景清くつ／＼とふき出しこりや狼狽者。あの者どもは己れが貪欲心を悲しみ。自害したるが知らざるか。それさへあるにうぬ奴が口から侍畜生とは誰が事ぞ。命を惜む程ならばかゝる大事をたくむべきか。まつた生きようと思ふ程ならばべろ／＼柱の五十や百。此の景清が物の數と思はうか。心中に觀音經讀誦する嬉しさになぐさみ半分に牢舍して在るものを緩怠過ぎたる囈言つき。二言と吐かば摑みひしいで捨てんずとはつたと睨んで申さるれば。十藏かんら／＼と笑ひ。其の縛にあひながら某を摑まんとは。腕無しの振り喋傍いたし事をかし。幸ひ此の頃痃癖

いたきに地ちつと掴んで貫ひたしと空嘯い
てゐたりける。景清腹に据ゑかねいで物
みせんと言ひもあへず。地南無千手千眼生
々世々。一聞名號滅重罪大慈大悲觀音力
と。金剛力を出しゑいやつと身震すれば。大
釘大繩はら〳〵ずんど切れてのいた。貫木
取つて押しゆがめ扉をかつぱと踏み倒し大
手をひろげて跳り出で。八方に追廻すは荒
れたる夜叉の三重〽ごとくなりフシ群りか
ゝる。若黨中間はら〳〵と蹴倒し。十藏
をかい掴み取つて押伏せ。脊骨も折れよと
どうどふまへ。詞何と景清を訴人して御褒
美にあづかり榮華といふは此の事かと。二
つ三つ踏み付くれば。なう悲しや。骨も碎け
て息も絶え入り候。御慈悲に命を助け下さ
れと聲を上げ歎きける。景清手を叩き打笑
ひ。チヽ、某が褒美には廣い國を取らせんと。
兩足取つて逆さまに引上げ。肩をふまへて
ゑいやつと裂きければ。胴中より眞二つに
フシさつと裂けてぞのきにける。エヽ心地よ
し氣味よしと弓手馬手へからりと捨て。地
さあしすましたり此の上は關東へや落ち行
かん。いや西國へや立ち退かんと。行きつ。
戻りつ。戻りつ行きつ。一町ばかり走りし
が。いや〳〵此の度落失せなば。又大宮司
や小野の姫憂目を見んは必定と。思ひ定め
て立歸りもとの牢屋に走り入り。内より貫
木しとゝ締め。地千筋の繩を身に纒ひさあ
らぬ體にて普門品。讀誦の聲はおのづから。
卽身菩薩の變化ならんと皆奇異の。思をな
しにける。

第五

かくてそ。の後。地右大將賴朝公南都の大
佛御再興まし〳〵。既に成就と訴ふれば
供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと。天が
下の科人京鎌倉の牢を開き殘らずフシ御免
なされける。地中にも惡七兵衞景清は大事
の朝敵重罪なれば。助くるに所なく佐々木
の四郎に仰せられ。終に首を刎ねられ今は
四海太平なり。大佛供養御聽聞有るべしと
諸國の大名御供にて。南都に御下向なされ
ける。路次の行列三重〽花やかなりフシす
でに我が君。小倉堤にさしかゝり給ふ時。
詞畠山の重忠息をばかりに馳せ來り。御馬
の前に跪づき。抑も惡七兵衞は御成敗のよ
し承り候へども。未だ恙く牢の内に罷在り
候。一大事の囚人なれば早速首を刎ねられ。
然るべく候はんと謹んで申し上ぐる。賴朝
聞召し不思議の事を申すものかな。景清は
佐々木の四郎に申し付け。一昨日の暮程に
首を打たせ。則ち其の首賴朝が見參して獄
門にかけさせしが。僻事なるかと仰せける。
重忠重ねて其の段は存ぜず候へども。重忠
は今朝景清が生顏を確に見て參り候と。い
ひもはてぬに佐々木の四郎つつと出で。い
や是畠山殿。筋なき事な申されそ。其の景
清は某仰を承り。高綱が手にかけ首を刎ね。
我が君の實檢に供へ。三條畷に獄門にかけ
て候ものを。景清が二人あるべきか。近頃
粗忽千萬と嘲笑つて申さるる。重忠聞き給

じしや御分が手にかけつるか。又重忠も確かに見て候はいかに。高綱色を違へはて埒もない事。一度切つたる景清が蘇るべきやうもなし。それは定めて血迷うて何をかな見られつらん。但しは寝ほれて夢をばし見たまふか。いやさ御分がうろたへて。よしなき者を景清と思ひ切つたるか。夢を見たるか慌てたるか。地これ目を覺して思案せよと。フシ氣色かはつて爭ひける。地頼朝だん／＼聞召し。詞いかさま佐々木畠山粗忽ある人にてなし不思議千萬晴れやらず。いで是より取つて返し。地頼朝直に見分くべしおの／＼續れ／＼と。御馬の鼻を立て直し都に歸らせ。三重へ給ひけるフシ去る程に三條の磧に景清の首を切りかけ。平家の一族謀叛の棟梁。悪七兵衛景清と高札を添へられたり。頼朝立ちより御覧あり。高綱重忠を招き是見られよと仰せける。重忠なほ不審晴れず諸大名立ちかゝり。よく／＼見れば今迄景清の首と見えけるが。忽ち光明赫奕として千手観音の。御首と變じ給ひけるフシ歷劫不思議ぞ有難き。地しかつし候へ清水寺の大衆達。我も／＼と馳せ參じ。詞扨も一昨日の夜中より佛前の蔀おの／＼明きて候ゆゑ。もし盗人のわざにやと御戸を開きて候へば。観音の御首切れて失せさせ給ひ。切口より血流れて禮盤長床朱にそみ。勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候故。驚き入つて御注進申し上げ候と事の次第を申し上ぐれば。地君を始め奉り畠山も高綱も。供奉の上下おしなべてスヱテあつと感ずるばかりなり。地君信心の感涙を流させ給ひ。誠や景清年來清水寺の観世音を信じ奉り。十七の春より卅七の今日迄。毎日卅三巻の普門品讀誦懈怠なく修行せしと聞きけるが。疑ひもなく観世音。兵衛が命に代らせ給ふ有難さよと。地御手を合させ給ひければ。僧俗男女下々迄皆々禮拜恭敬してナガシフシ涙を流さぬ者もなし。地重ねての御諚にはかくては如何勿體なし。急ぎ千手の御首を供養し。當座の本尊を缺かせ。御首をつぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面すべし。いざ頼朝も參詣せんと御身を淨め景清の御首を直垂の袖につゝみ入れて。清水寺への御參詣例まれにぞ三重へ聞えけれ。フシ枯れたる木にも。地花咲く花の。千手の誓ぞ有難き。地かくて頼朝御法事も事終り。佛の御首をつぎ參らせオクリ宿坊にへ入らせ給ひける。地時に佐々木畠山景清夫婦を伴ひ御前に出でらるる。詞頼朝御覧じ珍らしや景清よ。我を平家の敵とて狙ひ討つべき志。神妙／＼。尤も武士の勢ひにさうも有るべけれ。然れば頼朝が爲には御邊又敵なれば。討つて捨つべき奴なれども。汝が身には觀世音入り替りましますゆゑ。二たび誅せば觀音の御首を再び打つ道理。勿體なし勿體なし。もし又頼朝運盡きて御邊に討たるゝ物ならば觀世音の御手にかゝると思ふべし。地此の上は助け置き。日向の國宮崎の庄を宛て行ふと。詞御懇情の御詞に御判を添へ

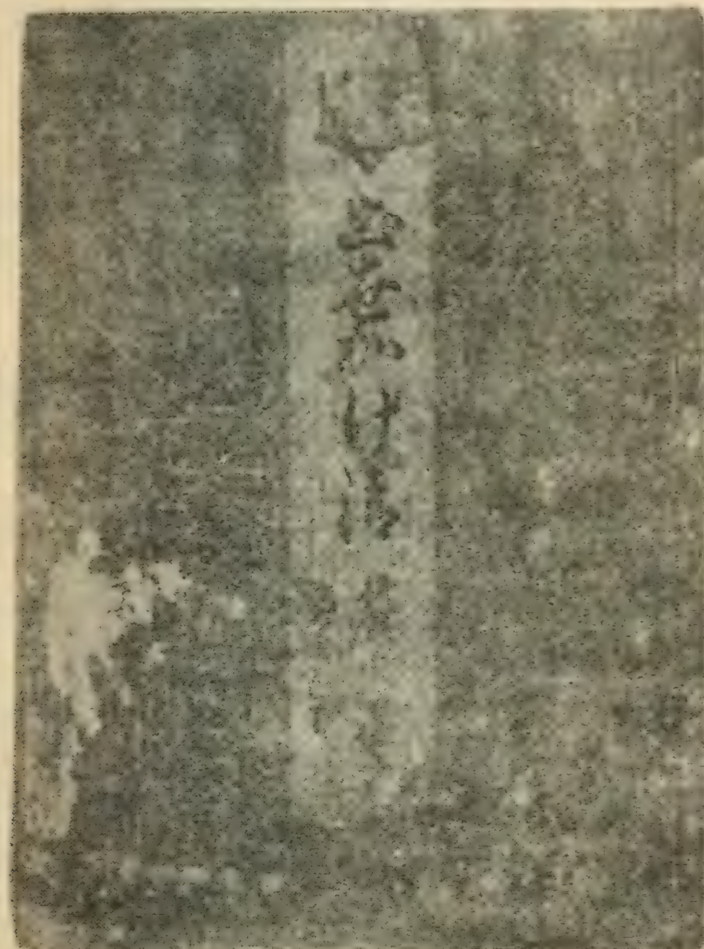
て賜りける。景清涙を止めかね。詞汝に身に鏤めたる御諚の段。生々世々に有難く魂に徹つて覺え候。地いとゞ情ある我が君と知らで狙ひ申せし景清が。所存の程こそくやしけれと。御前をも打忘れスヱテ聲を上げてぞ泣きゐたり。地さて御土器賜り。諸國の大名殘りなくオクリ皆々盃さし給ふ。地重忠仰せけるは斯るめでたき折といひ。かつうは我が君御慰めのため和殿八島にて功名の樣子語りて聞かせ給へ。内々君も御所望なりしぞひらに〳〵とありければ。賴朝公を始め參らせ。滿座の人々一同にフシはやとく〳〵と望まるる。地景清辭するに及ばねば袴の裾を高く取り。御前に色代しフシすぎし昔を語りける。いで其の頃は壽永三年。詞三月下旬の事なりしに。平家は都源氏は陸。兩陣を海岸に分つて。互に勝負を決せんと欲す。能登守教經宣ふやう。去年播磨の室山備中の水島。鵯越にいたるまで。一度も味方の利なかつし事偏に義經が謀いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討たん事こそあらまほしけれと宣へば。景清心に思ふやう。判官なればとて鬼神にてもあらばこそ。命をすてばやすかりなんと敎經に最期の暇乞。陸に上れば源氏の兵遁すまじとぞかけむかふ。景清是を見て。物々しやと夕日影に打物ひらめかいて切つてかゝればこらへずして。刄向たる兵はフシ四方へばつとぞ逃げにける。さもしや方々よ。さもしや方々よ源平互に見る目もはづかし。一人をとめん事は案のうち物小脇にかいこんで。なにがしは平家の侍。惡七兵衞景清よと名乘りかけ名乘りかけ手取にせんとて追うて行く。三保の谷が着たりける兜の錣を取りはつし取りはづし。二三度逃げ延びたれども。思ふ敵なれば遁さじと飛びかゝり兜を押へ取り。えいやと引く程に。錣は切れて此方にとまれば主はさき逃げのびぬ。地遙かに隔てて立ち歸り。さるにても汝恐ろしや。腕の強さといひければ。景清は三保の谷が。首の骨こそ強けれとフシ笑ひて左右へのきにける。地言はれぬ物語お耻かしう候と。語り給へば人々はフシ一度にどつとぞ感じける。地かくて我が君御座を立たせ給ひければ。大名小名續いて座をぞ立ち給ふ。詞景清君の御後姿をつく〴〵と見て。腰の刀をするりと拔き一文字に飛びかゝる。おの〳〵是はと氣色をかへ太刀の柄に手をかくれば。景清しさつて刀を捨て。地五體を擲ち涙を流し。ハル南無三寶あさましや。何れも聞いて給はれ。かく有難き御恩賞を受けながら。凡夫心の悲しさは昔に返る恨の一念。御姿を見申せば。主君の敵なるものをと。當座の御恩は早や忘れ尾籠の振舞面目なや。眞平御免を蒙らん。誠に人の習ひにて心に任せぬ人心。今より後も我とわが身を諫むるとも。君を拜む度毎にも此の所存は止み申さず。却つて仇となり申さん。とかく此の兩眼のある故なれば今より君を見ぬやうにと。いひも

あへず差添ぬき兩の眼玉を抉り出し。御前にさし上げ スエテ かうべをうなたれゐたりけり。頼朝甚だ御感あり前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬ如く又頼朝が恩をも忘れず。末世に忠をつくすべき仁義の勇士武士の手本は景清と。數の御褒美淺からず鎌倉さして入り給へば。なほ景清は觀音に。三萬三千三百卷の普門品を讀誦して。日向の國を本領し悅び〱退出す。なほ〱源氏の御繁昌。國靜謐の始なるはと皆。萬歳をぞ唱へける。

右此本者依爲懇望文句音節等
悉校合加秘蜜令開版者也

竹本筑後掾

大阪高麗橋壹丁目
山本九兵衛板
山本九右衛門板



團扇曾我

文宣王は大野に狩して麒麟を得。韓退之が獲麟の解に曰く。麟は徳を以てし形を以てせずともいふ。麟は仁獸にして生けるを喰はず。生草を踏まずともいへり。地道ある君が御狩場や。麒麟を得ずといへども農業を妨げず。民を助けて山田もる火串の光明々として。斐たる君子の一遊一豫。國を靡かす旗竿のオロシ直なる掟。樂しめり。地維時建久四年仲夏下旬。征夷將軍賴朝卿。富士の御狩の當日を待つも程なき短夜や。御發向は寅の一點假屋の木戸も明け方に。御出馬の御觸あり。昵近外樣の大小名狩裝束に美を盡くし。勢子の人數は所領の高下面々持の場所に纒を。立てて組子には思ひ〳〵の笠標袖印。扨御鷹は雀鷂雀鷂鶺鳩兒鷹。隼 兒鷹朝鮮鷹。逸物の犬唐犬これも數疋ひかれたり。馬鞍皆具の綺羅飾。花と紅葉と武藏野に フシ一度に眺むる如くなり。地爰に信州の住人海野の小太郎行茂。八十ばかりの老入道を御前に引据ゑ。詞只今御假屋へ參勤仕る處に。此の入道弓矢携へ。御假屋の邊を忍んで徘徊仕る體に。山賊强盜とも見え申さず。必定平家の餘黨と存じ召捕つて候。地きつと御糺明然るべしと申し上ぐる。賴朝聞召しいしくもしたり行氏。先年大佛供養の時。惡七兵衞景淸が賴朝を狙ひし例もあり。いかさま仔細あるべし眞直に白狀せよ。陳じなば拷問せん フシ如何に。如何にと仰せけり。地入道ちつとも臆せず今は何をか包み申さん。詞某は御舍弟九郎判官殿の家臣。武藏坊辨慶が父田邊の別當辨眞が生き殘りたる身の果候。君今天下の武將と仰がれさせ給ふも。全く判官殿の戰功なるに。地讒人の口によつて片時も安堵の思ひなく討たれさせ給ひ。子にて候辨慶も。冥途の御供仕りぬ。せめて無念を晴さんため。あはれ討死したる御家人どもが。産み捨てし子にても候はば。幼少なりとも狩り集め。心ばかりの弔ひ戰仕らんずる血祭に。先づ讒者を一矢と心掛け忍び寄つたるかひもなく。海野とやらに見付けられ白狀無念の至りなれども。君ゆゑ捨つる老の命とく〳〵首を召されよと フシ返答すゞしく申しける。地賴朝暫く御思案あり。これ一應の事ならじ。後日に評議あるべき條先づそれ迄はいたはれとて。和田の義盛に預けらる。時に工藤左衞門祐經罷り出で。詞誠に彼の法師其の儘置かば何事をか仕出し。御遊興の 妨ならんにいしくも仕つて候ものかな。地何にても御褒美をと執成せば君御悅喜の餘りに。尤々何にても望めよと仰せける。海野面目施しこは冥加に叶ふ

上意かな。然らば御秘蔵の御馬なれども松島月毛を拝受せば千萬騎の御用将にも勝りて悦び奉らんと申しも果てぬに師經。チヲ何しに上意に違變あらん。それ〳〵松島月毛を引いて牽け。と取り持つ處へ。仁田の四郎忠常憚らずつゝと出で。詞これ〳〵工藤殿彼の御馬には言ひ分あり。先年裾富士の人穴へ入りし時。御褒美望めとの上意ゆゑ松島月毛を願ひしかど。御出陣の召し料とて其の願叶はず。詞なんぞや老耄の痩法師を召し捕つたる御褒美とて。只今海野に賜はつては忠常が武士道立たず。且は君の御依怙にもなるかなり。よしそれとても御取持にて是非海野に下されなば。慮外ながら御前にて見事な思案を致せしごと色をちがへて言ひければ。師經えせ笑ひこれ忠常。詞以前は以前今は今。地御邊が望めればとて。日本の武将として誰に恐れて御言葉を違へさせ給ふべき。して又海野が拝領せば見事な思案致せしとは。どうした思案ぞ聞かんといへば。詞いやさ思案までもなし。彼の御馬を胴中より二つに斬り。頭の方は某海野には尾筒の方。地半分づつの切り取りごといへば海野もせいて膝立て直し。詞なに我が拝領の御馬を半分宛切り取るとは舌長き雜言。愛宕白山指でもささば堪忍せじと眦を張る。チヽヽ拝領したくばして見よ。詞諏訪八幡も照覧あれ馬人共に一討と地三方論義の意地づくにフシ各々手に汗握りけり。地大將扇を上げ給ひ詞暫く暫く兩人先づ〳〵靜まれ〳〵。これは雙方道理にて頼朝無念なり。先づ彼の馬を頼朝が預つたり。扨此の上は兩人共に今二度づつの手柄をせよ。以上三度の功名早き者に取らすべし。此の言葉相違あらば氏の神の御罰を得んと。忝くも御大將御誓言ありければ。二人はあつと頭を下げ恐れ入つたる禮儀の體。大將軍の御料簡フシ各感ずるばかりなり。地重ねて仰せ出さるるは。今將眞が言葉によつてつく〳〵と案ずれば。平家の餘類を始め義經が家人等、錦戸が一族伊東、道が末葉なんど。頼朝に怨みある者多かるべし。敵の末は根を斷つて葉を枯らせと傳へたり。仁田海野に言ひ付くる。父の知れぬ幼き者を尋ね出して吟味せよ。假令遊君下女たりとも其の父分明ならぬ子は懐妊なりとも腹を割き、蛇蠍詮義を加ふべしと仰せ嚴しき御狩場の、番手々々の繪印、御馬印の目に高き富士の裾野に三重へ出で給ふさる程に。地仁田の四郎忠常は海野と功名争ひてあはれ御敵の末を詮議し出し尚名二度數を合せ。松島月毛を拜領し海野工藤が口抑へんと駒を早むる大磯の、浪こゝ許や並木の蔭より若き女つつと出て詞これ申し仁田樣。お侍と見受け参らせ些と頼み度き事候と。詞面しかと取る若黨どもこは狼藉と立ち騷げば。仁田元よりさる者にてやれさなせそ〳〵。詞見かけて頼むとあるを聞届けでは通られず。シテ。頼むとは何事なるぞ仔細によつて頼まれうがとあれば。

先づ以て忝し。必ず其の御言葉を違へさせ給ふなえ。地いや餘の儀でも候はず。自らは今朝御狩場にて。海野とやらんに捕はれし入道が娘。花野と申す者なるが。詞親の入道武藏坊辨慶が父。辨眞と名乘りしはかつて僞。誠は曾我殿の下人鬼王團三郎が父。津藏の入道と申す者。地お主の敵祐經に一矢と思ひ忍び入り。其のかひもなく召捕られ候が、御前にて鬼王團三郎が親なりと有の儘に名乘りなば、御勘氣の曾我殿の大事と思ひ名を隱し。辨慶が父辨眞と申せしと存ずるなり。それにつき鎌倉殿より。地父親知れぬ子のあらば。假娵なりとも腹を割き。詮議せよとの御仰を承り給ふとかや。頼み申すはこゝの事。曾我兄弟の人々浪人の徒然に。折々色里通ひ馴染の方もありと聞けば。遊女の腹に情の胤の宿るまい物でもなし。よし其の事は構はねども。それからそれがどうこけて御兄弟の身の上に。萬一御祟ある時はもと自らが父入道が仕損じより事起る是をあはれと思召し。御聞き届け候ひて若も曾我殿の子胤など候はゞ。御料簡頼み奉ると理を盡し事をわけフシ手を。合せてぞ歎きける。地仁田聞きもあへず扨はお事は聞及ぶ。鬼王が妹今朝の入道も鬼王兄弟が親なるとや。扨々餘儀なき頼み事心得たりと言ひ度いが。詞ここに一つの難儀こそあれ。海野と某御前にて御馬拜受の爭ひゆゑ。三度の手柄ある者に賜らんとの仰なれば。何をがな手柄にと意地を張る眞最中。地曾我は伊東の末なれば我が君の御仇。海野に先を越されては某男立てられず。さりながら女の身として主を庇ふ志のやさしければ。八幡見遁し聞き遁しご少しも氣遣ひせられなとあれば。なう頼もしや有難や必ず頼み奉る。其の御返禮に參らする寶のありと。守袋より一包を取出し。これは韃靼國より渡りたる虎の生爪にて候が死したる虎の爪はあれども生爪は稀なる物。誠や虎は獸の王なる故。地を走る獸の怖ぢ恐るゝと承る。狩人此の生爪を持ち狩に出づるに。如何なる荒熊荒猪も易々手取に致す事猫の鼠を取る如し。之を御身に附け給ひ猪とも熊とも引つ組んで。人の及ばぬ御手柄を遊ばさせ給ふべし。いで〳〵證據を見せ申さん。隨分其の御馬に鞭を打つて驅け給へ。止めて見せんと言ひければ。地不審ながらも忠常は。心得たりと乘り出す娘先に立ち塞がり。追戻せばたぢたぢ〳〵。とろ〳〵〳〵と千鳥足。四足を折つて恐れしは フシ不思議なりける次第なり。地忠常我を折り喜びて。希代の重寶手に入るからは御狩にて高名し。望みの御馬を拜領し富士の高嶺に名を擧げん。此の上は曾我兄弟如何なる狼藉ありとても。又は子孫のありとても弓矢八幡見遁しこそ。お事が父入道も和田殿と内通し。必ず助け得さすべし人見付けては如何なり。さらばさらばも餘所事に聞き捨て行くや時鳥。五月の空の雨曇に紛れて。こそは 三重〽別れ路の。

フシ背の移り香。炷きしめて。地晝迄寢るを作法にて。餘所と門地の　フシ揚屋町。亡八の亭主下々迄それを習ひに朝寢する。大磯小磯化粧坂朝顏知らぬ里ぞかし。地かゝる處へ町の番太慌しく。詞何事やらん御詮議とて仁田殿海野殿御出なりと觸れ歩く。地町の年寄五人組。寢ほれ髮に袴肩衣オクリ土にへ手をつき居たりける。地程なく兩人入り來り。詞やおやあ町人ども。此の度仔細あつて姙婦を詮議する。夫妻正しき者は格別下女婢女は言ふに及ばず傾城とても吟味する。懷姙の女一人も殘らず出せとありければ町人ども承り。さん候下女どもには一人も候はず。傾城の中に三四人姙みたる者御座候。地それまづ富士屋の竹取出でよといへば。戀には恥ぢぬ傾城も。包む色にや胸高の　フシ帶で。隱すもしほらしや。地海野仁田言葉を揃へ。詞汝が姙みし子の親は何者なるぞ。帳に記し御前へ上ぐるぞ僞るな眞直に申せ。地さん候此の子が親は京の衆。折々ごとに濡衣の人目を包む闇の夜や。烏丸烏帽子屋の。折様と言ひければオクリ海野へ帳にぞ留めにける。地次に出でしは井筒屋の。檜垣と申す新造と。側からいふもフシ恥かしく。裲襠の褄。打合せ。見せじとすれど振袖の。下より漏るゝ二重嶌其の子が父は誰なるぞと問はれて顏も赤くなり。紅葉が谷の客なるがひよつと變るな變らじの。其の言の葉で發句や連歌師の山樣と。フシ同じく帳にぞ付けにける。地其の次は眉目惡く。歩き振りさへ横町の青柳と申し候なり。詞扨汝が胎内の子の親は如何に。地誰と申して我が身には。二人の客もあら磯の荒井の宿の馬方にて本の名は六藏。かへ名は四の二もの思ふ。歌流れ憂き身をすてゝんある。ある人の申されしは色も顏もお腹も脈も唯ではない。定めて〳〵あん。青梅好きやるならば惡阻でござろ。面妖や不思議やはや七月とぞ答へける。地さて其の次は虎御前。おめる色なく二人の前に立ちながら。お尋ねなれども自らは身持にては候はず。勤めの憂さがつがへとなり斯かる病を受け候。よし又身持なればとて。夜な〳〵變る男の數どれがどれやら何のその。それに覺えのあるものかと言ひも果てぬに海野はつたと睨み。詞扨々のぶとい賣女奴かな。己れ曾我の十郎が子を姙みしを知るまいと思ふか。地サア有りやうにぬかさぬかとぞ嚇しける。仁田曾我といふ聲に花野が契約思ひ付き。詞イヤこれ海野。浪人なれども祐成も侍押し付けてさうも言はれまじ。病とあらば病にして帳面をすまされよといへども海野聞き入れず。宥免するも事による。曾我は君の御仇不吟味にはなり難し。誠あかさずば腹を割かんと犇きける忠常ちやくと思案を出し。地エヽ是非もなし何をか包み申さん。あれは拙者が子なれども世間を憚り。祐成といふ假名をし遣手禿亡八中へも。懷姙する迄隱せしが手詰になれば打明ける。沙汰なしに賴むといへば梓

の皮着る虎御前。詞ハテ卑怯千萬な。地假令妾にて死ねばとてそれを今言ふ事かはと。フシ詞を合はする利發さよ。地海野かぶりを振つていやさお言やるな。詞此の場をさまし重ねて曾我が所緣とて引出し。一人の手柄にせん巧みな。但し虎と馴染ある正しき證據ばしあるかとひどく問ふ。ムヽシテ。證據あらば宥免あらうか。地後に否と言はせぬがと詞をつめても證據はなく。心を碎き實に思ひ出せしと。花野が與へし猛虎の爪懷中より取り出し。これ此の書付を見給へ虎の生爪と書いてある。離しくれたる虎守りに懸けたる聞夫男。疑ひめさるはヲヽ合點々々。今朝の遺恨に胎内の悴を殺さん心底は。白癩穢い下郎にも劣つたりと恥しむれば。誠とや思ひけん勢にや恐れけん。アヽ短かし忠常證據あれば。疑なし帳面もむつかしと虎は病に片付きし。仁田が思案なかりせばフシ危き曾我の運命なり。地かかる所へ海野が方へ祐經より早使。詞富士野の御狩最中にて。只今幾年經るとも知れぬ猪荒れ出で。勢子四五十人懸け殺し各々あぐんで見え候。早く御越しなされ此の猪止めて高名遊ばし。御望の馬拜領あれ事急なりとぞ告げにける。地海野はつといふよりも挨拶もなく駈け出す。後れじものをと仁田の四郎一散に駈け出し跡になり先になり。足をもためず駈け出すは宛然競馬の三重へ如くなりフシ案の如く。地狩場には幾年經るとも知らぬ猪の。牙は劍の如くなるが鹿矢三つ四つ負ひ乍ら。近付く者をかけ倒し下り合ふ者を踏み散らし。大きに猛つて巖窟を小楯に構へ鼻を吹き。寄らば懸けんず勢に人々馬をたてヽ兼ねてフシ勢子も。しどろにたゞよひける。地養由が術きよりくりう（本ノママ）が神變も。敵ふべしとは見えざりけり君團扇をひらめかし。誰かあるあの猪止めて高名せよのと。コハリ呼ばはり給へば武藏の國の住人。太樂の平馬の丞某止めて御酒宴の御肴にと。夕日かゞやく大太刀を拔きかざし進みに進んで出でたりける。猪は巖根に身を伏せて飛びかゝらんとる氣色たゞ。牛鬼とも謂つべし詞には似ざりけり。面もふらず逃げて行く。平馬が姉聟愛甲の三郎熊手提げかけ向ふ。猪は身を振り飛びかゝり弓手の腕を懸け切れば。熊手を捨ててぞ入つてける。安西の彌七郎返せ〳〵と聲をかけ長刀構へかけ向ふ。猪は怒つて齒をみがき唸りて。かゝる其の聲も高股を引つかけて。三間ばかり地振り上げしは。鞠の曲とも謂つべし。コハリ臼杵の八郎景信續いてかゝれば隙間なく。股の附け根を引つかけられ眼眩んで引いたりけり。御所の黑彌五是を見て。大の尖矢打番ひ暫しかためて。切つて放す矢よりも早く飛び來り。腰のつがひを横がけにざつふとかけてごおッとしける。岡部の三郎原小二郎。槍提げ兩方より上段下段に包み突き。猪は一期の死に狂ひひらりと飛んではかつしと跳ね。くるりと廻つて丁どかけくる

り〳〵はた〳〵〳〵。蝶鳥なんどの如くにてひるむ氣色の見えざれば。二人もあぐんでさつと引く。猪は巖根に身を縮め鼻の嵐に猛りをかき。息つぎ 地居たる有樣は オクりすさまじ〳〵かりけるコハリ次第なり。新開の荒四郎。憎し穢し方々よ。鬼神にてもあらばこそあの畜生に恐れては。誠の合戰なるべきか某が打殺し。皮引つ剝いで障泥にと突棒取りのべ振つてかゝる。猪は眼んで歯を鳴らし只一かけにと唸りぬる此の勢に驚きて。突棒からりと投捨て鹿垣左右へ押破り。高這ひして逃げければ數萬の狩人 地聲を上げ。フシ一度にどつとぞ笑ひける。地海野小太郎行氏眞一文字に駈け來り。此の猪を組み止めなば高名三度に足らずとも。御馬を拜領致さんと小太刀を搔い込み躍りかゝれば猪はすかさず一足に。飛ぶとぞ見えしが小太郎が膝口より 踝まで。眞下りに懸け通せば片足立ててちがちがと。フシ勢子の中にぞ逃げ入りける。地今は下合ふ

者もなく徒らに守り居る。かゝる處へ仁田の四郎後れ馳せに駈けつき。あらもの〳〵し仰々し。漢の李廣は石虎を射る。明の金氏は女なれども猛虎を討つて夫を助く。假令鐵石を丸めたる猪なりとも。しや何事かあるべきと箙竹笠かなぐり捨て。えい 地やつと聲をかけ二丈餘り飛び上り。向ふさまに乘り移れば 逆にこそ乘つたりけれ。猪は乘られて怒をなし土を蹴立て木の根を穿ち。雲と霞に分け入つて。飛び越え跳ね越え 三重〳〵駈け上り フシ又駈け下り。地虚空を飛んで廻りしは周の穆王法の爲。八疋の龍馬に乘じ萬里を刹那に到りしも。フシ斯くやらんとぞ見えてける。仁田は馬上の名人にて。樂天が三つ頭 王良が祕密の鞭。尾筒を手綱にしつかと取り腰も切れよと締め付け。締め付け履行縢は山おろしに。さら〳〵さつと千切れてのけば大童に亂れなつて。只落ちじ〳〵。落ちまじものと堪へける小笹萱原巖石枯木打ちつけ。打ちつけ猛

りをかき。落ちなば懸けんとあがけども。忠常虎の爪持てば其の威勢にや恐れけん。とある伏木に躓きて弱る處を誤たず。指添拔いて肋骨四五枚はらりと搔き切れば。四足を上に踏ん反りて立竦みになる處を。やがてひらりと飛んで下り數の止めをさしもの猪。仕止めて仁田は悠々と扇を使うて立つたれば。大將軍を始めとし大名小名勢子狩人。足輕荒子一同に乘づたり仁田止めたり四郎。手柄々々と 地喚く聲 フシ山も崩るる如くなり。地賴朝御感限りなく。仁田が振舞數箇度の高名にも勝りたり。望なれば松島月毛を取らするなりと宣へば祐經進み出で。詞松島月毛の事は高名三度ある者に賜らんとの仰なるに。たとへば如何なる雷と組めばとて。三度の都合も合はざるに忠常に賜はるは。海野の太郎に腹を切れとの御所存かや。地先づ此の度は御無用と。たつて止むれば我が君もげにもとや思しけん。先づ〳〵休息仕れと御本陣に入り給へば。

大名小名人數を卷きすクリ皆々へ假屋に入り給ふ。地仁田本意なげに見送りヱヽ惜つくし祐經めが。海野と緣者たる故に彼奴に譽をつけんため。度々我を妨ぐる。所詮祐經が首を取つて此の無念を晴さんと。立上る處へ若者一人木蔭よりつつと出で。詞これ申し仁田殿。前代未聞の御手柄目を驚かして候。拙者は曾我の十郎祐成と申す者。地先刻爰にて虎が難儀を御身に受け。救はせ給ふ御懇情生々世々の御高恩。御禮申し上げ候と頭を地につけ禮儀をなす。詞なに〳〵承り及ぶ十郎殿とや。某猪を止めたるも。御家來鬼王が妹とやらん虎の爪を與へし故。地其の契約に虎御前を助け申し候へば。フシ御禮は爲替に仕る。地扨此の爪お返辨申す間花野とやらんに返したべ。某は祐經めを討たでかなはぬ意趣ありと駈け出づるを引止め。詞重々の御無心なれどもさりながら。祐經は我々が大事の親の敵なるを。御分に討たれては曾我兄弟が侍立たず。地暫しの無念を休められ彼奴を我等に討たせてたべ。討ち了せてあるならば御前近く斬り入らん。時には大勢下り合はん。千騎萬騎防ぐとも我々兄弟物の數とは存ぜねども。仁田の四郎忠常と御名乘を聞くならば。首差し伸べて討たれ申さん聞き分けてたべ仁田殿と。理を盡したる詞の末忠常打頷き。チヽ神妙々々面白し。さあらば祐經討ち給はゞ和殿が首は貰うたぞ。如何にも進上忝い。それ迄隨分御堅固に。其げも御無事にお暇申す チヽ最早御座らうか。首を取つたり遣る迄の先づ〳〵これがお暇と。互の一禮こまご〳〵と降る五月雨やさらば〳〵と竹笠取つて打ちかづき仁田は假屋十郎は。伏屋をさして立歸る ハルフシ 述べも述べたり。地答へも答へた武夫の詞の末は神妙。神妙いやはや言語に盡くし難しと押しなべ。聞く人感じける。

第 二

己れが人に及ばざるを恨みず人の己れに勝るゝを妬むは小人の習ひ。されば海野小太郎行氏。仁田と武功の爭ひ蝸牛の角のつのめ立ち挑みはけむと雖も。仁田が猪に乘つたりし手柄に續く手柄なく。心は高上手はたゝず フシ空しく氣根を費しける。地元より祐經緣者といひ仲好しなれば。彼の辨慶が父辨眞と名乘りし津藏の入道を。鬼王が親とは夢にも知らず和田に預け置かれしを。工藤祐經取りなしにて暫く預かる其の手たては。狩場の見物群集の中辨眞を引き連れ。若し見知つたる者あらばそれこそ義經の家來筋。鎌倉殿の御敵と召捕つて御前に出で。仁田が手柄を踏み付けんと。巧む思案も廻り遠き野山を引いてぞ 三重へ めぐりける フシ曾我兄弟は 地聞き及び譜代の下人を囚人となしては亡からん跡迄恥辱なるに。人もこそあれ和田殿の御預りこそ仕合なれ。窃に歎き申して見んさり乍ら。祐成は人見知れり。昨日今日の元服にて五郎は見知る者あらじと。鬼王兄弟妹の。

花野を五郎に相添へて フシ和田の假屋へ急ぎける。海手山手を。限りにて。地大垣亂杙逆茂木引き。東海東山三十三ヶ國の大小名の假屋の前。所々に木戸を打ち。家人商人見物の中を紛れて行くうちにも。時致は此の夕敵討たんと思ひ込み眼を四方に見くばり案内窺ひ通りける。處こそあれ海野が持の木戸口にて覿面にはたと逢ふ。花野父を見付けあれよといへば鬼王團三郎。こは如何にと仰天す入道はつたと睨み。詞やあ何なれば狼狽面。此の入道に見知られては詮索がむつかしからう。地早く通れとつかうどに言ひ放す。海野敏き男にて。詞いや〳〵汝等が有樣兩方見知つたるに紛れなし。何者なるぞ眞直に言へ。さなくば跡へも先へもいつかな事やらぬといふ。鬼王兄弟つつと出でいや〳〵。我等は上方の貧者にて候が。これなるは妹老いたる親を育みのため。奉公稼ぎに方々召連れ廻り候が 地何方にてやら彼の御坊を見たるやうに候故。拙只今の通りなりと言ひ捨てて通らんとす。海野どこへと引留め。詞シテ其の見たるといふは何處にて見たるぞ。胡亂ならば通しはせぬ。地勿論戻しもせぬぞとて フシ腕を捲つて氣色する。地鬼王兄弟一期の大事と思ひ。是は近頃不祥なる所へ參りかゝつて候ものかな。然らば方々廻りし次第。スヱテあらまし語り申すべし。地先づ上方の女の習ひ大内方を望むゆゑ。中宮女院仙院十二の對の局々の女嬬お末。内侍所の刀自采女 フシ公家に松殿。薄殿。近衛關白政所一條殿や九條殿。久我菊亭に花山の院頭の中將頭の辨。儀同三司女三の宮。御比丘尼御所迄稼ぎしかど。フシ御所の風には合はずして。南六波羅の屋敷方。武家は行儀むつかしく妾もあり付く緣薄き。衣の棚や數珠屋町めぐり〳〵て室町の糸屋。組屋や鬘女に。御影堂の扇折骨身を碎き稼げども。都の奉公口もなく西國方へ身をしぼる。豐後の國の染殿や因幡の。國の紙漉き奉公フシそれより紀州熊野には。好き奉公の口ありと。聞くをしるべに立ち越えしに。それは小歌比丘尼とて尼にする由承り。逗留もせず歸りしがチヽそれよ〳〵。今思ひ合すれば。熊野山家の何處やらにて一寸見たる御坊にて候。海野聞きもあへずエヽ。うぬめ等はしれ者かな。入りもせぬ長口上紛らかして通らんとや。察する處己れ等は。義經の家來熊野の住人鈴木龜井が一族よな。此の辨眞めと心を合せ。鎌倉殿へ仇をなす御敵の張本ソレ。遁がすなとひしめく處へ。五郎時致編笠取つてつつと出で。詞これは近頃權柄なる仰かな。あの者どもは某が召抱への下人ゆゑ。最前より腸が燃え胸の蟲がむか〳〵と堪へ兼ねて候へども。無事に濟まばすまさんと齒をくひしばつて控へし所に。理非も碌に聞届けずなんぢや搦め取らうして如何樣の科があるさあ承らん。地科もない下人を搦めさせ主人の身にて堪忍ならじ。町人なれば太刀刀のお相手には

叶はずとも。腕や臑の力には御侍にも負け申さぬ。張りごくら踏みごくらは此の。膝骨の砕くる迄と。フシ臑打ちたゝいて睨めつくる。地されども海野はちつともひるまず。詞これさ若い者。たとひ其の方が下人にもせよ。是は頼朝公の御敵判官殿のゆかりを尋ぬる詮索なれば。言うても天下の御大事誰をか憚るべき。此の入道こそ辨慶が親田邊の別當辨眞よ。それに親しき者なれば。鈴木龜井が一族ならんと咎むるが僻事か。地彼奴等を下人といふからは。チヽ推したり義經の落し子ありと聞けば。拙は汝等はそれなるよな。爰での論は無益誤りなくば御前にて。速に言ひ譯せよ御所の假屋へ同道せん。はや歩めさあ來いと言はれて流石の時致も。御前へ出ては惡しかりなんと フシ返答。遅々して見えにける。地入道これぞ一大事と思ひ。詞拙は己れ等は先づ何者なれば。何の用もなき事を仔細ありげに言ひなす故。科もなき判官殿のいよ／＼御科深くなり。勿體なくも御骸に苦患をかくる後世の迷ひ。いかさま騙りか物取りならん。地エヽ腹立ちや憎つくい奴かな。しばし御免と郎等どもが突いたる寄棒おつ取つて續け打ちに時致を丁々と打つたりける。これはと言ひて鬼王兄弟立ち寄るを容赦なく。ヤア己れ等とても只置かうかと。拂ひ打ちに叩きつけ／＼。さればにや判官殿御存生の折からに。東下りの忍び路や安宅の關にて我が子の辨慶。判官殿を打つたるとや。それは富樫を欺罔の智略の棒のゆがみなき。此の辨眞が心底を海野殿への言ひ譯に。叩き殺して見せ申さんと口には言へども心根は。主君なり我が子なり思ひの色を腹立の涙に見せて打つ杖も外れよかしと。打てば此方は悟られじと。用捨もなく身に受くる互の心ぞ哀れなる。地海野我を折りやレさなせそ辨眞。殺しては如何なり最早よいわと引止むる。いや只殺して見せ申さんと猶振り上ぐるを捥ぎ放せば。エヽ殘念や口惜しや。草の蔭にて判官殿さぞや悲しく思されんと。義經にかこつけて胸に保ちし涙をぞ。わつと泣き出す其の心鬼王兄弟時致も。思ひやりたる忍びねの フシ歎きを。隱して俯向けり。地海野重ねてこれ／＼若者。詞以前彼の者が主人と言ひしが何處の町人商賣は何なるぞ。されば某は奧州伊達の郡の傾城屋にて候が。あれなる女を金銀出し傾城に召抱へ。只今連れて下り候。ムム然らば定めて傾城の請狀あらん。それにて讀め聞かんといふ。

傾城請狀

地元より請狀あらばこそ。懐中より夏書しかけし普門品を取り出し。請狀と名付け高らかにこそ讀みたりけれ。地傾城奉公請狀の事。一此のなみと申す娘流れの道に身を沈む。時に建久四年癸の丑。五月十五夜突出し女郎。いづくの雲も障なき影もまる年十年きつて。金子百兩確かに。地手取りの身は籠の鳥。親は他國の死に目なりと

も年の間は廓の外へ。ハルフアシ一歩にてもふみも通はぬ遠國波濤へ。賣りてやり手や姉女郎の掟。背かず勤めさせもが フシ露程も。奉公に如才なく。客をば振らず心にかけてギンハルフシまはる。紋日を。一日も怠らせ申すまじ。第一には間夫狂ひ。浮名黒子に入れ性根する。男あつて。勤め粗末に致すに於ては着の儘ながらの端に下され。又は水仕の下女にせられ。竈の火を焚き湯殿の水。フシ門掃き背戸掃き。庭の掃除や塵や芥の紙くずの葉の恨みと存じ候まじ。萬一此の者年の内。廓を迯げて走り井の水に。身を投げ刄に伏し。心中して死したりとも御難はかけじ何方迄も。フシ請人出でてさばきがみ油元結紅鼻紙。足駄雪駄に至る迄。ハルフシ仕着の外は身の入れ立てとの定めなり。若し又深き縁のありオクリ戀ぞ。積りてみなの川。誘ふ水とて請出す。價千金萬金なりともそれは主人の得分たるべし若し誰人ぞ流れの身に。横波かけて妨げのさし出の磯

りもがり舟。推して暇を取るならば衣裳篋らずはぎすゝきの フシ奉公構ひ給ふべし。總じて勤の其の間下戸なりとても酒飲み習ひ。文には嘘を書き習ひ。床にて人をやき習ひ寝ぶたきとても居眠らず。泣き度うなくとも後朝の。フシ別れに押へて泣かすべし。起請誓紙に身の中の血をば惜ませ申すまじ。指は切り損髮も切り損申し分候まじ。其の外なにはのよしあしにつき後日の爲の傾城奉公請狀。依つて件の如しと フシ天も響けと讀み立てたり。

地海野の太郎疑晴らし。扨は仔細もなき者なり疾う〲通れと許しければ。時致しすましたりと思ひ。詞御聞き分け先づ以て忝し。猶最前より承れば。判官殿の所縁御尋ね候とや。それにつき我等が本國奥州には。其の末々多く候へども手を措き構ふ者もなし。あの辨眞めが我々を打擲致せし返報に。地拙者に預け下されば。搦めて國へ連れ下り辨慶が親を捕へしと國中に風聞せば義經の所縁ども堪忍せず。集らん所を皆々催し搦め取つて參らせん。一つは旦那の御奉公にとフシ誠しやかに囀けば。地海野ほつかと落され。扨々これは過分な心入れ。彼奴は某我が君より預りし奴なれば。如何樣にしても苦しからず。人を添へ御分に預けん彼を囮に搦め取つて。我が手柄にさせてくれよ必ずそれそれ兵五兵六。兄弟かれに附いて行け。隨分ぬかるな沙汰ばしすな。判官の末類を多くも入らぬ一兩人。生捕りてくるゝなれば此の海野は手も下さず。嚙ませて飲んだる大手柄乾度證は重ねて重ねて。急げ〲と別れしはオクリ愚か〲にも亦あさましし。地兵五兵六是は不思議の同道いざ參らんと勇みける。時致あたりを見廻し鬼王兄弟に目くばせし。二人を左右へばた〲と蹴倒すコハ狼籍と起き上がるを。鬼王兄弟つゝと寄つてしつかと取る。詞時致から〲と笑ひ。やれ腑拔面が家來のまた腑拔面ども。我を誠の町人と思ふか。河津

の次男曾我の五郎時致といふ者よ。此の人道は鬼王團三郎が父なれども。我々を庇ひ辨慶が親と僞りしを。鎌倉殿を始め大名小名の髭口へ。うま〱ときこし召したる可笑さよ。地何とぞ奪ひ返さんため。和田殿へ參る折柄海野殿の運のつき、好い所で出くはせ此の時致にたらされ。お預りの大事の囚人うか〱と渡さるゝは。猫に鰹武士に似合はぬ甘い事。詞これ爰ななまぶしどもゝうぬめ等が首より爪先迄微塵に刎つて。地兄祐成が手飼の虎に喜ばせんそれ〱と。引起し口にこみ藁いきほねたゝすな山際にて討つて棄てよ。扨又入道妹に故郷へ送れ。某は祐成の狩場の出立氣遣し。追付いて本望遂げん門出よければ行く先の。仕合は手に取つたり、吉左右知らせん待ち奉る莞爾と笑ふ顔と顔、主從此の世の見納めとは後にぞ思ひ 三重へ 知られたる。フシ其の日の御狩も。地勢子を上げ息を休むる午の刻、御辨當と觸れければ、フシ狩場も暫し靜まりける。地爰に富士のねがたより。七年物の牡鹿一疋八つ股の角振り立て。險岨苦路をのさ〱と北を差して落しける。秩父の家臣本田の次郎親常天の與へと弓と矢番ひ、駒を直路に歩ませ寄り既に矢頃と見えし時、工藤左衛門祐經一散にあをりかけこれ〱本田の次郎。詞あの鹿は祐經が見附け射止むるぞ粗忽すなと聲をかくる。仰にて候へども。狩場の習ひ目がけし鹿を人に渡す法はなし。外れん迄も親常が射止めて御覧に入れ申さんと。地猶引きしほれば祐經怒つて。詞ヤア緩怠なり親常。秩父が下人陪臣の分として、此の祐經に慮外をなす地廣言吐いて乘出す親常無念に思へども。慮外といへば力なく。エヽ己れ祐經め、矢印に名乘なくば遠矢に射落してくれん物をと。拳を握つて控へし處に曾我の十郎祐成祐經を遙かに見付笠引つ込み弓を伏せ。繁みを分けて忍び寄る本田きつと見て。詞これ〱申し祐成殿、忍んで御狩の御供の由主人重忠聞き及ばれ。御用あらば承れと申し付けられ候が。貴公數年御狙ひの鹿こそあれへ見え候へ。地さり乍ら彼は馬上貴公は徒歩。幸ひ親常も當座の遺恨候へば。此の馬を貸し奉る召されて鹿の眞直中。根みの矢壺は外れ申さじ人目あればお暇と。下り立ち馬を與ふれば祐成手綱を押戴き。兎角は言葉多からずとひらりと乘つて駈け出す。不思議や此の馬身の毛を立て四足を縮めて立ち竦む。撻てども〱あをれどもちつとも動かず跳ね上り。前足折つて祐成を眞逆樣に跳ね落せば。祐成は枯杭に フシ 弓杖ついて下り立つたり。地落して馬は輕々と谷を下りに駈けて行く。折しも時致遙かに見付け走りかゝつて馬の口。しつかと止めて引き來り。扨よき所へ參りたり鐙を踏みしめしつかと召せ、心得たりとひらりと乘れば又此の馬高嘶し、躍り上れば祐成は屛風返しにどうど落ち。岩角にて胸を打ちスヱテ氣を失ひたるばかりなり。地時致

はつと抱き上げ。エヽ憎や此の馬は目前の敵刺し殺さんと飛びかゝる。祐成はつと心付きやれ待て時致。地全く馬の過ならず。よく／＼思へば花野が仁田に與へつる。虎の生爪懐中せしが恐れたるに紛れなしと。守袋より取出し遙かの谷へ投げ捨てて。駒引寄せ打乗つて引つ立て見れば不思議やな。元の如く歩み行く。續けや時致來れや五郎と谷を乗り越え乗り下ろし。丘の萱原篁の松原おつ返し尋ぬれども。はや祐經は見えざりけり兄弟目と目を見合せ。拳を握り牙をかみ寶の山に入りながら。空しく歸る口惜しさよし／＼今日は助くるとも。明日まで生けては置くまじきぞ此の富士山は死出の山。富士川は三途の川兄弟瀨踏みの門出祝ひ。酒宴せんと打笑ひ戯れながら立歸る。揃ひに揃ひし武士の。手本なり鑑なり教なるはと後の世迄も盡きぬは。曾我の話なり。

第三

文彌身は蜉蝣のうき命。身に蜉蝣のうき命。暮るゝや フシ限りなるらん ナシ○頃しも五月廿八日。空五月雨るゝ黄昏の口虎が涙や少將の。スエテ夜の雨さへ頼りなるに。地兄弟最期の晴小袖。母の手づから縫ひ仕立。受けし五體の胎内へ歸る心に本來の。經帷子と フシ觀念し揚羽の蝶や。群千鳥ら翼しをる、風情にて。松明かゝげ笠振り上げ兄弟顔を見合せて。スエテ涙ぐみたる哀れさよ地○如何に時致。和殿三歳祐成五歳。竹馬に鞭を打ちしより。片時も離れぬ弟兄の六度契りて兄となり△七度結びて弟となると傳へしが口今宵裾野の五月雨草の雫と消え果てゝ。未來の逢ふ瀨は定めなし。今ぞ此の世の見納めぞや。御身が顔をよつく見ん△母上を見奉ると思ひ祐成殿の御顔をも。今一度見せ給へ口事とはぬ草も木も。雲水空の名殘迄。フシ今を限りの別れぞや。いつも風は。吹きけれども。今宵の風ぞ身にはしむ。虎少將が書置をあけなば歎かん不便さよ△鬼王や團三郎が最期の供に外れたる。悔みの歎きこれ一つ○二の宮の姉△禪師坊口かれこれ盡きぬ思ひの涙敵を討つて本意を遂げん。嬉し涙も樣々の雨に爭ひ袖と袖フシしぼり。三重たる。ばかりなり 地△時致彼處をきつと見て。あれ御覽ぜよ御所の假屋の方よりも。供人具したる乗物の。庵に木瓜つけたる提燈祐經にまがひなし。爰に待ち受け本望遂げん口尤と松踏み消し。天にも上る心地して フシそゞろ。ふるひて待ちかけたり 地○程なく乗物近付けば△雙方よりつつと出で二つの提燈切り落す 地口あは狼藉と夕闇の刺すとも突くとも知らぬ夜に。中間若黨縱横に打物拔いて薙ぎ廻れば。二人は陰に身を潜む フシ危かりける有樣なり 地○輿の中より女の聲にて。詞必定夜盜と覺えたり大路へや出でつらん。爰を捨て置き外垣より山際を探されよと。地あらぬ方へ教ゆれば口愚かの下人尤と フシしどろになつて追つかくる。地○彼の女輿よ

り出で小臂にて。十郎様か五郎様か最前ちらと見付けたり。大事ない時致様祐成様と呼ぶ聲は△聞いたやうな物ごしと思へども粗忽に出でられず。○女はせいてァヽ辛氣。詞私は喜瀨川の龜菊ぢやわいなあ　地△兄弟はつと力を得。　詞シテ龜菊のかうした事は合點行かずといふ　地○聲をしるべに近寄りて。詞先づはお久しや扨私ことはナ。地虎様や少將殿の御苦勞になされし故。舞の一手も舞ひ習ひ。私が仕合にていつの頃より祐經殿に請出され。則ち主の親分にて。只今は頼朝様へ御奉公に出され。御酒宴のお肴の舞や謡や琴琵琶にて。御前を勤め候が。最前お顔はちよつと見る。若し供の者が見付け刀の先でも當てましてはと。よき智恵を出して退けましたが定めし日頃の御望ならん。さりとては危い首尾はあは〳〵と思ひし故これ痞が上つたわいな。先づ〳〵御無事でお嬉しや。虎様はおまめなか少將様は赤子生まんしたか。持病の癪氣は起りやせぬか猫の子はどうしたえ。兎どもは相變らず今に饑錢しえすかと口急な所に取りまぜ話。フシ女郎はあどなき心なり。地△兄弟耳へは入らねどもチヽ一段のお仕合。シテ先づこれはいづくへとあれば○されば我が君五月雨の夜の徒然に。祐經殿の假屋へお成なされんとのお使にと△言ひも果てぬに時致。詞イヤこれなう。日頃知つての事なれば何をか隱さう。今宵祐經を討つ覺悟なるにそれに頼朝入り給ひては。本望遂げぬのみならず仕損ぜんは目の前なり。地何とぞ思案し頼朝公今宵の御成を止めてたべ。生々世々の高恩曾我兄弟が一生に。人を拜むはこれが始めとフシ手を合せてぞ頼まるゝ地○龜菊暫しいらへもせず。是は餘儀なき御頼み。虎様や少將様の緣といひお二人を。如才に思ふ心でも又祐經殿を庇ふ心でも誓文くされ無けれども。親分を討つ人にならびてなどと後日に言はれ。傾城の果てなれば尤かなと言はれん事。勤めする身の總恥なればどうもお返事なり難し。惡う聞いて下んすなとスヱテあぐみし色ぞ道理なる　地△時致聞いてチヽ至極せりさりながら。日本一の思案あり。祐經を討つての後御所へ斬つて入らん時。定めて御所中下り合はん。百萬人かゝるとも事ともせぬ我々なれども。御身向つて此の時致を組み留めよ。女と見ば某易々と搦められん。時には御身も親分を討つたる者を女として。組み留めしと名を取れば身一分の道は立つ。我々も本意を遂ぐ、フシひらに。頼むと手をすれば　地○龜菊も恐ろしながらおいとしや其の義ならば。祐經は病氣なりと中にて御所へお返事申し。今宵のお成を止め申さん。御本意を遂げられれば必ず自らに組み留められ。我が一分を立てゝたべと口いへども流石女心の身も顫はれて聲こもり。あれ〳〵追手が立歸るは一言違へな○違へじと口左右へ別るゝ雨の足行く方。暗く三重〳〵風騷ぐ。フシ虎少將は。寐がての。地枕に殘る書置

を見るより驚き年來の契はこゝぞ冥途迄後れじものと豫てより思ひ染め置く蝶千鳥の。裝束引きかけ太刀刀髭小枕取つて捨て。地髪ばかりに鉢巻し フシ假屋間近く忍び入る。出立ち小柄に。凛々しくて。女と更に見えざりけり。地勝手は知らず雨夜なり二人手を組み隈々を。祐成やおはする時致やましますと。小聲に呼うでうそ／＼と尋ね廻るは過ぎし夜の。手くだのわけに事かはり フシ胴慄はるゝばかりなり。地斷、とけ知らず兄弟は袖打ちかざし松明に。足許ばかり照らさせて遙かに見ゆる虎少將。アレ夜廻りの番衆なるか見付けられては悪しかりなん。一先づ退けと一村の森を目當に走り過ぎ。オクリ逢はで／＼別れし本意なさよ。地兄弟は祐經が。假屋の外垣切り破り中門につつと入れば。郎黨若黨悉く晝の狩には爲疲るゝ。雨を頼みの油斷酒皆高鼾して臥したりける。所々の燈火を。吹き消し吹き消しそろり／＼と差足し。なんなく敵祐經

のオクリ一間の／＼寢所に忍びつき。地溜息はつと吐いたりし。フシ心の内こそ嬉しけれサア地是迄は仕すましたり。南無八幡大菩薩箱根兩所伊豆三島力を加へ給へやと近付き窺つて見てあれば。祐經沈醉高枕前後も知らぬ其の有樣。盲眼の龜の浮木に逢ひ、優曇鉢華の三千歳に。今に逢ひたる心地ぞや優曇華の咲く時は。拜みて枝を折るとかや。稀に逢うたる親の敵拜み打に討てやとし。兄弟と笑うて立つたりし フシ嬉しさ額はなかりけり。地兄弟刀を抜き放し祐經が胸板に。當てては引き引いては當て。大音上げて如何に祐經。詞河津が嫡子十郎祐成次男五郎時致なり。地起き合へやつと言ふ聲に心得たりと枕の太刀執らんとするを祐成弓手の肩先より馬手の肋骨のがれなく。褥をかけて斬り付くる五郎是にと言ふまゝに。腰のつがひを板敷迄切れも切れたり年月の。仇と恨と一時に今打ちとくる氷の太刀折れもせよ砕けもせよと フシづた／＼にこそ斬

り付けけれ。地側に臥したる大藤内太刀風に目を醒まし 詞狼藉あり出で合へと裸身ながら駈け出でて。地彼方此方と喚き廻るを兄弟左右より[illegible]四つ五つに斬り散らし。詞外差して斬り出づれば夜討こそ入つたれと。弦なき弓に矢を番ひ繋ぎ馬に鞭を鞭ち。太刀の柄を腰に差し上を下へと熙／＼返しける 地太樂の平馬の丞。祐經が討たれしは曾我殿ばらに紛ひなし。いで／＼彼奴等を討留て狩場の恥辱を雪げやと。愛甲安西海野臼杵入れかへ。入れかへ打出づる兄弟は事ともせず。小柴垣を小楯にとり揉みに揉うでぞ 三重／＼戰ひける 地多勢とは言ひながら。曾我殿ばらが死に狂ひに手負ひ討死四百人。足の踏みどもなかつし所に。仁田四郎忠常は。祐成に契約あり首を取らんと駈け出でしが。イヤ仁田と名乗りなば首差し伸べんは必定。それは武士の本意ならず。運づくの勝負せんと祐成に渡し合ひ。斬り結び斬りほどき戰ふ際にも祐成は。本

望は達したり惜しからぬ命なれども仁田の四郎忠常に。預つたる我が首を人手には渡さじをと。呟き乍ら打合ひたり。仁田之を聞くよりも。優しき者の志と猶恥入つて名乘もせず。物の文色の見えざれば松明出せと呼ばはる聲。祐成はつと飛びしさりさ云ふ和殿は仁田殿か。詞ヲヽ忠常と答ふ。地南無三寶こは如何にそれとも知らず最前より。太刀を合せし悔しさよ。厚恩といひ契約の誓文たがへし面目なさ。サア契約の首取り給へと。太刀を投げ捨て座を組みてフシ首さし。伸べてぞ待ち居たる。地仁田涙をはら／＼と流し。扨も／＼やさしき今の振舞頼もしや神妙や。蛇は一寸にして兆あらはれ。頻伽は卵の内にて其の聲諸鳥に勝るゝとは。殿ばら達の御事よ。幼少より日陰の身。武士の參會も絶え百姓土民に立交り。弓馬の道も取失ひ給ふべきかと侮りしに。異國の子路が勇にも勝る只今御扶持を下さるゝ。鎌倉武士は多けれども。誰か御身に勝るべき流石河津殿の御子なり。勇力孝行仁義の道斯程達せし祐成を。如何に契約なればとて仁田などがむざ／＼と御首を討つべきや天の咎め弓矢の冥加。所緣の人の歎きの程思ひ遣られて今更に、いづくに太刀を當つべきぞ忠常討たれば討たるる迄よ。運に任せて勝負あれなう祐成殿十郎殿と。なほ堰き兼ぬる感涙はフシ理り。せめて哀れなり。地十郎も涙にくれ嬉しき人の御詞や候。年月狙ひし敵を討ち。御身のやうなる弓取の手にかゝつて死なん事。なんぼう果報の某成佛迄も疑なし。はや首を取り給へと涙を止め言ひけれども。忠常は目もくれてスヱテ討つべき氣色はなかりけり。地エヽ曲もなし忠常殿。雜兵の手に罹つて名を下せとの事なるか。是非に及ばず自害せんと立上れば忠常。ヲヽ誤つたり御免あれ。此の上は是非もなし南無阿彌陀佛と諸共に。水もたまらず首打落し切先に貫き。詞鬼神と呼ばれたる曾我の十郎祐成を。武藏の國の住人仁田の四郎忠常討取つたりとぞ名乘りける。地無慚やな時致は逃ぐる敵を追つかけしが。此の由を聞くよりも今は何をか期すべきと。御所の假屋へ走り込む簀戸の陰より女の姿。薄衣被いて時致を取つたというてしつかと抱く。時致振り返り扨は龜菊ごさんなれ。今少し死狂ひに能き侍の二三百も斬り留め度くは思へども。契約なればサア。搦めよと手を廻すを高手小手に搦み付け大音上げて。詞天魔波旬と呼ばれたる曾我の五郎時致を。御所の五郎丸が生捕つたり下り合へやつと呼ばはり。地薄衣取れば童なり。こは如何に早まつて搦められし口惜しやと。齒ぎりをなし地踏鞴ふみ。鏡のやうなる兩眼にスヱテ涙を。流すぞ哀れなる。地すかさず大勢下り重なり。千筋の繩を四方へ取りオタリ引つ立て行くこそ無念なれ。地かくとは知らで黄瀨川の龜菊。曾我の五郎に契約あり組み留めんと顔隱し。繩を搔い込み此處彼處を目を

配つて尋ねける。虎少將も兄弟は。未だ討たれ給ふまじ此の騒ぎの其の内に。ちらとなりとも顔を見て冥途の契を結ばんと同じ所を行き返り立ち舞ふ揚羽の直垂は。宵に見たりし時致なり餘さじと飛びかゝり。詞喜瀬川の龜菊ぞや時致やらぬとしかと組む。地組まれて少將振り放さん。振り放さんと悶ゆれども龜菊は放さじと。捻ぢ合ふ處を虎御前兩方へ押し分くる。顔を見れば少將なり。龜菊あつと驚きて スエフシ暫し呆れて言葉なし。地やゝあつて虎少將。つれないぞや龜菊殿昨日今日迄かう三人は。兄弟よりも底意なく明かし合ひたる其の中に。時致遣らぬ遁さぬ女の際にあんあんまりな。さうしたものではないぞやと フシ言ひ捨て。行くを引止め。御恩を受けし。地皆樣の殿御とある御兄弟に。そもや如才を致さうものか。宵にはや御兄弟の危き處を助け參らせ。今宵の御本意遂げ難かりしを。妾が心の働き故。扨自らに組み留めよとの御契約候と。宵の次第をあらましに語るも聞くも忙がはしく。サア此の上は此處の勝手を案内し。御兄弟に今生にて今一度逢はせてたべ。はや今の間もお命知れずはや尋ねんといふ處に。夜廻りの本田の次郎馬上ながら大音あげ。詞曾我の十郎祐成は仁田の四郎討ち留められ。弟の五郎時致は御所の五郎丸が組み留めてはや事治まりぬ。御所の假屋は安全たり靜まり候へ靜まれと。地館々をふれ廻る人々はつと耳に立て。あれ聞き給へと魂もスエテ消ゆるばかりに身に應へ。若しや／＼の樂みの。心の綱も切れ果てだるか情なや悲しやな。同じ道にと走り出で。駈け出で／＼歎かるゝは目もあて。られぬ許りなり。地龜菊やう／＼慰めて。すかし勇むる言葉の露共に消えては誰人か。永き來世を弔はん此の世ばかりは短か夜の。空あけくれに星消えて澤の螢や鳴く蛙。昨日の聲にかはらねど ハルフシ今の哀れを。忍びねに弔ひかはす八聲の鳥。寺々の。鐘の響まで又待宵にいつ聞かん。これや限りのきぬ／＼ならんと泣く／＼。連れてぞ歸りける。

第四

右大將賴朝卿。曾我兄弟が有樣甚だ感じ思召し。時致が死罪を宥めまほしく思せしかども。國法默止がたくして明くる廿九日に誅せらる。扨又仁田の四郎には高名三度の御契約とて。松島月毛に金覆輪の鞍置かせ。五色の厚總馬鎧新開の荒四郎。御使を承り オクリ仁田が〳〵假屋へ引かせける。地こゝに朝比奈の三郎義秀此の處を通り合せ。詞ヤア新開殿見申せば君御祕藏の名馬を引かせどれへかと言ひければ。扨は御身は御存じないと見えた。是は仁田の四郎忠常拜領なりと答ふ。ムヽ珍しや此の馬は。生食磨墨にも勝つたりとて秩父北條我等が親爺。皆々願ひ申せしかど下されぬ御祕藏を。仁田の四郎に賜はるとはチヽ合點々々。値段がよさに賣らせらるゝの。ハテ惡口を申さ

るゝものかな。　仁田は富士の人穴へ入り此の度叉希代の猪を乘留め。　其の上曾我の十郎を討留め高名三度に及びし故。御契約にて拜領といはせも果てず朝比奈からからと笑ひイヤハヤしやらくさい腹筋千萬。三度や五度の高名を珍しいとは心得ず。高名づくにて貰ふならば。保元平治より源平の合戰迄。高名あるもの數を知らず。此の朝比奈もお耳に立つたる働き覺えあらん。地高名の數次第にて貰はるゝ御馬仁田迄遣らせうか。此の朝比奈が拜領申した不祥ながら新開殿。御取合せよきやうに　フシ賴み。申すとねちかけける。地新開はうど持て扱ひ。いやなう所望ならば御前にて。直に訴訟召されよ某はお使なれば罷り通ると行かんとす。どつこいこりや先づ待て。詞扨はしかとなるまいな。總じて此の朝比奈は惡い癖にて。或は敵の首でも城でも欲しいと念をかけ取らで置いたる例なし。是非に及ばず山賊して盜み申さう。地定めて後日に盜人とて切腹仰せ付けられん。馬と朝比奈とは賴朝こそ換へ損なれ。サア盜んだ渡せといへば。詞ヤ其の方は男を見違へたるか。地新開なるぞ盜んで見よと手ぐすね引いて氣色する。詞朝比奈くつ〳〵と吹き出し。イヤちつとも見違へはせぬ。曾我兄弟に出合ひ小柴垣を押破り。高這ひして逃げたる新開しつかと見知つた。サア　地今こそ馬を盜むぞ止めて見よと。取つて突き退け馬取り中間蹴倒し。蹴倒し手綱かいくりひらりと乘る。主從やらじと寄る處を馬引返し八方へ踏み散し乘り散し。鞭打ちくれて角を入れ　フシ雲を霞に飛ばせける。地新開は力なく。童子の手を切つたる如く恨めしさうに打眺め。待て己れ覺えて居れ。今に思ひ知らせんと御所の。假屋へ　三重

虎少將道行

戀といふ戀といふ。フシ文字の字形を。判じもの詞しがらむ唐綿の。解くに解かれぬ　フシした心。いとほしや虎少將。母の歎きを諫めかね慰めかねつ詮方も。スヱテ涙のうちに思ひ付き。フシ少し力を越後なる。禪師の君に告げばやと。フシオクリ旅立ち姿。此の儘は人や見知ると。さしかざす扇商人團扇賣。昔しのぶの戀風を。餘所に吹かせてやつし行く。世の習はしこそフシはかなけれ。人はともいへ我が身には三國一の殿持つて。富士さへ次に見し山の。今は上なき。雲の峯。月を招きし扇にも。見しは歸らで俤の。猶なつかしみ御影堂。スヱテ綺殿の扇召すまいか。夏を忘れて凉しさは。秋と白地や淺黃地やさつと隈どる一筆烏。何を恨みにあだし世を。長地墨繪彩色いろ〳〵に情の種を蒔き砂子すかし扇に唐扇。扇召せ〳〵。召されよや。扇とは　詞空事や逢はてぞ戀はそふ物をあはで戀ます。フシ鏡團扇や奈良團扇。扨繪團扇の品々は。オクリ武者繪や猛き武士も。心和らぐお山繪や浮世。男繪。立髮にしやんと振よき。お兒若衆の深編笠で。歌長い刀は。からで差す

其方。なるまいからが無いきそいの。茶つ釜やつこの。フシ踊り團扇に花盡し。スエテ所またらに塗團扇。うらやましきは高砂の夫婦。妹背の共白髪。なぜに御身と自らは。薄きえにしの箔團扇。風を商ふ其の身さへ空の暑さは凌がれぬ篠の石原。日ににやけして蝶も翼を。休め兼ね。千鳥鶺鴒趾冷す。ギンオクリ清水が。もとの柳蔭かげを。しるべに。ハツア走り寄り。立ち休らへばさあ〳〵さつさ夕立つ雨かとて。フシ聲に笠きる夏の蟬。春秋知らぬ。仇し世を餘所に聞きしも身の上と。スエテこれも。涙を濡へぬべし フシ習はぬ旅のうき泊り。夢さへうすく間遠なる。蚊帳の釣り手の短か夜をハツミ來ては水鷄のほと。〳〵と。ハルフシ格子叩くに。聞きまがひ思ひまがひつ見まがひて。フシ雲間に騷ぐ稲妻と。行方も知らぬ思ひぞや。身はならはしの假寢にも。あひ馴れし夜の寐惡く。一人寢られぬ露の床。寄れ枕と引寄せて。フシハルしめても抱きても。恨みても。スエテ言ひがひもなき草枕。ナゲブシ投げそ枕に。とがもなやナホスいざとて。共に寄り添へど。女同志のあだ臥しは。歌二人寢ながら。下紐のナホス解けぬ心や。フシ氷室守。夏の氷もあればある團雪の。扇雪なれど。消えても殘る世の中にア丶如何なれば我々は。戀のせごしを幾瀬とも越えしかひなき七瀬川。四十八箇瀬打過ぎて。越の白山白雪の。ハルフシ積るは富士に。似たれども裾野の原に我か思ふ魂の在りかは。嵐吹く松枝の里くれ行けば暫く。休らひ 三重〳〵給ひける。

フシ日も暮れ行けば。地人々は宿を借らんと立寄り給へば亭主立出で。詞今夜は曾我一類の囚人此の處の泊り故。外の旅人は一人も宿を貸す事叶はぬといふ。地こは如何にと肝を消し。詞曾我一類の囚人とは誰ならんと問ひ給へば。詞五郎十郎が弟越後の國陸上の寺。禪師坊といふ法師を海野の太郎殿の承りにて。地召取つてお通りと。いふ中にはや牢輿の前後嚴しく取り圍み。家人先を打拂ひ。海野太郎は押へを乘つて弓に矢つがひ長刀の鞘外し。朝敵か謀叛人の生捕なんどの如くにて。驛路の中へ昇き入れしはオクリ見る目も〳〵あはれにあさましし。地なう見給ふか少將樣 こは如何に虎樣なうせめて御兄弟の移香にも。又は母御の御慰のたよりにもと心ざし。遙々下るかひもなく。はや召捕られ給ひては亡き人の御形見。誰人にか渡すべき。お二人の御最期にも一足違うて逢ひもせず。忘れ形見に禪師樣を見んと思ひて遙々と。來たるかひなき旅衣。左椎なる世の中やと フシ歎くも。心便りなし。地此の上は片時も早く曾我に歸り。母御樣に此の由を一先づ知らせ申さんと。今來し道を立歸る心の。中こそ 三重〳〵わびしけれ。

地右大將賴朝公は曾我一類の落着富士野にて御沙汰あるべしとて。未だ假屋に御逗留かゝつし所へ。海野小太郎禪師坊を召捕つて御前に引つ据ゆる。君御覽じて和法

師は河津の三郎が末子よな。兄どもが敵討ちしを知つつるか。但し知らざりつるかとの御諚禪師居丈高になり。詞是は大將軍の仰とも覺えぬものかな。一腹一種兄どもが。親の敵を討つと申すに知らぬ顔する人間や候べき。但し法師なれば知つても得討つまじきやつと御覽ぜられて候か 地一寸の蟲に五分の魂。かくと知らする程ならば新經を兄どもに押向け。愚僧は御座近く推參致し。祖父伊東入道が御恨みをも申すべかつしものを。殘念や本意なやと フシ憚る氣色は無かりけり。地頼朝猶も志を引き見んとや思しけん。ヲヽ尤なりさりながら。汝はさせる科なければ伊東が所領を與ふべきが。還俗して頼朝に奉公してんやとのたまへば。禪師眼をくわつといらゝげ。詞エヽよつく某を腰抜けと御覽ぜしよな。これ。兄どもは誅せられ。愚僧は三衣に繩をかけられ其の無念をも顧ず。所領がほしい命が惜しいと思ひ還俗を致さんや。地とゝし又仰に従ふども。明け暮れ君を見る度に恨めしや先祖の仇。恨めしや兄どもが敵と思ひ積つて何處ぞでは。御首ほしく成り申さば粗忽致さんは必定。然らば虎の子を飼ひ置き給ふに似たるべし。よう〳〵御思案候へと憚らぬ言葉の末。君を始め奉り御前伺候の諸大名あつぱれ河津が子なりしと フシ舌を捲かぬはなかりけり。地暫くあつて仰せけるは。誠に猛き勇士どもかな。彼等兄弟召使はゞ。頼朝が一方の用にも立たんず者なれども力なし此の上は。時致を誅せし所へ引出し。首を打てと宣ふ所へ老母二の宮ん少將。警固も番も怖ばこそ外垣を押し通り。御白洲の内垣に犇々と縋り付き。やれ母こそ來れ禪師坊。あさましの有樣なう我が君も聞召せ。老中達も聞き給へ。されば出家は佛子とて衣を墨に染むるより。釋迦如來の御子となり。此の世の父母兄弟とは。他人に成つたる彼の法師にスエテ何の科の候ぞや。武士の子孫が敵をば。討つたが無理か フシ誤りか。時致が斬られしさへ御恨みに思ひしに。遠國波濤の隅々迄左程に捜し曾我一家を。絶さて叶はぬ事なるか。あの子ばかりは助けてたべなう御慈悲なるは人々よ。申し直して給はれやと フシ垣に。縋りて伏し轉び消え入り。絶え入り泣き給ふ。地今迄勇む禪師坊。母の歎きを一目見て朝日に消ゆる初霜のたゞしを〳〵と心くれスエテ前後も分かぬ。其の風情。地君を始め參らせて。滿座の諸武士下々迄。フシ袖を絞らぬ者はなし。

三　部　經

地禪師涙を押止め。アヽ愚かなり母上様。病に犯され劍に伏し火に入り水に溺るゝも。スエテ皆これ定まる前世の業。フシ遁るゝ道のあるべくは。地世尊入滅あるべきや。十神力をあらはせば一日も百千歳。迷の衆生は以如半日。龍かす惜しと思ひなば千歳も夢の心ぞや。母上も姉上も禪師坊が最期に 自受用御身成佛の御法を説くご聴聞あ

れ。御前伺候の人々も。スヱテ鳴を靜めて聞き給へ。地それ世尊一代五千七千の經巻は。華嚴寂滅道場に始まり。法華涅槃に說き終る。其の中間の五時八教。中にも薩達磨芬陀利花。妙法蓮華と飜じたり。三世の諸佛出世の本懷。衆生成佛の直路超八菩提の鷲の峯。スヱテ上なき御法と說かれたり。地爰に暫く緣なき衆生を度せんがため。方便の門を構へ。妙法蓮華の五字を隱し。南無阿彌陀佛の六字に攝す。五戒十善の窓の前には顚倒の霧。立昇り坐禪の床には。ギン煩惱の眠深く。修行天地に到り難き愚痴の凡夫は。地六字を稱じて極樂に往生す。娑婆分段の凡身には。恩あり仇あり貧福あり。善惡上下の品々も冥途の道に入りぬれば。刹利も首陀も。フシかはらざりけり。己身の彌陀。唯心の淨土なれば本來無東西。何處有南北と觀ずべし。提婆達多は前生にて フシ佛の師匠。たりし身が阿鼻に。墮して苦を受くる。不輕菩薩は打擲せられ憎まれながら妙覺の。佛の位に到り給ふ皆これ。一念信解の德。それ六字の名號は。華嚴經にて南の字をあらはし阿含經にて無の字を攝し。方等經にて阿の字を開き大般若にて彌の字をつゞめ。法華經を以て陀の字を皆合し南無阿彌陀佛と申すなり。妙樂大師の御釋に諸經所讃多在彌陀。緣深厚故と述べ給ふも深き心や。ありあけの。一心三觀の胸の月は圓頓止觀の雲にかゝり。フシ隨緣眞如の。初潮は同一鹹味の岸に打つ。中道實相の車は。無二無三の門に轟き一乘菩提の駒は。平等大會の園に嘶ふ。等覺眞意の時鳥は フシ妙覺究竟の峯に鳴き。二乘作佛の鶯は。無作三身の谷に囀り。諸行無常の春の花は。是生滅法の嵐に散り。生滅滅已の秋の時雨は寂滅爲樂の紅葉を染む。一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟を得。韋提希夫人の無生忍にあやかり給へ母上樣。禪師が素懷これにあり思ふ事も言ふ事も。これ迄なり人々いざ。我が首を召されよと フシ目をふさ。いでぞ居たりける。地賴朝重ねて學問といひ武勇の法師。近頃惜しき者なれども力なし此の上は。罪な作らせそはや〳〵討つて捨てよとある。處へ仁田の四郎忠常。言上の事ありと簀戸を開かせ伺候する。虎少將も母上も忠常といふ聲を聞き。あれこそ祐成を討つたる敵人こそ多きにあの者が。討つたるか恨めしや面憎や腹立ちや。扨口惜しや喰ひ殺して退けたやとスヱテ齒がみをなして。歎かるゝ。地忠常御前に向ひ。詞曾我の十郎を討留め高名三度に及び候。地御契約の御馬賜らんと申し上ぐれば君聞召し。それは沙汰にも聞きつらん。新開を使にて汝が方へ引かせし所に。朝比奈が狼藉にて盗み取り行方知れず。それ故義盛を始め三浦一黨閉門させ。新開迄も出仕を止めしと宣へば。仁田大きに不興し。詞これは御掟とも覺えぬものかな。三度の手柄せよそれ迄は。賴朝が預りしとの上意にて候はずや。御預りの我等が

馬を盗まれしなんどとは恐れながら上意とも存ぜず。御馬を得んばかりにこそ一命にかけ祐成を討留めて候へば。地是非に於て後ともいはず。フシ今たま。はらんとねだれける。地垣の外なる母上憎き奴が言葉やなたとへば龍馬千萬匹にもせよ。人の大事の秘藏子を。馬にかへて討つたるとは人でなしの畜生めとフシ聲を上げてぞ泣き給ふ。地頼朝もあぐませ給ひやあ忠常。其の儀ならば何にても他の物を望めとある。仁田暫くあたりを見廻し。詞然らば御馬の代りに此の。禪師坊を賜はらんと申す。いや／＼彼は大事の囚人なれば叶ふまじ。其の他は頼朝が重代髭切膝丸にても望めと宣へども。仁田かぶりを振つてイヤ／＼馬は四足有る物たるに。足も手もなき膝丸髭切は否にて候。地是非禪師坊を賜るか。さなくば御契約申したる松島月毛を賜るか。二つに一つの御諚を承らぬ其の内は。全く此處を立ち申さじと フシどうど。座を組み居たり

けり。地頼朝ほうどあぐませ給ひ。此の上は詮方なし。然らば禪師坊を取らすると御詞も收まらぬに。こは有難しと罷り立ち縄切りほどき塵打拂ひ。詞これ／＼曾我兄弟の母御疾う／＼連れて歸られよ。地こは誠か夢なるか神か佛か仁田殿。生々世々の御慈悲なるはと忠常を拜むやら。禪師坊を擦るやら行きつ。戻りつ泣いつ笑うつ嬉しさ足も地に付かず。暫しどよめき。悦びし。フシ心ぞ思ひやられたる。地斯かる折節朝比奈の三郎、松島月毛の口を取り御白洲に驅せ参じ。詞義秀めは盗を仕り直に立退き候へども。思案を仕り我と我が身を訴人罷り出で候。盗んだ處は科なれども自身訴人の御褒美には此の馬朝比奈が。地拜領致し申すべし若し。御聞入れなくば訴人して詮もなし。いつそ元の盗人になり和田の一門九十三騎。三浦の一黨同類とし盗を致す程ならば恐らく鎌倉中東八ヶ國を盗み立て。後には何を盗まうやら知れ申さず。時には

君の御損たらん理を枉げて義秀に。拜領仰付けられかしと フシ恐れなくこそ申しけれ。地頼朝莞爾と笑はせ給ひ。朝比奈が我が儘今に始めぬ事ながら。是は餘り興がつたり。さり乍ら和田が一家に免じて取らするなりと仰せける。朝比奈頭を地につけ。有難し／＼と御禮を申しもあへず。詞こりや仁田。お主は近頃出來いたり。あの禪師坊が命は日本國が御訴訟しても中々叶はぬ處。まつ斯うせうと思ひ拔此の馬を盗んだり。地此の朝比奈と同腹中。サア則ち某が引出物に和殿に遣るこれで何處も丸うなつた。名は朝比奈と名乗れども智慧は深いな分別よしひで。褒めてくれよとどつと笑へば我が君伺候の人々も フシ興に入つてぞ感ぜらる。地かくて大將簾中に入り給へば。海野太郎行氏役所より驅け來り。詞コレ／＼朝比奈。御邊の仕方仁田は悦び申されうが此の海野はさら／＼立たず。御邊が馬を盗みし故、我が召取つたる禪師坊を忠常に助け

させ。殊に評ある馬を仁田に遣るは何事ぞや。それでは某一分立たず。白痴聞えぬ仕業といへば義秀えせ笑ひ。イヤ事をかしい一分たて。自體あの馬御邊如きのへろ〳〵武士には似合す。其の上手柄三度したる者にこそ賜らんとの御事なれ。地ろくな手柄を一度もせいで此の馬を望む事。經をも讀まで布施取るに似たり。今でも手柄にサア〳〵此の朝比奈を投げて見よと。大手を擴げかゝりければ我が儘者の無法やぶり構うていられぬものなりと。ぶつくさ〳〵呟き表をさして逃げければ。仁田朝比奈どつと笑ひ。これ迄なり曾我の人々はやお歸りとすゝむれば。朝比奈殿のお志仁田殿のお情。草の蔭なる兄弟も嘸や悦び申すべし。あはれ存らへ在るならば如何は嬉しかりなんとなほ繰言の悔みぐさ。むかし戀ひぐさ荵茂く伏屋に誘ひ歸らるゝ實にや樂しみ悲しみの定めがたなき人界なりとは今こそ。思ひ知られたれ。

第五

かくて頼朝公富士の御狩ましまして。はや鎌倉に還御あれば大名小名相殘らず。御機嫌如何と御伺のためノシ皆々出仕申さるゝ。地我が君仰せ出さるゝは。此の度の巻狩遊興といひながら。且は耕作を荒す獸を退治せし事。萬民の助け小を罰して大を救ふの道理なり。詞それにつき過ぎし夜不思議なる夢を見る。曾我兄弟と覺え衣冠正しくして曰く。此の度我々父の敵を討ちし事。閻王孝の道を感じ。祖父伊東の入道河津の三郎共に修羅の苦患を免れ。忽ち兜率の内院に生を受くる。地然れば仇をば恩にて報ずる習ひ。我々兄弟富士野に居して永く弓矢の道を守るべしと。いふかと思へば其の姿正銘荒神と現れしと。思へば夢は醒めてけり。誠に古き言葉にも。父は至つて親しからざれども至つて貴く。母は至つて貴からざれども至つて親しく。父のみ貴く親の義に兼ねたりといふ本文あり。斯くは知れども親のため命を捨つる者やゝ稀なり。殊に閻王孝の徳を感じ。祖父親の罪業迄免るゝとの夢の告。夢とは更に思ほえず前代未聞の事どもなり。後代迄の武士の鑑打捨て置かんは本意ならず。急ぎ富士野に社を立て弓矢神と齋ひ扨又子孫には伊東が家督を與へん間。一家殘らず急ぎ召せと宣へば。伺候の人々一同にこは有難き上意の趣。感ずるに詞なしと フシ皆謹んで申さるゝ。地時を移さず召に從ひ老母を始め禪師坊。二の宮の姉虎少將鬼王兄弟父津藏の入道迄。祐成が一子を先に立て オクリやがて御前に上らるゝ。地頼朝御覽じ長々の日蔭の身。さぞと察しやられたり。さり乍ら其の恨みを翻せ。子孫を取立て得せしむべし。先づ伊東が三萬町の所領祐成が一子に取らすべし。禪師坊は陸上の後住。虎少將は老尼諸共跡目の一子を守り立つべし。跡に控へしは定めて鬼王團三郎とやらんな。其の他に老入道。あれは富士野にて海野が捕へ來り

し。辨慶が父田邊の別當辨眞にてはなきか。時に仁田の四郎罷り出で。詞如何にも辨眞と名乘つては候へども誠は斯樣々々の次第なりと始終の段々相述べ。主を重んじ辨眞と僞り申し候由。あつぱれ忠信深き者どもにて候と申し上ぐれは。地扨々驚き入つたる仕業かな。詞して又入道は曾我が家に傳はりし者か。さん候生國は尾州熱田の宮の社人にて候ひしが。社領の爭にて所を立退き。其の後河津の三郎に抱へられ。二人の伜諸共に曾我兄弟に召仕へて候。地君暫く感じさせ給ひ。扨も／＼神妙なる親子かな。世に亡き主を見捨てもせず。數年の奉公さぞや物憂く思ひつらん。さりながら左樣の先途をみつけばこそ。今又共に世に出づれ。猶々跡目の家臣となり恙なく勤むべし。詞扨入道はもと熱田の社人とあれば。地幸ひかな曾我兄弟を富士の裾野にて。正銘荒神と齋ふなれば神主職を勤むべしと。則ち宮内卿と召され鬼王は津藏の主膳。團三郎は同じく大膳と宮職を賜れば。こは有難し／＼草の蔭なる兄弟も。嘸や悦び申さんと フシ涙を流し禮儀ある。地はやお暇賜れば、勇みに勇み歸らるゝ威勢の。程こそ 三重ゆゝしけれ。フシ夜を日についで。地裾野の社程なく造立ありければ。吉日を選ばせられ我が君御參詣ましませば。大名小名お供の儀式 フシ晴れがましさは限りなし。地曾我の一家も相殘らず皆々社參申さるゝ。忝くも我が君は。社壇に向はせ給ひ御手を合させ給ふにぞ。近習外樣の人々迄 スヱテ皆々法施を捧げらる。地扨假御殿に入らせ給ひ御簾を捲かせましませば。禰宜覡座に着いて太鼓銅鈸子笛鼓。八乙女鈴を振り立てて既に神樂を 三重參らする。フシ種々の供物。地瓶子かき据ゑ渇仰申させ給ひければ津藏の宮内白髮たる老鬢に。風折烏帽子を着し雲紋の直衣に白き指貫幣帛携へ畏り。いで／＼祝詞を申さんと。老音張り上げ恭しく。謹上再拜敬つて白す 謠神司。八人の八少女五人の神樂男。雪の袖をかへし。白ゆふ花を捧げつゝ。神慮をすゞしめ奉る。御神託に任せても猶も神忠を致さん。有難や。抑神慮をすゞしむる事和歌よりもよろしきはなし。其の中にも神樂を奏し乙女の袖。かへす／＼も面しろやな。劇し席の舞の袖。今更思ひ出でられし。虎少將が連れ舞にて君を慰め參らせよや。はやとく／＼といふしでの フシ神は。上らせ給ひけり。地神託といひ殊に又。家引き起す曾我菊の花の一本安穩に守り給へと虎少將衣紋繕ひ立出でて。二人連れ立つ舞の曲昔に。かはらぬ 三重常磐木の色も一入。いやまして △千代に八千代をふる川の。地口君は舟とよ臣は水。謠水よく船を浮ぶれば。四海の波も治まりて梢。ゆるがぬ フシ時なれば。幾年咲かぬ曾我菊も。一味の雨の潤ひに枝葉榮えて咲き出づる。君の惠みぞ有難き。神も感應し給へや。名にし負うたる此の野邊に。フシ光を飾る宮造り朱

の玉垣。御注連繩猶永かれと祈るなる。御代の鏡のかけ清らかに。みがけやみがけ人心富士の高嶺の。白雪も。とくれば同じ谷川の。流れの末は鹽つ海。實相眞如の浪となり。ギンハルフシめぐる月日を。松原の綠の色を三穂が崎。オクリ汐汲む。蜑の打連れて持つや。田子の浦あづまからげの。汐衣。汲めばぞ月は桶にある。○あれなう。月は一つ△かけは□二つみつ汐にハルフシうつせばいよしも清見潟。さやけき空もいつの間に。時雨るゝ雲の愛鷹山。降らば降れ〳〵雨は。降るとも。イヤ闇とても。道くらからぬ星月夜。ギンオクリ治まり靡く民草の。榮えは千々の秋なれど誰か刈るべき鎌倉山 冷泉春は。先づ咲く。梅が谷。夏は涼しき扇が谷。秋は露草。笹目が谷冬は降り積む雪の下鶴が谷より。見渡せば由井の。濱風そよ〳〵吹けば舟に帆かくる。稲村が崎。いひしまべの島つゞき。歌にも詩にも言葉にも。フシ筆も捨つべき江の島や。フシ岩に碎くる白波とつれて鷗がばつと立ち。△さつと引く汐磯邊の千鳥。ちんりちり〳〵と。友鳴く聲との□島蔭より櫓の音が。からりころり。〳〵と 歌漕ぎ行く舟もよなもさ君が。招けばちとちゝと。ちと〳〵たんと打寄する波の鼓。海清樂に△青海波○はらく〳〵△ほろ〳〵○どうど打つ□それは磯波これは又諫鼓苔むし鳥驚かぬ東天光の時つ風枝を。鳴らさぬ三重〽御代とかや。フシかかる所に。地俄に黒雲舞ひさがり雷火亂れ雲中より。さも凄じき聲を上げ。此の富士野に棲む事九百年、千年滿つれば畜生の業を遁れて善處に到るを。此の度仁田に害せられ本の三途に立歸る。恨みは盡きじといふ下より惡鬼の像を現して虛空に上り地に下り。樣々障碍をなしけるは凄じかりける 三重〽次第なり 地君を始め奉り各々怪顚し給ふ所に。不思議や社壇の内と聞え弓の弦音頻りにして。いづくよりとは白羽の矢雨の如くに射かけつゝ惡鬼が上に降りかゝるさしもの怨靈堪まられず。種々に變化し逃げ廻る。神力加護とぞ 三重〽見えにける。フシ神變自在の。地矢先にて終に怨靈滅し社の戸帳押し開き曾我兄弟現れ出で君を暫く拜しつゝ。忽ち正銘荒神と現れ虛空を指して上らるゝ我か君いよ〳〵信仰あり。今に絕えせぬ弓矢神現人神とは此の事なり。なほ〳〵天下泰平源氏の御代萬々歳目出度しともなか〳〵申すばかりはなかりけり。

右此本者依小子之懇望附祕密
音節自遂校合令開版者也

加賀掾 宇治 好澄

二條通寺町西へ入町

山本九兵衛刊

蟬丸

近松門左衛門作

地諫鼓苔深うして鳥驚かず。荊鞭蒲朽ちて螢空しく去るとは。今此の時よ秋津君。延喜の帝の御聖徳オロシ フシ申すもをさ〳〵。有難し。地治まる國や民草の猶その榮え堯へを。直に叡覧あるべしとて唐土の聖代の巡狩に準へ。交野のみ野の櫻狩今日の紅葉とをりはへて。月卿雲客供奉せしめフシはや警蹕と呼ばふなる。地御狩車の五つ緒も五つの常の道芝や。恵の露に飽きて御幸オクリへあるこそ フシ目出度けれ。禁野を過ぎて渚の院殿が門田の八束穂に。竈の煙ほの〴〵と戸ざさぬ御代の民百姓。管籥の響羽旄の美欣々然と悦びて。君が御狩を待ち顔に空飛ぶ鳥も御車に。群り慕ひ囀りしはけに賢王のいつくしみ。鳥獣にも通じけん フシ民安全のしるしなり。詞時に行く手の松が根に幼き者の泣く聲す。藏人をもつて召さるれば未だ乳ばなれぬ捨兒なり。主上御涙ぐませ給ひ。我國民を憐み育むと雖も。地子を捨つる邪險の者我が國にある事。朕が不徳の誤りと忝くも龍顔にスヱテ御涙をぞかけ給ふ。地然る所へ十八九なる女房慌しく馳け來り。なう其の子返させ給へ返し給へと泣き叫び。詞全く捨子に候はず妾老母を持ち候が。今は老木のはも落ちて物まゐらせん樣もなく。乳房を哺め養ひ候。地此の子が爭ひむつかるゆゑ暫し外方にすかし置きて候。聊か捨ては致さぬなりスヱテ返してたべと泣き居たる。主上御手をはたと打ち。詞扨は捨兒にてはなかりしな。子にかへて母をいたはる孝行賢女とも謂つべし。して汝に夫はなきか。さん候夫は去年の秋霧と地消えても殘る面影の。形見は此の子とばかりの涙もいづれ由ありて。目許の位褄外れ フシ育ちゆかしき女なり。地主上感じ思召し中納言希世を召され。詞窮民を養ふは古への道。彼が老母諸共汝に預け與ふる條。地大内に誘引しよく〳〵養ひいたはるべし。就いてはかゝる豐年の悅び天に訴ふるしるしぞや。初菊の宴を催し紫宸殿にて音樂を奏し。五穀豐饒を祝ふべしと。世に。畏る御勅仰ぐも。おろか三重へなりけらし。フシ初霜よ。はつ霜に。折らばや折らん花の宴。スヱテ菊見の御遊絲竹の。其の役々を フシ分たれし。地中にも當今第四の御子蟬丸の宮と申せしは。天性美男の御器量天皇御寵愛淺からず。琵琶の妙を得給へり。扨又琴は蟬丸の北の御方と定めらる。そも此の姫君は右大辨早廣が妹にて。はや十八の秋風もふさがで通す振袖や。二つ違ひのつま琴はフシ似合ひ頃とのしらべかや。地月出でなば管絃を始むべしとの御沙汰に

て。衛士は烏帽子を傾けて。月待つ程の篝火もヲクリ優にフシ〽目出度き景色なり。地蟬丸は只一人月や出でしと欄干の、奥の渡殿見給へば琴を枕に女の寢聲スヱテ斯くこそ歌ひ出しけれ。歌夕べ〳〵の。我が涙川。若しや逢ふ瀬のなみ枕。それを頼みに憂き身を送るゑ。此の年。月をゑ。詞宮驚き御覽あれば北の方にておはします、詞お側に寄りてこれ〳〵。今宵の管絃晴がまし。琴を枕の假寢は調子もや狂ひなん。誰かあるそれ〳〵と宣へば。地はつと答へて女房達御枕參らする。北の御方つつと寄り宮の御太刀ずばと拔き。御長枕引寄せ二つにすど切り給へば、宮は驚き縋り付きこはそも如何に狂氣かとスヱテ呆れ。果ててぞおはしける。地北の方聞き給ひ。全く狂氣に候はずお主樣と自らは夫婦となりて二歳の。幾夜を重ね候へども。合はぬ緣かや但しはお遂に一夜も肌ふれて枕が氣に入らざるか。はせしまぬなし、樣遊にもさうはならぬもの。男持つたもフシ名ばかりぞ、地益もなき長枕科はなけれど成敗とスヱテ恨み。わびつゝ泣き給ふ。詞宮うなづかせ給ひ。チヽ怨みさもあらん言ひ出すべき折もなく今迄は打過ぎし。親の命を背かれず夫婦とはなりつれど。地我幼少より出家の望一生不犯の願を立て。佛に誓言立てし故。是非なき事と諦め給へとフシ共に涙を流さるゝ。地北の御方涙を止め。詞ムヽ扨は左樣に候か然らば妾も出家を遂げ。此の世はわづか永き世の心が誠の夫婦ぞや。地今より自らも誓文立て互に心を恥しめて。身を汚さず清淨に目出度く發心遂げ申さん。併し今宵は誓文固め一世一度の色床は。佛もお氣の通らめと膝に凭れて宣へばさすが。亂るゝ花薄言葉に。露を慕はせて。夜中ヲクリ〽深く入り給ふ。フシ月かあらぬか。地あかねさす衛士は篝を焚きさして。スヱテさめ〴〵とぞ泣き居たる。詞蟬丸御覽じ。目出度き御遊の折柄稀有の落涙心得難しと宣へば。地烏帽子かなぐりこれ御覽ぜよ御見忘れ候か。我は一歳春日の里にて假寢のお情候ひし。直姫にて御座候ありしあふ瀬の川水の。淀み〳〵て月重なり君の御子を生み參らせ。不思議の事にて御父帝樣に。老母諸共拾はれ候へども。君の浮名を憚り。夫は死せしと僞り。希世の卿にかしづかれ候が。せめてお姿見まほしく衛士の男に出立ちしとても賤しき此の身にて添ひ奉るは叶はぬ事。血判を染めて賜はりし誓紙も今はよしなし事。只今燒き棄て奥樣とはお仲よし野の初櫻。火花もかたれことにほひ炭くべんとせしを引止め。明け暮れ忘るゝ隙もなく乳人の清貫を尋ねに出し出家の望と僞り據の側にも寢る夜なき。地我をば無下に此の誓紙灰になせとは曲もなやと。喞ち給へば直姫も袂に抱きつくばの川。積る戀しさあふ時は。心後れに胸騷ぐフシそゞろ顫ひの姿なり。地爰に北の方の御兄右大辨早廣此の體をきつと見て。詞今宵の衛士は蟬丸密通の女

なり。地あれ吟味せよ宮人舍人我も〳〵と駈け出づる。聲に恐れて人々はフシ築地が隈に逃げ給ふ。地早廣誓紙を拾ひ取り。詞ヱヽあ證據は握つた奏聞せんとひしめけば。人目も恥ぢず北の方なうはしたなし宮の御名の立つ事ぞ。穩密にしてたべ兄上樣と涙にくれて宣へば。詞早廣眼に角を立て。エヽ言ひかひなし結構だても事による。宮を聟に持つてこそ一門親類榮華もあれ。兄が鼻まてひしがるゝが夫を寢取られ口惜しうは思はないか、これ證據を見よと誓紙を出せば、地北の方披見あり宮の御手跡紛れなし。くわつとせき立つ顏面に血筋は眞紅の綱を張り。髮逆に立ち上り。瞋恚の身悸ひ齒を鳴らしエヽたらされし口惜しや。恨めしや妬ましや思ひ知らずや此の恨み。思ひ知らせん思ひ知れと。天地を睨む兩眼に血の涙をはら〳〵はら立やとずん〳〵に喰ひ裂き捨て。衞士の焚く火はものかはの胸の煙はくる〳〵〳〵。狂ひわなゝき出で給

ふは恐ろしくも亦三重へ哀なりフシいでや其の頃、地蟬丸の御乳人左衞門督清貫は。直姫を尋ねんため南都を忍び巡りしが。一先づ都に歸るさの長池より日は暮れて。物凄じき宇治橋のフシ宮居にこそは着きにけれ。地今宵は是れにて明かさんと笠を取つて向を見れば。詞怪しき姿南無三寶。此の社は嫉妬を守る橋姫の。色丑の時詣是なんめり地窺ひ見ればやと神前のオクリ松のへ古木に攀ぢ躋りフシ身をひそめたる。歌振舞はさながら梢にさゝがにの。歌蜘蛛の網に。荒れたる駒は繋ぐとも。兩道かくるあだ人を。思ふはつらし思はぬも。アヽ〳〵物うしのフシ時參り。仇と情と怨念と。三つの鐵輪に燃ゆる火にフスヱテ瞋恚の薪こりもなく。煙くらべん夕闇の小オクリ空も。とゞろに浮舟のけうと〳〵立ちし宮柱。フシ人になつけのつま櫛も。おどろの髮を。七つ八つ地夜半の鐘の物凄き。心にこもる願事に。あまの逆手をうつて祈願へば。詞驗

あらなんあら〳〵〳〵恐ろしや心の角の枝高き。かげろふの森ほのぐらし。ハヅミあさくなあけそフシ朝日山、山吹の瀨にかけ見えて。峰の稻妻ちら〳〵〳〵。星の光かアヽ螢火か。あこがれ出づるフシわが魂たけにや外面似菩薩内心如夜叉。たとへ其の色コハリ白くとも。無間の猛火に黑むべく。涙に戀に紅の裾踏みしだき暗きより。女心の倉橋山くら〳〵。〳〵〳〵湧き返り。玉散る川瀨ナホス波の音。梢を渡る小夜嵐どう。〳〵。さら〳〵どう〳〵〳〵。とんどろとゞろと踏み鳴らし。世を宇治橋の橋姫の。宮居をたゝき祈りしはトル身の毛彌立つへばかりなり。フシ淸貫今が。地見始の何とやら氣味惡く。枝に取付き見る所に。又向より同じ姿の人影見ゆる。詞ヤア是も丑の時。地揚澤山や天狗の所爲か。但し狐や魅しぬとフシ睫を濡らして居たりけり。二人の女も見交して互にぞつとしたりしが。色始の女小聲になり。ナウ和上﨟は何人ぞ

とあればさいふ御身は何者ぞ。ヲヽ御身にかはらぬ妾なれば祈も同じ嫉妬よの。されば我も悋氣事扨も世の中に性の善き男はなし。地扨々合うたり叶うたり。いざ立ちながら悋氣講を始め。語りて憂さを。晴さんと先づ傍に立寄れば。地清貫怖さも打忘れ急な所の悋氣講と。可笑しさどうも堪られず フシふつと吹き出すばかりなり。詞扨も妾は女院の上童芭蕉と申す者なるが。及ばぬ戀とは申し乍ら。幼き時より蟬丸様に思ひをかけ。斯く 口説き申せしかば一夜は思ひを晴させんと堅き約束候へども。地奥様政道強きにやお約束も夢となり。獨り焦れ死なんより斯く祈り申すと。言ひもあへぬに初の女我こそ宮の北の方。詞妾を恨みは僻事ぞ。直姫といふいたづら女郎ゆゑ自らも捨てられし。地憎くい奴は直姫とスヱテ牙を鳴らして語らるれば。清貫聞けば餘所ならず フシ肝をつぶして居たりしが。詞芭蕉手を拍ち扨奥様か知らでお恨み申したり。地戀の敵は直姫一人いざ打殺し共に本意を遂げ申さん。ヲヽ尤と神木に立並び。鬼とも蛇ともなし給へと肝膽碎き釘取出し。これは直姫が兩眼に打つ釘はや潰れよと丁ど打ち。是首の骨胸板五體腐れとはたと打ち。四十四本の釘の數筋骨節々つがひ〳〵。打つて思ひを晴らせよ と躍り上り飛び上り。丁々はた〳〵。丁ど打てば。釘目より血流れてさしもの大木搖ぐにぞ。清貫もゆら〳〵と フシ漂ふ舟の如くなり。地餘りゆられて目眩き枝踏み外しどうど落つる。二人は驚き飛んで逃ぐるを北の方の小腕取つて立歸れば。其の隙に芭蕉の前 フシ行方も知らず逃げ失せけり。地清貫今は堪られずこれ御臺様。詞人にこそよれはしたなき御振舞。明けぬ先に サア御歸りと申せども、地聞き入れず人に知られて此の大願。空しかるとも一念は死して報を知らせんと。戀に浮名や橘の小島が崎は大紅蓮。逆卷く水に飛び入つて フシあはれ果敢なく成り給ふ。清貫あわて松明々々といふ聲に里人ども。詞松明提燈星の如く此處彼處とぞどよめきける。地時に小波岸をたゝきあら恐ろしや。角は忽ち北の方の遺骸むつくと起き上り。鱗を振ひ焰を降らし波を蹴立てゝ 三重〽巻き上り 地鳥居の笠木をくる〳〵〳〵くるり。〳〵と引ん纏ひ。虚空に向つて吐く息はたゞ火の雨の フシ如くなり。地人々是に怖ぢ恐れわつと言うて逃げ散れば大蛇は川瀨に飛び入つて 地コハリ生きかはり死にかはり世々生々に恨みをなさん。あら怨めしや口惜しと。いふ聲ばかりは水底のそこ。はかとなく流れ行く。宇治の川霧絶え〴〵に明け行く空と消えてんげり。恐ろしし。凄まじし。詞もつとも果敢なし哀れなりさて戀路は。切なる思ひぞや。

第二

地爰も戀路に名を立てし情の峠程近き。木幡の里の片ほとりに千手太郎忠光といふ者あり。元來ゆゝしき弓取なるが今浪人の身

ながらも。飢ゑず凍えぬ柴の庵明け暮れ殺生を楽しみ。尾花靫に弓取り添へ フシ今日も狩場に出でにける。 地深草山の薦原より兎一疋追出し 詞弓矢取つて打番ひ弓手もぢりに放つ矢を。手先下りに射損じて誰が刈り積みし稲村に。はぶくら込めてずばと立ち兎は遁れ失せにけり。弓矢八幡射損ぜし。いで矢を取らんと稲引き退くれば。こは如何に。詞廿ばかりの殿上人二八餘りの上﨟の。左の袂に矢を受けてスヱテ涙にしをれおはします。 詞忠光はつと驚き知らぬ事は是非もなし。見奉ればけしうはあらぬ御有様怪しや語りおはしませ。ヲ、我は當今第四の宮蟬丸といふものよ。地これなる女は直姫とて踏みも習はぬ若草に。つまもこもれり追風の追手も急に來るべし。萬事は頼むと宣ひてスヱテ又御涙にむせ給ふ。 詞ハア扨は蟬丸の宮にてましますか。某は千手太郎忠光とて古へは掛鞍にも乘りし者。殊に某が妹は女院樣のお末の奉公仕る。然れば大内ゆかりと申し數ならぬ某を。かゝる高位の御頼み一命も惜しからず。父は千手入道とて年罷り寄つたれどもかひがひしき覺の者。地一先づ私宅へ御供申し仔細は靜かに承らん。いざさせ給へといふ所へ。詞右大辨早廣兵仗二三十此處彼處と探し來り。あれこそ蟬丸直姫よ搦め取れと喚いてかゝる。忠光面に立塞がりこれこれこれ。扨方々は追手よな。宮の御誤はいさ知らず。某は千手太郎といふ者よ。苟も頼まれ參らせしとうとう歸れと呼ばはりける。早廣大きに怒り宮は不義の誤ゆゑ召捕れとの勅諚なるが。綸言にたてづくは扨はうぬめは朝敵かといへば。いやさ朝敵にもせよとん敵にもせよ。武士の一言綸言より重し。頼まるゝといふからは命は君に奉る。惡しく寄らば蹴殺さんと力足をどうど踏む。地早廣怒つて何の二才め討取れと。群りかゝるを飛びしさり矢束くつろげ矢つぎ早さし取り引結め仇矢もなく雨の如くに 三重へ 射かくれば。地早廣も敵はじと皆ちりぢりに落失せけり。詞ヲ、さもさうず是迄と。地直姫を肩にかけ。宮の御手を引き參らせ己が。宿所に三重へ歸りける フシ既に其の日も。地暮過ぎて左衞門督清貫は。蟬丸落失せ給ふと聞き京近邊を尋ね廻り。木幡の里に着きけるが草鞋切れて行き暮れし。村雨しきる今宵しも宮ましますとも知らばこそ。千手が門の茅葺に フシ晴間を凌ぎ立たれけり。地雨にこもれる夜半の鐘霧の絶間をすかし見れば。詞女姿の振袖もいと忍びたる氣色なり。木蔭に立退き見給へば。彼の女門の扉を忙しげに物申さんとぞ叩きける。千手親子はすは追手よと駈け出で。夜中の案内何者といふ。なうさ宣ふは兄上か父上か芭蕉の前にて候が。地朋輩の讒に逢ひ御前を紛れ出で候。爰明け給へといふ聲に母は驚き。扨は我が子かなつかしやと明けんとすれば父の入道ア、暫く 詞大事は油斷より起るぞかし。宮をかくまへ奉り。夜中に

門を開かん事不覚の至り。これ〳〵芭蕉仔細あつて夜中に門を開く事は叶はず。今宵はそれにて明かせ明けなば内へ入れんとあれば。地こは心得ぬ仰かな。いかなる憎しみ候ぞ。是非明けてたべ明け給へと スヱテかき口説きてぞ歎きける。詞いや〳〵憎しみはなけれども。今宵門を開きては親兄が侍立たず。仔細は明朝語るべしはや夜明け迄程もなし。地是を片敷き明かせとて内より小袖を投出せば。芭蕉は力なく〳〵も オクリ衣引き〳〵かづき フシ臥し居たり。地清貫芭蕉と聞くからに。詞彼奴こそ彼の丑の時參りごさんなれ。地大内の有様尋ねんと フシそろり〳〵と側に寄り 作り聲して詞申しといへばアヽ怖と言ひ逃げんとす。アヽ〳〵これ〳〵 苦しからず 我は田舎の旅人なるが雨を凌ぎて罷り在る。承れば大内方の人様とや。拙者どもは田夫野人の遠國者。殿上の交 夢に見た事も候はず。國許の土産に語り聞かさせ給へとある。芭蕉打笑ひ。田舎のお衆はいづれも左様に宣へどもさして變りし事もなし。地絲竹詩文和歌の道。取り分け流行るは濡事と フシにやつこと會釋し申しける。清貫とほけた顔付にて。詞エヽ野でも山でもすたらぬは戀の道。定めし上﨟様もさうした色候はんと 地さあ〳〵聞き度し〳〵と言へば。一樹の宿も他生の縁と フシ包まず語らうたてさよ。地恥かしながら自らは 詞禁中一の美男蟬丸様に思ひをかけ。地様々心つくし舟引手數多の殿なれど。さる一夜の玉簾まろび寝んとの約束を。よしなき女に支へられ遂に思ひの晴間なき スヱテ涙の雨に身は朽つる。地念力岩を通すとの譬に偽 なきならば 死ぬるとも生きるとも此の無念は晴らすべし。エヽ面伏せ口惜しや。詞や。よしなの問はず語りあなかしこ。地人に洩らし給ひそとスヱテ又むせ返りせきあげしフシ袖は。時雨に爭へり。詞清貫とつくと聞くからになう恐ろしの一念。遂に蟬丸直姫の仇とならんは必定。如何なる事をかし出し御命にさはりあらば後悔にかひあらじと。地近頃不便千萬ながら太刀抜きひそめ取つて引寄せ。胸元を刺通すなう悲し人殺しと。呼ばはる聲に親子の沓門を開き飛び出づる。惡しかりなんと清貫は篠の小藪に隠れて、暫く潜みおはしける。地母は縋りて悲めば入道親子も敗亡し。盗人の業なんめり追つかけんとはしたりしが。宮の御事氣遣はしく立ちもやらず居もやらず。蟬丸も直姫もスヱテ周章て。ふためき給ひける。今を限りの芭蕉の前宮をつく〴〵見參らせ。苦しげなる息を吐き。それなるは蟬丸様直姫御前とは御身の事か。恨めしや恥かしや 偽 多き御一言。誠と思ひ身を焦し戀に心を惱まして。あられぬ思ひに狂ひしも。只一筋に思ふ故君が戀路の障ならば。思ひ切れとは宣はで誑り殺さん御巧か餘りにむごき御心情の道はさはなきもの。なう憎うて人には フシ惚れぬぞや。はかなの戀に朽ち果てん名

こそ惜しけれ去り乍ら。詞我が里にお宿を召すも他生の緣。地草の蔭にて君が爲惡しかれとは祈らまじ。詞の所緣と思しなば餘の人千度百度より。君が一度の手向草。露の命は惜しからず。詞なう父上樣兄上樣。宮の御事偏に頼み奉る。地名殘惜しの母上樣南無阿彌陀佛といふ聲も。眠れる花の夕の秋十七歳を一期として。遂に果敢なくなりにける親子は夢とも辨へずスヱテ縋り付いて泣きければ。蟬丸直姬聲をあげさりとては覺なし。恨を晴れよ許してくれよ。不便の者の心やと抱き付き縋り伏し。泣けど叫べどかひぞなき フシ物の。あはれの限りなり。地清貫案に相違して今は耐へ兼ね案内し。斯樣々々といひければ聞及びし清貫殿か。先づ此方へと請じける。詞清貫人々に對面し。かひがひしくも御隱匿我が身に取つて祝着と禮儀こまやかに相述べ。先づ以て御息女不慮の最期御愁傷察したり。さり乍ら此の敵は知れ申す。本望遂げさせ申さんとあれば忠光悦び。それは何處いかなる者にて候ぞ。ヲヽ此の清貫こそ敵なれ。入道親子仰天し一圓に心得ず。いかさま仔細候はん承らんと眉を顰めて申しける。清貫涙をはら〳〵とこぼし。地ありし段々心底を詳しく語り。宮此の所にましますとは存ぜず。御行末の仇と思ひ不便ながらも討つたりし。忠は却つて不忠となれり仇は情となりたりし。短慮といひ粗忽といひ面目も候はず、今は恨を晴れ給へと太刀を逆手にすばと拔き。詞既に自害と見えける時親子左右に取付き。なう清貫殿我々も侍なり。一家命を擲つ上はさもしく悔み殘るべきか。大事を抱へてこれしきに死なんとは狼狽へしか。地但しは狂氣かさあ死なれうば死んで見よと。スヱテ樣々宥め止むれば。地思ひ切つたる清貫も理に詰められて死なれもせず。生きても居られず殺しもならず。三人目と目を見合せてスヱテ涙を流すぞ道理なる。地はや東明に及びし時右大辨早廣靑侍輩に物具させ。詞直姬の老母同じく若君奪ひ取り。陣頭に引つ立て千手が屋敷を取圍み。御勘當の蟬丸を隱匿へし段逆鱗斜ならず。太平の君が代に事を好むは痴者なり。疾々蟬丸直姬を渡せ。異議に及ばば先づ一番に彼奴等を殺すと刄を胸に差當て。サア返事は如何にと聲々に喚き叫んで呼ばはりける。地忠光親子清貫も。人質におぐみ果て左右なく切つても出で難く。如何はせんと犇きて兎角時刻延び行けば。地エヽまだるし戰神の手向草。それ突き殺して切り入れと。痛はしや御老母二歳の若君諸共に。只一太刀に害せしは フシ目も當てられぬ次第なり。エヽ天道知らずの人畜め。一人も遁さじと枕長刀おつ取りのべ。四十餘人を弓手に受け馬手に支へて 三重へ戰ひけり。地千手太郎が手にかけて十六人留めければ。入道が長刀に八人かけてご捨てゝける。殘る者も深手を負ひさつと引いては又駈け入り。二三度四五度揉み立てしに千手親子聟

をかけ。詞清貫はおはせぬか宮を御供申されよ。跡を構ふな／＼と呼ばはれば。尤と清貫宮を負ひ參らせ己が館に落ちらるゝ。地其の隙に早廣後の垣を押破り。直姫を引つ立て大地に踏み付け拜み討に振上ぐる。詞南無三寶と入道横合に丁ど受け火を散らして切り結ぶ。太郎は父を討たせじと打つてかゝれば入道隔て。父が命を庇ふな姫君を討たせなば。七生迄の勘當といふ聲に力なく。地母と姫とを兩脇にかい込うでフシ上の山へと落ち行きける。地入道は面もふらず追ひ行く敵を防ぎしが。早廣いらつて打つ太刀に弓手の肩先打込まれ。七十一歲春の夜のフシ敢なき夢とぞ消えにける。詞忠光父は如何ぞと取つて返してハア。地口惜しや討たせつる目前親の敵ぞと退く敵をかさに乘り蜘蛛手に追つ立て追つ返し。半時ばかり驅けたりしが早廣は行方なし。エヽ無念口惜しし己れ天地を出でずんば。討つて父に手向けんと。僅かに殘る雜人ども木の葉の嵐磯打つ浪。むら／＼ぱつと追ひ散らし。地セメ父が死骸の薄煙霞の谷へと分け入りし。父父たれば子も子たり。あつぱれゆゝし賴もしゝ。前代未聞の勇士やと扨文にも。殘し止めつる。

第　三

地早廣が惡逆ゆゑ宮は虎口の御命免かれ清貫が計らひにて中納言希世の館におはせしが。或時清貫希世參内あり。詞扨も蟬丸の宮往んじ皐月の頃より御眼病例ならず。唐の日本の藥をもつて醫療手を盡し候へども。元來宮の御事は美しくめでたくまします故。數々の女の思ひ嫉妬の怨御一身に迫り。地醫術の及ぶ所ならず遂に御兩眼盲ひさせ給ひ。蒼天に月日の光なく晴夜に燈火影暗き。盲目の御容力及ばず候と。スヱテ詞を揃へ奏せらる。地天皇はつと御氣色變り御落淚ましませしが。誠に朕が第四の宮と生れ。十善の位をもしるべき身が。生れもつかぬ盲目と成りし事。よつく前世の惡業深き故。詞五體不具にして佛には成り難し。況んや此の世さへ暗きに迷ふ盲目の。地未來の闇もいたはしやとスヱテ稍御淚にくれ給ふ。よし／＼此の世にて諸人の恥を懺悔して。業障を果し後世を助くる營み。逢坂山に捨て置くべしとフシ綸言。あるこそ哀なれ。地兩卿詞を揃へ宣旨にては候へども。詞賤山がつさへ不具なる子はいとほしし。況んや一天の若宮を山野に捨てさせ給はん事。且は仁心薄きに似たりと恐れ入つて申さるれば。いやとよ生きとし生ける者子を憐まぬはなきものを。況てや我が親心身にもかへまく思へども。過去遠々の惡業は十善の王位も遁れずと。萬民に知らしめて天下の民を悉く佛の道に入れんこと廣大の慈悲ならずや。地子のいとほしきは盡きせねど國を育む我なれば。國民に換へ難し構へて汝等露程もいたはらば。却つて仇となるべきぞとく／＼山に捨て置くべし。果敢なの浮世やあさましの人界やと。御冠の巾子を傾

けて。御涙せきあへさせ給はねば。八省百官諸共に フシおの〳〵。袖をぞ絞らるゝ。地清貫希世兩卿も。力なく〳〵退出ある世のなら。はしぞ三重ヽ定めなき。

蟬丸道行

フシ結ぶの神も。僞りや。いつの月日に結びそめ。寢ぞめし夜半の夢消えて。スヱテ緣さへ薄き唐衣。御痛はしや蟬丸は。何の報いか浮世の闇。戀慕の闇のくらがりに。引き出す牛は昨日かも。御幸の車 フシ引替へて。ハルフシ野飼にやつす。綱手繩。御身に添ふる物とては。玄上の琵琶一面。清貫希世御供にて フシオクリしをれ。出でさせ給ひけるフシ御有樣こそ。哀なれ小オクリ秋ざれば。〳〵月の。障りと泣き。歎きつる。東の山を越え行けど。今盲目の御身には。何の光も水鳥の。フシ加茂の川岸波越えて。契りも末の松坂とオクリ消えばや 海道下に。粟田口。ハルフシ秋まだ若き。山々に。忍び〳〵の初紅葉。誰に着よとか錦織るらん。

フシなり〳〵に。花鳥風月の戲も。共に散り行く相ノ山花の山鐘こう。〳〵とナホスフシはの聞え。御心細き時しもあれオクリおのが。夕の床急ぐつまこひ鴉二つ三つ。なう四つ五つ五文字は歌の。江戸ハルフシ中山清閑寺。あの神垣の年古りし。天の帝の御廟野よ。長地弓手の山の岡のべと御手を取りて致ゆれば。太夫宮は兎角の言もなく世々の日繼の。天津君民をツレテ惠みの言の葉の。露の流れを汲みながら ギンオクリなり行く。果のあさましやと。御涙せきあへさせ給はねば。清貫希世心なきスヱテ牛も。尾を伏せ角を伏せ フシ涙を。流す有樣に。草木も哀催せり。秋の田の。刈穗の藁屋風落ちて。賤が手枕寢亂れし。髮干す布干すまだ。フシ稻も刈り干す。我は袂の乾く間も。ヲ泣いそな泣いそ。澤邊の蛙小オクリかゝる。思ひはよも知らじ紫竹交りの籔の下。春の所緣の東風菜。スヱテ小笹姫笹行く袖に。長 蓑着て通へ。笠着て又通へ涙の。しづく。雨まさり 吉野雨には。あらでやこれの。木々の。木々の木の葉が。はらり。ほろり。フシはら〳〵〳〵と。スヱテ風に諸羽の宮所。今日を限りと伏し拜み。上り下りの旅人も 小オクリ心。心に。今宵しもたがたれと。伏見の山。見えて彼のたそ。冷泉がれの。さゞめごとハヅミ今日に浮ぶ。種ぞかし。フシ急くどすれど。とけしなき牛の玉鉾遲くとも。長地心の駒は日に千度戀しき。方に走井の。水櫛の齒もよしやよし。いつを頼みに東つけんスヱテ我が黑髮のさねかづら。フシ逢坂。山にぞ着き給ふ

ワキ地ヽ清貫希世兩卿は宮を木蔭に下し參らせ。宣旨默し難く是迄供奉せし候へども。スヱテいづくに捨て置き申すべき。詞さるにても我が君は堯舜以來の賢王とは申せども。地現在御子を捨て給ふ叡慮如何なる事やらんと。スヱテ涙にくれて申しけり 太夫地ヽ蟬丸聞召しあら愚かや人々よ前世の戒行拙くて盲目となりし故。詞されば父帝の御情

なきには似たれども。此の世にて因果を果し後世を助けん御はかりごと。地是こそは親の慈悲捨て置き歸れと宣へば ワキ スヱテ〽二人はいよ／＼涙を流し。詞此の御有樣にては盗人の虞あり。御衣を賜つて蓑を參らせ候はん太夫詞〽ムヽ是は雨による田蓑の島と詠ぜし簔か。ワキ〽さん候雨露の爲なれば同じく笠をも參らする太夫〽是は御侍み笠と詠みし物よなうワキ詞〽又此の杖は御道しるべ太夫地〽げに／＼是もつくからに千歳の坂も越えなんと。彼の遍照が詠みし杖かワキ〽それは千歳のさか行く杖太夫〽こゝは所も逢坂山 二人〽關の藁屋の竹柱。太夫フシ〽かゝる憂き世に。逢ふ坂の。知るも知らぬも是見よや。延喜の皇子の成り行く果。こはそも如何なる例ぞと。スヱテ聲をあけてぞ泣き給ふ。ワキ〽宣旨なれば人々も。名殘の袂振切つて涙ながらに歸らるゝ。太夫〽皇子は跡に只一人。琵琶を抱きて竹の杖。伏し轉び／＼さらば ワキ〽さらば 太夫ワキ〽さらばの聲ばかり梢の木魂山彦を。せめてそれかと力草分けて。山路に 三重太夫〽入り給ふ フシ桂はみのる。地三五の暮名高き月にあふ坂の。關の清水と聞えしは江州一の名水なり。されば關寺の稚兒達も。是を佛の閼伽桶や柄杓の露の玉襷。月を汲まんと秋に澄む フシ清水が許に出でらるゝ。地時に柳の木隠れより若き女の走り出で。石を袂に拾ひ入れ南無阿彌陀佛と言ひ捨て。既に清水に飛び入る所を稚兒達引留め。詞放生第一の靈水にて捨身思ひも寄らずとあれば。地いやとても存らへ果てぬ身ぞ。御慈悲に見遁して死なせてたべと振放すこれ／＼。詞さ程思ひつめしには仔細こそあらめ。品によつて兎も角も先づ靜まりて語られよひらに／＼と申さるる。地彼の女顔打赤め恥かしながら自らは。此の山に捨てられおはします蟬丸樣の思ひもの。直姫と申す者なるが御行方のなつかしく。是迄さまよひ候へども御在所も定かならず。人に尋ねて候へば御身の不具を恥ぢらひて。人に面を會せじと山深く入り給ひ。今は生死も知らざると聞くより浮世の頼みも切れ。此の清水をば三つ瀬川あふ瀬を急ぎ候ぞや。はや／＼死なせたべかしとスヱテ又さめ。ざめとぞ泣き居たる。詞稚兒達聞き給ひ扱いたはしや。我々は此の關寺の稚兒なるが。山踏みの行法に御在所は存じたり。餘所ながら見せ申さんさり乍ら。人音すれば逃げ隠れ給ふ間必ず聲ばし立て給ふな。地只御姿を見る迄ならばいで／＼案内申さんと。夕の雨にさす傘や。空も涙も定めなき山路 三重なるらん。太夫謡サシカヽリ第一第二の絃は索々として。秋の風松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は。我蟬丸が調も四つの。折がらなりける村雨かな。下歌流るゝ水のあはれ世の。其のことわりも ナホスフシ目に見えぬ。地月の入るさも知らざれば。夜晝分かん方もなくスヱテ谷の 梟 閑古鳥。梢を渡る 鼯やオクリ何を〽うらみて フシ猿啼く。江戸地落

薬衣に露重く。フシ月を擔ふに肩痩せたり。移れば變るあはれさよされぱにや。夕日の廻る方をこそ都の空と招く手にスヱテそなたの嵐懐しく。地又しん〳〵たる。野分に琵琶を彈じては。過ぎし寢覺の忘られず。鹿の妻戀ふ聲迄も。御身の上と フシあぢきなし。地眞拆の葛靑つゞら。來る人ありとも知り給はず。槇や柏を押し分けて。アミド杖が。枝折の。岨傳ひ。フシよろぼひ。辿らせ給ひける。ワキ〽姫はあれよと見るからに契りし人かあさましやと。縋り寄らんとせし所を。ツレ詞〽稚兒達抑へてアゝ音高し。人音すれば逃げ隱れ給ふ故物言ふ事は叶はずとこそ最前より申しつれ。地只音せでとありければ。太夫〽姫は詮方涙にくもる鏡の影か我が戀は 二人〽逢ふとはずれど物言はぬ 太夫〽我が口なしの色香をも 二人〽見ずや 太夫〽知らずや 三人〽あさましやと聲をも立てず忍び音に スヱテ咽せ返りてぞ泣き給ふ。太夫フシ〽宮は斯くとも白絲の

平家琵琶取出し。盤渉を平調に調べ變へやよや待て。天津雁がね。言傳てん。故郷の秋は。如何ならん我は。深山に住み侘びて琵琶より外は。フシ友なしと。地撥を上げ給ひし時。風がもて來る村雨の紅葉遲しと夕時雨。地一村さつと降り來れば蟬丸琵琶を濡さじと此處の木の下彼處の木蔭。濡れてら寢んと詠ぜしは。花に戲れし歌のさま我は又。三人賤の男が。〳〵。かづく袖笠肱笠の。雨に木の葉も亂るゝ初時雨彼方へ走り。此方へ走りざらり〳〵ざら〳〵ざつと。驅りさまよひ身は濡衣木蔭なければ雨もたまらずワキ地〽人々見る目も痛はしく少し小高き岨蔭より。笠をそつと差しかくれば。太夫〽宮御耳を敧てて。詞不思議や雨は降り乍ら身にかゝらぬは木蔭よな。詞口惜しや古へは。一夜泊りし宿迄も。錦の褥。綾の床。垣に金花をかけ詞クセ戸には水晶つらねつゝ。鸞輿屬車の玉衣のナホス隙間の風も厭ひしに斯く。あさましき苫莚。フシ敷く

ともしかじ。世の中よ。思ふ人とし片敷かば。スヱテ玉の臺も愚しき。地斯くとは知らで直姫があはれ何とか暮らすらん。戀しの昔や忍ばしの直姫やと。盲目の悲しさは側に在りとも知り給はず。獨ごちたき聲を上げ歎き慕はせ給ふにぞ ワキ〽今は堪へ兼ね心消え直姫爰にと言はんとすれど。ツレ〽稚兒達暫しと止むれば 二人〽絶え入り消え入り伏し轉び身を悶えてぞ憧るゝ フシ神ならぬ身は是非もなし。太夫地〽やゝあつて蟬丸琵琶も撥もからりと捨て。詞南無三寶叶はぬ事に迷うたり。逢ふは別れの始め一人止まる道ならず。色も匂ひも一盛り。アゝ思ふまじ歎かじと。一首の歌にかくばかりこれやこの。行くも歸るも別れては 知るも知らぬも逢坂の關。朝に別れ夕暮にあふ坂山の旅人の フシ往き來も夢のすさみぞや。雨降らば降れ。風吹かば吹け。山の奥こそ住みよけれ。エゝ浮世の無常今ぞ悟の花開けしと。走り出でんとし給へば。ワ

キ〽人々崖より飛んで下りこれ直姫よとすがりつく 太夫〽宮もこれはとばかりにて三人〽互に手を取り袖を取り戀しゆかしの物語。盡きせぬものは涙なりフシ心ぞ思ひやられたる ワキ詞〽時に二人の稚兒達詞を揃へ如何に蟬丸。御身色を重んじて思ひに絆され情に沈み。數多の女を迷はせし。因果の腹心をくらまし盲目となり給へども。地今の悟の詠歌面白し〳〵 三人〽三十一文字の面に旅の姿を列ね。内には則ちコハリ會者定離愛別離苦の理。逢ふは別れの始めと示し。首に三世を顯せりワキ〽神も心をたをやぎて ツレ〽佛の教にあふ坂の。二人フシ〽あの關寺の鐘の聲。煩惱の夢を覺すや法の聲も靜かに先づ初夜の鐘を撞く時は 太夫〽諸行無常とフシ響くなり 二人二地〽後夜の鐘を撞く時は 太夫〽是生滅法と響くなり 二人〽晨朝の響は 太夫〽生滅滅已フシ入相に三人〽寂滅爲樂と、響きて菩提の道も暗からず。悟の夜半も明け渡るコハリ雨眼は暗くとも。汝心月明かなり和歌の妙を授けんため ワキ〽我は人丸 太夫〽我は赤人 三人〽二人の魂魄現れ出で。共に成佛得脫の兜率に生れん嬉しきと。いふ聲ばかりは逢坂山。いふかと思へば逢坂山のナホス杉の嵐に立ち。紛れてぞ、フシ失せにけり太夫地〽蟬丸おつと感歎ありそれ日の本は神國の。和歌を以て道とせり歌仙の靈魂現れ出で。詞を交す其の奇特未だ天道捨て給はずと。感涙袖をうるほして扨直姫に逢ふ事も。神の授くる緣ぞと 三人〽各夢かと辿られて。猶信心の和歌の道古き例に踏み分けて。打連れ山路に歸らるゝ。夫婦不思議の契とて。再び巡りあふ坂山の名歌は。今に殘りける。

第四

地右大辨早廣は千手入道を討滅し。都の住居も成り難く遠國に彷徨ひしが。詞兎角我が眞正の敵は蟬丸なり。是非に恨を晴らさんと下人等一兩輩召連れ。地逢坂山の谷峯を草を分け、尋ぬれども。宮の行方はなかりけり フシ後は小關藤の尾や。地かゝる山家も住めば住む奥の柴人友呼びかはし。詞これ〳〵逢坂山にて不思議の物を拾うたり。そも何といふ物ぞ。さあ推當に言うて見よ。と琵琶の撥をぞ出しける。樵夫ども集りて。姿は銀杏の葉の形にて扨も合點行かぬ物。是は猿の末廣か。地いや〳〵天狗の笄ならめとフシ樣々見立て笑ひける。詞時に向ふの岡邊より若き樵夫の是を見て。地やれ方々それは此の山に捨てられましませし。蟬丸樣の琵琶の撥といふ物ぞ。賤しき者の用には立たず我にくれよといひければ。ムムして又お事は何にかする。樣子によつて遣らんといふ彼の男聞きも敢ず。テヽ某はあの志賀の里に世を遁れ住み給ふ。博雅の三位と申す人の一僕喜藤太といふ柴刈なるが。主君博雅の三位殿は蟬丸樣の琵琶の弟子。其の由緒にて此の間。蟬丸樣御夫婦共に日頃が庵に入り給へば。捧げ申すに是非々々所望といひければ。地扨はさうか持つ

ても用なし勿體なしと。フシ與へて皆々通りけり。地早廣とつくと聞きすまし郎黨に眴せ。喜藤太を四方よりはら〳〵と取圍み。地これ〳〵汝が主人三位の庵に蟬丸のおはするとや。さあ案内して連れ行け。否と言はゞ踏み殺さんとかさをかけてぞ申しける。喜藤太ぎよつとせしが打頷き。ムヽ聞えたつぬめ等は强盗よな。ヤイサ己れ等。氣色すればとて主の家へ盗人の引入れがなるものか。下郎と思ひ侮るな四も五もくふ男でなし。足手息災なうちはや〳〵歸れと怒りける。早廣怒つてそれ引立てよ案内させよ。地承ると下人ども。飛びかゝれば取つて投げ。取付けば踏倒し杓取りのべ打つてかゝる。早廣も拔き合せ二打ち三打ち働きしが。山路に馴れたる荒男岩とも谷ともいはせばこそ。猿より輕く駈け廻れば。さしもの早廣詮方なく〳〵フシ轉びころんで逃げ落ちける。地喜藤太も是迄と元の所に立歸り。詞エエなんでもない奴等に逢ひあつたら汗を流せしと。地柴に棒差しかき擔ひ。鼻歌うたひ悠々と志賀の。里へと。三重〽歸りける。地左衞門督清貫は。宣旨とは言ひながら御幼少より仕へにし。宮を山野に捨て參らせあぢき無き世に墨染の。袂にやつし國々を修行念佛他事もなし。されば故鄕忘じ難し宮の御上如何ぞと。都に歸る漣や フシ志賀の浦にぞ着き給ふ。古き都の所から花散る里の藁圍ひ。檜垣透垣さゝやかにいとゆゑづける庵あり。立入り見れども主はなしスヱテ持佛の香華こまやかに。持經禮讃繕はずフシ昔覺えたり。本尊も。如何なる遁世者の住家ぞや。詞世を厭ふ身は誰とても斯くこそあらまほしけれ。住持の歸さを待ちうけ。一夜語りて通らばやと思ひ椽に腰かけ待居たり。時に佛壇の下より。女の聲にて申し〳〵と呼びかくる。はつと驚き見てあれば。地忍びやかに戸を明けて雪のやうなる手を出し。詞やよこれ水一つたべといふ。地大道心の清貫も是ぞ化生の業ならめとフシ膝わな〳〵と顫ひしが。詞エヽ不便や餓鬼道に迷ひし幽靈ござめり。是ぞ出家の役と觀じ。地器物に水を入れ。詞利益三途飢渴飽滿地南無阿彌陀佛と差出しフシちやくと手を引きしさりしが。地又こは〴〵と立寄りてそつと覗けば。詞弓矢八幡あてやかなる女房なり。ムヽ扨は御坊の梵妻よな。いやはや浮世に拔目はなし。誰かは知らねど此の庵の濡坊主。地所こそあれ佛壇に女寢させてさゞめごと。思ひまはせば可笑くて フシ獨り笑うて居たりしが。又聲立ててあら心よや。今一つと差出す清貫もおどけ者。詞腸持の大黑殿ちと拜み奉らんと。其の手を取つて引出しよく〳〵見れば直姬なり。地扨は御身は清貫かなう姬君かと手を打つて フシ互に。呆れおはします。詞されども淸貫不審晴れず。何とて爰には御入りと問へば直姬聞き給ひ。されば とよ此の所は博雅の三位とて宮御琵琶の弟子なる故。扨妾もろとも是に忍びましますと語り給へ

ば。清貫悦び宮はいづくに渡らせ給ふ御目見え致したし。ヲヽ御出世の御祈請に坂本の山王へ日參遊ばし。地今日も三位を御供にて御參詣候が。追つ付け歸らせ給ふべしと宣ふ所へ喜藤太立歸り。詞清貫をきつと見て。彼奴も盗人の同類か油斷はせぬと鑓取直すを。姫君御覽じやれ喜藤太。あれは宮の御乳人清貫といふ人なり。お事は氣ばし違ひたるかと宣へば。ムヽ扨はさうか御免々々。拙者は山にて强盗に逢ひし故。扨只今の仕合と有りし次第を語りける。清貫つく〴〵聞き給ひ。いや〳〵是は盗人ならじ早廣に疑ひなし。大勢催し此の所へ押掛けんは必定。垣一重の庵室に長袖足弱退ちあらば後悔せん。地いで山王迄姫君をも御供し宮をも誘ひ奉り一先づ都へ上るべし。それ喜藤太御手を引け暮れぬ先にと夕浪の。鳰の湖邊を濱傳ひに坂本さしてぞ三重へ急ぎける。フシ爰に又。地千手太郎忠光は父入道を早廣に討たせ。其の無念晴れやらず老

いたる母を肩にかけ。親の敵早廣を是非一太刀と心掛け。野山に起き臥しつけ狙ふ所存のオクリへ程こそフシ理なれ。時しもあれ志賀の里にて。早廣をつけ出し。詞サア今ぞ日頃の運試し天の與へあら嬉しやとはやれども。見れば敵は大勢にて群り來る。老母を何處に置くべきぞ。エヽ屈竟の庵室御免といひ捨てつつと入り。持佛の下段の戸を押開け母を忍ばせ奉り。地あら心安や此の上は腕限り太刀限りと。身繕ひする所へ早廣主從七人にて。詞博雅の三位が庵とは是ならめ。ほつ込んで討取れといふ程こそあれ。我先にと亂れ入る忠光戸口に立塞がり。千手太郎見忘れたか己れをこそ尋ねしに。神佛のあてがひ能くも爰へ來りしな。地親の敵覺えたかと無二無三に切つてかゝれば。先を取られて動顚し慴えてさつと退きしが。踏み止れば打ちかけ取つて返せば切りかけ。打ちかけ〳〵息をもつがず。逃ぐる敵に追つすがい粟津が原へぞ三重へ追

つかけけるフシ斯くとは知らで。地博雅の三位蟬丸の御供して。清貫とは行違ひ麓の田面下向道フシ己が庵に歸りける。地蟬丸仰せけるは誠に師弟の因とて。此の度の忠節淺からずと宣ふにぞ。かゝる御用に立つ事も生前の本望。詞先づは姫君さぞ御淋しく御心も盡きぬべしと。佛壇の戸を明け御手を取つて引出せばヤア。是なんぢや。地七十有餘の老女頭の雪もみつわぐむ。老いさらぼひて出でてける三位はつと飛び退けば。宮も驚きやれ何事ぞ氣遣はし。詞さん候姫君俄に白髪の姥と成り給ふ。今の間に年の寄るは合點參らず。これ御覽ぜと御手を取り肌を撫づれば。地骨荒れて老の波立つ身の皺にフシ瘦せて色香もなかりけり。地宮も呆れてましませば。三位いよ〳〵當惑し。今朝程宿を出でさまに確か姫君を入れ置いたと存ずるが。地取り違へたか知らぬ迄とフシ眉を。ひそめて居たりけり。地いたはしや蟬丸は御涙をはら〳〵と流し。我此の姿

となる事もあの姫ゆゑと樂しみしに。情も戀も覺め果てし天魔の所爲か冥罰かと。スヱテ御愁歎こそ道理なれ。地老母は聲を聞き覺え御顏容をも思ひつけ。なう宮樣か蟬丸樣かお懷しやゆかしやと。縋り付けばアアうるさ。許せ〳〵と彼方へ逃げ此方へ隱れ百歳に。一歳足らぬ九十九髮 フシもてあつかはせ給ひけり。詞チヽ御尤〳〵。名を申さずば御見忘れ候べし。地妾こそ君がため早廣に討れし。千手入道が後家忠光が母にて候と。件の概略語らるればげに〳〵それよ珍しや。これは〳〵と手を打つて フシ一先づ不審は晴れしかど。地直姫の行方なし最前の騷動に。敵や奪ひ取りつると未だ氣遣ひ絕えぬ所に。清貫喜藤太姫君を誘引し。宮に出遇ひ奉らぬは道こそ違ひつらめとて。地本の庵へ歸らるればこは清貫か我が君か。それよこれよと寄り集まり泣いつ笑うつとりどりに フシ語らひどよみ給ひけり。地然つし所へ千手太郎徹傷少々受けながら。大汗になつて馳せ歸り。詞人々を見るよりもはつと驚き嬉しさに。地とかうの言句も出でばこそ夢かと思ふ氣色なり。各一度にやれ千手か忠光か。詞事の首尾は御老母の物語にて承る。して先づ敵は討留めしか。さん候敵は大勢と申し。長追ひに力盡き候を火水の底もと存ぜしかど。母が有樣氣遣はしく無念ながらも討洩らし取つて返し候。幸ひかな此の上は。恐れ乍ら母を君に預け參らせ。心身輕くし罷り出で敵を討つて歸るへし。はや御暇とぞ申しける清貫聞きも敢ず。チヽ淸し勇ましし。御老母は我々預り。都一條大宮に逆髮の姬宮とて。蟬丸の御姉宮おはします。君諸共に此の方へ伴ひ忍ばせ奉らん。これ此の袈裟衣は某が着用して君に巡り逢ひ奉りし吉相目出度き三衣なり。地貴殿に讓り申すべし修行者に樣を變へ。狙ひ寄つて本望遂げ目出度く歸洛せられよと。おの〳〵門出祝はるればチヽ有難し忝し。詞此の衣を賜つて姿は墨にやつすとも。心ばかりは染め殘し彌陀の利劍を提げて。假令ば敵翼を生じ。梢を翔り波を潛つて新羅百濟高麗國。支那天竺に到るとも乾坤を出でずんば。よしや五年が十年も命終らば一念の。魂殘つて本望遂げ目出度く歸つて母ぢや人。御笑顏見申さんチヽ御身が笑ひも見せてたべ。お暇申す我が君樣暇申して母上樣。各には老母が事頼み存ずるチヽ。〳〵〳〵おさらば。さらばと出でて行く花は三吉野人は武士譽は。雲井に薫りける。

第五

地世の中は兎にもかくにも假の宿。傘一本に起き臥すも身の程かくす我が庵と。墨の袂に墨頭巾經論少々懷中し。父の敵を狙ひ行く瞋恚に我は迷へども。人を導く六道の。スヱテ辻談議こそ殊勝なれ。詞誠にあさましいかな歎かしいかな。今日の衆生一生造惡不斷煩惱の塵に交り。朝に怒り夕に悦び。貪瞋痴慢の色香に迷ひ假にも佛法といふ事を

知らぬ。愚なるかな。妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者と申して。現世にて實の山を築かせ。子孫奴にかしづかれ花に詠じ月に嘯き。無上の榮華を極むると雖も。一息切斷臨終の嵐に貪慾私慾の火の車。業障の雲に懸き誘ひ行く時んば。日頃の下人も從はず金銀衣服も身に着けず。無間奈落に眞逆樣に落つる事三つ羽の征矢よりいと早し。財寶は地獄の家包名聞は焦熱のつま木とも譬へたり。さて如何がして各我等。佛にはなるぞと申せば。ハヤメ有難い事の。化城喩品に曰く。大通智勝佛十劫坐道場 佛法不現前不得成佛道。此の文の心は一心の外に佛法なし。一心の外に成佛なし。されば愚痴無智の凡夫心の外に佛を求め穢土の外に淨土を求め。却つて迷ひの種となす。是を和らげ傳教ナホス大師の。フシ御歌に。悟とて外に。求むる。フシ心こそ迷ひそめける。始めなるらん。地天台の釋文にも。法華彌陀眼目の異名とて。釋迦と阿彌陀は譬へば目といひ眼といふが如くにて。一佛異名同體。心の外に來迎なし。居ながら安ら蓮華道場。寢ても佛覺めても佛。立つても佛居ても佛。行住坐臥一心不亂に念佛せば。己身の彌陀唯心の淨土なれば。心外無別法卽身成佛。取りも直さず居も直らず。十方遍照の光明を放ち。金色の蓮臺に駕せられ一瞬刹那が其の間に。忽ち安養無垢世界。不退快樂の都に到らん何疑のあるべきと。四顚八辯流るゝ如く。語り給へば往來はシ皆々時して通りけり 地右大辨早廣は丹波の方へ落ち行かんと。編笠引つこみ驛馬に乘り白川越に來りしが。詞傘にや恐れけん早廣が乘つたる馬。俄にけしとみ跳ね上り鞍を放れてどうど落つる。早廣怒つてこれ頑人め。馬上にも容赦せず傘をひらめかし。落馬させつる奇怪と笠取つたるを屹と見て。ヤア親の敵早廣か千手太郎知つつらんと。傘の轆轤を拔けば長柄に槍を仕込うだり。地あまさじと飛びかゝれば南無三寶と馬引寄せ打乘り。鞭を當てて步まする卑怯者臆病者。返せ／＼と聲をかけ。息をもつがず追つかけしはフシ只韋駄天の如くなり。地半道ばかり追つかけしが馬の足並早廣に。十四五丁下り松の木蔭につつ立ち。詞又驅け出でんとしけれどもこゝは如何に足立たず。地野山に臥したる千手太郎二三日五穀を食せず。咽渴じてよろ／＼と一足も引かればこそ。エヽ冥加に盡きたり口惜しゝとスヱテ齒嚙みを。なして立つたる所に。詞誠に天の與へかや死人に供へし。枕づけの供物松の下に捨ててあり。有難し幸ひと一口にぐつと食ひ。一ゆり搖つて力足を踏んだれば。地金剛力士の如くなり。サア千里萬里も一飛びと又駈け出し 三重〽行く水の。地神屋川にて程なく追つ付き聲をかけ。詞馬の鞦鞍壺かけて突きければ。馬は堪へずかつぱと伏す早廣下り立ち心得たりと。太刀を合せて防ぎしが一念の鋒先岩を劈く勢に。左の肋骨を貫かれ仰向に反せばつ

つと入り、取つて引伏せ馬乗りにどうど乗り。親の敵諸人の仇年來の恨み思ひ知れと。ス地三刀四刀刺通しヱヽ嬉しし心地よしと。スヱテ嬉し泣に泣き居たり。地先づ母上に悦ばせ奉らんと。首かき落し槍に貫き振りかたげ蟬丸のおはします一條大宮逆髪の館へ。飛ぶが如くに急ぎける心の内こそ三重〽嬉しけれ。地案内にも及ばず。詞千手太郎忠光敵早廣が首取つて參りしと大音あげて呼ばはれば。地希世淸貫宮御夫婦これは〳〵と走り出で。扨もお手柄々々とフシ勇み悦び給ひけり。地此の年月の難行又下り松にて職に及びし時、亡者に供へし供物にて餓を凌ぎし有樣具に語り。母に申して喜ばせん早々逢はせてたべと申せば。人々は涙ぐみスヱテとかうの事も宣はず。詞こは心得ず如何なる仔細ぞ聞かさせ給へ。希世涙を止め今更語るも便なきながら。御老母の御事は廿日程以前より風邪の心地と候ひしを。醫療手を盡せしかひもなく。地一昨日の暮方に遂に果敢なく成り給ふ。只今の物語亡者の供物を食せしとは。それこそ御老母の供物よと語りもあへぬに忠光は。はつとばかりに伏し轉びフシ聲も。惜まず泣き居たり。地心の内こそ無慚なれいとゞ涙にくれながら。扨は亡母の供物にて我が渴命をつなぎ本望を遂せしかや。草の蔭迄子を思ふ母の一念通じたる。親子の値遇の有難さよ。斯くあるべきとは存ぜず御顏ばせを拜せんと勇み歸りしかひもなき定め難なの世の中やと。人目もわかず聲を上げスヱテ口說き立ててぞ泣き居たり。げに道理ことわりやとフシ各袖をぞ絞らるゝ。稍あつて千手太郎ァヽ歎くまじや候。詞親兄弟が命を捨てしも君を御代に立てんため。敵を討つて候上は只父母が孝養には。君御出世の御訴訟こそあらまほしう候と。涙を止め申しければ、淸貫聞きもあへず我々も然は存ずれども、先々月より直姬御懷姙の兆候の爲。取紛れ延引せし地いざ急に奏聞せんと評議とり〴〵なる所へ姉宮ゆるぎ出で給ひ。千手太郎とは御身の事か忠義感じ入つてこそ候へ。地妾は逆髮とて蟬丸の姉なるか。因果の不具に髮逆に生えし故父帝にも嫉はれて。かゝる佗しき住居ながら是は過去の因果なれば祈るべき力なし。詞又蟬丸の盲目は嫉妬に命を失ひし。北の方の一念現世の報ばかりなり。殊に直姬懷姙とや。彼の恨にて生まるゝ子も不具ならんは必定。もと北の方に仇もなければ科もなし。地安居院の小聖を請じ。宇治川にて七々日魂鎭めの法事をなし。彼の亡魂を和めなば蟬丸の目も開け。直姬の平產も氣質美麗の男子ならんと〳〵と宣へば。皆尤と同じつゝ小聖に御使者あり、都の辰巳思ひ立つ日を吉。日とぞ三重〽開帳ある。

懷胎十月の由來

フシ宇治の網代木、日を重ね。今日滿願の大法事。宮御夫婦は願主にて、姬の左右に着座ある。大君御幸なりければ、洛中近

國隱れなく。信心の參詣は。老若男女貴賤都鄙フシ袖を連ねて夥し。地かくて安居院の小聖は役の行者の跡を續ぎ。胎金兩部の峯を分け。七峰の露を拂ひし篠懸に。不淨を隔つる忍辱の袈裟。智行劣らぬ御弟子達弓手馬手に相具し。壇上にさしかかり先づ加持の讃をぞスヱテ誦せられける。謹上。
ワキツレ再拜 シテ再拜三人敬つて申す魂鎭め。それ無漏無上の法界には。自他の念更になし。悟る時んば十方空。迷ふが故に三界常喜怒。みだりに起つて哀樂。之が爲に止む事なし。花と見よ雲と見よ。立田の錦吉野の雲 小オクリ現へ なければ。フシ夢も結ばず。水溜らねば月も宿らず。ハルフシ今顯へす。常閑に。阿字本不生の風を招きて。迷妄の闇を晴さん。太夫抑行者が修法といつば。初七日は曼陀羅供。ワキ二七日は放生供。ツレ三七日には三人龍女成佛水施餓鬼。四七日は光明供。五七日はフシ妙なれや法華讖法六七日は。法要の修理三昧今月今日ナホス七々日の大結願と申すには。太夫妊婦安平子安の法。今の御法に仇を忘れて擁護の眦を廻らし給へと。懷胎十月の十相をオクリ語りへ給ふぞ殊勝なる。三人先づ初月は一氣胎中に孕まれ。其の形恰も鷄卵の如し。これ本來一德の清水。形に取つては混沌未分。名に取つては大元大素神道にては。國常立尊と申し奉り。漢儒は天の生民を下すといふ。佛法にては本有の毘盧遮那。不動明王の請取り給ひてフシ本來の。空の一物是とかや。二月目には陰陽の。二氣相和して一氣となり。獨鈷の形とあらはるゝ。是を胎子と名付けて形の始め理のつぎにて。藥師如來の請取りなり。三月目に至ては人倫の本心私なく。始めて一念萌す天竺の釋迦牟尼如來は佛といひ。唐土の聖は明德と名付け我が朝にては神慮と仰ぐ。名付くる所は隔れど三教一致は。ヲドリフシやこの〳〵ハツア〳〵この〳〵三鈷の形文殊菩薩のフシ請取なり。はや四月めは。地水火風の五輪悉く連りて。仁義五常の五鈷の形普賢菩薩の守なり。扨五月に及んで。六根手足を彩色五體殘らず連續す。此の時より其の體に守本尊定まりて 小オクリ附添ひ。めぐる臘帶や ハルフシ地藏菩薩の。請取なり。六月になれば好む所。欲する所自然に生じ。母の乳房に喰ひ付きて。親の血を吸ひ取ることフシ凡そ二石六斗なり。卽ち大悲觀世音。是を守らせ給ふとぞ。扨七月に至つては忝くも御佛は三世の因緣壽命を鑒み。扨こそ人間一生にめぐる。因果の小車の輪の。輪寶に刻み付け。頭にかづけ給ふとかや。彌勒菩薩の請取なり。八月目に及んでは阿閦菩薩の守にて。輪寶變じて胞衣となり。九月には成長し意念ある故法界の。惡魔惡靈毒氣を吹き入れ。吹きかけ。吹き込み此の界に出生せば。己れが魔道へ引入れんと隙間を狙ひ窺ふなり。父母の所行所念にひかれ。善をなせば善人。惡をなせば惡人と成り極樂地獄の境ぞとて。産神をナホス定め

置き勢至菩薩のフシ守なり　地十月は愛染明王。されば六道四生廿五有の其の中に。人よりも尊きはなく皆佛性を具へたり。彼も我も一佛一體汝が怨念消除微塵。本の佛果に至り給へ。唵阿毘羅吽見。吒干給急々。如律令と精々をぬきんでし。修多羅の聲も川風も天に響きてヘ有難しフシ時に不思議や。神木の松の木の間に北の方の幽靈影の如くに現れ。地此の御經に引かれて五逆の達多八歳の龍女。共に佛果を受けしぞや恨を晴れて今よりは。護持の佛となるべしと宣ふ聲も香しく。如意觀音と現れ光を。放つて失せ給ふ。地ツメ此の光明に照されて蟬丸の御兩眼。くわつと開けてこれは〱と宣へば君臣上下押しなべて。喜びさゞめき給ひけり扨小聖に御禮あつく。御夫婦打連れ還御ある御子孫繁昌國繁昌。千秋萬歲萬々歲盡きせぬ。やどこそ久しけれ。

我等かたり本の通ちがひなく寫させ進せ候此外口傳とてさのみむつかしき事もなく候たゞ人の心を慰るを祕傳にいたし候しかしふし付は作意と文句のはだゑが大事にて候祕事はまつけとや　かしこ

竹本義太夫

近松門左衛門作

大阪御堂筋　山本九兵衛版

最明寺殿百人上臈

近松門左衛門作

序 周書に曰く、國を治むるに三常あり。一つには君賢を擧るを以て常とし。二つには官賢に任ずるを以て常とし。士賢を敬ふを以て常とし。合せて三つの鱗形北條五代の鎌倉や、時の時たる時頼のオロシ〽執權の代ぞ。私なき、地德をかくして權貴に誇らず。祝髮して最明寺殿道崇と號し、名越が谷の法華堂に、故右大將賴朝卿の尊影を、木像に刻み奉り大江の僧正廣辨を、別當に請じ据ゑ莊嚴禮奠るますが如く。神易と名付け六十四本の御籤をこめ。凡そ國家の政道に誤ありや無しやとて。我が身を御籤に試みて正し給へる賞罰に、天地自然に僞りのフシ無き代なりけり村時雨。地冬至の日を吉例にて翌年の政所始め。御嫡子天女丸時宗十六歳、御舍弟式部の冠者時貞廿三歳。其の外連署昵近の歷々法華堂に群參あり、錦の戶帳開くれば、各はつと頭を垂れスヱテ生けるに、仕ふる如くなり。詞大江の僧正太祝詞奉り御籤の御箱押戴いて。地千早振る正直正路の御籤の文。讀み上げてこそフシ講じけれ。それ千里の地を得るは一賢人を得るには如かず、千金を列ぬるは一賢人を求むるには如かずと云々。詞此の文の心は。たとへば大國を從へ萬寶を求めんと思はゞ、先づ臣下の賢者を求むべしとの御知らせ。地目出度き御籤候と考へらるれば最明寺殿聞き給ひ、我も豫て存ずる所臣等が心君の冥慮に相かなへり。然らば建曆以來御勘氣謀叛の輩の、上り屋敷の明地多し。當代忠勤の方々へ分ち與へんそれ〳〵と中原の大外記執筆にてオクリ仰に〽從ひ記しける。先づ切通しの梶原屋敷は海を見晴らし山にそひ、境內分に過ぎたれども宇都宮の社司頼綱に恩賜あるこれはこれ、父朝綱が梶原を射留めたる舊功、且は其の身も學問好み記錄を集め文武の嗜み、行跡道を守る由外を勵まし德を勸むる御褒美として、向後若君天女丸殿御師範にこそフシさゝれけれ。ハルフシ葛西が谷の佐々木屋敷、そも此の佐々木兄弟は功名諸人に獨步すと雖も。義者の爲に沒收せられし分地なれば。先祖の忠節コハリ御感に堪へず、佐々木下總廣綱に賜びけるには、故鄕に飾る唐錦、錦張山の文覺屋敷。遠藤四郎に賜はる所、甘繩の盛長屋敷は結城の友重、妹背川の蒲殿屋敷は稻毛の彌五郎、雪の下の長明屋敷當代和歌に名を得たる、河內守光行が光源氏の講釋場、今ぞ風雅の道迄も色をしたる町が谷、佐野の源左衛門常世が屋敷は花好き者の跡ぞとて。若君の地御花畠フシ御休息所に賜びてけり。筋違橋の秩父屋敷赤橋左衛門所望の所。比

企が谷の土佐坊屋敷は金田の頼次、松葉が谷の佐竹屋敷は城之介安盛。藤が谷の大伴屋敷隣て足利望みに應ず。天神山の荏柄屋敷は仁科の前司。コハリ小林郷の朝比奈屋敷伊井島の景正屋敷。三浦の光村泰村に賜つたり。袖の浦の靜屋敷月かげの阿佛屋敷。稻村崎の大介屋敷は平の宣時秀時。安藤左衛門光成其の外庶流。二男迄分に應じ功により。住宅の地を地安堵あり實に。廉直の法政やと フシ各從ひ靡きける。地最明寺殿悅び給ひ如何に天女丸。詞來春よりは汝をら政道の連署に加ふべし。地御影に御禮仕れ畏つて引繕ひ。寶前に差向へば。ぞつと身の毛も彌立つて。忍辱柔和の佛眼も睨ませ給ふと御影の御顏。二目とも拜まれず頭の上に大磐石の。落ちかゝつたる如くにて眼も眩み俯伏せにかつぱと伏し給ふ。人々惶て抱きのけ看病すれば氣も爽ぎ。顏色もとの如くにてスヱチ不思議〳〵とばかりなり。詞最明寺殿驚き給ひ。扨は神君の御內性

に叶はぬと覺えたり。地御籤に伺ひ奉れと僧正やがて神呪を稱へ。御箱を振上げ振立て御籤の文を拜受あれば。詞豆を煮て豆の豆殼を焚く。煙絕えざる事日月の千回と讀みも終らず。あら不思議や此の文は。兄弟の仲不和にして恨ありとの御示し。是に就いて愚僧常々考へ置きしに疑なく。天女丸殿こそは九郎判官義經の再誕候。其のいはれは判官殿は丁丑の生れ。本卦師の卦に當つて軍術に妙を得。中秋半の誕生敵を制する京官。向齒反つて猿眼鬢の縮みしとや。地若君の本卦支干御誕生の年月刻限。面體骨柄寸分相違なき上に。只今御影の御怒かれこれ以て考ふれば。詞若君の前生は義經に極つたり。猶其のしるし末々御覽じ合すべしと。地三世命鑑理を照らし鏡にかけて說き給へば。思ひ合せて人々は フシあつと手を打ち給ひけり。詞僧正重ねて。承れば奥州の田夫者。鎌倉殿の御勘氣よ謀叛人よなんどとて。義經の御墓を馬の飼ひ

場と踏み荒し。剩へ賴朝公より錦戶に賜はりし。判官誅罰の御判の御教書國中に口ずさみ。御屍を辱しむ早く御使者を遣され。地彼の御判を燒き棄て御墓を淸め尊みなば。御勘當のしるしも失せ判官殿の魂魄に。天然自在の御威光今若君の御身に顯れ。智謀計略軍術劍術輕業早業。武勇の達者となり給はん。其の時こそ義經の生れ代りと著く。愚僧が繰つたる命鑑の易御疑も晴れ申さんと。見通す如く述べらるれば實に〳〵左樣の例多し。然らば二階堂入道は奥州に下向し。義經の御墓を祠り同じく誅罰の御教書も。召返して燒き棄つべしと フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。詞扨方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

帝には。韓王堂に一人御幸の例もあり。頭陀修行の身ともなり諸國の安危を見まほしく思へども。かくと世上に披露せば。諸人僞り阿りて誠の善惡知り難し。されば此の方丈の床をしつらふ事餘の儀にあらず。上宮太子の身は夢殿に在りながら、魂は震旦の天台山に逍遙あり。地 我も年月學びたる坐禪三昧の力によつて。此の方丈に閉ぢ籠り觀念を凝らし。身は鎌倉の法華堂。心は秋津洲の浦々里々遍見すべし。其の間は弟の式部の冠者天女丸と心を合せ。貞永の式目を守つて政道怠るべからず、僧正の外此の所案內禁制。坐禪終りて僧正の便次第に迎ひに來れ。追付け目出度く對面せんと禪定の戶を引立て、入るさの月の影暗く フシ 寂寞。として音もなし。地 若君を始め諸大名國家の爲とある上は、兎角申し上げ難しさり乍ら、宮仕へ申す者もなし萬事貴僧を賴み存じ候と、始終の約束こまごまと オクリ 皆々へ本所に歸らるる。地 豫て僧正只一人に牒し置き給ふ故。旅の物の具取りまかなひ何れも歸宅候て、はや夕霧の暗まぎれ御旅立あれかしと。音づれ給へばあら嬉しや數年の望達したり。來年彌生末つ方立歸る迄は我こゝに。在りと沙汰し給へやと內より扉押開く。花の袂を旅衣笠より外は宿なく。苔を敷寢の平包金軸の普門品。紫檀の裁刀矢立の筆百八の菩提珠ならで。御身に添ふる物はなし憲清法師が世を遁れ。修行の肩にかけたるはやさしき島の歌袋、是は浮世の人心ゆがみを矯めて竹の杖。月もろ共に我も亦世上の闇を照さんと。慈悲の眼の衣手や。民の草葉にやつれ給ふ。御有樣ぞ 三重〽 有難き。フシ 大學の道。地 明德を明かに生民を享けし天女丸、御同學には佐々木が嫡子花市、土肥の乙鶴金子の十丸皆物讀みの御伽にて。朝は武藝定まつて、晝の時計を宇都の宮の フシ 屋敷に通ひ給ひける、地 今日のお供は上野の國の住人、佐野の源藤太經景、若君の御出なりと案內す。

朝平立出で學問所へ伴ひ參らすれば、若君を始め何れも行儀繕ひて。面々書物控へらる。詞 朝平若君をつくづくと打守り、扨々御器用千萬。誠の聰明叡智とは若君の御事、それによつて御伽の子供衆迄。我劣らじと覺え強く。小學入より日數もなきに四書古文三體詩。錦繡段此の上に遊ばされんは五經文選。其の外聖賢の經書詩文の書。限りなく候へども、それ迄に及ばず。弓馬の家には孫子吳子三略、六韜司馬法など申して、合戰勝負の理非を述べたる七書よくよく御得心あり。兼ては史記を御覽あり古人の心を味ふを。弓矢取る身の學問とは申すなれ。大江の僧正廣辨が。三世命鑑を考へ九郎判官義經の。生れ代りと申されしにゆめゆめ疑ひ候はず。地 末賴もしき御器量いよいよ文武の御嗜こそ肝要なれ。詞 それに就いて先づ物讀みの始めには、實語教童子教和漢朗詠菅家往來。扨は判官殿の腰越狀お家の式目、是等は諸人存じの書。こゝに未だ讀

布せざる祕傳の一巻。是を御傳授致さんと簞笥の底より取出し。詞これは君の前生判官殿。高館にて御生害の時一期の遺恨を書きあらはし。口に含んで失せ給ひし含状と申す物。文法やはらかに候へども無點の物に候へば。地一遍教へ奉らんと押開けば天女丸。扨は我か生れぬ先の筆跡かと。見ぬ世の昔なつかしく涙を聲に浮べながら。スヱテ同音にこそ讀まれけれ。

義　經　含　狀

抑義經末期に臨んで申す。苟も清和の後裔を出で。多田滿仲の家を嗣ぎしより以來。繼父清盛に隔てられ邊土遠國を住家とし。土民百姓等に　フシ服仕せらる。然りと雖も。當家の御運を開き勅宣の。其の一つに選はれ或時は野に伏し山に伏し又。或時は漫々たる海上に。風波の難を凌ぎ敵徒の首を斬つて。鯨鯢の腮に曝し三年三月に攻め靡け。大臣殿父子を生捕り京鎌倉を渡し。源氏會稽の恥辱を雪ぐと雖も。梶原が讒言によつて空しく莫大の。勲功も默止され親しき兄弟を。仇の侍一人に思召し換ゆる。只これ不運と存ず將また。前世の業因を感ずるに似たり。仰ぎ願はくは梶原父子が首を刎ね。義經に手向けられれば今生。後生の恨ある可らず。萬端筆紙に盡し難し。恐惶敬つて白す文治五年。閏四月地廿八日。謹上鎌倉の右大將殿源義經。と讀みも終らず若君涙に咽び給へば。同學お供の少年迄　フシ皆々袖をぞ濡しける。地朝平涙を抑へ誠に義經の御形見ばかりにあらず末世の教になるべき物。詞其の仔細といつば。賴朝程の御大將梶原が姦曲に誑され。地實否を糺さす御舎弟を滅し給ふ事。火の中にある寶にめでて片手を燒くに異らず。されば大將としては先づよく人を知るべき教ならずや。詞又梶原は君の寵に誇つて己れを忘れ。一旦の利に眼眩み人を害すと思へども。却つて我が身を害すること。天に向つて唾すと四十二章經には説かれたり。地扨こそ賴朝公御逝去の後。安達の景盛を賴家公へ讒言し。結城の朝光を尼將軍へ讒訴申しける程に。賴朝御存命の間こそ諸人敬ひ畏れけめ。年來疎む梶原父子何に心を置くべきと。和田小山畠山三浦の義村千葉之介。八田小笠原藤九郎。盛長以下の御家人六十六人。鶴が岡に會合し景時が罪五十餘ヶ條。連判の訴狀を認め因幡守廣元を以て。賴家公へ奉り既に誅せらるべきに極つしかば。猛威を振ふ梶原が日頃の雜言惡口も。矢彈の紋の矢も楯も大勢に堪らばこそ。星月夜の編笠や鎌倉山を夜抜けにして。相模の國一の宮へ。フシはふ／＼逃げて隱れしが。地運に逸る我武者ども餘さじ物と在々所々。手ひどく嚴しく追懸され鶴川の小鶴磯に雉子。猫に追はれし野良鼠あなあさましや梶原父子。郎等下人も散散に馬に乘つても舍人なく。鞍は置けども鐙はさゝず都の方へと志し。駿河の國を驅け通る代代我等が本國なり。父彌三郎朝綱一族集の小的射て。勝負

を樂しむ射垜の前御免も乞は亦乘打す。朝綱弓に矢取つて番ひ大音揚げて梶原殿と見かけたり。詞徒步立にて通るにも的場には故實の候。禮儀もなしに乘打は。斯くいふを宇都宮と知らずになせる慮外か。よし知らば知るにもせよ。朋輩の情に人と人は許しもあり。弓矢に向つて乘打は正八幡の神罰の矢。地受けて見よと白木の弓。大中黑の的矢平題箭かけて引きしぼり。かけ行く駒に拳をつけ弦音高く切つて放せば。過たず跡に乘つたる嫡子源太景季が。押付を胸板へぐつと射拔いて餘る矢が。親平三景時が耳の根を肩先迄。咽笛かけて射通され親子一所に馬上より。左手右手へをちこちの。人の欝憤世の遺恨 マシ此の時にこそ晴れてけれ。地父朝綱が其の時の御恩賞の餘慶によつて。此の梶原の屋敷を今度某拜領し。土砂改め候へどもあれに候紅梅の早咲こそ。景時が二度の駈けの箙の梅の名殘とて。植ゑ置きたると承る。末の世のしるし

に引殘し候か。地折々雨の夕暮などは梶原が一念の火。梅の梢に來る由下女下部などが申し觸らし候へども。某は逢に見ずいかで左樣の事あらんと。語り給へば人々も フシあつと感じておはします。地佐野の源藤太經景次の間より罷り出で。詞好き時分御供致し若君のお蔭によつて。御講釋承り我等の仕合一代の德。扨々梶原めは武士たる者の風上にも忌みたる者。地其の時節經景生れ合せ在るならば。讒言吐き出す舌引拔き顋骨引裂き踏みにじつて退けんずもの。エヽ四十年遲う生れたなあ。あの紅梅が梶原梅か何の彼奴が箙の梅。二度の駈けも半分嘘輕薄らしい花の色。憎くい梶原めがしや面踏んでくれんずと。廣庭に飛んで下り股立つかんで古木の梅の。枝も折れよ根も碎けよ。どう。〳〵。どう〳〵どうど踏み付け。拳を上げて撲つや靭のほつきと折れて。落花顚る狼藉たるヲ、さもさうず景時と。雜言はいて立歸れば。挨拶なくも人々は フシ苦

笑にぞなりにける。地時しも冴え行く時雨の雪を催す空凄じく。山風落葉を吹立て〳〵吹上ぐれば。紅葉天に翩翻して。火燄の渦卷く如くなるに。梶原が髑髏虚空にひらめき舞ひ下り舞ひ上り。源藤太が髻にしつかとこそは嚙付きけれ。されども人目に地見えざれば。其の身はさしも猶知らず心も元の心ながら。氣は逆上し酩酊と フシ酒に醉へるが如くなり。地斯かる所に安藤左衞門光成方より。詞急々の御注進使者を走らせ候と。大息ついで伺候する若君驚き。其の使者これへ急々の注進とは。何事やらんと宣へばさん候。御叔父式部の冠者時貞殿。御家の重寶三つ鱗の御旗を奪ひ取り。本國伊豆の三崎へ押渡り給ひ候。勢ひ全く逆心の御企と見え候。大殿坐禪に御籠りの中と申し。延引にては御大事たるべし。此度御征伐然るべしとの注進なりとぞ申しける。地天女丸横手を打つてこは如何に。その旗といつぱ先祖時政に。江の島の辨財

天直に與へ賜つたる。三枚の鱗を旗の紋と勅請し。守とも賽とも是で立つたる北條家、叔父は一家といひながら庶子へ渡さんやうはなし。しや何事かあらん伊豆の三崎は捨置きぬ。鬼界高麗契丹國雲の果海の果。陸ならば駒の蹄の立つ限り。海ならば櫓櫂の立たんず所迄。攻寄せ攻寄せ取返さで置くべきか。天女丸時宗が鎧初の初陣に。叔父の首提げずんば鎌倉へは歸るまじ。山路を廻つて人馬の足を疲らすな。由井の濱より兵船出し。只一時に揉み潰せ。馬に鞍置け物具せよと勇み進みし御有樣。けに義經の再誕と フシ 札を打たざるばかりなり。地 梶原が死靈に犯されし源藤太進み出で。詞 此の度の先陣は此の經景が賜つて。眞先かけうずるにて候。仰付けられ候へとこそ望みけれ。 若君聞きも敢へずいやサ。 先陣も後陣もこの時宗がなくばこそ。先陣は某よ 地 いや／＼殿は大將軍。 是非先陣は經景に賜れかしと言葉を返せば。いやとよ大將軍とは父最明寺殿ならで外になし。我も汝等同然よ功名は仕勝ちぞよ。親にも子にも遠慮なし急げや／＼速ければ。待つ事あつて靜なり遲くて走る道は物うしと。名將の詠みしぞかしと口ずさみ出で給へば。 源藤太御袖をひかへ。 詞 然らば今度の御船には阿蘭陀櫓を立て申すべし。ムヽウして阿蘭陀櫓とは何ぞ。 さん候馬は乘手の心に任せ引くも駈くるも自由なれども。すはや退かんと思ふ時船押廻すは儘ならず。不覺の負を取るもの候。艫舳に櫓を立て違へ傍柁を入れ。何方へも廻し易いやうにと言はせも敢ず。エヽ門出悪しし忌まくし。一足も退かじと思ふさへ退くは軍の習ひなり。 地 豫て左樣の逃げ用意。臆病神の末社殿と笑ひ給へば同學の。十四十五の輩迄 フシ 手を叩いてぞ笑ひける。 地 藤太大きに赤面し。詞 總じて武夫は駈引を辨へ。命を全うして敵を滅すを以て能き弓取とは名付けたり。和殿の樣に口廣いくせに。尾の細いを鮟鱇武者とて何の役にも立たぬもの。近頃笑止／＼と言へば若君腹に据ゑ兼ね。汝はたつた今迄梶原を誹りながら。 梶原同然の悪口。我に向つて推參千萬。 サア今一言いうて見よと太刀に手をかけ給ひける。 地 ヤア最明寺殿より外大將軍はなきものを。御身も我も同然鮟鱇とも河豚黨とも。 言うて見せんと罵りあふチヽ。鮟鱇武者の切先受けて見よと拔放し給へば。土肥佐々木なんどいふ一騎當千の嫡子ども。一度に小太刀をはらりと拔き眞中におつ取りこめ。 我討取らんと犇めく所を朝平すがつてアヽ勿體なし。大事の前の御愼み最明寺殿の思召も穩便ならずと。御佩刀收めさせ罷り立て經景。 鎮まり候へ少人達と館に御供ありければ。 光成の使者經景の小腕取つて引出す。 逆櫓の遺恨止つて今 魂に入り代り 身は空船の梶原が心と。なるこそ 三重 あさましき フシ 寶治二年 地 十一月霙まじりの玉霰。 雪の下の廣小路一ぱいに降る黑羽織。 奴が髭に氷

柱ゐて、奥歯にかじる唐辛。赤熊の馬標御馬北風に嘶かせ。打つて出でたる大名こそ最明寺殿の御舍弟。式部の冠者時貞公と勢猛なる供先を。いかつらしき頬被若黨二三輩引具し。押割つて通らんとする徒士の者ども引つ捕へ。詞こりや盲目め冠者殿を見知らぬかと。頬被ひつたくれば佐野の源藤太經景なり。馬上より聲をかけヤア經景か。時貞直に尋ぬべし。つつと是へと呼び付けはつたと睨み。御分は身代不相應に。輕々しく忍ぶ體は訝し。兄最明寺坐禪に籠り在する内は。此の冠者が執權なるに。供先割るは緩怠者。申し分によつて急度過怠にいひつけんと。地返答惡しくば鐙の鼻にてフシ蹴殺し退けんず面色なり。地經景地に跪き御咎め至極仕る。詞さりながら聊か慮外に候はず。直に注進申し上ぐる義候故。人目を忍ぶ右の仕合眞平御免蒙るべし。扨御注進の趣は。先づ某が兄佐野の兵衞政常。先年人知れず闇討に討たれ。其の子源左衞門常世は阿呆拂ひに仰付けられ。兄政常が遺蹟佐野の庄此の經景に賜つて。奉公の忠を勵み候。然るに紅が谷常世が邸某望み申せども。御用の場所とて吝惜あり。此の度故もなき者にさへ。いやが上に屋敷地を賜はり。多年懇望の我等には換地の御沙汰にも及はず。常世が屋敷を若君のお花圃になし拙者は鼻をあくばかり。國を保つ者は。一歩の地も功ある武士に與へ弓馬の用に立ててこそ。なんぞや若君のまだ乳のまう飯食はうを。義經の再誕と鳩のかひの僧正に誑され。鎌倉の御家督とて大分の地を花圃に費し。若しもの時に草木の花が槍一本の役には立たず。當家に於て天下の執權には誰あらう冠者公と諸人擧つて申す所。殿の嗣がせ給はんに誰がぐつとも申すべき。さればこそ天女丸。殿をけぶたく思はれ。最明寺殿坐禪の内に攻滅さん催にて。則ち物讀の師匠宇都宮朝平。安藤左衞門光成以下を語らひ合戰の用事急に候。かたく〳〵御油斷あるべからずと眞逆樣にぞ讒しける。冠者は彼に物が憑いて言はすとは夢にも知らず馬より飛んで下り。チヽ神妙の注進大慶々々。傍からさへ齒がゆきに我に油斷あるものか。空らぬ證據を見せ申さんと首にかけたる錦の袋を取出し。是ぞ辨財天先祖に授け給はりし。三つ鱗の家の旗先づ此の主になるからは北條家の大將なり。地御分は急ぎ此の旗を伊豆の三崎へ守り奉り。宇賀の社に籠め置き湊の船場に關を据ゑ。渡海の船を止むべし追付け跡より加番として。佐々木の十藏廣綱を遣さん。詞我鎌倉を持ち堅め安藤宇都宮に閉門させ。天女丸を押籠め置かん兄きの坊主が咎めなば。靜謐の世を騷がする謀叛人と訴ふべし。我が願叶ひなば屋敷などは輕い事。一箇國は極つて其の外望み次第。地辨財天も照覽あれフシ虚言なしとぞ語りける。地經景思ふ圖に讒言しこれ殿。とてもの事に。其の兄きの坊樣ぐるめにしてやらうとは思さぬか。ヤレ

それを高うは言はぬ事心にばかり持つて居よ。向後御邊は一方の大將と頼むからは。威勢をつくる褒美として一家となつて北條の。家の定紋讓るぞと鰭をつけたる鱗形。北條殿や庖丁殿にかゝらん末こそ 三重〽危ふけれ フシ さる程に。 地 式部の冠者時貞は天女丸時宗を。無體に抑へ謀叛人と號し松が岡の彌勒堂に取つて押籠め重代の赤旗を伊豆の三崎に隱し置き。山手には二重三重の構をふり。海手に數箇所の物見の番。龍禪が崎の船場には佐野の源藤太經景。佐々木の十藏廣綱役所を構へ。干潟遠く逆茂木引き渡海の船さへ停止あれば。漁村の賤も鰹釣り鯛釣り兼ねて網の手を。餘所にみるめをかづきする海人もさかてを打休み。波の遊魚も飛鳥も オクリ 通ふ〽方なき要害なり。フシ 折しも夜更け。波靜かに番所の篝濕り行けば。天女丸はやう〳〵に フシ 圍を免れ忍び出で。宇都宮只一人語らひ湊に紛れ着き給ひ。 詞 サア時分はよきぞ朝平。兩番所も靜まつて海上は退潮なり。 地 命限りに渡り越し向へさへ着きたらば。番の奴ばら切散らし旗を奪ひ還すべし。よし仕損じて死するとも取返さでは生がひなし。死ぬるに極めていざ來いと。飛び入らんとし給ふを宇都宮抱き止め。 詞 如何に退潮なればとて思召しても御覺ぜよ。三里に餘りし海の面。徒歩渡りの人間業に叶ふべきやう候はず。 地 潮に溺れし御死骸を雜人ばらに引き捜され。恥辱といひ譏者に利潤つくといひ。かたゞ〳〵粗忽の御振舞御思案の入る所と。制すれば齒噛をなし。 詞 エヽ口惜しし是しきの事を治め兼ね。父最明寺殿へ言上し坐禪の妨げ御大願を破らんは。 地 後代迄の誹の種親に離れし我ならば。冥途へ問ひにやらるゝかと 嘲 は歴然たり。エヽ鱗もがな鰭もがなと平沙に兩足踏み込んで。拳を握りはらはらと フシ 無念 涙はせきあへず。 ハルフシ 友惑はせる小夜千鳥　驚く方の人足や年の頃配十八九。初夜の月さへはや西東 オクリ さまよふ。ふりにて 地 人々をちらと見付け足早に逃げんとす。宇都宮走り寄りむずと捉へ こりや女め。 詞 必定此の番所へ呼ばれし傾城ぢやな。我々こゝに在る體を番の者に知らするふりと見えた。是から直に己れが宿へ歸ればよし。番所などへ入るならば海へ切つてつつぱめん。サアどうぢやと嚇しける。アヽつがもない。何のそんな妾等であろ。此の浦のかづきの海人。此の頃御法度きびしう若布一本海松一株。取る事ならねば朝夕の迷惑さ。夜は番衆の隙間もとそつと見に來たばつかり。 地 はんに男に手を取られた一期の始にあた胴慾な。跡がひりひりひり〳〵する。あの若衆様やつわりと締直して貰ひ度いと。浦の海人さへ當代は フシ 只は通さぬならはしなり。 地 朝平是は屈竟彼奴を賺して。海の淺瀬を問はんと思ひ。 詞 ヲヽ許せ〳〵知らなんだ。そちに問ひ度い事がある。返禮には鐚遣らう隙はとるまい。 地 サアあの淺へ一寸來いと手を取ればエイ。

取つて濱へ行くやうな者ぢや 地こざんせんとてひんとする。詞若君見兼ねてこれこれ海人人。吾々は念願あつて向ふの三崎へ忍ぶ者。此の本望遂すれば海人のかづきも漁船も前の通りに自由なり。此の灘を越すやうあらばどうぞ指南はなるまいか。地わりない事よと宣へば推量やしたりけん。何が扨お尋ねといひ世上のため包まんやうはなけれども、昔よりこの入海徒歩渡りは沙汰にも聞かず。さりながら如何なる千尋の大海にも、潮頭潮別れ上り潮落潮、片潮干潮蠑螈潮拔潮湧潮なんどと申し、潮合を見てかづきの海人の龍宮城へも入るなれば。叶はぬ事とも申し難しあれ〳〵月影の。二つに割れて一筋に尾花の靡く如くなる。波の別れのそここそは海人の通ひの潮路なれと。指さしてぞ教へける。地若君も朝平も今は案内ござんなれと。裾かゝげてざんぶ〳〵と入り給ふ。なう〳〵たとへ潮路覺えても海人ならぬ身であぶない事。怪我遊ばすな

先づ跡へと言へども耳に聞き入れず。三段許りは足も立つ。次第〳〵に波は高し底深し。流石の朝平力なく。先づ〳〵跡へと御手を取りヲクリ元の〽磯邊に打上り。地お腰の物に水入らぬか。やれ先づお足を拭うて進ぜてくれ。賴む〳〵と捲り手にフシ袴を絞るばかりなり。詞それ〳〵人の言ふ事聞分なう情の醜いはお身の損。地若衆樣のお足拭ふにも手拭はなし私が。鹽燒衣お慮外と上がひ下がひ揉みくさにして。足の甲から足首迄ムヽ〳〵柔かなお肌やな。こゝはお膝こゝは太股内股の。此のもゝよならわしや小町。お前は四位の少將でフシ車の榻にと抱き付く。地若君飛び退き慮外者めと。摑に手をかけ給ひしを朝平暫しと止め参らせ。詞これ女彼方は鎌倉殿の若君。今度の騒がくれなければ知つつらん。汝が力に海を越え御旗を奪ひ參らせなば。財寶の願ひはいふに及ばず。たとへ一夜のお情でも相違あらじと申さるゝ。地海人嬉しげに打笑みて、

さこそは見付け参らせたり誠に賤しき海人の子の。御情とは憚あり鱗形の御紋付の、お肌着一重下されば世の思ひ出に肌につけ。千萬里の荒海なりとも波を潜り水を分くるも海人の業。奪ひ還して奉らんと申せば若君宇都宮。それ易い事是なりともと平紋の唐衣に。唐綾したる襠裏ひらりと脱いで賜びければ。海人は戴き打被き岩頭に馳け上り地自らは小袋坂金龍水の池のほとりに。年經て棲むものなるが江の島の叔母君より。賜つたる肌の産着を惡人に奪はれ。五體の力盡き果てしに今北條家の生き鱗。九萬九千の飾となつて神變。神通自在を得刹那が間に彼の旗を、奪ひ取つて参らせんと逆捲く波に飛び入つて。分け行く潮八重百重百の凝ある顏容に。尾は二十尋の金の鱗月に映じて泳ぎ行く。辨財天の眷屬の旗を守りの神體と思ひ。白波地走りしは帆かけし船の三重〽如くなり地波の音に目を覺し番所騒げば惡かりなんと。朝平若君身を潜め、

磯山蔭に忍ばるる。地源藤太經景木戸を開かせつつと出で。詞風も無きに波の音千鳥鷗の亂るゝは。天女丸が方より水練の忍びを入れたるに疑なし。地すは〳〵沖に物こそ見ゆれ仙術魔法の者なりとも。我が馬上に及ばんやと元より武勇第一の。梶原が精靈入替りたる其の驗。弓箭の本意此の時とフシやがて物の具堅めける。地爰に佐々木廣綱は相番ながら若君に。兼て心を寄せし故聞かぬ顏にて控へしが。經景が打つ立つ由共に防ぐ風情にて。しやつ妨げんと馬鎧花やかにこそ出立つたれ。經景其の夜の裝束は木蘭地の直垂白銀の摺付小札。白絲にて菱綴したる斑縅の鎧を着黒保呂の矢の廿四指いたる箙かき負ひ。本滋籐の弓持つて。雨夜といつし宿月毛の聞ゆる名馬に乘つたりけり。下コハリ佐々木が出立つ物の具は紅裙濃に所々。四つ目結。摺つたる直垂卯の花を黃にかへして。袖標付けたる鎧筋切文に塗箆の矢。吹寄せ籐の弓持つて。長月と

いふ地黑。栗毛の馬にぞフシ乘つたりける。地二人互に劣らじと引つかけ〳〵打つたりしが。經景は佐々木に一段許進んで海へさつとぞ打入つたる。廣綱先を越されじと聲をかけて經景殿。詞冬海は潮早し腹帶がのびて見えさふぞ。深みになつて鞍かやさん締め給はぬかと呼ばはれば。經景さもとや思ひけん手綱を鞍のゆがみに捨て。地左右の鐙を踏みすかし弓弦を咥へ。腹帶を解いて引締め。〳〵締むる間に廣綱ずつと乘拔けて。佐々木が家の骨法御免あれといふ儘に。ざんぶと打入り半町ばかり先に進んで泳がせける。詞嫉たい佐々木殿功名せうとて不覺ばし給ふな。此の頃海人のかづきも絕え海松茂つて見え候。馬の足纒はせて過あらん笑止さよ。心得られよと誑ればヲヽ親にて候高綱が。傳へし習ひあんなると。地太刀を拔いて水底を。切拂ひ〳〵三頭にどうど乘り下り。手綱くり上げ聲をかけ馬に力を添へたりけり。地冬も半の浦

吹く風磯打つ波を卷上げて水や空空かき曇りフシ天も凍りて霰散り。コハリ雲の足さへ早潮に。底の岩角巍々として海上遙に恢々たり。是は一騎當千の高綱が嫡々なり。彼は文武二道の武者梶原が魂魄なり。いづれに勝劣あらばここそ廣綱進めば經景つゞき。經景進めば廣綱續き轡をひつ揃へ。押竝べて渡すとすれば切付太腹どう〳〵。波鞍壺に打越して寬撓がたに突流され。半月に乘る所もあり馬の草分鞅づくし。さらさら〳〵〳〵さつと乘分け乘割つて。一文字に行く所もあり高き波には一鞭くれて。ゑい〳〵聲に躍り越え低き波にはしつとと當てて。手綱をくつて乘下ろし渦卷く波の右巴。左巴にくる〳〵〳〵くるり〳〵の輪乘りに潮を卷き解し。卷き戾し地卷き崩しハツミ蹄に。蹴立つる潮煙。隔ての霧と立塞がつて山さへ見えぬ海の面。星を目當の兩鐙息もつがせず踏みもためず。負けじ劣らじ我先にとオクリをめき〳〵叫んでフシ渡したり。

地經景馬や劣りげん馬上にや疎かりけん。二段ばかり乘後れ淺みに駒をかけ寄せて。漂ふ浮木に手をかけて一息ほつと吐いたれば。佐々木は沖の流れ洲に駒を控へて鞍かさに突つ立ち上り。詞惡う候經景殿叔父盛綱が藤戸の一流。海をばかうぞ渡すものお先へ參る御免あれと。地手綱かいくり乘出す陸には兩家の郎黨組子。波打際に下り浸り　固唾を呑んで控へしは　フシ前代未聞といつつべし。地かゝる所に式部の冠者時貞。百騎ばかり引率し喚いて來り。詞やあ〳〵兩人天女丸こそ宇都宮を語らひ何處ともなく落失せたり。方々が勢は如何なる故ぞと呼ばはつたり。經景馬上ながら。扨は只今此の海を泳ぎ越す者候故。兩人かくの如く追つかけ候。疑ひもなく天女丸ほつつめ提げ參らんと。駒の頭を立直せばやれ待て待て年にも足らぬ小丁稚。彼奴等が分にて泳ぎ越す事思ひも寄らず。それは必定水練を入れて。其の身は此の磯山に隱れ居るに極

つたり。我々山を狩出し濱端へ追出さん。兩人海に下立つて射取れや射取れと下知すれは。地承ると經景弓と矢取つて打番ふ。佐々木もあつと答へながら過つふりにて冠者めが。眞中を一筋と思ひ込うでぞ控へける。時を移すな狩出せと。打物拔連れ松明振り谷よ峯よと　三重〽かり立つる　フシ朝平今は。地是迄なり濱の手へ落ち給へと。暫し支ゆる其の隙に若君磯邊に走りつき。後を見れば時貞片手矢はげて追つかくる。今は詮方あら磯に沈まば沈めとざんぶと入り。渡るともなく行くともなく　フシ陸地に立てる如くにて。地四五町沖に浮み出で足下を見れば不思議やな。海人に與へし上の衣波の上に漂漾して。若君を救ひ立てたるは　フシさながら筏の如くなり。地沖には經景鎌を磨き寄せば射留めん其の勢。陸には人數鋒を揃へ返さば討たんとのゝめきしは。火坑に落ちし罪人の取り付く葛を黒白の。鼠きしつて惡龍舌を振るといふ。苦海の譬に異ら

ず　フシ遁れつべうはなりけり。然つし所に二階堂入道。旅裝束にて息をばかりに馳付け。詞暫く〳〵事の仔細は存ぜねども御使私の儀にあらず干戈を止め聞き給へ。今度某大殿の仰を蒙り。奥州高館に下り判官殿の御墓を祭り淸め。同じく賴朝より御勘當の御教書を取り歸り。仰に任せ只今燒き棄て申すからは。御勘當の罪消えて義經の靈魂妄執晴れ。若君の御身の上武運の御祈禱たるべしと。地御教書の封を切り下人に持たせし淸火を取つて。打ちかくれば燄は炎々と。天に通じて名將の俊邁精智悦び給ふ其のしるし。白銀の翼ある白鳩虛空に舞ひ下り。天女丸の懷にオクリ納まり〽入るぞ不思議なる。地判官の虛名晴れければ讒者の勢力も弱り。梶原が亡魂　フシ冥々として失せてげり。地經景心茫然と夢か現か空蟬の。もぬけの殼の如くにて手綱取る手も覺えなく。平顚に抱き付き馬も足も立て兼ねて。波に漂ひ浮きぬ沈みぬ泡沫の安房の浦路に

流れ行く。冠者苛つてヤア物々し。詞たとへ生れぬ前生は判官にもせよ辨慶にもせよ。現在にては我が甥なり叔父に向つて逆心構へ。國を損じ家を破る悪黨征伐なんの憚りあらん。身を浮べ熊手にかけ搦め取れと驅廻り。地どつと蘆邊に下り浸たる兵衛無雙の義經の。靈氣を感せし天女丸忽ち自然の妙を得て。波も潮も事ともせす巖の險阻にひらりと飛び。磯の松が枝躍り越え大勢に馳け向ひ。天狗に授かる飛行の術鬼一が傳へし一卷の。太刀風騷ぐ虎の卷獅子奮迅虎亂入。前を拂へば後にあり地を薙ぐれば霞に入り。陽炎稻妻水の月宛然飛鳥の三重〽如くなり フシさしもの大勢地一人に斬り立てられ冠者も數箇所の痛手を負ひ。命ばかりを遁れんと水練は心得たり。海へどうど飛び入つて。伊豆の三崎を志し フシ拔手を切つて泳ぎける。地沖の浮洲に控へたる。佐々木の廣綱。向ふさまに駒を乘り入れ。詞天道を守る廣綱は天女丸の味方ぞや。尋常に腹を切り給へさなくば佐々木が矢先にかけて。後世弔はんと言ひければ冠者大音上げて泣き出し。それは餘り慘い仕樣。如何に水を得たればとて三里五里は泳がれず。今の間に鱶の餌食となる我が身。少しの命を助けてたも。佐々木殿廣綱殿と立泳して拜みける。地佐々木返答にも及ばす中指取つてからりと番ひ。ひやうど切つて放つ矢に肝の束を射通され。眞逆樣に跳返し底の水屑と沈むを見て。殘る軍兵うら崩れしてフシ皆散々に逃げ散りける。地時に海上漣立つて月清々たる波間より。紫金色の耳ある蛇潮を卷き來る其の音は。和琴の調の如くにて。磯邊の松に攀上り〳〵。梢を啣へ尾を垂れて。鱗の衣を地はら〳〵と三重拂ひ殘すや〽三枚は家の紋付旗の手の。悠々とかゝらせ給ひけり若君三拜恭敬して。戴き納め歸るさの。道の用心佐々木は馬上に先を打てば。跡を抑へて宇都宮君判官の再誕なれば。二階堂は辨慶と敵の捨てたる槍長刀。突棒刺股熊手ひつとり打著け。夜はしら〳〵と七つ道具明け六つ。五つ五代の北條家。四つ世の中三つ鱗尾鰭を。つけてぞ語りける。

最明寺殿道行　（下之巻）

次第〽行方定めぬ道なれば。行方定めぬ道なれば。來し方もいづくならまし。詞是は一所不住の沙門にて候。我此の程は信濃の國に候ひしが。餘りに雪深くなり候程に。先づ此の度は鎌倉に上り。坐禪に籠り春になり修行に出でばやと思ひ候。地蝶の翅の白粉を草にこぼして梢には。鶴の霜毛をぬぎかくる。フシ雪は花より花多き。木曾の御坂の。谷風は。吹けども袖に。フシ寒からで。名も嫉ましき風越の。峯の吹雪ぞ身には沁む。スエテ身は墨染の墨衣。さながら雪の一筆鴉。尾羽うちかれし修行の旅。佛恩報謝の爲にもあらず。自證菩提の道にもあらず フシ浮世の。民におはふかな。覆へど漏るゝ竹の笠。似合はぬ身にも引締め

てしやんと召したる御有樣。有難しとも フシたのみあり、地幾重越しても信濃路は。まだ谷峯の大井山人里遠く離れ坂。スエテ筑摩の川の渡呼ぶ フシ聲も。嵐に埋れて。笠で招けば笠の端に 小オクリ 霰。たばしる氷柱から／＼。フシ輕井澤。見上ぐれば。朝ぼらけ。淺間の嶽に立つ煙。その一筋を樣々に。霞に詠じ雲に見て。歌人は思ひを述ぶるとかや、我は煙の立居にも。民の竈の賑を天に祈りの千早振る。雪を袂に幣とれば。雪は五穀の精たりと。フシ唐人も、豐年を祝ふ兆のあれ／＼／＼地下も在所も。にぎ／＼ふく／＼福島の。賤の妹背の妹は籾磨る。兄は米搗く麥搗く、餅つく餅つく望月の。里と詠むまでえいとん／＼サアとん／＼。サアとん／＼と杵の音。フシ碓氷峠にさしかゝり。上れば下る谷川の凍らぬ程は聲立てて。春も近しと岩間水ハヅミ木々の木の葉を。吹き。溜めて。今日山姫の衣配り。物哀よしと色々の、錦裁つなる板鼻の オクリ

宿を。麓の坂本や諏訪の湖なほ冴えて。鴨や鷗や鴛鴦の番も雁金も。下り居る程はおしなべて。フシ皆白鷺と。深山颪が。さら／＼。さつと吹いてはばつと群立ちはらふ。翼に。おのがとり／＼色品を。分けて見せたる雪の空。殘んの月は浮めども。兎はなづむ。厚氷驛路の馬ぞ並走る、走る馬にも鞭鐙。武藏も近き秩父山。八王子の山賤も。外山の爪木樵りつくし雪を燻らす。炭竈や、深谷の宿り、ふかく／＼と冬籠せし。一枝も。春待ち顔に初花の咲きかけんとや一二のかけ。熊谷村に盃の佐野の蓋さかなにて。强ひ止めんと詠み置きし古歌を。吟じて凌げども。スエテ雪の寒さのさのみやはフシ佐野の、渡りに着き給ふ。地宿もがなと夕顔のそれにはあらぬ小家の軒。椽まばらに傾きし雪折竹の上蔀戸や。主は貧女と思しきが年も二五の玉箒、庇の雪をかき落し、落せば襟に袖口に、首筋元にひや／＼／＼ア丶。冷たやと手を吹くも

フシ下司ぢかうして猶慢し。地最明寺殿簷に佇み申し／＼お上﨟、詞越後より下總の檀林へ通る所化の僧。今日の大雪先へも跡へも參り難し。簀子の端に只一夜賴みまするとありければ。ハア、お易い事ながら。主の留守に私が泊めまするも如何なり。地脇を御賴みなされませ フシおいとし樣やと愛敬ある。詞ムヽウ主のお留守とは扨は此方は御内衆か。いえ／＼主は私が姉聟。此の頃他國致されて主といふは姉樣。ヲヽ然れば其方も主同然。地江口の君がかりの宿に心とむなと申したは。それは色ある優法師炭の折か木の端かといふやうな此の坊主。色事の用心ならば フシ氣遣ひ。あるなと宣へば。地娘もにつと打笑ひ尤も色といふものは、眉目容姿とはいひながらどうやら時の機會では。鼻缺でも兎唇でも フシ油斷がならぬと走り込む。地天下を裁斷く御身にも。此の返答はゆきくれてオクリ佇み〳〵給ふぞ殊勝なる フシ世の中は。なにか常世が留

守住居。妻は手足も土大根蕪恵具菜も摘み持ちて。歸る山路の白妙にァ降つたる雪かな。如何に世にある人のさぞ面白う見給ふらん。文彌／＼夫雪は鵝毛に似て飛んで散亂し。地人は鶴氅を着て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も元見し雪に變らねども。我は鶴氅を着て立つて徘徊すべき。袂も朽ちて袖せばき。フシ細布衣。陸奥の。今日の寒さを如何にせん。スヱテあら面白からずの雪の日やな。最明寺殿これこそは以前の女が姉ならめと。詞なう／＼主のお方にて候か。御覽の如く旅僧の身のお宿の御無心申せしかど。主のお留守とありし故待設けたる御歸り。地前後を忘する大雪今宵ばかりの御惠。頼み入るとぞ仰せける。げに／＼易き御事ながら見苦しき賤が伏屋。何とてお宿と申すべき。詞いや／＼旅といひ三界の。家を出でたる世捨人草の莚も我が爲の。地玉の臺と有難し是非に一夜と宣へども。あれ御覽ぜ我々夫婦姉妹さへ。住ひかねたる體なれば止め申さんやうもなし。詞是より十八町彼方に。山本の里と申して好き泊の候へば。地暮れぬ間に一足も。急がせ給へと言ひ捨てて フシ庵の内へぞ入りにける。地あら曲もなやよしなき人を待ちつるよ。浮世の人の情なきも。我が誤と顧みてオクリ歩み／＼つかるゝばかりなり フシ妹の玉章。地涙ぐみいたはしや御出家樣。最前お宿とありしかども姉樣の心如何と存じ。外に立たせ置きませし。斯く零落しも前世の因果せめて出家に値遇せば。常世樣の武運も開け後世の爲にも惡い事。なされたやうにはあるまじ。泊めてさへ進ぜませば別に馳走は入るまいと。わしや思ひますと言ひければ。詞チヽ優しや能うぞ氣が付いたて地是程の大雪に遠くはよもやと表に出で。詞なう／＼旅人お宿參らせうなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬよの。文彌地いたはしの有樣やな。もと降る雪に道を忘れ。今降る雪に行方を失ひ。一つ所に佇みて袖なる雪を打拂ひ／＼し給ふ景色。古歌の心に似たるぞや フシ駒とめて。袖打拂ふ蔭もなし。佐野のわたりの雪の夕暮。斯樣に詠みしは大和路や三輪が崎なる佐野のわたり。是は東路の佐野の渡の雪の暮に。迷ひ疲れ給はんより見苦しく候へど。一夜は泊り給へやなう旅の僧スヱテ旅のお僧と招かれて。地それは嬉しき心ざし假の浮世に假の宿。假初ながら値遇の緣一樹の蔭の宿も。此の世ならぬ契なり。それは雨の木蔭これは雪の軒ふりて。憂寢ながらの草枕。フシ是へとこそは請じけれ。詞いやこれ玉章。折角お宿申しても供養致さん物もなし。お淋しからうがどうせうぞ。地姉樣幸ひ粟の飯さもしけれどもお慰みと。櫃取出せばァヽそんな物なんのいの。折節惡う九獻もなしお菓子は無いかと夕霜の。フシ置かぬ棚をや搜すらん。詞これ御兩人旅にしあれば椎の葉に盛るとかや。地粟の飯とは日本一の醍醐味。御馳走にあづかり度しと宣へば。やれやれ

それはお嬉しやせめては何も綺麗にと。萩の折箸土器も フシ由ありげなるもてなしなり。地恥かしやお僧樣此の粟と申すもの。古へ我が夫世にありし時は。歌に詠み詩に作りたるをこそ承れ。今は此の粟を以て命をつぎ候ぞや。下歌げにや盧生が見し榮華の夢は五十年。其の邯鄲の假枕。一睡の夢の覺めしも粟飯かしぐ程ぞかし。あはれやげに我々も。打ちも寢て夢にも昔を見るならばスヱテ慰む事もあるべきに。地なう御覽候へ住みうかれたる故鄕の。松風さむき夜もすがら寢られねば夢も見ず。なに思ひ出のあるべきと フシそゞろに。涙を浮べける。地旅僧もあはれに催され フシ墨の袂を絞らる〻。地更け行くま〻に夜寒さ增り冷えわたる。何をか焚火にたいてあて參らせんや。思ひ付いたり我が夫世にありし時鉢の木に好き。數多の木を集め持たれ候ひしを。斯樣のさまに衰へ言はれぬ貧の花すきと。皆人々に參らせて今はやうやう三本殘つて。

詞あの雪を持ちたる梅櫻松。わきて夫の祕藏なれども。地今宵の款待に是を焚火と立たんとすれば暫く〳〵。詞是は思ひも寄らぬ事。御志は有難けれども重ねて世に出で給ひての。御慰み無用になして給はれとよ。下歌いやとても此の身は埋木の。いつの盛りにいつの花いつの時をか待つ可きぞ。只徒らなる鉢の木を。御身の爲に焚くならば是ぞ採果汲水の。フシ法の薪と思召せ。地しかも誠に雪降りて。仙人に仕へし雪山の薪。かくこそあらめ我も身を捨て。人のための鉢の木伐るともよしや惜しからじと。雪打拂ひて見れば面白や如何にせん。先づ冬木より咲き初むる窓の梅の北面は。雪封じて寒きにも異木より先づ先立てば。梅を伐りや初むべき フシ見じといふ人こそ。うけれ山里の。折りかけ垣の梅をだに。情なしと惜みしに今更薪になすべしと。兼て思ひきや。上櫻を見れば春ごとに花少し遲ければ。此の木やわぶると地心を盡し育てしに。今は我のみ侘びて住む家櫻伐りくべて。フシ緋櫻になすぞ悲しき。地扨松はさしもげに枝を矯め葉をすかして。か〻りあれと植ゑ置きし其のかひ今は嵐吹く。上松は元より煙にて。薪となるも理や伐りくべて今ぞ御垣守。衞士の焚く火はお爲なり フシよく寄りて。あたり給へや。地等閑ならぬ御親切寒さを忘れ。肌は彌生如月の暖氣にあたる梅櫻。花見る心地候ぞや。詞扨しも如何なる人の御行末。男主の假名字は何とか申し候ぞ。自然の時のお爲にも。何か苦しう候べき聞かまほししと仰せける。アヽ人がましやな古へを名乘るもさすが面伏せ。さり乍ら此の上は何をかさのみ包むべき。地これこそ佐野の源左衞門常世がなれる果。あはれと御覽候へや扨も過ぎにし仁治二年。鎌倉は當最明寺殿の御兄君。經時公の御裁斷。詞夫の常世は將軍の御供して在京の其の跡の事。常世が父我が爲には舅。佐野の兵衞正常故もなく人知れず。闇打に討たれ

給ひしを聞くと等しく我が夫は。取つて返し下向の時一族の讒によつて。鎌倉へも入れられず道より直に御勘氣とて。所領莊園召上げられ常世親子が累代の知行。一所も殘らず叔父源藤太經景に横領せられ。地生きがひもなき此の有様。親の敵も大方は推量に紛ひなけれども。實否を糺し討たんための折々他國に身を俏し。跡降りかくす雪の庵。雪は春にも消え殘る夕も知らぬ武夫の。身の上憐み給へやと フシさめ〴〵。とこそ泣き居たる。詞げに〳〵それは聞き及びたる物語。何とて鎌倉に上り其の御沙汰は候はぬぞ。地さればとよ夫婦もさは存ずれども。運の盡きとて最明寺殿法華堂の坐禪に籠らせ給ひ。萬機をいろはせ給はねば天照神の岩戸に籠り。月日の光かくれし如く スエテ理非の判れんやうもなし。詞さりながら落ちぶれては候へども。取り傳へたる梓弓やたけ心は張りつめて。あれ御覧候へ是に武具一領長刀一枝。又あれに馬をも一匹繋いで持つて候。常世つね〴〵申せしは。只今にてもあれ鎌倉に御大事ありと聞かば。此の具足取つて投懸け錆たりとも長刀擔い込み。瘦せたりともあの馬に懸鞍置いてふはと乘り。女ばらに口取らせ一番に馳せ參じ。御着到に列つて扨合戰始らば。敵何萬騎ありとても一番に割つて入り。手に立つ軍兵寄り合ひ打ち合ひ。分捕高名譽をあらはし。一方を攻破り。君の御馬の眞先かけ。思ふ敵の大將と。むんずと組んで刺違へ死なんず身の。地エヽ口惜しや此の儘ならば徒らに。飢寒に迫り死なん命。なんぼう無念の事ざふぞと。姉妹がつばと伏し沈み フシ泣きくどく。こそ道理なれ。地旅僧も至極の理に フシ衣の。袖をぞ絞らるる。地よしや浮世の浮き沈み斷くては果てじ只頼め。我世の中にあらん限りはの誓を願ひ給へやと。言葉を殘し殘る夜も明方近く隙白く。雪も小止めばさらばとて暇申すと出で給ふ。姉妹假の宿ながら是も御縁と思召し。春お下りの折柄は立寄り夫にも逢ひ給へ。命あらば我々もとさらば〳〵の御名殘。自然鎌倉にお上りあらばお尋ねあれかひ〴〵しくはなけれども公方の緣になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなと。言ひ捨てゝし出舟の共に。名殘や 三重 惜むらん。フシ既に今年も臘月下旬最明寺殿の御臺所。松の御寮の仰として儀に稀有の御觸あり。晝夜の早打暇もなく フシ近國殘らず觸れにけり。詞なう忙がしや〳〵。只今我等當國へ下る事餘の儀にあらず。扨も最明寺殿天下の政道を考へなされんため。坐禪觀法の方丈に閉籠り近習外樣の侍は申すに及ばず。御臺若君へも御對面なく禁足なされ御座候。此の隙間を幸ひと思はれけん。御舍弟式部の冠者佐野の源藤太を語らひ。謀叛を起し遂に其の身も滅び源藤太は落失せやう〳〵事治つて候。斯様の騒ぎの出來するも最明寺殿館に御座なき故。國に執權なきは人に魂なく家に柱なく饂飩に汁なく鮨に酢の無きが如

しとあつて。忝くも御臺所坐禪をお出でなさるゝ迄は最明寺殿御名代との御事にて。女中の御身に執權職の裝束を召され。御側には諸大名の奥方いづれも男の出立にて。非番當番の隙もなく政道取り行ひ給ふ事。古への尼將軍に相も變らず候。さは申しながら人の口には戸が立てられず。牝雞が時をつくるか鎌倉殿はととかゝぢやなどと嘲つて。すは大事といふ時に勢が付くか付かぬか物は試しに集めて見よと。坂東八ヶ國の諸侍悉く物具して急ぎ鎌倉へ御參あれ。御付けらるゝ事ありと觸れさせ候が。餘りに諸軍勢遲く候程に。何とて遲なはるぞ催促致せとの御使を。承つて候程に急がばやと存じ候。やあ〳〵何と申すぞそれへ御參りあるは武藏相模の御人數と申すか。先づは早きこと急いで御參り候へ。あれへ見えたるは上總下總の御人數ぢや　やれ〳〵壯麗なる出立かな。遠いとの御事お急ぎ候へ。いや。是へ見えたるが常陸の國の御人數か。道理で眞先な武者が。黄楊の棒を提げたは常陸坊といふ心か。一段と華やかな出立何れをいづれと申されぬ。此の國々へは最早參るに及ばぬ。足を助かつたヤア。未だ上野下野の御人數がお見えない。先〳〵上野へ參らう。何といふ是へ御出であるが上野の御人數ぢや。やれ〳〵嬉しや參るに及ばぬ。今迄の出立に劣らぬ艶しい事かな。只一刻も御急ぎ候へ。最早悉く御參の體我等は先へ罷り歸り。各鎌倉へ御着きある由申し上げうと存ずる。皆々聞かれ候へ關東八州の諸軍勢。是迄御着き候ぞ其の分心得候へ候へと。地ふれて通りし勢はゆゝしくもまた　三重へ　はなゝゝし。

女　勢　揃　へ

フシ　昔へ晉の。地　朱序が母千餘人の女武者を領して。襄陽に城を築き賊敵を防ぎ。婦人城と名付けしは上代異朝の賢婦ぞかし。鎌倉の御臺所先般松下禪尼の風を慕ひ。自ら執權の與奪ごと烏帽子際氣高く。水干の衣紋かき繕ひ美精好の長絹。黄金造の御佩刀武目所の上段に。悠々と坐し給へば左右は白齒の御侍女。島田ほどいて若衆髷廊下づたひの長袴。花を竝べし如くにて御太刀の役贔屓掛。作法正しき廣緒諸大名の御前がた。いづれも男の出立にて。めん〳〵殿御の役々の　オクリ　座なみへ　亂さず伺候ある。第一の座上には都六波羅陸奥守。繁時の北の方お蓮の前。連理の若松若竹に比翼の鳳凰唐草の。刺繡したる薄直垂萠黄褐濃の袴腰。横幅ひろく結ばれしは此の月帶の御祝儀と。言の葉もじさつゝましさ。フシ　袖かき合せ着座ある。次は秋田の城之介義景の御簾中。おりう御前は成人の　オクリ　子の親へ　なれど何某の中將殿の季娘。烏帽子なれたる眉墨に戀を。染め込む狩衣の。つゆ長々と　フシ　結び下げ。裏紫の。藤袴。男じみたる指足ら　フシ　爪先そつてぞ見えにける。是も同じ風折に蒔繪の飾太刀佩いたるは。足利左馬頭の御内室お吉の君。此の春嫁入つて

人中を信夫文字摺信夫布。折目正しく着こなせし素袍袴ののりだちも。やは〳〵とせし挨拶の。いづれも是はお早うと。物靜かにぞ伺候ある。次は佐々木隱岐の入道の息女お百の姫。目結の直垂五色の絲にて菊綴し。嫁入ざかりの花づくし袖の重ねに匂はせて フシ大人くろしき。懸烏帽子。行儀正しき 地割膝に袴の襠の高ければ。さぞ紅の下紐の フシ裾や分れん心憎さよ。同じく續いて四條藏人の奧左近のお方。金紋紗の狩衣薄色の指貫。白銀造の太刀横たへ寺社奉行の座にぞ着かれける。大目付は宿谷の左衛門が女房おつけの前。是も二人の子持筋に鶴龜染めたる素袍袴。打刀さしほらし四邊近所を見廻して目を働かす顏に フシお役はさぞと知られける。地是は名越金吾の後家熊千代が母。おきいといふは年配も礒部の善知鳥安方の。子を後見て身を捨てず髮は切つてもなんのその。我が子の末も君が代も萬歲烏帽子引き込うで。御披露所に着座ある顏もつや〳〵ほや〳〵と。老いて再び若後家や。昔の蝶の吸ひ殘す フシ花の露うくばかりなり。次は山名の。總領娘おらくは今年十八歲。土岐の二郎が妹おふりといふも物語の。年は行かねど恰好の大友太夫のお内儀おさち御前 思ひ〳〵の太刀狩衣。大納戸小納戸進物所御膳番。フシ役所役所にコハリ着座ある。扨其の外お臺所の彌惣が女房。ゐろりの間の加藤が女房おはひおこん。料理人の三太が女房おなべの前。油奉行蠟燭奉行酒奉行の。彌吉兵衛が女房お樽の前おかんの前。茶道坊主の珍齋か妻おちや〳〵の前に至る迄其のしな〴〵の男出立。直垂狩衣布衣素袍。長袴切袴平禮白丁退紅丁袖をつらね裝は 地女護の島とも謂つべし フシ賑ははしとも愚かなり。地中にも佐々木入道が息女今日の着到承り。中門の扉押し開けば東八ヶ國の諸軍勢。召に從ひ參上ある。當國には伊藤の一黨長野淸原曾我山越。河津大場竹の下櫻井岩永土肥岡崎。御崎三浦佐原田原小笠原。コハリ小山平山宇都宮手勢々々を引率し。旗標馬標兜の星を輝かし。中門の廣庭より大名小路の極樂橋。錐を立つべき畾地もなく。人馬充ち滿ち竝み居たり晴れがましくぞ 三重 見えにける。地佐野の源左衛門常世は今度の出陣望む所と。ちぎれ具足に錆刀瘦馬に繩手綱。女房は長刀擔げ馬の口に引つ添うて。物その數にあらざる氣色さぞ笑ふらん笑はば笑へ。所存は誰にか劣るべきと心ばかりは急げども。弱きに弱き柳の絲のよれによれたる瘦馬なれば。打てどもあふれども先へは進まぬ足弱車の。御所の此方に駒を控へて見渡せば。東八ヶ國より集つたる數萬の軍兵是を見て。詞如何なる者ぞ見苦しや。あの態で此の中へ出面は何事と。地一度にどつと笑ふ聲鬨をつくるが如くなり。地此の音奧に聞えしかば御臺所御悅喜あり。自ら女の身にて此の度の勢揃へ。斯樣に從ひ集まる事これ皆殿の御威光目出度き故。若し

も重ねていかなる大事ありとても。まづ此の如く馳來らは卽時に敵を追散らし。鎌倉は千代萬代心安や目出度やな。いで軍兵に一禮して歸さばやと宣ふ所に。裏の門より最明寺殿旅に窶れし御有樣に。地御覽是はと驚き給ひ扨は坐禪を御出でかや。目出度き上の目出度さよと悅び給へば。若君も立出でて フシ御對面こそ賑しけれ。詞我此の度坐禪禁足と僞り。諸は廻國行脚して民の安危を窺ひし。其の隙間を見て貪者あが悪逆。天の譴目前たり。又天女丸が武功末頼もしく。北の方の勢づかひ。彼此以て入道が妻子ぞやと御悅は限りなし。扨此の諸軍勢の中に。横縫の斷れたる腹卷して錆長刀を持ち。瘦せたる馬に女房の口取らせたる武者一騎あるべし。地夫婦共に召連れ來れと御諚あれば。佐々木が息女承りすぐやがて／＼御門に立出づる。地大勢とはいひながら花紅葉と出立つ中。見紛ふべくもあらばこそつか／＼と立寄つて。詞これ／＼上意なるぞ。

男女ともに御前へ罷り出でられよ。常世驚き何と某夫婦御前へ召さるゝとや。あら思ひ寄らずや人違へにても候か。今一度御伺ひあるべうもやとありければ。いや／＼如何にも見苦しき出立の武者一騎。女房に瘦馬牽かせたる者あるべし。召連れ參れとの御諚の上は左樣の者は外になし。はや／＼參られ候べし。地何が扨此の上は。違背申さん樣はなしけに／＼女房。某が敵父讒奏申し上げ。召出されて頭を刎ねられん筋と覺えたり。如何あらんと言ひければテヽよしく／＼それも力なし。地假令夫婦が御前にて生首を討たるゝとも。一度鎌倉殿拜し奉る悅び。一念は潔く親の敵讒人を。三日が内に取殺し此の世の妄執晴らすべし。いざさせ給へと打笑ひ大床指して見渡せば。詞今度の早打に上り集る兵。綺羅星の如く並み居たり。地扨御前には諸侍其外數人並み居つつ。目を引き指を指し笑ひ合へる其の中に。横縫の斷れたる古腹卷に錆長刀。女

房に擔げさせ惡びれたる氣色もなく。參りて御前に畏る 詞やあ／＼あれなるは佐野の源左衛門常世な。いかに女房。是こそいつぞやの大雪に。宿借りし修行者よ見忘れてあるか。其の夜の情忘れ難く召出してありつるわと。地宣へば夫婦の者長刀からりと投捨てて。あつとばかりに頭を下げ フシ感涙袖をぞひたしける 地重ねて御出さるゝは。詞汝が叔父源藏太經景。父政常を討つて横へ。累世の知行を横領したる罪科紛れなく。我女房の國を通りし時彼の者落人となつて隱れしを。房州の探題に申し付け成敗を遂げさせたりと 地御言葉の下よりも鎌倉の雜色首桶持つて。常世が前に差置いたれば常世あまりの有難さ。蓋を取れば源藏太が首なりけり。こは忝き御高恩。冥途の父が悅び。現世の我等が本望いつの世に何をもつて。此の御恩を報ぜんと手を合せ涙を流し。大床に額をつけ フシ仰ぎ居ることそ道理なれ 地なほ／＼仰せ出さるゝ詞には

□近う參れと御膝近く召され。詞いで汝佐野にて女房が申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるとならば。斷れたりとも其の具足取つて投げかけ。錆びたりとも長刀を持ち。痩せたりともあの馬に乗り。一番に馳せ參るべき由申しつる。言葉の末を違へずして參りたるこそ神妙なれ。地先づ先づ沙汰の始めには常世が本領佐野の庄。三十餘郷返し與ふる所なり。詞又何よりも切なりしは大雪降つて寒かりしを。女房が情に秘藏せし鉢の木を伐り。火に焚きてあてたりし志をばいつの世にかは忘るべき。さらば女房に引出物せん。詞いで其の時の鉢の木は梅櫻松にてありしよな。其の返報に加賀に梅田越中に櫻井。上野に松枝合せて三箇の莊。子々孫々に至る迄相違あらざる自筆の狀。安堵に取添へ賜びければ。地常世は是を賜りて。三度頂戴仕りこれ見給へや人々よ。始め笑ひし輩もこれ程の御氣色。さぞ羨しかるらんさて國々の諸軍勢。皆御暇賜り故郷へとてぞ歸りける。詞其の中に常世は。その中に女房は。悦びの眉を開きつゝ。今こそ勇め此の馬に打乗りて。上野や佐野の舟橋とりはなれし本領に安堵して。歸るぞ嬉しかりける〳〵。

右之本令吟覺頭句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也

竹本筑後掾　竹本　博教

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋　山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目　山本九右衛門版

曾根崎心中

付り　觀音廻り

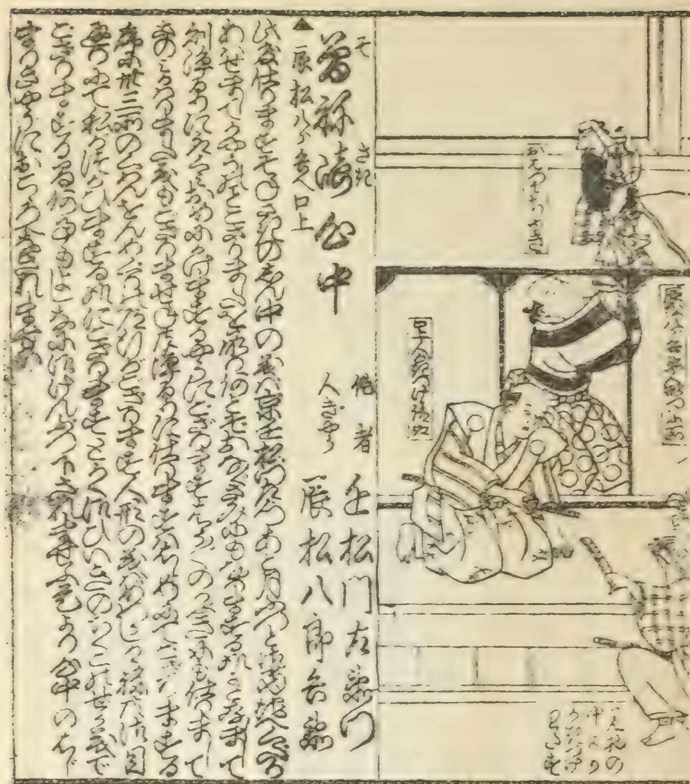
作者　近松門左衛門
をやま　辰松八郎兵衛

實にや安樂世界より。今此の娑婆に示現して。我等が爲の觀世音仰ぐも高し高き屋に。登りて民の賑ひを。契り置きてし難波津や。三つづつ十と三つの里。札所々々の靈地靈佛廻れば。罪も夏の雲暑くろしとて駕籠をはや。おりはの乞目三六の。十八九なるかほよ花。今咲き〱出しの。初花に笠は被ずとも。召さずとも。照日の神も男神よけて日まけはよもあらじ。頼みありける順禮道。西國三十三所にも向ふと。聞くぞ有難き。一番に天滿の。大融寺。此の御寺の。名もふりし昔の人も。氣のとほるの。大臣の君が。鹽竈の浦を。都に堀江漕ぐ。汐汲舟のあと絶えず。今も弘誓の艪拍子に。のりの玉鉾い〱。大阪順禮胸に木札の。普陀落や。大江の岸に打つ波に。しらむ夜明けの。とりも一番に長福寺。空にまばゆき久方の。光にうつる我が影のあれ〱。走れば走るこれ〱又。とまればとまる拔のよしあし見る如く。心もさぞや神佛。照らす鏡の神明宮。拜み廻りて法住寺。人の願ひも我が如く誰をか戀の祈りぞと。仇の悋氣や法界寺。東は如何に。大鏡寺草の若芽も春過ぎて。後れ咲なる菜種や罌粟の。露にやつるゝ夏の蟲。己が妻戀ひやさしやすしや。あちへ飛びつれ。こちへ飛びつれ。あちやこち風ひた〱〱。翅と翅とをあはせの袖の。染めた模樣を花かとて留に止れば白ら。紋に揚羽の。超泉寺。さて善導寺栗東寺。天滿の札所殘りなく。其方に廻る夕立の雲の羽衣。蟬の翅。の薄き手拭。暑き日に。貫ぬく汗の玉造稲荷の宮に迷ふとの。闇はことわり御佛も。衆生の爲の親なれば。これぞ小橋の興德寺。四方に眺の果しなく西に船路の海深く。波の淡路に消えずも通ふ。沖の汐風。身にしむ鷗。汝も無常の煙にむせぶ。色に焦れて死なうなら。しんぞ此の身はなり次第。さて。げによい慶傳寺。線に引かれて。また何時か。ここに高津の遍明院。菩提の種や上寺町の。長安寺より誓安寺。上りやすな〱下りやちよこ〱。上りつ下りつ谷町筋を。歩み習はず行き習はねば。所體くづれア、恥かしの。もりて裳裾がはら〱〱。はつとかへるを打ちかき合せ。ゆるみし帶を引締め〱。しめてまつはれ藤の棚。十七番に重願寺。これからいくつ生玉の本誓寺ぞと伏し拜む。數珠に繫がん菩提寺や。はや天王寺に六時堂七千餘卷の經堂に經よむ酉の時ぞとて。餘所の

打青柳のもも思はでくりき鐘の聲これ。鉄の。手に結びあげ口舌も無間に静さよ
堂に誓常や善院にともす火は。影もかゞす。木々の下風ひや〳〵と。有の袖口左の
やゝ盤衞りしん清水に〳〵暫しとて。フシ袖 袖に通ふ煙管に燃ゆる火も。道の思ひあつ
ては休らふ。蓮葉の間の清水を覆ふあれば かゝう スヱ 咲きて亂るゝ薄煙。に消

みては是も亦。行方も知らぬ 相思ひ草。人しのぶ草道草に 目も傳きぬ急がんと人が出入る雲の脚。時雨の松の下寺町に信心深き心光寺。悟らぬ身さへ大覺寺さて金臺寺大蓮寺ハサミめぐりて〳〵て フシ是ではや ハルフ

二十番に 六 律寺の大慈大悲を頼みにて。ふくるゝ申の御手に無。日本橋町とこ黒髪は結に亂るゝ妄執の。夢をさまさん博勞の。ここそ稲荷の神社神の寶のしるしとて嚢なるべし新御靈に。拜みをさまるさしも草。草の蓮葉な世にまじり。三十三に御身を變へ色で導き情で教へ。戀を菩提の橋となし。渡して救ふ觀世音誓は。妙に〳〵有難し立迷ふ。フシ浮名を餘所に 漏らさじと包む心の内本町。焦るゝ胸の平野屋に春を重ねし雛男。一つなる口擬の酒。柳の髮もとく〳〵と フシ呼ばれて粹の名取川。地 今は手代と埋木の。生醬油の袖したゝるき戀の奴に荷はせて。得意をめぐり生玉のオクリ社に〳〵 こそは着きにけれ フシ出茶屋の床より。地 女の聲ありや徳様ではないかいの。コレ徳様〳〵と手を叩けば徳兵衞。合點して打頷き。詞コレ長藏。俺は跡から往の程に。そちは寺町の久本寺様長久寺様。上町から屋敷がた廻つてさうして内へ往に



や、徳兵衛もはや戻るといや。それ忘れずとも安土町の紺屋へ寄つて銭取りやや。地道頓堀へ寄りやんなやと。影見ゆる迄見送り〳〵誰が上げてコンお初ぢやないか。これはどうぞやつこ編笠を、既がんとすればア、先づやはり被てゐさんせ。囯今日は田舎の客で、三十二番の観音様を廻りまし。生玉で晩迄日暮しに。酒にするぢやと贅いひて、物眞似聞きにそれ其處へ、戻つて見ればむつかしい、駕籠も皆知らんした衆、やつぱり笠を被て居さんせ。それはさうぢやが此の頃は梨も礫も打たんせぬ、氣遣ひなれど内方の首尾を知らねば便宜もならず。丹波屋迄はお百度ほど踏ぬれど、其處へも音づれもないとある。囯ハテ誰やらがヲヽそれよ、座頭の太市が友達衆に聞けば、在所へ行かんしたと言へども、つんと誠にならず。地ほんにまた餘りな私はどうならうとも、聞きたうもないかいの。こな様それでも濟もぞいの私は病になるわいの、嘘ならこれ此の疵を見さんせと、手を取つて懐の、ス エヽうち恨みたる口説き泣き。フシほんの。女夫にかはらじな。地男も泣いてヲヽ道理道理さりながら。詞言うて苦にさせ何せうぞいの。地此の中俺が憂き苦勞、盆と正月其の上に十夜お祓ひ煤掃きを一度にするとも斯うはあるまい。心の内はむしやくしやとやみらみつちやの革袋、銀事やら何ぢややら譯は京へも上つて來る。ようも〳〵徳兵衛が命は續きの狂言に。したらば哀れにあらうぞと フシ溜息ほつと吐くばかり。地ハテ輕口の段かいの。それ程にない事をさへ私にはなぜに言はんせぬ。隠さんし

たは譯がある何故打明けては下んせぬと。膝にもたれてさめ〴〵と フシ涙は。延紙をひたしけり。詞ハアテ泣きやんな恨みやるな。隱すではなけれどもいうても埒の明かぬ事。さりながら大方先づ濟みよつたが。一部始終を聞いてたも。俺が旦那は主ながら現在の叔父甥なれば懇にもあづかる。又身どもも奉公にこれ程も油斷せず。商ひ物も文字半錢違へた事のあらばこそ。地此の頃給をせうと思ひ堺筋で加賀一疋。旦那の名代で買ひがかる是が一期にたつた一度。詞此の銀もすはといへば着替賣りても損かけぬ。此の正直を見て取つて。內儀の姪に二貫目つけて女夫にし。商賣をさせうといふ談合去年からの事なれど。地其方といふ人持ちてなんの心が移らうぞ。取りあへもせぬ其の內に在所の母は繼母なるが。我に隱して親方と談合極め二貫目の。銀を握つて歸られしを此のうつそりが夢にも知らず。跡の月からもやくり出し押して祝言させうとある。そこで俺もむつとして。詞やあら聞えぬ旦那殿。私合點致さぬを老母をたらしたゝきつけ。餘りなされ樣お內儀樣も聞えませぬ。今迄樣に樣をつけ崇へた娘御に。銀をつけて申し受け一生女房の機嫌とり此の德兵衞が立つものか。いやといふからは死んだ親父が生きかへり申すとあつても。いやで御座ると言葉を過す返答に。親方も立腹せられ。俺がそれも知つてゐる。蜆川の天滿屋の初めとやらと寄り合ひ。嬶が姪を嫌ふよな。地よい此の上はもう娘は遣らぬ。やらぬからは銀をたて。四月七日迄にきつと立て商の勘定せよ。まくり出して大阪の地は踏ませぬと怒らるる。某も男の我チヽソレ畏つたと在所へ走る。又此の母といふ人が此の世が彼の世へかへつても。握つた銀を放さばこそ。京の五條の醬油問屋常々金の取り遣りすれば。是を賴みに上つて見ても折しも惡う銀もなし。引返して在所へ行き一在所の詫言にて。母より銀を受取つたり。追付け返し勘定了ひさらりと埒が明くは明く。されども大阪に置かれまい。時にはどうして逢はれうぞ假令ば骨を碎かれて。身はしやれ貝の蜆川底の水屑とならばなれ。汝が身に離れどうせうとスヱテ喞び。入つてこそ泣き居たる。フシお初も。共にせく涙。地力を付けて押止め。扨々いかい御苦勞皆私ゆゑと存ずれば。嬉し悲しう フシ忝し。さりながら心たしかに思召せ。大阪を堰かれさんしても盜み家燒の身ではなし。どうしてなりとも逢ふ分は私が心にある事なり。逢ふに逢はれぬ其の時は此の世ばかりの約束か。さうした例の無いではなし。死ぬるをたかの死出の山三途の川はせく人も。せかるゝ人もあるまいと氣強う勇む言葉の中。スヱテ涙にむせて言ひさせり。地お初重ねて七日といふても明日の事。とても渡す銀なれば早う戻して親方樣の。機嫌をも取らんせといへば。詞チヽさう思うて氣がせくが。其方も知つた彼の

油屋の九平次が。跡の月の晦日たつた一日入ろ事あり。三日の朝は返さうと一命かけて頼むにより。七日迄は入らぬ銀。兄弟同事の友達の爲と思ひて。時貸に貸したるが三日四日に便宜せず。昨日は留守で逢ひもせず。今朝尋ねうと思ひしが。明日限に商の勘定も了はんと得意廻りて打過ぎたり 地 晩には行つて埒あけう。彼奴も男磨くやつ。俺が難儀も知つて居る。如才はあるまい氣遣ひしやるなヤアお初。詞 初瀬も遠し難波寺。名所多き鐘の聲。つきぬや法の聲ならん。太夫詞 山寺の春の夕暮來て 地 見れば先なはコレ九平次。詞 ヤアヽ不出來千萬な。身ども方へは不届して遊山どころではあるまいぞサア。地 今日埒あけうと手を取つて。引留むれば九平次興さめ顔になつて。詞 なんの事ぞ徳兵衛。此の連衆は町の衆。上鹽町へ伊勢講にて只今歸るが酒も少し飲んで居る。科飾取つてどうする事ぞ。粗相をするな。こなたを取ればとて此の徳兵衛は粗相はせぬ。跡の月の廿八日銀子二貫目時貸に。此の三日限に貸したる銀。地 それを返せといふ事と。言はせも果てず九平次から〳〵と笑ひ。詞 氣が違うたか徳兵衛。汝と數年語れども一錢借つた覺もなし。地 聊爾な事を言ひかけ後悔するなと振放せば。連も笠をはらりと脫ぐ徳兵衛はつと色を變へ。詞 言ふな〳〵九平次。身が此の度大難儀どうもならぬ銀なれども。晦日たつた一日で身代立たぬと歎いた故。日頃語るはこゝらと思ひ男づくで貸したぞよ。手形も入らぬと言うたれば念の爲ぢや判をせうと。身どもに證文書かせお主が捺した判がある。さういふな九平次と血眼になつて責めかくる。ムヽウなんぢや判とはどれ見度い。ヲヽ見せいで置かうかと。懷中の鼻紙入より取出し。お町衆なら見知りもあらう。コリヤ 地 これでも諍ふかと。披いて見すれば九平次横手を打ち。成程判は俺が判。詞 エヽ徳兵衛土に喰ひつき死ぬるとてもこんな事はせぬ物ぢや。此の九平次は跡の月の廿五日。鼻紙袋を落して印判共に失うた。方々に貼紙して尋ぬれども知れぬ故。此の月からコレ。此の御町衆へも斷り印判を變へたわやい。廿五日に落した判を八日に捺されうか。扨は其方が拾うて手形を書いて判を据ゑ。俺を強請つて銀取らうとは謀判より大罪人。地 こんな事をせうよりも盗みをせい徳兵衛。エヽ首を斬らせる奴なれど懇がひに許して置く。銀になるならして見よと手形を顔へ打付け。はつたと睨む顔付は フシ 權柄も憎げにしらじらし。地 徳兵衛くわつと胸せいて大聲あげ。扨巧んだり〳〵。一杯くうたか無念やな。ハテなんとせう此の銀をのめ〳〵と汝に取られうか。斯う巧んだ事なれば出處へ出ても俺が負け。腕さきで取つて見せうコレヤイ。詞 平野屋の徳兵衛ぢや男ぢや合點か。汝がやうに友達を騙つて倒す男ぢやないサア來いと。地 摑み付くヤアしやらな丁稚上りめ。投げてくれんと

胸ぐら取り。撲ち合ひ捻ぢ合ひ叩き合ふ。お初は跣で飛んで下りあれ皆樣頼みます。私が知つたお人ぢやわお駕籠の衆は居やらぬか、あれ德樣ぢやと身をもがく フシ詮方なくも哀れなり。地 客はもとより田舍者。怪我あつてはならぬぞと無體に駕籠に押入るる。いや先づ待つて下んせなう悲しやと泣く聲ばかり。急げ〳〵と一散に フシ駕籠を早めて歸りけり。地 德兵衞は只一人、九平次は五人連れ。あたりの茶屋より棒づくの蓮迴迄追出し、誰が咎むやら叩くやら フシ更にわかちは無かりけり。地 髮もほどかれ帶も解け。彼方此方へ伏し轉びやれ九平次め畜生め。汝生けて置かうかと。よろぼひ尋ね廻れども逃げて行方も見えばこそ。其の儘其處にどうど据り スエテ大聲あげて涙を流し。詞 いづれもの手前も面目なし恥かしし。全く此の德兵衞が言ひかけしたるで更になし。日頃兄弟同然に語りし奴が事といひ。一生の思ひと歎きし故、明日七日此の銀が無ければ我等も死なねばならぬ。命代りの金なれども互の事と役に立ち。地 手形を我等が手で書かせ。印判すゑて其の判を前方に落せしと。町内へ披露して却つて今の逆ねだれ、口惜しや無念やな。此の如く踏み叩かれ男も立たず身も立たず エヽ最前に摑みつき。喰ひついてなりとも死なんものをと大地を叩き齒がみをなし。拳を握り歎きしは。道理とも笑止とも フシ思ひ。やられてあはれなり。地 ハアかういうても無益の事。此の德兵衞が正直の心の底の清しさは三日を過さず大阪中へ申譯はして見せうと。後に知らるゝ言葉の端いづれも御苦勞かけました。御免あれと一禮述べ。破れし編笠拾ひ被て顏も傾く日影さへ。曇る涙にかきくれ〳〵、悄々歸る有樣は目もあてられぬ 三重

へ戀風の。フシ身に蜆川。地 流れてはその虛貝うつゝなき。色の闇路を照らせとて。スエテ夜毎に點す燈火は。キン 四季の螢よ雨夜の星か 夏も花見る梅田橋、旅の鄙人地の思ひ人 小オクリ 心〳〵ごゝろのわけの道知るも迷へば知らぬも通ひ。フシ 新色里と賑はし。地 無慚やな天滿屋の。お初は内へ歸りても。今日の事のみ氣にかゝり。スエテ 酒も飲まれず氣もすまず フシ しく〳〵。泣いて。居る所へ。地 隣の姨や傍輩のちよつと來てはなう初樣。詞 何も聞かんせぬか。德樣は何やら譯の惡い事あつて。地 たんと撲たれさんしたと。聞いたが眞かといふもあり。イヤ私が客樣の話ぢやが。踏まれて死なんしたげなといふもあり。騙をいうて縛られてのと。ろくな事は一つも言はず フシ 問ふに辛さの見舞なり。地 あゝいやもう言うて下んすな。聞けば聞く程胸痛み私から先へ死にさうな。いつそ死んで退け度いと フシ 泣くより外の事ぞなき。フシ 涙片手に。地 表を見れば夜の編笠德兵衞。思ひ侘びたる忍び姿ちらりと見るより飛び立つばかり。走り出でんと思へどもおうへには亭主夫婦。上り口に料理

人。庭では下女がやくたいの フシ目が繋ければさもならず。詞アヽいかう氣が盡きた。地門見て來うと密と出でなう是はどうぞいのこ。こな樣の評判色々に聞いた故。其の氣遣ひさ〳〵。氣遣ひのやうになつて居たわいのうと。笠の内に顏さし入れ。聲を立てずの隱し泣き フシあはれ。切なき涙なり。地男も涙にくれながら。詞聞きやる通りの巧みなればいふ程俺が非に落ちる 地其の内四方八方の首尾はぐわらりと違うて來る。最早今宵は遁されずとんと覺悟を極めたと。囁けば内よりも 色詞世間に惡い取沙汰ある。初樣内へ這入らんせと 地聲々に呼び入るゝヲヽ。〳〵あれぢや何も話されぬ。私がするやうにならんせと。詞裲襠の裾に隱し入れ オクリ這ふ〳〵〳〵中戸の。沓脱より フシ忍ばせて。地椽の下屋にそつと入れ上り口に腰打掛け。煙草引寄せ吸ひつけて フシそしらぬ顏して居たりけり。地かゝる所へ九平次は惡口仲間二三人。座頭ましく

らどつと來り。詞ヤア妓樣達淋しさうに御座る。なにと亭になつて遣らうかい。なんと亭主久しいのと。地のさばり上ればそれ煙草盆お盃と。あたりべがかりに立騷ぐ。詞イヤ〳〵酒は置きや飲んで來た。扨話す事がある。これの初が一客平野屋の徳兵衛めが。身が落した印判拾ひ。二貫目の贋手形で騙らうとしたれども。理窟につまつて舉句には。死なずがひな目に逢うて一分は廢つた。定めてこゝへ來るとも油斷しやるな。皆に斷う語るのも徳兵衛めがうせ眞道樣に言ふとても。地必ず誠にしやるなや。寄せる事もいらぬもの。どうで野江か飛田ものと フシ誠しやかに言ひ散らす。地椽の下には齒をくひしばり身を顫はして腹を立つるを。初は之を知らせじと足の先にて押鎮め。抑へ鎮めし神妙さ亭主は久しい客の事。善惡の返答なく。こゝは何ぞお吸物と フシ紛らかしてぞ立ちにける。地初は涙にくれながら。さのみ利根に言はぬもの。詞徳樣の

御事幾久心根を明かし聞かせし仲なるが。それはそれはいとしぼけに微塵わけは惡うなし。地頼もしだてが身のひしで瞞されさんしたものなれども。證據なければ理も立たず。此の上は徳樣も死なねばならぬ品なるが。死ぬる覺悟が聞き度いと獨言になぞらへて。足で問へば打頷き。足首取つて喉笛撫で。フシ自害するとぞ知らせける。チヽ其の筈〳〵。詞いつまで生きても同じ事。地死んで恥を雪がいではと言へば九平次ぎよつとして お初は何を言はるるぞ。なんの徳兵衛が死ぬるものぞ。若し又死んだら其の跡は。俺が懇してやらう。其方も俺に惚れてぢやげなと言へば。こりや忝かろわいの。わしと懇さあんすと此方も殺すが合點か。地徳樣に離れて片時も生きて居ようか。詞そこな九平次のどうすりめ。阿房口をたたいて人が聞いても不審が立つ。地どうで徳樣一緒に死ぬる私も一緒に死ぬるぞやいのと。足にて突けば椽の下に

は涙を流し。足を取つて押戴き。膝に抱きつきこがれ泣き女も色に包み兼ね。互に物は言はねども。肝と肝とにこたへつゝ フシ しめり泣きにぞ泣き居たる。地 人知らぬこそ哀れなれ九平次も氣味惡く。相場が惡いおじやいの。こゝな旅衆は異な事で。俺等がやうに金使ふ大盡は嫌ひさうな。あさやへ寄つて一杯してぐわら〳〵一分を撒き散らし。そして往んだら寢よからうアヽ懐が重たうて。歩きにくいと惡口だらけ言ひ散らし。フシ 奥いてこそは歸りけれ。地 亭主夫婦今宵ははや火もしまへ。泊りの衆は寢せませい初も二階へ上つて寢や。早う寢やといひければ。詞 そんなら旦那樣内儀樣。もうお目にかゝりますまいさらばでござんす。地 内衆もさらば〳〵と餘所ながら。暇乞して閨に入ることれ一生の別れとは。後にこそ知れ氣もつかぬ フシ 愚かの心不便さよ。地 それ釜の下に念を入れ肴を鼠に引かするなと。見世をあけつ門さしつ。寢るより早く高鼾 オクリ 如何

なる〳〵夢も短夜の　フシ八つになるのは程もなし。地初は白無垢死出立戀路の闇の黒小袖。上に打ちかけ差足し二階の口より差覗けば。男は下屋に顔出し招き頷き指して。心に物を言はすれば階子の下に下女寢たり。釣行燈の火は明し如何はせんと案ぜしが。棕櫚箒に扇をつけ箱階子の二つ目より。煽ぎ消せども消え兼ぬる。身も手も伸しはたと消せば。階子よりどうど落ち行燈消えて暗がりに。下女はうんと寢がへりし。二人は胴を慄はして　フシ尋ね廻る危さよ。地亭主奥にて目を覺し。詞今のは何ぢや。女子ども有明の火も消えた。地起きてとぼせと起されて下女はねむそに目をすり〳〵。丸裸にて起き出で火打箱が見えぬと。探り歩くをさはらじと彼方此方へ這ひまつはるる玉緒。苦しき闇の現なややうやう二人手を取合ひ。門口迄そつと出で鑰は外せしが。車戸の音いぶかしく明け兼ねし折柄。下女は火打をはた〳〵と。打つ音に紛らかし丁ど打てばそつと明け。かち〳〵打てばそろ〳〵明け。合せ〳〵て身を縮め袖と〳〵を槇の戸や。虎の尾を踏む心地して。二人續いてつつと出で。顔を見合せア丶嬉しと死に行く身を喜びし。哀れさ辛さあさましさ。跡に火打の石の火の命の。末こそ　三重〳〵短かけれ。

徳兵衞 おはつ 道行

フシ此の世の名殘。夜も名殘。死にに行く身を譬ふればスエテ仇しが原の道の霜。一足づつに消えて行く。夢の夢こそ　フシあはれなれ。ワキあれ數ふれば曉の。七つの時が六つ鳴りて殘る一つが今生の。鐘の響きの聞きをさめ。太夫寂滅爲樂と響くなり。フシ鐘ばかりかは。草も木も空も名殘と見あぐれば。雲心なき水の音北斗は冴えて影うつる星の妹背の天の河。梅田の橋を鵲の橋と契りていつ迄も。われとそなたは女夫星。地必ずさうと縋りより。二人が中に降る涙フシ河の水嵩も増さるべし。ハルフシ向の二階は。何屋とも。おぼつかなさけ最中にて。まだ寢ぬ火影聲たかく。ヲドリ今年の心中よしあしの。言の葉草や。しげるらん。太夫地聞くに心もくれはどりあやなや昨日今日迄も。よそに言ひしが明日よりは我も噂の數に入り。世にうたはれん謠はば謠へ　フシ謠ふを聞けば。歌二人どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬものぢやと思へども。太夫地げに思へども歎けども身も世も思ふまゝならず。いつを今日とて今日が日まで。心ののびし夜はもなく。思はぬ色に苦みに　歌どうした事の縁ぢややら。忘るゝひまは無いわいな引。それに振捨て行かうとは。やりやしませぬぞ手にかけて。殺して置いて行かんせな引。放ちはやらじと泣きければ。太夫地唄も多きにあの唄を。時こそあれ今宵しも。ワキ謠ふは誰そや聞くは我。二人過ぎにし人も我々も。一つ思ひと縋りつきスエテ聲も惜まず泣き居たり。いつはさもあれ此の夜半は。せめてしばしは長からで心も

夏の夜のならひ。命を追はゆる鷄の聲明けなば愛しや天神の森で死なんと手を引いてオクリ梅田へ堤の小夜鳥フシ明日は我が身を餌食ぞや 太夫誠に今年はこな樣も二十五歳の厄の年。わしも十九の厄年とて。思ひ合うたる厄祟り縁の深さのフシしるしかや。地神や佛にかけ置きし現世の願を今こゝで。未來へ回向し後の世も猶しも一つ蓮ぞやと。爪繰る數珠の百八にスエテ涙の玉の數そひて盡きせぬあはれ盡きる道。二人 心も空に。かげくらく風しん〳〵たる曾根崎の フシ森にぞ。たどり着きにける。太夫地彼處にか此處にかと拂へど草に散る露の我より先に先づ消えて。定めなき世は稻妻かオクリそれかへあらぬかアヽ怖。今のは何といふものやらん。詞ヲヽあれこそは人魂よ。今宵死するは我のみとこそ思ひしに。先立つ人もありしよな。地誰にもせよ死出の山の伴ひぞや。南無阿彌陀佛。地南無阿彌陀佛の聲の中。あはれ悲しや又こそ魂の世を去りし

わ南無阿彌陀佛といひければ。女はおろかに涙ぐみ。今宵は人の死ぬる夜かやあさましさよと涙ぐむ。男涙をはらはらと流し。詞二つ連れ飛ぶ人魂を餘所の上と思ふかや。正しう御身と我が魂よ。地なになう二人の魂とや。はや我々は死したる身か。ヲヽ常ならば結びとめ繋ぎとめんと歎かまし。今は最期を急ぐ身の魂のありかを一つに栖まん。道を迷ふな違ふなと。抱き寄せ肌を寄せスエテかつぱと伏して。泣き居たる。フシ二人の心ぞ。不便なる。涙の絲の結び松棕櫚の一木の相生を。連理の契になぞらへ露の憂き身の置きどころ。サア此處に極めんと。上着の帶を徳兵衛も初も涙の染小袖リ脱いでかけたる棕櫚の葉のオクリその玉へ箒今ぞげに フシ憂き世の塵を。地拂ふらん初が袖より剃刀出し。若しも道にて追手のかゝり別れ〳〵になるとても。浮名は捨てじと心がけ剃刀用意致せしが。望の通り一所で死ぬるこの嬉しさといひければ。

ヲ神妙頼もしし。さほどに心落着くからは最期も案ずる事はなし。さりながら今はの時の苦患にて。死姿見苦しといはれんも口惜しし。地此の二本の連理の木に身體をきつと結ひつけ。潔う死ぬまいか世に類なき死樣の。手本とならん如何にもとあさましや淺黄染。かゝれとてやは抱へ帶兩方へ引張りて。剃刀取つてさら〳〵と。帶は裂けても主樣と私が間はよも裂けじと。どうど座を組み二重三重ゆるがぬやうにしつかと締め。詞ようしまつたか。ヲヽしめましたと。地女は夫の姿を見男は女の體を見て。こは情なき身の果ぞやとスエテわつと泣き入る。ばかりなり。アヽ歎かじと徳兵衛。顏振上げて手を合せ。我幼少にて誠の父母に離れ。叔父といひ親方の苦勞となりて人となり。恩も送らず此の儘に。なき跡までも兎や角と。御難儀かけん フシ勿體なや。罪を許して下されかし冥途にまします父母には。追付け御目にかゝるべしスエテ迎へ給

へと泣きければ。お初も同じく手を合せ。こな様は羨しや冥途の親御にあはんとある。我等が父樣母樣はまので此の世の人なれば。いつ逢ふ事のあるべきぞ便りは此の春聞いたれども。逢うたは去年の初秋の。初が心中取沙汰の。明日は在所へ聞えなば如何ばかりお歎きあらん。親たちへも兄弟へもこれから此の世の暇乞。せめて心が通じなば夢にも見えてくれよかし。　懐しの母樣や名殘惜しの父樣やと。しやくり上げ〳〵 フシ聲も。惜まず泣きければ。　夫もわつと叫び入り。流涕こがるゝ心いき フシ理せめてあはれなれ。　地いつ迄言うて詮もなし。はや〳〵殺して殺してと最期を急げば心得たりと脇差するりと抜放し。サア只今ぞ南無阿彌陀〳〵と。いへどもさすが此の年月いとし可愛としめて寝し。肌に刃が當てられうかと。眼も眩み手もふるひ。弱る心を引直し。取直してもなほ慄ひ慄くとはすれど切先は。彼方へ外れ此方へそれ。二三度閃く劍の刃。あつとばかりに喉笛に。ぐつと通るが南無阿彌陀。〳〵南無阿彌陀佛と。くり通しくり通す腕先も。弱るを見れば兩手をのべ。斷末魔の四苦八苦。オクリあはれといふも餘りあり。我とても後れうか息は一度に引取らんと。剃刀取つて喉につき立て。柄も折れよ刃も砕けとゑぐり。くりくり目もくるめき。苦しむ息も暁の フシ知死期につれて絶え果てたり。　地ヲ誰が告ぐるとは曾根崎の森の下風音に聞え。とり傳へ貴賤群集の回向の種。未來成佛疑ひ無き戀の。手本となりにけり。

右之本令吟覽頓句音節墨譜
等不殘令加筆候可有開
版者也
竹本義太夫

重而手以書達之本令校合候
畢至可爲正本者歟
近松門左衛門

京二條通寺町西へ入町
正本屋　山本九兵衛　板

源五兵衛
おまん

薩摩歌

近松門左衛門作

地櫻咲く彌生は雁の出かはりに。新參の燕おきつけてあとを濁さぬ水の面。這出の蛙二合半首にかけたか杜鵑。木々の梢も繁藏と誰か呼子鳥草履取。一季半季の花鳥もフシとかくは御縁次第なり。地はやり小唄も時につれ時の昔と何處へ往く。寛文年の頃かとよ御城本は但馬國。京の屋敷は千本通千本立の植込みも。若葉の錦見かけから長者町をば押しまはし。出水通の長屋門此の大屋敷をあづかり。京江戸御國の御用等一人に承る。御留守居平鹿の何某殿にこそ中途に奴草履取。召置かるれと方々より引を求めて目見えする。此の頃五人三人づつ毎日吟味なさるれど。好い男さへ稀なれば。すこしよめなる女房のフシびかしやかふるは科ならず。地中間頭寄親の四十平下見をして。詞ムヽいづれも好い奉公人衆。さて御家の若旦那殿様よりお小姓に召出され。親旦那様御同道で只今は御江戸に。御若年の若旦那氣を知つた上方者を抱へてやらんと仰せられ。小萬様と申す姉御様お部屋のお庭へ召出され。簾ごしに御覽ある女中よつての御極め。女中多いといふ中にも。丈のすらりと眉目の好い。二十餘りな女中が受返答をめされう。林殿とて姉御様の御氣に入り。第一此の人のいひなし地とはいひつ縁次第仕合次第といふ處に。小庭へ廻る車戸のかけがね外す女の聲。詞これ四十平。奉公人衆揃うたら。一人づつ地お庭へまはしやといひ捨てて立歸る。それ〱あれが林どの簾の内は姉姫様。御前が近いせりあはず下馬前をして振りませい。ないといらへて振出す手先上りの頭八分。腰のひねりに足取りにすつ〱。すつ〱砂地に膝をする花梅花皮と散る花と。ざんざめいたる掃庭の椽の上には腰元衆。簾に挿みしおばな紙フシ姉御様ぞと奥ゆかし。地中にも林は手をついて簾の中より何事か、御意なさるればあい〱とサクリお返事へ申して尋ねける。ワキ地これ〱さきな絲鬢の鬢かりつけた鎌髭奴。今までは何處に居て在所は京か田舎か。お小姓方の奉公は髮月代にお好みあり手覺えあるかと尋ぬれば。詞太夫わつちが生國陸奥の國七ツ道具の一通り。お馬の湯洗ひ伏せ起し武家の奉公しからせば。糠味噌汁の花ちりて近年高野に相勤め。小姓廻しは致せしが高野六十那智八十。きんか頭の若衆にて。遂に月代剃つた事フシごはりませぬと答へける。ワキ氣疎や怖や其の樣な。目出たい若衆に升かけを切米望みは次第ぞや。次な男はどうぞどうぞ。太夫詞拙者は杵の時分より醫者衆に相勤め。町人衆や香附子方の奉公は不案内

鳥ぢたい我等は川芎持ち同じ處に當歸まで。
半夏／＼と季を重ね罷り在し傍輩の。中居
にちよつと甘草の甘うまい事仕り。豆那茯
苓いたされ詮議まち／＼麥門冬。季中に其
處を追出し薬それより心に莪蓮を張り。よ
しや浮世は陳皮の皮肩に木香かたけても。
地黄に大根しらがまで斯ては果じと。紺の
だいなし生薑一へぎ。腰に一本薬研鍔。つ
らに鍋墨毘人蔘。煎じ詰めたる奉公人暫
文白蓮和中散。身を粉薬に御奉公フシ定齋
なしとぞ答へける。ワキげに氣の薬なもの
なれど。女中の訶の長口上近頃天鵞絨の半
襟かけた。次の男は町の風。武士の勝手は
合點か。太夫さてもお目利今極め極印打つ
て私儀は。銀座に永々使はれ蠟籠染物の
はい／＼ぶき。京者の正眞お屋敷方は薪
分銅。聲になまりはまじらねど少といきに
くいと申す故。歩を引れても奉公のしなか
へますといひければ。ワキそれでは此方に
使はれぬ。末の季までは包みのまゝフシ宿
に居やゝと笑はるゝ。地後な奴が國處あと
と麓の赤松をオクリ打割り。松の油烟髭氣味
よい頭のすり鉢鬢。江戸すりがちしと見
えたよな。太夫御意の通りに丁稚奴は。
信州木曾の山家者。でつかく冷ゆる寒國の。
髭に氷柱の朝嵐。布子一つでお供先歌へ
ふろか信濃の／＼。ハツア冷たいな。實に。
雪國で身を寒晒し唐辛。天目に御器地集錢
酒。一兩二歩の取替を。フシ春めきながら
借越して。ハルフシ末白雪の買がかり。首だ
け積る借錢の。深田に馬を駈落いたし。木
曾を走つて參りしと。二人いへば各打笑
ひ。左樣な者を抱へては。此方に算用栗津
の原とハツミどつと。興をぞ催しける。ワキ
お庭の隅に目をもつて碁盤格子の染帯を。
骨牌結びや年配も二十一二三四五六七。押せ
／＼ふつて出てませい。在所故郷は何處に
て小姓廻しの一通り。お江戸の勝手覺え
てか。供先乗打ち下馬前に。大名方の目標
も フシ知るや如何にとありければ。せがれ
九州薩摩者推参ながらいにしへは、大小
刀もさそふ水叶はぬ霜に身を浸し。廣い薩
摩をせばめられ。近い朝鮮琉球より。遠い
あづまは日本の地。命菜種に油の涙。つか
み奉公致しても戀しい奴めにま一度と。江
戸に三年都に二年公家武家方のお小姓髪。
ゆひたては持ちませず六十餘州の大名樣。
お馬標槍標お駕籠押への紋印。そらに覺え
て罷在る御奉公は緣の物。これを取得に
召置かれば常江戸脇城國脇まで。申せば事
も長い事。先づ一國名に高き。城主樣方あ
らましと スヱテ口拍子にて。連ねけり。

諸國鎗じるし

地武家繁昌の御威勢我等が口にかけまくも
。勿體波風治まりしお江戸は貴賤群集の中
。御同朋をつれらるは外に數なき類な
き。フシお家の是がしるしなり。ハルフシ重ね
盛羽の大鳥毛。對のお道具突立てゝお駕籠
の者は裏菊の。裾にませ雛染めたるは名に
し奥州。五十四郡の ノン旗頭。地旗は白旗

黒羅紗の。杉形鞘に羽織着てお駕籠かくのは是ばかり。同國若松の主ぞと誰白河は大身の鑓。かこの紋は松皮菱鑓形の挟持り。白頭の長禿二本松の城主とかや。素鑓の鉤に技垂舞さつとしだれて。しだれ鳥毛の大小は。これ南部殿。フシ津輕殿。奥大名の長道中數が首も投鞘に。紺に手杵をつくゝ〳〵〳〵岩槻の御城主と。フシ名乘つて出羽の米澤に。鶴鳥毛。唐人笠。六尺は裏打鍜白鳥の笠鉾鞘。猩竹羅紗の袋鞘大鉤打つたる印こそ。庄内の主ぞと。白熊の天目鞘。これが秋田の佐竹殿。劍鋩の中じめに六尺模樣はぐる〳〵〳〵。御紋も車は越後の村上。黒羅紗の輪鼓鞘。同じく桔梗十文字鞘に無紋の六尺は。加賀に梅鉢百。一十萬石につゞくものなし似たるものなし。御紋ばかりは越中も似たりや似たり杜若花花菖蒲。菖蒲皮の角十文字。白頭の大禿これ。越前家六角の。筒鞘の二本道具は フシ若狭の小濱。劍鋩輪鼓の鈎鑓素鑓は伊賀伊勢の津の御城主。花色羅紗の巾着鞘輪違の六尺は。相州小田原兜巾頭と大身の鑓は。下總の國佐倉の御城主栗色のたゝき鞘。革形の中締は江州彦根の フシ御大將。黒熊の如意寶珠駕籠は紺地に角の棒。美濃の加納の主なり。コハリ青貝柄に切立鞘信濃の松代。白柄に白熊兜巾頭駕籠は東木丹後の宮津。雀鷺の對のお道具出雲の松江。駕籠の紋は丸に蔦の葉のきませ。退けノ〳〵とつと退け〳〵鳥取鳥毛大鳥毛。因幡伯耆のお國取替膝の同國印も似たり。重籐は赤し明石は黒し何れも素鑓の中締にて。分銅形の一對は備前の岡山。鉤鑓に白熊子の鳥毛の棒には備中松山。駕籠の紋は丸に虎の尾ぴんとはねたる備後の福山。鶏冠形の白鳥毛駕籠は紺に鄭の地染抜き。袋鞘は〳〵安藝の廣島。又四國の御大名。熊の皮の投鞘は。讃州高松同じく伊豫の松山は。黒熊の唐盃に。お道具持が醉うたとき。醉うたとさ。とさ〳〵土佐の高知は フシ中ぶくら。ハルフシお駕籠は紺に蒔の頭なり。阿波淡路兩國主。挽木鞘と丸十文字。六尺はつなぎ菱つなげやこノ〳〵永聖寶の駕籠印。黒鳥の赤寶は周防長門の萩の殿。さて九州にいたつては御紋も石餅。ふんまる鳥毛は筑前福岡の御城主。猩猩鞘と鍬鑓は筑後の久留米。大白鳥毛は同國柳川白熊のすみ袋。杉形の中締はハツミコン豐前の小倉。ハシ中津の主。地白分銅は豐後の杵築。萌黄羅紗の袋鞘。コハリ白滑皮の帰ぶくら。銀杏の丸の駕籠の紋肥前佐賀の御居城。大袋は同國唐津すん切鞘に銀の笠。手杵は島原平戸の城主。白猪の丸筒雀鷺同じく筆鞘。駕籠は淺黄に山道こそ代々肥後の御國主。劍形は日向大名十文字は對馬の守。黒熊の片鎌は高鍋までもかくれなき。大隅薩摩の御大將。其の外諸國の御大名。數も限りもあらぬ意外。申すも長柄の地御鑓じるし フシあらまし斯くと述べければ。地濟の内外ざは〳〵〳〵ようノ〳〵言うたり申したり。扨も〳〵と御暫し フシ下

を叩いてご褒めらるる。やれ幸ひの奉公人。此の者に極めよと。四十平を召出され首名殿へ申して。取りかへ渡し吉日なれば今日中に請判極め。今宵からお屋敷に泊らせよ。薩摩者とあるからはさの字をのけて津摩藏とお付けなさるゝ。彼へ立つて休みませいない。〱と立ちければ四十平小隅へ招き。詞して切米は何程ほしい。半季に二兩二歩下されい。四十平興さまし それでは一年五兩か。いかにも〳〵近年五兩取りまする。すれば其方は寶盛ぢや。地道理で女中の氣に入つたとつて。入口も 三重へ短夜や。フシ秋の初夜過ぎ。はや夜半蒸くり暑う寢にくやと小萬の昔の夜半起き。庭にとぼんと風うけて。アヽなま暑や此方が樣に肥えたものは猶暑い。男持つて痩せたいぞと獨言してこれはゝ。詞七戸の錠が下りずにある。棒が粗相で忘れたか。地誰ぞ來いやいと召す處へ屋敷廻りの拍子木の音門に近寄る影を

見れば。新參の津摩藏ヤア是は好い慰みとつい立寄る女松の陰。フシ男氣入れぬお部屋なり。地新參は勝手知らずに戸のあくまゝに突と入り。庭のすみ〴〵拍子木打ち爪立てて蚊帳の中。好もしさうに見る間にそつと廻つて戸を引立て。錠さす音に肝つぶし申し〳〵。未だ私が出まする錠あけて下されませ。詞いや〳〵此處に鍵はない。むさと男の來ぬ處へ來たが不祥明日まで待ちや。ヤアそれでは私首がない。これ四十平殿お助けと。拍子木ならすをエヽかしましい〳〵。拍子木おいて貰はうと取つて擲つて手をとつて。詞コレ些とも大事ない苦にするな。おれは此處の姉娘小萬といふ者。其方は流ゆる薩摩を出て賤しい奉公するといふ。大名衆のしるじ揃へ聞きたうも何ともない。地薩摩の戀の一通り、根から葉から聞かねば氣にかゝつて夜が寢られず。ひよんな噂を聞きさいて睡たうて眼がうづく。嘘なしに話さうか言はねばこれぢやと抓らるゝ。詞あいた〳〵申しませう。私は鹿兒島で菱川源五兵衞と申して。親兄どもは小知を取り我等末子の是非もなく。來迎院と申す知行寺へ寄住の約束。地十三の秋から豆腐蒟蒻念佛の外。魚類女類は口にもかけず。善導か法然の化身であらうと申した。詞父寺の旦那に濱の町といふ處。芭蕉布屋のお萬と申すは筑紫一番 和泉式部か小式部の化身とほめた小娘。地きやつが我等を見るたびに齋に參れば抱きつき。詞墓へ參れば抱きつき。地めつた無性に抱き付けども此の方合點參るにこそ。和泉式部の化身めが此の法然の化身と。相撲を望むと覺えた投げてくれうと存じて。或時墓へ參つた處私は裸になり。長老樣の緞子の袈裟襟にきつとしめつけ。サア御座れと抱き付いた。彼方もぬからず四つ手にくみ。汗水ながして組合ふとて。何やらさゝやきつぶやいて。互に因果を晒屋の内から杵とは此の事。まんまと法然上人も彼方の十念授かり。諸譯

の五十相傳受け四十八夜の常念佛。互に忍び忍ばれて物三年は夜晝なし。千日の回向まで一日懈怠も仕らず。是が知れいであるものか沙彌が聞けば長老が聞く。兄が知れば親が知り髮を剃さぬ其の内に。縛首打たるゝ沙汰。如何も國にたまられず。お萬と後の契約して十九の年に薩摩を出で。十方世界をかけまはりお尋ねなれば身の上の。願以此功徳氣の毒なフシお咄。なりとぞ語りける。詞さても〳〵可笑しいやうで悲しい咄。其の人はお萬おれは小萬。身になぞらへて涙がこぼるる。國並びの事なればもしや聞きやつた事もあろ。おれは肥後の熊本。笹野三五兵衛樣といふ人と後紐から緣組あり。無事で御座れば疾うに肥後へ嫁入する。地八年前に彼のお人病死なされた便宜あり。一門衆も親達も盃はせず顔は見ず。方々もらひてある内にはやかたづけうとおつたれども。頑是なしに道を立て十二で小癪な髮をきり。今で後家は立つれども若い女子の可愛いと思や。つま戀ふ犬猫鳥翼。蟲にも劣つて男の肌知らずに死ぬる。今の樣な咄を聞く度に罪つくられ。當座にしやんと嫁入てのければよいものを。阿呆な斟酌仕すごいて湯の辭儀は水になる。吸うても見せず心から煮こじけの若後家。詞一字違うて名もよう似た。三五兵衛樣と思うて其方をお萬に借りたいが。なんと一夜は貸す氣か。地お萬に受けやつた五十相傳此の小萬に授けてたも。手を合せて拜みますサア南無阿彌陀〳〵。これなう南無阿彌陀ぢやと身をもみしフシ笑止痛はし恥かしし。源五も困りうろたへて。詞お萬が五十相傳は丸裸で受けました。地夜は蚊がくふ明日と逃げんとすれば引止め。氣がつかなんだ蚊が喰はう蚊帳へおじやと抱入るゝ。いやぢや〳〵もお主の威光蚊帳打ちあぐる煽風。有明消えてこれ〳〵〳〵。これが安養極樂世界いづくも戀の〳〵闇ぞかし地お氣に入りの林は背より茶の間に寢たりしが。土戸に錠を忘れしと手燭かゝげてお寢間の次。御用もやと立窺へば有明消えし襖のあなた。しめやかな男の聲合點がいかぬ蚊の鳴く聲かいやいや人に紛れないと椽先見れば男の草履。サア惡性にきはまつた男は何者襖蹴破り飛入つて二ツ胴に斬重ねんと跳り出しがァ、左樣でない〳〵。詞笹野三五兵衛ともいはるゝ身が。は病死と披露して葬禮まで取行ひ。あらぬ女の眞似をして。五年七年辛氣を碎くも大事を思ひ立つたる故。地念願遂げず本名あらはし小事に大事を忘れては。今迄が皆うつけの沙汰一家一門武門の名折れ。堪忍の場思案の場だまれ〳〵人や見ると。もとの女でじやなら〳〵と立歸る。お寢間はいよ〳〵聲高く。今ぞ別れのさゝめごと。エゝ妬ましく口惜しきに下部の持つたる拍子木あり。ムゝウ忍び男は下郎よなたと、望遂げたりとも。三五兵衛が女房を下郎にぬすまれ目前の女敵見遁しにならうか。日頃塗つたる艶白粉のつやつくろひも入らば

こそと。裾捻ぢ上げて足くびも人に見せじと包みたる。紅絹地袋の色に出る脾太股いと黒く。女のすなる緋縮緬。足纏ぞと高からげフシ男の下紐あらはなる。地常にたしなむ紅皿も。今宵血汐の膝の皿鐵漿壺のくろがねも。心の鋼鋳おとし引寄せ〳〵一刀。挿櫛笄こん小枕粉微塵になれと髪掻きなで。早速を踏んで駈出でしが。南無三寶刀は部屋の長持に取りに歸るは手のびなり。無刀でかかるは不覺なり。夜中半時の時計の聲フシ心せかするばかりなり。地ハア、彼の廊下を來る人は朋輩のおしゆんぢや。此奴は饒舌の韓婆め見付けられては大事ぞと。からげ下して前かき合せ。所體つくれば目の前に。元の林と奈良團扇空睡り。こそゆたかなれ。地おしゆんは何の氣もつかず林殿此處に何してぞと。いへばわざとびつくりして。詞ア、なんぞいの氣疎氣なお寢間が近いたしなめや。明日は月の十五日鐵漿つけて寢ようか。寢て待つ男もあらはこそ氣散じな獨寢。地宴で眠るも同然和女も往つて早う寢や。明日逢はうぞやといひければさればいの。詞今日ひよんな草紙を見て氣が騷いで寢られぬ。女夫事して寢ませう。今宵は此方さんお内儀にならしやんすか但し男にならしやんすか。地ア、どちらになつても思の種男とも女子とも。見立次第といふて居るフシ下心こそわりなけれ。地いや〳〵どうでも女子が好い實可愛らしい女房ぢや。ならば男と生れて貴樣と一夜寢て見たい。どうもならぬと懷に手を差入れて抱き付けばア、はてくろし放させ。女子同士寢ようより一人寢て本の事。夢に見たのに德があるとじやれに紛し逃入れば。私も夢の相伴とフシ追はへてこそは入りにけれ。地此の人音に源五兵衛あらはれては身の落度。お暇申すと駈出づる小萬押留め。詞覺悟あつてするからは其方に難儀かけはせぬ。ハテ高が後家の身いたづら者といはるゝまで。地思案がある待つてたもといへどもいや〳〵お屋敷は如何もあれ。生國薩摩は人改めつよく我等は今にお尋ね者。此の事國へ聞えては召返されて罪科にあひ。一門の恥お萬が歎き塀を乘越え夜の中に。大津までもといふ處へ林はたしなむ長刀。裾ばし折つて捲り上げ奴殿動くまいと。椽端に躍り出でたるはフシ狂氣とならでは見えざりけり　詞ホ、ちと合點が參るまい。これ小萬。我こそ肥州熊本笹野三五兵衛。我二歳の時親三五左衛門は。武州の遊所にて石子久彌といふ者に討たれしぞ。幼ななれば夢にも知らず四歳で母に後れ。一門の介抱にて十四の年跡目を繼ぎお手前と縁を組み。迎へ取るべき用意の最中毎日門に貼紙して。狂歌俳諧さま〴〵の落書を立て手中指さし嘲弄する。如何なる故と聞合すれば親の敵があるといふ。地弓矢八幡知らぬ事は力なし。敵石子を討取り此の恥を淸めずば。本國へ歸るまいと譜代の下人に心を合せ。頼みし寺と內談しめ　三五兵衛病

死と披露し、鰶魚といふ魚をもつて火葬をおさなき、詞十六歳で國を出で髪をのばし女となり。十九歳の九月より今年二十三歳まで。五年の春秋附添ひ見るに顔も知らぬ夫の爲。下尼の身となりまざ／＼側に居るとも知らず、朝夕我に香花とり精進回向歎きの樣子。嬉しいやら不便なやら部屋に入つては泣暮し、名乘つて聞かせて嬉しがる顔見たいとは思うたが。いや／＼本望遂する迄と胸に包んでかず／＼は船車にも餘るべし。日頃にも似ず今夜しも彼の下郎を閨へ入れ。見苦しきざまは何事ぞあれ體の下司奴を。三五兵衛が女敵といふも口惜し。況んや大事の敵を討つ迄は無念も恥も詠えうと。心誓文立てたれども凡心の習ひ。目の前の怒り止み難く。かう破つて出るからは。討ちとも無うても討たねばならぬ。詞一本指せばうぬめも男。サア抜け相手にしてくれん。エヽ地うぬ等風情と太刀打は武運に盡きた口惜しいと。齒がみをなして歎きしはスエテ道理せまつて哀れなり。詞源五兵衛にこ／＼笑ひながら。ヤレたとへ王の息子でも。今草履取するからは下郎といはれてかまはぬ事。併し下郎を相手にするか無念ならば其の無念はやめてやろ。コリヤ音にも聞いたか薩摩の鹿兒島。菱川源五兵衛雀の餌程な米を取り、馬の脊骨を跨げた者。其方も昔は誰にもせい。當分女子で居るからはお腰元の林殿。女は相手にならぬといひたい者ぢやがそれも口眞似童しい。但し女敵といふ惡名に。髪きつた後家女に女敵とは不理窟ながらこれもしらべて益ない事。女敵ならば女敵如何にとしてもお手前が。親の敵に身を碎く此處が如何もしかられぬ。地脇差に手もかけまい女敵討つて門出祝ひ。親の敵を討ちめされ。詞それとても是非抜けならば抜かうが。身が國のならひで。抜くと鞘をたゝきわり再びささず死ぬるが。是が薩摩の正銘。時には二人討死して。親の敵久彌たつた一人の仕合せ何の役に立たぬ事。これ御同元女子衆。女敵の首斬らしやんせサア。首斬つて取らせんと。人を人とも思はぬ顔ッシさすがに薩摩者なりけり。詞いやさ／＼武士の喧嘩に工面はいらぬ。鞘割らば割れ碎かば碎け。地サア抜けと詰めかくる小萬隔たり押宥めて。扨は三五兵衛樣かいの此方を男といふことは。三年前から見たれども三五兵衛樣であらうとは。もつとも氣のつく筈も無くわしやはまつたが是非もなや。餘の奉公は半季でも季を重ぬれば打解けて。冬は同じ夜の物夏は同じ蚊帳の内。女子と女子の主従は肌を合せて寝る程に。じやれてんがうもいひ慰むそれに五年の馴染といひ。お果てなされた母樣の鐵漿親にならせられ。おれとは姉妹同然に一寸側を放さぬに。如何なる事か夜に入ればただ寝姿を隠したがり。遂に側に寝た事なく小風呂に入れば風邪引いたの。物が出來るの何のとて伽に小風呂へ入る事なく。胸へさはるも嫌がつて兎角乳を隠したがる

詞よろづ起居に心を付け見れば見るほど男ぢやが。さては此の小萬に執心かける奴さうな。悋氣するか試しの爲とわざと今夜彼の人を。閨へ呼うだは是ゆゑ。地されども佛に誓を立てた道筋はゆがむまいと。暗がりに斷辭して寢させたは外の者。源五兵衛殿を騙した此の詐言は幾重にも。身の明らかなる證據をと蚊帳打上げ手を取つて引き出す。お萬といふお髪上げ髪もほどけて所體なく。顏を赤めて源五兵衛樣。許して下さんせアヽ恥かしと袖おほふ。三五兵衛は詞なく手持無沙汰に赤面する。源五兵衛も胸つきしがちつとも苦しからぬ事。詞小萬樣も女子此方も女子。人間の身に變りなし譬へば饂飩と切麥。汁はおなじ醤油。地何方でもお振舞は同然なりとぞ和らぐる。地小萬取付きわつと泣きこれ三五兵衛樣。詞泣かずに言はうと思へどもどうも涙がとめられぬ。出來た仕樣ぢや御座んすまい。私明暮れ戀慕ひ泣き悲むを見て居ながら。地ようもだまつて居られたなう。去年の春の大煩ひもこな樣ゆゑといふ事は。看病なされたお前が證據。男は松女子は藤と元から譬にあるげな。松の力で藤もはふ男頼みに女は立つ十二の年から十九まで人の盛りを捨置いて假令道を守ればこそ。若し氣がそれていたづらしたらこな樣斬つて棄てさんすか。さりとてはつれない人。女房可愛がつたとて。ひけになるか恥辱になるか侍がすたるか。八年の月日を取返しはなるまいと。思ひの限り息かぎりスヱテすがりついて泣きければ。二人の男も理にせまり フシ泣くより。外の事ぞなき。地三五兵衛涙を押へ理とも非ともこればかりは。一言も返答なしそれはよし夫婦の中。詞源五殿への申譯腹を切らうと申すともよも切らせはなされまい。地すれは入らぬ化粧業何とも違却千萬といへば源五これ／＼お詞の中なれども。親の敵狙ふ身は盗みをしても許しある。何のこれしきお心にかけられな。詞さて彼の石子久彌といふ者は。只今名波道愚と申す雲水の身となり。或時は勢州に住まひ又は濃州信州。折々は京東山。勝軍地藏の隱遁者にちなみ。詩文など作るよし草履中間の咄なりといひければ。地有難き御物語。御恩の上のお情と フシ喜び合ふこそ道理なれ。地夜もしらしらと白む頃家の首名磯部奥茂太夫。寄親の四十平中間四五人ひき連れ。路次口たゝいてこれこれ林殿。詞お部屋の方に男の聲が聞える。錠明けさつしやれ穿鑿いたす林殿。地林殿とぞどよめきけるそりや親爺めが來をつたと。あわて騒いで三五兵衛は奴振る。源五兵衛は女子の眞似先づ小萬樣隱しませと。蚊帳へ入るやら駈出るやらフシ更に差別はなかりけり。地中にも源五物巧者騒ぐまい／＼。渡り奉公した御陰我等次第に遊ばせ。私お家に居ねばかり何の氣遣ひない事と。いふうちにも戸を敲き下々わめけばせんかたなく。土戸の錠を明くるとひとし

く與茂太夫つつと入り。さてこそ新參め縛れくゝれと取廻す。詞源五兵衞少しもひるまず。いや縛らるゝ科は持ちませぬ。夜前初めて拍子木役奥とも口とも存ぜず。戸の明いてあるからはと而も念入れ廻る處。女子衆が見付けて此處へうせたは曲者夜明まで留置いて。首名殿へ渡すとて錠を下して動かせず。地蚊にくはれて居ましたが。それでも縛らばお縛りなされと。さも有りつべしう言ひければ三五兵衞合點して。詞いかにも彼がいふ通りわしが麁相で。錠を忘れた其の間にお庭に來て居ました。勝手知らぬといひ乍ら後で知れては奥の者の過り。地夜明けて此方へ渡さうと錠下して留めました。何の別儀も無い事と。何れも武士の一疋どもフシ尤らしうぞいひなしける。詞與茂太夫頑い者。何も奥の道具に見えぬ物は御座らぬかよう吟味なされたか。地イヤ何もお道具揃うて胡散な事は御座らぬと。いへども猶顏をしかめ。詞汝は好かぬ奴ぢや。第一鼻が高うて合點の往かぬ面。きつと詮議の仕樣はあれどわきへ障ればやかましい。これ四十平すぐに大阪へ連下り薩摩宿へ渡して舟に乘るまで見屆け歸れ。渡した二歩の取替返してうせう早う／＼と睨付くる。ハテかしましい返します。おれが鼻が高けりや此方がねめる筈か。一歩は其方の一歩鼻はおれが鼻。地それ返すと投出す三五兵衞も我が身さへ。世を忍ぶ身は詮方なくこれそこな者。其方も人の一大事詞の役にも立つたであらう。さきの人が侍ならば其の恩は忘れまいと。心をふくむいひこなしお蘭は奥より走り出で。詞これ待ちや待ちや此の鼻紙入鼻紙。中にお錢もあるさうなお庭に落ちてあつたが。地其方のであらう持つて往きやと仇の契りも仇にせず。心の底に結び置くフシ露のなさけぞ哀れなる。地源五兵衞もほろりとなり是は如何にも私の。お志は薩摩でも一生忘れは致すまいと。お寢間の方をじろりと見てほんに切麥でさへ此のお情。こんな事なら箸ついてに。饂飩も一膳たべましよものお殘り。多やと 三重 出でにけり。

中之卷

サラシ歌 川下に布掲く朝來て見れば。寒する夜半の。霜と見るもの／＼合ノ手 つばき／＼谷川の椿。編笠なりに開いたら好かろなほ好かろ 地さつさ薩摩の。フシ芭蕉布。ハルフシ晒すも織るも。上方で。まなびも奈良や玉川やオクリ宇治より育ちなりけらし。地むざんやな源五兵衞京も東も足止らす。戀に心の不敵なくまた故郷に立歸り。見つけられたらそれ迄とお萬に命捨杵の。浮名晒しの其の日過ぎ奉公人やら手間取やら。出入仕事の事介と名を變へ。見つ見らるゝを取得にて フシ語る夜。なきぞせう事なき。地晒搗の女子男どもヤア事介今か。詞銀が出來たやらゆるりとやりやる。地羨しいといふ處へ内より下女が走り出て。詞なうこれ／＼今日は内方のおまん樣へ御祝言の頼み

が來る。夫で餅を搗かしやる。臼も杵も入る程にまあ仕舞うて歸らしやれ。今日の働き半日拂にせうけれど。なまなか半手間取らうより頼みの祝に皆進上にさつしやれと。お內儀樣のいひ渡しと云ひ捨て入れば皆々あきれて。詞何と事介聞いたか。其方が出入の旦那ぢやがあんまりな慾づら。おまん樣の頼みが來るなら祝儀は上から賜る筈、其の日過ぎの半手間を貪つて何程ぢや。それに今日はおまん樣。本の母御の十三年忌茶の子一つ配る事か。おまん樣がいとしい云うても一人の娘御。彼の名の立つた源五兵衛殿とやら尋ね出し。物さへ入れゝば成る事。方々首尾を繕ひ。聟に取つて世を渡いたが先づ順といもの。定めて頼みの來た方も大分取れる見込で。奉公分といふであらう。地其の跡へ銀持つて來る男の子を養うて。又銀の付く嫁を取り舉句に主の連合も追出し。銀持つて來る亭主を入れ。懲うしたらば內外の者も置きかへ銀持つて來る奉公人。敷銀する手間取りを尋ねられうも知れまい。傳兵衛のお方如何思やるとどつと笑へばヲヽそれ〳〵。詞お蝶の父のいやる通り一を打つて萬を知れ。琉球屋の新兵衛樣といつてはお國はおろか。筑紫九箇國隱れない分限者に。餅搗く臼杵持たずに晒臼を兼る程な吝嗇坊。あの心で餅搗きやるは不思議でないか事介。いや臼ばかりに限らぬ。萬の物を一色で二色三色に兼ねはらるゝ。先づ主の身から新兵衛樣を押退け父母の二役。帷子時も前垂で上下共に仕舞はらるゝ。入相時分に膳立して夕飯夜食を引つぱり。地火搔がすぐに塵取砂斬桶に柄をつけて。柄杓を遂に買はれず。狗兒仕入れて鼠捕らせ。盜人の用心と一疋で埒明け。冬は時々蒲團代り欠伸もそつにせまいとて。口開き序に念佛精進日には和物一つ。其の和物の擂木の。頭の圓いを長老の代僧で仕舞はるゝ。慈悲ある者の眞似はせず。吝嗇者を手本に杓子を定規に使はるゝ。正月の飾が釣瓶繩になるやら。七月の苧殼が壁下地になるやら。念佛講に當れば煎豆ついでに灸して。來月の庚申も取越したいとのつぶやき詞それに奇特な如來樣がほしいとて佛師を呼うでの好み事。右の御手に錫杖左の御手に縛の繩。腰から下に緋の袴御頭には烏帽子着せ。地蓮華の代りに米俵御面貌を眞赤いに御口をくわつと大髭阿彌陀如來一體で。不動地藏聖德太子。惠比須大黑閻魔大王。しまうて胴の中を空胴に刳つて二月堂の牛王と。お伊勢樣の御秡入る樣にとの誂へ。佛にさへ油斷させず責め使ふ和郎ぢやもの。衆生を責めるは道理ぢやとオクリ口々へそしりて歸りける。地琉球と家名を聞けば痔めきて。君は和國のほつとり者おまんは千々の物思ひ。七つで離れて母樣の十三年忌が二度はなし。お墓へちよつと加賀笠に小風呂敷には手向草露も涙も押包みながら竹。大儀ながら是持つてお寺まで供してたも。參つて來たいとい

ひければ。詞お袋様に問はしやんしたかわしや喚かれたら何とせう。今にお前の氣に入りの事介がおじやりましよ。事介つれて御座りませ。地いや事介はちとお寺に障す事ある。母樣の今藏に御座る間にはやう出たいといふ所へ、詞アヽこれ〳〵母は今藏から出た。動く事はなるまいと笠風呂敷も取つて投げ。詞參らしてよけりや參らする。。今日はそなたの嫁入の賴みの使來る筈で此の中女夫が用意して餅よ粭よと世話かくが其方の目には見えぬか。產み落した母御前も七歲の年まで養育。それから此の方十何年といふものは。誰が世話で其の樣に脊丈のびたと思やる。地十月の宿こそ貸しはせね恩くらべをして見たい。本母御前から釣を取る。地獄にやら何處にやら見えぬ孝行せうよりも。これ鼻の先にぎろつく此の母に孝行なら。寺も精進も取置いて。今日はにつこり笑うて生臭物で祝うてたも。其の代りに來年は祖父樣の三十三年忌 それと一度に荷うてそなたの母御は十四年忌。一年でも多ければ弔はるゝ佛も德。此方も雜作が少ないと差す手引く手に算用なり。地何時もの事なり。親ながらおまんも餘りこたへかね。もう好い加減に默らんせ。他人でさへ恩ある方親しい中は精進して。地寺道場へも參るのが先づ道さうに御座んする。腹を借つた母樣の十三年忌の墓參りが。それ程科になりますか第一はこな樣の。外聞冥加もあるものと寺へ上げるお布施も、皆此方樣の志に書付をしました。嘘なら風呂敷見さしやんせ。死んだ人への回向は此方樣への孝行。此方樣への孝行は佛への奉公母といふ字は同じ事。わしや別け隔てはせぬものを。又しては〳〵さしてもない事苦口いうて。我も瞋恚をもやしたり人にも惡氣附けさんす。精進すなならすますまい寺がいやなら參るまい。子は親次第の者なれど緣の道ばかりは。押付業には成らぬ事賴みとりたか取らしやんせ。わしや嫁入はしませぬ。其お上に一つは父樣にも問はしやんせ。月に向うて口過すも皆此方樣がいはさしやんす。餘り氣强う御座んすと。袂を顏に押當てゝ恨み、フシ歎きの其の中にも、地今日命日の亡き母を フシ慕ふ。涙ぞまさりける。詞ヲヽ泣く程嫁入りがしともなくばさせまい。一期男持たずに居やるかどれ顏見よう。地ヲヽいやさうな顏ぢや。わが身の好きやる男はおれが嫌ひ。親の許すは和和女が嫌ひ押付業はしますまい。追付け賴みが來る筈投げ返いて見せうぞと。わめき散らす折下袴に媒人が。袷羽織も鹽日好き大鯛昆布柳樽。五色の縮緬紅絹眞綿附紙臺折紙臺。二荷に荷はせ先づ萬事首尾なつて。私迄大慶と舁込めば女房。今迄夜叉の忿ちに愛敬柔和の高笑ひ。詞まあ〳〵是は是は夥しい なぜに留めては下されぬ。さりながらあなたも代が一度の事皆お仲人のお世話ゆゑ。これ姉お禮巾しやいの。彼の子も今朝から悅んで。待受けて居ましたが恥か

しいと見えました。地つれあひの新兵衛奥に待受け居られます。先づ彼へお通り供の衆は端の間へ。詞男どもは何處へ往た事介はうせぬか。地これおまん目を拭うて鼻でも亀や玉よ。此の進上物持つて來い。それ茶の下を吹きはちやつと酒屋へはしりに水が無さゝうな。吸物に何を醤油かいやざつと薄味噌を鰯炙れとやかましくオクリ連立ち〳〵奥にぞ入りにけるフシおまんは胸も。地せきかへりサア頼みを取つてはもう通れぬ。わざくれやけぢやばれて出て。忍び男の構ひがあるとゝんというて捨てうか。いつそ内を走らうかいや〳〵源五兵衛様も日蔭の身。其の上に苦を持たせてはいとしい人の身の大事。談合もするものを今日は如何して見えぬぞ。父様を呼立て變替して貰はうか。内の者は身にならず心の合うた友はなし。何とせうやら彼とせうやらやるせ涙に氣も寒がり。座敷の内をうろ〳〵とフシ立つたり居たり泣くばかり。地時刻移れば奥の間に。謠〽千秋樂は民を撫で。萬歳樂には命をのぶ。相生の松風さつさ　地お暇〳〵と。好い機嫌にて媒人は。足もひよろ〳〵立出づる新兵衛も送つて出で。兎角目出たいお目出たい。おまん様追付け好い殿持たせますお内儀様と申します。兎角目出たいお目出たいとフシくだを巻いてぞ歸りける。地母は酒氣に猶氣強く何とおまん見やつたか。詞安う積つて百兩足。なんぼ四の五のいやつても。我が身の細工であれ程の男はちつと持ちにくかろ。地皆仲人の肝精親父殿の名代に。仲人へ禮に往て氏神へも參つて來う。どれぞ暇な女子ども。供を雪踏よ綿帽子よとオクリ引きつく〽ろうてぞ出でにける。地おまんは母の町内を出離るゝまで見送りて。門口より走り入り父様是はどうぞいのと。膝の上にかつぱと伏しフシたえ入るばかりに歎きしが。地育てし恩があればとて戀の道は格別ぞや。殊更今日は大事の年忌弔ふ者は私ばかり。ほんに無縁の佛の日出家の一人も供養せず。お墓の花も枯れ次第持佛の香も消え次第。ざゝんざ所ぢや御座んすまい但し今の母様の。仕様が好いと思うてか嫁入りは思も寄らぬ事。重ねていうても下さんすな。いつそ死ねなら死にますとスヱテ聲を上げて。泣きければ。新兵衛も涙にくれ我が子の心底恥かしい。今の母に目がくれて死んだ母を忘れたと。思ふ恨かフシ恨めしや。今日は往なさんと追出さんと幾度傘は取りたれども。。詞堪忍せしも子の可愛さ。七歳から馴染みたる彼めさへ彼の辛さ。地跡に呼ぶは猶以て馴染は薄く氣兼して。互に隔てもある時は。スヱテ苦勞に苦勞を重ぬべし。詞世話の譬にいふ如く。眞の母の折檻より隣の人の扱ひが痛いといふは譲ぞや。地如何なる賢女貞女でも乳房の母には似もつかぬ。かういふ我も其の通り若い時分は色もあり。頭に霜を頂いて寝覺がちなる夜な〳〵は。幼馴染の子の親を。忘るゝ事はフシなきぞと

よ。此の度の縁付も一旦心に從うて。三日なりとも居て戻れ。其の上では如何樣とも望の通り違へはせじ。さら〳〵彼めがひゐきでなし兎角心に逆らはず。可愛がらせう爲ばかり。今日の佛が不便やな。預けて往んだ此の娘。何とて粗末に思はんとスヱテすがり付いて泣きければ。地それなら是非に及びませぬ必ず〳〵苦にもつて。煩うてばし下さんすなと。親子手を取り縋り合ひフシ泣き。叫ぶこそ。道理なれ。詞こりや〳〵戻つて見をればやかましい。雑物でもして居や。酒の上に泣いたればア丶地いかうふらつくやあぶいと。手枕すれば少ととろ〳〵となされませ。私も其の間に事介の頼みやつた。洗濯物つい仕立てやりましよふと。取出す我も其の人も。互に思ひ變らじと神に誓を掛針や。此の血を染めし指貫なりと思へば心ゐだけ絲。過ぎし其の夜を忘れかね思ひ切りかね捨てかねて。心の底に包み鍋落つる涙の絲筋に縫ひ。縫込むまへ〳〵心を碎きても先づ一旦は縁付に遁れ

哀さよ。地事介は頼みの使ありと聞くより堪り兼ね。嗜む一腰ぼつこんで。覺悟極し顏色門に駈入り。おまん樣これ來ましたとはかりにてスヱテおろ〳〵涙で立ち居たり。地おまん嬉しくハアおじやつたか先づ上りや。母樣は留守父樣は寢轉んだばかりで。ろくに寢入りはなされぬぞ物をいやらば密そといや地お眼か覺めれば悪いぞと目まぜ領き知らせけり。事介聽て合點し。詞今日は御縁付の極めがあると承り。お出入申す私が。お前の嫁入をおめ〳〵と知らぬと申すは一分立たず。御心底を聞居け其の日出度いお座敷の。お茶の給仕を地これ急爾所をまつ此樣に。お給仕でも致さんと脇差さして參つたが。はや御祝儀は相濟み御縁付は極つたか。早う聞きたい聞きたいとフシ胸なで。擦るばかりなり。地いかにも出入・の門の事其方に知らせ取持つて貰はずば。殘り多く腹も立ち無念も眞と思ひやり。さ

がたなう極りし。嫁入する日は死出立ち葬禮の儀式と聞く。此方の胸は死用意嫁入の供をしてたもらば。其方も定めて死扮装此の誂への縫物も。其の心得に仕立つれども心の底の裄丈は。昔も今もかはらぬが彼の袖下のいひかはしいよ〳〵一尺一寸も。引かぬ合點か フシ聞きたいと。縫物に事よせて問へば答の返し縫ひ。心通はす端縫のオクリ詞の〳〵縁こそ哀れなれ。フシ我もそもじもわきあけの。其の袖形の裄肩もオクリ何も。彼も未だ。はつしの絲のいとし。とまでに。フシお もはくの 針の本末覺え初め。たがひに心懸袖の縁に。より絲く丶り袖。スヱテ針目人目も思はねば。太夫親のしつけもよしや只。地とくな解かしと仕立てしに。綻び易きならひとて誰がみみづに。聞傳へさがない浮世の袖口にかけて裂かれておぢきなや。文の音信言傳も 冷泉フシ誰れつぎ。あてす。中絶えて。何時しみ〳〵と久し振り。裄丈あうた フシ夜半もなし。詞〳〵は

かなき。ものは女の身親の。詞にしたがひの餘所の小褄に。綴ぢられて フシつらや悲しや。忍び泣き涙小針にしく／＼と。まばら／＼に フシ縫ひこぼす。 ワキげにことわりやとても肩身ばかりかう／＼と。存らへはつる身巾なし オクリ縫込み。廣き身でもなしかたの惡さに裾切れで。フシ人を恨みん道もなし。 詞地思うた事云うた事今は仇なる逆衽。三寸落しに裁切つて。此の世の契麻絲なれど、來世は長き絲巻を繰返しては繰返し。撚れつもつれつ合せ絲。六道の縫目に待針して。フシ手はおそ／＼とも待ちぬべし。 太夫地ア丶跡も結ばぬ絲筋の。一筋先へ抜けんとや。一人残りてまた／＼と誰を相手に裾合せ。針道違ひ着にくしと。手づつの浮名は。フシ取るまいとよ。ワキ地拙は頼もしなまなかにまた着換へなき此の生は。五尺に足らぬ襟落し狭き浮世は何かせん。太夫戀にさはりのせき縫の。ワキ積る思ひを。太夫肩あけて。太夫ワキ同じ刀にたち違へ。一つ枕に伏縫して。三途の川の脊筋にて。太夫結びとめましよ。ワキ縫留めましよ、太夫ワキ留めて。とまらぬ涙の絲裾を引合ひ褄を引き。二人がなげき諸共に スエテたゝみ込めつつ。泣沈む フシ世にたよ。りなき戀路なり。地時しも表に念佛も鉦の響もあはれげに。ほそ／＼と女の聲。 詞これは上方より諸國を巡る修行の尼。草鞋の價頼みますと。地聲付卑しからざりけり新兵衛起上り。詞ヤア事介來たか。あれ一錢取らせといひければなう父様。母様のお位牌に念佛一言手向の爲。彼の修行者を持佛堂へ呼入れても大事ない事か。ヲヽ氣が付いた奇特奇特。殊に比丘尼の事といひ、雷奴が戻つても大事ない事。地それ事介呼び入れよはいといふよりおもてに出で。見れば京の屋敷にて假の契りのお蘭なり。互にはつと驚く顔事介ちやつと我が身を陰に。かぶりを振つて口の内。何もいふまいいふまいぞゑへん／＼と知らすれば。心得うなづく目許にも フシ浮ぶ涙ぞ至極なる。詞これ内方から志がしたいとある。此方へ／＼と案内すハア御免なりませと。地笠を脱いで腰かくるおまん茶を汲みもてなして、詞若いお人の上方から筑紫の果まで修行して。發心の因縁は如何した事か知らねども。今其の身には苦もなうて羨しう御座んす。ほんに此の世の佛ぢやといひければ。あのおしやんす事わいの。苦は色かゆる松風通り風の吹く様に。身にも染まぬ一時戀、物いふ間もない仇男と。地假初臥の轉寢後も前もない戀なれど。お前様も姫御前。女のはかない心から二人に枕交すまいと。思ひ初めたが善知識、詞髪容つくつてさへたかのしれた私の標致。衣を墨に頭を圓め戀慕はれうと思はねば。地いつそ氣樂で何れ佛では御座んする。されば佛は石上樹下とて石の上、樹の下蔭のやどりも厭ひ給はねば、岩が根枕氣散じながら寢覺／＼にどうやらすれば。彼のあだぶしの因果めが煩惱

を起させますと、餘所に語りて事介をフシ見日に睨むぞ氣味惡き。地事介も迷惑さエエこゝな佛殿。問はず語りせぬものぢや。地近頃佛とも覺えぬ人ぢやといやがれども、新兵衛氣も付かず菩提の緣はさま〴〵殊勝にこそ存ずれ。詞今日は我等が先妻の忌日。彼の中二階の持佛に薰譽蓮淸と申す位牌。あれにて念佛御回向頼みます。地それならあれへ通りましよ。いざ〳〵あれへお通りと二階へ上れば新兵衛。事介頼む何ぞ一種で非時をせい。さらばお布施を包まうと。フシ奥の間にこそ入りにけれ。地二階を見上げて事介エ、打見には殊勝らしく。話を聞けばいたづら者信心がさめたれど。非時をせよとのいひつけ豆腐でも取つて來うと、起たんとすればおまん取付きコレ待たつしやれ。詞彼の尼は内々咄にいはしやんした。小萬樣の侍女お蘭であらうがなぜだまつて隱さんす。但し私があのお蘭を取つて噛まうといひましたか。如何いふ心で御座んすと問詰められて顏を赤め。ム、今の尼の咄がお蘭が噂に似たゆゑに。其處を以ての惡推か。イヤ是はいかいはまり。彼のお蘭があの尼程見えれば薩摩へ戻らず京に居る。味なら出た顏見せたかつた。地頭は赤熊猫背鳩胸に顏は猿。まちつとで鵺になる思ひ出すもないや〳〵。暗がりの商はせう物で御座らぬと。まぎらかし出づればいや〳〵〳〵いはしやんすな詞夫ならなぜ門口で咳拂して首肯あひ。何もいふまい〳〵とは何の事で御座んした。地命をかけ身を捨てゝ親に見返る男なれば鼻息にも氣を付ける。低ういうたら聞くまいと思はしやんすが不覺の至り。過ぎにし事を輪廻深くいふ氣はさら〳〵無いものを。問はれてもまだ隱さしやんすさほどに隔て心を置き。未來までとはよういはれたお蘭が來たも皆あひけん。つもられた騙された逢ひ初めし時の誓文を、金輪際と思ひ詰め男を大事にかけるゆゑ。今の母に逆らひて常々疎み憎まるゝ。袈裟まで憎い世の譬へ今日の年忌の佛まで、憎まするは我が戀ゆゑ多くの罪をつくりしよ。皆徒に成り果てた死んだ跡では彼のお蘭と。心やすう添はしやんせわしや死にますと事介が。脇差拔いて我が胸に突通さんとする所をこれは短氣と飛びかゝり。地柄に取付き。これ〳〵今日の日天御照覽少しも隔つる所存なし。思ひがけなき處へ來て我も當惑したる上。氣にかけさせて無益と思ひ先つそで無いというた分。地隱し遂げる心でなし前後の聞分なう。氣が短いともぎ取ればア、氣が短うて鈍な事。見ながら生きては居られぬと又取り付いつもぎ取りつ、競り合ふ中に母親は表まで歸りしが。内の騷に心をつけ暖簾のかげより覗くとも。更に白刃を奪あうてやう〳〵男もぎたくり。手許に置かじと力に任せ投ぐる拔身が一はづみ。二階比丘尼が小腕にきつさきはづれにずつぱと立つ。狙うてはよも當るまじ。障子にさつと生血引て、朱に染まれば兩人

の口說もわきへ興さめて フシこれは。〱と騒ぎしが。地されども淺疵かひぐしく。二階の梯子ふみとゞろかしこれ源五兵衛殿おまんどの。詞さすがは田舍夷よなう。男に執心ひかされて尋ね來たとの惡推か。執心殘る程ならばあたら姿をむごたらしう。木の端と窶さいでも人は情の心の花。花の匂ひに引かれては深山谷の奥までも。離れ難なう慕ひ來る戀路とても其の如く。地此の胸一つ据ゑたらば源五兵衛殿で御座らうか。業平殿で御座らうが戀の絆に繋ぎ留め物の見事に添うて見しよ。詞されども國のおまん故かうなつたとの物語。我が身の事は思切り其方に早う逢はせたく。路銀まで取りしつらひ其の上にも其の中は。地何とかなりしと氣懸りにてとても捨てたる此の身の果。修行がてらに餘所ながら戀には味方のほしいもの。役には立たずと力にもやと八重の汐路を渡る。都女の戀の仕様見習うて手本にしや。詞それに[illegible]を投打してだまし討に殺さうや。コレ其方の手では得死ぬまい。地サア源五兵衛殿尋常にお手にかゝれば身の本望と。脇差拔いて手に持たせ。泣きわめいて武者ぶりつく。おまん引退けこれかしましいしちくどい。詞都の上方の聞きともない置いてたも。西國の筑紫のとて情の道に變りはない。そなたの樣にいふならば。西國はまだしも唐には戀はあるまいか。地これかうならんだ妹背の中其方の樣な女房が、千人萬人妨なし存を入れても離れはせぬ。何が邪魔で殺さうぞ怪我にあたるは其の身の不運。いはれぬ遠のお見舞から。都衆の戀には手傳が入るさうな。薩摩の戀に味方は入らぬ早う出て往ね。腰が起たずは縄つけて引きずり出すがうせまいか。いや張合になつたればかう居た處を動きはせぬ。オヽいごかずともいごかせうと フシせり合ひ捻合ひ立騷ぐ。地新兵衛かけ出であたり隣もあるぞかし。兩方だまれ鎭まれと制すれども聞き入れず。母親始終を聞きすまし天秤棒押つ取りのべせりあふ中を容赦もなく鎭まれ〱片端に。撲ちすゑてくれるぞと叩き廻りし勢は。只山姥の山廻り フシ舞ひそこなうたる如くなり。銅鑼の樣なる聲あらゝげ。詞エヽ親父殿がなまぬるし括し上げて置きはせず。彼奴等が口說の揚屋の亭主になる氣か。やい事介。おのれはお尋ねの源五兵衛。大事の娘をそゝのかし塞りの此の國へ。前髪落して態をかへ又彼の子に惡氣を付け。人の目をくらますは人買よりもの太い奴。地たゞさへお國は人改の嚴しさに此の内は。月に一度の判をする。見知らぬとて是非もない手前にふだん飼ひ置いて。外から上へ聞えては同罪といふ一筆の身拔けがならうと思ふか。詞御吟味所へ引渡し牢へ入るるはやすけれど。おまんが心底はかつて腹をかき忠母のゑに。世間内證義理一つで沙汰なしに往なするぞ。地尼めも共に出て失せうと帶かんざしとは耳かはの。道理至極に返

答なくおまん涙に正體なく。源五は手を突き頭を下げ。詞元に越度ある上に重ね／＼の誤り。如何樣になるとても御恨みとは存せず。地只御夫婦娘御の御難儀のなきやうに。兎も角も御計ひと差俯向いて居たりけり。詞情ある新兵衛も私ならねば詮方なく。疾くにも斯くと打明けて仰せられば何とぞ思案も致さうもの。地近頃殘念氣の毒といへばおまん縋りつき。とてもお慈悲の上からは私も源五樣。一所にやつて下さんせ拜みますると泣叫ぶ。母はいよ／＼腹を立て。詞汝が一所に出て往んで。賴みを取つた聟殿へ此方とは死んで見せうか。地それ親父殿奥へ連れて往かつしやれ。事がのびれば尾鰭がつく男どもは居らぬか。詞此奴が宿は坊の津にあるげな。家主へ渡して來い。地心得ましたと引立つる。おまんはわつと聲を上げなう源五樣お蘭と連立ち御座んすの。アヽ羨しい腹の立つと。恨み歎けは源五兵衛往きたうては往きませぬ。今此の庭でさつぱりと死にたいわいのとばかりにて スヱテどうと伏して泣沈む。地手あらき薩摩男の無意氣者死にたくは我が宿で。たゝき殺してくれうぞコリヤこれを見よと振上げて。振廻したる坊の津や棒づくめにて三重へ送りける フシ何時の間に。地日の暮るゝとも夜の更くるともおまんは分も正體も。泣きつゞけなる孀鳥親のしがらむ背戸門に。人目の網のしげければ魂ばかり飛ぶ鳥の。翼折れたる如くにて屋敷の内を此處彼處。逃出づる隙間もがなと尋ね廻れど常々に。用心くはしき屋造り フシ風の通ひもなかりけり。地見付けられたらそれ迄と布織る下機取組みて。庭木の松にもたせかけ我が身ながらも恐ろしき。智慧の梯子を上るにも盜みする氣のかくやらん。ふるひ／＼もやう／＼と。枝に取付き フシ塀の上へはあがりしが。地周圍は用水底知れず幅一丈の堀切にて。下るゝに足手のかゝりなく飛ぶこと難き石垣なり。此の上は思案もなし思切つて飛んでのけう。水に溺れて死んだらまゝ千に一つも神佛の。力もあらばと思ひきりひらりと飛べば南無三寶。帶を松に引つかけて宙に下つて是も彼の。罠にかかりし野邊の雉子 フシつまゆゑにこそ苦しみけれ。地かゝる處に如何はしけん、お蘭比丘尼は紛れ來て締めたる門口見世格子。覗きありき裏へ廻つて此の姿一目見るより。はつと驚き怖氣立ち。フシ念佛申して居たりけり。地おまんは夫と見るよりもヤア汝は又來たか。詞思ふ夫に添ふが、言分はあるまいが。我に恨が殘つて殺さん爲に來たよな。地口惜しやこれを見よ内は忍び出でたれども。兎角男に緣ないしるし其方が手にかけいでも。しばしの知死期を松が枝の折るるまでの命ぞや。詞定めて源五樣も同道と覺えた。鐺はあるまい竹の先に小刀でも結付けて。夫の手にかけさせて殺してくれよ。地エヽ苦しや身がしまつて息切して。アヽ苦しやと悶えしは フシ目もあて。

られぬ風情なり。地なう勿體なや我等に左樣な惡心なし。もとより源五樣に露心殘さぬ上。今日御二人の深い中そもやそも此の尼が。半時も男の側に居ては女の道立たず。三衣の罰も恐ろしく此の世では源五樣に逢ふまい見まいと鉦を打ち。明日の夜明に上方へ幸ひ出船の作もあり。夜の中に港までと思ひ立ちしが待てしばし。おまん樣は如何してぞ力にも成らうと申した一言。詞にはせまじと來た證據。死なせはせまい聲高に暇取つて見付けられては一大事。何としてがな下さんと驅廻つてこれ／＼たんと晒布が干してある 詞 此の端をきつと結付け此方は此の木で留て置く是をたくれば樂々おやと 地 石をおもりに結び付け。投げても如何とゞくべき。力の程も白布の フシ松にかゝるぞ仕合なる。地 おまん嬉しさ恥かしさ疑は御免あれと。伏し拜み／＼布引絞り フシ松の木に。しつかと括り付けければ此方は尼が締付けて。しつくりの木に留めてけりおまんは片手に布を取り。片手を廻し松の木に懸りし帶を引き放し。左右にたぐる布引の瀧津心の胸をどり。目眩ひ氣も消え絶え／＼の雲の通路天津風。尼がせくまい／＼の。聲を力にやう／＼とオクリむかふの〽岸にたぐり着く／＼。地 サアしてやつたあぶなやと抱き下せば夢心地。アヽ正眞の生如來是が誠の善の綱。お禮は何と申さうと泣拜むこそ道理なれ。禮をいふ間に夜が明ける所の人に教へるは。釋迦に經か知らねども陸を往けば遠うて追手の氣遣ひ。九里の渡しが近いけな一足なりとも早いがよし。此の尼は今生で逢ふ事は是迄。一所不住の出家の身互に便りも是限り。早う／＼と別れ行く仇を御恩の情人。名殘はつきず上方で芭蕉の布を見る時は。形見と思うて下さんせヲヽこな樣松葉の相生まで。わしや一人寢の芭蕉布御恩生平の目も詰る。涙に袖は半晒今ぞ一期の織留と。互の心太布の名殘は一反裁切つて。二丈六尺五尺の身戀にさらすぞ 三重〽哀れなる。

源五兵衞おまん夢分船

歌〽源五兵衞何處へ往きやる。薩摩の山へ。後はおまんが。涙の海よ。船もおされず。櫓櫂も立たず。寄邊尋ねてうか／＼。うか／＼こがるゝ。源五兵衞こがるゝ。〽高い山から谷底見れば。布を晒すは。夏こそよけれ。おまん心は冱寒の冬か。雪の面影ちら／＼。ちら／＼忘れぬ。源五兵衞面影 フシすがたは四季の。花なれや。時折り／＼にはやり行く。山ぞ伊達者の山葛。引手かず／＼數ならぬ フシオクリ心の〽種の。笹舟に フシなさけの上荷。はねられて思ひは。沈むヤツサ。やつさ／＼の空櫓の音もオクリ耳に。悲しく遠ざかる彼の故郷へ此のまゝで。フシ又歸らじと思ふにも。是が此の世を出船ごと。親を恨みの目は涙。地何に生れん鹿川松のむらだち夏樹立。歌甑島人打群れてサンサ沖。に網曳き釣たるゝ波の雄波を。かきわけ／＼走る兎の名所ぞや。フシよゝ

の曠野にのがれ來て。遊ぶ野猿や鷺鷗。筑紫の妻を都鳥ありやと問へどいかにとも。牧の野馬の馬の耳オクリ風福。山の渡守我が思はしらすげに。舟もうしほ。 フシも引く方に。下り行く濱は。遠目の岸高千穗の嶽。高けれど。高い聲せぬ二人が中の。契は此の世後世山かゝす。ほとゝ鵑 フシ世にもれて。蓮牧聞の。神の氏子の神歌や 歌ヘ おらは知らぬが子供等が囃す。おまん寢處に足や四本となんしよばへ。寢處におまんおまん寢處に足や四本となんしよへはヘ フシ謠ふ一節。舵の音鷗の友呼ぶ聲までも。地此方が浮名のうはさかと餘所のひがこと焚付の硫黄が島は一霞。流され人のあの島で フシ流す卒塔婆も立つ。波によりくる〳〵よりくる絲は。くまの三筋が。流れくりつる。ちんりちりつる三味線の。フシ渡り初めにし國とかや。スヱテ琉球國に打續き 歌ヘ 薩摩や。三が國に。霧雨が降らばよな。それぞ立つ名のうき。雲の フシ雨の。杜とてぬれて行く。油は嵐の吹乾かして。顔は涙の水鏡アヽあれ。あれ〳〵。眉の引墨べに落ちて。髪はばら〳〵みるめ和布に。もつれみだれて何時節の齒の 歌ヘ 櫛になりたや。ヤレサテ薩摩の櫛に。諸國娘の。ヤレサテ手に渡ろ。どうがねの。よんぢり嫁御はよい嫁御。此のなん〳〵この。よい嫁。あれ見さいな霧島山の横雲。此のなん〳〵此の横雲。横雲の下こそ俺等が親里。此のなん〳〵此の親里。妻里が夜の間に近くなれかし。此のなん〳〵此の。フシ なれかし。戀しき方も。近くなれ潮みちくれば水馴棹。長き日影もほの曇り心づくしや氣づくしに。暮れぬさきより我が心夕暮の闘眺めやり。眠る鷗に誘はれて。うたゝねぶりのふら〳〵とスヱテ船にゆられて睡るらん。舟人も。睡りこがれ行く。地そも一睡の假枕皆一心のむすぼふれ。夢を結びて荒磯海夢か現か 幻か。更に分ちも七流れ流 灌頂血の上の。亡者浮ぶる法の水。オクリ あはれに 歌ヘ もまたユリフシ不思議なり。地導師のあ僧鉦打鳴し。地釋迦は去り彌勒は未だ世に出す。彌陀の悲願を頼まずば何時か火宅を出船。乘りおくれては誰か渡さん。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀〳〵〳〵南無阿彌陀佛南無阿彌陀。地如何なる人の何故に。刄の上の往生か。產のちら血か世の中は。餘所の事とも思はれず語り給へと尋ぬれば。誰がいふとも浪の音弔ふ人は琉球屋 おまんと申す姿の花末源五の手にかかり。消えて散つたる血刀の。法の誓もあさましや其のおまんとは我が身の上。婆婆か冥途か如何にとも。スヱテ おほつか涙せきかぬる。浮世の恨み葛の葉のかへす刄に腹掻破り。男は最女は宵。一夜ばかりは隔つれど末の逢瀬は一筋に。流れ寄るべの水施餓鬼 フシ語るも我が身聞くも我。地心一つをいろ〳〵に。む。す。ぶは有漏路とくれば無漏。萬事は夢のたはぶれの手にも取られぬ沖津風濱風。潮風さつ〳〵さつと

して覺め行く夢のあと見れば。ありしは。浪の音どう。どうとして。海上空しく フシ 渺々たり。元の我が身にて。地 おまんは驚く舵枕我が身は淺瀬の波に下りひたり歎きの聲に舟人が。舵取直す面舵の思ひまはせば夢なりけり。心もとなや我が夫に怪我過ちの知らせの夢と。かつばとまろぶ兩袖に涙も潮も滿にけり。夢違へしつ轉じ反へ心も波も立騷ぎ。痞は上る山颪吹くや追風のそよ〳〵と風のいろはに帆を上げて。走り行方は薩摩潟沖の雄波にあこがれて。たより渚に立つ雌波身を碎。くこそ 三重〽 ふびんなれ フシ 尋ねめぐるや。地 はう坊の津鹽の辻なる裏貸家。かねて聞置く目標あり嬉しや此處ぞと走込み。詞 ヤア、これは源五樣死なずにまめで御座んすか。地 先のが本か是が夢か。どれが夢やら誠やら息が切れた水一つ先づ飲。ませて下さんせとどうど伏しくゞ泣き居たる。地 源五抱上げ水含ませ。

ようこそ〳〵心底届いた滿足した。此の上からは親里の首尾は兎もあれ角もあれ。首は首胴は胴甲が舍利になるとても親の手へは渡すまい。落着いて氣を鎭めやと背中をさすり撫でおろす。おまんも少し笑ひ顏此方樣の顏見たりや。胸も大方しづまつた氣遣して下さんすな。詞 さて〳〵憂い目辛い目や身の一代に覺えぬ事。裏の高塀飛びぞこなひ堀へ落ちて死ぬる場を。お蘭比丘尼は命の親結ぶの神。地 眞實奇特な介抱ゆゑ鰐の口を遁れ出で。やう〳〵と福山の船に乘り九里の渡も千里の如く。とけしないやら怖いやら氣がくたびれてとろ〳〵と。船ばりに手枕して寐るとも思はぬ其の間に。詞 まざ〳〵しい夢を見ました。わしや此方樣に斬らるゝ此方樣は又腹切つて。女夫殉の死人の爲と流灌頂七流れ。殊勝らしい坊樣が鉦をはつてお念佛。わしや悲しうて〳〵何やら泣いてくどいたが。いうた事は覺えねども我が手に我身の回向して。念佛申すが耳に入りふつと目が覺めうつとりと。今のは夢であつたげなサァ徒事ではあるまい。此方樣の怪我過か但し浮世を見限つて。例の短氣が起つたか早う逢ひたや聞きたやと。地 胸も心もわくせさして帆掛船さへまだるうて手繰つく程氣がせいた此の樣に無事な顏。見まいかと思うたにわしやがつくりとなりました。善いにつけ惡いにつけ夢は三日が大事のもの。必ず人に逆らはず身を愼んで下さんせ。詞 これ此の袖見さんせ。夢に泣いた涙で今に濡れてあるわいの 地 思へば〳〵夢の間の悲しさか。本の事ならどうせうぞ夢が合うたらどうせうと。夫の膝にもたれ伏し フシ 聲を。あげてぞ歎きける。地 源五は男氣打笑ひ。詞 チヽ氣がくたびれてはいろ〳〵のわけもない夢見るもの。身に金が入るとて斬らるゝは上夢。おれも去年怖い夢。天狗の鼻に取付いて女護島へ渡ると見た。其の明くる日餘所から松茸と赤貝を貰うたと。地 語ればおまんも噴出して

エイ好い加減な事ばかり。アヽ久しうて笑うた家では親の氣をかねて。誰にあまえる者がないわしや此方様にあまえる。あまやかして下さんせと頬杖枕身を横に。互に足を打ちもたせフシ來し方語るぞ盡しなき。地斯る處へ母親は下女下男引連れ。案内もなくつゝと入り。詞ハアヽおまん此處にか左様あらうと思うた。來るなら來ると二人の親に何故知らさぬ。人も連れず着の儘で親の外聞構はぬ氣か。地云ふ事いうて仕舞うたらきり／＼戻りや迎ひに來たと。前後もなく云捨てけりおまん挨拶いはんとするを。源五兵衛押止め突と出で。詞これ／＼昨日迄は其の方へ。出入奉公下人分の事介。今日より元の菱川源五兵衛。一錢持たねど侍のらやく／＼。十萬貫目持ちやつても琉球屋の新兵衛。詞も違ひ座も違ふ。推參至極な案内もなく踏込んで。歸れといふは誰が事。此のおまんは身が女房侍の妻女は。夫の心次第にて親のまゝにはならぬ事。おのれが宿にて新兵衛を廻いた格とは違うたぞ。地其の方ばかり早や歸れ長居をせば引きずり出すと。烟草引寄せ烟吹きフシ取つてつくべき方ぞなき。地女房さすが物仕にて詞を和らげ。詞御尤／＼連れて往んだら戻すまいと惡うお心廻つたさうな。親が千萬嫌うても主が心に好いたもの。戻さぬとても彼の子が戻らずに居やるまじ。地親も何しに留めませう。さりながら琉球屋ともいはるゝ我々娘一人をしつけかね。長持一つ送らぬと外聞惡い沙汰もいや。第一彼の子が身祝ひ屹と仕立てゝ送りませう。新兵衛心も其の通り其の證據に今日は。祝うて餅を搗きまするちよつと戻して下さりませ。善哉祝うて戻しませう。サアおまん立つておじや。サアおじやいのアヽしぶとい子やといひければ。おまんは中にうろ／＼と情なや疎ましや。あのゝものゝがやかましいちよつと戻つてさらりつと埓明けて來ませうか。詞何處へ／＼。母めが言分皆僞り。だましすかして連歸り。賴みを取つた聟の方へ。送らんといふ心底面つきにあらはれた。門より外へ一寸も出しはせぬぞ動くな。地母めも今日が明日になり千日なりとも居たくば居よ。おまんに於ては戻さぬと既に顔色變りけり。地母はもとよりたゞ者ならず。アヽ詞町人のあさましさお侍の作法は知らず。是非に及ばぬ何とせう。駈落人のお尋ねものそれでも武士が立つならば。いはれぬ肝精やかうとより町所家主を。賴んで連れて歸りませう手間も隙も入らぬ事。地皆來いと起たんとすおまん取付きまあ待つて下さんせ。町所へ斷つて源五樣を今の間に。牢へ入れうといふ事か連立つて歸りましよ。先づしづまつて下さんせこれ源五樣萬事人に逆らはず身の愼みと申した事。必ず忘れさんすな大事のお身ぢやが合點か。何も私が胸にあるちよつと戻つて親達を。なだめて歸ればさらりとすむ私次第にしていなさんせ。つい戻りましよと

いひけれども源五兵衛合點せず。詞イヤ明日戻さば戻しもせん。今日一日は此の源五が。戻さぬといふ一言。首になつても地言ひ通すとフシさら〳〵戻す氣色はなし。地母は名に負ふ我武者ものヤア丶しやまだるい男ども。おまんを引立て連れて來い畏つたと下男。床の上へ駈け上る源五兵衛駈け寄り。侍の女房に指でもさゝば片端に。泥臑切つて切りすゑん寄つて見よと睨めまはす。薩摩一國名取の男。源五兵衛に睨付けられフシ左右なく寄付くものもなし。詞母事ともせず打笑ひ。臆病な奴等かな。昔が今に至るまでにらまれて死んだ者はない。地おまんおじや手を引かうと立寄る處を抜打に。頬さきかけてずつぱと斬る切られながら刀の刄に。しがみ付けば手の内くられ朱になつて逃廻ろ。おまんは母をきらせじと立ち掩ひ立ち隔たり。抜身の下へ〳〵と廻りける男はおまんをよけん〳〵としけれども。せきにせいたる手ものびて見込の曲合外れけん。おまんが左の肩先より前は乳房を袈裟がけに兩へさつと切下げられフシ既に最期と見えにける。母はひるます大聲あげ。詞やれ人殺し切つたノ丶と。地呼ばはる聲に當町隣町驚き騒ぎ我も〳〵と駈け集り。手負をいたはり源五兵衛取逃すなとぞひしめきける。詞源五騒ぐ色もなく大肌脱いではつたとにらみ。やかましい町人ども逃すなとは誰が事。衛によつて此の源五が立退かば立退きもせん。逃ぐるといふ字が聞きにくい刀を抜くは人を切る覺悟。人を切れば死ぬるは覺悟嘘か實かこれ見よと。左の肋に刀を突立て。ゑいやつと引廻し返す刀を喉吭に。地立ては立てゝ抉りしが腹を深く切りたれば。腕先弱りのつけに反りフシ半死半生あはれなり。地かかる所に風體千石ばかりなる侍夫婦。供廻りはなやかに親新兵衛に案内させ。息をばかりに駈付け未だ死切らぬか。嬉しやと。夫婦の手負を看病し耳に口寄せ大音上げ。詞エ丶いひがいない源五殿。先年京都で參會した林と申した侍女今は笹野三五兵衛。是は我が妻其の時の小萬見忘れたか。不慮の縁によつて親の敵の在所別名まで聞いたる故。翌年敵を討ちおほせ數年の本望遂恨をはらし。此の小萬と夫婦となり本國本知に歸參して。會稽の恥辱も雪ぎ武門の美名をかゞやかすも源五殿の御情。御恩は海山報じても猶報じがたし。まづ御自分の行方を尋ね拙者が主人を頼み入り。お國を廣う彼のおまんと比翼の盃取結ばんと。心の限り尋ねても今日まで行方知らず。其の内にあのおまん外の縁に付けさせては恩を報ずるゑひもなし。まづ外の手を止むるためと我々夫婦が思案にて。靜かに貴殿を尋ねん我等が方へ呼取つて。媒人頼み作り名して。云入れの頼み途つたは此の三五兵衛であつたぞや。地殘り多や殘念やさりながら曲がないよし此の方こそ知らずとも笹野三五兵衛こそは。親の敵を討ちおほせ本

懐を遂せしとは。九州に隠れなきものをなぜ尋ねては下されぬ、但し今零落て詫ふまいとの身の卑下か。但し又拙者が昔の恩を忘れて、見ぬ顔しさうな三五兵衞と見付けられたか恥かしい。さりとは聞えぬ恨めしいせめて好い折對面して、詞をかはして滿足した。地後に聞いて三五兵衞に追腹切れといふ事か。さりとては曲もない其の答おやない源五殿とスヱテいだき、付いて泣きければ。いまはのおまんも目を開きじろりと見たる目は涙、源五兵衞も手を合せ忝いとばかりにて谷わつと泣く涙フシ落ちてながれて紅のあけの。血汐も洗ひけり。地ア、三五殿御夫婦の御禮は來世でく。とてもの情に御介錯早うくと苦む聲。エ、賄がひない氣遣ひすなもつとも深手といひながら、本國長崎に黄陳といふ南蠻外科。昔の華陀が仙方を傳へきたえたる筋。折れたる骨落ちたる首もつぐ名人。此の療治にかけたらば、夫婦が命も恙なく、千年までは千石取が受取つたりや松の風凰に當つるな身を揉むなとりぐさまぐ取りつくろひ、乗物に乗せ三味線に乗せて。謠ふは源五兵衞どこへ往きやるぞ薩摩の山の山は。寶の山とかや。

右之本令吟覧頭句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾 [竹本] [博教]

重而予以著述之本令校合候
畢至可爲正本者歟

近松門左衞門

正本屋 山本九兵衞版元

大阪高麗橋壹丁目 山本九右衞門版

雪女五枚羽子板

近松門左衛門作

檀車うて囃した檀車うつた見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ。殿ハナ。笛吹のヤ。家で。紫竹寒竹、挨をさ。さつさと掃うて。通らいの〳〵。お年玉は到来の。此方からも遣らいのと。合せ吹いたるはさつても吹いた笛吹と。どつと褒めて通した。門松立てゝ囃した御松囃を見さいな。藤内太郎。アリヤ、コリヤ。殿ハナ。斯波殿のヤ、御近習。弓矢打物お馬をさ。さつさと乗初や。蓬萊の〳〵。榧搗栗膝栗毛。熨斗昆布に川原毛と。祝ひ乗つたるは。さつても伊達な 地 お侍と ヲロシ〳〵 どつと都に。褒めにける。地 主君斯波の左衛門義將は。當家の管領たるに依つて藤内太郎が文武の器量。將軍義教公の上聞に達し。御直の諸武士同然に年頭五節の御目見え、殊更笛の達人にて小水龍といふ名管を。上より預け下さるゝ。そも此の笛は天暦の帝の御寶物。國に異みある時は吹かぬにおのれと音を出す神妙あり。御先祖尊氏將軍より代々に聞うる笛の音の。ひいや兵亂治りて寶祚百王の堅めたり。時は永享八年正月三日。將軍家の御松囃花山の御所にてあるべしと。藤内太郎は笛の役御預りの小水龍、餘寒の風に吹き反らし。未だ夜も深き五更の一點。フシ 虎の。御門に着きにけり。地 太郎挾箱に腰打掛け。詞 御松囃は辰の刻との御觸なれば。役人伺候の諸大名衆の中より群參あるべきに。御所の内ひつそとして御門も未だ開かれず。地 不思議さや退屈さ。奴に持たせし煙管筒。一服ついで燻らする目覺草ははつとり（服部 初霜）の。八聲も鐘の霞み行く ヲクリ 門のへ〳〵檜皮を踏越ゆる ノン 霜の褄袖。詞 角前髪取りかはす手もわなゝと。女が帯の若紫 茶宇の袴の信夫摺。亂れ逢ひにし密通の フシ 賍落とこそ知られけれ。地 咎めて無益見ぬ顔せんと。下人等にもさゝやきて築地の蔭に忍ぶとは。見ずや知らずや門松を傳ひ下りたる人も木も。詞 連理の女松男松かや太郎いよ〳〵身を隠すを。詞 彼の若者きつと見て。地 打物拔いて弓手より背もかけず打ちかくる。刀の柄にて拳を打ち太刀擲落させ、二の拍子にて胴骨あて踏付くれば。女は叉右の方より打ちかくる。拳を打たんと持つたる笛、振上ぐるを付入つて笛を二つに切折つたり。すは狼藉者と取つて引寄せ二人をどうど引敷いて。詞 ヤアこび過ぎたる奴等かな。斯波左衛門が家來藤内太郎家治ぞ知つつらん。おのれ等不義の賍落見遁しにする處に。却つて手向ひ剰へ御預りの笛を切折り。地 言語道斷の始末白狀せば許すべし。僞らば縄をかけ四職衆の白洲に引居ゑ。一家一門

の恥を見るかサア分別次第と申しける。詞若者聽する氣色なく。チヽ藤内太郎能く知つたり。我は一色が末子大炊之介久常といふ奥小姓。此の女は御臺所に小田卷といふ御侍女。地阿漕が浦のぬけ舟も度かさなりし通路の。赤沼入道幸滿に。見付けられ御成敗たるべきを。直に入道がはからひにて。隱密に命を助け御所を夜ぬけにせさせ。詞此の恩賞には御門前に藤内太郎相詰めたり。お預りの笛を二ツに切折つて得させよといふ。心得ずとは思ひながら一旦の恩を受け。否といふは卑怯と思ひさてこそ笛を切折つたれば。入道が恩は報じたり。さて是からは其方への話。入道が根心上へ對して其の意を得ず。御分が主人左衛門にもいひ聞かせ必ず油斷あるべからず。地某身にも望みあり正八幡ぞ僞りなし。なんと落してくれまいかと スヱテ 理非を決して語りける。詞チヽ一色大炊之介殿承り及うだ。お身柄と申し御誓文虚言はあるまじきりながら。明朝は御松囃の御觸なるに。はや東雲に及べども。其の沙汰なきは樣子あらん。御前向を有體に承らんといひければ。小田卷聞いてムヽさては御存じ候はぬか。地昨夕俄に變替り松囃は明日の晩。赤沼の方へ御成にて節分のお年取。御遊覽とのお事にて皆々お觸が廻りしに。たとへお觸がないとても御前の事を知らぬとは。エイよい加減な事ばかり。朋輩の中川殿とこな樣との挨拶が。大體並の事かいの奥の事は筒拔け飛脚よりましぢやもの。知らぬとは小面憎う フシぶちたいまでと笑ひける。詞アヽ音高し〳〵。さては赤沼奴が此の笛を過たせ。我々主從越度にせんとて御祝儀までを延引せし。地一大事を承る御厚恩には御身の上。奈落までも隱密ぞやはや夜も明くる落ち給へと。別るゝ方の禮者の。聲物孟春の御年玉。取りかはしたる扇子箱日本目出たき年越や。今日から一ツ年の數升に煎豆福は内。鬼は外面にふかみどり柊に。鬼も恐るゝと。鰯の頭梅が香のほどけ初めたる下紐は。心ありげにつちのこまで春めく。御代こそ 三重へ 豊なれ。地御大將義教公赤沼が館に入御あつて。追儺の御祝儀行はる。年男には熊谷犬二郎滿景。御年豆を献ずれば 赤沼前司入道幸滿。子息新判官則久御前に畏り。詞冥加に餘る御成一家の面目此の上や候べき。然れば毎年御所にての御祝儀は。斯波畠山細川なんどを始め。馬鹿慇懃の頑侍卷舌の諸禮。折目正しき正月詞さぞ御窮屈と存じ。某が御馳走には。御供の諸大名殘らず退出致させ。古流な事をさらりと止め。奥方の女中の中の通者。其の外洛中に娘子供の色好きが。御座んす詞の酒のこなし上覽に入れん爲。地召寄せ置きて候と。かねて仕度の色揃へ御侍女の其の中に。心意氣も風俗もこれ當流のまん中川。酒になりての名人さ飲まずに人をお小夜の君。琴三味線の撥音は フシ誰も袂に菅戸かや。フシさて又町には。姉が小路の針屋のぬひ。紺屋のお

染白粉屋の艶絲屋の房。舞子踊子小唄の節。上手に座敷を持ちければなほ御機嫌は義教公。烏帽子の紐も直垂も打ちとけ給ひ膝枕。足さすられつ御腰を フシうつゝともなき酒宴なり。地入道時分よしと思ひ。詞さて節分の夜厄拂ひと申して。民間には行はれ上つ方には御存じなし。御身の大事とあるものを。捨つるというて。某に預けられ。厄拂ひの詞をのべて呪へば。惡病邪氣を除くと申す。疾く／＼行ひ奉らんとぞ申しける。義教公佞臣の詞を誠と信じ給ひ。幸ひ是に先祖よりの印判。軍兵を集め關所廻船に。日本を治むるも此の印一つ。地是を暫し預くると錦の袋に入れながら。サア捨てたと投げ給へばお厄は我等拾ひ除け。四魔三障祟りはなしこれ女子ども。廓の町の厄拂ひ物は呪ひ出るまゝに。拂ひ申せと云ひければあつと答へて口々に。オクリ厄拂へひをぞまねびける。

初春厄拂ひ

やあら目出度や此方の御壽命申さば。鶴は千年龜は萬年。浦島太郎が八千歳。東方朔が九千歳。西王母が桃の核。フシ猿豆小豆。親もまめどり雛鳥のオクリはがひ。重ねに。寶は集る。家は治まる持丸長者の。四方に四萬の藏の戸前の明け行く年から。フシ福神達の御影向。一に市姫辨財天女。二は西の宮若恵比壽殿三は三面大黑頭巾の襞の。數々十二箇月は。無病息災其の身は鐵槌打出の小槌。打つて打出す金錢。銀錢。福德圓滿惡魔外道。打拂うて西の海へさらりさらりさつ／＼こきやこう。まつかう祝ひ納むるは。フシこれ上方の厄拂ひ。扨また東の果にては。斯くこそ厄を拂ひけれ。詞お厄拂ひ／＼厄つつ拂ひ申すべい。がいに目出度い此方の御壽命語るべいなら。鶴と龜奴が何うち食らつてすつ百萬年のめりめりとくたばり外れにあやかりなされし。父ら母らに爺媼息災。女兒小悴產のまゝなる餓鬼十二疋。錢金俵や小袖の中から。目玉むきだし耳朶でつかく。五百八十七曲り惡魔外道ぶつ拂つて。西の海へ 地ぶんなげろ フシこつきやつこうと祝ふとかや。地爰に名に立つ色廓。揚屋女郎の厄拂ひ。スヱテ又珍らかにかくもなん。あら／＼目出度やこなさんの。御壽命申さば苦海十年。蠅が止つて鶴は千年。龜は萬年オクリ浦島。太郎が重箱肴紋日々々は一歳に。フシ貸す數の子も。御盛や何時大福の。茶はひかず。揚屋に海蔘煎藏鮑幇間相客。宿屋鴛鴦のつけとゞけ。こそ／＼宿の フシなさけ事。身揚り分のおどもりも。東方朔が九千兩それで殘らず梅法師。井戸へ釣られた大黑天も。好い客踏まへた俵子や。蜜柑柑子大々盡子の日の。松や根引のよねん。三年前の紙纒頭空纒頭搖てた。ふるがけ今年はくる／＼廓の全盛。炬燵に火をせい床せい酌せい。酒はこぼすと仕着は厭はじ。禿が文錢駒は古さに。寶引骨牌をハヅミうつゝら王子が八千歳。フシ女郎に口說の痞も下り遣手は際の血の道な

く。揚屋々々の賑ひはオクリ二階。中の間奥座敷。五客。六客しつきやく入れず。フシ掛こそ不審春の日の。長う要らぬは。地見せかけ大盡惡議末社の。ちよつと借着に食物喫物小言いふ人おやぢの意見に手代の始末。一つ買うては三度借る客是が廓での惡魔外道。打拂うて西の海へざらり。／＼フシこきやこう。とこそ拂ひけれ。

地大將猶々御盃の數も揮も傾きて。伺候の女に誘なはれオクリ寢殿へ／＼深く入り給ふ フシ入道親子。地見送りサア熊橋してやつた。いかに厄を拂ふとて。天下を治むる此の印判。人手に渡すうつそり滅すに思案は入らす。詞むつかしいは斯波細川。此の判を以て義教の下知と偽り。鎌倉勢を催し一戰に討取るべし。地此の年越からまんが直つたこれ熊橋。來年は。めつきりとよい年取らせう精出せと。うなづき悦ぶ折節御侍女の中川。つか／＼と走り出でこれ赤沼殿。詞只今の御判はお厄落しの呪ひに。ちつとの間御預りかと思ひしに戻さず其處に留置いて。なんとやらひそ／＼と妾はどうとものみこまれず。地女子なれども御臺様よりお附けなされた此の中川。サア其の御判を戻さうか戻さぬか。戻しやらねば思案があると フシ男勝りの氣色なり。地入道動ぜぬ顔つきにて。詞アヽ好い處へ來召された是こそ仔細あれ。斯波左衛門義將諫言申すが御氣に入らず。密かに諸國の軍兵を集め左衛門滅す御催。それを聞いて笑止さに。御判をさへ取つたれば。軍兵一騎寄せる事もかなはぬゆゑ。やう／＼賺し取つたる御判。聞けばそなたは斯波が家來。藤内太郎家治と夫婦の契約して居るげな。是に就いて大事がある。藤内太郎は御預りの笛を折る。それを越度の仰せにて。今宵是へ召寄せてお手討になさるゝ筈。地今宵さへ過しなば明日は某御訴訟申し。藤内は助くべし。どうぞお側の刃物ども盗む事はなるまいか。如何にしても笑止など フシ誠しやかに云ひければ。地さすが女の一筋にアヽ忝き御知らせ。夫の命助くると申し斯波殿とても夫の主人。よしなき疑ひ恥かしや上にはことない九獻にて。御寢の最中そつと御太刀を取りませう。ヲヽそれ／＼目の覺めぬ先片時もはやう太刀。奪取り高遣戸の小庭から。椿畑の妻戸を明け鞠場の口に待たれよ。土戸の錠を明けさせんそれを合圖にそつと拔け。左衛門方へ落ちられよ飲込んだか仕損ずまいぞ。アヽ身に係つた事ぢやもの。其處に氣遣ひなさるゝなと フシ奥へ。さしてぞ入りにける。地そりや又彼奴も喰はせたわ屋敷の内をうろつかせ。曉方に引捕へ斯波左衛門逆心にて。家來藤内が密通の女に御太刀を盗ませしと。證據を出す上からは好い仕合で切腹道具。今宵は如何した夢かな見るこちは誠の寶舟。軸先が向いた飲めきほへと勇み頭をふる 三重へ 雪空の フシ春すさまじく。地ふけにけり時分は好しと中川義教公の枕の太刀。奪ひ取りて出でけるが思へ

ば品こそ替つたれ。慾心ならで此の太刀も主の目抜の盗み物。生きる死ぬるの切迫ぞと心も後れ手も顫ひ。持ちたる太刀の柄鮫や鍔に追はるゝ心地して。フシ檜書院に出でにけり。遣戸をそろりと明ければ吹雪と跡の恐ろしさ。竦む心の駒下駄に怪しめらるな。エヽまゝよと。素足の雪に飛下るれば フシ劍を踏むが如くなり。地跡より赤沼つけ來り遣戸に錠を下せども。中川それとは白雪を打拂ひ〳〵。上戸を押せども開かねば扨は來た早かりつと。暫し待つ間のかきたれて。オクリこぼすが〳〵如く降る雪の フシ庭も埋れて。白妙に。立寄る端も横吹雪。フシ袖打拂ふ蔭もなし。地佐野のわたりもさのみやは嵐は五體をつんざけり。袂は捲いて防げども襟にたまりし雪解けて。脛は水に凝さるゝ足は膝まで埋もるゝ。鬢の氷柱は白銀の スヱテ瓔珞かけし如くなり。アヽ寒や苦しやと顫ひ上りて齒も合はず。通路ならで是も又男の緣をや戀ぢやもの。此處を一つ耐えうと身を抱締むれば息切るゝ雪にて口を濕せば。身の内までもしみ凍り寒苦鳥の苦しみかや。立歸つて湯一つと腰まで埋む大雪を押分け踏分け遣戸にすがり。押せども引けども。明かばこそ南無三寶。誰かは錠をおろせしと立歸れども時の間に。分來しあとを降埋み殘路を渡ぐ其の風情。上戸は猶も明かばこそ。次第々々に降り重なり。身も埋もるゝ其の苦しさエヽ。扨は謀られたか口惜しや。病に臥し刄に伏し火水に死するはある慣ひ。殺しやうもあるべきに雪に凍やし殺さんとは。おのれ入道奴けざ〳〵とは死ぬまいと。埋るゝ雪を這ひ出づれば踏み沈み。這上り踏落し嵐は咽に吹きせまり。呼ばはる聲も立たばこそ手足も凍え身も冷え渡り。寒やつめたや苦しやなう藤内殿〳〵我が夫なうま一度逢うて死にたいぞと。雪に喰ひ付き涙の氷 スヱテ眼も口も閉ぢられて。地天ぎる雪はばう〳〵ばう。寒風頻りにさつ〳〵と。五臟六腑に刺す如く息の保ちもあらばこそ。二十七歳の春の花待ちあへぬ。雪に先立ち消えけるは。敢なき最期や 三重 一セイ謡〳〵東南に雲起つて。西北に風靜ならず夕闇の。空もとゞろく雪も夜のあら 地物凄の フシ景色やな。地斯波左衞門義將は今宵しも。小水龍のおのれと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣はしと人馬も具せず藤内一人提灯ともさせ。雪踏分けて赤沼が フシ門の此方へ着きけるが。地僕に持たせし提灯の吹き消す樣に消えてけり。塀の内より白鷺の飛ぶ如く。雪渦巻いて提灯に映ると等しく女の姿。白衣白髮白妙の フシ雪女とも謂つべし。地左衞門主從太刀の柄に手をかくれば。なう見忘れ給ふか藤内殿。互に忍びて落合の漏らさぬ水は御身と我。思ひ二つの中川が。幽靈まで フシ來りたり。地口惜しや赤沼親子逆心にて。君の御判を奪取り。自らには御太刀を奪はせ左衞門樣我が夫にも。其の科負せて失はん スヱテ巧と。知らで盗み出づる。

道の前後錠御し。今宵の雪に埋れて凍やかし殺されし。此の世から八寒の苦患は。我が身一つにて。いとし可愛の我が夫主従の御命。助けたや救ひたやと。思ふ一念凍りつき只今知らせ申すぞとよ。此の御太刀を義教公へ差上げ。御身の言ひ譯立て給へ名殘り惜しの我が夫や。此の世の緣の薄雪もながき契りは厚氷。結び添へ／＼生々世々にもよも解けじ。さらば／＼と泣く涙の フシ實と消えて失せにけり。地藤内涙を押拭ひおのれ入道奴。妻の敵國家の仇首引拔いてくれんずと。跳り入るをやれ待て是は一應ならず。申しても天下の大事大將の御座といひ。御直衆に慮外せしといはれては理非立たず。是に控へて窺ふべし罷出でば勘當ぞと。宥め給へば藤内太郎 フシあつと靜めて控へたり。地其の身は衣紋引繕ひ御太刀持つてしづ／＼と。廣間に立つて 詞お小姓衆／＼。斯波の左衛門義將御機嫌伺ひ申すと。高々と宣へば 地すは左衛門よ討取れ

と。赤沼親子犬二郎心得たりと出でけるが。さすが五常の德備り。威あつて猛からぬ。忠臣の威光に氣を呑まれヤア斯波殿。命特の御出と フシ手を採んでこそ居たりけれ。地大將斯波と聞き給ひ。ねほれ髮に烏帽子引きかけ出で給ふ。左衛門につこと笑ひ。義將は今宵珍しき夢を見。御物語のため伺候仕る。いやはや夢はをかしいもの。これ赤沼殿御氣にばしかけられな。貴殿逆心の企にて。尊氏公より御相傳の御印判を賺し取り、御侍女の中川をだまし御太刀を奪はせ。罪を某に負ほせて此の左衛門に。切腹させんず謀とまざ／＼と見たる夢。覺むるとひとしく枕元に此の御太刀のあつたるは。なんと正夢とは思さぬか。地夢なればこそ御仕合もし誠にてあるならば。赤沼殿でも青沼殿でも御前にて直中を。親子繫ぎに突抜くか又一戰に及ぶとも。和主如きの相手に騎馬を向けるまでもなし。左衛門が足輕十騎ばかり差向けば。朝がけに生捕つて洛

中を引渡し。なんでも柱一本の主にしてくれんもの。さりながら春の夢は合はぬもの。必ずお氣にかけられなと フシかんらからとぞ笑はるゝ。赤沼も云ひ込められじといやこれ義將。詞和殿が今の言分は。其の身の過り人に云はせぬ前置に。かさから出づる詞なりと此の入道は聞き申した。ヲヽ思付いたりお預りの小水龍の笛を打折り。御咎めを恐るゝ由 地それ程の事は某が。申譯をしてやらんエヽ氣の狹い左程の事。氣苦勞に召さるゝな フシ左衛門殿とぞ申しける。地藤内太郎飛んで出で居丈高になつて。これ入道。詞兩刄の劍にて人を切るに。振上げざまに我先づ切らるゝといふ譬あり。まつ其の如く人を惡に落さんとて身の惡を囀るか。其の御笛は此の藤内太郎家治が預り奉り。先日北山の御門にて一色大炊之介を。汝が頼んで切らせたを忘れたか。功ある者の心掛誠の小水龍は。庫に藏め影を作りて持つたる故。うぬが頼んで切らせたは。其

の影の笛なりしはうつけ者。誠の小水龍といふ御笛。天暦の帝勅筆の銘ありて。天下の大事にはおのれと鳴る。只今も音を出し怪しさに馳せ參ず。地是を見よと差出し是程大事の御寶を。何として御邊は大炊之介を頼んで切折れとは云ひしぞ。笛を切るが好きならば汝が咽吭切折らん〳〵。つめかくれば義將マア藤内御前といひ。主を差措き憚り千萬罷退去れ推參者。赤沼入道ともあらん人が笛を切折り。遺恨を晴らすなどといふ若輩所爲のあるべきか。よしそれはあるにもせよ上は天下の武將たり。御譜代忠功の斯波の武衞笛一本に思召し地代へられんや。詞とは思へども忠臣を厭ひ佞臣に心をゆるし。酒宴妓樂に御目眩み。枕許の太刀取らるゝ程の大愚將。山鷄を鳳凰とし燕石を玉と見て。國を失ひ身を破り名を末代に損ひ給はん。地口惜しの御所存やと。拳を握り席を打ち涙を流して教訓ある。詞大將御氣色變つて。折こそあれ祝儀の座敷。己れ一人智慧ありげに愚將とは誰が事ぞ。罷立つて閉門せよと大きに怒つて仰せらる。左衞門突つと進み出で。愚將と申すは我が君の事よ。愚將と申すが御耳に障る程ならば。など佞臣忠臣の詞を聞分け給はぬあさましさよの愚さよの。地御祖父義詮將軍御父鹿苑院殿義滿公。御舍兄勝定院殿義持公。御先代義量公我が君迄は五代。我々は三代管領職を承つて終に閉門の例候はず。左程過ある左衞門ならば閉門までもなく。御指料を以て御手討になさるゝか。但し御氣に入りの赤沼入道子息新判官。此の歷々に討手を仰せ付けられ軍勢を以て。此の左衞門をなど攻滅し給はぬぞや。詞ヲヽ赤沼なんどの手に及ばぬはことわりことわり。軍といふは酒宴遊興に事かはり命づくのものなれば。鯨波の聲矢叫びに怖れて馬より落ちて目を眩さんより。追從いうて世を渡るが一段の思案ならん。エヽこれ我が君。莫耶を鈍しとし鉛刀を鋭しといひ。周の鼎を棄てゝ瓢簞を。寶とするといひしは御身の上と御存じなきか。麒麟も繋がれて動かねば犬猫に同じ。渇しても盜泉の水を飲まずとは義者の恥づる處。章甫の冠を沓に履かれんより。首陽山に蕨餅を練り汨羅に沈んで。江魚の腹中に葬られんには如かじ。地某都を開きなば赤松細川畠山。結城長沼仁木石堂。大内今川山名京極宇都宮。凡そ名ある諸大名賴もしげなき世を憤ほり。面々分國に引籠らば民百姓は貢物を私し。地頭郡司に收斂あつて國を惠む糧盡きん。時には四海野心を含み。四夷八蠻一度に起つて攻來らんは必定。其の時には御寵愛の佞臣奸人味方をすてゝ敵に下り。君一人敵の擒となり給ひ。元祖尊氏公の御勳功も一度に朽ち。御父義滿公の七寶八貨に金銀を鏤め。造り給ひし北山の金閣室町殿の花の殿三條の紅葉の殿。野原となつて梟松桂の枝に啼き。狐蘭菊に隱れ栖んで谺山彦ならで。誰か昔を訪ふ人の候ふべき。詞其の

時には此の斯波が詞を思召し出され。天を望み地に爪立て。前を睨んで悔み給はん事掌をさすが如し。三度諫めて用ひざれば。身を報じて去るといへり。地左衛門が一生の諫言も是迄なり。仲尼は欸水を受けて衛の國を去り給ふ。某も其の如く領所へも歸らず。直に他國仕るお暇申すと罷立つ。詞赤沼判官突立つて。この中左衛門。主君に暇出す推参者除さじと緣んでかゝる。藤内に邪魔隔たりヤア。汝如きの鈍刀が主人の身に立つべきか。地ま一度身悶えするならば御前とは云はせぬと。はつたと睨めば義教公やれ待て赤沼討手を以て。左衛門が首を取る鎮まれ／＼と御諚ある。左衛門少しも臆せず討手とは有難し。地速かに腹切つて汚れ首を差上ぐべし。地さりながら討手の人は誰ならん。其の相手によつて一戦の勝負を決し。討手の首を此方へ拜領致し候へし。意外と思召されぬ爲御斷り申し置く。藤内太郎供をせいと御前を立つて悠々と。顧もせず立退きしは。臣下の亀鑑取の鑑とここそは三頭へ見えにけれ。斯波左衛門。地義將は腹巻に小具足固め。侍には藤内太郎家治。若黨少々召具一騎相具して。都を隔つる山崎や フシ關戸の院にぞ着きにける。地かゝりし處へ。緋縅の鎧月毛の馬に乗つたる武者。直兜五十騎ばかり引率し 地 やあ／＼左衛門。詞御暇申し捨て京都を開く慮外者。討取つて参るべしと大將軍義教公の御下知。細川右馬之丞勝秀向うたり引返せとぞ呼はりける。左衛門聞きもあへずなに勝秀とや。たとへ千萬騎向ふとも。打物の續かん程攻戰はんと思ひしが。勝秀と聞くからは速かに腹切らん。首取つて歸れとてどうと座を組み居たりける。勝秀馬より飛んで下りやれ待て左衛門。和殿が切腹に三箇條の不審あり。勝秀が武勇に恐れての切腹か是一つ。日來水魚の朋輩の。討手に向ふ恨みの腹か是二つ。まつた浮世を輕く見て身を見限つて切る腹か。三つに一つを云うて死ねとぞ申さるゝ。左衛門打笑みホヽウ流石勝秀程ありけるよ。問ひにくい事を能く問うたり然らば其方にも不審あり。人こそ多きに御邊が討手は。此の義將が諫言を僻事と思ふか一つ。但し某程の弓取の首取つて。功名せんと思ふか二つ。まつた倭臣赤沼と一味の心か三つの内。明さば我も明さう其勝秀如何にとありければ。地ヲヲその疑ひ某が心はなし。管領の其の中にも御邊と我は斷金の契なるに。我にも知らせず都を開く。志氣違はしく死すとも生くとも朋友の交を違へじと山名に討手とありけるを。請受けて某が向うたる討手なれば。むざと腹は切らせぬぞヤア。御邊の心底承らんとありければ。ム、聞えたりさぞあらん此の左衛門も其の通り。勝秀は愚か樊噲が討手なりとて。恐しとも思はず諫言申すも君の御爲。死せる孔明生ける仲達を走らしむといへり。死しても忠は忘れまじ。一旦都を立去り。御邊とも内通し悪人を退け。

我が君を名將と仰がんと思ひし處に。案に逢ひ御分討手とあるからは。浮世の望みも切れ果てゝさて生害に及ぶなり。弓矢取る身の討手を蒙り手を空しうは歸られまじ。介錯せよ勝秀と自害せんとする所を。待て〳〵左衛門げに滿足せり〳〵。日頃語る朋輩のかほどに心の合ふものか。爰は死する處でなし筑紫方へも身を忍べ。我も本國に引籠り世上の安否を内通し。佞臣の榮枯を頼ひ義兵を起し討つて出で。詞悪人を攻滅し聖賢に勝る名將と。なさんとは思はずやと理を盡し諫むれば。地左衛門横手を打つてハアヽ左樣ぢや違つた君の御爲大事の命爰は死ぬる處でなし。一先づ落ちん御身も退くか。なか〳〵の事やれ勝秀。斯程に揃ひし忠臣に君君たらば唐土も。靡け從へ治めんものを無念にないか勝秀。口惜しいわ左衛門と互に鎧の袖と袖。取付きすがり泣き沈たる フシ忠義の涙ぞ哀れなるヤア 地時刻うつして益もなし朋輩の緣つきず。また逢ふ事は命次第と泣く〳〵左右へ別れしが。詞又立歸つてこれ〳〵思へば。地明けていまだ對面せずこれ當年の逢初め。されば〳〵其の通り先づ新春の御吉慶。此方も其方も互に目出度い御越年。此の春よりの御悦び十分の御仕合珍重。珍重。お盃は永日々々。然らば春永末永月永日永年も壽命もなが〳〵と。傳はる御代の時に逢ふ春の。門出を祝ひける。

中之卷

ぼんじやり咲いて匂うた梅の花がた見さいな。藤内二郎。アリヤコリヤ。殿ハナ。小鼓のヤ。得意物。赤椿の胴に加賀革くれ。紅の調緒。千鳥がけにかけさせ。合せ打つたるはさつても打つた小鼓と上の町。下の町。どつと褒めて通した。ほんのり明けて唄うた鳥の懸聲聞きやいな。藤内二郎殿大鼓の上手で。しつたんにしつたん〳〵。七反作る御百姓。明年は八反ぢやさ明年は十六反たん。丹波の國の御百姓と。勇み打つたるは扨ても打つた大鼓とどつと褒めて通した。春めく大路ぞ。豐かなる。六法ヨイ。一夜押開けて四方の春。空のかんばせにこやかふくやかにつこりほやりの笑顏は誰だア。それだか是だか春の司の佐保姫君。霞の衣當流仕立。しやんと着こなす四尺八寸。あざを握つて押せ〳〵。押込め乘込め米俵。でつかく踏まへた大黒々々。大黒舞と囃されて 天の戸袋たんぶくろ。くわつと開けた初日の色あら。面白やお目出度や。草木心なしとは申せども花實の時を違へず。げに陽春の德利樽鏑屠蘇の酒。三抔機嫌の朝ぼらけ物もう。どれい。先づ當年の御吉けいはく慶庵。めつきり今年は若うなる〳〵。なるほど〳〵目出度い事の言ひばさ山草。穗長は白妙楪の淺みどり。わつさりわさ〳〵紙衣の袖にも春立つと。いふばかりにて金かけて。買うた袴の師走の氷。解いて碎いて若水の湯殿初め着衣初め。衣紋寄ふ若い者藤内二郎。同じく三郎。合せて五郎

は曾我に劣らぬ住家にも、ごまめ鰌の素浪人。雑煮の上置輪ん切大根ずんでん、どうど打ちをさまつた。時世に逢ふも他生の御縁花の宴、椽から落ちたお乳の人、打つた處がふく〳〵福德、千歳を呼ばふ鶴の聲、此方は似合つて雀はちう〳〵烏はかあ〳〵。鳶とろゝ山の藷。精のついたる妻戀猫。猫の化粧。鼠の嫁入。ちゝつちつくり色をやる、戀から生れた人間萬事塞翁が。馬のうつた太鼓の撥、狸がうつた腹鼓うつたら鳴るべい。何になるべい。知行になるべい。なれ〳〵なれ〳〵。花になれこし王城の町。其方に高山去年の雪。これ、香爐峰の心なんめり、簾を捲けばお肴に嵐が雪をもつて北山東山、西に妓里戀廓、正月買の初君の袖を連ねる裳裾をつらぬる。ぬる〳〵ぬつと出る日影に。南枝花始めて開く。梅に鶯。紅葉に鹿。獅子に牡丹、昆布に山椒。小粒な男も陽氣を受けて。和歌を轉る一曲奏づる。つる〳〵つる〳〵。釣つた處を惠

方掛賑ひ申す榮え申す、押へ申す食べ申す、色めき申す時めき申す、御亭を祝つて御禮申す。ありや。こりや。はつあ新玉の。ハル フシ 春ご長閑なる、ハルフシ 折知り顔に、白梅の。地 路次の垣ほに咲きこぼれ。研ぎ拭ひたる玄關前。これは本阿彌の屋造と。スヱテ 目利したるも理なり。地 藤内三郎武治奧を見入つてこれ兄者人、詞 本阿彌右衛門太郎清祐が居宅。此の身代は羨しからず。此の内に澤山な。地 銘の物の大小を持つならば。好い主取つて立身を致すもの。何をいうても此の竹光何時か此の無念さを。春といふは名ばかり未だ師走おやと フシ 小首を投げて悔みける。二郎塵治聞きもあへず、詞 浪人の町住居鼓太鼓に武士の道 忘れたかと思ひしに頼もしい心懸。然らば咄す事のあり。兄の太郎家治の主君斯波殿は、近日義兵を起し佞臣赤沼を攻滅さんとの用意と聞く。地 こゝぞ我等が立身の種斯波殿の。御味方に加はり兄太郎殿諸共に、軍功を勵まんと

思へども。刄物とては脇指一本ちぎれ具足の一領も、才覺とて叶はず如何せんと思ふ處に。詞 これ女房は持つべきもの。黄金三千兩調へてくれうといふ、地 此の金子で、御邊と我が軍用意は物の見事、斯波殿の御手に屬し藤内太郎二郎三郎と名乘つて、赤沼親子が首提げ、めざまし功名御感狀を拜受し。今の泣事止めうぞやと。語れども三郎は、ちつとも乘らぬ顔色にて、詞 ヲヽ主、旱魃はいかず。斯波に扶持を受けんとは勿體なし、いつぞや兄太郎殿の肝煎にて某奉公望みしに。氣に入らぬとてありつかず。斯波に嫌はれ無念の折節。赤沼入道幸滿殿へ肝煎らんといふ人あれども。拵へに資本なく延引に及ぶ中、犬二郎滿景より斯波の左衛門は勿論。宗徒の郎黨一人にても討來らば三千石は相違なしと是、地 慥な書中到來す、御内方の調へ給ふ金子少々配分あれ。身の廻り大小拵へ。斯波が面打ち赤沼殿に奉公し。三千石では仕好い事二人扶持や三

人扶持の御合力。兄貴そこらは　フシ引きませぬとぞ廣言す。地二郎むつと空笑ひ。詞兄なればこそ二人扶持の合力とは先づ過分さりながら。二人の兄が主と頼まん斯波殿の大敵。赤沼に從ふ其の方に此の大切な金子與へて。敵に勢付けうとは云ひ難し。地天下の忠臣賢臣と呼ばるゝ斯波殿に。嫌はるゝを口惜しと思ひ手を下げかせいで奉公し。斯波殿にも戀慕はれんと思ふ心はなく。末頼みなき佞臣の赤沼を主に取らんとは、道に背く無分別追付け獄門の。相伴せんずる瑞相エヽ笑止なと教訓ある。氣短き三郎ぐつと急き春早々から獄門の相伴とは兄ぢや人嬉しう御座る。此の三郎が相伴するか賢臣の斯波の左衞門を。木上りさするか今御覽ぜと云ひ返す。ムヽ扨は斯波殿につく我々なれば。太郎殿も此の二人をも討つべきな。ヲヽまさかの時は此の三郎も弟とて容赦はあるまい。地すれば組んで落ちる一戰に及ぶ時。貴殿の首は某が討取り。兄

がひには獄門の木を太うして。外よりは五六寸も高う上げてやらんといふ。詞二郎腹にするかねうぬが知行になる某が首。戰場までもなし今でも取られば取つて見よと。脇差に手をかくるイヤ此の三郎が取り兼うか。サア討てサア來いと。地柄に手をかけ睨み合ふ目の鞘はづしの下鍔。身は竹刀抜きかねて　フシ暫し挑み合ひけるが。地三郎飛びしさつてこれ二郎。詞好い加減に引きもせず。我等が大小本身でなしと侮るか。地組伏せて赤沼殿へ引いて行くも合點なれど。兄弟のよしみ許し置く追付け大小調べて。眞劍の勝負せん待つて居れ盛治と。上は立派な鞘口に。鑓を遣うて別れける　フシ心の内こそ不覺なれ。地二郎見送り弟と思ひ甘やかす。情が却つて倨傲になりけるよと。呆れて立ちし垣越しに　オクリとり／＼響く羽子、板の音は娘の集りや。笑ひに春の色こもる。オクリ祝儀も。〽籠る伊達籠る情も河豚の羽根。スヱテ雉子の風切思ひ羽

や。思ひの數を歌一と二た三い四う。地十二三迄未だ君知らず。十五六からぬれ鷺の。羽根の數々年の數。フシ讀む聲聞けば姿まで。スヱテさこそと思ひ遣り羽子はフシ正月。あきし景色なり。地藤内二郎も曲者にて扨も間の好い羽子板の音。姿見たしと思ふ處へ仕舞うて戻る萬歳殿。鼓を少しかしこへ寄つて見物せよ。面白い事して聞かせうと戀も鳴手の曲鼓。垣の内には本阿彌の一人娘の玉椿。侍女までが拍子利き聲に合せてつく羽根の　打合せたる如くにて　三重往來も留まる／＼ばかりなり　フシしつ心なき　地春風の羽根を吹上げ横ぎつて。藤内が襟袖にばら／＼と。落ちとまる。二郎袂に拾ひ入れ鼓を渡し萬歳に　フシ目禮してぞ返しける。羽子板もつて玉椿侍女諸共走り出で。藤内には氣も付かず其處か此處かと梅の枝。搖りつ振ひつ尋ねける。藤内羽根を取出し。扇を擴げて一二三四といふ聲に。振返り　アレ彼のお人の拾うてぢや。意地の惡いこ

此方へ下さんせとありければ。詞藤内眞顏になりどなたの羽根か存ぜねども。年の數つけば夏痩もせず蚊が喰はぬと申す故。おつとの間がりまする女中の大事の物。長うつきは致しませぬ。早うついてのけませう。一二三四五六七八九と口ばやに數ふれば。詞玉椿打笑ひお年は其の樣に往きそむないが。地數はたんと取らしやんす。ほんか〳〵においくつが定ぢやまでと手を取れば。詞ホヽウお家程ありてよい目利。我等はおやうど窺なしに二十六。地羽根はとうにつき仕舞ひ是は又女どもが。名代につく羽根なるがなう此の女が私に。六十二の老女房當年八十八歳。顏の皺は漣や志賀の山越え頭は雪。それでも八十八ぢやとて我が手に米とやられます。此のよねの八十八一日にはつかれまい。數取りばかりで仕舞ひましよ。地詞十二十三十四十五十六十七十八十。五六七八なう フシ草臥やといひければ。姫は羽根をひつたくりお內儀樣はあるまい

が。いかい嘘をいはしやんす羽根つく事も上手なり。嘘つく事も上手なり抱付く事も上手であろ。此の抱付の上手奴に。フシ抱かれて見たいと抱付けば。さすがの藤内しよげになり。扇の骨で白壁に フシ小坊主書いてぞ居たりける。侍女ども取付いて扱も小氣な往來も見る。門の内へちと御入りと手を取つて引きければ藤内是ぞ幸ひと思ひ。詞何と此の家に將軍より御預の銘の物。數多あると承る武士たる者の冥加の爲。戴く事はなるまいかと。地皆までいはせず姫悦び。お易い事〳〵將軍樣の御重代。天國小鍛冶義光其の外名に負ふ銘の物。今日は御鏡開きにて奥の座敷に飾られたり。玄關からは人目ありそれ路次口の錠明きやゝ。沙汰しやんなと夕節の オクリ人に〳〵紛れて入りにけり。地藤內三郎武治は兄が歸るを待伏し。投げてくれんと元の道本阿彌の門の內。奥の路次口細目に明く〳〵何かは知らず入つて見て叱られたら出る分と。獨語して身を細

路次の取りつきの桁椽の。障子を明けて床の間の床に置かれし一腰の。よき折紙に相州物の中に取つても出來心。盗といへば氣も後れ前後棒鞘身は顫ひ。足もしどろに取つて出で フシ行方知らずなりにけり。地暫くあつて家內には折紙道具失せたのと、家來は面々身開きに上下騷いで共吟味。出入を穿鑿する處へ路次より歸る盛治を。門外まで附出して盗人知れたと押取りまく。詞二郎騷がす。これ〳〵卒爾せられな。我等は宇治の邊に居住の浪人用事あつて出京し。女中方の誘引にて御太刀頂戴いたせし分。地胡亂ならば女中衆へ尋ねられよと斷れども。ぬかす程晝強盗旦那の留主を狙ひ女子子供をたらし。手の好い盗人捕てよ括れといふ處へ。外より歸る下部の男たつた今一二の橋にて。詞棒鞘の刀持つて走つて下へさがつたといふ。扨こそはや同類に渡したな。地大小捥いで搦めよと六尺中間立ちかゝり。意地張らばぶち殺すと這伏せて大小取り。

詞いやはや見掛ばかりの金拵へ。燒付で火傷すなと 地雜言だら／＼脇差拔けば。あら身の疵物こりや／＼刀の身を見よ竹の箆。さても見事なお侍冬年ならば此の刀を疊叩きに借らうものと フシ一度にどつとぞ笑ひける。 地藤內涙にせきくれて盜人とは無實の難。天道も晴らし給ふべし武士の刀に竹の箆。こそげても此の恥を雪ぐ事のあるべきか。舌食切つても死にたしと我が身をつかみ腕に嚙付き。大地を踏付け齒をたゝき スエテ絞り泣くこそ道理なれ。いや／＼少しき恥を忍んで。大功を立つるは丈夫の勇と思ひ定め。詞これなう心あらん人は聞いてたべ。毛頭覺えなけれども折惡るければ言譯なし。さりながら一門兄弟歷々。主も持つたる者我も望みある身なり。地繩掛つては一家の破滅又後日に盜人あらはれなば。此の家內主人下人何十人あるかは知らず。犬鷄に至るまで。生けて置ぬが合點ならば兎も角も。されどもそれも無益の事願はくば料簡あれ。詞某身上稼ぎの爲妻の女房。今明日に金子三十兩借調へると申したり。刀の折紙いかほどか知らねども。盜人の實否立つまでは右の金子を渡し置かん。迯失せる身にもあらず土地で人にも知られたり。地繩を免して此の料簡賴み入るとぞ申しける。詞家の首名文平次ム、聞えた／＼好い言譯。折紙は百貫町人方の賣道具。旦那の留守に失うては此の文平次が譯立たず。三十兩あるに極まらば五兩は某償ふべし。地宿へ送れ取逃すなと。兩人兩手を引張れば一人は髻を取り、四方を棒にて取圍みサア歩めといふ處へ。姫玉椿走り出でやれ其の人は御存じなし。いとしぼなげに何事ぞ許してたも賴むぞと。泣叫べども聞き入れず先を拂つて途すがら。面も恥も名も晒の宇治の。里へと 三重へ 送り行く。フシ世もかすかなる。陽炎の。森の下庵軒あれて。月の影さへ盛治が。妻の女房小晒は。スヱテ夫の出世の物入に。我が身を捨つる志 フシあはれ。やさしき貞女なり。地中立の老女供の男に財布を持たせ。今日御契約の日限ゆゑ。金子も渡し手形をも 地極めませんと腰掛ける。小晒悅び何故に遲いと。心待ち致せしに先づ此方へと請じ入れ。詞さて連合には大名方の若君の。おさし奉公といひ聞かせ夫の判も預りしが。詞世間へも其の通りに言うて下されなば。茶屋廓の外は何なりとも嫌はねども。先のお主の名を聞いて手形も仕度いとありければ。詞小聲になつて勿體ないお山や女郎にやるものか。地先のお主はさる御本寺の大寺の。悟開いた長老樣。寢酒のお伽にそれ樣を三年限つて置きたいとの御事。此方から沙汰がしたうの仕着に遣ひ金。未來も惡うはあるまいぞいのサア金渡さう判なされと フシ手形と共に出しける。女房はつと涙ぐみ如何に夫の爲なるとて。出家に思はれ來世まで取り外さん悲しやと。そゞろに淚はすゝめども差

當つて變改も。泣く〳〵判を捺しければ價の金を讀み渡し。只今迎ひを連れ參らん御亭樣とも暇乞ひ。門出祝うて待ち給へとフシいそがしげにぞ出でにける。地かゝる處へ藤内二郎大勢が取卷いて。逃げだてしたら撲擲ゑる撲殺せとどよめけば。詞逃げはせぬ棒あてな。地逃げたら撲つぞ棒あつるな逃げはせぬと。命から〴〵來る體女房きつと見嗜みの。手鑓提げ突つと出で仔細は知らねど我が夫。其處放せ放さずば片端に突止めんと。突出す鑓を桿棒にて。打つつ拂うつ叩き合ひ。既に危く見えたりけり盛治聲をかけ。詞やれ女房はやまるな此の人々にも一理あり。樣子を聞けと制すれば小晒は齒がみをなし。エヽ膽がひなや理にもせよ非にもせよ。浪人なれども藤内二郎盛治といふ侍ではないかいの。白晝に手籠に逢ひ其の恥が立身の妨にならいであるものか。夫を出世させん爲奉公に身を賣つて。地たつた今手形して三十兩取つたる金。皆徒事になつたよな賤しき下々相手には不足ながら。夫婦此處で討死し名を潔う殘さんと。金子を大地へばらりと捨て杖も棒も厭はゞこそ。無二無三に突立てしはフシ人の妻たる手本なり。地二郎手ごめを振解き勇んで勵む女房が。鑓の柄をしつかと取りヲヽ健氣なり頼もしゝ。詞先づ靜まつて仔細を聞け。さりとは武運拙きは今日都本阿彌にて。百貫の折紙道具盜まれし場へ行きかゝり。我盜まぬに極れども言譯もなき首尾となり。既に牢舍の縛繩かゝらんとせし處に。地御身が情の三十兩ふつと思ひ出せし故。それを贖ふ約束にて口惜し乍らおめおめと。面を拭うて來つたり。御身が無念の心底を。尤と思ひ遣る。我も生きんず覺悟なかつしが。詞卞和が三度足切られ本意を嘗く夜光の珠。韓信は市に股を潛り。勾踐は石淋を嘗めて會稽の恥を清めし例。地それ程こそはあらずとも盜人の虛名を忍び。武功を立てゝ一天に名を止むべき念願。纔目の恥を遁れしも誰が情ぞや妻ながら。親にも劣らぬ厚恩を生々世々に忘れはせじ。思へば如何なる貧乏神よしなき處へ導きて。思ひも寄らぬ難に遭ひ。情の妻の身の代を無下になさうか口惜しや。あさましの運命やとフシ男。泣きにぞ泣き居たる。女房はつと心くれ勇む心もよわ〳〵と。さても〳〵先の見えぬは浮世ぞや。夫の爲に捨つる身は何れも同じ道なれど。世を立てゝ所領の主乘馬よ引馬よと綺羅をみがいて浪人の。萎んだ肩の怒るをも人にも見せうためん爲に。添うて間もなき女夫の中三年といふ年きつて。生別れする身の代を無實の難に換んとは。口惜しや本意なやな金惜しとは思はねども。夫婦別るゝ三年の。月日が惜しいとばかりにてフシ聲も。惜まず泣き居たり。地警固ども遲し〳〵金子を渡せと聲々にいふ。詞ハテ渡す迄もなし其の金子。取つてうせうといひければ請取らいで置かうかと。小判吟味し數讀みてヲクリ皆々へ京へぞ歸りけ

る　フシ盛治彼等を。地見送りてエ、心ない雜人かな。盜まぬには極つたり此の歎き見るからは。情も料簡もあるべき事此の上はわやにする。取戻いてくれんずと駈出づるを女房ハテよいわいの。金より命が大事なり迎ひが來れば往かねばならず。三年の内逢はれぬぞや死なうも生きようも知らぬもの。迎の來ぬ間についちよつと門出祝うて御座んせと。泣き腫れし目をにつこりと。涙片手の暇乞ひ哀れ。わりなく　三重〳〵別れ行く　フシ跡は霞の。八重一重。山吹の瀨を我が中の。天の川瀨と又何時か馴れにし夫の盛治に。逢ふはたまさかたま〳〵も。スヱテ歩み習はぬ大和路や。涙に揉れ駕籠ゆりて小オクリ額〳〵重しと徒跣道の伽とや中立が。フシ咄も今の氣に合はず。未だ春淺き御室山花には雪を雇人が。戀知らぬやら荷も輕き。肩荷の端に提烟草盆折々休む道草の。今の悲しさ忘れ草思ひ。薰せ思ひ消し。胸に解かせ手に掬ぶ。フシ玉水の。邊に着きにけり。肝煎の老女聲づくり。詞これ申し御內儀樣。今宵は奈良に泊らせ明日は御國へ着く。此處で月代剃らせ衣裳も替へて袴を着せ。男の姿になしまする用意なされと申しける。女房大きに仰天しそれは喚樣何事ぞ。寺方への奉公と聞くも腑に入らねども。それは言うて返らぬ事月代を剃り袴を着て地男の眞似する約束は。こちやしませぬぞおんまりなと　フシ烟草を。吹いて顏をふる。詞ハテ是こゝな人あんまりぎく〳〵いはしやるな。金遣つて手形は取るそれがいやなら如何なりと。地三十兩の銀たてゝ爰から往んで貰ひましよ。チヽなま暑いと上着脫ぎかけ　フシ汗押拭うて居たりけり。地女房しく〳〵泣き出し何事の報ぞや。奉公の身の代が男の身にもつく事か。三年たつは夢の中月代剃つた髮つきを。戻つて男に見せられうか人に面が合はされうか。道でさへかかる事猶行く先が思はるゝと。泣けど悔めどかひもなく思ひ。直すも亂るゝも心。フシ一つの涙なり歎きて、歸らず兎も角も。地せめての事に樣子を語り滿足させてたべかしと。泣く〳〵いへば肝煎悅び。詞チ語らねば叶はぬ事　寺と申すは僞り心を鎭め聞き給へ　此の國の大名古川權頭淸氏殿の一人姬。琵琶の君とて美人あり。斯波の左衞門義將殿と嫁許。地されども父權頭殿は赤沼入道幸滿と。水入らずの伯父甥とて斯波殿の御祝言。今に延びて沙汰もなしおいとしや琵琶の君。二十歲の花も散り過ぎても殿御の顏も見給はず。只斯波殿を戀ひ慕ひ思ひ積つて氣病となり。今養生の眞最中。詞それゆゑ器量のよい人を斯波の左衞門義將と名付け。心に勇みをつけたらばおのづと藥も廻らんと。醫者衆の指圖なれども眞の男はならぬ故。男らしい女中のお尋ねにてかくまで談合なりし事。地月代剃るがいやならば。三十兩を今爰へ　フシ立てゝ歸りやと語りける。女房あまり可笑くなり寺よりそれはましならん。常々聞きし事も

あり左衛門様の眞似をして。合戰軍の咄でも見事聞には合はせうが。自らと姫君と肝心の夜討には。どうも勝負が付くまいと フシ笑うて憂さを晴しけり。地さては合點か悦ばしと荷物をほどき櫛道具。衣裳品々取出す女房常に連合の。髪月代は手馴れしが自剃自鬢の初元結。揉む黒髪を玉水の底の玉藻と水鏡。油の梅花剃刀も匂を惜しむ額際。剃れば芥の花蔓髪置きしての幾歳か。見馴れし顔に我と我が。別の涙みだれ髪ォクリ共に〳〵落來る膝の上 フシ小枕捨てゝ。丈長も。捻元結に大髻眉の引黛男眉。鐵漿落す フシ磨き砂。磨き楊枝の。青柳に。地櫻咲いたる二役や。女とも見え男なら。御物上りの若者と フシ擬ふばかりになりにけり。地衣裳あらため太刀刀衣紋繕ひ待つ處に。引馬乘物徒士侍七ツ道具を押立てゝ。詞古川權頭清氏より。花聟斯波の左衛門義將公の御迎と地呼ばはればァレ馬がでん〳〵うつわいのァ、怖やとぞ逃げにける。肝煎も氣の毒さこれこれ是は何事ぞ。小訛りに訛つてどうすべいかうすべいと。男らしう遣らうぞやと囁けば打ち頷き。詞ム、なんと身が方へ舅殿よりお迎ひだといふか。ヲ、大儀〳〵。目出度い折からだ酒でも打飲つて。唐辛子をかつ噛り。寒風を凌いで供をせろ。地先へ行くべい奴様ゆるさしやんせやと口掩ふ。袂張肱のし〳〵と歩むとすれど裲襠の。身癖顔癖引包む殿御模様のかさね着の。うらなつかしき女肌男女の二面。此の手柏や此の手振れ。詞ふれ〳〵お前押立てろ。まかせて置ける春の霜。古川館へぞ 三重〳〵迎へける フシ花聟がねに。地相生の島臺飾る座敷構へ。フシさも賑はしくぞ見えにける。家の總領藤冠者氏連は。妹の祝言と裝束更め居る處へ。都より赤沼判官下向の由にて案内し。密に冠者に對面し。詞此の頃は御飛脚殊に斯波の左衛門義將。聟入との御知らせ是ぞ屈竟の時節と存じ。罷下り候がしてそれは必定にて候かといへば。冠者小聲になつてなか〳〵の事。妹の琵琶の姫左衛門を戀ひ焦れ。病氣重り候を父母歎きて申遣はし候へば。左衛門も合點し今日聟入り仕る。我等には何も知らせず。是ぞ天の與へ手を合せて討取らんと。内通致せし處に早速の御下り。大慶々々とぞ申しける判官悦び。詞さてなう日外此の處にて失ひし。將軍の印判も必定琵琶の君の盗みしに疑ひなし。妹とて油斷せられなそれにつき。此の者は藤内太郎二郎が弟藤内三郎武治。兄を疎んじ我々に仕へんと申す故召抱へ候。地かゝる處へ聟入する左衛門奴は。死に來る同然と フシ笑壺に入つてぞ笑ひける。地ヤアこれ〳〵下人どもには一味もある。父母聞かば事やかまし隨分忍べ忍ばんと。座敷を立つて判官は。土民の家に宿を借りオクリ案内〳〵をこそ待ちにけれ。フシ殿御見んとて。琵琶の君。地今日ははらりと氣も輕く此の頃になき笑ひ顏。男といへる妙藥に フシ耆婆も匙をや捨てけらし。父母

ばかり合點にて深く包む事なれば。兄藤冠者家來まで誠の斯波殿御出でと。伺候の侍頭を下げ御通りと申し上ぐる。女心の男の眞似顔に紅葉の錦綠。疊ざはりも足浮きて舅君にも姑にも。どう挨拶を諸禮やら無禮やら。たゞあい／＼と禮をして　フシ頭下げるに隙もなく。割膝いたく兎もすれば。女子居住居しどけなく　スエテ行儀つくるもいたく／＼し。詞姫君心わくせきと申し左衞門樣。何がお氣に入らぬやら祝言のとりやりも。渡守なきこがれ船片破れ船の片思ひ。よう煩はして下さんしたと　フシうらめしさうに宣へば。こがれ船でも何船でも手前に帆柱持合せず。本意を背く仕合と　フシ貝韻。してぞ居たりける。藤冠者此の體を心得ずや思ひけん。詞これ／＼左衞門殿。貴殿の御事は斯波の武衞のお館とて。系圖正しく是ある由。氏は何氏何れより別れしぞ承らんと申しける。南無三寶と思へども知らずと云はゞ惡しかりなんと。ムヽ拙は私を。誠の左衞門にてなきと思ふ疑か。拙者が家の氏系圖存ぜぬ事や候べき。末永くゆる／＼と御物語致しませんとぞ答へける。冠者何がな詞質にせんと思ひ。イヤ重ねては重ねて。冠者奴も云ひかゝつて聞かねば一分異なものなり。地是非語りともなくばどうぞ又。語らせ樣もあるべきと。にが／＼しくぞ申しける。今は遁るゝ方もなく然らば語つて聞かせ申さんと。まざ／＼しくはいひけれども夢にも知らぬ斯波の系圖。何處へ取付きいふべきやら。こは如何せんと思ひ亂れて居たりしが。此の上は力なし古の大將兵を。思ひ出すを幸ひに口へ出るまゝ嘘八百。云うてのけんと心を据ゑ膝立て直し息つぎし。左もありさうにぞ語りける。

もんさく系圖

そも／＼斯波の武衞の館と申すは。代々左右の兵衞に任ず。兵衞の官の唐名なれば家を武衞と名付けたり。斯波の氏は源氏なり。總じて源氏もしな／＼の。清和源氏。宇多源氏村上源氏嵯峨源氏。中にも斯波は清和源氏。源氏々々が四源氏御座る。中にも清和ぞ世に光る。　フシ光源氏は敷島の歌道の傳授と聞えたる百人一首の卷頭。天智天皇十八代の帝。陽成院筑波嶺の。峰より落つる源の。賴光に胤腹一つの御弟。賴信の跡取賴義の總領。遠でないよの愛宕白山八幡太郎。義家に五代の後胤上總之介義兼が末葉。兵庫頭坂田の公平には顏。眞赤いな他人にて。渡邊の綱こそは。フシ茨城。童子が片腕。只一太刀にうちわも内輪。フシ叔母聟ぞや。叔母の息子の競瀧口源三位。賴政の小姓立猪隼太とは行合兄弟。近衞院の御宇かとよ鵺といひし獸の。帝を惱まし奉る賴政勅諚蒙つて。たんだ一矢にころ／＼／＼。落つる處を猪隼太九。刀ぞ　地刺いたら畠。畠山の重忠も　フシ縁者つゞきの先祖にて。三浦の大介が痴氣筋。四代の末孫朝夷奈の三郎義秀は。音に聞えし大力。

皆我の五郎時致が鋒の草摺むんずと取つて。曳いて見せんとふみしめて。蹈んばたかつた股野の五郎。力損にて我等まで。いかな殿御もしつかと。だきしめだけはあられの佐々木殿。土肥の二郎も從弟前從弟程ようフシ仁田の四郎。富士の御狩の功名は。末代末世記錄に載つた。猪武者の爭ひに。負腹立てゝ讒言いふ。梶原とは何でもなく鎭西八郎爲朝の外戚腹。瓜の蔓に那須の與一扇の的より精兵の達者。弓の傳授の家そとは是ぞ系圖の始めなる。フシそれより代々に傳りて。楠多門兵衞正成が嫡子犬坊丸。二男惡源太義平。三男山邊の赤人は古今無雙の歌人にて公家にも。一門。在原の業平の中將の。妾腹の孕ごもり妻もこもれり若草に。今日はな燒きそフシ武藏坊。辨慶が七番目の末子。七つ道具のさいづち頭。法然上人の一の御弟子と有難き。熊谷の二郎直實に三代の一人娘。靜御前は血の道持フシ扨こそ御子ましまさず。常に冷えたる

腰越より。追返されさせ給ひにし九郎太夫の判官。源の義經の一の谷の鵯越。眞逆樣にフシ落し子の末葉も茂る桃園や。淸和源氏のちやくちやく嫡流斯波尾張守家氏。左近の太夫時氏其の子に宗氏其の子に武衞。高經が三男斯波左衞門義將とは我等が事にて御座んすと。口に任する系圖の卷胡散な處をいひかすめ。息吐き次第に云ひければさても廣き御一家。身に過ぎたる聟殿や三國一ぢや聟に取り。フシすまいたとぞ諂ひける。地權頭夫婦の人長物語に女の姿。顯れては如何と思ひちと御休息候べし。我等も勝手へ罷立つ。皆々是へと打ちつれてオクリ座敷をへ立つてぞ入り給ふ。地小晒は只一人さてもあぶなや氣づまりや。眞似をするさへ術なきによう殿達は彼のよにして。生きて居さんす事ぢやまでと。獨語して身を横にフシ手枕してぞ休み居る。琵琶の姫立歸りさし足して寢姿のうしろに立つてつくづくと見れば見る程好い男。日の暮れ

るまで待たれぬと。とんと抱付き臥し給へばなう悲しやと起上る。袴の相引しつかと取りこりや騷がしい如何ざいの。暮るるを待たぬ新枕御蔑みも恥かしながら。御事故に氣病して爰へ性なく落付かず。帶紐解いて下さんせ寢て見もせいで嫌はんすかと。じろりと見たる顏付はフシほれて欲しそな目許なり。小晒もたうわなく親達のいひつけには。詞彼の子の氣色本復までは寢る事無用とある上に。地ぬけがけしては一分立たず是非に寢よなら寢もせうが。朝と朝とで切合ふ樣でフシ齒切れがせまいと笑ひける。しや堅い事ばかり毒藥變じて藥となる。袴なりとも解かしやんせと取付けば飛退きて。詞アヽ譯もない。此の袴の下には鬼が栖んで。地いつかい口で嚙付きます。怖い事ぢやとありければ姫さめざめと泣沈み。つれもなきお心や男に立つる心中は。珍しからぬ事ながらみづからが兄藤冠者氏連と。伯父赤沼と心を合せ將軍義教公の御判を以

て。贋廻文を致せし所を自ら御判を盗置き。新手杦の引出物に参らせんと。兄伯父の敵となり隠し置きたる心といひ。あんまり辛き我が殿とステテ恨み喞ちて歎かるゝ。（地）御尤々々御判も請取り義教公へ奉り。御身の思ひも晴させたいが肌を觸れて寝る事は。凡夫の業には叶はぬ事。どうぞ抱付くばかりでは フシなるまいかと言ひければ。（地）それほど寝るがいやなものよう聟入はなされたな。今ならずば今宵の中今宵ならずば明日明後日。少將程通うても叶はぬ間はかなはぬなり。よう覺えてやとかこつ目に。涙を浮べて歸らるゝ オクリ心の〳〵内こそわりなけれ。（地）藤内二郎盛治は女房とは夢にも知らず。左衛門殿聟入りの風聞あり赤沼一家に縁を組み。心を許し給ふ事飛んで火に入る御身の上。如何にしても氣遣はしと借着扮裝つ古川の。式臺に立ちかゝり當番に近付き。斯波の左衛門が家來にて候。主人にそと逢ひ申し度き事の候。御取次頼み存ずるといふ。（地）番の侍聞き届け幸ひ廣間にお出なり。かうお通り御免あれと奥に入れば上段に。器量ゆゝしき若侍茫然として坐したりけり。我が女房の小晒に能くも似たる男子かな。さもあれこれや斯波殿ならんと額を疊に謹んで。（詞）近頃憚り千萬ながら。藤内太郎家治が兄弟なれば。お主同然の忠義を重んじ奉る當代の習ひ親が子を誑れば子は親に楯を突く。況んやこれは赤沼が一族。殊に御小舅藤冠者は。君を討滅さん結構と密々に承る。（地）御運盡きて不覺の事も候はゞ。色に溺るゝの嘲弄遁れ給はじ。とつく御供申さん爲参候仕るとぞ申しける。（詞）顔を上げねばそれとも知らず。ヤア誰なればちんぷんかん殊に此の左衛門を色に溺るゝとは。（地）宿に殘せし思ふ人の傳へ聞かんも恥かしゝ。先づ己れは何者ぞ罷立てとぞ仰せける。イヤ某は御家來藤内太郎が弟。同じく二郎盛治と顔を上ぐればなう。藤内殿か我が夫かと。走寄つて縋り付くを小腕捻ちて取つて投げ。（詞）やれ物狂奴。大名の若君のおさし奉公と僞り。所こそあれ赤沼一家剰へ女の身の。斯波殿と名乗つて月代剃つて。其の態は唐天竺にも例を聞かず（地）爪一つ髪一筋夫に任せし身體ならずや。察する處敵に頼まれ斯波殿を。賺し寄する計略か但しは不義か。迚も助けず白状せよと フシせいて聲さへふるひけり。（地）女房動せず アヽコレ聲が高い。（詞）不審も腹も立つは道理。さりながら不義をする妾でもなし敵に與せん様もなし。變の娘御左衛門様を戀病の心ゆかしの伽にとて。だましてかくはなした事。それに就いて。琵琶の姫大將の御判を兄の持つたを奪取り。（地）床入りしたらばくれうといふさま〴〵思案して見れども。千日千夜案じても女子同士の床入は。文殊の智慧にも能はぬ事腹を立てすと御判を取る。分別したが好いわいのコレせつく事ではないぞやと。事をたゞして云ひければ盛治聞いて。（詞）これは案の外の事出來いた〳〵。

まづ其の御判が取りたいがどうしたものであらうといふ。これ重畳の思案がある。今宵も姫の忍ばれん此方様私と入替り。暗がりに姫と寢て賺して御判を取り給へ。ハテそれがどうなるものぞ餘の分別をせいといへば。地エヽいはれぬ斟酌わしさへ慾を離るれば。お主の爲ぢやないかいの。いやいや終には左衛門様御夫婦の姫君に。疵がついては後難なり然らば某閨に待受け姫君忍び給はん時仔細を語り。連れて立退き參らせん時には御判も取戻し。姫君も御夫婦と本望を遂げさせ給ふのみか。我々が忠義も立つ好き折柄に來合せたり。此方へ任せ案內せよと盛治は上段の。帳臺の戸を差廻し臥したる體にてもてなせば。女房は植込の數寄屋に隱れ首尾合せ。一所に連れて立退かんとヲクリ手筈を〳〵取つて別るれば フシ早暮六つの。地時計の聲一間々々の大蠟燭星の下りし如くなり。牒じ合せし藤冠者赤沼判官藤内三郎。郎等には走井久八根地大藏。息をも立てず抜足して帳臺を押取りまき。鞠垣の大網をそろり〳〵と引延し。四方に張つて包みしは フシ逃れがたなき手段なり。地しすまし顔にうなづきあひ面々が懐中より。大釘鐵槌取出し槇遣戸に手を揃へ。一度に打つて打付けたり。藤内三郎南無三寶と此處よ彼處と明くれども。釘付けの戸の明かばこそ障子を破り差覗けば。大網かけて軍兵ども兵具提げ圍んだり。天へや飛ばん地へや潜らん。六神通の阿羅漢も フシ逃れつべうはなかりけり。地障子の內には大音上げ涙を流いて。詞古人の詞に僞りなし。七人の子は生すとも女に心許すなとは。今身の上に知られたり敵は敵とも思ふべきが。おのれ女奴此のまゝにて死するとも。大天狗となつて思ひ知らせんと。戸障子叩き踏みならし敵の奴等よつく聞け。詞昔が今に至るまで君を弑し父をなみする族はあれども。主と聟とを討取つて世に立ちし例やある。汝知らずや長田の庄司は。主君義朝聟の鎌田を害し其の日に其の身も討たれたり。地因果は下れる車の如し報はん程を思ひ知れ。せめて冠者奴か判官奴か一人討取り雜兵の。五騎も十騎も左右の脇に挿込うで。思ふ樣に締殺し心變りし女奴を。蹴殺いて死なんずものをエヽ〳〵無念なり口惜しゝとて。踏んだる板敷どうど〳〵。どう〳〵と踏鳴し血の涙をはら〳〵〳〵。はらりはらりと襖を切裂き牙を嚙み。跳り上つて怒りをなす フシ無念なりける有樣なり。地障子の外には女といふを姫の事と心得て。詞ヤア愚なり左衛門。敵の娘兄弟とは知りながら。悠々と聟入して女を恨むる不覺さよ。此の通りにて乾殺しに逢ひ餓鬼道に墮ちんより。一思ひに腹切つて修羅道に墮ちよかしと。一度にどつと打笑ひ鯨波の聲をぞ上げたりける。權頭夫婦姫君諸共走り出で。ヤア物に狂ふか惡人奴。仁義ある斯波殿と縁を組みて忠を盡し。身を立てん心はなく謀反人に與し。賢人の大事の聟をも討たん

とは天魔の障碍かあさましと。制し給へばサア開きともなし。地大義には親を殺すそれ搦めよといふ所へ。庭の一木の陰よりもヲヽ暫く暫く斯波左衛門是にありと。夕暗照す黄金作り五尺餘りを指貫き。搖ぎ出でたる有樣は鷗群れ居る潮干潟。蘆分け鶴ののさノ\と フシ物に恐れぬ威勢なり。詞藤冠者驚きて。今迄爰に蟄しつるが何處より逃出でけん。それ討取れと。呼ばはればハヽア愚か/\。蟹は甲に似せて穴を掘るとは汝等が事よ。天下の管領承つて六十餘州の政道を司る。斯波の左衛門義將身は一つなれども。命に代り名に代り幾人にならうとまゝ。これさ藤内三郎。なんと此の左衛門は其の方が舅の。小晒といふ女によう似たとは思はぬか。ヲヽ似たも道理誠は藤内二郎盛治が妻。小晒といふ女房なるかうつそりども。女と思ひ怪我するな灘や通途の女でない。地浪人のうき難儀針一本の力にて。夏の物を冬にしつ鏡立を米にしたり。硯箱を味噌にする古葛籠を忍に。目の前で屋賃にせし神變自在の女なるぞ。詞さりながら姫君の床入には。神通も叶はぬ悼はしさよ。サア此の上は案じもなし。天に二つの日なし地に二人の殿御なし。地夫の爲に捨てん命塵灰芥吹けば散る。煽げば飛ぶ高の知れた浮世の中。詞たとへおのれら鬼神にてもあらばこそ。地斬らば切らんず突かば突かうず飛ばゝ飛ばん跳ねば跳ねん。命限り腕限り三つ四つの男首。詞此の一つの女首換へば換へ德サァ來いと。身も輕々と早速を踏み目の中鋭く身は凛々しく。勇みかゝれる有樣は昔の巴山吹が。フシ生れ變りと謂つべし。地ヤア口の過ぎたる女めかな。あれ討留めよと下知すれば。父權頭打物抜き母も姫も長刀構へ。主といひ聟といひ親に敵對ふ大惡人。除すまじと入違へ暫し支へて 三重 斬結ぶ。地其の隙に盛治は疊を上げて板敷を。やす/\と切破り大童になつて現れ出で。詞藤内二郎とは我が事よ敵に勝劣なけれども。差當つては弟三郎奴首捻切らんと飛んでかゝる。三郎討たすな者どもと。どつと喚いて驅合せ。彼方へ追立て追ひまくり三郎危く見えける時。地女房さかしく障子に張りし大網外し。勇んでかゝる新判官藤冠者が後より。ざい/\と網を打ちかけてえいやつと引きければ。仰反に打ちこかされこれは/\と手足も叶はず。はごにかゝりし野末の鳥 フシ心地よくこそ見えにけれ。地此の勢ひに盛治は三郎をとつて伏せ。高手小手に縛め寄せ來る雜兵四方へばつと追散し。立ちかゝつて網繩を床柱に括り付け。彼等二人は左衛門殿より舅殿への御年玉。生けるも殺すも御勝手次第弟は拙者が正月の。料理初めの初肴是を肴に姫君を。御供申して御祝言月代剃つたを幸ひに。お輿添へにも女ども侍女郎にも女ども。侍にも女どもお侍女にも女ども。四揃花揃きりばねつんばね二役。三役繪がつく德つく色がつく。人思ひつ

く知行づく民も。つく／＼筑紫の果も東も悉く管領無。武家繁昌の御代に逢ふ。此の正月こそ目出度けれ。

源義教公道行　下之巻

地文武の花も栄えた初花咲いた見さいな。藤内四郎殿すゝに鼓打の。役で、代々の太鼓なの。あそこらもとに置かせて。金の撥を手に持ち。てれつくにはつッてん／＼。てれつくにはつッてんてん。とうからつとんと打惚れたなるかならぬか。戀の中の町。なつかの／＼中の町を通りたうは。ないがし草たゝいててつへい若水、裸花笄百貫。くわん／＼くわんとも鳴るは夜明の。鐘はつん／＼つらいか。つッてん。地天の道フシせはかはず。立つ春は鶯鳴かぬ離れ島に雪の深谷の奥までも。知ればや知召されたる。スエテ御身の上に如何なれば。御運も今は薄霞。花の袂もたゞなくに。袂は露にゆふべの色。赤沼父子が逆心を防ぐ力もつき弓の、月の都を。月もろともにヲクリをちかた。人とさすらふる羅綾の袴、錦繍の、重ね引換へいつの間に、鶉衣と綻びて。フシオクリほつれ。出でさせ。給ひける　フシ従ひ仕ふる。者とては、御側近き旅衣。狩場になれぬ若鷹の鳥立も知らぬ若草や。二番生えなる。　フシ若侍。地太夫六角左近大輔冬倉氏公の白旗を、守袋にこもりとて戴み込めてぞ持ちにける。　ワキ山名伊織之介氏廣が。肱にかけたる袱紗には花々に香はる軍配團扇に太夫昔を包ふ梅の紋。畠山小野監高照が、袋に收めし腰に指す。ワキ同じく郎等藤内四郎光治。二人彼等もせめて攻太鼓勝色見せて又何時か。都に歸り花軍開かん。御代の　フシ關路の鳥も。此の曉を今暫し。忍べや我も忍ぶごと。地門出の庭に驚きて。笠打掩ふ人々の　フシ世の成る末ぞ痛はしき。ハルフシ思ふに違ふ。あらましに。昨日と過ぎつ明日は又。いさや白木の弓の弦。フシ思ひきれども思ほえず。頼らるゝ九重の、殘んの雪のほの／＼と　フシ花に。明け行く比叡の嶽。スエテ霞にこめて鞍馬山。鞍置き馬の數々をヲクリ繋がせ。曳かせ歩ませて折にふれたる乘心。フシわが北山の御所櫻。フシ春の眺めと。櫻葉地咲いた櫻になぜ駒つなぐョノ。勇めば駒が。駒が勇めば地天にも上る　フシ雲雀毛や、夏は楠も青の駒、祭に加茂の葦毛や紅葉にかよふ小牡鹿の　鹿毛も溶えたる月毛の駒の。駒の銜さへ／＼／＼と。手綱かいくり／＼栗毛に。乘つた馬上はよしや蘆毛に。雪の間つ白白覆輪や、フシ金覆輪。今は梨子地の鞍鐙馬はあれども此の身には。徒歩路越えの、八幡山弓手に、みつの行く先は、地山梔原と聞くからは。世に隱らふる我々が。此の身包むに頼もしく　フシ明けすもあれな淀川の。岸にかけたる白浪を花の網代と朝ぼらけ。鶚の鳥鳶飛んでハル天に至れば、魚、淵に躍る教へも。上下の。スエテ道明らけき鳩の峰。正八幡の鎭座なる。地我が氏の神軍神武運を守りたび給へと。江戸頭を傾ふけ給ひければ。お

のゝ遙に禮拜し。君が行方を祈念あるフン御有。樣こそ殊勝な。れ　フシ見渡せば。地山の名の。朝日に氷解けわたり水や畑を槇の島。宇治の里の子打群れて。歌萌ゆるゑぐ摘む若菜摘む薺花杉菜にさいたづま。妻は誰が妻老いぬれば。藷の姑。〳〵。水黒い川で船こがば其方は目籠で水を汲め。藷の姑。藷の姑。あの松山の松葉をよめやゝ嫁菜蒲公英。フシ土筆。菫菜摘みて童の。相撲取草立つ方に。勝てや勝て〳〵かちどきの聲高無雙武士の。誉にかけて播摩投フシあぐる團扇や　フシ扇の芝に。はや三番の勝相撲。名乗りて過ぐる杜鵑待たぬに春を〳〵漏れ出でて。地弓馬の道も魁けんと。張りわたす長池や水草かきわけ鳴く蛙。かはづ軍の勝負に。御身の上の占問へば。氏の源氏みなく濁り。なき世に泉川しばし[illegible]の瀧津に。沈まば沈め額みある甕の。頭にそ[illegible]〳〵着き給ふ

[illegible]其後に。地畠山小將監進み出で。詞某召具し候は藤内四郎光治と申す郎等。太鼓の妙を得戰場の駈引。御陣の押太鼓萬里を響かす名人故。地則ち御代代の太鼓を預け召連れ候。斯波の左衛門が家臣藤内太郎が弟にて候へば。此の者を御使として斯波が方へ内通し。一先つ御頼み然るべしと地申し上ぐる地義教公やゝ涙ぐみ給ひ。我もさこそは思へども斯波が諌を用ひず。今かかる身となつたれば今生にて左衛門に。いかでか面を合はされん。仁義ある忠臣に見捨てらるゝも義教が。スエテ運の極めとばかりにて御。涙にぞ咽ばるゝ。地かゝる處に十八九なる若者。編笠脱いで御前に畏り頭を地に着け申すやう。詞某は御近習に召使はれし一色大炊之介にて御座候。御壁書を背き不義の科高眼を掠め。女を相具し駈落重罪遁るゝ方なく候へども。全く色に耽り御成敗を恐るゝにも候はず。もと我等は一色が子にて候はず。元來父母もなき捨子とやらんにて候ひしを。詞養父一色兵衛拾

ひ取り御目見え仰付けられ。總領に立つべき處に段々實子出生いたし。養父兵衛尉世を去り母にて候者。若年の弟を總領と申し上げ年嵩の某を。末子と沙汰し式日の御禮も俄に末子の座に列り。御供に候六角畠山山名を始め。肩を並べし諸朋輩に。地面を向けんも面目なく。所詮一色が家を出で誠の親の所緣を尋ね。此の面目を雪がんと存じ候折柄。心の外に御法式を背き御所を立退き候。慈悲は上より御免を蒙り。御馬の前にて討死仕り候はゞ。生前の思ひ出とスエテ涙を流し申しける。地大將御立腹まし〳〵。詞など以前首を斬つて棄つべかつしに。入道奴が助け落したれば己れは入道が。大恩を受けし者を召使はん樣はなし。誠あらば立歸り赤沼入道父子の中。首取つて來れ其の時は勘氣を赦し召使はんず。地罷り立てと御諚ある大炊之介承り。有難き上意赤沼父子が首取つて。御憤を安んじ奉らん如何に朋輩達。若し仕損じて討死すとも。敵

に半死半生の深手を負ほせて置くべきか。御勘氣御免の御執成。賴み申すとばかりにて御前を立去りし フシ彌猛心ぞ賴もしき。地大將彼が後姿を遙に見遣り給ひ。如何に方々彼奴が詞は心得がたし。大炊之介が痩腕にて赤沼父子を討たんとは。誠に蟷螂が斧なれば叶ふまじきと歎かんこそ。誠の心なるべきにたやすく討つて參らんと。輕々しく立つたるは思へば彼奴は入道が。思を逆らん爲義教が有樣を窺ふと覺えたり。おつかけ討つて來るべしとく/\と宣へば 詞血氣盛んの若者とも逸るばかりに思案もなく。討取つて御門出の一番手を祝はんと。早速を踏んで三人は藤内四郎相具して。もみにもうでぞ追駈けける。フシ御運のなせる處なり。地旅人の体らふ體にもてなし。傍に寄り給へば何處よりか來りけん。矢一つ來つて左の袂に立つたりけり。こは如何にとかなぐり給へど堪らばこそ。猶亂れ來る矢を凌がんと笠を以て受け給へば。刈殘したる村薄 フシ枯野に立てる如くなり。地今は叶はず是までと此處の木蔭彼處の草村。隱れ顯れ逃れんと。佇む處に赤沼熊橋弓箭の武者百騎ばかりが。一面に矢襖つくつてどつと寄せ。ヤア義教都よりつけ來るをそれと知らざる愚さよ。速に腹を切れ異議に及ばば 地なぶり殺しにせんずると。鏃をならべし其の勢ひ遁れつべうは無き處に。詞藤内四郎取つて返し。矢面に駈塞つて。ヤアこりやなまこび過ぎたる奴輩かな。畠山が郎等つでん天下に隱れなき。太皷打の藤内四郎定めて音にも聞きつらん。太皷も打つたり敵も討つたり。物臭い赤沼に胸が惡うて頭も討つ。地太刀も刀も入らばこそ撥二本が干將莫耶。一曲所望かサア來いと四邊を睨んで立つたりけり。相手になつて犬死すな遠矢に射取れと。差詰め引詰め雨霰と飛び來る矢を。樂車太皷の曲撥見よと。撥押取つて切拂ふは前代未聞の 三重へ拍子なり フシ矢種盡くれば。地敵の勢太刀拔連れて討つてかゝる。大將も太刀さしかざし支へ給ふ其の隙に藤内太皷を轉ばせ寄せて天も響けどう。/\/\と打鳴らす其の聲に。すは事こそと三人は我も我もと引返し。大勢に割つて入り斬立て薙立て追散らすは フシ潔かりし働きなり。地熊橋犬二郎滿景取つて返し藤内に討つて蒐る。しやしれもの奴太皷の撥の鹽梅見よと。目とも鼻ともいはせばこそ。無二無三に叩きつけ太刀打落いて小股をかき。俯伏に取つて伏せ フシやがて繩をぞかけたりける。地程なく三八立歸り御事初の御吉左右。猶も目出度き驗には只今あれにて承れば。赤沼入道吉野山の古城に立籠り候を。斯波細川が攻寄するとの風聞。兩將が陣へ御入りあり。逆臣滅す謀時刻を移すべからずと。言上すれば御大將げにもと同じ給ひける。藤内四郎は犬二郎が背中に太皷を括り付け。御出陣の武者揃へ味方を集むる觸太皷の。祕曲を打つて祝はんと撥輕々と打鳴らし。聲

張上げて觸れにける。明日より吉野の山にて大合戰寄手の勢は三萬續き。敵役は赤沼入道御望みの方々。明日はとうからから〳〵。とん〳〵からからどんがらが。つッてん天の時到り。地の利に合へる名將の出陣こそは 三重 勇々しけれ。ノシ さる程に。斯波の左衞門義將は大將軍の御出に。面目開く花櫻吉野に籠る大敵を。血汐になれと赤沼が大手の木戸に向はるゝ。搦手は細川勝秀三萬騎を引率し。貝を吹き太鼓を鳴らし鯨波の聲をぞ上げたりける。詞 軍大將竹束際に駒を立て清和天皇の後胤。足利の類葉斯波左衞門尉源義將。寄せ來る意趣は赤沼入道父子謀逆を構へ。帝都を騷がし武將を弑し。四海を覆さんとする罪科據なし。誅戮せしむべき旨承つて發向す。勅命といひ武命といひ天道いかでか免れん。速に腹切て親子皆を渡せややつと呼ばはつて。地 しづ〳〵と乘入れしは フシ ゆゝしかりける武者振なり。入道門の矢切に立つて。

詞 大將を滅し國家を望むは弓矢取る身の定まる法。和漢其の例を知らず忠孝に事寄せて。位牌知行に膝を屈むる臆病者。入道一家を討たんとは鷲の巣を鼠が狙ふに異らず。誰かある討つて出で追散らせと。采押取つて下知すれば。城にも鬨をどつと揚げ大手の木戸口押開き。切つて出づれば寄手の大勢入違ひ入亂れ揉みにもうで 三重 戰ひける フシ かゝる處に。地 金の御嶽の方よりも若武者一騎。卯花縅の鎧着て大手の木戸に突立ち大音上げて。詞 城内へ申すべきの事候。我こそ入道殿に一命を救はれ參らせし。義教の奧小姓一色大炊之介久常。御高恩忘れ難く命の親の御先途に。鑓一本のお役にもとお味方に參つたり。門を開き城内へ入れてたべとぞ呼ばはつたり。斯くと聞くより新判官塀の上に現れ出で。ヤア表裏者の恩知らず。汝不義の科によつて害せられんずる處に。父入道が情を以て命を助け落せしに。其の大恩を振捨て一大事を

など藤内には語りしぞ。犬猫の畜類も食を與ふる恩を知る。地 蟲同然の奴ばらを此の赤沼が味方にせんずる樣はなし。とつく歸れと云ひすてゝ城の内へぞ入りにける。地 大炊之介も詮方なく寄手の陣を見渡せば。藤内兄弟三人陣頭に控へたり。大炊之介きつと見て珍しや藤内太郎。詞 定めて沙汰にも聞き給はん。某御勘氣御免の願ひ申し上げたる處に。大將軍の仰には赤沼父子が中首取つて來らば。其の時御免あらんとの御諚に付き。味方と僞り城に入り誑り討たん心入れ。門外までは來れども敵心を許さねば力なし。方々ひとへに賴み入る斯波殿へも樣子を語り。御執成にて御免あり心すゞしく好き敵と。引組んで討死遂げたき心底を哀れと思ひ。よき樣に披露してたべ藤内殿と スヱテ 涙を流して賴みける。地詞 太郎聲を荒らげ情知らぬに似たれども。大事の攻口小事に拘る暇なし。軍初めの味方に對し涙の體は不吉なり。地 餘人を賴まば賴まれよと

フシ愛想なげにぞおしらひける。地はつとばかりに大紋之介。我はふつつと叶はぬかと。スヱテどうど座を組み歎きしが。敵も味方も聞いてたべ某程世にあぢきなき者はなし。地誠の親は見ず知らず捨子となつて拾はれし。名字の親の一色殿には死別れ。主君には勘氣を受け朋輩には疎まるゝ。此の身の前世は何者が生れ替りて此の身ぞやと。諸軍勢の見る目とも恥ぢず。歎くぞ哀れなる。地エ、思ひ極めたり軍をすとも悔つて。好き敵は向ふまじ雜兵の五騎十騎。討つとも何の益あらん兩陣の眞中にて。腹掻破り生々の業煩惱を晴さんと。腰刀するりと抜き此の刀こそ生みの親より讓りの刀。是を添へて捨てられしと養ひ親の物語。二度指すべき鞘にてなし。共に冥途の供せよと。鞘の眞中二つにさつと切割つたり。不思議や鞘を二重に鑿り父の筆とおぼしくて。一通の證文あり諸人不思議の思ひをなし。鳴りを靜めて聞きければ高らかにこそ讀みたり

けれ。詞五番目の男子に書置く一通の事抑我等が氏は藤原生國は河内の國。依つて家名を藤内と呼ぶ久しく浪人に沈淪して。五人の男子を儲く一藝に名ある者は。用ひられずといふ事なしといふ本文を忘れず。藤内太郎より二郎三郎四郎まで笛鼓を習はしむ。汝は襁褓にて母に後れ父亦今死に臨む。孤兒とならんいとほしさ路頭に棄てゝ養育の。又餘の親を待つ事も誠の親の情なり。共に孝行忘る可からず藤内五郎忠治へ。慈父藤内太夫實治判と。讀みも終らず太郎二郎四郎も立寄り。見れば父の手跡なり在りしとばかりに見ず知らぬ。乙の五郎なりけるかや兄々達か懷しやと。兄弟ひしと抱きつき フシ慕ひ歎くぞ道理なる。地城の内には聲々に斷くとも知らば誘き入れ。とつく討つて棄つべきものを。あれ餘すなと云ふ程こそあれ。我も／＼木戸押開き鎗先揃へて支へたり。何處よりか來りけん藤内三郎高手小手に縛められ。陣中に跳出で城の大

將聞いてたべ。先日古川が館にて。兄の二郎に搦め捕られし藤内三郎武治なり。つれなき兄奴が生けもせず殺しもせず。遣放しの放し飼近頃無念千萬なり。繩をといて給はれかし兄二郎奴が首取つて。此の無念を晴らしたし如何に／＼と呼ばはれば。地城に籠る藤冠者任せて置けと飛んで出で。詞ヤア三郎か珍しや。大事の味方一人搦めさせては口惜しゝサア。働けと解く處を添しと腕首取り。前へとつて引寄せどうど押伏せ。一旦の出來心兄に背きし後悔さに。誑つたるぞたわけ者。すぐに此の繩頂けと三寸繩に括り上げ。兄弟の中直り土産にすると廣言して。味方の陣へ押立て行く フシ心地よかりし働なり。詞弟五郎入替り今迄は大炊之介今日よりは藤内五郎。四人の兄は親のしつけし亂舞藝。我等は自身の才覺にて棒を一手覺えたり。我と思はん者あらば某が棒先に。中つて見よと呼ばはつて白銀にて筋金入りし。樫の棍棒掻込うで進み出づ

れば四人の兄弟。地我々が一藝も揃へて軍の目を覚さん。棒に合せて囃せや鼓吹けや横笛。打てや太鼓討つたり敵と戯れて。一聲を奏すればこは花々しの者どもや。討取つて功名せよと走井久七久八。羽根田頓藏根地大藏。栗生熊藏石坂九郎得物〳〵を提げて。打つてかゝれば藤内五郎棒の祕術の水車。横車腰車片手輪違ひ雙輪違ひ。一文字十文字拂ひ落し掛落し。百手を千手と衛を碎き。數多の敵に駈向ふ目覺しかりける三重〳〵働なり。地胸坂胴骨眉間眞甲打割られ。弓手馬手へぞ伏しにけり時分は好きぞ乘取れと。搦手より細川勝秀城中へ亂れ入り。堀際塀際追詰め〳〵。一騎も殘さず討留めしが赤沼親子を見失ひ。此處よ彼處と尋ぬる處に。地中川が亡魂は花の吹雪の雪女。一念の鬼女となつてあら恨めしや如何に赤沼。たとへいづくに隱るゝとも助けはやらじ吉野山。花を尋ねて山廻り最期の寒風また此處に。冴返りたる雪氣の雲の雪を誘ひて山廻り。めぐり〳〵て輪廻の恨み。思ひ知れやと入道親子を引立て〳〵。來れ〳〵と大將の御前に引据ゑ。猶行末は源氏の白旗白雪の。守神ぞと木綿四手の フシ雪を。散らして失せてげり。地大將御喜悦淺からず二人が頭を斬りかけさせ。勝関三度三々九度斯波細川に御盃。藤内五人に五箇國の御加增御褒美だん〳〵に。樂車打つてはやした。囃した繁つた松竹の世よし人よし物なりよし仕合よしの今年ぞと祝ふ。春こそ目出度けれ。

右之本令吟覽頌句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也

竹本筑後掾 竹本博教（書印）

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋 山本九兵衛 版

大阪高麗橋壹丁目 山本九右衛門 版

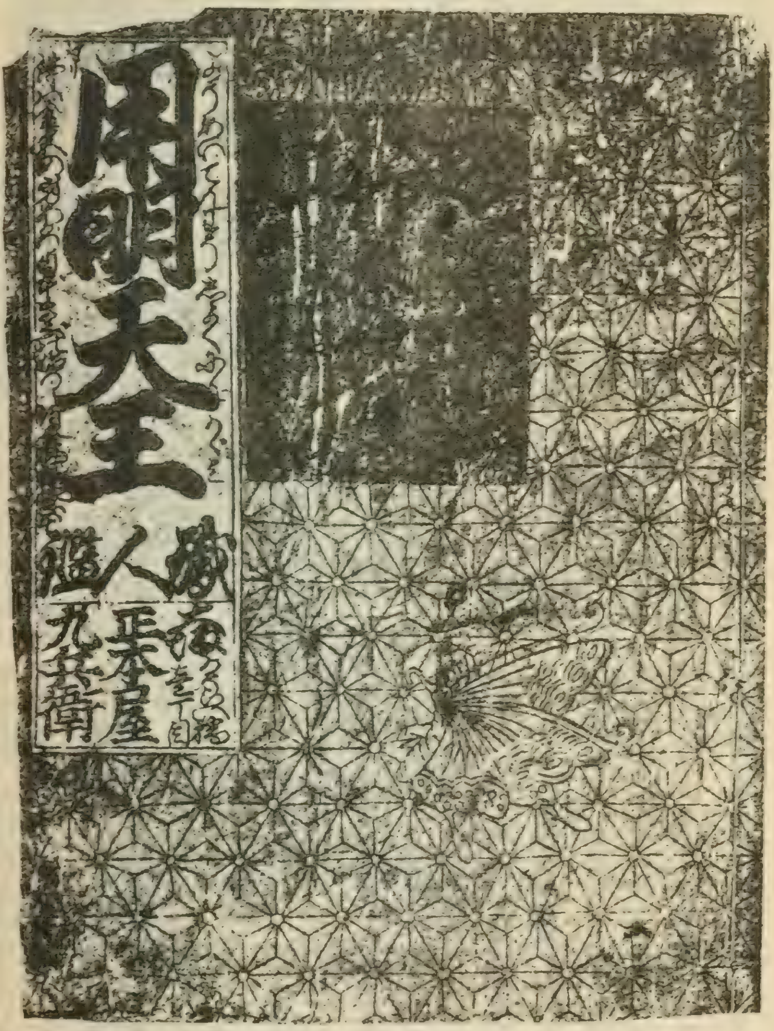
『用明天皇職人鑑』表紙見返の繪

用明天皇職人鑑

近松門左衛門作

序宋の陸子靜が曰く。東西海の聖人此の心を同じうし此の理を同じうす。南北海の聖人も亦同じと。されば大中臣の本系に。嚴矛の本末を傾けず中柄ふる人中臣といへり。是ぞ實相中道の佛の敎禪の法。皆一筋の秋津道傳はる種や和歌の文字。三十一代敏達の天子。惠みかゞやく瑞穗の國オロシ〽八咫の鏡の。影淸し。地然るに當今甚だ文史の學に長じ給ひ。民を以て天とすとめぐしひたし給ひければ。君が八隅の外迄も フシ君子。國とぞ仰ぎける。地御同腹の御弟山彥の皇子萬卷の文車。牛に汗して轟かし謹んで奏聞ある。詞誠に先帝欽明の聖代に。五經の博士易の博士。曆道醫藥の書籍迄來朝すとは申せども。外道の法未だ日本に渡らず候。是はこれ四韋陀と號す外道の書。此の法を學ぶ者は因果を撥無し來世を期せず。現身に虛空を飛行し雨ともなり風ともなり。億萬劫の命を保ち。上天を祭つて生きながら上界に生ずる法。そのかみ五天竺に蔓つて君臣安樂を得たる處に。釋迦といふ者佛法を起し外道衰へたると傳へ候。目出度き國の御寶天下に弘め給へかしと。希代緣によつて招き求め候と。地奏し勸めし其の顏貌外道の術に迷はされ。魂に入りしとは後にぞ人を知るとかや。帝を始め奉り百官歸伏の思ひをなし。重ねて諸卿の勘物に任せ。此の書を和國に弘むべしと フシ御沙汰とり〴〵まち〳〵なり。地爰に別腹の御弟豐日花人親王は。黃卷朱軸の經典を七寶莊嚴の羽車に盛り積んで。庭上に舁き据ゑさせ正笏一揖して奏聞ある。詞そも此の卷々は大聖世尊釋迦牟尼佛、五十餘年の妙經父帝の御宇に。百濟國より渡りしに。時機未だ熟せず。追返されし彼の小舟博多の沖にさすらふる由承り。臣密に尋ね得て拜見し佛敎の大旨を鑒みるに。智者は禪定觀念の理によつて。三世を悟り。愚者は讀誦戒法の行によつて菩提に入り。戒定惠の三覺廣くは三千世界。一切衆生に亘り略しては一心に歸す。一心則ち十界に遍滿して自在をなすを佛といふ。これ萬寶を降らす如意寶珠、地此の敎に則つて天下を治め給ひなば、我が朝の天神地祇感應の和光を添へ。なほ君が代は萬代と。治まる國の御寶と フシ恐れ。入つてぞ奏せらる。地山彥の皇子聞きも敢ず。詞ヤア花人親王珍しの奏聞やな。そも佛法は先帝の御宇に異國の法とて捨てられし。其の先帝と申したは誰なるぞ。主上を始め麿も貴邊も父ならずや。三年父の道を改めずとは儒道の敎。但し佛法は親に背く道なるや。花人やがてイヤ仰迄

も候はず。父の非を改むるは孝の一つ。君父の命重しとて悪を改めざるを道とやは申すべき。それは舟端に刻を付けて刀を尋ぬる譬に似たり。よしそれもさも候へ。佛教をさへ捨て給ふ父の詞を守り給はばなどか外道を用ひ給ふ。地親といひ兄といひ斯く申すも孝の道。邪道を捨てて正法の佛の御法を受け給へと。誠を盡し宣へば皇子大きに氣色を損じ。詞ヤア邪道とは何事ぞ。和主が尊ぶ佛の弟子神通の目蓮は。竹杖外道に打殺され。漏樓外道と聞えしは八萬劫が其の間。四大海の水を耳の孔に收めて。過去七佛も諸菩薩も水に渇して憂き目を見せし。地かゝる不思議が叶ふべきか。釋迦が説いた極樂世界寂光浄土はいづくにある。舟で行くか馬で行くかサア。在るならば連れて行けと。詰めかけ〳〵席を打つてぞ申さるゝ。詞チヽ極樂の在所案内申さん。これ君見ずや君が尊ぶ道書にも。呂洞



繪入細字本の表紙

賓が袖の中の青蛇を抛つて。黄龍に參ぜしは。身の中の蓬萊山を唯心の淨土とあらはしたり。一心の外に何處かあらん。外道の元祖提婆達多は如來の三十二相を學び。千輻輪に金具を使ひ。眉間白毫に螢の光を借りしぞとよ。惡法を説く釋迦ならば何とて提婆は似せけるやらん。地ア丶勿體なし〳〵。慢心を挫いて正道に入り給へと。理非を正して教化ある。道理かな此の親王御成長の後。邪と愚かや日本佛法の開基。聖德太子の御父帝用明天皇と申せしは此の親王の御事なり。時に物部の大臣進み出で。いづれも御連枝の御中といひ。殊にかゝる聖賢の道此の勝劣は勅判にも及び難し。所詮兩方の經卷を火に燒いて試みば。邪正の驗あるべしと用意あれば佛道に。心を寄する人々は勿體なしと歎くもあり。皇子方にはすは大事と眼を塞ぎ觀念し。三目八臂摩醯首羅天。毗紐天。迦比羅大漚樓僧佉天。一つの驗を見せ給へと。齒をくひしばつて立つたりけり。主殿司松振り立て兩方一度に薫する。あらうたてや佛經の表紙紐に火移つて。華嚴阿含方等般若大乘涅槃沙羅林の。夕の。煙消え殘る フシ玉軸はかりに成つてけり。地外道の書には火も移らず雪を焚くかと怪まる。山彦皇子大音上げ。叡覽あるか我が君佛道邪法に極つたり。邪法を信ずる花人は大日本の怨敵たり。罪科輕かるべからずと高聲に罵るは フシ苦々。しくぞ見えにける。地花人親王莞爾と笑ひ。詞ア丶さな宣ひそ兄君。正法に奇特なし譬へて申さば。草木の誠の花は嵐に散り霜に枯るる。風にも霜にも痛まぬは僞の造り花。まつ其の如く石金にても燒くを以て火の德たり。況んや火を取つて紙に移さば燒くる道理燒く道理。物を燒かずば火の益なし紙も燒けぬは天魔の術。信ずるに足らず願ふに足らず。地眞實微妙の佛の不思議驗を見せしめ給へやと。合掌あれば有難や殘りたる玉軸より。七千餘卷の文字の數々一點失せず現れし。光の中より妙覺の如來の容貌あり〳〵と。拜まれ給ふと見えけるが肉髻より電光。移ると等しく外道の書は皆灰燼と煙り行き。紫雲に乘じ御佛は フシ雲居に。上らせ給ひける。地皇子は默して赤面す月卿雲客手を合せ。あつと感じて禮せらる主上甚だ叡感あり。妙なる業を見るからは異國の法とて捨つべからず。當國向原に伽藍を構へ佛法流布を待つべしと。稻目の臣にぞ勅諚ある重ねて花人親王を玉座近く召され。佛法の大意は大慈大悲と傳へ聞く。されば朕世を治めてより未だ一事の慈悲をもなさず。天が下に觸をなし土民には貢をゆるべ。商人に黄金を施し扨職人には官位を與へ。諸國の受領に任ずべし。御身宜しく計らひ給へと。畏りなる詔 此の時よりや諸職人。今も國名を許されて時に近江や世に出雲。其の萬代も竹の名の。筑後の後の末長き御代に。住む身ぞ 三重へ豊なる フシさる程に。
地山彦の皇子の館には小野の土丸伊駒の宿

詞彼等二人は襃の臣中にも外道の道士。伊賀留田のますらは神變希代の魔法を得て。則ち皇子の師範たりしが今日大内の諍論勝負は。如何と案じ煩ひ便遲しと待つ所に。還御なりとぞ呼ばはつたる三人すはやと走り出で。さて御首尾はと尋ぬれども皇子は不機嫌返答なく。冠もぎ捨て禁色の裾脛高く捲りあげ。どうど坐してくわん〱たる聲をあげエヽ無念至極せり。今日禁庭の晴れ業佛道外道の爭に。我が法は打負け佛道のために。寺とやらん伽藍とやらん建立せよとの勅諚。それさへあるに日本國の諸職人に。官位受領をなすべしと花人親王に是を仰せ下さるる。然らば弟の花人は日々に威勢蔓つて春宮に立たんは必定。時には麿が王位の望達すべき期はあらじ。地此の上は高麗唐土へ押渡り。韃靼契丹南蠻蝦夷の夷を語らひ。一戰の矛先に運を極むるばかりなり。エヽ思へば奇怪口惜しと。怒れる涙はら〱とスエテ鮫人が玉を貫けり。

地伊賀留田のますら承りこは心弱き仰や候。たとへ腸持の釋迦阿彌陀が出たるとて我が法に敵ふべきか。いで某が魔法を以て。形はこゝに在りながら兩眼は四方へ飛ばして。親王方の案内を見屆けて注進を仕らんと。地虚空に向つて大玄谷神の呪を唱へ。還丹の法を行ひしが刹那が間に一條の。虹大空に棚引いて左の眼拔け出でて。眼火四邊に散亂し雲蛇に巻かれて三重へ飛行するフシますらは其の儘。地眇目となり申し〱。詞暫しの間を待ち給へ。これかつせん王が吹目の術。三界を見巡る事半時を過ぎず候と。地語る詞の中空にますらが左の眼の玉。光と共に飛歸り本の眼に收りしはフシ只流星の如くなり。詞ますら横手を丁ど打つて。花人親王の御所の樣よつく見屆け候が。珍しき事こそ候へ其の仔細は。豐後の國の住人眞野の長者と申す者。寵愛の娘玉世の姫繼母を疎み殊には又。女の身にて遠國に住み果てんも物憂しとて。百島太夫と申す乳

人を具し春の頃より都に上り。檜隈の國に館をしつらひ居住仕り候に。彼が被官の職人どもに官位受領をせさせん爲。金銀財寶を以て親王へ賂し諂ひのあまり明日は。親王を招待し御茶を上げ申すとて。料理獻立表換へ其の用意眞最中と見て候。地これ屈竟の時節たり我々が祕法を以て。毒氣を吹き込み親王の執權檢非違使勝舟。百島太夫と不和になし同士戰を致させなば。親王は一本立誰侍く者もなく。討たうとも縛らうとも。籠中の鳥に候とフシ語りけるこそ不思議なれ。詞皇子忽ち色を直しヲヽ大慶々々。眞野の長者が玉世の姫は音に聞いたる美人なりなほ端的の法を以て帝位に登り。彼の姫を後宮に立てんは如何にとありければ。地それは危ぶむ所にあらず我亦一つの祕法を以て。彼等に障碍をなし申さんと天に向へば不思議やな。ますらが右の眼の玉又拔け出でて棚引ける。雲に入るかと見えけるが則ち小仙の。奇形となつて雲路行

く。鐵拐仙の再來かと フシ奇異の。思をなしにける。地本懐時を移すべからず先づ悦びの一献と。青海波と名付けたる一吸九盃の大蛇。濱床に飾らせて既に。酒宴ぞ 三重 へ始りける。フシ鄙人と。誰が言ひ初めし國の名も。心の花の豐後梅眞野の長者の祕藏子の。玉世の姫はたま〳〵の。スヱテ上方住居習はうより。地慣れて所の風に染みたる髪容。少し殘るは國訛。それも詞のフシしなならし。地今度花人親王御執奏に任せ。町人の受領勅許なりと傳へ聞き。我が國許の諸職人受領望みの輩を。御取次申さんと其の人々を給にかゝせ。宮を請じ參らせらる。花やかなりし御接待オクリ心へことばも及ばれず。地斯くて親王館に入らせ給ひければ。姫中門に出迎ひ及ばぬ雲の上人を。賤が伏屋の御設け恐多しとばかりにて。俯向きざまに御顔をじろりと見たる上臈フシこれ戀知りの目癖ぞや。詞親王もはや御心に思ひ入江のこがれ舟。笹のをざさの一夜をだに寢亂れ髱 地解きほどく職人盡しの手業にて。事寄せつ又かこつけつオクリ互のへ心を語らるる。

職人盡し

地是ぞ此の大内の縣召かや諸人に。司を賜びてそれ〳〵に國名をつきし烏帽子子の。始にかけし烏帽子屋が身を立烏帽子諸眉は。三大臣のお召しとて。スヱテ高き位やかけ烏帽子。十二の冠式法の。中に人目の透き額フシ風折烏帽子。折々は。戀に心や揉烏帽子。平禮小結梨子打や。烏帽子屋なれば是をとて。先づ頭にぞ フシ置かれける。次は琴屋が爪立てて家職に骨を折琴の。調に君を松風やじつと二人が フシねじめよき。繼三味線は場を取らぬ閨に嬉しき細工人。こゝに見えしは筆結ひの千歳の。昔千里の海。隔てし中の通ひ路も。スヱテ物言ひ交す中立は。假名書き筆の假名文にオクリ眞書。筆の眞實の法の敎も學ばせて。人の心に花咲けば實も奈良油煙手合せに。朽ちぬ寶や フシ握り墨。澄むも濁るも世の習ひ。人のふり見て我が振袖の。姿直せば心の中も。月は眞澄の鏡屋の。鏡は神の御影ぞとて。伊勢の守とも フシ召さるべからん。扨其の次は鞴吹く鍛冶屋の挺の衆てつ。からり。ころり。てん〳〵からりの相槌も フシ打ちに打物。もとは燒刄の燒物なれば。備前の守とや名にし負ふ。櫻が色に。花塗の吉野漆の塗師屋蒔繪屋檜皮屋に。軒の御簾屋の玉簾 フシ伊豫の守とも召さるべし。フシ我が通ひ路を。塗籠めて。風を通さぬ壁塗はかくと白地の扇屋の。折さへあらばフシ折を得て。互に見まく。星兜具足屋弓屋武夫も。親子妹背は情知る野邊の。木地屋の轆轤引きひくや夕なの。梳櫛や。亂れ鬢櫛人はよも。フシ水櫛とこそ。思ひしに フシたが三つ櫛に。名を立てて。包めど餘所に。錐は透す霧は通さぬ桐の箱。指物屋より檜物屋の。地曲らぬ木竹捻ぢ曲げて締めてそこいを月ぞすむ桶屋が妻の寐心も。よしや濡ら

してきぬ〳〵にフシ干してまだひぬ傘屋。さして降らねど紅葉も。時雨の雲に染物屋。染めて上繪屋縫物屋。絲もて通すみすや針。綻びやすき浮名をも繋ぐ數珠屋の百八の。思ひよるなを フシ我が思ひ。地如何晴らし給はると御衣の袂をひかゆれば。親王も亦御心ぬるみてとくる銅屋。二人の戀路一對の錫屋瓦屋かはるなと。しとゝ背中を叩いて延す藥鑵屋に。詞の花やかざり屋の飾らで思ふ中ならば。いざ屛風屋の小蔭にて君と。我とはねり物やこちの寢衣の帶解きて。とんと其方に煙管屋の。仲よしず屋となり給ふ緣の程こそ〳〵不思議なれ。

地爰に親王の執權檢非違使勝舟は。御留守に殘りしが思へば四方に皇子方。氣遣しと馳せ來り奥の體を窺へば。酒宴亂舞の眞最中エヽまだ盃はとれまいと。辛氣をもやし居る所に百島太夫。金の銚子に土器添へ廊下過ぐるをこれ太夫殿。詞ヤア勝舟殿か先づ以て今日は冥加に叶ひしお成にて。姫が恐悦我々迄も有難さ。扨職人の悦びいづれも冥加の爲と申し。勝手に相詰め罷り在る。扨是は長者が家の銘酒國許より到來す。是を差上げて千秋樂に致さんと存ぜしに。親王樣は只今御假睡にて候へば。御迎ひの樣子をも後程披露申すべし。先づ御酒一つと言ひければ勝舟聞いて。殘るかたなき御馳走さぞ御勝手にも御草臥にて候べしと。地挨拶も時移り既に夜半のかねてより。ますらが行ふ魔法の形天井に現れ。二人に邪氣を吹きかくれども フシ更に人目に見えざりしが。地銚子自然と飛上り勝舟が眞甲に酒ざんぶとぞかゝつてけり。吹込む毒氣五體に浸み只熱湯の如くなれども。外道の業と知らばこそ。身じまひして百島が膝元へつつと寄り。詞ヤイ爰な運命つきの業人め。山彦の王子には威勢が怖いか但しは利慾で賴まれたか。どうでも己れ一分の意趣あるべき樣の覺えなし。世に出生して三十餘年人に指でもさゝれぬ男子。沸き返つたる酒をかけ隙間を見て討たうとや。我を討つて我が君を害せんとの巧みよな。サア己れが首は獄門道具高札に書く爲なれば。眞直に白狀せよ百島ぎよつと仰天して。イヤコレ勝舟殿銚子に手をもかけばこそあれ。殊に冷酒熱からん樣もなし。ムヽ聞えた聞えた。御用心の折柄なれば嚇して心を試さん爲な。それには些と御粗相でないかと言へば。イヤだまれさ。檢非違使勝舟が粗相とは否長しと。地諍ふ内に異形は手をのべ百島が眉間を。割れてのけとはつたと撲つ。詞百島太刀を押取つてやい公家侍。凡そ薩摩二才とて九州者は端喧嘩せず。武士と武士との口論に面をはるは何事ぞ。怺へる程は怺ようが堪忍藏の戸が開いた。ま一度指をさいて見よ腕骨切つて切り下げん。サア腕を出して見よと鍔元寛げかゝりける。ヤイこゝな狼狽者。己れに何を遠慮して腕先でするものぞ。九州者の首を取る公家侍の手並を見よやと。地斬らんとかゝる勝舟が眞

甲をはたと打つ。ヤア己れこそ卑怯者とつつ立ち上れば彼方を打ち。此方を打ちつけ叩き付け。雙方一度に拔合せ。ヤア物狂ひめ餘さじと切結ひては切りほどき。大庭に飛んで下り左手へ追つ込み右手へ切込み散々に打亂れ。裏門さして切出づるオクリ外道の〽所爲こそ怪しけれ フシ斷くとや物の。地告げたりけん山彦の王子只今是へ馳け來り。御門外に突つ立ち候御用心あるべしと。門番の者ども口々に注進す。女房達は慴ち恐れ太夫殿はおはせぬか。百島太夫殿と呼び廻れども音もせず。若侍は醉ひ臥したり勝手に詰めたる諸職人。立騷げども丸腰の フシ顚ひ廻つて埒あかず。地度を失ふ折柄に桶ゆひの久馬平とて。小兵ながら大力人々立寄りこりや久馬平。此の度の御用なり武夫と僞り。皇子を早くほつ返せ如何に〳〵と言ひければ。詞なう勿體なや鬼のやうなる惡皇子。殊に刄物は槍鉋より外。太刀とやらん刀とやらん手に取つたる事も

なし。地眞平御免と逃出づるをこそ言うては事すまさずと。無理無體に衣裳させたりし侍よ直垂よと フシ詳に用意をしたりける。地はや其のひまに山彦は衣冠も着せず只一人。駒を飛ばして乘入りしは慾天の阿修羅王。龍馬に駕せしも斯くやらん馬上ながら大音上げ。詞虛が心をかけし女。今宵花人親王に忍び逢ふと聞きし故。仲人の爲來つてある見參やつと地喚く聲。深山も裂けて法螺貝の フシ海に入るかと恐ろしし。怒れる聲にてかつら〳〵と笑ひ。詞ハヽ、是は仲人入らずの新枕ござんなれ。互の初戀面はゆからん。地いで〳〵王子が挨拶せんと馬乘り放しつつと入り。白書院黑書院納戸帳臺化粧の間。渡殿細殿贄殿まで妻戸障子を蹴破つて。御簾も几帳も引切り〳〵駈入り駈出で。尋ね廻つて南無三寶二人しつぽと臥し給ふ。臺子の間の高遣戸。さつと明くれば衣引被きフシ生きたる心地はなかりけり。地皇子大きに怒をなし根太も折れよとどう

〳〵と踏み。衣引退くれば兩人はあつと魂ぎり起上り。淚も汗も身を浸しエヽ顫ひ慄きおはします。詞これ花人汝が尊む佛道には。邪淫戒とて妻ならぬ妻は忌むと聞きしに、珍しの佛法や。佛者も破る邪淫戒皇子が保つて益もなし。地汝が寢たる暖まりに聞も床に入るべきにサア我が見る前にて今一度しつぽりと寢て見せよと大太刀寬げば逃げば斬らんず氣色なり親王も顚倒も。立ちもやらず居もやらずそろり〳〵としさり退く。どつこい〳〵動いて見よ左程寢る事叶はずば、思ひ逢うたる中定めて命は惜しからじ。三途の死出の床永い來世で寢るならば。枕を一壇に二人が首を並べうかサア寢て見せぬか切らうかと。じりゝ〳〵と附け廻すは狙ひ居る野の床鶉。鷲の見入りし眼ざし。危ふさ辛さ恐ろしさ。フシ譬へて言はん方もなし。エヽ見れば腹立ちサア來れと。二人を左右に引つ摑み駈け出でんとせし所へ。地かひ〴〵しげなる若侍一文

字に飛び來り。皇子を取つて投げのけ親王姫君押圍ひ　枯木立につゝ立つて大音上げて。詞我を誰とか思ふ。玉世の姫か譜第相傳のをけ人牛插天王の後胤。かづらゆひの親王の末孫樽井の小樽といふ。大剛の者桶有とは定めて音にも聞きつらん。早く歸れ歸らずば三年竹の八つ割にて。汝が五體に七つ輪を入れ頭から爪先迄。鑄鉋をみしらせてなし物桶にしてくれん。地いはれぬ皇子の手桶だて。身が前では置いてくれ。おけノ\おけやと罵りしは　フシかひ〲しくぞ見えにける。詞皇子騒がずムヽ彼奴は眞の武夫ならず。何處の下司め推參者とはつたと睨めばヤア下水をけとは誰が事ぞ。御分が其の鹽程の目をむけば。こつちには水風呂桶の目を持つたと　地くわつと見開き睥め廻し。こりや親王樣も姫君も某が御供する。指でもさゝば胴をけ切る。寄つて見よと身を堅め　フシたるみを見せず睨み寄る。地皇子は下郎と侮つて手ざしもやらず太刀の柄も。ひしげて退けと鍔元くつろげ瞬もせぬ面色は。淺紫の額の筋眼の内は八角の。池の氷に紅葉のちりノ\血筋血走つて。隙間もがなと睨み寄る久馬も先を取られじと。はがね鳴らし拳を張り頭の汗の湯煙は。枯野の霜の霜枯れて朝日にけぶる如くにて　フシ引かんず氣色は無かりけり。地斯かる所へ土丸宿禰馳せ來り。切先揃へて驅け向ふ。ハア丶物々しの奴ばらや鬼神と言はれたる。皇子に楯づく某が己れ等に恐れうか。飾桶くさい奴等やと　フシかんら〲とぞ笑ひける。地物な言はせそ打殺せ承ると飛んでかゝるを。引つ外し下手に入つてむんずと拖き上を下へと揉ぢ合ひける。其の隙に皇子宿禰は隙間なく親王姫君引つ立て行く。やれ人は無きかあれ止めよと組合ひながら呼ばはれば。琴屋鏡屋烏帽子折數珠引煙管屋。塗師屋檜物屋指物屋藥鑵屋なんどに至る迄所在の得物を提げノ\餘すまじとて追つかくる。詞久馬平は土丸と揉みに揉うで組合ひしが。土丸四つ手に引結び目より高く指上げ。ゑいと言うて打付くる宙にてひらりと跳ね返し。土丸が小足を取り大地へどうど打付け。地馬乘にしつかと乘り。一息ほつとついたるは　フシ心地よかりし手柄なり。地かゝつし所へ百島は宮を奪ひ引返せば。勝舟は玉世の姫を肩に引かけ立歸り。互に主君を取換し思へば外道の所爲なりしに。知らで危き同士戰怪我は無いか過せぬか。主從安穩珍重々々さり乍ら。斯く迄外道變る上は都住居氣遣し。姫君は本國へ早々御供致されよ。此の檢非違使は都に殘つて暫く。皇子を防ぐべし。久馬平は我が君を四國の方へ御供せよ。追つ付け跡より追ひ付かんまかせて桶屋が門出と。土丸を取つて引起し首搔き切つて負ひ奉り。地ツメ只今まかり龍田越夜半に紛れて落ち行きける。外道一人滅すは佛千體供養とかや。殺生却つて忍辱の信心。慈悲心菩提心大善根の種植ゑて。末葉の末も竹の園生榮うる。

代こそ久しけれ。

第二

地同じ世に猶在りながら逢ふ事は。八重の汐路の彼方なる佐渡が島の流人。五位之介諸岩といふ者あり。彼は元來花人親王の後見にて。檢非違使勝舟が弟なるが。此の島に流し放たれしを當國の鄕侍。松浦の庄司が情にて。スヱテ辛さは同じ世の中に。地名をば下部に引きかへて。鍬取の京雀と呼ばれ。領内の離れ島石地を開き畑を打つ。土民の業を菅蓑に命をつなぐ繩の帶昔の弓矢太刀刀。今日取換ゆる鍬の柄の長からぬ世を徒に。新島守となり果つる。身の習ひこそフシ不便なれ。頃を忘れぬ。物の葉も。染めし錦を我ならで。誰が着て歸る故鄕の空フシ姿は。案山子に似たれども。地見なれ逢馴れ友なれて下り居てあさる雁がねも。今は恐るる氣色なくオクリ伴ひ〳〵なつく優しさよ。地五位之介振り仰向き獨言してこは如何に。詞あの一叢の雲の色こそ心得ね。正しう王城に立つ雲なり。地天子のまします所ならで此の島に。此の雲氣現るゝこそ不思議なれ。ハア、訝しと守り居る處に。追うても立たぬ雁がねの葦のそよぎに驚きて、殘らず一度にばつと立ち雲居遙かに 三重 〳〵飛去りける。フシいよ〳〵不審。地晴れやらず葦間掻分け磯邊を見れば何處よりとも白波に。小船一艘漂ひて都育ちの女房の。殿上人と思しきが濡れたる袖を絞り兼ね。包み兼ねたる涙のさまスヱテ此の世の人とも見も分かず。地いかさま是は七夕の年に一度を堪へ兼ね。又取越しの天の河と渡る舟か化物かと。思へど思案に落ちざりける。五位之介鍬振上げこれ〳〵。先づ汝は何者ぞ。此の所は離れ島。流人ならで餘の舟の來る處でなし。地扨は海賊八幡舟よな。但しは往還の護摩の灰か盜賊か。一々に打殺し鍬ついでに此の島に。植ゑてくれん待つて居れ汝等と。乘り移らんとする所を。なう暫く更々左樣の者ならず。都方より西國へ身を浮舟の舵を絶え、横ぎる風に吹放され命から〳〵此の島に。苫漏る月の行末をなう憐みてと打口說き。賴む詞のひつはなし。愛くろしげにほのめかしフシ泣いて言ふさへ戀らしし。地五位之介もさなきだに都戀しき時しもあれ。心浮かれてムヽなに都人なるとや。詞色よき若衆お上﨟たつた二人の乘合舟。血氣盛りの戀風の追手に得手に帆を上げて。舟の底拔けなんだはまだお仕合〳〵。地色氣にかつゑし此の島なればお若衆でも上﨟でも。我等もちつとさらば便船申さうかと。乘らんとすればアヽこれ〳〵。詞お罰を受けて後悔あるな。忝くも是は主上の御弟宮。地花人親王樣よとあれば。ハツア扨は我が君なりけるかと。鍬をからりと投捨ててスヱテ頭を。地に伏せ涙を流し。フシ御懷しやとぞ敬ひける。地親王舟より上らせ給ひそも汝は何者なるぞ詞御見忘れは御道理。是は往んじ頃勅勘蒙

り、此の島へ流されし五位之介諸岩が。成れの果にて御座候 地と申しもあへぬに親王は。扨は汝は古への五位之介なりけるかや。自ら幼き其の時に見し俤は無きぞとよ。我とても此の如くあさましき姿を見よ。如何なれば主従が斯く迄は成り果てしさり乍ら思はず。お事に逢ふ事は地獄の底の罪人の。佛に逢ひし心地ぞやと。勿體なくも諸岩が朽ちたる蓑に抱き付き フシ御聲を。あげてぞ泣き給ふ、諸岩も諸共に、咽せ返り〳〵フシ 御應答も申し兼ね。稍あつて扨如何なれば斯樣には。零落させ給ふ事覺束なしと申し上ぐれば。詞されぱとよ。兄宮山彦の皇子外道を信じ。王法を傾けんと都を騷がし。自らを討たんとし給ふ故。地汝が兄の檢非違使は跡を防ぎ。扨自らは職人に介抱せられ。西國方へと思ひしに其の者さへ病に臥し。是なるはそれが妻女ながらもかひ〲しく。夫が代りに召具したり。語るも言ふも便なさよとスヱテ又御涙にくれ給ふ。五位之介承り驚き入つたる御事かな。然れども某兄弟候うちは尊意を安んじおはしませ。只今某主人と頼みし、當島の主は松浦の庄司とて由ある者の後家の尼公。老女とは申しながら總領は松浦の兵藤太。殊更乙の佐用姫は某を京者とて。心にくゝや存じつらん樣々情を加へ候故。地若しもの時の便にもと忍びて交す手枕に、深き妹背と成り候これ幸ひに候へば。一先づ御供仕り時節を窺ひ姫に語り。兄や母を頼みなば一方の御用に立ち申さんは必定。先づそれ迄は恐れ乍ら都に殘る兄弟の尋ね下りしと申しなして日を送り。行末目出度く此の憂さを昔語になし申さんと。御力をつけ奉り樣々いさめ參らする。親王御感斜ならず嬉しき人に巡り逢ひ。頼もしの心やな下人とは更に思はれず。父天皇の今こゝに蘇らせ給ふ心地ぞやと。忝くも諸岩を。伏拜み〲フシ御落涙、ここぞ頻りなれ。地時も移れば秋の日の暮方近き雲ゐの雁。一列連れて下りるしが中に一羽が翼を擴げ。五位之介が前に來て只物言はぬばかりなり。親王御覽じこれは如何にと問はせ給へば。詞さん候此の五歲夜叉鳥に起臥候へば。作ふものは鳥翼、中にも雁がねの春は歸ると申せども。秋來る迄に忘れもせず、人情の移ること人間に變らず。翼に文を結ひふくめ海山越えて往來し。啼く聲知らぬ人間の詞を己が聞知る事。地人に勝れし其のしるし是御覽候へと。翼に付けし一包女の文に櫛鏡。黄金少々封ぜしを雨にも潤らず持ちたるは。古語に傳へし雁がねの翼の文を目の前に。今見る事の不思議さよと御手を打たせ給ひしが。詞如何に諸岩。是は女筆の散し書殊になまめく贈物。如何さま味な事さうな聞かまほししと笑ひ給へば。五位之介顏を赤めいやいや〲。些か戀路に候はず。是は都にて某が添うたる妻女。斯く流人となりし後彼も身を捨て。播州の傍に賤の奉公夫の爲。配所の憂さを助けんとて雁の便りの折ごと

に。筆墨料紙の類迄心をこめし贈物。地女心の神妙さあはれ天運に叶ひ。勅勘を赦され古への五位之介が妻よ妻よと言はせんと。歸參をいつかと待ちし所に不便や今日の此の時が。夫婦の縁の切れ目と成つて候ぞや。詞それを如何にと申すに。元此の女は皇子の執權伊賀の宿禰が娘。君の爲には大怨敵。親ゆゑに貞女の道破る奴にはあらねども。地七人の子はなすとも女に心許すなと。申す世話もありといひ一つは世上の人口。恩愛も執着も情も恩も。戀も恨も御大事には代へられず。不便ながらも離別して心清しく義兵を起し。一職を勸み申すべしさり乍ら。故なく離別と申しなばよもや承引仕らじ。末頼みなき世を見限り自害し死すると最期の文誡しやかに遺しなば。續いて死なんは必定死なうが生きようが歎かうが。重ねて參り逢はばこそ。偕老同穴忘れもやらで未來一人待たば待て。生々世々の離別ぞと口には言ひて涙は胸。目をする墨も筆紙も此の文書けとてこしけるかと。猛き心も繰言を思ひかへしつ卷き返し。こま〳〵と書き結び雁の翼にゆひ付くれば。心あれども鳥類のさすが離別の文とも知らず急ぎ立ちたる羽風にも落ちよかし落ちよかしと。言ひこそはせね心の中。思遣られて親王もスヱテ御涙にくれ給へば。五位之介も雁がねの霧間に影の見ゆる迄眺めやり〳〵。宮に蓑笠きせ參らせ我が住む里へぞ三重〽歸りける。地松浦の兵藤太宗岡は。所用あつて越後の國へ渡りしが。只今歸着と告げければ五位之介飛んで出で。地コレ頼うだ人の御歸り。若旦那のお歸りなりと呼ばはるにぞ。母の尼公も佐用姫もフシ悅び迎ひに出でらるる。地兵藤太歸るとひとしく扨母ぢや人妹。詞今度の他國に目出度き吉事松浦の家を引起し。昔の長者と立歸る出世のもとこそ出で來れ。地先づ御頂戴候へと首に掛けたる錦の袋。母や妹が額に當て。上座の床の卓に上げアヽフシ忝しと三拜す。地母も妹も打笑ひ何事か知らねども。吉事とあれば嬉しきに早う聞かせてたべとあれば。詞されば候都には。山彦の皇子朝家を怨み。御謀叛の企あつて諸國の武士を召され候。其の上花人親王の行方の知れざれば。多勢の付かざる内近々に軍始つて。忠節の功に從ひ大國小國相應に賜らんと。地御判の令旨を頂戴し罷歸つて候。武運の花の開くる時節弓矢の冥加に叶ひしと。語りも敢ぬに母上は扨有難や忝や。我々は老の身の殊更の事ぞかし。侍盛りの御身をば埋木となすべきか。生世の内に世に立つて姫にも名有る聟を取り。草葉の蔭の父御へも未來の土産に語らんと。明暮願ひしかひありて時節來りし嬉しさよと。皇子の令旨を戴き〳〵イヤコレなう兵藤太。地手勢というても數ならず語らふ人もあらざるか。アヽそこらは油斷仕らず。當國には昔より歴々の流人の末。事もあらば功名して名を發せんと。双金を鳴らす武夫どもは

や道すがら語らひて。今宵是へ集つて着到極め明日は。未明に打立ち申すべしと手配極め置き候。それについてヤイそこな鎗取の京雀。汝は上方案内者軍の供に召連るゝぞ。拾首でも知行になる。萬に一つも運に叶ひ親王の首取つたれば。地國大名と仰がるゝ一命かけて働けと。言へども更に返答なし母の尼公も詞につきチヽさうとも〳〵手柄は仕勝の軍の場。大國の主となり如何なる位に昇らうとも胸次第にてなる事ぞお事が此の度功名して。國主とも成るならば幸ひ姫が氣に入りといひ。聟に取つて夫婦にせん勇んで向へと勸むれども。わぢ〳〵顫うて返事もせずフシ身ぜせりしてゐたりける。地姫は飛立つばかりにて。詞コレそこな者。母上の御詞ぢや興と思ふか。地あのお詞のねをつめて功名極め自らと。夫婦になり今悔られし會稽を。清めんと思ふ我は無いか。あつと申しやエヽふがひない。詞ムヽ但し女夫になるがいやぢやの。地つい具足着て行つて。掻い首切つて來てたもと。樣々恥しめ勸むれど。詞ハテそれを人に習はうか掻い斬るは合點なれど。其の内向ふからこつちの首を掻い斬つて。其の時は名代に死んでくれもなされまい。地損は拙者只一人命にかけがへあらばこそとフシ舌を。捲いてぞかぶり振る。地尼公聞き給ひエヽ見損うたる根性かな。詞汝はもと何處の者とも知らねども。狼狽廻る不便さに庄司殿が扶持し給ひ。殊に姫が不便がり。憐みをかくる故妾とても其の通り。此の頃も故郷の妹よ弟よなんどとて。童や女郎を連れ來るアヽ可愛や便りもあるまじと。痛はり養ひくるるぞや。地せめて恩を知るならば言はずとも御供と。望んで軍に立つてこそ男のきれともいふべけれ。此の内には叶はぬぞ暇をくれる出てうせう。サア姫此方へと立たんとすれば姫は悲しさ遣る方なく。是なうあつと申してたもいのと。氣を急く胸もせく涙フシ若い心に道理なり。地兵藤太興をさまし。詞詞費を言はんより藏に入つて物具せん。エヽ見るもなか〳〵地いま〳〵しと背中をしたゝかどうど踏み。奥を指して入りけるはオクリ無念とへいふも餘りあり。地五位之介立上りムヽ踏みもせよ笑ひもせよ。其の細首は我等が物不便なるは母や姫。よしそれとても如何せん直に踏ん込み討取らうか。いや〳〵軍勢數多語らうたれば。若し仕損じて惡しかりなん一先づ君を落さうか。如何と思案する所へ姫。走り出で縋り付き。軍に立たずば立たぬ迄よ火の中水の底迄と。言ひし詞を違うかサアどこ迄も一所ぞやと。引いて行く手をもぎ放し駈け出づれば引止め。振切れば引戻し。昨日にも昨夜にも變る色目はなかりしが。俄に秋風たちけるかチヲげに心得たり。最前よりの顔氣色扱は御身は都にて。親王樣の所縁の人かと言はんとすればアヽ〳〵音高し〳〵と。口に袖を押當てて小聲になつてこれ〳〵。詞御身は暫しの情あれば包

まず語る他言せられな。我こそ親王の家臣五位之介諸岩といふ者よ。兵藤太とは今日より敵味方になつたれば。御身の緣も是迄ぞや。互に名殘は惜しけれども弓矢の習ひと思ひ。恨を殘し給ふなと又駈け出づれば縋りとめ。扨こそ始より斯くと知らせ給ひなば。母にも兄にも語らひて御味方となさんもの。是は言うて歸らぬ事妾は夫婦の契約なれば。たとへ敵でもかたきでも放し給ふな離れじと。覺えず叫ぶ泣聲を餘所に立てじと袖を噛み。スヱテ喰ひしばりたる包み泣き。フシわりなくも亦哀れなり。心弱くて叶はじと。諸岩聲を荒らげ。詞エヽ聞分けなし愚かなり。鐵漿染の本妻さへ。皇子方の者なれば狀通にて緣切つたり。先づ思うても見給へ。合戰すれば御身の兄兵藤太が首を取る。兄を討たせて面白からうか小舅が討たれうか。よしさ程添ひ度くば。御身手にかけ兄兵藤太が首取つて來れ。かなはぬ事をくど／＼と。近頃愚痴の至りなりと苦り切つてぞ言ひ放す。姫聞き答へ然らば兄上の首取つて見せ申さば。必定夫婦になり給ふな。五位之介も難題の叶はぬ事を言はんと思ひ。チヽそれも時刻延ばされず。今宵廿日の月出づる迄遲くはならぬが合點か。ハテ地何とせん宵の中兄上の首取らん。裏の妻戸に待受けて聲をかけば出合ひ給へ。其の時引かせぬ合點か。いふにや及ぶ夫婦なり。討たずばこれが一生の。暇乞ぞと言ひ捨てゝヲクリ一間に入れば佐用姫は。地はて沒義道な討たれまいやら討たれうやら。ま一度詞も交させぬ。夫の心のむごらしやとスヱテわつと泣き入り。居たりしが。地夜はしげしげと更け渡る鬼のやうなる兄上が。女の手にて討たれうものか討たでは妹背の緣切るる。こは何とせん恨めしや昔が今に至る迄。戀路の憂き目は多けれども兄たる人の首討つて。戀をかなへし例はなし世の言種に指さゝれ。名をや流さん恥かしと。千々に亂るゝ憂き思ひスヱテ胸も裂けぬる。ばかりなり。地かゝる所へ母の尼公後の障子をさつと明け。長刀橫たへ走り出でヲヽ可愛いやないとほしや。和御前が常々あの男に心をかくるなりそぶり。又先からの概略を殘らず立聞したるぞや。子に愚かはなけれども分けて御身は乳の餘り。たつた一人の娘なれば兄には思ひ代へぬぞやれ。氣遣するな兄を討たせて思ふ男に添はせてやらう。詞こりや此の長刀は。妾が母より傳はつて嫁入に持たせし重代。和御前が祝言する時の輿の先にと思ひしが。地只今讓るぞ形見にせよ妾は兄が閨に行き。よく寢入らせて相圖には襖を鳴らさん其の時に。障子越しにずばと突き長刀引かず突きながら。五位之介をば呼び寄せよ此の母が面談にて。夫婦の堅めを祝はうぞよ高いも卑いも女の身は。此の道ばかりは氣を強う思ひつめたる男なら。添ひ通さいではわけ立たず出來した母に任せよと。髮搔き撫でてぞ申さるる姫は嬉しさ恥かしさ。怖さ

に胸も打騷ぎ。親のお慈悲とばかりにて
フシ手を合せて泣きければ。地ヲヽ嬉しいは
道理道理。御身が悦ぶ顔ばせが見度いばか
りに身をもがく。親の心を思ひやれサア聞
は無いぞせくまいぞ。聲ばし立てな音すな
と フシさし足してぞ入り給ふ。地五位之介
諸岩はよも討たんとは思はねども。若しや
と裏の小柴垣妻戸の蔭に立忍べば。東の山
にあかねさしはや月魄ぞあがりける。姫は
見るより心せき南無三寶月は出しほに契約
の。時や過ぎんと氣をつかふ月は次第に差
昇る。如何はせんと行きては戻り。戻りて
は行く フシ足もさながら地に着かず。地か
かつし折柄門外に物具の音騷がしく。詞大
音上げて兵藤太やおはする。かう申す我々
は一味の武士八十の眞人廣盛武智の郡司安
彦。押熊の武者所坂上の古虎。阿摘の文次
宗賢。手勢々々を引率し着到のため參入す。
打つ立ち給へ御供せんと聲々にこそ呼ばは
つたれ。地姫はなほしも氣も狂ひ只。あい

といとばかりにて フシ身を顫はしておはし
ます。地空には月影晴々たり庭に諸岩伸び
上り。時分過ぐるといふ氣色門外には軍兵
ども。こゝを明けよと罵る聲思ひは門ナ身
は一身。心配りに目も眩み火を呑み氷を踏
む心。危しとも恐ろしとも フシ譬へて言は
ん方ぞなき。地時に一間の内よりも戸をほ
と〳〵と音づるる。すは首尾よしと身を固
め急き上る氣を押靜め〳〵。長刀取りのべ
障子越しぐつと通して一抉り。手應へして
ぞ突いてけり姫はがた〳〵顫ひながら大音
張り上げ。詞五位之介諸岩はおはせぬか。
兵藤太宗關を妹の佐用姫仕留めたり。下り
合へやつといふ聲に家内騷ぎて馳集まる。
加勢は門を蹴破つて何事かはと込み入つた
り。諸岩急ぎ飛んで入り障子をさつと引明
くれば。尼公は娘の長刀に胸元を刺通され。
半死半生朱に染み今を限りの其の苦しみ。
姫もあつと消え入つてスヱテ前後の分ちもな
かりけり。地母は弱りし氣を取直し。詞騷

ぎ給ふな人々全く姫が業にあらず。地皆こ
れ妾が心から。子の可愛さにフシせし事ぞや。
詞なう諸岩殿。とつくに名乘り給はば何し
に兄の兵藤太が。皇子に賴まれ參らせん。
地それとは知らで與せし故皇子方の兄の首。
討つて見せば妹と夫婦の緣を結ばんとの
義理に詰つた御難題至極の上の至極なれど
も。假令妹が討つにもせよ。兄も我が子妹
も我が子右の手か左の手か。何れに惡かが
あるべきぞ。兄が命を助け度く妹が望みも
叶へたく。斯くは巧みフシ申せしぞや。世に
數ならぬ此の尼かたとへ病で死したりとて
。子に讓る物あらばこそ。せめて一つの我
が命二人の子供に引分けて。讓ると思うて
死ぬる身が生きたからうか惜しからうか。
分別なしとも狂氣とも笑はば笑へ言はば言
へ。子故に恥は代へられず息の通ふ其の中
に夫婦のしるしを見せ給へそれを冥途の血
脈とも引導とも回向とも思うて成佛致さん
に有無の返事を聞かせてたべ。さりとては

心強やと消え入り〳〵泣き給へば。家内の人々五位之介。彌猛心の武夫も親子の哀を思ひやり フシ袖を。絞らぬ者はなし。姫は別ちもなき中に。扨も扨もあぢきなや此の御心と知るならば。夫婦の縁も切るべきものを。誠や親の恩を送るには。生々世々が其の間身を燒き骨を碎いても。報じ難き親の恩送りこそせめ自らは。現在母を手にかけし。後の冥加の如何ならん此の上の御芳志に。今一度御命存らへてたゞ母上と。歸らぬ事の悔み泣き フシ 見るに。哀ぞまさりける母は。涙の玉の緒も 地はや絶え〳〵の息の下。なう心強きもいつ迄ぞ。島の夷も山樵も。物のあはれは知るぞかし。武夫なれど都人少しは心も弱れかしと。歎くを見れば諸岩も脆く碎くる涙の瀧。堰き止め兼ねてこれ〳〵母御。今よりは姫は我が妻夫なり。心安く成佛あれと高らかに呼ばはれば。母は悦び手を合せ其の一言を聞く迄よ。此の世の思ひ晴れしぞやれ佐用姫。

詞 兄は兄御身は御身。敵と敵との縁組なれば必ず心はづかしきぞ。地兄弟の因とて二心持つなとよ。憐みてたゞ諸岩殿宮仕せよ佐用姫。思ひ置く事とてなしサア長刀拔いて苦痛を止め。殺してくれと觀念し息を閉ぢたる眼にも。名殘の涙せきあへず兵藤太は走り出で。今はの母に抱き付き我等が命を助けんため。御命を捨てられし御慈悲の有難さよ。某皇子に與せしも世に出でて母上の御悦びを見んとこそ母は失ひ一人の妹と敵對し。何を勇みに戰せん 地さり乍ら。死しては母の情に背く。又存らへては惡皇子に契約變じて武士立たず。思ひ切りたり見切りたり弓切折つて武道を捨て。入道法師の身となつて母の恩を報ずべし。其の時は加勢の人々入道が首取つて皇子に見せて恨を晴らし。皇子の下知に從つて親王と合戰し。分捕生捕功名し賴まれし惡皇子の。本意をも遂げてたゞ五位之介は親王の。御味方をかり集め粉骨つくし一軍に。敵を

滅し親王の御運を開き給ふべし。兩方勝負は運次第兵藤太が發心の。一句の戒文これなりと太刀引ん拔いて髻を。ふつつと切つて投出し悟りきつたる眼にも。弱りし母の顏を見てわつと叫びて伏し轉び。人目もわからず歎きしは惡に强きは善の種とスヱテ理すぎて哀なり。地木石ならぬ加勢の武士。下郎の士卒に至るまで フシ 鎧の袖を絞りつつ。地ツメかゝる哀を見捨つるも。弓矢取る身の本意ならず。皆親王の御味方と弓を伏せてぞ服しける。母は引取る息ながらヲヽ悦ばし嬉しやな。生きがひもなき此の尼が命一つを捨てし故。十善天子の御爲と成りける事も子孫の爲。さり乍ら何時迄も名殘惜しの子供やと。いふ聲もはや消え〴〵と惜むべし惜めども。地其のかひ更に七十や八十に近き老の坂。鐘の霜とぞ消えにける無常は世上の習ひにて。歎きて歎く道ならずと。各いさめ親王を奥の淸間に御供の。鎧の袖を連ぬるも親子誠の心より。家に歸

く絆緘や聲は。朽ちぬ金札名を卯の花に伏繩目。白絲縅しら〱と。東明急ぐ小櫻の盛りの。春ぞ頼もしき。

第　三

地 三因佛性の中には緣因殊に量りなき。佛の緣やいつとなく此の日の本に廣まりて。やゝ袈裟衣播磨潟法の威光も高砂の　尾上の松の下宿も石上樹下の戒めと。心止めず行ひし。兵藤太入道が發起心こそゆかしけれ。地 世に絆されぬ信力の佛意にや適ひけん。不思議の瑞夢を感じて此の海の底よりも。希代の釣鐘波に打たれて顯れしを。椎を入れ繩を着けさし來る潮の時を待ち。波のまに〱引上ぐれば凡そ七十餘日に。波打際迄上げしかども。それより此方は潮の力離れし故。一人自力に叶ひ難く。往來の人に勸進し再び日本の寶となさんと思ひ立つ フシ 大道念こそ殊勝なれ。地 かくとも知らで五位之介諸岩は。西國の武士を語らはんと親王も佐用姫も。賤の童や女童の里通ひにもてなし。降りみ降らずみ濡れみ乾きみ。隙なき袖を暫しとて オクリ 晴間を〽松の下蔭に フシ 立寄り給へば。地 藤太入道見参らせヤア是は我が君か。五位殿か妹か兄上樣か珍しや スエテ これは。〱とばかりなり。地 親王御覽じ邪法盛んの世の中に。信心深き大道心頼もしさよと宣へば。詞 入道も涙を流し。愚僧が母こそ善知識なれ佛なれ。これ此の鐘を御覽候へ。不思議の瑞夢によつて是迄は引上げ候へども。是よりは潮の差引なき故に。一力に叶ひがたく諸旦を勸め候が。地 母が死して見せずんば發心も致すまじ。發心せずばかゝる奇特も見申さじ。廣大無邊の親の恩いつかは報じ申すべきと涙を流し語りければ。妹の佐用姫は又思出す憂き涙 フシ 月日たつ程身にぞしむ。親王釣鐘の銘を御覽じ。御手を打つて禮拜あり。詞 アラ尊や此の鐘は。先帝の御時經論佛像諸共に。異朝より渡されしを筑紫の海へ捨てられし。天竺祇園精舍の鐘なるぞや。地 此の鐘の濫觴は龍宮の紫金を取つて。世尊火坑三昧の蹈鞴を以て。鑄たて給ひし鐘の聲。此の響には九十五種の外道。通力失せて地に墮ちたるとの緣起なり。再び湧出し給ふ事實が運を開くべき。時近づけり普賢力をこらし引上げ。再興あれと宣へば入道佐用姫諸岩も フシ 地にひれ伏して禮拜す。地 かゝる所に筑紫大名と思しくて。先を拂つて來りける入道下部が袖をひかへ。詞 誰方ざふと問ひければ。是は豐後の國眞野の長者殿。御息女玉世の姫君御在京の所に。上方に騷動の由聞及び。御迎ひのため御上京候處に。姫君は恙なく御歸りの由告げ來り。長者殿にも是よりお歸りなりと 地 語る間に先備の供馬引馬乘換へお葛籠馬、七つ道具を揃へしはげにも美々しき 三重〽見物なり。地 入道臆せず乘物の前に立ち。詞 そも〱野釋は此の尾上の松の下蔭に。一夏を送る道心なるが。或夜此の海底に涅槃經の四句の文。梵音聲にて唱ふるとあらたに

靈夢を感じ。果して此の釣鐘を見出せり。是は天竺祇園精舍の寶鯨にして今此の三界に並びも波の立居に任せ。是迄引寄せ フシ侍りしに。貧僧の力に及ばず。願はくは多少を論ぜず。扶助の思ひをコハリ勵まし給へ。佛說誤りなくんば。現世にては增益壽命。一紙變じて衆寶の莊嚴となり。半紙却つて紫磨。金色の光明と顯れ未來。成佛 地疑ふべからず フシ勸進。とこそ勸めけれ。地長者乘物より飛んで下り奇妙の寶を拜み申す。詞先年我等が本國の海へ捨てられ。其の所を鐘の岬と申すぞや。地はや／＼引上げ此の所に鐘樓を建て。尾上の鐘と名付け奉らん。詞幸ひ國許に豐國國師とて。學業目出度き唐僧あり。地供養の導師に賴むべし金銀は入り次第。それ／＼とありければ承つて荷物より。金銀鳥目山の如く濱邊に積めば。入道悅び衣をからげ近邊近鄕ふれ步く。舟長馬方百姓町人柴刈木樵。綱曳舟曳鯨漁蜑人老若男女數千人。刹那が間に馳せ

集まる入道下知してサア錢金は摑み取りはや／＼曳けといふより早く。我も／＼と綱を取りゑいや／＼。ゑいや／＼と引汐に。つれて沖へは出づれども磯の方へは寄らざりけり。理かな人間の眼にこそ見えね外道の形。鐘の上に突立つて。人力を奪取りフシ奈落に入れとぞ抑へける。地親王かくと知り給ひ長者の前に蹲ひ。近頃差出がましう候へども。日本國が集つても。財寶費ゆるばかりにて中々動き候まじ。地童に仰付けられば一節の木遣にて。人數入らずに山へなりとも上げ申さんと。言はせも果てず浦人どもばら／＼と立懸り。詞ヤア生小賢しき丁稚めかな。我々を仕落して己れ一人が錢取らう。ヤア暖かな糟童。それ打殺せととつと寄る諸岩入道立塞がり。此の方の連なるぞ棒をあてたら撫斬りと。きつぱ廻して怒れどもそいつ共に撲ち殺せ。片端海へはめてのけと。口々に罵るはフシ是も外道の障礙なり。詞長者大音あげ鎭まれ／＼。して又

童は何の覺えあつて。斯くはいふぞとありければ。されば候事も愚かや釣鐘の。功德廣大なること詞にも及ばれず。釋尊先生此の鐘を鳴らして大法を得給ふによつて。槌鐘告四方と御經にも說かれたり。此の聲耳に入る時は。百八煩惱無數の罪障を消滅す。又惡魔外道は人界の。罪障煩惱を悅んで。此の鐘の響に外道の通力絕ゆる故。地是を憂へて此の鐘を。下界へ取つて沈めんため外道の障礙疑ひなし。されば罪障消滅の經文を。木遣にして引くならば。一曳には惡魔を拂ひ。二曳には外道を退け進退心の儘なること。掌に候と フシ言說正しく仰せける。地浦人ども舌を捲き坊主もどきの悴イヤ此奴只者ならず。皇子樣よりお尋ねの親王とやらんに紛ひなし。搦めよ縛れとどよめきしはフシ危ふかりける次第なり。地長者も不審をたて詞いかさま年にも足らで斯樣の事は何として覺えしぞ。先づ何者なるぞと問ひければ五位之介おつ取つて。イヤ

名もなき土民にて候が。彼は幼少より都の學者へ奉公に出せしが。生れついて覺え強く。一度聽いては一生忘れぬ器用者。却つてそれが仇となり。小癪者とて叉しては。人に憎まれ候と誠しやかに申しける。長者悅び是も佛の緣ぞかし。何と我にくれまいか。幸ひ次第後々は引上げてもくれうとあれば。地元より姫の好はあり幸ひなりと五位之介。有難き御詞兎も角もとぞ受けにける。長者いよ／＼悅び名をば山路と改めて。今日よりは主從ぞやサァ奉公始めに此の鐘を。山路が木遣で引上げよ承つて候と詞いかに方々此の山路が。諸行無常と音頭をあげば是生滅法と付けて曳け。生滅滅已といふ時は寂滅爲樂と唱へて曳け。地曳けや／＼の聲の内邪法の雲は正法の。風に消えつつ高砂の尾上の鐘の曉ら氣かけし宵の如くにて鉦に。鐘撞ぞ三重一昼夜作りし罪も消えぬべし。フシつくりし罪の。重たきを。重たき木とも割木とも。わりなやわられ。

フシ碎かれもせで。鐘の撞木と我と我がスヱテ身を削らるゝ。憂きつとめフシ今か。いらかと待宵は。鐘のたはれ男遲くとも時には切れて曉の。往ねとの鐘のけはしげに。鳴れとは誰に頼まれしそれも恨みも昔にて。今は鳴るとも響くとも。まゝよおのれが尾上の松。鐘の供養に參るらん。詞是は此の國の傍に。下司奉公の勤を致す飯炊の女にて候。世は樣々の中にも宮仕へ程辛いものあらばこそ。主に賣つたる身と思へば晝は日がな一日。手足の乾く隙もなく働けば働く程。休めとも言はばこそ褒めそやされておの女子は。律義で達者で。心のまめなまめ者よ豆腐賣が通るはそりや夕飯を。地やう／＼仕舞うて洗足すりや。はや入相のかね付ける間もあるにこそ小隅へ寄つて。眠ろとすれば夜食をせよと夕飯の。まだ間もないと思へども土と病に肩骨も。おればつかりが奉公か人もすりやこそ擂鉢に。此の擂木の太さは太うても態ばつかり。人に物を

思はせて身體倒しと投げ放れば。當つてからはらけからの寄合元のが増しちや先の季から夜ぶかに起きて今宵も月は八つおちやが。夜半の鐘は鳴らぬか憎やつらや腹立や。鳴らずば破れよ碎けよかしとフシ鐘を憎まぬ夜半もなし。それさへあるに。曉は。地まだ宵と寢ようと思ふ間に阿房烏のがあがあは。何時知らずよ烏羽玉のまだ夜は深いと思ふ間に。耳につきぬく夜明けの鐘これは寢る間もあら憎や。憎や／＼とむくろ腹つむくおき／＼に鐘鳴る方を。フシ睨みつけ。地敵の樣に怒りをなし。早いにつけ遲いにつけ。鐘をうとみし其の罪は五逆罪にもまさりなん。聞けば此の尾上の濱にあらたな撞鐘あらはれ。詞唐の尊い聖の供養ありと承り。鐘の供養に參らばやと思ひ候。詞月は程なく入りしほの。月は程なく入りしほの。煙滿ち來るフシ小松原。木蔭を漏る初雪の斑に積むも先づ消えて。それより重き木綿物さかりきならし。衣つまなしにか

ひなき命いつ迄か。かく長々し山鳥の フシ尾上の。松にご着きにけり。供養の庭には垣結ひ渡し御簾屛風。幕の内にぞ人音す。ワキまだ早かりつと悦び簀戸に入らんとす。ワキ折から佐用姫出合せこれ〲今日の供養には。女の参詣禁制とこそ候ひつれ。あら不沙汰の僧達や。其處退き給へと押出し フシ編戸を。はたと押立つる。太夫地いやなう鐘の供養に参ること女とてな厭ひ給ひそ。詞よし禁制ならば禁制ならめ。さいふ御身も女ならずや。ワキいや自らは此の内に夫のあれば苦しからず。外の女は叶はぬとよ。太夫詞なに此の内に夫ありとは坊主が女房を 地勿體なや信心もさめたれど女が女に言ひ負けて。悄々とは戻られじ是非に入つて聽聞せん。ワキ我づくになれば猶入れじ。太夫いるや。二人入野の鹿垣も フシ搖ぐばかりに押合へば。地藤太入道走り出で。人こそ見れと佐用姫を幕の内にぞ入れにける。太夫詞これ申し法師様。御秘藏様を見ましたが美しさどうも言へませぬ。女同士さへ氣の毒な。地あんなおか樣持ちながら。あつたら御身を墨染に フシ惜しい事やと仰せける。ワキ詞あらいま〲し大道心の淸僧が妻を具してよいものか。愚僧が傍輩の女房なるはと言ひければ。太夫扨は傍輩樣のつれ合かや。仕合や羨しや我等は常の俗よりも。只坊樣がいとしうて。あはれ一期の思ひ出に頭の丸い坊樣を。いとしがつたりがられたり其のくせ情が深いぞい。斯うした供養の所へも頭の丸い御人が。つい這入らせて下んすと フシたしなませてぞ氣を持たす。ワキ地藤太も上手にしかけられ待ちやや。談合して來うと。走り入つてこれ五位之介。詞某が在俗の思ひ者が來つたり。一人などは苦しからじ聽聞させてくれまいか。太夫いや一人が二人三人それは苦しかるまいが。沙門の思ひ者とは破戒の僧よと申しける。ワキム、然らば御分の佐用姫はなんと。太夫是は僻事某は。敵の爲に衣をこそ着たれ。頭巾の下迄剃りはせぬ。ワキ我は頭もそりはしの 二人いたはしければ。見ず知らず。聞かず顔をば咎めじと フシ簀戸を開きて通しけり。互に見しや面影のそれぞと夫は忍ぶ草。太夫我は何しに忘れ草羽を並べし鵲の。五位之介と見付けしより是はと泣いて抱き付く。振り放されてかつぱと伏しねながら裳裾をしつかと取り。逃げんと引いて廻れども。放さず轉び引きずられスエテ聲をばかりの。叫び泣き ワキ目も當て。られず痛はしし。ワキ地思ひがけなき五位之介これ狂人め。詞武士の妻ともあるべき身が見苦しき振舞。諸人の見る目もあるぞかし言ふ事あらば重ねて聞かん。見苦し〲歸れといへば、太夫地女房涙に咽びながらエ、見苦しとは其方の事よ。人にこそよれ五位之介諸岩といはれし弓取の。僞りいひて今又能うは人らしう。女房に面は向けらるる。詞御身流人となり給ひ島にての憂き身の程。雁の翼の文ごとに聞けども我が力にて。貢

ぐべきやうなき故になう口惜しや。唐にはありもやすらん日本にはまだ例なき傾城といふ物に騙し賣られて室の津の。室君といはれしを我が身の事とは知り給はじ。よしや因果よ假の業夫の名をも我が身をも。穢さじ捨てじ汚さじとそもや勤の始めより。男は何千何百やら數も限りも白露の。下紐解いた フシ 事はなし。されども勤が惡いとも床あしらひが惡いとも。浮名立てずに一日も客を落さぬ辛抱は。皆誰が爲ぞそれのみか着衣裳腰の廻り迄。あれをがな我が夫に是をも島の我が夫にと。餘所のを見るも罪作り スエテ 盜まぬばかりに求め出し。地 雁の翼の重る迄送りし物は數知らず。されども色にも出されず寢た間ばかりを我が物と。樂に歎くが樂しみにて一度は逢はんと思ひし所に。詞 これ此の雁がねの名殘の文。世を見限つて自害して今日死ぬるとの文章を。見しよりはつと氣も落ちて晝も涙夜も涙。起臥立居行き戻り涙に絞り身も枯れて。

里の住居を追出され伴ふ者は雁がねの。鳥類ながら共泣きに泣死にせし此の羽も。地 夫婦が中の形見ぞと持ちし片羽は思ひ羽の。片羽は餘所にもぢりばの鳥類程な根性を。せめて持つても見よかしと小柄を取つて引きほどき。叩き付け喰付きし齒莖の血汐血の涙 フシ 墨の袂も染めけらし。ワキ詞 五位之介もてあつかひ。發心の身となつたれば佛の眞似する出家ならずや。佛身より血を出す罪人め 地 此處を放せと突き退くる。太夫 なに佛とや心の多い佛樣に。躾をせんと抱き付く。ワキ エヽ憎くき女め夫に恥を與へるかと。したゝかに取つて投げ。腰も折れよと踏み付けて フシ 溜息。ついてぞ居たりける。太夫 女房むつくと起上り霰のやうなる涙を流し。齒がみをなして以前の女それにて聞け。幾夜か我に仇臥の憂き目をかけて我が夫の。肌を荒す木枯の森の木の葉のかれ〴〵に。なりしは己れ故なるぞやサア女ならば是へ出よ。逃げ隱れても二世三世五

生七生五百生。此の怨は盡きすまじ。盡きせじ晴れじ忘れじ止まじと。舌早に。泣いつ怒りつ恨みつ侘びつ。色ある顏忽に。目尻目頭肉落ちて。フシ 涙は瀧の如くなり。ワキ 諸岩聲を荒らげ。畢竟己れは傾城なれば飽いた時は念頃切る。サア傾城念頃きる。挨拶切つたが何とと言へば。イヤ〳〵〳〵。御身と我といつ傾城にていつ逢うた。幼馴染の夫婦なり。夫婦に向つて念頃のいや挨拶を切らうとは。ワキ ムヽ扨は夫婦に極つたな。太夫 チヽ事新らしい御身は男我は妻。ワキ ムヽ面白し〳〵。氣に入らぬ女房を夫が去るに言分なし。點を打つ人もないサア。夫婦なれば夫が去る。ムヽ何と我を去る。ワキ チヽ去る。太夫 さる。ワキ さるう。二人詞 さる程に〳〵尾上の鐘の。同地 月落ち烏啼いて霜雪天に。滿ちじほ程なく此の浦波の。江村の漁火愁に對して人々眠ればよき隙ぞと。立舞ふやうにて狙ひ寄つて撞かんとせしが。太夫地 思へば鐘さへ恨しや

とて。龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし。引つかづきてぞ。フシ失せにける。ワキ地鐘の落ちたる其の響天地も崩るるばかりにて。豐國國師御弟子達驚き騒ぎ何事やらんと尋ね給へば。人々包まんやうもなく有の儘にぞ申しける。國師聞き給ひ。詞言語道斷斯樣の事を思ひてこそ。女人禁制とは申しつれ。總じて鐘の供養に女人を警むる因緣はそも。天地未だ開けざる昔。東北の隅に當つて惡風を吐く虎あり。其の名を曠野虎と名付く。此の虎晝の午の刻より亥の刻迄。惡風を吹出し人の性氣を奪ふ惡虎なり。又西南の隅に飢渇申といへる猿あつて。子の刻より巳の刻迄毒氣を吹きかけ人生をたつ。佛是を悲しみ給ひ。鐘の響に虎猿の惡魔を抑へん其の爲に。其の時々の鐘の數。午に九つ未に八つ。申酉戌に七六。五。亥の刻迄に四つ撞けば。いづれも虎に當るなり。夜半の子より九つめ。猿にあたつて丑寅卯。辰巳の刻に至る迄。八つ七つ六つ五つ。是も四つの時の數いづれも猿にあたる。故を以て虎猿二つの惡魔障。響に恐れて障礙をなす事能はず。かるが故に彼の魔王。世界の鐘を絕やさんため。供養の庭には女人と變化立入つて。燄を降らし火炎を吹きかけ。釣鐘を奪ひ失ふと傳へたり。なんぼう恐ろしき事にては無きかと地語り給へば人々は。フシ身の毛を立ててぞ怖れける。地國師重ねて宣ふは。是はそれには引きかへて戀慕の恨み執着の一念。斯くては後世も浮み難し。法師が多年の修行も斯樣の時の爲ぞかし。涯分祈つて彼の女人をも助け鐘を鐘樓へ上ぐべしと。五大明王五龍神の秘法を行ひ三重〳〵給ひける 地山盡きて波に入り海かへつて高砂の。眞砂の數は盡くるとも佛の誓願盡くべきかと。皆一同に聲を上げ東方に降三世明王。南方に軍荼利夜叉明王。北方に金剛夜叉明王中央に大日大聖不動。曩謨三曼多嚩日羅南。旋多摩訶嚕遮那。コハリ娑婆多耶吽多羅吒干䤋。聽我說者得大智惠。知我心者卽身成佛と。誠の道に導く上は。何の恨みか有明の撞鐘こそ。詞すは〳〵動くぞ祈れたゞ。〳〵引けやてん手に千手の陀羅尼。不動の四句の偈明王の火焰の。黑煙を立ててぞ祈りける。祈り祈られ撞かねど此の鐘響き出で。引かねど此の鐘躍るとぞ見えし。程なく鐘樓に引上げたり。あれ見よ蛇體は顯れたり 引

鐘入の段

フシ涙川戀の氷に閉ぢられて。身を切り碎く思ひより憂き川竹の憂きふしを。せめて閨もる月だにも。スヱテあはれ枕に訪ひも來ず。我一人寢となつたるぞや。心づくしの年月は。幾百夜をか泣き明かし。凌ぎ明かすも 歌此の身一つの報の罪や。かず〳〵の岩もる水の湧き返り。胸に漲る。戀慕の熱湯鐵の鎖となつて。戀につながれ恨にからまれ包むに餘りてほに出でそめても。ひとり立つたる一本薄 地嫉みの露の重たさよ。嫉みも仇も打拂ひ懺悔に罪を滅さば。迷

ひの雲は晴れぬべし 太夫 恨みは濱の眞砂にて語ると更に盡きすまじ ワキ 恐ろしの目許や髻を取つて引留むる 引 太夫 亂れし髮も、ワキ 亂る〻我が心も 二人 流れの女の懺悔の有樣これ御覽ぜよ。あさましや。太夫 花の外には松ばかり。憂きが友には酒ばかり。暮

れそめて 地 格子 フシ 叩くらん、門に松立つ。あしたより。桃に柳に菖蒲葺く。軒の燈籠二度の月菊の節句や年の暮。人の悦ぶ日といへば フシ 我は歎きのます鏡。まるに祝ひし年もなし。恥を包めど花袋日もはや。立つて月の足。只我をのみ追ひ來るかと。科なき空を恨みにし。此の罪科の懺悔の涙積つて末に川と成り。いくせ〳〵の瀬越しにも。辛さ果てなき流れの苦しみ。フシ いつの世に。誰が始めけん。地 天竺

佛の御國には、街賣女色と名付け唐の帝の色好み。手いけの魚と水深き。妹背に國も傾きて名を傾國と今の世も。人の心を和ぐる。和國にながれ立花の。花の情の契と書いて。契情とは フシ 名付けたりや 詞 山寺の入相の鐘に花や散るらん フシ 情の花や。散りぬらん。地 仇し男の仇花ならば。餘所に散るとも心の匂は此の身に殘つて打たるるとも。離れじ姿はこ〻に撞鐘の。龍頭に立つたる龍頭の。兩眼拉ぎの祈の聲も。思ふ中をばよもさけじ。二人連れ行く妹背の道には コハリ 東南西北八面玲瓏と明かに。天に昇らば非想非々想天迄追つかけ。扨又大地の底に入るとも一面八丈の淨玻璃の鏡に影の立ち添ふ如くに。附き纏つてくる〳〵〳〵くるわに忽ち地獄の圍み。邪淫の角の高塀 地 長塀 フシ 大門變じて鐵門の。地 忍び返しは劒の山。戀慕の鉾先らん。〳〵。蘭奢の空炷焰となつて。身はすみがまと焦熱の煙がへしは

も、フシ皆紅の雨霰。おら〳〵苦しやあら苦しと歎き呼ばはる口には氷のコハリ利劍を含み。虚空を睨み大地を蹴立て、仇と情と二張の弓の矢先を折らんと怒り

誰ゆゑぞや。情は却つて仇となり共に重ねし比翼の翼。刄の鐵杖猛火の羽風追つ立て〳〵引つ立て行かん來れとこそ呼ぶも叫ぶも恨のこだま。遁れがた野の狩場の吹雪に、そら怖ろしや容誓文の神罰。佛罰。皆身の上に降りかゝる。涙は血汐ナホス雪霜

をなし。面色變つて見えたりけり。謹請東方青龍清淨謹請西方白體白龍。謹請中央黄體黄龍一人三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受。哀愍頻んの砌なればいづくに恨のあるべきぞと。祈り祈られかつぱと轉ぶと地見えけるが廿尋餘りの大蛇となつて

角を振立て鱗をならし夫を目がけて鐘に向つて吐く息はフシ猛火となつて立昇り、地今より後は夫婦妹背の守神ぞと。いふ聲残つて雲を捲き立て捲き下し。鱗變じて金色の花を降らして其の姿。虚空に跨り入りにけり尾上の鐘の鳴り渡り。響傳へて是よりも。世に始まりし傾城を。太夫と名付け初めけるも尾上の。松の謂れかや。

第四

地白鷺は塵土の穢を禁ぜずとや。親王は筑紫潟賤の奴と成り給ふと。ほの聞きしより檢非違使。急ぎ筑紫に便船しフシ豐後の府内に着きにけり。地眞野の長者の館を見れば山より海邊に打續き。棟門。多く立並べ出で入る人迄も。寂光の都喜見城の。樂しみもかくやとスヱテ思ふばかりの景色なり。奥の方に人音して今日は東の御花園地残菊の御酒宴掃除の家と段々に。呼びつぎつぎてあつといふ聲の下より下部の者ども。箒水桶數知らず列を揃へて運びしは

ノノあけのすさみに異らず。勝升笠を取つてこれ申し、詞ちと御尋ね申す事のあり。さいつ頃お館へ都者の小冠者の、御奉公に出でし者を数へてたべとぞ申しける。下人ども打笑ひ。ハテ風をつかまへるやうなとでも無い問ひ様かな。都方の童とばかりいうて埒があくものか、當國他國都者上中下の奉公人何萬人あるとも知れ難し。其の上面〳〵の役にて。傍輩の内にさへ近付でない者ばつかり。但し名は何といふぞ。若し名を云うて尋ぬるならば。地上邸下邸山邸河邸。卅六ヶ所のお屋敷を。百日ばかり尋ねたらどこぞでは知れうといふ。詞イヤ爰にての名も存ぜず。併し牛飼か草刈か。いかさま野方の御奉公と承りぬと云ひければ。ハテいよ〳〵當どもない事。百間長屋の鋤鍬五六千もあらうが。朝誰が持つて出て晩に誰が持つて來るやらん牛馬ばかりも千四五百それに飼ふ秣なれば。草刈の數知れず誠尋ね逢ひ度くばまあ一年も逗留して。ゆるりと尋ねやと口々にフシ笑うてこそは入りにけれ。實にや日本の月蓋と聞きしはさる事ぞかし。扨夥しく〳〵。さり乍ら我が念力逢ひ奉らぬ事あらじと。館の廻りを盤桓ど立ち休。らひてぞ 三重〽うかゞひける フシおきまどはせる。初霜の。籬の菊の名殘とて。長者夫婦玉世の姫月雪蟲に花紅葉、絲竹酒は常なれば。フシ五樂樓と名付けたる。地欄干高く軒長き流に映る築山も。錦を飾りてもてなせども姫君の心には。親王の御事のみスエテ思ひ、重なる霜の菊フシ花もろ」共に打ちしほみ。地欄干に立ちつくし其方の空をほつしりと。打咳きて面痩せて。醫者の手を置く物思ひオクリ氣むつ〽かしげにいたはしや フシ斯かる所に。地蔓る外道の蕭殺の形邪見風の嵐を吐けば、梢木の間もばら〳〵〳〵ぼう〳〵ばつと吹落ちて母上の。五體にぞつと浸み渡れば。忽ち悶絶顛倒として息も果敢なく成り給ふ。スエテ長者姫君女房達これはこれはと驚き騒ぎ藥さま〴〵看病すればスエテやう〳〵に起出で給ひしが、外道の惡念魂に入替りなう、曲もなや玉世の姫。御身とは繼しき中されども妾に本子なければ。憎かるべきやうもなく底意もなう育てしに。御身は萬にわけ隔て父御へはさもなくて。母の親に何事も包み給ふは恨みなり。明暮それが苦になりて胸の癪がさしのぼり。今のやうなる憂き目を見る怨めしさよとありければ。姫君胸はつぶるれど扨も悲しき御詞。乳房のうちよりお情にて人と成り。何しに粗略に存ずべきよしなき事の御耳へ。入るゝ者あらばそれは人のいひなしと。思召して給はれとフシ涙を。流して申さるゝ。地いや〳〵さな諍ひ給ひそ、詞山彦の皇子樣より女御に召されん。后に立てんなんどとて度々召しの下る故。地かゝる貴人と緣を組み。長者の家の名を上げん嬉しさに。意見をすれども緣付はいやといふ。詞いやといふも道理かな其のお腹は何事ぞ。長々都に逗留して其間

の仕事か。ヲヽよい仕事めさつたの。地なぜさうした事あらば母には密と知らせぬぞ。何とこれでも隔てぬか俺や無理は言はぬ。是が嘘ならお腹見しや。ちつとさうもおじやるまいと フシ怒り恥しめ申さるゝ。地姫君はつと血も上り。胸もだく〳〵ひつたりと フシ 汗は肌を浸しけり。詞長者横手を打つて。始めて聞いて驚きたり。百島太夫を付け置きしに其のかひもなく。長者が娘が父無子を孕んでなんと一分立つものぞ。地先祖子孫の恥辱なり。皆太夫めが無沙汰ゆゑ。此の度受領の御禮に又都へ上せしが。道中迄検使を立て其奴に腹を切らせよ。さて又姫が懐妊月重つては世間の聞え。恥を招くといふものなり。胎内にて失ひはや〳〵皇子へ奉らん。詞抑此の妙薬華陀が秘書に顕したり。則ち其の薬といつぱ。牛膝あかりも廿日草鼠の尾花末摘花。此の草を採つて満月の夜の露を搾つて與ふるに。形砕けて消ゆるとは見えたれども。我が朝にて此の草を見知らず。今度某播州尾上の浦より連れ來たる。草刈の山路こそ知つつらめ。地尋ねて見よ。承ると女房達御前をこそ立ちにけれ。姫君父に抱きつきたとへ此の子は言ふに及ばず。我共に殺さるとも皇子の方へは許してたべと スヱテ泣叫び給ふ處へ。草刈の山路右の草を見知り候と申し上ぐれば。長者聞き給ひ然らば御身内山の月見堂へ召具し。密かに計らひ胎内の子を。湯とも水ともなして後目出度く歸り給ふべし。幸ひ今夜満月なり。早やとく用意と宣ひて オクリ 奥に〳〵誘ひ入り給ふ。地斯くて門前に人數多歴々たる侍。花人親王の御使者なりと案内す。詞長者威儀を改めて。一間に請じ入れければ使者口上を述べけるは。某は親王の執権検非違使勝舟と申す者。然れば今度親王御運を開き再び都へ入り給ふによつて。姫君の御事御息所に差上げ給はば。御感あるべきとの仰。御同心に於ては直に迎ひ申せとて。此の検非違使参つたり親王帝位に即き給へば姫君は后たり。然れば長者殿は御外戚。此の上の本望あらじ珍重さよとぞ述べにける。長者悦び冥加に餘る仰かな 地さり乍ら先づ姫に申し聞せ追付けお請仕らん。先づそれ御茶御菓子と フシもてなし奥にぞ入り給ふ。地検非違使勝舟は生駒の禰宜がもの〳〵しく。長者へ行きしは心得ずと跡を慕うて門に入り。屏中門よりさし覗けば検非違使勝舟と我が名を言はれて酒肴馳走に逢うてぞ居たりける。扨こそ痴者好き時節と立蔀の陰に寄り。懐中の鬢鏡杖に結び付け。疊紙を幣に切りかけ煙草入打拂ひ。オクリ 烏帽子に〳〵折つて打被き。地廣庭さして入りければ。宿禰はそれと見るよりも氣味悪るさうに頷を振り フシ聞かぬ顔して居たりける。詞これや此方へ御免ならう。是はお鹿島香取より罷り出でた事觸れでござりや申す。御神託の通り一言一句偽りはござない。無い事も有るやうに足らぬ所は取りつけ引つ付け。國々所々

を觸れて通る事觸れて御座りや申す總じてお鹿島と申すには上の禰宜が卅三人。中の禰宜が卅三人。かす禰宜が卅三人。合せて九十九人の禰宜が正月七日に神前に於て。おやおつかない起請を書く其の起請の文言に。嘘をつくまい慾をせまいくれぬ物は取るまい。又くれる物なら辭儀もせまいなんぼなりとも貰はうと申す誓紙を書いて。六十六國を觸れて通るから僞りは御座りやない。此の度お鹿島の御寶殿よりでつかちけない光り物が筑紫の方へ飛び出で。お前の扉が八文字に開け神前の白洲が八角に割れ。神馬のお馬の四足に土を付けて大汗をかいて御座ある。さるによつて禰宜神主是を歎き。神馬のお馬に三石六斗の豆を食はせて神樂の太鼓を打たせ。御湯を捧げて七座の物忌み七日のおこたれとござある。時にお鹿島大明神氏子を不便と思召して御託宣がござやり申す。當年は乙酉春から今迄氏子繁昌。ゆるりくわんと乙の梢に酉の年の

萬の鳥が羽を休める如く。十分の世の中なれども爰に一つの大事がある。娘を持つたお方は御用心なされ。蒙古高勾麗が以ての外勢が強うなつて此の界へ渡つて。或時は美しい稚兒若衆となつて誑かし。或時は貴人高人の執權御使なんどと僞つて。女御に上げい后に立てよなどと申しておやおつかない僞り。跡からはける化け頭親は是を誠と思ひ娘を手放すものならば。あつたら娘も身代もむくりこくり取られん事不便なりとの御託宣。嘘も飾りも申さないお疑やり申すな。出るまゝ八百萬神の御判のすわつたナホス事觸れ。地無上神靈 フシ神道加持とぞ申しける。地長者元より遠國育ち正直正路の老人なれば。心にやかゝりけん奥より立出で。先づ此の度は御返事申されず。重ねての御相談御縁次第と申さるる。詞宿禰氣色を損じこれ。物取り鳩のかひの僞りに嚇され。左樣の御返事此の檢非違使はえ申さじ。どうぞ身が一分の立つ樣な御返事を

めされ。返事が惡いと長者殿の娘の代りに和主の首を連れて歸るサア。首か娘かどちらでも。素手では歸らぬ思案せよと太刀の柄に手をかくる。長者もさすが物師にていやこれ檢非違使殿とやら。娘も我等が祕藏の子首も祕藏の首なれば。渡さうとは申し難し 地但し貴殿の勝手次第。取られうば取つて歸られよと フシ中々ゆすりは喰はざりけり。地宿禰も止り付かざればヲヽ身が勝手なら首取らんと。飛んでかゝるを檢非違使飛び上つて立塞り。詞ヤア騷ぐまいゆるぐまい。地搖ぐともよもや拔けじの要石。鹿島の事觸れあらん限りはコリヤ宿禰。詞見知りごしに檢非違使とは今に始めぬのぶといやつ。これこれ長者。彼奴は皇子の家臣生駒の宿禰といふ大盜人。誠の檢非違使勝舟は某なり。地こゝを我に任せよと打つてかゝれば下人ども。宿禰を圍うて勝舟を餘すまじと立向ふ。詞檢非違使かつら〳〵と笑ひ。詞これや此方へ御免ならう是はお

鹿島香取より。悪人の首を取つて廻る事觸れでござりや申す。いかなる蒙古高勾麗がもと首でも此の事觸れが太刀先にて。むくつてこくつて切捲つて。地敵の種を三合にしてくれんとの。御託宣でござやり申すてこさり申すと。無二無三に切廻し濱邊を指とてぞ三重〳〵追ひかけける。

山路玉世の姫道行

フシ草刈笛の。地そら音には。呼ばねど鹿の落ち来るに。契りし人は我此處に在りと知らずや思はずや。心にくさとゆかしさと。スヱテ都の空の戀しさと。しどろもどろの斑牛。オクリ引綱。取つて引きのばしの字にしては丸めては。のの字に讀みて我故に。死のと見えたる辻占の。變らぬ心フシ頼もしく。襷のの字にたぐりかけ。肩腰輕き草の露フシオクリこぼれ〳〵出でさせ給ひけるフシ野飼の童。いつとなく。知る人得たり友を得て。跡は呼びつぎ先なるは。薄押しなみ歌隠れんぼ。走りこぎりこぎりや。ころびうつの花すり衣。オクリ草刈。衣ほころびて子供遊びの。果ては時雨の。フシ雨雲のスヱテ硫黄が島に立つ煙。同じ思ひを焚きつけになれも焦るゝ姫島や。歌沖に戀路の〳〵まだいろは舟。ほれてほの字の帆が見。ゆる。ほの字の〳〵たれに。誰にほの字のフシ初尾花。小萱白萱。いはま萱。地此の一叢は刈り殘せ。妻籠の夜の床にせん塒の蟲と諸共に。刈り取る鎌の鋭くも聲きり〳〵す轡蟲。牛の鞍にも音をなきて歸る家路をまつ〳〵蟲や。さらば笹原さゝがにの秋にそめフシ絲くり出し。五百機立てし。機織やその藤袴破るなと。鳴くか茨のつるさきに。野飼の駒のフシやさしくも。故郷の風の北に嘶えていなゝけば。越路の雪に故里の空を慕ひて鳴く犬の。別府の湯本はあれとかや。如何に況んや久方の天津雲井を天離り。賤の仕業はいつ君が給にかくならで思ひきや。見しや聞きしやとばかりに。スヱテ草も刈りかね忍びかねフシ涙を。受けて磨ぐ鎌の。砥石も。心砕けとや。地夢にもかくと白玉の玉世の姫は胎内の。まだ見ぬ兒の別れぞと。つれなき母に誘はれオクリ行く道筋は多けれど笛に誘はれつま戀ふる。牡鹿の苑の法の導これなれや。互にそれと道芝のフシ縋るばかりの戀草も。めは繁りそふはゝこ草千草八千草。思ひ草。恐ろし鬼の醜草に。地隔つる中の垣根草力草なく泣き交す心ぞ思ひやられたる。草ばし刈るな笛を吹け。フシ後に一人が悔み草。毒の草をも身の上ゝと知らぬ手元の暗さには。燈臺草をクドキ歌思ひ出す思ひ出でずやありし夜の。亂れあひにし枕には葛草をぞ思ひ出す。かのほの〴〵のほの暗き。黄昏早く寐し時は。蚊帳つり草を思ひ出し。人目思はで肌ふれて起きつ轉びつさゞめして。相撲取草思ひ出す。通ひ路遠き獨り居の。斑女が閨の淋しさは茶引草をも思ひ出し。心細しや絲薄。歌ゐいく〳〵風かと聞けば。山の下には嵐吹く。嵐吹くゝさりとは嵐吹く。山をはなれ

て風となるナホス風も昔に。フシ吹き返れ葛の裏葉のうらざぬも。ありし其の夜の移り香を洗ひ落すなすもの草。連れ立つ道のフシ遅かれと。祈る心の生憎に早くいるやの靱草浮む瀬もなき水草に。身をうめ草と捨草も誠を照らす月草の光のひまを媒介に。顔を見合せ目を合せスヱテ包む心の内山に。やうやう。歩み着き給ふ。地野飼の牛馬の外繋を兎角しつらひ小袖幕。女房達は姫君の心底を思ひやり。何をするのもうろ〳〵とスヱテ叱られ廻るばかりなり。地跡より下部の荒男薬風呂に火をおこし。敷皮毛氈持運ぶ繼母あたりを見廻して。詞今參りの山路といふ草刈はいづくにある。言ひ付けし五種の草刈り取つたるかとありければ。地かゝる事とは露知り給はず。さん候仰に任せ刈り候。あかりもとは燈心草鼠尾花は溝萩。末摘花は紅の花。二十日草とは芍藥牛膝とはいのこづち。何れも仰に任せ今宵滿月の露ながら。刈り調へ候と出し給へば繼母悦び腕まくりして藥の釜の沸え立つに。捻ぢわけて搾り入れ曲物につぎ込み。詞サア姫是へ此處へおじや。地此處へ來て飲みやいのと言へども姫は應へもせず。わつとばがりに草莚スヱテひれ伏してこそおはしけれ。地母は小腕引つ立てエヽ卑怯なの。人やら水やら知れもせぬお腹な餓鬼めがそれ程に惜しいか。餓鬼めが父に名殘が惜しいか忽ち親が迷惑するが。親が大事か子が大事か夫が可愛いか親が可愛か。些と世上も思へかし鰓骨を割つてなりとも。飲まさにや置かぬと責めけるは フシ地獄の呵責もかくやらん。地此の時親王心付き此の上は名乘つて出で。兎にも角にもならばやと。御懐中の守刀に手をかけ〳〵し給へども。姫の心を量り兼ね涙を止めおはします。フシ御心底こそ切なけれ。地姫君は聲を上げ。アヽ心强の母上樣やな。父こそ知らね妾が子を孫とは思し知らぬかや。如何に自ら繼しきとて。さ程にはなき物ぞとよ。犬猫の孕みしさへ。馴るれば不便を加ふるも親たる者は身に受けて。子のいとしさを知つたる故せめて此の子を生落し。月日の光りも見せて。殺してたべと手を合せ フシ聲も。惜まず泣き給ふ。ナウ山路とやらん御身は都人と聞く。都に歸り玉世の姫が忍び夫と尋逢ひ。此の有樣を語りてたべ。斯くと見聞き給ひなば。共に死なんと嘆や悲しみ給ふべし構へて〳〵御命が大事なり當座の歎きに命を捨て。多くの人の苦しみといひ末代末世御名の汚れ。國の爲人の爲御身をかへて。今の無念を怺へ給へと傳へてたべ。とても此の子は過去の約束さりながら。人もこそあれ御身が刈つたる毒草にて。此の子を流し殺す事因果の上の因果ぞやと。夫婦目と目を見合せて叫び上げ咽び入り。袖にも膝にもはら〳〵とフシ落つる。涙は水晶の數珠の。切れたる如くにて。フシ草葉の。露に爭へり。地繼母いよ〳〵腹を立てエヽこゝな者あいら風情を相手にして。言うて

埒のあく事かこりや冷めぬ先にちやつと飲みやと。押伏すれば女房達先づ暫くと取付くを。取つて突きのけ口押分けて思ふさまに注ぎ入れしは。天狗道の三熱の　フシ其の熱湯ともいひつべし。地姫君忽ち腹痛み五體を悩み給ひければすはや驗のありけるぞと駒繋の草蔭に。御手を引いて女房達オクリさま〴〵いたはり奉る。地あら不思議や有難や清風四方に香しく。玉世の姫の御肌潤すと覺えしが。玉のやうなる若君を易々と誕生あり。心地涼しくなり給ふ。變毒爲藥の佛法不思議　フシ尊かりける奇瑞なり。地悲しき中にも姫君は悦び抱き奉り。御顔貌を見給へば汚れにも染み給はず。濁りに浸まぬ白蓮の汚泥を出でし御形。柔和の相好忍辱の笑の眉。教主釋尊の再誕とは　フシ後にぞ思ひ合せける。地繼母驚きこは如何に墮胎藥を飲ませしに。却つて平産しけるはムヽ合點此の童めが。餘の草を與へしな待て己れ只置かうか。いで餓鬼めを拈り殺いてくれんとて。飛びかゝれば姫君はなう今生れし此の若に。何の恨みの候ぞやと。泣き叫び逃げ惑ひ。助けてたべと泣き給ふを聞入れもせず追つかけける。時に不思議や野飼の牛むつくと起きて駈け隔たり。齝を嚙み立て角を振り繼母を目がけて飛びかかり。追ひ廻し追ひ散らし。遙かの岡邊に二重〽追うて行く。地かゝつし所に生駒の宿禰勝舟に追つ立てられ。命ばかりを助からんと無二無三に逃げ來り。草籠を引つ被き上に刈草取り掩ひ。　スシ身を縮めてぞ隱れける。地百島太夫は都の使者の歸るさに。姫君斯くと風聞あり直に此の野を此處彼處手分けをして尋ねしが。姫君も親王もやれ百島やれ太夫。これ〳〵爰にこれは扨樣子具に承り。御館へも參らず直に尋ね參りしが。彌猛心の一念のくろほしを見しらせたり。詞扨承れば生駒の宿禰めが。檢非違使と偽り却つて檢非違使に見付けられ。逃げ失せたると承る。たとへ如何に逃ぐるとも當國の中なれば　地牢へ入れたも同然。何時も彼が首は我等が物に候と。いふを聞いて籠共にそろり〳〵とゐざり退く。百島きつと見付け。彼等を威嚇して狂ひ死にさせんと思ひ。詞縱令敵が東の道へ逃ぐるとも。此の道には某が手の者どもを置きたれば。死に行くも同然なり御心安かれと。地餘所事に言ひければ跡の方へ這ひ戻る。詞いや申し此の先には。勝舟が支へ候へば敵の寄ること叶ひ難しと。地嚇せば則ち嚇されて。うご〳〵と又脇道へゐざり退く。詞此の道へは御家中の討手の達者に　地待伏させて置きしと。使へば使はれ行き兼ねて。跡へうろ〳〵先へうご〳〵。狼狽へ廻つて百島に行當る。はつたと睨めば仰天し。被つてゐまする御免あれと　フシ慄きいふこそ笑止なれ。地百島かつら〳〵と笑ひ。詞智者は惑はず勇者は懼れずといふ。己れ智惠こそなくとも匹夫の勇でも勇はある。只今殺すも易けれど若宮御誕生の折といひ。殊に勝舟が

殺しさしの奴なれば勝舟に首討たす。地縄をかゝれと踏み伏せて。足手を取つて八重無盡に絡げ付くれば。地アヽもう御免／＼と大聲あげて泣き居たる フシ心地よくこそ覺えけれ。地向の岡より以前の牛繼母の直中突き通し。肩に振り懸け一散に駈け來り。親王の御前に膝を折り黄涙を垂れて。詞人間の聲を出し。自らは生駒の宿禰が娘。五位之介諸岩が妻にて候。配所の夫を貢がんため室君と呼ばれ。遊君の流の身となりし所に。少し契りの隔ありしを敵の所縁によつて嫌はるゝとは露知らず。嫉妬の恨みに蛇身となつて此の世を去り。浮みもやらぬ苦みの。中に忘れぬ妹背の道。君の御身を フシ守らんため。地獄の責の隙々は閻魔王に暇をこひ。此の牛の魂に入替り御側を離れぬ志。通ぜし事の有難や。此の忠節の誠によつて地獄道も遁るべし。なほ／＼弔ひたび給へといふかと思へば牛は其の儘起き上り。身震して頭を振り繼母を大地へ打付けて家路を指して走り行く。地斯くと聞くより檢非違使長者諸共馳せ參じ。一先づ館へ移し參らせ都へ注進申さんと。御乘物を差寄する時に繼母の頭より。コハリ電光の如く飛んで出で虚空に閃めき見えけるが。忽ち異形の身を現し我はこれ。山彦の皇子の師範伊賀留田のますらが眼中の瞳子なり。繼母が一心に入つて不思議を見せしも我なるぞや。我祕術を振舞ふならばなかなか都へ還さじと。虚空に翔つて叫びしが黒雲四邊を瞑まして、山河草木震動して天地も裂くる／＼ばかりなり。地百島も勝舟も心ばかりははやれども。太刀も刀も力なく虚空を睨んで立つたりけり。不思議や若宮左の御手を少し開き給へば。御掌の裡よりも光明四邊を輝かし。ますらが魔術の力も盡き大地へかつぱと落つる所を。追つつめ／＼刺通せば正體識の眼の球。貫かれしぞ不思議なり長者いよ／＼渇仰し。其の夜に御殿をしつらひて先づ／＼移し奉る。和國に佛法始まりの種植ゑ初めし戀草や。草刈笛の聲の色心の色と思の色。色に和ぐ國なれば御法に。民も和げり。

第　五

地佛日西天に隠れて遺耀東北にかゞやく。獅子吼の金言過たず佛法流布は王道の。盛んの始めとなりにける。御誕生の若宮を、厩戸の皇子と名付け參らせらる。これ駒繋の邊にて フシ降誕なりし故ならし。地然るに此の宮御襁褓の内より左の御手を開き給はず。如何なる病氣の御病か但しは外道の魅入なるか。一先づ都へ行啓なし參らせ名醫の敎に任せんと。海の戸渡る商人の筑紫通ひにもてなして。任する風も君がため坐せるが如き波の上。一日一夜を明石潟 フシ播磨の國にぞ着き給ふ。地山手を見れば騎馬武者徒歩武者千騎餘り。金銀にて日月打つたる錦の旗眞先に押立て。東風吹く風に飜して勇みに勇んで打たせける。詞勝舟百島こは如何にと怪む所へ。五位之介

諸岩兵藤太入道諸卒を具して御前に跪き。扨も我が君筑紫潟へ御開きあつて。眞野の長者御語らひの風聞。山彦の皇子安からずや存じつらん。惡黨を語らひ丹州大江山の麓に土城を築き。野面の石垣麥藁塀要害うとしと申せども。地の利防戰堅固なれば。御退治の叡慮猶豫の由承り。憚りを顧ず我々君の奏聞と稱じ。山彦征伐の勅宣を願ひ奉り候處に。叡感誠に淺からず此の度御誕生の若宮に。親王宣下あつて即ち御名を聖德太子と名付け申し。大將軍に立て參らせ朝敵追伐あるべしとの勅命を戴き。日月の御旗を預け下し賜はつて。馳せ參じ候と大息ついて言上す。地親王を始めとして各頭を地に着けて。勅書を拜し奉り。フシ御悦は限りなし。地就中兵藤太入道が働き五位之介が忠節。親王親ら人々に御吹聽ありければ。長者一家勝舟もあつと感ずるばかりなり。地宗徒の御味方八十の眞人武智の郡司。押熊の武者所渥摘の宗方。坂上の古

虎御盃を賜はり軍師軍監軍配者。物見遠見物頭手分け手配り手組を備へ。錦の御旗賜る上は天子の行幸同然なり。往く所幸福あり吉日吉方此の日にあり。時刻移すな打つ立てと貝も太鼓も高砂の。尾上の鐘も巳の時と。輝く月日の御旗を押立てて。こゝぞ 三重〽押寄せけれ。地抑此の山後に險岨を負うて左手に大河流れたり。前に大木伐りかけて亂杭竹束隙間もなく。所々に井樓矢切を付けて横矢繁くぞ構へける。官軍既に間近くなれば山手川手の前後の備へ。十重廿重に取捲いて貝鐘鳴らし鼓を叩き鬨の聲をぞ上げにける。地待設けたる城方にも同じく閧をぞ合せける。詞検非違使勝舟濠端に進んで大音上げ。御進發の大將は事も愚かや欽明天皇の孫王。厩戸の皇子聖德太子。御父親王の御代官として向はせ給ふ其の意趣は。山彦西夫外道を重んじ佛法を輕んじ王法を傾けんとす。天是を赦さず急ぎ匹夫が首取つて。神慮をすゞしめ三世諸佛の報恩

に供へ兼ては宸襟を安じ國家の泰平を致すべしとの。宣旨を蒙り龍蹄を差向けらる命が惜しくば陣頭に股を潜つて降參せよとぞ呼ばはりける。皇子は怒つて甲冑をも帶せず。井樓に駈上つて猛虎の吼ゆる如くなる。大音上げてヤァ緩怠過ぎたる廣言やな。日本國が集つても。事とも思はぬ山彦が立籠らんずる城郭へ。昨日今日生れ出でまだ臍の緒も落ちぬ聖德とやらふんとくとやらいふ悴。盾に向はんなんどとは蟻の髭にて須彌山を崩さんとするに似たり。ますらはなきか魔法を以てあれ蹴散らせと下知すれば。ますら續いて駈上り。度々某が祕術の手並を見せけるに。性懲もなき奴ばらいで。片端から立竦みにしてくれんずとぞ呼ばはりける。詞五位之介諸岩駈け出でて魔法使ひのますら殿。御透の片目は何としたヲヽ結構なる魔法かな御用ならば是にありと。槍先に貫き。是は此後の府内にて化け廻るを突き止めたるが。詞覺えあらう鹽漬にし

て。勝軍の酒宴せんずる其の時の。吸物にせんと思へども只今返す受取れと。地地に抜き捨てて草鞋にてキラシ踏み躙つてぞ笑ひける。地皇子大きに怒りをなし物な言はせそ追つ散らせ。承ると逆茂木引退け突いて出づれば味方の勢汐合ここぞ乘つ取れと。一度にどつと喚いてかゝり花よ紅葉と 三重 へ戰ひける。フシ味方は運に乘つたれば二三度四五度突崩し。朝敵ひるんで見えにける。詞時に敵の中よりも深山の如く揃つたる。武者こそ五騎出で來たれ。我は皇子の御味方。黒島雲住荒鷲沖廣鬼正と名乘つて。大太刀鉞大長刀大薙鎌に九尺の棒得物々々を提げて木戸口に立並び。寄手の方に武智押熊阿摘古虎八十の眞人といふ兵ありと聞及び。見參のため馳せ出でたり。晴業の勝負ぞや出であへやつと呼ばはつたり。呼ばれて如何疑々すべき五人一度に駈け向ひ。ヤアこざかしき敵好み。地やさししほらし參りざふと五人が五人に駈け分つて。得物々々に渡合ひ半時ばかりぞ 三重へ 戰ひける フシ或は打伏せ叩き伏せ五人の敵を味方の五人。一度に取つてどうど伏せ。詞サア末代迄の語り句に一度に首を取るまいか。ヲ、尤と拍子を揃へ。はらりと首を搔き落し。地首提げてしづ〳〵と味方の陣に入りければ。官軍一度に聲を上げ。いやお手柄〳〵と フシどつとどよみも止まざりけり。地ますらも今は怺へかね一丈有餘の鐵の棒。色より輕く提げ佛と仰ぐ親王に。參り合うて此のますらと。佛道外道の勝負を試さん親王出でよと罵りける。詞かゝる處へ見馴れぬ若武者眞一文字に躍り出で。柄は八尺の鑓鉋閃いてぞ立つたりける。諸人是を見れば桶ゆひの久馬平物の具堅め莞爾と笑ひ。先年皇子殿に參り合ひ系圖を名乘り申し上ぐれば。具に申すに及ばず定めて沙汰にも聞き給はん。此の柄道具にて推量あれ。いらざる職人の武士だてなれども。ふと頼まれ奉り仕さいては置かれず。裏壁かやして跡をつめんと思ひ。具足も拙者が細工にした桶側胴とはこれなるぞ。一つ殘つたますら殿の。目の玉を申し受けに度しと高らかにぞ呼ばはりけり。ますらから〳〵と笑ひ。うぬ等が分で某に向はんとはけがらはし推參なり。此奴討取れ見物せん味方は無きかと呼ばはれば。地さしつたりと雜兵ども左右より討つてかゝるをひらりと外しはつしと受け。數年鍛錬鍊磨して使ひ覺えし鑓鉋ひらり〳〵と斬り捲れば。或は眞甲片頬片耳鼻柱。腕先膝節打ち缺かれ フシ四方へぱつとぞ逃げてげり。地追行く體にて取つて返しますらが突いてつつ立つたる。鐵の棒をひらりと取る南無三寶と振返り。摑み付くを飛び上り。續け打に打ちかけ〳〵味方の陣へ追込んだり。地ますらは追はれて途方を失ひ。後は軍兵前は手ひどく打立つる。ぐる〳〵舞うて立つたるはフシあつぱれ氣味よき次第なり。詞久馬平聲をかけサア是迄は仕舞せたり。是からはお侍

衆に振舞ひ申す。一箸づつ遊ばせとどつと笑へば。勝舟諸岩藤太入道百島太夫。然らばお辭儀申さぬと。地思ひ〳〵に斬伏せ斬伏せづだ〳〵に斬つて棄て。詞いつに變らぬ久馬殿お手柄ざふと褒めければ。あの仰しやます事わいのと フシ會釋してこそ入りにけれ。地最早皇子一人なり塀を乘つて討つて取れ 承ると諸軍勢喚き叫んで斬入りける。皇子今は詮方なく幾年古りし桐の木の。一の梢に逃げ登り傳へし祕文を唱ふれば。忽ち梢に葉を生じ。王子の姿を隱せしは フシ不思議なりける祕術なり。地寄手は皇子を見失ひ官軍あぐんで見えける時。詞親王宮を抱き參らせ。地南無佛法擁護の諸天神外道の根を絕ち我が國に。佛道成就なさしめ給へと念じ給へば。其の時若宮虛空に向ひ。南無佛と三度唱へて御手を開き給へば 一躍に佛舍利の光明棚引き薰風渡つて桐の木の。はらりはらりと吹落し フシ皇子の姿顯然たり。其の時皇子大音上げ。我はこれ提婆達多が後身たり。唐土日本に再來すと雖も。佛力に支へらるゝ口惜しさよ。汝聖德太子上位にあつて佛道を弘通すといふとも。我亦臣下と生れ出で現在に本意を遂ぐべきぞや。地最後の程をこれ見よと枯木の節に頭を打當て。ゑいや〳〵と打ちければ。微塵になつて失せけるは フシ只阿梨樹枝の如くなり。かゝる所に稻目の臣勅使として發向あり。天皇御位を親王に御讓り。玉世の姬は皇太后聖德太子は儲の君との宣旨なり。目出度勝鬨上げられよと高らかに述べらるる。目出度し嬉し千秋樂萬歲樂の萬代迄。是を祝ひの始めにて猶打續く松竹の齡も。盡きず世も盡きず佛神擁護の此の所繁昌。にこそ榮えけれ。

右此本者依爲懇望文句音節等
悉校合加祕密令開版者也
竹本筑後掾
大坂 北久寶寺町御堂筋西側 本屋 仁兵衛 板

心中二枚繪草紙

上之卷

ノルフシすでに。今年の酉も立ち。戌の顔見とゝろき明日はとうから唐錦。色どる空は世朝木戸をあけぼの深く提灯の。影きらき夕陽の山は夕の雲の帶。腰の廻の御用心押らと初霜の。翁の面の フシにこやかに。ハルすまい。ノ〳〵日の入り來る人や歸るさフシ始り呼ばふ。聲に引かれてオクリ老も。若や。花山の幕か袖つゞく。貴賤群衆は冬ないも見る人は餘念なじみに御贔屓に。ようがら心ぞ。彌生と 三重 なりにける フシ中お出やつた ハルフシ朝日影。御代も御國もに家名も。地君が名も世上に高き天滿屋の。久方の此の日の本の習はしの。歌を種なるお島といひて彼の里にお初が後繼かくれな諸物。天地を動かし鬼神を感ぜしめやかにし。此の頃明石の貞と云ふ馴染の客にあけ妹脊も猛き武夫も。心やはらか饅頭や。菓られ。今日は南へ連れて出るいづくはあれ子に火繩に番附と。賣る聲にまで節こもろど曾根崎の。ゆかりの芝居初樣も定めし傷竹の紋つく道行の。本を召せ〳〵日狹笠小金色の。身上りと聞く外題にひかれ終日見オクリ笠も。預かる預けてござれ。紅絹のく物慰みて。芝居果つれば繋がせし オクリ屋け緋淺黄紐ゑ。繁昌々々。イヤ此の所繁昌彩に。皆々乘出す。地提重開き幇間ども。毛氈敷島の。その浪速津の冬籠 フシ今を。詞なんと島樣今日の山路の道行は。本で語春べの顔見世に。ハルフシ日もなが事の。御ると直に聞くとは又格別。地大造樣のお慰退屈。地はや今日のお暇乞。散し太鼓の下み船の着くまで道行を。所望々々とどよめけばイヤごりやよかろ俺も島の一弟子で。國太夫節は覺えたが追付け島をひつ摑み。へ連れこいつたりとも御許に堅い所。こんな遊びはなりがたし此の船中をふら〳〵と。たゞ行くも愚癡の至り。大阪の名殘にちつと聽聞致したし。サア皆つけややと云ひければ供の丁稚が懷中の。本取出してお島に渡し東西々々。詞此の所が山路草刈の道行。地師弟連節東西々々。歌おきに戀路の〳〵まだいろは舟。ほれてほの字の帆が見ゆる。ほの字の〳〵誰に。〳〵ほのじのフシはつを花。ハルフシ小菅白菅。いはますけ。地此の一叢は刈り殘せ。妻ごめ夜の床にせん蝸の蟲ともろともに。刈取る鎌の鋭くも聲きり〳〵す轡蟲。牛の鞍にも音を鳴きて歸る家路を松蟲や。さらば笹原さゝがにの秋にそめフシ絲くり出し。五百機立てし。機織やその藤袴破るなと。なくか茨のつるさきに。野飼の駒の ハルフシ心やさしくも。故鄕の風の北に嘶へて嘶けば。越路の昔の故

鄕の空を慕ひてなく犬の。別府の湯本はあれとかや。如何にいはんや久方の天津雲井をあまさがり。賤の仕業はいつ君が繪にかくならで思ひきや。見しや聞きしやとばかりに。スヱテ草も刈りかね忍びかねフシ涙を。つけて硏ぐ鎌。の砥石も。心砕けとや。地夢にもかくと白玉の玉世の姫は胎内の。まだ見ぬ兒の別れぞと。つれなき母に誘はれオクリ行く道〳〵筋は多けれど笛にさそはれ妻戀ふる。牡鹿の苑の法の導きこれなれや。互にそれと道芝のフシすがるばかりの戀草も。ハルフシ芽はしげりそふ。はゝこ草千草八千草。思ひ草。おそろし鬼の醜草に。長地隔つる中の垣根草力草なく泣きかはす心ぞ思ひやられたる。草ばし刈るな笛を吹け。フシ野路に二人が悔み草。毒の草をも身の上と知らぬ手許の暗さには。燈臺草を歌クドキ思ひ出す。思ひ出でずやありし夜の。みだれ逢ひにし枕には鬘草をぞ思ひ出す。かのほの〴〵のほのぐらき。黄昏早く寢し時は。かやつり草を思ひ出し。人目思はで肌ふれて起きつまろびつさゝめして。相撲取草を思ひ出す。通路遠きひとり居の。斑女が閨の寂しさは茶引草をも思ひ出し。心細しや糸薄。歌ゑい〳〵〳〵風かときけば。山の下には嵐吹く。あらし吹くさりとは嵐吹く。山をはなれて風となりナホス風も昔に。フシ吹きかへれ。詞イヤ淨瑠璃待ちや〳〵舟も留めい。なんと皆は氣が付かぬか。先にから陸を見ればうそ汚れた八丈縞に。花色の羽織茗荷の丸の紋付けて。編笠きたる男めが道頓堀を乘出すから。此の舟に目を放さず後へ下れば走りつき。先へ拔ければ立留りつけて廻るは合點いかず。地ありや〳〵又あそこに立つたるは。喧嘩しかける體と見た默つて居るはひけた事。あがつて一つ詰開かんと脇差押取り出でんとすれば島引留め。詞ハテはでな人樣ぢや。わしらがやうなものが乘つた舟は目に立つゆゑ。どれに限らず皆見さんす。地なまなか咎めて一本かたげ恥かこより。ハテ彼方から見るなら。此方からも見て大樣にして居さんせと。言へども更に聞入れず駈上れば續いて上り。見ればいよ〳〵間夫の男これ市樣と。いはんとせしが目はじきして。詞是申し。此方は他國のお衆ぢやぞ。所の衆なら粹であろ。何を云ひかけさあんしよと言譯して下んすな。地どちらの爲にも惡るいぞとフシ心を揉むこそ道理なれ。地貞は肘ばり澁面つくりこりや編笠。詞五度や三度は恕ようがどうした事に舟につき。女を乘せたる船中を見るも大かた方圖がある。地それ程見たくば近くへ寄つて見られに來た。サア汝が存分に見けつかれ。見やうが惡るいと許さぬとフシ聲を訛つて力みける。地市郎右衞門もさしあたる意趣はなけれど當分の。妬ましさばかりなれば口論しては如何ぞと。詞イヤ申し別にお腹の立つ事とも存ぜず。我等も下地淨瑠璃好き折々稽古仕るが、此の山路の道行は戀を含んだ節附なるに。只今お島

樣とやらあそばした淨瑠璃の。節は少しも變らねども情を御存じない故か。誠の心少なうて御眞實のない故か。地如何にしても道行が浮氣に聞えて。底意に戀が御座らぬと。フシ片目でお島を睨めにける。詞男あざ笑ひャア吐かすまい〳〵。島が淨瑠璃よかれあしかれ。己れが冷にも熱氣にもなることか。どうでも外に樣子があらう。但し又己れがいふ戀をふくんだ淨瑠璃の。語り樣を知つたらば只今爰で語つて見よ。節が違ふと打据ゑるがサァなんと語らうか。地何がさて御所望ならば語らいでは。則ち山路の四段目檢非違使が鹿島の事觸。島樣とつくとお聞きなされ。詞是や此方へ御免なう是はおしまでも御座らぬ。お鹿島大明神より罷出でた事觸で御座りや申す。總じてお鹿島と申すには上の客が卅三人中の客が卅三人。拙者がやうな見る影もない粕客が只た一人。正月七日神前に於ておやおつかない誓紙を書くその誓紙の文言に。かや

うに申し交すからは未來までも變るまい噓をつくまい隱すまい。勤めの間外に深い男を持つまいと申す起請を取交すから僞りは申さないと存じ。盡す程にけるほどに只今は向脛からでつかちない光り物が飛んで出て。巾着の扉が八文字に開け内の首尾が八角にわれ。神馬のお馬の幇間にも見捨てられ大恥をかいて御座ある。されどもお鹿島大明神氏子を不便ともと思召さす。或時は餘國のだいじんぐうに身請の談合をしかけ。或は紋日をかづかせひき日の立前後からはげる禿頭。親里の合力なんどと申して厄介しつかい蒙古高勾麗の上手ごかしに。むつくりとられたとの地御託宣フシ無上神靈神道加持。地これ是が眞實戀のある淨瑠璃。島樣ようお聞きなされいとフシよそながらこそ恨みけれ。男は二人が目色を見てはて扨變つた文句ぢやの。詞なんと餘國の大盡に身請の談合とは珍しい事觸。これお島、其方は今のが面白からうが此の貞は耳に立

つ。とても所望しかゝるからはまあ一節所望致さう。地お島とお身とが連節で戀のこもつた淨瑠璃を。初段から切まで語りぬかせにや堪忍せぬと。ぎしみ廻ればおしま一人が氣を苦しみ。詞是申しこな樣程の粹樣が。是は又氣の通らぬ。彼の人と私とわけある樣に見さんしたさうなれど。微塵そんな事ではない腹立てさんすお面白がつて。法界悋氣に云はんすわいのおとなしうしてサァ舟に乘らんせと。手を取れども。聞入れずいや〳〵おつしやれな〳〵。詞他國から上つて此の大阪で。妓柄をも握る者が通例の男と思ふか。地どうでもかうでも聞かにや置かぬ。語らせねや置かぬと堪忍せぬ顏つきに。お島は難儀手に汗握りこれ。こゝな人も誰か知らぬが餘程な。勤する身か客に引かれ芝居へ往つたら珍しいか。舟に乘るが不思議なか淨瑠璃は其方より私がよう覺えて居る。晩に此方の見世へおじやよう合點のいくやうに。教へてやらうと世

話やけども市郎右衛門も云ひかゝり。いや〳〵此方に習はいでも。此方の胸中にある淨瑠璃は。此の鼻が覺えて居るお聞きやれと。扇を打つて。扨もますらが此の目の玉ぐつと拔出で花人親王の。蜆川の御所の體とつくと見屆け候へば。詞眞野の長者同然の大銀遣に思はれて。金銀小袖をして貰ひ深い男を振捨て。登り詰めて擧句には姫君を請出すとて。地料理献立表がへ眞最中と見て候。二人が中へ某が毒氣を吹込み男と女と不和になし。同志戰の口舌をさせば姫君は見放され。端々の闇屋へさがり後には濱の納屋のかげ。一本立にて候と　フシ語りけるこそ不思議なれ。詞なんと此の節に違ひがあるかと云ひければ。ヲヽよい推量追付け島を請けて見せう。地なんぼせいても張合うても銀で語る淨瑠璃は。ちつと喉につまらうぞこりや是見よと。お島にしつかと抱き付きなんと腹が立つかと云へば。又扇の拍子を打つて。不思議やますらが行ふ魔法の形。天井に現れ出で。異形は手をのべ檢非違使が眉合を。割れてのけとはたと打つ。ハァヽ拍子にかかつて麁相々々。ヤァ己れ撲つたぞよ。もうきかぬと立上る地お島は縋つてなう情なや。是わしが詫事おやエヽ供の衆氣が利かぬ。船頭衆頼みます舟に乘せて下んせと。泣き叫べば地人々は折も惡し場も惡し。是非御堪忍〳〵と。無體に舟に抱き乘せ　フシ櫂をはやめて漕出す。地なほ船中より聲を上げ銀も持たいで云はれざる。戀の意氣地の淨瑠璃たて身が前では置いてくれおけ〳〵おけやと。船端たゝき手をたゝき　フシ笑うて舟は上りけり。地市郎右衛門あたりを見廻しハァ我ながらしどもなや。氣が違うたか南無三寶一期と思ふ女房を我が物顏の醜さに。苛つは戀の癖なれども思へば口惜しかうせいでも。三匁では彼の面をうつけた事と思ひやせん。島が心の　フシ恥かしや。氣遣ひかけし可愛やと。見送るかたもほの〳〵と明石の客の乘る舟に。お島もかくれ島隱れ蜆川へと　三重こがれ行く。

中之巻

フシその名は云はじ。地名を問へば父は長柄の田地持。市郎右衛門が弟善次郎なれど惡性者。人の意見も馬の耳よそ吹く風のぶう〳〵にて。夜步き日步きとほしたて歸れば小宿で衣裳をしかへ。かせぐ體をば親兄に。これみやの前大黑を　フシ荷うて家路に戻りける。地かゝる所へ下男つか〳〵と寄つて棒鼻取り。詞申し善様。これお見忘れなされたか毛馬屋の七兵衛。エヽお前は譯の惡い。術に依つて待てならば待つまいものでもなけれども。幾際か幾際か今日遣らう明日遣らう。假初ながら五百目餘り五匁も埒あかず。それに昨夕も隣までお出でなされ。此方へは音信なしあまりなされ様。今日は親御様へ直に申して取つて來いと旦那が申し付けました。地断りましたと入る所を引留めて。こりや聞えぬ日頃の己ぢや知らぬかい。五百目や一

貫目今でもやるは合點なれど。詞親父が手前をあぢにして末長う出よう爲。少しの銀を延引した。そちが差配で二三日どうぞ頼む。ヤアいつやらの紙花も。思ひの外におそなはり地面目ないく〳〵。是も拂ひと一度にやろ。今改めてこりやばつと打ち直すわと。捻つて出せし鼻紙のフシしらごかしこそ笑止なれ。地所へ駕籠の長介來り。詞私が請合の菱屋の花代津の國屋の料理代。合せて三百四十五匁六分。扨もく〳〵せがまれます。其の上お前は侍もない花車や娘仲居に迄。仕着をして取らせうと約束ばかりで參らぬ故。私が宙でも取つたかと毎日毎夜の使立て。内は常住師走にて何とも迷惑仕る今日は是非に請取りませう。それにならずば親旦那へ訴訟申すと地云ふ所へ。五十餘りの女房綿帽子にて顏包み。編笠島の笹屋の嗅で御座んする。御人體とも覺えませぬ我等が僅のあきなひの。元手も利喰の月をどる泥鰌汁の集禮代。取切る間は何處

までも着きまつはる〻藤の棚。谷町からと云ふもあり九軒の駕屋が揚錢の。殘りも今日はすつきりと取つて九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の。或は饂飩けんどんのフシそばで聞くさへ笑止なり。地善次郎もてあつかひ尤も掛は負うたれども。詞節季でもあることか月ともない今日にかぎり。此の樣にせがむのはム、合點ぢや〳〵。兄市郎右衛門のうつけ者。天滿屋のお島にがらりと片鼻打明けて。親父の機嫌さん〴〵にて半勘當の身となつた。それを聞いて我迄を氣遣ふと見えたり。地兄とは格別こんな銀わけ悪うする男でない。親父にいふなら云うて見や一文にもなるまいが。遅うて此の月一ぱいに濟すと云ふから嘘はない。十三國島北南の長柄で男といはれたる。善次郎ぢやが何と見た。詞僅か二貫目内外で捨てる善次が名ではない。親父に云うて此の善次を勘當させて腹癒るか。但しは自然に銀とるか勝手次第と投出し。地立派に云へば掛

乞どもいかなれ嘘は長柄川。砂にはよもやなるまいぞと。いく日〳〵の日切りしてオクリ皆々〳〵宿所に歸りける。地親介右衛門は六十餘り頭に積るお霜月。講中お茶所の冥加錢殘らず爰に持集りお勤過ぐれば表に出で介右衛門云ひけるは。詞何れも講中有難いと思召せ。毎年のお霜月懈怠もなう上くる事。自力では叶はず御恩德のお蔭なり。扨去年の通り此の銀を。兄市郎右衛門に持たせて京へやる筈なるが在所で沙汰も聞かれつらん新地狂ひに身代あけ。方々の借錢堤際の田地をも。七百目の質に入れ四貫目の手形したと聞く。かうした性になるからは一錢も持たされず。あの弟めは一日でも居らねば年貢の埒あかず。身どもが上りませうといへば弟は律義な顏つくり。大儀ながらさうなされ。地アヽいづれも性のよい兄貴にて。年よられて親父の苦勞で御座ると云ひければ。それは與がる今聞いたとフシ頭を振り顏をしかめける。地介右衛門重

ねて白銀五百目二包。小判廿五兩一歩合せて四十切。改めて預つたと數よみ揃へ懐中より。掛硯の鍵出し抽出あけて。金銀取入れ錠おろし フシ鍵を袋に入れにける。地時に表へ駕籠の者頼みませうと云ひければ。どれいといふて妹のお吉何處からの使といふ。詞私は蜆川天滿屋のお島樣より。市郎右衞門樣へ急な使に參つたり。此の文進ぜて下されませと高聲に云ひければ。アヽこゝな人高い聲さつしやんな。地兄樣は昨夕からまだ歸られず。私が預り届けませう。お歸り次第頼みまするとフシ言ひ捨てゝこそ歸りけれ。地介右衞門聞付けてお吉今のはなんぢや。詞イヤなんでも御座りませぬ。なんでもないとは己れ等まで一つになつて。地親の目を拔き居るかと。文捻ぢたくつて是いづれも。詞田地賣らせた女めが市樣まるゝ身よりとは。はて扨々あたじたゝるい。皆の手前も面目ない。地まて己れどうすると。鼻紙袋へ文をも入れ。ぐる〳〵まきに

紙捻より。細きお島と一命の フシ終るはしとぞなりにける。地講中も挨拶なく男の子は何處もそれ。先づお暇申しませう。なんと太郎兵衛若い衆か奴々と云ふ程に。どうした事と思うたが田地を賣つて買ふ故に。それでお山を米といふ。今講釋が聞えたと。堅い輕口言うて歸れば。介右衞門も苦笑ひオクリ奥の〳〵間にこそ入りにけれ。地善次郎は只一人外の事は耳にも入らず。一心不亂に掛硯の銀に性根を奪はれて。そろりと立つて錠前を。押して見引いて見捻ぢて見て奥を覗き表を見。箱口取つて持ちあぐれば顫うてどうど打落し。我とおびえて飛び上り。種々樣々に盗みやうオクリ工夫〳〵するこそ恐ろしき。地ヤア忝い鍵の入つたる鼻紙入親父が忘れ置かれたり。引解き鍵取出しまんまと明けて。鍵はもとの紙入に初めの如く納め置き。掛硯の抽出明け二包の白銀を。下懐へ押込んで小判は頭巾にぐわらりと入れ。裸一歩を手に握れば奥より親の

聲として。善次。〳〵と呼びかくる。あいといへども此の一歩。置所に動轉して口へ入れたり目へ入れたり。うろたへ廻つて釜の上なる御酒徳利へ。ざら〳〵と移し入れフシ親の前へぞ出でにける。地かゝる所に市郎右衞門内へ歸れど敷居高く。心置かるゝ家來まで何れも野畑へ出でたれば。誰に首尾問ふ便りもなく上り口にとほんとして。寒さは寒し酒一つと膳棚さがせど酒もなし。ヤア荒神の御酒がある冷でも一つ戴いて。胸のもや〳〵晴さんと。茶碗引寄せつぎければこりやどうぢや。酒の中より壹歩が湧く寶の泉か有難いと。皆打明けて是は夢か現か。三寶荒神の御利生か死したる母のお授けかと。嬉しいやら怖いやら分別に能はねども。久々で金氣にあうた先づ目出たう壹歩の上汁吸ひませうと。戴き〳〵ぐつと飲み壹歩を紙に押包み。フシ懐に納めける。地黄金は人の身を富ます寶なれども此の身には。命を刻む刄となる善惡こそは哀れな

れ。詞所へ善次ひよつと出でヤア兄ぢや人お歸りか。推參な御意見なれどもお身持ちがさうでない。親父も機嫌さん〴〵の上蜆川のどこからやら。悪い所へ文が來て親父が見付け。地それそこな鼻紙袋に入れ置かれた。我等は南の御堂へ親父の使に參るなり。後で首尾ようなされと云へば市郎右衞門は肝潰し。是はと呆れ居る中に善次はそつと後手に。御酒德利を隱し取り表に出て押戴き。一散に駈出でし フシ心の内こそ可笑しけれ。地かくとも知らず市郎右衞門つね〴〵不和なる弟の。さすが恩愛なればこそよくも知らせて有りけると。鼻紙袋の紐を解き文を搜す所へ。詞親つか〳〵と出で後に立つて。それは何する市郎右衞門。地はつと驚き飛びしさり差俯。向いてぞ居たりける。詞介右衞門聲を上げ。己れは天魔が魅入れたか佛罰が當つたか。餘の悪性は若い者あらう事とも云はれうが。あれ掛硯の口明いたり。鎚を入れたる鼻紙袋あけて我に見つけられ。仰天するは盗人な。身が銀ならば親の慈悲沙汰なしにもしてやらう。身の油にて講中が。御開山へ奉るお茶所の銀ぢや盗人め。地一文一字違うても己れが生けて置かれうか。我等一人は緣者の證據それそれ講中組中と。呼ばはる聲に向ひ隣。一在所が駈け集り フシ外樣の詮議ぞ是非もなき。地介右衞門大きにせきサア何れもの目の前で。掛硯を開かんと抽出見れども金銀は。壹錢とてもなかりけり介右衞門地蹈踏み。涙を流いてエヽ口惜しや。何代か此の家に小言のあつた例もなし。歲六十に及んで一在所と云ひ講中の。大口小口うごかする己ればかりが恥と思ふか。盗人を捕へて見れば我が子なり。此の手間で是程のよい事をしたならば。親の身ではどれ程の自慢であらうと思ふぞやれ。成人の子を持てば親の心安めぞと人も云ふに己れには。寢た間も心安からず擧句にかゝる大事を仕出す。内でかうした心からは外で何がな仕置きつらん。誰に似た此の根性憎いが餘つて不便なり。不便の餘りの憎さやと フシ地そらを。叩いて無念泣き。地實に尤もに哀れなり市郎右衞門顏を擡げ。詞鼻紙入は開けたれども金銀には手をさゝず。盗人は外にあらん心を靜めて御穿鑿と。地泣く〳〵云へば飛びかゝり喰付きてエヽ腹の立つ盗みをする子を持つて何と心が靜められうぞ。親の心を知らぬかと懷搜せば以前の壹步。是を見よと打付けて大聲あげてわつと泣き。縱へ千兩萬兩でも銀惜しいと思はぬが。廢る己れが名が惜しい。近頃面目なけれども。人々も聞いてたべ。詞此奴はとつくに殺す奴なれども。今ならでは申さぬが。もと我々が實子でなし。大阪のさる人の四十二の二つ子にて。産家より貰ひ守り育て。後に弟が出來たれどもそれにはかへず可愛さに。地育てるに從ひ性わるく。勘當せんと思ひし事五度三度には限らねども。もしや己れが寢心に養子と云ふ事知るならば。

眞の親ならかうあるまいと我々夫婦を疎みやせんと。義理もあり不便もあり殊に母が最期にも。詞弟より彼の兒を繼母にかけてくれるなと。云うて死んだは小耳にも定めて覺えて居らうぞや。地仁義も慈も身の上も本子には忘るゝに。その本子よりこれをば大切にせしかひもなく。湯を沸かして水入らずの親の内で盜みをする。是は如何なる性根ぞと聲を上げて泣きけれども。子は覺えなき事ながら言譯もなきしだらとなり。親も道理子も道理。心にこもる哀れさのフシ二人の。涙せきあへず。地エヽとかういふも恥の恥。勘當ぢや出てうせう。親子名殘りのかたみの杖。身に覺えよと押取つて。さん〴〵に打ちければ杖は中よりふつゝと折るゝ。飛びかゝつて踏む所を。妹と下人すがり付きオクリ泣く〳〵奥へぞ フシ入りにける。地市郎右衞門涙をはら〳〵と流し。詞何も申す事はなし。地親ならぬ親子ならぬ子。眞實の親子にも勝つたる御恩德。いつか報じ申すべき。とくにもかやうに承らは如何樣とも孝行の。盡し樣もあるべきに口惜しさよ後悔さよ。産みの親は見ず知らず、養ひ親にはノン不孝をなし。地此の市郎右衞門めは親の罰が當つたり。せめて心の念願にて死して再び親子と生れ。今の御恩を報じたきその印。此の杖の片折を未來の形見と押戴き。詞如何に講中組中も今生の暇ごひ。地頼み申すは親の事。孝行つくせと妹に傳へてたべ。死するとあらば御回向も頼み申すと言置きも。涙ながら餘所ながら見おきながらの橋柱朽ち行く身こそ引三重

下之卷

哀れなり。フシ逢ひそめし。一夜を戀の水上に。三夜四夜五夜十夜百夜小オクリ通ひ。車の蜆川變る瀬枕沈む淵。思ひ二つの フシ中町や。フシ更けて苦む。待宵に。明くるわびしき別れ路のフシうきを接木の。梅田橋フシうめて冷せと。色茶屋 フシの色の。出花の。フシ里ぞとはさめぬ花香を。フシ沒みて知れ。地實にや士農工商の。品かず〳〵の其の中に情で賣れば情で買ふ。歌人評判つけおきし。よき衣着たる商人もオクリ誠を〳〵守るフシ天滿屋の。地亭主は外より歸りしが。詞なんと女子供は仕舞うたか。島は今宵はどうしたと云へば。島は今宵は長柄の市樣とて。馴染のお客が久し振りで近江屋迄見えまして。それで島樣も近江屋へ送りましたと云ひければ。扱こそ〳〵さうあらう。今宵丸屋の謠講に往つたれば。町衆の話に長柄の市郎右衞門といふ人。報恩講の金を盜み親の勘當うけて。白晝に在所を追拂はれた。是も此方の島故ぢやと女夫池で聞いて來て。知らぬかと云はるゝ故とつかはして戻つた。地前のお初にこり果てた家名の出るも迷惑。客を倒すがみめではない商せいでも大事ない。それ早う呼びにやれと喚きちらせば女房も。エヽ皆も氣がつかぬ此方に云はるゝ事かいの。又淨瑠璃に乘しやんなや。早う連れて戻りやいのとフシ女心のせは〳〵し。

地譜代の下女は門より入り。市様はお馴染故やるは私がやりましたが。勘當ともふんどうとも知つたら何のやりませう。詞たつた今も近江屋へ行て見れば。島様はきつう酔うて居さんして何を言うても譯がない。地そんな事なら戻しませうぞ初様の彼の傍さり。地二階の梯子を踏外しおれが胴骨踏まんした。地形見の痛さがやうやうと此の頃やんだに勿體なや。また踏まれてはならぬごと フシ駈出してこそ走りけれ。地かくて弟の善次郎は兄に負うせて銀盗み。所を出びらくらを仕舞はんと。此の所へ来りしがお島は酒に酔ひくづをれ。ひよろり／＼となまになり近江屋出でて濱筋や。今宵一つに三途川越えんと思ひ詰めたれば。心にはたと戸をたつる風呂屋の前にて善次に逢ふ。ひらりと外すをちらりと見て。これ善次様善次様手が悪いと。よろ／＼とすがりついて。詞こなさんな聞えやせんぞえ。前はさいく／＼ごあんして何が怖うて逃げさんす。

これ兄嫁の島ぢやいな。たつた今迄近江屋て兄さんと逢うて居て。今日の様子を聞きやした。大事の俺が男が勘當うけて御座んしたりや。胸が痛うてちつとの酒で舌がまはらぬ。こなさんは弟の身で羨や機嫌がよささうな。詞いふ事がある御座んせと。地胸ぐら取つて引いて行く。善次は何れも頼みます。頼みまするとと仰向に反り。引摺らるれば下女下男是は島様何ぞいの。サア内おや這入らんせと無理無體に押入るれば。上り口にひよろ／＼と。片身をとんと横に投げ フシ水たもやとて伏しにける。地夜こそ更くれと一町の行燈しまへば天満屋の。締たる門口暗闇に善次は島が心根の。恐しければ格子の蔭 フシ身を引きそばめ立聞きす。地市郎右衛門は近江屋の人目にせかれしかん／＼と。死際の契約せず便もがなと門に立ち。弟ありとも知らざれば弟は兄があるとも知らず。傾く月に東向き暗き格子を隔てにて。内の様をぞ聞きにける。詞亭主夫婦是を見て。島はいかう酔うたさうな。是いて休みや。お島。地お島と茶を汲んで一つ呑みやと云ひければ。詞あい／＼こりや忝いと頂きて。ほんに誠にお主たる身が勿體ない大事にかけて下さんす是を思へば勤の身が心中などで死ぬるのは。お主へ對して不躾。損をかけるは身の罪科。地さりながら死んだ者が生返りその入譯を云ふにこそ。命に代へるものはない夫を捨てゝ身を果すは。いふに云はれぬ詰つた事憎まう者でも御座んせぬ。地かう云うて私が心中する氣はなけれども。爰にも前の初様に手懲の事もある故に。こりや前書の話ぞや私が馴染の市様の勘當は。弟御の無實の難を身にかづき。所の住居もならぬとよ。これはなんたる胴慾ぞやわしらが今の此の勤。伊達にも派手にも身の爲でも一日片時なさ事か。親兄弟の フシいとしさ故。面白からぬ勤をも辛いと一度云ひやらぬは。詞親兄に苦をかけまい爲。地かほど大事の親里の。

貧苦を助けしお主なれば。御恩は更に忘れねども。詞生身は死身殊に又此の頃酒にあてらるゝ。地もし頓死でも致しなば下された茶が末期の水と。くだまく體に紛らかしわつとばかりに怺へかね。しやくり上げたる泣上戸と人目に見せし下心。市郎右衛門ば忍び泣き弟は身の悪顔て。恥ぢて悲しむ悔み泣き。心は三つに變れども同じ涙に。くもる月 フシ時雨の。闇の本意なさよ。地人影見てや町内の犬吠えわたれば兄弟は。見付けられては悪しかりなんと フシ西東へぞ逃去りける。地亭主夫婦は氣も付かずくだをまかずと早う寝や。皆々仕舞へと云ひければあいと答へて箱梯子。上りかゝつてコレ旦那様内儀様。みんなさらばや／＼と フシ言捨て二階に上りける。詞下女は見上げてハテ小氣味の悪い聲つきぢや。長兵衛門もよう締めやや。有明の消えぬやうに油もたんと注いでたも。消えても此方は火は打たぬ。地俺には火打が禁物ぢや。打つ音聞いてぞつとすると オクリ呟きへてこそ臥しにけれ 地稍靜まれる小夜格子市郎右衛門は立歸り。軒の下にてしはぶけばお島は夫ぞと二階の窓。覗けどわれが姿は見えじ聲を立つべき様もなく。柄付の鏡差出し星影映してひらめかし。爰にあるとぞ知らせける夫も心得扇を抜き。聲立てられねば金箔の光りに物を云はせては。招き合ひ／＼我と我が身を抱き締めて。齒をくひつめて嘆きける フシ深き思ひぞあぢきなき。地弟の善次郎島が詞に發起して。悪心を飜へし兄の命を助けんと。此處彼處と尋ね歩きもとの格子に走り付く。兄は人ぞと立隠るれば善次郎門叩き。詞長柄の市郎右衛門は是には居られ申さぬか。近江屋にて尋ぬればはや歸られたと申さるゝ。地御存じないかと呼ばはりける内よりは喧しい。夜更まはつてそんな人は知らぬと云へば。南無三寶と走り行く斯くと心を語りなば。死なで止みなん二人の命隔て疑ふ因果と因果。定まる業ぞ力なき。彼奴追掛けて討つて棄てんいやいや見苦し。最期の邪魔と心をしづめ小聲になり。サア夜明も近づく人立あり一所と思へど詮方なし。我は在所の堤にて最期の所は變るとも。連れ立つ道は唯一筋今より數珠を繰りそめて。一萬遍に終る時それが互の合圖ぞや。追付け待つと云ひければ合點しましたさりながら。同じ枕に死にたいなあ心はついて往きませう。ヲヽ我とても其の二階顔を並べて死にたいなあ。心は跡に殘るぞとあこがれ出づる玉の緒の。互の目には見えねども殘し置くのと連れ行くと。兩刄に死する剃刀の。一刀の亂れ燒きみだれ。心は 三重

血死期の道行

鉢タヽキ 死神の。導く道や蜉蝣の。はかなき蟲もたま／＼は。朝の露に生きのこる。それよりもなほ。あだくらべ。これを限りと百八の數 オクリ とる。歌たびに繰りつくす。命。二つを。數珠二聯これが。冥途。の フシ迎

ひぞや。フシ見送る軒と。見返る野邊と。なかに飛びかふ夜這星。行いて歸らば言傳てん。出でて歸らぬ魂の。地あこがれ添ふとは知らねども。そばに夫のある心。太夫夫はお島と連れ立ちて歩む心のともすれば。目にちら／＼と幻のこはその人か。ツキまことかと。太夫抱きつけばあだし野や風ぼう／＼たる閨の戸に。ワキどれ市樣は。太夫お島はと。尋ぬる袖に降る涙。フシ夜半の時雨となりにけり。フシこれこそ曾根崎。天神の。地松と棕櫚との連理の森。かき集めたる言の葉のよそに聞きしも今は又よそに嵐の身にぞしむ。お島も同じ我が庵は。歌お初德兵衛のその曉の。夢もやぶれてまだまもないに心中宿世の報の業か。それのみならず親方や。親の苦勞と思ひは知れど男死なせて見て居られうか。女房先立て存らへあらば、そりや犬猫も同じ事。同じ中にも鹿となり フシ鴛鴦と生れて女夫池 生ける間もなく身を果し猶や藻屑に埋まんと。

また只管のうき涙。スヱテ落ちて三途の川となる。太夫フシをとこ。心もくれ果てて。地西か東か何處ぞと月に向へどわが影の。映らざるこそ不思議なれ。ワキ女も向ふ燈火の。壁にも窓にも障子にも我が影見えぬ怪しさよ。ツ 太夫アヽあぢきなや果敢なやなまことや人の物語に。死する時節は人魂飛んでその身の影の無きと聞く。さぞやお島も。ワキ市樣も。かくぞ最期の近づくと。二人合圖の數珠の念佛の。一萬遍も繰りつめて フシ九千遍にぞはやなりぬ。ハルフシ心細くも。便なや今千遍の命の內と思へど。我が身は思はれずさきには如何いかにぞと。案じかはせる互の形 フシ茫然とこそ現れけれ 地夢か現か空蟬のもぬけの魂とも。知らばこそ。こは何として何時の間に一所に死なん嬉しやと。もつれ取付き縋りあひ誠の形影の人。歎けば歎き泣けば泣き。戀にせぐりの玉の緒のおのが思ひに手繰られて。一里の道は隔たれど フシ鏡に映す如くなり。地

月は白みて曉のあれ明星もさし昇る。近づく最期一筋に一つ蓮と願へども。思へば思へば我が身の科養子の親には疎る。誠の親のありとても親知らず子知らず。假令冥途で逢うたりとて何をしるしに誰をか見ん。惡業深き我が身やと フシ聲を。上げてぞ泣き居たる。地お島が心の嘆には。一人の母の老の世にいつかお主が年あきて。せめて一日片時なりとも湯水とられて往生せんと。これのみ一つの願なりしに。病で死するは是非もなしいとほしや母樣の。詞藥飲め灸せよ身養生して勤めよと。地大事にかけて下されし此の身體をば血に染めて。明日は堀江へ使たち呼び寄せ母の目に見せば。死入るやうの嘆の顔今見るやうで聞くやうで。思ひすごしの胸の中。五體の涙しめ寄せて フシ手にも。袖にもせきあまり フシ漲る。瀧に異らず。爰にくゆるは葭原よあれにふすぼる梅田の墓。餘所の無常の煙を見るも明日は我が身もいづくの雲。いづくの煙と

フシ立昇り。誰に煙の骨。拾はれん、冥途は六ツの巷ぞや。迷はぬしるべあの煙の消えざる内に我々もと。夫が脇差拔く形島がまぼろし後れじと、用意の剃刀よこたへて、サア只今ぞ一足も早かるな遅かるな。手に手を取らんと思へどもまだ死んで見ぬ死出の旅。連れ立てうやら連れまいやら逢はうやら逢ふまいやら。再び生きて生顔を見るは此の世の限りかと、物をも云はず面影の、顔をしを〳〵見合せて スヱテわつと消入り泣き居たり。地ヤア後れるな後れませぬ、合點か合點ぢや。南無阿彌陀佛を忘れまい、南無阿彌陀佛と喉吭に、がばと突立て兩手をかけて。くるりと抉ぐれば兩方の フシ面影消えてなかりけり。地無慚や二人は半死男は女の姿を尋ね、女は市樣々々。とのつつ返しつ苦しみの、眩む眼に手を伸べて オクリ尋ねへ迷ふぞ フシ不便なる。地遂に一息切斷の經絡六脈絶えん〳〵に、息の通ひ路ふつと切れうんとばかりを此の世の名殘

いざよふ月の朝霜と フシ一度に命は絶えてけり。地ツメ弟善次は川端に捨てし衣裳と書置を。拾ひ驚き駈付けて見ればあへなく事切れたり。南無三寶と嘆けども詮なしかひなし面目なし。せめて兄の報恩と。恥も。

身體も衣裳につゝみ負うて一先づ立退きける、扨こそ世上に此の男死んだ風說死なぬ沙汰。生死二枚の繪草紙に戀路の、回向をうけにける。

右之本令吟覽頭句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾 [竹本] [博教] (印)

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門 [信盛] [花押]

大阪高麗橋壹丁目
正本屋 山本九兵衛版 (印)
山本九右衛門版

兼好法師物見車

近松門左衛門作

序 徒然なるまゝに日ぐらし硯に向ひて。心に映り行くよしなし事の手習よ。人に言ふべき思ひならねば神の御願に事寄せて。毎日の御物詣貴船吉田大原野。松の尾平野梅の宮祭過ぎても今日は又。後の葵の下簾オロ〽賀茂の河原を。とゞろかす。地御車の五緒は極る位のみならす。忝くも後宇多の院第八の姫御子。卿の宮と申し奉る。品形より心ばへけに人間の種ならぬ。スヱテ竹の園生の篠竹の。地その忍びねの憂節も。色香に染める御心ゆゑ。フシ男えらみの閨の中 地既に十九の月雪も。フシひとりの友と眺め捨て。地お腰元よりお茶の間のおやしの下女に至る迄。見目は次でも男なく小いたづらなる遊び立てゝ。作文和歌管絃の道好色に意氣方の。手なんど拙からす走り書。聲をかしくて拍子とり痛ましうする物から。下戸ならぬこそ女子はよけれ。御形の森に酒宴の幕せみの小川に暮れかけて。螢拾うて涼風に提灯なしの還御ぞや。詞譜かある北面達近う参つて。名所々々の 地風景を。御物語申されよと フシ御車をこそ立てられけれ。地こゝに大織冠十九代卜部の兼顯が三男吉田の兼好。其の時は左兵衛の佐にて候ひしが。出衣のつま近々と進み出てければ。すだれ押し遣り姫宮も欄にこぼれおり給ひ。折節の移り變れば名所の。野山の色も立ちかはる。数へてたもと諸共にオクリ語りつ〽問はせ給ひけり。

四季の段

先づ御車の丑寅や。昔男の此の山を二十重ねて駿河なる。富士に譬へし比叡山都の富士とも。又は天台四明が洞。我が立つ杣とも フシ申すなり。フシ一際心も。浮き立つは。比良や横川の春の頃。フシ花もやう〳〵景色だつ花見の使早馬に。フシ鞍馬の山の雲珠櫻。静原山の。山樵も何を思ひに八瀬大原。戀を芹生の里人が。薪に。蕨 フシ五味。草は山吹藤杜若躑躅。卯の花。結び添へて。つゞら。つゞら折をばゐい。ゐいさつさゐいさつさ。ゐいころ〳〵〳〵。フシ小石流るゝ貴船川。川瀬の柳又をかし。市原二の瀬幡枝や蚊遣ふすぶる賤屋の軒も。ほと〳〵叩く水鶏の鳥。六月祓亦をかし。御手洗川に 歌さんざらめくは。蟬の時雨か松風か。松風の。音でないよのさゞれ小鮎かの。登りのぼるや フシ高野川。西に清瀧鳴瀧山式子の君の浮名立つ。定家葛の這ひかかる オクリ軒端の。松は五葉もよし小倉の。山の。一本薄。いつ穂に出でて亂れ。亂れあふひの フシ野の宮や。太秦戸無瀬高尾山雙の岡に〽雁鳴きて萩の下葉も色づきて。

早稲田刈りほすなんどこそ。フシ野分の朝をかしけれ。フシ御室法輪。嵯峨の御寺ヲクリ廻らば。廻れ水車の輪の。臨川堰の川波川柳は。水に揉るゝ。枝垂柳は。風にもまるゝ。ふくら雀は竹にもまるゝ都の牛は。くるくる車に。茶臼は挽木にもまるゝ地宇治に。續きの三室山。かの十帖の名所まで申せば源氏物語。まくら草紙に似たれども同じ事また岩清水。いはねば腹もふくるゝわざ御所より見ゆる山々も。御車より御覧じて所かはれば人心。かはらぬ山も珍しく初めて見たる如くなる盡きせぬ景色に候と。袖かき合せ語りければ御供の女房たち。名所の景より兼好が。言葉の色に氣を移し フシ顔を。見とれて立ち給ふ。

地姫宮輿に入り給ひヲヽよういやつた兼好。明けくれ眼なれた山々も所をかへて見る時は。又あらたまつて珍しい。詞そなたも院參御番の時殿上で見るは常の事。地今こゝで見る顔は又はんなりと懐しう。可愛らしう恥かしう北面とは思はれず。木の殿御と思はるゝ神の司の吉田の兼好。此の姫宮はしんぞよし田にもまるゝ。一つ車に打乘せてとても事なら一もみに。もまれたいぞと直垂に縋り付かんとし給へば。兼好は飛びしさりこは勿體なき仰や候。詞一歳たび〳〵御玉章を下されし時。樣々御意見申し上げ重ねて仰せ下されば。兼好出家仕り深山に隱れ申さんと。申し切り候へば御承引ましまして。思ひ切るとの御誓言。其の上今の御戯れ兼好に罪なくて。配所の月を見せ給はんとの御心か。地なまなか烏帽子裝束して男の數につらなる故。是にて只今髻切り。遠き山家に跡をくらまし申さんと。指副に手を掛くればあれ留めてくれ腰元ども。しばし〳〵と宣ひて。詞あゝ恥かしい兼好。扨は眞實いたづらと思やるさうな曲もない。定めて沙汰にも聞きつらん尊氏の執權。高の武藏守師直みづからに見ぬ戀して。地妻にほしいと奏聞す。あのむくつけな野暮天奴にそもや一夜も添はれうか。とかくそなたと自らが夫婦なりと披露せば。威勢を振ふ師直もさすがに天下の執事なり。男のある身に逆な無體をいはん樣もなし。詞聞きわけてさへたもるなら兄帝へも申し上げ。世間むきの嫁入して。寢所かへて寢るからは互に後の言譯立つ。地そなたの身では不祥な事姫宮とあがまへて。女房に持ちながら一つ枕に寢もせぬは。作の佛に利生がないと。思うてたもや頼むぞとスヱテ打涙ぐみ給ひける。詞兼好も手を打つて。感じ入りたる御心其の趣。とつく承り及び御笑止に存じ。何とぞして師直に思ひ切らせんと思案をめぐらし。侍從と申す辯舌の女を以て。出雲の國の住人。鹽冶判官高貞が妻の美質を語らせて候へば。移氣の驕者彼の妻に又見ぬ戀して君の御事ははつたと忘れ候よし御心安く思召せさり乍ら。義も辨へぬ無道者。鹽冶が妻の艶書を某に書けと申せし間。梵網經を和け。古今集十戒の

和歌を引き女の罪をおどろかし。貞女の道の教訓を細々書いて送りしかば。地彼の女手にも觸れずさよ衣とて投げ返す。それより其の兼好め門外へも寄するなと。音信不通に罷りなる。己れが威勢を鼻にあて出入させずば兼好が。迷惑がると思へども此方は結句悦ぶを フシ鬼に取られし如くなり。地御身の上もお心やすう思召せとぞ申しける。地宮は殊なる御機嫌にて。嬉しい事を聞きしよな。戀に氣轉な兼好やそなたの樣な戀知りに。惚れそこなうて口惜しい平人の娘と生まれたら。人手にかける男でない王の娘に生れて。姫宮にたふされた。詞やれ腰元ども。れき〳〵若い身を持つて。地あのやうな戀知りを外の者に添はせては。何と口がきかれうぞあつたら物をと宣へば。さあお許しが出た日頃の思こちが先ぢやいや我ぢや。三年先から文やつた。七年前にいひかけた覺があらうと縋りつき。袖を引くやら褄引くやら フシ更に差別はなかりけり。地さすがの兼好持て扱ひ袖打拂ひ逃げまはり 詞エヽ囂しいやかましい。是は戀の大晦日か。七年五年の古戀ならばいきまはつてござれ。愛着の道其の根深く。源遠し。地六塵の樂欲多しといへども。たゞ此の惑ぞやめがたき 詞才能は煩惱の增長學んで知るは智にあらず 可不可は一定なり無常の急に來ること。地瀧の水よりなほはやし。すは其の時に至つて老ひたる親いとしき子。君の恩妻の情捨てがたしとていかゞせん。萬事は皆非なりいふに足らず願ふに足らず。文字は同じ文字にて兼好とよめば俗體。兼好とよめば法師なり容とても黑髮を。剃ると剃らぬに僧俗ありいでさらば兼好が。けんかうになる是見よと直垂の紐引きちぎり〳〵。ふはとぬいで捨てければ下に黑染五條の袈裟。烏帽子かなぐり取つたればかねて頭を剃りこぼし。つけ髮したる風折や。包むにあまる遁世の フシ世を面白く見立てたり。地宮は驚きおはしましかね〴〵おことが天台の。教を學び莊老に心を寄せ。歌の道に思をのべ無常を心にかくるとは。常々に聞きけれども是は餘りに邂だし。我が身の緣の片付く迄見屆けてくれぬかと。衣の袖に御涙名殘つきせぬ御有樣。兼好答へ思しくて。思ひ立つ木曾の麻衣淺くのみ。染めてやつるべき袖の色かはと。袂振切走り行く月に憧がれ露に臥し。不來ならぬ隱遁は末の世までも兼好と。鳴くや吉田の雉子の聲花鳥を。友とぞ三重〳〵樂しみの フシ時を得たるや。地天下の執事高の武藏の守師直は。朝家の覺え武家の崇敬。驕日々に超過して フシ酒宴女樂に日を送る。地頃は水無月十日あまり青葉吹き來る山風の。音羽の瀧に涼みの會夏の花見て遊ばんと。洛中の細工人を召集め。五色の絹にて造り花地主の櫻に付けければ。一夜の中に爛漫と再び春に立ちかへり。山郭公聲はおぢて老いの鶯法華經や。觀世音の誓かと。老若男女も裾をそめ フシ袖を連らぬるばかりなり。地

具の身に舞臺に侍らうたせ。金襴の褥に坐しければ。藥師寺二郎左衛門公義を始めとし。お出入の大小名追從抹龍按摩取。お鬚の塵とり百千鳥口々囀る追從。句欄に打ちもたれ往來の女の品定。惡女には唾はき中の女に酒をかけ。美女が通れば扇にて散らしかけたる造花。袖には志賀の山越や。踏分けて行く八重櫻。今日九重の京雪踏 フシ奈良草履とぞ匂ひける。地されども師直浮かぬ顏。詞これなう藥次。師直が身の榮花忽ち夏を春にして。京中の女を一度に見れど我は一切面白からず。地鹽冶判官が女房此の胸にしみついて。心肝を惱まする。詞歌學者と思ひ兼好めに。文を書かせて遣つたれば手にも觸れず。地小夜衣とてなげ返し。我がつまならぬつまな重ねそと。結句意見にあづかる。今日はかの上﨟。瀧詣と聞きし故。此の會を催せしが媒介の侍從めが。まにあひの僞か今において侍從も見えず。呼びにやれといふ所へ侍從伺候といひければ。そりやめでたい地主の櫻も取つて抛れ。嵯峨も御室も君にとゞめた首尾はどうぢやと取廻す。詞いかにもいかにも近日鹽冶判官。北國へ軍立ち其の立願にかの瀧樣。三十三度の瀧詣 地もうそれそこへといひければ。エヽ早う拜みたいと フシきよろ〳〵するも。土氣なり。地幕を下げよの音するな。あひだ遠くば遠目鏡近くへ寄つて物言はゞ。外郎つめとざはめきて今や。〳〵と 三重〽 松風や フシ裾に模樣の眞葛原。たが染めかねし染浴衣。供の女中と一樣に。紛らかしても紛れなき。フシ腰にしきみの淺綠。地皆水晶の百八と。水の白玉光りあひ音羽の瀧つ絲筋も。手にくりとむる瀧詣。ぢきに瀧見の觀音の フシ影向かとぞ怪しまる。地三十三身かたどりて。三十三度の足早く讀誦の聲も口ばやに。下オン妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五爾時無盡意菩薩。卽從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音 地菩さつ〳〵さ。ゑい〳〵〳〵の下り上り。跣足に石の階段も心あれかし。いた〳〵し 地侍從幕の物見よりあれ〳〵先なが彼のお方と。指をさせば師直ナヽ言はいでもさう見えた。見事々々堪られぬ。聞きしに增すとは此の君どうぞ盃頂く間。これへ來迎なさるゝ樣に賴む〳〵と手を合すれば。侍從はとても叶はぬ事好い退き機と分別し易い事〳〵呼びまして參らんと。被衣打ちかけ西門へ フシ走りて京へ逃げにけり。地師直は欄干に頤もたせ首を伸べ待てどもいなせの返事なし。詞ヤア我は侍從が外したか。但し女が承引せぬか。地いかに藥師寺計らはれよと。氣色變つて見えにけり藥師寺機嫌背かじと。あつといひて立ちけるが粗忽にはいかゞぞと。心を奥の千手より立歸るにはたと逢ふ 詞申し〳〵。是は鹽冶判官高貞の御内室候な。本堂の舞臺に執事高の師直殿。御酒宴とも憚らぬ浴衣の體にて立騷ぎ。塵を蹴立つる狼藉ぢきに言譯有るべしとの。御諚たりといひけれ

ば北の方打笑ひ。ム、珍しい徒歩跣足で身
をやつす。佛様への敬ひが師直様へは慮外
になる。地申譯して詫むならば追付けそれ
へと宣へば。然らば直に御供とオクリ連れ立
ち〳〵舞臺へ出でらるゝ。地鹽冶判官高貞は
かね〴〵妻の物語。一期の浮沈と夕紅の
緋縅の腹卷　平文の練貫に唐縫したる上襲
帶刀の大口稜取つて。弦袋　つけたる大太
刀丸鞘卷の打刀。深編笠にて顏隱し執事に
もあれ何にもあれ。首捻切つて棄てんず物
と氣もせきのほる坂の上の。田村堂に立つ
たる姿ちらと見しより北の方。鐵金の楯よ
りもなほ確なる嬉しさと。目くばせしてぞ
出で給ふ師直幔幕上げさせ。有難い御影向
我等が念彼觀音力。歷劫不思議の御縁なり。
詞此の頃侍從が御返事に小夜衣とは怨めし
い。鹽治は此の度北國の討手をいひつけし
が。敵には畑六郎左衛門なんどいふ。鬼神
も欺く剛の武者。千に一つも鹽治が生きて
歸る樣はなし。後家になつてうろたゆるは

如何にしてもおいとしい。地今日から師直
がお身の上を請取つた。小夜衣の衣更もよ
つと此處で濡衣と。抱きつけば振放し。詞
ア丶事あたらしい。武夫の習ひ軍に立つには
修羅の門出生きんと思ふ者はなし。師直様
も其の通り。敵味方とならば夫、鹽冶が太
刀先で。其のお首を只今でもころりとやる
まいものでもなし。地其の時こなたの奥樣
は後家。今から頭を剃りこぼし小夜衣の衣
更へ墨衣の用意あれと。立たんとすれば藥
師寺袂を引きとゞめ。詞アヽ心にかゝるは
御尤。是は殿の御誤。藥師寺祝ひ直すべ
し。詞あの繪馬を御覽あれ。坂の上の田村
麿鈴鹿の鬼神を滅す所。鹽冶殿が北國の討
手に向ふ旗の上に。ウタヒ千手觀音の。光を
放つて一度放せば千の矢先。雨霰と降掛つ
て敵は殘らず討たれにけり。有難し有難し
や是。地觀音の御引合。めでたいめでたい
一獻とフン銚子を持つて立ちければ。地チヽ
繪馬に準へ給ふならばあれこそ木曾の思ひ

入る巴は馬上の女武者右より堅き石田が
首、鞍の前輪におしつけて捻ぢきりつ。き
[illegible]。きりゝとめぐる巴の丸。師直殿の
御首で。一つ巴が御所望か。[illegible]へて
二つ巴。おいあふ人々片端に。三つ巴四つ
巴、[illegible]武藏の[illegible]
なびはいづれでも御所望次第と聲高く。遂
にしつけぬ帶刀も後には我が夫。百萬騎に
味方よりの心嬉しさと目をつかふ。鹽冶は鍔
元くつろげてすは驅出でんと氣を配り。夫
婦目と目を三日月に　フシ明星輝く如くな
り。地藥師寺[illegible]と見てこはにが〳〵
しと齒噛ひ。[illegible]此の場を興になしてしま
はんと思ひ。詞[illegible]檢校が。
常に奏づる和田酒盛。[illegible]を和田殿藥師
寺は朝比奈。この上藤を御簾に擬へ。果
一節仕らん。[illegible]
謠うて。めでたう。御立ち候へと。ヲサわな
なき聲をぞ張り上げける。〽頃も其の後　地
和田の義盛九十三騎の人々は。山下宿河原

長者の宿所に集りて、夜日三日の酒盛はフン背にふれてぞ聞えける。地されども和田の心ざす。虎は座敷へ出でざれば。和田は大きに腹を立て。伊豆に北條武藏に秩父。扨相州にて此の義盛なんどが。地酒盛せんずる座敷へ虎は召さずと出であひて。扇の一手も舞ふべきに。義盛を侮るか。夫の曾我を憚るか。とう〳〵座敷へ出でよと申せ。それさなきものならば。夫がためも惡しからん。山下宿を追出せ フシ朝比奈えいとぞ怒らるゝ。地虎は心にそまねども。天下の執權和田の心に背きては。夫の爲も大事ぞとこゝろをやがて〳〵座敷へ出でければ 地朝比奈大きに悦び白銀の大盃。黄金の銚子取添へて。虎御前の思ひざし誰になりともさし給へ。朝比奈お酌候と フシ節もしどろにいひければ。地北の方とりあへず面白し思ひざし。我つまならで誰かはとだんぶと引受け口をつけ。十郎殿十郎殿と呼びかくる。鹽治嬉しさたまられず祐成これにとつつと出で。差いたりや虎御前のうだりや十郎と。手酌に三盃引續け〳〵。息なしについ〳〵〳〵。ハル打ち越は和田殿へ。慮外申すと投げ出し。女房に引つ添うてあたりを睨んで控へしは。觀音二十八部衆のフシ金剛夜叉ともいひつべし。地師直はつと仰天せしが弱氣を見せじと大樣に。詞ヤア九十三騎の人々和田におそれを取らするな。十郎をひつ立てよとはいひながら當座の興。鹽治殿のひけでもなし師直に意趣も残らぬ筈。地和田酒盛の本文に合せてひつ立て〳〵と。笑うて見ても色違へ一座の。詞面々こは〳〵も太刀に手をかけうぞぶるふ。詞鹽治なほも事ともせずつゝ立ちあがつて。折節弟の時致は。古井といふ所に矢の根研いでゐたりしが。地胸騷こそ心得ねと鎧とつて投げかけ。馬に鞍おく隙もなくあらひ髪に肌脊馬。廻れば三里曾我中村韋駄天よりもなほ早く。長者の門に馳着いて女房に案内させ。障子の陰より窺へば古郡新左衛門。ゐびた兵衛あしだ兵衛。すのさきの孫太郎。主ある女の太鼓持追從面のむやくし寺。上座は今日の和田殿。朝比奈出して草摺曳させぬか。朝比奈出さぬはおくれたか。地和田酒盛をくひさすな。なすびの高の師直と フシがんら〳〵とぞ笑ひける。地ヤア酒宴の座興を眞事にして事を好むか鹽治殿。詞薬師寺殿の朝比奈ならねば御邊も本の時致ならず。力も知行も等分の千日曳いても勝負はあらじ。地加勢々々と呼ばはればこゝはの侍我劣らじと。上帯草摺腰楯にむんず〳〵と取付いたり。物々し珍し〳〵時にあうたり時致が。時こそかはれ草摺曳力は更にかはらじな。舞臺の板を踏み抜いて眞逆さまに人なだれ。音羽の瀧のたぎつ波三筋を四筋になすものか。腰の番を捩ぢ切るか一足さらずの勝負ぞ。飾磨の徒歩路清水の堂もゆるげと踏みすゐて。腰をすゑのの朝嵐朝比奈ならぬ腕首も。多勢に無勢敵はじと力聲はゐいさらゐい。ゐいや

ノ〱ゑんや盥治判。宮が。觀音力は普陀落や。熊野の浦の鯨鯢數千人の海士人を。大の鯨が鰭振りて沖へ。沖へと沖津波磯へ磯へと磯打つ波。巖を叩く其の響踏み止め踏み弛め。腰を捻つてゑいやつと一振り振つて地ふり放せば。思はず一度にくる〱〱顏と額打ち合せ。尻居にどうと打つたる音フシ山にこたゆるばかりなり。地サア草摺曳が終つては時致が和田殿に。はなめづらしう見參とつゝと通つて師直が。馬手の膝にどつかりと乘りかゝり。詞惡しう候義盛殿虎が盃お望みならば時致お酌仕らん。何と〱と乘つかゝるはフシ大磐石の如くなり。地師直が諸膝も折るゝばかりの痛さをも。咎めばいかゞと息をつめがた〱ふるひ。詞ア丶〱〱和田酒盛をもう置いて。あれあの繪馬は澁谷の金王が。長田の庄司をきめた體。地貴樣は金王我は長田が頷ふ所。ア丶〱御免々々御助け。直ぐに長田は都をさして落行くところ。學んで見せうと云ひも敢へずフシひつ外いて逃げて行く。地夫婦諸共立塞がりこれ〱〱。金王ばかりで寂しくば。あれ御覽ぜ薙刀持つたは靜御前。弓を引くは泉が城。地自らそれとは恐れながら八幡宮の御母御。鬼界高麗百濟國の。あらき夷を攻滅して。かへる君が代千代に八千代に。いはほに弓をおつとりのべて異國の王も師直も。犬に劣つた今の世の梶原が讒奏にて。義經討手の土佐坊正尊武藏坊辨慶が。色も眞黑黑の駒尻馬乘つたが御所望か。かず〱多き繪馬の內望み次第にまなんで見せん。詞あの張良が流れ足樊噲が門破、鬼と餓鬼との首引に鬼は弱味噌手擂木。地ゆるせかお馬か繋馬まだ放駒。我が美人草あやめの前に今夜はじめて源三位。名をは雲井の弓張月たぐひ。なく鵺といふ。變化を押へて九刀刺通し刺通さんもさすが又。地ツメ大慈大悲の佛前と命助くる盛久や。景清の繪馬あり富士見西行文字人丸。竹に虎の毛をふるひ龍は雲を捲登り。梯子さいて月代剃る福祿壽の長頭。長居はそれ是迄と夫婦手を取り立歸る。扨こそ音羽の瀧の絲結ぶ繪馬の夫婦の中。諸願成就皆令滿足と敬。てこそ歸りけれ。

中之卷

地友とするに惡しき友七つ良き友三つあり。一つには物くるゝ友二つには醫師。智ある友こそ益者なれ。爰に侍從か父太秦の又五郎。もとは火焚の衞士なりしが今は僅の秋の田や。借らず負はずに四人口昔の烏帽子白丁より。嬶が手織の衣手に。露の世渡り共稼フシ寢ざめを樂と暮せしが。地けふは心に祝事あたりの衆にいざ給へ。搔餅召させんと東隣の與茂九郎。川端の彥六兵衞草堂の具覺坊。藪際の小吉の婆向のおこほの嬶までも。呼び集めたる酒肴鮎の素干乾鮭や。味噌のついたる土器も亭主が心一ぱいなり。詞在所の者ども口々に。目出度事とおしやる故辭儀もせずに參つたが。いかいざうさをおめさる目出度とは何事。

聞いてとも〲喜びたいといひければ。されば悦んでたも。こちの娘侍従が事。父にも母にも似をらいで色白に生れつき心までが器用で。吉田山の兼好様にかねよしの折から。歌とやら歌學とやら習つて。御所へお出入し。おらが娘に似合はぬ侍従といふ名を下され。それから武家方一ぱいに。今の世で誰あらう。高師直様のお目を下され。出雲の大名鹽冶殿薬師寺殿。方々へ出入して絹巻物を戴く。時々お金も下さる。今年といふ今年作つた麥は賣つて了ひ。師直様から下された米の飯をしてやつて。此の様に肥りたつく〲。地婿が膚を擦つて見れば皺が延びてすべ〲と。思はぬ謀叛が起つて来る。何處ぞで義兵を挙げさうなと フシどつと笑うていひければ。それは誰もあやかりたいシテ娘御はどこへぞ。盃も頂きお大名の結構な。咄もちつと聞きたいといへば女房されば の事。大名様といふものは結構な事も結構。我が儘なもの なれば御機嫌が取りぐるしう。こちの娘もいつぞやからちとお氣に背いて。久しうお召なされぬ所に。御機嫌が直つたとて乗物持つて。今朝お迎が來ましてその祝に此の通。地大事の娘が出世の祝何しても飽はなければども。細長う祝ひましよ一つ過いて下されと。嬉しがれば在所の者仕合な娘御や。其方やこちらが家の内。乗物の出入は葬禮でもならぬ事。詞こつちのお婆の葬禮には桶さへろくに買はいで。香の物桶へ入れたれば。案の如く火葬の時焼味噌の嗅がして 地それから茶漬食ふたびにお婆の事を想ひ出し。今でも涙がこぼれると。とつてもつかぬ物語。フシ在所酒もり聲高し。地時に表へ徒歩の者乗物舁かせて。詞親父殿宿にか。侍従殿帰られた。別して殿にも御機嫌よく御前にて大酒。地づなう酔うて寝入つておや乗物共に置いて行く。先づとつくりと休ましやと フシいひ捨てゝこそ帰りけれ。詞又五郎威嚴顔あれお見やれ。二本差を供につれ乗物に寝て来る。地あやかり者であるまいかこれ嘸乗物では窮屈がらう。そつと抱いて寝所してほんに寝さしよと戸を開けば。血みどろの女の首ころ〲と轉び出でにける。わつと座中が立退きて フシわな〲と慄ひ恐れしが。地怖い中にも母親はなう父悲しやこれは侍従が首なるわと。抱き付けは又五郎はて何をいふ。詞今朝家を出るまで。首はたしかに胴についてあつたものと。地夫婦軀を引出し撫でつ擦つつ押動かしハア。ほんに首が無いなう悲しや何とせん。やれ娘よ侍従よ如何に酒に酔へばとて。首の落ちるも知らぬ程酔ふといふ事あるものか。醒めたら首がつきもせう。酔を醒ましてくれよとて フシ狼狽へ。歎くぞ道理なる。地在所の者ども氣をつけて内輪でいうてもすまぬ事。今の送りの侍を引きずり戻し穿鑿し。師直様へ言上せんと。我も我もと追つかけしが フシ程なく引つたて立帰る。侍ちつともひるまず。詞其の女は大罪人。主

君師直卿の宮と申す姫宮に。御心を掛けられ御縁組極まりしに。吉田の兼好と心を合せ姫宮を惡女と言ひ消し。鹽治判官が妻を褒めそやし勸めこみ。中立を請取り大分お禮を取りながら。叶はぬとて身を引く其の科にて 地 お手討 死骸を下され親一門命のあるを。有難いと存じませと フシ 睨みつけてぞ歸りける。地 父母わつとばかりにて スヱテ しばし絶え入り歎きしが。又五郎齒軋みして。エヽ口惜しや下々には生れまいもの。地 まんざらの無理殺無成敗にあひながら。此の恨さへ云はれぬかいかに天下の上に立ち權柄がしたいとて主ある者に執心かけ。叶はぬ程に中立を手討にしたとはどうした掟。大分禮を取つたとはくちごひにして貰うたか。千萬反の綾錦萬々石の俵物。金の湧く泉でも買へる娘の命ぢやない。其の日過ぎの又五郎も日本の長者の師直も。命の惜しいは同じ事貰うた物は皆返す。娘が命返しをれと。絹巻物黄金を投げ出し投げ出し。命あつての乘物と扉微塵に踏み破り フシ 首を。抱へて泣きければ。地 母は骸を抱き寄せ。最早接いでも着くまいかとかつぱと轉び泣くを見て。ありあふ土民心無き。尼嬶迄も諸共に。袖を絞らぬ者はなし。涙すゝつて又五郎やれ娘よ。貧な親を貢ぐとてよしない事に賴まれ。敢ない死にをしたよな。師直が戀が叶はぬとてそちが身の科でなし。其の分ばかりで殺しはせまい追從面の出入の奴が 支言か偏ねしか。但し師直が心一つか恨と思ふ者あらば。死靈となつて憑いてくれそれをしるしに此の父が。錆たれども九寸五分大名でも高家でも。胴中を刳つて娘の敵を取つて見しよ。其の科で父や母獄門も 磔も。悔しいとは思はぬ親の歎が天道樣へ。屆けかし通ぜよかし力を添へて此の恨。晴れさせて給はれと首を天へ差向け〳〵。月日は無理を照さぬにようも〳〵大事の子を。何故に斬らせて下さつた天道樣から恨ぢやと。口說き立てかき口說き フシ 聲も。惜まず。泣きゐたり。地 あたりの人々とり〴〵に。亡者の後世もいかゝぞといたはり送る仇し野の。露消ゆる時なく鳥部山の煙立ち去らで。住み果てね世は定めなやはかなや。悲し 三重 中音 〽花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向ひて月を戀ひ垂籠めて春の行方。知らぬもなほ哀になさけ深し。咲きぬべき程の梢なり。萎れたる庭なんどこそ見所多けれ。男女の情も偏に相見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ仇なる契をかこち。淺茅が宿に昔忍ぶと フシ 書き棄てし。地 反古紙帳に燈火の仄にうつる影法師。月かとばかり涼しげに簾の破を洩れくるも。邊にあらぬ空炷や オクリ 岩に〽堰かるゝ遣水の フシ 音清らかに。地 さら〳〵と人通ふとも知らざれば。姫宮はたゞ人の姿に御身そめものの。褄かい取りて竹椽に フシ 暫し休らひましませば。フシ 人目稀なる。山里の。根笹にすだく藪蚊まで。女の肌の

珍しげに。袷越しさへ面憎とスヱテ拂ふ袂の追風に。地紙帳動けば兼好の影もゆらゆらふら〳〵と。筆持ちながら大欠伸。フシ名聞離れて住みなせり。地姫宮言ひ寄る便もなく。アヽ申しちと頼みませう。頼みませうと宣へば。詞誰ぢや夜中にやかましい。地又歌の點取か但しいつもの豆腐屋か。歌學より田樂せんフシ一丁置けとぞ答へける。地姫宮も一筋に爰はためらふ所でなしと。紙帳打揚げつゝと入り。詞面白い草紙が出來るげな。硯の墨でも磨りましよかと。地机にもたれ寄り給へば兼好机引つ抱へ。紙帳の外へ逃げ出でて。なう〳〵豆腐かと思うたれば。若い豆腐の姥が來た。いかう乳が張るさうなが。此の法師の向はないとフシ草紙を書いてぞゐたりける。地乳飲む事がいやならば無理にとはいふまい。乳母は子を抱く者いとし者ござれや。抱いて寢ねしよと取附けばあれん〳〵と聲立てゝ。紙帳の中へ逃げて入る。チヽそのうちは較らなうてなほよからうと。跡を追うて入り給へばなうもつけやと駈け出づる。宮も續いて出で給へばこれ紙帳がたまりませぬ。詞あんまり暴れさつしやるな。地宮樣ともある人が紙帳に寢た事なささうな。下卑た〳〵と打腹立ちフシこそ〳〵這うて入りければ。地宮も赤面まし〳〵て。詞ムヽ名聞離れし兼好の筆先に僞あり。此の書きかけし草紙を見れば。こゝろ深き文章の。地中にも萬にいみじくとも色好まぬ者は。玉の巵の底なき心地と書きながら。此の端なき振舞は筆に書くは僞ごと。德を飾りて名を求め名聞賣僧の嘘つき。玉の巵の底拔と。誹られて紙帳の内。嚔。くさめ〳〵も我ながら物狂ほしと書きたるは。是かや麓に人聲して。氣違よ。〳〵。氣違よ〳〵狂ひ。狂ひて 三重へ 詞やあ〳〵童どもは何を笑ふぞ。なに物に狂ふが可笑しいとや。地可笑か笑へちつともそつとも大事もない泣いつ。笑うつ。育てあげたる我が娘。われが小雀フシ鶯の。地卵の中の時鳥しやが父に似て父に似ず。母になほ似ぬ姫瓜の。つるになれ〳〵なれし雲井に隱れなき。詞侍從といふはこの子よなう。地みめようてふりよく古今萬葉伊勢物語。歌は人麿伊勢小町琴の手もよし琵琶を彈く。罰か報か何の仇にか。あへなくもたゞ一討ちにきり〴〵す。野邊に迷らず身を放さず。これ三界の首枷ぞやあれ。討たれしとは虚言とよ。父を見て笑ふか。歌いとし娘によい殿持たせ。孫を儲けて爺や姥が。老の頼の杖柱。地杖も柱も折れ果てた。親は何となるべきぞ折れたる杖はつぎもせん。つぐにつがれぬ娘の首本の如くについでたべ。首ついでたべ人々なう杖の下にも歌まはる子はいとし。盛親僧都の芋頭。芋よ〳〵どの子がいとし。むかひ殿狗は。未だ眼が開かぬ。お壺に飯いれてころ〳〵〳〵やころび伏してぞ。フシ泣きゐたり。ツレ地へ侍從とあれば姫宮も若しそれかはと御涙。浮ぶばかりに見えけ

れば。ワキ〽ものに泥まぬ兼好も。慌て驚
きよく見れば狂人は侍従が父。扨は侍従は
討れしか。師直が業ならんとスヱテ落涙袂を
ひたせしが。詞ア、狂人とてな厭ひ給ひそ。
人間の境界いづれか狂氣にあらざるや。蟻
の如く集りて何ごとをか營む。地昨日は歎き
今日は笑み。朝に怒り夕に愛し。財に繫か
れ名に纒まれ露の命を危ぶむは。皆狂人に
あらざるや。兼好が作る草紙徒然草の大意
を得たり。あの物狂を我が師と頼み フシ
書きつらねんと筆をとる。ツレ地〽宮も發明
まし〳〵て狂人走れば不狂人。走るも追ふ
も物狂扨正氣とは。ワキ〽生れぬ前の法性。
ツレ〽覺むる期ありや有明の。二人フシ止觀の
窓の月の影。峰の木隱れ雲隱れ常に照らす
と知る時は。いづれ別を悲しまん歎を止
めよ狂 人と。スヱテさまざま慰め諫むれば。
シテクセ〽地を走る 獸。空を翔ける翼まで
親子の 地あはれ フシ知らざるや。地況ん
や佛性同體の人間。子と生れ親となる父と

母とが諸羽交。育み立てし雛鶴の松に歸り
で獨りたつ。身は唐崎の一つ松 フシ額に志
賀の漣や。頭に比良の暮雪にて。まだ消
えもせず存らへて。世に住吉の松の思はく
恥かしやな 詞ある僧の曰く。謠サシつら〳〵
世間の現相を觀ずるに。飛花落葉の風の前
には。有爲の轉變を悟り。電光石火の影の
裡には。生死の去來を 地見るといへり。去
りては來り歸りては往來の人にもの問はう
娘は二度歸るかなう。ワキ〽もとより來ら
ぬ道芝の根にかへるとは見つれども。同じ
梢に咲き匂ふ變らぬ色を見給へや。シテ〽
面白や思子の遂には孫の親となり。ツレ〽
親又親の子なりけり。二人〽親子は假の名
のみにて時に從ふ花の春。シテ〽紅葉の秋
と變れども。二人〽松竹櫻。シテ〽梅柳 三
人〽くる〳〵と小車の。廻る輪廻の。風
車。風にもあてじ撫子の。木花咲耶姫の御
神木の花ならば。風も過ぎて吹けや吹け。
シテ〽あたら櫻のとがは散るぞ恨みなる。

よし恨むまじ歎くまじ。泣くまい泣くまい
啼かぬ鳥の聲聞けば。生れぬ先の我が子戀
しき。いとし我が子を何に譬へん門田の早
苗よ 歌なぜ〳〵 二人〽しよんぼりしよぼり
と。植ゑたもの シテ〽今來る秋に刈ろすよの
の誰か刈らん。二人〽植ゑい〳〵早乙女。
笠買うてとらせん。シテ〽笠買うてたもる
ならばなほも田をば植ゆべし。歌笠買うて
たもれやこれの涙。ハヅミ涙ふるよの。あら
フシ暗の夜や。二人〽夕暮は扨如何と。シテ〽
一方ならぬ思かな。二人〽曉 は又如何。
シテ〽數々多き歎かな。我が爲ならば雪も
よし降れ。雨もたゞ降れ。露も降れ〳〵。
なう我が子のあるならば。フシ伏屋も寢よげ
なるべし。ワキ〽我が子に心を盡し〳〵て。
シテ フシ〽我が子に心を。つくし〳〵て年の
數々讀みて見たれば。十三五つ嫁入盛りよ
嬉しやとて。吉日を選み 二人〽急ぎてやら
ん姿は如何に。シテ〽笠も見苦し花染被衣。
二人〽蓑をも脫ぎすて。シテ〽花摺衣の色襲。

二人へ待つらんものを。三人へすははや今日も。紅の下紐も フシ誰に解かせん解くべきと。生先までを。思ひ來し。待ちし月日も幻の。シテへ夢ならば又も見ん 二人へ現ならば其の儘見ん。シテへ夢にも劣り 二人へ現にも シテはかなきものは我が娘、娘よやよと喚びめぐり尋ねても求めても。かひも涙の瀧の絲 フシ亂れ。心や狂ふらん。ワキ地へ兼好見る目も痛ましく。詞いでくく教化問答して迷を開き得さすべし。如何に狂人。佛といつぱ何者が佛にはなる。サア何が佛になるやらん シテへ愚の仰候や。スエテ佛に別の種はなし。地佛の教に從ひて人が佛になるぞとよ。ワキ詞へ佛の教によるならば。教へし佛は何故に佛にはなり給ひしぞ シテへそれこそは其の先の佛の教候。ワキへ扨其の先の佛とは。シテへ又其の先の佛の敎。ワキへ又その先のその先の。敎へ始めし第一の。佛の師とは如何にく シテへハア天より降つたか。地より湧いたか木になつたか。地蔓に下つた瓢簞の フシ川流。なんでもないもの南無三寶。一心一念の本佛は無心無念の一佛より。敎を受けて久遠劫悟あれば迷あり二人へ迷ふ世あれば別あり。シテへ君子あれば仁義あり 二人へ家あれば鼠あり シテへ佛あれば衆生あり。三人へ衆生あれば狂人もあり柳は綠花は紅。ただ一ことの敎にて。狂亂も晴れく フシ本の正氣に立ちかへれば。二人へ姫宮も煩惱の愛着の花散るや。シテくウタヒへ鐘も鳴り 二人へ鳥も八聲に シテ月も早や 三人影傾きて明方の遠山蔓絶えくに。岡邊の松も 地ほのぐくと隙白。くこそなりにけれ。シテ地兼好は此の時につれぐく草二巻。三人へ二百四十餘段に書捨て。殘す藻鹽草風月のなさけ後世の道。人の心世の有樣蟲の鳴く音に至るまで。其の折々を博士として。隱遁の情を 地現せば。物狂ほしや物狂。是も思へば師なりけり緣も。三世の御佛に。花奉る時ぞとて。各打連れ朝霧の山路。踏分け 三重へ入り給ふ。フシ卯の時雨の 地朝虹に光り合ひたる赤絲縅。汗に絞りし若武者の鎧に露の白玉か。玉のやうなる上﨟を母衣の如くに負ひなして。もみに紅葉の指物は母衣の山車とも擬はせて。庵室に走り入り御庵主にちと御意得たし。詞御庵主。御庵主と呼ばはつても音もせず。扨は留守よな。地留守にもあれ此の紙帳の内に御忍び。主歸らばしかくの御物語候て。御賴み候ふべし追手急に候へども粗忽の御自害あるべからず。主君判官殿はや討たれさせ給ふ上は。我々とても世に存らへぬ命なれども敵師直を討つ迄は。先づ御忍びと申すにも北の方は涙にくれ。判官殿あへなく討たれ給ふ上は何を賴みに在るかひも。なき身なれどもと紙帳打上げ入らんとして。詞なういぶせやと飛んで出で。あれを見よ六郎紙帳の內に女の首。地朱に染みて見えたるは人の住家と思はれず。凄じさよと宣へば。詞エエ何がな御目に見えつらん。兼好といふ大

道人の澁室に[illegible]の儀はなし。そこ退き給へと[illegible]。見れば如何にも女の首こりや何ぢや。[illegible]に[illegible]たる首の色も變らず[illegible]好の[illegible]を見かけて[illegible]地何にもあれ天の與へ。此の首で[illegible]頭を[illegible]き氣を撓ませ。[illegible]逢けさせ申さんと[illegible]下にけり。地兼好法師は卿の宮又五郎諸共。花摘み[illegible]の前には[illegible]向け[illegible]華を供へ。南無[illegible]南無[illegible]世界。座法蓮華成道正覺[illegible]。回向も未だ終らぬに内より女の聲として。詞コレ兼好様。地兼好様と[illegible]耳に入れば兼好不便や[illegible]は迷ひたか。親の歎き姫宮の怖さもさぞと聞かぬふり[illegible]と。[illegible]南無[illegible]これ申し兼好様と。ひらりと打上げにつこと笑ひ顔さし入るればっそれや幽靈よと觀ながら。わつと迯げて身を縮めッシ様に食付きゐたり

けり。地兼好か[illegible]と笑ひ。詞サレ首はちりと云ひ死したる者[illegible]る[illegible]には[illegible]如く。首に魂なき故に野干の魅入り疑なし。[illegible]なう恐ろしやさら〳〵左様の者ならずと。[illegible]ますと[illegible]事と縋り付き[illegible]見知處に[illegible]卿宮が[illegible]の苦患より[illegible]せば[illegible]人の[illegible]たると[illegible]道理なり。地北の方も詮方つき。詞さては最前の首についての不審か[illegible]。自は鹽冶判官高貞が妻。高の師直[illegible]の戀に[illegible]逆心と將軍家へ讒言し。地討手向へば我が夫も。所詮鎌倉に落ち下り申し開かん爲。昨日東に赴き給へば師直追駈け上意と僞り

詰腹切らせ自らは。[illegible]八幡六郎と申す家の子相具し落ちし所に。師直が追手嚴しく[illegible]先を包まれ。そう〳〵遁れ[illegible]込み。首の[illegible]り討たんとて。地狼藉ながら其の首は八幡太郎が[illegible]たり。人の命の助かる事亡者の[illegible]ら悪しかつし。[illegible]してたべと宣へば孫は鹽冶殿の[illegible]。こなたは卿の[illegible]の首は侍從[illegible]師直が[illegible]の手討これこそ又五郎[illegible]の者世を[illegible]兼好が。[illegible]又五郎。師直[illegible]侍從が首は申すに及ばず。[illegible]手前に[illegible]。此の親父が首も取つてござれ。此の又五郎年寄つて[illegible]しい事は[illegible]ぬが。[illegible]人までは請取つたと。地いひもあへぬに麓に鬨をどつとつくり。雨の如くに飛び來る矢先揃ひ兼ねて
三重〽待ちゐたる 地所に師直が侍大將か林民部。直兜百騎ばかり[illegible]の庭に込入つて大音上げ。詞ヤア〳〵兼好法師只今八幡六郎

が、舅治が妻の首と偽りしは侍従が首、然れば女を地室に匿へしに紛れなし。此の首を返すからは舅治が女房ひつ立て歸る。地サア踏込め者どもと首を庭へ投込んで、我も／＼と亂れ入るさしつたりと又五郎、鍬押取つて立塞がり。詞ヤアさせぬ／＼。かういふは侍従が親。もとは大内火焚の衛士今は百姓。師直は娘の敵。お出でなくとも此の方からお見舞申さうと存じた。かう見えたお侍、なんぼう取つても一人前高か五石か八石か。十石づつの太刀さきでも。十本で百石百本で千石。此の親爺は鍬一本で何萬石か作り出す。幾人でもサアござれ一足でも引くまいため。ふんばりかつた又五郎サア地片端から己ればら。小麥畠に打ち返し微塵に崩す眞桑瓜、西瓜の戰時の運命は水の栗稗。名こそ惜しけれ菜畠にゐぐ芋頭鉈豆割り。腸畠踏出し元首取つて牛蒡抜き。血しほに染めて眞赤いな唐辛畠にしてくれんと。眞甲脊骨腰の骨脛首筋口癖なく、泥田にほうと打立て／＼蘆の。淵へと三重へ追下すフシかゝる所に、地六播六郎數個所の手負ひ敵二人を左右に受け。朱になつて来りしが一人の敵隙を見て。北の方に飛びかゝる兼好机おつ取つて。受けつ開いつかけ隔てよろほふ所を押付けて。詞机の上にのつかゝり是六郎、此の机で書いたは徒然草今は後段をきれたゝ草。地サア切れ／＼といふ隙に六郎も敵を切伏せて、走りかゝつて一打に首打落すぞ心地よき。六郎息もつぎ敢ず。先づ目前の敵なれば追手の大將小林を。たゞ一打と出でんとすれは又五郎小林が、眞田に鍬打立てゑいやゑいやと引来り。かつぱとひつすゑ胴中をしつかとふまへ、鍬の先で仕留めしは、地頭殿へ量るが百姓の法なれど、是は小林の堀開。地作り取に致さんと鍬ふり上げて頭より。脊骨迄打立て／＼畠打つ如く打ちければ。鎧草摺打裂かれ。五體碎けて骨ひしげ微塵になつてぞ失せにける詞六郎を始め間音に手柄々々と褒め立つれば、又五郎かぶりを振つていや／＼さうでない。我百姓の事なれば菜大根を大事にかけ、鍬を使ひ覚えし故只今の働は、地畠に生えた土大根の精靈大こんの者、とはいひながら。情なや、親が大根なればとて。娘の首はかぶらぢやとフシわつと泣くこそ哀れなれ。詞兼好も涙にくれ何事も頓世の業、地先づ此の髑髏を葬らんいで兼好が引導せんと。髑髏に向つて合掌し、詞鍬おつ取つて閑相なし、南無幽靈、汝元來土百姓の娘、土より出でて土に入る。三悪道の苦は脱けて。佛の種を蒔くぞ嬉しき。地南無佛南無法南無僧と共に唱ふる回向の聲に驚ちて退く敵の勢、佐も根もわが心阿波の、鳴戸の浪風も渡りくらべて世の中を。目出度く悟る隧道の鑑を。筆にぞ殘されし。

右之本令吟覽頗句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾 （竹本 博教）（印）

重而予以著述之本令校合候
畢全爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋 山本九兵衛版 （印）
大阪高麗橋壹丁目
山本九右衛門 版

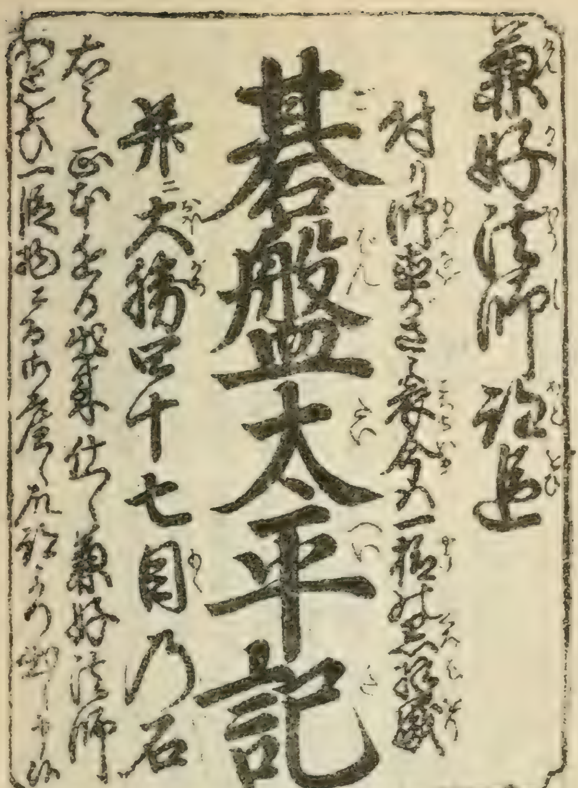
碁盤太平記

付り師直がさよ衣今は一樣の黑羽織
幷に大膳四十七目の石

近松門左衛門作

地物まうどなたぞ頼みましよ。頼みませう物まう／＼と引聲も。長路地の裏座敷フシ浪人住居奥深し。地折ふし嫡子の力彌は碁盤引寄せ片手差し。三つ目がゝりの大指拍ぎ腕先試して居たりしが。詞そこに岡平は居らぬか。物まうが有る請取れ。地岡平々々と呼びければどれいと應へ出でにける。詞是は承り及ぶ鹽冶殿浪人。初の名は八幡六郎。今は大星由良之介殿と申す御方の御宿はこれか。なか／＼由良之介借宅なりといひければ。愚僧は關東の所化。用事あつて昨日京着致せしが。鎌倉の町大鷲文五殿と申す。地是も鹽冶殿浪人より御狀一通ことづかり。急用なり大事の用檻に届けくれとのこと。お届け申すと出しける。旦那は他行致され悴力彌宿にあり。申し聞かせんと入らんとす詞アヽ是々。愚僧も本寺へ用あるもの。地お目にかゝるに及ばずとフシいひ置いてこそ出でにけれ。地岡平力彌に書狀を渡し口上述べんとする所に。又物まうと案内すどれいと應へ出でければ。地是さ主達。物さ問ひ申すべい。我たうは常陸からつん出た順禮さでおんじやり申す。鎌倉切通の邊で狀をことづかり申した。大星由良之介殿といふは此の屋臺に居まり召さるか。いかにも是が由良之介旅宿。シテ何方よりの御狀といへば。是さお見やれ狀は十四五もおじやり申す。渡した人は小寺總内竹森喜多八。片山源太といへば先に合點た。頼むと有つてことづかり申した。順禮が屆けたと返事にゆつてやりなされと。地いうて出づれば。詞これ旦那殿。大星由良之介様は是か。こちは相州の馬方。三條堀川迄早追の通に來ました。鎌倉の町原郷右衛門といふ人から。地狀ことづかつて草臥ながらほつこしうもないと、フシ持つて來る。地あと笈負うたる高野聖。詞我等此度東へ下り鎌倉の星月夜。堀井彌五郎殿と申す御方より。地急用の御狀とてことづかりしと置いて行く。お祓配の伊勢の御師六十六部の納經者。關東廻しの商ひ便宜思ひ／＼の使について。案内合圖の忍の狀數四十餘通。九月五日の一時にフシ到來するこそ不思議なれ。地岡平一つにひん抱へ力彌の前に手をついて。詞一度一度に申し上げんと存ぜしまに。追々に屆き申す故數多ければお名も忘れ。元より無筆の私讀むことは皆なり地狀は紛れ申せども屆けられし口々は。忘れませぬと申しける力彌打笑ひ。詞世には無筆も多けれども。おのれが歳まで方々して。一文字引く事も讀む事もならぬとは。地子供に劣つた奉公人親父のお歸りなされ

たゝ。届けた衆を覺えて申せ。ヤァ序にお
のれにいふ事あり。昨日お上りなされし女
中一人は身が母ぢや人。お年寄つたは祖母



様。隣の家主の座敷を借り一兩日は御逗留。
地裏はひとつの行通ひ浪人でも武家は武家。
常の様に自墮落に裏越に行くまいぞ。御見

舞申して来るまでに用があらば切戸を鎖け
と、文ども簞笥に錠卸し、裏へ出づれば表
より頼みませうといふ聲す。力彌開付け何
事かと障子の陰より窺ふとも。思ひがけなく闘平は。はて所々の頼みましよ。どれからとふと立ち出づる。詞いや我等は鎌倉
り二度飛脚。大星由良之介様の内案闘平殿
とはこなたか。高師直様のお屋敷から。と
地状取出せばしいしい高い〳〵。成程合點

請取つたと懐中に押入るゝ。詞いや是々當
代の師直様大事の御用と御念が入つた。何
時に届いたと委しい請取欲しうござるとい
ひければ。アヽ聲高な合點ぢや。地請取せ
んと駈入るも人は見ずとや硯水。瀧本流の
墨色やなまなか常に無筆ぞと。偽る筆の毛
を吹いて アン疵を求むる類かや。地飛脚は
手形請取つて立歸れば闘平は。封じ目切つ
て小隅へより繰返し讀む長文の。しかも細
字をつら〳〵と細明の横齧り。影唇を動か
せば無筆といひし空言も。顯れ渡る網代木
やうぢ〳〵として隠しかね。ずん〳〵に引
裂き茶釜の下に打くべて、門脇に目を
配る體力彌とつくと見すまして。大きに呆
れ是は扨色事などの文ならば隠す術もお
るべきが。いろはも知らぬと無筆になつて
人の心を許させしは。底意にたくみある奴
殊に飛脚が詞のはつれ鎌倉よりと請取を書
かせて取つたる次家迄。思へば敵の入れた
る間者彼奴内通に極つたり。エヽ出抜かれ

し口惜しさよと胸をさすつて立つたりしが「我々が發足も今日明日に近づいて。斷落するか道中にて外すか。何にもせよおめおめと取逃しては無念なり。一刻も油斷はならず。手討にせんと思案を極め。然あらぬ顔にてやい／＼岡平。火の廻り氣をつけよ紙子臭いと出でければ。詞いや少しも苦しからぬ事。八幡愛宕方々のお洗米の包紙地只今火に上げ申したりと。間に合ひ盧も眞赤いな フシ火箸觸りてゐたりけり。詞ムムさこそさこそ。ヤ最前物ようは何方からぞ又文などは來ぬかといへば。いや／＼それは私用。近日お下り近づく故道中の嗜。晒木綿の切を買ひ代物が遅いとて。氣の小さい商人め毎日せがみにうせをる。地旦那に勤ある岡平二匁足らずに銀やらずに立つと思ふかと。木綿は六尺一寸のがれ フシ實しやかにぞ僞りける。地力彌始終を聞居け曲者に疑なし。下人手討は大事のものと豫て親の物語。一生の手始め仕損ずまじと

こりや岡平。用がある此處へ來いとにこやかにいひければ。ないと答へてゐざりよる。詞いやずんど此處へ寄れ。遠慮なしに膝元へ地つゝと來いといふ五音。岡平も心付き脇差ぬいてからりと捨て。丸腰になつて出でんとす。ア其の儘脇差さいて居れ。さいて來いと重ねていへば如何樣とも兎角御意は背かじと。脇差さいて膝屈め左勝手に坐したりけり。力彌も小膝を立直し。ヤイ己れは最前關東の飛札を讀み。請取を書きながら。文不通の無筆と僞り。主人の眼を晦し誑したる不屆によつて。地成敗するぞと聲をかけ拔討にはたと切る。左の肩先肋をかけ脇差まで切りつけられ。仰向に返すを取つてひつ敷き止めを刺さんとせし所へ。父由良之介立歸り門口より聲をかけ詞ヤレそいつに止めを刺すな。地仔細ありと走入り力彌が脇差取らんとすれば。こいつは敵の内通者お退きなされと引放す。詞ヤレそれをお主は今知つたか。彼奴が作り

無筆になり。敵方の内通とはそも／＼より此の由良之介が見付けしが。地只今討つては敵方に。すは露れしと用心の氣をつけさせ。敵に六分の徳あつて味方には六分の損あり。内通と知るからはその儘彼奴を生けて置き。謀を打返に白き物を黒く見せ。赤き物を青く見せ噓を實に我等へは。彼奴はそれを實とし其の通を内通せん。時には敵に裏くはせ居ながら敵の樣を知るは味方に十分の勝十分の徳取つて。詞仕舞には此奴を殺しても助けても。損も益もない事。損益なくば同じくは助くるは慈悲仁の道。我が計略は智より出でお主が手討は勇の道。是常にいふ智仁勇。弓馬の家の守にも本尊にも此の三つ。地是を守るを忠臣とも忠義の武士とも名づくるぞ。エヽはやまつたり粗忽なり。さりながら若き者道理かな道理かな。我も口にはかくいへど主君を無罪に殺害させ。其の仇をも報じ得ず主の敵と今日迄も。同じ天を戴くは智仁勇も口

ばかり。忠臣の道を失はん。口惜しさよと兩眼にスヱテ無念涙を浮ぶれば。地力彌も敎訓聞くにつけ。父が涙に催されフシ落涙とゞめ兼ねにけり。地深手の岡平起直り親子の顏をつく〴〵見て。涙をはら〳〵と流し。眞實敵の内通と思召されん恥かしや。疾くに名乘らん〳〵とは存ぜしかど。一日も師直が扶持を受くれば。主從の道にあらずと延引し。地此の仕儀に罷り成る拙者が親は前殿樣御持弓の足輕寺岡平藏と申せし者。某は寺岡平右衛門先年我等九歲の時。御領内の鹽濱。檢地の越度に親平藏御扶持を放され。地流浪の身とは成りながら奉公こそは輕くなれ。忠義の道にフシ違ひはなし。二君には仕へまじ譜代の御主に今一度と。十餘年の渇命は草の根をはみ木の實を拾ひ。水を飮んで暮せしに。詞去年殿樣滅亡と聞くより親子が此の時に。大手の御門を枕にして。鹽冶殿の足輕寺岡親子が忠心と。地鎗下に名を止め御恩を送り奉らんと。御城

下へ馳せ參じ籠城願ひ歎きしかど。浪人を集めては謀叛の籠城同然にて。天下の咎め憚あり叶ふまじきと追ひ返され。詞親平藏は七十の老の望も是迄なり。冥途へ參つて殿樣へ御奉公仕らん。地手ぶりのお目見えいひがひなし己れは敵師直が。首取つてお土産に後より參れと申し置き。去年の當月切腹致す親の遺言お主の仇。人手にかけじと存じ立ち緣を求め心を砕き。詞師直が厩奉公に罷り出で。馬の口取る時もがな只一討と佛神に。祈つて時節を窺へども用心深く引籠り。馬はさておき乘物でも他行とて致さねば。地本望遂けん時節もなく。我が身の運の拙さと。思ひながらも世を恨み天をかこちて一冬は。布子の袖の乾く間も長き夜すがら忍び泣き。よし仕損ぜばそれ迄よ切込まんと存ぜし内。各方の檢見のため方々へ間者入るゝ。我等も其の役申し付け見る事聞く事内通し。虚言他言あるまじと熊野の牛王に血判据ゑ。方々へ出でける

が只目にかくるは此の御親子。案内人に知らせじと當春より御奉公。親が念願殿樣の草葉の陰の御忠節。せめてもと存する故内通の度毎に。詞由良之介親子の者腰が拔けて武道を忘れ。遊女に耽り酒宴に長じ。武具も馬具も賣拂ひ。主の敵を討つことは思ひも寄らず。一門も仲違といひ遣はすを實にして。地師直が用心怠り連歌茶の湯花の會。泊りとは此の時なり片時も早く御下り。本望を遂げられよ。詞サア此の事申し了うては浮世に思ひ置く事なし。はや〳〵止を刺いてたべ。熊野の牛王の起請の罰。現世にはあり〳〵とお手討にあふ現罰。地未來の無間も疑なし那由陀刧が其の間。阿鼻の苦患は受くるとも一言なりとも主君の忠。親の願を遂する事喜ばしや嬉しやな。さりながら願はくは今少し存らへ。敵討の御供し敵の首を一目見て。一所に腹を切るならば。なんぼう嬉しかるべきぞ忠義は人に負けねども。實の時に外るゝは是も起請の罰

かとて。口説歎くも息切れて フシ哀。涙の玉の緒の脉も。亂れて見えにけり。親子も不覺の涙にくれ驚き入つたる忠心。今一言の知らせにて大勢本意を遂ぐる事。一騎當千ともいひつべし身柄こそ足輕なれ。お主は冥途の鹽冶殿我等親子も傍輩なり。主君の忠義に傍輩の スエテ禮をいふも慮外なり。詞由良之介が志に此の度の一味の武士。我々親子を始として。以上四十五人あり。たとへ其の場へ出でずとも其の方親子を差加へ。四十七人忠義の武士と末代に名を止むべし。地これを冥途の感狀と親父に語り吹聽あれ。あつたら武士を殘念やと涙ぐめば嬉しげに。顏差上げて一禮を言はんとすれど舌すくみ。聲も出でねば手を合せ。スエテ頭を下げて頷きし。フシ心の中こそ哀なれ。地力彌は手負の顏色見てはや眼の色も變つたり。息のある中師直が。屋形の案內聞き置きたしといひければ。げに是は氣がついたり大略如何にと尋ぬれども。心許に息切の只ウヽ〳〵と苦みて言説更に分らねば。詞由良之介碁盤を寄せ。これ此方より碁石を竝べ圖を造つて尋ぬべし。合はば頷き合はぬ時は頭を振り。指をもつて引直せ。白石は塀黑は館と心得よ。地此處は東表門一目を十間積。竝べし石數十四目。百四十間これ皆塀か。ムヽ〳〵折廻しに平長屋西の裏手は長屋か塀か。扨は是も折廻しの長屋門。櫓は爰に辰巳角立闕は此處の程。侍小屋は南か北かムヽ〳〵三方に取廻し。厩は西か武具の藏。扨はこゝらぞ遠侍廣間は是より是までな。奥の寢所は此處か彼處かムヽ出來た。然れば此の間長廊下。此の間が泉水築山廣庭ならん。北は明地か碁盤の目。明いても塞ぐ手負の目。うんとばかりを最期にて フシ終にはかなくなりにけり。地サン音たてな沙汰するな町屋住居の氣の毒さ。家主へ聞えては今日か明日かの發足に。大事の前の障りなり。隣座敷へ聞えても。母女房に包む事跡は兎も有れ當分遁れ。是又旅宿の重寶と親子頷き疊を上げ。根太こぢ放し死骸打込み。やう〳〵に元の如くに取繕ひ。疊に溢れし血を押拭ひ物陰に敷換へ〳〵。サア能いわとは言ひつ此の上にも。愼むは兩隣外より人も來る事あり。色悟られなと囁きて。親子碁盤に差向ひサアいくつで五つでか。詞それでもなるまいま一つ置いて。六つの鐘 ウタ 山寺の春の夕を來て見れば。入相の鐘 地荻の聲庭の切戸を フシ押明けて。地由良之介の奥方つかつかと立出で。申し〳〵。謡の聲碁石の音隣座敷へ響きまする。私は夫婦の中おいとしやおふくろ樣。遙々お供申せしもそもじ樣の腰が拔け。地お主の敵は打忘れ盤上亂舞の遊び事。弓矢の道はすたりしと一門中の腹立。此の異見の爲ばかり國許の老母女房が。昨夜上つた今朝早々内を出て今歸り。親子碁盤で阿呆げな山寺所ぢやあるまい事。詞過分の所領を賜り。鹽冶判官高貞の執權と敬はれ。三千騎五千騎の諸侍の上に立

ちつ國中を靡けしは殿様の御恩ならざるや。地其の敵を生けて置き御命日の精進も。御回向も寺参りも何しに佛が受け給はん。御恩は何で報ぜんとや。詞ヤイ力彌め悴め。父こそ腰が抜けうずれ母が腹を貸したぞよ。なぜ父御前に意見はせぬ。家に爭ふ子なければ家治まらずといふ事を。常にいうたが忘れたか。地己れが二歳の秋の末有難や殿様の。お膝の上に抱き上げられ。親に劣らぬ人相あり成人して忠功なせと。力彌とは殿様のお着せなされし烏帽子ぞや。其の時に勿體なや幼い者の習とて。殿のお膝を濡せしを却つて殿には御機嫌よく。でかした〳〵主の膝を憚らぬ。その心では百萬騎の敵を敵とも思ふまいと。御感の言葉を常々にいひ聞かせたを忘れはせまい。人でなしの父親は忘れても此の母は。寝ても起きても主君の御恩束の間も忘れはせぬ。庭に飼ひ飼ふ犬迄も主の仇には噛付くぞや。差いた力は化粧か伊達か左程敵が怖いか。何時迄命が生きたいぞ臆病者卑怯者。何の因果に腰抜を。子に持つたぞと聲を揚げ フシ 前後。不覺に泣き給ふ恨の程ぞ道理なる。地力彌は俯き返答せず由良之介色をかへ。詞ヤア口上張るな女め。主の敵をえ討たいで恥をかいても身どもが恥。酒宴遊興長生して樂みも身が樂。人を傭ふ事でない。歳勢強き師直を討ち損へば首が飛ぶ。討ち了すれば腹を切る何方へしても死なねばならぬ。地損する者は我ばかり譽められて死なんより。誹られて生きたが得一門も緣者も。岡目八目傍からは言ひよい物。力彌に向つて惡口我が子にはいはれうが。夫にはいはれまいサア。いはれうば言つて見よと聲も荒くなる所へ。老母は走り出で給ひチヽ夫には言ひ惡く我が子には。言ひよいな。詞然らば其方は妾が子。其方にいふは此の母さりながら口では云はぬ。地犬同然の畜生は喋に思ひ知らせんと。碁笥なる石を引攫み搔攫み。目鼻も分かずはらり〳〵と投付け〳〵。散々に投掛けてわつと泣き出しなう奥。此方も元は他人なりあのやうな子を持ちて。其方の心が恥かしい何もいやるな云ふまいぞ。サア此方へと手を引いて涙乍らに入り給ふ。流石は武士の嫁 姑 オクリ 例へなうこそ聞えけれ。地力彌は泣いて平伏ししが御心根もいたはしし。そと御知らせあれかしといへばいや〳〵。詞一言大事の所。其の上母や女房も一味なりといはれては。母方の一門妻の緣者天下の詮議にかゝらん時。人の心まち〳〵にて見苦しき事もある時は。地屍の上の恥辱なり百丈の木に登つて。一丈の枝より落つるとは爰の事。母の恨も妻のかこちも。本望遂ぐれば今の間に晴るゝ事。大事を思ひ立つ者が小事に拘る事勿れと。教訓あれば御尤御尤。詞ヤ忘れたり。鎌倉下向の一味の衆。四十餘人より段々飛札到來と。地簞笥を開き取出せばこれは〳〵。扨は鎌倉首尾よき便と覺えたり。それ封切れと親子の人手々に開き

見給へば。敵師直油断の時節到来せり。一時も早くお下り待ち奉り候と。大概同じ文體なりサァめでたし〳〵武具は先へ廻し置く。旅立ちとても此の身柄明日といふも手延なり。笠も草鞋も道での事此の文どもを火中して。金子を肌に忘るゝな。當地の拂ひ宿代は。書付に相添へて簞笥の中に殘し置く。心にかゝる事もなし我が女房はそちが母。我も老母の顏を暇乞にたゞ一目。一寸覗いて立つべしと手燭差上げ奥座敷の。襖戸そつと明けければ床の前に人伏したり。誰なるらんとよく見れば嫁姑の吭の鏁。朱に染みて伏し給ふ力彌是はと驚けば。由良之介押鎭めアヽ是でこそ我が女房。是こそは我が母なれ命を捨てゝ我々が。心に勇みを附けられしは尤も斯うこそあるべけれ。主君の敵の師直に母の仇妻の仇。三つの恨を一太刀に晴さんと思ふ門出は。嬉しうないか嬉しうござる。足が輕いと進むにも流石恩愛骨肉の。變れる容に氣後れして父には包む力彌が涙。父は我が子を勇めの笑ひ泣くも笑ふも武士の道。スヱテ哀にも亦頼もしし。地 老母むつくと起きあがりアア嬉しや本望や。其の心が知りたさに母は自害を半にして。今の詞を待ちたるぞや。如何なる知識の勸めより。今の詞を引導にて嫁姑は成佛す。跡の死骸の取置も去る方に頼みおく。浮世に氣掛つゆ塵なし突込む脇差合圖にして。跡見返らず門出あれ彼方へ參つて殿樣へ。御披露申さばお悅びさぞお待かねなるべし。片時も早く本望遂げ親子連立ち早うおじや。詳しい事は冥途にて先づそれ迄はさらばやと。がはと突立てあつといふ聲を聞捨て振捨てゝ。行方に響く夜半の鐘。ともに孝行忠孝の武士の。道こそ 三重〽 遲しき フシ 急に鎌倉。地 高の武藏守師直が飯島の屋敷構。東面に石壁高く西には大河漲りて。南の方に入海の船の往返自在にして。甚だ堅固の要害なり忠功武勇の鹽冶が郞黨。此の要害に氣を屈し今は狙ふ人なしと。聞くより師直油断を生じ。くせの驕の歡樂はフシ運の末とぞ聞えける。地 文和三年空冴えて冬も半の雲凍り。霰亂るゝ夜嵐に口切の夜會を催し。數輩の客人勝手方。果は亂舞の酒宴に オクリ 小夜も〽漸々更けにけり。地 やゝあつて表の門を敲き。詞 藥師寺二郎左衞門公能。初雪の御茶の湯に伺候致すと呼ばはれば。門番立出で。早お振舞は相濟みお客も殘らず御歸り。奥もやう〳〵仕舞にてお夜詰も退け申す。明日お出と應へける。いや苦しからず。宵より參る筈なれども。典厩の御所に御用あつて遲參せり。師直公のお寢間にてお話し申す事もあり。今宵は是に一宿致すお心易き藥師寺。地 ゆめ〳〵氣遣なき事爰明けられよといひければ。げにいつもの藥師寺殿いざ御通り候へと。門を開けばつゝと入り。詞 番の家大儀々々。最早夜半であらうが。鹽冶判官が家老腰拔の由良之介今は町人同然になつたるとは聞きたれども。燒鳥に捉

緒用心におきはない。拍子木を絶さず代り〳〵に寝ずの番必ず油断召さるな。ヤイ身が供の者。明日晝時分に迎に來い、地朝飯は此方で食ふおれが飯は惜するなと。玄關に入りければ廣間は雨戸締むる音、屋敷の圍拍子木の音しん。しんとぞ三重〽更け渡る。地夫柔よく剛を制し弱よく強を制するとは。張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高貞の家臣大星由良之介。これを守つて既に一味の勇士四十餘騎。露命を亡君に抛ち死を一戰に極めて。獵船に取乗つて苫深々と身を隱し。稻村崎を漕出し天に滿ちたる曉の。霜も鋭き白波のフシ岸の岩根に漕寄せたり。嫡子大星力彌苫押退けて舳板の上につつと出で。忍び提灯差上げ敵の要害遙に見て。時こそよけれあれ御覧ぜ。人鎭つて淸氣は沈み空に朝霧横をれて。濁氣上を覆へり拍子木の調子金にして。數は九つ老陽金尅木火尅金。自滅の相現れたり破軍は辰巳に向うたり。地東の門より南へ

ついて乗れや〳〵と下知すれば。心得たりと片山源太槍提げてぞ出でにける。竹森喜多八大長刀奥山孫七須田五郎。勝田早見東の森七筋合せの鎧にて。板金鑿の着込を着し割筏割羅。家金襴の塗籠手を揃へてこそはさしもけに音に。聞えし原郷右衞門。大鷲文五掛矢の大槌。提げ〳〵下り立てばフシ吉田岡島不破前原。各素槍地横たへて列を揃へて打つたりけり。地小寺藤内立川甚平。千崎彌五郎河瀬忠太夫彼等四人は半弓手挾み。敵もし遠見を付け置くか。又は落ち行く溢れ者助勢あらば射留めよと。由良之介が下知によつて。左右を見定め前後に氣をつけ。しんづ〳〵と歩み行く。コハリ蘆野菅谷千馬村松村橋傳次。大太刀佩いてぞ續きける。地鹽田赤根は長刀構へ。中にも磯川十郎は十文字の鞘外し。遠松甚六片鎌かたけ。杉野木村三村二郎。皆一樣の花田の脚袢由良之介が智略にて八尺計の大竹に。弦を掛けてぞ持ちたりける。勇む心は

春めきて雪に秀づる雪の梅。白梅猪む内出立白小袖に黑羽織。金の札に面々の假名實名書付けて。袖標に付けたれば有明月に光り合ひ白石。黑石。打散す亂れ。碁盤に地金銀の。砂子を撒きしに三重〽異らずフシ扨其の次に地堀井彌惣七十二歲一子彌九郎卅歲。親子名に負ふ覺の者ゆらり〳〵と出でければ。矢間の庄司六十八歲嫡子矢間重太郎。廿六歲音に聞えし親子の武士。今日を限りの死軍と莞爾と笑うて出でたるは。獅子と虎とが子を連れてフシ孤山を巡る如くなり。地扨其の外吉田奥山小寺が嫡子。由良が從弟の大星瀬平。岡野中村矢島衞門平賀左衞門牧野平次。由良之介は後陣の押へ忠臣以上四十五騎。義を泰山より重んじ命を鵝毛と輕んじ。心を金石に比へしは。如何なる天魔破旬なりとも堪りつべうは無かりけり。由良之介下知して曰く。夜討の大事は奇正の變敵を明に誘引出し。味方は暗みを小橋に取れ女童に手な負せそ、地

天下を恐るゝ敵討矢を放つとも塀越さすな。火の用心に心をつけて繋ぎ馬を放さすな。折々に合圖の笛吹合せ吹合せ。敵に中を割らるゝな敵をさへ討つならば。名乗つて勢を引きまとへ合詞を常にして。味方討たすな同士討すな。合詞も三度に替へ乗込む時は山か鐘。軍になつては花か海。退口は笠か鶴。向ふ者は討つて捨て逃ぐる敵を追駈けて。無益の功名手間どるな取るべき首は只一つ。サア攻寄せよと手組を揃へしと〳〵。しと〳〵〳〵と詰寄せて。門の南北二手に分り屋形を睨んでひた〳〵と。塀裏についたりし心の中こそ 三重へ 嬉しけれ。地 時刻はよきぞすは乘れと千崎彌五郎。須田五郎が肩を踏へて飛上り。塀の腕木に手を掛けて。乗入らんとせし所に。夜廻中間拍子木打つて來りける。人々あつと靜まれどもイヤ乘りかゝつたる一番乘。やはか乘らで置くべきと。えいやつと打跨ぎ フシ 難なくひらりと乗込みける。地 中間驚きやれ盗人よといふ所を。彌五郎取つて押へ討つて捨つべき奴なれども。案内のため暫くと帶を解いて括し上げ。控柱に縛りつけ我拍子木を打つ間に。門の扉を打放せと家の内外諜合せ。拍子木けはしく打ちければ外より小寺河瀨忠太夫。掛矢振上げどうどうと。打つ音に相番の中間。何事やらんと出る所を彌五郎飛びかゝつて切つて捨て。又拍子木を打ちければ外より掛矢どう〳〵〳〵。咎むる中間ずつぱと切り拍子木の音かち〳〵〳〵。掛矢の音どう〳〵どう。中間出づればずつぱと切り三人切つて捨つる間に。力に任せて打つ掛矢門の金物打外し。閂中よりほつきと折れ。扉微塵に打碎かれ フシ 大門くわつとぞ開けゝる。地 大將由良之介忍の火差上げ。内を見廻し山と聲をかければ。鐘と答へて一同に我も我もと込み入りしが。詰り詰りの戸を締めて内より錠は固めたり。敲き割れば目を醒し内より先を取らるべし。左右なう入るべき樣もなき所に。豫て期したる謀 大竹の弓五張。戸口々々の敷居鴨居に確かと食ませ。各一度に手を揃へ刀を抜いて弓の弦。ふつつふつつと切りければ大竹に彈れて。鴨居を四五寸持上げ。遣戸妻戸ははら〳〵と將棊倒しとなりにける。詞 力彌すかさず緣の上へ駈け上り。鹽冶判官高貞が家臣大星由良之介義國。同じく力彌義道。此の外忠義の武士四十五騎。亡君の仇を報ぜんため攻寄せ候。武藏守殿の御首を賜つて。亡君判官が黃泉の闇を照らすべき。地 存念なりと呼ばはつて一文字に切つて入れば。すはや夜討と混亂して宵の茶の湯の茶筅髮。寢惚顏に素肌武者 フシ 太刀よ鑓よと犇いたり。地 小勢なれども寄手は今夜必死の勇者。合詞合圖の笛吹き合せ吹き合せ。此處に集り彼處に亂れ馬手に開き弓手に窄み。祕術を盡せば由良之介餘の者に目なかけそ。たゞ師直を討ちとれと八方に下知をなし揉立て〳〵 三重へ 攻めにけり。地 北隣は仁木播磨守。

南隣は石堂右馬之助兩屋敷より何事かと。屋の棟に武者を上げ提灯星の如くなり。ワキ詞〽軍兵屋根より聲を掛け。御屋敷騷動の聲太刀音矢叫こと騷しく候故。狼藉者か盜賊か但し非常の沙汰候か。承り屆けよと主人申付けらるゝと高らかに呼ばはりける。シテ〽寄手は元より返答せず師直方には狼狽へて。闖入る者もなく隙間あらばと逃足も。門々には寄手の兵槍の穗先を突つかけて。出でば突かんと待ちかけたりワキ詞屋根の上より口々に。よし何にもせよ隣屋敷の騷動を。聞捨てにせんやうもなし。御加勢申し一防仕らんと呼ばはりける。シテ〽大鷲文五原鄕右衛門詞を揃へ。これは鹽冶判官高貞が家來の者ども。主君の仇を報ぜんための働き候。天下へ對する狼藉にても候はず。元より兩隣仁木石堂殿へ。何の遺恨候はねば卒爾致さん樣もなし。火の用心は形の如く申し付けて候へば是もつて御用心に及ばぬ事たゞ穩便に捨て置かれ候へ。それとも是非御加勢と候へば。力なく一矢仕らんと高聲に呼ばはつたり。ワキ〽兩家の人々これを聞き。御神妙御神妙弓矢取る身は相互。我人主人持つたる身は尤も斯くこそあるべけれ。地御用あらば承らんと フシ靜まりかへつて控へけり。詞一時計の戰に寄手僅か二三人。薄手負うたるばかりにて敵の手負は數知らず。討たるゝ者百餘人殘る者は逃げ隱れ。今は手に立つ者もなしされども大將師直。影も形も見えざれば由良之介大きに急いて。詞年月心を碎きしは彼奴一人を討たん爲。寢間と覺しき所を見よと。地槙障子を蹴破り〳〵奥へ入つて見てあれば。夜着蒲團引きさばき枕ばかりぞ殘りける 詞ヤア是を見よ。斯る寒夜に此の蒲團暖まり冷めざるは。只今脱けしに極つたり近くにあるぞそれ搜せと。地天井屋根裏緣の下槍を突込み矢を射入れ。打返して尋ぬれども師直はなかりけり。詞外にも人を配り置く門へ出でん樣もなし。各呆れて立つたりしが。由良之介あたりを見廻し横手を打つて。あの水門の箱樋こそ一人這うては通るべし。内より水を流しかけ外へまはつて窺ひ見よ。内に人の有無は水の幅に知るべきぞ。地心得たりと堀井の彌惣遠松甚六。外へ廻つて待ちかけしに内より水をどう〳〵と。汲入れ〳〵流せども水口割れて滴の。跡へ餘つて落口は フシ岩に堰かるる如くなり。詞サア人あるに極つたり。槍を入れて搜せやと。手々に槍を突込み〳〵狩立つれば。堪り兼ねて泣き叫びなう御助け下されと。詞這出づるは藥師寺なり人々はつと惘し所へ。大星力彌走り寄りなんのごくにも立たぬ奴。地人手間取らせし憎さもにくしと。ぶりあげて首打落せば紅の フシ血汐の樋とぞ流れける。地由良之介大音上げ是程迄仕課せて。師直を討漏すよつく天道に捨てられたる我々。不運の程こそ口惜しけれ 詞憎々歸つて死なんより此の處にて腹掻切り。四十五人の怨念惡靈とな

つて師直を取殺さんと。思ふは如何にといひければ力彌を始め原矢間。堀井片山四十餘人いづれも左樣に存ずれども。大將の詞を相待つたり我々先を仕らんと。面々肌を押寛げすでにかうよと見えし所に。色豫て信ずる正八幡愛宕山の御加護にや。厩の傍なる小屋の内より煙頻に渦巻上る。詞由良之介きつと見て南無三寶。あの煙其のまゝ打棄て外の人に鎭められ。重治郎黨四十餘人師直を討損じ。狼狽たりといはれては恥辱の上の名折なり。地いざ鎭めん尤と我も我もと小屋の戸に手をかけ。えいやつと引放せば中には薪炭俵 フシ 煙は消えてなかりけり。地此の内は物臭し探せや捜せといふ聲に。内より炭を摑みかけ割木を投げかけ投げつくる。矢間の庄司は炭俵弓手につかんで投げのけ。無二無三に切つて入る師直今は敵はじと。躍り出づるを重太郎餘すまじと飛掛り。押竝べてむづと組み一締しめて跳ね倒し。詞取つて押へ高の武藏守師直

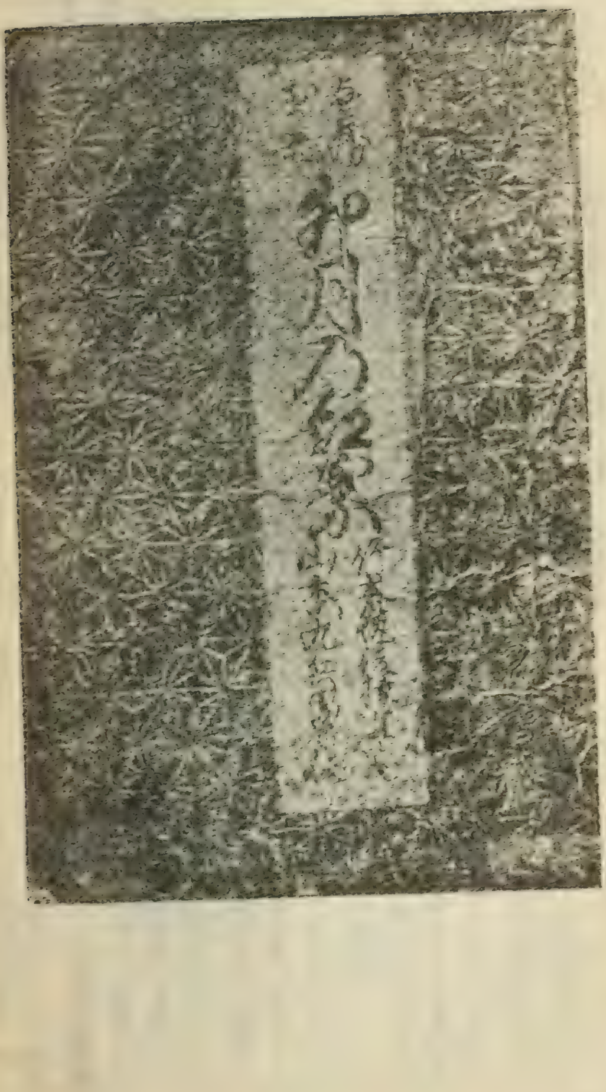
を。矢間重太郎組留めたりと呼ばはれば。地由良之介を始めとし四十五人が聲々に。浮木に逢へる盲龜はこれ三千年の優曇華の花を見たりや嬉しやと首打落し聲を上げ。踊上り飛上り扇を開き舞ふもあり悦の鬨の聲首眞中に取廻し妻を捨て子に別れ。老いたる親を失ひしも此の首一つ見ん爲の。今日は如何なる吉日と首を叩いつ喰ひついつ。一度にわつと嬉し泣き フシ 理すぎて哀なり 地由良之介は師直が白無垢剝つて首押包み。詞矢間殿御親子は姿をかへて片時も早く。我が君の御菩提所光明寺の御墓まで此の首を持參あれ。地我々は後よりとあらぬ下郎の首取りあげ。同じく師直が白無垢切つて押包み。鎗に結ひつけ堀井の彌五郎。大鷲文五に指荷はせ師直が本首を。御墓所に供ゆれば今生の本望これ迄なり。せくまい〳〵せく事ない此の屋敷も今迄は師直が屋敷なり討たれし跡は天下の地。踏荒すは恐れぞや第一は火の用心。詞燈ほどの火もし

めせと。つまりづまりを靜々と。心靜かに巡見し敵の一類一家の武者。追手かくるは目前なりいらぬ我等が一命。彼等に施し報謝せよと門外に下り敷いて。待合せ見る武勇の程天下にふるるしのゝめや。是は功名寺の名は光明。寺へと 三重 急ぎける フシ 夜も明け行けば。谷七郷に隱れなく在鎌倉の大小名。何事やらんと兜は着れど鎧は着ず。片手矢矧げて走るもあり馬の腹帶を締め兼ねて。肌脊に乘つて驅くるもあり辻々の番太鼓。人馬東西に馳違へ上下の騷動斜ならず。地師直が舍弟師泰が郎黨。光明寺の門前に雲霞の如く取りかけ。門を開きて御首渡せ。異議に及ばゞ寺の門を叩き破り。堂も伽藍も打碎き片端に坊主首。捻ぢ切つて奪ひ取れ渡せ〳〵。と犇きける。地寺僧の面々衣の袖に玉襷。棒よ杖よと防げども フシ 制し兼て見えければ 地住職の老僧立ち出で。詞やあ〳〵斬くいふは師泰殿の手勢とや。して侍か下郎かよも侍にては

有るまじ。鹽冶殿の家臣四十餘人の人々は。師直を討取り首を鹽冶の墓に手向け。本望達せし上は。鎌倉殿の御咎恐れありとて。各身を捨て只今幕府の御所へ罷出で。如何様とも御制法に仰付けられ候べしと。御下知を相待ち申さるゝ。是をこそ弓取の手本とはいふべけれ。和殿原は主君の親を闇々と討たせ。其の場へ下り合ひ討手の一人も切留めず。喧嘩過ぎての棒ちぎり木佛場どいひ長袖に向つ

[illegible]太平記

て。嚴がましき振舞當寺の法師は怖からず。幕府の御所より御指圖のなき間は。あの生首が髑髏になるまでもいつかな事。此の老僧が手足をもいで取らば取れ。渡す事は叶はぬと フシ發言はなつて宣へば。地いや論は無益たゞ込入つて奪ひとれ。門押破れとわめきけるかゝる所に。畠山。左京太夫上使なりと呼ばはれば。さしもの軍兵憚りて門の左右に平伏す。詞内より門を明けければ。畠山老僧に對面あり。鹽冶判官が家來ども主人の仇を報はんため。夜前高の師直が館へ押寄せ。師直を討取る條武門の面目弓馬の譽といひながら。御所近邊とも憚らず鎌倉を騒す。御咎によつて則ち仁木石堂に御預け。今日鹽冶が墓の前にて。殘らず切腹させさすべしとの御諚なり 地はた又師直が首は一子師泰願に任せ。送り遣すべしとの仰なりと述べらるれば。住持御諚を承り。首穢しつらひ宜しくまかなひ取納め。詞師泰殿の身うちにて。人がましき方請取り給へとありければ。地執權三隅の郡司と嚴しげには名乘れども。かひなき主の首持つて。悄々として歸りしは フシ面目なうこそ見えにけれ。地直に用意あるべしとて判官の廟を中にあて。左右に疊敷き並べ前に白砂積みたるは。溢れし血を清めん爲。[illegible]後に白幕引廻し白絹の布團を敷き。四十餘口の腹切刀三方に並べたり。鎌倉中の諸侍天晴武士の守り神。弓矢取る身のあやかり者と威儀を正して參詣す。歌人は悼の和歌を陳ね文者は歎の韻を搜り。上下萬民老若男女名殘をし合ひ我先にと。光明寺に群集して門前。市をぞ 三重なしにける フシ既に時刻も。午の刻。地羊の歩近付きて檢使の大將名越備前の守。光明寺に着き給へば介錯の役人を始めとして。帳付横目其の外の。役目々々の場を請取り フシ爰を晴と列座あり。地用意よくば面々出でられよとありければ。左の幕より大星由良之介を先に立て。矢間堀井原郷右衛門廿三人續いたり。右の幕より大星力彌第一にて。小寺片山東森廿二人打連れて。歩み出でたる有樣は古今稀なる武士の業。譽を取つて世の中の濁に染まぬ白小袖。娑婆は夢なる契にて淺黄上下淺くとも。君に三世の忠孝と各墓に回向して。諸役人に一禮述べ一面に著座して。目と目をきつと見合せ檢使の詞を待つたるは。天晴名士の腹切る樣尤かくこそあるべけれと。知るも知らぬも涙を浮べ オクリあつと感ずるばかりなり。名越備前守進み出で。地上よりの御諚には此の度鹽冶判官が家臣四十餘騎。高師直を討つて亡君の仇を報ずる事。前代未聞の忠臣一人當千の働き甚だ感じ思召し。一命助け置かれ度く思召すといへども。太平の御代に干戈を動かし御旗下を騒がすあやまり。國制據所なく切腹仰付けらるる。强將の下には弱兵なし。かた〳〵が忠義に依つて鹽冶判官。存生の仁徳を思召しやられ。判官が一子竹王丸父が遺跡相違なく。出雲伯耆兩國宛行はるゝとの御諚。冥途へ參つて判官に申し傳へ有難く存じ奉り。早々切腹仕れと高らかに述べ給へば。はあつと一度に頭を下げ悦涙悦笑。肩衣取つて押退け〳〵由良之介刀を頂戴して左の小脇に突立つれば力彌も續いて突立てたり。次第々々に突立て突込み引き廻し〳〵。時も違はず場も違はず主君の墓の左右にて。一度に腹を切つたりし フシ三世の縁こそ頼もしけれ。地ツメやがて殘らず介錯して直に御寺を墓所。萬劫末代萬々年朽ちせぬ石に名を殘し。主君の子孫家繁昌富貴自在の幸ひも。忠と孝との誠の心。天地に叶ひ佛神もめでたく。守り給ひけり。



おかめ
與兵衞　ひだりめん

卯月紅葉

廿二社めぐり

次第へ ふるき都や難波潟。ふるき都や難波潟。二十二社詣（まうで） フシ急がん。戀といふその水上を尋ぬれば。神と神とが肌ふれて。抱寄せ給ひし腹帯の。スヱテとけてほどけて世にこぼれ。産みひろめにし人種の 小オクリ次第々々に孫つぎて色の道には發明な。町の小娘若嫁の。まねる芝居の女形。髪の結ひぶり小利口に。ひつくる〳〵廓樣。今は向ぬと縫箔の。それにはあらぬ白の風。フシ皇居の煙のたち居まで。ハルフシ姿似せれば心も共に オクリ染まる。紫縮緬の小皺のよりし蛇噪まで。ギン情こめたる此の時代地[illegible]經て變に石の上。古道具屋の古格な。[illegible]父の親の手を水離れせぬお龜とは。[illegible]命をば。フシ萬代祝ふ名なるべし。

正五九月の神參り殊に此の頃我が親と。初元結の我が夫と夏の挨拶の。中に節だつ早苗月。スヱテ五月の雨は神心。夫の身の上安穩に。田畠を潤す其の如く。苗代水にせきかけて。フシオクリ惠めや。あまの。川崎の。スヱテ大權現を伏拜む。此の御神の君が代を。聞くも。語るも有難き。蝦夷か千島や朝鮮國琉球薩摩島の。此の日の本の外迄も。フシ御威光四方に飛梅の。天滿の社に手習子供。書いて上げたる龍虎梅竹絲屋の小絲。姉は十三妹は十二。殿御ほしさに宿願。かけてゐ。フシ月の參りは。二十五日やつさ。ありやそりや。地こりや堀川の惠比壽殿。北野は天滿と御一體荒人神と音高くとゞろ。とゞろと。鳴神も。よもや破らじ。よもやさけじの幼馴染の女夫合。フシ

此の神明に祈らばや。扨六番は。曾根崎の。宮の木立もいつごろよりか 小オクリ名立て。がましき天滿屋お初よそに聞くさへ身に蜆川。水の流れの勤めのうき身。どうで女房にやもたれぬ中の死ぬる生きるは愚の沙汰よ。おれはそれをと願ふぢやないか。男故なら命も身上も取つて行け。どこらへの。こゝらでの。お手引合うて二人のかばね。こゝに梅田のナ橋に寢てサ夢を津村の。フシ新御靈。人の祈りは樣々の大明神や其の次は。仁徳帝の宮所オクリ拜み。めぐりて十番に數も願も三津寺の。フシ正八幡に。はやつきぬ。道頓堀の絲竹や。太鼓の聲にひかされて心も足もしやな〳〵しやなら。ちよつと立見の手毬の曲は。中歌ひいふうみい。よういつむなゝ八よころ〳〵。フシとんとはづむも可愛らし。明日も來うぞの。歌惠比壽橋や。惠比壽橋越えて。見たや見せたや難波橋 フシ難波の今宮。是からは。野道の風の涼しさに オクリ笠も帽子も晴々

と。雨の袂に吹きたまる。歌身もひや〳〵と。心よき。肌をしめさせ。しめてもらはば此方からも。じつとしめ〳〵。ハヅミ空もしめりて。フシ五月雨の。スヱナヲ雲のすゞしの帷子の。衣紋つくろひとりなり直しォクリ鬢かき。なづる挿櫛の蒔絵に似たる松原は。安井の天神是ぞとよ。長地天王寺には十五社の鎮守を一社と伏拝み扨十四番十五番。南東の門前の午頭天王に我が願ひ。幾つとはなき生玉の玉の光りの。すきとほり神は見通し。云はずとも。心の底の只一つ。それを頼みに　フシ北向の。八幡宮の御誓ひ。世々に高津の坂道を。歌登ればさつさ。下ればさつさ。さつさ三六 地十八番こゝも難波の大君を。唐土人のほめ詞。咲くや此の花今はとて。梢も青き夏木立。西を遙かに百舟の。入江の秋の海面に。歌沖津白浪。さばけて忍べ。砕けて遊べ。中よい月に。たはふれ遊べゑい〳〵。遊べゑい〳〵ゑい〳〵〳〵照る〳〵月。〳〵てる〳〵君と。

寝たらば何とよござるまいかの照る〳〵月。照る〳〵月や。フシ月よみの。ハルフシ朝日の神明。額づきて。仰向く顔にあたる日を袖でかざしの玉造り。稲荷の宮居こゝも亦。伊勢の内外の内平野町大神宮よと色々の。諸願のたねを上町の。座摩のお旅所に二十二社拝み。納むる袖神楽。乙女子ならぬ神子町に問ふべき占のあればとて。まだ日の足も南へと。駕籠の息杖息つがず走らせ。てこそ 三重〽 急ぎけれ

フシ幼き時より。地氣に入りて幾春秋をふりと云ふ。年季の下女を身になして。隠す事をも語りしは　フシ黒格子の辻とかや。地上手と聞きし神子の門あゝ申し。ちと口寄を 地頼みませうとぞ案内ける。弟子の小女郎心得てお通りなされと戸をあくれば。お亀は一間に入りにけり暫くあつて立出づる。神子もよつほど見えるもの 詞アヽようお出でなされました。大阪のお家で御座りますか。お供の衆へ上つて先づあふいであげ

さつしやれ。地お茶持ておぢややとあじらひは。あいくろがうしの若神子の フシ口と口とも寄せまほし。詞して先づ御用の事ありとは 生口か死口かと云へば。いやさればとよ頼み度きとは生口なるが。海山隔てし方でもなし。地只二三里の道を越え五日六日の便もなし。どうがなかうがなくよくよと。案じわびたる御身の程 フシ 寄せてたべとぞ仰せける。地神子は合掌目をふさぎ。數珠をくりひく梓弓。スヱテ神下しして寄せにける。地天清浄地清浄。内外清浄六根清浄。天の神地の神家の内には井の神。庭の神竈の神神の數は八百萬。過去の佛未來の佛。彌陀藥師彌勒阿閦。觀音勢至普賢菩薩智恵文殊。三國傳來佛法流布聖徳太子の御本地は靈山淨土三界の。フシ教主世尊の御事なり。地此の御教への梓弓釋迦の子神子が泣音に。引かれ誘はれ寄り來り逢ひた見たさに寄り來たよ。なう懐かしの台の枕や。詞我懐かしとはおぼつかなみの寄り

来る人は誰ぞいの。太夫詞子ロ誰とて二人思ふ身か。一つねふしの双股竹與兵衛を。夫と思へばこそ問うてたもつて嬉しやの。問はれて今の恥かしや扨世の中の憂き節はなう。我がよきに人の悪しきがあらばこそ。破れ車でわが悪い。とは云ひながら扇の影の立烏帽子。舅といひもとは伯父。跡嗣の約束なれば今では親子ぢやないかいの。何しに粗略にするものぞ在所の生の親達より。猶孝行を盡せども。丸い續桶に角の蓋心が合はねば是非もなし。恨も仇も外になし憎いも辛いもたゞ一人。重きが上の小夜衣よなう。ワキ詞恨みありとは私が事か。おの様の女房よみ仕方の悪い事あらば。なぜ殺しなりともなされずして何か恨みのあるぞとよ。太夫ヲヽ二世と契りていとしいもの。そもじに恨のあるべきか。小夜衣とは親ならぬ親の手かけの茨草。目をつく様に屋の内を立てうと伏せうと儘にして。地陰言中言さゝへ口立つてはふすべ居ては譏り、何がな見出さう聞き出さう目に角立てる仁王顔。物には阿吽ある故に道具仲間の商に。損もする又徳もとるゆすれば落ちる木の葉の露。我が身にかゝる商賣のそれにおろかのあるべきか。又しては〱道樂者でのら者で。在所へ戻せいなせとて額に角も入れたもの。丁稚小者を云ふ如く。内の手代や庭寶の侮り者になし果てゝ。あの女めが弟を内へ入れうと云ふ巧み。町内からも小柴垣ゆひ立つれども世の中の。詞藥の灸は身にあつく毒な酒は甘いとや。何を云うても氣に入らず牛は嘶き馬は吼え。理は非に落ちる左繩ゆひかひもない身なれども。在所に歴きと親もあり。敷金してあの下司めに使はれう筈はない。エヽ口惜しいわいの腹が立つわいの。詞舅の家を出るからは下司めたつた一打に。仕舞うてのけうかいや出所へ連れて出て。首に繩を掛けうかと地様々思案はしたれども。家の名を出すそれのみかそもじと縁が切れうかと。是が第一悲しうて情ないやら無念なやら。弦なき弓に羽抜鳥立つもたゝれず居るも居られぬ家の内。そもじに心引かされて破れ暦にあらねども。あだな月日を數へたよなう。籾糠三合有るならば入聟すなと云ふ事は我が身の上のたとへかや。詞十貫目と云ふ敷金をあの女めにちやかさりよかと。涙がこぼれて口惜しいわいなう。ワキおいとしや〱。あの今めと云ふ奴を出入も止めうと思へども。母様の存生より居たる者の事なれば。生若い私が身で出過ぎた事と控へしが。此の秋は母様の十三年忌も仕舞ひまし。ふつゝと出入を止めさせんして此の間五七日は。河内へ歸りて御入りかや。そよとの便もない事は扨は我にも秋風かや。太夫アヽ何しにそもじに秋風の。立田の山のフシ初紅葉。故郷へは錦を着て歸ると申す。今すご〱と此の姿何とて在所へ歸られん。晝は生玉天王寺天滿小橋に河口を。終日歩む時もあり或は芝居で日を暮し。旅籠に命を養ひて。

暮ればそもじが懐しく。人目忍びて門に立ち軒の下なる長持に。そつと隠れて折々は。詞もしも二階の格子から顔も見えるか聲するかと。蓋を明方近づけば立出で歸り夜毎には。猶しも思ひ深草の榻に通ひし車長持。廻り逢ひたや語りたや。語るに盡きぬ生口も今は是まで梓弓。引いては歸る習ひなりともしばしが程と。せめて止むるかひもがな。太夫かひこそなけれ縁あらば。リキ逢ふも不思議。太夫逢はぬも不思議。二人逢はずば何を玉の緒も絶えなば絶えねと伏し沈み。死したる人に逢ふ如く名残を包む涙の袖。寄り來るよりの生口は フシ神上。りしてさめにけり。地親の意見は直なれどそばのとりなし横時雨。どこを先途にさして行く傘屋與兵衛在所へも。面目なしと戻り兼ね心は有頂天王寺 フシ神子町に迷ひ來りしが。地お龜は神子に一禮して立出づる門口に。下女が見付けてあれ與兵衛様。どれどこに。地是はお龜か與兵衛様かあんまり便宜もない故に。生口寄せに來ましたがなぜに戻つて下されぬ。おりやどうならうと構はぬ氣かと スヱテすがり付いてぞ泣き居たる。詞ヲヽおれとても和女に心が引かされて。在所へも得歸らず。地大阪中を立迷ふ雲助同然の身持となり。今日は河内へいかうかと小堀口まで行つたれば。詞親父とかまの今めとが是も在所へ行く風で。跡から來たをちらりと見てやうやう逃げて戻つたが。地おれを見たか知らぬまで怖い事ぢやと語りける。見付けられたら大事か根みも腹の立つ事も。私に免じて下さんせ。詞昨日はわしが氣晴らしとて。父様と半四郎の心中狂言見たれども。餘の事は耳へもいらず半九郎お染が最期の臺詞。此方の胸に皆こたへ。二人死ぬなら死にたいがこな様死んで下さりよか。どうかかうかと思うて居て四郎五郎か不心中面白いとて笑へども私や一日泣いてゐた。泣いてばつかり居たわいのと。袂に取り付き聲を揚げ十五になるやならずにて。夫を思ふ眞實の フシ歎きの。涙ぞ奇特なる。地あれあれへ見ゆるは親父ぢやないか。詞葛籠笠は今めぢやわ。地逢うてやかまし爰御免と フシ神子の門にぞ隠れける。地親長兵衛は手代を連れ大汗流して來りしが。詞今大聲上げてやお是はお龜様。廿二社巡りとてあぢな所へ來てござんす。如何に男を持つたとて若い姿してびらしやらと。あんまりはたへさつしやるなと。地嚙みつく様に夕立の フシ鳴る雷の如くなり。お龜ははつと恐ろしく今日のついでに母様の十三年忌の口寄に。ちよつと寄つた迄の事。して父様はあの人連れていづかたへと云ひければ。詞ヲヽされば與兵衛めが。在所へは戻らいで。町の會所の櫃箱に入納めた讓り狀。身が使と僞つて取つて行んだと年寄から。斷りが云うて來た。彼奴に讓る讓狀取つて何になる事ぞ。家を棒に振りをるか但しはどうぞ公事だくみか。日頃は此所な女子と。いひ事小言が絶えね

ども五分々々に聞いて居た。彼奴が悪いに極つた河内の親に言渡し。ぢきに埒を明けんため來ればあれで見付けたが。地此邊へはうせぬかとうそ〳〵見廻し格子の門。こりや爰にけつかると引出せば與兵衛は。かづき菅笠身に添ひうろ〳〵出でし其の風情、お龜はわつと泣出す フシ笑止千萬哀れなり。詞妾笑つてこれ與兵衛様。此の生粹なわたくしを。熊鷹の熊手のつかみづらのと異名をつけ。八町まちへ名を立てて。地テヽ心の直な跡取様。かうした事をなされても。是でも家が立ちますか。コレ與兵衛様やあフシ與兵衛殿様とぞ喚きける。地與兵衛はさしうつぶいて居たりしが。詞顔を上げてこれ女かしましい。エヽ恨めしい親父様。あの家屋敷家財まで私夫婦へ譲りの約束。なれば親子と存ずる故不祥の事も堪忍して。心一ぱい働けども何をするのもお氣に入らず。在所へ歸れ戻れとはテヽ、ヽ道理かな〳〵。家屋敷家財まで今が弟の傳三郎に。

取らそとある譲状 此の與兵衛が聞いてゐる。明日でも親父様ら〳〵の耳へ入つこ時。町衆が立合ひ譲状を披いて。傳三郎に跡式取られ。此の與兵衛が悄々と生きて在所へ歸られうか。是誰がわざぞ其の女めとの談合ならん。地此の事を某には誰が知らせたと思ふぞや。おのれが弟の傳三郎。今迄おのれら一本と思ひしに。奇特にも傳三めが天道が怖ろしさに。知らせまするると告げし故後日の證據に取つたるぞ。おのれはおのれと思へどもさりとては親父様。可愛い娘の男なり聟子とは申さぬか。さうはなされぬ筈なりと聲を上げて泣きければ。お龜は傍にひつ添うて母様生世の折ならば。彼等に口を利かせうか母様は此の世になし。伯母様といへば目は見えず。夫婦は誰をたよりにせんとスヱテ口説き歎くぞ。哀なる。詞長兵衛肩をひそめ。是はゆめ〳〵覺えなしおのれを町へ弘めして。すぐに出した譲状身が目を塞がぬ其の内は。年寄行

事も封を切らぬ書置を。傳三が知らう筈がない。譲状を奪ひ取つて親に難題いひかけ。今兄弟に無實をいひ大阪に置かぬ公事巧み。地おのれ一人が智惠でないサア譲状が物を云ふ。三鐵輪で讀んで見よと懐中へむさぼりつく。詞いやこれ親父様でんどで披く譲状。後の證據に封じも解かす持つたれば。此方の手へ渡さうか地權柄になさるゝなと。もぎ放せばこづかを取り引伏せ〳〵踏んづ擲いつ。さんざんに打擲し引起いて譲状。奪取つたる有様はオクリ目もあて〵られぬ次第なり。地テヽ成程身が判封の儘。只今披く是聽けと封を解いてぞ讀みたりける。與北久太郎町心齋橋表口五間半。裏ゆき町並貳拾間家財残らず。娘お龜聟與兵衛夫婦に譲り申し候。外より異亂少しもなし如件 地是見よと。與兵衛が目に差付くるをよく〳〵見れば紛ひもなき。我方への譲状ハア、南無三寶。扨は傳三郎めが賢人面を見せかけて。我を取つて落さん爲裏の裏を喰

けせしを。知らではまりし悔しさよ。たばかられし口惜しやとスヱテ歯がみを。なして泣き居たり。地長兵衛も怒りの涙こりや卑怯者。人な恨みそ皆おのれが誤りぞや。母なき娘か大事に思ふ聟が何とて憎からん。皆根性のひがみから親にも恨み出来るぞ。恨めしの心やと譲状を與兵衛が。面に打付けどうと伏しフシ大聲。あげて泣きければ。地妾はいきつて科もない。傳三郎にいひかぶせしやるなと哮りかゝつて怒りける。娘は我が親我が夫中に立つたる遣瀬なさ。側で泣くやらわめくやらフシ往來も止まるばかりなり。地神子町中が下り合せ人がたかる何事ぞ。はやはや通りやと叱りける。詞アヽ御尤々々御町の妨げ御免あれ。サアおのれ在所へ駕籠で送らせんと。地尩弱な與兵衛を引立て駕籠に押込めば。何の面目在所へは行くまいと。駕籠の左へつゝと拔けた親も續いてつゝとぬけ。又引つ捕へて乘せれば拔ける親子くる〳〵〳〵。出つ入りつどこぞのはづみに長兵衛。駕籠を拔けるを町人どもエヽ面倒なと押込みて。駕籠舁き上ぐれば長兵衛ヤアこりや違うた違うたと。わめけど更に聞き入れず大阪の方へ舁いて行く。お龜は歎きこがれしを下女や手代が手を引いて。なだめ歸れど立歸り留り。見返り呼びかけて。息をばかりに泣きかはす山時鳥皐月雨。涙の雨も古道具屋の聲ばかりして面影は。隱れがさやの憂き名殘り別れ。別れに三重〳〵成りにけり。

中之巻

フシ花聟と。地名にこそたてれ下草や。娘ぞ家の心齋橋。女夫の間は烏鵲や。傘屋お龜は昨夕よりスヱテ寢られね目許おちくぼみフシ思ひ。しみたる身の大事。地中よき下女にも語らねば。誰も斯くとは白無垢を仕立つる縫目大針に。一度と着まいと思ふにもフシ涙。先立つ折柄に。地町内の娘友達二三人。お龜様内にかえ。詞今日は五月の十七日。とこうかゝりの約束三十三番連立ちませう。地サア拵へさんせ出さしやんせとフシ何の氣もなく誘ひける。觀音様と聞くからに未來の縁も嬉しけれど。詞父様も留守なりこれも仕立てて仕舞ひたし。今日は連になりますまい地よう拜んでやと云ひければ。夏白無垢が入る事か詣らしやれと云ふもあり。よしかおかしやんせ今のおじやつて見やつたら。留守明けたとてやかましからう。ほんにお龜様も能い姑を持たんした。こちらばかり廻りませう與兵衛様とこな様と。一つ蓮と拜みませうと。云うて出づるも常なれどフシ思ひあればや身にぞ染む。地斯る所へ與兵衛は今朝迄うか〳〵さまよひありき。心も空に行くともなく我が家の門を徘徊す。お龜はちらと見るよりも是誰もない大事ない。これなうこれと呼ばはれば笠をも取らずつゝと入り。二人ひつたり抱き付きフシ伏しまろびてぞ泣きゐたる。やゝあつて與兵衛。詞ムヽ此の白無垢を仕立つるは。死ぬる合點か嬉しやと云へばヲヽさ

ればとよ。これはかうはして置けども是非に叶はぬ其の時は。地わたしが方から知らせをせう必ずそれ迄短氣な心持たんすな。こな様いかう狼狽へてぢや心を納めて下さんせ。ひよんな心を持つまいぞと力を付くる其の中にも。さすがは年も童氣のいつそ連れ立ち走りたいと。また縋り付き抱き寄せ フシ引寄せ〳〵歎きける有様。ここは不便なれ。下女のふりはさし心得門に立つて西東。心をつけてゐたりしがあれ鼬堀の伯母御様。駕籠が見えると駈入ればこは何とせん伯母様の。目は見えねども内の者が見付けやせんと。見世に立てたる賣佛壇の フシ戸を明けてこそは隠れけれ。地程なく駕籠を舁き入れて。伯母も下るればお龜は是はようこそと オクリ手を引き〳〵奥に入りければ。地供の女は駕籠舁に。錢を渡しも歸りませう。晩方迎ひに參りませうと フシ言うて其の儘歸りけり。地伯母は溜息ほつと吐き。詞爰のはまだ戻らずか。今朝こちへ來て與兵衛が咄をめさつた故。地あるにもあられず氣遣はしく。扨こそ見舞に フシ來たるぞや。詞總じて入家入婿に小言のあるは慣ひなれど。和女や與兵衛が親々は伯母が爲には兄弟なり。詞和御寮達は甥姪なりどちらに贔屓偏頗もない。まんろくを云ふ時には皆與兵衛めが惡いぞや。地胸前垂に草鞋がけ親の辛苦一つにて。仕出いたる此の身上それをまねぶが子の作法。詞何であらうぞ唐物屋衆さへならぬ程に。ぞべ〳〵と着飾つて謠講の俳諧の。若いそなたを女房にもつて内の茶が呑み足らぬか。地茶屋へもちよこ〳〵遣ふと聞く。意見をすればいぶりを出し商賣は袖にして。小路隠れの家出のと聞く度ごとに此の伯母が。スヱテ胸には釘を打つ如く。云ふさへ涙が フシこぼるゝぞや。これなうお龜年はいかねど男を持てば大人役。夫の身持惡ければ女房の名が出るぞや。戻つたりとも寄せ付けず江戸長崎へも追下し。盥を踏ませて人にしや。地とは云ひながら與兵衛めは。氣の弱い生れつき無分別の出ぬやうに。女夫あひをようしやゝ。内に惡魔のあることも憎い者は生けて見よ。これも世上の不祥うぞかしア、あさましや此の伯母が。年はよる目は見えず。連合には離るゝ子は養子なり嫁がかり。明日が日往生申しても骨を拾うて眞實に。泣いてくれるは與兵衛とそなた。子同然にいとほしくよいが上にもようしたく。朝夕の看經にも其方女夫を祈るぞや。お袋が此の世にならば是程苦勞は聞かじもの。恨めしの娑婆世界片時も早う參りたやと。むせ入り〳〵或は憐み或は叱り。甥子を思ふ誠の涙與兵衛もまろび出でゝ物は云はれず手を合せ拜めばお龜は聲をあげ。只伯母様を母様と思うて頼むとばかりにて フシすがり。あひてぞ泣きゐたることわり。すぎて哀なり。地伯母は涙のひまよりも。詞懐中より縮緬一巻取り出し。此の緋縮緬は今は此の手は渡らぬとて。此の前人に貰ひしが。色變りし

か知らねども若いものは嗜みぞ。與兵衛と其方が肌の物に縫うてしや。地男も女子も旅他國どこでどの樣な事あつても。肌の物のよしあしにて。常まで思ひ フシ知らるゝと。地渡せばお龜忝けなしと。夫諸共戴きて跡まで淸くあらはせし。心の色の緋縮緬オクリちゞむ。〽命ぞ果敢なさよ フシ時に亭主。地立歸り見世の道具を見廻す間に。あれ父樣のといひければ與兵衛裏へそろりと拔け。細目に明いたる倉の戶を明けて內にそつと入り。くろゝをはたと落しける。詞長兵衛は不機嫌顏ヤア。伯母お出なされたか。手代どもは一人も居らぬ。何處へうせたと云ひければ。お龜聞きもあへずはて忘れさしやんしたか。一人は河內のおぢ樣へ。一人は尼が崎へ買物にやらしやんした。ヲヽそれを何の忘れはせぬ。地未だ歸らぬか野良どもと表裏を見廻して。詞是は〳〵。男切は一人も居ず倉に錠もおろさぬか。地扨々無沙汰千萬とつぶやき〳〵錠おろし。雁巾着に打入れて伯母御遊んでお歸りなされ。我等は町の年寄へ聟のすりめが談合に。參ると云うて出でけるば フシにが〳〵しくぞ見えにける。地お龜はさま〴〵心亂れ。伯母樣ちつとお息みと フシ奥の間にこそ入りにけれ。無慚やな與兵衛は網代の魚の如くにて。倉の窓より顏出し水にても湯にても。せめて莨喫みたやな煙管火繩は懷中す。お龜來らば火が欲しやと フシ咽喉かはかし待ちけるが。地エヽ思付いたりと倉の案內覺えたり。水晶の根附尋ね出し艾を少し押當てゝ。入日の窓に差向へばげに炎天の極陽の氣。水晶に火移りてオクリ艾へ〽燻り出でけるを フシ火繩に移し。やす〳〵と。煙草に氣をぞ休めける。地お龜は伯母を寢入らせて倉をほと〳〵叩きける。詞與兵衛顏を差出し 地是は何たる不仕合。云ふ事する事間に逢ひ獨り網にかゝりしは。如何なる因果と泣き口說くお龜は思案やしたりけん。斯なる上は一心をする壁を破つて逃出で。二人連にて在所へ行き今兄弟と公事をせん。此の暮紛れに早う〳〵と云ひければ。ヲヽ我もさう思ふ故壁は餘程崩せしが。壁下地の大竹を切る音の響きては。如何あらんと云ふ所へあれ〳〵芝居の替りの太鼓。サア此の間がよからうと脇差拔いて切破る。音も嵐の三右衛門替り〳〵と打つ太鼓に隱れて餘所には 三重〽知れざりけり 地今が弟傳三郞かくとも知らで來りしが。旦那は留守かお龜樣は奥にかと。裏へ通つて後より遠慮もなくしつかと抱く。詞エヽ暑くろし誰ぢやいや。ムヽ傳三郞か。主といひ主ある身に。此の樣な不作法は覺悟なうてはならぬ筈。其の根心が聞きたいと騷がぬ顏でうら問へば。ハテ根心とて別はなし。與兵衛の地君さへ合點なさるれば曉が聟になるぢやげな。但し阿呆がお好かと フシ猶理不盡に抱き付く。地ヲヽ聞えた扨はかの讓狀も。詞其方がだまして取らせたか。如何にも〳〵

町儀が何とも濟まぬ故。手盛にさせて喰はせたる 地 才覺を御覽ぜと。云ひも果てぬにヲヽそれを聞かうと云ふ事よ。詞 あれ間男よと 地 聲立つる口に袂を捻込んで。絞め殺さんとする所を與兵衛壁より這出でて。むんずと組んで引きければ フシ お龜は奥に逃げ入りける。地 己れ不義者身上の敵と。つかみついて組合ひしが傳三郎は剛力者。非力の與兵衛を取つて投げ。足をもためす逃失せしは フシ 殘念なりける次第なり。地 さわがしきは何事と亭主歸る折節に。手代も皆々立歸り裏へ通れば與兵衛は。南無三寶と起上り狼狽へ廻つて切明けし。倉の壁へ這入る所を長兵衛飛びかゝり兩足掴んで引きずり出し。詞 ヤレ與兵衛めこそ倉の家後を切つたれと。地 呼ばはる聲に驚き伯母はお龜に手を引かれ。そも實かとばかりにて スエテ あきれ。果てゝぞゐたりける。地 道具はあるか吟味せよと。雜投出すを手代ども戸を明け内に走り入り。何も道具は違ひなく是ぞ不思議と燻つたる。火繩艾を取出すは フシ 詮方なうぞ見えにける。地 親ははら〳〵涙をこぼし。如何なる天魔が入換つたか。町衆を騙つて讓狀を取出し。大恥かいたる昨日の今日親の倉の家後を切り。此の火繩の火は何にするヤレ罰當りめ。八百屋お七を見居らぬか。聲山立てて町へ聞え下で濟まぬ詮議になれば。如何なる仕置にあふとか思ふそこをせめても不便さに。高い聲も得せぬわい。これでも己れが心には伯父をつらしと恨むらん。本氣ではよもあらじろくな死をせまいかと。却つて是が不便なりと。涙を流し身をふるはし フシ 色を。違へて怒りける。お龜涙を押へこれ與兵衛樣うろたへまい。言譯なされと言へば。詞 イヤ 證據もない言譯見苦しげに何かせん。地 皆我々が不運なり如何樣になるとても。親をも人をも恨みとは思ふまいぞ思やるなと。一聲言うたばかりにて誰がもの言うても返事もせず。歎き沈みし有樣は フシ 目もあてられぬ風情なり。地 日の内は外聞惡し表をしめて追出せと。蔀おろして情なく引出せば伯母お龜。なう今暫しと取付くをもぎ放しもぎ放し。門より外へ押出し潜戸をはたとさしければ。内には妻の叫ぶ聲外に夫の忍び泣き。涙に曇る十七夜月に。別れて三重 出でにけり。ギン 宵より二階に。引籠り。スエテ 待てど暮せど其の人の。音便も。早九つの。フシ 鐘の聲。書置。涙に。文字消えて。フシ 先へ死んだも。ましならめ。スエテ しをれわびたる折節に。地 ひそかに人の足音すそつと二階の障子をあけ。覗けば夫もかき暮れて互に聲も立てばこそ。うなづき合ひたるばかりにて フシ 泣きくづ。をれしぞ。哀れなる。地 用意仕置きしさしがへに。夫の白き帷子緋縮緬に結びさげ。下せば下より受取りて フシ 死ぬる覺悟と心得ける。地 南無三寶西町より新町戻りの駕籠に提灯。走つて近く車長持オクリ 蓋をあけてぞ隱れ入る フシ やゝ遣り過

し。地出でければいつかは釘を放しけん。蟲籠窓をはづし帶結下げ。傳うて下りん其の用意夫は長持曳出し。心を碎く二階には消ゆるばかりに蜘蛛の。絲に懸れる身の命露のたよりの危さよ。憂さよ怖さよわな〳〵と顫ひ傳ふを〽抱きおろし。地二人が顔を見合せて息つぎ胸をしづめしが。此の頃とだえし添寢の床ゆかしなつかし戀しやど。互にひしと抱きしめ齒を喰ひしばり息をつめ。顔と顔とを打合せ フシ身を悶えてぞ歎きける。地町の夜番が時申し又長持の蓋あけて。抱き合ひてぞ忍んだる夜番は物に心をつけ。詞けはしく門を敲き立て。これ起きた〳〵。二階の蟲籠窓を外いて上から帶が下げてある。長持も出してある盗人さうなとわめくにぞ。地家内一度に目を覺し二階へ上れば娘はなし。地お龜樣が見えぬわそりや提灯よ鉤鐘よ。八つ過ぎぢや八軒屋河内よ堺よ川口よと。足許へは氣もつかず フシ手分をしてぞ追駈ける。地夫婦は隙間に長持よりそつと出でてあたりを見、先立ち失せし心中の戀の移りの香をとめて。梅田橋へと心ざし二三町こそ 三重〽走りけれ。

末期の道行

江戸フシ 今捨つる。身にも恐ろし犬の聲。辻を隔てゝ見返れば。あれで生れし町所家の。なじみも フシ十五年。其の春夏の此の月は。祝ひ月とて物忌ひ 長地しの字をさへも嫌ひしが死して死骸を知る人に其の死恥も包ましく。スエテそなたの髪亂れずや。いや我よりもおの樣の。鬢撫附けてかきなでて。死んだ跡までよい殿と。人に云はせま フシほじ明り。今宵の月を。月々に。待ちしもつひに引きかへて オクリ冥途の。使我々を待つらんものとかきくれて。涙曇りの十七夜 フシ二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも。スエテたとへ佛になるとても引。タヽキ 必ず契り米屋町。太夫本町筋の軒深く。ワキ思ひ染みたる。二人中なれば埋まば同じ安土町。ワキ生れ變りて又いつか 太夫娑婆のたよりの備後町。ワキ思へば我も元服し。太夫わしも若いに 二人鐵漿つけてのがれし賽の河原町。太夫三途の瀬戸の淡路町。ワキ越ゆれば親の古里の。太夫名にも別るゝ平野町。二人あけぼの近き時太鼓どう 地道修町 フシこれやこの。修羅の太鼓の。響きかと共に驚く袖と袖。抱き寄せつつ泣くばかり。太夫聞けばわたしも母樣の三十過ぎての初子とや。二人其の讓りかやなれそめて フシ一夜。離れた。事も。なく。かはす枕に子胤のないか オクリ是も。タヽキ產ますの數ならば。根を掘る竹の伏見町。太夫高麗橋の西東。ワキ床も定めぬ立君はこれも世渡る習ひとて、太夫浮世小路の細き聲、太夫唄うて歸る其の歌の。二人品ある中にも來ぬ人をまつほの。浦の夕凪に。太夫やくや藻汐の身をこがす。ワキそれは吾妻の。物語 地耳に聞きたるばかりぞや。そもじと我は難波津の。貴賤群衆の見るめかる尼ヶ崎

町過書町に。はや北渚や中の島 オクリ 明日は。歌天満の橋々賣りて。梅田の梅田の堤をそめし。紅葉傘屋のな女夫の心中。男廿一お亀は十五。年にあはすりや。いたづらいたづらぢやサア繪草紙ゑ。地よその口の端。フシア餘所ごとに。買求めては慰みし此の身の果を讀賣に。長地たが節つけて田舎まで唄ひ流さん蜆川水も濁りて此の世へは。いつ歸りすむ根なし草弓手は。無常の燒草と。惜しからぬ身は惜しからず。太夫灰となさうか此の肌。ワキ煙となるか此の形。太夫惜しや。ワキいとしや。二人悲しやと。引合ひし手を猶締めて フシ涙の限り泣きつくす。フシ杜の小鳥。川千鳥合法鳥も聲さびて。はやしのゝめも近付けば。小田守る賤に忍ばんと。右へ下れば網舟の目にやかゝらん行く先は。はや曾根崎の宮仕の朝淨めする折なれば。今はせんかた夏草の。人目堤の下蔭を スヱテ爰ぞ。夫婦が最期場と。フシ泣く泣く。休らひ立ちにけり。

地お亀は夫の顔を見て連立つ冥途の道とは知れど。今今生の別れとて云ひたい事の何やらが。胸にはあつて口へ出ず。飽くほど顔が見て死にたや心なの短か夜と フシ身を投げかけて泣きゐたり。ア、愚かや愚痴やあさましや。永き來世があるぞかしさりながら。心にかゝるは其方の父御。二人とも無き獨り子を憎や聟めが殺せしと。さこそ恨み憎しみの。是罪障となるぞとて フシ共に。ひれ伏し泣。きければ。いや父様は男氣の思ひ諦め有るべきが。いとしや在所のお袋様 姑なりとて一日の。給仕した事もなく。大事の子をばよめ故に。失うた殺したとお叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母様の力となるはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲しみ眼でも眩ぬかどうしたと。胸に塞がる是二ツ。又母様の十三年觀音經を書きませう。佛になつて下さんせと墓に向うて約束の。是が違うた何やかやかくまで重き罪科の。閻魔の前には黒鐵の帳に付くと聞くものを。能い所へよも往かじ火水の地獄も厭はねども夫妻別れて行かうかと。是のみ猶も迷ひぞと スヱテ聲も惜まず歎きける。さすが男は力をつけ。詞一つに行かうと別れうと皆一心の向けやうぞ。氷の地獄火炎の地獄劍の山へ登るとも。取り交した手は放さじと。心強くは云ひけれどまだ蕾む花出づる月。玉の様なる若い者若い女の顔是なさ。宥めらるゝも宥むるも フシ分けて分かたぬ涙なり。地あれはや東も白うだり サア念佛と云ひければ。心得たりと懐より剃刀二挺取出し。これも母様の額たれとて讓りなり。私はこれで死にたいと泣く〳〵出す其のなかに。向ふの野道を人通ふあれよ〳〵と心は急く。二挺の剃刀一つに取り南無阿彌陀佛と引寄すれば。お亀はつな〳〵信仰の南無觀世音菩薩様。母様の戒名教譽授倫信女。一つ蓮に導き給へ南無觀音様觀音様と、手を合せて待ちけれども男は行くれ差うつふき スヱテ只泣くより外の事

ぞなき。地エヽうきめを見せて何事と夫の手を取り我が咽喉に押し當つれば思ひきり。南無阿彌陀佛と笛のくさり。剃刀の刄も折れよと一ゑぐりはゑぐりしが。若き者の悲しさは止めの急所は知らずして。未だ息絶えず悶ゆるを。甕の口を隱さんと抱への帶をくる〳〵と。二三遍引まはす フシうき目の程ぞ不便なる。我もやがて追付かんと咽喉にあつる剃刀の。刄は鋸と折れ砕け皮肉ばかり切れけるを。力を入れて突きけれども フシ通りつべうはなかりけり。地南無三寶と剃刀捨てそばに拔きおく脇差の。鞘を持つて引き上る鍔は重し手は弱る。はづんではぬる勢ひに脇差ぬけて樋の口の。井出の水草の漲つてざんぶとこそは沈んだれ。エヽしなしたりこは如何にと這ひおるる堤の露。こぼれし血に足すべり フシ池へどうど落ちたりけり。地池は深くて泥深し底の脇差尋ねかね。浮きぬ沈みぬ漂ひしが今を最期の眼にも。夫を思ふお龜が心引揚げんと思ひけん。這ふ〳〵岸に寄ると見えしが。くらむ眼に氣も亂れ。同じく池へどうど落ち互に助け引き上げんと。抱き上ぐればどうと臥し。搔き上ぐればかつぱと伏し心ばかりを力にて。なう與兵衛樣〳〵お龜〳〵と呼びかはす。絶え〴〵切るゝ息の下。此の世からなる地獄かや哀れ果敢なき三重〽有樣なり 地甕の口に水入つて女は生年十五歲。時も皐月の菖蒲咲く フシ沼の泡とぞ消えにける。地夫も死なんと脇差を尋ね漂ふ朝嵐。里人下りあひすは心中と飛入り。〳〵夫婦を取つて引上ぐる女は死して池水も。みな紅に名をとゞむ。男は生きて生きがひのかひもあるかや蜆川あと白。波とぞなりにける。

右之本令吟覽頓句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也
竹本筑後掾 竹本 博數

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟
近松門左衛門 信盛 花押

大阪高麗橋壹丁目
正本屋 山本九兵衛版
山本九右衛門版

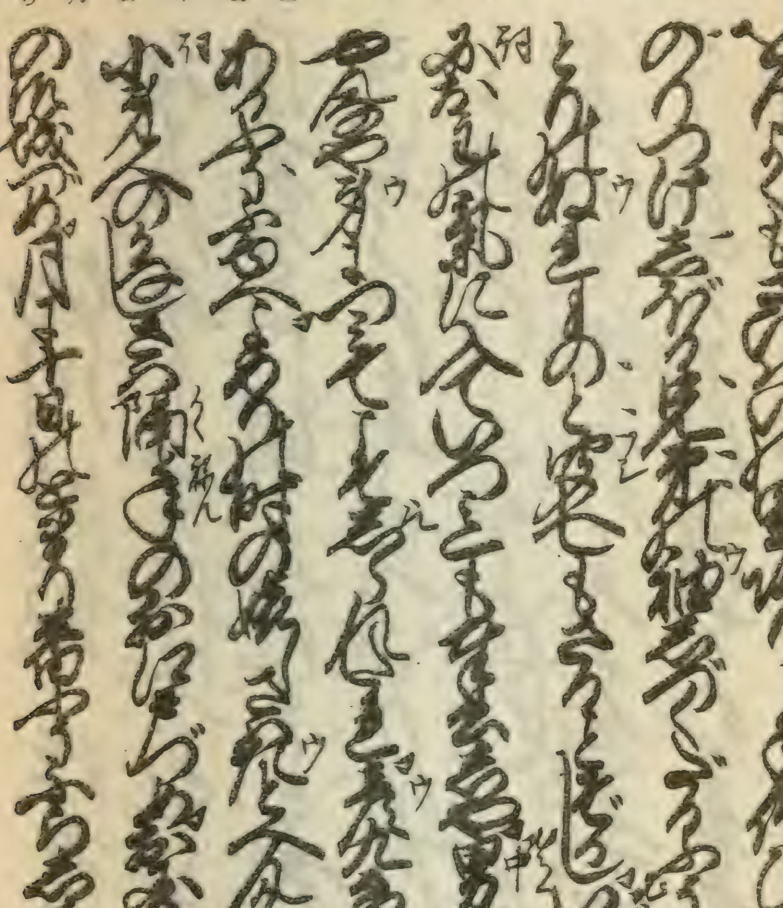
拔渋川堀

堀川波鼓

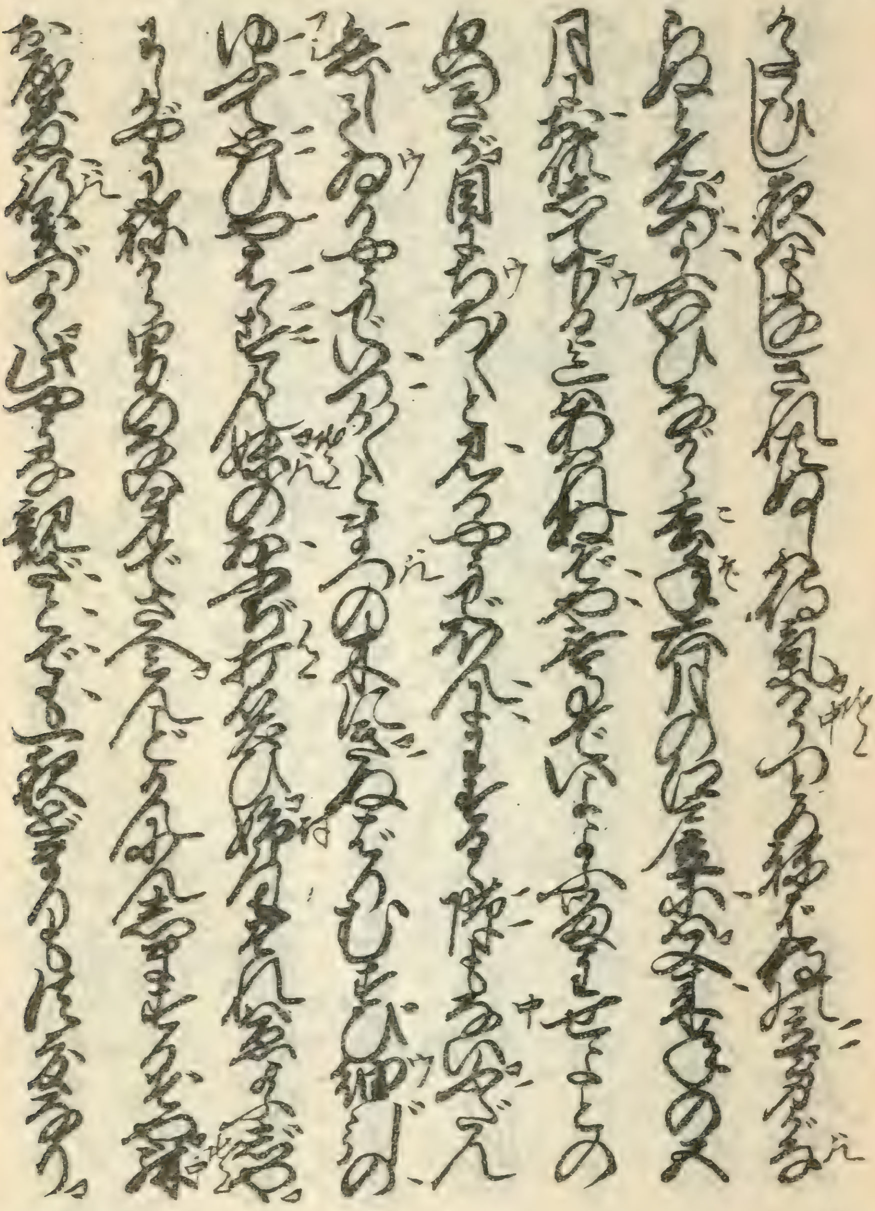
作者　近松門左衛門

ウタヒ 扨も行平三歳が程。御徒然の御舟遊。月に心は須磨の浦夜汐を運ぶ海士少女に。姉妹選ばれ参らせつつ。折にふれたる名なれやとて。松風村雨と召されしより。月にも馴るゝ須磨の海士の。鹽焼衣色かへて。縑の衣の空炷なり。地 夫は鹽焼く海士衣是は夫の江戸詰の。留守の仕事の張物や妹のお藤は

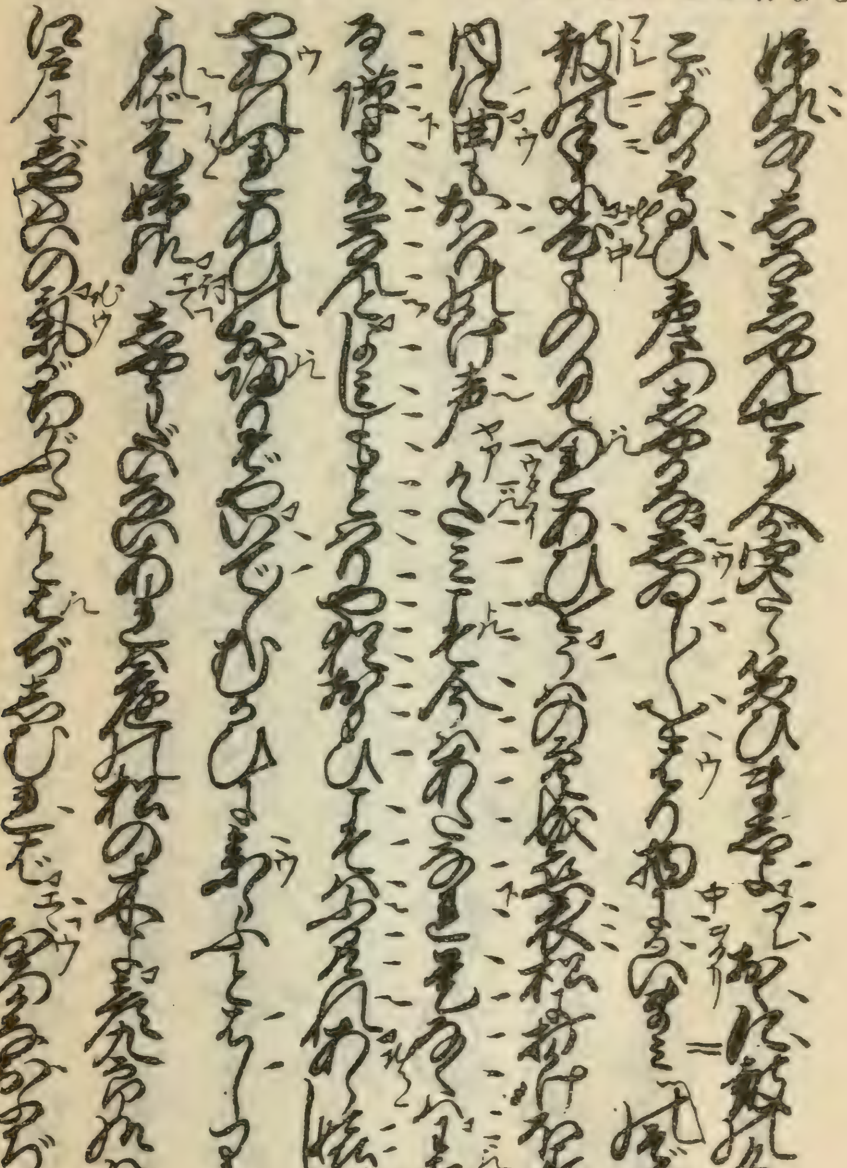
折よくも。幸の里歸りサア手傳ひとゆふ襷。糊つけ絞る姉妹の袖雫だる風俗は。國に名取の濡者とフシ聞えしもさる事ぞかし。地いやなうお藤。詞必ずお主の氣に入つていつ迄ら奉公しや。地男やなんど持ちやんなや身に抓みてこそ知られたれ。彦九郎殿とは樣子ある夫婦故。嫁入の時の嬉しさは譬へん方もなかりしが。詞小身人の悲しさは隔年のお江戸詰。お國に居ては毎日のお城詰。月に十日の宿直番夫婦らしうしつぼりと。いつ



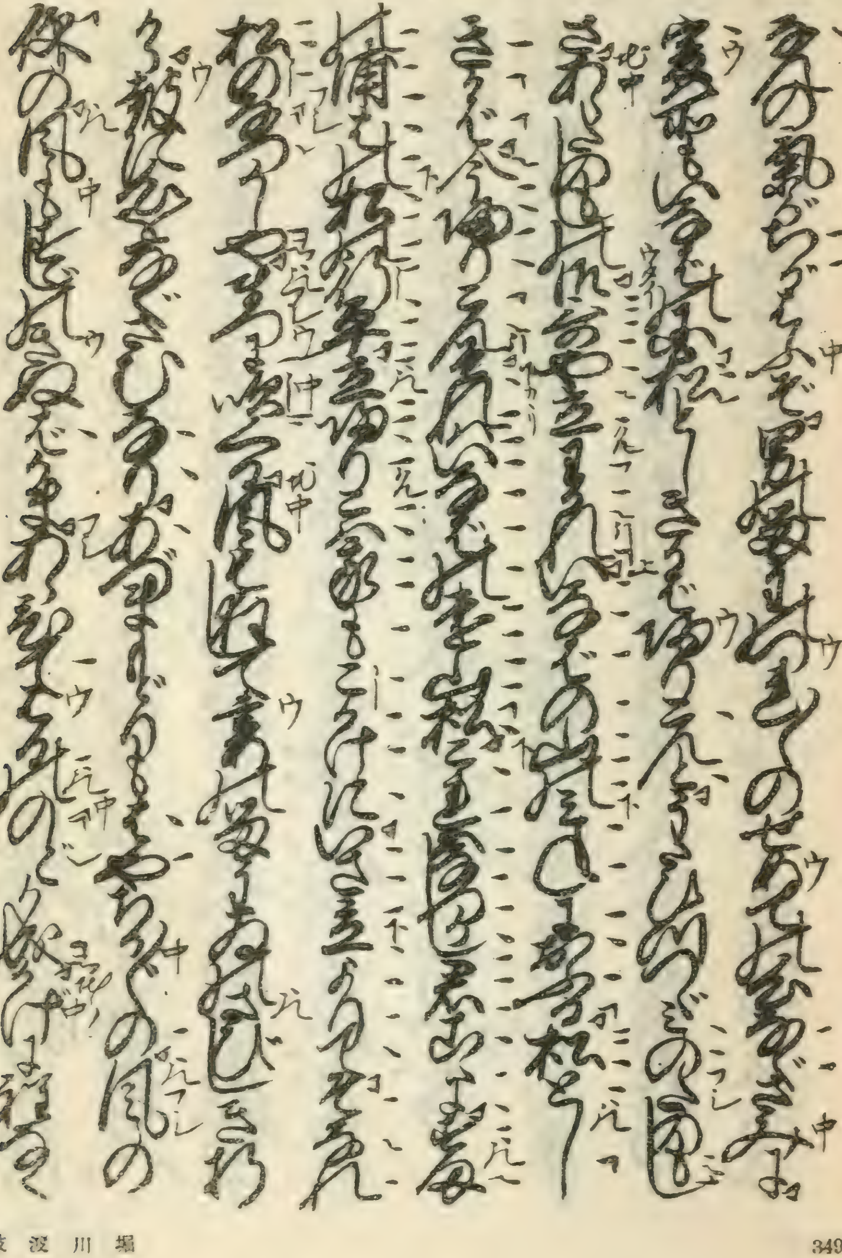
語らひし夜半もなしされども主は侍氣。地斯う勤めねば侍の立身がならぬとて。心強うは言ひながら去年六月の江戸立に。又來年の五月にお供して。下る迄は逢はれぬぞや無事で居よ能う留守せよとの顏付が。目にちろ〳〵と見るやうでほんに忘るゝ隙もない。平常戀して居るやうでいつか〳〵と松の木に。衣張結び細引のフシゆうて思ひや晴らすらん。地妹のお藤打笑ひ。詞姉樣それは榮耀ぢや。妾がやうに根から男の無い身でさへ。見事堪忍しまするぞや。地姉にお屋敷行儀づよく。此のやうな親里でも一夜泊も法度なり。



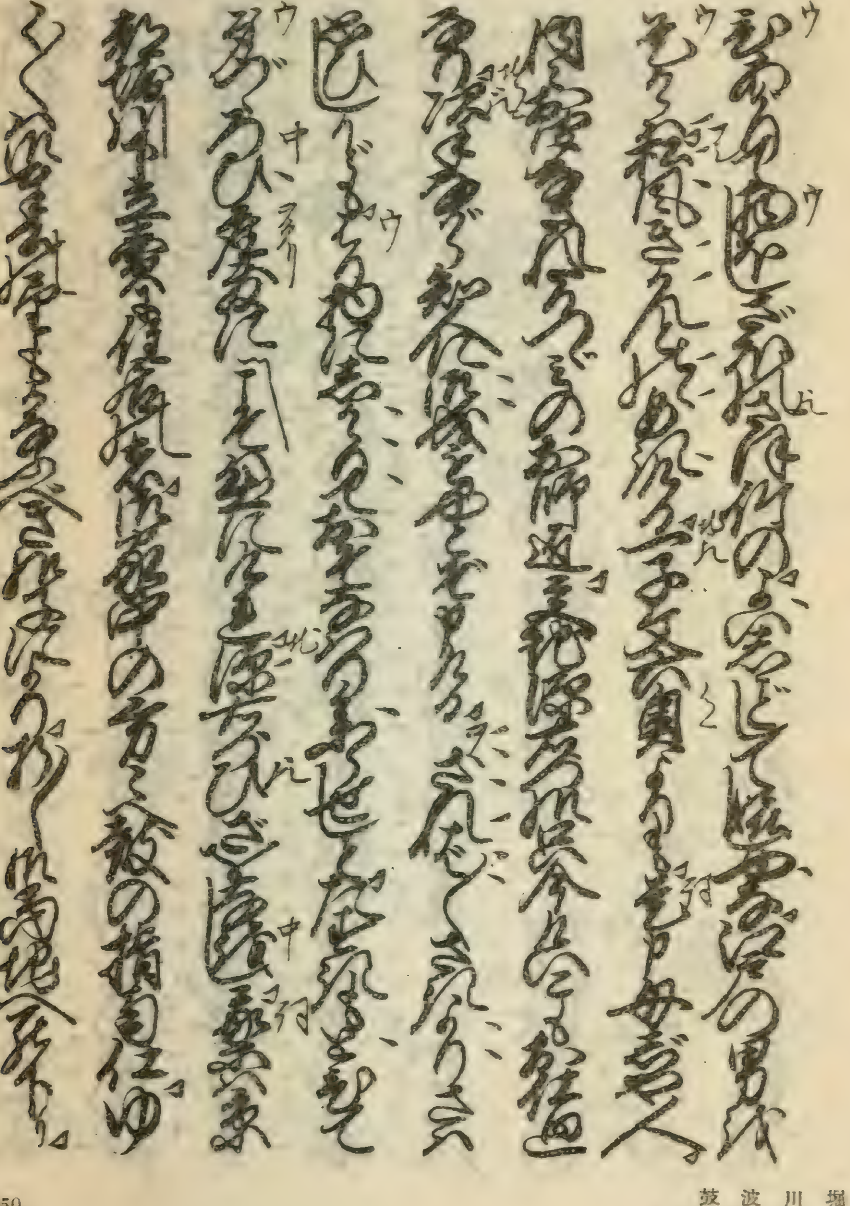
姉様なら死なしやんせう人が聞いたら笑ひましよ。アレ奥に鼓の稽古がある高い聲さつしやるな。しるしくを張物にオクリかいまみへのぞく。フシ鼓の手に。地心も乘りて連合(つれあひ)を。うはの空なる戀衣松に打懸け干す内に。曲も終りのかけ聲ヤアウタヒ形見こそ今は仇なれ是なくは。忘るゝ隙もありなんと。詠みしも理(ことわり)や猶思ひこそは深けれ。地あら嬉しやあれ連合のお歸りぞや。いでく迎ひに參らうと走り寄ればこれ姉様。詞エヽ正體ないあれは庭の松の木よ。彦九郎様は江戸にぢやわいの。地氣が違うたかと恥しむれば。エヽ愚かなお藤



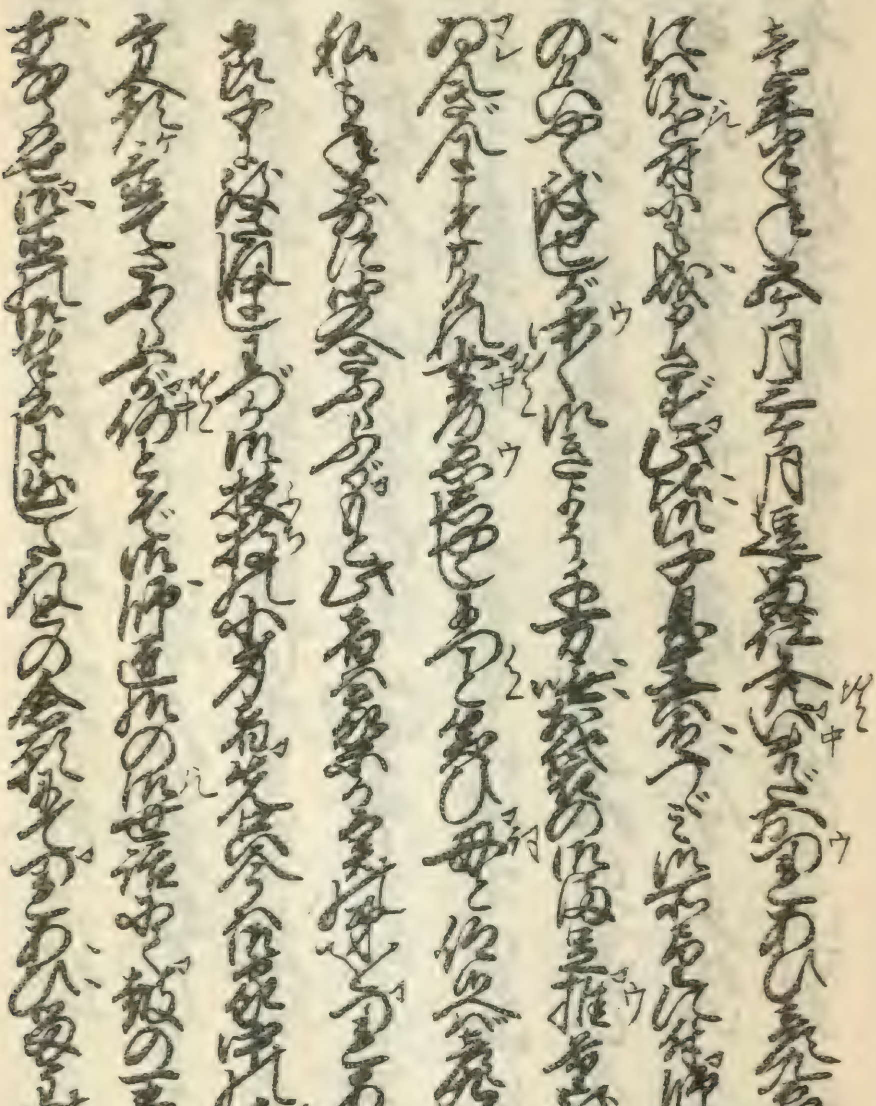
なんの氣が違はうぞ。男の留守の徒然のせめての心慰みよ。爰は所も因幡の國。まつとし聞かば歸り來んと。謠ひつ鼓のフシ賴もしさ。地あら賴もしの。ウタヒ御歌や立別れ。いなばの山の峰に生ふる。松とし聞かば。今歸りこん。それは因幡の遠山松。是は懐し君こゝに。須磨の浦曲の松の行平。立歸りこば我も木蔭に。いざ立寄りて。磯馴松のなつかしや。フシ松に吹き來る、地風も狂じて夫の留守居の淋しき折から。鼓に心を慰むなり。東戻りも早近々の。フシ風の便の。風もすこしの絹袴フシ洗ひて春の長閑なる。地影に程なく



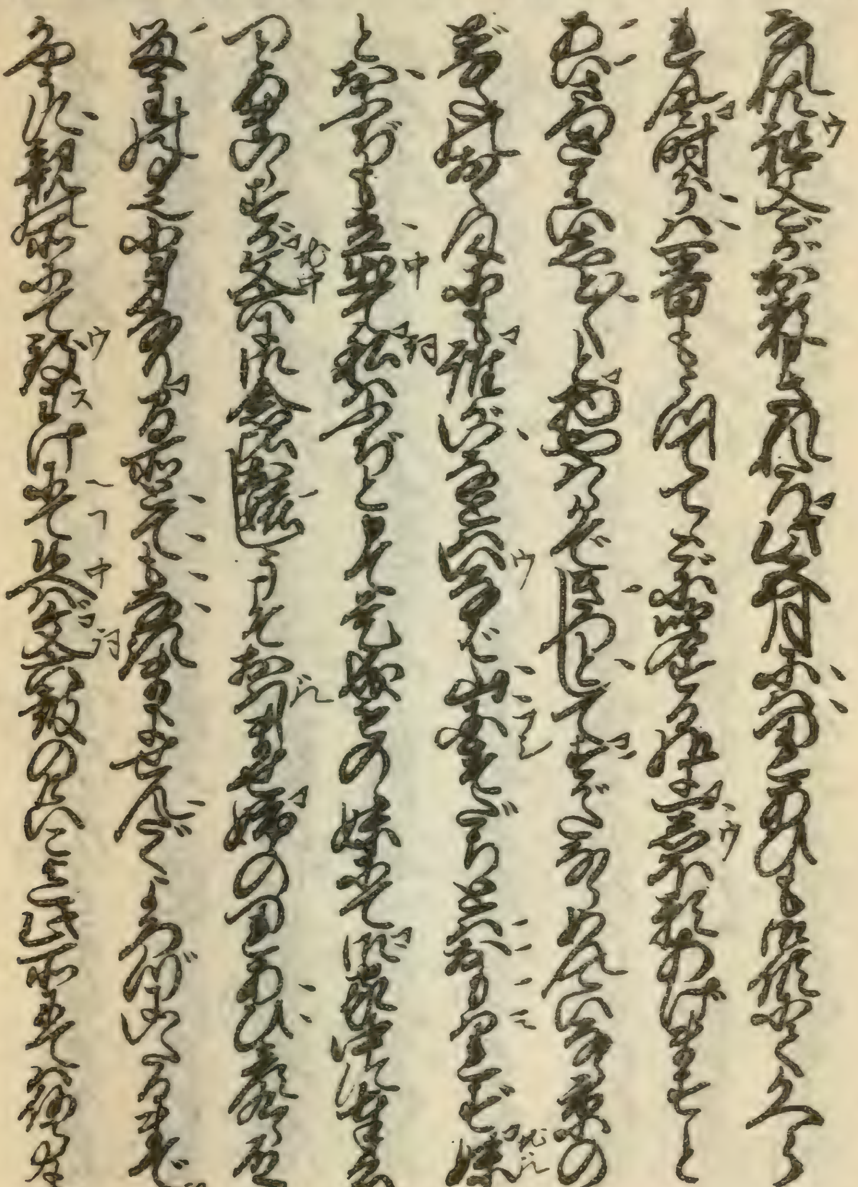
干上りて物乾竿の竿竹の。よい仕事して嬉しやな。江戸の男を是からは。フシ松風聞かんとのゝめきける。地一子文六奥よりも。詞是申し母ぢや人。内々お聞きなされたる鼓のお師匠。宮地源右衛門樣只今稽古もお仕舞なり。地序乍ら知人にお成りもやとぞ申しける。ヲヽされば〳〵先よりさは思ひしかども。張物にしかゝりて遲なはり參らせしと。襷もといて身繕ひオクリ座敷に〳〵こそは出でにけれ。地源右衛門膝を直し。詞我等は京都堀川下立賣に住居の者。御家中の方々へ鼓の指南仕り。行く〳〵は御奉公の望も叶ふべき樣子により。折々御當地へ罷下り。



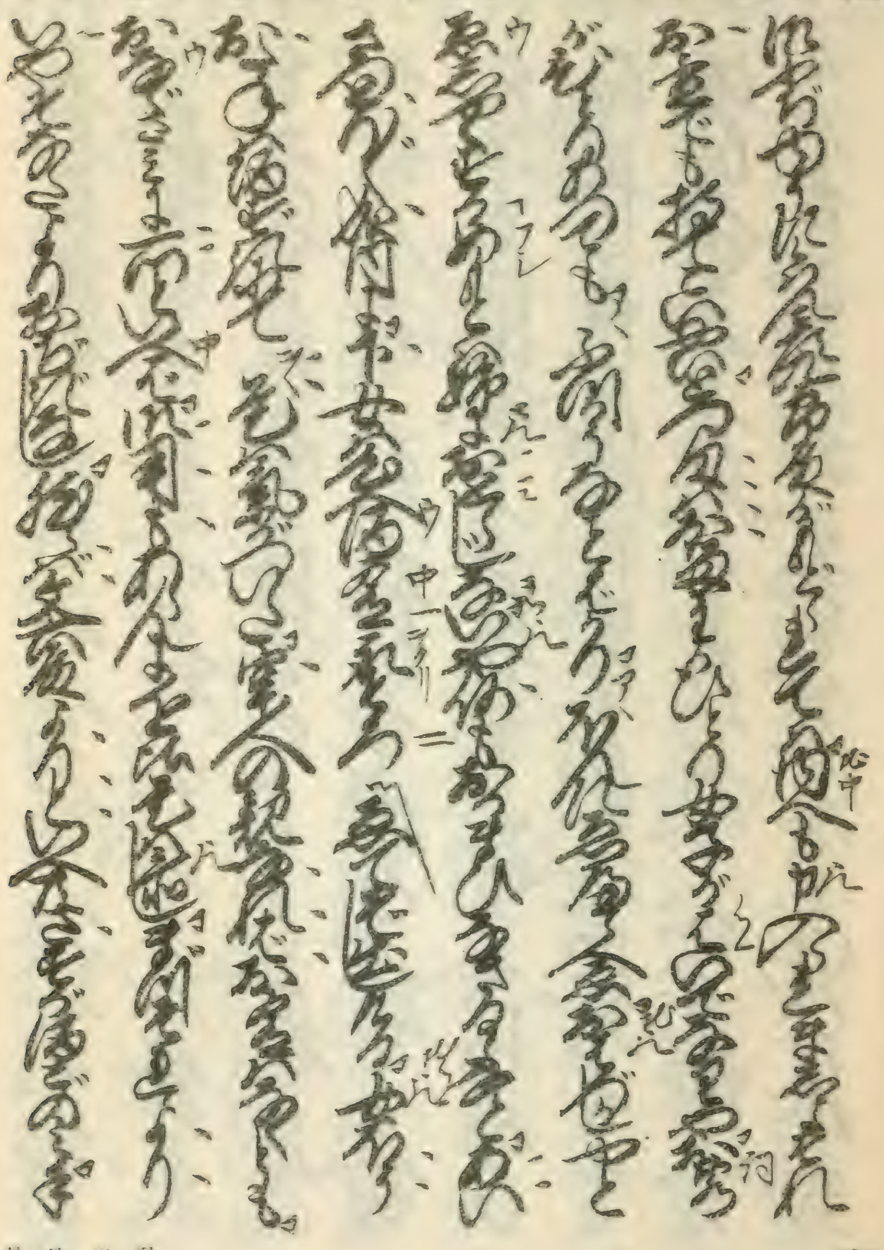
一年半年五ヶ月三ヶ月逗留仕り候へども。未だお連合彦九郎殿には御近付にも成り申さず。此の頃御子息文六殿鼓御所望につき。師弟の契約致せしが中々御器用千萬さぞお役の御満足。推量致し候とフッシ慇懃にこそ申しけれ。女房會釋し莞爾と笑ひ。御母と仰せ候へば彦九郎も私も年寄に聞え候が。もと此の者は我等が實の弟を。連合養子に致されまし僅か御扶持の小身者。先づ只今は御家中の。さる方へ預け置きて候が。何とぞ御師匠様の御世話にて。鼓の一番も打習はせ。御直の御奉公に出し度きとの念願にて。連合留守の内



なれども祖父御がお頼み申されたり。此の五月には連合も御供にて歸られん。其の時分は一番も打つて父御に聞かすら様に。一入頼み上げますと挨拶差配しとくと。物柔かできつとして。姿なら面體なら京の誰方の奥様にも。誰が否とは因幡山　國育ちとは思はれず。堀妹お藤も立出でて。鼓私は藤と申して是なる者の妹にて。御家中に奉公勤め參らすが。堀文六に御懇お嬉しうこそおはしませ。姉の連合彦九郎殿留守の事なり小身なり。間所とても無きまゝに洗濯よろづに至る迄。斯様に親の所にて致す譯にて候へば。鼓文六鼓の稽古迄此の所にては何事も。



御不自由に様はん彦九郎殿が戻られては。、地内へも申し入れられましよそれお盃でも持て来いやい。父様(とゝさま)はお留守か一人(ひとり)女子が這出(はひで)なりや。詞お客が一人あつてもア、不都合な事ばかりア、ほんにゑへゝゑ。地お恥かしやと會釋する フシ 目許は姉に劣らじな。いや何もお構ひなさるゝなと。挨拶とりぐ/\なる内に。下女は心得酒肴(さかな)取揃へてぞ出しける。地女房お種は酒好にてヲ、是は氣が付いた。浪人の親なればお肴は無くとも。お慰みに一つと言へば。御用もあらんに近頃是は忝し。先づそれよりいや其方よりお前儀なし、然らば文六殿よりと言へども流石酒好み。手

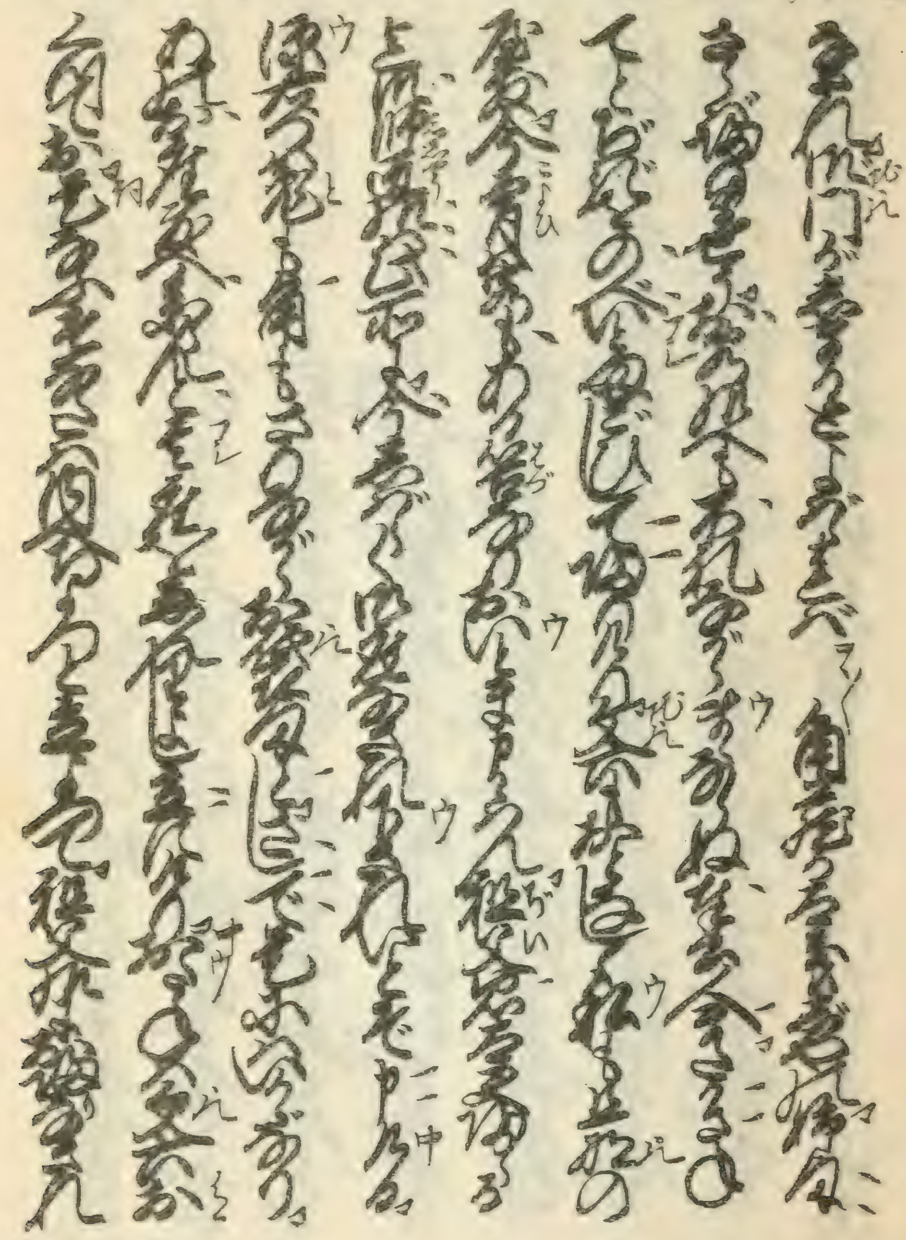


まづ進る盃の母がひに私から。こお燗を見てと引受けてさらりとほし。地文六にぞ差しにける我等は曾てたべぬとて。ちよつと飲んでお師匠へ慮外ながらと禮をなす。源右衛門戴きて素より上戸の家のもの。詞舌鼓たんたんと打ちハッく〳〵。天晴御酒かな〳〵へ拙者も深うは下されぬが些御酒を好む故。方々吟味致せども。是にはなか〳〵京酒も及びなし。地色よし香よし風味よし御亭主様の御心遣。御懐しう候と酒挨拶の容ぶりの。よきさへ過ぎては仇となるッシ先の見えざるうたてさよ。直に是を文六殿へ返盃申すと言ひければ。詞爰は

母が抑へまし間を致して上げませんと。又引受けてついとほし酒がお氣に入つたらば。一つ上つて下さんせと置かせもあへず盃取り。何が扱下されんどたんぶと請けて一息のみ文六にぞ戻しける。今度もちよつと口付けて傍りながら叔母様へ。上げませうと差す所をはて扱如何に飲まぬとて餘りすげない一つ飲みや。母が間をしませうとたぶ〳〵受けてつつと干し。母の身で我が子のあひ目出度い上の目出たさに。江戸の父御の名代に父は一つ重ねませう。サアおほおひを額みますとフシ又源右衛門にぞ差しにける。扱は御内儀にはちと御用

ひと見受けたり。嬉々しき事ながらお手許見んと突戻す。妹は笑止がりいや／＼深うはたべられず。殊に此の頃あてられて氣色も勝れぬ折柄なれば。姉樣もう置かしやんせと側からたつて止むるが。張合になる上戸の癖エイ何いやる。お肴もない酒なれば飲んで上げるが。御馳走と。得手勝手より代へ銚子。客は手鼓一曲の。是では一つと差しめぐる。盃取つては天晴な。ウタヒ兵の交り。賴みある中のフシ酒宴かな。盃數遍傾ける日も晩景に及びしかば。妹の主人の屋敷より中間來つて。これ申しお藤女郎。迎ひに來ましたお歸り

なされ。地御門が閉まると呼ばはれば。ヲ、〳〵角蔵か太儀ぢやの。姉様さらば帰りませう。お客様へも不禮ながらまゝならぬ奉公人。又重ねてと辭儀を述べフシ暇乞して帰りけり。地文六もおとなしく私も旦那の屋敷。今宵は客もある筈なりお暇申し候はん。祖父忠太夫帰らる迄御師匠様は此の所に。今暫く御座なされ下されいとぞ申じける。源右衛門は兎も角もさり作らお袋様と。さしで是には如何なり。あのお座敷へ參らんとフシ其の座を遠慮し立たにけり。お種は文六送つて出で。詞是なう其方は内へちよつと立寄つて。祖父様にお帰りなされ



と申してたも。地我も亦戻り度いりんを迎ひにおこしてたも。心得ましたと打ち應へオクリ主人の〳〵屋敷へ歸りけるフシ門さし時の。町外れ。女主の年若さ。夫は長の東の留守。心確かに持つ爲と。一つ過する酒好み。スエテ亂れぬ顔もほか付きし。重たき頭撫褲やオクリ向ふ。鏡に餘情あり。フシ殿待ち顔の夕かな。地同じ家中の相役人。磯邊床右衛門は病氣とて。江戸供免され在國せしが。下人も連れず潜戸あけ。御見舞申すとつつと入るお種はつと鏡をのけ。詞忠太夫は今朝程より。出られ留守にて地候と言ひ捨てて入る

所を抱きとめてこれ申し。詞お留守を存じて参るからは御親父に用はなし。地そもじ樣の爲こがれ舟人目の岩に波せきて。碎くる磯邊床右衞門今年お江戸を勤むれば。御加増あるは知れた事武士の立身振薬して。虚病を構へ願ひをあげ。御國に止まるも皆君ゆゑと思召せ。病氣も嘘で嘘ならず戀が病のお種樣。假の情のお藥をちよつと一服頼みます。拜みますとぞ抱きしむる女房ちと酒には醉ふ。エヽいやらしや面倒やと振放して退きけれども。身の毛も立つて恐ろしくわな／＼慄うて居たりしが。詞こりや侍畜生め。彦九郎とは惡なり。人間の道に背くといひ

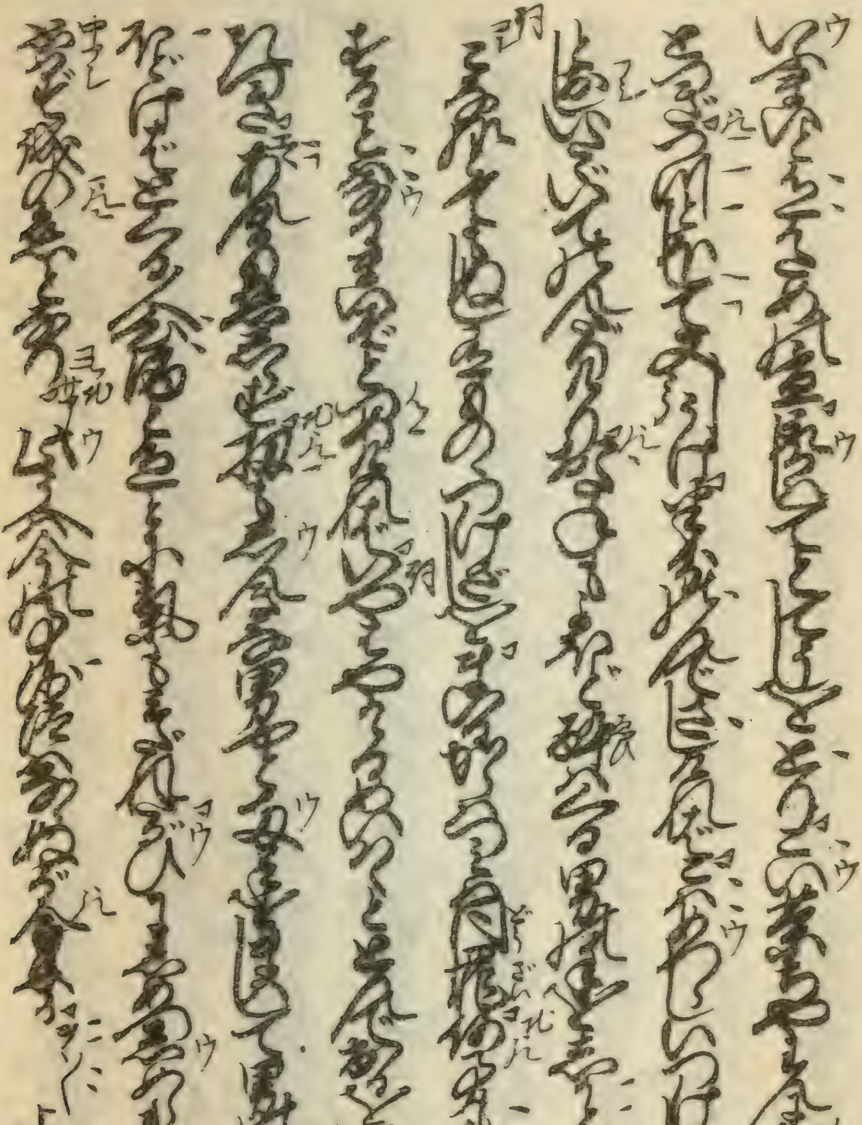
御家中の後指。殿様のお耳に立てば身體の瑕瑾となるが知らぬかや。地小倉彦九郎が女房ぞ侍の妻なるぞ。推参な事をして必ず我を恨みやるな。沙汰はせまいサア歸りやと苦々しくも言ひければ。詞いやいや〳〵人の誹も身の恥辱も。思うて了うて上の事。地よし御承引なきからは此方と妾で刺違へ。上方に流行る心中と國中に沙汰をさせ。共に恥を曝さんと覺悟を極め來りしと。刀を抜いて胸ぐら取りどうぞどうぞと蔵しける。女心の誠と思ひ夫死といひ無き名を取るも口惜し。たらさばやと分別して。詞ムヽ是は眞實か。テヽ殿様の御勘當受け。夫に首討たるゝ法もあれ偽りはな

いといふ。地 扨も嬉しき御心底何しに無下に致すべき。されども爰は親の家今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へそつと忍んで下されなば。打解け思ひを晴さう、とフシしとふ打つてぞたらしける。地 無智無學の源右衛門。一言に騙されほろりとなり。忝い御情此の上はあこぎながらとてもの事に今爰で。ちよつと〳〵と縋りしを聞分けなやと逃げ廻る。襖の彼方に源右衛門鼓を打つて聲をあげ。ウタヒ 邪淫の悪鬼に身を責めて〳〵。剣の山の上に戀しき人は見えたり。嬉しやとて攀登れば。剣は身をとほす磐石は骨を碎くフシこはそも如何に恐ろしや。地 なう恐ろしや〳〵人が

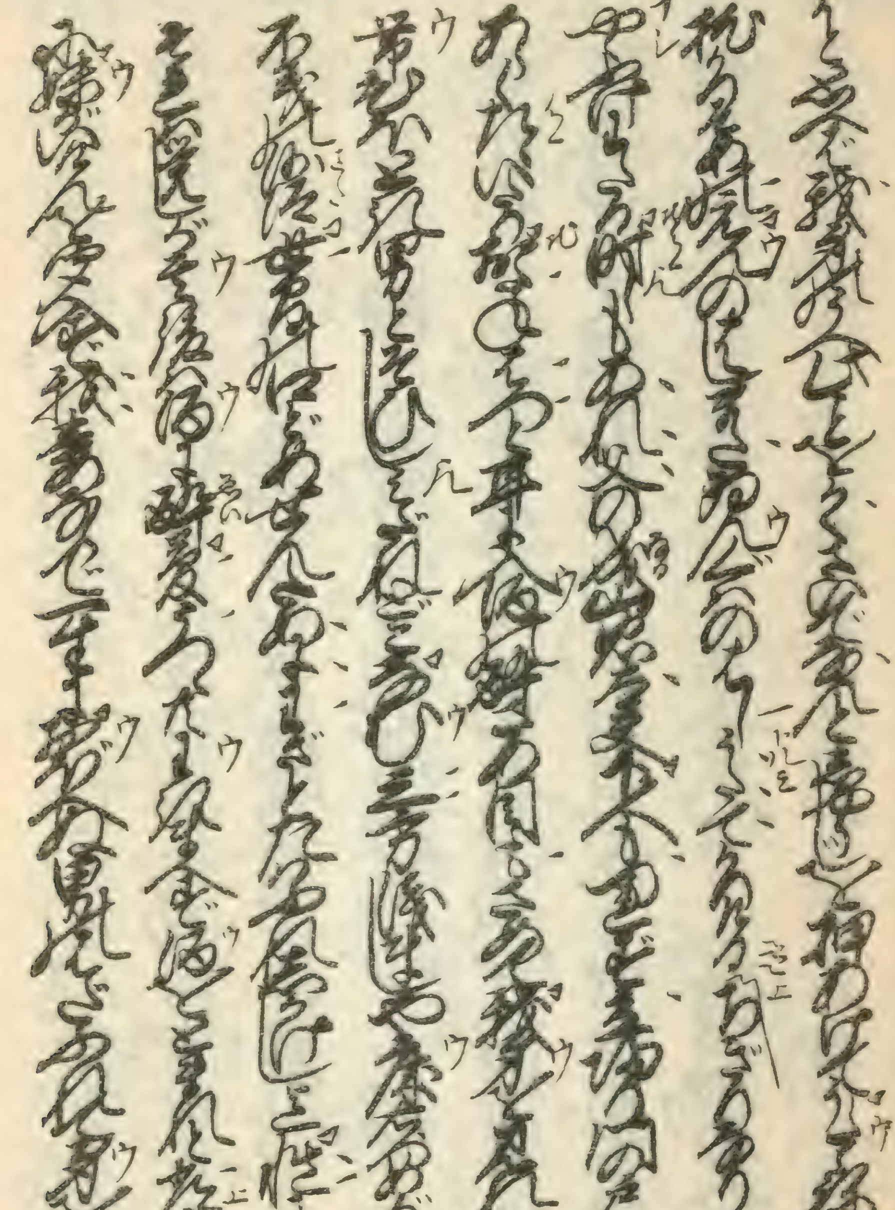
来たそりや〳〵と。詞されて源右衛門今のは何も皆じやれぢや。詞ぢや〳〵と言ひ捨てて フシ走つて表へ逃げてけり。地無常やお種は氣もすわらず。 恥かしや京の客今の概略聞き給ひ。騙して言ふとはそも知らずスヱテ心の慶ぶばかりかは。 地家中一ぱいする人の世間の沙汰な如何せん。胸いたくつき塩へ兼ねて。下女呼び起し酒の燗表も閉めてもう寝よと。詞独り酒酌み憂さ辛さ忘るる内も忘れぬは。江戸の夫の事ばかり フシ涙に。いとゞ寝夜の。地月さす様に人音す。詞ヤア是は源右衛門様。お前はどれへお越しといへば。 イヤ女中ばかりは遠慮に存じ。 地罷り帰ると立出づる袖を控へて。扨はお前は

今の事お耳に入つたるかや。勿體なや恐ろしや彦九郎といふ男を持ち。眞實にいふべきやうはなし當座の難を遁れんため。騙して申した分の事御沙汰なされて下されな。偏に頼み參らすと手を合せて泣きければ。源右衞門も詮方なく。いや聞いたでもなく聞かぬでもなく。餘り側から聞き惡く謡をうたひ紛したり。申しても安大事拙者は他言致すまいが。錐は袋と外よりの。取沙汰は存ぜぬと振切り出づるを縋りとめ。さりとは憎い御詞御身様も若い殿。我も若い女の身實のかうした事聞いても。騙し騙すは世の情此の分で往なせては。私心落付かず

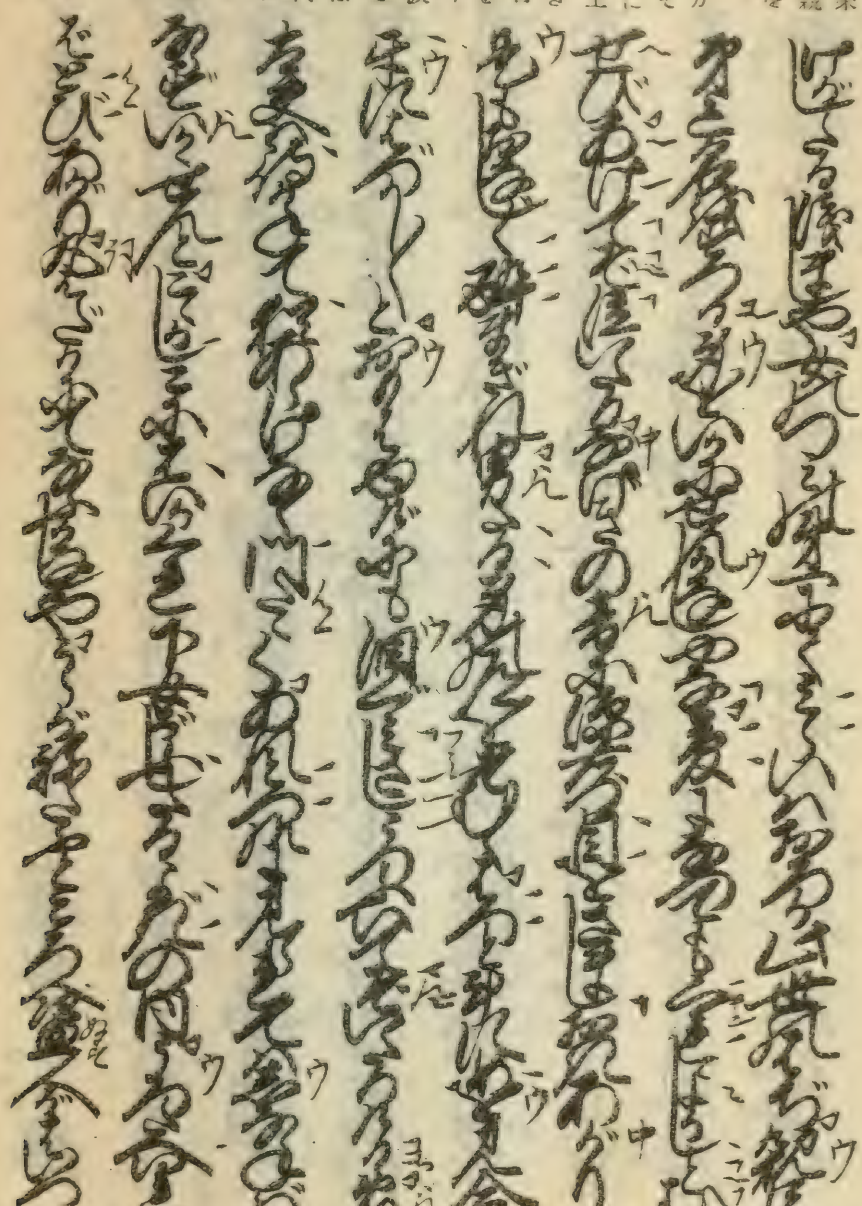
言ふまいとある堅めの盃。取交して銚子を取り。濃茶茶碗にちやうとつぎ。つゝとほして又引受け。半分飲んで差しければ。こは珍しいつけざしと押戴いて飲んだりけり。お種も餘程酔は来る男の手を確と執り。詞これこな様とても主ある者のつけざしを。参るからは罪は同罪。地何事も沙汰する事はなるまいぞと詰めければ。詞いやはやかゝる迷惑と飛んで出づるを抱き付き。エヽ餘り懸知らず。地扨も辛氣な男やと両手を廻して男の帯。ほどけば解くる人心酒と色とに氣も亂れ。互に締めつ締められつフシ思はず誠の戀となり。地サア此の上は今の事沙汰はならぬが合點か。ヲヽ〳〵餘所



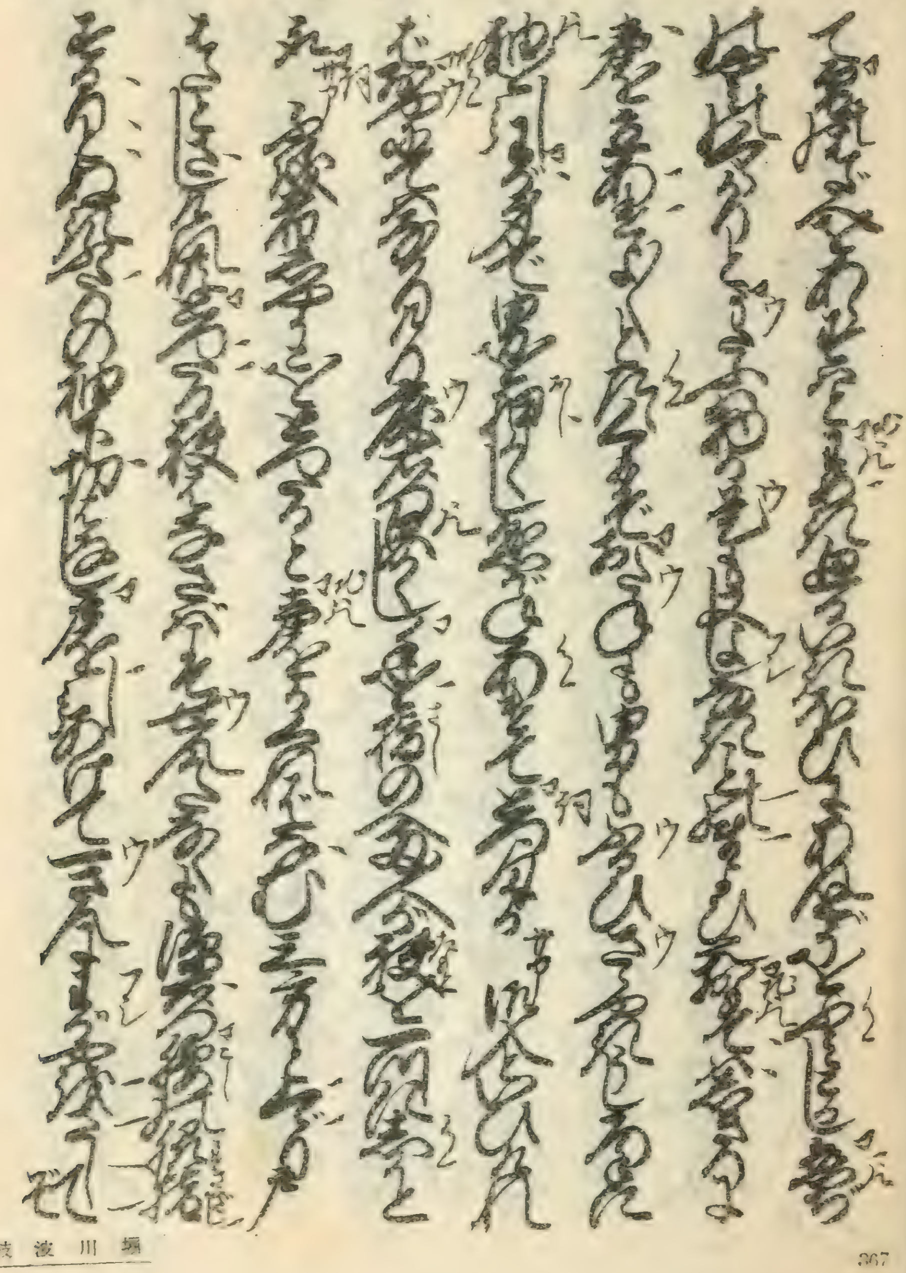
かと思へば我が身の上此の事を隠さいで何と障子を押開けて。轉寝枕假初の。緣のはし又因果のはしうたてかりける〳〵契りなり。フシ稍更け渡る。地時しもあれ父の成山忠太夫。下人も連れず立歸り門の戸荒く敲いたり。お種はつと耳に入り酒の醉醒め目も覺めて。我が身を見れば帶紐解き男と添ひし亂れ床。南無三寶あさましや床右衞門めが不義の沙汰。世間の口留せん爲にわざと戯れしかけし迄。慥にそれは覺えしが其の後は酒に醉ひ。夢現とも辨へず酒を止れと常々に。妹が意見を聞入れず我が夫ならじ一生に。覺えぬ男の肌觸れて身を



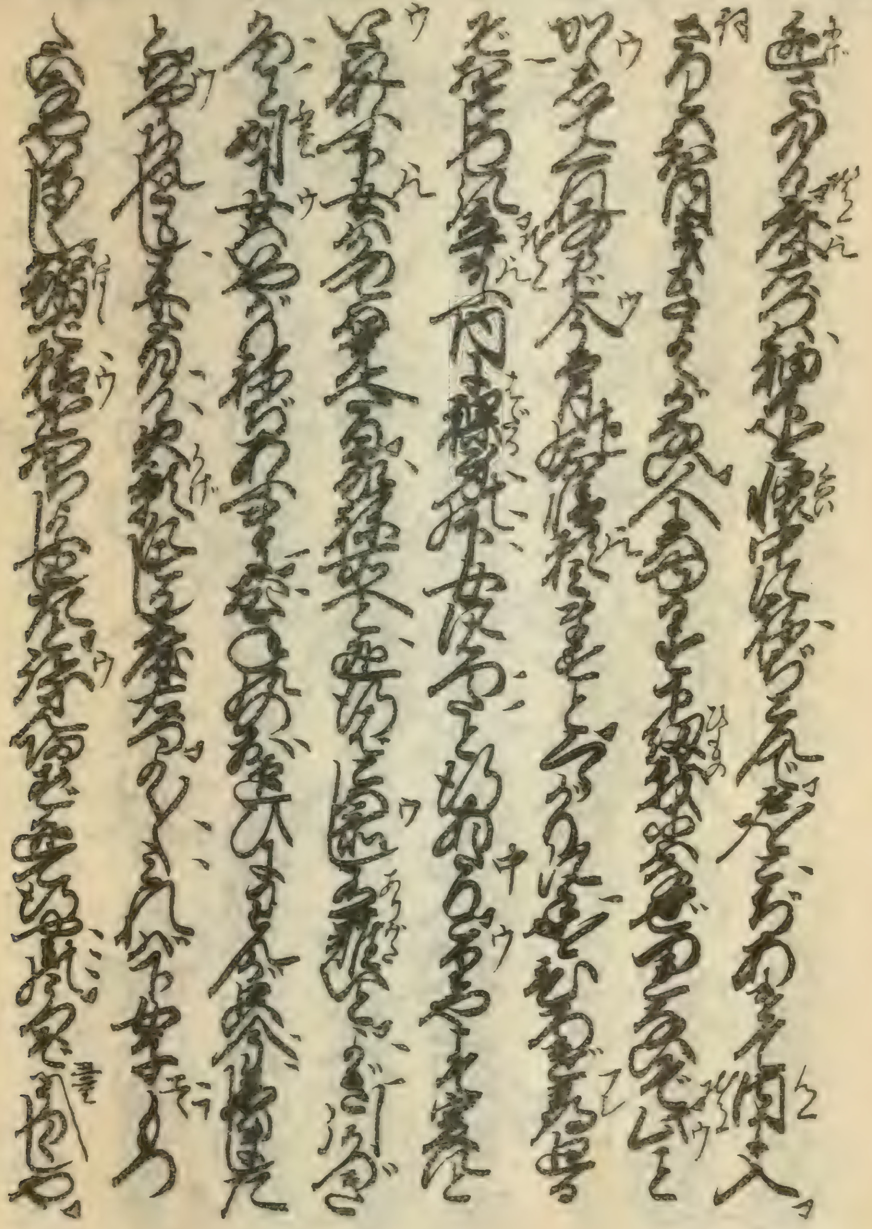
穢したかあさましや。女の罪の第一にて未来は愚か此の世の恥、親兄弟迄名を捨つる身を如何にせん悲しやな。夢になつてもくれよかしとフシ咽び。あげてぞ泣き居たる。歎きの音に源右衛門目を覚し起上り。是も同じく酔まぎれ。男たる身の道を背く。はつとばかりに目を見合せ互に恥かしく／＼と。おもはゆげにも涙ぐみ フシ差俯向いてぞ居たりける。忠太夫は待兼ねて猶荒けなく門敲く。あれ父様に見られては死なねばならず如何せんと。此處後處に這ひ隠れ下女が臥したる夜着の内。狼狽へ入れば飛上り。詞丸裸にてなう恐しや。俺が寝た懐へ盗人が這入つ



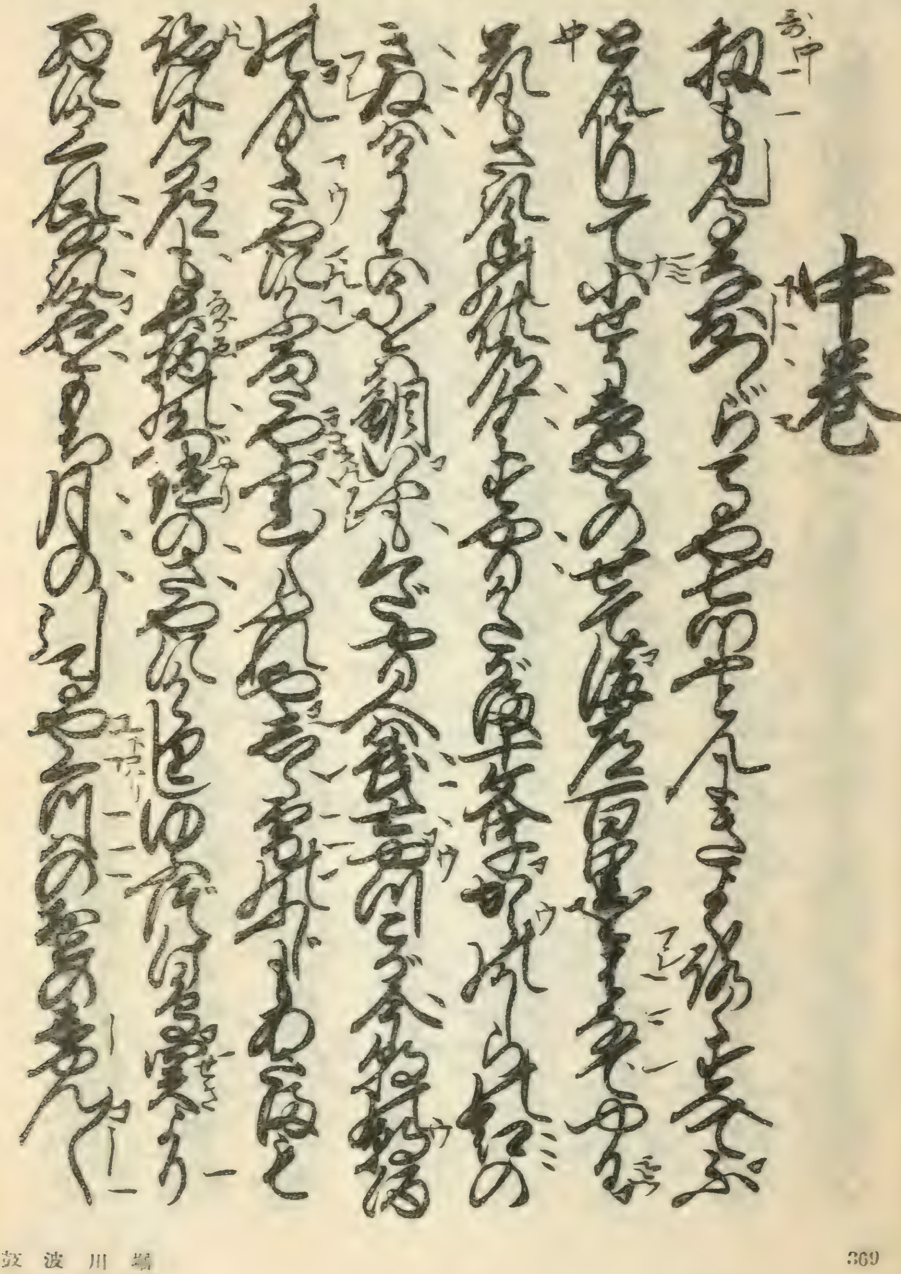
て雪の肌を荒すわと。地嗅ぎ廻る勢に行燈を踏みこかし。戀路の闇のくらがりと。唄ふは物か是も亦マシよしなき事の迷ひなり。地妻は頼りに聲を立て開けよ〱と敲くにぞ。おろ種も男も慄ひ騒ぎ後手に袖を引き。我が身で男を押隠し鎖あけて。詞父様かサア御入りと言ひければ。地詞にてはなかりけり床右衛門顔かくし。手を差伸べ兩人が袂を一つにしかと取り。詞サア不義者詮議を取つたると。地聲をかくれば南無三寶と潜戸はたとさしけれども。取つたる袂放さばこそ詮方なく〱源右衛門。腰の脇指するりと抜き二人の袂切放し。戸を引開けて一散にフシ我が家を指してぞ



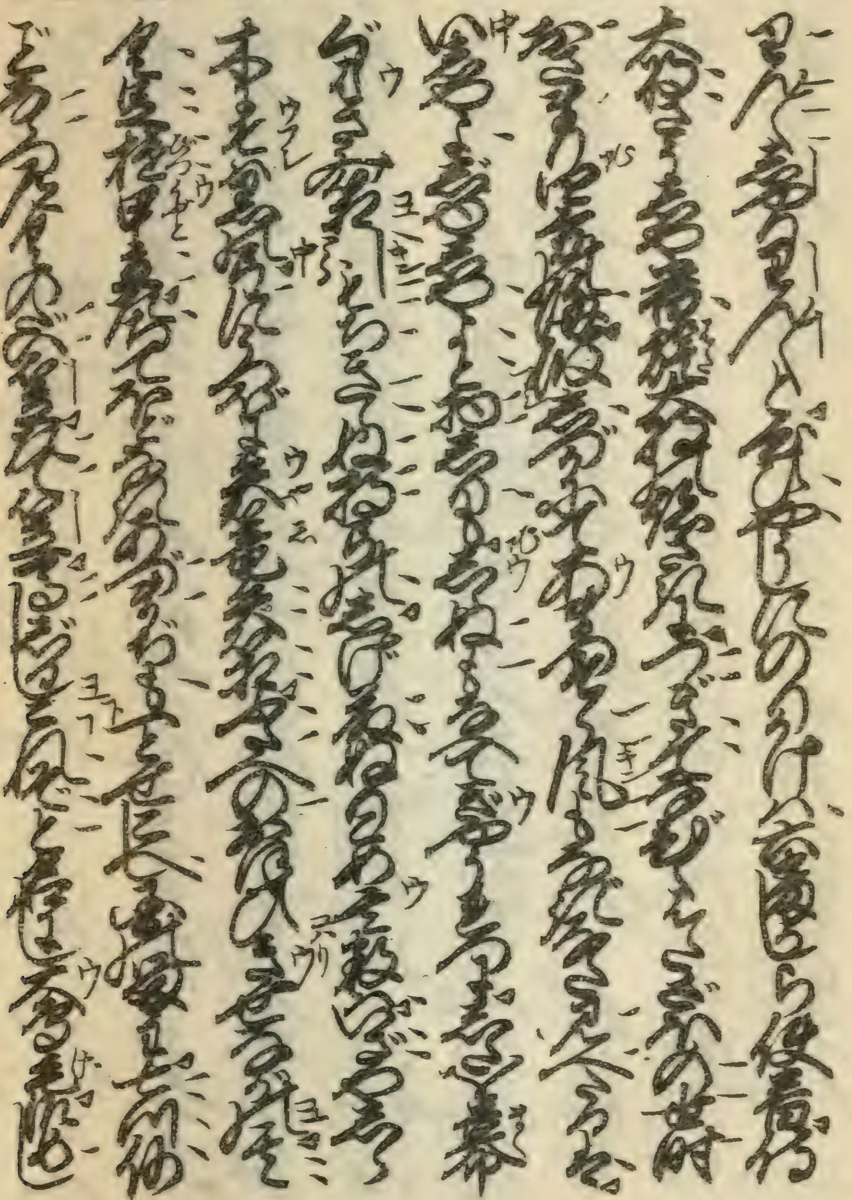
去りける。地床右衛門は袖下を懐中に捻込んで、戸をこじあけて内に入り。詞さりとはお内儀曲が無い。人には死す下紐の我にはなぜつれないぞ。地此の事隠してくれならば今宵のお情頼みますと。闇がりに手を摘けフシ尋ね廻るぞ恐ろしき。地立まふ内に裸身の下女にはつたと行當り。こりやこそ爰にと抱きあふ下女は勝手は覺えたり。我が寢所へと逃げ行けばここは忝し有難いと。夜着引被きかつぱと臥す下女はいやがり捻合ふ間に。お種様のお迎ひにりんが只今參りましたと。提燈ともし來りける火影にすかし床右衛門。よくよく見ればこ下女子エ、勿體なやいましし。詞で精進落ちようとしたと。跡見返らず逃げて行く闇の。現ご三重ぬうつくしや。



歌 扨も見事なおつゞら馬や。七つ蒲團に曲彔(きよくろく)すゑて。蒲團ばりしてナ小姓衆を乘せて。海道百里を フシ はなでやる。花もさき手の供道具素槍片鎌十文字、から頭(かしら)の紅(くれなゐ)のきぬは紅梅魚は鯛。いふも管(くだ)相人は武士。奴(やつこ)が今朝の朝酒の。フシ 天目鞘(てんもくざや)に禿鞘(コース)、振れ〳〵振れや。白雪の富士も淺間も跡に見ろ。道も長柄の數槍(かずやり)のさやにかゝりし木綿(ゆふ)づけ鳥。關より西に隱れなき。名を望月の引馬や 六り響の音のしやん。〳〵

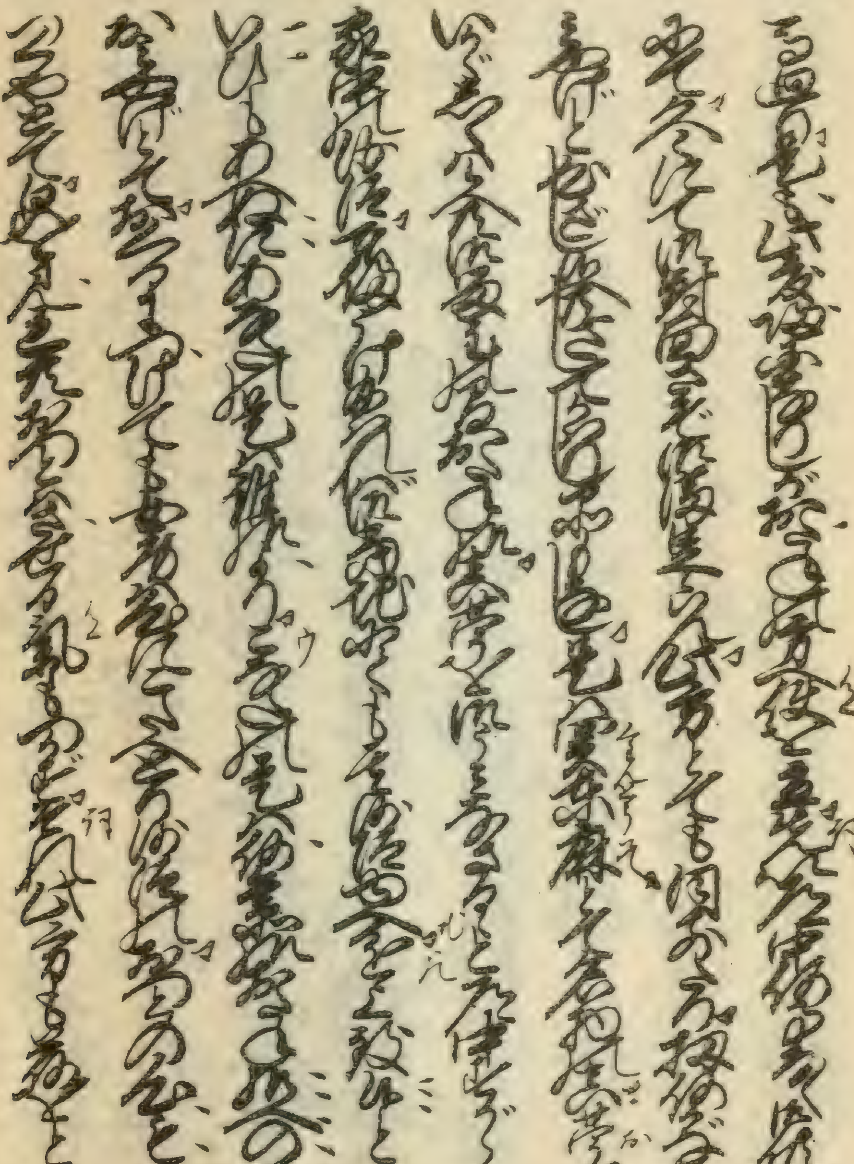


りん〳〵しやりりん〳〵と。心拍子に乗掛は六番頭使番。侍大將樂者番旗大將の跡先に。續きて靜々。旗竿の世時治まり 地四方の海。波靜かにて天つ空風も薙刀見えたるは。醫者よ儒者よ・と フシ物識も。地知らぬもなべて行列に。舌をまく串挾箱引きもちぎらぬ持弓の。滋藤塗こめ其の數は。いさや白木に フシ側黒の。弓に靱に矢籠矢箱。二重の覆着長の。其の具足櫃甲立。たちて程なき東路も一歳越えし國の留守。七つ何事七つ道具の臺笠。立傘。馬印これぞと名にし大鳥毛。御召

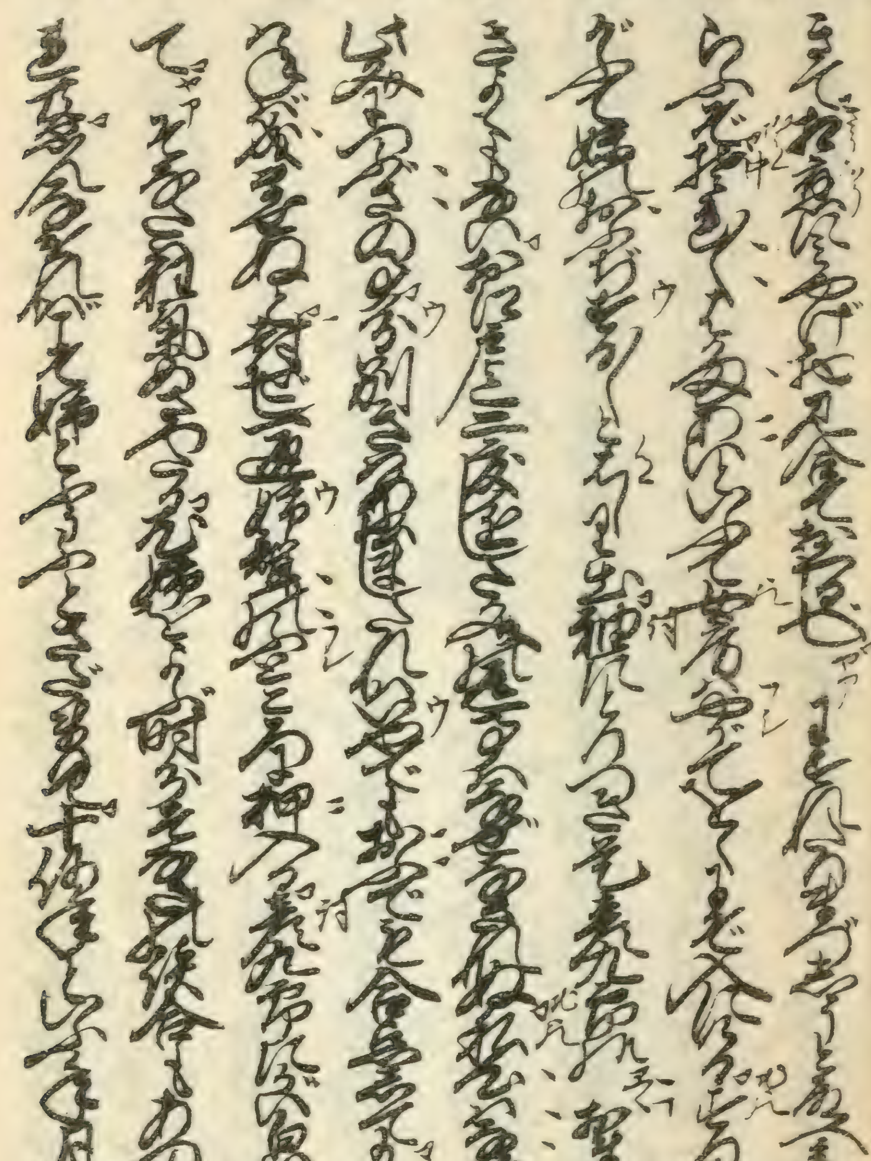


の鞍も乗替も己が故郷の北國に。勇んで嘶ふ勢ひや跡に抑への對道具。國久しかろ目出たかろさこそ。嬉し家老殿君君たれば臣も亦。しん樽の酒ざゝんざや濱松の葉の地散り失せず。萬代經べき國入の國こそ久し三重へかりけらし。フシ家中の上下。地親妻子に一年ぶりの對面に。彼方此方の悦び使祝儀土産のとりやり持。中間小者に至る迄フシざゝめき渡るぞ賑はしき。地中にも小倉彦九郎。數年の勤め舊功によつて。東發足の刻拔群の御加増賜り。若黨下人いや増して一子文六お種兄弟オクリ悦びへあふ事限りなし。地妻に主の妹聟政山三五平といふ

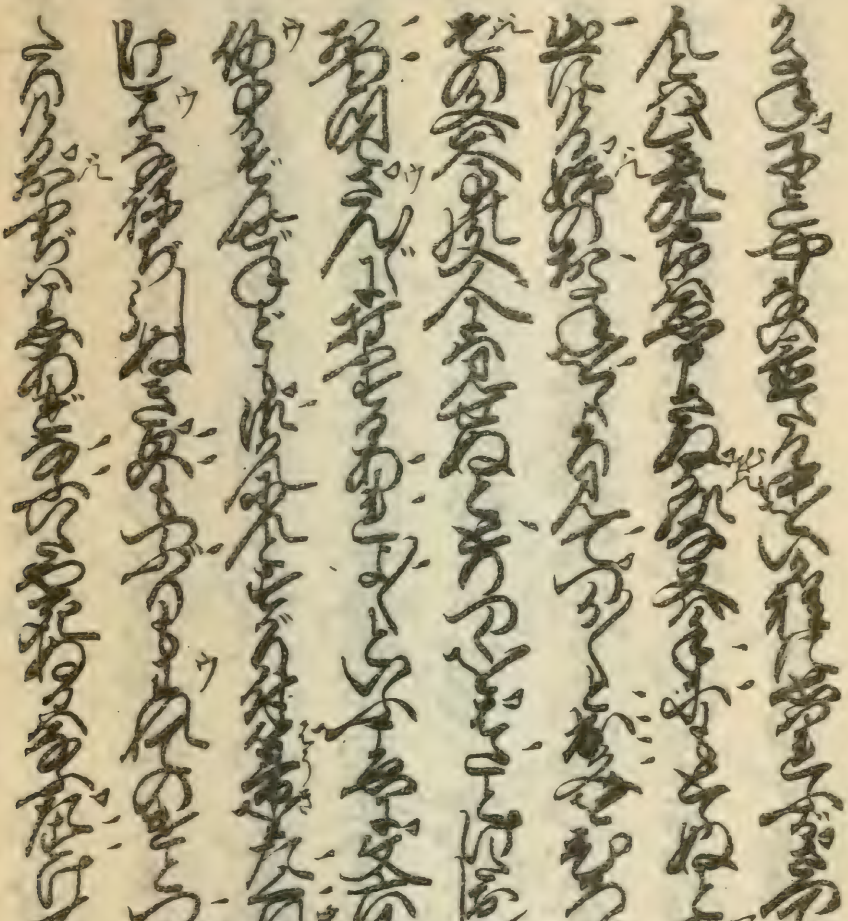
馬廻、是も此の度歸國ありしがお種の方へ使を立て。同先づ以て道中何事なく御供にて。久々にて御對面さぞ御滿足候はん。此の方とても同然たり、扨何がな土產と志し候へども、さして變りし品もなし。是は關東麻とて名物の眞苧。如何しくは候へども御留守の間お種樣。眞苧を御うみなさるゝと道中すがら家中の沙汰。罷り歸り承れば御當地にても其の沙汰ゆゑ。地進上致し候と言ひもあへぬに彼方の是は誰樣より。此方の是は何兵衛樣お種樣へのお土產とて。贈るにつけても女房は心にこたへ取沙汰の。夫の心も付くやとて。顏を見れども夫はさせる氣もつかず。同それ此方も荷を解



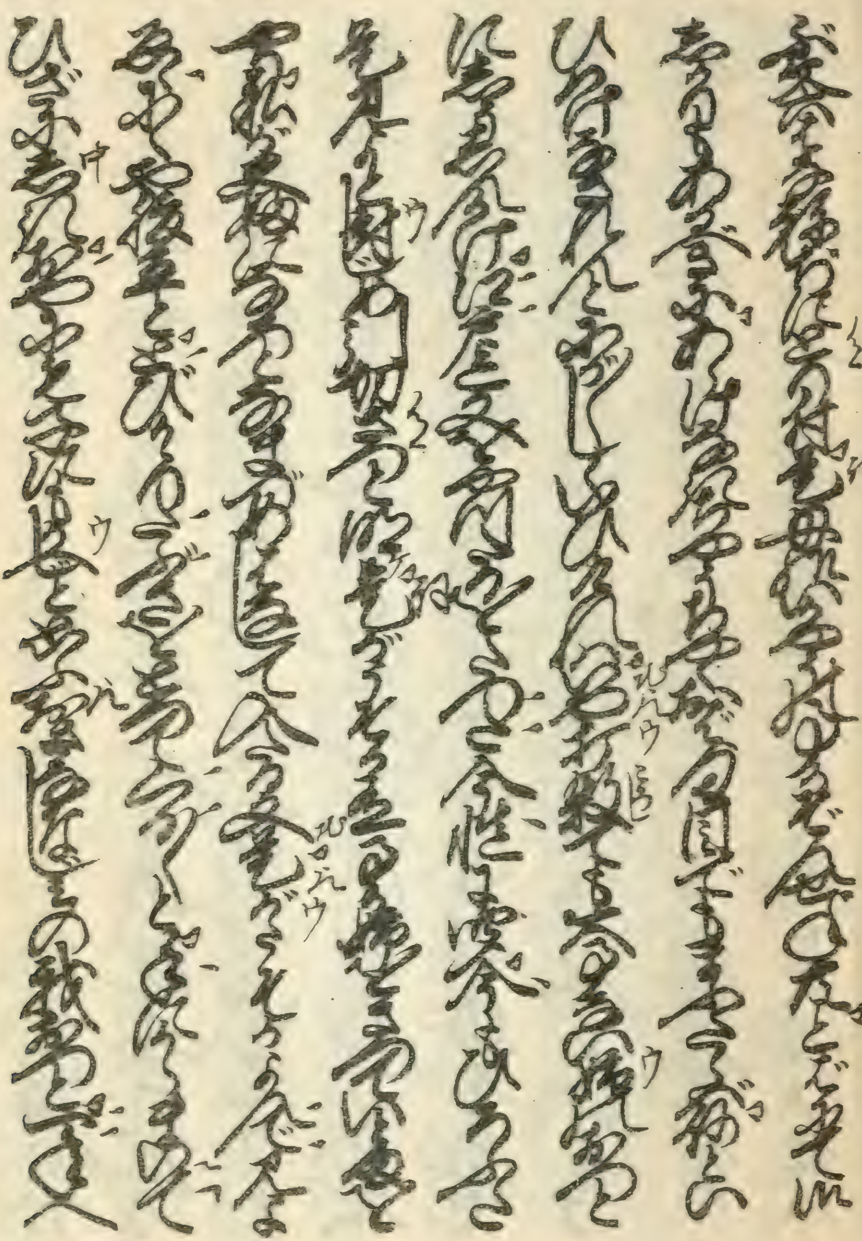
きて。相應に土産物見合せて贈るべし。ヤア忘れたり先づ舅殿へ參らうぞ。地 それ〳〵袴あいと言うて女房は フシやがて奥にぞ入りにける。地 摺違うて妹のお藤するる〳〵と走り出で。詞 袖に取付きこれ彦九郎樣エ、お前は曲もない。お江戸迄二度進じた文の返事はなぜなされぬ。地 私心はなほ此の文に具の事。分別極め書きましたれば否でも應でも合點して。貰はねばなりませぬと。封ぜし一通姉聟の フシ懷に押入るる。 詞 彦九郎苦い顏して。ヤア其方は狂氣めさつたか。尤姉をよぶ時分そなたの談合もあつたれども。緣なければ姉とこそ夫婦と定まりて。十何年といふ年月を



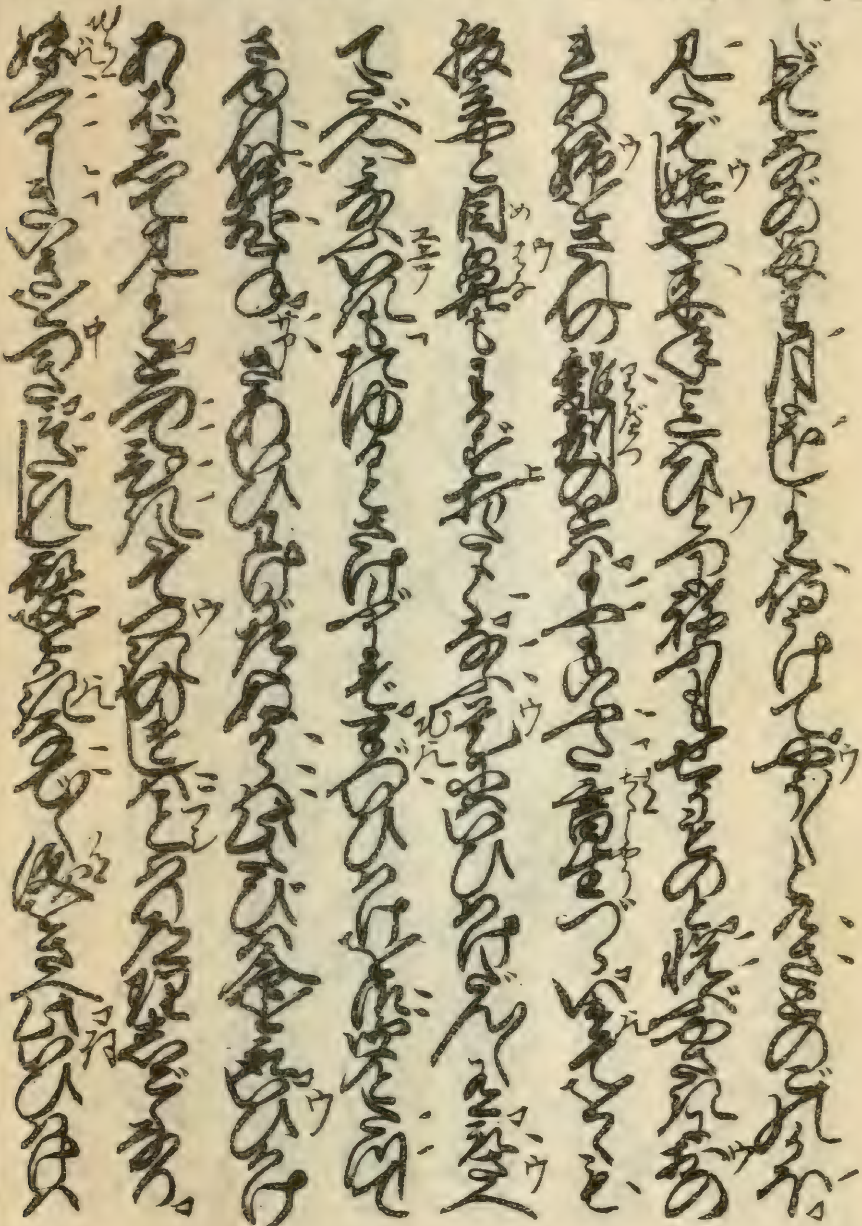
重ね、子迄養ひ置きたる仲を如何程に思はれうが。去つて其方に添はんとは此の彦九郎はえ申さぬ。地 斯様な文は手にも取らぬと フシ 抜付け表に出でにける。姉のお種奥より見て。つか〳〵と出で文を拾うて懐中す。いやその文は大事の文人には見せぬと取付くを。はたと蹴倒し棕櫚箒おつ取つて散々に打伏するあれよ〳〵といふ聲に。文六下女ども駈付けて何事か存ぜねども。御堪忍と縋り付き箒をたくれば。荷物につけし鼻捻引抜き。顔も頭も割れてのけと續け打にぞ打つたりける。お藤は聲あけなう痛や死ぬるはなう。助けてたべと泣き叫



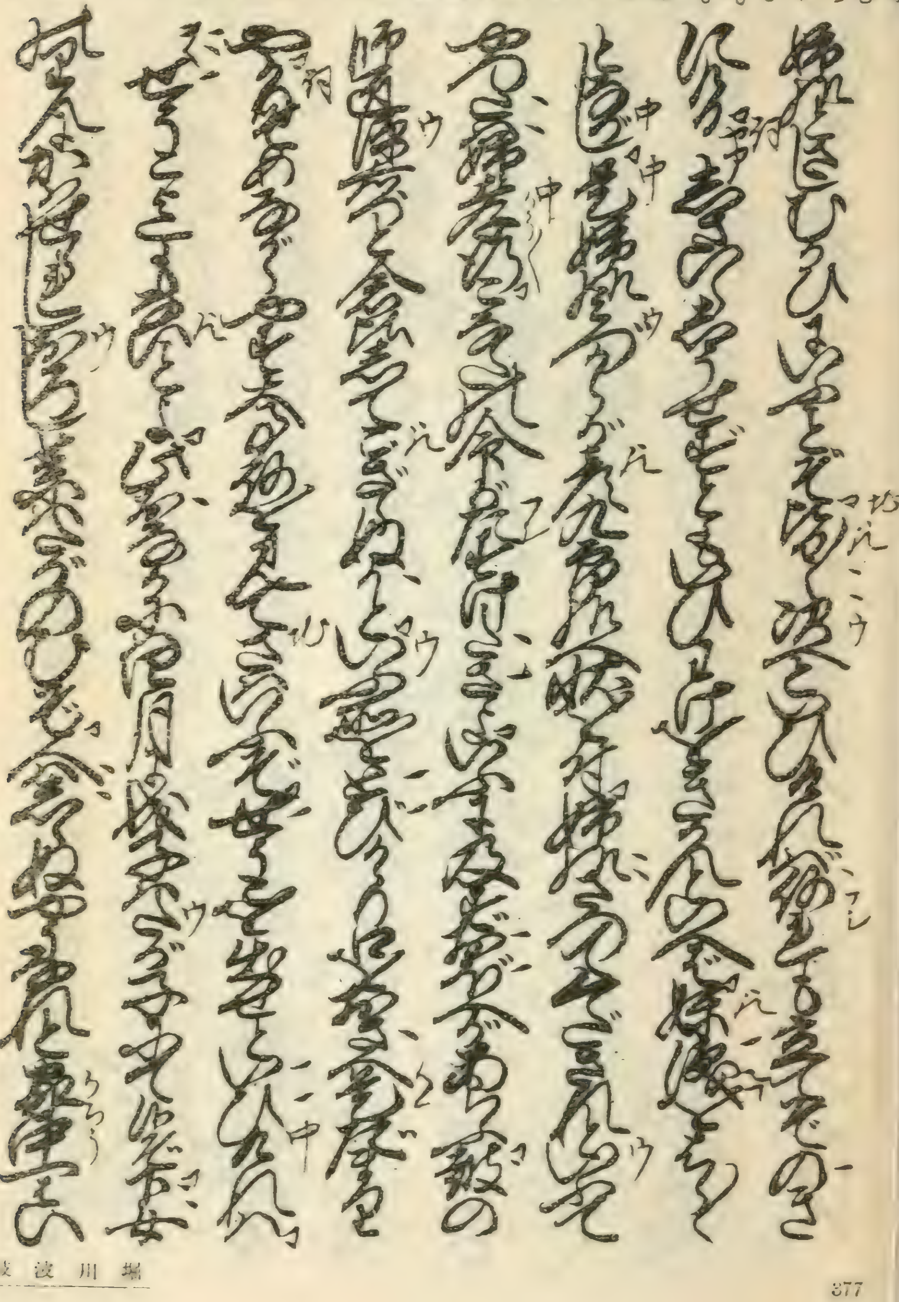
ぶ文六鼻捻に取付き。詞これ母様如何やうの事か存ぜねども。言葉にてお叱りもあるべきに。荒けなき打擲叔母様目でも眩うたらば。何と言譯なされんと苦々しく言ひければ。地いや打殺しても大事ない姉の夫に執心がけ。江戸迄文を遣つたるをたつた今慥に聞く。今も拾うた是見よと封じめ引切りさつとあけ。詞是が嘘かある事か姉を去つて暇を遣り。私が夫婦になろと生爪はなして入れたる文。地是が嘘か讀んで見よえゝ憎や腹立と。飛びかゝり髻を取つてくる〱と。手にからまいて膝に敷き。親にも子にも代へじと思ふ幼馴染の我が夫。一年隔



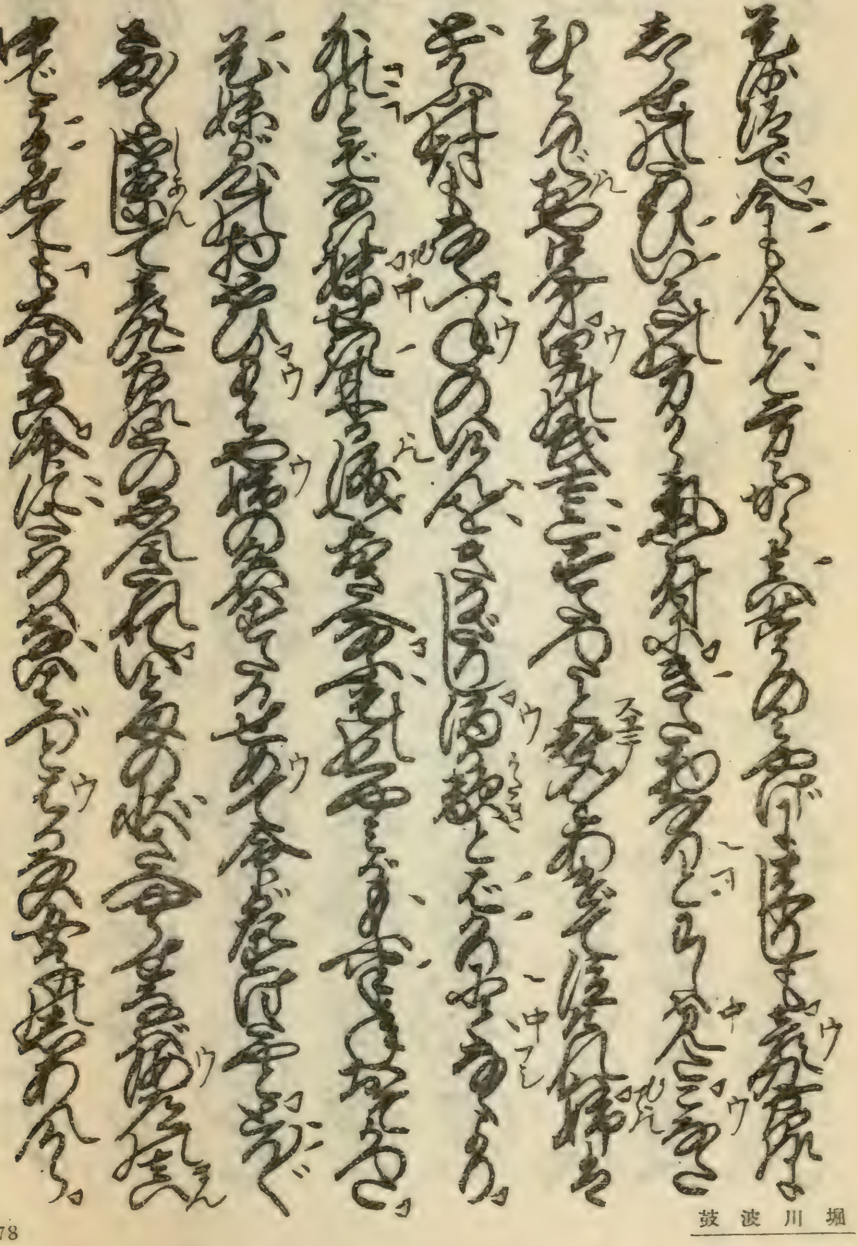
てし長の留守月よ日よと待受けて〳〵やう〳〵と今朝殿御の顔。見たぞ嬉しや来年迄は一つに寝臥もせうものと。悦ぶやさきに己れめは姉を去れの離別のとは。ようもいうた畜生面。生けて置くも腹立やと目鼻もわかず打擲く。なう是には言譯段々あり。取支へてたべ人々なうスヱテ息も絶ゆると叫ぶにぞ。地先づ言譯をお聞きとたつて支ゆれば姉お種。サアさあ言譯が立たぬからは此の度は命を取る。言譯あらばして見よと。取つて引立て突退けしは フシことわり道理至極なり。
地妹苦しき息をつき。亂れし髪を掻き撫で〳〵涙を押へ。詞此の言譯は



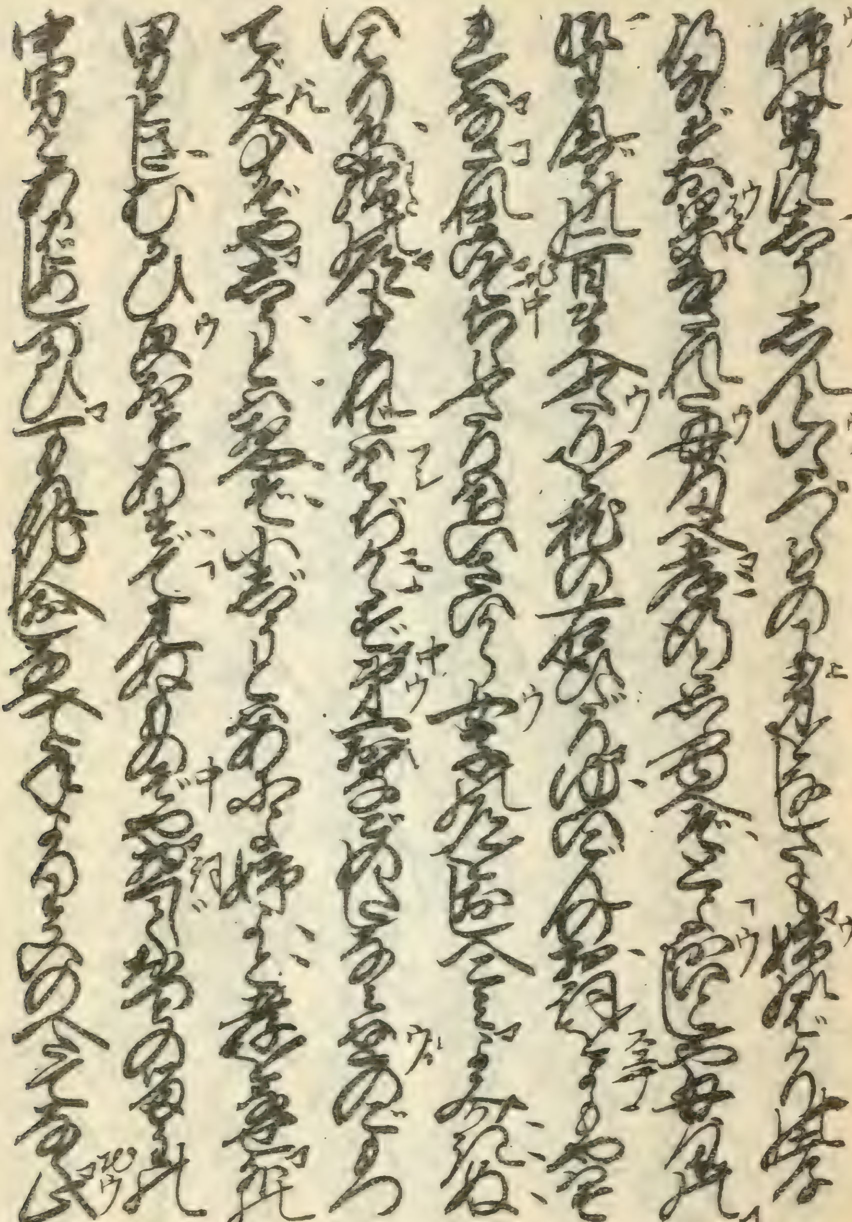
娘様と差向ひに言ふ事ぞ。地皆々次へと言ひければ。ナシ何れも立つてぞ退きにける。詞ヤア仔細らしうせずとも言譯を聞かんといへば。妹涙をはらはらと流し。これ姉樣自らが彦九郎樣へ狀を付け。姉樣を去つて下されと言うてやつたは姉孝行。此方の命がフシ助けたさよ。言ふに及ばす覺えがあらう。鼓の師匠源右衛門と念頃してござらぬかと。言ふ所を飛びかかり口を押へこれ黙りや。詞假初ながら安大事何を見て地さはいふぞ證據を出せと言ひければ。ラヽ證據迄もないことよ。此のお腹には四月になる兒は誰が兒にて候ぞ。下女のりんに買はせられし墮胎藥は誰ご飲むぞ。人は知らぬやうなれど家中一ぱい



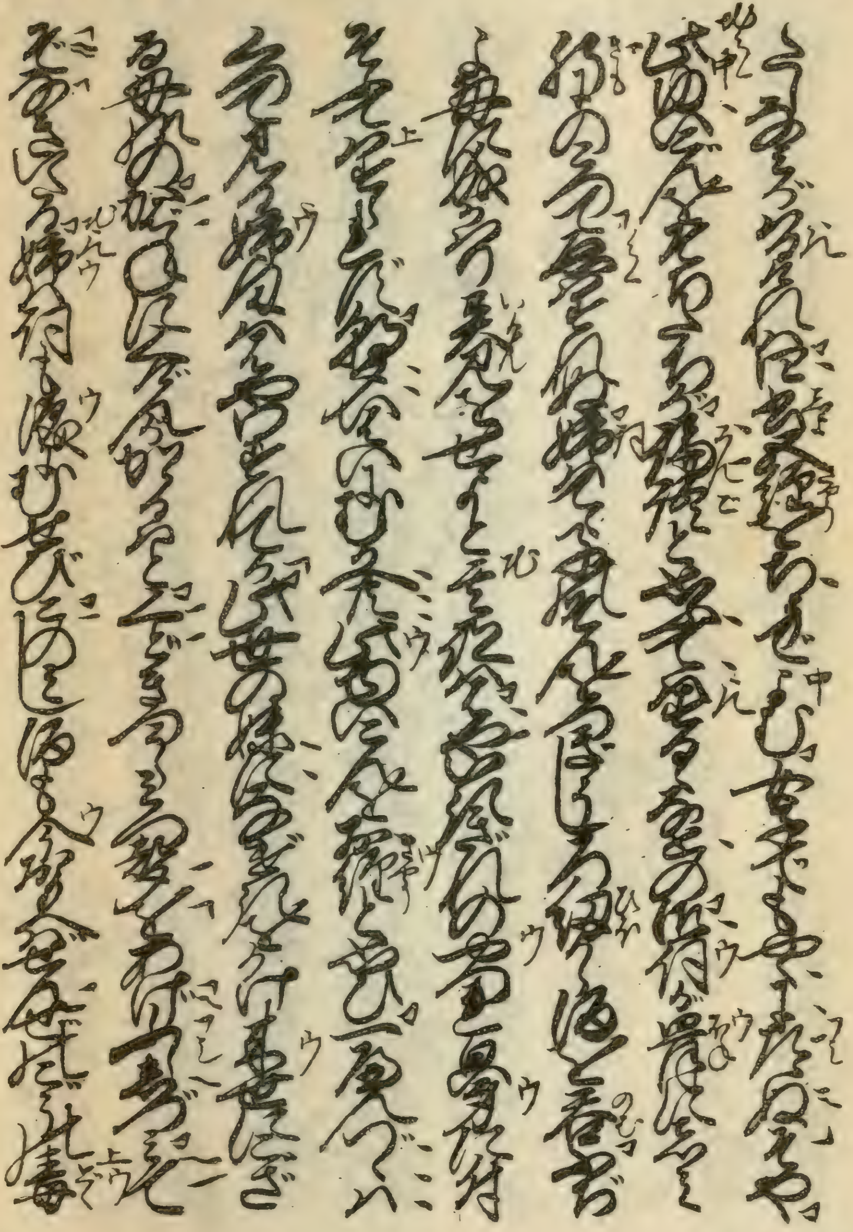
是沙汰で。今も今とて
方々から眞苧の土産に
來りしも。彦九郎様に
知らせの爲最屓の方か
ら氣を付けに。來た物
なりと私は見た。此方
一人で親兄弟。男の武
士迄廢つたとスヱテ聲を
上げて泣きければ。地
姉はとかうの詞もなく。
常の意見を聞かざりし。
酒が敵とばかりにて
フシ泣くより。外の事
ぞなき。地妹せき來る
涙を抑へ。なうその悔
みがもう半年遲かつた。
これ妹が心の物思ひ。
最早姉の名は廢るせめ
て命が助けたやと。と
り〴〵様々思案して彦
九郎様との緣切れて。
暇の狀さへ遣らせなば
街道の眞中で產ませ
ても大事ない。命に
障りは無い筈と果敢
ない女子の思案から。



姉の男に執心と淫奔者に身をなしたも。姉様ばかりの孝行ならずお果てなされた母様へ。孝行と思ふ故ぞとよおいとしや母様の。御臨終の二日前二人を枕の右左。遺言のお詞をスヱテよもや忘れはなされまい。姉そちら二人は小さいから女子の道を教へ込み。読書縫針絲綿の。道もそれではフシ恥かゝず。第一女子の嗜は殿御持つてが大事ぞや。舅は親ぞ小舅は兄よ姉よと孝々なせ。外の男と差向ひ顔をも上げて見ぬものぞや。舅總じて夫の留守の中男とあらば召使。一門他人押並べて年寄若いの隔てなく。姉此の

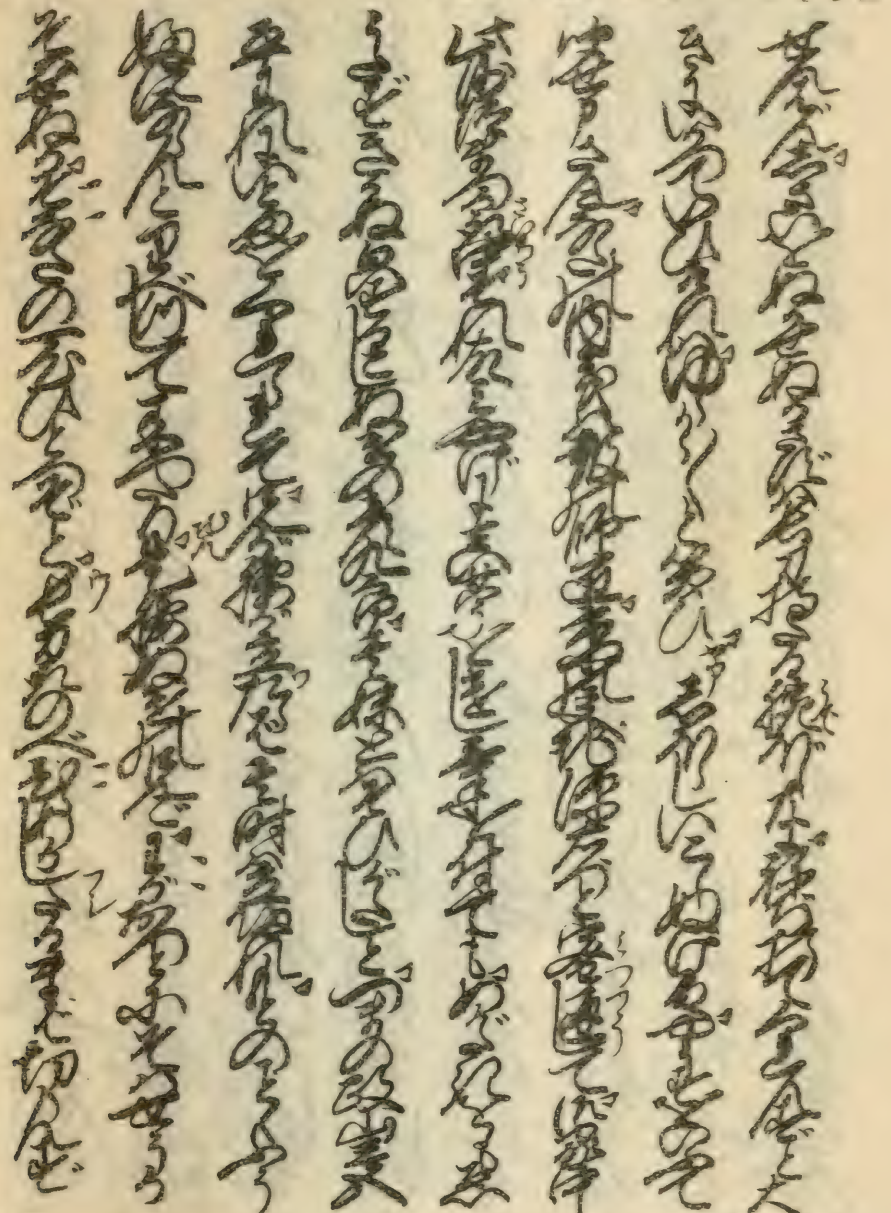


嗜みが悪ければ。四書五經を宙で讀む、女子でも役に　フシ立たぬぞや。地此の遺言を其方たちが。論語と思ふて忘るゝなとの。御詞が骨にしみ肝に殘つて得忘れぬ。詞姉は父御の孫を繼ぎ後紐から酒を飲む。藤よ母に成り代り意見をせよと　地其の跡は。はや息切れの蹇れ顏身に付添うて忘られず。朝夕位牌に向へども此の遺言をお經と思ひ。一遍づつは繰つて見る姉樣は早忘れてか。此の世の妹に歎きをかけ來世にござる母樣の。屍に苦患がかゝるはと。口說きつ恨みつ聲を上げ　フシ伏し沈。みゝてぞ泣き居たる。地姉は詞も淚に咽び。好みし酒も今思へば前世の業の毒

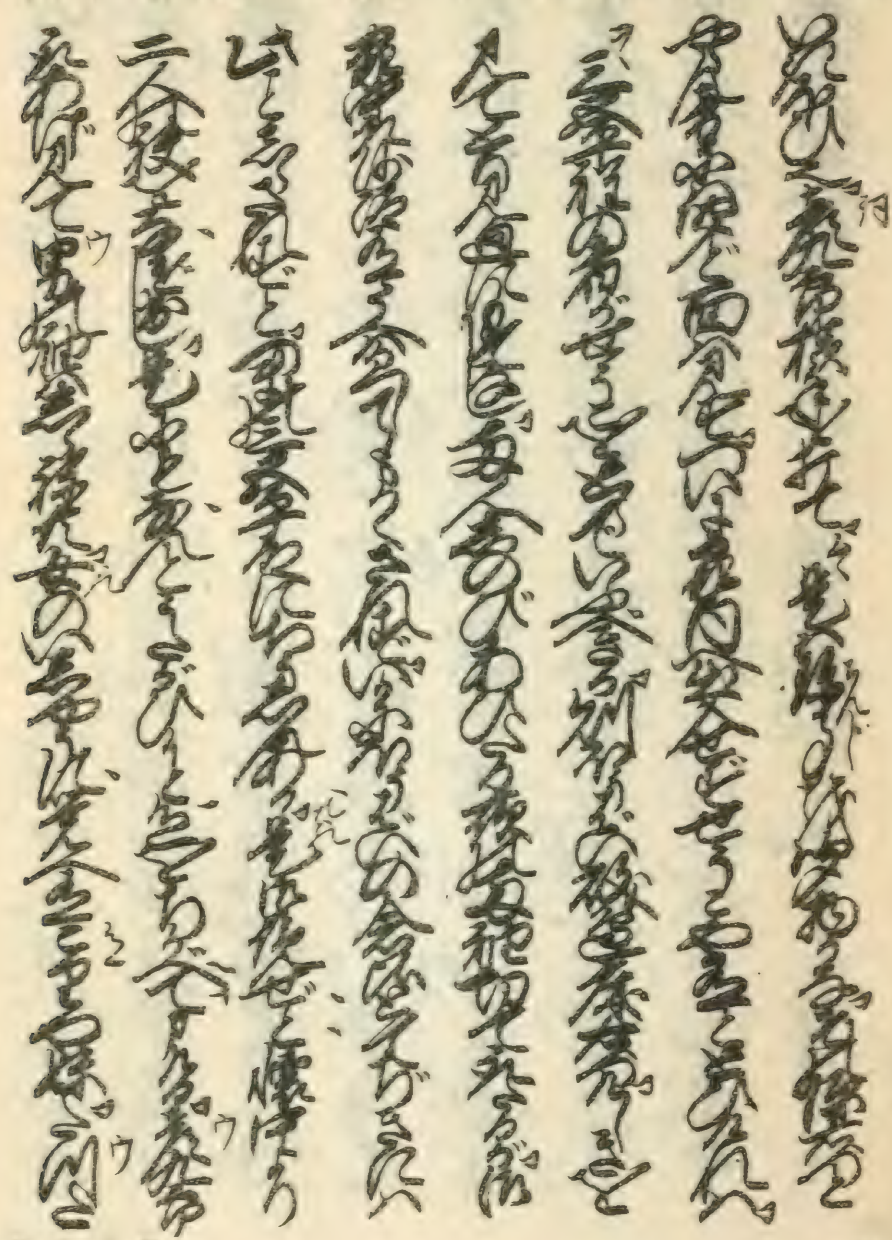


の酒。無明の酒の醉さめて自害せんと思ひしが夫の顔を今一度見度いく〳〵と思ふより。今日と延び明日と暮れ世間に恥を曝すこと。我が身に惡魔の魅入かと歸らぬ愚痴の繰言に。姉妹縋り抱き合ひ フシ 聲も。惜まず泣き居たり。世に是非。もなく哀なり。地 時に門外騷がしく口論あるか先づ暫しと。姉妹奧に入りければ彦九郎妹のゆらは。長刀を取りのべて兄彦九郎を追かけ來り。詞 これ兄樣。妹とは言ひながら政山三五平といふ侍の妻なれば。義の立たぬ事あれば兄とても免されず。如何に〳〵と申しける彦九郎はつたと睨み。ヤアこざかしき女郎めが。兄彦九郎に向ひ義の立たぬとは推參

千萬。仔細をぬかせぬかさずば長刀持つたる腕ほし共に。總折つてくれんずと大きに怒つて言ひければ。ゆらからから〳〵と笑ひ。ヤアしほらしい腰拔殿。樣子を言うて聞かせ申さん。此方の内儀は鼓の師匠。京の宮地源右衛門と密通して。御家中此の沙汰眞最中。これ故土產に眞苧を遣し氣を付けても。女敵をも得討たず開かぬ顔する腰拔の彥九郎。其の妹とは添ひ難しと。夫の政山三五平我に暇をくれられて。兄が腹立つたらば其の時は立歸れ。元の如く夫婦にならんと離別して來つたり。これ腰拔の兄御。我が夫に添はせうか添はせぬか。其方の一心一つぞと。長刀取伸べ閃かしつゝたるまば斬らんず

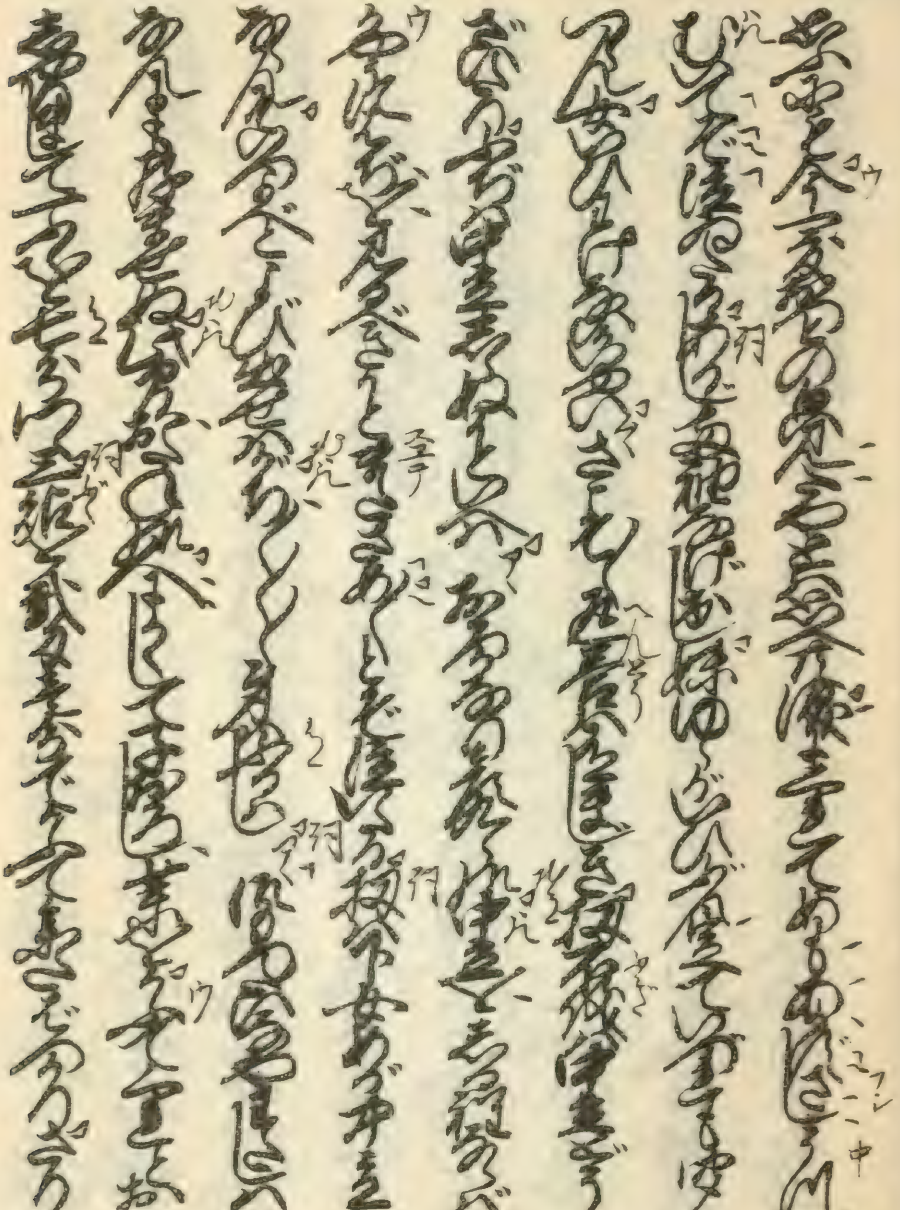


勢なり。詞彦九郎橫手を打つて。ムヽ是は珍事を聞くものかな。其の源右衛門とやらん音には聞けど面は見ず。遂に案内へ出入せず證據やあると言ひければ。ヲヽ三五平程の者が證據を取らいで言ふべきか。則ち傍輩磯邊床右衛門。氣色を見て取り身遁にもてなし。兩人忍び逢ひたる夜の兩袖切つて取つたるが。御家中取沙汰ある上は隱しても隱されず。如何に傍輩の 懇 とて直には此の事知らされずと。夫の三五平殿に拄進ある。地これ御覽じと懐中より二人の袂を投出し。是にも何と疑ひかと色を違へて申しける。彦九郎取上げ見て男の袖は知らねども。女の衣裳に覺えありこりや妹。たつた

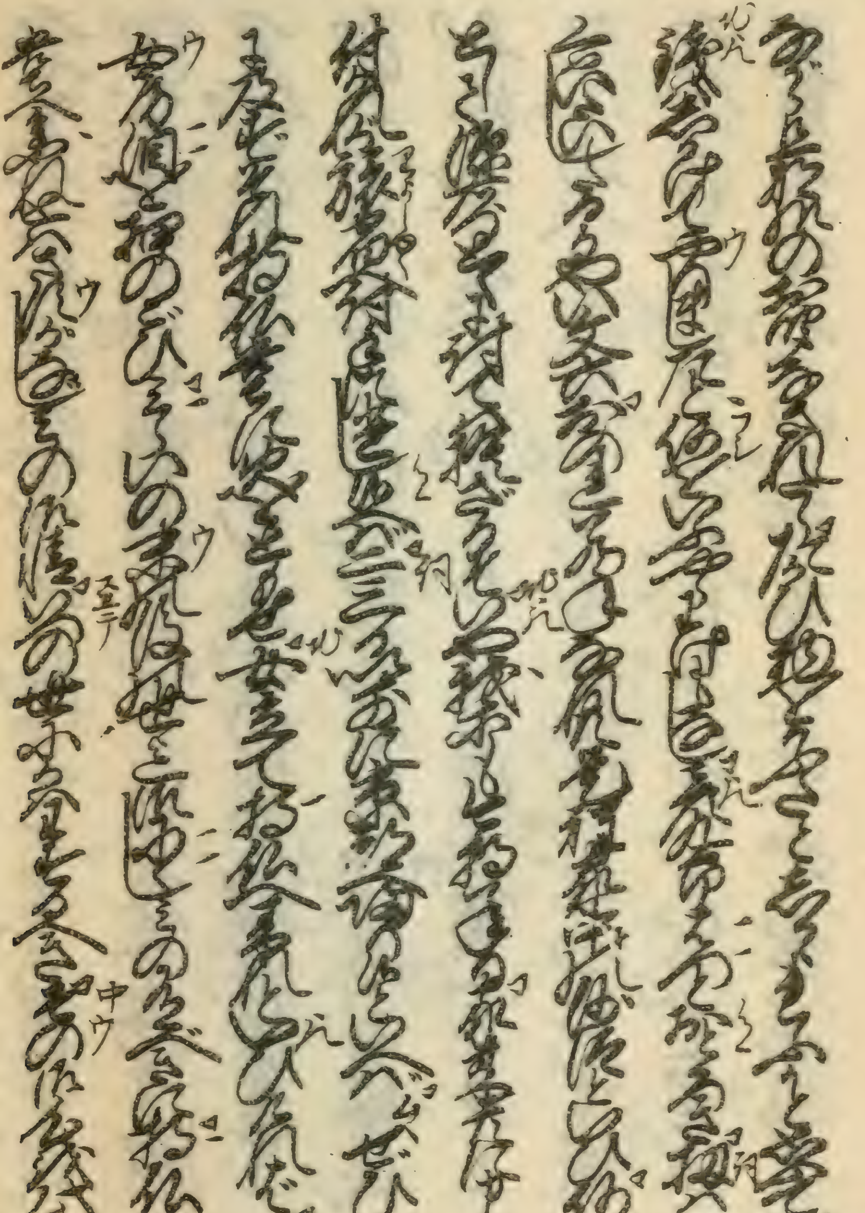


其の方が非番を守い
で待させんず。此方へ
来れと打連れてオクリ座
敷に〳〵こそは通りけれ
フシ家内の上下。地是を
聞き鳴をひつそと鎮め
し時。詞主少しも騒が
ず女房ども来れ。倅文
六来れと地詞少なに呼
びければ。何れもすは
や大事ぞと　そろ〳〵
夫の前に出で頭を下げ
て居たりしは、身も冷
え渡り魂きえ　フシ息
を閉ぢたる其の中に。
地無慚や種は心にも巧
まぬ不慮の悪縁の。身
の錆刀夫の手で刄にか
ゝるは覚悟の前、やがて
逢はんと長の留守辛抱
盞せしかひもなく。去
年発足の前の夜の枕が
限りの枕とは。今殺さ
る、今迄も思はざりしと

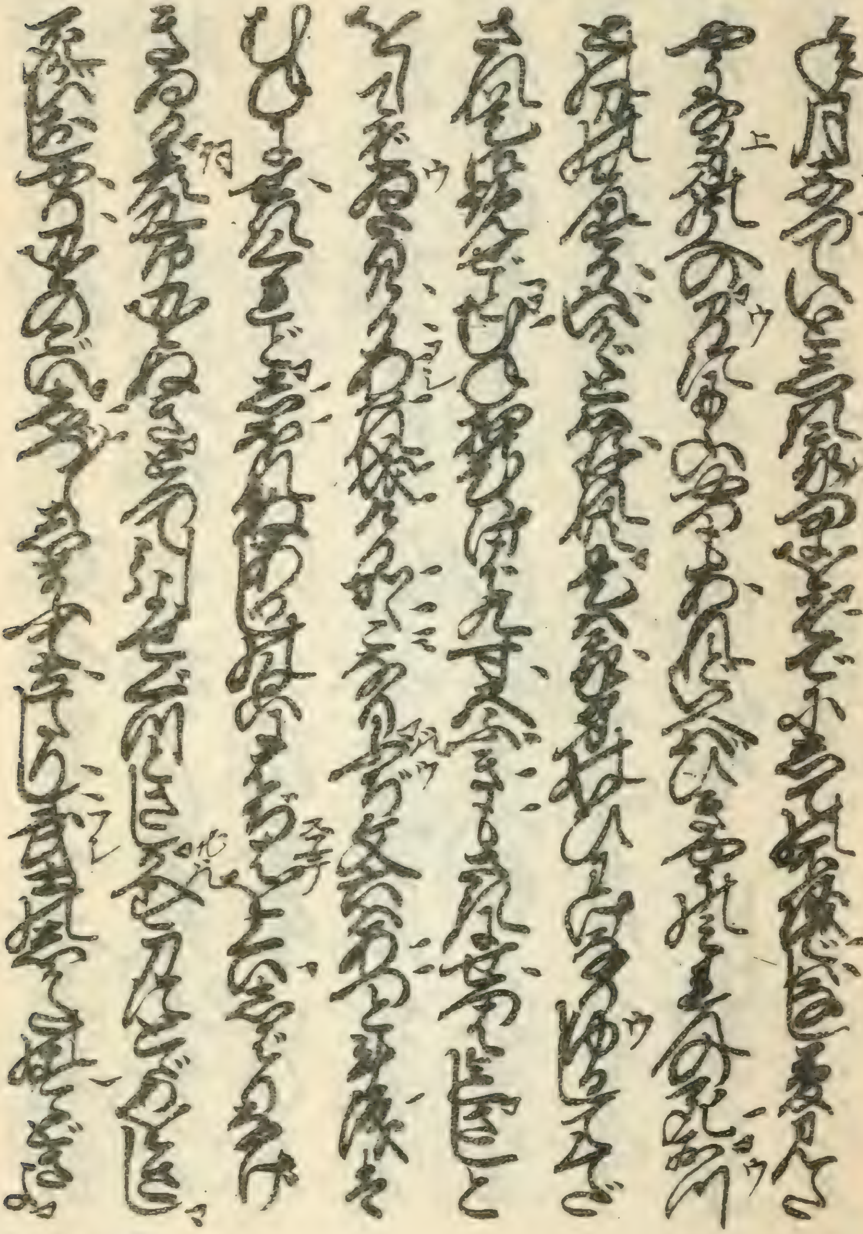
思ふにも。今一度夫の顔見たやとは思へども。涙にくれて目もあかず。フシさしうつ。むいてぞ泣き居たる。詞主人両袖投出し。妹ゆらが言ひ分定めて何れも聞きつらん。女言譯ないかいやい。ムヽさこそ〳〵返答はあるまじき。扨不義は媒同罪たり。藤は媒知らぬかといへば。アヽ愚かなり彦九郎様。地媒を知る程ならば。斯様に恥を見るべきかとハエテまたさめ〴〵とぞ泣きゐたる。詞扨は下女めが媒ならん。そいつ呼べと呼出せば。地がちく〳〵〳〵身を顫はし。詞アヽ御勿體なや私は何にも存じませぬ。詞此の間お種様、人に隠して子おろし薬を。買うてくれとおしやりまして一貼を七分づつ。詞三貼を貳匁壹分で買うて参つたばつかり。さり



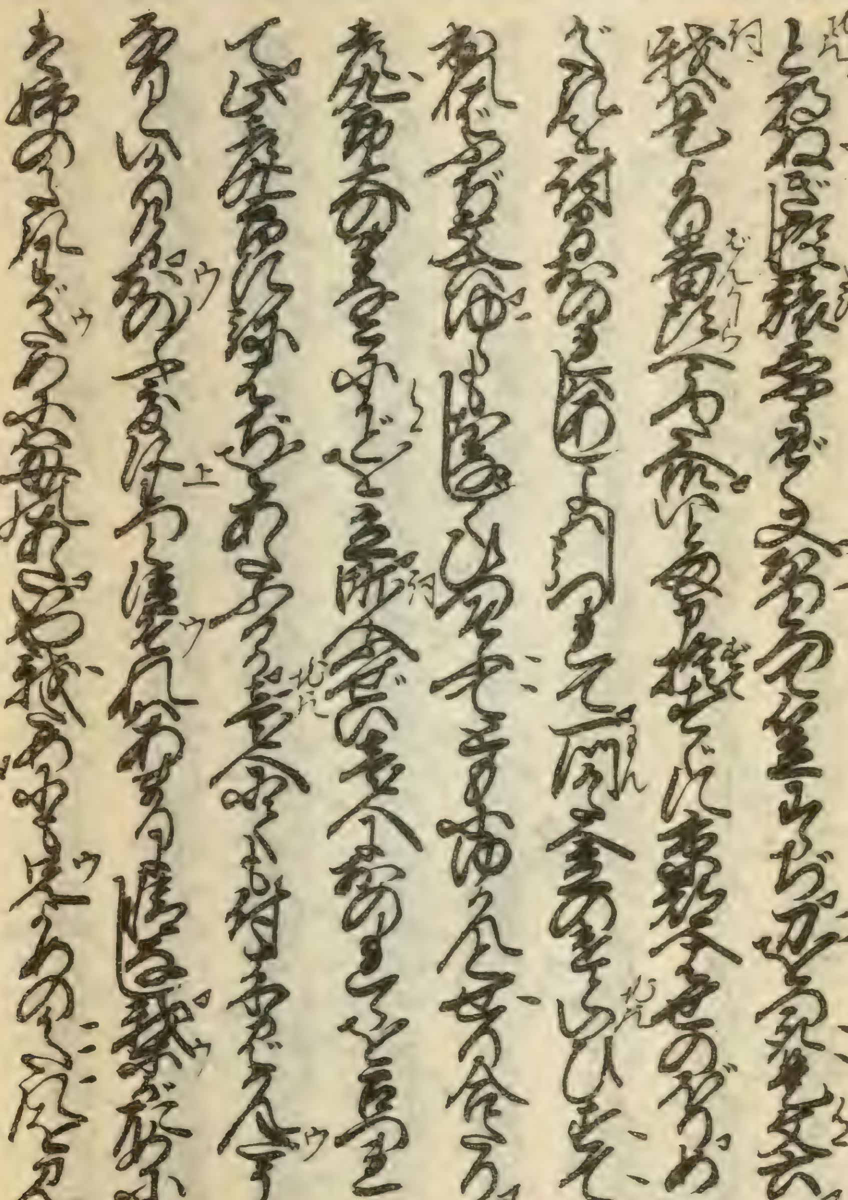
ながら旦那様のお聞きなされたら。高い物を買うたと叱られうかと思うて。地銭はしかけてやりましたと　フシ何をいふやら譯もなし。彦九郎はつと驚き。詞扨は懐胎したるかやい文六。己れ若年なれども是程家中の沙汰といひ。何として源右衛門疾くに討つては捨てざるぞ。地いや我等も今朝承り。家來どもに申し付け彼が旅宿へ討手に遣し候へば。詞二三日以前に京都へ歸り候といへば。ムヽ是非に及ばずそれ持佛堂に火を燈せ。地女立つて持佛へ來れと言ひければ。女房涙押拭ひ。未來の末の後の世迄御情しみのあるべきに。持佛堂へ參れとは流石なじみの御情。スヱテいつの世にかは忘るべき。その御心を此の



年月知つていとしき我が夫を。袖にしての不義ではなし夢見たやうな身の上の。間に憎い奴もあれど言へば卑怯の未練の死。夫の刀の先するは如何とは存ずれども。是は我が身の言譯なり免して下され是御覽ぜと。胸押開けば九寸五分膽先に切羽迄。刺通してぞ居たりける　フシ哀れなりける覺悟なり。藤文六はあつとばかり涙は胸にせき來れど。怖れぬ主人の顏に愧ぢスヱテ齒をくひしばり歎き居る。詞彦九郎刀を抜き。とつて引寄せぐつと刺し。地返す刀に止めを刺し。死骸押遣り刀を拭ひ。しづ〳〵仕舞うて立つたりし　フシ武士の仕方のすゝどさよ。



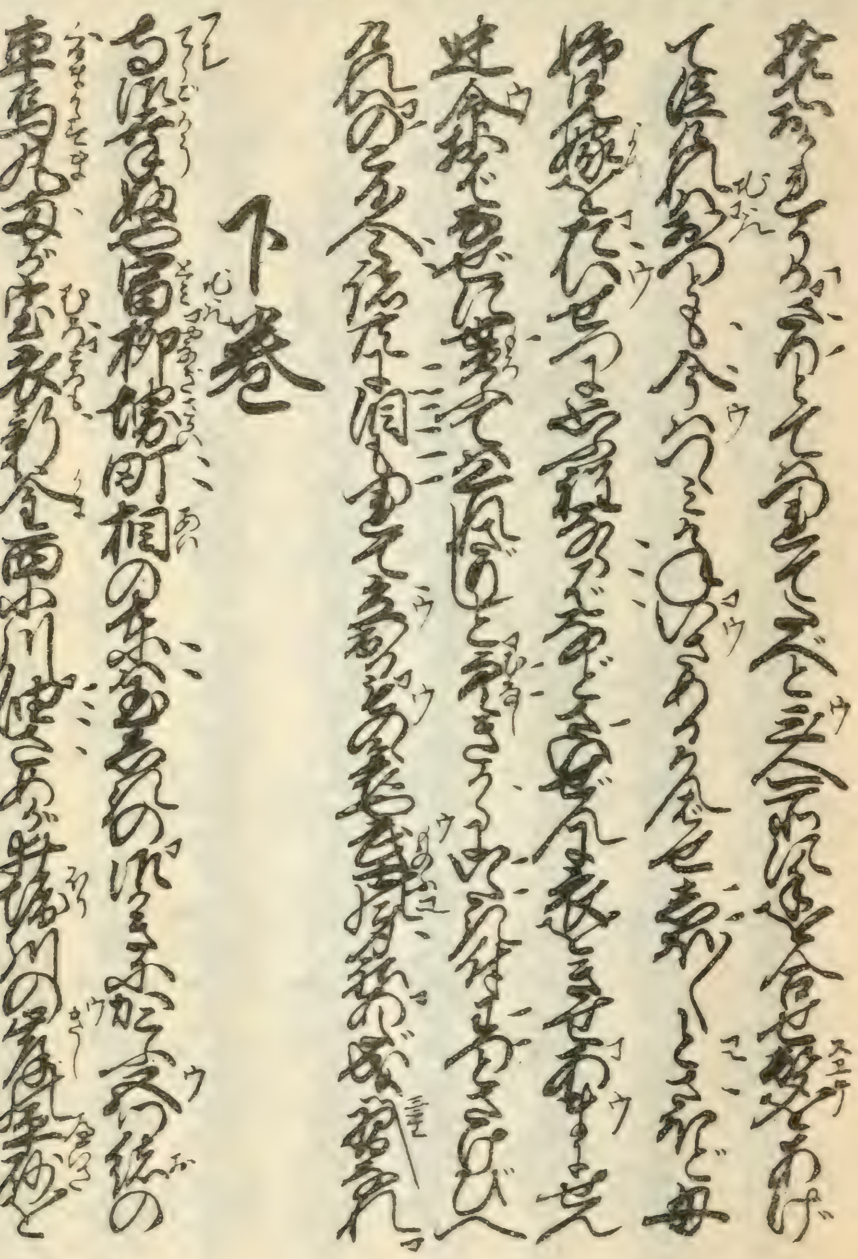
地今朝脱ぎ捨てし旅雪踏東又おつ取つて笠草鞋。刀おつ取りこれ文六。詞我は是より番頭へ訴へ。御暇申し捨て直ぐに京都へ馳せ上り。女敵を討つ間己れは足弱引連れて。一門方へ立退けと地言ひ捨て出づれば藤文六。ゆらも同じく引つ添うて共に行かんとせり合うたり。彦九郎大の眼に角を立て。詞町人風情壹人に己等を召連れて。此の彦九郎にいよ〳〵恥を與ふるか。地一人にても附き來らば勘當なりと怒りける。各一度にわつと泣きそれは餘りに情なし。我等が爲には姉の敵我が爲には母の仇。いや我が爲にも兄嫁の敵を見



搭てて置かれうか。然りとては連れてたべと三人一所に手を合せスヱテ聲をあけて泣きければ。地夫も今は包みかね。勇める容顔悄々とさほど母姉兄嫁を。大切に思ふ程ならばなど最前に衣を着せ。尼にせんとて命をばなぜに貰うてはくれざりしと。空しき骸に抱付きわつと叫び入りければ。殘る人々諸共に涙につれて立出づる。物の哀や武士の身こそ。仇なる三重へ慣なれ。

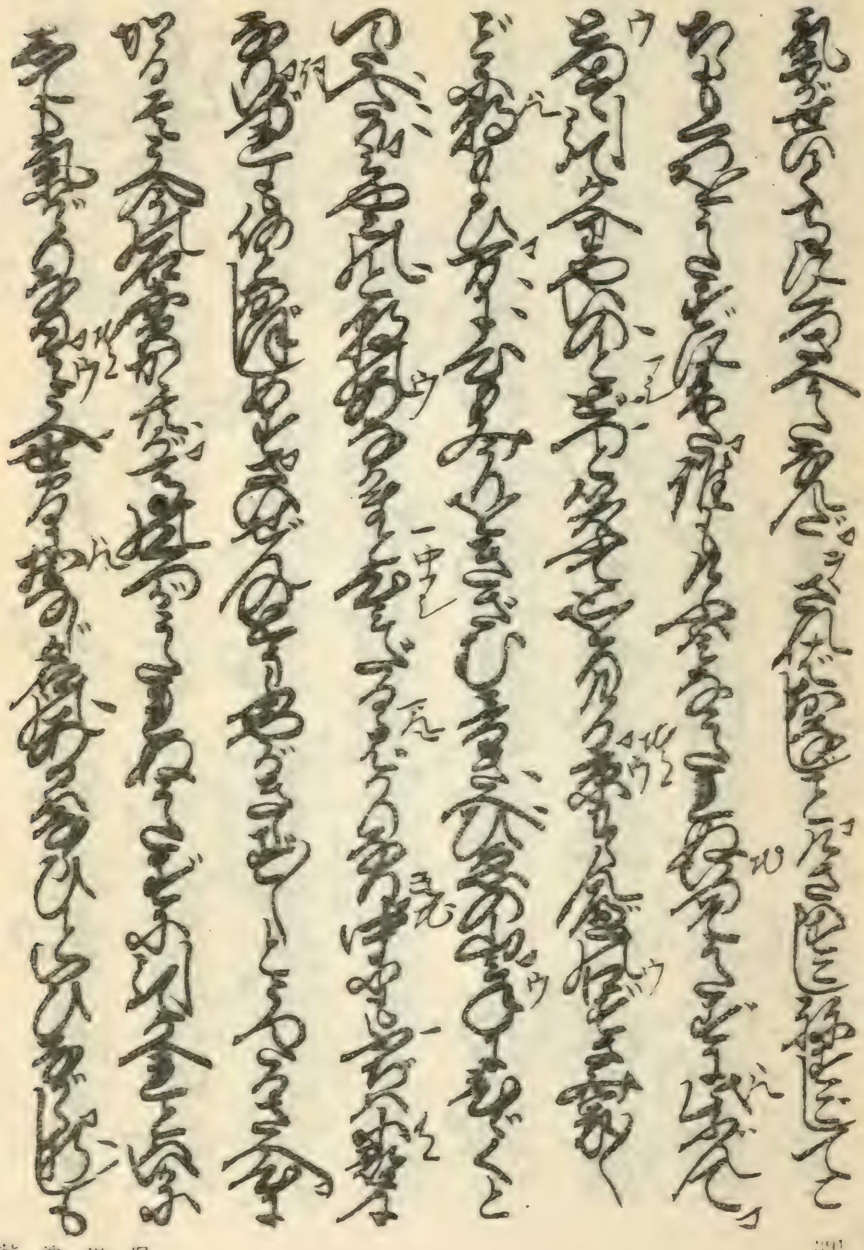
下巻

フシ 寺御幸麩屋富。地柳堺町相の東は玉敷の。御垣にかこふ五つ緒の車烏丸雨が室。衣斬釜西小川。油さめが井堀川の岸の平沙を

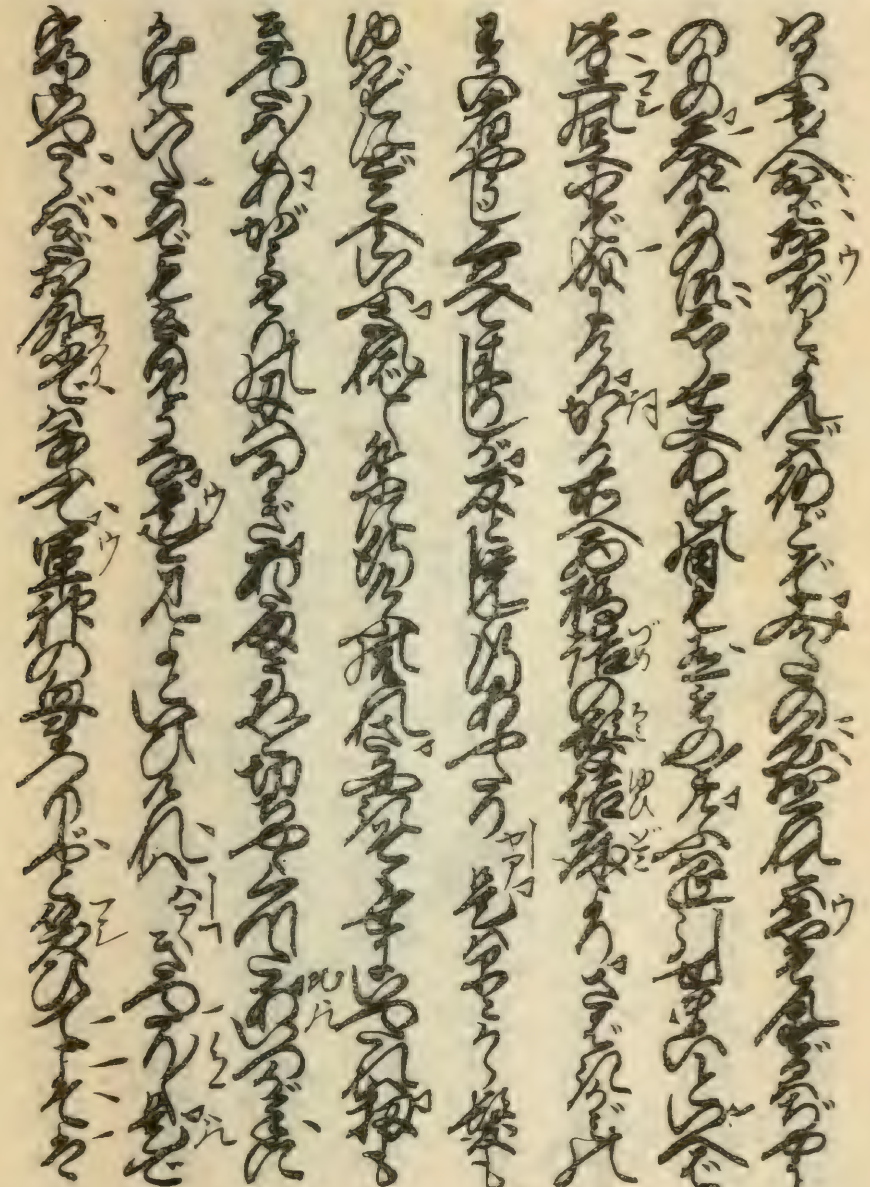


白波に。照せば今も夏の夜の。下立賣のほの〳〵明け六月七日祇園會の。長刀鉾の切先にうちかち時の鷄鉾と。門出を祝ふ力紙。輿を固め四つ辻に フシ 四人さまよひ立ち居たり。地 常さへ賑ふ上京の折しも今日の祭客。下へ〳〵と朝霧のひまに門掃き打つ水の。かゝる姿を咎むやと。西と東に行別れ立休らへる折柄に。 豆腐商ふ商人のきらず〳〵と聲高に。賣る辻占の耳に立ち心後れとなりやせん。南無三寶と橋詰に各寄れば向より。白川石を商ひに賤の嬶等が馬追ひ連れて。 詞 連を呼ぶさへ同じ名の。 お藤や。今日は商 はやしまうて。祭に行かうと

氣が急いて馬に沓さへうたなんだ。ヲヽされば同じ事。今朝は少し寢過して此方も沓をうたずに來た。誰も今日は皆打たれぬ地いつそ打たずに此の分でゞとつとゝ引いて歸りやいのと フシどつと笑うて通りける。地京童の口荒家々毎に朝もよひ。萬に心もみ瓜を刻む音さへ比叡の山。峰に響くと傳へたる。都の今朝のあなかまと フシ 心亂るゝばかりなり。詞中にも藤は小聲になり。いづれも何と思召す。最前の豆腐屋がきらずく〳〵と賣つたるさへ。心にかゝる其の上今の石賣嗅どもが。馬の沓が打たれぬ打たずに牽いて歸れとは如何にしても氣がかりなり。其の上世間に同じ名のあるは習ひと言ひながら。折しも



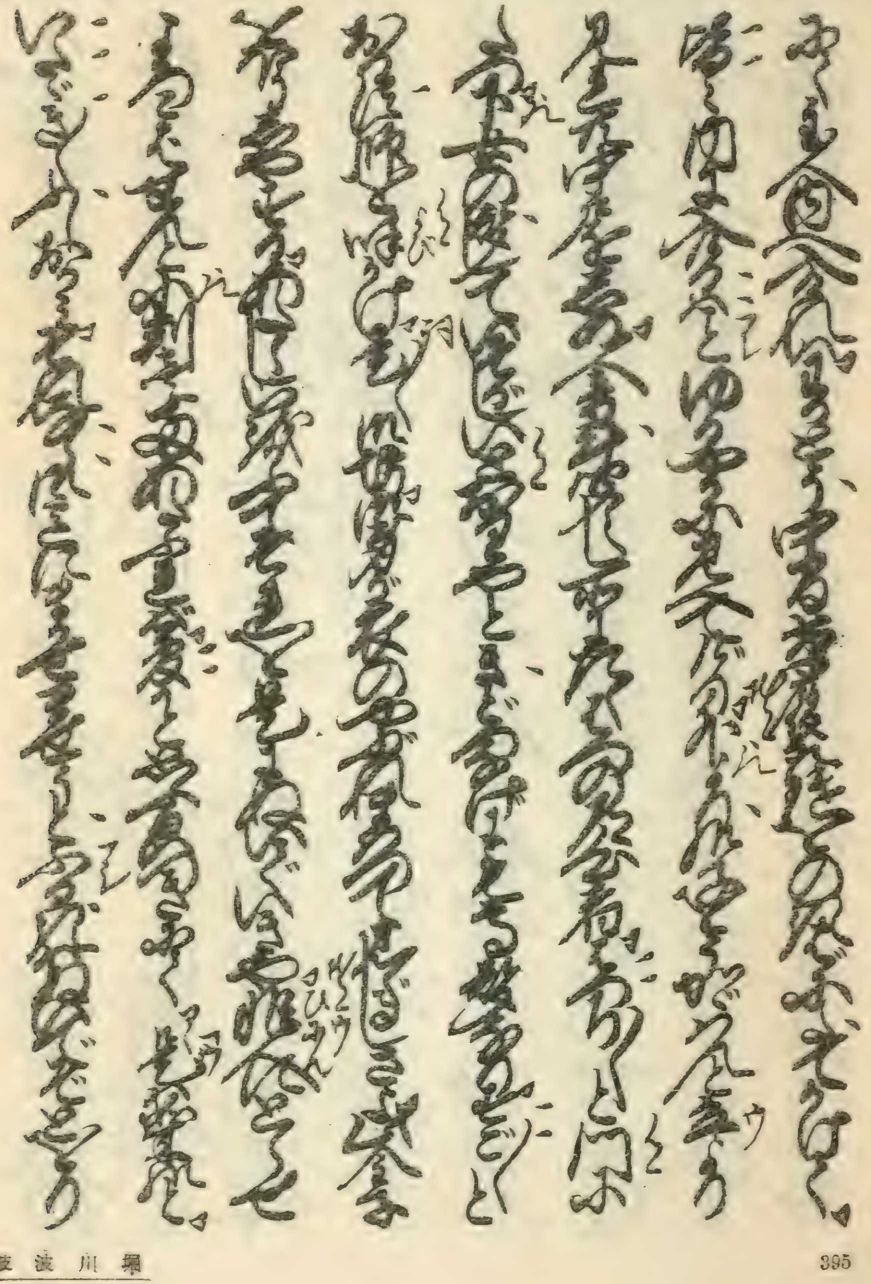
思う一人をばお藤と呼んだは何事ぞ。味方の心後れては仕損ずるは定のもの。天道よりの御知らせ又明日の日もあるものを。今日は延引せまいかといへば皆フシ二の足にぞ成りにける。詞かゝる所へ西橋詰の髮結床より。さばき髮の若い者楊枝咬へて來りしが。友と思しく行逢うたりヤア。是は早早から髮も結はずに何處へといふ。されば〳〵祭に行く今日のはれ。月代剃らせに行つたれば。扨も切つたは〳〵。あら剃刀の刄は劍。頭うちを切りちや〳〵つた。地彼奴が手にかけては幾人でも切りさうな。是を見よといひければハアゝ。切つたり〳〵。是で客に行つたらば祇園祭ではなうて。軍神の血祭ぢやと笑ひてこそは



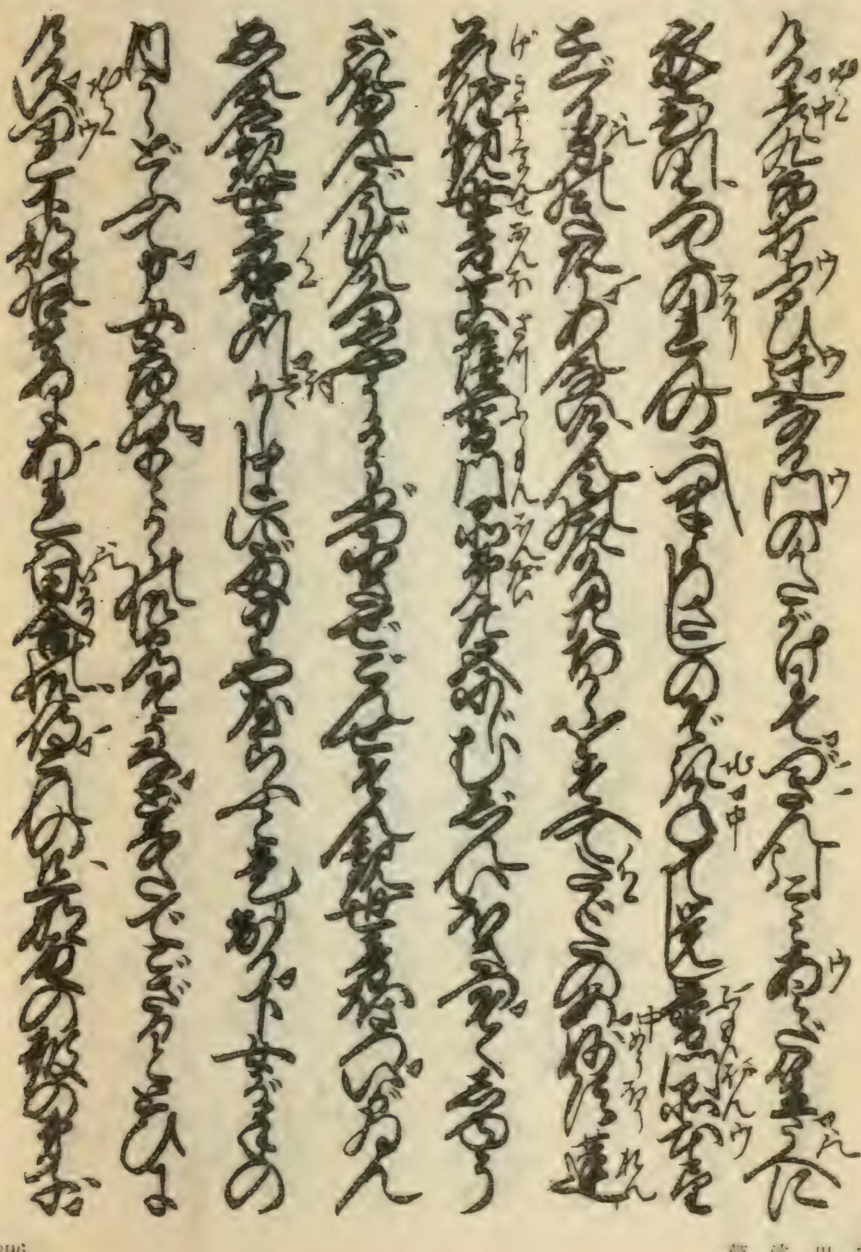
別れけれ。地四人嬉しき辻占の今のを聞いたか聞きました。サア破軍が直つた仕濟したと。そゞろに笑うて勇みをなす心底思ひやられたり。いざ此の運に乘つて討たん時刻延ばすな用意せよと。帶締め直し身を輕め内の勝手を知らざれば。爰にて談合無益の沙汰女二人は堀川表。小見世に上つて障子蹴破りつつと入れ。我々親子は立賣の門口より中戸を蹴破り込入るべし。面體を見知らぬぞ人違へするな。神妙に意趣を述べ物の見事に討たんずる。早まつて騙し討卑怯なと言はするな。合點か合點ぢや心得たか心得た。サア込入らんとつつ立つ所へ。詞あれ見たか油の小路を此方へさし。蠟

鐸輔の槍印知行ならば三百石。廿餘りの若侍茶宇の袴に綟肩衣。地若黨三人挾箱對の奴草履取。十枚糊の付紙臺足打早め敵の門。ものもうと言ふも訛り聲内より下人がどれいと應へ。溝ばたに蹲へば何かは聞えず稍暫し。頭を掻廻つて口上述べて進上臺を差出せば。下人は請取り腰屈め フシ其の儘内に入りにける。地文六頭を掻いてエ、拍子に乘つたる先を折る。如何はせんともがきしをいやいや屈する事勿れ。詞屋敷方か御所方か。囃子を勤めし禮物と見受けたり。返事を聞いて歸る分際は入るまじ 地待つて見よと。いふ内に以前の下人立出で。是へと言へる氣色

にて主人内へ入りければ。若黨中間草履取槍を軒端に立懸けて。皆々内に入りけるは フシ事緩やかに見えてけり。詞外より様子を窺はんと立寄り見れども中戸を締め。人音ばかり聞えし所に托鉢の道心者。はつちく／＼と門に立つ。下女の聲して忙しい通りやときごつなげにも高聲なり。悄々通る法師を呼びかけ。詞これ／＼御坊。御身が衣の破れまはつて見苦しさよ。此の金子を報謝する。新しいを買うてそれを是に脫いで行きや。地非人に取らせ悦ばせんと小判一兩與ふれば。夢かと思ふ顔つきにてア丶是は如來樣と。頂き／＼伏拜み。それなら御意に任せませうと フシ古著は脫いでぞ通り

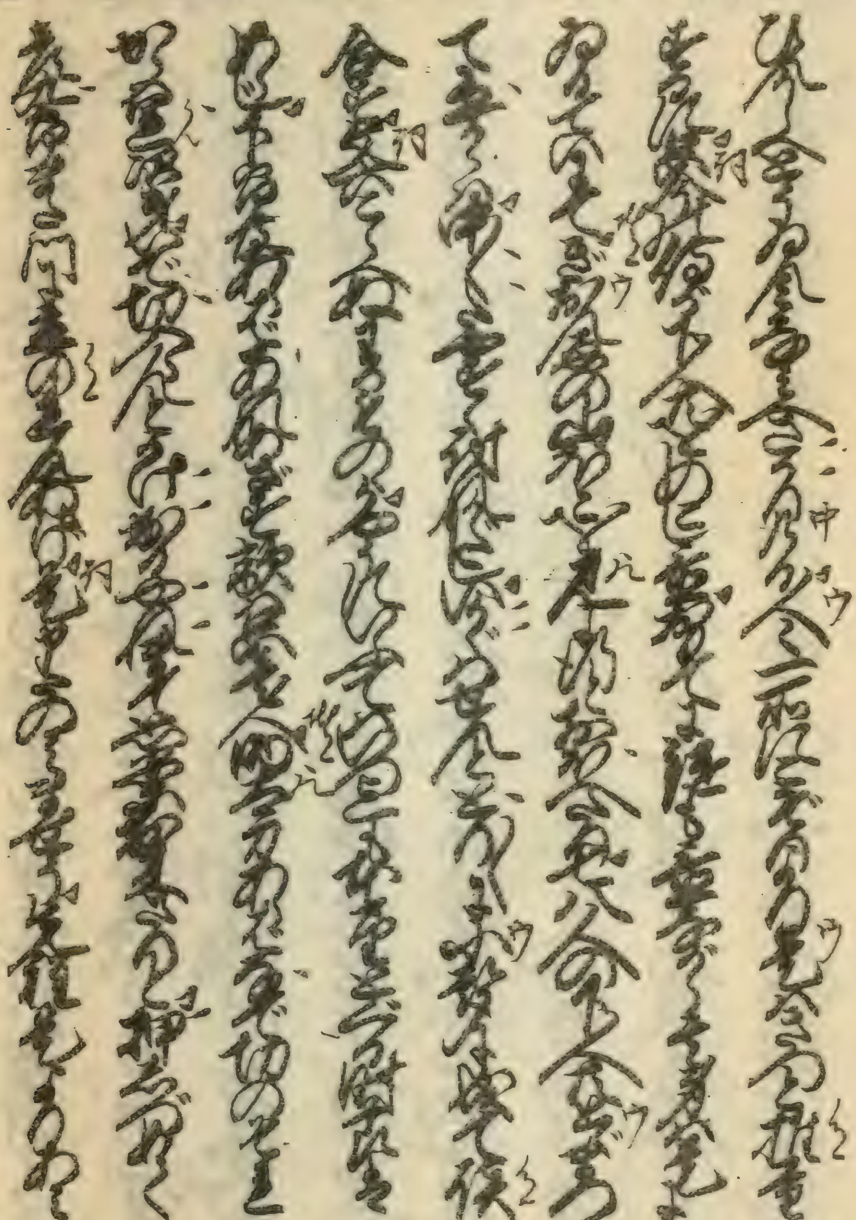


ける。地彦九郎打振む
辻なる門の片陰にて。頭
巾引込み阿彌陀笠。上
に衣を引つ張つてオクリ
暖簾の〳〵端より差覗
き。地かねて覺えし普
門品本望遂ぐる身の祈
禱。案内檢見の便とも
力を添へて只賴め。妙
法蓮華經觀世音菩薩普
門品第廿五爾時無盡意
菩薩。即從座起偏袒右
肩合掌向佛而作是言世
尊觀世音菩薩。以何因
緣名觀世音菩薩。詞
エヽ喧しい囀りや遣ら
うと走り出る。下女が
手の內うらどうて。申
し女郎樣。早々からの
お客さうな。誰方でご
ざると問ひにける。地
いづれ下部の口まめに
あれは田舍の御侍。こ
れの旦那殿の鼓の弟子。

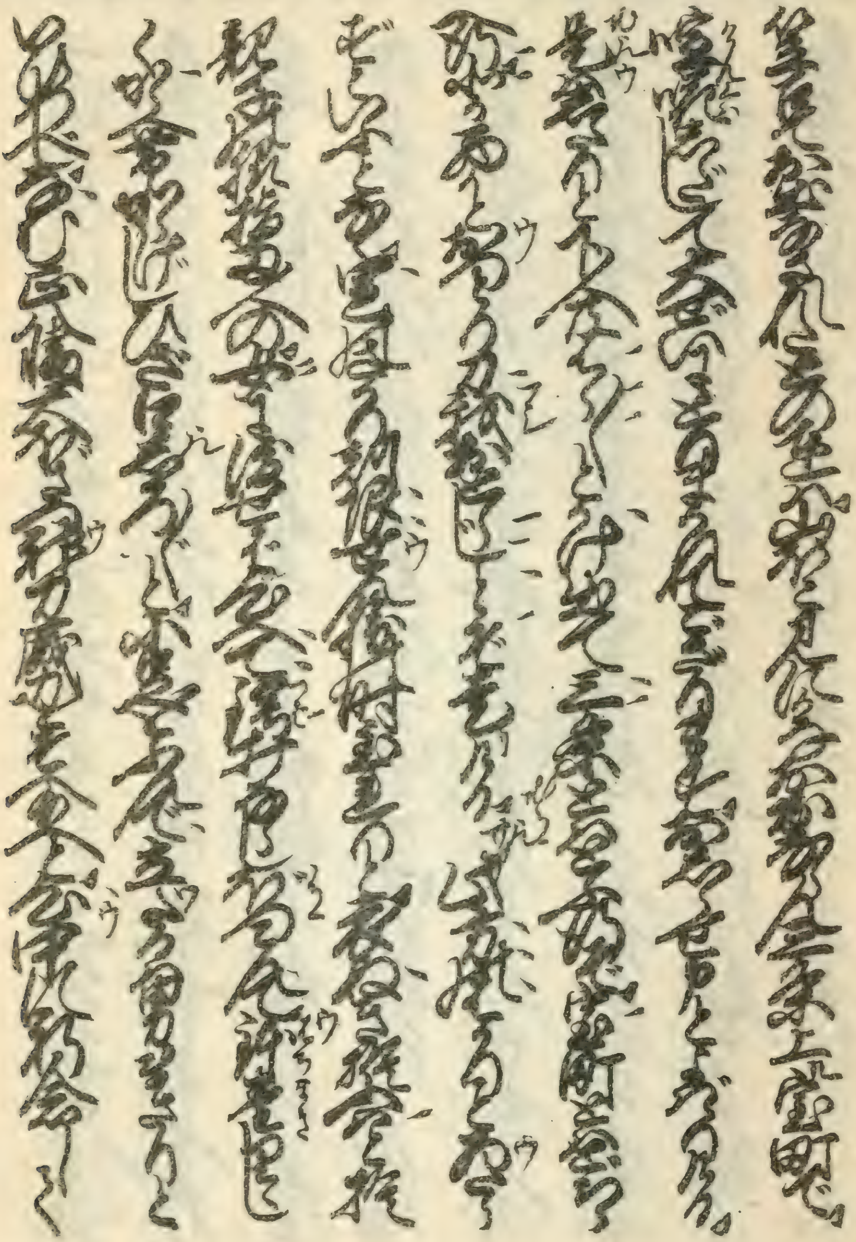


お國の殿様から鼓ゆゑに御加増があつたげな。是も師匠のお陰ぢやてて今度禮にござつたが。旦那様へ銀十枚内儀様へ壹歩五つ。俺等迄つらりつと三百宛あたゝまつた。わが身の一日朝から晩迄咽の穴の痛い程。觀音經を讀みやつたとて三百は貰やるまい。さらりと經を取置いて手鼓なりとも打つたがよい。今からでも鼓を打ちやと。問はず語りの口早に。フシ言ひ捨て内に駈入りける。彦九郎打領き様子は聞いたり今からでも。鼓を打てとは吉相よしと フシ皆々呼き勇みける。時を移さず客人は上下脱いで脇指ばかり。編笠被き只一人四邊を忍ぶ風情にて。立賣を

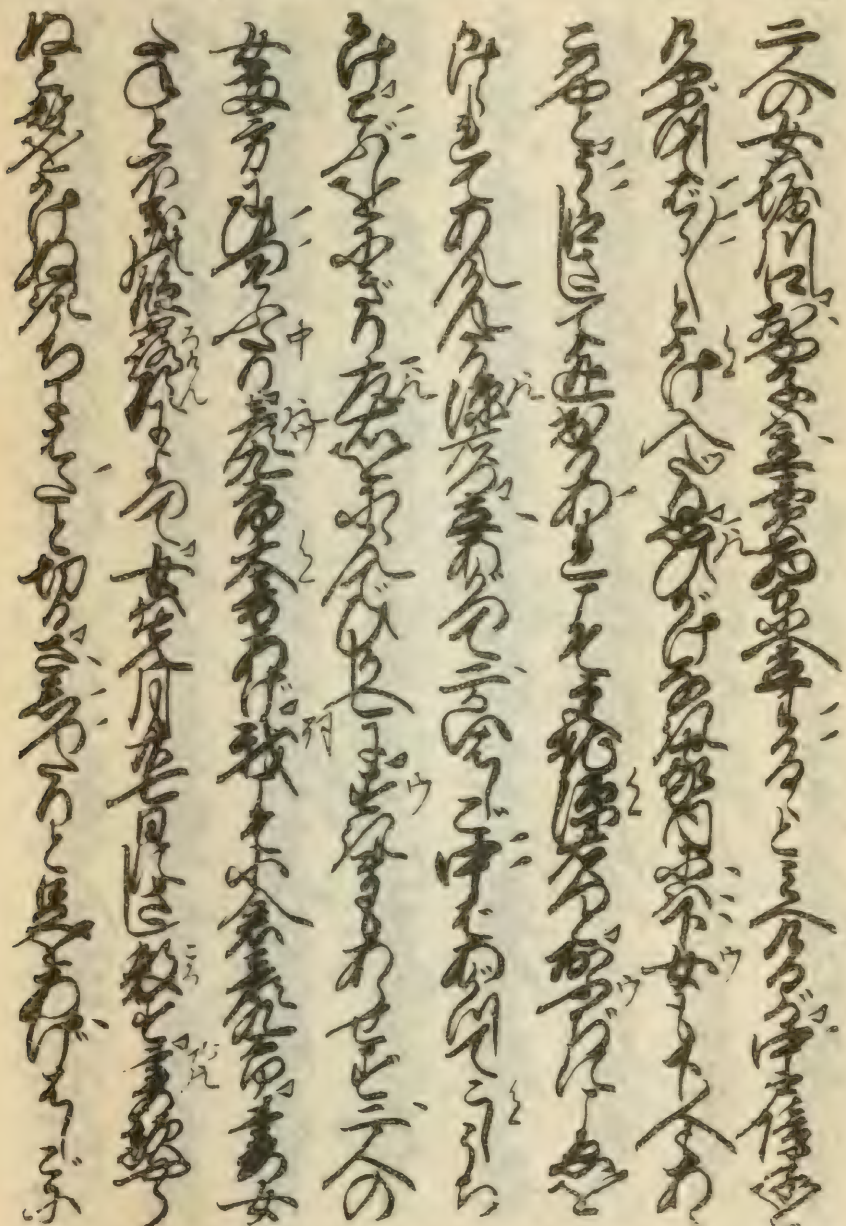
東へ洞院南へ下りける。人々一所にこぞり寄り是はきつと推量するに。只今の侍が下人どもを殘し置き。表に槍も置き乍ら其の身は是に居る體にて。祇園會の山鉾を見に行くと覺えたり。七八人の下人ども止まつてあるからは。なか〳〵容易く討たれ難し。如何はせんととり〴〵に小聲になつて談合す。文六堪へぬ若者の。斯樣に言うてはいつ迄も本望遂ぐる時節はあらじ。下郎どもあらばあれ目ざす敵は只一人。助太刀あらば撫斬のそれからは運次第。いで斬入らんと驅出づるやれ待て思案出來たりと。押鎮めて彥九郎また門に立ち暖簾あけ。是申し賴みませう。先程是より編



笠召してお出でなされた殿達は。山鉾見にがなお出でならん三條上る室町で。喧嘩し出して大勢に取巻かれてござります。お知らせ申すと呼ばはりける。地是はしたりと下人どもはらく〳〵と駈出でて三條とはどう行くぞ。室町とは何方へ行く。北か西かと追取刀フシ我劣らじとぞ走りける。地サア此の方の謀略當らずといふ事なく。運の盛り剋限先勝の時到れりと。衣服捨てふはと棄て親子の脇指兩人の。女に渡せば心得て鍔打鳴らしほつ込んで。鉢巻襷々しく抱へ帶からげし膝口しろ〴〵と。小足を踏んで立つたるは男勝りと謂つべし。南無正八幡大菩薩神力威力を添へ給へと。心中に祈念して

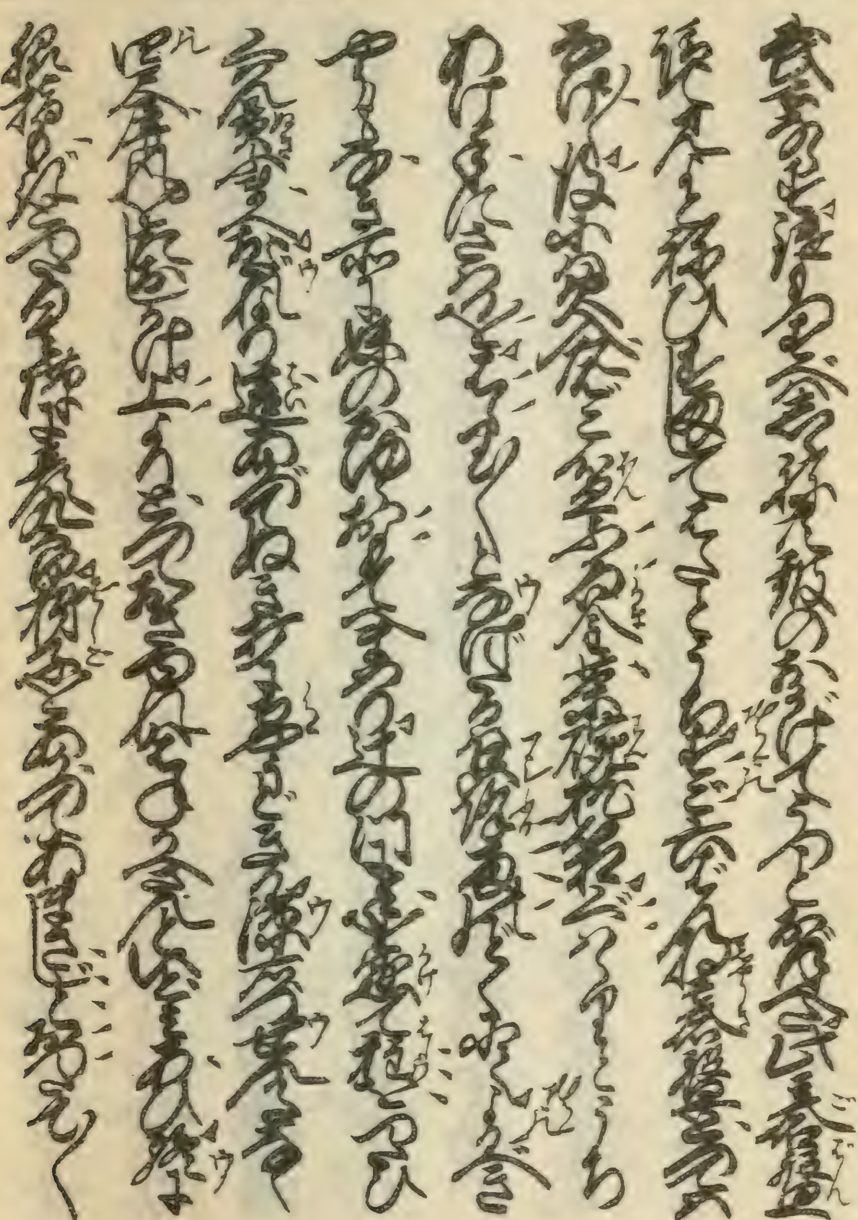


二人の女は堀川口。親子は立賣西東へ立別るると見えけるか。中戸障子を蹴破つてばらばらと駈入つたり。思ひがけなき家内には下女も下人もあゝ怖やと。裏口さして逃出づるあれこそ宮地源右衛門と。お藤に聲をかけられて安閑たる源右衛門。立上つて二階梯子半上つて履打かけ。傘を握り左右を睨んで控へしに。隙間もあらせず二人の女兩方に引つ添うたり。彦九郎大音あげ。詞我こそ小倉彦九郎。妻女種と不義の段露顕によつて。女は先月廿七日に刺殺す。地妻敵やらぬと聲をかけ抜打にはたと斬る。さしつたりと足をあげ梯子に

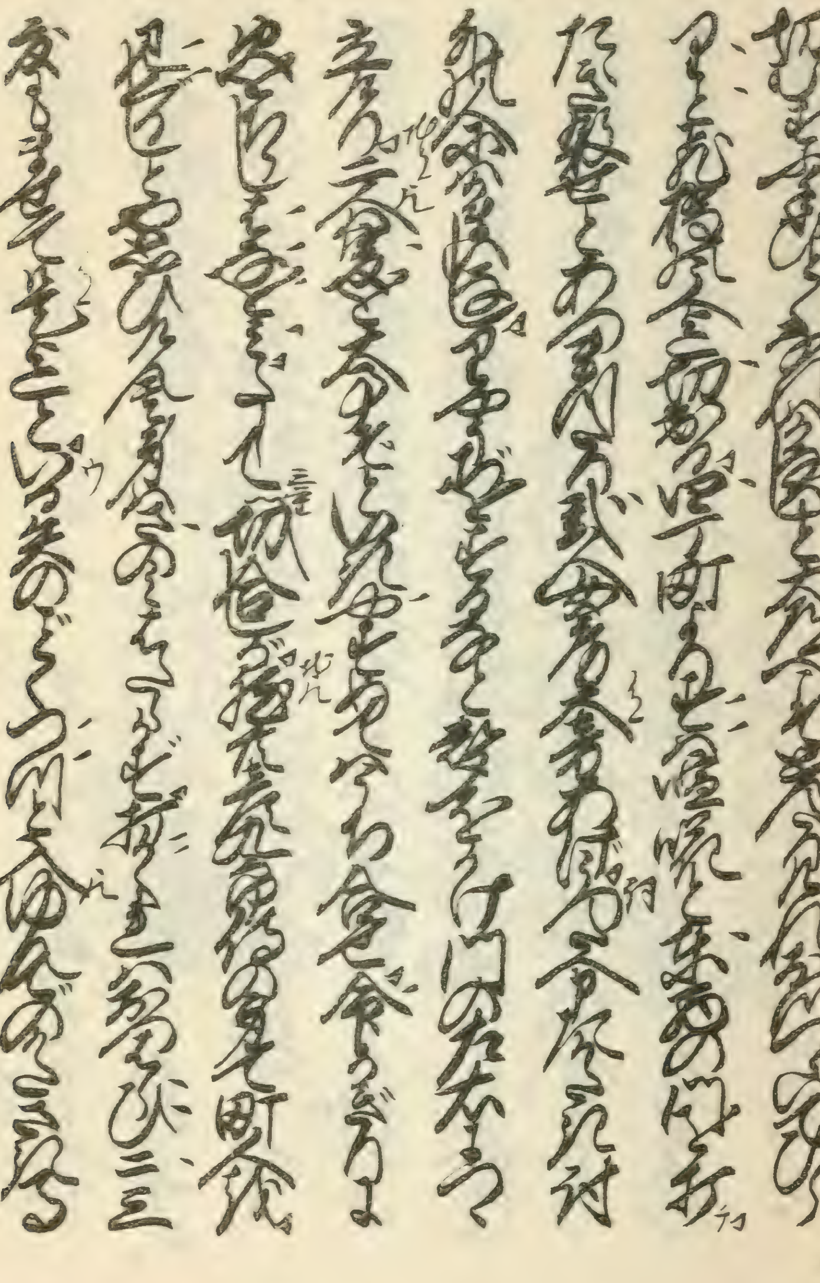


手をかけるいやつと。二階へ上るを追つすがい上らんとせし所を。源右衛門が女房かけたる長刀押取りのべ。上げは立てじと斬結ぶ下人どもは物間より、寄棒杖よ簓よと支ゆるも棚となり。ためらふ内に源右衛門蟲籠窓より手を出し。軒に立てたる槍おつ取り上り口より差下しに。上らば突かんといふまゝに眞下しにぞ突きかけたる。彦九郎あざ笑ひなんの己れが鼠突。皷の胴こそ握るとも槍の柄握り習ひは知らじ。身の好いたる細工槍手並を見よと。蛭巻よりかつしと切つてぞ落しける。もの〳〵しやと腕の力碁盤片手に振上げて。こりや我は元より

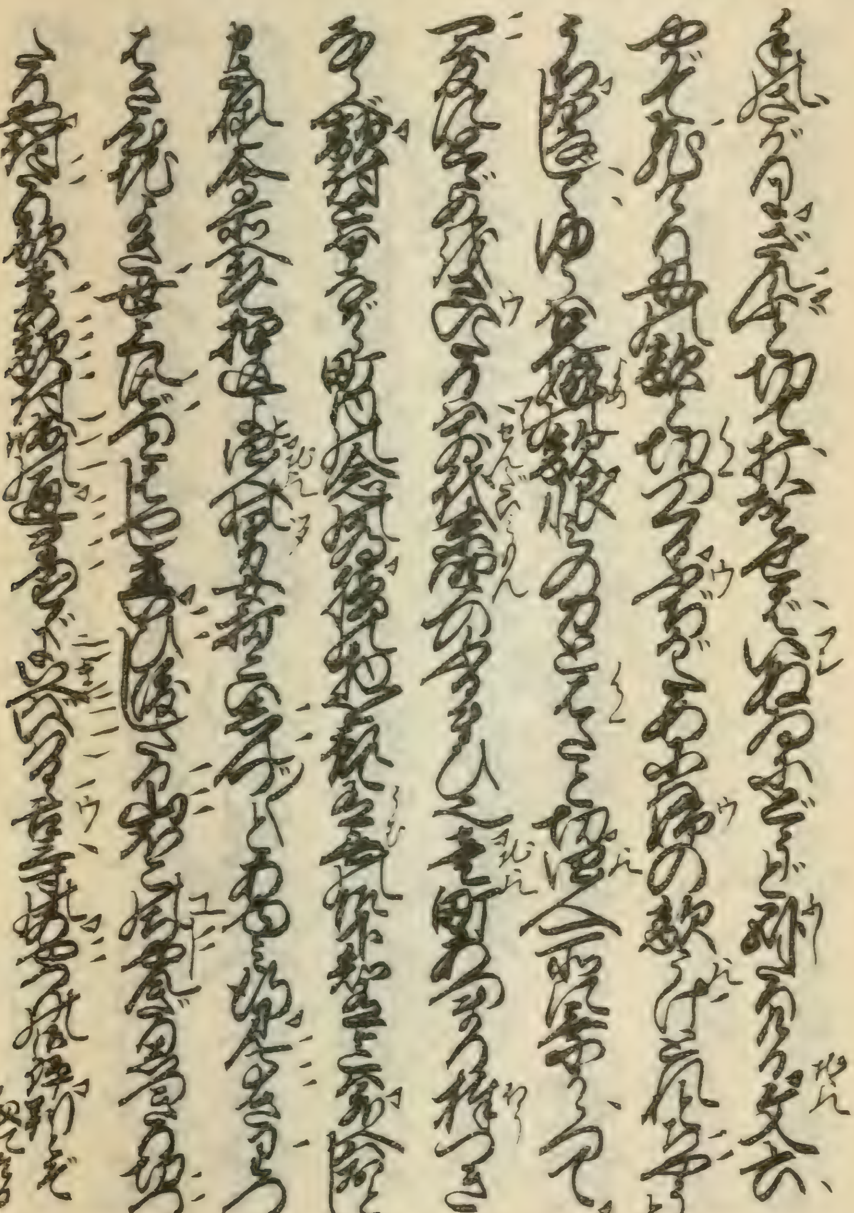
武士ならず、輪持つ衛士は知らねども彼のお蔭で打つ事覚えた。此の碁盤受けて見よと狙ひすましてはたと打ち。地 雙六盤将棊盤取つては投げ〳〵、後には火入煙草盆風呂釜茶碗枕箱。ぐわらりと打あけ手にさはるを。はらり〳〵と投げたるは フシ只降る雨の如くにて。地寄るべきやうも無き所に妹のおゆら表へ廻り。辻の門に手をかけて柱を傳ひ閂（くわんぬき）ふまへ。庇より這ひあがつて抜打に丁ど斬る。源右衛門詮方なく四尺屛風を倒しかけ。上より取つて抑ゆれば跳ね返さんと挑み合ひ。終に脇指もぎ取つたり其の隙に彦九郎。梯子を上つて餘さじと追つたて〳〵



斬結ぶ。手ひどくなれば敵はじと大道へこそ飛んだりけれ。追つ續いてひらりと飛び橋の上迄斬出づる。四丁町よりすは喧嘩と東西の門を打ち。毆き殺せと集つたり二人の女房大音あげ。詞 訴へ申した敵討外の人には構ひなし。聊爾をするなと聲をかけ門の左右につつ立ちけり。地 二人は爰を大事ぞと息休めては打合せ。命限りに火を散らし花を。みだして 三重 へ斬合ひしが。地 然れども彦九郎侍の身で町人を。見苦しとや思ひけん其の身はさのみ働かず。打懸くれば追つ拂ひ二三度揉ませて是迄と。射る矢の如くつつと入り弓手の肩先馬



手の下りに。ざんぶと斬つて落せば フシ犬居にどうとぞ伏したりける。地 文六續て飛びかゝり母の敵と斬付くる。藤がためには姉の敵受取れと丁ど討つ。同しくゆらは兄嫁の敵と恨みの刀とはたと斬る。四人一所に乘りかゝつて。一度に止めを刺いたるは フシ前代未聞の殺舞なり。地豊町集まり棒つき並べ。敵討とは申しながら町内の念のため、腰の物を預つて有無の御下知ある迄は。外へは落し申されず會所へ取つて押込めよと。地ツメ四人の男女打圍ひしんづくと歩み行く。見事さ立派さ心地よさ世上にはつと囃し立て。言ひ渡したる山鉾のちやんぎりしつきり斬つたりや。討つたり敵妻敵討咄の。通眞直に言へば言はる舌三寸の。操の御評。判とぞなりにける。



右之本令吟覧須句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也

竹本筑後掾

重而予以著述之本令校合候異全可為正本者歟

近松門左衛門

大坂高麗橋壱丁目 正本屋 山本九兵衛

山本九右衛門版

右之本令吟覺頭句音節墨譜
等不殘筆匡令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾 竹本 書判 博教

重而予以著述之本令校合候
畢至可爲正本者歟

近松門左衛門 信盛 花押

大阪高麗橋壹丁目

正本屋 山本九兵衛 版

山本九右衛門 版

あとおひ心中 卯月の潤色

上巻 末期の道行

ヒロフシ今ぞ捨つる。身にも恐ろし犬の聲。辻を隔てし見返れば。あれで生れし町所家の。馴染も。フシ十五年。其の春夏の此の月に。忌び月とて物忌ひ。色地しの字をさへも嫌ひしが死して死様を知る人に其の死恥も。つゝましく。太夫其方の髪乱れずや。いや其よりもおの様の。鬢迄て付けてかき揃てこ。死んだ跡迄好い殿と。人に言はさまフシほしあかり。今宵の月を。月月に。待ちもしも逢に引きかへてコハリ冥途の。使我々を待つらんものとかきくれて。涙雲ゐの十七夜。フシ二人か胸に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも。スヱテたとへ佛になるとても。色ヲクリ急ぐ契りのこがや町。地本町筋の軒深く。思ひしみたる。二人連れは埋よは高し

安土町。ワキ生れ代りて又いつか。太夫憂婆の値の備後町。ワキ思へば我も元服し太夫私も若い殿貴つけて通れし賽の。河原町。太夫三途の瀬戸の淡路町。ワキ越ゆればば親の古里の。太夫名にも別るゝ平野町二人暗近き時太鼓と。道修町フシこれやこの。修羅の太鼓の。鐘かと共に轎く袖と袖フシ抱き付いつゝ泣くばかり。太夫聞けば私も母様の三十過ぎての初子とや。二人其の實かや馴れそめてフシ一夜離れた。事もなく。交す枕に子胤の無いか　ヲクリこれもタヽキ生さずの數ならば。根を掘る竹の伏見町。太夫高麗橋の西東。ワキ床も定めぬ。二人か身はこれも世責る習ひとて。太夫浮世小路の憂き契。太夫迷うて歸る其の數寄。二人品ある中にも素な人を待つ宵の、浦のタ

なぎに。太夫憂くや浪隠し身をこがす。ワキそれは東の。二人物語り耳に聞きたるばかりぞや。そもじも我は難波津の。貴賤群集のみるめかる尼が崎町過書町に。はや北濱の中の島オクリ明日は。色天満の橋々賣りて。梅田の／＼堤を築めし。紅葉傘屋のな女夫の心中。男廿一おかめは十五。年に合はすりや。いたづら／＼おやサア繪草紙ゐ。地よその口のは。フシア餘所事に。買ひ求めては戀えし此の身の果を言賣に。色地誰が備付けて田舎迄唄ひ流さん蜆川水も濁りて此の世へは。いつ歸りすむ根なし草左手は。無常の煙草と。棄しからぬ身は惜しからず。太夫灰となさうか此の肌。ワキ煙となるか此の形。太夫惜しや。ヲキいとしや。二人悲しやと。引合ひし手をなほしめてフシ涙の。鶏の泣き聲です。鼓の小鳥。川千鳥音法師も啼きなで。はや東明も近付けば。小田守る樋に忍ばんと。右へ下れば割丹の日にやさゝらん行先は。はや金龍寺の石垣の

勧請ゆする折なれば。今はせん方夏草の。人目堤の下蔭をスヱテこゝぞ　夫婦が最期場と。フシ泣く〳〵。休らひ立ちにけり。地お龜は夫の顏を見て連立つ冥途の道とは知れど。いま今生の別とて言ひ度い事の何やらが。胸にはあつて口へ出ず。飽く程顏が見て死にたや心なの短夜とフシ身を投げしかけて泣き居たり。ア、愚かや愚痴やあさましや。永き來世があるぞかしさりながら。心にかゝるは其方の父御。二人ともなき一人子を憎や憐めが殺せしと。さこそ恨み憎しみの。これ罪障となるぞとてフシ共に平伏しな。きければ。いや父樣は男氣の思ひ諦めあるべきが。いとしや在所のお袋樣姑なりとて一日の。給仕へした事もなく。大事の子をば嫁ゆゑに。失うた殺したとお叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母樣の力となるはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲しみ日でも眩はぬかどうしたと。胸に塞がるこれ二つ。又母樣の十三年觀音經を書きませう。佛になつて下さんせと墓に向うて約束の。これが違うた何やかや斯く迄重き罪科の。閻魔の前には鐵の帳に付くと聞くものを。善い所へよも行かじ火水の地獄も厭はねども。夫婦別れて行かうかと。これのみ猶も迷ひぞとスヱテ聲も惜まず歎きける。さすが男は力をつけ。詞一つに行かうと別れうと皆一心の向けやうぞ。氷の地獄火炎の地獄劍の山へ登るとも。取り交したる手は放さじと。心強くは言ひけれどまだ蕾む花出づる月。玉のやうなる若い者若い女の顏是なさ。有らるゝも宥むるもフシ分けて分たぬ涙なり。地あれはや東も白うだり　サア念佛と言ひければ。心得たりと懷中より剃刀二挺取出し。是も母樣の額たれとて譲なり。私は是で死にたいと泣く〳〵出す其の中に。向ふの野道を人通ふあれよ〳〵と心は急く。二挺の剃刀一つに取り南無阿彌陀佛と引寄すれば。お龜は常々信仰の南無觀世音菩薩樣。かゝ樣の戒名教譽授倫信女。一つ蓮に導き給へ南無觀音樣觀音樣と。手を合せて待ちかけども男は目くれ[illegible]きスヱテ只泣くより外の事ぞなき。地エヽ憂き目を見せて何事と。夫の手を取り我が咽喉に押當つれば思ひ切り。南無阿彌陀佛と笛のくさり。剃刀の刄も折れよと一抉りは抉りしが。若き者の悲しさは止めの急所を知らずして。まだ息絶えず悶ゆるを。劍の口を隱さんと抱への帶をくる〳〵と。二三遍引廻すフシ憂き目の程ぞ不便なる。我もやがて追つ付かんと咽喉に當つる剃刀の。刄は鍔と折れ碎け皮肉ばかり切れけるを。力を入れて突きけれどもフシ徹りつべうはなかりけり地南無三寶と剃刀捨て側に拔置く脇指の。鞘をもつて引上ぐる鍔は重し手は弱る。はづんではぬる勢に脇差拔けて踊の口の。井出の水草の漲つてざんぶとこそは沈んだれ。エヽしなしたりこは如何にと這ひ下る堤の露。こぼれし血に足辷りフシ池へどうど落ちたりけり。地池は深くて

泥深し底の脇指尋ね兼ね。浮きぬ沈みぬ漂ひしが今を最期の眼にも。夫を思ふお龜が心引上げんとや思ひけん。這ふ〳〵岸に寄ると見えしが眩む眼に氣も亂れ。同じく池へどうど落ち互に助け引上げんと。抱き上ぐればどうど伏し。かき上ぐればかつぱと伏し心ばかりを力にて。なう與兵衛樣〳〵お龜〳〵と呼びかはす。たえ〴〵切るゝ息の下。此の世からなる地獄かやあはれ果敢なき三重〽有樣なり地朝出の土民が見付け出し。ヤレ心中と呼ばはる聲に里人下り合ひ池に飛び入り引上ぐれば。女は死して眞菰草菰や莚に死骸を埋む。男は淺疵半死。殺してくれ死なしてくれと。泣き叫ぶ間に緣者一門かけ付け〳〵。北久太郎町心齋橋古道具屋の跡取。聟養子ととり〴〵に見物人の山をなす。かくてはすまずと與兵衛を駕籠に打乘せ存らへし。かひもあるかや蜆川跡しら。なみとぞ三重〽成りにける。

中之巻

〽廣がりし。フシ浮名は何と。地すぼめても傘屋夫婦の心中と。唄にうたはれ繪に賣られ。或は狂言淨瑠璃のフシ三十五日にはやなりぬ。地父長兵衛は一人子を敢なくなせし其の悔み。聟與兵衛が變も亦伊達堀の伯母諸共に。傳三兄弟引連れて河内の親の手に預け。天王寺の東門をフシ大阪の方へ歸りしが。地下女のふりは神子町を見やりてわつと泣出し。詞申し伯母御樣お今女郎。今迄は物見見物物參り。又は此のよな時節でもお龜樣も打揃ひ。地びらり帽子に加賀菅笠大振袖の後帶。田舍者でも見返りてお供に附いた私等まで。ほんに肩がいかつたに大事の花を失うて物足らずなお供には歩けど足を引戻す。いつやら此處の神子町へそれがお供の仕納か。冥途の道の一人旅誰がお供しませうぞ。おふりどうぢやかうぢやと愛想らしい聲つきが。耳に殘つてあるやうな元結一筋紙一枚貰はずに貰うて使うたものお龜樣に別れてから。五分で買うた塵紙を。涙に拭ひあげたとてフシ口說き。立ててぞ歎きける。地伯母も涙の乾かぬに又言ひ出して泣かしやるか。誠にいつぞや口寄に此の神子町へ來たと聞く。それもかうなる約束ぢや。最期の時は親伯母に言ひ殘し度い事もさぞ。問うて取らせんいざさらばと。冥途の闇の黒格子オクリ辻が〽もとへぞ立寄りけるフシ神子の内には。地心得て茶を持つて出る煙草盆。文庫の蓋に梓弓奥より神子も立出でて。詞御祈禱か口寄かお志の精靈は。地目上か目下か古い佛か新佛か。神降致してはお十二銅が一包。御潔秡が百二十フシお望み次第と言ひければ。アヽ〳〵禮錢はどうなりとも。三十五日の新精靈荒血の上で死したる人。よう寄らつしやれ寄り給へと。各數珠に手をかけて。スヱテ聽聞するこそ哀れなれ。神子口書千早振御潔秡の道淨め。天清淨とは水火の淨め。地清淨とは屋內の淨め。內外六根清淨とは世になき魂の道しるべ。六道四生のフシ淨

のぞかし。忝くはましませど神と佛は夜と晝。娑婆と冥土は日光月光出づるも入るも闇は道。娑婆往來八千度[illegible]の千[illegible]弓。此の弦音に寄り來たはスヱテ梅田に。屍さらしなや。伯母様の手向有難や。詞なつかしの父御前。古の枕の與兵衛様忘れがたなき昔へは。生口寄せた者なれど。今死口に寄人が語り度いぞや聞かれたやなう。ワキ詞梅田に屍さらしなとは我があい月の面影よなう。地姪一人伯母一人何とて我に知らせもせず。不慮の死を召さつたる。目の見えぬ我なれば フシ姥捨山の恨めしや。太夫詞山の枯木の一本立母なき身には伯母様を。天とも地とも頼めども 地ふぢの木柱茅屋の雨。人こそ知らね屋の内に。直で立つたる人はなし。詞先へござつた母様の第三年も經たぬ間に。出船は遠く入船の親しうなるは世の慣ひ。此の帽子寶の親仁様内の今めに廻されて。こなたと女夫は雨夜の星どこにあるやら無いやらで。死なねばならぬ内

伯母様なれば親の[illegible]。[illegible]見になれとの[illegible]、我が名は[illegible]母も與兵衛様はおいとほしや。一代だけに添うて二度の死をなされうか。再び憂き死地なさせうかと フシこれが。迷ひとなるわいなう。ワキ詞イヤ伯母が歎きもそれ一つ心中の作法にて。死損ひし片々は試物になると聞く。地與兵衛が死を衰生し本懐したる其の後に。試物にならたらば伯母は何とならうぞや。詞其方も伯母が可愛くば片時も早う一途に。地取殺してはなさたもらぬぞ。地いやなう世間の心中とそれは違ひがおらかねの。金銀づくの勤の身奉公人や主ある人、娘子などの逢はれぬ仲、うろたへ死なぬ心中は人殺と同然の。罪に沈むも フシ世の作法。幼馴染のこち女夫比翼連理の仲はよし。何に不足はなけれども内では誰が點を打つ大鎌の犬めらに。懲り果てて死ぬる身を言はゞ面々自害とも。心中の外の心中ぞかし。詞町衆在所世間へも此の歎きを言

ひけれども。與兵衛様の命を助け心中果させまして。詞朝晩回向が受けたやなあ。詞そこに噂ふ兄弟の犬どもを。追出して下さらば。千僧萬僧百萬僧のとひ弔ひにも増鏡。黄泉の曇が晴らしたやなう。ワキ詞いやこれなうお龜様。女夫の衆が此の肉を[illegible]て裂いて飲むやうに。言ひたいがいに言ひこめて死んでもまだ言ひ足らぬか。榮耀が餘つてこなた衆が。ほたえ死ぬさるゝを俺兄弟が知つたか。それに何ぞや兄弟の犬めらとはヲヽ妾や犬ぢや黑犬ぢや。地試物になる與兵衛の身體をがり／＼と噛んでやろ。梅田堤で其方の死骸。噛まいで殘り多いわいなう。太夫地なう死人に妄語は無きぞことよ。詞恩を知らぬは犬畜生身の皮剝いでも母様の。御恩を思はゞ幡天蓋。袈裟の一重も上げはせず着衣裳迄もがり取り。家一杯に荒れ鼠父御をたらす見苦しや。詞それに弟の傳三めが旦那まさりにとぼし立て。提燈に鈎連と主ある我等が袖褄引き、與兵殿を[illegible]ひ

て夫婦になつて家の跡。地繼がうというた
を忘れたか。こちと夫婦は下人にて今兄弟
は旦那顔。車は海へ船は山みな逆さまの憂
さ辛さ。語れば親の恥曝し。言へば言葉の
くずいをの。夜の衣の我が夫の 上地命を助
け出家となし。家を暗ます黒雲を フシ拂は
ば。晴るゝ胸の月 ワキ地守りの神と木綿づけ
鳥の別れは又の逢瀬あり。太夫今は返らぬ
三途の河 ワキ影はとまらず 太夫手に取られ
ず。二人兵士の使繁ければ憂き世の名殘是
迄と。梓の弓の末彌に フシ弦走りして失
せにけり。地伯母は涙に沈みながら神子の
前とも思はれず。詞コレ長兵衛の邪見者亡
者の寄口聞きやつたか。我は其方の姉ぢやや
ぞや。身こそ貧なれ一文一錢合力は受けま
いし。なに輕薄が言ひたかろ。地現在弟に
暇機つけ。内外の者に追從するも母の無
い姪子ども。可愛がらせう爲ばつかり。詞
に一度强ひて二度。三度とは フシ行かねど
も、地門のきよたつも見て取つた此の擱み面

兄弟が。お龜女夫を踏付けに虐待め廻すと
いふ事を。盲でさへ知つて居る其方に二つ
目は無いか。但し知つての指圖かお龜は其
方が死なした。お龜を返しや姪返しや。如
何に妾が可愛いとて我が子に思ひかへると
は。慘いぞやとせきあげせきあげ／＼ 地泣
き叫び側なる竹杖おつ取りて姪の敵と長兵
衛を。散々にこそ撲つたりけれ。傳三も
今も縋り付きこれ申し伯母御樣。詞人中と
いひ女中の身如何に弟御なればとて。地近
頃非道千萬ともぎ放す手を振りほどきヤア
非道とは誰が事その非道といふは己れ等兄
弟同じ女子と生れても。己れ等とは違うた
ぞ善惡は嚙み分ける。エヽ扨此の伯母が手
前ともかうもするならば。お龜夫婦を引取
つて分立つて商させ。公事みやしても己
れ等にがや／＼口を聞かせうか。貧の病に
肩身もすぼり可愛や氣弱な甥姪を、踏み付
けにさせたよなあせめて片目見ゆるなら、
立居[illegible]に氣をつけても。かうやみ／＼と

は死なせまじ其の胴慾な心からは。二人が
死に出る體を見ても見ぬ顏しかねまい。根
めしの者どもやと。盲打に毆り打ち／＼ ツ
シ聲も。惜まず泣きけるが。地不便やお龜が
存生に。己れ等が驕る面たゝきたからう撲
ちたかろ、若い身なれば齒ぎしみして、
怺へた心フシ 思ひやる。地是はお龜が打つ
杖と。折るゝばかりに四つ五つ又丁々と打
ちつけて。今は打つても叩いても死んだお
龜が歸るにこそ。よしなき罪を造りしと杖
をからりと投捨てて フエテ前後不覺に、代
し沈み聲を。ばかりに歎きしは理。せめ
てあはれなり。至極につまり一言も傳三兄
弟詞をなくし。伏目になれば長兵衛もやう
／＼涙を押止め 詞道理とも尤とも昔來か
ら[illegible]なり。此の上に身に代へて與兵衛が命
を助け。出家させ[illegible]が願を立て申す 地落
髪の後は今兄弟家を追出し申すべし。外聞
といひ親の身でのめ／＼生きて居る心。伯
母御推量遣はされ[illegible]又さめ／＼と泣きけ

れば。ヲヽそれはせめても其の言葉違はぬやうにフシ頼むぞや。詞ハア神子殿へも面目なや。いつぞや此處へ生口寄せに參つたげな。地美しい娘こそ今大阪の口の端に。かゝる梓も緣ならめ拜んで下され頼みますと。出づれば神子も門送り。いとしぼさまやと諸共に思ひの數も百二十。袖に涙を包み錢繫がる。因果や三重〽めぐり行く。

フシ月にも日にも。地秋風と捨果てたりし與兵衞が。生きがひもなき身なれども親伯母の心默止れず。髮剃りこぼし發心とげ妻の菩提も我が後世も。助け給へといふ文字その名を助給法師と改め。再び難波の古里へは踏み返さじと足曳の。大和の國平群谷大念佛派の庵室にフシ知邊を求め閉籠り。妻の位牌の手向草。地幽々たる谷に下りては去此不遠の水を荷ひ。盤々たる山路に薪を拾ひては。十萬億土の月を攀ぢオクリ宿に。〽あこがれ霞に臥し櫻が。とざす柴の戸も。躑躅に明けて今年も早や。フシ卯月半になりにけり。地相住の道心は二三日以前より。石山參りの留守なれば助給一人佛前に。心も細き鐘の聲廬山の雨の世捨人に。捨てても捨てぬ面影は夢ともなく現とも。なき人こゝにあり〳〵と昔を見るも。次第〽歸るさ知らぬ死出の旅。〳〵。露の仇籠フシ急がん。地戀といふ其の投網にからまれて。浮かみもやらぬお龜とは。フシ餘所には人も水暗き。澤邊の螢。稻の殿。影かあらぬか簾のひまにオクリもるは〽卯の花白妙の フシ雪のな振袖ちら〳〵とありし。昔に奈良團扇。風輕々とフシ駕籠舁が。地昨日の旦那今朝の幻。夢の浮橋一つ橋跨げぢや。合點ぢや跨げぢや合點ぢや手にも。取られぬ朧駕籠。姿の山に肩かゆる フシ暖が袂も幽なる。地折節助給は念佛に氣を屈し茫然と睡氣ざし。物に化されたる如く。うつかりとして表を見れば。山家に見馴れぬ女中駕籠不思議と思ふ氣も付かず。身をも處も打忘れ フシとほ〳〵と。してぞ居たりける。地細谷川の小石原息杖の音喧く。川瀨が鳴るか空耳か女の聲にて高々と。詞北久太郎町古道具屋。傘屋與兵衞樣と申すお方は此の邊ではござらぬかと。地尋ねる聲と諸共に。フシ駕籠は庵に近づきたり。地助給は元より魂魄に氣を奪はれたる夢心地。詞ヲヽこれこれ其の與兵衞はこゝぢや〳〵と。地扇を揚げて打招くヤレ〳〵嬉しやあそこぢやげな。駕籠の衆頼みますまちつと急いで下さんせと。機嫌よげなる高笑ひ。程なく駕籠は庵室の フシ柴の戸口に舁き据ゆる。地簾をあぐれば妻のお龜にこやかなる翠の眉。芙蓉の目許わさ〳〵とさつても暑い事かな。それそこな樒の葉の水一つ。下さんせと。汗押拭ふと見えにけり。詞いや〳〵水は入らぬもの釜の下を焚き付けう。して先づ今日は駕籠に乘つて。何處へ行きやつた事ぞといへばされぱいな。今日は四月十七日觀音樣の御緣日。こな樣と父

様と仲の良うなる願だてに。二十二社廻りしましてその序に神子町の。黒格子お辻の方へ在所の衆が呼ばしやんして。ちよつと逢ひに寄りました。地去年こな様の生口を寄せてから近付きになりそめて。再々私を呼び出して父様にも伯母様にも。折々は逢ひまする神子殿さへ合點なれば。何時逢はうと任なるになぜこな様も折々は。呼出しては下さんせぬと。そゞろに咽ぶ恨みの涙。世になき人と氣も付かぬ。フシ夫の心ぞ哀れなる。地ムヽ先づ駕籠は預らうこゝへ通りやと呼びければ。嬉しや誰もなささうなと裾をかいとる身も輕く。下りゐの簾捲き返す フシ駕籠は。亂れて失せにけり。地助給内に案内し 詞これ見や今は此の身持。結構な事は無けれども。地浮世の世話を餘所に見て藜の羹紙衾。先づ盗人の虞れなく寝覺がよいと言ひければ。お龜は庵の體を見てアヽ本に扨も氣樂な住居ぢや。釜一つ鍋一つ谷から水を汲んで來て。山から柴を折つて來て米ごし〳〵と洗うて。俎板に白瓜菜刀取つて。てき〳〵〳〵ヤてき〳〵〳〵ヤ。てき〳〵しやんと揉瓜に。なれ〳〵茄子秋茄子嫁を譏る姑はなし。相伴は如來様火吹竹は一本。火箸は二本國中に怖いと思ふ今めは居ず。こな様と只二人寝たけりや宵から長枕。寝ともなくば起き通し誰が叱らうとも思はゞこそ。世界の樂とは此の住家女夫一所に居る内に。せめて一日片時でもかうした暮はしもせいで。今是が何になるなんぼ此の住居でも。女房が無うてはちつと事がかけませう。地鍋蓋と女房は無うて叶はぬ筈なれど。鍋蓋あつても女房が無い事のかけぬは不思議ぢやまで。ほんに忘れた其の筈ぢや。地道具と女房はあり合せ。尤ぢや〳〵道具屋の娘ぢやものと。とんと背けて身をすねて フシ口説しかくる目許なり。地色氣を離れた道心もどうやら心浮いて來て。詞ヤアいかう口が上つたの。かうして居ても面白い事芥子程も持ちませぬ。胡散な事があるならば拷問なされと言ひければ。それその口が憎いわいの。此方覺えが御座らぬか。伊達堀の伯母様の聞けばあの與兵衛は。うちの茶が飲み足らぬか茶屋へもちよこ〳〵遣ふとある。その言葉を覺えてか。これから尋ねる折もなく今で胸に溜つてゐて。地穿鑿せうばつかりに今日ははる〴〵來ました茶屋で此方の參る茶は新造の振か詰茶か。但しは白の白茶か。風呂で焚いた煎じ茶か私がやうた薄茶は。交した言葉もさめ切つて水くさうて飲まれまい。互にこの茶の初昔私は忘れはしませぬと。衣の袖にひつたりと フシ抱き付いてぞ泣きにける。地助給打笑ひ エヽ功にも立たぬ悋氣ぢやなう。詞今は左様の色茶もなく只お茶湯で暮します。地さらば釜を焚付けてお茶湯一服供へませうと。火打箱引寄せて。はた〳〵と打ちければお龜すつくと立上り。なう暑や堪へ難や愛着戀慕の迷の[illegible]縁に引かれて石の火の身を焦

すあさましや。 これまでなりと駈け出づる。地我を捨てて何處へぞ。暫し／＼と縋れども影も形もなき人の。ありとは見えて園原や伏屋に立てる我が妻の フシ位牌に。隠れ消えにけり。地ヤレお龜女ども。おかめ／＼と尋ぬれども木魂ばかりに姿もなし。ま一度顔を見せよかし。つれなの人やとかつぱと伏し フシ消え入り／＼歎きしが。やう／＼に正氣つき。詞アヽ狼狽たり南無三寶。思へばお龜は死したるもの。扨は魂魄止まつてまざ／＼言葉を交せしか。地不便の者の心やと。スヱテまた咽び入るばかりなり。地エヽ口惜しやあさましや去年一所に死ぬるならば。迷ふとも共に迷ひ浮むとも共に浮むべし。つれなくも死後れ中有の闇に迷はせし。詞今出家とはなりたれども知識知者の身でもなし。文盲不學の青道心念佛回向なしたるとて。亡者の功徳にもよもな・らじ。地 今日は卯月十七日此の命日のあけぬ間に。 今宵の中に自害して來月の周忌は。未來で一所に附き添はんと胸を定めて死を急ぐ。戀しき人は先にあり此の世に殘す心はなく。涙も零れね死用意 フシ無慚といふも愚かなり。地ヤア待て暫し大阪の叔父在所の親。恩深き伯母のあり狂亂したりと歎きをかけ。不孝の罪も恐ろしや。一筆づつの書置を殘さばやと佛前の。經机引寄せて油も細き燈火の。 消ゆる間近き我が命。 心餘りて言足らぬ。オクリ筆の〳〵すさみぞ哀れなる フシかゝる所に。地相住の道心石山より立歸り。詞なんと助給御無事なか。今下向致したやあゑいと。地平包どうど卸して休みける。助給はつと思ひしが。詞イヤ此の坊主はいろはのいの字も讀み書きならぬ幸ひと。まめで下向美しい今にいかい參りか。地在所の文を書きかけた釜にぬるみも沸いてある。洗足して休息あれと・言ひつつ筆を早めける。道心何の氣も付かずヲヽ構はすと遊ばせ。詞扨石山の繁昌京大阪が打ちあける。ヤアそれにつき戻りがけ大阪へ立寄り。此方の里へ見舞うた在所にも何事なく。長兵衛殿もお息災伊達堀の伯母御から。地懇の言傳進上物を渡さうと。平包押開き來月の十七日は。 お龜様の周忌盛物になされとて。詞これ菓子が二袋お齋でもなされうばと。大阪の名物櫃の上の切荒布。嵩高なばかりで賤安な物なれど。地これ齋にも非時にも重寶な。壹歩が二つ屆けます。梅雨も近づく土用前咽喉の痰が起つたら。此の藥を參つて隨分命延ばはつて。伯母樣の後世菩提を頼むとある言傳。詞これは又白縮緬の手巾帶。 衣の上によからうと氣の付いた伯母御樣。地必ず愚かになさるるな幸ひ文の序なり。皆々確かに屆いたと懇に遊ばせ。愚僧も一宿仕ります言傳どもは明日。 長道中の草臥我等は最早休みますと。 我が事ばかり言ひしまひ フシ奥に入りてご臥しにける。地此の間に助給は書置こま／＼と書き納め。伯母

よりの贈物一つに取つて押戴き／＼。位牌の前にも供養してスヱテ暫し絶え入り歎きしが。詞扨も／＼有難や役にも立たぬ甥一人。或時は氣を痛ませ心を盡させ身を碎かせ。地苦勞の上に苦勞をかけ一日盡せし孝行なく。不孝第一の某を勘當不興もし給はず。如何なる合縁奇縁にや親も及ばぬ御厚恩。送りもやらず自害して又もや歎きをかけん事。不孝の上の不孝の科日月の怒を受け。堅牢地神は大地を蹴破り奈落に沈め給ふべし。罪業深き此の身體と。我と我が身を掻き抓り喰付きてフン聲を。あけてぞ泣き居たる。詞稍更け渡る野寺の後夜八聲の鶏も啼き交す。曉方も近付きたり後れじものと位牌に向ひ。詞これお龜去年の五月に伯母御より。緋縮緬を下されて御身と我が肌廻り。死骸の恥を隱したり。地時しもあれ今宵また白縮緬の絎帶。これも二人申し受け永き形見と身に附けん。我も受取る受取れと位牌のひれに結びつけ。詞端を左手に確と絡みからう持つたる心こそ。最期は後れ先立つとも手に手を取つて行く道は。只一筋の白縮緬延さぬ時刻只今と。剃刀取つて押しあてしが。アヽ思へは名殘惜しの伯母御樣。身を達者に長生し後世弔へとて只今もお藥迄も下されし志を無下になす。御恨み御免あれ神も佛も御慈悲に。我等を地獄に沈めても伯母御の二世を助けてたべ。南無阿彌陀佛と剃刀を咽喉にがばと突き立てて。笛のくさりをはね切つたりまだ死に兼ねて目くるめく。苦痛はせじと押つ取り直し人脈筋を四つ五つ。聲をかけて刺通しうんとばかりにかつぱと伏しのつつかへしつのたれを打ち。苦む中にも妹脊のしるしお龜が位牌に抱き付き。周忌待たぬ花橘昔の人と短夜の。雲隱れして世の人の。袂しをるる藻鹽草書置。に名を三重へ殘しける。

助給書置　下之卷

詞古道具屋與兵衛入道助給。末期に親伯母の御方へ申し殘す書置の事。地つら／＼思へば。老木却つて春を迎へ。莟める花の先に散る世のならはし堅地の長持。嫁に傳はり出來合節櫃風呂の下の藏となる。老少不定の境會者定離の掟。末世一代教主の如來も。スヱテ遁れ難しと思召せ。それ一河の舟に棹さし。一樹の陰の相宿りも他生劫の縁と聞く。況んや親となり子と生れ。伯母と言はれ甥となる一日。長育の御恩は蘇迷盧の山よりなほ。フシ高しとこそは承る。まして多年の御面倒譬を取るに物なし。殊に去年皐月十七日不慮の御難儀かけ。繭し命を捨つる身のそん錄を。フシ餘所目には。榮耀者たはけ者。氣違者と人の譏り世の嘲り。親伯母の御歎き存ぜぬ我にも候はず。然れども生きて居られぬ心の内。今更申せば人を損ふ毀ち屋の。立つ方もなき夫婦の者フシ涙でくらす朝夕に。湯水も咽には錠前の。懸硯の海かへほしても書き盡されぬが我が身の上。二人が胸に埋木の身

にならずして誰人か。推量には及び申すまじ其の節お龜諸共に相果て申す程ならば。スヱテ二度の歎きはかけまじき。とても助かる程ならば。存らへ出家成就して御恩の伯母樣情の親。百年の御壽命過ぎ目出たく往生遊ばさば。御菩提を弔ひ奉るこそ。フシ順とも孝とも申すべけれ。地去年はお龜が憂を見せ。今年は我等が歎きをかけお心を苦め申す事罪に罪を塗り長持孝行の元値に外れ申すなり。さり乍ら師弟主從父子夫婦五倫の親みいづれ愚かはなき中に妻となり夫となり偕老同穴の枕屛風。鴛鴦の襖障子疵も破れもなき契。ハツミ今捨賣にはなり難し。殊にお龜と我等こと從弟同士の水入らず。鼠入らずの竹戸棚フシ釘も離れぬ仲といひ。去年最期の折柄も。一所と思ふ頼にて廿歳に足らぬ女の身。淸く相果て候ひしに。我等思はず存命しオクリ六道の。辻に只一人今や〳〵と。フシさこそ待兼ね申すにや。現に顯れ。夢に見え。幻に來り歎くさま。見る度ごとに片時も存らへてある心。思ひやらせ下されとよ。今は此の世に亡き妻を再び娑婆に掘出しする。小道具屋の身にもあらず無常の。風の荒道具。身蓋揃はぬ離れ物フシ憂き世の値打更になし。輪廻の輿の。置き古し地無明の夜市に賣り。さけられんよりはと今宵亡妻の。忌日を期して去年お龜が死したる剃刀。縁と縁とを合せ砥にかけ。廿二歳一睡の。夢をはらつて滿月を己れが。眉間に施し。今月今日朝刀のコハリ刃に滅し畢んぬ。悲しきかなや娑婆に親をば冥途に妻。未來に情現世に慈悲。中に憂き身を挾箱いつの。世にかは地一對の。フシ一つ蓮に生るべき。これも因果のコハリ車長持轟く穢土は假の宿。有漏路無漏路の中休み。割籠辨當地茶辨當フシはげぬ。間の戯なれば。誰か端に殘るべき。たとへ此の度存らへても重ね箪笥の抽出の。一重足らぬ如くにてお龜なければかひもなし去年一度に死したりと。思召し切り給ひ歎きも悔みも御止め。只佛壇に差向ひ夫婦の御回向あるに於ては。六尺屛風の隔てもなく眞直に受取り。先立つ妻の跡繼と成り共に三途のかは葛籠。一荷に手を取り打渡り西方淨土に一文字。越ゆるは下品下用櫃忽ち上品膳棚にいたら。んと思へば最期急げども。返す〴〵も伯母御樣御名殘惜しき梳家具。法界行器の。御回向偏に賴み奉る。南無阿彌陀佛彌陀佛とフシ涙を。そめて書き止む。切言同音毎日評判朝暮の供養佛法繁昌の回向を得るも其の身の果報と承る。

心中重井筒

近松門左衛門作

上歌 夜さ來いと。いふ字を金紗。で。縫はせ。裾に清十郎と。寢た所。オクリ裾に。清十郎とねずみ色。地京の吉岡紙子染。フシやぼてり柿か。薄柿か。正月前の際々に旦那殿は外が內。御神酒過して。かく〳〵と山衆といへば目が見えず。內に居やんす內儀樣此方人ばかりに打任せ、誂物も節季をも。どう仕舞はんす事ぢややら。フシ下心の惡い旦那殿。詞やい三太こりや何ぢや。茶屋へ行きやろが山衆を買やろが。旦那は旦那此方人は紺屋の手間取。何事もさらりつと淺黃にいうて居よいやい。ヲヽ喜兵衛のいやる事なれど。我が身は本を知るまいが。地體旦那の下染はの。重井筒屋といふ南の茶屋の弟で。地これへは入聟乳呑み小紋を持ちながら。人の海松茶も構ふにこそお內儀は結構者。柳樸竹にやつこぢやが。隱居の親仁が來ると。家內はしみ郡山染になるわいの。あのやうにほついてはやがて身代は。木賊色でおろすやうにフシなつてのけうと笑ひける。地酒漬に水も盡くかや我が宿へ。歸り紺屋の德兵衛急がしげに立歸り。詞これ庄介喜兵衛。埒が明かぬの〳〵。これにまだかゝつてか。何時ぢやと思ふ今日は師走の十五日。中の島の誂物ものも昨日限の約束。谷町の蒲團もまた持つて行くまいな。見世から誂への重井筒の暖簾も。地遅いと言うて腹立ちや女房どもは何處へ行た。エヽ鈍氣な一言俺が言はねばもうそれ程間があく。言ひ付けも見廻しも口は一つ目は二つ。これでは水も飲まれぬとフシ言うた所は見事なり。地下人どもはいつもの事。詞お內儀樣は槍屋町の姉樣へ。ちよつと行つて來う程に。お前に問うて蒲團地も持つて行けとの事といへは。地そんなら喜兵衛持つていきや。庄介は提燈持つて女房どもを迎ひにいけ。それ坊主めに怪我さすな負うて歸れと言ひ付くれば。あいあいいふもそこ〳〵ながらフシ皆々表に出でにける。地亭主も辻迄行くかと見えしが三十ばかりの女房と。何やら囁き咬きてオクリ連立ちへ內に入りければ。地女は亭主と座を組みて。お家樣顏して居たりける。年季の三太すつきりと合點せず。じろ〳〵見るを德兵衛これ三太こゝへ來い。つつと寄れと膝許へ呼びつけ。詞こいつはすんど利口者で言ふなといふ事は言はぬやつ。地それで人が可愛がる近付になる印に。何ぞ遣つてたもといへば彼の女さうやらして目許が利發に見えまする。何と顏見世見やつたか札買やる錢遣らうか。但し何ぞ餘の物かフシ欲しいかいの言ひければ。詞イエ〳〵私

芝居が見たけりや。六軒町の兄御様からなんぼ行かうと任ぢや。私や銀が欲しいといふ。ムヽ銀持つて何買やる。アノ銀貰うてか。銀貰うてから其のかねで。よそ〳〵のお山が一つ。地貰うて見度いとやらるゝぢやと フシ身をすくむ。詞これは出來いた易い事〳〵。して誰ぞ惚れたのがあるかサア言へ〳〵と。問ひかけられて恥かしがり。私が惚れたのはいろはの内にあるといふ。ヤアそんならばいろは茶屋か。イエ〳〵太左衞門橋筋に。何ぢや太左衞門橋にいろはとは。ちりぬるをわか。よたれそ 地つねなと吟じ返せばそれ〳〵。その次のらむ フシうけんだとぞ答へける。地これは上物上目利と豆板一粒はつとはづみ。詞ヤイ今こゝへ金持つて來る人がある。此の女子衆をお内儀様かといふ程に。必ずいゝやと言ふなゑ。扨この事を女どもにも傍輩にも。微塵も言ふ事ならぬぞ合點かと言ひければ。三太郎頷き勿體なや〳〵。地いふ事では御座りませぬ。若しも重ねて言ひ度い心出來た時々に。お前へそつと斷りませう程に。又銀を下さりませと。阿呆な顔でも損をせぬ フシ遣る粹よりは粹ならん。地時に表に頼みましよ。紺屋の徳兵衞殿は此方かと。地年配なる人體なり。ヤア治右衞門樣かお這入りなされ フシ御免といひて通りける。詞あれ女房ども内々の治右衞門様。其方の判なら銀貸さうと仰しやる。地お目にかゝつて置きやといへば言ひ合せてや彼の女。これはまあ〳〵御懇親な。尤も家も商賣も私の物とは申しながら。子なかなしたる仲なればもう今では屋財家財。皆主の物で御座りまする。かうお目にかゝる上からは私が請合。深しい事こそ此の家屋敷相應に。三貫目や五十兩は貸して遣つて下さいやせと。捿々合せる辯舌に口入喰うた顔付にて。詞アヽ〳〵これには及ばぬ事ながら。徳兵衞殿は入家と聞くかう致せば後のため。地又も用を聞かうためサア判をなされよと。手形を出せば徳兵衞。硯引寄せこれ其方の判。さらば先づ私 とオクリ互に〳〵印判 フシ明白なり。地丁銀四百目包の通り吟味なされと受取り渡しもう暮れまするお暇申そ。詞ちとお盃致しましよ。地重ねて〳〵預けます フシさらばと言ひてぞ歸りける。地さつと濟んだ目出度しと銀懐中に押入れ。詞これ三太。此の女子衆を送つて。ちよつと行つて來る程に門も閉めて火も點せ。地其のうちお辰が戻つたら湯屋へ行つたと騙して置け。必ず何にもぬかすなと。口を止めたる紺屋橋 フシ徳様早うと出でにけり。地所帶持つても色はなほ捨てぬぞ道理紺屋の妻。月も冴え行く夜嵐にあゝ提燈もよいわいの。宵寢まどひの小市郎竹が脊中にふら〳〵と。寢風引かすな大事の子 フシ萬年町に歸りしが 地問ひもせぬに三太郎。旦那樣はたつた今湯屋へと言へば。テヽ〳〵どうで湯か茶か呑みにであろ。法界の男ぢやと思へばすむと恨みながら。小市郎が目覺す

を。暖簾の奥の小座敷にオクリやう〳〵賺し寢入らせて　フシ我も着る物。詞着かへんと押入開くればこりや何ぢや。懸硯あけ廣げ夫婦の印判取散せり。これは〳〵と言はんとせしが四邊を見廻し押靜め。詞こりや三太郎そちに大事の物やらう。火を點して奥へ來いといふより早くあい〳〵。地さらばしこだめ參らうと小行燈提げ入る有樣。下女手間取は見送りて内儀樣と旦那の仲。あちらへ支へこちらへ言ひ兩方で物を摑み居る。彼奴は鋸商と。鋸屑の言ひがひなき　フシ猜みも下の役ぞかし。地此の家の隱居吉文字屋の宗德。代々傳る紺屋の形と共に禿げたる頭を下し。額に絕えし古毛拔喰ひかねぬ世も算用づく。此の家屋敷家職をば妹娘に槍屋町。姉にかゝりて隱居分薪の始末燈心を。日暮れて一人によつと來る内の者どもあれお辰樣。槍屋町の隱居樣の御出でといふ聲に。おうと言うて立出づる宗德尖り聲にて。詞入聟殿は何處へぞ。

節季師走内をあけて出るとても出す者が。これ二人めの聟ぢやぞや。あの孫の小市郎に父親三人持たしやんなと。地いふ顏の不興なれば優しくも女房は。夫の惡性押包み。詞なんの餘所へ行きましよ。方々の贈物もの内外の者の手は足らず。今朝早々から仕事して。風引いて頭痛するとて奥に寢て居られます。お前は何しに御出でといへばいやコレ只は來ぬ。詞たつた今其方が歸つた其の跡へ。堀江の口入治右衞門といふ者ぢや。此方の娘御聟殿兩判で銀四百目貸しました。若い人の事なれば。後日の念にちよつと知らせて置きますと言ひ置いて歸られた。聞くと俺は目が眩うて一服の藥を呑みさいて來た。地四百目といふ銀は何にするとて借つたぞ。喰ひ込んだかへこんだか女夫の仲の榮耀遣か。エヽおとましや身代は得持つまい。詞俺が談義參りして一文投げる賽錢さへ。進ぜうか進ぜまいかと。疊算置いて見て。たとへ算が合うても五度に

三度は投げずに仕舞ふ。側に居る同行衆がくわら〳〵投げる時には。錢を一文つまんで肩へ手をかう振上げ。地投げる顏で膽の長次郎錢は手に止つた。かう氣轉を利かせねば過ぎにくい身代。四百目は何にしたフシ行き端を聞かうときめらるゝ。地女房扨は丁稚めが話に違ひなしと。思ひ當れば姑ましさ寧そ言うてのけうか。いや〳〵それも慘い事。どうかかうかと急き來る間にスエテ先づ先立つは夫の可愛さ。詞アヽ親仁樣何ぞと思へば御山な。私等女夫が何に借錢しませうぞ其の銀はな。南の兄御の方に。廓から出た好い奉公人を抱へて。手附銀が遣り度いが世間ともに銀づまり。あの邊は利も高し殊に兄御は病中なり。詞私等が判では貸す人あるとの頼みやう。地銀こそはなるまいし判つぐ程は一門がひ。殊に私と他人なれば猶しも義理は缺かれず。又用無心もある物とそれで判をしました。内との者も聞くぞかし。千里萬里も違うたか。あんま

りな親仁様と　フシ陳ずる心のやさしさよ。　地徳兵衛は女房の歸らぬ先にと足早く。門口に立ちけるが內には舅の喚き聲。南無三寶と入りもせず暫く樣子を窺ひける。　詞舅なほも納得せずヲヽ女夫が言ひ合せ。親を騙して身代潰せ。地寢てゐるも嘘ぢや何處へうせたと穿鑿す。はてなんの留守なら留守と言はひでは。あれ暖簾のあちらへと。指させば宗德は。暖簾うち上げ。孫の事は氣も付かず老眼の何見てか。　詞ムヽウ。先づ職人に似合はぬあの

鬢付が氣に入らぬ。頭痛のする寢やうでない。地又くらひ醉うたか春は早々まくし出しや。あのやうな聟なら廿人や卅人は今の間に取つて見しよ。三日と一人寢させはせぬと呟き〳〵雪踏はく。内の者どももうお歸りなされますか。詞送りませうと言ひければ。ヤア道ならちと送つて。それ言ひ立てに夜食くはうといふ事かと。地門の戸明くれば徳兵衛虎落の蔭に隠れしを。それとも知らで歸りしはォクリあやふ〳〵かりける次第なり。地入れ違う

て徳兵衛つつと這つて羽織を後へひらりと投げ。實事の始は見覺えたり女房の膝許にむんずと居て。詞こりや最前からの次第門口に聞いて居た。留守の俺を寝てゐると。親仁の手前は男を庇ふやうなれど。職人に似合はぬ贅付な男を。身代りに寝させたは念が入つて忝い。入聟の事なれば家屋敷家財にも。芥子程も瑕はつけまいがうぬが命に傷つける。地たつた今間男を引摺り出して見せうぞと。奥に飛び込み何かは知らずわつと叫ぶを胸ぐら摑み。宙に提げ躍り出でどうど引つすゑよく見れば。こは如何に坊主頭の小市郎盆に買うたる踊の鬘。奴頭を振りながらかゝ様怖いと泣き居たり。徳兵衛も仕舞つかず言葉なければ女房は。宵より積る憂き涙スヱテ一度に。わつと叫び伏し フシ消え入る。ばかりに泣きけるが。地なう徳兵衛殿慘うござる辛いぞや。不義せうものと見据ゑたら。なぜ附き張つてもフシ居もせいで。元日から元日迄いのう行き處もある事ぞ。此方の留守の言譯にふつつりと事は缺く。隠居様の聲と聞き僞にあつたが幸に。此の子に被せて閨を隠したも私が智慧ではあるまい。氏神様のなされたと有難う思へども。親受けねば一シ生添もなし。地女房の口から推參ながら。言はば此方は人でなし。房と挨拶切れねばいかな傾城はかでもある事か。兄御の寺の衆も人讃意見もすべき身が。客衆とやらの妨になり身代の妨と。兄嫁御のねすり言スヱテ聞きづらや聞きにくや。アヽ詞それも道理又あとり月の騒動に。一家が寺へ退いての時見舞に行つて見届けた。餘のお山衆は押退けて房一人を大事にかけ。地こゝらで心底見せ顔にけば／＼しい仕方ども。側に居るは知つた衆此方より私が顔。阿呆らしう見えたやらまぶられて歸りしぞや。それに餘り踏み附けた先に房を連れて來て。女どもの女房の印判迄を引き捜し。納戸棚も見せさらし是が嬉しからうか。男と男の恥よりも隠しても隠し度い。女子同士に恥を見せ男は寝取られ寝間寝臺は見さがされ。阿呆の數々讀みつくされ是でも男の可愛いは。扨も如何なる因果ぞや今日の事が隠居へ聞え。私は親に叱られながら。科を負うて居る心。人間らしい氣があらば三十日の一月を。せめて三日はあく／＼に寝物語もあれかしと。心一ぱい理をせめて フシ情も。深く口説き泣く千々の。思ぞあはれなる。地徳兵衛一念發起して。詞ハツア あゝ誤つた／＼。地惡人とも業人とも盗人とも騙りとも。我ながら十罪人今迄も其方に恥ぢ。詞止めう／＼と思ひしが是程の瀬戸が無うてうか／＼と盡した。我一人思ひ切れば其方子供隠居のため。兄貴の身上我が身のため房めが後のためもよい。地そこを知らぬ身でもなし明日は伊勢の御縁日。今宵の月に蹴殺され三世の諸佛の御罰を受け。二人の親に冥途から睨み殺さるゝ法もあれ。ふつつと思ひ切つたぞ。詞今日の女も房ではない。人置の

娘を一角で傾けた。證據には其の銀こゝにありと取出し。地明日直に返辨し向後房とは通路せぬ。今迄心を無下にした恨みもつらみも許してたも。さりとては此の徳兵衛女房の罰が當つた。罪を免してくれよとてスヱテ手を合せてぞ泣き居たる。地女房莞爾と打笑ひ。詞エヽ忝い〱。挨拶切つた捨てたのと幾度か聞いたれども。地銀迄見せての誓文とんと心も落付いて。今日から本の夫婦皆悦んでたもやとてフシ嬉し涙を流せしが。地とても同じ事に年寄つて一夜の心も休めたし。大儀ながら隱居へいつて今の誓文一通。聞かせまして下されかし。是は私が御無心御恩に受けうとありければ。何が扨讓り受ければ我が爲にも親同然。ついちよつと行つて來うそんならさうして下さんせ。生薑酒して待ちませうそれ生薑おろしや釜の下。竹は手燭を振つて見る。酒の通路引きかへてオクリ夫は〱北へとヲクリ出でけるが。地辻にてふつと思ひ出し南無三寶。義理に詰つた女房のせりふ。尤と胸にこたへしより房が大事をはつたりと忘れたり。入相限に待て待たう此の手管違うては。生死の出來る銀いや〱親仁は明日の事。ちよつと逢うてと立戻る。詞アヽさうもなるまい。たつた今誓文立て殊に銀も手放したり。地先づ此方を仕舞うてのけうか。ハアヽ可愛や房がどうぞ銀の首尾なつて。卵酒飲むやうにしたい事ぢやと歎きしを。氣遣すなと勇めしが氣の弱い女子なり。こちらはまゝよと又立歸り。思へば〱女ども生薑酒して待ちますと。手づから生薑おろしたる志。不便なれども。辻を通つては又戻り。辻に立つたり歸つたり行くも歸るも定らず。どうせうか斯うしやうが酒いりつく樣に氣がなつて。胸がさまはす卵酒。心を二つに打割つて君が方へと走り行く。後は涙の卵酒のしろみに 三重

中之卷

〽月ははや。シ渡り初して。中橋や。六軒町の小夜格子唐の聖の日はく。色の徳には隣あり向兩側輝かす。フシ軒の挑灯目印に。昨日も今日も。明日の夜も。重井筒の釣瓶繩。フシくり來いとのよすがかや。地中に不便や房は憂き身のしなぐ〱を。心一つに苦勞の鰓が勇めば。力なく。片目で笑ひ片目には。涙を包む火鉢のもとフシ人待つ宵の火弄りや。地小夜も小六も浮き〱と。引裂き紙のひねり元結で火通を。詞火の字日野絹。房さま何と。私は[illegible]いまいまし。雛無垢冷酒引付火桶。地雲雀 鶸 比叡の山の。檜の枝に。そりや烏指か。鳥でないぞや身は丙午。詞又房さまのいま〱し。地[illegible]そといふ事か。こちは祝うて姫小松。緋縮緬とく人目のひまに。鬼も來るなと柊や。雛鯤葱エイ酒落くさい。二瀬仲居が小箸出で。飯炊は來て火吹竹 料理人迄なし物 蘭籠の彦兵衛饅頭。柄杓鮮緞子嗅。平野寛蔭ひし釉。フシ平野やゑきやう肥後芋莖。地サア〱紙燭が皆にな

るなんと房様サアどうぢや〳〵と詰めかけられ。詞アヽかしましい息が出ぬ。物が言はれぬ免してたも、地息が出ずば火屋へやれ。そんなら火箸で焼いて退け。南無三寶火が消えた。サア房様の灰寄せぢやと。どつと笑ひし戯謔も。フシ明日の哀となりにけり。地火廻半へ飛脚屋が何も御用はござりませぬか。ヤア房様京へ上す銀もあり。御状もあるとの御事遣されませぬかと問ひければ。詞アヽよう寄つて下んした。まだ文を書きませぬまちつとしてから來て下され。それなら明日の便になされませ。今宵は仕舞でござるといふ。尤なれども今夜上して明日の間に合はせねば。きつう叶はぬ大事の用。地無心ながらまそつとしてま一度寄つて下さんせ。頼みまするとに詫ぶれども フシ返事もせずに出でにける。地房は心も心ならず日の暮迄の約束が。初夜過ぎ四つのかねてより思うた壺へ當りしと。門に出でて北を見つ濱まで歩み西東。足も

冷えて鐵釘をスヱテ胸に打たるゝ地幾瀬の思ひ。ヤア北から人が走つて來るそりや徳様よと走り寄り。見れば以前の飛脚屋なり。詞お房様かどれ〳〵御状は舟が出ます。チヽ道理々々此の銀は。京の私が親里へ明日の日中に渡さねば。いかう詰らぬ銀なれども今に先から來ぬわいの。定めていんまに來う程にまそつとしてから來て下され。いや最早や來られませぬ。來てから今夜は地出されませぬと言ひ捨ててこそ歸りけれ。房は一人とほんとして今夜の首尾を違へては。一代京へ繋がれて連添ふ事も限りとは。根掘り知つての上なれば如才のあらう筈もなし。皆おか様のさしこみと思ふも地體こちの無理。身一つ胸を据ゑたればいつそ悲しい事もなしと。內へ歸れば主の内儀房は今迄門にか。詞此の寒いに物好きな。總じて此の中うか〳〵しやる祟と心を締やゝとありければ。されば餘りよそが賑かさに。地格子祝に出ましたと言ひ捨て二階へ上る體。

氣懸りなれば目を放さずオクリ折々〳〵心を付けけるが フシ房はそれとも。地白紙の障子の月をあかりにて。剃刀出し合せ砥にかゝらましかばかくとだに。まア一度顔見て死に度いと。思へば引かるゝ後髪スヱテ手もわなわなとぞ顫ひける。地主見付けて後より房それは何しやる。詞はつと驚き振返りハア内儀様の。何ぢややら喫驚としました。餘り良い月影に。地額剃れうと思うてと。紛らかせば打笑ひチヽ好い所へ來て仕合や。幸ひ旦那殿髭剃つてくれとある。ちと其の剃刀貸してたもと。ひつたくり押包み。暫しは顔を打守り居たりしが。詞アヽ一昨日の裾掃にたんと肩がつかへた。そろ〳〵揉んでたもらぬか。地あいと後に廻りしも扱は氣色を見取られしと。悲しさ怖さいや增して フシ更に分ちもなかりけり。地さすがそれやの女房とて世間話に氣をゆるませ。詞是なう房。いつぞ〳〵と思ひしが序に其方に意見がある。我も初は勤の身。素人の言ふ事

と一つに聞けば曲がない。心靜めて聞いてたも。廓や此處の奉公は樂みなうては勤らず。むげなう壞くではなけれどもそれにさへ猶駈引あり。必ず妻子ある人と末の約束せぬ事ぞ。地男の間男同然にて思ひばかいかぬ物ぞとよ。徳兵衛樣とも今は挨拶切つたとある。ヲヽ〳〵仕合々々目出たい事。詞お辰樣を離別させ。添うて其方の本望ならず。いとしい人の身のひし一門中の憎しみ受け。其方を鬼よ蛇よといふ。又圍はれて世を忍び後家同然に暮しても。是が何の手柄ぞや若木の花は一盛。老木の枯葉色失せて變るは男の フシ心ぞや。餘のお山衆と違うて十の年から子養にて。豆腐取て來い八百屋へ走れ。駕籠呼んでおじや掃き掃除戸棚の鍵迄預けしは。小いからの馴染だけ我が子のやうに思はれて。良い客もがんな出世させ下女の一人も連れさせたう。思ふはこちとばかりかは皆親方は同じ事。譯も無い事仕出して慘い目見せてたもんなや。爲

のよい事あるならば今でも暇をくれといや。慾を離れたこれ證據損というて僅かの事。不便な目を見ようかと案じ過しがせらるゝぞや。思ひも寄らぬ憂をかけ必ず泣かせてたもんなと。涙も聲もしめ〳〵と殘る方なき恩の程。房は顏を上げもせず。只あい〳〵としやくり泣きノン延の。幾重を絞りけり。地 客かあらぬか表にてようござりましたといふ聲す。誰樣ぢやと澄して聞けばいかう冷えるが。詞兄貴の氣色變る事も無いかといふ。地ハアヽ人事言はず席敷け徳兵衛樣さうなと。聞くより胸もさは〳〵と。フシ飛びも下り度き心なり。詞時に丁稚が門口より。向ひの肥後屋から房樣ちやつと送らつしやれ。お客は堺の早う〳〵と呼ばはれば。料理人不審を立て。問ひもせぬお客の噂お合點がいかぬ。房樣はおひまが入るならぬといふを。房聞いて。あれは何故にと問ひければヲヽさればいの。あの宿で徳兵衛樣に逢やつた故。それで遣るなと言ひ付

けた。エヽ内儀樣の譯もないそれはあつて過ぎた事。地今は挨拶切れた上徳樣はこゝになり何の氣遣。堺の客は正月を頼まねばならぬ人。平に遣つて下さんせといふも眞實と思はねども。ヲヽそれもさう是なう房を送ろぞや。と。呼ばれば下にて料理人。そんなら道ぢや駕籠へも一寸寄つてくれ。心得太郎兵衛の婆樣と フシ喚いて使は歸りけり。地サア身仕舞して早う行きや。いや夜もいかう更けまする。つい此の儘と連立ち二階下りる間に。駕籠を庭にぞ舁き寄せける徳兵衛樣遊んでお歸りなされませと。言へばとぼけた顏つきにて誰ぢや房か。際の商賣跡を詰めやと 地よそ〳〵しう。口には言ひて魂は。一つ駕籠なる番ひ鳥 フシ飛び立つばかりに見えにける。地色を悟りて女房是は夜更けて御大儀な。先づお上りなされませいかう冷える酒一つ。それ燗つきやとありければ。詞アヽ置きや〳〵もう歸る。此の頃酒が中つて今も今女ども。

生薑酒をたべさせうと手づから生薑おろすやら。地それが厭さにやう〳〵是へ逃けて参つたに。又酒を飲めとやれ逃げんと。出づる所を女房飛び下り立塞がり。詞なんの無理に進ぜませう茶でも一つ参りませ。いや〳〵此の頃は茶があたります。地今も今さる方で生薑茶をくれたを。やうやうと逃げ延びた是非歸してとといふ所へ。詞兄の主寝間より出で。ヤア徳兵衛ようぞ〳〵。夜が寝られぬに夜とと も話さう。サア地こゝへと呼びかくれば病人

どいひ兄の命。異議も言はれず不返事に フシ もぢ〳〵してぞ上りける。詞なんと中橋架けたの。欄干渡すばつかり。春は町中渡 初氣色も次第に快し。寒明いたら本腹せう是といふが此の夏の。西國の御利生ヤ三十三所の風景。一々語つて聞かせんサアろくにゆるりと居やと。地果しも知れぬ長話徳兵衛心もた〳〵と。可愛や房を今迄待たせ又宿屋でもあこがれん。早う立ちたさ氣は急いていや申し。今宵は我等伊勢講講中待つて居つるべし。地

罷り歸ると立たんとす先つ待ちや今迄誰が待つものぞ。地まそつと話しやと止められ。いや槍屋町の隱居へ。齋に參る約束是非 地お歸しと言ひけれども。はて齋は明日の事ひらにといふに詮方なく。女どもが懷姙何時に產致さうも知れず。お戻しなされ下されと言へども兄は聞入れず。遁れぬ方の自身番見舞ひ度う存ずれども。是ではお歸しなされまいあいた〳〵。あいたしこ〳〵。冷える加減か俄に疝氣が起つた。歸つて養生致し度い。はて譯もない。夜氣にあたつて猶痛まう藥でもやらうか。いやもう藥も通らぬ駕籠に乘つて歸り度し。あいた〳〵と呻けども。内儀推して外へとては出すにこそ。小座敷の炬燵に火をたんと入れさせて。泊つてござれと强ひければ。詞いやや〳〵今年の炬燵はいかう人にあたります。今も今女どもが生薑炬燵をしかけて。やう〳〵詫言致したと 地心は先へ拔殼の。何を言ふやら譯もなしこゝになりとも寢せませと、蒲團打着せ表には内儀手づから錠おろし。内との者に目くばせしそろ〳〵脇へ退く樣子。ムヽウ氣がついたとそらさぬ顏いや〳〵寒いに往なうより暖かにして泊つたが。先づ此の方の德兵衞と重き心を輕口に、蒲團かぶつて行くふりも淚。くろめし 三重 〽まぎらなり フシ内と外とに。牽き合ひの。心の駒の諸手綱房が思ひの通ふかや。夢とはなしに フシ現なや。地顏を並べて見るやうで抱き付けば小夜蒲團、淚に濡れてひや〳〵と氷ほどけて身にさはる。スヱテ其の夜の心地しみ〴〵と。身に引き纏ひ寢て見ても。ひとりころりはエヽ埒が無い。心の内はむしやくしや枕いつそあけてものけても退けよかし。アヽ大幣の此の蒲團。小六も寢つろ小夜も寢つらん。房も寢よう引手數多にどこの誰めと寢くさつた。撲ち度い踏みたい叩きたいゐゝ。〳〵踏むな蒲團に科もない。今は踏んでも叩いても房に逢はれぬ逢はせぬかと。炬燵にとんと腰も拔け フシわけも。淚に我が身ながら男の。やうにもなかりけり。地戀の寢ばなの屋根續きいつか思ひは山口屋の。物干傳ひ忍び來る餘所の戀かと羨しく。見れば雨戸の戸袋を。そつと踏へる足許もふるひ〳〵の目もくれて。詞ヤア爰にかいの。房か、地これはどうぞとばかりにて。炬燵を中に手を取りて フシ只泣くより外の事ぞなき。地淚の巾にも男の顏じろ〳〵と見て。アヽいとしぼや氣を揉まんす故にやら。顏にたんと瘠が來たその苦は誰がさするぞい。皆私ゆゑとそれは〳〵忘るゝ事もあるにこそ。さり乍らもう苦にして下んすな。かういへばどうやら拗ねて言ふに似たれども。微塵もさうした フシ心もなし 詞私が京の父樣よしない者の請に立ち。明日限に銀立てねば私をやるとの判ぢやげな。地私は爰へ身を賣つて先から連に來た時は、二重賣二重判牢舍は鏡にかけた事。ならぬ事をくど〳〵と思ふは愚癡の至りなり。詞先立ち死なんと剃

刀を手に取りは取りたれども。内儀樣に見つけられ得死にもせず居る間に。地こなさんの聲はする向側より呼びに來る。嬉しや先で何事も談合せんと。今迄待ちぼうけになつたれども。一目逢へばこれ本望末頼みない契りなれば。是限り〳〵と逢ふ度毎の觀念今更溜めていふ事なし。貞女を立てるお辰樣の蔑みも恥かしい。仲ようして下さんせ互に生れ代つたら。本妻定めぬ其の先に早う女夫になりませう。言ひ置く事は是ばかりサア〳〵戻つて下さんせと。夫にひしとしがみ付き フシ絶え入る。ばかりに泣き居たり。詞チヽ聞かねど萬事至極した。さり乍ら其の言葉嬉しいやうで恨みあり。本妻あるは知れた事同じ口で諸共に。地死んでくれと言うてたも京の便を大事に思ひ。騙同然の才覺にて銀四百目借出し。一時ばかりは懐中にあつたれども。兎角二人に死脈が搏つどこもかしこも一時に。潮のさいて來る如くばら〳〵と首尾惡く。詞元より理を持つ女ども理窟をつめて恨み泣き。いかな張良樊噲でも道理に向ふ矢先はない。銀も渡す其の場にてみす〳〵噓の空誓文。地とても遁れぬ此の罰佛神を俟たずとも。こちらから當つて埒あけんと道から胴は据つたり。死に直しは二度ならぬ喞ち顏は曲もなし。手に手を取つて莞爾と死ね死なうと言うてたもと。炬燵に顏を打投げて世にあぢきなき涙のてい。ナウさう思うてが定かいの。思ふが不思議か女夫ぢやもの。ほんにさうぢや忝い。嬉しうござると抱き合ひ フシ聲を立てずの絞りなき。フシ炭火も。消えて凍るらん。地奥へ斯くとや聞えけん兄の聲にて。詞なんと德兵衞痛みはよいかと。地ごつ〳〵せいて來る音すやれ隱れよと狼狽へて。房を炬燵に押入れ蒲團かぶせて德兵衞は。上にもたれて覆になりフシ顏もきよろ〳〵なりにけり。地程なく主人立出で。詞物言ふ聲の聞えたは誰であつたと不審顏。いやそれは私寢言がな申したか。但しお前が病み耄けて空耳でがな御座りましよ。歸つてお休みなされと言へば。イヤいかう夜が寢にくい 地話しさいた西國の。物語して聞かせうと フシ炬燵に當らうたてさよ。地ヤア炬燵の火がうすい。詞これ女房ども火を赫とおこいて。火斗に二三杯持つておじやと呼ばはれば。德兵衞ぎよつとして申し〳〵。火のきついはお毒御無用に遊ばせ。いや〳〵裾が冷える。地膝節の焦ける程ながこちはよいと言ひければ平にそれは火の用心と申し。膝の皿に火が付いたらば御身體の妨と。言へども兄は懲しめと思ひ意地惡う。火を早う フシ持つておじやとぞせがみける。詞アヽ申し。お前は病氣で引籠つて世間を御存じござらぬ。此の冬から火の強い炬燵は廢り物。北脇邊のよい衆は大方炬燵に水を入れるげに御座る。重井筒とも言はるゝ身が氣の通らぬ。炬燵に火を入れなんどとはさりとてはお笑止な。あれおか樣火は入らぬと仰しやると。

地身をもがく其の間に火斗は焦るゝ紅葉葉を。盛つたる如き池田炭遠慮も内儀が炬燵に移し。サア當らんせと言ひ捨てて フシ臺所にぞ出でらるゝ。側で見るさへ徳兵衛身も焦げ渡る心地にて。詞兄ぢや人其の火で熱うはござらぬか。いつその事に火炙にならしやれぬか。こゝ迄火氣が來まする 地ちといけて消しませうと。寄らんとすれば其の儘置きやと。止められては炬燵より胸を焦すは徳兵衛。房は涙の埋火に焼き付けらるゝ身の苦しみ。蒲團のかけより手を出し裾に取付き。堪へんとするに耐へ難き フシ地獄もかくやと不便なり。地主人も一旦慾しめのさのみは哀れと思ふにや。詞アヽ暖まつたもう歸るそなたも休みやと立歸る。地徳兵衛兄ながら怨めしく思ひけん。詞とてもの事に眞黒に焦る迄。あたつてお歸りなされかしと。地言へども流石一言も。岩木を分けぬ人心 フシ奥の。一間に入りにけり。地徳兵衛は小腹立ち。櫓も蒲團も一つに摑んで取つて投ぐれば。咸陽宮の煙の中に顔も手足も紅の。房は目ばかりじろじろと物をも言はず片息の フシ性根も亂るゝばかりなり。地やう〳〵に抱き上げ袂に扇ぎ身をさまし。花活の水幸ひと。顔に注ぎ口濕しスエテ少し心も爽けり。地サア兄貴迄が知られたり。なに面目にのめ〳〵と人に面をまぶられん。いざ此の所で尋常にと脇差取らんとせし所を。さうさへ覺悟極まれば嬉しい〳〵さり乍ら。こゝでなか〳〵思ふやうによもなるまい。屋根傳ひに裏へ抜け樽屋町の門へ下り。宗門なれば日親樣の御門で死なせて下さんせ。ヲヽ尤々有難い志サアおじやと立ちけるが。詞ヤア其方は法華我は淨土。願ふ處が別なれば先の行きはも覺束なし。詞宗旨を變へて一所に行かん今題目を授けてたも。とく〳〵と手を合はすれば房は不覺の涙にくれ。詞私に淨土になれとも言はず法華になつて下んする。地扱も嬉しい心やな勿體ない事なれど。今迄毎日千遍づつ五年唱へた題目の。功德で許したび給へと互に合掌心を靜め。今身より佛身に至る迄よく持ち奉る。南無妙法蓮華經。今身より佛身に至る迄添はせたまへ添はせてたべ。南無妙法の力を賴みに。しつかと負うて上る二階や 三重〽屋根の棟。フシ鷲の峯ぞと。地一筋に這うつ辿りつ傳ひ行く。道は三途の瓦葺霜の劒の山冴えて。此處に地獄の鬼瓦左手も右手も恐ろしく。遁れ遁れて行く末は今ぞ冥途の門出と。これを限りの立酒や樽屋町にぞ 三重〽迷ひ行く。

血汐の朧染　下之卷

歌筒井筒井筒の水は。濁らねど。今はナホス涙に フシかき濁す。月も袂に。かき曇る。朝の雲夕の霜仇しが浦の空舟 身をなき物と知りながら。いとし憎しの戯れも。暫し此の岸彼の岸の。スエテ假の現の假橋や。藻に埋もるゝ牡蠣船の。フシ苫の隙間の螢火の。風を待つ間の。影よりも。明日迄待たぬ フシ我が命。地我と失ひ兩親の。育てし御恩は

如何せんと歩みもやらず泣き居たり。辿り迎ひの色駕籠も ホオクリ しばし。と絶えはいづくに。ミ馴染々々の寝入りばな。我が身は今宵 フシ 散り果つる。地 名殘盡きせぬ濱側の、歌 こゝは竹田か夜は何時ぞ。五つ六つ四つ千日寺の鐘も八つか七つの芝居。二人が噂せば狂言の、仕組の種となるならば フシ 我を紺屋の片端に。地 何とか思ひ染川は詞に泣いてくれよかし。包む袂の飛鳥擽。二つがひの手妻にも。かゝるなりふり移すとも。此の思ひをばよも知らじ。去年のお島の心中の。その井筒屋に我が今 フシハヅミ 重井筒と。篠、塚に。ミスヱ いはれ岩井の半四郎。憂ひ詞のあやめのいさ、露の音しも御身と我が フシ 積る涙の雫かや。酉に嵐の、吹き晴れて空は冴えても我々は、戀慕の闇に暗がりによしなきことを仕出して東の果に名を流す。それに劣らぬ歎きぞと フシ いとゞ。思ひに。くれ竹の。節を習ひし浄瑠璃も。餘所の事よと慰みしが ギンオクリ

今身の上に降る霜の一足づつに消え失せて。死にに行く身の フシ あぢきなや。地 あれ見返れば人聲の。我を尋ねて高津の町を急ぎ。通るゝ鰐口や。頼みをかけし御經の。ハツミ 此の三界の衆生は、皆これ我が子と聞く時は。親諸共に、到るなりけり南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。五逆の提婆は天王如來。龍女も成佛する時は、煩惱菩提と。なるぞ頼もし南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經、地 南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を。フシ 只此の七字に納りし。大曼荼羅やきたなき宵南にも風にも詣で來て。朝は現世夕は後世、此の世彼の世の二面今宵、一つに楢の葉の、影は浮世の塵芥共に命の捨場ぞと スヱテ 大佛殿の勸進所。フシ 身を捨つる。藪となりにけり。地 涙に逢ふ其の中にも男は流石男にて。詞 なう世間を聞けば女先立ち男は跡に死損ひ。見苦しき沙汰に逢ふ無念の上の死恥ぞや。地 先づ我からと脇差を。抜かんとすれば抱き付きなう待つて下さんせ。今死ぬる身と言ひ乍ら大事の夫が目の前で。朱に染まつた體を見ば氣もうろたへ目もくれて。どうしてか死なれうぞ半死して恥曝し。こなさんの死骸の帯解き紐とき打返し。詮議のあるをじろじろとそもや見て居られうか。私から先にと手を持添へ スヱテ 我が身に差當て、忍泣き、男は力涙に逢ひ刃物持つ手も弱々と。女の膝に伏し轉び フシ 覆ひ。重なり泣き居たり。地 石の鳥居の彼方より女子の泣く聲子の泣く聲。南無三寶我が家の提燈女房子ども家來ども、見付けられては情なし小橋の方で死ぬまいかと、立ち上らんとせし所へはや道端まで尋ね來て。間は僅か半町に足るや足らずも因果の隔て、百里も同じ如くにて。近きかひなき千賀の鹽釜 フシ 身をこがすこそ哀れなれ。地 妻のお辰は宵よりの涙と霜に袖凍り。物言ふ力もなき中にあれあれ夜明けも近付くか、烏がいかう啼くわいの。詞 外の斷落走りの者と逢うて明日葬

ねうとは言はれぬ。死にに出に心中なれば。とくに命はもうない人。地ヲ ア のしや悲しやな女房子の無い人ならば。殺すまい死ぬまいものとさぞや最期の悔み言。お房が恨みも思ひやる思へば我がある故に。人二人殺すよな位牌に向うて言譯ない。冥途の旅を連立たんと下人が指いたる脇差に。取付く處もぎ放し。詞これは一興此の子はいとしう御座らぬかと。地止むれば小市郎かゝ樣死んで下さるなと。歎く聲さへ身にしみて フシ野邊の霜風小夜嵐。地丁稚の三太もうろ〳〵涙。心中といふものは。いかう寒いものぢやとて フシ共に袖をぞ絞りける。地德兵衛呼きて月は傾く東は白む。ためらうて今の間に見付けられんはあさましし。いざ何事も宵より言うた通りぞや。おうと頷くばかりにて涙に物を言はせつつ。夫の膝をしつかと押へ。仰向き待つたる口の中南無妙法 地蓮華經。南無妙法蓮華を一つ蓮華にと。ぐつと突抜く一刀わつと叫びし。

一聲の。フシ哀れ果敢なき最期なり。詞今のは何處ぞやサァ知れた。地ツメそこかこゝかいや〳〵南に聞えたと。こだまの響は氣も付かず皆生玉へと〳〵走りける。地見付けられじと德兵衛畑の中を西東。こゝに屈み彼處に忍び今は嬉しゝ一所にと。房が死骸を尋ね寄る道も心も埋れ井戸。踏み外してかつぱと落ち水のあはれや汲み上げて。重井筒の心中と御法の。水など湛へける。

右之本令吟覽頭句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也

竹本筑後掾 印

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋 山本九兵衛版 印

大阪高麗橋壹丁目

山本九右衛門版

傾城反魂香

近松門左衛門作

次第 素きを後と花の雪。白きを後と花の雪。野山や春を畫くらん。地 聞きに北野の時鳥初音を啼きし其の昔。清凉殿に立てられし。跳馬の障子の繪。夜毎に出でて萩の戸の。萩をくひしも金岡が。筆のすさみの。跡絶えず傳はる家や畫工の譽。狩野四郎二郎元信。丹青の器量古今に長じ心ばへよき男ぶり。親の繪筆の彩色に フシ生れ。つきなる美男なり。地 頃は文龜の彌生の空天滿天神の告有りて。越前の國氣比の浦へと旅羽織。我は笠きて大小の。柄にも袋きせる筒。丁稚がこしの白山も フシ去年の緣にかへる山。フシ山のいたゞき。青々と。雲にうつらふ月代の。湯尾峠の孫杓子。盛りこぼしたる花重。かさね〱し旅籠屋が。情もあつき燗錫の フシ敦賀の。濱にぞ着き給ふ。地 四郎二郎一僕を招き、詞 ヤイ雅樂之介。外の弟子にも隱し此の所に下りしこと餘の儀にあらず。近江の國の大名六角左京太夫賴賢殿と申すは。佐々木源氏の旗頭高島の館とて。系圖所領並びなき大將なるが將軍家の御意を受け。本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奧州武隈の松と云ふ名木は。往古能因法師さへ跡なくなりしと詠みたれば。地 名のみ殘つて知る人なし。我是を書きあらはし。譽を得させ給はれと。天滿天神を祈りし所に。詞 武隈の松を見んと思はゞ。越前の國氣比の濱邊に行くべしとあらたに靈夢を蒙れども。地 それは陸奧爰は越路。何を知邊に尋ぬべき。あはれ里人の來れかし フシ物問はんとぞ呼ばはる。ワキ詞 所の者に御用とは都人にて有りげに候。御尋ね有りたきとは何事にてばし御座候。シテ 御覧の如く都の者。天神の敎へによつて松を尋ぬる仔細あり。この所にこそ名高き松の候ふらめ敎へて給はり候へとよ。ワキ 是は思ひも寄らぬ事を承るものかな。此の北國にてお尋ねあらうならば。越前布越前綿。若は實盛の生國なれば お供の奴の髭にぬる油墨などのお尋ねもあるべきに。名高い松とは流石優しき都人、先づ當國の名木は、西行が汐越の松。淺生の松若が物見の松。金が崎には義貞の腰掛松 山のを山松庭のを庭松。門には門松酒には濱松。肥たは肥松ねぢたは捻松わり松たい松ぬつほり松。我等が息子に岩松長松と申す嬰兒もあり。庄屋の名は松兵衛。若い時には相撲取。赤松ぶち割つた樣に御座有りしが。今老松になられて力ももとより下り松。腰も屈んでゐざり松〱と所の人は呼び候。ヤア。誠に天神の御告と有るに思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。是ぞ京にも類なしと心を懸け

ぬ人もなき。色よき松の候か。もし左様の松にては御座なく候か。シテ實にや往來も慕ふとは疑もなく我等が尋ぬる名木よ。急いで見せて給はれかし。ワキいつも夕暮ごとには此の所へ現れ出で給ひ候。ヤア〳〵はやあれへ御出で候。我等は御暇賜り候べし。御逗留の間御用の事は承り候べし。シテ頼み申し候はん。ワキ心得申して候。地高き名の。松の門立たちなれてフシ人待ち顔の。暮ならん。町は敦賀の。かけ作り。情夫こそ汐の滿干なれ誰をかも知る人にせん。フシ此の廓の松と成りしも。親の爲。賣られ買はれて。北國の土けのへ賤の里なれどよねの育ちは上田の。水損なしの太夫職。名を遠山と呼ばれしも。人に登れの戀の坂。おろし歩みの道中は。花の立木の其の儘に フシぬめり。出でたる。如くなり。地雅樂之介これ申しみごとな者がそれそこへ。それ〳〵といへば四郎二郎ヤア何と。松が見えたか現れたか。寫しとめんとふつと立ち女郎にはたと行き當り。詞是はさて松かと思うてはまつた。地本の松を尋ねて見ん。丁稚來いと行違ふ袖を控へて是申し。詞此の遠國の我々と。京の廓の松様達と比べさんすが不覺の至り。地併し不粹なお方には。松と見られて嬉しうなし。杉と云はれて腹立たず。桑の木とも榎とも。こなさあに似合うた阿呆の木とも見さんせと。無駄言なしの云ひ捨はフシ田舍妓とて笑はれず。地ヲ、御機嫌損ねし御尤。げに〳〵松とは太夫樣。我等は惡う心得て不調法な御挨拶。眞平〳〵お詫事。詞是を御縁にお知人に成りました。し下拙事は狩野の四郎二郎元信と申す僅かの繪師。さる御方より武隈の松の圖を仕れとの仰せ。則ち天滿天神の夢想に任せ。此の所にて名有る松と尋ねしを。地太夫樣との取りちがへ是はかうも有らう事。御料簡ついでにお附合も數多なり。願のかなふ便りもあらば。御世話頼み奉ると フシ思ひ。入つてぞ語らるゝ。地女郎はつと顔を眺め。扨は狩野の四郎二郎樣とは御身の上か。恥を包むも時による何を隱さんわし事は。土佐の將監光信が娘なるが。父は一歳勅勘受け今浪人の憂き淺世。此の身に沈むは申さずとも推して泣いて下さんせ。詞扨武隈の松の圖は土佐の家の祕傳の繪本。漏す事は叶はねども。昨夕不思議や天神樣の夢の告。狩野と云ふ繪師下るべし。武隈の松を傳授せよ父が出世の種ならんと。地見たはまざ〳〵まさ夢と。語りもあへぬに四郎二郎。感心感涙肝にそみ。天を禮し地を拜し。懷中の繪筆繪絹を擴げ。サア遊ばせフシ御傳授頼むと悦びける。詞いかにも傳へ申さんが。親の許しもなき中に筆取る事は如何なり。地ア、何とかせん實に思ひついたり。あの御供の人の立姿を松の立木になぞらへ。笠を枝葉の笠となし爰にて學び見せ申さん。夫にて寫しとめ給へ是そこな奴樣。詞爰へござんせ雇ひましよ。ない。地〳〵〳〵手ふる頭をふる年ふる松の。松根に倚つて腰つきも。千年の翠寫せしは作意なり

けり。先づ歌人の見立には。一本松を二木とも三木とつらねし言の葉の。それは老木の松が枝なれど 小オクリ 寫す〳〵若木の。やつこの〳〵。此の膝のふし フシ 松の節。前へ地摺の下枝にぬつと出せし片足は。慮外千萬千貫枝。筆捨枝や久方の天津。少女のかたくま枝や フシ 腰掛。枝の三がい松。月にさはらぬ。枝々の。さゞれ小枝の松蔭を。サア沖こぐ船の帆の。フシ ほの見えて。地 さす腕には壽福の枝收むる手には不老の枝。垂れて雪見の控への枝。是々これ〳〵。ずつとのびたる流しの枝。松は非情の。フシ 物だにも。傳へし心の。色はなほ 地 さながら青々條々として。松の生木のいき〳〵と フシ 若やぎ立てる其の風情。地 狩野は一點違ひなく。書きつらねたる筆勢は。何れを寫し繪何れを立枝 フシ 紛ひつべうぞ見えにける。地 元信家の幸甚たり。早速歸り本懐とげ。此の報恩には御身の上父御の事も請取り申す。萬のお禮は本國よりと立歸るをこれ申し。

詞 神のお告に任せしからは恩にはかけず末かけて。情を思召すならば。地 必ず外に内儀様持つてばし下んすな。奴殿頼みます何がさて〳〵。詞 天神様より太夫様 地 追付けお二人連理の松。中に立ちたる此の松は島臺持つての取結び。千年萬年萬々年。とぢ付きひつ付き松脂の離れぬ。中とぞ 三重 〳〵壽きし。フシ されば江州。地 高島の館左京の太夫頼賢卿。參観の上洛あり。執權不破の入道道犬。同じく嫡子不破の伴左衛門宗末。國を預かる留守居なり。御家の繪師長谷部の雲谷あわたゞしく。入道親子が前に手を束ね。詞 近頃過言に候へども。某事は雪舟の嫡傳として代々の御扶持人。此の高島のお館にて。繪筆を取つて誰人か拙者が上に着き申さん。然るに此の度狩野とやらん申す二才。武隈の松を書きしとて過分の恩賞を下され。古參を踏付け御前にはびこり剩へ。今日は奥方へ召され姫君様より。お料理を下さるゝと承る 地 殿様の御留守誰が許しての推參。御家老の仰せ一國に違背申す者はなし。きつとお仕置然るべしとぞ支へける。詞 道犬領きつゝと寄れ雲谷。總じて此の四郎二郎めは身が相役名古屋山三が取持にて召出された。山三は元來お小姓立前髪の酒林で殿を醉はせし男傾城。嘴の黄な小雀が家老並に列なり。威を振ふ其の山三めを甲に着て。のさばりまはる四郎二郎我々親子が睨めども。事とも思はぬ奇怪さ其の方とても同然たり。詞 又乙の姫君銀杏の前は。御愛子なれども妾腹ゆゑ御臺所を憚り給ひ。田上郡七百町の御朱印を付けられ。京都有德の町人か由緒ある御家中へも。下されんとの御内意ゆゑ某嫁に申し請け。此の伴左衛門に縁邊し七百町を主附かんと當てはめて置いたもの姫君狩野めに心を通はし。地 今日密々祝言ありと。奥目付より聞きたれども御意とあればせんかたなし。御在京の其の間は山三めら留守なれば。彼奴が方人する者なし少しにても過りを。隨分見出せ聞

出せ慮外をせば打殺せ。御留守の間國中は某が裁断なり。此の不破といふ鍔が魅入れて餘り程はあらせまい。試して見たい新刄はないか。一の胴か二の胴か。望んで置けと云ひければ雲谷甚た笑壺に入り。政道正しき御家老様。お屋形の心柱とフシ追從たら〴〵見苦しゝ。地かくとは知らず四郎二郎櫻の間に伺候し。詞姫君銀杏の前様より御掛物を仰付けられ持参仕り候御取次頼み奉ると。云へども入道伴左衛門しろりと見たるばかりにて。返答もせず睨付くるヤアしれ者よ。側には雲谷いかさま我に手を取らする巧あり。立ち歸るも不覺なり幸ひ幸ひ。奥へ通路の鈴の綱。ふりはへ引けば鈴の音オクリおうと〳〵答ふるフシ女の聲。宮内卿とて中老の局立出でヤア狩野殿か。地姫君様の御待ちかね。お直の御用も有るとのお事サア〳〵此方へとありければ。畏つて四郎二郎入らんとすれば。伴左衛門聲をかけ待て〳〵。詞お家の掟を知らずんばなぜ物頭には伺はぬ。知つて背くか不屆千萬。上より御許しなき時に刄物を帶し。奥方へ参ること。禁制との御條目。地あれ大小捥いで引きずり出せ當番々々と呼ばはれば。宮内卿いや是は私ならず。姫君様より殿様へ御伺ひ。則ち京より名古屋山三殿の指圖にて。奥へ召さるゝ四郎二郎なんのお咎めござらうと。云へども更に聞入れず。詞お留守を預る家老の耳へ。承らぬ御意なれば殿の御意でも叶はぬこと。地それ伴左衛門捥いで取れまつかせと立上る。四郎二郎も身構へしてすがらば切らんず眼ざし。左右なくも寄付かずサア。渡せ〳〵とフシ詞で嚇すばかりなり。地時に奥よりお腰元つか〳〵と出で。詞これ〳〵いづれもお姫様より御意が有る。四郎二郎殿には直に御用の事あれども。丸腰でなければ奥へ通さね御法度と有れば。是非に叶はず姫君様此の所へ御出でとの仰せなり。四郎二郎殿は御用人。其の外の男の分雲谷は云ふに及ばず。御家老殿を始め御前へは叶はぬ。皆お廣間へ立ちませい。地〳〵との權柄さ。道犬親子無念ながら突と立つて。サア雲谷姫君の御前へは。男たる者罷り出でず男でもない奴原に。侍の辭儀無用の沙汰と。四郎二郎に刀の鐺。打ち當て〳〵袴の裾。踏みたゝくつて睨み付けオクリお次の〳〵間にぞフシ出でにける。地御留守と云ひ女中の邊なほ穩便にことともせず。御好の掛物梅に泡雪雉山鳥。仕つて候と紐を解いて懸ければ。この由披露致さんにサアまづゆるりとお茶進じやと。局は奥にあい〳〵と愛想らしきこゑ〴〵の。男の側へよる事は常に梨地の煙草盆。落雁かすてら羊羹より。地物に臆せぬ男なれども女中の色に目うつりして。氣を取られたる折ふし十八九なる脇詰の。後結びも格別に。銚子盃前に置きしとやかに手をついて。私はお姫様のお髪上げ藤袴と申す者。しみ〴〵お咄致しませいとの御事

ぞや。御存じの通りお妾腹のお姫様。御臺様への憚りにて大名高家のお望なく。心次第縁次第と田上郡七百町。地御朱印提つて殿好みつれないは其方様。いつぞやより色色とお乳の人お局。口のすい程勧めてもどうでもお請けないとの事。おいとしや姫君は餘りの事に戀ひ焦れ。私をお寝間へ召しやイ藤袴。せめての事にそちなりと四郎二郎と名を付けて。心ゆかしに抱いて寝よそちもおれをだきしめて。姫可愛いと云うてくれともがき事がおいとしさに。とんと下紐打解けて。ねる程抱く程しめる程スヱテ二人の心せくばかり。フシどちらぞ男に成りたいと云うても泣いても叶はゞこそ。詞なう大名の手業にも有るべき道具の足らぬのは。地ひよんな物とておむつかる。みづからにいなせの返事聞切り参れとのお使。私も一分立つ様にフシお返事なされと述べにける。地元信額を疊につけ冥加にあまる仕合ながら。詞度々お返事申す如く諸傍輩の猜みと

申し。慾心に紛るゝこと世間の嘲り。よし御機嫌に違ひ改易仰せ付けらるゝとて。地御恨み候まじ御請とては成りがたし。よき様に御執りなし頼み入るとぞ言ひ切つたる。詞ハヽアにべもなう埒あいた。しかし如何にとしても上つ方へ左様な慮外申されまじ。少し物に品付けて。始より約束の女房ありと申しなば。お胸の晴るる事もありさり乍ら。其の女房は何者と期度をつかるる念の爲。地今こゝで私と夫婦堅めの盃して。とつと前から藤袴と契約ありと申さば。地いかな主でも大名でも此の道ばかりはせんが先。此の談合はどう御座んしよ。ヲ、ウ幸ひ望む所。サア盃仕らう。詞いや／＼いや／＼。我とても假にはいや。佛神掛けての女夫ぞや。地誓文々々綸筆を取らぬ法もあれ。かうぢや／＼と抱き付き近頃嬉しい忝し。是祝言の盃と一つ受けて元信に。妻の盃頂く作法儀式は堅うと四海波。腰元中が謡ひつれ奥よりお局島臺に。七百町の御

朱印箱。姫君様の御祝言フシ三國一とぞ祝ひける。地四郎二郎合點ゆかず逃げんとするを抱きとめ。藤袴とは假名ぞやみづからこそは銀杏の前。誓文だての盃いやはならぬと宣へば。詞いや我等の名ざしは藤袴。地外に妻はこれ無しとなほ意地ばれば腰元衆。そんならほんの藤袴早う／＼と呼出す。お茶の間のきりかが五十餘りの厚化粧。三平二蒲の口紅しなだかれゝる會釋顔。これが何の藤袴しやちらごはい皮袴と。地どつと笑ひのどやくや紛れフシつきせぬ妹脊と成り給ふ。地かゝる所へ不破伴左衛門宗末雲谷を伴ひ。遠慮もなく座上にずつかと直り。詞これ四郎二郎。汝如何なる野心にかお屋形を調伏し。亡さんとの存念ある。きつと詮議を遂ぐべき旨父道犬が下知。申し譯仕るか直に縄をかけうかと。早縄たぐつて見せかけけり。四郎二郎ちつとも騒がず。せめて形の有る事には申譯も有るべし。御屋形を調伏とは此の方の言譯よりまづ御咎め

の證據。承らんとぞ答へける。雲谷下座よりこりや／＼證據は是よ。總じて繪師の祕密にて繪を描いて調伏すること。人は知らじと思へども此の雲谷が見付けた。此の掛繪は和主が筆。梅に山鳥雲に雉。抑當家は高島の御屋形と號す。山偏に鳥と書いては嶋とよむ文字なり。梅の梢に山鳥の高々と留りしは。これ高島にあらずや。雉にほろろの聲有つて雪は降るとの心あり。讀みくだせば高島亡ぶる調伏。狩野とはかりの野と書けり。姫君と心を合せ屋形を亡し。一國を己れが狩場の野原にせんずる表相。地重罪のがれず繩かゝれと。取付く所をひつぱづし胸板はたと蹴倒す間に。飛びかゝる伴左衞門が眞甲刀の柄にてはつしと打ち。すぐに拔かんとする所を隱し置いたる捕手の者。十手八方鐵鞭をぶち立てぶち立て捻伏せて。高手小手に縛め黒書院の床柱に。思ふさまに縛り付け姫君の御朱印を。奪取れと群がるを。女中手々に枕槍。長刀にて引包み圍ひ防げば餘さじと フシ奥をさして追つめける。地腰掛に控へし雅樂之介かくと聞くよりたまられず。かけ廻つても奥方の勝手は知らず中口の。不開の門砕けてのけと扉を叩き。詞狩野の四郎二郎元信が弟子。雅樂之介之信と云ふ草履取。主といひ師匠なり死ぬる道なら共に死なん。高が繪書の丁稚づれ怖い事も有るまい。相手の首取る分のこと。地開けよ明けよと貫の木も。折るゝばかりに踏みたゝき フシ鳥居立にぞ跨つたる。地元信内より雅樂之介か滿足した。身に誤なき上に慮外をして姫君の。御身のあやまち氣遣はし フシ歸れ／＼と呼ばはれば。詞アヽ慮外と云ふも事による。明けずば踏んで踏破ると 地わめきちらせば雲谷不破。雅樂之介を打殺せと引返して門の貫の木。はづす所をつけ入りに。雲谷が小額ずつぱと切下げたり。あいつたしと躍り上り二人拔き連れ打ちかくる。彼方へ追詰め此方に支へ城下をさして 三重〽切り出づる。

地四郎二郎地蹈鞴踏んで。エヽ倭人ともむさ／＼とは死ぬまい。親より傳へし一心の繪筆は爰ぞと觀念し。右の肩に齒を立てゝふつゝ／＼と喰破り。口に我が身の血を含み。襖戸に吹きかけ／＼フシ口にて虎をぞ書きたりける。地電目雷威の眼の光り怒り毛怒り斑怒り爪。フシ千里も驅けん勢なり。地道犬は姫君の行がた尋ね廻りしが。まづ繪書めから仕舞はんと太刀を拔かんとせし所に コハリ俄に吹きくる風騒ぎ。繪にかく虎は形を現じ。牙をならして吼えかゝる道犬も強力者。組止めんと挑みあふ。虎は猛つて爪をとぎ。あたり蹴立てて 三重〽揉み合ひしがノシちとより不思議の。地猛獸道犬が襟髻。ひつ咬へ打ちかたげくるり／＼。くる／＼／＼。くるり／＼と持つて廻り。一振ふつて投げければ。堺を打越し敷石に フシ面をすつてぞ打付けゝる。地虎は勇んで元信の縛を噛切り背を差向けてそばへたり。元信驚て心付き袴の股立しぼり上げひらりとこそは乘つた

りけれ。虎は千里の足早く風に嘯く身もかろく。追來る敵を追散しかけちらし。堀も築地も躍り越え、飛び越え。跳ね越え駈り行く豐干禪師が四睡の虎。李將軍は虎を組む繪にかく虎を動かすは。古今一人乘つたも一人天下一人一筆の譽は。世にぞ 三重〽殘りける。フシ げに獸君の。地 一靈山野に蔓り草木を踏折り。田畠を荒すこと斜ならず。近鄕の百姓聲々に。詞 三井寺の後から藤の尾迄は見屆けた。地 此の山科の藪蔭へ逃込んだに極つた。地 皮に疵を付けずに毆き殺せ撲ち殺せと フシ とりどり喚き評定す。地 庵の内より棒ついて。小提燈さげたる男。詞 ヤ、何者ぢや人の軒。打ての殺せのとは胡散なりとぞ咎めける。いや是は矢橋粟津の百姓ども。此の頃信樂山から虎が出て暴れる故。隣鄕が云ひ合せ此の藪へ追込んだ。探させて下されと口々に呼ばはれば。侍あざ笑ひやい。虎と云ふ獸が日本に出た例なし。途方もない事夜盜押入の手引か。此の

庵を誰とか思ふ。土佐の將監光信と云ふ繪師。仔細有つて先年勅勘を蒙り此の所に逼塞し。將監年は寄つたれども某は門弟修理之介正澄と云ふ者。地 油斷はせぬと棒振廻し諍ふ聲。將監夫婦障子を明け聞いた〳〵。詞 天地の間に生ずる物あるまいとも極めがたし。地 諸共さがせと鎗熊手提げ〳〵ゑいゑい聲松明ふつて狩立つる。一むら竹の下蔭にそりやこそ物よと火を上ぐれば。暴れにあれたる猛虎の形。人に恐るゝ氣色なく フシ 背をたわめてご休み居る。將監横手を打つて。詞 あら不思議や顔輝の筆の。竹に虎の筆勢に少しも紛ふ所なし。是は誠の虎にあらず。名筆の繪に魂入つて現れ出でしに極つたり。然も新筆今これ程に描かんず人は。狩野の祐勢が嫡子四郎二郎元信ならでは覺えなし。何れにもせよ證據には足跡あるまい。地 物はためしと百姓ども。若草わけて尋ぬれども虎の足形あらざれば描き手も描き手目利も目利き。前代未聞の名人や

と。心なき土民等も フシ 拜むはかりに信をなす。地 修理之介七足退つて師匠を拜し 詞 ア、有難や此の虎を見て。繪の道の悟りを開き候そのしるし。地 我が筆先にてあの虎を消し失ひ申すべし。名字名乘を授け御免しを受け度く候と。懇望あれば將監悦び ヲ、今日より土佐の光澄と名付くべしと。印可の筆を與ふれば修理は戴き墨を染め。虎の顔にさし當て四五間間をおきながら。筆引く方に從つて頭前腰後脚。胴より尾先に至るまで次第に消えて失せけるは フシ 神變術ともいひつべし。地 百姓ども舌をまき孫子迄の咄の種。詞 なうあの上手な繪書殿に。よいおやまを十人程書いて貰ひ。金儲がしたいと云へば一人が聞いて。ヲヽヲ ヲ 冬年お目に懸つたら。借錢乞の帳面を爰から消して貰はうもの。地 お暇申すと打笑ひ ヲクリ 在所〽在所へ歸りけり。地 爰に土佐の末弟浮世又平重起と云ふ繪書あり。生れ付いて口吃り言舌明らかならざる上。家貧

しくて身代は。薄き紙衣の火打箱。朝夕の煙さへ。一度を二度に追分や。地大津のはづれに店借して妻は繪具夫は繪かく。筆の軸さへ細元手上り下りの旅人の。童すかしの土産物三錢五錢の商に。命も錢もつなぎしが日陰の師匠を重じて。半道餘りを夫婦づれ フシ夜な〳〵見舞ふご殊勝なる。地夫はなまなか目禮ばかり女房傍から通事して。詞まだ是はお寝りませぬ。誠にめつきりと暖に日も永うなりまして。世間は花見の遊山のとざは〳〵ざは〳〵致しまする。此方は山陰御浪人の。お徒然をいさめのため嫁菜のひたしに豆腐の煮染 地竹筒でも持ちまして。關寺か高觀音へお供して。春めく人でも見せませうと。夫婦申して居ますれども心で思うたばつかり。詞道者時分で見世はいそがしし。洗濯物はつかへる仕事にははかいかず。日がな一日立ちずくみ何をするやらのらくらと。地急げばまはる瀬田鰻。只今膳所から貰ひまして練貫水の大津酒。ゆめ〳〵しうござりますれども此の春からお仕合がなほつて。鰻の穴から出る様に御世にお出でなされませ。ほんにつべこべ〳〵と私が云ふ事ばつかし。こちの人の吃と私がしやべりと。入り合せたら地よい頃な。女夫が一組出來ませうア丶フシおはもじやと笑ひける。地北の方聞き給ひ。詞チヽようこそ祝うてたもつた。今宵は奇妙なこと有つて修理は名字を免され。土佐の光澄と名乘るぞよ 地そなたもあやかり給へとあれば。又平時節と女房を。先へ押出し背をつき我が身も手をつき頭を下げ。訴訟有りげに見えければ女房心得進み出で。詞誠に道すがら百姓衆の噂を聞き。身は貧なり不具なり 弟弟子に土佐を名乘らせ。地兄弟子は浮か浮かといつ迄浮世又平で。地藤の花かたげたお山繪や。鯰押へた瓢箪のぶら〳〵生きてもかひなしと。身をもんでの無念がり。尤とも憐れとも連添ふ我等の心の中。申すも涙がこぼれまする。奥様迄は申せしが。お直の願ひは此の時節。今生の思ひ出死しての跡の石塔にも。俗名土佐の又平と御一言のお免しは。師匠のお慈悲とばかりにて涙に。咽び入りければ。地又平も手を合せ。將監を三拜しスヱテ疊にくひ付き泣きゐたり。詞將監素より氣短く。ヤア又しては〳〵叶はぬ事を吃めが。こりや此の將監は。禁中の繪所小栗と筆の爭ひにて勅勘の身と成りたるぞ。今でも小栗に從へば富貴の身と崇うれども。一人の娘に君傾城の勤めをさせ。子を賣つて食ふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ。土佐の名字を惜むにあらずや。地修理は只今大功あり。おのれに何の功が有る。地琴棊書畫は晴れの藝。貴人高位の御座近く參るは繪書。物も得いはぬ吃めが推參千萬。似合うた樣に大津繪書いて世を渡れ。地茶でも呑んで立ち歸れと フシ愛想。なくも叱られて。地女房今は力を落しこなたを吃に產付けた。親御を恨みさつしやれと頼みなく〳〵又平も。我が咽吭を

かきむしり。口に手を入れ。舌を抓つて泣きけるはフシことわり。見えて不便なり。地時に藪の内より將監殿光信殿と呼ばはつて。痛手負うたる若者椽先によろぼひ立ち。詞狩野の弟子雅樂之介御見忘れ候か。實にも〳〵雅樂之介まづ此方へと座敷に入れ。承れば四郎二郎殿雲谷不破が惡逆にて。難に逢ひ給ふ段々具に聞き氣遣はしと有りければ。さん候某も供仕り。雲谷と戰ひ斯樣に深手を負ひ候。賴み切つたる名古屋山三殿は在京。元信危く候ひしがやう〳〵のがれ。落失せたると承る。爰に難儀の候は。姬君銀杏の前元信を哀れみ。七百町の御朱印を持つて落ち給ひしを。敵奪うて下の醍醐に隱れし由。地二度姬君屋形へ移し御朱印奪ひ返さではながく繪師の瑕瑾なり某手負の身は叶はず。御加勢賴み申さんため。忍び參りて候と。語りもあへぬに將監皆聞く迄に及ばず。狩野と土佐とは一家同然力に成つて參らせん。されども彼奴らと太刀打は

いかな〳〵叶ふまじ。姬君にも怪我あらんどうぞ辯舌のよき人に。御屋形の御意といはせ。詫つゝ取返す分別がござらう。何れも云うてお見やれと額に小皺頰杖つき フシ各小首を傾くる。地又平何ぞ云ひたけに。妻の袖引背中つき指さしすれども合點せず。しんきをわかし女房を引き除けつゝと出で。師匠の前に雙手をつき唾を飲込んで。詞此の討手には拙。せつ者が參り。姬君もゴウ御朱印も。ウヽ〳〵〳〵うば奪ひ取つて歸りましよ。將監きつと見。ヤア。面倒な吃め。思案なかばに邪魔いるゝ。地そこ立つてうせぬかと。叱られても怖ぢるにこそ。詞イヤ膝とも談合と申す。口こそ不自由なれ。心も腕も天下に怖い者がない。拙者が分別出し。叶はぬ時はふん正祐定あつちへ遣るかこつちへ取るか。首がけの博奕命の相場か一分五厘。浮世又平と名乘つては親もない子もない身がら一心。命は掃溜の芥名は須彌山とつりがへ。悴の時から舊功なし。命

に代へて申上ぐるも師匠の名字を繼ぎたい望み。ばつかり。拙者めを遣はされて下されませ申し。申しさりとては御承引ないか。吃でなくばかうはあるまい。エヽ〳〵〳〵。地うらめしい咽吭を。搔破つてのけたい女房ども。さりとは情ないお師匠ぢやと スヱテ聲を。あげてぞ。泣き居たる。詞將監なほも聞入れなく。不具の癖の述懷淚不吉千萬。相手に成つては果しなしこれ〳〵修理之介。御邊向つて思案を廻らし奪ひ還し來られよ。地畏つたと云ふより早く刀ぼつこみ立出づる、又平むんずと抱留めてマヽまんまん待つてくれ。地師匠こそつれなくとも。弟子兄弟の情ぢや。此の又平を遣つてくれ殿とも言はぬスッすゝすつ修理樣。こりや又平。某やたけに思うても。師の命は力なし爰を放せ。イヽ〳〵いやハヽ〳〵〳〵放さぬ。放さねば拔いて突くぞ。ツヽつきコヽ〳〵〳〵殺せ。ハヽ〳〵ハヽ〳〵放しやせぬぞ。地修理之介もてあつかひ放せ。〳〵と

フシ捻ぢ合うたり。将監夫婦聲を懸け放せ放せと止むれども。耳にも更に聞き入れず女房取付き。詞あれお師匠様の御意が有る。地おとましの氣違ひやと。もぎ放せば女房を。取つて投げはたと蹴て睨みつけ。詞おのれ迄が氣違ひとは。詞エヽ女房さへ侮るか。不具は何の因果ぞやと。どうど座を組み。疊を打つて。スヱテ聲も惜まず歎きけるフシ心ぞ。思ひやられたる。地将監重ねて汝能く合點せよ。詞繪の道の功によつて土佐の名字を繼ぎてこそ。詞手柄とも云ふべけれ。武道の功に繪書の名字。譲るべき仔細なし成らぬ〳〵と云ひ切り給へば。女房居直りサア又平殿覺悟さつしやれ。今生の望は切れたぞや此の手水鉢を石塔と定め。こなたの繪像を書留め此の場で自害し其の跡の。贈り號を待つばかりと硯引寄せ墨すれば。又平頷き筆を染め石面に差向ひ。これ生涯の名殘の繪姿は苦に朽つるとも。名は石痕に止まれと。我が姿を我が筆の。念力や徹しけん厚さ尺餘の御影石。裏へ透つて筆の勢。墨も消えず兩方よりフシ一度に書きたる如くなり。地将監大きに驚き給ひ。異國の王義之趙子昂が。石に入り木に入るも和畫に於て例なし。師 勝つたる畫工ぞや浮世又平を引きかへ。土佐の又平光起と名乘るべし。此の勢ひに乘つて姫君御朱印諸共に。取返せとありければはつとばかりに又平は。忝しとも口吃り禮より外は涙にくれ。踊り上り飛上りフシ嬉し泣きこそ道理なれ。地将監夫婦悦び心剛にて志厚けれども。詞敵に向つて問答せん事いかゞあらんと宣へば。女房聞きもあへず。常々大頭の舞を好き妾諸共連脇にて舞はれしが。節の有ることは少しも吃り申されずと云ふ。地やれそれこそは屈竟よ。試に一節目出度う舞うて立て。あつと答へて立ち上り古き舞を身の上に。擬へてこそ舞うたりけれ。舞詞さる程に鎌倉殿。義經の討手を向くべしと。武勇の達者を選はれし。それは土佐坊。是は又。地土佐の又平光起が。師匠の御恩を報ぜんと。身にも應ぜぬ重荷をば。大津の町や追分の。繪に塗る胡粉は安けれど。名は千金の繪師の家。今墨色を。揚げにけり。詞斯て女房勇みをつけ。又もや御意の變るべき。はや御立ちとぞすゝめける。カリ、ヲ、いしくも申されたり。身こそ墨繪の山水男。紙表具の體なりとも。朽ちて朽ちせぬ金砂子。極彩色には劣らじと。勇み進みし勢は。ゆゝし頼もし我ながら。天晴繪筆の健氣さよ。唐繪の樊噲張良を楯についたと思召せ。お暇申してさらばとて打立ち出づる勢は。誠に諸人の地繪本ぞとヲヽ。譽めぬ者こそ三重なかりけれ。フシ逢坂の關に。地曙近き火用心の聲高島の星形には。六角殿の姫君行方見えさせ給はぬとて。旅人の改め問屋の詮議フシ土を返さぬばかりなり。地又平は今朝七つ立ち門出祝ふ中椀に。例の熱燗三杯ひつかけ打立つ所に。やごとなき上臈の素足の土に身もくづをれ。伏見の方

よりうろ／＼と是そこな者。京の道を敎へてくれ草鞋とやら云ふ物を。地穿かせてくれと詞つきの横柄さ。詞又平むつと顏に立ちはだかつて返事もせず。地女房走り出で大抵のお方でない。威の備つた見所有りとお側に參り。詞恐れながらお屋形の姫君樣と見參らす。我々は土佐の將監が弟子吃の又平と申す繪書の夫婦。狩野の弟子雅樂之介に頼まれ。お迎ひに參る折柄なり必ず包ませ給ふなと　地囁けば嬉しげにヲヽ自らこそ銀杏の前。道犬雲谷が追手すき間なし。よい樣に頼むぞやと宣へば。又平土塗に額をすり付け悅びの色勇みの色。氣を急けばなほ物云はれず心を仕方の腕まくり。りきみ反打ち居合の眞似拔打撫切拜み打。組合捻首手にとつて摚拏の武士氣をあらはし　埴生にかくまへ參らするヲクリ夫婦が〳〵所存ぞ頼もしき。地程なく八町走り井の問屋組頭。組町引具しおこしかへつて聲々に。詞六角殿の姫君朱印を盜み出で給ひ。御家老より御穿鑿裏屋小路も改めよ。別して繪書は屋捜し有る人は勿論犬猫も。地内を出すなと裏口門口ばた／＼と。さしもの又平取籠められフシ狩場の鹿の如くなり。不破の伴左衞門長谷部の雲谷。着込の兵百騎許り。むら立ち來つて家々に押入り／＼捜しける。又平一期の浮沈ぞと。女房諸共姫君を押し圍ひ。隣をがばと蹴破つてぐつと拔けたる壁あつき。氷の樣成る大刀物さし出す首を片端から。キ、／＼／＼切り並べんと壁に添うてぞ突つ立つたり。詞雲谷聲をかけヤア／＼是ぞ音に聞く。土佐が弟子吃の又平めが住家なり。地たゝき毀つて捜して見よ承ると一番手捕つた／＼。捕つた／＼とどつと寄せしがしどろになつて引き返し。詞なう怖や凄じや。何かは知らず家内には人大勢充ち滿ちて。或は奴の形もあり又は若衆女も有り。人間ばかりか猿猪鷲熊鷹爪を研ぎたて眼を怒らし寄付かるゝ事でなし。地なう／＼いやゝと身ぶるひしフシ舌を捲いてぞ恐れける。地何を吐す狼狽者。人三人とも住まれぬ荒屋何者か在るべきぞ。察する所見世に張つたる三文繪を生物と見違へしか。怖いと思ふ心から眼が眩んだ腰拔ども。地それ／＼蔀をこぢ放せぬるい／＼と下知すれば。鳶口をひつかけゑいや。ゑいやとなんなく見世をこぢ放しける。コハリ内を見れば不思議やな云ひしに違ひも荒奴の。影ともわかず幻ともまだほのぐらき曉の。鳥毛の鎗先揃へしは。土佐が魂寫し給の精靈なりとも知らばこそ我も／＼とかけ向ひ。打てども突けども手に取られぬ露の命を君にくれべいと。染めし奴服嫌ひなしフシ相手擇ばず防ぎたり。地雲谷が弟子長谷部の等巖數にも足らぬ糟奴。我に任せと捲り。かゝれば。片肌ぬいだる立髮男。大盃をひらり／＼と閃かし。眉間にふつたる唐辛。ヲヲから。ヲヽからからにしきフシあやめも分かず引返す。地師匠の雲谷堪りかね。片端より打ちみしやぎ。手並を見せんとコハリ

飛んでかゝる。やさしや優者の。女業にはきどく頭巾。藤のしなへを押取りのべ。ひん遷うてはたと打ち。しとゝ打つをひらりと外し受けつ。ほどいつ 地 あさ衣の フシ 玉襷。かひ／＼しき若き法師の現れ出で。勇みかゝれる。有樣は。なみや飴の飄簞々々。持つて開いて鉢叩き。叩けばすべり打てば滑りぬらり。／＼と手にたまらず。フシ あぐみ。果ててぞ支へたる。地 不破が郎黨犬上團八。そこ退き給へ人々と。打つて出づるや現の闇の。座頭一人とぼ／＼と。とぼつく杖を振上げ。／＼盲打に打つてんげり。あまさし物とつゞいてかかる。團八が弟犬上三八。二八ばかりの少人枕がへしの曲枕おつ取り。／＼はらり／＼はらはらはら。うつ波枕かず枕枕がさねに 地 打ち亂れ。フシ ちり／＼にこそ引いたりけれ。地 伴左衞門怒りをなし手にも足らぬ雜人輩。しや何事か有るべき武士の刀のあんばい見よと。眞一文字に駈けたりけり。あら凄じやこはいかに姿は沙門かしらは鬼神。鬼の念佛嚙みくだく。牙を鳴し角をふり向ふ者の眞甲撞木を持つて叩き鉦くわん。／＼。／＼くわん。耳にこたへ骨に浸み進み兼ねては引足も隼荒鷹鷲熊鷹一度にさつと飛び來り群がる勢を八方へ。追立て蹴立て啄き立て。翼の嵐夜明の風 三重 鶯の聲々〳〵 逢坂の フシ 木綿着鳥に。地 しら／＼と白み渡れば白紙に有りし形は彩色の。繪に寫りたる筆の精 フシ 天骨の。妙とも謂ひつべし。地 又平勇んで女房の袖を引き。物は云ひたし心進んで舌廻らず只ウヽ／＼とばかりなり。詞 エヽ愛な人。敵が詰めかけ事急な。廻らぬ舌をいはれぬこと。地 舞で／＼といひければ。チヽ。舞 それよ／＼氣がついた。今日前の不思議を見よ。我等が手柄で更になし。土佐の名字を繼いだる故。師匠の恩の有難さよ。敵の中へ駈入つて。命限りに追散さんと。大勢に割つて入り西から東北から南。蜘蛛手かくなは十文字。割りたて追廻し。散々に切立てられ。さしもの軍兵 地 堪りかね八方へ逃散つて フシ 殘る者こそなかりけれ。地 さあしてやつた此の上は。コヽ／＼／＼愛には片時も叶ふまじ。都の方へと姫君をヲヲ／＼／＼／＼逢坂山の時鳥。まだ初聲の口は吃り心は鐵石かなおとがひに。勝つたすぐれた越えた峠は日の岡の。石原草原足もしどろにどゝ／＼／＼吃り廻つてのゝの／＼上りける。

中之卷

地 里は都の未申なり通ひても。通ひたらぬぞ三筋町西の洞院中道寺。右衞門が馬場の門の東が白むドン。どんと撃つたる太鼓一方口未だ大門の遲櫻。忍びて開け一番の番太。詞 何者やら大門口に切られてゐると呼ばはる聲に。地 忘八屋揚屋茶屋昇夫。廓の年寄立合ひ見れば年頃三十許り。屈強の侍二つ重の白無垢白茶字に縫紋。紅絹裏に源氏雲の裾ぐくみ。南蠻ころの大小對の金鍔手彫は波に山王祭七所。御物蒔繪の

印籠阿瑪港珊瑚珠はさもなくて。大創五ヶ所肝先にとゞめありと委細に書き付け管領所へ訴へさせ死骸を圍ふ横梯子。二階から女郎買手遣手の龜は首のばし。松は寢ほれた顔出しまだおき／＼の禿ども。つね彌いく野と手を引舟も走つて來て。塀に鞍かけ木に取付きかほる樣あ見さんせ。吉野樣の大膽な掃溜山へ上つて。海老の皮で足突かんすな突いたら大事か。斬られて死ぬる人さへ有ると　フシあだ口々のやかましさ。詞あの斬られてゐる人は葛城樣の大盡。不破の伴樣に似たぢやないか。ほんにさうぢや伴樣に極つた。地サア伴左衛門が斬られたと京童の物見だけく。手負見がてら傾城見に　フシ群衆はおしも分けられず。地すはや検使と人を拂ひ菅領の雜色。供人引具し死體を解いて疵改め。詞江州高島の執權不破の伴左衛門に極つたり。さて此の者の買うたる傾城は何と云ふ。意趣ある者の覺えはなきか口論などはなかりしか。眞直に申せ當分隱して。後日に知れなば曲事なりとぞ仰せける。年寄罷り出で。上林の葛城と申す太夫を。千二百兩にて請出さるる筈の所。名古屋山三と申す浪人衆と葛城と。行末深い約束とて談合なりかね申せし故。兩方意趣を含み居られしが。是ならで覺え候はずと詳かににぞ云ひわくる。雜色一々口書し。名古屋山三は浪人なれども元は伴左と傍輩。地かた／＼大事の詮議なりまづ葛城が遣手を呼べ。遣手出ませと呼ぶ聲に玉は臆病年寄なり。やら恐ろしや私が出てなんと言はう。縛られたらどうせうぞ。なう悲しや目がまうたスエテ氣付は無いかと泣居たる。地是では埒が明くまいどれぞ氣轉な遣手衆を。頼んで見んと云ふ内に出ませ／＼と地頻りの使。エ思ひ付いた一文字屋の和國に附いてゐる。みやと云ふ遣手は。越前の敦賀で。遠山と呼ばれた全盛の太夫。戀ゆゑ今はあの體すゝどげなうて智惠まん／＼。閻魔の廳でも云ひぬける此のみやを頼まう。地あれ／＼彼處へ大福帳かたげて來るは。みやぢやないかといふ所へおしよぼからげのいそがしげに。詞皆さん是にござります。詞まあおけうとい事が出來まして。御苦勞でござんす地言ひ捨て通るをこれ／＼おみや。詞検使の衆葛城が遣手を召さるれども。玉は愚鈍で臆病なり何をお問ひなされうやら言ひ教へてすまぬこと。廓中の頼みぢや葛城が遣手に成つて出て。請返答をしてたも恩に受けうと言ひければ。あの死骸のそばへ出る事か。アヽゑゞ。地さりながらいやと云ふも仔細らし。地言ひ損うたら大事か。口に任せて遣つてくれよフシてんぽのかはとぞ出でにける。詞雜色鐵鞭横たへ。汝は葛城が遣手めか。用有つて召出すに何として遲なはる。横着者氣隨者と嵩をかけて叱らるゝ。アヽ彼のさんわいの頭から叱らんす。なんの氣隨でござんしよ十二人の太夫樣を一人して廻せば。地辨慶遣手が忙しさ口說の中をおし

隔て。打物業にて適ふまじと日に幾度の詫言やら。よるの身持は揚屋の吸物同然。ちよつちよと座敷へ出る度に一杯宛も飲む酒に。ふら〳〵眠りの行倒れ。朝から晩迄絆の袴花色繻子の巾着も。中は秋の夜の長紐。さけた鍵の穴から天をのぞけばほのぼの明。妓樣達の身仕舞風呂の手洗水の髪洗ひの。鍋よ杓子よ臼よ杵よ。正月しまへば節句朔日今日は二日の拂日なり。灸も据ゑたし卯腹辰股脊中に腹。商賣には換へられず皮切こらへて出る心。其の樣に云はんすな廓は諸國の立合。常住切つての撥つてのと。是程の喧嘩は。お茶の子〳〵茶の子ぞや。フシアヽ仰山なと笑ひける。雜色怒つていやさ汝が身の上は問はず。此の伴左衞門千二百兩にて葛城を請出すとな。傾城は賣物直段極まる上からは。名古屋山三が妨言うても叶はぬ筈。然るを違亂に及ぶとはうぬ等が奸曲と覺えたり。斬手も知らいで叶はぬ筈眞直に申せと詞荒く問ひかくる。少しも臆せず會釋して。御意の通り賣物とは申しながら。神佛の奉加と同じことで。銀出しながら拜まするは恐らく世界に傾城ばつかり。地買うてくれるが嬉しいとて親がかりやお主持の。戀路の闇の一寸先見えぬ所を側から見て。買人のお身も廢らず女郎ものぼさぬ樣に。能を取るが引舟目の鞘外すが遣手の役。大事にかける證據には世間に心中十あれば。廓に一つ有るかなし。伴左樣は御大身お銀に不足も有るまいが。御主人のお耳に立ち。お身の妨とも成る時は御一門の評議にのり。詞人を剝ぐの欺すのとおつる所は廓の難。爰の意氣をたてるが色里の 嗜。身請の談合破れたも伴左樣のお身の上。大事に思ふ上の事でござんす。地道で斬られさんしたはそこ迄は存じませぬ。定めし死にともあるまいし尤逃げても見さんしよし。そこに如才もあるまいが先の相手が強いか。身の取りまはしのわるさにかフシ知らんでやんすと答へける。地檢使の人々もであつかひよいわく〳〵。一時に詮議成り難し死骸を酒に浸し置き。後日の評定たるべしそれ〳〵とて役人共。桶をしつらひ死骸を納め。酒没み入れて繩がらみ。籠屋へやれと舁上げたり。詞雜色重ねて年寄々々。商賣なれば傾城には構ひなし。さりながら夜前よりの買手ども事濟む迄名と所を。一々に書き留めよこりや遣手め。地重ねての詮議には水をくれる用心せよと。嚇して立てどもおぢもせずエイおかんせ。詞銀くれる遣手に水くれるとは地惡譃なと。笑ひを機に云ひじらけ先を拂ひて立歸る。權威を見せて突鳴す鐵棒の音三味線に。引き替りたる三筋町戀の。市場と三重〽なまめかし。フシ名古屋山三。春平は。通ひなれにし六條の。道には石が幾つ有る迄。よみ覺えたる一貫町のフシ茶屋が。葭簀のよしやよし。地廓に擲つ命ぞと。大門口の與右衞門も門番には二代の後胤。平の供して口輕くフシ舞鶴屋にぞ入りにけ

る。地亭主傳三を始めとし數多の女郎遣手迄。是は〳〵様子はお聞きなされうが。まづ四五日もお出なされぬがよい筈。日頃意趣ある伴左衛門斬手は名古屋山三ぢやと何處ともなしの取沙汰。葛城様のお案じ我等夫婦の氣遣ひ。此のおみやが辯舌で今日はすらりとやりましたが。伴左衛門が死骸を奈良漬にして後日の詮議。殊にお客の名と所書き記せとのいひ付。お身に覺がなうてから詮議まんぎも喧し。お前を外様へ蹲はせて此の傳三が立ちませぬ。帳面に留めぬ間に フシまづお歸りといひければ。詞いや傳三さうでない。お手前こそ念頃。廓中の女郎衆へ苦勞をかけた此の山三が。穿鑿にあふ悲しやと屈んでゐる程ならば。里通ひも妓交りもあたまからせぬがよし。まづ和國様から御禮申す。大事の遣手をお貸しなされ忝い。扨みやの働き心ざし詞の禮はいふ程古い。三千石取つた山三が手を突いて頭を下げる。額に千石兩の手に二千石。

地主人の外一生に。此の式作法はみや一人。是が禮ぞと手をつけば。詞アヽ勿體ない何のお禮が入りませう。ちよつと葛城様に逢はせて去なせましたい物ぢやが。わたしが行けば目に立つ。和國様一筆進ぜて下さんせ。いや文もいかゞぢや私等直に誘うて。遊びに出る顔で連れまして來ませう。地サア皆ござんせとフシ座敷をこそは立ちにけれ。地然らば妾は人もくる 二階へお通りなされといへば。詞ヤア何が怖うて隱れうぞ。伴左衛門を斬つたるは誰とか思ふ。此の山三が手にかけ討つて棄てたるぞ。葛城が意趣は僅の事彼めと傍輩たりし時。狩野の四郎二郎を身が取持ちにて奉公に出せし所に。伴左衛門親子雲谷といふ繪師を引き。御在京のお供の留守無實をいひかけ刄傷に及び。四郎二郎は行方知れず。剰へ外戚腹の姫君銀杏の前。四郎二郎に心をかけ御祝言有る筈を。妨入れて狼藉し某迄も讒訴し。浪人の身と成つたれば重々の遺恨あり。殊に四郎二郎に隱れもなき名筆。大内繪所の官にも進む身を。某強ひて國に止め難儀をかけて見てゐられず。姫君と夫婦になし四郎二郎さへ出世すれば。本望々々生けて置かば四郎二郎に如何なる仇をかなすべきと。傾城の意趣を幸に討つて棄てたる伴左衛門。地知れて切腹するばかり四郎二郎故に捨てん命。聊か惜しいと思ふにこそ武家に生れた不祥には。大門口で立腹切り新造衆や禿ども。芝居でするやうな事して見せうヤア葛城はどうぢやの。亭主唄へと三味線の轉手に顔をすぢかひ身。絲の音色も目の色もフシ人を切つたる體はなく。地亭主はけつく色違へ先づお咄はいらぬ物。内外の者ども必ず仇口聞くまいぞと。わな〳〵ふるひ手酌にて フシ滅多に飲んでぞ居たりける。地みやは聞くより驚きて扨は我が二世迄と。思ひ込うだる四郎二郎様にかく迄深き恩を見せ。お命をも捨てんとはアヽ頓もしや忝や。詞我こそと名乗つて一禮いはうか。い

や〳〵。姫君とやらへ聞えては。御祝言の邪魔ぞと遠さけらるゝは知れた事。地只餘所ながら彼のお方の爲に成り。お命を助けるこそ我が夫への奉公と。思ひ定めてこれ傳三樣。お侍の覺悟の上を女子の料簡推參なことながら。あのさんに腹切らせ恩を受けた四郎二郎。何國の浦で聞付けてもよもや生きてはゐられまい。地人の所緣は。知れぬ物どれからどれへどうつゝて。誰が悲みとならうやら山三樣のお身の難。遁るる工面はあるまいか思案は今でござるぞやと。よそを言ふのも夫の事。案じて餘る涙の色フシ胸撫で下すも道理なり。詞ヲヽ汝が身がいふ通り。押取つて廓の迷惑お仕置には法が有る。腹切りたいとおつしやつてもようあたゝかに。見苦しい罪に粟田口下からどうも量られぬと云へば。山三はつとしてア、ウよい所へ氣が付いた。三味線どころでないわいの。相手は主持ちこちは浪人。暴れ者にしなされ木兎の留つた樣に獄門などに曝されては。先祖一家の恥辱今さつばりと腹切つても。其の段からは死骸迄耻辱は重り成る。地エ、主持たぬ身の無念さよと スエテ 歯切を。してぞ涙ぐむ。みやは聞く程我が男の。身に逼りくる悲しさの どうぞよい分別して。進ぜて下され頼みますと身に引きかけて歎く體。亭主暫く思案し。これ〳〵よい仕樣有り。詞爰へよりやと小聲に成り。是をついでに葛城樣を、とんと請出し奥樣に定める。時に親方と肌を合せ手形の日附をとつと跡の月にして。外樣へは借宅見たての其の間廓に少し逗留分。すれば御夫婦と云ふものよ。昨日迄伴左衞門が、くどいた狀

文提つてからは密夫の證據たしかなり。女敵討は天下のお許し千人切つても切り德。此の分別はどう有らう。地みやは悦びヲヽできた〳〵。目出度い〳〵智慧者めとあふぎ立つれば。詞アヽむしやうに目出度がるまい。當分請出すお銀がない。若しお腰の物をそれ迄の質物に遣されば。私が加判で太夫樣をたつた今門を出して見せませうか。お侍にお腰の物とはなうおみや。どうも申しかねるわいの。ハテお主のお身ばかりか不便になさるゝ四郎二郎迄。命を助かることなればゞ地御料簡あそばしませと。手を合せるやら歎くやら山三も共に涙を浮め。チヽ〳〵何がさて〳〵。皆の衆に苦勞をさせ。何しに否と云はれうぞ近頃過分千萬コレ詞是は重代の左文字二千五百貫の折紙有り。地惜しとは思はねども。七歳の時より今日迄。つひに脇差一本で。他所に居た事知らぬ身が刀の冥加に盡きたかと。涙は雨や鮫鞘のオクリ脇差〳〵ばかりで奥に入るフシ後姿を。見送り。

ておいとしや〳〵傳三樣どうぞ首尾して下さんせ。巻添が入るならば私が繻子の帶もあり。

八丈の袷もござんすと歎けば共に泣聲の。ヲゝ奇特によう言やつた。俺も男ぢや氣遣すな。嚊を總嫁に賣つてなりと埒を明けぬといふ事はフシないて出づるぞ頼もしき。フシみやが憂き身の。憂き思ひ。口でいはねば氣につかへ。目に流るゝは百分一胸に涙の滯り山三樣に骨折るも。男の心のフシ悲しみを。思ひやり手となつたるものウぞんざいでなられうか。戀が嵩じて遠山が此の態になつたとは。知らぬか聞かぬか男めが何處に居るやら死んだやら。梨も礫もうつとりと煙草のんでも煙管より喉が通らぬ薄煙。人の見ぬ間に思ふ程スヱテ泣くを所在か。あぢきなや。地内を首尾して葛城は走つて來るよりかけ上り。詞みや殿爰にかいかい世話であつたげな。忝いぞや土になつても忘れはしませぬ。おれが心を察してたも。ほんに／＼物日なかに痩せたわいな。こなたは今は何の苦もなうて樂であろ。遣手の身は羨しい地山樣は奥にかの。ちよつと逢うて來うぞや。後に／＼と云捨てゝフシ行くを見るにもなほ涙。地辛いぞ憂いぞといふ中にも。男を傍へ引きつけては。憂を凌ぐも力が有る。此の身には苦も有るまいとや。明暮つきあふ人目にさへ樂な樣に見えるもの。遠國隔てた男氣に思ひやりのない事は。無理ともいはれずさりとては。せめて在所が聞きたいとフシ聲を。立てねば泣いじやくり地氣もしづ。み入る時しもあれ心細げな鼓弓の聲。哀れ催す相のギンオクリ山我に相ノ山涙を添へよとや。ゆふべの朝の。鐘の聲寂滅。爲樂と響けども。聞いて驚く人もなし。詞通りや。只の時さへ相の山聞けば哀れで涙が零れる。地悲しゆて成らぬどうぶくらに。あた聞きともない通りや。通りやフシといひて涙を押拭ふ。相ノ山野邊より彼方の。友とては血脈。一つに數珠一連これが。冥土の友となる詞ア、舌垂い手の隙がない。通りや／＼といへども心に苦のない新造禿。ばらばらと走り出で。詞こちら好ぢや相の山。地聞いて泣きたい所望々々と立ちかゝる。詞エゝ意地の惡い子供ぢや。それ程何が泣きたい事。地遣つて往なそと巾着の紐をといて取出だす。錢は一錢二世の緣切れてもきれぬ笠の內。泣沈みたる顏見れば戀しゆかしの四郎二郎。互にハア、。ハア、とばかりに目くれ。心はしみ／＼と。抱付きたうもあたりには禿が目許小ざかしく。こらへるだけと包めどもスヱテむせびふくろび泣きゐたり。詞ア、去なせましたらよい物か。まちつと哀れな所を唄うて聞かせて下さんせ。地あつと涙にするさゝら胡弓の弦も細き聲。相ノ山定めなき世に。捨てられて身の寂。滅が知らせたく文は。書けども便りなし。合の手ひとり。寢覺の友とては夢に。見た夜の面影が。是が。寢覺の友となる。地折しも二階奥座敷こいよ／＼と手を叩く。あい。／＼地あいと禿ども。立つ間遲しと走り寄り。これ斯うした事もあらうかと憂き命をも捨てなん

だ。よう顔見せて下んせと。縋れば男も抱き締め涙の。外は聲もなし。なう戀しいのゆかしいのとは大抵戀路の習ひぞや。それをとんと打越して主親方にも背きし故。奈良伏見迄賣渡され今此の京で遣手となり。花の都も我が身には鬼界が島に住む心。胼凍瘡に苦しみても手足の苦勞は成りもせう。心を痛めるばかりぢやない力業にも才覺にも。叶はぬ物は逢ひたいと。思うて遣瀨がなかつたとフシ甘え口說くぞ不便なる。四郎二郎も盡きせぬ涙チヽ道理々々愍然や。詞度々文でも云ふ通り。其方の蔭にて大事の繪を書き譽を取り。契約違へず身請をせうと思ふ間に。不慮の事ども命があるといふばかり。恩をきた名古屋山三我等故の浪人。行く先も〳〵目出度いと云ふ字は書き樣も忘れて。今は團扇の繪蘆屋釜の下繪に露命を繫ぎ。大津で問へば奈良にといふ。難波で聞けば伏見とやら。是は釆女雅樂之介二人の弟子の介抱で。丸四年目に顏を見て嬉しいことはどこへやら。俺と云ふ者ないならばとうによい仕合。前垂鍵はさげまいと親御の事まで思はれて生きた心はせぬぞとてスエテ男泣きに泣きければ。ナウさう打明けて下んすが本々の御眞實。わしはいつそ親のこと思ふ所へいかなんだ。わたしに罰が當らずば當る者は有るまいと口說き立つれば四郎二郎二人の弟子も共涙。の竹も古へのフシ紫竹に染むるばかりなり。詞稍有つて四郎二郎先づいふべきは。名古屋山三春平此の所にて不破の伴左衞門を討つて。詮議にあふ由洛中の是沙汰。遺恨のもとは某故聞き捨てて置かれぬ挨拶。廓の說はどうぞといへばされいなア。詳しい事も聞きました山三樣にする世話は。こなさんへの奉公とさま〴〵心を碎いて何の波風ない樣に。十の物が九つ追付け埒が明く筈で。あれ〳〵奥にぢやわいなア。是は大慶先づ通つて對面せう。イヤ〳〵待たんせそりやならぬ。こな樣を尋ね出し。姬君と夫婦にせねば侍が廢ると。今も今云うた人に逢はずといんで下さんせ。エヽ愚痴なことばかり。我故に一命を果さうといふ山三ぢやないか。逢はずに歸つて人外の名をとれか。地異しう逢はせまいなれば爰で腹を切らうかと。脇差に手をかくるハテ死なんせではないわいの。詞外に奥樣持つまいといふ誓文立てて逢はんせ。ヲヽ姬君はさて置きたとへ餠屋のお福でも。山姥と祝言するても。山三が言葉を一旦立てずに置かれうか。地エヽ世間見た樣にもない氣が狹いぞやと恥しむる。世間は唐土迄知つても氣は武藏野程廣うても。大事の男を人には添さぬ。山三樣にあうて四郎二郎が女房は此のみやでござんすと罷り出でて斷らう。詞ヲヽ云ひ度くば言や詞の中に脇差を。此の腹へ突込むサアどうぞ〳〵と地詰められて。泣くより外は何をいふも大切さ。そんならいふまい息災でゐてくだんせ。さりながらどうぞ言ひ拔けらるゝなら。言ひ拔け

て見てくだんせとまだ〳〵の忍び泣き。尤々男の面役。かういふとてなんの如才が有る物ぞ。弟子衆こちへと涙ながら奥へ行く間も惜まれて。詞これ釆女様雅楽様。祝言の咄が出たらいひ消して下さんせと。地頼む返事の否應はフシ涙に紛し入りにけり。地心許なさあぶなさに心騒ぎて落付かず。襖の際にさし足し。立聞きすれば伴左衛門を討ちとめた物語。詞ア丶嬉しや女房事は出ぬさうな。まちつと聞かう。あの噺きは何ぢやしらぬ。聞きたい迄と耳をよせ。地ア丶悲しや連れて歸つて姫君と。女夫にせうといひくさる。詞こちの男が悧巧さうに。こなたの詞は背きませぬと。地吐かしづらは何事ぢや。エ丶聞くまい物を腹の立つと。耳を塞いで立ちつ居つフシ身をもみ歎くぞ哀れなる。地舞鶴屋の傳三郎遣手引舟下男。いきりきつて大聲あげ。詞こりや〳〵葛城様の身請さらりつと埒明いた。跡の三月二日に暇をやるとの一札。王様の御綸旨より高直な物握つた。乗物の戸をくわらりと明けて今でも大門をお出でなされと。地わめく聲に人々悦び走り出で。ア、〳〵お手柄〳〵酒呑童子の首より取りにくい事。詞主持たぬ身は爰が過分手を引合うて門を出て。名古屋山三と葛城と後々迄の咄を残さう。ヤア亭主近付になつて置きや。狩野の四郎二郎元信廻り逢はうばかりに。地互の苦勞は知る通り。身は葛城を請出す。四郎二郎は大名のお姫様を掘り出す。祝言の夜は勝手へ見舞や。拯みやの禮は今は申さぬ。前垂鎰を捨てさせ。武家か公家か町人か望み次第に數ならねども。拙者が親分先つ姫君の祝言には。女郎に賴まうと勇みかけても投首に。目も泣きはらして返事もせず怺へ兼ねてつゝど出で。云はんとするを四郎二郎柄に手をかけ腹を擦れば手を合せ。泣く〳〵退れどなほ堪られず思ひ切つていはんとす。四郎二郎胸押明け既にかうよと見せかくる。詞ア丶〳〵申し四郎二郎様私やなんにも申しませぬ。地御息災で姫君と。夫婦になつて下さんせと。スヱテわつと叫び伏しければ。共にせきくる四郎二郎ヲ、よい合點〳〵。廓の衆は涙もろく目出たい事にも泣きたがる。身請する女郎衆に名殘惜しいは尤ながら。他國へ行かず死にはせず追付け逢はう泣きやるなと。地よそにいふさへ包みかね目はうろ〳〵となりにけり。詞サアお乗物が參つた早うお出でなされませ。いや〳〵乗物古いと立出づれば。ヲクリ一家の太夫天神圍葛城様さらばや。さらばでござんす門迄送れあと賑やかし。打つたり舞うたり。舞鶴屋傳三が萬うけこんだ。おきみやげを遣手衆お春お夏と勇めども。みやが心はあきがらの。腰の巾着ぶら〳〵と物寂。しげにぞ三重へ見えにける。フシ花の三月。地はや過ぎて娘の年も廿椊。いつのまにかは長持に桐の葉茂る嫁入月。銀杏の前の御祝言名古屋山三の計ひにて。四郎二郎元信を北野の社人に借座敷。名古屋が家の子世繼

瀬兵衛輿添にて。供女中の出立や。地黒淺黄紅檜皮フシ右近の馬場にぞ着き給ふ。地並木の櫻暮れかゝりまだ人顔も。白無垢着たる若き女の横合より。嫁入の供先押し割り押し割り打つも擲くも事ともせず。しつかと縋つて引く程に乘物の戸は碎けて放れ。姫君あつと叫び給ふを胸ぐら摑んで引きずり出し。土手に押しつけ引つ据ゑたり瀬兵衛刀の反を打ち。六尺徒士の衆おつ取廻しそこを放せ放さずば。撲ち殺せ捻ぢ殺せと口々に呼ばはれば。地姫君制してアヽ默つてゐや構やるな。嫁入する身に女の際で只の事とは思はぬ。四郎二郎殿の妾か但し時の戯れに。末では妻にせうなどと男の當座まに合を。一筋な心から其の恨みでござらうの。我が身に知らぬ事ながら。殿を持つ役なれば聞くまいとはいはぬ。道理さへ立つことで負ける道なら負けもせう。又筋もない道いうてみや我にも手も有り足も有る。地銀杏の前が理不盡と云はれては大人氣ない。相手向ひにしておきやサァなんぞ聞かうと。口は陸路をわけながら。胸はしどろの山坂やフシ顔は躑躅の如くなり。女ためいき顔をあげ。アヽ流石でござんす。詞其の美しい出やうには。かう取つた胸ぐらを放し樣に困つた。地我とても中々狼藉する氣は微塵もなく。お乘物に縋つて歎きを申し。お情を受けうと。七本松から跡先に是迄窺ひフシ參りしが。あたまのかゝりがどうもなく。思はず慮外致せしなり。仰々しい白無垢着たは。討果してのなんのといふ。威しでも見せでもない。思ふ願ひが叶はずば西所川原か舟岡へ直に飛ばうと思ふ氣で。妾が爲の修羅出立ち高いも卑いも女子には。大なれ小なれ此の氣はあれどいはぬで持つた世の中。色に出さぬを嗜と心で心を叱つて見ても。いかなる慾も離れうが男に慾は得離れぬ。さりとては穢い氣恥かしゆうござると聲をあげフシ譯をも。いはず泣居たり。地瀬兵衛を始め女房達御祝言の時刻違ふ。詞道行ばかりいはずとも。入る事ばかり申せ〳〵と責めければ。ヲヽ御尤〳〵。詞私は土佐の將監が娘幼名はお光親の憂き瀬に身を賣り。越前の敦賀で遠山と申せし流れの者。地四郎二郎殿とは故有つて。起請一筆書かねども釘鎹より離れぬ中。詞身を持ちくづし方々をうろたへ。今は六條三筋町上林が内みやと云ふ。地流れの身よりあさましい遣手はしてもおのれやれ。一度は狩野の元信が内儀といはれう〳〵と。四年が間の氣の張弓はつたりと弦きれて。泣くにも力あらばこそ。無理ともそんとも餘り無法な事ながら。長うは入らぬ一七日今宵の嫁入を下されば。跡はお前と萬々年七日添うて別れて後は。此の世の生顔見せまいし。たとへ死んでも彼の人の未來の回向は受けますまい。もう此の跡は申しませぬと。フシ涙を流し手を合せフシ伏し轉ぶこそ哀れなれ。地姫君呆れておはせしが。聞けば笑止いたはしや。いやと云はば大抵どうよく咎と

いはれうず。心得たというてから迷惑するは我一人。新枕はどうかうと競ひかゝつて行く嫁入。道から貸して歸るとは話にも聞かぬこと。こちや義理ずくめになつたかとスヱテ聲を上げて。泣き給ふ道理の上の道理なり。やゝ有つて涙をおさへ。ムヽよしよし合點した。詞そなたが其の思ひからは男も心にかゝる筈。二人の緣の離れぬ中へ嫁入してをかしうない。地蓋も懸子も打明けたこそ女夫なれ。詞男を貸してやる程に互の心を晴らしてたも。さりながら餘り懸子を明け過し底抜きやつたら地こちや聞かぬと。涙ぐみつゝ宣へばハヽ有難やと遠山は。姫君に抱き付き貸すお心より借る心御推量遊ばせと。泣き聲よそに。飛梅のフシ神も憫み。給ふべし。地サアとてもなら早いがよし元信は豫てより。傾城好と聞きし故。此の小袖を見や廓模様にいひ付けた。是着て行きやと裲襠脱いで七日といふもいまいまし。來月一ぱい貸すぞや。アヽお志は有難けれど。終に別るゝ此の身なり。然らば七々四十九日が中は私が妻と思召せ。此の分で死んだらば定めし男の餓鬼道へ墮ちませうと。泣く／＼たてば姫君さういうて皆吸干しやんなどこぞ少しは殘してたも。こちは是から腰元つれて歩うて戻る。あの乗物で皆供しやと歸るさを見て遠山は。姫君様のお情程我が身の罪は重うなる。借る時の地藏菩薩に捨てられ返す時の閻魔の聽。どういうて遁れうと涙をかこふ神垣や。神も佛も見通しに。酸いも甘いも梅靑む北野の。借屋に三重〽嫁取のフシ嫁の手道具。地御厨子鏡臺うちみだれ箱。葛籠貝桶挾箱。長刀持たせて遣手のみやが來るとは思ひがけもなし。其の心底の届きしこと姫君の情といひ。かた／＼默止がたければ門弟雅樂之介釆女隼人。大學なんど宗徒の弟子ども。すべよくまかなひ春平にも内意を得。表向は銀杏の前御入り有りしと披露すれば。方方の音物樽よ肴よ巻物よ。太刀折紙の馬代銀五十目がけの蠟燭の。明けぬ暮れぬと賑ひて今日五日目のあさ上下。雜煮の黒餅子持筋オクリつきづき〽しくぞ見えにけるフシ其の日もやう／＼。地かたぶく頃名古屋山三春平はお見舞申すと案内ある。詞雅樂之介出迎ひ。先づもつて此の度は姫君様御料簡美しく。おみやも念晴れ元信も落付き申すこと。地皆是貴公の御蔭門弟中も忝く。悦び存じ候とフシいづれも禮をなしにける。是は迷惑元信爲と存ずれば。各同然の大慶。さて今日は五日目五百八十の餅搗いて。里歸りといふこと緣邊の式法なれども。親元は遠所祝うて我等が宅へ呼びたいと。葛城も申すがちよつと尋ねて見たいとあれば。雅樂之介笑ひイヤ尋ぬるに及ばず。總て別るゝ日切の女夫寢入る間も惜しいとて。顔と顔を突合せ頭も振らぬ舌たるさ。地里歸りはさて置き臺所へも出られませぬ。夫は仰な喰付様さうして互に飽かせたら。跡の爲には珍重元信筆は違者なり。一日一夜

に半年の　フシ仕事は出來うと笑はるゝ。地斯かる所に無紋の色に淺黄の上下」編笠取つて入るを見れば舞鶴屋傳三郎。出口の與右衛門打ちしをれたる風情なり。詞名古屋を始め門弟中興さめて。これ傳三あんまりそれは粹過ぎた。聞かぬといふこと有るまい葬禮の戻りに。祝言の家へ立寄るは無禮すぎた不道化。可笑うない歸れ〳〵と苦々しく叱られ。鼻打ちかみて目をすりすり。姫君樣の御祝言と遠慮致して見ましたが。わきから沙汰が有つてはお恨みの程も如何と。女房が心を付けまして。今日七日目の墓參り。ついで乍らのお知らせ。地常々氣立が結構で。おみやといはず佛々と申したに。あつたら佛もやくたいもない。骨佛にしてのけたと　スヱテさめ〳〵とぞ泣きゐたり。地人々更に誠とせず酒に醉うたか狂氣か。みやは少し樣子有つて姫君に代り。四郎二郎と祝言し。五日前より奧に夫婦竝んでぢや。阿呆たことを吐かすまい。イヤ私を阿呆になさるゝか。七日前に死んだ人が五日前に來る物か。地蓮臺寺專譽樣の御引導舟岡山で灰になし。地和國樣を始め女郎衆から名代に。禿どもが灰寄せ五輪まで立てたもの」何の僞り申しませうと眞顏にいへば人々も。ぞつと怖氣も立寄りて。詞して眞實かどうして死なれたことぞといへば。眞實かとはいとしぼげに常が癪持ぶら〳〵とはしながら。一日と寢られたこともない人が。いつぞや葛城樣身請の晩から頭痛するとて引き込んで。地それから枕上らず次第に重つてくる程に。お客樣のひき〳〵て。柳原の法印樣半井の御典藥幸ひと和國樣へ。對島の客から參つた朝鮮人蔘。尾張大根見る樣なを刻みもせず丸ぐち。人蔘の風呂吹を一期の見始め。人蔘でも鐵砲でもいッかな咽を通すにこそ。もう無いに極つて私を呼び寄せ。今迄は隱した遠山といふた昔から。四郎二郎樣と夫婦の契約し。目出度う願ひ叶うたら。夫婦づれで熊野參りを致さうと願ひをかけ。此の笠の紐も手づから絎けました。これを被て四郎二郎樣熊野へ參つて下され。死しても心は連れ立たう書置もしたいが。口でさへ盡くされぬ筆には中々廻らぬと。目をほつちりとあいて南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛と七八遍は聞きましたが。地なう肝心の時には念佛といふ物もなんのごくに立ちませぬ。南無阿彌さへすう〳〵陀佛迄やらずにころりと取つていきましたとわつと叫べば人々も。扨は定よと手を打つて　フシ皆々袖をぞ絞らるゝ。地名古屋も呆れゐられしが。疑ひもなく夫に引かるゝ魂魄假に形を見せけるぞや。さもあれ樣子を尋ぬるため腰元衆。〳〵と呼びければあいと答へて奧より出づる。詞なんとおみやは機嫌はよいかと云ひければ。ア、御機嫌ようにこ〳〵笑うてござんする。さりながら心ざしありとて。酒も魚も口へ寄せず樒の香の煙絶やすな。煙絶ゆれば爰にゐることならぬとて。地お寢間の內は抹香

でふすぼりますといひければ。して。四郎二郎はどうしてぞ。詞アヽさればおみや様の頼みで。お寝間の襖に熊野の山の繪を遊ばいてござんする。地扨はみやが幽靈疑ふ所もないとあれば。腰元驚 アヽ怖や。なう知らいで傍に居ましたと。膝のそばに這寄りて フシ身を屈むこそ道理なれ。詞雅樂之介心を決せんと思ひ。さもあれ狸野干の業も有り。誠の死したる幻は。形あれども影映らずと承る。地某参り直に逢うて笠を渡し。灯火をたて實否を試し申すべし。かたがたは小庭より障子の影を御覧あれ。たとへ怪しいこと有りとも必ずわつといふまいぞ。何が怖いこと有ると誰も口では夕暮や。小氣味の悪き雒が本軒に藪蚊の餅つきも。其前垂の名殘かと心細くも佇めり。詞雅樂之介何心なき調子にて。是は暗いお座敷。みや様はそれにか。火を點したらようござらうといふ聲す。ア、さればいな。心の迷うた身の上闇に闇を重ぬるつらさ。地晴らしてほしやと夕顔の黄昏ゝらす行燈の。障子に映るを能く見れば元信は元の人體にて女の影は五輪とみやが物腰ばかり人間の地水火風の風艶き。木の葉に結ぶ陽炎のフシ露の姿ぞ哀なる。地四郎二郎は勞々と疲れ佗びたる如くなり。雅樂之介猜訝しく。詞此の菅笠は里の便に参りしが。何に入ることぞと云へばなう嬉しや嬉しや。ほんに是が欲しかつた私が熊野を信ずる事。敦賀では遠山三國での名は勝山。伏見へ賣られて淺香山。山と云ふ字を三度つき。それ故に木辻では三つ山と付けられし。地思へば熊野三つのお山の名を濆し。牛王の咎めも恐ろしく。お主と夫婦にして下さらば。連立ちお禮に詣でませうと笠の絲迄絎けおきし。追付け別るゝ身なれども一日でもかう添ふからは。願は叶うた同然神佛に嘘はないと。此の襖戸にお山の繪圖を頼みまし。参つた心で拜まんと。思ふ所へこの笠は。どうした便に來たことぞ。餘のことは何もいはずか。地又の便に傳三殿へたとへいかなることありとも。四郎二郎様へ歎きのかゝる事などは。知らせまして下さんすなと。よういひ届けてくださんせと。苔の下まで我が夫フシいたはる心ぞ不便なる。地サア女夫連で参りませうこな様は勝手へいて。後夜の鐘の鳴る迄念佛きらして下さんすな。似合うたか知らぬと笠打被たる五輪の影。五つの假の夢現餘所のことではなくなくも。元の座敷へ人々は宗旨々々の手向草。題目眞言念佛の回向に。更くるも 三重

三熊野かげろふ姿

歌あら惜しやあたら夜や。夫婦の中に。咲く花も。一夜の夢の眺めとは。知らぬ男の。いたはしやと フシ泣くより外の。事はなし。昔の朝の。身仕舞に。髪に炷いたり裾にとめ。そよとふくさの色風も。フシ今燒香に立つ煙。スエテ反魂香と燻ゆるかや。香爐の灰の。灰寄せも。願をいふならこなさんを。我こそあらめ逆様の。フシ水の流れの。身

のならひ。ところ〴〵の死水を。誰にとられんあさましと。フシオクリよそに〳〵いひなす。言の葉をフシ世に亡き人とは。そもしらず。アアいま〳〵し。老木の末の。思ひ置きはよしなやな。此方も其方も若松の。歌千代の盃ざゝんざ。フシ濱松の音。七本松の七本を。女は卒塔婆に數ふれど。男は今日の七五三。嫁入ごとせし戯れも今は誠と嬉しげに。ハヅミ手を引き。合うて笑ひ顏。フシ我は朝顏。しぼみゆく花の上なる。露とはしらぬ果敢なさよ。月は虧けても三つの山オクリ婆婆の。便は片便宜文も屆かず言傳もフシいはで。心の。熊野路や。照手の姫のやつれぐさ。常陸小萩も夫ゆゑ身を旅籠屋の。水棚の。はしに目鼻の餓鬼阿彌をスヱテ夫とは更に白絲の。緣は穢き土車に心は物に狂はねどオクリ姿を。物に狂はせて。詞説經曳けや。〳〵此の車ゑいさら。さら〳〵 地笹の葉に死出の旅路の。後世の友。一曳き曳けば千僧供養。二曳き曳けば萬能の。フシ藥の湯本と聞くからに。四百四病は。消えもせん骨になつてもなほらぬは。私がそ樣を戀やまひ。變る心を案じては神の御名さへぞつとする。飛鳥の社濱の宮。王子々々は。九十九所。百に成つても思ひなき世は和歌の浦。フシ梢にかゝる。藤代や。地岩代峠汐見坂。書きうつす繪は殘るとも我は殘らぬ身と聞けばいとしやさこそ我が夫の。涙にくれて筆捨松の。雫は袖に。フシみつ汐のスヱテ新宮の宮居かう〳〵と。出島によする磯の浪。岸打つ波は普陀落や那智は千手。觀世音。古へ花山の。法皇の。后の別れを。戀ひ慕ひ。十善の御身を捨て高野西國熊野へ三度。後生前生のフシ宿願かけて。發心門に入る人は神や受くらん御本社の。證誠殿の階を。おりて下りて。待ち受け悦びフシ給ふとかや。地我はいかなる罪業の。其の因緣の十二社をめぐる輪廻を離れねば。疑ひ深き音無川流れの。罪をかけて見る業の秤のおもりには。スヱテそれさへ輕き磐石の。岩田。川にぞ着きにける。地垂跡和光の方便にや名所〳〵宮たち迄。顯はれ動き見えければ元信信心肝に染み。我が畫く筆とも思はれず目をふさぎ。南無日本第一大靈驗。三所權現と伏し拜み。頭をあげて目を開けば南無三寶。先に立つたる我が妻は眞逆樣に天を踏み。兩手を運んで歩み行く。はつと驚きこれなうあさましの姿やな。誠や人の物語死したる人の熊野詣は。或は逆樣後向生きたる人には變ると聞く。立居に付けて背より心にかゝる事ありしが。扨は和女は死んだかと。こぼし初めたる涙よりスヱテ盡きぬ歎きとなりにけり。詞恥かしや心には陸地を歩むと思へども。逆樣に見えけるかや四十九日が其の中は。娑婆の緣に結ぼほれ姿を見せて契りしものを。妹背の中に怖氣立ち愛想も盡きば如何せん。かはる姿のつゝましや逢ひ見る事も是限りと。泣聲ばかり身を絞る。地涙の霧

不戀慕の霞。冥々。朦々朧々として。見えつ隠れつ燈火の フシ油煙に。紛れ失せにけり。地元信五體をかつぱと投げ。よし雨露に朽果てし骸骨なりとも抱き留め。肌身に添へん夫婦の友。何に怖氣の有るべきぞ。地現世の逢瀬かなはずば。刄に死して此の世を去り。極樂諸天は愚かのことたとへ地獄の底迄も。誘へ伴へ連立てと。座敷のくまぐ〱屏風おし退け。障子を開きやれ遠山は何方にぞ。みやはいづくに我が妻戸。明くる遣戸に遣手の形。スヱテ現はれ見えしぞ。哀れなる。中音いつならはしの世渡りや阿波の鳴門は越ゆるとも。此の浮舟のうき流れ何と遣手の身ぞつらき。まぶの忍び路關となり文の通ひの逆茂木に。人の思ひはフシ戒めながら。地我が身は包む戀衣赤前垂の火焔にこがれ。三途八難の惡趣に墮す苦みの涙目を眩まし。生死をわかぬ迷ひの雲所々に名を變へて。數々色を飾りし報。身體一つが五つに分れ五輪五行の苦をうくる。

如何なる世にか免れんと。叫びわなゝく袂の影艶色あてなる二人の遊女 フシ左右に。別れ見えたるぞや。地是こそは其のはじめ白粉紅花によそほひし。後世の道には遠山があだの情の釣針に。人を敦賀のうき姿松といはれし松が枝は。四大のもとの木に。フシ歸るなり。地次は三國へ買ひ流されて姉女郎や傍輩に。賣り負けまいぞ勝山と名を變へ風をかへけるも。戀に我を張る我慢の山。麓の塵のちりひぢの。土にかへすを御覽ぜとフシ夕月。出づる如くにて。地うしろに高くあらはれしは流れ漂ふ川竹の。伏見に來ての淺香山。地さすが所も極樂を。願へと告ぐる撞木町。安養世界の夜見世には點すべき灯火なく。吹消す風も吹かずして一心の火をもとの火に。返す間の影ぞかし前に。立つたる花薄。ほの〲見えしまぼろしは。木辻の町の地三つ山と。フシ呼ばれし。フシ時の面影が。今は名のみに。奈良坂や此の手彼の手の枕の酒霙霰と隔つれ

ど解くれば同じかすり井の。水をかりなる戯れも遂に迷ひの井堰にからみ。木は執心の斧に碎かれ土は逢ふ夜の壁と隔り。火は又三世の縁を燒く。四大の四苦を此の身一つに重ね。重ねて空より出でて空に入る。報も罪も色も情も迷ふも悟るも待夜の鐘も。別れの鳥の聲々迄も。フシ地水火風の五つの玉の緒。只一筋に結びあひたる フシ姿なるぞや。地なう〱惜みてもなほ惜まるゝ。名殘も縁もつひに行く。道ならばいざ伴はん。とは思へども夫の命長かれと。祈る心もさまぐ〱に。皆妄執の仇夢と。さめざめ驚き涙の露の玉の臺の床の内。連理の蓮片敷て。長き契りを待つぞや待たん。標はこれ。此の。一見卒堵婆永離三惡道。南無や三熊野本地の三尊。迎へ給へや導き給へと唱ふる聲は伏屋に殘つて フシ形は。見えず消えにけり。地元信抱き留めんとすがりつけば影もなく。うんと仰向に目くるめき忽ち息切れ絶え入りしを。名古屋揚屋門

弟等驚き騷ぎ。藥さま〴〵呼び助けやうやう。一間に 三重へ 休めけり フシ夜もほの〴〵と。 地明け行く頃管領の雜色衆不破の道犬長谷部の雲谷誘引し。伴左衞門が酒漬の。死骸を舁せ どや〳〵亂れ入り。 詞此の所に名古屋山三春平や在る。管領よりの御下知有り對面せんと呼ばはつたり。 地名古屋遲々せず出で向へば。雜色鐵棒引き鳴らし。 詞不破の伴左衞門をお手前が手にかけしこと紛なき上。父道犬願によつて。吟味を遂げらるゝ處盜賊の罪遁れがたく。曲事に行はるゝ條召捕り來れとの御諚。尋常に繩をかゝられよとぞ仰せける。名古屋少しも騷がず懷中より。忘八の手形數通の文を取出し。斯樣の愚蒙の返答は申すも似合はぬこと乍ら。片口の御裁斷如何にしても輕々し。これ此の手形を御覽ぜ。葛城事は三月二日に親方が暇を取り。拙者が本妻借宅見たての間。揚屋に預け置きし所に。伴左衞門數通の艶書。斯の通り不義者の女敵なり。此の方より願ひを申し。親道犬をも罪科に沈めんと存ぜし折柄。却つて我等を召捕れとは定めてそれは各の間違へ。それなる道犬か雲谷が事でがなござらう。 地逃げも走りもせぬ男。聞き直してお出でなされよと フシ大樣にこそ答へけれ。 地道犬つつと出できたない〳〵こりや山三。忰伴左衞門葛城を請出す手付として。金子五百兩懷中せり。女敵討は聞えたがなぜ金子は盜んだ。總じて盜みと云ふ物も盜む時はうまい事。あらはれた時は辛い苦い物ぢやげな。サアなんと遁るゝ所は有るまいと。 地證據なき言分ながら名古屋も相手は死人なり。何をしるしの言譯と フシにが〳〵しくぞ見えにける。 詞四郎二郎かくと聞くより飛んで出で。いや〳〵とかうの評議は御無用盜人ならば盜人切取ならば切取。 地科人は狩野の元信。繩は百筋千筋でもおかけなされと。大小拔いて投げ出さんとする所を。名古屋抑へて暫く〳〵。 詞御心底忝いさりながら。それ迄に及ばぬ事ひらに〳〵と押止め。これ道犬。某盜人でない申し譯が立つならば。己れ又侍に。盜人といひかけした其の科はなんとする。時に雲谷進み出でイヤサ山三。盜人でない言譯立たば。命を助かる其の方が仕合せよ。道犬公は一子を殺され金子を取られ。何のあやまり有るべきと。いはせも果てずヤアうぬらが存ずる詮議にあらず。お屋形には一つ間へさへ入れざりしを忘れたか雲谷。 地此の穿鑿濟んでうぬも遁さぬ用心せよと。睨み付くれは道犬。 詞山三山三脇道へすべらすまい。五百兩の金子を身に付けた伴左衞門。斬りは斬つたが金はしらぬと言ふとても言はせうか。盜人でないならば言譯せよと詰めかくる。ヲヽサ言譯はして見せん其のあとは合點か。 地イヤまづ言譯から聞かんずと。せりあへば雜色これ〳〵名古屋。 詞問答迄もなし其の爲の我々。人にこそよれ兩方共に弓馬の身がら。盜賊といひかけ分明なら

ぬ訴訟。且は上を掠むる越度。言譯たゝば道犬は存分に計ふべし。又盗賊に極らば下知の如くお手前に。繩をかけ申すと理非明らかに述べらるゝ。名古屋勇んで罷出で名古屋山三春平は外の事は不調法、傾城の買様と人斬る様は大名人。恐らく宗匠ごさんなれそれ〳〵。伴左衛門が死骸を是へ出されよ。地心得たりと役人ども封切ほどき酒漬の。死骸は更に色かはらずフシ唯其の時の如くなり。地名古屋袴のそば取つて近々と寄り。詞彼を討ちしは先月廿日。曉月の時鳥名乗りかけしは欺さぬ證據。向ふ疵に斬伏せとゞめを刺さんとのつかゝり。胸押開けば懐中に金子あり。此の儘置いては誠の盗人來つて捜し取らんは必定。時には山三が盗みしと後日の難を察せし故。鳩尾さきを抉つて。金子は彼奴が身體の內肺の臓に押込んだり。五臓の中にも肺は金同氣求めて朽もどろけもよも爲まじ。地いで見せんと手をのばし。ぐつと入れ朱に染みたる緞子の財布。引きずり出してこれ見たか。詞是でも山三が盗人か。地弓矢取る身の仕方を見よと道犬にはつたと投付け。死骸を踏まへつゝ立てば雜色を始めとし。元信其の外門弟等出來た〳〵。あつぱれ〳〵御分別。フシ後學なりと勇みをなす。地道犬は言句も出ず雲谷はひるまぬ顔。相手の言譯たつたからは此方は切られ損。お歸りなされと立つ所を二人の雜色衆飛びかゝり鐵棒ふり上げ打つ程に面も眉間も打裂かれ。胴骨碎くるばかりなりやがて繩をかけさせ。道犬親子は世間流布の重罪上を犯す科とい ひ。只今の始末諸人の見せしめ。親子諸共獄門に曝さるべし。詞先づそれ〳〵死骸の首を討て。承つて下郎ども搔首にして髻をからげ。地道犬が首にかけさせ扨雲谷は當座の處外。罪の輕重いかゞあらんと有りければ。元信春平詞を揃へ元は彼奴めが惡逆。騷動の始なり古主の屋形に訴へ。長袖なれば流罪に行ひ申したし。尤々二人共に牢屋へやれと引立つれども脛立たず。エヽ卑怯者歩まずばまかせて桶にうち入れて。詞生ながらの酒びたし地獄の鬼の中食菜と。地ツメ戯れ笑ひ歸らるゝ悦ぶ中にも元信は。憂に沈む那智の瀧亂るゝ色を勇めんと。唄へや唄へ雅樂之介。其の外の門弟中。憂ひは憂ひ祝儀は祝儀未來の嫁入は一七日。現世の嫁は七日町永く知行に墨筆や。家をさいしく繪具筆隈筆。藁筆泥引筆その筆先に金銀も。わきて和泉の壺の印。ならびなつ毛の狩野の筆末世の。寶となりにけり。

下之卷

地凡そ繪の道には六つの法有り。長康張僧陸探の三人を。異朝の三祖と學び來てフシ和國に筆の色をます、地狩野の四郎二郎元信天然彩墨の妙手を得て。後柏原後奈良の院正親町の帝。三代四代の聖朝に仕へ祝髪の後越前の法眼玉川齋永仙と號し。末世の今に至る迄。古法眼と賞歎するは此の元信の筆とかや。既に大永七年新帝。大嘗會悠

紀主基の御屏風を書き。從四位の下越前守に補任せられ。數多の門弟上下の供人肩をいからす山科や。土佐の將監光信のオクリ山莊にへ案内せられける フシ將監夫婦。地出向ひ今官祿に秀で給ふを見るに付け。娘が事のみ忘れ難なう候とスヱテ詞に先立つ涙なり。詞御の如く某とても。彼の人を先立て世に交る所存なけれども。將監殿を世に立てんと。惜しからぬ世も捨てかね申せし所に。次第々々に登庸し大嘗會の御屏風を仕り。叙爵に至る朝恩の上。地貴公の勅勘訴訟叶ひ向後一家の結をなし。相並んで繪所の門を開くべしとの宣旨を蒙り參りたり。親御達を世に立てなば草葉の蔭の娘御の。一つの逑ひも晴るべきかと型の如くに禁中方。願ひ取りなし候と語り給へば將監夫婦。有難や忝や歎きの中の悅びとは。我等が身にて候 貴殿の御庇惠にて勅勘を免さるゝも。一つは娘が光ぞと フシ なほ〳〵落涙せきあへず。地かゝる所へ名古屋山三春平。樽肴黄金時服さま〳〵音物持たせて。將監に對面あり雲谷不破が不居故。詞元信我等兩人永々沈淪致せし所。善惡の是非落居し。二人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ。某も先知に復し候。其の節は姫君の御事につき。御自分さま〳〵御懇志の趣。主人御屋形滿足致され。先づ當分お禮申さるゝ印目錄の通り。微少ながらと述べければ。地御使がらと申し御丁寧なる御事と。互の禮儀淺からず フシ暫く時こそ移りけれ。詞稍あつて名古屋。ヤア承れば娘御遠山。忘八の手前約束の年明けて。今日是へ歸り給ふよし。地さぞ〳〵お悅び推量致したと。言へども人々のみこまれずとかうの返答なき所に。供の者ども聲々に。詞遠山樣はやあれまで見えまする。迎ひにお出でなされませありや〳〵振つてござるわと。地言うても更に心得ず死して程經る遠山が。歸らん樣は涙ながら立出で見やれば屋形の姫君銀杏の前。地髻入れずの二ッ櫛。鴨のはなりの蓮葉袖吃の又平日傘。さしづめ香車は フシ女房なり。いつならはしの。道中も。心つければ振りやすい オクリ ふれ〳〵へ雪の遠山が御影もよもや是爰が。おれが內かとつゝと入り。なう父樣母樣今歸つたわいな。久しうで逢ひやしたと。地とんと坐りし居住居は フシ禿だち見る如くなり。地各は不審晴れず。名古屋は元より合點なれば。地チヽいづれもの御不審は尤々。ながう申せば段々あれども。必竟姫君を將監殿の娘にして。死したる人が二度蘇生られたと思召し。元信にめあはせあれ姫君も一度は。大事の命を助けられし各なれば斷うなうてから親同然。地なまなか儀式だてしては養子というて面白なさ。又平夫婦と談合して血をわけた遠山に。致したが我等が趣向取組は御屋形の。御意でござると小短く。譯も聞える道もたつフシ金遣うたるしるなり。地將監夫婦も悅び涙。ちひさい時のお光が。成人顏見て嬉しいと抱き付いてぞ

泣き給ふ。名古屋重ねて懐中より一通を取り出し。詞是は田上郡七百町の御朱印永代知行なされと頂戴させ。扨田上郡は給所々々の入組にて地割中々むつかしし。某が父主計之介天文の暦算に達し。鼠算盤と云ふものを巧み。積物割物人の聲にしたがつて。算盤の表明白にあらはるゝ。是を以て勘へば間づもり知行高。刹那に相濟み申すべしとありければ元信聞き給ひ。それに付き延喜の帝。陸平永寳駒引錢を鑄させて民を賑はし給ふ。其の駒は晋の韓幹が馬を寫されし。地我亦其の駒の圖を傳へ覺えて候へば。駒引錢を鑄て領内を賑はし申すべし。是は珍重然らば善はいそがしや。嫁入婿入國入して本祝言の儀式は重ねて。まづ〱今宵は祝うてさつと目出度うそろべくそろばんつぶに萬代。積るぞ 三重へ豊なる フシ年は子の年。地大黑女夫力次第に子孫もわきいづる。地からは五穀手からは金が湧出で〱子々孫々迄。長久榮華の家繁昌は君が。惠みの威德なり。

右之本令吟寛頭句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者也

近松門左衛門

正本屋 山本九兵衛 版

大阪高麗橋壹丁目
山本九右衛門 版

高野山女人堂 心中萬年草

近松門左衛門作

歌女嫌やる。高野の山に。なぜに女松は。生ゆるぞや。なぜに女松が生えまいならば。夜這星でも フシ飛ぶまいか。松より梅より。柳よりお寺小性の稚兒櫻。稚兒文殊の御相傳大師の弘め置き給ひ。俗も尊む若衆の情 フシ衆道祕密のお山とかや。地南谷の吉祥院に播磨大名の使者有りとて。庭の掃除の下男小性衆は客殿の。床に掛物臺子の埃掃いつ拭うつ忙がしさ。詞是長助闘介。掃除が大方出來たらば不動坂まで一走り。お使者が見えるか見て戻りや。地急ぎやく\と有りければ。詞いやそれは餘の者やらしやりませ。私どもは皆樣の髮を結はねばなりませぬ。寺方のお小性は俗の内儀と同じ事 地法印樣の奥樣の髮結はすにすみますかとじやれを眞受の顏ひねて足らぬ心の花之丞。

詞ム、そんならこちは法師樣と女夫か。エ、在所の父樣や母樣はうそつきぢや。地山へ登れば魚くふ事がならぬ程に。豆腐や蒟蒻を鯛や鱧ぢやと思うてくへ。山の芋を鰻と思へ。法印樣を親と思へとばつかりで。女夫とは聞かなんだが。詞アヽ思ひ當つた一昨日のお日待に。法印樣の相伴で善哉餅を十三杯。地それから身持になつたやら。フシほてれんぢやと腹さすり 地傍輩は皆小小性の顏を赤めて挨拶せず。久米之介は年嵩にてなう花殿。詞笑止な事いふ人ぢや。是にござる主膳殿八彌殿右門殿。年は三ッ四ツ下なれど。こなたの心が足らぬ故なぶられてゐるさつしやる。地こちは他國者なれば當地ではこなたの里を頼みにして。一家同然のこなたを笑はせて本意でない。此の久米之介がゐる内は悔らせはせまいが。追付けお暇申し受け國へ歸つた其の後では。高野一山のなぶりもの少たしなんで下されと。いへばむつと腹を立てどんな事いやんな。詞法印樣の女房が法印樣と並んで。善哉餅くうて孕んだが可笑しいか。コレ忝くもおれが親は。神谷の宿で隱れもない雜賀屋の與治右衛門。地かゝ樣と一つに何時も物をくやるでおれも生れる。お梅といふ美しい妹迄生みやつた。そなたもいつもこちへきて。妹のお梅と二人藏へはひつて 善哉餅をくはしやるやら。お梅が聲でうまいく\というたを フシおれや聞いたぞと言ひければ。地久米之介は赤面し殘りの傍輩口々に。賢い人のいふ事を氣にかけては果がない。さりながら正直な法印樣のお耳へ入れては言譯ならぬ。小性仲間の恥辱なり沙汰しやるなと制せられ。六尺どもも聞きながし。阿呆に油斷はならぬとオクリ目まぜ八してこそ入りにけれ 地稍あつて表より。詞成

田久米之介樣に逢ひましたい。お國の親御武右衛門樣よりの飛脚なりと。地若黨一人刀の先に。文箱付けてつゝと入る。詞ムヽ久米之介とは身が事。國許よりの使とは氣遣はしといひければ。いや別儀にてもなく御老體の武右衛門樣。御隱居の願に付き。久米之介を呼び戻さんと御一門の談合極まり。地法印樣への御狀段々の御口上。とかくは首尾能くお暇の出る樣に。御傍輩樣たちへも頼みませとの御使と。文取出せば久米之介是は思ひよらぬ事。父が老後の大望を違背ならずと云ひ乍ら。我が口からは申されず何れも傍輩いひ合せ。お暇の出る樣に取合せ頼みます。狀も進んぜてよい樣に何れもに任すると。手を合すれば人々も心一ぱい申してみんと。一度に座敷を立ちけるが花之丞ふり返り。詞是久米殿お暇もらうていなしやらば。糠袋はおれに下され。地巾着にして穴一の。粒入れますと打連れてオクリ皆々へ奥にぞ入りにける。地飛脚はそつと側により。詞申しお國からことば傳り。雜賀屋へ出入いたす。岸の和田の九兵衛と申す駕籠の者。お梅樣のお頼でひそかにお噺し致せと有る。彼の御存じの京の紙屋此の中下つて逗留し。二三日中に祝言し。其の明くる日お梅樣を京へ連れて參るとて。地内方にも御用意とかくお前が片時も早く。山をお出でなさるゝとどこぞへ一所に立退くか。分別も有る所それ故内々約束の如く。お國の親御の置狀でお暇取つて今日中に。久米樣連れて來てくれといとしぼやお梅樣。涙を流し手を合せお頼みなされた手前も有る。どうぞお供致したし委しい事はお筆にと。懐中よりお梅が文取出して渡しける。久米之介も心せき成程々々其の筈。其方も知つての上なれば隱す事は少しもない。外の者に添はせては生きてゐられぬ二人の中。親の命と有るからは法印料簡ないとても。暇乞ひすて出でやすし先づ文見んと封じ目切り。讀まんとすれば南無三寶。上包はお梅が文。久米樣との名宛にて中は吉祥院法印樣參る。成田武右衛門親の文。詞ムヽ扨は聞えた。お梅が常々男手をよう書く故に。國許の狀をも人頼みするなと下書かいて渡せしが。地隱し忍んでする事とて封じちがへて我が文が。法印の手に渡つたか。これは〳〵と色ちがへ。立つても居てもせんかたなくフシうろたへまはる折からに。詞主膳立出で是々飛脚。詞法印直に問ふ事有り。地先づ休息召されとの事なりと。いひもあへぬに久米之介なう主膳殿。詞最前の文を法印樣ははや御披見なされたか。封じ目お切りなされずばそつと取て來て下され。一期の御恩といひければイヤ其の狀は。法印樣繰返し披見有り。反故棚へ入れ錠おろし。手が汚れた勿體ないとあとで手水をなされたが。地いかなる狀でござるぞと問へども譯は話されず。はつとばかりに胸躍らし。詮議に逢はばどうせうと。飛脚の丸兵衛が心迄。細谷川の丸木橋フシふみかへ

れとぞ祈りける。地時に麓の山どよむ木遣に法のひんよるゐい。聲揃鷹路の大名より御墓。引くこそ 三重 殊勝なれ フシ 則ち宿坊。地吉祥院僧逢立合ひ石塔請取り給ひければ。使者は座敷に直りける法印やがて出迎ひ。詞遙々のお使者御大儀く。いざく是へそれお盃。地お茶もて參れと挨拶ある使者の侍慇懃に。詞旦那が悲母第七年に當りし故。御當山に石碑を立て日牌を供へ申すにつき。祠堂銀五百枚奉納致され候。地御受納あつて末世末代。不退轉の御回向頼み存じ候と。包の白銀目錄添へて渡しければ。武門の御身に御信心御孝行の御追福。感じ入り候。詞それ我が山に卒塔婆一本遺せし人は。五十六億七千萬歳の後。彌勒の出世に逢はせ給はん御誓願などか疑ひ候べき。地先づ此の銀子の請取認め申さんと。法印奥に入り給へば豫て用意の勝手より。銚子盃重箱や。はや吸物の椀折敷 フシ 善盡したる馳走なり。地後住の弟子祐辨律師を始めとして 納所同宿入り替り立ち替り。山中と申し風情はなくとも御時分よし。お吸物でもお代へなされ。詞それ小性衆相手になつて御酒一ッ。地ゆるりと上つて下されとあひしらへば愛敬の。小性はおあいと色めきける使者も數献を傾け。詞扨々御器量なる小性衆。何れもお名は何と申す。御生國はいづくの御方ぞ。仰せ聞けられよと云ひければ。我等は有村主膳と申し當國田邊の者。私は世嗣八彌と申し大和の者。身どもは伊賀の上野の生れ。小栗右門と申します。地わたしは此の麓神谷の宿。雜賀屋の花之丞。年は十九で法印樣のお内儀。わたしが妹にお梅と申してずんど伽羅めでござれども。惜しいことは女子でほん樣の口へはひりませぬ。わしが顏は花のやうで花之丞と申しまする。詞妹をお梅といふわけはどうした事か知らねども。あの梅といふ物をこなたは割つてみさしやつたか。中にひらたい物が有る。地こちのお梅が中にもそれが有るやら無いやら。ついしか割つて見ませぬ フシ 無念な事とぞ眞顏成る。地使者も返答し兼ぬれば傍輩は笑止がり。是しいく〳〵と袖を引く。久米之介はお梅が噂聞くに付けても彼の文の。法印の手に渡り今や詮議の有るかとて。思ひ詰める胸の中釘を打たるゝ八寸の。給仕も更に手につかず スヱテ 目に涙持つばかりなり。詞使者重ねて。御自分はお年嵩と見え申す。お名は何と生國はと問ひければ。我等は播州飾磨。成田武右衛門伜同苗久米之介。ムヽ扨は同國武右衛門子息高野に有るは此方かと。地見上げては泣き出し見下しては涙にくれ スヱテ 打ちしをれて見えければ。地身に思ひある久米之介心だよりもなき折から。故郷の人のしみ〴〵の涙にほだされ側により。詞一見に瞬々しき事ながら。同國の好と申し御落涙の樣子。御心底のやさしさも推し量つて賴み奉る。私こと此の山に。一夜も足をとゞめがたき身の難儀出來致し。幸ひ國よ

り迎ひも參る。具の事は麓にてお物語致しません。地お詞を添へられ法印より暇を取り。今日中に此の山をつれてお出で下されば。生々世々の御恩に請け命の親と存じませうと。身の置所無さまゝに。粗忽の無心も戀路ゆゑ フシ若氣故こそ是非なけれ。地使者は膝を立て直し是久米之介。詞お主が山へ上つたは末は出家の筈なるに。今此の山が出たいとは還俗したい心よな。ヤレ出家する因縁を忘れたか恨めしい。お手前十二歳の時。傍輩伊吹重太夫が二男。卯之介といふ十一に成る友達と。鷄合の友達喧嘩にあへなくお主が手にかゝつた。卯之介が兄伊吹千右衞門とは身どもが事。其の頃は數年の在江戸後日に聞けば殿よりは。切腹との御評定父母が料簡にて。子の可愛いは同じ事親たちへ歎きをかけ。討たれし者のためでもなし。出家させて幼い者の後世弔はせんとの扱にて我が親どもが命を助け當山へは登らぬか。地一人の弟が死骸をも見ぬ懷しさ。せめての形見に其方を一目見たさに此の度の。お使を望みうけ小性衆の名を尋ね。久米之介と聞くよりも弟が在るならば。今年は十八蓄む花つれなくも討つたかと。思へども改めて恨をいはん樣もなく。仇を恩なる出家して後世を助けてくれるかと。思へば形見の心地もする恨めしいとゆかしいと。未練の涙をスヱテこぼしたが悔しいぞ久米之介。詞たとへ親の敵でも。出家は格別在家となれば見のがし置かれぬ弟の敵。地此の山が下りたいとはそれこそは望む所。麓に下つて八年以來欝憤を散ぜん。法印に斷り申すため御意を得んと立つ所へ。法印かけ出で樣子詳しく承る。詞やれ若衆め。汝はいまだ髮こそ剃らね。九字護身法傳授して。禮拜化敎も勤むれば出家も同然。殊に大師此の方結界清淨の御山。かりにも女犯の穢があれば。一山荒れて震動し。其の身は狗賓に五體を裂かれ木の枝にかけらるゝは。地目にも見せ話も聞かうそれを知つて此の寺を。ようも〳〵けがしたな。詞國許の親から珍しい文を得た。此の年になれども思ひまゐらせ候べく。御言のごとく二世三世。腐れ〳〵と血判をすゑた小舌たるい女子文。手に觸れたは今日はじめ。地梅よりとは誰がこと皺の寄つた此の法印を。梅干に譬へたか師匠と思ふな弟子でもない。あのお使者の手にかゝり死なうが生きようが構ひない。あれ引きずり出せたゝきだせ。十一から敎へた經文も眞言も。魔道へ棄てたか勿體ないと。腹立涙にくれ給へば久米之介は伏沈み。在りあふ小性同宿も。側から何と千右衞門フシ呆れ果てたるばかりなり。地祐辨律師走り出で久米之介が袴腰。割るゝばかりに踏みつけ〳〵引起し。齒がみをなして涙を流し。詞エヽ見損なうた倅め其の根性とは夢にも知らず同胞の契約のねんごろしたは何事ぞ。雜賀屋にはお梅といふ若い娘も有るほどに。出入するには行儀が大事浮名ばし立てられ

な。若衆のたしなみ是第一。兄分に恥かゝすなと立居にいうたを忘れたか。是千右衞門戰。今迄愚僧が存ぜしは彼めは敵持つたる身。もしも狙ふ人あらば抜身の下へ此の法印が。かけ入つて討たれんと一命やつたる中なれども。地只今ねんごろ切る上は金胎兩部の大日も。御照覽ましませ不便とも存ぜず。御舎弟の敵サアお手にかけられと。座敷の下へ取つて投げ俗の女を慕ふより法師の身にて少人を。思ふは幾千まさるぞや其の兄分を袖になし。志を無下にした憎や無念やあさましやと。氷の樣なる眼より涙をスヱテはら〳〵とぞ流しける。地千右衞門續いており。心無いには似たれども寺を出づれば弟の敵。討たでは武士の道立たずと。するりと抜いて背打に四ッ五ッ。丁々と打ちつけ。是からは死したる人此の方遺恨なき上は。心次第に師弟の中何とぞ挨拶致したいと。さすがは武士の神妙さ久米之介わつと聲を上げ。只今の背打もうつてうたる

る身の報。恥辱とも思はねども。山の名殘に法印様の御機嫌損ふ悲しさと。二世と賴みし兄分を袖にしたとの恨の詞。悲しうて〳〵死んでも逢と成りまする。とくに髮を剃つたらば此の悔みも有るまいもの。坊主頭のすげない顔兄分に見せる悲しさに。せめて二十を越す迄と鬢を撫で顔つくり。身だしなみが身の敵お梅に思ひそめられた。スヱテ是も前世の因果かや。地お梅に逢うてことわり立て。緣を切つて來ましたら元の樣にねんごろに。かはいがつて下さるか。詞をんでもない事女と緣さへ切つたらば。身に代へても法印様へ詫言申してねんごろせうが。誠緣を切らずは大師の罰を受けうといふ。誓文を立てうか。地いかにも誓文立てませう。サア立てサアなんと。エヽこちは切らうと思へども。お梅が合點せぬ時は。なんとしませう悲しやとスヱテかつぱとふして泣きければ。●詞それ其の心のつくこそは罰の當つたしるしぞや。地はや出て失せう

とどうどふし フシ共泣するこそ道理なれ。地其の隙に法印以前の文を取出し。山に置くはけがらはし持つて失せうと投げつけ給へば。恥かしさうにそつと取り肌懷に入れけるが。男女破戒の御咎俄に吹きくる天狗風。岩も枯木もどう〳〵どう震動雷電雨霰。天地一つに黒雲覆ひ長夜の闇とぞ 三重〽成りにける 地すは一山の大事なり。不動坂迄追出せと下僧下部が小腕引つ立て。棒よ杵よとひしめいたりさすが好みの花之丞。詞是久米殿。妹が事は氣遣ひさつしやんな。こなたの居所知れる迄はおれが女房に持つてやろと。地聞くも苦しき名殘の山鬢も髻も引き亂れ。涙亂れて目もくらくさらば。〳〵と振返り泣く音も枯るゝ鶯や。お梅に通を失ひし久米が。心ぞ 三重〽哀れなる。

中之巻

フシ逢はぬ昔の。白紙も。忍び重ねて厚紙を。人に裂かるゝ横紙に。袖濡紙の。漏れ

やすき。浮名やぱつと塵紙のオクリ嵐に〳〵もろき鼻紙やまだ十七の懐子。フシ名さへお梅は氣もすしや。地親與次右衞門いき〳〵として外より歸り。詞お梅が祝言いよ〳〵今宵に極つた。地今朝いひ付けた通り市介傳九郎鱠をかけ。なつよ雜煮の用意せい。たけ膳立もきれいにせい。聟殿は京烏丸の人なれば。黒椀がよからう。塗盃は入らぬぞ年のいかぬ娘ぢや。土器を三寶に口取は熨斗昆布。肴は鯣 車海老。熊野から貰うた鹽貝があらう。詞ヤ鹽貝のついでに地女房どもはどこにゐると フシ嬉しがるのも親心。地お家樣は中二階に。お梅樣の髮梳いてといひければ。詞二階の口迄かけあがり。こりや〳〵宿老殿へいて談合した。皆内證勝手づくの祝言なれば。弘めは重ねて下つた時。地今宵盃すんだらば娘はもはや聟の物。とんと先へ渡いて女夫づれで明日早々。上してのけといはるゝと競ひかゝる親の顏。見るよりお梅は涙ぐみ急な事いうて下さんす。盃さへ延べてほしけれど親のこうけん是非なうて。どうなりともといひました京上りは先づ待つて。氏神へも參りたし阿呆でも兄は兄。花樣にも知らする筈。日頃懇切遊してお守りよ御符よと御恩を受けた祐辨樣。お山にはまだ外にもと其の人の名はいひかねて。思ふあたりをかすらする フシ是も思ひの餘りかや。地母親も打ちうなづき チヽそれもさうぢやがこんな事。詞ねんごろな方へ知らすれば。贐の祝儀のと厄介かけるが迷惑ぢや。地とかく聟御の心次第サアござれと。納戸へ入れば與次右衞門是かゝ。詞聟の供の者どもこれの内の奴等にも。何かなしに三百づつお引をやる合點ぢや。筒ごかしの顏でつらりと九文十文づつ。百の口を拔いて置けや。ハテこなたもあんまりな。地お梅が一世一代に何が惜しいぞ。やつぱり九十六文で。百づゝやつて置かしやれと オクリつれて〳〵納戸に入りにけりフシ

お梅は幼き。時よりも。あまやかされて二親に我儘いひし習はしも。心に疵を持ちたれば スヱテいぶりもならずすねられず。詞アヽ九兵衞はなぜ遲いぞ。久米樣の返事はと 地そろ〳〵表へ出でけるが。女子丁稚が口々にようお梅さま。晩には立聞致しましよ京のおか樣にならつしやると。なぶられても浮き〳〵せずアヽ何いやる。京へいこやら冥途へいこやら知れぬ事かと門に立ち。坂を見上げてゐる所へ久米之介は頰被。九兵衞も投首して辻へ見ゆれば走りより。なうよう來て下さんした文にいうてやる通り京の奴めと今夜盃する筈で。わしが氣は今朝からとんと死んでゐたわいのと スヱテ縋り付いて泣きにけり。詞チヽそなたは氣が死んだかわしは叩かれ引きずられ。身も心も死にまする。地うそなら是と手を取つて。袖から背中がハア。詞たんと腫て有るわいの。髮もそゝけた顏も泣いた顏ぢや。地こりやどうぞいのといりわりも フシ言はず。知らずに泣きゐたり。地九兵衞不祥な調子

にて。詞エヽ粗相なお梅様。文を封じ添へて久米様への濡文が、法印様のお手に入る。地何が日頃法印様眞言陀羅尼讀んだ目で。くどくは御見思ひまゐらせ候と。讀んで婆羅僧掲諦を立て。菩提婆婆訶なる顔つき。念者坊の祐辨様は踏殺すとてにえさつしやる。一災起れば二災起る。お國からは弟の敵ぢやとやら申して理窟くさい侍が背打をくらはする。弘法大師御入定八百年此の方の。一山の大騒ぎ飛脚の詮議も有りさうで。私は揃つた勝箸も取らずに隠れゐる。其の間にお山が荒れてきて天狗殿が鼻を怒らかし。大雨大風雷霆大事の山を久米之介が。潰したと叩き出されて フシ斯くの體にておはします。地お二人のお陰で煙草入を落しました。詞中に頼母子の掛錢七十四文あつた物。定めて狗賓に攫まれたでござらう。地正眞の天狗頼母子ぢやと フシぶつくさいふも道理なり。地ヲヽ其の様なことと内へ渉汰してたもんなや。山は荒れても崩れても。

久米様に逢へば嬉しい／＼。こんな様嬉しうないかいの。ちと笑うて見せて下さんせと。いうても後前思はれて フシ泣顔見ゆる不便さよ。地親はお梅よ／＼と門口見やりて誰ぢや。詞ヤア久米様か。九兵衛是は何として。呼びにやりたい所へようこそ／＼先づ内へ。地かゝ久米様がござつたぞ暮れたに。なぜに火はとぼさぬ。お梅が祝言常とは違うた。二階は蠟燭庭もおうへも燈心を。つかみこんでくわつくわとやれと。勇む所へ母親はなりふりを心得難くや思ひけん。詞いつのまに九兵衛は爰へも寄らずに山へいて。お梅が祝言聞いてお出でなされたかと。地不審さう成る顔色を九兵衛見て取りつゝと出で。詞久米様のお仕合まだお聞きなされぬか。お國の親御御隠居で跡目をお繼ぎなさるゝ筈で。私も在所から。早飛脚に雇はれ打通りに上りました。地日頃のねんごろ暇どのため。ちよつと連れて寄つてくれ。祐辨様も追付けそこへと有る事。今日から

は是七百石の御世嗣。詞旦那様ものは談合。お梅様の御祝言また盃なされぬさき。あちらを變改なされて久米様へ進せられまいか。地私やお爲申します。祐辨様も大方其のお心と見えました。千貫目持ちても商人は。一時の損が知れませぬ。照れ降れなしに七百石すればお前もお手柄。雜賀屋の婿殿がひん／＼はねるじや／＼馬に乘つて。娘御は金物の乘物に乘らつしやる。サアしやんと打ちませうと手を擴げてもイヤまあ打つまい。詞ハテねちみやくしたそんなら舅御夫婦も。地乘物やじや／＼馬とフシ乘せてもいかな乘らばこそ。詞いや／＼馬は馬づれ牛は牛づれ。けふ祝言する婿殿は。京三條烏丸美濃屋の作右衛門。お梅をほしいばつかりで年々の殘銀九貫五百匁。百六十兩で帳消して。此の秋の買入に紅花の花のやうな小判貳百五十兩。先へ預けて置かれた。地今宵の物入し拵らへ此方には一文入れさせず。娘を裸で請取る婿は世間にちよつと有

いかねる。なんと九兵衞といひつければ。詞いや久米之介樣も小判の事は請合はれぬ。お梅樣を裸でならば鬼に鐵棒でござりましよ。地コレ阿呆なことはいはずとも婿がおじやるか出て見よ。これお梅久米樣二階へ連れまして。新しう出來た寢道具を見せましや。詞こりや女子ども。地肴を鼠にひかるるなと鼠の用心しながらも。二人二階へ上げたるは是こそ猫に鰹なれ。二階には古渡りの。大紋緞子の夜の物。二ッ枕の總つきを。嬉しさうに久米之介。詞ムヽ京の男と此の枕を並べて。地此の夜着をきて二人しつぼりと寢さんしよの。アヽひよんな物見せて。又泣かせて下さるかと フシほろ／＼淚を流しける。詞エイいやがらすやうな事聞きたうない。京の奴となんの寢よ。今夜中につれ立つて走るぞゑ。胸を極めて下さんせ。地此の夜着蒲團に今の奴が寢くさる筈。エヽいやらしいうるさやと踏みちやちややくつて投げ擲り。是は又わたしがの新しい寢道具。祝うて寢初めてはしけれど人が來うかと氣遣ひな。アヽ辛氣やと疊みし夜着にもたれあひ。誰もなこそのせき心。花のお梅に鶯の フシ人來といとふわりなさよ。地時に美濃屋の作右衞門小者をつれてつゝと入り。與次右衞門が髻を取つて引寄する。女房はじめ下々もこれは聊爾と取りつくを。詞寄るな／＼とぶち拂ひ取つて引つするゑ。こりや與治右衞門。京の者をはめだてしたら返りをくはう用心せい。親代々の得意で二十年此の方。二千貫目足らずの商ひに九貫目のほこりを取り。先も見えぬ秋買に十五貫目の前銀取り。祝言の仕入れに四貫目取り。男の有る娘をかづかせて去らせて構はぬ工面ぢやな。此處らではまだ流行るか。京大阪では其の手の奸曲は廢つた。地サア娘の首を渡すか廿八貫目戻すか。二ッ一ッの返事を聞かう。詞ヤイ一升入る袋は海川でも一升。運のよい者の仕合見よ。地盃せぬばつかりで廿八貫目拾うた。惠比壽大黑がのりうつゝた作右衞門を瞞さうやこ フシ置いてくれとぞ罵りける。地與次右衞門眞直者ぐつとせいて。詞ヤア京々とやかましい頰桁がすぎる。七十萬石の下に住む與次右衞門。氣の狹いおのれらが差みとは違はう。銀返すはやすけれど。いひ詰められて戻したと。いはるゝが口惜しい娘にも疵がつく。サア男のある證據を出せ。どこぞで藥を焚かれて銀が惜しうなつたか。慮外申した御免あれと詫言させて其の上で。是非に祝言させねば娘の垢が拔けぬ。地サア證據を出せとにちければ家内の上下しみこほり。二階には遁場もなく。死ぬるより外分別の フシ泣いつ顫うつうろたゆる。地作右衞門押鎭め證據々々と涼しさうにいやるな。詞身は明日立つが合點で今朝からお山へ上つたが。八ッ時でもあらうか俄に山が荒れ出して。大雷雨風一期に覺えぬ怖い事。さる寺へ駈込んで樣子を具に聞きたれば。南谷吉祥院の小姓久米之介といふ者と。

雜賀屋のお梅と數年密通して山を潰した其の祟り。それゆゑ今追出さるゝと一山が見物後姿をおれも見た。飛脚のやうな奴が供して麓へ下つたと。地いふより九兵衛もじり〳〵と門の方へ後退り。亭主もはつと二階を見れば女房賢くいや〳〵〳〵。詞其の分では胡亂な此方の人。娘が垢を脱かつしやれ。うろたへて娘一人捨てさつしやるな。地これ〳〵と膝をつけば合點し。チョのみこんだこりや男。詞雷が鳴つたとてこなたの娘が不義のある證據にはなるまい、ぞ　地どうでも今宵祝言させ極り付けて往なさねばこ　雜賀屋の與次右衛門が面が出されぬ。手柄に婿にして見せうこと、おれが身代見かけては定めて婿にほしからう二十八貫目の金では疵のない手入らずの、女房が持たるゝおれが銀でこしらへた。夜着蒲團から取つてくれうと二階へ上がれば與次右衛門　腕など折らうと引きおろしッン上さへ〳〵と摑みあふ　地小菜之介は勝手

拔いてすはといはゞと縋り付き。お梅がわつと泣く聲も下には聞かず叩きあふ。女房中を押分けてこちの人から默らッしやれ。待つて下され婿殿とあなたを拜みこなたを拜み。漸う兩方押鎭めスヱテかつぱと伏して泣きけるが。地都衆とも覺えぬ物の情のない事や。世帯迄取り結びサア祝言の場と成つて。打破つてこち夫婦世間が立たうか身が立たうか。男を持たぬ娘子はたが身の上に何事のあるまいとも　フシ言ひ難し。地過ぎつる事に兩親が迷惑するを聞くならば、氣の細い娘なりさきの小性も堪へかねて。死なうとするは必定止めに行から、時宜でもなし。詞必ず死ぬるな死ぬまいぞ。此處は死ぬる場でないぞ親に難をかけるといひ。其の身も無い難うける事。親孝行と思はゞ必ず死んでくれるなと　地まつ斷ういうて此のたらはまらやとは思へども、若い心の一筋に。恥しいとはつかりこ　若しや死なうか悲しやと。知らせの詞一つをも皆

兩方へ架橋の。二階にも聽取りて拔いたる脇差すが又。死にもやられず聲立てずッシ抱き。合ひてぞ泣きゐたる。地なら親はどれも變らねど。母の名汚すを濯ぐのも、娘の育ちの善惡から。詞お梅が一期の疵つけば。三十年添うたこちの人に面かい拭ふて添はれもせず。地是非に一旦盃して男の手柄に何時でも。退き去りは世の慣ひ子が立つてこそよくもあれこ　屋財家財代なして返す物を返さずに置く與次右衛門でさら〳〵なし。母が此の歎きを聞きお梅が受へ出るならば。それを機に和睦して、祝儀を渡してドされ。詞たとへお梅が我を立てゝ座敷へ出まいと云ふとても。さきの小性も木竹ではあるまいし。地先づいきや〳〵といふる筈。地これもきかねば不孝者子を一人育つるに、生きる瀬か死ぬる瀬か七度あるとは幼い内。十七八に背丈伸び親に夜のめも寝させぬか。惜い者には世話やかぬ子を持つたらば思ひ知らうこそ。恨めしの世の中や

トフシ顏を。あけてごくごくときける。地久米之介も聞取つて。後はともあれ親御の心休めるが為。涙も拭うて下りてたも。地拜む／＼とすゝめられ。口惜し涙ひつしよなく階子とんとん踏鳴らし。駈下りて是かゝ樣。詞徒ら悪性も。男持たぬさきならばいはれぬ構ひぢや有るまいか。地それに意地むぢいふ人は放からかいて置かしやんせ。わしが斯うして出るのは詮言といふもの。それで合點ないからは氣に入らぬで有らう迄。田舍育のわしぢや者なんの都の目に入らうと フシ身振もすねて見えにけり。地婿はお梅にゆすられにつこと笑ひ。詞是親爺お袋だまらつしやれ。あれがこゝへ出てくれて今の詞で千倍ぢや。頭の上で踊つても去ることではござらぬ。地サア寢所へと手を引けば二親屋内打ち潤ひ。ハアめでたい／＼さりながら先づ爰で盃ごと。其の間にそれ／＼と氣を付けてもがけども。否々今宵も四ツ過やがて夜半寢るまがない。めでたう閨の盃と フシ寢所急ぐ氣の毒さ。地平にこゝで酒盛なされ其のまに内外の者一獻酌めや酒を酌めそりや酌め／＼とあがいても。いづくへ落さん久米之介。夜着引きかづき身を縮め生きたる心地はなかりけり。婿は蒲團にのしあがり。ヤア誰ぞ寢たやら暖かな。さらば此の夜着を着て盃せうと。久米之介が臥したる夜着を取らんとすアヽ是々。詞こな樣ばかり寢ようでの。とんと二人が一度に寢る。盃すむ迄いかな事夜着に手をもかけさせぬと。地もたれかゝりし夜着の袖。足をさすり手をしめて夫に力を付けければ。一ツに寐ようは忝い銚子早うと呼ぶ内に。夜半の鐘も鳴渡る下には夫婦手に汗握り。九兵衛其の外小隅へより供の者にも酒盛つて。酔うた時分に臺所の火を消して闇にせい。二階の酒のしゆんだ頃祝儀の石を打ちこんで。騒ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし。どやくや紛れに久米殿の手を引き門へ脫かさうぞ。仕損へばお梅が首がないぞぬかるなと。謀し合して酒肴下では下人盛りつぶし。二階を母の酌人は オクリ怪我あら〽せじの フシ氣遣や。地作右は母に辭儀もなくさいつさゝれつ辭儀作法。大盃四五杯引きかけなうお袋。詞姑に酌取らせ無益しいか知らぬども。斯うめさつたがよい筈。作右衛門程の婿は慮外ながら取りにくい。久米之介は若衆で前髪は有らうが、おれが樣に小判の前髪は有るまい。あの樣な奴等が娘子どもを喰かし。京大阪にも有ること大方果ては心中。ホヽいやな事。お梅は命拾らやる。親御は娘拾らやる。地おれは盃拾らはうと又三杯引き續け。サア寢ませう。お袋あちへ往なしやれと。夜着引き立てんとする所へ大石をはたと打つ。是はと驚く頭の上障子雨戸を打ち破り大石小石隙間なくはらり／＼と 三重〽 投げければ。地お梅は爰を大事ぞと久米之介に抱きつき。作右衛門はひよろ／＼足お梅はあぶない夜着被きやと。立寄れば母親燭臺を踏みこか

し。詞やれ闇いわ火を點せと。いふ聲に與次右衛門下の火殘らず吹消して フシ常闇の夜と成りにけり 地母は這寄り久米之介が手を取つて引出す。喫驚するも夢心地お梅は久米が帶を取り。ついて出づるも闇の夜の母はかくとも知らばこそ。作右衛門度を失ひ。詞お梅はどこにイヤ爰に居まする。闇がりで怪我しやんなお袋はどこへぞ。火を取りにでかなござんしよ。こな樣勝手知らずぢや動かすにござんせ。地私もこゝにゐますると聲が殘れば母親も。一人と思ひ連れて出るお梅は跡も恐ろしく。母に知らせぬ足音をば火を踏むごとく爪立てゝ。ふるひふるひ沓脱迄忍び出で。母久米之介に囁きて。詞こなたは命の無い人なれどお梅が惻く不便さに。こち夫婦が料簡で今宵の命を助ける。詞お梅は男定まれば思ひ切らねばならぬぞや。是はお梅が呑んだ盃是を形見の縁切と。懐に入れければ二人は死ぬる覺悟の上。心の中の暇乞顏は見られぬ暗闇に。まゝ一度聲をとためらへば遲い遲いと氣をせきて。急ぐは我が子の死を急ぐ産み出すも母死なすも母。生死二ッの門口をあけて出で行くさきも闇。跡も子故の闇の夜に迷ふ親こそ 三重へ悲しけれ。

久米之介お梅道行　下之卷

歌まぼろしや。定業の。限とはいかに。いかなる娑婆やらん。世は何の。たとへぞや。逢ひそめてはや三歳。かげばかりの。契にて。つまは野中の一つ井戸名は。後の世の。形見かや。殘す形見は フシ親の爲。我は其樣の前髪の。永き來世もわしが此の直さぬ額此のまゝで。見たり見せたり六道の。フシオクリ辻の。巷は。多くともはぐれまいぞと。夕月は。はや入り果てゝふけわたる。まだ二月の八重霞。スエテ隱れ忍ぶによけれども。顏が見にくの朧夜や オクリ二つへよい事あらし吹く木の下露の玉川の。地毒の雫も降るならば。身に突つけず丸にたやと顏と顏とをすり寄せてこぼす涙は自ら。互の口に傳ひ入り。フシ末期の水と成りけらし。スエテ刄を急ぐ我が命。末短夜の。春の霜淡。しやな朝まで。消え殘るかと白妙に オクリ里の。夜業も時過ぎて。ほすや神谷の宿はづれ。フシ生れ在所の名殘さへ。親より殿を。思ふぞや。我はそもじの親御の恩。戀と思ひに縛られて。情の絆縛の繩。フシ不動坂にもさしかゝり。死出の山路を越ゆるかと。歌心細しや卒塔婆谷。こゝな塚はと引きとめ問へば。爰は古の苅萱殿の。繁茂りし春の草。クドキ問うて語つてあぢきなや。かの苅萱弓取の。猛き心や梓弓彌生の空の月の前。櫻が下の盃に オクリ開いた。花は散りもせで フシ花の蕾に。身を捨てし。無常の世語り。身の上に。十九十八一盛り今宵散り行く初櫻。見が瀧とぞ ハルフシ涙ぐむ。あれへ越ゆれば尼の口。去年母樣とつれ立つて拜みし。事の忘られず。哀れ佛の御母も。女の罪の捻岩や。それさへあるに我が身の科は。歌五月雨。ヨほど。戀ひしたは

れて。つひにナ。秋田。のヨ落し水 地山は。眠りて物いはず。谷の流れよ フシ聲立て〳〵。地人に語るな此の姿。クドキわしが心をこなさんに隱す事とて持ねども。賴む佛の御名とへば我をば外の不動樣。二親よりも棄てがたき。さぞや若木の花の見慣き根の數々も。二人が上に罰受くる。天竺の。山おろし。しめた膚に。しみじみ〳〵とザア悲しゐ。フシいとしといふも。今の間の冥途の苦患覺束な。此の世からさへ嫌はれて深く心を奥の院。渡らぬ先に渡られぬ御廟の橋の。危なさも。後世の見せしめ蛇柳さ。鬼が千疋責めうぞ フシ責められつ。さいなまるゝと離れまい。放すまいぞと取りかはす。袂は涙手には數珠。賴めや賴め一筋に。一心頂禮萬德圓滿釋迦如來眞身舍利。フシしやりしやり佛に。成るとても又は三途に迷ふとも。一つ回向の水汲めや手向けの。梅の花折坂たどり越ゆれば曉の。五障の雲に埋もるゝ女人。堂にぞ 三重〽 着きにける

フシ若い心の。一向に。死んで來世で〳〵と。思ふ心のおつくりと。サア着きました嬉しやと フシ勇むは跡の歎きなり。地堂の内には我より先詣りし女中の目を覺し。申し。申しと呼びかくる。あいといふのも怖氣立ちスヱテ身をだき。合ひてゐたりしが。詞イヤお氣遣な者ではなし。私は播磨の飾磨にて。成田武右衛門娘さつと申す者。南谷の吉祥院に久米之介と申す弟を。地尋ねて今日の暮方下人どもを登せ問はせても。在りとも無しとも知れがたく。坂の蓮華谷の宿を尋ねよといふ人も有り。皆樣所のお衆か若し御存じも有るまいかと。他人に見なす姉弟 フシ後世の闇路も知られたり。弟は骨肉恩愛の涙にくれて返答もなう。暫したためらひ居たりしが。詞久米之介とは聞きたる人。昨日の晝より俄に大病引きうけて。今宵限りの命なりと申せしが。地夜明けなば生き死の定說かくれ有るまじと。涙をかくす聲つきを姉はそれともなほ知らず。詞さ

れば。こそ思ひ當つたれ此のお山の萬年草は。人の命の生死を示し給ふと申す故。餘りの事の訝しさ。守りに入れし萬年草をあの谷川の水に漬け。地久米之介と心ざし半時ばかり浸しても。次第に枯れてしぼみしが弟が命有るまいとの。大師樣の御告か遙々と尋ねきて。昨日にも着くならばせめて死目に逢はうもの。男の身ならば一山を驅廻つても逢はうもの。女と生れし惡業は。あさましや悲しやと フシ聲を。あげてぞ。泣きければ。地夫婦も共に伏沈みお梅涙のひまよりも。詞親御樣をもお誘ひか但し姉樣ばかりか 地なう其の事よ父樣が去年の冬から煩ひて。此の二月の朔日に。六十九にて御臨終明くる二日に煙となし。今日七日の弔ひを兄弟一所に拜まんと。此のお骨を持つて上りしに。弟も同じ骨となし悄々歸つて母樣に。何と申さん定めなの浮世やと フシ又さめ〳〵と泣きければ。地久米之介は我が親の骨と聞くより氣も亂れ。お梅は一

目も見ぬ舅。縁といはうか因果といはうか。心に含み目にもるゝ。涙を袖にせきかねて スエテわつと絶え入るばかりなり。地側に臥したる供の下女あれ申し。詞七つの鐘が鳴りまする。善か惡か夜が明けたら知れませう。アヽ地こちはくたびれて。何が善やら。あくびやら。フシふらふらねぶる心なき。地アヽそれもさう御用あるも存ぜず。引きとめて長物語是も他生の御縁でこそ。もし久米が事を聞付けなされなば。お知らせを頼みます何れもに別るゝも殊更名殘惜しうて久米之介が臨終の。暇乞をする樣で心細うて悲しやと。物が知らする血のゆかり涙すゝむるばかりにて。言はず知らせず別れしはイクリ本意なく 三重〳〵も亦哀れなり。地堂のこかげに身をひそめ片時も娑婆にゐる内は。見るも聞くも皆罪障夜明けも近づく此の上に。いか成る苦み恥をか見んいざ死なうと囁けば。詞早う死にたうござんする。さりながらこな樣はよそながらも姉御にあ

ひ。親御のお骨の側にて羨しい最期ぢやが。地わしは父樣母樣の悲しい中にも不孝者と。叱られうかと氣にかゝり是が迷ひと成りますと。又泣出せば是々。詞背に母御の下されし盃は此所に有る。地手に觸れられし物といひ志のこもつた。形見は是ぞと取出す。地アヽ有難い背丈の伸びた私を。親の心でいつも童と思うて。抱いて寢て下さんした其の心で死にましよと。盃に手を合せ刄を持つたる其の顏容。ヲヽきれいな〳〵其方は母の形見を持ち。我は父の骨の側夫婦親子一蓮の。示しの時刻のはされず。只今ぞと脇差拔き。胸に押當て唵阿暮伽。廢嚕者那摩訶畝捺羅。摩尼鉢頭摩入嚩攞跛囉韈鞞野。吽と突込む切先の。肝に當ればのりかへりはりたやうんとくり通す。阿吽の息も消え〳〵とのつゝかへしつ〳〵苦む聲。地姉主從は驚きて走り寄つて南無三寶人殺し。人殺しよと呼ばはれども。山中夜中聞く人も フシ泣いて籠へ走りけり。地久米之介身

を隱し立歸れば骨桶に。樒を添へて殘したり。押戴き三拜し。分けて賜る骨肉を一つに返す。阿字本不生。阿字の一刀是なりと咽にぐつと突き立てて。死骸の上に法の花梅と枕を並べける。地水火風の風は山水は谷水土は又。土砂の功德の眞言秘密。善男善女人堂心中。かくとぞ聞えける。る。

右之本令吟覽頭句音節墨譜等不殘毫釐令加筆候可有開版者也

竹本筑後掾 竹本（壺印） 博教

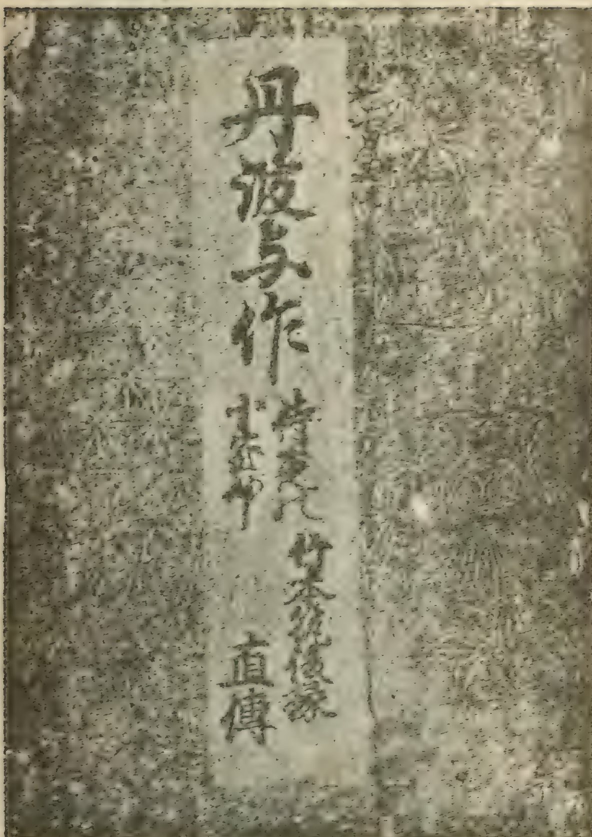
重而予以著述之本令校合候畢至可爲正本者歟

近松門左衛門

大阪高麗橋壹丁目

正本屋 山本九兵衞 版 （印）

山本九右衞門 版


丹波与作
直傳

丹波與作待夜の小室節

近松門左衛門作

地大名に生るゝ種の一粒が。何萬石ぞ幾萬人胎の内から敬ひて。持てはやしたる舌鼓丹波の國の一城主。由留木殿のお湯殿子フシしらべの。姫はお國腹。地金水引の初元結まだ十歳の裲襠も。すらりとしたる生れつき東の高家入間殿より。御養子分の約束にて嵩からとる花嫁御。御迎ひの諸侍五千石を頭にて。騎馬が廿騎稚兒醫者は御輿づき。大上﨟小上﨟おさし抱き乳母御乳人。中﨟下﨟の供乘物陪卒駕籠はいろは付。以上四百八十挺金銀瑪瑙枝珊瑚珠。研出し蒔繪の長柄の傘長刀袋傘袋。時代の金襴鶴菱繹。花兎窠に霰大內桐。覆ひかけたる挾箱濃紅の大紐を。高々と結びしは。フシさかりの牡丹に異らず。地臺所荷は次傳馬御葛籠荷物は通し馬。三十駄の馬方の小唄がなつて小綺麗な。聲のよいのを選られしも。フシ金に。飽かせし吟味なり。地刻限は巳の上刻との定めにて。御迎ひの奥家老本田彌三左衛門。數獻の盃足許はよろ〱と。猩々緋の道中羽織白い所は髪ばかり。きんか頭に顏色も繻珍の裁着凛々しげに。詞なんと〱御供廻が揃つたら。お先手から乘り出しめされ。是さ文左源五左。身は押へを乘り申す萬事夜前申し渡す通りだ。若黨中間荒子小者に至るまで。大酒を致さぬやうに。馬次舟渡し等にて。豪氣粗暴を仕つたらば曲事でおじやんべい。又とさ。泊り〱の赤前垂にじやらくら致さないやうに。第一お乘物の先で見苦しい。さりながらとさ。長の道中下々が退屈致すべい。若し濡などを企つるとも。目立たぬやうに物蔭へよつて。ちよこ〱ちよこちよこ濡れたがよくおんじやる。目出たい折柄と申し殊に女中のお供だ。少々の事は見遁しにして置きめされつちや。地あつと答へて宰領ども。サア御立ちと催すところに奥より女中聲々に詞ア、待たつしやれ〱。氣の毒やお姫樣關東へ往くことは。いやぢや〱とやんちやばかり御意なされ。地お袋樣も殿樣もたらしつ叱つゝ遊ばせども。どうでもいやぢやとおむつかり。お乳人の滋野井殿色々と申されても。それほど江戸へ往きたくば乳母ばかり往きをれと。詞お乳人の背中をとん〱と撲たしやんして。地御機嫌が損ねましたといふ處へ。眉泣きはがし姫君は江戸も東もこちやいやぢや。おれは往かぬと泣く〱走り出で給へば。侍衆も下々も。御門に駈出で家老の外フシ男ぎれこそなかりけれ。詞お乳人色を變へ是申し御姫樣。下々の子供さへ九ッ十では物の聞き分けござります。あれ見さ

んせ。百里あちらの山川越えて白髪かづいた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに參つて。江戸へござれば入間殿の總領嫁御と、侍かれるお身ぢやぞや。お乳の育の難になれば。女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬ。地 サアよいお子ぢやお輿に召せと、賺してもそやしてもいや〳〵皆のだましぢや。なんの東がよいところ腰元どもが謠ふを聞きや。サアみんなこゝへ出て。いつもの歌をうたへ〳〵とせめ給へば。お伽小性の頑是なし十二三なが手を揃へ。歌 山も見えざるかりそめに江戸三界へ往かんして。いつ戻らんす事ぢややら殺して置いて往かんせの。フシ 放ちは遣らじと泣きければ。詞 アヽおきや〳〵。お大名のみやづかへ箏の組でもうたはいで。誰に習うてはでな唄姫樣などに教やんな。地 必ずおいて貰はうとお乳人の不機嫌さ。本田も餘り詮方なく申しお姫樣。あれは人の口てんがう花のお江戸は京優り。淺草上野の花盛りまた堺町木挽町の。てんつく〳〵木偶。辨慶や公平が。ゐいやつとゝゐいなどと 地 切合ひを見せませう。道中の面白いこと富士の山と申す。天までとゞく山を御目にかけまする。サアお輿に召しませいと力一ぱい賺しても。いや〳〵江戸へは往きはせぬどうでもいやぢやと泣き給へば。お乳も今はあぐみはて。どうしてよからう御家老もフシ 呆れてこそは居られけれ。地 お仲居の若菜は旅出立に菅笠持つて門外より走り入り。詞 なうお乳人樣面白いことがござります。十ばかりの剃下げのちつぽけな馬方が。道中雙六とやら東海道の繪を廣

げ。地あぢな事して遊びます。御機嫌直しにお目にかけなされませ。ヲヽ〳〵ようぞ氣がついた。それは聞き及うだ道中の繪を見せまし。お心も移るため馬子で、も子供は大事ない。お許しぢやその丁稚に。持つて參れと呼うでおぢや。心得ましたと御門に出でオクリ連立ち〳〵來る馬方がフシ片肌ぬいで。地さばき髪お前近くも無遠慮に。椽先にあげ足して。詞やれ〳〵〳〵あり樣達はあつたほこしゆもない。傍輩どもと賭け德に道中雙六打つて。沓の錢ほどしてこませうと思うたに。人呼び廻つてなんでやる。はれやれやれ〳〵きり〳〵地乘らつしやれフシ馬やろいとぞつかうどなる。地さて〳〵利口な野郎ぢやな。船頭馬方お乳人こちもそちいも同じこと。詞して年は幾つ名はなんと云ふぞ。年は今年十一。五つの年から馬追うて一代若衆にならずに。はえぬきの念者ぢや所で名はじねんじよの三吉。さてもよい名ぢや聞けば道中雙六があるげな。腰元衆も博つて見や姫樣も遊ばせ。地サア三吉もこゝへ來い苦しうないと呼びければ。あいと云ふより慮外をもかへり短き煙管の煙。立交りたる女中の傍そぐはぬ樣にも見えざるは。さすが童の一德と。繪を取り出し雙六をオクリ皆打ち〳〵交り遊ばるゝ。

道中雙六

地これ〳〵御覽ぜ博たしやんせ。是こそ五十三次を居ながら歩むひざ。膝栗毛馬。はいしる道中雙六。南無諸佛分身と。書いた六字を六角の。骰子は櫻木花の都をまん中にフシ思ひ〳〵のしるしを置いて。さらばこちから打出の濱。大津へ三里こゝで矢橋の舟賃がオクリ出舟〳〵召せ召

せ召せ旅人の。フシ乗りおくれじとどさ草津。地お姫様より先づ姥が餅。一口二口みな口鼓躍りこえ。坂へ越すのも骰子次第。骰子をふれ〳〵。ふるや鈴鹿を跡に下れば負けまいとせきに關より。フシ龜山に煙草。火打の石薬師。おつと桑名の舟渡し。宮へ上れば池鯉鮒へ四里の。宿にころりは歌岡崎女郎衆〳〵。岡崎女郎衆と。もつれ寢よやれ藤川に。思ひ〳〵の君待ち受けてオクリ解く前へ垂の赤坂や吉田二川。歌白須賀ちよいと越えて。手判ござるか。振袖に地ヤこのこの。新井今切う舟に召せ〳〵。蛤召せの。蛤々濱松まで。舞坂三里ナ地馴染見附の。フシ泊りと聞けば。誰も惜まぬ。縞の財布の袋井や。乗掛川を飛びおりて　機嫌笑顔やサア日坂の蕨餅。腰なはなんぞ日本一の大井川。骰子に無の字を打出せば水の出ばなの八十川の島田。金谷に二日のよどみ。仕合よしの旅すご六里。七里八里もただ一足に。先へ〳〵と唉きかゝりたる。藤枝岡部瀬戸の染飯。フシ宇津の山邊の十團子。フシ所々の。名物買うておあしつく〳〵つく手鞠子に。ひいふうみいよ。府中江尻にすつとん〳〵。とんと打つたるフシ興津波。フシ松原はるゝ。膏薬買うて月を吸ひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原の花の蒲燒名物の。鰻のはだへフシ沼津の宿。三島越ゆれば箱根へ三里。地骰子目次第に關越ゆる。悪い目打てば手判を取りに。元の京へ立ち歸る。合點かヲヽのみこんだ。小田原外郎大磯平塚藤澤の。さゝありもなしに雙六のハヅミさいさき。もよし門出よし。道中早めてとつかはと。急ぐ程が谷神奈川越え川崎を越え品川越えつ。まづ先駈のお姫様。一番勝に勝色の花のお江戸に着き給ふ。一のうらは雙六の幸ひあり悦びあり。慰みありける道中とフシどつと。輿にぞ入り給ふ。

地お傍の衆に囃されて幼心の姫君。かう面白い東とは今までおれは知らなんだ。サア〳〵往かうはや往かう。ヤアござらうと仰しやるか。そりや目出たいは〳〵地またもや御意の變らぬ間に。行列揃へと立騒ぐ。お乳人は勇みをなし。そんならまア一度大殿様お袋様とお盃。是も馬子殿おかげぢや出來いた〳〵そちには禮いふ褒美やる。そこに待ちややとさゞめき渡りフシ奥に御供し入りにけり。地馬方は逢に見ぬ金の間をうそ〳〵と。覘き廻れど莚の外踏みも。習はぬ備後表。詞エヽこの座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも。地こつちの内が結構でござると　フシ獨言して居たりけり。地お乳人は大高にお菓子さま〴〵文匣に盛り入れ。詞どれどれ三吉そこにか。まあ〳〵そちは健氣の者ぢや。地道中雙六お目にかけそれ故に姫君様。お江戸へ御座ろと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。是は御前のお菓子有難う頂きや。お錢三筋買ひたい物買やや。殊にそちは通しぢやげな道中すがらも用あらば。お乳人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに馬

方させる親の身は。よく〳〵で有らうとフシいと懇の詞の末。三吉つく〴〵聞きすまし。詞由留木殿の御内お乳人の滋野井樣とはお前か。そんなりや俺が母樣と抱付けばアヽこは慮外な。汝が母樣とは馬方の子は持たぬと。地捥放せばむしやぶり付き引退くれば縋り付き。詞何の無い事申しませう。私が親はお前の昔の連合この御家中にて番頭伊達の與作。其の子は私こな樣の腹から出た。與之助は私ぢやわいの。地父樣は殿樣のお氣に違うて。國をお出なされたは三ツの時でおろ覺え沓掛の乳母が噺には。詞母樣も離別とやらで殿樣に御奉公こなたを。乳母が養育し父樣に逢はせたう思へどもかひもない。母樣の細工の守袋を證據に。由留木殿のお乳人滋野井樣と尋ねよと。地懇に敎てて乳母はおれが五つの年。久しう痰を煩うてあげくに鳥羽の祭りに往て。詞餅が咽につまつてつひに死んでのけました。地在所の衆が養ひてやう〳〵馬を追ひならひ。今は近江の石部の馬借に奉公しまする。是守袋を見さしやんせなんの嘘を申しませう。お前の子に紛れはない外に望はなんもない。父樣を尋ね出し一日なりとも三人一所に居て下され見事沓も打ちまする。この草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて夜は沓打ち草鞋作り。父樣母樣養ひませう。父樣と一つに居て下され。拜みまする母樣とスヱテ取付き抱き付き。泣き居たり。地お乳ははつと氣も亂れ。見れば見る程我が子の與之助守袋も覺えあり。飛び付いて懐に抱き入れたく氣はせけども。アツア大事の御奉公養ひ君のお名の瑕。僞つて叱らうかイヤ可愛げにさうもなるまい。まあちよつと抱きたいアヽどうせうと。百千色の憂き涙。二ツの眼には保ちかねフシむせび。沈みて居たりしが。いや〳〵我が子ながらも賢しい者詐つて誠とせず。母を心のきたない者と蔑まるゝも情なし。譯を語つて合點させ恥しめて歸さんものと。涙拭つて氣を鎭め爰へ來い與之助と。引寄せて兩手を取り。詞さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば。侍らしうなぜ尋常にも育たぬぞ。顏の道具手足まで母はかうは生みつけぬ。地美しい黑髮をこのやうに剃下げて。手足は山のこけ猿ぢやほんに氏より育ちぞとフシ又さめ〴〵と泣きけるが。詞これ物を合點しや。腹から生んだは生んだれども。今では子でも母でもない。地あさましうなり下つたを嫌うて云ふではさらさらない。この譯をよう聞きやや。詞母はもと御前樣の奉公人。與作殿は奥小性互に若木の戀風に。地摩れつもつれつ一夜が二夜とたび重り。通はせ文をお次に落し小性目附に拾はれ。武家の作法と云ふ内に殊にお家は御法度嚴しく。御家老衆の評定父も母も御成敗と極りしを。詞御前樣の御身に代へお命かけての御訴訟。殿樣の御慈悲にて科を赦され其の上に。表だつて夫婦になされ奥

作殿は段々に。奏者役番頭千三百石迄お取立。地追腹程の御恩の家其の間 にそなたを儲け。上 は姫様御誕生御内證のよしみにて。母が乳を上げまし首尾さへよければそなたも今。家老衆の子同然に二番と下座に下らぬ人。情なや父様は江戸詰の山谷通ひ。大事の所を仕損ひ又切腹に極つた。詞なれども腹を切らせては女房お家に置なれぬ時には。大事のお姫様の乳放れ御病氣も出ればいかゞとて。地母を其の儘殘さうため父様の命助かり。奉公構の御改易其の時母も一所にのけば。尤も夫婦の道は立つお姫様乳放れ。お苦しみをかけまし身に餘つたお家の御恩。誰がいつの世に報ぜん殘つて御恩を報じてくれと。父様のことわりゆゑ第一は男のため。夫婦の義理を忠義にかへて。あかぬ離別を フシしたわいの。詞男の子は幼うても御勘氣の末氣遣ひな。地與作が子とばし云やんなやサア早う御門へ出や。アヽいかなる因果な生れ性。現在我が子に馬追させ。男の行方も知らぬ身が母は衣裳を着飾つて。お乳人よお局よと玉の輿に乗つたとて。是が何になる事と フシ聲を。忍びに泣くばかり。地子は生れつき賢く一聞分け有る程なほ泣き入り。悲しい咄を聞きましたさり乍ら常に乳母が申したは。姫君様と私とは乳兄弟の事なれば。母様にさへ這うたらば。父様も出世なさるる由。御訴訟なされ下されかしと。言へばちやつと口を押へアヽ〱勿體ない。詞その乳兄弟いはぬ事。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間てい。地三吉と云ふ馬追が乳兄弟に有るなどと。どう妨にならうやら蟻の穴から堤も崩れる。輕いやうで重い事ひそひそ言うて人も聞く。まづ早う出てくれと泣く〱言へば三吉。詞アヽ母様餘り遠慮過ぎました。先づ云うて見て下され。地未だ云ひ居るか聞分けない。夫の事我が子の事母に如才が有るものか。合點の悪い聞き分けないと 制する内に奥よりも。詞お乳人はどこにぞ。御前から召しますと呼ばはれば。地あれ聞きや人が来る出てたもと。手を取つて引き出す不便や三吉しくしく涙。頬冠して目を隠しを沓見まつべて腰に付け。見すぼらしげな後影。こりやま一度こちら向きや。 山川で怪我しやんな雨風雪降り夜道には腹が痛いと作病 起し。二日も三日も休んで煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに下痢や麻疹の用心しや。可哀のなりやいた〱しや。千三百石の代取りがなんの罰ぞ咎めぞと。式臺の段箱に フシ身を投げ。伏して歎きしが。地懐中の有合ひ一歩十三服紗に包み。是嗜みに持つて居やと。涙ながらに渡さるゝ三吉見返り恨めし氣に。 母でも子でもないならば。病まうと死なうといらぬお構ひ。其の一歩もいらぬ馬方こそすれ伊達の與作が總領ぢや。母様でもない他人に金貰はう筈がない。エヽ胴慾な母様覺えて居さつしやれ

とわっと泣出す其の有様母は魂消え入りて。養ひ君お家の御恩思はずはさて一人子を手放して。なんの遣らうぞ奉公の身のあさましやと。フシ悶えこがれて歎きける。地時に奥口ざゝめいてはや御立と姫君の。御輿舁きあげ行列立て。お乳人の乗物をフシ直付にこそ舁き寄せけれ。地お乳はさあらぬ顔つきして姫君のお伽に。最前の馬方をこの乗物に引き付けお慰みに諷はしや畏つたと宰領ども。こりやそこなじねんじよ奴。諷ひをらうとぎごつなく。ヤア此奴はほえをるか。地なんぢやこりや忌々しと。握り拳を二つ三ついたゞきながら泣聲に歌坂はてる〳〵。鈴鹿はくもる。土山あひの。あひの土山雨が降る。地降る雨よりも親子の涙中に。しぐるゝ 三重 雨やどり。

中之巻

詞これ泊りぢやないかえ泊りならとまらんせ。とまらんせ〳〵旅籠安うて泊めませう。上旅籠中旅籠お望み次第すき次第。地椀家具も綺麗な座敷はこの夏表替へ。寝道具好うて酒好うてお茶は上々木賃でなりと。据風呂もしやん〳〵かゝり湯取つて加減見て。旅の汚れのあかつきは七つ立ちか八つ立ちか。枕のお伽が御用ならば振袖なりと詰なりと。足さすつて腰打つて。吸付煙草の煙管の雁首。首筋もとからぞつと庄野の六藏でないか。詞よい女郎衆乗しやつて足許が輕いの。置いてたも地アヽしやらくさづの三介三藏。石部金吉泊りなら泊めてたも。なんぼ先へ行かんしても旅籠屋は皆一つ。同じ音を啼く鶯の春はござれの伊勢衆でないか。目許にしほがこぼれるこゝへ見える坊様は。この暖かなに紙子着て仙臺の坊様か。あの旅人は京の八幡の生れやら。足に牛蒡の毛がむく〳〵ぢや。向ひ通る菅笠樣足許腰元身のまはり。すつきり綺麗に掃いた樣なは フシ伯耆の國の人と見た。地是々ここな若衆樣。詞越後衆か明石か鬢がちつくりちゞんだ。地あれへ大名一かしら。瓜ざね顔の旦那殿東寺から出た人さうな。跡からござる角前髪吉野の衆がはなが見事。これへ見えた飛脚の。足許のねばいは三河者に極つたぞ。常陸の衆は帶で知る。是爰な奴殿。地越中の國の人と見たなんで見たればこの下紐を。解いて一夜は泊らんせ夕暮は フシ急ぎの人も呼びとむる。地色こそ道の關の地藏白子屋の左次が内。小まん小女郎小よしとて百廿里の名取ども。人呼ぶ片手の袖の下麻小笥の掛匣底意には。戀に心をひねり麻の。麻桛みだいに胸の フシ中なんと奈良麻の憂き身ぞや。詞なう小よし小女郎。かうした勤め樣々あれども君傾城と云ふものは此の類での王樣。これから段々ある内におじやれの身には何がなる。朝の夜から見世ざらし晝休みから泊りまで。葦原雀の啼く樣に息のありたけしやべつて。それでも泊り人あることか。どうした事やらこの頃は一膳盛の客さへない。地隣にはあのやうに大名のお姫樣。今日で三日

の逗留宵朝百六十人。どりぱさつはと忙がむいこれの内はいかな事。下宿さへ泊りが無い晩にはみんな覺悟しや。旦那殿のにがい顏日頃生えた角に股がさかうぞなう怖や。常に最屓な馬子衆も。こんな時に客引いてくれそなものではないかいの。詞それについて小女郎。そなたのおてき松坂の七二はなんとして見えぬぞ。口説でもしやつたか。梯子の下のごそ/\が過ぎて氣色でも惡いか。地あんまりこそ/\ごそついて。馬は追はいでおとがひで。フシ蠅追やろぞやと云ひければ。詞ムヽ其の七二とは九郎助の事か。それは未生以前で今は挨拶きり/\す。しいと云ふ馬追聲も聞かぬわいの。始めはたんとかわいうて元結の脚絆の。鬢附買ふの帶買ふの沓の錢まで續けた。詞其のわしが目をぬいて。一人か二人か水口の火繩屋のおげん。まだ土山のくし屋後家。庄野のふとのお米が俵腰に食ひ付いて。馴染のおれをすほんぬきに逢はせた。地それも云うたら止むにもせいほでてんがうの貧乏神。何もかもほつきおげ今は布子と襦袢と。たつた二枚の四九をやつて。親方の駄賃の算用も立たぬげな。詞聞けば小萬の知音の與作も博奕の友ぢやげな。與作がいとしか意見しや。小よしも取沙汰聞きやらうと云へば小よし小聲になり。されば内の旦那が龜山の問屋で聞いて來て。これの小萬がねんごろする馬方の與作奴は。博奕打の大將ぢやあれから盜みの下地ぢや。重ねて來たともあしらふな餘程彼奴に懸もある。丸裸にしてなりとも懸を取つてそれからは。門詰も踏ませまいと女夫叩き頷いて。地寄合に行かんしたと語りもあへぬに小萬はら/\涙にて。勤めの身にもおじやれの身は。下の下といふは フシこゝのこと。地傍輩衆へもいはなんだ。横田村の父樣二石二斗の未進に詰まり。六十六で水牢男にも娘にも。子とてはこの身ばかりなり。しよざいこそ出女なれ。お大名へも知られた關の小萬が父親を。水牢では殺されず參宮するとて暇もらひ。詞女子の身で代官所を秋納めまで請合うて。牢を出しは出したれども何をあだてになんとせう。前の樣に客は勤めず私仕事に賃苧うみ。地女中 泊りの袖の下小萬といふ名でほつ/\と。鍋のあはれやあさましや請合の日は近付く。氣が勇まねば身も痩せて辛苦するのもあの人の。身をもくろめて遣りたいの念力一つで立てる身が。世間で惡ううたはれて眞實けもなき浮世やと フシ苧小笥に。平伏し歎きしが。地あれ/\あそこへ謠うて來る本小室の引拔は。與作々々と小手招き。歌さても見事なソンレハおつゞら馬や。七つ蒲團にソンレハ曲彔据ゑて。我も昔は フシ乘りし身を。地人はそれとも白子屋の見世先に馬引付け。詞こりや小まん此の旦那 殿馳走して泊めましや。お供かけて三 人ぢやサア下りさつしやれと。地荷物とく 小女郎小よし取々にそ

れお足の湯まづ奥へ。合宿もござりませぬ廣々と。お休みなされませと フシ奥に伴ひ入りにけり。 地與作は荷物も跡付もそこ〳〵に投げ下し。小萬この中逢はなんだ無事で嬉しいやがて逢はうと。馬の口取れ賦出す手綱に縋つてこれなんぞ。 詞語る事がたんとある此方も云ふ事ある筈ぢや。 地そは〳〵せずと待たんせと引戻せばエヽじやまな。其の端はいつでもなる急なことぢや遣つてくれと。振り切れば抱きとめて是どうぞいの。何がそれ程忙がしいどうで心に一物有る。譯を聞かねば遣りはせぬと見世にとんと抱きすゐられ。 詞ハテ荷物さへ卸したに一物があるものか。氣遣ひさうなに短う話して聞かせう。この不仕合を聞いてたも。傍輩どもがけんねじついて錢儲けする羨しさ。瀨多の久三が筒の時百切りはつて見たれば。勝つ程に〳〵一いきに七百。地こりや門出が面白いと腰に引つつけ。しやんぐ〳〵鈴鹿で皆ついてゐる。こゝへもちよつと出かけて又六百してやつた。是で置けばよい物を慾には見えぬ目川村の。馬子ども寄せて我等が筒を取つたの。當らぬか〳〵晝さがりから七つまで。一文と六文の錢の顏を見ぬ程に。前の勝を打ち込んで五百あまりの爲過し。 どつこいどこぞで此の損を梅の木の是齋の辻で。身を粉にはたいてやつて見た。和中散でも利くにこそ。 金に直いて一歩二朱の借錢負うて。肩の重たい石部の八藏に請合うて貰うた。是をいくさの始めとして大津八町で八百負ける。小野の宿の小町塚で九十九文してやらるゝ。磨針峠の氣が細うては勝たれぬと。へそ村の上で分別仕替へ守山の觀音堂で。卅三匁が質置いて心は鬼神と出たれども。土山の田村堂でつい平げてのけらるる。伊勢へ通しに行つた時宵から曉の。明星が茶屋で飲み干す樣な大ぐさり。借錢の利を一月に二月をどる松坂越えて。雲津の渡しで算用したれば貳貫づゝ合せて。二四が八藏めに八貫の借錢。是はならぬと思ふ所へ向ふから馬追うてうせをる。じたい八めはぶう〳〵なりおれが胸倉しつかと取つて。 詞こりや貸した錢はどうする。見忘れたか八ぢや〳〵と刺す樣に云ひをる。 地くど〳〵と見苦しう詫言もしてゐられず。錢というて今はない正味で借つた錢ではなし。數ばかりの勝負づく一ばん切に突いて見て。八貫を濟ますか十六貫負ふものか。サア來いと云うたれば八めは數年の通りもの。こちは八貫出して置く負ければそれで取り遣りなし。勝てば倍して十六貫なんで濟ます合點ぢや。抵當もなうてはいやぢやといふこちも引かれぬ云ひだがり。是この馬を知つたか池鯉鮒の市で九兩一歩。親方の物なれど十六貫の代りに五百目の。馬ならしてこいと木蔭へよつて錢握り。 詞サアどうぢやというたれば。三まいせい七つぢやと二文張りをつた。まつかせとつく程に手の内に殘つたは。たしか七文南無三

貰しをつた。地一文はねて六文にして。あてゝ取らうと思うて一文しやんとくろめて。突いて見たれば悲しやの八文であつたもの。一文はねて七つにして彼奴が壺へあてがうたは。どうした因果のかたまりこちやげんなりとなるほど。八めはいきつて馬を取つたとしが六付く。今日の乗手は氏神約束の馬次まで。やれ／＼とせがまるゝ八めも武士を乗せたれば。なぜ馬を追はぬと目のぬけるほど叱られて。窪田で旦那を下して追付け馬を取りに行くと。早追ひほどに追つて來る親方の馬を取られては。この海道は云ふに及ばず木曾街道中仙道。佇みが叶はぬ八藏めが來ぬうちに。はやう内へ往にたいとフシ溜息。ついて語りける。地小まん心もくら闇にて人の沙汰に違ひない。世につれるとは云ひながらさもしい心にならんした。古へはお歴々わたしら風情は下司にもお遣ひなされまい。縁なればこそ肌ふれて抱いつ締めつのわりないこと。嬉しいやら悲しいやらフシ一倍愛しさ増すものを。惡い病が付きましたそりや雲介の身持ぞや。友達仲間の附合で引かれぬ事があるにもせい。わたしが親の未進米この六日の吉書に立てねばもとの水牢。この世から八寒の地獄へ落すわたしが心。苦にかけうではなけれども案じてもくだんせず。しこり博奕の惡遊びさてもつれない氣と思へば。熱い涙がこぼるゝとスエテせき上げ／＼。泣きければ。地與作わつと泣き出しそりや曲がない／＼。詞慰みにも慾にもせぬそなたの親の未進米。二石二斗は何程ぢやむかし與作が草履取の切米。地是で可愛いそなたが親を殺させはせまいと。痩我をはつての出來心千三百石から馬追迄。成り下るほんのくほよいことはない筈と。思はなんだは身が不覺。是は主の天罰と諦めて濟ますが。しこり博奕の榮耀とはさりとは小萬むごいぞや。皆是そなたの親のため胸に書付あるならば。こゝが立ちわり見せたいと打ち叩いたる胸當もフシしぼる。ばかりの恨泣き。地小萬是はと手を合せ忝うござんする。とうに云うてくだんせば恨むまいもの堪忍して下さんせ。詞父樣の出入も夏の物ども人手に渡し。傍輩にも無心云ひ百三十匁整へ。まちつとの所は賃苧もよつほどうみためた。地これ見さんせと苧小笥より金取出し。父樣の命代落付いて下さんせ。日が暮れて間があるよもや八も來をるまい。泊人はなし私も暇。馬は向ひに繋いで中の間に寢ていなんせ。互の憂を散ぜうと草鞋の紐解く所へ。石部の八藏きよろ／＼目して來りしが。詞ヤア與作か人の馬を斷りなしに。美濃路まで隱れもないひぬかの八藏目のあらい男知らぬかい。十六貫をたゞせうや地どうずりめと。馬を解く手を飛びかゝり捻ぢあげてこりやい。詞汝がひぬかの八藏なれば俺は丹波與作ぢや。二百匁のかたに五百匁の馬を欲しいか。遣つたら機

嫌がよからうな。三百匁のつりを持つて來い五十三次に汁かけて。咬みこなす與作ぢや。（地）すないやい。すないやい　フシほてつぱらめと振りちぎる。（地）ヤイ男達はおいてくれ錢濟まいてしたかせい。腕づくならサア來いとぶつてかかれば小萬取付きなう八藏殿。（詞）こなたは粋のやうにもないそつちもこつちも親方持。馬をやつてよからうか取つてこなたを褒めうか。（地）聲高に言はずとも料簡づくがよいわいの。情なやと泣きければヤイこゝな引きさかれ。（詞）其の涙は與作に泣けこちや忝うないわいやい。取るべき錢は取らずに馬を取るが料簡ぢや。いやそりやならぬ。この門に繋いだ馬はこの小萬がやらぬ關の小萬がやらぬぞ。イヤ死女郎のふんばりめ竹の鞭を食らうなよ。ヲヲ女子を相手にならばしや。ヤアしかねうかと鞭を持つてはつたと撲つ。與作小萬を押し退けて。あれは餘所の奉公人なぜくはした。ヲヽ我が女房ぢや所でくらはした。

ムヽよう食らはした女房どもの返禮と。（地）拳を固めて目鼻の間缺けてのけと打つたりけり。來いする氣ならして見せうと互に小柄を取つては投げつ投げられつ。撲つつ撲たれつ摑み合ふ。誠に馬子の喧嘩とて　フシ馬の蹈合ふ如くなり。（地）八藏は力ばかり與作は捕手柔術とり。すりちがひに小腕を取り脛を蹴返しこりやあと取つて投げつくる。門柱に腰骨打ちよろめきながら睨みつけ。（詞）どうずりめ覺えてけつかれ。問屋馬差親方へ斷つて。海道筋の御器の實をぶちあけ。（地）莚被かせて見せうずと身を捻ぢ振つて立歸る。小萬追付きこれ八藏殿。（詞）公用勤める馬方が。馬差問屋へ斷られ。何處で身が立つものぞ。（地）この小萬が手を合せる男は當つて碎けいぢや。堪忍して下されと詫びる程なほつき上り。（詞）十六貫と云ふ錢貸して其の上に投げられて。堪忍したらそつちはよかろが俺が惡い。與作奴の博奕摶盜人とこの門からわめいて往く。なうこれ

く〳〵こゝに百卅匁命がはりの金なれども。（地）男の爲ぢや惜しうない是で濟まして下されと。取出すを引つたくり必ず跡も濟ませよ。（詞）錢の値段はどうせうぞハアテそこらは構はぬ。そなたの勝手にしてたも。そんなら是で拾貫分。（地）相場は十三もんめん巾着捻ぢ込んでこそ歸りける。（地）小まんは小首傾け溜息ついで立歸り。さきの金を渡してやう〳〵といなせた。彼等との附合重ねて置いて貰ひたいと。呟けば與作肝潰し。（詞）其の金渡してよいものか。取り返さうと立上るこれ待たしやんせ。人の物負ひながら返さいでよいかいの。昔と違うて當代は道中筋も吟味強く。馬借問屋へ斷られ惡名が立てばどん〳〵と廢つて出入の門も塞がれば。おのづから逢ふ事もならぬ樣になり果て。（地）萬一お國へ聞えての恥辱は再び返らぬ。父樣の未進も云ひ延べるだけ云ひ延べて。叶はずば水牢へ代りにわしが入る覺悟。差當つた男の難

儀救へばわしが本望と。云へども與作聞入れず馬方風情になんの恥辱。うき身やつすは親のため其の金をやるものかと。斷出でしが南無三寳こりやならぬ。是の旦那の佐平次殿が何事か出來たやら。問屋組中連立ちそれ其處へ戻らるゝ。なんの彼のがやかましいちよつと隱れて逢ひともない。馬も何處ぞへ引いてくれと隣の見世の幕の蔭。乗物あるを幸に戸を明け片足踏み込めば。内よりあいたあいたしこ横腹を蹈みくさる。何者ぢやと小丁稚が大欠伸してによつと出る。詞ヤア石部のじねんじよか與作殿か。そちはここに何してゐる。おりや江戸へ通しの馬追うて本陣に泊るが。夕飯過ぎから眠たうてこゝでぐつとやつたもの。有様はこりや何事ぢや。いや氣遣ひな事ではない隣の旦那に逢ひともない。地こゝへ隱してくれと云へば三吉あたりを透し見て。詞そこなは小萬かエヽ〳〵うまいなうまいな。おりやとうから知つて居る。外の人なりやならぬが與作と云ふ名で愛しい。與作のことなら引きはせぬ隱してやらう。地サア這入りやと。膝押合ひし心ざし。知らねど親に孝行のフシ通ずる念こそ哀れなれ。地程なく亭主門口から内外の者ども皆起きよ。詞問屋殿中屋殿組中殘らず御座つた。かゝも起きて地出や〳〵。と喚く聲に出女ども。主婦諸共に出づる庄屋問屋口を揃へ。詞おかたお聞きやれ今日の寄合は。是の小萬に就いて代官所のお差紙。小萬が父親横田の彦兵衛。四年このかた二石二斗の御未進にて水牢に入れられ

たを。小萬が願ひ請負ゆゑ出牢仰せ付けられた。宿中としてきつと取立て納めませいと則ち小萬をお預けぢや。ようお聞きやれと云ひ渡す小萬俯向き涙ぐむ。女房も驚きておとましいこと仕出しやつて。主に厄介一文もこちや知らぬ。上り下りの旅人衆も關の小萬と云ふ名にはぢて。百やる人も二百やる一匁の貰ひも鷗尻に取りをる。百目や二両は半年にも溜れども。與作と云ふ博奕摶の盗人めに。有りたけこたけ仕上げて夏の物は半刕に襦袢が一枚なささうな。與作が懸が餘程ある皆己れが請合ぢや。帳面は忘れぬ旅籠が六かたけ。酒が四升五合十文もりが七十杯。芋と鯨の煮賣が八十五杯。地食ひも食うた蒟蒻の田樂を百五十串。蒟蒻の錢ぢやとて砂にしてすませうか。盗人におひなればこの出入はこちや知らぬ。與作めが身の皮剝いでも二石二斗が物はない。馬を質に押へて彼奴にきつと濟まさせ。小萬を内へ入れておきや皆御大儀でござると。辭儀もそこ／＼戸を立て丶 フシ錠さす音こそきびしけれ。地庄屋問屋組頭さて／＼與作と云ふ奴は。存じの外の大食旅籠から盛切から。蒟蒻くうて煮賣喰うて其の間に小萬と云ふ。お山を夜食に喰ひをるとオクリめん／＼〳〵宿にぞ歸りける フシ與作は肌に。地冷汗流しやう／＼這ひ出で樞の節穴。蔀の隙間のぞけ／＼ど見えばこそ。竹櫺子の出格子に スヱテ首を伸して取り付けば。地内より顔がによつと出るちやつとひけばア丶大事ない／＼。コレ 地わしぢや小萬か與作樣か今のを聞い

てくだんせ。悲しい事になり果て籠の鳥になりました。わしがかうなる上は父様へ難儀はもうかゝらぬ。こな様にあふ事はならうやら成るまいやら。是が別れにならうやら。下から上ははかられぬと フシ手に取り付いて泣きければ。詞イヤ是雲に汁が出來てきた。どうした縁やら三吉めが與作と云ふ名に惚れて。常におれを大事にする。乗物の内でたらし込み隣に泊つた大名の。金を盗んでくれまいか男と見込んで頼むと。地のぼせば此奴がのぼされて成程盗んでくれうといふ。なれば上々ならねば元と。云ひもあへぬにいや〳〵〳〵。詞人迄罪におとす事止しにして下さんせ。ハテ氣の細い顯れて。地あいつが撲たるゝ分三吉いよいよ頼んだ。引かせはせぬと云ひければ。詞はれやれやれ〳〵〳〵しちくどい。盗んで入らずば棄ちやいの。此のじねんじよが頼まれて引きはせぬ。ハテ親はなし一門なし拳固取より小さい首。地意氣づくなら取つて行け盗みして顯れ。首切らるゝが不思議かと義を立て抜きし侍氣。盗む黄金もくちせざる フシ筋目恥かし哀れなり。地ヲゝ頼もしい命かけて頼んだとありたけそやされ。詞ハテイ味方があれば氣が後れる何處ぞへとつと退いてゐや。ヤア小萬女郎この守が預けたい。ハテ守は掛けてゐやいの。いや〳〵是にはわしが本名が書いてある。若し顯れて捕らまへられ人に見せれば恥辱ぢやと。地解いて預けし神妙さ裾ねぢからげて忍入る。坂の下の彌六が方へ退いてゐて。夜中時分に戻らう小萬も這入りや。わしやあぶなうてきやきやする南無地藏樣〳〵。エゝ今願立が利くものか。聲が高いひそかに〳〵ひそ〳〵と。胸はだく〳〵凸凹の オクリ坂の下へと別れける。地武家は道中掟にて半時がはりの柏子木の數も九つ十に餘るやあまらずの。子供心の愚かさは盗み了せし嬉しさに。柏子木を除けもせず金襴の財布提げながら。門口へずつと出る夜廻りちらりと氣を付けて。慕ひ寄れば狼狽へて乗物に逃げ入つて。内より戸をざさいたりける夜廻りつづいて飛び付き。詞乗物の戸をしつかと押さへ。簾を揚げてヤアうぬめか。是は御前のお金袋。サア馬方の三吉めがお金袋を盗んだ。出會へ出會へと呼ばはりし是ぞ此の世の地獄落しフシかゝる鼠の如くなり。地本陣の上下殘りなく下宿の諸侍。隣町隣家の旅籠屋ども棒ちぎり木にて駈けつけ。街道の眞中に乗物かき据ゑ高提灯。あたり嚴しく取巻きたり。詞當番下知して。地畏つたと荒稚づれに仰山なそれ引出せ。子ども戸を明けてサア出ませいと。小腕取つて引出す。詞旦那殿盗んだ金は返しますと。地きよろりとしてゐたりける。いか樣にも幼少な。彼奴ばかりではあるまい。詞同類を穿鑿せん馬差は居らぬか。當宿に泊つたる馬子ども殘らず召し寄よ。地あいと云ふより觸れまはり フシ皆皆一所に相詰

むる。地八藏も大酒して宵より闘に泊りしが。盗みかはくは何奴ぢやいヤアませのじねんじよ奴か。己れなら尤もろくで果てまい奴ぢやと。常に云うたが違うたか。詞馬方仲間の恥さらしヱヽ礫柱めと。地脊骨をどうど踏みければ俯向にかつぱと伏し。額を石にすり破りフシ血は紅と流れたり。無念な己れ踏んだか肢骨もいでくれうと。立ち上ればひつするひつする。詞そこな馬子めも慮外者。武士の前にて脛三昧とさん〴〵に叱らるゝ。地エヽあいつに踏まれたか下々の刀でさへ。切られまいと思ふに脛にかけて此の樣に。顔に疵を付けたなあ。首がとんだら己れが面へ喰ひ付いてくれうぞと。はつたと睨む目の中に無念涙をはら〳〵と。思ひ込んだる腹立の。をさな心の念力はフシぞつと身の毛も立ちにけり。地母お乳人聞き付けて。駈出で見れば大勢に取り圍まれし我が子の體。あつとばかりに腰も拔けスヱテ呆れて。泣くより外はなし。

地人々に悟られては今まで包みしかひもなく。お姫樣の乳兄弟馬方して盗みしてと。いはれんも口惜しく不便さ憎さ腹立ちさ。ヤイ詞そちは國から目を掛けて。情を加へたかひもないさもしいことを仕出したな。節目も有りそな者なれども流石育が恥かしい。地其の心故親々も知つても知らぬ見ぬ顔して。其の馬方とはなりつらめ此方も子を持ち覺えがある。皆親心は同じこと若し母などが聞き付けても。我が子の命を助けん爲火水の底へは沈まうが。この場へ助けに出らるゝ物か見殺しにする樣なれど。心の中では神佛に命乞してもがくぞや。年にも足らぬ心から恐ろしい事する筈もない父親が貧しうて。云ひ付けて盗ましたか但しは人に頼まれたか。言譯あらばしてくれよ母の心を推量し。この頃の馴染もあり。兎に角命が助けたい。姫樣のお名を思はすばこのお乳が生んだ子で。姫樣の乳兄弟と云うてなりとも助けたい。どうなりとかうなりと言譯あらばしてくれと。ギン魂の底心の底肝より出づる憂き涙。當番吟味の人々に推量もしてくれかしの。心遣目遣をフシそれとも知らぬ是非もなさ。三吉も母の顔。見上げ見おろしスヱテ涙に咽び居たりしが。詞申しお乳樣さもしい盗み致しても。馬方の事なれば誰恥かしとは存ぜねど。地お前一人に恥かしい。父樣の爲かとは恨めしの仰せやな。父樣がある程なれば馬追は致さねども。在所知らねばフシ顔も見ず。また母樣も持つたれども女子の身の腑がひなさ。奉公人のはかなさは今では他人も同じ事。たとへ言譯立つてから盗人の名を取る見苦しい目にあうては。父樣に顔は向けられぬ。はやう殺して貰ひたい其の樣に仰しやられて。可愛がつてくださる程どうやら心がうろたへて。死にともなう成りさうな奥へ入つて下され。もう顔見せて下さるなと。兩袖を目にあてゝ泣き沈みたる利發さに。母はなほしも心くれ命はお乳

が貰うた。助けて下され侍衆とわつとひれ伏し聲を上げ。人の推量思はくも フシ忘れ。はて〻ぞ。泣き居たり。家老の本田奥より出で樣子つぶさに承る。詞盜み物出づると云ひ殊に道中他領の者。是しきの事評議に及ばず 地お助けなさる〻立ち歸れと。引立つれば三吉この恥かいて助けられ。なんと生きてゐられう慈悲なら切つて貰はうと フシ猶座を占めて立たざりし。エ〻小癪者輕い科を成敗とは。古今の掟にない事。立つて失せうと怒らる〻。詞ム〻この分ではどうでも命助かるの。ヲ〻聞えたとつ〻と立ちこりや八藏め。己れは俺をよう踏んで面に疵を付けたな。地元來我は武士の子ぢや人に踏まれて生きてはゐぬ。覺えたかと云ふ詞のうち中間が脇差ひらりと拔き。飛びか〻つて八藏が首打落せし早業は フシ瞬く間の稻妻なり。地すは人殺しと取つて伏せもうこの上は料簡なしと。本繩に縛り上げ宿の庄屋へ預け置く。この方よりも人をつけ代官所へ渡すべし。立ち上れと引つ立つる母は性根も泣き入りて。前後も分かず亂るれど。このお目出たい道中に繩付などは見ぬものと。人に誘はれ力なく見返り〳〵奥に入る。子は又母を見送りて顏をうなだれ目をふさぎ。聲をも立てず歎きしがム〻これぞ本望々々。地惡名取つて人には踏まれ助けられても生きて居ぬ。一人死ぬより人切れば往にがけの駄賃ぢや。父樣も母樣も誰も一度は死ぬるもの來世でゆるりと逢はうまであの世から來てあの世へ歸る。戻り馬やろいほてつぱらめと惡びれぬ。所存は侍まさりかな惜しい奴ぢやと涙ぐみ。引いて歸れば本陣は。火の用心の聲ばかりオクリ物しづ〳〵かにぞなりにける フシ與作は取沙汰。地聞くとひとしく科を我が身に引受けんと。駈けつけ見れども早落着してひそかなり。本陣も門しまりあたりもひつそと鎭まつたり。小萬待ちかね格子敲けば走りより。詞どうぢや〳〵仕損うたげなのう。ア〻仕損うた段かいの。わしやこ〻から覗いた。地八藏まで殺いたわありや皆我等が身代り。明日の日中に切らる〻げなかわい〻事をしますると。泣き叫けば南無阿彌陀〳〵。そりや皆こちが殺すわ。こちとはいかい業人とスエテ顏を見合せ泣き居たり。詞なう三吉より一時も跡にさがつてなるまいが。こなさんどう思ふぞ。ム〻其の覺悟極まればもう落付いた滿足した。宵からさうは思うたが親父の難儀を見捨て〻は。死なぬ氣であらうかと胸にばかり持つてゐた。心がかりは殘らぬの。地ハテかう左繩になるからは父樣の事も埒明かぬ。もじや〳〵云へば氣がもどる餘のこと置いてサア早う。こ〻が出たうござんする。ヲ〻嬉しい〳〵裏の軒に繫いだ。馬を人手へ渡しては主たる人への不調法。死場へ馬も牽くまいか其の間に身の出る程。此の竹格子を放して見や。いやこ〻も小よしの惡性でつ

い押せば離れる。地アヽ〳〵小よしは逢ふ夜の通ひ路。最期近付く二人には冥途に通ふ鐵の門と。　くどき〳〵馬牽き出し預けて置いた脇差は。詞そこらは抜からぬ私が腰にさいて居る。できたそれなら此の馬の鞍を踏まへてそつと下りや。アヽあぶないぞ怪我すなと。地かばはるゝ身もかばふ身も果つる廿日の月毛の駒の。　尾髪亂れて置く露に袖の涙をあらそひし。　ひらりと飛びおり一町ばかり足ばやに立退き。海道は往還伊勢路の方で死ぬまいか。アヽそれに付いて待たしやんせ。詞三吉が預けし守袋。如何なる神の御札やらわしが懐にも大神宮の守御祓。穢すは後生の障りなり。地地藏堂へ納めませうヲヽ氣が付いたと取出す。詞浮線綾に紅梅裏の袋を開き月影に。　讀んで見れば正一位小原太神宮。丹波の國の住人伊達の與作が一子與之助息災延命。地南無三寶さては三つで別れたる我が子の與之助なりけるか。　我を親とは知らねども與作と云ふ名を大切に。慕ひしものを氣も付かず盗みをさせて掟めにあふ。　手を出して我が子の首を切つたと同じ事よとて。とんと坐して足ずりし　フシ聲を。上げてぞ歎きける。　地女も共に涙にくれ。因果人とも業人ともよう〳〵罪業を。　重ねたは二人が身死なうと云ふ氣の付いたこそ。まだも冥加に叶ふたれなんのかのと暫しでも。この世に居る程罪重し。サアござれヲヽさうぢやと。立たんとすれど腰立たず口惜しや腰ぬけた。エヽ氣の弱いと引き立つれども膝折るゝ。抱き上げても腰折の　地三十一期の憂き思ひ。最期は伊勢路育ちは近江。生れは丹波くりげ馬。夫を抱きかき乘せて妻は口取るはいどう〳〵。今六道の次傳馬三途の川を打ちまたぎ。　昔の小唄引きかへて間の土山死出の山。冥途の旅路通し馬たどるや。夢の　三重

下之卷　與作小まん夢路の駒

歌與作丹波の。馬追なれど今は。野末の。放れ駒ぢや。しやんとさせ與作。與作思へば引。照る日も曇る。關の小まんが。ギン涙雨か。しやんとさせ與作フシ與作々々と。地呼び呼ばれつる。稲負鳥も　フシ音を入れて。　野邊の刈萱軒端の荻馬の秣に飼ひ殘す　フシナクリ萱も〳〵我が身も。此の暁はオリリともに。枯野の轡蟲スヱテ人を乘せたが乘せられて。　かぎりの旅の坂の下。なうあれ夜深に急ぐ乘掛も。　泊りは知れて　フシ四日市。地我は泊りもなゝ七日。中有の旅の馬羊。歩めしる〳〵アヽしぶとい口を。　引けどしやくれど行きかぬる。畜類ながら性あれば。最期を惜しむ綱すくみかや。歌私は十二で人呼び初めて。今年廿一まる九年。　とめし旅人何萬人ぞ。關一宿はせばけれど。男女にいくたりか友のよしみも時の花無常の。ナホス　フシ風に散り果てゝ。フシ馬より外に。とふ人も。泣いてくれるか優しやとフシ鞁にひれ伏しはら〳〵と。スヱテ袖には涙梢には。木の

實こぼるゝ椋本や。契り初めしは一昨々年拔參宮の道連に。歌そなた櫛田の。眞中ほどで。深き。思ひをやれ紫。帽子ほんに口說いた其の眞實が。關の。地藏を誓に掛けて。戀の引。重荷の。馬追ふとても。足もかる〳〵心もひろき。フシ豐受野とこそ。樂みし。あかれぬ中を秋の霜。今宵ごりごと氣もへりて窪田に浮名埋むかや。サイモン歌 小まん泣く〳〵 ヨイ 申す樣緣は異な物其の時に。起請一枚書かねども雲津の川瀨二世三世。指切りしての云ひかはせ枕定めぬ參宮に。寢て居て胸を燒かうより手を引きあうてゆるゆると。歩み慰むヨイ夕暮は一把の火繩に火を付けて。相谷煙管思ひ草思ひし。かひも夏の蟬。春秋知らぬ世のたとへ。與作小まんが身の上とフシ昔忍ぶの露涙。今を恨みの。うき歎きこのもかのもにあのゝもの。阿濃の松原しぐれ行く。阿漕の海士の。フシあこぎにも。過ぎにし方を思ひ出て。二見の

浦の。ふたつ石。清めし肌へ引きかへて。地刄に穢し死する身の。形見となれや。石塔の。歌標の石を思ひ出す。忌垣越えしも戀の罪末社々々の宮巡り。地獄巡りを思ひ出す。返らぬ昔思ふまい。泣くな〳〵と啼く鳥。人の末期を知らすとは地音に聞きしが。フシ今ぞ知る。朝隈の嶽。あさましや。かの齋宮の忌詞いまはしやとて道もせに。曝す身體を道者にもハヅミ嫌ひ。憎まれ人々の。地よのもや回向も情なや。歌過去もエイ。未來も現世で知ると。男見る目は。泣く目もと。ヤツサありや。そりやフシはや男方の。お八つの太鼓の聲は高田の寺。泊り〳〵は多くとも。十萬億土馬次なしの西は百味の旅籠屋に。觀音勢至手を取りて蓮の。臺に泊らんせ。夫婦の外は相宿も南無阿彌陀佛と。國府の阿彌陀の影たのむ。其の誓願の詞の緣千貫。松にぞ 三重 〽着きにける

與作も名有る弓取の家に生れし氣質とて。きつと死に身に胴すわり。土手へ飛びおり馬を小松の根に繫ぎ。小笹の露を打拂ひ。詞こゝへ〳〵と小萬が手を取り顏を眺め。地是でか廿一と卅一二人合せて五十二歲。いとしい人ら長生と云ふ程の年でもなし。いとしい人を殺すよなう心にかゝり云ひたい事はないか〳〵と云ひければ。ハテ可愛い男と死ぬる身が浮世に心なに殘らう。さりながら只一ついうて返らぬ事ながらと。云はんとするをア、もう〳〵それもいらぬ事。詞人間の念慮限りなく。息の通ふ間は六根の樂慾にひかれ。思ふ程云ふ程なほ盡きず皆罪障の種となる。この念を拂ふを生死を離れ涅槃門に入ると云ふ。我とてもいひたいこと千萬無量を打捨てたり。地されども一つの粗相にはそなたに預けし箱枕に。先祖の由緒所々の軍功知行付の一卷あり。死後に諸人に蒙せられ家名を流さんこの無念。よしそれはまゝにもせん不便や可愛いや與之助が。最期まで親とも知らず親戀し

父親戀しと。思ひ死に殺されん其の思ひは親の業。親ではなくて敵ぞとスヱテかつぱと伏して。泣きければ。地それわしには云ぶなく〱とてこな樣云うて泣かしやんす。そんならわしも父樣が年寄つて子を先立て。スヱテ途方があるまいとしほや。詞チヲ念を殘すが迷ひなるたとへ奈落に沈むとも。親の事と子の事が思はず云はずにゐられうか。地さうでござるさうぢやもの。いつそ云うて罪作り親の爲子の爲に。地獄へ落ちてやりませうと二人ひつしと抱付き聲の限を豐受野の。フシ風も哀を添へにけり。地あれ〱あれへ見える早提灯走り飛脚と覺えたり。道端は如何なりいざ最期場を變へまいかと。半町ばかり草わくる飛脚どもは汗水にて。詞お乳人の御立願明日四つ迄に。地命乞ひの太々神樂御願かなへば御祝儀の。御褒美は知れた事フシ急げ〱と走り行く。詞あれ聞きやつたかいづかたのお乳人。命乞の御願とは養君の煩ひか。詞いらぬ命が二つ有るアヽ換へらるゝ物ならばと。悔めば小萬涙ながらそれがかなふ程ならば。餘所の子よりもこつちの子切られて死ぬる身代りに。とても死ぬるこの身體髮頭より爪先まで。一分試しに試されても代りたい助けたいと。歎き沈みし誠の心。百千萬の祈よりフシなどか祈禱にならざらん。地時に人足四五十人ひそめいて來りしが。ヤア詞主なき馬の夜中といひ。繋がれあるは訝しゝ地提灯立てよと呼ばはつて。忍び提灯さやはづせば。フシ萬燈會のごとくなり。地遠くはあらじ一二町野を狩れと大勢が。與作小まんと聲をかけ洩るゝ方なく取卷きたり。南無三寶見付けられては二度の恥。いざ死なんとひらりと拔く。刄物の光りそりやこそとお徒士衆。やにはに二人を縫り留め兩方へ引きわくる。詞やれ侍ならば情を知れもとは伊達の與作ぞ。一所懸命の時節到來死損なはせくれるか。地エヽ口惜しいと身をもがく。遙か彼方に立てられたる乘物より御意を請け。若侍走り寄り。詞ムヽ珍らしい與作。古傍輩鷺坂左內見知られつらん。今度姬君關東御下向御悅びの時節。今夜の始終御憐愍淺からず。吟味仰付られしに小まんが箱より貴殿の實名あらはれ三吉事も實子與之助に紛れなく。殊に內室お乳人神妙の志かれこれ感じ思召し。三吉が命を助け母儀も同じく御供にて。兩人を助けんため忝くもあれまでお乘物を出だされた。地大殿の御前相濟むまで五十人扶持の御合力小まんもお家へ引取り。重ねてよろしく御料簡あるべしとの御意の趣。有難う存じサア。お乘物のお供してフシ歸られよとぞ述べにける。地與作草むらに頭を着け。詞大殿以來例なき御厚恩報じ奉る事もなく。不奉公の天罰にてあらぬ體に成り下り。親子も知らず恥辱の屍を曝すべき所。姬君の御哀憐生々世々に忘れ難し。さりながら女ども悴も。人の笑はぬ心ざしも立

てたるに。拙者は何を面目に。おめ〳〵と諸人に生顔が合はされん。地傍輩の情に死んだ後と御披露あれ。最期のお暇申し請くる小萬が事はその代りに。頼み存ずる左内殿と云ひもあへぬに是々〳〵この小萬に殘れとはお内儀樣の思召し。地わたしばかりに恥曝せか一人歎けか物思へか。口で云へば人そばへ先立つて埓明けうと。取付く脇差押止めさうぢや〳〵。恩も禮儀も忠孝も死ぬる身には糸瓜の皮。こゝへ寄れ南無阿彌陀と。刺違へんとする所を左内飛入り脇差もぎ。二人を兩へ踏倒しはつたと睨んで齒嚙みをなし。詞ヤイ道知らずの人外め。さすが以前は御家中の物頭采配まで御許され。二つ道具をつかせし身が。心まで上々の馬方になつたよな。諸傍輩多けれども親左近右衛門が烏帽子子。與作といふ名を付けたれば。この左内とおのれと兄弟分が口惜しい。死なう〳〵とやかましい死ぬるが左程珍らしいか。弓馬の家の死といふは。城攻の一番乘野合せ軍の一番鎗。よき敵の首取つて討死するを侍の。死に惡い死とはいふぞ覺えて置け。地鬪の小萬と心中の討死を手柄とは。一切經にも無いこと僅かの恥を思はんより。主君の恩を報ぜぬは侍たる身の大恥と。知らざるかさてあさましや後指をさゝれうが。犬畜生といはれうが我が身の恥を振り捨てて。厚恩の主君に忠節を勵むこそ恥を知つたる侍大丈夫の武士の。生粹といふものぞこの道理合點なく。死んで勝手がよいならば左内は留めぬ心任せ。詞さりながら侍ならぬ馬方を刃で死なすは勿體ない。地舌を喰ふか身を投げるか似合うた樣に在鄕馬の。口取繩で首縊れ情に見物して遣らう。エヽ侍でもない者に。心を盡して氣が盡きたと フシ大欠伸して居たりけり。地與作わつと泣き出し誤つたり左内殿。この仕合せの上なれば心も闇と罷りなる。萬事貴殿に任せて置くと スヱテ手を合すれば膝立て直し。詞合點いつたか過分々々それでこそ與作なれ。御前は拙者が受取つたと大音上げて。與作は御意を重んじ生害思ひ止まる由。御披露あれ女中衆と 地呼ばはれば御乘物。ざんざめかいて舁寄するお乳人も與之助も。流石武士の子武士の妻御前なれば手を突いて。四人目と目を見合せ何事も姫君樣。御慈悲ゆゑとばかりにて フシ嬉し涙にむせびける。姫君輿の内ながら與作丹波の伊達男と。歌にうたふはあの人か。鬪の小萬も雙紙にある繪で見たよりは好い女房。聞けば踊が上手ぢやげな明日は一日逗留せう。踊をどつて見せてたも。家老どもに云付けて知行をたんと遣らせうと。生れ付いたる御詞その一言に千石千兩。千貫松の千代に八千代によろづ與作が諸果報。小萬が戀も通り町仕合せ好しで今はお江戸の刀差ぢや。しやんと一筆ふみ馬御免踊り子寄する笛皷。馬も太皷もうつくしき。踊り浴衣

の上から下まで色めき悦び三重へ賑へり。

與作踊

クドキゐい／＼／＼紺屋の徳兵衞。房に元よりこひ染めこみの內の身代灰汁でも剝げず。口入頼みて銀四百目を。假に雇うて女房と名付けあはう三太をらむうげん太で。やまけふづくる內儀の心。男いとしゝ子も又可愛い。吝い隱居の手前をつつみ。宵寢する子を我が夫ぞと。フシいひまけ濟ます鬢かづら。徳兵衞不義ぢやと逸まるきほひ。顔は澁面ぐめんもいらず。詞羽織ひらりとやつ。やつ。この／＼この／＼我が子のこの／＼胸ぐら取つて。引きずり出だす。ナホス宵より積もるうき涙。理づめ義理づめ情づめ。如才內儀の貞女にめでて。クドキ金も投げ出しふさとの中を明日は神明今宵の月ぞ。思ひ切つたと誓言すれど。今宵ちぎりの戀風は引。生姜酒でも。フシふせがれず引氣もふは／＼の玉子酒。詞まゝよ往つてのきよ。さうもなるまいか。どうせうかうせうが酒。辻にしよづつくばうて。思案なかばし戀しさまさる。胸かきまはす玉子酒。心二つに打ちわつて君が方へと走りゆく。跡は內儀がナ一人寢てさ。ヲドリふさは日暮れて人待つ隙の。火廻しすれば。飛脚がせがむ。肥後屋の迎ひはや疾く徳兵衞。兄の病氣を見舞顔で。來ても互の心の底はいふに云はれぬ鴛鴦の立たんとすれば。病者の癖の長話。なんとせんきのあら腹痛や。痛や／＼と空腹病めど。空寒き夜に。是非に泊れとゆふ霜の奥の炬燵にふとんと轉けて。泣いて忍ぶは隣の二階。そろり。／＼。そろ／＼／＼／＼差足は。誰ぢや房か地徳樣かいの。是は夢かと抱き付き縋り憂を喟き辛さを口說き。死なでかなはぬヲドリ身の差詰と成り行く果て。哀れなり。引房を背中に大屋根傳ひ。足もよろ／＼。夜は何時ぞ。七つ八つの芝居の仕組。浮名ばかりは殘れども。タヽキ殘らぬ物は命ぞと。いとゞ涙のたる屋町。おりてふたゝびこの娑婆へ。いつか高津のフシ日進樣で。南無妙法蓮華經。南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經蓮華一つと脇差を。胸に押し當て只一刀。あつと叫びし一聲に。づんぶり染めの紺屋の徳兵衞。お房が頓生菩提の回向。水を手向けてふたたび盆を。重井筒と名の立つにさ。千歳樂萬歲樂踊り悅ぶ御代ぞ。樂しき。

右此本者爲懇望文句
音節等悉校合加秘密
令開版者也
竹本筑後掾
大阪天神橋筋泉町
正本屋七兵衞板

淀鯉出世瀧德

近松門左衛門作

詞 廓住居は。時雨の雨よ。降つつふられつ。むら〱さめの。まだひぬ露もまだひぬやよや。アヽ霧は不斷の。伽羅を炷き。晝にもまさる燈火は。月常住の フシ 夜見世かや。朱雀三谷もいかなこと。直下にみつの難波の里 オクリ 戀も。所の氣につれて萬手びろき大廓。色に擲つ金銀は。土か砂場の西口や思ひ綻ぶ袖口を。九軒阿波座の野良烏月夜はなほか闇の夜も。瓢簞町を腰づけに威權ふる手の印籠の。底に炷きがら吸ひがらの煙に油煙棚引きて。 霞が關か東口こそ浮世の伊達の大木戸。明けぬは銀の富樫の關。それつら〱惟れば。大盡客衆の秋の月は。小判の雲に光り。小傳呼びましや長返事。驚かすべき フシ 夜半もなし。地 三番太鼓つてんてん。天下は夜中八つ過。廓は戀の晝中や フシ 駕籠やろばかりぞ寢聲なり。地 頃しも初冬亥猪餅小豆織のべんがら縞。羽織の上に手拭帶頭巾鼻まで顏隱し。女郎買ふべき風にもあらず宛然用なき體にもあらず。どちらへどうとも片付けて思案に落ちぬ風俗。新町橋の上橋辨慶が薙刀の。鞘拾うたる如くにてうろ〱として立つたりしが。ちよこ〱と立寄つて。詞 これ駕籠の衆卒爾ながら物問ひませう。今宵九軒の井筒屋の。客はどこ衆の何とした人。まだこゝに遊んでかどうで御座ると尋ねける。アヽされば井筒屋のお客は。隱れもない八幡の住人江戸屋の勝二郎殿。替名は鯉樣十萬兩使うても。此方人が百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども。地 新七とやらいふ手代頑固に政道し。一門衆町所迄頼んで。藏々に封をつけ一歩の銀も使はせなんだけなを。總兵衛といふ相手代若い旦那の氣を詰めさせ。煩はせてはならぬと新七を追出し。氣儘にぐわんぐわと使はせる。鯉が鰭を飛んで出て日頃馴染の茨木屋の。吾妻をとんと請出し。明日は直に八幡へ。今宵廓の名殘ぢやと井筒屋で大振舞。なんぢやは知らず井筒屋の庭から門迄長持で通られぬ。今夜の物入りざつと積つて二百兩。詞 扨も金は片行きな有る所には有るものか。私等は夜晝足掻いて三百は儲け兼ねるに。よう飲んだとて一歩取り。よう笑うたとて二歩取り。兩肌脫いで擽られ鼻の孔へ胡椒入れて。嚔しても一角。地 いかな鯉でも鮒でも フシ 一藏あかうと語りける。地 新七扨はと恨めしく。腹の立つにも主思ひ 詞 ムムそれは聞及うだ分限者ずんど若い人ぢやけな。仰山な酒飲みと聞いたが。今宵も酒であらうの。アヽア、並びもない飲抜け。親茂庵といふたも命を酒に代へられた。鯉

殿の母御前ももと此處に勤めた人。地どちらへ似ても蛇の子孫。それでもよい衆のしるしには萬事に達した器用人。能の脇師を手活にして九軒で主の座敷能。常住酒で足ひよろつき三番叟も高砂も。皆猩々の亂かと思ひますとぞ笑ひける。地女房お半も手分をして。見外すまいの目もきよろ〳〵立賣堀邊さまよひ來て。夫を小蔭へ咳拂ひ招き寄すれば新七合點。そつと寄れば耳を寄せ。詞なう今迄西口につけて居ましたが。こゝへはまだ見えぬかと囁けば。ムヽよい〳〵樣子は知れたぞ。まだ井筒屋に居らるゝげな。地程はあるまい抜かりやんな人が見れば不審が立つと。一つ所に立ちもせず橋を越えたり渡つたり。忍び佇む女夫の姿夜見世戻りが氣をつけて。詞ヤアこつてりと味な事地妓女狂ひよりあの方の實入がよからうといふもあり。時分がら心中の下地か又義太夫が口の端に。新町橋を鵲の。橋と語りて行く人もオクリ絶えて〽其の夜も

フシ更けにけり。地なうあれを見や中から提燈引舟交くら。禿が謠うて客送るそりや是に極つた。其方は駕籠に取付きやこつちへ任せて置かしやんせと。大門際に待ちかくれば。詞遣手の綱ぢやや。羅生門開けてたもといふ地茨木屋の大盡。鯉にはあらで雜魚場の人。鈴木樣明日駕籠の衆頼む合點と。北へ走れば新七夫婦。南無三枚肩見送りてフシ口を。開いてぞ呆れたり。地それ〳〵そこへ又提燈。今度はよもやはまるまいと潜くゞるを手ぐすね引き。女房しかと引つ捕へ見れば色は眞黒に。横肥つたるみつちや面。道頓堀の佐渡島傳八はつと白けて立退けば。傳八も肝潰し是は君何したまふ。詞人違へとは存ずれども色に袖を引かれて。神ぞ忝う思ほゆるホヽ〳〵〳〵。賤も昔は戀を研き年中廓に入りびたり。太夫天神に引きずり引張られ。それで顏が引きつつた西瓜のやうな顏なれど色は黒ざね。地ずんど風味のよい男。しんぞ一切振舞ひ度い。

ホヽ〳〵〳〵オクリ笑ひて〽南へ歸りけりフシ暫くあつて。地井筒屋の能がすんだと出入の者。兵法遣ひ座頭茶の湯者古道具屋。大酒食悦おかげを蒙る八十末社。流石の廓駕籠されて雪踏片足の醉ひつぶれ。遙の跡よりのさ〳〵と彼奴は手代の總兵衛め。同道は侫人組能の師匠の富川め。京の浪人軍四郎。醫者はすれども本道守らぬ目醫師なんど。中にも總兵衛嵩取つて。詞なんと何れも旦那のはゞを御覽じたか。あれ皆我等がさする事。兎角此の總兵衛と肌を合せ。羽交について廻らつしやれ。地一期の身代固めてやらう。はて旦那の身上で一年に。千兩二千兩は筒落でもある事旦那を名代に立てばどう瞞めうとも自由な事。かの新七のいきずりめお爲顏で旦那をひづめ。家久しい我等を押退け。一人威勢を振はうとしをつたを。詞旦那へ吹き込みまくし出して退けたが。聞けば大阪にうろたへて。此の總兵衛と公事の宮のとぬかすげな。地あは

れ出所へ出やれかし五畿内を堀いて見しよ。今の間に御器さけて心からの非人敵討。どこそ其處らの橋の下新七は居やらぬかと。口合惡口偕上はり フシどつと笑うて通りけり。地新七どうも怺へられず胸を撫り鎮めて見ても律義一遍に眞直に一筋な若い者。末の事も思はれず斬つてくれうと飛んで出る女房抱き付き。詞これこゝな人。女夫の者が世話やくは勝二郎様へ御意見申す爲ではないか。あいつ一人斬つたとてお主の爲には何がなる。新七が言譯なく身のあつさに斬つたと皆手前の蹟みかぶり。地無念を怺へてお爲になり親旦那様の御恩を。送る心は無いかいの其の様に短氣では。私や心許ないと恥しめ留むれば新七。詞それも皆合點理が非になるとは知つたれども。今の惡口聞かぬか。地彼奴が此の前親旦那の惡性銀を。十四貫目横取して曲事に逢ふ筈を。とやかく俺が精力で沙汰なしに事すんだ。其の時には命の親と手を合せて拜んだ。それから十年經たぬ間に少しも爲になりさうな。古い手代を猜み出し。恐らく濟しい此の新七に無い難つけて暇出させ。旦那の身代空にして今の様な雜言。のし上つた面見れば火に入る事も思はれぬとスヱテ涙を流すぞ道理なる。地時に揚屋の上する女子下男、門番起いてちと門を頼みます。詞是はこつちの大事のお客。浮世小路迄お歸りぢや。きつう醉うて御座んす故。斷いうて内からお駕籠に召させます。地氣を通して下んせといふより早く門番。皆迄いうな合點ぢやと。潜開いて目を眠るも フシ日頃の金の威光ぞかし。地夫婦すはやと橋詰にて。駕籠の跡先しつかと捉へ。お駕籠待つて下されと引留むれば駕籠の者。詞ヤアこりや狼藉して。息杖の背打を喰ふかと。地振上ぐる。狼藉は致さぬぞ旦那のお爲に致すこと。撲たばぶて毆かば毆け旦那へ一言申さぬうちは。駕籠をやらぬいや放せ。いややらぬと揆ぢ合ふ勢ひ。駕籠を横に打明けて鼾ながらの勝二郎。橋板をころ〳〵〳〵河へ落ちんとする所を。お半ちやつと引起し後を抱へて膝の上。一昨日からの醉醒めず女郎の小袖を打掛けながら。詞舌も廻らぬ夢半分。太夫こゝまで送つてか。エヽ忝なんきんの八幡酒には醉はぬ。今のは兼平の能の手。木曾殿が泥田へ踏込まれた所。ウタヒ〽末しら雪の薄氷。深田に馬を駈落し。引けども上らず打てども行かぬ望月の。駒の頭も見えばこそここは何とならん身の果。いや 引はあ引。詞なんと地面白い事かと フシひよろ〳〵正體なかりけり。詞申し旦那様これはどうしたお身持ぞ。お前のお蔭で榮耀する今夜の人も大勢あるに。お駕籠に一人附く者ない。これが江戸屋の勝二郎様のお行儀とはいはれまい。私が男の新七にお暇を下され。地お出入さへ止められたれど。眞實お爲になる者はお家で新七ばつかり。御身上の妨をなす總兵衛めと新七と。思ひかへて下さんすは。お馴染とも思はれぬ。詞其

の上忘れはなされまい。前方私も御奉公致したうち。お寝間へ來いのお側に寢よのと人頼み迄遊ばした。地私は一つも年かさなり若いお主を唆かす。熊手よ慾よと言はるるも口惜しゝ。詞奥様お呼びなさるゝ時のもじやくじやも如何と。お暇を乞ひましたれば志を感じた。さりとは女子に奇特者あの新七といふ者は。親茂庵不便をかけ我が子の如くせられて。兄同然の新七と夫婦にして。一生見捨てぬお約束地其の新七を追出し。敵のやうになさるゝは其の時から私を。憎さに夫婦に遊ばしたか憎まるゝ覺はなけれども。お心に從はぬ恨を杵で當り杓子であたる御仕方か。但しは今にお心殘り悋氣ゆゑの憎しみか。それならば猶きたない氣。何が惡うて新七が御意見は御意に入らぬぞ。頼もしうないお主樣やとフシ涙を。零さぬばかりなり。地げに酒の醉本性忘れずお半を突退け。詞因縁話おきをらう。新七めが意見聞き度うない。俺が親父はな。一年に八

千兩九千兩づつ。三十年使はれたれども遂に浮名は立たなんだ。此方が身代で五百兩や千兩使うたらなんぢや。ナア慮外ながら。それを新七めが。使ひ潰すの身持が惡いのと。一門一家町年寄庄屋迄ふれ歩いて。藏々に封をつけさせて阿呆者にしてくれた。忝い事の何ぢやそちに心が殘つて悋氣ぢやあ。おけよ。尤初めには惚れて居た。けれども今新七めがたべよごして。裏まで反して喰ひさがいた物を此の方所望にごあらぬ。アヽ慮外ながら。新七めが口ゆゑに揚屋の居も無沙汰になり。若い者の一分を棄てうとした此の恨みは盡きせぬ。勘當の上の勘當ぢや。サア地駕籠やれと乘らんとするを新七飛び出で縋り付き。お情ない旦那殿。何とて左樣に横しまにお聞きなさるゝぞ。新七が御一分を棄てたとは怨めしい。千兩棄てまい爲の御意見金の事は申さぬ。千兩が萬兩でも金ほどづつの御身につくスエテお慰みがあるにこそ。地總兵衛めが計らひに

て奸曲どもを帳間に附け。十兩の物いもを百兩に附け立て。九十兩は分け取りにして白痴にして笑ひまするが。此方は御存じござらぬか。詞吾妻殿の身請の金も。私お家にある時分七百兩と申す金總兵衛に渡した。其の上に此の度名物のお家の道具。質に置き。二千兩餘の御借金が出來たげな。京三界地旦那には借金させ手代の總兵衛屋敷を求め。お出入の醫者浪人田地買うたり銀貸して。分限になるが御存じないな。御懇の醫者はあれど善惡を嗅ぐ鼻がきかぬ鼻缺け醫者が。入れ殘しの目藥でもお目が明かぬか情なや。此の新七めが親は大和の貧乏人。詞幼少の時藤田小平次と申した。狂言役者へ奉公やら養子やらに參つて。女形を致したを親旦那のお蔭で。お家へ參り手代並になされしが。地流石育ちが恥かしい算用算勘存ぜねば。何を奉公御恩を送らうフシやうはない。律義を我が身の奉公にしてお爲にならうと存ずる一念。五臟六腑に浸み込ん

でお主を大事に存じまする。詞 茂庵樣の御臨終勝が事を頼むぞ。お氣遣なされなと。請合うたかひもなく。斯樣にお身を持ち崩させ。佛へ言譯何とせう。お墓所へ參つても顏ふりて戒名を。ろくに拜みも致されず。涙に沈み居まするわいのそれさへあるに此の盆から。お前からの言ひ付けか總兵衞めが私が。若旦那の勘當の者お旦那の墓へは參らすなと。お寺へきつと言ひ付け。地 挿いた花も取棄て手向の水迄打明けて。未來にましますお旦那にさへ疎ませうといふ事か。お爲を思ふ新七が左程お氣に入らぬは。水と火との相性か餘りといへば曲がない。さうではない若旦那とスエテ主の意見に恨み泣き。詞を過し推參いふ フシ涙は。主の藥ぞや。地 勝二郎大酒の上なほ〳〵氣にやさはりけん。詞 ヤア意見いふも所がある。途中に駕籠より引きずり下し。恥かゝせて意見せよと親ぢや人の遺言か。地 サア此のれ申し勝二郎樣密に御意見申さうも。門詰も踏まれず取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候し六尺どもが手にかゝり。撲ち殺されうば殺されう。主從の冥加は忘れまいと。朔日と廿八日には御門に禮して罷歸り。さもなき時にも月の中に二度三度臺所の口迄參り。つてさへあらば內證から申し上げんと存ずれども。さりとは人はつれない者古への傍輩も見ぬ顏し。目をかけて引廻した丁稚小者飯炊迄。言葉をかける奴等もなく馴染とてかはいや。白犬が見知つて尾を振つてしなだれる。犬に劣つた畜生ども恨むまいとは存ずれども。凡夫心のあさましさ無念でならぬ女房ども。エヽ口惜しい新七殿但し我々僻事ならば。親旦那の魂魄冥土から蹴殺いて下されかしと。夫婦は橋に平伏して フシ聲をばかりに歎きしは不便。なりける心なり。地 醉ひ醒めの氣は上るぐつとせいて勝二郎。ヲヽ親父迄もない事身せ。胴骨を散々に踏付くる。女房是はお情なしと取付けば其の儘置け。詞 手向ひすなお腹の癒る程踏ませませ。ヲ、踏まいで置かうか重ねて斯樣な慮外をせば。下々に撲ち殺さする用心せよ。地 駕籠もて來いと打乘るも腹立ち紛れ譯もなく。後向くやら前向くやら縱に乘るやら横堀を。急げ〳〵と走らせし フシ若氣の程ぞ笑止なる。地 新七は齒嚙をなしエヽ〳〵口惜しい無念な。天逆樣の事にても主に踏まれて恨はない。傍輩の言ひなし故踏まれたと思へば腸が燃え返ると。橋板叩き欄干もスエテ握り。拉ぐばかりにて フシ涙に。眼も眩みしが。よい〳〵合點ぢや思案ありと。駈け出づるを女房縋つて。思案とはどうぞいの。短氣を出さずと待たしやんせと引留むればしやまだるい。最前に總兵衞め斬り損うたも女房故。短氣も短慮もいる事か思案は此の胸にある。サア其の思案が聞き度いいや是ばかりはま

くらはするが放さぬかと。男思ひの女房と主思ひの男と。誠あまりて摑み合ひ女夫諍犬くはぬ。夫の悋氣に威されて。辻の番太が夢くらふ博勞町なぞ 三重〽 歸りける フシ 請出すといふ。其の日より。地 衣裳をも皆町風に。縫針の茨木屋より嫁入とて。聟は八幡の石清水浴せませんと井筒屋の。亭主は送る傍輩の太夫天神。餞を。持たせ遣手の杉重に樽の銘酒を守口や。佐太の煮賣を見る事も廓でならぬたの點野に。紅葉焚け〱鍋が茶屋牧方楠葉これも亦。吾妻請出す山崎見ゆる フシ そつこで乘物立てにけり。地 吾妻乘物の簾をあげ 詞 これ太郎樣。最早八幡も近いげな。地 豫て鯉樣道迄迎ひに出やしやんす筈。そこをこちから先越してによつと押しかけてはどうござんしよ。詞 八幡太夫樣是はずんど洒落ませう。地 そんならとんと菅笠で供やら主やらごちやごちやは面白輕々飛び下りて。アヽ氣が晴れたわつさりと嬉しや傍で山見たも。勤の皮切り

堪へた故。うき潮うんだは身の灸十四の冬より今年迄。それに染みたる風俗はいかな家にも走り出て。お山見じと目をつける上から下る魚荷の戻り。歩き〱の高話。詞 扨々浮世は知れぬもの。江戸屋勝二郎というては石火矢でも崩れまい。長者の家と言うたれども咸陽宮も滅び時。地 一時の間にいとしぼやあれもいはば金ゆゑ。生中持たぬ我等しき寢覺が樂ぢやといふ跡から。詞 科は何ぢや知れぬが勝二郎は追放で。八幡は煮える俺や見て來た。百兩や五十兩はあれでも取つて退かうか。なんのいの編笠さへ被せぬもの。地 請出された吾妻とやらはどうなる事ぞあつたらもの。安分でこつちへ貰ひ度い。何のかのと惡い沙汰 フシ 口々言つて通りけり。地 吾妻ふつと耳に立ち太郎樣今のはどうぞいのいやな沙汰で御座んすと氣遣がれば供の下女駕籠の者迄色違へ。辨當持もくひさげぢやう咽喉につまりし餡餅の フシ 案に相違の顏つきなり。地 井筒屋も

氣にかゝれど。氣落させじとこれ〱梓のやうにもない。詞 あれは人の法界悋氣太夫樣を見知つて。氣遣かけて面白がる猜みで皆いふ事。起緣直しに酒にせう毛氈敷けと勇んで見ても。どこやら狹間が明樽の底の心は澄まざりけり。あれ〱あそこへ泣き〱走つて來る人は。勝二郎樣のお草履取佐五介ではないかいのと。いふ所へ佐五介息もきれ〱なう太夫樣。詞 ひよんな事が出來ました 地 私や何と致しませうと スヱテ 泣いて言葉もなかりけり。地 扨こそ噂に違ひはないちやつと樣子を話してたも。泣いて居てすむ事かきつと性根を付きやいのと。叱られて涙をとめ。詞 事の起りは皆總兵衛め。旦那をいとしい〱とぬかいたは己れが慾。お金には御一門の封がついて自由にならず。地 結構な茶入れ掛地お家の寶黃金の鷄迄。京で質に置くとて。詞 何とやら申す位高いお公卿樣の姬君を。勝二郎が嫁に呼ぶ其の物入との言ひ立て。其の公卿樣

のお袖判を贋判し。地金の取手はよみ人知らず大内方より御穿鑿。科人は總兵衛一味の同類。十人餘り。粟田口にて獄門にかゝる筈。手代の業とは言ひながら名ざす所は勝二郎。存ぜぬとは言譯立たず金銀財寶山田畠。京大阪方々の家屋敷迄取上げられ。着の儘での御追放どこを前途に御座らうぞ。腹の内から今日迄荒い風にも當らぬお身。嘸や途方があるまいと思へばいとしう存じますと。語れば一度に手をうつてスヱテ呆れ。果てたる其の中に。吾妻一人の物思ひ。とかく私が不仕合とフシ餘の事。いはず泣き居たり。地井筒屋も溜息つき。詞お笑止とも氣の毒ともいうたばかりで爲う樣なし。太夫樣は先づお歸りなされませ。殘金二百兩八幡の馬下りに請取る筈。總兵衛とつうくつ致し茨木屋をば私請合ひ。手形の上で今日お供仕り。斯樣の御難儀出來の所うか〳〵八幡へ參つても。地二百兩の金子誰から請取り申さんやら。お笑止ながら太夫樣を茨木屋へ渡しませねば。我等が手形消えませず世間にばつと知らぬ内。早うお歸りなさるれば私が爲と申し。太夫樣もお首尾よしサアお歸りといひければ。吾妻わつと泣出しスヱテ顏をも上げず居たりしが。地無下ない言ひ分して下んす歸れなら歸れですむ。詞歸れば吾妻が首尾よいとはさうした吾妻ぢやないわいな。可愛い男の流浪したのを聞きながら。身の首尾を思ふやうな傾城ぢやと思うて下んすは。地曲が無い情ない亡八の譯が立たぬとて。再び廓へ立歸り身の恥は扨置いて。勝二郎樣の恥辱はこれが何と雪がれう。こなさんの請合は私が命ある限り。微塵も難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町でもあらばこそ。京の島原奈良伏見茶屋風呂屋へも身を賣つて。見事に譯は立てませう。世に落ちようがどうせうが勝二郎樣の女房に。なる程の吾妻ぢや自面づくに賴むからは。雫も是に僞りない再び新町の勤を遁れ。勝二郎樣の一分立てて下さんせ。これ手を合せて賴みまする。ほんに〳〵此のよな事降り湧かうとは夢にも知らず。地伊勢兩宮へ太々神樂。愛宕清水住吉樣へ金燈籠。八幡樣へ萬燈其の外神々宮々へ。鳥居立てのなんのとて金の入る事厭はずに。神佛への約束も。今では違へる身となり果て。人間どしの遠契約は騙りの樣にも思はんしよ。それが悲しうござんすとスヱテ歎きわびたる。口說き事フシ眞實。見えて哀れなり。地揚屋も流石只者ならずよい〳〵二言と御意なされな。義理づめになつて來た茨木屋の手前は此の太郎が請取つた。手形一枚なされいでも今の淚を手形にして。お前をこゝで手放します。お身をどこぞへ片付けて二百兩お立てなされませ。契約お違へなされても此の方からは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ是から互の心底づくと。切れ離れたる詞の末それは定か有難い。胸がちつとは開けたと伏しフシ拜みてぞ泣き居たる。時に向の堤の上大勢人

の喚く音。追放人の作法とて八幡公文所の役人數多。手ンでに割竹大地を叩き。勝二郎を先に立て兩手を引張り。聲をかけて追拂ふはいまく〳〵しくも 三重 すさまじし フシ 憂き事知らぬ。地 若子樣の氣を奪はれ性根を取られ。起きつ轉んづ足立たず橋本の宿外れ。三國境の フシ 板橋にこそ着きにけれ。荒けなき聲々にてサア此所よりおつ放す。京大阪淀伏見堺を添へて住居は叶はず。詞 背くに於ては見合ひ次第討棄て。何方へも失せ居れと 地 口々罵り歸りしは。硫黄が嶋に捨てられし フシ 俊寛僧都もかくやらん。地 往き來の人も目をあいて泣かずに通る人もなし。役人歸れば馳付けてこれ私ぢや吾妻ぢや。不慮な難儀が出來ましたさりながら大事ない。命が實袖乞非人の身となつても。二人一所に居る上は滿足ではあるまいか。亡八への出入もこゝなお人の男氣故。御苦勞かけずに埒明く筈樣子は靜に物語る。悲む事もなんにもない結句で浮世が面白いと。笑うて見せて力を付け涙を隱せば顏を上げ。詞 詳しい樣子は聞かねども。太夫が殘金埒明くとは井筒屋殿の親切。生中禮は申さぬ。エヽ面目ない此の勝二郎は。下人の罸が當つた。地 大賢人の新七が。意見を用ひず フシ 勘當し。身の仇となる總兵衞めにばかされ新町橋で新七を足にかけて踏んだる罸。忽ち當つて此の仕合。身の先行のする事は今生で思ひ切つたぞ。先の事は知らねども先づは此の世の暇乞と思うて損のいかぬ事。何れもさらばと立出づる井筒屋袖を引留めて 詞 何方へお出でなさるゝにも當分の御入用。地 路銀の餘り少分ながら御懷中と差出す。手を付けちよつと頂いて志は千萬兩 金子は申し受けまい親祖父の貯を 冥加も知らず使ひ捨て金の罰が當つて。金銀に疎まれ手ぶりになつたる我なれば。此の度きつと身を懲し一錢得難しといふ事を。我が魂に思ひ知らせん貧苦の修行の稽古の爲。金銀とては貰ふまじさりながら。詞 服部煙草煙草入煙管の餘計あるならば。一本所望申し度し。地 アヽお易い事〳〵煙管のらうは細くとも。お心を太うして心中など遊ばすな。詞 いやるがくどい不足なうて死ぬるこそ。本の誠の心中なれ。金に詰つて心中する勝二郎でない證據。藥も少々貰ひ度い。地 げに是は御尤懷中至寶の一包。藥屋は命堅い石見の掾と祝ひければ。遣手の杉が太夫樣へ花色繻子の前巾着、人蔘入れてお[illegible] 仲居の初は延二折。ちよつと假寢もあるものと フシ 味な所へ氣をつくる。地 駕籠の衆の仲間から。三尺手拭抱帯とて進上す。詞 是は彼の五尺いよこの手拭と唄にうたひし手拭か。地 是は又加賀菅笠締緒あらくと召しませとよ。實にも誠の志さこまが土產の菅笠と。踊になどりし笠よなう。それは東の花嫁御。是は吾妻が身請の果 フシ 腰をよおらす供もなき。紋日の夜床。引換へて矛もつかぬ草薄園、夜見世の太鼓音絶えて山崎寺の鐘の聲はやこう〳〵とナホ

ス響けども我が迎にはいつ來うぞ。お二人まめで仲ようて隨分無事で御座船で。迎に參る男山八幡の弓の弦切れず。便を待つぞ待たるぞさらば。／＼と泣く聲ばかり。耳に殘りて面影は雲に消えけり。

勝二郎　初木綿

歌 春の夜の夢。驚かす。鷄の。其のしだりをの結ぼほれ。解くる思ひはいつかはと。いはで心にかこ。ちぐさ。根引にせんと言ひ交す。身は捨草の捨てもせで。浮名は流れの淀川や。何をたよりに水鳥の。波にゆらるゝ世の習ひ。疎きは人の フシ情なり。地 廣き世界は廣けれど。京や難波の住居さへ。塞きとめられし水車月の影さへくる／＼と。彼方此方に汲み分けられて オクリ行けば。丹波路戻れば大和 フシオクリ行くも／＼戻るも。二人づれ フシ女夫鳥の。とぼ／＼と。昨日の闇の花紅葉今朝降る霜に朽ちそめて。身を木枯の森の下道。憂きしほ踏むろあだうきなき別れての。故郷の草も木も。[illegible]

の名殘を止め兼ね。待て／＼と鳴く葦原雀フシよしみ／＼の。言の葉に。ばかされ渡る狐川。フシあだに暮せし年月の。榮華は夢の盃の。醉ひざめ枕 歌〽 それは若草身をうらみ草。なんの其方に飽いたではなし飽きも飽かれもせぬ仲の戀と命が。フシ寶寺。昔の里の。寢覺には伽羅で暖む床の内。地 起き別れ行く曉の袖から袖に手を入れて。出口の風も寒からず。今の憂き身の旅寢には。フシじつと寄せたる肌。と肌フシ吹き分けて吹く。山おろし。麓に立てる女郎花格氣辛氣となまめきて。くねる心の男山いとし男を古への。スヱテ世に引返せ弓八幡。神に暇と伏拜み。東を見れば名にも似ず ウタヒ月こそ出づれ朝日山。山吹の瀬に影見えて。歌大黒舞 渡つた／＼光る君の渡つた。夢の浮橋六十帖を渡りつめ十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若生え。二に匂たきしめて浮舟に蜻蛉。紅梅竹川香椎ニ手習。我が名のゆかり[illegible]東屋で[illegible]

まの忍び寢ナホス世も忍ぶ フシ人目も忍ぶ道芝に。駕籠借るすべも白妙の晒布ほすてふ槇の島。はんま千鳥も友を呼ぶ我は伴ふ人とても。泣顔かくせ フシ笠取山。隱すとすれど心なや宇治の川霧。絶え／＼にあらはれ渡る。網代木の フシ川瀬の水に。袖ひぢて。互に影を水鏡。やつれさんしたやつれたぞ 歌〽 はなれ／＼の。あの雲見れば／＼。明日の別れが思はるゝ。つらき我が身はいろはの文字よ／＼。袖に涙のゑひもせず木の葉散りぬる。フシ木幡の里。徒歩でこれ程行く事も。初名月や一口 堤づたひの長暇。續く里々山々も。地 皆近づきの山なれど今日の憂き身は心から。さぞ見ぬ顔と袖掩ひ袂を掩ひ笠掩ひ。空をおほへば冬の日のいとゞ。短く早や暮れて夜は長池の水の泡。水の淀みに我もとて淀み。休らひ明さるゝ。

下之卷

地 奈良坂や木津も遠の札所にて。女郎[illegible]

小藤をこゝの四天王 フシ續く勢こそなかりけれ。地あはれや吾妻は義理合の金の契約默されず。此の里一番名の高き山城屋といふ亡八へ。中年四年二百兩命がらりに身を賣りて。大阪の埒は明いたれど又傾城と奈良晒。縱横沙汰を聞きふれて戀の大和の色好み。吉野の花も振捨つる三輪の素麵喰ひ付きて。買ふ人餘れど賣る日は足らす中にも龍田の藤といふ。しなだれ男纏ひ付き揚屋も諸譯吉田屋の。仁三郎を定宿にて二階を一間あてがはれ。命ありたけ首尾ありたけ金ありたけと勤むれば。四天王の名取をも。今の吾妻が下に見て フシ一人武者とぞ流行ける。地藤も在所に稀男吾妻に深く染めつきの。龍田や沖津白波の幇間も連れず今日も亦。通ひ木辻の吉田屋の。詞仁三内にか。ヤア妓樣達歷々のお寄合。おてき樣の待合ひ我等が座敷へも。ちと貸して下されかしと言へば薫小紫。珍しい藤樣の外の

へふれぬは側から見ても憎うない物なれど。こなさんと吾妻樣とはあんまりで小腹が立つ。辛氣の湧く程羨しい見ぬがましぢや。戀の面々稼ぎしやと フシばら／＼立つてぞ入りにける。地仁三郎忙がしげにしよこ／＼と立出で。詞ヤア藤樣いつから此處に御鎭座。地手でもお叩きなされいで夢にも白髮の母ぢや人。藤樣の御出でぢや吾妻樣の御氣色も。今日はお快さそうな。詞申し。醫者の名も起緣の物。始は西の京の。道偏と申す醫者の藥でどうも變にあつた所を。昨日から三條の元喜と申す醫者でめつきり元氣が見えました。地御祈禱を本服院息災法印を頼みませう。銚子々々と手をたゝくこれは／＼。吾妻が氣色よいとは頭でよい事聞きそめた。詞さり乍らあの病氣は。彼の江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取つたれば氣が變つて達者になる。そこには氣遣ない事。是に付いても一刻も

年の所を元金の二百兩で請出さうといふからは親方も不足ない所。エヽ親子の衆が無精な。餘所へ取られて此の藤が一分立たず死なねばならず。地今日は金をつき付けて是非とも詫びて貰ふ思案。耳を揃へて懷中した是袖口から手を入れて。詞噓か誠かこれ見や。どれ／＼。ホウホウ／＼可愛らしい小判女郎。是はきつい穿鑿。扨油斷とお恨みなさるれど。前髮もある私が親程な山城屋。算用だても申し惡し母妙慶をやりまして。割つつ碎いつ言はせてさらりつと埒を明け。地只今お知らせ申さんと硯引寄せ墨をすり。鹿の卷筆妻ごひ鹿しかは春日の藤樣め。果報者め金持め フシあやかり者めと騷ぎける。地それは大慶先づ吾妻に逢ひ度い呼うでたも何處にぞ。詞いつもの二階にござりますこれ林之介。吾妻樣呼びましや。地吾妻樣太夫樣。林之介と呼ばつても返事もせず。是はどうぢや又例の勝二郎

といふ淀鯉を。思ひ出して泣いてかな。鯉がついてゐるさうな鯉なら煎餅蒔いて見よ。いや手拍子を拍つて見よ。心得たん〳〵たんたんたんと手を拍てば。地心浮かねど身の勤め悲しい顔を見せまいと。わざとにこ〳〵わさわさと二階の口に立つを見て。そりやこそ鯉が現れた盃をさしみにせう。ここへちよくと御入り フシ酒うまい事ぢやと喚きける。吾妻二階に腰かけて。詞これ仁三様。たんと口があかつたの。あんまり鯉々いはんすな。鯉も瀧へ登詰め今ではどうも下りはがない。地總じて鯉といはんすは勝二郎様故かいな。あのさんは八幡の人八幡に鯉はあるまいが。合點がいかぬと言ひければそれならば今日より。牛蒡様と申さうか。妓様に牛蒡はいかゞヤアそれも大事か。加賀の牛蒡といふ事ありそんならいつそう毛牛蒡様。追付け且那の引抜牛蒡目出たい牛蒡と座を持てばエヽ。憎い口や叩き牛蒡にし度いぞと。二階下るゝも勇ましど

オクリうはべ〳〵ばかりの笑ひ顔 フシいうて泣くより。なほつらし。地藤もいよ〳〵機嫌よく今日は嬉しい事揃ひ。詞第一そなたの氣色もよし。仁三親子の働きで身請の埒が明いたぞ。地懐中した金子を里に残いて其方の身と。兩替して一兩日に吉日極め。瀧田へお供仕るサア〳〵二階で酒々。吾妻はこれのお袋へよう禮いうて跡からおじや。仁三こつちへと手を引いて フシ奥の。二階へ上りける。地吾妻ははつと怪轉して夢見たやうな事どもやな。根引にするの請出すのと。スヱテ取りじめもない譬上は。地十人が十人で思はれたさに言ふ事。床で帯さへ解かぬ身によもやと思ひ頼みまするを偽りしを。先は正直悦んではや談合が極つたか。拇も胸をついた事誰にどうと談合せん。勝様からは便宜もなしサア今でも出るといふ時には。泣き口説いても叶ふまい其の際にならぬ先。とんと打明け言うたらば義理づめに詰められて。思ひ切りゐる事もあらと

階子半分上りしが。詞いや〳〵ひよつと言ひ出し先に呑込ない時は。勝二郎様のお爲迄取返しのならぬ事。地アヽ言ふもいやなり言はねば悪し。罪深い事ながら今の間にあのお人の。身に妨も出來よかし此の病が募れかし。今夜のよるが常闇と明けずにあつてくれよかし。身請の時が延し度いと科なき天にも難をつけ。歎き恨むる世の辛さ。我が身ながらもあさましやとスヱテとんと伏して。泣き沈む フシ涙も。階子を傳ひけり。地通ふ心や格子の前耳にこたゆる謠の聲。一度は榮え。一度は衰ふる理の誠なりける世の習ひ。住所求むとて東の方に フシ東の方に。地あづま〳〵と謡ひ忘れた顔付で。我が名を呼ぶは知つた聲と。行燈の陰から表を見れば戀しゆかしの勝二郎。飛び立つやうに懐しさ表には人目あり。それから廻つてかう〳〵と指で敎へて招かれて。小暗をばそつと抜け。つつと通れば縋り付き [illegible]

だとステテしつかと抱きしめ泣き居たり。地よい衆の果の流石にて貧苦を貧苦と思はゞここ。詞此のなりを見てたも。思へば／＼無算用。そなたの身を賣らする程ならば三百兩もしてやつて。賣りへぎの百兩も手に持つたがよい筈。大阪の親方へ二百兩渡さねば。井筒屋の太郎左衛門と約束の義理が外れゝとて。差も引きも無うきつと堅う二百兩に賣らさいでもだんない事。此の鈍さかこのつら。何にも得はなけれども。坂田藤十郎が夕霧をま一度見たいと思うたが。此の紙子で手夕霧を仕る。太夫又逢ひに來たわいの。サアそなたも爰で泣きやといへば。地アゝ泣くぶんは夕霧に負けはせまいと泣きければ。男も心悄々と。詞可愛や。／＼物眞似に フシ眞の涙を紛らかす。地奥二階より手を叩き禿來。詞吾妻樣呼びましや。吾妻樣。地／＼と呼ぶ聲すそれ人が來るアゝ辛氣。どこへがなこれ／＼炬燵へ隱れさんせと。蒲團をあぐれば勝二郎。詞此

夏此處の芝居へ。竹本が弟子が下つて重井筒を語つた。地サア是から夕霧替つて重井筒炬燵の段。詞北濱邊のよい衆は炬燵に水を入れまする。地紙子一枚の我等はとてもの事に。火炙りになり度いと フシ蒲團取つて引つ被る。地仁三郎二階より障子を明けて。詞申し／＼吾妻樣。只今暦を穿鑿すれば明日は天赦鬼宿日。地萬事揃うた大吉日金はお身につけてなり。何に不足ない上は善は急げ明日の朝。目出度う廓を出します筈。其の用意なされませ飮まうぞ／＼大きな物で飮んでくりよと フシ障子引きたて入りにけり。地炬燵よりむく／＼起き今のは何ぞ。廓を出すとは善か惡か氣遣な。聞き度いと氣をせければサアされば。それ故胸を痛める事。先度の文にも言ふ通り龍田の藤が事いの。作病起しつ振つて見つ色々飽かるゝ工面して。退くやうに仕掛けても煩悩の犬かして。地こゝの妙慶挨拶にて請出す談合極ると。聞くから胸が騷ぎ出し今に

心が落付かぬ。どうした事であらうやな。最早智慧にも能はぬと フシ泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣き出し。掙も／＼惡い事も。續けば續くものかな。詞五年以前に在所を出で無量の辛さに逢うたれども。諸めつ慰めつ心で埒を明けたるが。地命かけた其方を人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には。刃鐵砲も敵はぬと。ステテ齒をくひしばり歎きしが。詞とかう言ふ間に夜は更くるもう分別はない所。地其方も死にや俺も死なうと若い同士は氣を嗜み。死を先立てて涙をかくす フシ歎きの色こそ哀れなれ。地吾妻死に身と胴を据ゑこれ申し勝二郎樣。詞死ぬる覺悟に極らば死なすに逼るゝ思案あり。こなさんは先づお歸り內を仕舞うて。夜半過ぎ八つの時分に又ござんせ金調へて置きませう。地其の金持つて丹波へ退き來年私が年前に。迎に來て下さんせ心安うて出らるゝ事。早ういんでござんせと囁けば勝二郎それは至極の才覺。詞

其の金は借るか貰ふか何處から出るはてそれは構はんすな悪いやうにはしませぬ。地早ういんでござんせとせがめば頷き悦んで。是ぞほんの丹波越と。不道化言うて忍び出る。氣の愚かさも育ちからフシ憂き事知らぬ證かや。地吾妻は本の出來心ふつと言うたは言うたれど。これからが大事の思案炬燵の櫓を談合柱。お腹の痞だく／＼とスヱテ胸に躍るを擦りさげ。詞二階の客を刺殺せば明日の難儀を遁るゝ得。金を取れば勝二郎樣のお爲になるが得。地是程よい事あるものか足許によい思案。轉けてあるのが見えなんだ殺して除けうと思ひ立つ。目の前ばかり背中を知らぬフシ女の智惠こそ果敢なけれ。フシ夜は何時ぞ。臺所は。夜中を告ぐる鼾もあり更け行く儘に怖氣立ち。膝の顫ふを踏みしめ／＼。階子の口から覗いて見れば。詞客は醉うて前後も知らず。仁三郎が浮氣酒いき倒れては性根つかず。地サア仕澄いた階子三つ四つ上つて見て。詞ヤアコリヤ何で殺さう刄物が無い。地帶を解いて絞殺さうか。いやゆるりとする間はあるまい煙草でふすべ殺さうか。醉うて先へこちが死なう何としてよからうぞ。鋏でも剃刀でも金物がなと。座敷中を差足しフシうろ／＼うろ／＼尋ね廻り。地ヤ思ひ付いたぞ炬燵の火箸。火に燒いて喉吭を通さば刀も同然と蒲團をあげて手を入れ。熱や／＼と懐の。袱紗に持添へ陸奥の。唐紅の錦木やフシ枝珊瑚樹と燒付けたり。地嬉しや冷めぬ間にと立上らんとする所へ。仁三郎が母妙慶。詞吾妻樣まだ起きてかと。地によろ／＼來れば肝潰し袖の陰に押隠し。詞ハアかみ樣か。私も早や休みまする。冷ぬ間にこな樣も地目のさめぬ間に暖かに。熱うして寢やしやんせとフシ狼狽へ挨拶跡先なり。地妙慶更に氣も付かずお前は果報な妓樣や。詞廓で繁昌しつめて間もなう根引の松さま。千年も萬年も藤樣との御仲さめぬ樣に遊ばせ。地其のいとらしいお氣立ではさめまい／＼明日お目にかゝりませうと。辭儀を述べて立歸ればフシ火箸は氷と成つてげり。エゝ言はれぬ長口上燒直さんと。蒲團あげても炬燵も冷し。エイ詞阿呆らしいなんぼう冷めぬと言やつても。炭火までさめ切つたと。地吹いつ煽いづ氣をせく所に。二階より仁三郎醉ざめの長欠伸。客の脇指持ちながら目をすり／＼階子を下り。ヤア詞吾妻樣こゝにか。扨醉ひましたと下に居る。吾妻脇指に心つき。それは藤樣の腰の物。こなさんも先づ氣の通らぬ。客の刄物預るとは渡りなみの客の事。藤樣とは女夫になり明日請出さるゝ今宵となり。心中はせまいし其の儘置いて行かんせと。地いへどもふら／＼居眠りながら。はて一夜でもお客の中は弓矢の禮儀外されぬと。いふ内に脇差の柄を膝に押へて。いかう更けたに休まんせと。いへども柄には氣もつかず明日御見なりませう。鹽茶を呑んで寢てくれうと脇差の。鐺を持つて立つ程

に柄は殘れど下は見ず。目は空鞘をぶら下げて。フシふら〳〵勝手へ入りにける。地アア〳〵有難い神佛のおてがひかと。頂き〳〵ひつそばめ立つて見ても後より。又誰ぞ來るやうであぶなさ怖さ右左。足も摺らぬ行燈の我が影にびつくりして。わな〳〵慄ふ箱階子ぎしぎしぎし〳〵鳴る音も。耳にこたへ胸に浸み氣を抑へ息を呑み。漸く惱み上りつき溜息吐いたる女業。我が身ながらも興さむる藤が臥したる北枕。いとしや科もない人をと恐ろしながら背中に腹。胸先に打跨ぎ切先差當てどうど乘る。詞乘られてふつと目を醒ます。これ〳〵〳〵聲立てまい。此方に恨も罪もない。假にも惚れてくれた人殺し度うはないわいな。地殺さるゝ此方より殺す我が身が悲しいと。涙は刄に傳ひしがなう生けて置いては請出して。女夫になるが情ない私には大事の男がある。詞其の男と緣切れるが戀路の仇となる故に。地今刺殺す懐の。詞小判も貧な男に遣り度い。地殺生の罪盜みの罪男の爲に作る心。少しは恨を晴れてたもと又はら〳〵と泣きければ。得心やしたりけん敵はじとや思ひけん。目を塞いで返事もせず。サア只今とぐつと刺し。止め迄は手も弱り其の儘捨てて懐の小判を兩の袂に入れ階子下るれば後より。摑み立てたる其の寒さ。寒風肌も縮み胴顫ひ。半死半生の手負伸り反つてうんといふ。聲に驚き階子よりばた〳〵どうど落椽の フシ隅に踞んで顫ひ居る。地手負は惱み苦みて。續いて階子を轉び落ち呻く聲に妙慶親子。家内の男女我も〳〵と駈出で〳〵。詞ハア南無三寶藤樣を斬つたは。地斬手があらうとこゝかしこ尋ね探して椽端に。人こそと引出せば是は。是は詞吾妻殿。地それ取放すな縛れ括れと立騷ぐ。詞如何にも斬るも私が斬り金も私が取つたからは。氣遣しやるな逃げはせぬと。地最も器用な白狀。先づ〳〵龍田の一門衆兄御の方へ。注進をぬかるなとフシ追々人を走らせける。地勝二郎は約束の時分過ぐると紙子に股引。直に丹波の旅出立にて來て聞けば。吾妻が客を斬つたと町のもやつきつつと入つて。詞これ〳〵亭主。身は江戸屋勝二郎といふ吾妻が男。何科なりとも同罪にしてくれと。座敷にどうど坐しければ。地吾妻は泣いて目も明かず無分別な事をして。思ふが仇となりましたとスヱテ顏を下げてぞ居たりける。詞町の役人龍田より走り歸つて。手負の兄御只今是へ御出でと。地いふを見れば古への手代新七。木綿布子も物さびて御免あれと座敷に入り。主從顏を見合せ互にはつと驚く中。勝二郎赤面しスヱテ面目なや恥かしや。そちに顏は合されぬと。兩袖を顏に當て フシうづくま。りてぞ隱れける。地新七恨の兩眼に涙を浮め大聲あけ。詞エゝ聞えませぬ旦那殿。我等に顏を隱さるゝは面目ないか恥しい。コレ其の恥しがりが遲かつた。五年以前に新七を恥しいと思召さば。御身代は潰れませぬ。

まつかうあらうと存じた故樣々の强意見。新町橋でお足にかけられ踏まれながらも御意見は。［地］親旦那の御恩の送りたさ。女房お半はお身の上を苦に致し。氣病を煩ひ去年の春遂に空しうなりました。［詞］彼奴も元は御家來お主を苦にして相果つろは。下人たる者の本望聊か悔みも致さばこそ。［地］親旦那のお蔭で少しの資本家屋敷。在所龍田の親どもも餓ゑ凍えぬ程なれども。［詞］いや／＼お主は流浪の身。家來の安樂道ならずと家屋敷田地迄賣り代なし。有銀十八貫目御覽の通り我が身にはろくな布子も着ぬ體ながら。［地］親旦那の十七年忌は内證でお前から遊ばすと申しなし。恐らく江戸屋の追善と笑はぬ程の法事を致し。御出世の願ひのため京都公家方折々の。附屆油斷もなく。［詞］殘る金二百兩いとしや吾妻殿。新町の殘金ゆゑ此の所に勤めと聞き。［地］御兩人の氣を思ひやり弟の藤五郎が。請出す分で沙汰なしにお二人一所に置きましたらば。貧苦の中のお樂み。［詞］高いも卑いも親たる身の悦びといひ子の悦。お前の御機嫌よい顏を。草葉の蔭の親旦那に。見せましたいフシ心ざし。御奉公の仕納めと存じ立つたる所に。

［詞］藤五郎は吾妻殿の手にかゝつて死んだか。出來いた／＼。此の新七はお主の爲心ざしの奉公はしたれども。一命の奉公は其の方に劣つた。兄に勝つた忠の者。これ／＼御亭主。只今申す通りに虛言はない。兄が言ひ分ないといふ證文を致すからは別條はあるまい。それとても是非所の作法下手人を取るならば。水入らずに此の新七。［地］女房は死ぬる親はなし。一人の弟は相果つる雲りうちを尋ねても。お主より外世の中に大事の人は無きものを。隔てて下さる旦那殿恨めしう思ひますとスヱテどうど伏して。泣きければ。［地］吾妻を始め亭主親子町内近所の者迄も。誠の心を感じつつフシ皆々涙を流しけり。［地］勝二郎飛んで出でアヽ誤つた／＼。斯樣な身と成り果てたもそちを踏んだ下人の罰と。かね／＼悔み歎いた藤五郎を弟と。知らいで吾妻が殺したも我故ぞ。主ゆゑに身上つぶし其の體となつたを見て。此の勝二郎が如何に畜類なればとて。見ても聞いても居られうか。死ぬるにも死なれもせずとても情に其の方が。此の足にかけ以前そちを踏んだやうに。勝二郎を踏んでくれ一つの罪も遁るゝ爲。さりとては新七某を踏んでたもと。足の下に背中を向けフシ手をあは。せて泣きければ。吾妻は縋つて弟御の敵は私。刺殺して下さんせどうも生きては居にくいと。歎き悔む聲々新七は飛びしさり。［詞］アア勿體ない。冥加ない新七を新七と思召すが定ならば。［地］御夫婦心を完うして出世を見せて下されば。踏殺されても大事ないと。三人顏を差寄せてスヱテ聲をばかりに泣き居たり。［地］かかる處に八幡の神主紀の太夫より。御吉左右の早飛脚。いきり切つて案内すそりや吉左右とは悦ばしと。封目切つ狀箱開くも疾し遲しとて拜見す。［詞］なに／＼江戸屋勝二郎事。家來新七數年の歎を感じ思召され。關白左右の大臣御憐みによつて。八幡の本地もとの如く返し與へらる。追付け歸宅あるべきと。［地］讀みも終らず八拜九拜悦び躍り飛上り。跳ね上りたる淀鯉の瀧の壺より湧き出づる。白銀黄金の鷄寶ときは勝関びどき。五畿内五箇國神々に先づ願ほどきに三重へ悦びの［地］幣帛を上げ神樂をあげ。參り納むる八幡山此の難波津の惠方神民安。全こそ目出たけれ。

おなつ清十郎五十年忌歌念佛

近松門左衛門作

上之巻

序詞 通ひ車は小町が仇の情に乗せられ。闇の扇は班女が親骨にせかれ。形見の烏帽子は行平の言ひかぶり。柏木の鞠山路が笛、古今其の品變れども皆これ戀路の寄せ框。根太も根强き門柱。其の但馬屋の初色に立つや浮名の濡草鞋。笠がよく似た菅笠のオロシ〳〵雫つもりて。戀の淵。地湧きて流るゝ和泉の國。水間の里の左治右衛門畑作りの田島や。鳶が生んだる高給取の手代は主の代をも。清十郎といふ子を持つてフシ老の入り前暮しよき。地正月着物播磨潟延引ながら年頭に。娘はおしゆん嫁の名も二人連の木賃宿。明日は出舟の名殘とて道頓堀の芝居過ぎ。名所々々は大阪の娘子達に交りても。打てず押されず手入らずの、田舎生れのおぼこにも父の乗りたる便船の。しるしは如何に錨綱。たぐり着いたぞ日は傾く。いざ急がんとちよこ〳〵走りとは河。口にぞ着きにける。地親左治右衛門苫打上げて。詞やあこりや〳〵こゝぢや〳〵。はれやれ〳〵大膽な暮れる迄。ふら〳〵と。女の身にて何事ぞ夕も東の横堀で、男と女子と喧嘩して濱納屋の下で。組んづ轉んづして居たを幾はなか見て來た。扱ひになりしやら錢をついたも慥に見た、大阪の喧嘩は大方相場が極つて。地十文では事がすむ喧嘩は降りもの和御寮達。若しもの事があつたりともいかな九文半文でも。堪忍ばし召さるなとフシ眞顏に言ひしも殊勝なり。詞二人の娘打笑ひさればいの、今日も一日芝居見てそれから此處の河口の。八景とやら見物してつひ今になりしとて。地舟に乗れば左治右衛門草履菅笠片付けて。先づ〳〵休めやといふ處へ向の艀の船頭來り。詞和泉の國の左治右衛門殿は此の舟にか。此方の舟の乗手衆がちとお目にかゝり度い。播州姫路但馬屋の勘十郎といへば。合點ぢやけなとぞ申しける。左治右衛門聞きも敢へずチヽ知つた〳〵。但馬屋の勘十郎殿わしが息子の傍輩衆。地參つてお目にかゝりませうと上らんとする所に。是へ見えしと勘十郎なんと〳〵親爺殿。詞扨も年も寄らぬわ不思議な處で逢ひました。先づ以て御無事にて一段清十郎も息災で。商賣の用事にて此の處へ上りしが早や下つたも存ぜず。旦那も折々噂なり何故に見えぬと言ひければ。ゑい勘十郎殿様お久しう御座ります。嫁子供が申すにも親爺ちと旦那様へ行かつしやれ。何かの御禮も申さつしやれと申しまする。チヽ〳〵は申しながら正眞の貧乏隙なし。物作の事なれ

ば、や大根時の綿時の。瓜を蒔くは茄子を作るは牛蒡畑豆畑。粟よ黍よ藍時よ。麥を蒔くぞ赤らむぞ田を植ゑては草取る。穗が出れば苅りまする籾になれば磨りまする。米になれば炊きまする飯になれば食べまする。地何ぢやし只居る間とてなく フシ御無沙汰とこそ語りけれ。地勸十郎打頷き詞尤何方も暇はなし。して此の舟に乗つて何方への下りぞといへば。先づ旦那へ春の御禮も申し淸十郎にも逢

はんと存じ。是は妹おしゆんあれは行く〳〵清十郎が。留守をもさせんと存じおさんと申し娘分。連れて姫路へ罷下る。とても事に御同道致さんと言ひければイヤコレ逢ひ度いといふは其の事よ先づ下る事は入らぬもの。清十郎が沙汰を聞かぬか扨々氣の毒笑止な事。旦那の娘お夏樣と密通して。お夏樣のお腹は茶壺を抱いた樣になる。それに立野の一門中へ祝言が極つて。嫁入道具も出來揃ひ身ど

もか道具を請取つて。地下り次第の嫁入あの襲の土産物。聟から詮議があるは定否でも庵でも清十郎は。片假名の木の空で此のやうに手を廣げ。引張凧は知れた事親兄弟も同罪なり。どうぞ嫁入の無い先に。身を引く思案がさせたさに。こう知らせまするると威しける。地親は在所の律義者何の巧みのありとも知らず。アヽお前は如來樣内々どうやら承り。氣遣致せし折柄なり傍輩の好みとて御知らせ有難し。年六十に餘つて火屋へ片足踏み込んで。一人の悴が木の空で。引張凧になるのが。そもや見て居られうか悴が命助かるやうに。御思案頼み奉るさりとは誰に似て。下心の惡い悴めとどこで聞いてか言ふ事とスヱテ泣いて口説くぞあはれなる。詞時に船場に案内して。姫路の本町但馬屋の勘十郎樣のお船は是か。難波橋の蒔繪屋讃へのお道具今宵船に積まんと存じ。銀子請取り申さんため參りたりとぞ言入れける。ありて見給聞いていかう。銀も渡せず道具が下る道具が下れば嫁入がある。嫁入があれば清十郎は引張凧。なんとこゝが談合。身は國へ歸つて旦那へは道具屋が出來さぬ分ですまし置く。あの道具屋の手前は親爺から。百五十兩か八貫目渡してさへ置いたれば。波風立たず嫁入が延びる。地延びさへすれば清十郎暇を取らうと走らうと。此の勘十郎請取つた茲は親爺大儀ながら。八貫目何ぞいの田地賣つても子の爲ぢや。出したがよいと言ひも果てぬに左治右衞門ぎよつとして。詞エヽあり樣は一口に八貫目。縱へ清十郎引張凧にならうが乾鮭にならうが世が泥の海になるとても。地一文も金は無いヱヽ此方は皮か身か合點が行かぬと顔しかめ立つて入るを引止め。それは親爺廻り氣な。然らば銀も入らぬ思案がある。あの蒔繪屋に向うて。此の娘には構ひあつて嫁入はさせぬ。道具はそちへ預けた銀渡したら損であらうと。一言いへば濟むぢやがならまいかと言ひければ。ハテ銀さへ入らぬ事ならば。我が子の爲ぢや申さいではと表の間にぞ出でにける。播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を。請取つた蒔繪屋は此方か。身どもは和泉のどん百姓土ほぜりでおぢやれども。但馬屋のお夏にはこつちに先の構ひがある。外の男を持たせぬからは嫁入道具を抑へた。勘十郎殿さつきにから切羽詰金する通り。銀渡したら御損であらう。斷つて置いたぞと苦り切つてぞ申しける。地蒔繪師の手代せゝ笑ひ。詞ハテサテ惡い工面なされやう。これ娘に構ひあるならばそれは先との詰開き。此の方に構はぬ事。どうでも是は廻し者。近頃惡い仕方といへばヤア。何ぢや廻し者。ヲヽ男ぢやもの廻しをせいでよいものか。若い時は小相撲の一番もひねつた俺ぢや。地男に使ふ詞がある廻しかいたがかゝぬか。來い見せうと裾からげフシ胸を叩いて力みける。地蒔繪師も聞かぬ者片肌脱げば二人の娘。船頭船方下り合せ先づ堪忍と取付きける。勘十郎も

分入つて様々宥め押鎮め。詞塗師屋殿も悪い合點道具はそつちの銀はこつちの。銀やらずに此方へ請取らうといふにこそ。其方と我とにあの仁から一筆取つて置くならば。我も旦那の手前が立ち其方も下細工へ手間やらいでも大事なし。身に任せて默つて居やこれ親爺。なんと一筆召されうか。ハテお前の御料簡ならばどうなりとも。それおさんお望み次第に書きやといへば。勘十郎立寄つて。但馬屋のお夏祝言につき構ひ是あるにより。嫁入道具抑へ止め申す所如件。　但馬屋勘十郎殿蒔繪師權之丞殿清十郎親左治右衛門と好む通りに書きければ。親は悦び巾着あけ。墨肉黑々と捺したりし　フシ因果の程ぞ不便なる。地一札巻いて勘十郎懐中にしつかと收め。サア埒は明いた塗師屋萬事は國より一左右せん。先づお歸りと言ひければ塗師屋は船中一禮し　フシ辭儀を述べてぞ歸りける。地なう親爺殿此の勘十郎が好い時に居合せて。此方親子の仕合道具さへ下らねば。祝言は延引其の中には清十郎。暇を取らうが走らうが氣遣な事はなし。勘十郎に任されよ此の船今宵出ると聞く。然らば是にと乗移り方々此の度下つては。清十郎が爲惡しし好い時分に便せん。其の時必す待入るぞや數年馴染の清十郎。惡い樣には致すまじ。いづれもさらばと言ひければ。親子の者は舟より上り手を合せ涙を流して。傍輩の好みとて有難し忝し。生みの親の我等より清十郎めが命の親。嫁も娘もやれ拜め辨へもなき清十郎。弟とも下人とも思召して御意見なされ美しくお暇取り再び在所へ來るやうに。偏に頼み奉ると敵と知らぬ愚かさの。親の情は子の爲に藥といへど是は又。毒を合はする左治右衛門心は律義一杯に。煎じつめたる水間の里舟は。別れて　三重へ　下りけれ。

中之卷

フシ　所さへ。地戀知り顔に姫路とは。いつ名付けしぞ但馬屋のお夏が父は九左衛門。國一番の米問屋有銀箱も十づつに。六十近き月雪や花も紅葉も算盤に。かゝる親には似ぬ娘お夏は深き濡ゆゑに。　詞菩提心と意地張りて嫁入も丈ものび〳〵の。それも戀する氣の前か二人の親の顔迄も。　飾磨の徒歩路播磨潟　フシ國に浮名や立ちぬらん。地今日は蚊帳の祝儀とて萌黄の生絹六。布七布。家の内祝ひ賑へどもお夏は更に氣に染まぬ。心の内の綸子の蚊帳色香を外に漏さじと。アヽ俺や風引いたさうなとて。鼻うちかみて紛らかす　フシ忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰元どもお夏樣と聟樣と。此の蚊帳でしけらしやんしたらばいかな藪蚊も羨かろ。こちは蚊帳は及びもないせめて嫁入の紙帳なりと。肖り度いと口々に申しお夏樣。詞新し蚊帳の御祝儀ちと浮き〳〵となされませ。賑かに酒盛して謡ひませうと言ひければ。アヽ何をざわ〳〵しやるぞい。地蚊帳が出來ようが紙帳が出來ようが此の

氣合で今やなど。嫁入する氣は微塵もないあつたら手間であの蚊帳を。生絹の衣にして着たい只無常氣で可笑しうないと。後を見れば父親は内手代の源十郎に帳を讀ませて算盤のつぶ〳〵いやんな喧しい。先づ來て祝やと赤飯のこはい目付は吾が戀を知つてさうなと百千に。碎き割りたる胸算はフシ如何な算者も及ばじな。地かかる所へ清十郎勘十郎同道してぞ戻りける。詞九左衞門悦びヤアよい所へ戻つたは。今日はお夏が嫁入蚊帳の祝ひ。此の拍子ならば大阪の仕合もよかろと言へば。清十郎庭に立ちながら。旦那の病になされた。中國北國殘らず賣つて爲替手形濟みました。地利合は高で二十四五貫目と目を合する二人が仲。無事な顔見て嬉しいと フシ心に心を言はせたり。地九左衞門上機嫌。お手柄〳〵お夏が嫁入は只出來た。詞扨なんと勘十郎。蒔繪道具も出來つらん。跡から來るかどうぞと言へば。お道具も出來致し代銀殘らず渡し。職人の手前は濟みながら不落居な事にて。道具を留められ下りませぬと。言ひも果てぬに九左衞門立腹し。それはどうぢや餘る程銀は遣る。但馬屋九左衞門の嫁入道具留められう覺はない。總じて此の祝言お夏が氣色に。日限延び。やう〳〵此の度脇まで詰め今日明日となつて。道具が出來ぬなんのとて此の嫁入が延ばされよか。世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せん。地それに浮か〳〵銀渡し素手で戻るといふやうな。子供遣つたも同然と。算盤の割れる程 フシ疊を叩いて叱りける。地勘十郎迷惑さうに御立腹御尤。拙者もぬかりは致しませぬ證文を御目にかけ。密かな所でお物語致し度い事御座るといへば。チヽ言譯あらばサア聞かう源十郎も來て聞け勘十郎。こつちへ來いと。打連れ裏の小座敷へ オクリ 苦い〳〵顔して入りにけり。地清十郎奥を見てハアヽ餘所には嫁入があるさうな。こちや洗足でも致しませう。やあゐいと沓脱に。腰を掛ければお夏つか〳〵走り出で。詞又ねすり言ばつかり。地同じ口で可愛やと言ふ事がならぬか。意地の惡いと抱き付き フシ戀には。涙脆いぞや。詞清十郎 懷手アヽ思へば阿呆な者。身の正直な勝手して人の詞をまん誠に。世間の奉公する者は態々暇を貰うては。春は親に逢ひに行く此の清十郎は親里の近所に。十日廿日逗留しても。親の所に許嫁の女房分がある故に。是に逢ふと思はれては心中が立たぬと思ひ。親へ便りもせずに歸る 地是に懲りよどうさい坊。ほんに孫子に傳へても。主の娘と念頃などするがの富士と一里塚。及ばぬ事をエヽ阿呆なと フシ舌打。してぞかぶり振る。地お夏涙を押拭ひ。其方と我が身は實事にて。口説などする挨拶か此の度の祝言を。好きこのんだる事でもなし知つての通り母様は。室の女郎今の内の母様に。あの弟が出來る迄は我も室で育ちし故。詞母方が惡いの傾城の風

があるのとて。地どこの嫁にも嫌はるゝこれぞ能い事ひと。なほ女郎の風を似せ人は隱せど我は只。母樣は傾城と一季半季の者に迄。觸れ廻りたる村時雨スヱテ緣には附かじと願ひしに。詞あの立野の阿呆めら敷銀に目がくれて。地嫁に取らうといやらしい此のお夏ばつかりは。言うた事を違へるな恨みもつらみも後を見て言うたがよい。詞總じて其方もこんな時、どうなされかうなされの主あしらひが聞えぬ。地私から詞を直しませう。なうこちの人こち向かんせと。袖口から手を入れて。ほと〳〵叩いて抱き締むる。詞清十郎四邊を見廻してしかしお前に聞えぬ事がある。此の袖下は何事ぞ。若衆の前髮女の脇詰男が知らいでたつ物か。出來ぬ仕方と言ひければ。そこらを忘れるお夏でなし。ま一度振袖見せたさに皆々お針が縫うたれど。祝うて我ら縫はんとて片袖ばかり縫ふ顏して。地是が嘘かと帶解いて上着を脱げば右左。振と詰との片ちぐに片枝は蕾片枝は開きそめたる花衣。二人前見る誰も皆フシ斯くぞ仕立てて着せまほし。地清十郎は身を擲ち手を合せ。涙が零れて忝し。それ程に此の男を不便に思召さるゝかや。冥加に盡さん勿體なやと フシ取付き。拜めば手に縋り。女房を拜む事かいの。是程思ひ合つた仲。なぜに女夫になられぬと フシ辛氣。泣きにぞ泣きゐたるヤァお夏樣。詞いつぞやお前に借りました七十兩の小判の事。私が使ふ金にてなし傍輩の勘十郎。私商に損をして平に賴むと申した故。地取替へ遣んと存ぜしが思ひも寄らぬ仕合して。損を塡めしと道すがらの話。もう入らぬ金子なれば戾しませうと言ひければ。アヽよいわいの婆樣の讓の金。どうしても大事ない人の來ぬ間にあの蚊帳の。開眼をせまいかとこは〴〵顫ふ春風も。人目を忍ぶ綟子の蚊帳蚊帳はお夏に緣深く神の結ぶの釣手かと。戲れ交す手枕も ヲクリ心へせはしき契りなり。地内手代の源十郎お夏樣。旦那の呼ばつしやると出でけるが。はつと廣げし手も打たれず。呆れて立てば清十郎お夏が褄を引被く。お夏騷がず袖にて隱しこれ源十郎。詞其方も男ぢや引かせはせぬ。忍んで逢ふは清十郎見遁しにしてたもらうか。沙汰をするならするといや。幸ひ刄物もこゝある。地直ぐに二人が死ぬる迄サア助けてたもるか殺しやるか。きつとした誓文で承らうと弱味を見せず。貴付けられて源十郎。詞沙汰して私得もなし商冥利穩密なり。僞ならば各より私が先に。清十郎が脇差にて止めを刺さるゝ法もあれと。地言ひ捨て歸る其の舌も引入れず寄親の。勘十郎に打明けて フシ斯くと語りし不實さよ。地二人は五體に冷汗の露の命も消ゆるばかり。居直つて溜息をつきもあへぬに親手代。ばら〳〵と走り出で。お夏が小腕引出し。清十郎も這出づれば其の儘居れ身動せば。男ども撲ちのめせと取

逢せば。蚊帳の内にすご／＼と晝の疊の影消えて。籠に寢るゝ其の風情外にお夏は夏の蟬。聲の限りを泣き盡くし思ひをくらぶるばかりなり。地親は腹立涙にて。地やれ女郎め。己れが母は流れの者。空言に身はまぶれても。心の細貫さ公道さ千人にも稀れなりしぞ。地いつ習うて其の淫奔遊女の腹とて何方へも。嫁に嫌ふは聞きつらん。其の袖下は何事ぞ。左様な事をせんよりも己れが額に傾城の娘と。なぜ看板は打ち居らぬとスヱテ齒ぎりを。してぞ泣きけるが。詞やい丁稚め不義一通は免しもあり。十一の年から子同然に育てしやつ。事によらばお夏めと一つにせまい物でもなし。在所の親めと言ひ合せ嫁入道具に邪魔を入れ。親方に恥かかせ但馬屋の家を覆さうと巧んだな。地口の明かれぬ事見せんと證文出しこれ見たか。己れが請狀にある親めが印判。妹とやら嫁とやらが文とも合せて吟味した。芥子程も違ひなし覺えがあらう詐ふな。主の寢首を掻かれも知らず。エヽ憎やと蚊帳越しに。額を三つ四つくらはせて フシ涙をこぼして怒りける。地淸十郎はつと驚き。親の印判妹の手跡とは言ひ乍ら。親にさへ逢はぬ身が夢程も覺えなし。詞在所の親を召寄せて吟味もなされず。片手打のなされ樣。地勘十郎めどこに居る。言はせねば堪忍せぬと蚊帳より出づるを取つて押へ。詞ヤレ勘十郎源十郎は此の九左衞門が兩の眼の代りをする。其の手代が穿鑿して一札取つたに胡亂があるか。暇をくれた出て失せう。これや女子ども。地彼奴が這出に着てうせた布子があらう尋出し。引剝いで着せ替へ フシ追出せとぞわめきける。地お夏はかゝる有樣を目も當てられず涙にくれ。いはゞ我が身も遁れぬ科。餘りといへば親ながら。無得心なるお心や人の譏りも思召し。少しは宥免あれかしとフシ聲をあげてぞ泣き居たる。詞チヽ憾いも辛いも知つたれども。己れが母が遺言に傾城の娘とて。侮られうかあさましや。未來の障りは是のみと返す／＼も歎きしに。氣遣するなよい聟取つて。名を揚げさせうと請合しを嬉しさうに打笑ひ。地それで成佛々々とて死んだ顏ばせ忘れ兼ね。千兩つける嫁入を止め大事の娘を教唆し。惑ひ者になしたる恨み但馬屋の九左衞門は。胴慾吝嗇い者といはれねばならぬ人の。位牌に向うて言譯ない胴慾者には誰がなせしと。わつとばかりに堪へかね。咽せ返りてぞ歎かるゝ。地其の間に下部ども衣裳を剝いで振袖の。汚れし綿衣に着せ更ゆればさしも美形の淸十郎。山田の案山子とうぞぶるひ二目と見られぬ姿形。お夏は我も一所にと飛付くを下女腰元。引分け宥め教訓しフシ常の部屋にぞ伴ひける。地父はいよ／＼腹を立て勘十郎は何處にある。何に恐れて引込むぞ淸十郎めが入物吟味し。衣類諸道具押へ置き。追出せ追出せとフシ言ひ付け。奥に入りければ。地心得ましたと勘十郎。

半櫃簞笥舁出させぐわらりぐわらりと打明けて。衣類引出し取散らすは。三途川の奪衣婆の フシ呵責もかくやと哀れなり。地 錠前を叩き割り提物指替取出せば。包の小判七十兩是は扨。此の金子はお夏樣へ婆御よりの讓りの金。身が包ませて覺えあり極つた大盗人。首のあるは旦那の慈悲。叩き出して追つ拂へと手足を取つて引出す。詞 淸十郎大聲あげ。ヤイ勘十郎盗人する男でなし。 己れが私商に赤穗鹽買うて損をして首縊らねばならぬ首尾どうぞと談合したる故。お夏樣へ申して己れに貸す爲に預つた。 地戀する者の因果で傍輩の機嫌取り、追從したが身の仇となつたるか口惜しや。詞己れが損は入れ合せ今は金も入らぬといふ。察するに此の度の嫁入道具の代銀を。遣らずに己れが引込んで我が親騙つて一札させ。人を損ふ工面とは鏡にかけて知つたれども。相口なければ是非もなし 是を見よ淸十郎は破れ布子一枚で。地非人の體となつたれども心の内は紗綾縮緬。錦より譔いエヽ辛いぞやれ恨めしいと。スヱテ齒噛をなして泣きけるが。地丹波に更々恨みはなし。十一歳の彌生の花いろはともちりぬるとも。 知らぬ者の是程迄。算勘商賣讀書の。硯の海より フシ山よりも。地勝つたる御高恩。拳一つ當らぬ身が。如何なる月日か今日の今日主從の緣切らるゝ。如何なる神の咎めぞや。今一度旦那の顏拜まんと駈入るを。地情なくも男ども手取り足取り大道へ追出し。門口はたと鎖しけるは詮方もなき 三重〽 次第なり フシまた如月の。地朧夜や涅槃の雪の名殘の門。立止まりつ立去りつ フシ凍え狼狽へ佇めり。 地無慚やお夏は魂も。布子の袖に入るばかり身は拔殼の力も切れ。若しやと部屋を忍び出で門の戸明けてそつと出で。四邊を見れば人影のお夏樣かこゝにかと。言ふより先きに抱き合ひ聲を立てじと諸共に。肩の縫目に喰付いて フシ忍び、音に泣くばかりなり。地今の間の物思ひま一度逢はせて下されと。いくらの願をかけたやら淸十郎の淸の字なれば。先づこゝの淸水樣京の淸水室の明神。書寫山伊勢の御神樣住吉樣金毘羅樣不動愛染大師樣拜み賴みし驗にて。顏を見て有難やサア二人連にて立退きて。如何なる遠國小借屋でも二人使ふを一人使ひ、一人使ふを手鍋でも暮されまい物でもなし。いざ立退かんとありければ。詞いやそれでは情の親方の惜しみも增るべし。在所へ歸り親どもと勘十郎めが善惡糺し。身の垢脫いて詫言せば御機嫌も直るべし。詞それ迄辛抱遊ばせと泣く〳〵宥め慰むれば。戀しゆかしは身の氣隨男の爲には憂き苦勞。願はすながら只一人突き放して遣られうか。詞これ此の小袖と脫ぎかへて。其の布子を逢ふ迄の形見に着んと 地涙ながら。互に帶解き身を合せ片袖づつを脫ぎかはす。肌睦しき心ざしオクリ戀路〽ならずは何故に フシ生れて知らぬ、木綿物。祇紗の衣と引締めて。顏

と顔を見合せて スヱテわつと泣入る。心底に フシ萬の 涙籠るべし。地物にて顔を押包み。さらばやといふ所へ腰元下女ども。お夏樣が御座らぬ裏の井戸よとひそめきしか。門口明けてこりや此處にぢや。詞アヽ申しお夏樣。お前は悪い合點などちらの爲にもならぬ事 地先づ御入りと衣裳をしるしに。清十郎を取卷き フシ連れて内に入りけるに。地お夏續いて入らんとすこれ清十郎殿。詞お夏樣がいとしくば先づ往んだがよいわいの。男のやうにも無い人ぢやと。地恥しめ突出し押出し。大戸をはたとさしければ。清十郎は詮方なく部屋へ入る體にして。大釜あけて身を縮め。そろり〳〵と忍び入り中より蓋をぞしめにける。お夏は門に憧れて入るべき便りを待つ所に。詞水仕の玉はそろ〳〵と。門口あけてなう清十郎さま清さまと。お夏が袖を確と取り。詞あゝ此方は戀知らず。私が此方に絆されてお主樣は袖になし。朝晩に心をつけしんぞ思ひを盡せども。お夏樣に心中たて一度も靡いて下されぬ。地恨みのほむら火吹竹。なゝや十四五すつとんとんと撲ち度いが。アヽいとしいが因果の種人は落目の志。詞コレ此の餅は正月の。在所へやらうと思へども君に何が惜しからん。恥かしながら此の玉を食ふと思うて。賞翫して下さんせと 地懷に押入るゝ。お夏は色を知らせじとじつと抱き付き締めければ。チヽぞつとする程嬉しい恨みの雲晴れ渡り。是で千倍々々とても事に盃せう。酒取て來ましよと入る跡に引つ續いてつゝと入り。部屋に斷け込み夜着引被き フシ身を顫はしてぞ臥し居たる。地清十郎はかくとも知らずお夏は外に如何ぞと。釜の蓋あけ見廻せば奥には人も寢入ばな。勘十郎は親方と寢酒の相伴ひよろ醉ひて。夜着蒲團引出し フシ常の所に臥しにけり。地跡より又源十郎これもほろ醉ひ來りしが。詞勘十郎もう寢たかもと談合あり目をさませど。頓枕してぞ寢鼾びける。いや寢入りはせぬサア話せと。夜着の中より煙草盆 寢ながら行燈引寄せて顔を並べて語りける。源十郎小聲になり。其方が賴うだ鹽商の損銀。彼の金子ですまして。請取手形も餘り金も一所に上した屆いたかと言へば。チヽ過分々々慥に屆き請取つたが。其の狀も請取も大事にかけ笠の頂きに入れ置き 其の笠を道頓堀の群集に。芝居の木戸に預けて餘所の笠と替つて。地詮議しても知れなんだそれは失せても大事ない。お蔭で萬事忝いといへば。源十郎一段々々それにつき。清十郎めが諸道具七拾兩の小判迄。旦那が身どもに預けられた。お夏女郎と清十郎が盗み出した分にして。してやるやうな工面がなと分別すれど能はぬ智恵。そちが今度のおぞい仕樣魔法でも叶ふまい。どうぞ思案はあるまいかといへば勘十郎頷いて。詞嫁入道具の代銀をこちらへ使うて損を填め。まんまと間には合せしが一度は大坂へ上す銀。あれをと胸

に當てゝ居る。地工面を聞けと呼き合うて吸付ける。煙草の先にて行燈はフシ消えて闇とぞ成りにける。地清十郎は幸ひと釜の内より這ひ出づる。酒に醉ひたる源十郎オクリ とろ〳〵寢入る體なれば勘十郎搖り起し鼻に手を當て爲澄したり。七十兩を盜み取り預り手の此奴に負はせんものと分別し。そつと起き出て源十郎を我が寢所に押遣つて夜着打被せ指足しフシ奥の。納戸に入りにけり。地清十郎はそれとも知らず扨は彼奴等は寢入りしな。エゝ憎さも憎しとても斯くなる憂き身なり。身代の敵この首尾に助けておめ〳〵戻られず。勘十郎めを刺殺しありがひもなき我が命、仕損うたら浮世は闇跡先見えぬ出來心。内の勝手は覺えの庖丁心の錆もあら砥の研ぎ立て。尋ね寄れば高鼾前後も知らず不思議の本望。夜着引退けて咽喉吭をぐつと抉れば源十郎。うんといふを引起し肝先を一刀。又刺通して息を止め耳に口を差寄せて。詞こりや勘十郎まだ魂はよも去るまじい能つく聞け。傍輩に科を被せ身の爲にせし報いの劍。名乘り合うて殺さぬは近頃殘念至極ながら。詞讒訴したる此の顋骨と。頤かけて斬り下げ。此の胸から巧んだかと鳩尾先を背中まで。思ふさまに止めを刺し死骸を夜着に押包み立上れば血落ちて滑つて仰向にどうど伏す。はつと起きて蒲團にて足摺り拭ひしづ〳〵と。身仕舞して立つたる處に奥よりお夏は手燭の影。表へ出づるをこれ〳〵〳〵。ムゝ其處にかと走り寄り。血に滑つてアゝ怖と。聲を立つるを押鎭め樣子を呼き此の上は。一所に退かんといふ所へ行燈提げて勘十郎。納戸の方より來る體南無三寶人違へよしこれも汝が身の火を吹き消して車戸を。押明け飛んで出でにけり後れてお夏は詮方なく。蚊帳打上げ身を潛めフシ生きたる心地は無かりけり。此の音に勘十郎走り寄つて手燭をあげ。夜着引捲つてヤア詞源十郎が斬られたわと。地呼ばはる聲に主下人男女殘らず起き合せ。疑ひもなき清十郎門の戸明けたは落ちつらん。引入れあるか吟味せよとフシ上を下へと返せしが。詞なうお夏樣がござらぬわ。ヤアこれぞ曲物捜して見よと。地二階内藏椽の下湯殿迄捜せども。蚊帳の内は氣もつかず表の口に錠卸し。裏を捜さん尤と提灯點して顛惑ふ。お夏は我が身の恐しさ清十郎が氣遣さ。氣も逆立つて散亂し南無天照大神樣。觀音樣氏神樣死ぬとも二人一所にと。胸を騷がす折柄に勘十郎が聲として。詞蚊帳の内を見なんだ捜して見よといふ聲す。地南無三寶と飛んで出で表には錠おりたり。裏には大勢充ち滿ちたり後へも先へも因果の網の。かゝる憂き身は佛神の直なる法も横町の。間の細路文殊破ればさつと開くも戀路の念力。かけし願ひの神力の神變奇特毒蛇の口。遁れ出でたる如くにて落ちんと契り西の辻東の辻になう我が夫〳〵と。聲を限りに往き歸り捜は

俘となりけるかと。はや狂亂となる鐘の響の末にあれお夏。〳〵と呼ぶわいのおう。〳〵そこにか何處にぞ。いや〳〵いや待て暫し。あれは我が家に父の聲我を尋ねて我を呼ぶ。親もゆかしや夫も戀しや。父は子を呼ぶ夜の鶴我は夫呼ぶ野邊の雉子。追つかけ行かん夜は何時ぞ。鐘は幾つ。八つか七つか曉風の。辻行燈を吹き消して（コハリ）道も心も眞暗〳〵。くる〳〵〳〵狂ひ亂れ泣き亂れ。亂

れて謡ふ鶏の。卵を渡る危さの狂女となるこそ 三重ヘ 哀れなれ。

お夏笠物狂

下之巻

夜さ來いと。いふ字を金紗で。縫はせ。裾に清十郎と寢たところ。裾に。清十郎と寢たところヱ。少くわん。歌念佛 觀ずれば夢の世や。寢て温めし 懐子。ギン いつの間にかは浮かれそめ。三界を只家として。袖笠雨の。宿にも。心止めぬ。フシ 假枕。地 流にあらぬ川竹の。笹の小笹の

拍板。花の手覆。お手を引かれた。是も熊野のフシ修行かや。薦様のこれの。勸進柄杓の。笑顔よしとてギン柳が招く。柳の髮を何故に浮世恨みて尼が崎。尼が崎とは海近く。小オクリなぜに。其方はしほがない節はあはれに身は伊達に。スヱテ歌は念佛の歌比丘尼。歌向ひ通るは淸十郎ぢや無いか。笠がよく似た。菅笠が能く似た笠が。笠が能く似た菅笠がゐ。笠をしるべの。フシ物狂ひ。太夫地物に狂ふも我ばかりかは。鐘に待宵鳥には別れ。戀する人の夜な〳〵を氣違ひとてな笑ひ給ひそ。ウタヒ傳へ聞く孔子は鯉魚に別れ。思ひの火をば胸に焚き。白居易は又我が子を二人先立てゝ枕に殘る。藥恨むは理やそれは子故の。別れの涙。フシ親より子より我が身より。ハルフシいとし殿御の。いとしぼや。地それより便宜音づれの。聲も聞かねば顏も見ず我は秋鹿つまを戀ひ歌かいろと。なく。とフシ知らせ度や。太夫地コハリなう〳〵あれなる御僧我が殿御返してたべ。いづく〳〵連れて行く事ぞ。男返してたべなう。ワキ地いや御僧とは空目かや。我もこがるゝ丸太舟浮世を渡る一節を。謠へや謠へ泡沫の。二人歌小舟造りてお夏を乘せて。花の淸十郎に櫓を押させしよゐくわん。地觀音薩陀の誓ひには。枯れたる木にも花笠太夫笠に挿いたは椰の葉。ワキ腰に挿いたも椰の葉。太夫一枝。ワキ二枝地二人三日に三枚七日に七枚。起請誓紙の。牛王のうらなく灰に燒きつつ互に呑んだる。水も漏さぬ。フシなか〳〵に。スヱテ引きも合せぬ神心。熊野の神のお留守かや。地足柄箱根玉津島貴船や三輪の明神も。神とも覺えぬ神ならば尋ぬる人に逢はせて見や。太夫それ〳〵逢はせず逢はれぬは皆僞りの御神と。誹つても祈つても。神の力も叶はぬかと。笠も髱もかなぐり捨て狂ひ。歎くぞ哀れなる。二人共に。濡せる尼衣ワキ二人の比丘尼も涙を抑へ我も尋ぬる人故に。假に俯せし修行の道思ひ當る事あらば。知らせ申さん國所フシ有樣語り給へとよ。太夫嬉しの人の問ひ事や。國は播州姬路の者。尋ぬる夫の姿形。フシ姿は詞に。語るとも心は筆も及びなき。ぼんじやりとしてきつとして花橘の袖の香に。昔男の業平づくり黑い羽織が好き梳き油。鬢つき髮つき眞黑々。黑目がちなる目の中に鼻筋通つて櫻色。年頃は廿餘り丈高からず低からず。茶の湯盤上打囃子男の藝に一つでも。瑕なき玉の盃の。酒もよい酒假名文書き手の袂の露。轉び寢し夜の詞睦言はギンフシおれと。其方が中ならで。岸の濱松根堀れても。漏すまいぞや顯すな。變るまじきと。末かけしオクリ末の。松山浦の波。地上越す人も。なかりしに友朋輩の猜みにて。犯さぬ罪の仇名を喞ち世を憂き物に出で給ふ。今は我が名を包みても何かそのかひ夏はつる。扇の女の物狂ひ。其の人の名はフシ淸十郎。地ありし姿は變るとも。まだ面影は殘るべし。教へ

てたべの人々とて フシ伏し沈。みてぞ泣きゐたる。

ワキ地二人の比丘尼縋り付き扨こそは餘所ならぬ。一つ流れの和泉の國其の人の爲にこそ。我は妹。太夫我は嫁。二人親の歎きを宥め兼ね フシ共に亂るゝ我が身ぞや。太夫狂女といふも。何故ぞ。ワキ其方は妹背の忍ぶ草。太夫身は同胞を思ひ草。二人同じ所縁の草葉ぞと手に手を取りて泣叫ぶ。フシ物の哀れを止めける。なうあさましや今里人の語りしは。詞但馬屋の清十郎は人を殺めし科によつて。方々へ追手かゝり。長崎とやらんにて終に捕はれ囚人と成り。あの松蔭の竹垣にて七日曝し其の後は。地但馬屋の門口に獄門に懸けらるゝと語りし故。せめて餘所目の暇乞に是迄は參りしが。御存じなきかいとほしや何我が夫は捕はれて遂に首を斬らるゝとや。それは誠か今迄は狂氣の中にも若しもやと。頼む念力切れ果てゝ。同じ刀に斬られんとスヱテ駈出づるを ワキ二人の尼。歎きは變らぬ吾々なれど最期に心亂れては。人の誹後世の爲。皆其の人の仇ぞとて オクリ泣く〳〵制し止むれば。二人フシ早や先拂の。地警固の者山賊夜盗の其の如く。嚴しく固め引出すは生きての思ひ死する罪。もと一筋の縛めの。繩目に逢ひて清十郎 フシ引かれ出づるぞ無慚なる。ワキ矢來の内に土壇を構へ高手を許し羽交締。北向に引き据ゆるは目も當てられぬ風情なり。太夫お夏は涙に目も明かれず聲も立たねど伸び上り。なう此處にゐる是こゝに顔を向けて下されと。二人呼ばはる聲も往來の群集の歎き念佛に。地紛れ聞えぬ哀れやな不便やな清十郎。顔も形も痩せ衰へ最期極る心にも。後生菩提も思はれずお夏が歎き故郷の。親兄弟は如何ぞやお夏に知らせ今一目。せめて面影ばかりでも笹路の方を見廻して目と目をふつと見合せて。太夫お夏はわつと泣き出す。ワキ 清十郎は聲立てず。膽より出づる憂き涙刀の刄より先づ先にスヱテ思ひに命絶えぬべし。二人地 涙を中の架橋と。心通はす心の色世に取沙汰の諺や 引。歌清十郎殺さばお夏も殺せ。生きて思ひをさしよよりも。思ひを生きて。生きて思ひをさしよよりもエ なまみだ〳〵南無阿彌陀。南無阿彌陀佛なまみだ。〳〵。地南無阿彌陀佛と回向して フシ皆々袖をぞ絞りける。地清十郎涙を抑へ。詞何れも有難き御回向千金萬金より。一遍の回向に勝る寶なしと承る。最期の悦び何事か是に加かん。さり乍ら心にかゝるは此の高札。主人の金七十兩盗むとは身に取つて覺えなし。相手勘十郎を斬殺さんと思ひしに。誤つて人違へ遁るゝも業悦びならず。殺さるゝも業歎きにあらず。地某生年廿五歳十一歳の春より奉公し。主人の育み情にて商人の道一通り。藝能文字の本末迄人並になつたるも。皆これお主の フシ御高恩。明暮主の教へに任せ親に孝行主に忠。詞只正直を守つ

て一言も。偽りを言ふまじと毎朝天道氏神を祈りしかども。地若き者の悲しさは只非業に死なんとは思ひも寄らず。佛とも法とも一遍の念佛申せし事もなく。スエテ今の悔しさ詮方なく。詞高き山の頂にて。一杯の水を求むるが如しとは此の身の上に知られたり。地此の群集の中にこそ。清十郎が一命に代らんと歎く人もあるべきぞ。必ず〱僻事なり存らへて追善し。菩提を弔ふ善根こそ命を助け。不老不死の藥を與ふるよりも嬉しきぞや。人々の回向を受け佛の御國に到らんと。思へば〱此の世の絆はふつつと思ひ斷つたぞや。アヽ思ひ斷つても斷られぬはいとし可愛の只一人。よし是も夢の戯れ頓證菩提南無阿彌陀佛と。潔くは言ひけれどもお夏が歎き妹の。變れる顏を尻目にかけ覺えずわつと泣き出せば。お夏を始め二人の尼警固の上下緣もなき。貴賤群集に至る迄フシ皆々。袖をぞ絞りける。稍あつて清十郎如何に警固の方々。詞口渇きて苦しきに煙草一服所望したし。此の群集の其の中に姫路の人もあるならば。地吸付けて賜はれかし情のお主の御手より。末期の水と觀念せん如何あらんと言ひければ。詞苦しからじそれ〱と煙管煙草を出しける。地お夏悅びなう我こそ姫路の者。一樹の蔭も他生の緣況して一つ國なれば。未來も一つに生るゝため約束の煙ぞと。餘所ながら暇乞煙草吸ひ付け垣越しに。警固の者取次ぎて清十郎に渡しける。夫婦は物も言ひたげに顏振上げしが噎せ返る。淚を中の關の戸にて兎角の詞も出でばこそスエテ泣くより外の。事はなし。地清十郎淚を押止め人も多きに御身の手より。末期の一服を受くる事の有難さよ本望さよ。此の煙草にて十惡五逆の眠を醒し。詞充滿其願如清涼池と嘯きて。地獄餓鬼畜生修羅此の四惡趣の苦患を解脫し。吹出す煙は沙羅林栴檀の霞と變じ。三寶供養の燒香となつて。三十三天に熏じ渡らば日月は。兩の眼に入替り給ひ。梵釋二天に手を引かれ奉り。佛の御前に此の度は立別るゝとも藻鹽燒く。煙は同じ鷲の山靈山淨土で待つべきぞや。南無阿彌陀佛といふより早く煙管おつ取り雁首迄。咽喉の内へ押込んでフシ眞逆樣にぞ伏したりける。地警固の上下ふためきてそれ殺すなと引起せば。色も變つて目眩き血は紅の瀧つ瀨と。口に流るゝ風情を見て口惜しや後れたり。我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏。人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け給へと。立てたる拔身の槍おつ取り喉吭ぐつと突通す。二人の比丘尼抱き付きなう皆樣頼みますと。泣けど叫べど囚人の自害に各仰天して。いたはる人も無かりしはフシ是非に叶はぬ次第なり。地城下にかくと注進す代官所の役人。馬を飛ばして馳來り矢來の内に飛んで入り。詞大聲あげてヤア早まつたり清十郎。汝傍輩の源十郎を人違にて殺めし段は白狀紛れなしと雖も。盗人

の科未だ分明ならぬ故。據し者として成敗の日を延し。盗人の本人顯れなば汝が命を助けんとの評議なりしに。地近頃殘念千萬なり只今但馬屋一家を召寄する。事の詮議濟む迄の命を生きんと思はぬか。 狼狽者と力を付け二人が口に氣付を入れ。 樣々看病なし給へばお夏は少し息出づる。 清十郎は心配の臟腑を破りし長煙管フシ賴む方なく見えにける。地程なく但馬屋九左衛門手代勘十郎。一家殘らずお召によつて參りたりとぞ訴ふる。詞かゝる處へ老たる百姓慌しく狼狽へ來て。一目見るより南無三寶しなしたり。地待てむざ〳〵と一人は殺さぬ敵を取つてとらせうと。せき來る涙を押拭ひ謹んで。詞我等は清十郎が親和泉の國水間の左治右衛門。 年寄ながら面目なや其の勘十郎めにたらされ。お主を大事子が可愛さよしない手形なんぼう後悔仕る。それにつき其の時分。 娘子供が道頓堀にて取違へ歸りたる。 筐を此の頃取出せば頂きの下に此の文あり。地御詮議なされ清十郎が科を輕め下されと。 涙を流して訴訟するそれ〳〵是へと取上げて披見ある。詞幸便に任せ一筆啓上せしめ候。此の度お夏樣嫁入道具の代金百四十兩の內百廿一兩妾許にて鹽問屋へ相渡し。 貴樣の損銀殘らず相濟し則ち請取手形。 殘金十九兩上し申し候追付け御下り待入り候。但馬屋勘十郎殿參る同源十郎 詞と此の手跡相違なしやと仰せける。 九左衛門一見して。相果てし源十郎が筆蹟形共に疑ひなし。ナア返答あるか勘十郎御前にて申せ〳〵と責め付くれば。勘十郎少しも怯まず。尤も我等私商損金の流用に。道具の代金暫く取替へ置きたれども。追付け右の金は才覺して道具屋へ濟し置く商賣の習ひ廻り金の無き時は。氣轉を利かせ表裡を使ひ主人の金を手前へ加へ。 自分の銀を主の銀に廻し間に合するは。世間ともに手代の習ひ我等ばかりに限るでなし。 あの清十郎は傍輩を斬從し。金七十兩盗み取る是も手代の習ひか。地エヽ殘り多いまそつと早う生れたら。熊坂の長範か石川五右衛門が手代にせば。よい給分を取らうものをと フシ憎體にこそ申しけれ。地今を最期の清十郎眼をくわつと見開き。詞やい〳〵勘十郎廣い世界を己れが口から。 世間手代の習ひとは顯が過ぎて聞き憎い。悪い事を習ひと言はは主殺し親殺し。 屋燒き強盜世間の習ひと許さうか。人を殺せば我が身も死ぬる。此の清十郎が七十兩や八十兩の金に代へる命でなし。旦那の御恩お夏樣の情に捨てゝと思ふ身を。 地己れが口一つにて勘當させ其の怨み己れをたつた一討に仕舞はうと思うたに。 仕損うて口惜し。エヽ〳〵無念な口を利かするなあ。 ハツ〳〵我等故にお夏樣の自害。御恩の旦那の憎しみも嘸や増さらん情なや。 此の年迄の御面倒御恩を。報ずる事もなく。 御苦勞をかくる事是ぞ黄泉の障りとなる。 詞これ親父樣妹ど

もとへ。地呼び向け顔をじろ／＼と言ひ度き事のありさうに。目は働けど息切れに人脈絶ゆる兩眼より、涙ばかりを暇乞。親子他人の隔てなく フシ皆々哀れを催せり。地左治右衛門涙を流し申し殿様。詞勘十郎がお主の金を引負ひし。我等を騙した憶な證據出づるからは。七十兩も彼奴が盗みに極つた。御詮議なされ清十郎を御助け下されとスヱテ大聲上げてぞ申しける。詞代官職聞き給ひ尤々。不便なれども清十郎は人を殺せし。白狀紛れなき上は斷罪遁るゝ所なし。又勘十郎が七十兩盗みしといふには證據なし。然れども勘十郎己れ一旦主人の金子をわだかまり。清十郎親子に無實を言ひかけ。迷惑させし不屆者皆己れが悪心より。事起つてお夏も自害に及びたり。主殺しとも謂ひつべし。屹度仕置に行ふべきが。手を出して人も殺さず盗人に極る證據なければ。慈悲を以て助け置く命の代りに髪を下し。出家して彼等が菩提を弔ふべきかと仰せける ハア丶地有難しと勘十郎頭を地につけ三拜し。小刀拔いて髻よりふつつと切つて捨てければ。詞チ丶神妙々々佛弟子と成りたれば。縦へ誠の科あつてもいよ／＼命は取り難し。此の上は汝が行末彼が後生の爲ぞかし。和睦して恨みを晴らさせ往生させよとありければ。勘十郎一念發起してこれ清十郎。今は我も懺悔せん。彼の七十兩の小判は此の勘十郎坊主が盗んで。源十郎めに塗らんと思ふ折節。斬られしを幸ひに其方に負せたり。地恨みを晴れて成佛あれ跡弔らはんといふ所を。扨こそ盗人顯れたり其奴括れ承ると。踏付け／＼腕捻ぢあげ フシはや切繩にぞかけてげる。地ツメ直に國中引渡し獄門に切りかけよと。引立つれば妄執も晴れつゝ清き清十郎。臨終顔も菩薩の數廿五歳の命は消えて浮名は今に殘りけるお夏も共にと取付くを宥め伴ひ立歸り。其の夏衣墨に染め。年忌。年忌の手向草花の帽子に修行の笠。笠が能く似た阿彌陀笠彌陀の。御國に生れける。

栬狩劍本地

近松門左衛門作

タリ 頃は冷泉院の御在位の御代。安和二年の春。主上夜な〳〵御惱あり 引 サシ 有驗の高僧貴僧に仰せて。大法を修せられけれども。其の驗更に無かりけり。御惱は丑三つばかりにてありけるが。神泉苑の森の方より。黒雲一叢立來つて。御殿の上に覆へば ナホス 必ず オロシ 〳〵惱え給ひけり。 地 則ち公卿詮議ありて定めて變化の所爲なるべし。武士に仰せて警固あるべしとて源平藤橘の兵を選ぜられ。上總之介平の朝臣惟茂をぞ フシ 宿直に選び召されける。 地 抑此の惟茂は桓武天皇の後胤。 高望の親王に三代の末葉。民部卿兼忠の嫡男生年二十五歳。薄紅梅に若草摺つたる狩衣。弓は重籐山雉の眞羽の鏑矢只一筋かい込うだり。 地 郎等の茨菰次郎黄糸の腹卷赤銅作の打太刀。 足緒長に結び下げ。左近の陣の此方なる。櫻の木蔭に敷皮しかせ月さへ遲き雲井の庭。衛士の焚く火の薄煙星の光も朧夜や。時刻待つ間の片睡り フシ 騒がぬ有樣不敵なり。御格子高く明渡し内侍命婦の待女。上日の上達部几帳の物見簾の褄。覗きさゞめき天晴ゆゝしき骨柄かな。此の頃召されし武士どもが誰か是に及ぶべき。如何なる變化も恐れんと聲も フシ ほのめく空燻物。 地 炬火影細く既に夜半の時申し。宮中更けて物凄し刻限至れば案の如く。 地 俄に風落ち雷光黒雲渦捲き震動し。すはや御惱と立騒ぐ惟茂ちつとも騒がず。雲間をきつと睨め付くれば形は四足の獸。面は飛龍の如く トル三重 焔を吹いてぞ〳〵閃いたり。 地 膝立直し大音上げ。 詞 從四位の下上總の受領平の朝臣。惟茂と名乘つて鳴弦し。 地 矢取つて打番ひよつぴき放せば手應して。ひやうはつたとぞ中つたる得たりやおうと矢叫びの聲。蟇目は御殿の檜皮にとまり變化はをめき苦しんで。落つる處を茨菰次郎むんずと組んで暫しが程。 捻ぢあふ足音 フシ 大地も轟くばかりなり。 地 茨菰名に負ふ功の者引擔いで。どうど投伏せ打物拔いて。刺通し切りさばかれ首は宙に舞上り。四足翼も散亂し虚空に飛んで失せければ。御惱平癒忽ちに風治つて晴るゝ夜の。二十日餘りの月清く夜の明けたるが如くにて。宮中悦び聲々に射たりや惟茂したりや茨菰。古今無雙の弓取やと フシ 勇み賑ひ給ひけり。 地 關白教通公御陪に立出で惟茂が弓箭の德。叡感淺からず將軍の官に任ぜらる。汝は葛原の親王五代の孫。先祖義茂將軍が武勇の餘慶を繼ぎし故。余五將軍と名乘るべしとの宣旨なるぞと宣へば。 惟茂左右の袂を廣げ。烏帽子を地に付け拜賀の禮 フシ 面目餘つて見えに

ける。詞爰に伊豫國の武者所大宰の大貳橘諸任。遠侍に宿直せしが會釋もなくつゝと出で。これ〳〵惟茂御邊將軍宣旨あればとて御受け申すは心得ず。將軍の職といつぱ。武官の棟梁朝敵を征し。非常を警むるを以て規模とす。變化は當分去つたれどもあれ見よ。蟇目の鏑矢御殿の檜皮に射付けたり御殿に鏑矢を射つくるは天子に對つて弓引く道理。朝敵のなす業天理を恐れず。弓矢の法も知らぬ愚人武士の司となるべきか。地かゝる御詮議もなくふか〳〵との將軍宣旨。御政道の暗き事末代の譏。勿體なし〳〵と言上すれば。諸卿の面々げに是は理と フシ眉を。ひそめ在します。地爰に侍所の預 鷹巣の帶刀太郎廣房。瀧口の陣よりつゝと出で。詞御政道暗しとは舌長なる奏聞。剰へ惟茂弓矢の法を知らぬとは。尤和主に似合うたる難勢。事を知らずば語つて聞かせんよつく聞け。それ弓矢といつは神武不殺の威德を表し。物に疵付け殺さねども弦音ばかりにて。化生變化を滅す事。たとへば佛神の札守にて惡魔を攘ふに異らず。忝くも天照大神天鹿兒弓羽々矢を以て。惡神を鎭めおはします此の理をさして。神通の鏑矢と號し。佛道にては大悲の弓智恵の矢とも悟るなり。凡そ大將たる身の弓は袋劍を箱に納めながら。東南西北の敵を鎭め退くる。一張弓の理に至るを精兵の射手とも。又は文武兩道の。弓取とも是を名づけたり。地見よ〳〵今宵の變化惟茂矢先の疵はつかず。只一矢に射て落し郎等に切留させたる。惟茂の心底を察するに射殺すは易けれども。詞御殿の棟に矢を射付け血を流す恐れを存じ。矢の根はそつと拔棄てたりと覺えたり。地證據にはあの矢を下し見すべしと鞠垣の。梓取りのべてかり落し見れば詞に違ひなく。鏑ばかりに鏃はなし惟茂會釋し。チヽその矢の根これにあり。惟茂が家の相傳弓矢の故實これ御覽ぜよと。鏑先の大鴈俣懐中より取出せば。諸任は一句に返答なく拳を握つて赤面す。地帝を始め月卿雲客帶刀太郎が弓矢の評定。フシ惟茂が振舞優にやさしき勇者どもやと再びあつとぞ感ぜらる。地天氣猶も麗しく關白重ねて勅を蒙り。柳の五ッ衣着たる官女を誘ひ。御劍を携へ出で給ひ。惟茂か振舞仁義の勇者と謂つべし。且つは神道にも携り佛法をも窺ふ事。多能は君子の恥づる所甚だ感じ思召し。此の御太刀は神代より傳はりし平國の御劍とて。八幡宮の御母神功皇后異國退治の寶劍なり。然るに信州戸隱山に惡鬼化生し。民俗を惱す由訴ふる。此の度大内の變化も正しく彼の山の變化の餘類なるべし。此の太刀を帶し戸隱山に驅入つて惡鬼の根を絶ち。國家安全の功を顯し朝家を守護し奉れ。且つ又汝には。未だ定る妻なしとや。是こそ中宮の上童世繼御前上より嫁せ下さるゝ。此の御太刀を土産にて吉日選び送らるべし。地如何に猛き武夫も婚になびけ梓弓。妹背の中に子をまう

け武勇を子孫に傳へよとの。叡慮なりと宣へば。惟茂は身に餘り冥加にあまる悦を。何と奏せん詞もなく世繼御前は嬉しげに。見かはす眼許色深き御所の女中の花心、羨むもあり妬むもあり惟茂が矢先には、變化は物か及びなき內裏上﨟しとめしは。げに精兵の手利やと其の名を。擧げし 三重 九重や フシ 柳櫻を。こきまぜて。錦小路の中納言冬通卿の一人姬。玲瓏君は隱れなき公家一番の美人草。草のゆかりの フシ 草結び。彼の惟茂といつの間につい言傳の架橋を。渡り初せし文玉章戀の山々重りて殿御よ妻よの約束を。つき〴〵お部屋の人ならで スヱテ 人に漏さぬ閨の戶や。 地 一條表の物見の亭氣のむすぼれも時津風。はれやかに見渡し給ひ。 詞 なう〳〵能い日和ではないかいの。美しい男が空色の薄物着て。にこ〳〵笑ふやうな景色東山も一目にて。惟茂樣の吉田のお館。手に取るやうに見ゆれども每日遠目に見るばかり。 地 いつ呼迎へて下さるやら若しお心が變つても。世間忍びの契約なれば恨いうても齒がきかぬ。アヽ一人辛氣をやむばかり。四方の霞は晴れたれど自らが氣ははれぬ。皆は心に苦がなうて フシ 羨しいなと宣へば。 地 小枝の局聞きもあへず。アヽ 詞 それは案じ過しと申すもの仲人なしの。御契約世間へ知れぬと申せばとて。人にこそよれ惟茂樣御詞といひ數通のお文、嘘があつてよい物かお大名なり高家なり。此の度內裏の御手柄余五將軍になり給へば。 地 關白樣かどなたぞ歷々のお仲人で。表向の言入れのあるは定追付あれに。御祝言の御殿が建つて御夫婦お顏をならべて。東山の春秋をお庭に御覽なさるゝは今の事。少いそ〳〵あそばせ。 詞 なんと腰元衆。あの景のよい吉田白川山。春は躑躅や蕨折。秋は栗など拾うたら面白からうぢやあるまいか。いや申しお局樣。 地 何よりかより惟茂樣の、境內の松茸が見事なげな。兎に角に御果報な フシ お姬樣ぢやと笑ひける。 地 姬君もにこ〳〵とあれ人々。先にから此の築地の前いろ〳〵の。進物持つて行通ふ今日は如何なる祝日ぞ。何事やらんと宣へば。 詞 あれも皆惟茂樣への進上。內裏の變化を退治あり。將軍の位に陞り給ふ御祝儀。御一家は申すに及ばず公家武家の持囃し。お出入商人御用聞。職人まで我も〳〵と進上物。 地 此の中から引きもきらずといふ處へ。五十ばかりの使者男板目付けたる出立の。ぴんと反つたる朱鞘の刀鍔作りの月代に。白髮交りの五體付下人に持たせし折紙の。御太刀一腰金馬代。四百石は見え渡り フシ たしかに武家とぞ知られける。それ〳〵其處へ絹上下の撫付男。年頃配も三十一字進上物も歌の臺に、番すゑて持たせたる。山鳥の尾のしだりをの。長袖なりと見す〳〵も ハヅミ 公家衆よりの。 フシ お使者ならん。平樽かたげて來る中間サア。是は武家か公家方か。 地 されば樽が五升樽御所方といふ心。公家衆であらうが中

間が鑓頤。武家方でもあらうかと目利する間に又其處へ。蟇に似た魚五尾。臺に載せたはありや何ぞ。あれは鰒と申す物。五つ竝べの進上はお出入の呉服屋と。さいてからは一寸もフシ違ひはせまいと笑はるゝ。地爰に一際目に立つて洲濱形の大島臺。松竹に鶴と龜蒔繪の文箱紅の。紐ながくと結び上げ。仕丁二人が持舟にオクリさながら〵祭の荷ひ物。地往來も見返る折柄橘の諸任。郁芳門の番替り油の小路の四辻。馬をはたと乗りかけたり。徒士の者肱を張り。詞大道一ぱい是なんだ。はやく持つて片付かずば踏碎いて捨てべいと。既に手をかけんとす仕丁どもびくともせず。ハテがやく〳〵とやかましい道が狭くばのいて通れ。忝くも大内の女中世繼御前より。余五將軍惟茂公への御進物。踏碎かば首から先へ。出して置けとたつた一口にいひ返す。諸任くわつと腹を立てヤイ〳〵。こうぬらが惟茂風聞きたくなし。其の島臺打砕き青才六めらそれ踏殺せ。地承ると徒士若黨どつと寄れば仕丁ども。無法者を相手にするは癇と棒打。此のお館頼みますと門の内へかき入れ。御進物に疵さへ付かねば面々は言譯立つ。犬死すなサア來い〳〵とフシ一散かけて逃げてげり。地よしよし云がひなき下司めら構ふな〳〵。惟茂が面を踏む同然門内へ込入つて。島臺を踏碎け。踏拉げやと下知をなし亂入らんとする處に。地大紋に烏帽子かけ大の男門一ぱいにつゝ立つて。寄付く者を引つつかみ〳〵弓手馬手へ取つて投げ。諸任が乗つたる馬の鞦つかんでゐい。〳〵〳〵と二三間尻ゐにどうど捻付け。ヤイ詞見ン事馬に乗つたれば定めて武士の切端ならん。眼が見えぬか法式を存ぜぬか。錦の小路の中納言殿のお館。斯くいふは御家の雜掌金剛兵衛利綱。推参至極な御門に馬を乗りかけ下人輩に踏立させ。ぬつくりと懐手で見て居ようと思ふか。サア下馬せうかせまいか。但し引きずり下さうかと手ぐすね引いてせめつくる。ヤア公家侍め。太宰の大貳橘の諸任を見知らぬか。禁中の寶劍平國の御太刀を拜領せんと。度々奏聞せし我が願ひかなはず剰へ。心をかけし世繼御前まで惟茂に下され遺恨深き惟茂が進物に。道を塞がれ惡口させ。此の門内へ舁入れしを堪忍する諸任ならず。是へ出して踏碎かせい。否といはゞ公家でも御所でも乗込んで。屋臺共に馬足にかけ微塵にするがサァなんと。ハアヽ事をかし。馬の足に懸替あらば一寸でも乗入つて見よ。地テヽ所望ならば是見よと乗込む馬の前膝。兩手に取つてこりや〳〵〳〵目より高く差上ぐれば。馬はさんたをする如く諸任は仰向に。轉を打つて跳返し眞逆様にぞ落ちたりけり。地顔を顰めて。詞エゝ阿呆力の公家侍。何を喰ひ込んだやら喰ひ倒れ地覺えて居れと。砂打ちふるひ腰をさすつて立歸る。跡からちが〳〵ちんば馬フシ見苦しがりける有樣なり。地利綱どつと打

笑ひ。御内の者ども此の島臺。惟茂卿まで屆け申せといふ處へ。姫君怒れる顔にて待ちや／＼利綱。詞世繼とやらいふ女惟茂樣を。我が物顔にほてくろしい此の長文。何程蓬萊の島臺で祝うても。地相生と契りおいたは此の玲瓏。鶴龜も引きむしつて松竹も折つて棄ちや。追出されうが殺されうがお館へかけ込んで。一足なりと自ら先へ嫁入して見せうと。駈出で給ふを抱留めてこれ姫君。詞跡先何にも存せねども此の體で駈込んでは。氣違の沙汰に落ちお家のお名お身の恥。理が非になると制すれども。地いや大事ない夫ゆゑの氣違は女の上に恥ならず。生を替へても添はねば置かぬ妾を放せ利綱。やつてくれぬか利綱とスヱテ聲を上げて泣き給ふ。地金剛兵衛もてあつかひ。詞お局はお側に居てかゝる大事を知らぬかと。地睨め付けられて顫ひ／＼。詞元ひよつとした御縁にてお文の通路度重り。惟茂樣も惟茂樣來世かけて夫婦の。やがて呼迎ようのと神かけたお文。提つて御座るお姫樣。世繼御前は勅諚にて御劍を土産に。明日の晩嫁入との文を見て。地お腹の立つもお道理といふてあちらは勅諚なり。足らはぬ女子の料簡どうした物であらうやら。フシ胸が痛いといひければ。地金剛兵衛横手を打ちさて／＼始めて承る。詞惟茂ほどの弓取直筆の契約は。仲人より猶慥な事。中納言の姫君を傾城遊女の如く。よも一時の戯れにはせられまじ。たとへ帝より世繼御前を賜はるとも錦小路が娘。玲瓏姫と堅き契り候と奏聞するこそ道ならめ。長袖と思ひ侮つたる仕方。此の利綱があるからはお家に瑕はつけまじき。地サア御祝言は明晩半時なりとも此の方の。お輿を先へ入れ申さん然れば姫君御本望。此の上に惟茂卿お心變るか變らぬは。脇からは見えぬ事それは御夫婦しつぽりと。お寢間の勝負に遊ばせと笑へば姫君浮立つばかり。エヽ詞忝ない。利綱樣々樣々ぢや。地父上へも母上へもよいやうに申してたも。一詞アツアさりながら盃事の最中に。世繼御前が來たらばどうしたものであらうの。ハテ何の事はない。赤前垂を引つ張らせ。はしり元で味噌すらせ。飯釜の下焚せたり世繼の名をかへ臺處の。繼御前にしてくれんと戯れ。用意を 三重へ俄事。フシ既に其の夜は。地如月下旬花の三月よけぬれば。皆吉日ぞ其の外に忌むは申の日猿の頬。おして嫁入の御乘物御輿添には金剛兵衛。鶴龜書いたる對の提灯供侍が子持筋。追付け初子を御懐妊 フシ大原口にぞ着きにける。地金剛兵衛立留りなう侍衆。詞つく／＼思案をめぐらすにお輿をどつと持ちかけ。若し違亂ありては姫君の御身の上いかゞなり某は二三町先へ參り事の樣をはからはん。地お乘物に氣を付けられよと言捨てて只一人。先に立ちてぞ急ぎける。地はや法性寺の四ツの鐘早瀬に響く加茂川の。堤の陰より頬被の男二人。出づると見えしが提灯持をはたと蹴倒し。一提灯

微塵に踏碎けば常闇とこそなつたりけれ。供人是はと騒ぐ處に。此處彼處より數十人が足音して星に映らふ拔身の光太刀を渡せ〳〵といふ聲ばかり。妾は見えず盲目打に切りまくれば。六尺中間青侍。臑を薙れ腕を落され。南無三眉間してやられ胴骨腰骨小鬢先。あいた〳〵痛手負はぬ者もなく泣いつ喚いつ逃げて行く。姫君は乘物に生きたる心地もなき悲しみの。聲をしるべには世繼御前は是なるわと。乘物手ん手に追取卷き フシ行方知らず落失せけり。地金剛兵衞は五六町行過ぎ見れば提灯消えて。人聲遙に騒動すあら心得ず氣遣はしと。息を限り足限り走つて歸る夜の道。何かは知らす踏み滑り眞仰向にどうと伏す。南無三寶と起き直れば身もひつたり。土も石も濡れ〳〵と手に觸るあたゝまり。是はさて。詞たつた今切つた血草葉も浸るばかりなり。地ずは事こそと氣も騒ぎ滑るを踏留め踏しづめ。足に觸るを引摑みすかして見れば。御家の提灯の斷切れハア、姫君を奪はれた。詞エ、利綱が一生の不覺。おのれ何國迄と駈出でしがハツ。我は狂氣したさうな方角の辨へなく。どこを前途に行く事ぞ。先づ何者の所爲ならん。ム、知れた世繼御前が妬の所爲。イヤ諸任めが昨日の遺恨かと。地思案する程氣も混亂分別入らぬ思案もない。京中九萬八千軒。一軒づつ搜せばとて取返やさで置くべきかと。北へ走れば御手洗川の川音の。しん〳〵としてあてもなく東はたつた今來た道。先づ洛中をと駈出す足許暗く加茂川の。深みにだんぶと浸つたり。エヽしなしたりとかけ上り裾に雫のたるみなく。心ばかりはせきのほり行くも走るも同じ道。二三町の間を往つゝ戻つゝくる〳〵と。さしもの利綱途方にくれ。物の魅入が誑されしかと齒噛をなしてどうと坐し。エヽ詞口惜しい〳〵と石を取つて噛碎き〳〵。地無念涙にかきくれし。スヱテ心の内こそ道理なれ。

地かくては主君の言譯なしまだ〳〵面を曝さんより。自害せんと膝立直し向ふをきつと見渡せば。ヤア詞下り松の松陰に提灯ちらめき。人足數多乘物もほの見ゆる。サア地あれに極つた。一寸もやらうかと目差すも知らず暗き夜に。道も畠も別ちなくもみにもうでぞ 三重へ 追つかくる。地世繼御前は大内より直に嫁入の行列。中にも御太刀の役人は功の武士を選ばれし。則ち鷹巣の帶刀太郎廣房。折烏帽子に袖單衣ついたる直垂。平國の肌には腹卷小袴にひをくゝりして。目八分に差上御太刀錦の袋に入れながら。夜道は大事とくまん〳〵け乘物に引添うて。フシ眼を配つて歩みけり。地其の外介添に衣かづき長刀傘。ざんざめいたる供先走りかゝつて金剛兵衞。やにはに提灯切落し無二無三に切りまくる。思ひがけなき帶刀太郎わつとばかりに太刀ひん抱へ。此處に隱れ彼處に狼狽へいちはなかけて逃げてけり。功の武士さへ逃足に況んやかひなき青女房。

中間小者乗物すてフシ皆散々に落失せけり。地世繼御前は聲を上げ。是はそも何事ぞ何者の所爲ぞや。スヱテ助けてくれよと泣き給ふ。地走り寄つてチヽお道理お道理。詞某があるからは恐しい事はない。地あれ月魄も上つたり惟茂卿へも程近し。乗物の一挺などは引つかたげても參らうが。先づお心を鎭められいざそろ／＼お徒歩でと。乗物の戸を明くれば。アヽ怖。其方は見知らぬ何者ぞやと二度喫驚に魂消え。利綱も横手を打ちこりや違うた。エヽ詞せくまい／＼と思へどもせいたさうな。口惜しやと我が身ながらも。身に狼狽へ。地呆れて空を見る顏も。二十三夜の眞夜中のフシ月もきよろりと出でにけり。地かゝる處に匹夫ども十人ばかり乗物かゝせ馳來り。あれこそ金剛兵衛利綱。ヤイ詞狼狽者。主の娘は此の乗物此の方に入用なし。世繼御前と平國の御太刀所望故。取違へてこつちも麁相そつちも麁相。地太刀の行方は追つての沙汰まづ此の乗物と。替へ／＼すれば兩方よしの兩得渡せ／＼とわめきける。詞利綱大きに勇み出でやれ／＼よう來たなあ。此の金剛兵衛を脅からようろたへさせ。既に自害をせんとした。姫君に憂き目を見せ。此の上藹に狼藉したもおのれ等故。返報せすに置かうか。前に立つたは太宰の大貳が郎等。兒玉の忠太と目利した。替へ／＼とはあたゝかな。地金銀の兩替も利を取られねば兩替せぬ。豆坂の兒玉首つりを取つて替へんずとくわつと見出す兩眼は。新鑄の白銀を研き。出せる如くなり。ヤア詞兩替に小言吐かば姫が胴骨打折つて。贋物をつかませよと引出さんとする所を。地元首つかんでぬつと指上げ目の輕いわる銀。潰しにせんといふまゝに石にかつはと打付くれば。頭ひしげて失せにけり。地いで殘るやつばらに極印打つてとらせんと。するりと拔いて二三人同じ枕に切倒せば。四方へばつとむらむら雀。鷲の蹴立つる如くにて跡をも見せず三重へ逃げ失せけり。地立歸つて乗物引寄せ死骸の上帶切りほどき／＼。棒と棒とを確としめて結合せ。引上げ見ればチヽ天秤針口輕目なし。此方も重い彼方も重い主君の戀の重荷に小付。見捨てぬ義理は侍の肩入れ奉公。えいやつと荷うて宿所に立歸る。ツメ四人の肩を一人して六尺。六尺又六尺。二條川原は石高くだつくりほつくり曲り道。車大路の廻り道今出河原鞍馬口。毘沙門天も御納受百足の足取足つかひ。引足五尺伸足五尺一條大路柳原。柳がゆるぐ春の風乗物ゆらすなゆるがすな。雲も霞もはいはいはいキンはや東雲の朝烏。雀はちう／＼忠臣の誠を。力に現せり。

第二

地范蠡西施を湖水に沈め。呉起が妻を害せしも勇者の道を重んずべき道とかや。地今度橋の諸任狼藉に及びし刻。平國の御太刀紛失の事。永く平の御名折と。洛中の口ずさみ止む事なく惟茂卿の御館には。老中

譜代の御家人等氣を失ひ色を損じ。日々夜々に寄り集り。フシ詮議とり〴〵まちまちなり。地茨菰次郎眉を顰め。詞誠に主君惟茂大内の變化を平け。弓箭の德によつて御惱平癒の恩賞として。世繼御前を宿の妻になし下され。剩へ天下の重寶平國の御太刀まで。當家に下し賜はる事。地弓矢の譽時こそと御婚禮の日限も。急に急ぎ待ち設けしかひもなく。思ひがけなき路次の騷動彼の御太刀も行方なく。詞世繼御前も身の上危かりしかど。金剛兵衛とやらんが働きにて恙なく。地則ち彼が館に忍びおはする由さりとは案に相違の事。世間の人口且はお家の一大事。此の上は草を分けても。二度御太刀を搜し出す手段こそあらまほし。座中の面々心底を殘さず評議あつて然るべしと。いはせも果てず若侍口々に。詞いや只外を求むるにも及ばず。必定橘の諸任我が君に將軍を超えられ。偏執の上多年所望の御太刀。當家に渡り無念とは思へども。地腕敵はねば一戰までに及ばず。御祝言の供先にて狼藉仕懸けどやくや紛れに御太刀も。盜取りたるに疑なし。何條事かあらん彼奴が館に押寄せ。門も塀も踏破つて込入り御太刀詮議するばかり。若し手向ひせば太刀の鐵の續かん程滅多切りの一軍。續けや人々ヲヽ、面白し尤と。一度にはらりと座を立てば。茨菰大手を廣げ。詞あゝ粗忽なり方々暫し暫しと押留め。橘の諸任が所爲と世上の噂。何れもの料簡さる事ながら。世繼御前の御輿には鷹巣の帶刀太郎。禁中守護の武士多き中に一人に選ばれたる勇者。御太刀を預つて引添うたれば。諸任が切つてかゝればとて漫におめ〳〵渡すべきやうなし。しかも彼の帶刀其の夜より行方なく。今にありか知れざるとは爰に不審の有る處。諸任が多勢に圍まれ御太刀を奪はれたるや一つ。まつた此の騷動をかこつけに帶刀が欲心きざし。御太刀を盜み逐電したるや一つ。有無の兩儀知れざる中に一戰に及ばん事。地禁裏の聞え然るべからず。隨分まづ鷹巣めを尋ね出し首を踏へて白狀させんに。御太刀の所在知れぬ事やあるべき。構へてせくまい〳〵と。勇む諸武士を押止め悠々と坐したるは。さすが茨菰知行高フシ家老の思案ぞ格別なる。地かゝる處へ沼田の七郎御白洲に畏り。詞扨も錦小路の中納言殿より御使者として。執權金剛兵衛の妹。梅の井と申す女中君に直の見參か。さなくば御家老茨菰次郎殿に。直談との儀に候とぞ申しける。茨菰暫く思案し。中納言家の御使者ならば人もこそあれ生若き女を使者とは。地ムヽウよしよし某直に對面せん。其の使者是へと座を更めオクリ衣紋〳〵繕ひ待宵や。フシ十六夜過の。二十日頃。鬠にたまる愛敬は。花の粧ひ細そりすうはり柳の間の。フシ廊下傳ひ。人中おめぬすり足は。梅の流し枝梅の井と。選ばれしもげに理なり。茨菰立合ひ。詞黄門公の御使者梅の井殿とは御自分の儀候な。拙者は

卽ち茨薙次郎口上の趣。委細仰聞けらるべしと。地さも慇懃に兩手をつき。巻舌の挨拶に梅の井くつ〳〵と失笑し。詞ハアさう堅い御挨拶ではどうも御口上も申されず。尤も堅い御使者ならば澁面つくつた侍衆も多けれど。此の梅の井が参るからは中納言様とは詞の品。誠は姫君玲瓏様より使と申せば使。お恨みの品々おゆかしがりも第一。お咄も申せとて腰元衆も多き中に。梅の井参れ。あいと申して参りしからは。畢竟姫君の心をくんでの思はく咄し。お前もサア。其の三ッ指割膝取りおいて。お姫様と惟茂様の太鼓持ぢやと思召せ。堅い顏遊ばしても。地色好みの惟茂様に使はるゝお人ぢやもの。その髭のかゝりが助平の。べいの字なりに見えますと フシとんと叩いて寄添へば。さすがの茨薙挨拶なく。軍書の評判聞きたる外。耳なれぬ戀咄し。フシまじめになるこそ可笑けれ。詞梅の井重ねて。地體帝様が帝様。變化退治の御褒美なら。大國小國馬物具で好い事を。世繼御前とは異な物。よしは宣旨にもせよ惟茂様御心底さへ變らずば。玲瓏姫と申して契約の妻ありと。たつて御斟酌なさるゝに。いかな王様も押付け所爲はなさらぬ筈。根が移氣な惟茂様跡先知らずぽか〳〵と。あだぼれして畏つたとお請合 案じても御覽なされ。地男一人に女房二人そもや杵一本に臼二つで。いかな惟茂も搗くには少ししんどうに御座んしよ。此の度路次の騒動も玲瓏姫様の乘物を。世繼御前と心得惡人どもが引つ肩げて走るやら。妾が兄の利綱も氣のせくまゝに取違へて。世繼様の供先で粗忽の働き。一方ならぬ大揉。事の起りは皆惟茂様の不心中ゆゑ。詞されども兄の金剛兵衛。地難なく世繼様も奪ひ返し。お二方とも私が屋敷に忍ばせ置き参らせしが。アヽ詞さすがは上つ方案じたとは違うて。其の睦じさ中のよさ。地琴の連彈續松の歌骨牌も逢坂山のさねかづら。惡い處へ氣を廻してお二人のこそぐり合ひ。腰元衆のもらひ笑ひ。脇から見ての見事さ。詞どうともかうともいはれねど悋氣妬は女の役。底意にどうした無分別もと油斷ならず。地剃刀鋏もお側に置かぬ私等兄弟が氣配り。生物二疋預つてかういふ内も氣遣絶えず。もし何れにてもお身の上に過ちあつては金剛兵衛は切腹。第一はお家の瑕。玲瓏様の仰せを受けて此の鬱憤いひに來た梅の井。恐らく戀の道の孫子呉子。軍配振つて勝負を付けねば歸らぬ。世繼御前も宣旨なれば嫁入せねばきかぬ氣。玲瓏様も契約なればいきりきつて嫁入する氣。お二人の上﨟を何かなしに。此のお館へ迎取つて其の上で埒を明けさんせ。これ御家老此の通りお取次。地さり〳〵お返事〳〵とさし付くやうにせがまれ。詞茨薙次郎頭を掻きさりとは一世一期の迷惑。第一我等弓矢打物取つては。誰に負けんと存ぜねども色事かつふつ不得手なり。地何れにても若手の武士にお頼みなされ。あい

たく〱。あいたしこ〱。又例の疝氣。溫石あぶつて來る間。暫くそれにと僞つて。走り入らんとする處を。どつこいやらぬと袴に縋り。詞エヽ手の惡い御家老樣。色事不得手といふ下から嘘つく術は知てぢやの。地餘の取次で濟む事なら。あつたら口に風ひかせてこなさまに頼まぬ。否でも應でもお取次一人惡くば二人連。手を引合うて出たら女夫ぢやといはうぞへ。詞いうたら大事か。地私も定まる男はなし浮名が立たばそれ限りサア。御座んせと手を取つて引摺れば。エヽ詞舌たるい何のまね。髭口反らしてどうさんせかうさんせと。ひらたくたい口上がどう主人へ云はるゝもの。地一生の厚恩こらや〱と振切つて變化に恐れぬ茨菰も。後を見せて逃げつ。隱れつ彼方へ追つかけこなたへ屈み。走り廻つて後なる。一間にぐわたと行き當り。襖につれて茨菰次郎仰向にどうどこけ。起上れば惟茂卿見臺に向はせ給ひ御學問の最中。二人はハ

ッと飛退いてフシ赤面。したるばかりなり。惟茂につこと笑はせ給ひ。ヲヽ詞最前よりのあらまし聞いたるぞ。物堅き茨菰が取次しかぬるも理。お身は金剛兵衛が妹梅の井とや。地兄利綱が働きにて世繼が身の上恙なく。玲瓏もろともかくまひ置きたる由過分々々。詞我も飛立つ玲瓏姫ゆかしさ限りあらねども。平國の御太刀紛失したる事いかゞと詮議の最中。地世間のとなへを憚り文を以ても音づれず。女心に恨みとはさこそ〱。兩人ともに惟茂見放し捨てんフシやうはなし。追付け玲瓏世繼御前諸共我が方に迎取り。兄弟が苦を晴さん。サヽ〱歸つて二人の姫にかくと告げ。此の文見せて悦ばせと手づから結ぶ御文箱。眞紅の絲の末永き。妹背のしるしとフシたびければ。梅の井悦び二つの文箱押戴き〱。詞アヽ又大將の御料簡は格別ぢや。地此の文見せたら飛付いて。玲瓏樣の玉の緒も消ゆるばかりのお嬉しがり。お笑ひ顔見るやうなは

やお暇と御文箱。兩手に重き妹脊山。歩むは輕きちよこ〱走りオクリ宿所をさしてご歸りける。地茨菰次郎跡見送りエヽ出過ぎたる女めかな。詞これ我が君。あの女郎が辯舌に廻され。御一生の浮沈たる御太刀の詮議は脇になし。一人ばかりか二人の姫君迎入れんなんどとは。先づ此の次郎めは呑みこまず。屹度御心腹承らんといへば。惟茂卿あたりを見廻し。次には誰も居らぬか。小姓どもなど聞いては居ぬか。地これへ〱と膝許に招き。女の恨み妬みには身を忘れ。恥を思はぬ慣ひ。太夫に二人の妻。少しも心にかゝらぬ事。されども御太刀詮議の最中。梅の井とやらん先づすかし歸さん爲。迎取らんと口上には僞つて。二通の文は同じ文章に認めたり。詞豫々おことに語る如く。彼の御太刀行廻つて若し諸任めが手に渡り。戸隱山の惡鬼退治。諸任に先を越されては一人の恥辱のみにあらず。地子々孫々永く當家の瑕瑾ならずや。さるに

よつて我ひそかに館を忍出で。日本國中浦々島々海は櫓櫂の立たんす程。陸地は足を限りに尋ね求め御太刀無きに極らば。一人戸隠山に分入り悪鬼の腹中に葬らるゝか。首取つて立歸るか今日や思ひ立たん。明日や思ひ立つべきと日を數へて闇然たり。今日只今發足せん。世上は惟茂所勞と披露し。留守を守つて帝都の守護。怠る事なかれと御諚あれば横手を打ち。詞竊々左様の仰せなれば斷う申す茨菰もお供とこそ存ぜしに。腰拔役の御留守思ひも寄らずとかぶり振つてぞ申しける。地いやさないひそ茨菰。主從都を出でしと聞かば大惡無道の諸任。如何なる事をか仕出し朝家の御爲家の爲。後悔あらんは必定なり。汝が家に殘るこそ惟茂が身二つあるも同じなれと。主從心隔てなく親み深き詞の花。築山の細道を裏門よりと出で給へば。茨菰次郎も力なく跡に止まり御後。見送れば見返つて主從互の御名殘。盡きせぬ月の都の空中に。隔てゝ三

重へ別れ路と。ギンフシ神ならぬ身は。白玉か。スヱテせめて何ぞと我が涙。地問ふ人もなき獨寐の憂身もつらく世もつらき。世繼御前玲瓏姫。男ほしいもゆかしいも。同じ思ひの同じ身を。同じ住み家に睦ましく。御歌合草結。悪性咄。フシとり〴〵に。亂れし髪を二面の鏡小オクリ向ふへ粧ひ誰が爲につくらふ影ぞ仇人に。かくとも告げよ。フシ黄楊の櫛。腰元二人が梳く髪に。四邊も薫る梅かをる庭の東風芬々とフシ心ときめく御住居地かゝる所へ梅の井惟茂卿の門外より。走るやら轉るやら息を切つて歸りしが。長廊下をぐわた〳〵〳〵障子ぴつしやり明けるや否や。詞サア戻つた〳〵私一代の智慧袋。富樓那もどきの上唇咽のかきがね舌の釣緒頤の落つる程。こつちからも饒舌るあつちからもしやべる。さうしてかうしてどうしてと。遣羽子の詰開きかき集めた咄もあり。ヤア息がきれる水一つと。地跡先いはずまんなかへフシべつた

りと坐るにぞ、世繼御前玲瓏姫南方より立ちかゝりコレ梅の井。詞お屋形の首尾氣遣ひな。地惟茂樣にお目にかゝつてか。軋ませずと咄しや。早う聞きたい〳〵。サア〳〵どうぞとゆすり立てられ。梅の井吐息ほつとつき。エヽ詞餘りびろ〳〵遊ばすな。聞くまいとあつても是がいはいで濟むものか。まあとんと主樣に直に逢うたと思はんせ。そして恨の山々お二人になり代つて。たくしかけ〳〵難なくこちの利潤にして。地追付け迎ひの乘物お二人ながらお屋形へ。迎取つて抱いて寢て可愛がろとのお返事。別してあなたの御念が入つて。拵へは何も入らぬお手道具より櫛笥より。三百目入の地黄箱五六千も用意なされとの御口上。お二人樣へのお文箱フシ渡しまするると差出す。地二人の姫君飛立つばかり。忝いと嬉しいと餘りの事に手もふるひ。夢ではないか玲瓏樣。詞まアお前から御覧なされませ。ハアテ辭儀のない事そもじさまから讀ましや

んせ。地そんならいつそ一時にと。文箱あくるも戀人に大高の結び文。參る身よりの御すさみ開く間遲しと繰返し。讀返し卷返し見れども迎ひの輿とはなく。御太刀尋ね出さん偽館をも忍び出で。野山の起臥し此の世の逢瀨定めなし。死せば未來とばかりにて玲瓏姫の文章も。世繼御前の御すさみも同じつらさの筆の跡。はつとばかりに胸塞り　フシさしうつ。むいて在します。詞梅の井呆れた顏付にてこれ姫樣方。おてき樣の痴話文お二人ながら跳つゝはねつ。お悦びであらうと競ひかゝつて戻つたに。さつても當の違うた彼のすねくろしいお顏わい。世繼樣なんと玲瓏樣こりやどうぞ。エエ氣がかりなわけも聞かせず。地お意地の惡い中から私が讀んで見て。判斷なさうと御文箱取らんとするを玲瓏姫つきのけ。詞エヽなんぢやの。我が機嫌のよいまゝにざはざはざはく／＼囂しい見たうない。地おきやいのとひんと振つたる顏ばせに。

梅の井猶も合點ゆかず。詞こりやまあどういふせんさく一切わしは呑込まぬ。世繼樣けなお子ぢや。お文の通りありやうに讀みなりと咄しなりと落ちつかして下さんせ。エヽ愛なお子もしぶといきり／＼言はんせどうぞいのと。地せゝくり寄りて問ひかくる。世繼御前は文の表包ます明さば惟茂樣。御家出ありしと口々に世間へ知れてはお家の御大事。我が身の大事も此の時とこゝさぬ振にて。詞アヽ別してもない事を。何がそれ程聞きたい追付け迎に乘物やる。地それ迄はまめで居て隨分器量上げておきや。女夫も／＼二世三世いとしい可愛ぞと。したゝるい御文章我が身でさへ恥かしい。まして他人に是がまあつがもい事ばつかりと。詞に紛らし御文箱へ納め入れんとし給ふにぞ。地玲瓏姫は此の咄聞くより胸もどき／＼と。エヽ妬ましや我が方へは家出したりと嘘ついて。世繼に乘替へくさつたか。人でなしの畜生と心に餘る腹立紛れ。

梅の井が首筋取つて引退け世繼御前の膝許へどつかと居直り。詞フウ／＼今のは聞き處。女夫も／＼二世三世愛しいかあいと書いてあるが定ぢやの。アヽクド何の嘘いふものぞ。そもじ樣の文章にはどう書て御座んすと。問はれて玲瓏赤面し。地文の通りあらはさば見捨てられしと腰元どもにさはれては恥辱ぞとゝ心に染まぬけら／＼笑ひ。詞イヤ／＼二世三世とは世間並で淺い事。私が文には五世六世彌勒の出世も變らぬ女夫。身節がなえていとしいと。それは／＼忝いうまい事ぢやとせかすにぞ。地世繼御前も急きのぼる悋氣の焰に氣を上げて。エエ我が方へは他國するの太刀尋ねるのと僞りごと。賴まれぬ男心いつその事破れかぶれと玲瓏の。胸づくししつかと取りなに身節がなえるほど可愛いとの文章か。チヽ面白し／＼身節が萎うがしびれうが。詞惟茂樣には此の世繼御前といふおか樣があるぞや。忝くも媒人は常樣綸言は汗の如し、地

出でて二度歸らねば未來かけての我が夫を。横取りせうとは暖かな。手柄になるなら添うて見やサア。添やらぬかと聲もわなわな フシ身を顫はして責めかくれば。地玲瓏も云負けじとおんでもない事添うて見しよ。詞綸言ごかしておいてたも。地帝の仰せの汗よりも此方の汗はしめ合うて互の肌の汗雫。吸うても見る事なるまい。此の道ばかりは權つくに押せど押されぬ茨の枝。名付ばかりの若草の下紐一夜ときもせで。肌の味知り拔いた此の玲瓏をさしおき夫婦とはどの口で。地結ぶの神も御照覽。日月地に落ち駒に角生え鼠が猫を食殺す。浮世になつたら知らぬ事。命の内は姫御前の一分立てて立てぬいて。世間廣う添うて見しよ。詞アヽあの口わい云ひそみない顔付して。ほんにつべこべ〱とよい加減で止みやらぬと。はしやいだちよぼ〱口抓つて抓り上げて置くぞや。イヤ舌長し胸紐から母様にさへ抓られぬ大事の身。地

其方が躾せうとは我が身抓つて人の痛さ。思ひ知れと飛びかゝり世繼御前の肩先ほつかりと噛み付けばアヽイタもう堪忍せぬ腹立や口惜しやと涙貫く玉櫛笥。地傍にありしを幸ひと釵 笄 油壺。打付くるやら踏みわるやら フシやくたい更になかりけり。地梅の井を始め腰元下婢。驚き騒ぎ眞中へ分け入つて。詞これはまあはしたない。摑み付くの毆くのとは下々の悋氣事。上つ方のあるまい事玲瓏様からお靜まり。世繼様御堪忍腰元仲間へ此の喧嘩。地貰ひましたと背中を擦りすかしてもたらしても。いや〱けもない堪忍せぬ。放して存分いはしやいのと。泣叫びのび上り飛出で〱し給へども。腰元四方に取圍み無理無體に兩手をとりオクリ引連れ〱奥にぞ入りにける。フシ玲瓏姫は。只一人跡に殘つて立ちつ居つ。疊にかつぱと身を投伏しスヱテわつと叫びおはせしが。地エヽはかなの女の身や口先で言ひ勝つても。世繼御前は帝から。勅諚

の夫婦こちの契りは内證事。どうこけても世繼めが大事の男を我が物顔。兎角先を超されぬ先お館へ駈込んで。惟茂様にひつたりとしがみついて居ましよ。ムヽよい思案と裾かいどり駈出でては駈戻り。アヽ是でも世繼が此の世にあれば戀の仇。妬ましや面憎やと。すつくと立ちつどうと居つスヱテ歯がみ歯たゝきがた〱〱。地今の間に世繼めが死ねがな〱天も落ちよ地も裂けよ。山も崩れて落ちかゝり世繼が五體碎けよかし。憎し〱の フシ亂れ髪。地髢ほどけて千早振悋氣の神はなき世かの。庭の植込松杉も神木と觀念し。瞋恚の鐵釘心の鐵鎚打殺したや殺したや。地櫛笥見れども及物はなし。エヽ何とせん。是よ〱二面の鏡思ひ付きたりあら嬉し。地鏡は女の魂武士の太刀刀。本望遂げん銘の物。得たりや嬉しと走り寄れば柳の髪も我が涙も共に。はら〱はら〱〱腹立や此の鏡。世繼御前が朝夕に紅白粉のとき研き。粧ひつく

つて主のある男を寢取る第一の憎い奴は此り鏡。見るも恨みの增鏡と踏付け。ノヽ取つて投げ。地是は又我が姿見曇らぬものをフシ鏡山。心ぞかすむ悋氣の雲霧誰が研立てん水銀の。水漏らさじと誓ひてし地鐵を仇に捨てられし。此の恨は生々世々盡きせぬものと怒れば怒り。笑へば笑ふ正直の姿の鏡圓くとも戀慕の角稜忽ちに。劍となして我が念力思ひ晴さで置くべきかと。小脇に搔込み躍出で築山の岩角に。押當てゝは押戻し。戀と妬みと浮世のつらさ三つの合砥瞋恚の荒砥。生れて馴れぬ力聲庭も春風どう〳〵。共にゐい〳〵さら〳〵さつと散るは櫻か。フシ越路の雪。地顏は上氣の高尾山紅葉袋に置く露や。五つの指の何時の間に。枝瑚瑚珠に異ならず。寐刃や付きしと透し見れば。詞アヽ嬉し切刃も付いたり干將莫耶が名作も是には過ぎじと押戴き。地奥をめがけて駈出でしがいや待て暫し大事の敵。一擊に切るや切れずやためして見

んと走り寄り。二抱餘りの古木の梅。下へ振つたる一枝は世繼が腕と心にこめ。えいやツと打てば過たず。枝は中よりずつぱと切れ。念力岩を徹すなるフシ紅梅血汐と亂れたり。詞ヲヽ天晴切れ物切入らん。地いや〳〵此の氣色を悟られ仕損じては無念なり。だまし切にと上がへ下がへ押し繕ひ髮撫付けんと鏡に對へばアヽ怖。詞こりや何ぢや。藪の後の松の木に六尺ゆたかの大男。地内を見込んで狙ふ體あり〳〵と映つたり。玲瓏きつと心付き。南天林の木蔭よりすかし見れば人音の。藪垣廻つて泉水の板橋より忍び込む。晝中によもや盗人でも有るまい。扨は世繼めが此の玲瓏を返り討に殺さん爲。賴めばとて賴まるゝ蠅同然の下々。待て見よ目に物見せんとフシ猶も木蔭に身を忍ぶ。地斯くとも知らず兩人囁いてはうなづき合ひ。奥を目がけて行く所を玲瓏鏡押取りのべ。走り懸つて切付くれば。さしつたりと振返り。兩方より切りかくる刀の

光鏡の影。電光擊する如くからり〳〵と切結び。受けつ流しつ暫しが程刀に向ふ鏡の刄。念力こめてはつしと打てば。眞甲より立割にフシ二つに成つてぞ伏したりける。地隙をあらせず今一人疊みかけて打つ太刀に。女力の手も弱り鏡をからりと打落され。迯入らんとし給ふを。さもしや上臈餘さじと。捕つて引伏せ旣に兩手を捻上ぐる。地狼藉者が入つたるぞ出合へ〳〵と叫び給へば。金剛兵衛戸障子蹴破り飛んで出で。元首摑んで引上げどうど打付け腰の骨ゐいやうんと踏付け。詞己れ面を見知つた。諸任が郎等猿股與一よな。これ姫君惟茂公は御太刀を尋ねん爲密に都を御出で。此の留守を窺ひ如何なる惡事か仕出さん。御兩人に用心致せと執權茨菰次郎只今知らせに參りし處。地扨々こらへ情なく早まつた愚人すぐに此の足で踏殺さうか。但し恥をかいても生きたいかぬかせ〳〵と云へども更に返答せず。腰より鼻笛取出し吹かんとする

をひつたくり。詞ヤア扨は合圖の笛か好い物くれた忝い。鼻笛の返禮は咽笛に受取れと。地引起して逆手に取り息のつがひ胸板を。つゞけ樣に七つ八つフシ突かれて敵なく死してけり。地合圖の笛の隱し勢取卷れては事やかましし。打散して埒明けんと垣に向つて笛取直し。高音を吹いて吹きそらす諸任すはや仕濟したり。時分はよしと十人許り打連れてどつと入る。思の外に金剛兵衛が力士立はつとばかりに怪轉して進み兼ねて扣へしが。詞エヽ口惜しくも仕損ぜし。地某は無體に込入り世繼御前を奪取らん。金剛兵衛を討取れと云捨て奧に飛んで入らんとする所へ。茨菰次郎ぬか〱と出で諸任が胸ぐら取つて突きのけ。詞ヤア珍しい諸任。世繼御前は勅諚によつて主人惟茂の妻ぢや〱と存ぜしに。扨は御邊のおか樣か。めでたい〱祝うて水を參らせんと。五尺ばかり堀入れたる小山の如き手水鉢輕々と差上ぐる。金剛兵衛聲をかけ暫く

候茨菰殿。水祝より先づ御祝言の夜の石の祝ひ。地我から先と云ふより早く。八尺餘りの立石ゑいというてすつと上げサア。水からか石からか但し水石一時かと。追廻し追捲り聲を合せて投付くれば。先に進みし十餘人フシ微塵に成つてぞ失せにける。地さすがの諸任氣を失ひ女房入らぬ女房も去る。こつちも去るさりとは許せと逃げて行く。餘さじものと金剛兵衛追つかけ出づれば茨菰押へ。茨菰駈くれば利綱押へ此方に怪我の無い上は。詞先づ何事も穩便々々茶瓶茶碗の割物かけ物。一所に置くはあぶなもの。地世繼御前は主君の館。こちの姫は此方の御殿惟茂歸洛遊ばして。嫁入の前後は仕合次第御寢間のやりくり御機轉次第。上十五日の長枕下十五日のお手枕。談合次第と二人の姫を二人が背中にしつかと逢瀨のそれ迄はおさらば。さらば〱腰元下婢も目を配れ。道の用心敵の推參踏立て。〱踏散す。落花狼藉許すな許さじ。ヲヽ〱

〱〱負うたは木男松の木樫木。負はれし花は梅櫻盛を。待ちてぞ別れける。

第　三

地歸去來とて故鄕へ遁れしは。彼の天命を樂みて祿を捨てたる古人の心。鷹巢帶刀太郎廣房は。去んぬる世繼御前の婚禮に武士一人に選はれ。御劍の役を蒙りながら太刀風に恐れ。一番に逃失せて。御太刀共に行方なく洛中の物笑ひ。毎日押紙貼札して狂歌狂句の惡口に。落書をたつる門柱フシ殊に逆鱗甚しく。地事落居の間妻子閉門。屋敷の口々釘付にして扉に樫の大丸太。十文字に遣違へ大釘鎹裏かゝせ。引つそぎ竹にて高垣付け。亂杭打つたる世の掟スヱテ見る目もいぶせく忌々し。地悼はしや北の方籠中の鳥の憂き思ひ。一子房若の手を引いて門の蔭にて窺へば。往來の貴賤立集ひ。詞これ〱此の屋敷が腰抜侍。鷹巢帶刀太郎閉門の態見苦しい。あの落書見よ〱と指さし嘲り讀む歌に。恥知らずいづくで武

士を帶刀が。頰の皮剝け平國の太刀。地出來た〳〵よい口にやりをつた。これ見よ此處にもまた一首。詞鷹巣も鼠の巣やら子を置いて。あなあさましの親の逃ざま。地鼠とはよういうた御藏より下されし。御知行盜みの米の罰。升落しにかゝらうぞと フシ笑ひどよめき通りけり。地聞くにつけても北の方悲しとも口惜しとも。思ひ亂れておはせしが。なう房若。父御は弓馬を嗜みて譽ある武士なれども。弓矢の冥加に盡き果てかゝる不覺を取り給ふ。其の恥を顧てよも存らへてはおはすまじ。詞されども預りの御太刀は日本の名劍。尋ね出して惟茂卿へ渡したう思へども。地家は閉門とぢめられ譜代の郎等小者まで。皆侮りて逃走る一門一家は不通なり。男とては其許ばつかり三年たてば十歳ぢやぞや。詞命を懸け身を碎き御太刀を取出し。父の恥を雪ぎ落書を立てゝ笑はれた地親御の面を晩いでたも。早う大人にしたいなうと口說き給へば。詞アヽ母樣泣かしやんな。何の事其の御太刀を取出して。笑うた奴等が首打切つてくれうぞ。母樣おれは强者ぢや。地おれは樊噲張良ぢやと裾引からげ駈出づる。抱止めてヲヽ出來した〳〵。さりながらなんぼ心が剛なりとも。門は釘付高い聲もかなはぬぞ。思へば夫の帶刀殿子まで健氣に產付くる。魂すわりし弓取が其の夜に限つて後を取り。諸萬人の口の端に。うたはれ給ふ フシ恨めしさよ 地妻子の恥辱は思はずかと歎き給へば房若も。悲しさうにつく〴〵見て。おりや樊噲ぢやといふ顏に。フシ戒をつくるぞ哀れなる。ヲヽ道理いとほしや。せめて御身に御慈悲下り。罪赦さるゝ爲なれば。萬事家內を愼めと。親子一間に引籠り。いつを晝とも夜もすがら。寢もせぬ夢に明さるるヲクリ心の〳〵內ぞ悼はしき。地汨羅の潭も水あせて沈みも果てず存らふる。帶刀太郞廣房は心の外の誤りも。運の不祥に近江の國伊吹山の片陰にスヱテ知邊求めし隱家もノルフシ憂きには絶えぬ。身の成る果ゝ地妻子に一目對面し御太刀の所在を語り。兎にも角にもならばやと。やつし果たる破れ蓑身をしる雨は厭はねど。月にも恥づる夜の笠。梅が小路の我が宿の。門に入らんと立寄ればこは如何に。地逆茂木打つて釘付に戶締めたり。帶刀はつと眼も眩み南無三寶。詞代々朝家の堅めとして。武勇の名を得し親祖父の屍。地名字に釘を打たるゝかとスヱテヤヽ涙ぐみ立ちたりしが。今は何をか期すべき門前にて腹かき切り。腸つかんで扉に打付け死なんものと。地どうと座を組み刀をずばと拔きけるがいや〳〵。我が心底を知る人なく身の置處なきまゝに。狂ひ死に死したりなんどいはれんは。一子房若が恥辱據なし。詞妻子に所存を語るまで。地暫し存ふ命とも。心を隔つる高塀の腰板に刀を當て。我か家へ我が身として宛ら盜賊の。所爲もけやけき欅板フシめつき〳〵と切破る。地北の方障子を明け。詞耳を澄し

でヤアさては盗人ござんなれ。閉門の家女子童と侮るとも。地一討に切り留て房若に手柄させ。世上の聞えにせんものと。薙刀かい込み房若にそつとさゝやけば。どつこいやらぬアヽ高い／＼合點か。ムヽ／＼うなづき押肌ぬぎ。地高からけする足丈も九寸五分をするりと抜き。親子さし足息をつめ フシそろり／＼と狙ひ寄せ。地待ちかくるとは白壁を一尺餘り切破り。身を縮めて這入る形つらも頭も引包み。ちぎれし胴の菅菰に。只蓑虫の蠢く如く フシ書院を指して忍び入る。地やり過して北の方。ハル薙刀取伸べ腰の番ひをはらりとなげば。うんとばかりにかつぱと伏す。詞房若打物持てひらいて飛びかゝれば。やれ房若なつかしやと。地むつくと起きしをよく／＼見れば父の帶刀。ハアヽ／＼とばかりに親子の人スヱテ呆れて。詞もなかりけり。稍あつて帶刀。ヲヽ思ひかけぬは道理々々。詞妻子の手にかゝりしは。せめても天の惠と知れ。

語るも面目なけれども。某不覺の名を取る事臆病に似て臆病ならず。彼の祝言の供先無二無三に切りかけしを。諸任が所爲と心得。只一筋に御太刀を大事にかけ。地前後を分かず落ちし程に物に誘はる心地にて。そこども知らぬ山々を二三日はさまよひしが。詞やう／＼夢の覺めたる如く。地始めて驚く フシかひもなし。地此の言譯は私事。五十歩を以て百歩を笑ふとかや。詞逃ぐるは同じ逃ぐるなり。帶刀太郎廣房が面掻拭うても出でられず。地自害せばやと幾度か柄に手をかけしが。日本無雙の寶の御太刀。朽果てん勿體なさ。浮世にまだ／＼ながらふる心底思ひやつてたべ。詞今は近江の國伊吹山の麓。久作といふ土民の家にかくまはれて日を送る。此の久作は御身も覺えあるべし。先年家に奉公し。澤といふ腰元と密通して斷落せし。九郎といひし童が事。地昔の恩を忘れもせぬ。夫婦が誠頼もしく御太刀を預け置く。サア 詞片時も早く房若を連行き。太刀を請取り惟茂に參らせ。始終打明し歎きなば仁心深き惟茂卿。品ようしく奏聞あり贋巣の家を立て。地房若武門を繼がん事疑ひなし。此の事く詳しく知らせ置き心やすう腹切らんと。非人にやつし來りしに屋敷は釘付戸締められ。詞塀切破りし某を盗人と思ひ心はしかき薙刀。房若が働き天晴帶刀が妻子なるぞ。地嬉しや死後に案じもなし。やれ。詞夜明も近付く外へ漏れては詮もなし。地止めを刺いて一足も。急げ／＼といふ聲も スヱテあへぎ。せぐりて玉の緒も フシ引入る。如く見えければ。地北の方涙に暮れ。御太刀さへあるからは御身の上は言譯立つ。如何に姿變ればとて。夫を見違へ手にかけて。何とながらへあられうぞなう房若。父の敵は母なるぞ寄つて切れと泣き給へば。今はの眼をくわつと開き。詞ヤイうろたへ者。武士の廢つた夫を刺殺して。あの倅世に立てうといふ性根はなく。共に死んで房若を誰が守立てて家は

繼ぐ。今の間に夜が明け御咎の塀は切破る。見苦しき此の態を御所の役人檢非違使どもに見付けられ。恥に恥を重ぬるか房若連れてはや急げ。地詞を背かば生々世々妻でない夫でないと悶ゆれば。詞アヽこれこれ何の詞を背かうぞ。地房若おじやと出でんとすれど後髮。思ひ切り兼ね進み兼ね近江の國がどつちやら。伊吹山とはいづくぞと。口にくど〳〵口說きごと涙が足を引戻す。房若もうろ〳〵と戸じめし門を押して見て。妾が明かねば出られぬとスヱテかこつけ泣くこそ哀れなれ。詞エヽ塀の破れが眼に見えぬか。愚鈍な餓鬼めと叱られて。地泣く〳〵潜る四ッ這は父親知らぬ犬子や。母も續いて出で給へば なう〳〵これ〳〵。詞止めを刺いてくれぬか止めを刺せ〳〵。イヤもうそれは許して下されかし。なう曲もない苦痛させんといふ事か。夫婦のよしみ頼む 地〳〵と苦めば。思ひ定めて立歸

我世の中にあらん限りは只頼め。御摂願あやまたず一つ蓮に導き給へ。南無阿彌陀佛と引起し止めをぐつとさしも草。伊吹山へと焦れ行く道たど。〳〵し 三重 歌エイ〳〵。手枕々々肩だるござるに一火するたや切艾。サンヤレ〳〵。登りか下りか飛脚文箱足に三里のたゆる間も。サンヤレ〳〵さんさつけやれ。手杵かち杵 フシ氣輕な男の 地氣もあさ〳〵に連れ添へば。嗅が心もギンオクリ揉拔艾。伊吹の里に昔より。刈れども盡きぬさせも草 フシ身過は草の種ならし。地夫婦臼ばたに息休め。詞なう久作殿。此方一人は何してもゆるりつと過ぎかねぬ身を持つて。女房子ゆゑに漢方くづし憂苦勞。さりながらまあ四五年。あの萬虎が十二三になるまでぢや。持つて出た果報で何萬兩儲けうやら。地金とて名ざして持たねども。あの子があればこちや金持。餘り身代に氣をもんで煩らうて下さんなと。背

子を産むは金産むと同じ事。そなたの胎內は銀山ぢや。おれも隨分精出して。地ま一人二人掘出さうそちも手のもの灸して。山の腰暖めや久々まぶが途切れたに。ちと山入致さうか何と山はさからうがと。しなだれ寄ればしなだれて。うそ恥かしい晝日中女房の口からそれがまあ。えやは伊吹の艾屋が。女夫中よい暮しこそフシ所帶の藥なれ。地是じやらくらもよい加減。旅人衆が大勢門に立つてぢや。地おつと合點と店先に進み出で。伊吹艾の功能を商ひ口にぞ述べにける。詞凡そ諸國に蓬多しと申せども唐土にては蘄州四明が洞。我が朝にては當國江州伊吹山周の幽王の吉例を以て。三月三日に刈始め五月五日の露を受け日に曝し月に乾し。桑の杵は男を表し柳の臼は女を表し陰陽和合に搗きぬく揉みぬく白艾。今年艾舊艾二十年から百年まで代物僅か六錢にて。人の命はあたひ痳氣や寸白や萬病の根を切艾。實をふすべる薫醋艾霜にかじ

けし老木の節の筋柔ぐる蒸艾。未だ稚き兒襁はなの身柱や筋違や赤子にするゝても熱からず。智惠ない子には智を生じ子の無い女中は子を孕む。此の艾の威德には時を選ばず日を嫌はず思ひ立つ日に人神なし。土用八專構ひなし前三後七愼みなし灸した夜でも戀衣夜着の下から手を入れて。せゝり起すにふツつりと捻艾の生やいと跡もうぐはず痛みなし。引灸禁灸祟りなし養生灸押灸醫師入らずの御重寶捨てると思うて只た六錢。巾着の皮切堪へれば年中の 地後藥 フシ召して御座れと賣り立つる。地辯舌がらに上下の旅人オクリ皆いへ〳〵づとにと求めけり フシ歩みほつれし。草鞋や。地房若は悄々とおしよぼからけに破れ笠。店先に立ち休らひ手を伸して。艾の袋を引つつかめば萬虎がはしたなく。詞あれ父樣乞食が艾盜むぞや。地すりめやらぬと飛んで下り小腕捻上げ。詞店の物かけて取る。道中の小蕩。地重ねて爰へうせうかと荒き風にも

當らぬ身を。握拳七ッ八ッうんといふほど敲かれて。涙はら〳〵こぼしながら痛いとだにも聲立てず。詞いや盜みはせぬ母樣の足痛い。歩かれぬとある故に。やいと貰ひに來たわいや。地堪へてくれと諛はぬ。詞に素性顯れてフシ目も當てられぬ次第なり。地女房見兼ねいとしや參宮かなする人。お袋はどこにぞ草鞋が足をくうたか。艾欲しくば遣らうかといたはれば。地いやおきや〳〵。親をだしに遣ふは。物取の奧の手。ヤイ小童。今度は是を喰ふかと。地杵振上ぐれば旅人どもアヽこれ〳〵。爰は我々が扱ひ。嘘にも親とは奇特なり。こりや艾取らせんと一袋投出し。早う歸つてするゑてやれと皆々通れば房若。横柄らしく推戴き。痛さこらへて泣いた顏せまいとすれど泣じやくり フシ笠傾けて立歸る。地門見廻して女房夫を招き。詞今の子を合點か。なんぼう汚れ破れても衣裳つきに見所あり。物云ひの大樣さ目許口元帶刀樣に生寫し。疑も

なく房若樣とやらにまがひはない。地おいとしや帶刀樣今度の恥辱雪がれず。都へ歸つて切腹する妻子が是へ來るならば。御太刀を渡し再び家を繼がせてくれとの御賴み。其の御詞に違はず若君うろたへ給ふ體。帶刀樣は御切腹に極つた。追付いて奧樣もお供せうと駈出づる。詞アヽこれ待て〳〵。此の久作もさうは見たさりながら。此のひすい人心騙のあるまいものでもなし。殊に預り置いた寶の御太刀。彼の橘の諸任とやら望みをかけ。是から起つた騷動念にも念を入れたがよい。旦那の妻子に極れば艾の袋に隱れもない。久作尋ねて御出でなされう。總じて此の事隣限つて穩密。ざはざはして近所に不審立てられな。今朝からもう〳〵と頭痛で頭が碎ける。地旅人はなし日は暮れると暖簾はづし看板仕舞ひ。見世片付けて フシ蔀を下し。一寢入して汗してくれう。門口締めて用心しやと頭巾鉢卷高枕。詞こりや萬虎。房若の帶刀のと必ず人

にいふまいぞ。眠たさうな目許ぢや抱いて地寝ようと引寄せて。うん／＼うめいて引被る木綿蒲團の裏表。背戸門締めて女業。夜なべ取りつく行燈の。スヱテ光も細き忍び聲。地久作は爰か都から來た明けてたもと。表をひそかに敲く音應と答へて駈出づる。蒲團の下から裾引つとらへ。詞米屋か味噌屋か留守ぢやといへ。地留守ぢや／＼と引留むる。エイ物負うた覺えはないと振切つて門口の。フシとしや遲しと走り出で。詞なう奥様かおゆかしや。おいとしや最前此の御子をそれとも存ぜず。慮外致せし勿體なやとすがり付けば北の方。昔にも似ぬ此の有様身の憂き時の人頼み。恥かしさよとばかりにて フシ涙に。くれて在します。地お力ないは御尤されども大事の此若子様。お氣ばししなせ給ふな折ふし夫は風心地。先づ／＼是へといたはりて脱ぎすて草鞋洗足の。床は簀の子の藁葺や。洩りて袂に露霜も フシ奥の間にこそ請じけれ。地これ久作殿聞いてか。奥様親子御出でなされた。ちよつとお前へ出られぬか。ヲヽ詞聞いては居たがどうも頭が上らぬ。熱が強うて氣が宙を飛ぶやうな。隨分御馳走／＼と云捨て蒲團引かづく。地アヽ時も時の煩ひやと奥に出づれば北の方。、詞なふ久作の病氣とはさぞやそもじの氣扱ひ。高きもひくきも女の習ひ。夫子の上は我が身にも。かへて心を痛むるぞや。是につけても帶刀殿そなた夫婦の志。くれ／＼も悦びてあへなき最期を遂げ給ふ。預け置かれし寶の御太刀此の子に持たせ。惟茂卿へ參らせ父の家を繼がせてたべ。世が世ならば御身達に頼まるるこそ道ならめ。却つて頼む身となりし。あはれと思うてたもやとてスヱテさめ／＼と泣き給へば。アヽ詞冥加ない。來し方の御厚恩。久作も云ひがひなき商は致せども。昔に變らぬ男氣。地夫婦が命をなげうつても御世に立てて置かうか。地お屋形を出でし時身に持つた子も成人致し。房若様のよいお伽御世に御出でなされての。家老殿にして下されませ。アヽおとなし様に。お眼がかたいちとお休み遊ばせ。地何ぞお裾に置きましよと。恥ぢぬ心の奥底を明けて伊吹の山颪。落ち來る軒の月更けて房若はふら／＼と。居睡りこけしあぢきなさ北の方も旅疲れ。咄寝入の袖枕オクリ前後も〳〵知らず臥し給ふ。地悼はしや隙間の風も厭れしに。夜寒を何と洗濯物恐れながらと打着せ／＼。我が身は次の片隅に子のある中は男にも。常が丸寝を今日は猶 フシ帶引きしめてぞ臥しにける。フシ既に燈火。半點して。地三更に伴ふ鐘の聲。深夜の雲に埋れて。フシ四方に人音鎭まりたり。地久作そつと起出でそろり／＼とあたりを見廻し。奥を覗いてさし足に雨戸の樞かけがねを。締めて廻らす力帶女房が口に手を當て。鼻息窺ふ胡椒の紛藥研鍔の二尺一寸するりと抜き。奥をさして入る處を起きて女房。膝節にしがみつき振つても引いても放さばこそ。片足

飛に家の内を引摺廻れば附いて廻り。戸棚の隅にどうと引据ゑこれ。詞此の抜身は何ぢや。熱氣に冒された體でもない。お主様の寢所へ誰を切る刀ぞ。ヤイ喧ましい音ぼね立てな。エヽ仕了せて後にいはうと思ひしに。こりや太宰大貳諸任公より内通あり。帶刀に預り置く平國の。寶の太刀持參するに於ては、領分伊豫の國の内桑村郡三十町を。永代扶持せられんとの契約。かう近道に持つて來た仕合せ。此の刀で房若をしてやつて。今の間に黒縁の乘物に乘せるぞ。地老入の榮華まで此の頃思案しめ置いた。地聲立てて目を覺すなだまれ〳〵と突つと立つ。まづ待つて下されと引するゑて興醒顏。スヱテ溜息吐いて居たりしが。地やゝありて涙をはら〳〵と流し。詞情なやいつの間に魂が入りかはつたぞ。お主様の御厚恩七年は未だ昨日今日。よもや忘れはあるまい。地二人が不義の忍び合ひあの萬虎がお腹に宿り。身は重うなるといひお家の法度を背

くといひ。親請人の迷惑子はおろさうかながさうか。二人首を縊らうかと内玄關の外絆に。縄まで懸けたを覺えてか。地それにお主の慈悲心奥様の合拳にて。お袖の下より金戴き夫婦連でお家を走り。あの子を悦び三人の命。生きながらへたは誰が庇ぞ。わしや今日が日までお主の方へ足を向けても寢ぬわいの。互の性根見屆けて言交したほどにもない。きたないさもしい心根や持佛に御座る如來様。つい木の切れと思うてかわしや何にも知らねども。地獄も此の世にあるさうな報いがなうてかなはうか。女房子可愛が定ならば分別しかへて下されと。夫の膝にもたれ伏し。聲を立てじと我が袖をフシ口に。くはへてしめ泣きにかこちくどくぞ不便なる。詞エヽ馬鹿律義な。仕替へる分別こつちにない。地わごりよが分別出直せと突立てば突放し。詞よい〳〵そつちの分別極ればわしも思案極つたと。膳棚の庖丁押取り我が子の萬虎引起し。胸元に

差當つれば。ヤレ女め氣狂め。詞恨があらば口でぬかせ。科もせぬ子に刄物を當て。大事の子に怪我させたら堪忍せぬとねめつくる。地女房涙せきくれど。憎いながらも夫の惡事。スヱテ高聲もせず。かこち泣き。詞なう科せぬ者は殺さぬとは。御身も見事知つてか。我が子大事と思ふ程人の子は尚大事。地殊に御恩のお主の子殺してそもや其の報。我が子に當らであるものか此の子が行末お主の罰。憂い辛い報い見せうより一思ひに今殺す。皆御身の惡心からお主と我が子を右左の。兩手で殺すと同じ事これ。庖丁と思うてか此方の心の劍ぞや。詞サア房若様から殺しやるか此の子から殺さうか。生きとし生ける身の上に命を大事とする故に。地熱い灸も堪忍する藥を商ふ魂に。惡魔が入替つたか地獄の迎ひがゆかしいか。慘い悲しい心やと聲を立てねば眼で恨む。恨みは夫思ふは主人歎き一ツを二筋に。零す涙は組絲を。フシ手繰り。出すが如

くなり。地久作はつと得心し。詞アツアさうぢや過つた。お主は根本こちとは枝葉、根さへ枯れねば枝葉は立つ。お主が本ぢや合點したぞ女房ども。ムウ餘り急な折れやう眞實の發起か。ハテ木石ならぬ久作。てきめんの道理を聞いて合點せいでよい物か。地未來まで助かる意見女房と思はぬ善知識と。手を合すれば嬉しさの猶も涙にむせびしが。構へて〳〵其の心を跡へ戻して下さんな。詞されば〳〵我が身ながら此の心めが自由にならぬ。地少しも心に油斷させず善は急げ明日早天都へお供し惟茂卿を頼むべし。地御兩人の駕籠二挺。お太刀持する人足今宵から約束せう。詞御身も休んで七つに出立の用意しや。それなら早う戻つてや。ヲウ火の用心ようしやと門の戸明けて跡を叉。さすとは見えし片雄波。足も音なく見がくれて フシ椽の下にぞ這入りける。見るよりぞつと身も顫はれ扨も〳〵恐ろしや。詞得心も僞り。地斯る邪見の悪人に。夫婦の枕を並べたる我も前世の因果の業。破れかぶれ奥様に知らせ。いつそ割れて出ようか。イヤ〳〵年月重ねし我が夫。罪に落すも本意でなし。遣る方知らぬ我が身やと。むせ返り〳〵スヱテ伏沈むこそ無慚なれ。地扨は簀子の下から突殺さうといふ巧み。エヽ罰も報もかみわけぬ。愚痴とも惡とも恐ろしやあさましや。兎角我が子を代りに立て我も死んで見せたらば。恥入つて惡を飜しお主の爲になるべしと。思ひ定めて萬虎を寢ながらそつと抱き起せば。晝の勤に草臥れてたはひ性根も長欠伸。母にじつと抱付くを抱きしめ。千年萬年と思へども定まる業は フシ詮方なし。地房若樣に代つてそなたの命を母にたも。時には父樣の胴慾心も飜り。お主樣へは御奉公未來では佛樣に。褒めらるゝごと身を添へて フシせくり上げて歎きしが。地おそなはつては詮なしとそつと立つて歩めども。疊も薄き竹簀子下へ知られじ聞かせじと。火焰の淵の薄氷踏むかとはかりわな〳〵、ふるふ足をやう〳〵に鎭め。我が子を密と奥の間の障子の側に寢させ置き、我が身は房若抱取つてそろり〳〵とゐざり退く、跡の疊を貫きて氷の切先突きぬき。〳〵閃いたり。ひらり〳〵と火に映ひ。萬虎が耳の際枕元ハア。〳〵危なや、詞今迄は刄物持つな 地怪我すなと。世話やいたもの可愛氣に劍の山に捨つるかと。思へば目もくれ冷汗に フシ心も、消ゆるばかりなり、地刀の切先萬虎が脊骨に突き當て、胸板かけて貫かれ、ぎやつとばかりに反返へれば目も當てられず身も縮み。知らずに殺す父親と見て居て殺す母親と。つれない親を持つた子やと。思へば前後も打忘れ母はわつと叫ぶ聲。地北の方驚き起き上つてなう悲しや。房若が殺された久作なうと騒ぎ給へば、詞是々申し其の久作が惡心からなす業。されども房若樣は恙なし。殺されたは我が子の萬虎。地委しき仔細は申されず先づ奥樣此のお子連

れ。早う爰を落ち給へ。チヽ心得たと懐中の守刀房若に。さゝする間に女房戸棚の封捻切り。詞是此の袋は寶のお太刀是が大事渡します。チヽ地合點と太刀袋押取り出でんとする所へ。地椽の下より久作厄神の荒れたる如く飛んで出で。ヤア詞罪人ども昔は昔今は今。主面ひろぐがふが悪い。面々の立身づく義理も仁義も入るものか。飼ひかふ犬に手を喰はれ女め故に子を殺した。其の上に此の太刀ぬつくりと渡さうかと飛蒐つて引つたくる。地女房すかさず摑みつき。申し奥様。詞此の太刀は此の女房が跡から持つて追付かう。辻まで退いて待たつしやれ。早う／＼と氣を急けば。心得たりと親子のフシ人走つて表に出で給ふ。地夫婦太刀を引合ひ夫は片手。女は兩手太刀を下に引つするゑ。詞久作えせ笑ひ。己れがよし千人力あればとてこりや。此の脇差で腕節を切落すが放さぬか。なう命捨てた此の女。腕切らるゝを厭はうか。八年九年

連添うて其の様な根性と。知らなんだが口惜しい。いとしい可愛い子を殺さば。邪見の角も折れうかと。地可愛や萬虎に無駄死させた悲しやな。大事の子を殺させて男でも何でもない。あつたら月日を其方の様なむごい恐ろしい。あさましい畜生と肌を觸れて腹が立つと。顔を見上げつ見下しつ。恨みて睨む目の中にフシ涙の。海を湛へけり。エヽ地あたやかましいと振上げて。右の腕を肩口よりばらりずんと切落す。左手は猶放さず。詞これ異國の眉間尺とやら首を討たれて。劍の先喰切りふくんで本望を遂げしと聞く。地唐日本も同じ人女でこそあらうずれ。五體の内一寸でも續いた所に魂籠り。此の太刀は渡さぬといふより早く左の腕切落せば。飛付いて紐付にしつかと喰付き。うなりうめいて引いたりけり。詞ハアヽ徳利子は見たれども。徳利女房今見始め腕なしの振礫とは此の事。すしな女の酢徳利と突放して。細首水もたまらず

打落す。地首は太刀に喰付きながら兩眼くわつと舞上りコハリ夫を追立て追ひまはり太刀の鞘にて打立つる。音は千聲萬聲の砧をおくる夜嵐の空物凄き雲に入り。翼のあるが地如くにてフシ虚空に。翔り失せにけり。地かくとも知らず親子の人待ちかねて立歸り。内を見れば女房の死體は朱に横たはる。南無三寶と目もくらみ呆れ果てゝ立ち給ふ。地久作も半狂亂。詞ヤア愚人夏の蟲。己れら故に女房子をよう殺させた。地敵取らんと切りかくるもうかなはぬ是までと。房若は椽の下。北の方は門の口逃出づれば追ひ返し。走りの下竈の蔭夢に追はる心地して。隱るゝに處なく納戸をさして逃入れば。地久作二人を見失ひ爰やかしこと尋ぬる足も。自業自縛の因果歷然ゑのれが刀に切裂きし。實子の破れに兩足ぐつと踏込んだり。地獄落しと謂つべし拔かん。引かんと悶き簀垣の繩しまり。竹のそげにて脛の肉熊手に搔いて取る如く。苦しむ所

を下に隠れし房若。守刀取り直し。股も脾も覺えたか〳〵。覺えて己をようぶつた切つたり殺いだり突通され。詞ヤレ〳〵痛いは〳〵。餘りむごい 地許してくれと泣叫ぶ。北の方走り出で脇差もぎ取り。切つつ突いつの恨の太刀。房若も顯れ出でてずた〳〵に切りさいなむなぶり殺しののたれ死。天の憎しみ主人の罰。妻子の罰も一時に フシ報いの劍ぞ心地よき。地今は是迄これよりは賴むは佛神天道次第。いさうれ房若いざ給へ母上。親はそれたか鷹の子の心は鳥屋出の大鷹隼。ツメ雁取り鶴取り白鳥取る。手に取る小鷹手馴れ鷹。やがて名を取り知行取り疊を取ると氣逸物。心ばかりは勇めども。身は落草に影隱す歸つて雉子と鷹巢や都の。古巢に歸りけり。

第四　信濃下り

歌今年。渡。りの。伽羅では。ないが。とめてねまきの。一襲。ねまきの。とめて。とめてねまきの フシ一かさね。共に重ねて二襲いざや信濃の雪國の。雪の肌を温めて。同じ契りを重ねんと。スエテ世繼御前も玲瓏も。心折れあふ フシ花の枝。ハルフシ杖に切りつゝ。旅衣。世の憂いつらい知らぬ身は。後強しや後には。金剛兵衛茨菰次郎つはもの二人連るゝとは。誰もなるまいまねて見や。まねて都の町の中。フシオクリさながら〳〵人目。恥かしと ハルフシ笠傾けて。杖つきの。乃の字や誰が手習に。本フシいろはちりぬる粟田山。候べく候に見えたるは オクリ雪折。竹の影やらん藥屋の烟一筋を。り〳〵に讀みなして。スエテ玉章つもる關寺に。歌小町踊のなりふり殘す。霜の小菊の狂咲々々。嵐に狂ふ秋の空雲に。埋れて微なる。三井の御寺は フシあれとかや。彼の秀鄕の。中よしの龍宮海の乙姫の。人の侍宵別れ路は。長地如何にせよとの鐘の聲つがも長良の山續き梢まばらに染めなして。殘んの月の紋所。木の葉衣の模樣よく フシしやんと立ちたる三上山。いつか七曜の末の山。居は萩原小松原 歌待つと誰がいうたヤ。妻戸へをヤ明けて。月に枕。のヤ宿かした。ハルフシ宿柏木の。森ならで。粟津の森にやすらひてそれから。先を見渡せば。沖の鷗や磯邊の千鳥。羽音淋しきさゞら波聞けばさながら。フシ夜の雨。ハルフシ誰がなかだちの。文使。花にをりはへ行く雁も。爰の景色を忘れ堅田に落ちかへり。飛びかふ翼ほのぼのと。帆かけて走る。とも船も戀の道かや舵を絶え。行方白羽の矢走に渡る。から櫓の。ハヅミ拍子が。からり。ころり フシ唐衣。打出の濱打出でて。見れば往來の袖繁く ホオクリ人や。見知らん見られじと。笠を反らせてよそめふる。ハルフシ空には虹の。彩りて花の柄付の。フシ鏡山。顏にほや〳〵秋の日の。さして誰とて恥もせず。構ひはせねど旅馴れぬ身はとりなりも直さんとスエテ亂けし髪の柳蔭しばし。立寄り給ひしに。シテ地是も窶れし旅人の七歲ばかりの幼いの。手の川さ步み渡て[illegible]

木蔭にお休みなされしは。歌都人と見參らす。近頃粗相な事ながら。余吾將軍惟茂樣は御在京にてましますか。若し御存じも候はゞ敎へてたべとぞ尋ねける。ワキ詞金剛兵衞心付き。抑何故に尋ね給ふ。卽ち我々は惟茂の郎黨ども　あなたは何れも御簾中。地只今いづれも下る折柄用事あらば同道せん。誰人なるぞと問ひければ。シテさては聞及びし方々にてましますか。我が夫は御太刀故身を果し世をさりて、羽がひしをれし鷹の綜緒房若とは此の子が事、御情あれや人々よ。ワキ地さては聞及ぶ帶刀太郎の妻や子か。いざ伴はん痛はしや。シテ憐み給へ諸共に。二人フシ同じくしぼる袖の露。ハルフシ野路の篠原。分け行けば番場に續く小野の宿、なじまぬ中も問ひ問はれすれつ縺つへ摺針の峠遙に、見下せばフシ今こそ秋に。近江路の。名所々々を其の儘に。梢にうつす寫繪と寫して人に語る迄。我が扇にも柏原逢ふ夜の夢はいつ迄も。覺さで見ばや醒が井の。水はせかれて淀むとも。我は止めじ不破の關。スヱテ旅行く人も立別れ。稻葉の山や。宮路山草木も染めし麻衣の。木曾の御坂にさしかゝり信濃路。にこそ三重へ着き給ふ。

サシ面白や頃は長月二十日餘り。四方の梢も色々に。錦いろどる夕時雨。濡れてや鹿の獨り鳴く聲をしるべの狩衣。實に面白きナホスフシ景色かな。地花の吹雪の雪ならで拂はぬ袖に積りては、五色の雪と降る紅葉、フシ分けつゝ行けば錦着て、ハルフシ家に歸ると。人や見るらんと。朱買臣が昔を詠みし。フシ歌の心に似たるぞや。地それは唐土の會稽山、こゝは信州戸隱山。今惟茂が身にたぐへ望を叶へ二度都に歸るべき、しるしを染めてますらをが。やたけ心の梓弓。籠の矢さへ紅葉して。スヱテ共に染羽と楯の葉の。帝の御目には。龍田川の秋の夕べ錦とも御覽あり、渡らば中や絶えなんと。惜み給ひし　フシ御製もあり、又は古今の花を踏んでは同じく惜む花紅葉。堪へず紅葉青苔の地。踏までは行かん方もなしあら〳〵。海道面白やな。行くも紅葉葉戻るも紅葉葉。心を染むるも。紅葉葉。もみぢ葉の　フシ蔭に宿れば。雨にもあらず。雪にもあらず。まして露霜霰にあらず、亂れて吹下し袂にはらり烏帽子にはらり。はらり〳〵ばら〳〵ぱつと。風の寄せたる朽葉落葉の色も珍し。詞ハア、聞きしにまさつて嶮しき山かな。谷深く、峰高く。屛風を立てたる如くなるに。櫨楓蔦紅葉、紅錦繡の山黄纐纈の林。錦上に花を敷くとは斯樣の事をや申しつらん。ヤ是なる紅葉の下枝に盃をかけ。鼎の下に落葉かき寄せ薪となして燻らせ。酒暖むる此の風情。林間に。地酒を煖めて紅葉を燒くといふ。詩の心をうつせしは。詞詩人か歌人か扨は又。戀する人の樂みか。花に鶯紅葉に鹿。昆布に山椒戀に酒。ウタヒげに酒は曲物更に得こそ堪え

ね。綸にかく鶴も酒に舞ひ。フシ蓑を酒にも換へしぞかし。地主は誰とも知らねども風流人の爲すわざ。咎めはあらじ立寄つて酌まう。か。詞ヤア向ふの紅葉の木蔭を見ればゝ。さもやごとなき上臈の 地紅葉に戯れ遊覽ある。此の人々の酒なんめり。ウタヒ詞よし誰にもせよ上臈の。深山隠れの紅葉狩。かた〴〵推參叶ふまじと、フシ道を隔てゝ山蔭の。岩の崖路を フシ過行けば。ワキ〽げになう虎溪を出でし賢人も。情は捨てぬ盃をいかでか見捨て給はんと。いふ聲遠くいつの間に姿は爰に忍ぶ摺。亂れをゆるす竹の葉の。便りにフシ立寄り給へかし。シテ地〽思ひ寄らずや數ならぬ。深山にたてる木の下露雫もならず御免あれ。ワキ〽情知らずや一樹の蔭。一河の流を汲む酒も。緣あればとて引留むる。シテ〽引かるゝ袖も ワキ〽ひかふる我も 二人ウタヒ〽さすが岩木にあらざればゝ。心弱くも立歸る。所は山路の菊の酒何かは苦しナホスかるべき。ワキハルフシ〽およそ酒には。威徳あり。愁を掃ふ玉箒。詩をフシつる釣針思ふ事なく。折る事なし。殊更。秋の葉の色。酌みかはす山水に。弓矢は何の御爲ぞ思ひついたり此の山に。鬼棲むなるといひなすを。誠と心得平げん爲な。地おそろしやそれは人の空言。又は御身の空耳かハルフシそもや。鬼すむ。山ならば女を助け入るべきか。まことや鬼の籠るは安達が原の黒塚。葎生ひ茂れる宿の。うれたきに。假にも鬼の。すだくなりとは。昔男のこはざれに。女を鬼との捨詞。普天の下率土の内 フシ何國か鬼のすみかならん。弓をも矢をも打折りて。スヱテ捨てさせ給へまれびとよ。シテアヽウ 詞〽暫く。左樣の儀にてはなし。落來る鹿を射留めん爲の弓矢ざふよ。ワキ〽扨は御身は狩人か。シテ〽、狩人ならねば射ぬものか。地花踏みちらす鶯をうたんといひし人もあり。猿丸太夫が悲みし。色よき紅葉を踏散らす鹿射留めん爲の弓ぞとよ。異國の楊由は百歩に柳の葉を垂れて。百矢を外さず空飛ぶ雁を射て落す。ワキ〽それは柳 シテ〽是は紅葉 ワキ〽それは雁金 シテ〽是は小牡鹿。地名を聞くよりもいで物見せん小牡鹿とて。履いたる沓をふんぬいで大口のそば高く。狩衣の袖をうつかたぬいで。紅葉の木蔭にねらひ寄つて。よつぴきひやうど射ばやと思へども。地佛の訓の殺生戒をば破るまじ。ウタヒ打ちとけて酒を酌まうよ。ワキ地〽おもしろや劉伯倫がもてあそび。今爰に フシ酌めやくめ。シテ地〽晉の七賢が樂み〽重ねて爰に酌めやくめ。シテ地〽是なる山水の巖にかゝる瀧のみ。瀧の白糸くるり〱と。山もめぐるやフシ雲もくるくる。めぐる盃數も忘るゝ我が身を忘れて醉心地。狂言歌只おもしろいよの木の葉の色よりお顏の紅葉。紅葉焚かうより柴召さんか。沈や麝香は持たねども。匂うて來るは燻物。大原木。大原木。〱。買はい〱黒木召さんか。峠の茶屋で。團子ばし買ふな。松の木肌をそろりと撫で

て。其の手で團子な。まろまかすく〵。眞圓まろく〵丸やのかもじが眞圓げな顔で。月見よとおしやる。角やのかもじは眞四角な顔で。炬燵にあたろ。長い豇豆が花は短うて短い栗の。花の長さよ鼻の長い小天狗。しごのばいこのけぢく〵。爰を明けさい明けずば戻ろ。佩いたる太刀に露がうく。く〵くわんこや。く〵。したんにたつほゝエイ。はらく〵にはらはらは。きりく〵く〵しつちよんく〵。ちやうりやうふりやうらりつろゝ。とうらいりやうらりつろゝちやうらにひよ。二人〽よろりく〵とよろほひ臥したる枕の上に。雷火亂れて天地もコハリ響き。酒も鼎も焰となつて梢に騷ぐ山おろし。咸陽宮の烟の中に ワキ〽不思議や今迄ありつる女。地とりぐ〵化生の鬼形と變じ愚なり惟茂。大内にて我が脊屬を矢先にかけし其の恨。微塵になさんと躍りかゝるを太刀拔きそばめ。二人コハリ切拂へども事ともせず。頭を摑んで上らんとす。引下して突かんとす シテ〽山谷一度に鳴動して雲霧暗き ナホス地 其の中に。月ともなく星ともなく一團の野火現れ出で。黃金の太刀一振紅葉の枝に懸ると見えしが。此の太刀自ら拔出でて。鬼神の上にはためき渡り トル三重 閃きかゝつて〽追散し追拂ふ劍の光。紅葉八葉御鉾の刄先。刄の劍相威力に恐れて飛行を失ひ 二人コハリ〽朝日に霜と消え行く鬼神。劍は鞘に納る山風。梢に其の儘殘りし太刀の飾の金玉。紅葉の照葉も耀き渡つて ナホスフシ 山路の草木赫耀たり。シテ地 惟茂茫然としてあらあさましや我ながら。無明の酒の醉 心 現ともなき變化の形。顯著なりける利劍の德と。梢を見ればありつる太刀のましますぞや。天の授くる名劍ならん嬉しや取らんと立寄れば。女シテ ウタヒ詞〽なうく〵其の太刀な取り給ひそ。それには由緒の候ぞや ワキ〽扨はおことは此の太刀の主なるか シテ〽否此の女が身に添ひ果つる物ならねど。タヽキ 我が身は輕き水の泡。浮むは重き水鳥の。お主の爲と憂き世を踏み。心を碎き苦しむる。一ツの望ある太刀を。人手に渡し參らせば。思ふお主の出世の日を。いつかは三保の松原に天の羽衣盜まれし。彼の天人の憂き思ひ羽なき鳥の如くにて。天上せんにも羽衣なし。地に又住めば下界なり。兎やせん角や ハルフシ せん方ら。スエテ 淚の露の玉蔓。かざしの花もしをく〵と。三途に迷ふと フシ 傳へ聞く。其の天人の五衰より人間に八苦あり。ましてや女は五障の雲。三從の霧深きに。從ふべき夫に離れ。いとし悲しと育てつる子を失ひし蘆邊の鶴。善惡二ツに迷ひぬる。來世の闇を如何せんと ノルフシ 只さめ〴〵とぞ泣居たる ワキ地〽覺げなき賤の女の身心得難き詞の末。詞 扨は一ツの望とは。價が欲しいといふ事な。我こそ隱れもなき余吾將軍平惟茂。價は望に任すべし シテ〽うたての事な宣ひそ。數多の命に代へし太刀。たとへ千金萬金も命に價のあるべきか。望とは陰

たのむ。譜代のお主の身の上と。フシいひさしてこそ歎きけれ。ワキ地へ猶も不審は晴れやらず我も太刀を尋ぬる身。詞おことが主人の氏名乘妻や子の身の上。詳しく語れと宣へば シテへ問はれて斯くと語るにもいとゞお主の櫨紅葉。色に出すもつゝましく。別きてそれとは伊吹山。蓬に麻の夫婦の中。あたりに近き フシ不破の關。地人目の關を凌ぎ越しもとは。互ひの忍逢。狂ひ合うたる唐猫の。お主の膝元懐しく。御恩をいつか送らんと身こそ貧しき暮しにも。心を直に フシ世を渡る。地竹の子は猶親まさり鳶が產んだる鷹の羽の。羽交の下に立返り奉公させん大人になれとたつ年月もたぐり来る。歌三ツで髮置き五ツ袴着。六ツで寺入り上げる手本の數々は。じッいろはの年弱七ッ。撫でつさすりつ撫子の花の笑顔の。愛らしさ父と。說辭母とが樂みは。吉野初瀬の花見にも。カン劣るまいぞや優るぞや。劣るまじきと育て上げし賀の。唐崎一ッ松ハルフシ外にならびも。なかりしに。地寵愛餘つて我が夫の主人の子を刺殺し。我が子の末の榮華にせんと惡心巧む恨めしや。地因果々々の同い年この手柏の二面。一葉を分けて身代りに立つを夢にも白刄の刄。果敢や親の手にかゝり胸の邊りを。刺通し刺通さるれば氣も魂も。消え〳〵となりはてし其の俤の身に添ひて永き闇路に。フシ迷ひしなり。地かゝる歎きに沈みしも哀れお主を世に立てて。罪を作りし夫の後世非業の死のみどり子も。母が修羅をも助からん願の絲は一筋と。スヱテ玉を貫く涙の露 ワキへ見ればしをるゝ惟茂卿 シテへ山の紅葉も一入に 二人フシへ歎きの色をや添へぬらん。ワキ地へ心弱くてかなはじといかに女。詞おことが歎きも不便ながら。惟茂が尋ぬる太刀は望をかくる人多し。何者か奪取り何者の手に渡りしやらん。其の主の名を聞かでは望かなはんやうもなし。地太刀を改め事を紏し奏聞して得さすべし。都へ尋ね来れやと太刀を取つてぞ出で給ふ。シテ走りかかつて太刀もぎ取り小脇にかい込み。詞なう心強やつれなや。譽ある主君ならば大音上げて名乘らんもの。不覺を取りしお主の名何面目に名乘れとや。地園に植ゑても紅の色にもそれと知召せ。 願ひかなはぬ其の中は此の太刀我が身は放さぬとよ ワキ詞へげに〳〵是も道理なり。さて日本には名劍多し。此の太刀の銘太刀の威德。聞及びても知りつらめ語れ聞かんと仰せけるシテ詞へされば主君の物語。御太刀の御本地聞傳へし趣を。あら〳〵語り申すべし。

劍の本地

詞先づ葦原大日本。神代三振の寶劍あり。一ツは天のはぎりとも。又は十握の劍とも申し。大和の國石上の御神體に立ち給ふ。又一振は八雲起つ。八岐の大蛇が尾先より顯れし天の叢雲の寶劍。素盞雄尊祇園の牛頭天王の フシ御劍なり。地今一振は素盞雄尊の御子。日吉山王權現とも。三輪の明神

とも拜まれ給ふ。地大貴己尊の御劍。事も愚かやこれ。此の　此の御太刀にてましますなり。二人それより代々の帝に傳りて。人皇十五代の姫帝。神功皇后神風や天照太神宮の告によつて。新羅の夷を　フシ討つべしと。御身もさすがたゞならぬ子もち月の中空に。ハルフシ韓國さして攻め入り給へば。中臣のいかつの臣。吉備の鴨別兩大將。兵船軍船凡そ二萬八千艘。順風に帆を上げて。さながら悠々平地を行く。扨皇后の御座船は　楯籏弓鑓。鋒鎧兜腹卷を飾立て、ノ〵錦を疊んで包み立つたる屋形には欄の纜。綾の帆を上げ絹傘御傘清々。と檣が原の波間ふり。住吉の神榊を取り。龍女は干滿の珠を捧げ。鯨鯢龍車を先として。八尋の鰐や鯱鉾や。鰯に鱸に鱧鰹。あらゆる魚族鱗を並べ。君が御舟を守護しつゝ。コハリ三日三夜は三つ羽の征矢飛ぶ鳥よりも猶はやく。七千餘里を漕渡り百濟國の大港。ふうとうの津にご御船着く。百濟王傳へ聞き。

小國なれども日本の神軍に。士卒の力を勵ますべしと金城。鐵壁。四百餘箇所に搔き並べ石疊石臺山の如く。鋒先揃へ矢先を嗜いて待ちかくる。ワキ〽日本勢に事ともせす船を洲崎に乘捨て　シテ〽乘捨て　ワキ〽乘捨て　二人〽乘放し駒の手綱をかいくつて。鞍越す波を乘りすかし。向ふ波を三頭に下り。一鞭くれてさつ〳〵と乘放し　フシ乘浮め。向ふの岸に上るもあり。又は遠矢に射て落す。矢先は降る雨降る霰。喚き叫んで戰ひしは。百獸の洞の中虎の駈けるに異ならず。敵も味方も入亂れ。切つつ切られつ追つつまぐつゝ鎧の袖を。汗に浸してやれ。さて。さて〳〵〳〵。ホヽ〳〵〳〵〳〵暫時の隙もなかりけり。されば日本神力の。住吉現じ給へば。八百萬神七千餘社。旗の手に顯れ出で。神明鏑矢射かけ給へば。此の太刀自と拔け出でて。ひらりひら〳〵切立て〳〵。トレ三重二十餘ケ度の。戰に味方は討たれず手も負はずヲヽ。〳〵〳〵

新羅百濟高麗國の。荒き夷を此處に追つ詰め彼處に追ひ。追つ詰め〳〵攻滅して。歸る波風安〳〵と。正八幡を　フシ産み給ふ。扨こそ三國和合して。龍宮城より嫁君娶り高麗の伶人舞樂をだし　オクリ呉織〽漢織の。人の織姫きたりん綸子。金襴緞子を織り弘め。詩書禮樂の　フシ道廣き。聖の書も渡り來て。上に惠の政事萬民德に潤ひて。風雨隨時に治まる事此の御太刀の威德ぞとて。太平國の文字によつて平國の。フシ御劍と。申し奉る。ワキ詞〽げに有難やこれぞ我が尋ぬる太刀。望を叶へ得さすべし。賴む主君の名乘は如何に。シテ詞〽今は何をか包むべき侍所の預　鷹巢の帶刀太郎廣房。主君の若君房若殿麓に佇みおはします。地今爰に誘ふべし世に立てゝたべ惟茂卿　ワキ詞〽正八幡も照覽あれ此の契約は違ふまじ　シテ地〽嬉しや有難や。今は迷の霧はれて　ワキ〽悟に入れや戸隱山ワキ〽山風　シテ〽谷風　二人〽さ。さ。さつとして。木の葉隱れをよ

く見れば形は。秋の露きえ。きえとて顏梢に莞爾たり シテ地〽 房若親子二人の軀二人の郎黨誘ひて誰が呼子鳥そことなく。分け入り給へば惟茂卿。互に始終の物語ワキ地〽 房若が父帶刀は勅勘の首なれば。奏聞經んも事むつかし。惟茂が家臣として過分の所領を安堵せん。地 元服加へ名を改め。鷹巣の小太郎廣文と名乗るべしと御諚ある。地 はつと頭を地に着けて悦の色淺からぬ シテ地〽 女が首は嬉しげに笑を含みし梢の色。紅葉も同じ形見ごとと。請けたる袖の廣文が。フシ 末頼もしゝ頼みあり。ハルフシ 此の御太刀の。御威光に金剛兵衞が金剛力。茨菰次郎が仁王力。戸隱山の大明神天の岩戸を天の原。取つて投げたる手力雄其の大力加つて。鬼神忽ち亡び失せ八洲の外に波もなく。のゝめき渡る雲井の空へ。やがて再び。歸洛せん南無や戸隱大明神。早く瑞相見せしめ給へと一心に御祈誓あるさてこそ。廣文成長して。頼光に奉り。酒呑童子を退治ある。源平兩家の寶の太刀上古も今も末代も。例すくなき御神力と紅葉を。幣とぞ奉る。

第　五

地 賢者を得たる渭水の狩にたとへは畏れ紅葉狩。寶劍を求めしも自らの德によつてなり。太宰の大貳諸任。思ひ立つ旨ありて戸隱山に勢子を入れ。我が身は山の半腹にヮシ 敷皮敷かせ休らひける。地 勢子の大勢駈來り晝前より只今まで。詞 狩暮し候へども猪猿兎は存じも寄らず。野鼠一疋出で申さず。辨當食べた手前もあり。いかゞはせんとぞ申しける。諸任打笑ひヲヽサ其の筈其の筈。知る通り當山には鬼神すんで人間をさへ取喰ふ。兎狸を生けて置かうか某山狩とは僞り。汝等に斯くといはゞ腰を拔して一人も。供するも者あるまじと思ひ山狩とは觸れたれども。地 誠は鬼神退治なりといふより勢子ども顫ひ出し。後を見ては前へ出で フシ 前へ／＼と込出でける。詞 拐揃うたる臆病者。某數年願ひをかけし。平國の御太刀惟茂拜領し。戀焦れたる世繼御前まで彼に下され。片落の御沙汰と思へども。上へ恨も申されず。地 其の上に此の山鬼神退治の勅諚。何もかも彼に仕負けては諸人に面も合されず 詞 鬼神退治とあるからは扮裝もあるべきに。納め過ぎた惟茂が素襖長袖長袴で。毎日山を廻ると聞く。地 諸任が下ごゝろ鬼は附けたり惟茂退治の合點。サア侍から足輕中間奉公とは此の度。命を主にくれたと思ひ。惟茂と引つ組んで刺違へ。此の無念を晴させよ フシ 頼む／＼といひければ。地 勢子の者ども猶顫ひ鬼とはいへど目に見ぬ事。第一好かぬは惟茂。其の上に金剛兵衞茨菰次郎なういやゝ。鬼に鐵棒惟茂に牡丹餅。再々手並食べつけた。ハア、悲しや。俄に虫喰齒が痛んで來た。お暇申し上げますと フシ 一人逃げて立ちければ。持病の中風が起つたと口を歪めて起つもあり。當月老母產月のヤ。今日は我等か叔父

桓武天皇の命日の。南無三跡の義實屋の。錢忘れた遣つて來う。旦那寺の長老が斷落しられた。船頭が屋根から落ちた馬子が川へ陷つた。何のかのとかこつけに皆々 フシ外し逃げにけり。地郎黨禰宜の平藏立上りヤレ臆病者。一足でも立去らば一々首を討つべきと呼ばはつても聞入れず。詞あれ御覽候へ殘らず落失せ主從二人。鬼すむ山に安閑として手柄にならず。誤つては御恥辱。麓へ一先づお下りあれかしと云へば。チヽ我もさは思へども。最前鑓にて金剛兵衛と茨藏次郎がちらり／＼と見えたれば。地此の道下るは無用心奧山は又鬼の氣遣ひ。今では惟茂と兩方に敵が廻つて來た。どうぞ脇道はあるまいかと。ウタヒ夕日も年も傾きて。文彌七十餘りの柴人の。腰も撓れし山道を。たどぼく／＼／＼歩み來る。詞こりやこりや老爺。何と此の山に脇道はないか。鬼がすむとはいへども。定めて劫經た熊か猪かを。鬼といひなすものならん有樣にいへと

ありければ。さて／＼疑深いお侍必ず油斷なさるゝな。或時は女ともなり或時は小ぼけな小坊主で出る事もあり。時によつて鼠衣に頭陀袋道心者とも現るゝ。彼の世話に申す鬼に衣といふ事は。地此の山から起つたけな フシ御用。心とぞ答へける。地さすがの諸侍聞く度にびく／＼しもして。サア／＼どうぞ氣遣ない道があらば敎へてくれ。詞サアそこが變化の通力。今日來た道は明日は無く。昨日まで無い大石が夜の間にぬつと出來るやら。大木が生え出で山人を迷はすやら。道とて更に定まらずチヽ怖いこと／＼。さりながら忝い余吾將軍惟茂樣。鬼神退治なさるゝ由國中の悦び。是を妬んで鬼の諸侍とやら。惟茂樣を狙ふとの風說。此の諸侍めを見付次第。打殺いてのけうと國中の若い者。地手ぐすね引いて待ちかけると。いはせも果てず胸倉摑んでどうと投げャイ爺め。詞うぬは惟茂に何ぞ貰うたなあ。此の諸侍を見知つて。氣遣させて笑はん爲の僞。まこと鬼のすむ山に己れは何とて柴を刈る。但しうぬは鬼の一門か。有樣いはずば踏殺すとはつたと睨んで責めつくる。ムヽいかさま御不審御尤鬼神に横道なしとて。當山戸隱大明神の氏子の分は指もさゝず。却つて守護致す故。氏子に惡うあたれば眼の前に仇をなす。總じて氏子に限らず山を住家の山人。地柴でも木でも肩に置いて通れば。夜でも晝ども フシ恐れなしとぞ語りける。主從顔を見合せこりやかうもあらう事。詞ヤイ爺め。此の柴身がかたげる。汝は道の案內先へ立つて行せをれと。柴取つてかたぐれば。エイお前がおかたけなさるゝかアヽ是は御大儀な。慮外ながらお先へ參りますと。文彌地樵路に肩を休めたる。年の功とて山人が。鬼に取られし荷ひ籠をさして 三重へ下りける。地房若は只一人長刀の一本ざし。股引輕き山傳ひ母上追ひかけなう房若。詞いふ事聞かずにどこへ行く姫君達のお伽はせず。大人衆と

同じ樣に山へ登つて何をする。地戻らぬか房若と引きとめ給へばこれ母樣。詞なぜ房若とおつしやる。わしが名は小太郎廣文もう大人ぢや。鬼神退治のお供して。鬼の子でも殺さねば父の恥が雪がれぬ。地やつて下され母樣と踏みしまれば母上も。詞オヽ健氣な事よういうた。地父御を無事で置きまして今の詞を聞かせたい。悦び給はんものをとて。スヱテ又嬉しきも涙なり。諸任は坂中にて茨萩次郎に追立てられ。峯ともわかず逃上り。草にや隱れん土にや入らんとうろたゆる。小太郎は味方と心得是なう〳〵と呼びかくる。諸任見付け南無三寶。はや鬼が現れたと フシ地に喰ひついてぞ伏し居たる。親子の人も興さまし。詞アヽこれ麁相な。其方はそも誰人ぞ。こちは鬼ではないわいの。顔上げて念を入れ是よう見やと笑ひ給へば。イヤ念入れて見るに及びませぬ。ある時は小坊主或時は女とお化けなさるゝ由。お噂とつく〳〵と承る。一時に二種は御念入るほど迷惑。鬼神退治致すは平の惟茂。我等は結句其の。地フシ惟茂を滅す橘の諸任。お恨受けん覺えなし助け給へと額づける。親子目配せ音に聞く諸任。父の流浪も彼奴ゆゑ久作一家が滅びし遺恨。鬼より大事の敵ぞと。心賢しき小太郎大音上げ。詞ヤイ〳〵。おのれを橘の諸任とは我が通力で知つて居る。惟茂殺すは己れを頼まず。鬼一口に噛んでやる。どうでも汝が太刀刀の差しやう。此の鬼どもを退治する面つきぢや。地待つて居れ。がり〳〵と噛んでくれよ。疑はしくば眞の姿をあらはそか。わん〳〵〳〵といひければ。詞アヽ〳〵胴慾な事御意なされな。退治する氣儀塵もなし。太刀刀がきづかひならばこれ。地御覽あれと大小からりと投出す。親子押取りするり〳〵拔放し愚かなり諸任。詞誠は我こそ帶刀太郎廣房が一子房若丸。惟茂將軍の家臣となり。元服して鷹巣の小太郎廣文。地父の恨み世の敵眼の前主君に敵する奴。餘すまじきと兩方より打つてかゝれば。諸任猪の怒りをなし。ひらりと外しひらりと拔け。かい潜つて北の方を小脇に掻込み太刀もぎ取り。寄せな特め一討と。八方拂ふ切先に左右無くも寄りつかず。母は悲しみ聲を上げ。我を捨てゝはや逃げよ。大事の身ぢやとあこがるゝ危かりける最際中。金剛兵衛茨萩次郎。敵の郎等猪選平藏を引包み。打立て〳〵來りしがやれ出來いた小太郎。しつぱと討て小太郎と力を付けて拜み打ち。胴は一ッに二人の太刀。平藏か首より十文字にぞ切割つたり。諸任是はと見返る間に小太郎隙さずつつと入り。たゝみかけ〳〵。太刀打落し眞甲眉間にたゝき伏せ乘つかゝつて。詞ヤイ泣こなりや今ぢや〳〵と 地胸板を。抉りくりくり首打落し。アヽ。好い氣味ぢやと笑ひしは天晴武功の親ざんと フシ母は悦び限りなし。地兩人樣び御手柄〳〵。鬼の首同然の功名いよ〳〵君の御仕合。麓へ下つて一先づ御覽に入れ

られよ。母御の滿足さこそ〳〵といひければ。詞されば御推量なされませ。あの親程な責任を、鬼になつて騙した地言ひ廻しの辯舌、後には人も賣りましよとオクリ笑うて〳〵打連れ下りけり。地金剛兵衛息をつき。さて何でもない奴に餘程の骨折つたり。肝心の鬼に逢うた時くたびれては詮もなし。暫く休息せまいかと。十抱餘の榎の古根横たはつて苔蒸せり。ヤア屈竟の休み所と兩人あげ足腰打懸け。心揃ひし不敵者。鬼神退治は事ともせず世間魑魅魍魎に向かうてはと。紅葉を眺め悠々とフシ氣をのばしてぞ休みける。不思議や虚空の闇の中臼挽く如き鳴れ聲。詞何者なれば推參な。足を伸してまどろむ所膝の上でやかましい。蹴散して退けうずやつと呼ばはる聲。地振上げ見れば一丈ばかりの鬼の面。角は枯木頭は茅。眼の光は鋼鐵をフシ打つて付けたる如くなり。二人太刀に手をかけ下を見ればこは如何に。地木の根と見えしは鬼の脛。朱塗の岩とも謂ひつべくさすがの者どもはつとせしが。詞ヤア不行儀な鬼殿。人の前に臑を伸して見苦しさ。地足が長うて苦にならば切りこまげて取らせんと。切付けんとする處を乗せながらねつと上げ。おうと呻く跳ね足に。百間ばかり蹴散して消すが。フシ如くに失せにけり。金剛兵衛すつくと立ち。詞これ荚蕨。さぞや鬼が心には我々を蹴散したと思ふらめ。我々は又鬼の臑を下敷にしたからは。勝負は五分々々。地サア是からは鬼にも人にも氣が出來て面白い。奥山深く切入らんいざ來いといふ處へ。詞剃下野郎の小奴が。だいなしの裾ちりけまで。歌詞股から富士山見え申す。地關内角内可内よ。取つたかとらんか虎藏よ。奴々小奴に。山の手やつこ〳〵ゑ。詞關内角内可内よ。地とつたかとらんか虎藏よ。やつこ〳〵に小奴に。山の手奴のさあさ振出して。フシ踊り狂ひて遊びけり。地金剛荚蕨目を見合せ。詞變化が戯々引いて見る侮つたる振舞。地あつちから侮らばこちらからも鬼をなぶりもの。なぶり殺しにしてくれんと。詞ヤア小利口な奴殿。地是へと招けばちよこ〳〵〳〵。宸へと呼べばちよこ〳〵ちよこ。さつても擬つたりまだ擬れ〳〵。踊る所を飛びかゝり。討たんとすればひらりと飛び。斬らんとすればはつと消え。陽炎稻妻水の月。眼に遮つて手に取られずフシあきれ。果てて立つたりし二人の頭を兩手につかみ。踵は空に引上ぐる。切つても突いても只雲水を切る如く。踏みしめても大象に引かるゝ如く。覺えず宙に引上げらるれば。天地俄に震動してフシ山河も覆へる如くなり。聞くとひとしく惟茂將軍山上に駈上り。南無正八幡大菩薩と。心に念じ彼の平國の寶劍を拔て切拂ひ給へば二人を大地にかつぱと投げ。劍に恐れて雲井に上るを。引下し刺通し切伏せ給へば。地其の丈一丈の鬼神の正體。怨む惡鬼を滅し給ひ。威勢日に増し所領も増して。二人の姫に數々の子孫繁昌。國繁昌民繁昌萬歳萬歳の大日本神と。君との恵ある御代に。住むこそ樂しけれ。

[illegible]

二郎兵衛おさき 今宮の心中

近松門左衛門作

忍い〳〵。忍い〳〵月見花見は何所も同じ。諸國名所のその中々に。オクリたぐひ〴〵難波の舟遊老も若いも下人も主も。男女がござ〳〵船に袂。凉しき。川風は秋と云ひても。嘘でないよの。じやれでないよの本町橋を。フシ潜出て見れば天満川。市の側なる初甜瓜買うて冷してひいやりと。瓜を二つに打割れば似たりや似たり燕子花。地紫帽子河水に。映らふ影を水波が。汲んで寄うて詞持つや樋の棒。坊主頭を装立てて。道正坊の金柄杓あれ〳〵。撫でて通れば一撫に。フシはや本復の伊丹酒茶舟で下る。樽肴。地在所嫁御の里歸。上荷で送る葬禮や世の有様の様々を。一時に見る舟遊これ常になきお肴と。一つ勸むる盃や。詞然れば船のせんの字を。公に薦むと書きたり船の屋形に三味彈けば。フシ納屋に油の臼を挽く。橋のいよこの。橋の上にて賣る聲は。地煙管團扇煙草入。役者評判扇賣。難波藝者の風俗を。橋々名所に擬へて書き集めたる藻鹽草。伊勢ゑの蟹にあらねども其の瀧荻野八重桐を。詞龜井橋ぢやとおしやる。心はの。先は御旅の神かけて。跡先に又續く者がないはさて。袖島源治は新靫ぢやとおしやる。それなぜに。鹽町のしたたるたる。然も藝には骨があるといの。地葛城常世は江の子島とよ フシなぜ〳〵。狗ころ〳〵抱。寄せて手飼ひにフシ愛らしや。地扨又嵐三十郎。詞鰹座橋とおしやる。心はの。何の料理に使うても仕出が甘いは扨。櫻山庄左衛門福島ぢやとおしやる。心はの。小柄なれども張詰めて地舞臺一ぱい嵩ちあい。藝に身もある口中のしより〳〵したる雀鮓。それで藝穂の何所やらがフシひりゝとするとぞ答へける。地音羽二郎三を雑喉場とは。譬かや、上村吉彌は伏見堀ぢやとおしやる。鯖があるとの義理はの 地舟板町の舟板の末には神に乗出だし。帆を十分の印とて今から人や焦るといふ事。さて市村玉柏梅田橋と見立てたり。夫なぜに。はて渡れば色町越ゆれば火屋。誰にも愛にもようつるは扨。詞杉山平八を四つ橋とはこれどうぢや。江戸からも京からも四方へ引つつり引張つた。地踏んばたかつて山村がくわつと擴げた兩足は。百間堀を思出す。善惡二つを嚙分けて。六義を糺す柴崎に。思案橋を思出す。篠塚二郎左を見る時は。大佛島を思出す引。三代つゞく奴風。嵐が風姿を譬ふれば。其の江戸堀を思出す引。嘉十郎が顔付に炭屋町を思出す。敵は三原重太夫。序にて作りし悪心の。切で報いの引。フシ來る時は。

地 六質屋橋思出す。思出し〳〵。尋ね行く先づこれ迄が片表。裏の御堂も高々と立竝[illegible]を[illegible]し。辨當濟まば檢家具も。釜もちやく〳〵あらや橋。跡へはんなり入花の茶備後橋はこち〳〵と。寄せよ〳〵濱際のフシ瓦町。橋にぞ着きにける。詞 [illegible]屋介五郎は如法なる。氣も丸額にこやかに。詞 申し[illegible]。此の永き日の馳走ぶり亭主由兵衛さこそ草臥。地 暮も近しこれからお上りなされとありければ。隱居の貞法七十三眼鏡いらず杖つかず。詞 顔は一枚も拔目なき男勝のかみ様にて。詞 テヽそれ〳〵これ由兵衛。念の入つた馳走でいかい[illegible]。此方の内から出た人が。店一軒の主になり商もしにせて。親方一家を[illegible]とは此方とら嬉畢竟其の身の手柄。さりながら女房がなければ。人の世帶は落付かぬ。身代藥の女房を早う持つて落付きや。さうでないかとありければ内儀も共に打笑ひ。何故に女房持ちやらぬ。地 但し何處ぞに思入りかなあるか

いの。由兵衛思ふ圖に乘りて。詞 誠に今日はお心ようお遊びなされし[illegible]。其の上女房の事までお尋ね。詞 [illegible]の通りちと思入りござれども。地 此の女房が行き易うて行きにくい。どうでかみ様お家様への。お口を借らねば參られぬ事。はてこちとがいうて濟む事ならば肝煎らいで何とせう。其の思入れの名は何といふ誰ぞいの。詞 由兵衛始と笑壺に入り。ヤア有難い添い三度禮拜仕る。名を申せばつい御存じされども先づ只今は。お名をばえ申すまいよのしやん〳〵。地 サア是からが本酒。亭主から又始め。擇りながら介様へ。詞 [illegible]に若女房一節頼むといひければ。詞 介五郎盃受け申しかゝ様。地 二郎兵衛が法隆寺より戻つたに連れてきて。あれが好きの心中を語らそもの。テヽさればいのせめてきさが居たらば。氣女を驚かうものと。地 いへば由兵衛興醒顔。詞 ふゝ二郎兵衛は母親の年忌に當り。在所へ參ると申したが。きさも一所に二郎兵衛と

連立つて參つたか。アヽつがらない。地 きさは此の頃風引いて。詞 頭痛がするとて宿へ往たと。聞きも敢へず由兵衛。地 エヽ内方も此方等がゐた時分と違ひ。自墮落になつたなあ。青二歳の二郎兵衛めを丁稚上りの分として。母の年忌で候とて此の忙しい最中に。十里近い法隆寺へ行かせ様が氣に入らぬ。事にきさが煩うて宿へ歸つた時分に同じ様に内を出でろくな事は仕出すまいと。滅多無性に一人職人も知らぬ心を苛つ。船辨慶にあらねども。詞 無明が沈みし其の有様に。又由兵衛が悋氣を燃し。舟辨慶 頭立て盃預割り[illegible]前後を忘するばかりなり。地 [illegible]一家の人々は何の心もつかざれば。早日も暮れた。最早これから歸らうと。上り支度ゝ由兵衛危い事はちつともなし。提灯用意致せしと取出せしが南無三寶。詞 蠟燭を忘れたこれ九三。大儀ながら一走此の通の百貫町。詞 四五町往けばおきさの宿。定めて知つてゞあらうぞ由兵衛が申す。詞 蠟燭一

擬寶してたも。ちつと氣色がよいならば。ちよつと此處まで出てたもといふて渦道しておじや。地序に内に氣をつけて誰もないか見廻しや。早う早う合點か心得ましたと帶もせず。襦袢一つの裸身や フシ百貫町へぞ走りける。地昨日今日前髪とつて下手代。また新枕の三郎兵衞おさきと淡き中入の。南京鍋の上邊には手にない樣に仕立口。在所はいかな横堀の知造の前に隱れゐて。暮るれば眞處へと通路の。既に見ゆるあの舟の屋形には。貞法樣お家樣。舳には女堂寺町の山兵衞ヤアこれならぬ。外しませうありやどうぢや。袰の提灯久三が持つて。歳から來るはおききぢや。樣子が無うては叶はぬ爺と。氣ももやくつて蒸暑き。材木納屋に立隱れ オクリ 事の〳〵樣をぞ窺ひける。フシささは樣なく〳〵。地走寄の是は〳〵皆樣今日はお慰みと。只今久三の物語私が氣色もしか〳〵とはなけれども。おかみ樣お家樣へ願ひあげます御新話事。直に是へ參りしも。アヽおとましい事出來まして。一倍樣に在所の嫁入をお止めなされ下されと。氣合に當りますと フシ溜息吐いて居たりけり。詞貞法もつく〴〵見て。此方へ訴訟の事有りとは。どうした事ぞ嗜して見や惚るべき事なら聞かいではと。さも懇の詞の末ア、お腹立とて怒り。詞昨日の晝方三田から私が父親上られ。小さい時から在所で。約束し置いた男の姑の身故。急に嫁入を急いで來た此の度お暇申しうけ。三田へ連れて歸りて嫁入さすとの申し分。地御存じの通り私は幼い時より大阪に育ち。手痛い事は仕つけず殊に病者な身を以て。在所の手業がなんとして。詞夫故當座の間に合に。內方のおかみ樣が御懇に遊ばし。舊功なした若い者ども數多の中。一つにして此の大阪で物の見事に躾てやらう。必ず外へ約束すなと常々のお詞。是が反古になるものか在所へとては歸るまいと。私は申しますそれでは親の一分が立たぬと。いうての親子諍。地多分これへ見えませう私が口の合ふ フシつど〳〵語る下心。地三郎兵衞は合點にてあの言分は我故。男に親を見替へる心中者めと。材木に抱付き フシぞく〳〵悦び居たりける。詞はとは〳〵尋ねつき。詞妻屋敷のお縮は是か。さきが親三田の太郎三郎でござります。ヤア親父殿か。それ酒進ぜ茶進ぜと。取々挨拶ありければいやお茶も食べました。詞定めてきさめが噺でお聞きなされませう。在所で許嫁のかより。急々に欲しいと申すにつき。中途ながら一生の身の固め。斷立てゝお暇取れと申さば。在所へは行くまい大阪で男を持つと申す。それは我儘親の云條を反くかと。叱つても聞入れず。己が男は內方のおかみ樣次第に任せてある。是非とも親のこうけんに在所の男持てならば。おりや死ぬるが合點。娘殺そといふ事かと大聲あげて吠えまする。お主のお慈悲に御意見を頼みます。在所が婿と申すも食ひ兼ねぬ身代。地行きをれば

彼奴が果報。世帯佛法腹念佛。口に喰ふが一大事彼奴が食ふは違うて。大阪の男に喰付いたか。やい其處な呆氣者。詞在所の男ぢや大阪の男ぢやとて食ふに二つの味なし。地一人の娘に親の身で無味ない男を食はさうか。エヽ親の思ふ程にもないと フシ涙を流し恨みける。おきさも流石親心。思ひやれども二世かけて交せし事も捨てられず。只かみ樣のお情を頼みまするとばかりにて スヱテ同じく。泣いて居る姿。貞法も不便さに親父の言分理が聞えた。詞さりながらあのきさが病者で。在所方の荒働一年と續くまい。詞身に藝もない事か銀の湧く手を持つてゐる。二百目近い給分を只の女子にかこふか。地廣い大阪に男養ふ商賣とはあれらが職。五人三人は針一本で樂々と過す手を持ちながら。山家在所へ傾ひに往かうとは。無分別かと思はるゝ此の談合は取置いて。きさは此の貞法にとんと預けて置いてたも。此方の内にも子飼の者躾る者がたんと有る。良い婿取つて後々は。親達も大阪へ呼ぶ樣にして遣らうと。念の入つたる割口說。由兵衛扨はあのきさを我等へ隱居の心當。日頃の念願成就とこれ親父。詞隱居樣へ任せて在所は變改したがよい。此の由兵衛も旦那の蔭で。安堂寺町に手も廣う商し。手代の一人も使うて今日のやうな饗應に。二兩三兩遣ふも皆親方の光。まだ女房を持たぬはかみ樣へ。とんと任せてあなたの媒酌待つてゐる。地かみ樣のお心で此方と私が婿舅に。なるまいものでも御座らぬなうおきささうぢやないかと。いへどもきさは胸塞がり。アヽどうやら知りませぬと フシ打傾きてゐたりけり。地太郎二郎一々に聞屆け。詞きさめが申した分では更々胃の腑に落ちませぬ。かみ樣のお御意で發起いたした。御尤々々。地親方の躾らるゝと申すに先は幸ひ一門中。何の仔細も申すまい此の上はきさめが縁付は。どうなりとももうお暇と。立たんとすれば由兵衛分別顏にて。詞これ貞法樣。是は大事の請取物おきさも若い人の事。後日のもやもや喧しちよつと親子に手形させ。きさが緣付き貞法樣の御指圖背くまい。外から一言邪魔させまいとの 地手形が。取りたいものと差込めば。貞法打頷き。是は由兵衛がいふ通り手形を取つて置きたい。詞それでも父樣無筆なり明日でも私がかみ樣へ。地手形してあげませうと辭退する程由兵衛。いや〳〵たとへ無筆でも判がなくば筆の軸。手形は我等が取らうと煙草盆の硯引出し。早や書きつける提灯の蔭二郎兵衛見濟まし聽濟まし。ヤア彼奴が勸めて手形させかみ樣賺してきさを貰ふ分別。此の判させては一大事何とせうぞ石を打つて。提灯を打消してのけんと。石を尋ぬる其の間に手形の文言思ふ通に書濟まし。詞これ宛名は菱屋四郎右衛門樣貞法樣。親三田村太郎二郎。詞サア印判といひければ御念が入つて忝い。私の荷が下りましたと。巾着の印判黑々と。

詞サアおきさ我が身も判を据や。いや私は印判持ちませぬ。そんなら父が裏判をと。地同じく揃ふて貞法様。いよ／＼頼み上げますと差出せばヲヽ／＼。是では此方も如才がならぬと。数珠袋に納むる内二郎兵衛溝の石を掻け。由兵衛目がけて打つ石が。塀板に當つて一はずみ川へざんぶと水散つて。由兵衛一蹴りそりや暴者が石打つわと。立ちあがる所を續けて打てば由兵衛が。額に當つてあ痛しこれは危し。皆々星形へきさも乘つて戸を閉ちやと。無理無體に箱に乘せ親父も早う。去つしやれ。色怪我さつしやれなといひけれどもいや／＼是は目出度い。きさか嫁入の談合に石打つとは吉左右。地目出度うござるといふ小鬢にはたと當れは南無三寶。こりやどうぢや目出度すぎて芽が出たと フシ抱へてこそは歸りけれ。地猶も續けて打つ石に。提灯も打破れ。由兵衛ら敗亡しおきさに心あるやつが。戯謔かはくに紛れない船頭舟をやつてたも。

久三おじや此奴めを踏んでくれう任さつしやれと。上るを見て二郎兵衛横へきれてぞ 三重へ歸りける。地由兵衛久三大汗にて何かへ失せた／＼と。橋へ廻れば年配なる浪人侍。髭奴の草履取何心なく來る所を。詞ウぬ覺えたかと久三郎奴を橋へ横投げに。眞甲を四つ五つ疊掛けて喰はする。主人これはと立歸り久三を掴んで打ちつけ。踏付け／＼踏む所へ由兵衛駈付け。ヤア爰にけつかるかよう舟へ石打つたと。掴みつく手を確と取り。何さ石打つたとは誰が事。慮外者めといふを見れば歷々のお侍。アヽ／＼御免なりませ人違で粗相致しました御許されて下されませ。お慈悲でござると泣叫ぶ何の御慈悲と捻上げ。向脛を傍向けにはたと蹴返し。これ奴腹わたの出る程此奴踏め。任せておけろと土足にかけ。うなよく身を打たせたナア。覺えて居ろと 地胴骨尻骨うんと踏めばぎやつといひ。うんと踏めばぎやづといひ眼玉も出づるばかりなり。詞もうよいわ／＼。死なぬ程にして置けさ。地此方へ來いと主從は フシ悠々として歸りけり。命からがら由兵衛あ痛／＼と起上り。詞久三其處にか。エヽ聞えぬぞや。今の樣に踏み居るを見てゐる筈はあるまい。や此方が聞えぬ。地此方故に最前喰はされたり踏まれたり。エヽ振舞食うたばかりに云はれぬ人の肩持つて、阿房くさい振舞が戻つた。御座れ戻ろと立上る。ヲヽ其方はせめて振舞を食うたが。此方は物入振舞うて。擧句にしたゝか踏れた。向後饗應致すまい御馳走が身の災厄。酒盛つて尻踏まれたと獨り言して 三重へ歸りけり。

中之卷

フシ本町や。地新物店の若い衆は。女とも見えず男なりけり。女子交りの針仕事。つい一針が永き世の緣の端縫しどけなく。尻も結ばぬ絲櫻 フシ綻びかゝるうたてさよ。地二郎兵衛は在所より戻つた顏して二三日。仕事は常より精出せどもきさに拗言佞言。

乾反し直し上下を鐙にかけて打ちけるが。詞エヽ是は糊加減の悪い袴ぢや。よそ〳〵の人の心の様に。彼方へはひつたり此方へはひつたり。移り易い國根性なら。おきさ殿。此方が頼でかゐ様の肝煎で。安堂寺町へ嫁入の時。此の様な袴殿に着せたらよかろ。其の晩に石打たれて小便壺割られぬ様に。抱締めてゐさつしやれやいの。おきさ殿やいのおきさ殿う。オヽ嬉しい。ほや頼もしや。ござらぬ是。此の私が仕立てる袴子も。詞やらが氣によう似て。なんぼ直に縫うても端へ〳〵と往き居る。聞分けのない者は此方に似合ふ着さつしやれ。私等が氣には入らぬといへば。ハテ氣に入らずば打破つてのけたがよい。ムヽ打破つてもだんないか。それはどうして打破る。まつ此のやうに打破ると。詞横撲上げて打擲を。とん〳〵〳〵。何方やらの男と他方々々の女と。渡らぬ先にとん〳〵〳〵。ととんとんとぞッと打ちにける。地面下代口々にやい〳〵ほたえな。それ向ひの出店から丑藏のわせゐ見えぬかと。云ふ所へ四郎右衛門に。眼病に毒とは知れど渡世の世話。詞なんと仙臺の注文は仕舞うたか。秋田の荷を積んだらば今宵へ往て金請取りや。ヤアト庵老は未だ見えぬか。地ト庵が見えたら灸をせう女子の手が空きちや。きさに點ゑて貰はうし二郎兵衛に手傳さしよ。手のふるはぬ様に仕事仕舞へ。他の者は出店へ行けといふ所へ。詞物まう瀧川ト庵御見舞申すと。つゝと入ればヤアお出でか待ちかねました。詞先づ是へと上座へ通せばト庵。今日は廿三夜なれど一向宗はお構ひない。明日から八町上明前一枚とより御座る。詞どれ脈を見ませうか。私の申した通り藥喰をなさるゝか。ハテ當て脈が能うなつた。顏を見る證に。左の脈がふは〳〵と打ちまする。ムヽ胸の中にも腹などは大温の物。兼て無用と申したよもや食ひはなされまい。地右の脈か頭痛なはもし擂子などは参らぬか。風氣もなし點を致さう硯をといひければ。詞で點を頼みませう。これきさ二郎兵衛。油火灯して艾を揉み。地先づ二三百撚つて置きやと打連れ〳〵奥に入りにける。地あつといふて二郎兵衛行燈點しつ土器灸り。艾出して揉まんとするをきさは立寄り隔ぐら取り。詞こりやあんまりぢやぞや醋いぞや。先度から段々と物いふ間もない故に。心底が語りたさ傍へ寄れば。ひかしやかと詞言の有るじやう。安堂寺町とは何事ぢやアヽ嫌らしい〳〵。地是なう誰しも此方の年配では。十六七の左褄をすき好む最中に。四つも五つも年嵩の私に惚れて下された。詞私や其の心に打込んで親兄弟も棄てたぞや。在所は生れ故郷なり兩親の傍に居るものが。住きとらない者はない何の所縁に大阪に。執心はなけれども此方といふ人に離れるが悲しさに。お主を騙し親に背き身を狂はす心を。可愛やともいはずに面白さうに拗言。コレ死んで見せうか死に兼は仕ま

せめて二郎兵衞殿と抱きつき　フシ聲をも立てず隱し泣き。二郎兵衞もしを〳〵と。堪やく〳〵と背中を撫で　フシ共に涙を流せしが。地シテ先度の手形の文言は。どうぞどうぞといふ所へ卜庵奧より立出づる。詞ヤ是はもうお歸りなされますか。　れば歸らうか。まそつと遊んで灸行の相伴せうか。地やあゐいと煙草盆引寄する。二人は艾拵へながら此の首尾に語りたし。早う去ねがな〳〵ともがけど去ぬる氣色なく。詞なんと灸行いひ付は無かつたか。冷麦か素麺か。なまなか茶漬位ならいつそ戻つて寝てくれう。地内證知らしやといひければきさは悦びさし心得。旦那様は毒斷で夜食はあからず。卜庵様へはつい茄子の淺漬で。茶漬進ぜとお家様のいひつけ。早う歸つて御寝なつたが増しで御座ろとたらせども。詞何ぢや茄子の淺漬ぢや。一段よからう。地それに出端を付けたらばと茶臼形になるを見て　地おきさも呆れいつそ面つて御座んせと。佛頂顔に二郎兵衞艾に火をつけ庭の[illegible]へ卜庵か雪踏の裏。[illegible]は試と囁き立て　フシ煽ぎ立てゝぞ燻らする。地呪は理外にて卜庵氣にや徹しけん。是は不思議千萬。詞俄に宿へ歸りたいもう往にましよ。地滅多に往にたうなつてきた。ハテまちつとお遊びなされませ。いや〳〵俄に往にたうなつて足の裏がこそばいと。疊に足を摺付〳〵降りければ。二郎兵衞雪踏をちやら〳〵と直し申し卜庵様。詞旦那の目も直りませう灸が早う驗きましたと。地いへども我が身の上とは知らずチヽ卜庵が名人御覽あれ。一炷で驗が見えましよと。足の踵の氣味惡げに　フシ雪踏踏ならせて歸らるゝ。サア旦那の出られぬ間に手形の文言早う聞きたい〳〵。詞さればいの文言はどうやら讀んでも聞かせず。宛名は讃屋四郎右衞様貞法様。親子が印判しましたと語れば二郎兵衞はつと驚き。詞エヽ由兵衞めが文言を聞かさぬは曲者。地おきさを由兵衞へ遣はさうと書いたやらしれぬ。日頃そなたに心を盡す由兵衞め。どうこけてもうぬが盗のよい樣に書いたは定。地三田の親仁も粗相なり。これ後文言吟味なしに判するといふ樣な[illegible]の邪魔とはその手形。地どうぞ手形を盗んで破つて棄てたいものぢやといへば。詞アア苟且にも盗むといふは怖い〳〵。ハテ錢銀の手形か慾徳になるにこそ。地傍輩由兵衞との色づく旦那に損徳かゝらぬ事。いつもあの[illegible]に手形ども置かるゝ。[illegible]はそこらに見えぬかなんのこゝらに置かれうぞ。お家樣かみ樣旦那樣。三人の外介樣へさへ持たされぬ。何時ぞ事にかゝる樣積み文言見たがよいわいのと。いふ所へ四郎右衞門なんときさ二郎兵衞。詞艾が未だ出來ずば向の出店へ往て。女房どもにも撚つて貰へ。更けぬ先に仕舞ひ度いどうぢや〳〵氣かせ〳〵。あい〳〵艾も皆出來ました。御勝手に遣はしませ。そんなら宴で斷う向いて。それ二郎兵衞[illegible]。[illegible]山椒に。小[illegible]

熱けと桛くるりと灸のばば。前を後に目は見えず何をせうとも頷いて。地くすりくすりの灸箸オクリ痴話の〳〵便の薄煙。地十四の灸に水が湧く盛の女盛の男。手を締め身を撫で口を寄せ。誰を忍ばんさしも草 フシ是ぞ因果の皮切なる。地やう〳〵灸も點ゑおろす主人の帯の前巾着。後へ廻る紐とけて繋ぎし鍵は巾着より。半分こぼれかゝりたり二郎兵衛見付けて。簞笥に指さしきさに目配せ。天の與と取らんとすきさはいやぢやと手を振れば。大事ないとて頭ふる。手をふる頭ふるひ〳〵。手を出し手を引く唐猫の フシ燠を弄ふ危さや。詞由し旦那様熱つくばちと押へましよか。いや熱うはないが精がつきた。よい加減に置きたい。まちつとでござんすそれまちつとぢや 地まちつとぢや。そりやよいはと鍵引出せば狼狽へて。はしの灸を取落す熱や〳〵。もう〳〵是で仕舞はう奥へ往てちと寢よう。二人ながら寢んでくれようしてくれた過分なと。悪事と知らぬ主の慈悲。仇となつたる身の果のオクリ冥加に〳〵盡きしも道理なり フシ二人は顔を。地見合はせて鍵は取りは取つたれど。主の目を眩ませば胸が慄うて怖しい。誰ぞ來るか番しやと合せて見たる簞笥の鍵に。あたるも地獄の錠前を。明けて搜せど衣類の外は三原の合口時代の印籠。箱に入れしは蓮如樣の名號。ハア合點のいかぬ。手形箱はいつも土藏へは入らぬが。戸棚に入つたか知らぬと 地常見覺えし戸棚の鍵。何の苦もなく戸を引明け。搜せば一通上書に手形とあり。嬉い是が欲しさの狂亂と。戴き〳〵二つ三つに引裂き。懐に捻込んで跡仕舞はんとする所へ。詞門を明けたは誰ぞ。だんない者と由兵衛上口迄つか〳〵と。地影を見るより二郎兵衛戸棚の内へ這入れば。きさは前にひつ添うてハア由兵衛殿か。上らしやんせと後手に。フシそろ〳〵戸棚を鎖しにける。詞由兵衛とつくと見濟まし。旦那は灸をなされたげなとつゝと上つて是やなんぢや。大事の鍵ども取散し簞笥の口も明けてある。これおきさ退きや。此の世間物騒に戸棚の錠は何故おろさぬ。地さらば鍵も腰に付け。錠をおろして置きませうヤアしやんとなと 地卸す錠の音。内に響けば消入る心地きさはわな〳〵〳〵と。直に死にたいばかりにて フシ前後にくれてぞ見えにける。地由兵衛きさが手をむずと取り。詞これおきさ。先度船へ石打たれた其の疵がこれ未だ治らぬ。此の打手が知れました。今宵旦那の戸棚へ入つた盗人と同人。定めて此方も助けたからう。戸棚を明けて沙汰無にして遣ろうか。旦那の耳へ入れうか此方の心一つぢや。地何と〳〵といひければ手を合せて頼みまする。日頃に恨もある者を打棄てゝ其の詞。生々世々迄忘れませぬ一生の内此の御恩。どうしてなりとも送りませうどれ鍵貸さんせ。預けましよと。取付けば押退け 詞ヤア甘い事いやんな。何時ぞ〳〵と今迄釣られた

は何十度。此の以前貴様が津山玄三殿に奉公した時から惚れて居た此の由兵衛。是非思を晴さうなら。其方の口へ手拭捻込んで。寝る術も知つたれども。それは戀とは言はれぬ。地此の戸棚が明けたくば此の首尾につ いちよつと。身を焦して下されちよつとちよつとと。取付けば突放し逃げて廻れば追廻し。抱付く所をあた面倒なと突倒し。詞由兵衛の生畜生。文言知れぬ手形に能う判捺さしやつたなう。今其方と寝たらばなんぢや戸棚を明けてやらう。忝い嬉しい。夫が嫌さに此の苦勞いひたくは云や大事ない。地二郎兵衛殿と此のきさと懇をしてゐる。戸棚の中なは二郎兵衛私も科は遁れぬ。詞好かぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生と。所存極めし涙の聲由兵衛聲を立て。詞ヤア若い衆は出店にか。盗人が入つたぞ久三や竹は宵の口。地何所に居ると呼ばはる聲貞法始め長兵衛權兵衛。皆跣足にて駈付ける由兵衛居丈高になり。詞これ御覧あれ。旦

那殿の腰を離れぬ此の鍵を。盗み出しあの如く。簞笥を明け戸棚を明けし所へ。身が來るを見て戸棚の内へ逃込んだ。所へしやんと錠を下した中に居るは二郎兵衛。地手傳は此のおきさ請訴人は此の由兵衛と。出來顔の腕拱きさは涙に性根もなく。内外の者ははつとばかり フシ 顔を。眺めてゐたりけり。地貞法鍵を腰につけ四郎右衛門はもう寝てか。旦那に聴かせて兎も角も思案が有らうとありければ。詞由兵衛先づ町代を呼びに遣り。宿老殿へ知らせて 地町中提燈。繩よ棒よと犇めけば奥より由兵衛〳〵と。手を叩いて呼ばゝるゝあいと應へて奥に入れば。四郎右衛門小手招き。詞次第とつくと聞居けた。子飼と思ひ肌を許し扨も〳〵憎い奴。灸の間に鍵取るは恐ろしい仕方。さりながら己が聞いてはむつかしい。地夜中にわや〳〵町内の外聞もよからず。外へ物さへ散らずは己が聞かぬ分にして。済まし様もあらう事。何いうても夜が更け

ろ二郎兵衛めは籠の鳥。其の分で戸棚に置きさめは今宵請人の。姉めにきつと預けにやりや。急いては粗相もあるものとつくと分別して見よう。女房子どもが怖がらう。直に出店に泊らしや。手代どもも同へ母者人は爰へ來て。お寝みなされと申して其方も歸つて明日おじや。必ず何にも穏便に背の中に皆寝さしやと。蚊帳に入れば由兵衛元の所に立出で。詞夜中に旦那のお耳に入り眼病に障れば如何。何事も明日の事これ長兵衛權兵衛。大儀ながら此のきさを請人の姉女夫に。地きつと預けて直に出店へいつて寝や。サアきさ立てといひければ。詞申しかみ様参ります。詞私が身は構はねども。二郎兵衛に科のない段は申譯のあるもの。事。地お家様へもお執成し萬事頼み上げまする。盗人の名を取り是が悲しうござんすと。わつと泣出し送られ行く オクリ 目も當てゝられず不便なり。地サア貞法様奥へ御座つてお休み。我々も明日早々久三も表を

よう閉めて。夜敏に寝やとて出でければ欠伸を直にあゝといふ。返事睡たき夜中聲ッン廿三夜の代待や。地門の道にまだ四つ。内は靜まる燈火も心も細く三重〳〵更けにけり。フシ物の憐み深きこそ。後生願の フシ心なれ。人も寢入りて貞法は寢覺の床を起出で。戸棚の傍に差足し。詞こりや二郎兵衛生埋讀め。詞聞知つたか阿房めと。地こと〳〵と讀かるれば地獄で地藏に逢ふ心地。詞ア、かみ樣かお耻しや。庖丁でも薄刃でも柄を拔いて戸の間から。そつと入れて下されませお馴染たけのお慈悲ぞとスヱテ泣く聲漏るるばかりなり。詞アレ死ぬる程の性根てさもしい事をするものかと。地袖を覆うて錠鍵の音せぬ樣に戸を明けて。其所へ出をれ。町人といひ年寄の婆なれど。詞菜刀でなりとも己れが首は切つて遣らうと。故意と詞を荒らゝかに叱られてしよぼ〳〵と這出つる帷子も汗に浸りて時の間に ッシ顏も痩せたるむごらしさ。地流石子飼の

主心叱る心はわきへなり。思はず涙を流さるゝ。詞二郎兵衛顏振上げ。貞法樣面目もござりませぬ。地お主の罰とばかりにて フシはたと。俯伏し。泣きけるが。詞存じの通り今迄に一錢掠める我等でなし。氣も遣はねども耻しや。ささとねんごろ致せしを由兵衛めがねたにこみ。何かな見出さう見出さうと文言知れぬ手形を書き。詞きさ親子に詮議させ旦那のお手に入りし事。如何にしても覺束なく此の手形取られたればかり。戸帳の内で微に聞けば旦那のお耳へ入らぬとやら。地どうぞお耳へ入れずに濟むやうに賴み上げまする。あの眞直な旦那殿お心の蓋親が。首斬らるゝより悲しいと。隱居の膝を敲き〳〵 フシ聲に喰付き泣きゐたり。詞やれ其の言譯は己れが心の料簡よ。主の腰の巾着明け。屋内の鍵を盜取り此のたいそれた言譯が。出處でそもや立つべきか。地由兵衛が我が儘な手形とは見たれども。其の場は其の日の亭主方無興と思ひ

其の手形は。とうに破つて棄てたぞや。きさめと己れを夫婦にして末では所帶に躾んと。此の年寄が苦に持つたも斯う破れては水の泡。何程慈悲がしたうても。理を非には枉げられず。目の明かぬ主と由兵衛などがいひ立てては。傍輩どもも氣がふれて後で人も使はれず。詞己れに不便もかけられず。思切つてききを由兵衛にやれ。時には四方圓くなり其方も是に勤めよく。主の恩も遂らるゝ。詞己れが心持次第池田の姪中にても。女房には事缺さぬ地ききを遣るかどうするぞと。我が子に意見をする如く叱りつ泣いつ割口說。二郎兵衛も只泣き入つて スヱテ暫し返事もなかりしが。詞一々お詞聞入れぬは。畜生に劣る二郎兵衛なれども。あつと申して御恩はよも送るまい。元服も致したものを丁稚よりなほ押下げて。地さしてもない事言立てに踏まねばかりに撲ち敲き。蟲でも堪忍なり難き無念を凌ぎ參りしも。お家のお蔭で一日もきさ

と一所に住居をせば。由兵衛が面を踏返した同然と。思へば今日の奉公も心まめしう勇みしに。やみやみときさめを渡しこりや見たかといふ面が。見てゐられうか口惜しや。どうも私は爰へまいと無念涙は目に餘り。袖を食切り我が身を摑み。身を顫はして歎きしは フシ心底。道理に。無慚なり。いや申す程おまへの慮外。兎に角元の戸棚に入れ彼奴が致した通り。錠を下して下されませ直に寺へ參らばこれ。今生のお暇乞。御恩を報ぜぬ段は御免あつて下されませと。這入る所を引出しやれ恩知らずの物知らずと。腹立涙の隙よりも。詞十二の歳より飼育てし。二郎七の昔忘れたか三日にあげず煩ひて迚も用には立つまじき。往せ〳〵と人毎にいはぬ者もなかりしを。地此の妻一人情を張り在所へ戻さば死ぬるは定。島本の患者とは此の事と十八の春まで。呪よ薬よと孫子にもせぬ世話をして。地四郎右衛門にも物入させ。やう〳〵と人になし。傍輩どもも嫉む程人に勝れ目を掛けしに。半帳に入る時兼屋の婆が阿呆盡し。盗人を飼立て親方は眼病なり。身代空けるも知らぬと四郎右衛門泣寄らせても。己れが一分立てたいな。御堂の晨朝參りにも。女子ども起して苦勞かけては後生にならぬと。己ればかり伴れしに明日より明時に參られず。地願ふ後生も願はせぬあさましい氣が附初めた。此の家に馴染めば犬でも猫でも貞法は醜いめが見ともなく。可愛さにこそ口叩け。此の上にも我を立てて己れが情を情に立て。死にたくは戸棚へ入れと詞いつ威しつ様々に。慈悲心餘る涙の意見フシ後世に入つたる聲なり。地二郎兵衛聞入れてや勿體なや。今合點參つた。思切つて由兵衛にささを遣りませう。詞ムヽ夫が定なら誓文立て。來月は母の七年忌。此の頭取請取した此の母を。奈落に堕しませうと地後先知らぬ誓文の。フシ一つは罰も當るべし。ヤヽ出來いた〳〵此の家久しい番手代由兵衛と張合つて勝つて負けといふもの。何事も貞法が美しう濟して遣らう。二階へ上つてもう寢めと戸棚の錠前しと、下し阿房めがおききばかりが女房か。彼の樣な洒落者より。おむくむく〳〵の手入らずを抱かせうぞ。南無阿彌陀佛南無阿彌。陀佛とて奥に入る フシ心殊勝に哀なり。地二郎兵衛夢とも誠とも氣もうつとりとなりけるが。さもあれ彼の手形醜の破つて棄てしとや。今破つたは何ぢやや知らぬと取出し合せて見れば南無三寶詞七貫五百目上本町の家質の手形。此の箪笥に元利殘らず相濟む筈。はア。〳〵。地はつと開いたる口も。何に塞がん身の罪科。一期破れば二疲起る。畑雲の空恐ろしく。よろめく足許何の破を引寄せて。合せて見比べて更に増がれぬ命の難儀。どうも生きては居られぬ死ぬるとも生きるともエヽテきさは放さじ離れじもの。先づ此の家を駆落のひよろつく足を踏留め〳〵。表へ出づる中の間の合の戸

そつと明けければ。竹が蚊帳に丸裸を焼く蛍明々たり。エヽ邪魔な蚊を追はば皆むべし。アヽ如何せん何と扇の一煽ぎ。はつと消ゆればアヽ悲し。詞憎の風めや火を消した。今宵一夜は蚤と蚊に此の肌を手向けるぞや。地あつたらものを久三でもおじやらいで。詞二郎兵衛殿とおきさ殿挨拶見れば恭しうて堪らぬ。色此方も金には在所へ往て。粟島でしけろと。ころりと寝たる音ばかり フシ軒の闇はあやなしや。地やう〳〵と門口の貫の木堅き家の風。鍵は久三が預りにて。朝比奈ならねば門破 フシ詮方盡きて立ち居たり。地預けられたるきさが身の出でては姉の迷惑と。知れど夫の懐しさと。わけて割なき割菊の紋の風呂敷引包み。菱屋の門口櫺の穴覗いても音信は。蚊の聲ならで便なく胸じやくりして泣く聲の。内へ微に聞ゆれば二郎兵衛も櫺の穴。顔を寄すれば覚の香の。梅花の薫はおきさか。おいの二郎様か。詞語りたい事ばかり

蚊がどうも開けられぬ。詞此の戸一重が關守と。互に身をすり氣をもがき フシ泣くより外の事ぞなき。地難波橋の辻に寝し犬一疋吠えかゝる。聲につれて方々より七八疋。きさを威して吠立つる フシ恐ろしなんども詮方なく。地放れがたなく門口に縋取付いて立つたりしが。詞中の間の竹目を醒し。あれ久三門にいかう犬がなく。何もないか起きて見や。地おうと答ゆる寝聲の返事。そりやこそ久三ときさは東へ二郎兵衛は。中戸の蔭にぞ隠れける久三は例の襦袢一つ。寄棒提げ貫の木明け。潜開いてつゝと出で。詞ハテ何にもないもの非人かな通つたか来い〳〵来いと。地呼べば犬ども尾を振りかゝる。エヽ蒸暑いが外へ出れば極楽の西風。エヽ忝いと 地涼む間に二郎兵衛。積重ねたる築地の日野絹。一反解いてくる〳〵〳〵。身も顔も眞白に引つ包み潜をぬつと飛出づればなう悲しや幽霊ぢや。幽霊よ幽霊よと逃込み門口はたと鎖す。危なや

地獄極楽の堺筋からこれ爰と。招かれ寄りて何事も先づ此の近所を退いての事。當はなけれど南の方人や咎めんぐる〳〵と。絹をも包む世を包むその風呂敷の木綿帽身のなる。果こそ、三重

二郎兵衛おきさ道行　下之巻

歌一つとや。一つ涙の蘂の糸。落ちて三途の川となる。二つとや。筆もあれかし我が心。書いて後世に止めたや。三つとや。見たや聞きたや 地故郷の。親の生顔 フシ夢にだに。夢さへ見せぬ死出の旅。醒めては何時か此の娑婆へ。フシ歸りこんどの藪入は。女夫連でと約束の。地盆正月の十六日を待ち樂みし我々が哀れ地獄の。釜の蓋。開くを待つべき罪人と オクリ 呵責の。責はよもやその。シテ愛しい此方。ワキ可愛い其方。シテ逃すまいぞや 二人離さじと フシ縋り抱寄せ泣く姿。スエテ咎めて吠ゆる犬の責。此の世に地獄見せけらし。是も思へば親の罰。私は親よりお主の報。オクリ育て。られたる

お情や後生願の親方の。宵にや和讃夜中にや念佛。早真夜中の。フシ月魄の。フシ空を力に東堀。澄み行く水に影映る。我が身の濁恥しゝ。恥は暫時の浮世なりとも。戀をする身の手本町とは二人が。心一つに米屋町とも。思ひはかりて後生七生助かる。己が殿御は日本おろかよ唐物町にも。稀な男のちよきりこきり小女房。花の様なる若子を儲けて久太郎町とて。やがて寺入久寶寺町。地其の豫言も。フシいつしかに。フシ空寝の夢の博勞町。地誠に私もこなさんも。跡には親の枯れ殘る。老木の老の世はさかさまに フシ順慶町も空ごとや。安堂寺町も子故の闇に迷はせ。ません不孝の罪。何と遁れんあさましと。フシ又引寄せて泣く涙。袖にさし來る鹽町や。長からぬ世に長堀の樂な世界を心から。九之介橋や是や此。詞瓦屋橋とや油屋の。油搾木の音に聞く。お染に染めじ久松は。いつの時雨の一雫の。洗へど落ちぬナヨイ紺衣。世に弘がりし

仇し名を。よそに謡ひし言の葉や。其の油屋の一節も。師走油か。身の上にイ。かゝる涙と溢れそひ明日より同じ三味線に。法の灯油屋のオタリ回向を心へなすこそ フシ哀なれ。一つあるさへ惜しき世に今宵限と堀詰や。命二つを二つ井戸深い緣とて死にたいも。皆罪障の大和橋。あの千日に立つ煙無情の雲の五月雨 フシ降らぬ先にと 歌死場尋ねて露にしみづく帷子。肩と裾とは薑花色。腰に弘誓の船に帆掛けて。後に磯馴の松原。是を最後に京橋やら。西に川口船の帆柱。既盧に蛭子の フシ松原。松のくろみか雨雲か。降らぬさきとて道急ぐ。はや曉の鐘人や。歌死に行くものヨホ知らいで人の。浮世仇口曲もなや。知らいで人のヨホ知らずや人の。浮世念佛も賴もしく。傾く月を。知るべにて。空を拜めばをち方に。とどろ〳〵と遠く鳴尾の海かと聞けば。あれ〳〵よそに聴く フシ雷鳴の。落ちかゝるとも。我がつまをとのけて涙の袖おほふいや。我は

男よ其方をと互に覆ひおほはれて。今死ぬる身も生身には。目に恐ろしき電光野。な。かの水に飛ぶ螢。御堂の陰はまがはじと。歩みよろよろ足たゝぬ我の。森にぞ 三重 着きにける

フシ二人は松の。地下蔭に スヱテどうど座を組み泣きけるが。詞男は氣弱き若い者 詞アア譯もない事したわいの。内にゐる時走のさきの。菜刀でなりとも一人死ねばよいものを。詞死ぬるに連を拵へて旦那には事缺かせ。家の名を出すといひ女房の親兄弟に。雜儀をかける野太い奴と。死面をまぶられ。日頃立てた正直も無になり。由無い者に緣ふれたと其方も世間の評議におふ。許してたもやとばかりにて フシ涙。正體なかりけり。詞なう死際まで其の樣に私が事思うてか。嬉しう御座る 忝いと。フシ共に打伏し泣きけるが。詞されども夫は愚痴ちやぞや。恰好こそは大脇なれ。昨日今日の前髪を姉というても大事ない。きさめが酷や殺

したと悩みは我が身一つにて。そこは露ちり厭はねども世間晴れて宿小屋持ち。若い衆のつき合にも女房持つたとて。人が笑ひ誹らうか。此の両の手のありたけは命限りに稼ぎ出し。まあ十五年辛抱すれば。こなた様は三十六我は丁度四十一。老[illegible]に縄を付けうことぞと。思うた事いうた[illegible]ゝは是非[illegible]。人世は[illegible]。中有の旅の道芝に見失ふ事ありとも。大死と言うて下さるな。六道の辻にて必ず巡り逢はうぞや。テヽをんでもない事たとへ畜生界に落ち。虫けらに生るゝとも同じ虫と生れうと。思ひ詰めたか詰めました。さはさり乍ら何にならうとも知らぬ身の人界の見納め。よ一度顔がよう見たい。私も見たいと引寄せ〳〵。我故に殺すか。女房故に死なしやんすか愛しいぞや愛しいと。盡きせぬ歎きひぬ思ひ涙に濡るゝ。夏草の露蒸れて伏してぞ泣きゐたる。地あれ〳〵夜明も近付くかちら〳〵人の通ひある。二人が帯を結び繼ぎいうた通りと解かんとすれば。詞いや帯を解いては見苦しからん。此の絹は親方の商物。盗みはせねども断りいはねば盗みも同然。地これを此の木に結はへ付け且

[illegible]にて首縊れ。且那の手にかゝるも同然。一つの縄や[illegible]。是も男と女郎花それは[illegible]は又。うなりし松に手を取りて消ゆる[illegible]。最期[illegible]心の〳〵罪に[illegible]。地[illegible]しめても上り傾ふ男の體。女子の身でさへ上るものこりやどうぞいのと手を引けば。二郎兵衛涙をはら〳〵と流し。詞アヽ主の罰の恐ろしや。[illegible]の中に[illegible]お咎。[illegible]く咎。地土足にかけし其の咎お許しなされ下されと。[illegible]松が枝にそりや雷が鳴らうぞや。[illegible]。日ごろも知らぬ[illegible]。地浅い事なから顔を寄せて下さんせ。[illegible]首ず見たい見せたいと。くわつと[illegible]わつと泣き。[illegible]。地涙の雨に二重三重しめつけ〳〵。二丈の絹も我々が一つ間は一丈ぞ。詞[illegible]浄土は一寸も伸へも縮めもサアよいか。首の結目生々世々解けぬ契の堅結び。サアも一首にいはれぬいひたい事は[illegible]か。其方はないか私は父様母様が。懐しいこればかり我は[illegible]真実[illegible]の事いうて盡きせぬ此の外

はつたゞ南無阿弥陀佛ばつかりぞ。サア只今が南無阿弥陀佛。南無阿弥陀佛〳〵。と踏みはづし。落つる袂を引寄せて抱きついても苦しみの。寄りては離れ離れては足を。縮め手を伸し虚空を掴む[illegible]の。互の目には見えながら物はいいはれず若代の。松に懸れる下藤。嵐に揉む如くにて次第々々に弱り果て。地消え行く星と諸共に。一度に息絶え目を塞ぐ。裄丈揃ひし死姿刃に伏すは古手にて。これ心中の新物と聞く人。回向をなしにけり。

右之本令吟味頭句音節墨譜
等不殘令加筆候可有開
版者也
竹本筑後掾
竹本博教 印
重而手以著述之本令校合候
畢全可爲正本者也
近松門左衛門
大坂高麗橋壹丁目
正本屋 山本九兵衛版
山本九右衛門版

百合若大臣野守鏡

近松門左衛門作

序詞 千早ふる御威勢、背に千箭の靫と五百箭の靫を負ひ、臂に稜威の高鞆をはき。弓弭を振起て堅庭を蹈んで淡雪の若く蹴はらかし。稜威の雄誥神代よりこれ勝関の始にて。悪神悪魔和やかに治まる國も平けく。續く平城天皇のオロシへ御代の春こそ。長閑なれ。地早新玉の四方拜節會菓子小朝拜、二日は梅枝臨時客 三日四日七日に打續き。朝覲大饗白馬の嘶ふる玉の砌には、踏歌の沓音もフシ春めき渡り寒からず。地詞中 縣召の除目は吉日に任せ。諸國の受領を召さるゝ中に豊後の國の鎮頭、太宰の大郷和田丸は權の帥に任ぜられ。去年より在京勤めしが仰下さるゝ仔細あり。甲冑弓箭を帶し出陣の出立にて。參内仕れとの宣旨なり。そもそも此の和田丸は房前公の苗孫、精兵神武の良雄、都には田村丸筑紫には和田丸とて、牛角兩輪の弓張月雲居の庭も照渡る。錦革の腹巻霞の松雪の梅、金銀にて据金物打つたる直垂。生年二十八宿の星兜を童に持たせ、南蠻鐵の鐵の弓鳥打を四寸ばかり、白き紙にて巻きたるは、フシ大將軍の標かや、地綰む股靴の郎等別府の郷武者雲足同じく雲住、鎭權府内の太夫秀主か一子、市助丸秀虎思ひ〳〵の道の旗、花も雜も折り添へて兩隣近く伺候ある。詞頭の中將仲成を以て御下されけるは、今度蒙古國の蒙起つて、新羅百濟を攻動かし、直に日本を趁さんと賊船七百艘、對馬の沖に來たる由日夜の注進頻なり。然れば汝が弓勢百人の力を合する由、百合すると書いゆりと訓す。今日より氏を百合若と改め。假に大臣の官に擬へ、此退治の御鎮を賜はる條、地西戎に押渡り日本國王の、武臣百合若大臣と名乘つて、蒙古の北狄一戰に切鎮め、天下太平の忠勤を致すべしとの綸言なりと宣へ給へば、ありつと謹み承り東狄征伐の勅宣は、調兵仗の家に生れし慣珍しからず候へども。氏を賜り高官に擬せらるゝ事。生涯の面目何事かこれに如かん。某未練の弓矢たりとも神國の威光切先に輝かせ、攻戰ふ程ならば四夷八蠻が一時に寄來るとも。一戰に蹴散らし萬里の波に切沈め。地天機を安んじ奉らんは百合若が方すの。胸の間に候とフシ詞渝しく奏せらる。地叡感殊に麗しく、關院の左大臣冬嗣公、御座の中より錦の袋に込められし、御の箭にて射いだる鏑矢一手取出し、詞是は人皇の始大和の國天香山に巣を組みし、香取丸鹿島といひし鷲鷹の風の羽、雲井彦尊東の夷退治の時、鹿島の香取丸にて甲矢を矧ぎ雌鷹鹿島丸にて乙矢を矧ぎ。地大敵を滅し國

武天皇と仰がれ。百王の守と遺されし。詞然れば夫婦一手の矢夫を慕ひ妻を慕ひ。假令所を換へ置いても遂には一所に廻寄る。不思議ありとの傳なり。則ち甲矢を御邊に授けし乙矢は帝都に止めらる。地この片矢を身に帶し千里の海山越ゆるとも。雌雄の鷹の契によつて。追付け目出度く凱陣との。宣旨なりとて賜びければ百合若御階に進寄り。三度拜して頂戴ありフシ箙にこそは收めけれ。地勇氣に募る猛將に稀代の武運を添へ給へば。龍の水を得たるが如き勢にて。夫れ忠臣は天下の爲門を過ぐるに我が家に入らずといへり。宿所へ歸らずこれより直ぐに發向せん。軍奉行は別府兄弟。扨市郎丸秀虎は其の儘跡に殘るべし。詞軍の供に外るゝ事無念とばし存ずるな。汝が父の秀主が老病甚だ重しと聞く。乳人なり譜代なり國の柱要にて。百合若が爲にも親同然我に代つて看病せば。戰場に先駈して。如何なる分捕力名の忠節にも優るべし。先づ本國へ早馬立て軍兵の催促せよ。地先陣後陣の手配は敵によつて轉化する。島夷の軍術何事かあるべき。軍は互に船軍と覺えたり。先陣に輪鋒船を立並べ。水彈を湛へ敵の火矢を防がせ。射手船には一枚楯突立て〳〵武者走を高く上げ。船後を二行に列ね盲船に竹束つけ。螺鉦鳴らし攻鼓水底を轟かし。鳥船に風切らせ懸引自在に漕廻し。敵小船と見るならば投槍投鉾。飛鈎を打掛け。〳〵乘沈めてフシ打つべし。大船と見るならば胴突船を押懸け。敵船を打碎き。漂ふ所を熊手にかけ。受切り下切り掌し。勝利は案の内なるべし。はやお暇と奏聞す器量骨柄類なき。天晴弓取大將やと御簾も几帳もざゞめき渡り。月卿雲客一同にフシあつと。感じて在します。地御感の餘天盃を下さるべしと。十二一重の袖の香も。長柄の銚子女官の酌。御土器を檜扇にフシ載せて寄添ふ欄干に。地冬嗣公進出で。詞是は立花と申す上童衆中一の美人。逆徒を滅し歸洛の後。御邊が妻に相具せよとの御氣色なり。地武勇に猛き鬼百合も情にひけや姫百合と。戯れ給へば百合若も。勇む鎧の袂百合。返す〴〵も身の譽名も鷹の羽の夫婦の矢。心の的に立花の妻をも得たり幸も。得たりやをうと手應の。春の。門出ぞ三重〽逞しきフシいで其の頃は。地弘仁元年庚寅正月吉日。まだ春寒き雪霰花の吹雪の朝嵐。旗指物を吹靡かせ馬物具の色々に。霞を染むる勢は海を堰き河を割き。巖をも碎く山崎やフシ關戸の院に着き給ふ。地午頭天王の拜殿にて幣奉り本國の。宇佐八幡を遙拜あり。願はくは神明擁護の門を開き。和光利生の德を垂れ蒙古の賊民速に。天誅を加へ百合若が。矢先にかけてたべと賴みをかけて賴もしく。心の氷解けそめて谷の戸出づる鶯の。聲に誘ふ睡眠のオクリふらり〽〳〵と睡らるゝ。詞ヤ是は居睡つた。なんと鼾はかゝなんだか。常に見馴れぬ内裏上﨟お公家樣に參り

會ひ。人縮つくつて氣が草臥れ眠たうて目が醒めず。我は此の拜殿にとろ〳〵と目睡ん。地別府兄弟も休息し軍兵どもも憩ませと。宣ふ内も片眠鼾の聲も高欄に。鎧の袖を片敷きてフシ前後も知らず臥し給ふ。地別府の雲足御小袖着せ參らせ。詞御目醒めて此方より合圖の貝を吹く迄は。何方にても諸軍勢心任せに休息あれ。地我々も一睡と。雲澄諸共瑞籬にオクリ敷皮〳〵敷かせ臥しにけり。フシ顯るゝ地色を深くも塗笠に。年の頃はひ十七か葉竹草履も穿き馴れず。緋の袴着た足取にハオクリ山路。分くるは御社の。フシ詣と見ればさもなくて。地拜殿に立止り。ムヽ〳〵是は百合若樣。詞自らこそ立花上より御の緣組。否あらうとは存ぜねども直に言葉も交したう。地お暇申し參りたりサア擦つてお目を覺しましよ。具足とやらいふ物を手に觸れたは今が初。堅い冷い強ばつた何處から膚へ手を入れう。背中搔くにも搔かれまい寢返を遊ばす時。灸が擦れうなう〳〵と。フシ起せど〳〵目が醒めず。地アヽ辛氣燥つて起してぢ。具足越は應へまいいつそ抱いて寢て起さうと。衣引上げしがいや〳〵詞具足鎧うた侍と若い女子と二人寢て。傍から人が笑はうがアヽ儘よ。地若も咎むる人あらば祭の練衆の女房とフシいうて退けうとひつ被く。地此の聲をや聞付けけん別府兄弟頷きあひ。そろり〳〵忍寄りあれを見よ雲住。詞寢の長寢の死人同然。斬るも突くも儘なればいざ一討に仕舞うてのけ。隱し置きたる軍勢鯨波をどつとつくりかけ。地八方より取卷かば大將はなし誰が味方やら敵やら。百合若の家絕えて跡を繼ぐべき甥子はなし。府内親子を打殺し。豐後豐前の大將は我々兄弟。日頃の念願成就ぞと嬉々笑ひ差足し。衣引上ぐれば立花。アヽ悲しや狼藉者。起合ひ給へと搖起す。詞ヤア聲立てまい〳〵。彼奴は昨日の立花鎧に女の肌觸るゝ。地穢らはし忌々し高聲せずにサア歸れと。太刀振廻せば詮方なく。命限りに逃げ給ふフシ危かりける次第なり。サア邪魔拂うたり心易しと差足し。兄弟太刀を拔放し。討たんとすれど威に壓されフシ戰々慄ふばかりなり。地エヽ何が怖い事思ひ詰めたる本望の。寶の山とは只今ぞと胸を定めて兄弟は。枕を蹈んで兩方より斬付けんと振上ぐる。地百合若むつくと起上り二人が首筋引摑み。弓手馬手へかつぱと投げ拜殿にすつくと立ち。詞ヤア冥加知らずの逆臣め。汝等野心ある事は疾くより知つたれども。思ふ程奉公させ使ひ枯らして其の後に。首を刎ねんと思ひしに寢首を狙ふ小癪者。地ヤア草履取ども馬取ども。別府兄弟引出し首討つて棄てよとて。悠々と立ち給ふ別府も流石武士にて詞ヲヽ顯るゝ上からは主從はこれ迄。御首を賜らんと飛掛つて兩方より。弱腰取つて締付けたりヤアやさしや物見せん。只一討は易けれども出陣の清淨劍。下人手討の血を塗つて軍神の恐あり。首引拔いて

は拜殿を穢すも當社の憚あり。一足に蹴殺してのけんずものと取つて伏せ。ゑいや〳〵と踏む足は拜殿の板敷に。轟々たる音ばかり。二人が形は何所ともフシ遙消す。如くなかりけり。地百合若は茫然と野干の業かと氣を治め。心を澄ませば當社の下に別府兄弟高枕つき寢れ轉え臥したりけり。地ハア丶扨は夢か常々彼奴等兄弟を。心得難く思ふ事を夢に見る、さりとは夢は可笑しいもの別府々々と召さるれば。兄弟はつと目を醒し拜殿に走出で。主君の顔を屹度見てわぢ〳〵憚ひ色違へ。御慈悲に一命は御助け下されかしと。誰問はねども身の上のフシ白狀。こそはあさましけれ。地百合若扨は實夢にて。彼奴が腕にも徹したりと分別し。詞ム丶何を申すぞ。若し夢でも見たかとあれば。雲足はつと本心つき。ハア丶思へば夢にて御座候。扨も〳〵不思議かな。府内の太夫親子の者野心を起し。君のお鏡竊へ忍び込み。内裏上臈を盗ったし。御首取らんと致せし所に君御目を覺され。何が日頃の御力に取つて引伏せ踏殺さんとなされしを。我々靈宮仕ると存する間に夢覺むる。地是ぞ當社の御告府内の太夫に御油斷ばし候なと。我が身を外にご慮りける大事動する氣色もなく。詞ホヽ汝が夢に能く似た夢をも見たれども。夢に任せて大國の賞罰は行はれず。總じて愚人の眼は面にあり智者の眼は胸にあり。地包まば包め我が手勢十萬騎が心中の。善惡は百合若が胸の鏡にあり〳〵と。照らし見るこそ面白けれ今日は珍しう。馬の口取れ兄弟と鞭引寄せゆらりと乘給ひ。鐙の鳩胸兄弟が眉間先に踏反し。靜々と打ち給ふは天晴。不敵の三重〽勇士なり。フシ府内の太夫。秀主は。老體に大病うけ。鹿谷の館に。フシ養生加へゐたりしが。地主君は蒙古誅伐の。大將蒙り百合若といふ氏を賜はり。大内より西海へ直に打立ち給ふと聞き。年こそ寄つた[illegible]破り。日本の老武者に鬼神ありといはれんものを。エヽ腹の立つ病あと。枕を叩き咳上る痰火は胸に滯りさま病症重くぞ見えにける。地市郎丸秀虎立歸り。詞御心持變る事も候はぬか。扨主君の御恩の有難さ。汝が父は國の柱要にて我が篤にも親同然。館に殘つて看病し今一度本復させは。軍の供の功名には勝らんとの御諚故。地道より罷り歸りたり緩々御保養遊ばせと。枕に寄れは秀主むく〳〵と起き。鬅息荒取り秀虎をさん〴〵に。打伏せ〳〵叩伏せ。苦しき眼に涙を流し。エヽ情なやあさましや。君君たらずとも臣以て臣たるべしといふ。詞夫には引換へ君君たれども。臣臣たらずとは汝が事。老に惚れて病づき。在るにかひなき秀主を國の柱要と。君大切に思召すは何故と思ふ。地數度の軍に名を顯し。命は君にフシ捧げし故。地此の度の合戰は異國迄の晴軍。詞日本の弓取百合若の執

と、異國の記錄に止めぬさへなんぼう無念口惜しき。地されども己れが御供して異國本朝に名を上げば。むだ〳〵と床に臥し病で死する親の名も。あけてくるると嬉しさが藥よりも藥となる。今日は心も清しくて氣力もありしもの。親の病の妙藥ぞや。憖じて武士の道にて。家を出づる時其の妻を忘れ鄕を離るゝ時。其の親を忘れ矢を取つて其の身を忘るゝといふ。詞殊に別府兄弟は油斷のならぬ曲者。味方の内に仇敵あり斯樣の心もつかずして。親の看病孝行顏雪の中に竹の子出で。黄金の釜を掘出せし。孟宗郭巨に優つても。侍の子が出陣に外れて孝行立つべきか。不孝者不忠者とスヱテ齒噛をなして泣きけるが。詞己れが兄の惡次右秀貞めは。好色故に勘當し今は行方も知れねども。己れは父が弓矢にも劣るまでと頼もしく。地守育てたるかひもなく。二人の子は持つたれども。一人も持たぬ同然なや。過去の因の子は必ず親取らるゝぞ

手に劣つた侍め兄同然の勘當と。枕刀をおつ取り。するりと拔いて脇息を二つにさつと切割つて。是を見よ此の脇息が二度合はぬまつ此の如く。親子の緣是迄なりと。涙にくれ蹌踉入れば母は暫と引止め。やれ詫言申せ〳〵と泣き給ふ。秀虎も涙にくれ君の御意の有難さに前後を忘れ候。只今追付け軍の御供仕らん。勘當御免下されと手を合すれば。はつたと睨み。詞弓矢取る身の軍に立つが。珍しうて勘當を宥さうか。地狼狽者とねめつくる然らば討死仕らんせめて無き後に勘當御免あるべきか。詞ヤア敵に打たれて死したるとて何を譽に許すべき。地ムヽ然らば好き敵と引組み。分捕功名首數取つて候はゞ。其の時御免あるべきか。侍と言ひ御免受けし此を戴いてたべ。一つは親の御慈悲とスヱテ聲を上げて泣きければ。詞父もさながら涙にくれ。やれこれ此の切割つたる脇息も。殊に汝の手柄ならずや。手柄が[illegible] フシ[illegible]なるゝぞや己れが

手柄に今一度ついで父が起臥の身を輔けよと泣き給へば。アヽ有難し忝し。親子の緣の脇息を手柄に接げとの御教。心も開く花漆はや御暇と出でけるが。存命不定の父の顏是や限りの涙を袖に。拭ひ漆と塗り隠し眞先駈けて一番首を。せしめ漆と勇みをなしもみに。揉うてぞ 三重へ急ぎける。フシ折しも其の日は。順風にて大將を始とし。和田の岬を出船の八十島遠く漕ぎはなれ。別府が乘つたる船ばかり 今纜をとく〳〵と フシ既に錨を揚げにける。地秀虎嬉しく大音あげて。詞只今の出船は別府殿と見受けたり。府内の市郎丸秀虎。愚父が病氣によつて御座船に後れて候。暫く待つて乘せてたべと扇を擧げてぞ招きける。雲住かつら〳〵と笑ひ。ヤア法を知らぬ侍かな。馬でも船でも戰場は一二を爭ふ習ひなり。待つてくれとは扨も目出度いお侍と。地船中どつと打笑ひ。詞誰は出せと罵りける。詞こは情ない別府殿。先陣後陣

を爭ふは敵に對する時の事。親子遁れぬ義に遁れ乗後れたる傍輩の。一世一度の御供心と大聲あげて喚ばはれども。いやこの方は本侍。戰場急ぎて功名せねばならぬ者。何れもは寛々と後から〱。地サア出せと櫓櫂を早め漕出す。秀虎今は堪へかね本侍の出船を。止めて見せんといふまゝに磯打つ浪にざんぶと入る。水手檝取艫舳に走り帆を八分に引掛けて フシ寄付けじとぞ揉うだりける。地秀虎聞ゆる強力にて波を蹴立つて二三丁ばかり。矢を射る如く渡り來て船の纜むんずととつて。磯に戻れと引戻す廿五反の東海造。金物盡に七百餘騎四十八挺櫓を立てゝ。舟は足入り風はもつ引戻せばコ ハリ押出し。押出せば引止めゆらり〱と揉合しは。小島の動くに異らず浪と風とを相手にして。秀虎力や優りけん元の淺みへさつく〱。さら〱さつと引戻し乗らんとすれば船中より。鑓突出し地熊手に懸け フシ打止めんとぞ犇きける。詞別府が郎等雲山九郎七尺豐の大男。ひらりと飛下り秀虎に押並べてむんずと組む。さしたりと片手に引寄せ。汝如きの下郎奴が秀虎が手にかかるは憚り千萬。さり乍ら主の別府が名代ぞと。詞上帶摑んでゑいやつと。三段ばかり彼方なる岩角に打付けられ。頭微塵に打つ波の フシ底に沈んで失せにけり。別府今は敵はじと藻切刀をおつ取り延べ。纜ふつゝと切りければ風の機に彈かれて。船は沖へ十町ばかり。帆びらき打つて走りしは鳥の伸羽の 三重〽 如くなり 地秀虎獅子の怒をなしエヽ別府恨めしき。最前舷ひつくり返し惡魚の手向となさんずもの。浪も風も心あらば忠と孝とを感心し。船寄せてたべ戻してたべ龍神は何所にぞ。風の神はなきものかと海に駈入り駈上り。濱邊の眞砂蹈立て。〱蹈鳴し。天に恨を吹立つる鯨の息や涙の雨。眼も眩るゝ日も暮るゝ遠寺の鐘を導にて。知らぬ山路に分迷ひ君の。御跡慕ひけり。

第二

地府内の丈夫が嫡子惡文次秀景は。先年父が勘當うけ昔思へば好色は。此の身の疵か世の中を走りかねたる小篠原。有馬上下の駕籠の棒。角兵衞と名は變へたれども フシ角のとれたる男なり。地相肩の忠助息杖かたげてなんと角兵衞。旅人は多けれど駕籠借らうといひ手がない。寅の年の奇特に。世間の人の道が達者になつたげなといひければ。いやさうでもあるまい。去年は丑の年なれど飛脚は何時も走り詰め。申の年に當つても不精のものは不精で通る。酉の年にも日の暮に目が見える。さり乍らそこの親父ばかりは七十六であの氣丈。午の年に當つたら フシ太鼓打ちやろと笑ひける。地あれ〱其處へ見える女房衆町人でなし武家でなし。賣物氣も離れた合點が行かぬといふ内に。いつ旅なれぬ上﨟の錦の袋に入れたるは。太刀か刀か用心の惡いも知らず唯一人。蹴躓きたる石の角あ痛しことて憩ら

へば。邊に充つる伽羅の香を。駕籠遣りませう上臈樣 フシ駕籠やろいとぞ申しける。ヲヽ駕籠借り度い豐後の國まで乘せてたも。詞はれとでもない。爰は津の國池田。豐後迄は海の上が二百里。地なんぼ豐後豐前でも直下に見るとは違ひます。行基か山田まで召しまして。それから先々お借りなされといひければ。ヲヽ何處までなりとも遣つてたも。サア乘るぞやと乘らんとすいはぬ事は惡い。詞駕籠賃は山田まで銭殿ぢや御合點でござるか。地ムヽそれはおあしの事かおあしは持たぬ。京から爰へも緋の袴を代にやつて乘つて來た。袖に大事の名香あり箏の爪でも鏡でも。望に遣らう フシ乘てたもやとありければ。詞ムヽ〳〵優しい忠介聞いたか。常の人の言はぬ事駕籠舁冥利に叶うた。地末代の話柄に名香で乘せませう。サア召しませサア揚げい忠介と。いへども更に合點せず。置いてくれ角兵衞。其の樣な花車道具大臣昧宿屋に請取るか。遣りたくば一人やれ。有馬の湯女を女房に持つて。女房に掛るそちとは違うて。詞コレ 地此の足二本で四人口夕飯の代に伽羅嗅がせ。鼻はよい衆其の下の口が干てはならぬわとフシ呟き腹立ち歸りけり。詞可愛や譯を知らぬな。汝ばかりが相手か。地お氣遣なされな。一人なりと遣りませう。一寸遁さぬ戀と見た。我等も戀故この有樣定めし御忍び簾もしやんと下して。相肩呼うで來ませうといふ所へ。武士ども二三十やあやお駕籠舁。詞十八九の女錦の袋を持つて此の道へ來たる由。芥川で聞屆けた眞直に申せ。さあさあ吐せとあらけなく穿鑿す。ハア今朝から此處に居たれども。左樣の方は通られず。遊人でかな御座るかといへば。ヲヽ謂はば遊人同然。豐後の國の大將百合若。蒙古退治の勅諚蒙り。當春西國へ向はれしに一戰に討死し。家の執權別府殿の働きにて。　敵を滅し御恩賞に百合若の遺跡。豐後豐前兩國別府兄弟に賜はり。殊に百合若に下されし雌雄の鷹の羽。片矢は内裏に遺されし緑丸といふ鏑矢の矢。別府所望ありし所に百合若に嫁せられし。立花と申す上臈彼の矢を奪ひ落ちたる故に穿鑿す。地道は一筋今の事を汝が知らいで誰が知らう。吐さずは括上げていはせて見せんと。皆一面に取廻す。秀景はつと思ひ。所以を聞けば重代の。主君の御事爰ぞ忠義と覺悟する。詞ムヽ夫は大事の穿鑿。慮外ながら何れもなんぼ取る衆か知らぬが。百合若殿は大名。地此方衆の分では行くまいと。煙管くはへて 懷手 フシ身をのさばつて立ち居たり。地ヤア知らずば知らぬで濟む事雜言は慮外者。駕籠の内が胡散もの探して見んと飛掛る。息杖押取り立塞りヤア何處へ〳〵。詞稼ぐ此の男身過ぎの種の御駕籠、町人の土藏百姓の田畠。武士なれば城廓同然。地山坂石原滑路。跨げ飛越え一橋也里の四枚肩。一度も不覺の名を取らず。詞權柄に隠れない此の頃へ。うんじに足を通

みんなならば。忌様の罰かん障げんご鼓頭に
戴んで。こつりと腰に引つ付けがれん／＼
と一寸に。戴んでのけんと寄つて化おとつ杖
差出し立つたりけり。是こは推参なる駕籠
舁め別府が郡竈門山田兵庫。手並を見せんと打
つて懸る心得たりと受流し。太刀打落し杖
取直し。叩き掛けて打つたるは罰の利いたる
三重へ早業なり　フシその隙に。地下部ども駕
籠舁出し簾を上ぐればこは如何に。誰が手
馴れとも白目の鳴羽枕をつきて眠り居る。
是は不思議と立寄れば雲は怖る。気色もな
く。ぱつと羽を延て行く空の千鳥。百舌鳥飛
鳴して。雲井を西に離り行く追手の武士は
口を開け。雲ばかり見てきよろきよろとフ
シ都の方へ立帰る。ヤア。詞是旦那殿駈落者
の行方が知れた。なぜ追つかけさしやれぬ
地結構な追手の衆気息精張つて事句に。息
杖迄戴いて。是が本の共骨折つて腰に取ら
れたお侍と。笑うて戻駕籠細工有馬の。宿

近に。有馬の湯口来て見ればこゝを養ふ産
よりも。ハルフシ小湯女が。情身の粟心の実一
湯煙の一の湯。フシ馴染めて。ハルフシ重荷を
肩に。二の湯かや。色は賣らねど色里も心
は。同じ客動。フシ西に明かさぬ夜半もな
し。地實に湯の山の道連と人も湯桁の数々
に。戻る人あり今来るお客。浴衣干すてふ
三階座敷思ひ／＼の幕懸けて。入るさの月
の都人田舎道園様々に　小ヲクリ見舞の々鰻籠
珍折の　フシ子持ち良いとて。入る上燗衆。
地體て御座の帯解の。大百姓の嫁御とや。
三年足でも給はぬは津の國西の宮の人。目
出度や今の湯上りは永々の中風病。癒るも
道理桑名の衆。右の頬先ふつくりと瘤の出
来しは松前衆。浴衣姿の小娘の咽に咳詰め
咳が出る。丹後丹波の御客ぞかし。あの老
僧は癇気持比叡の山の出家衆。痩せて窶れ
て骨と皮ま邊の大垣。手足の筋が敦賀の衆
癪で胸先。フシ播磨潟。ハルフシ諸國貴賤の。

恋湯の権の目早に。あかれ／＼／＼
あかれ上りの衆ならば。土産仕せ／＼竹細
工籠も品々有馬筆。様にも及はぬ名所は。
かの楊貴妃の舞山宮も。ヲクリやさしやと。見物
るばかりなり。地大湯女小湯女多き中に分
けて名高き松が枝と。元の出ごしは豊後
の國濱の市の遊君なりしが。秀景に馴染て
主君の不興蒙れば。親子の縁の弦断れて。
武士を捨てたる梓弓　フシ居所もなき憂き
命。池の坊の湯女となり夫を育む身の勤。
スヱテ世に味気無き憲踏なり。地中に仲よき
小湯女ども。湯口に集りこれ松が枝。詞嫁
て語りし茅の坊の御客は西國衆。そもじ
に深き思ひ入り。お床の側が合點ならば身
の片付も能い様に。見捨てませいとて誓文
立て我々たんとお頼み。男ありとはいひ乍
ら駕籠舁さするが見目でなし。我人湯女か
勤の身は帯解ぬ傾城。今の無念口惜しさ世
帯持つての後楽。地角兵衛愛しか靡いて進

筋沙汰なし。湯口を勧め座敷へ出で。六十六國の機嫌を取り。地漸う審めて宛行へば三日と手には持たずに。人に遣好き振舞好き。女房貰つても遣ひたがる男に聞かせてよいものか。我とても聞きともないとフシ耳に手を當てゐたりけり。地秀景は主君の身の果聞捨て難く。松が枝に談合しはめ本國に下らんと。胸に折れ込む駕籠の棒投げ捨てゝ湯口に來り。詞ヤア松が枝身の一大事が出來て來た。急に談合する事あり。宿へ歸れといふ顔付。友の湯女ども不思議がり。あの角兵衛は常が可笑しい事いうて。笑顔のよい人がやが只事ならぬ顔色。氣遣さよといひければ秀景は南無三寶。色に出でては惡しかりなんと。詞さればくヽ顔色も變る筈。世間の沙汰を聞かぬか。伊勢の國鈴鹿山に鬼神が住んで人を取る。田村丸と申す大將討手を蒙り人大勢催はるゝ。地此の角兵衛も傭はれ侍になつて。明日早

五百匁何とぞ借出す其の談合。皆の衆も共々にどうぞ頼むといひければヲヽ詞たつた今其方の金遣やる噂。鬼神退治の御供に錢金が入るものか。地何ぞ外に思事語りやくヽと責めければ。秀景も陳じ兼ねヲヽ金銀が無ければ田村丸の御機嫌惡しく。文彌巖に腰を掛け。急に借るべき金もなし質種をだに持たざれば。何を工面何を見込に借出さん。身代こゝに洗うたりせめて五兩か十兩か。小判の顔を見る迄は角兵衛が屈まぬ。湯の山に暇さんすコシ暇達如何にと宣へば。地大湯女小湯名打笑ひ。病なしの制輕とせ。皆々へ宿へぞ歸りけるフシ人目なければ。地秀景小聲になつてこれ松が枝。詞只今大事を聞出す。抑も我が昔百合若殿蒙古の戰に討死し給ひ。國は別府に賜はるとの定說。地親の勘當主人の不興武運に盡きたる秀景が。耳に入るは弓矢神も未だ捨てさせ給はぬか。天子より賜つたる百合若

が若の。妄執も（のゝ）殖はし本國に差下り。別府兄弟が首を刎ね。郡一門を守立て。兩國を相續せば不孝不忠の重罪も。少しは晴るゝ事もやと思立ちは立つたれども。刀にも太刀にも此の息杖一本。買ひ調へん金銀なし十を九分に仕寄せても。聞き方なき運命やとスヱテそゞろに。涙を流しける。地松が枝悦びヤアそれは必定か。有難や孫や今の御身で侍の。道を忘れぬ思立ち身を棄てさせたも我故なれば。又自らが力にて元の御身になし申さん。太刀刀も金銀も手にこそなけれ。湯入衆のを盜み取り。御世にお出でなされて返せば暫時の借物と。湯口に人の音なひして浴衣々々と呼ぶ聲に。フシ夫婦ははつと身を忍びヲ戸口に隱れ居たりしが。地浴衣の上の深編笠下人に持たせし打刀。木瓜鐔の太刀作り州濱の大臣。烏帽子たゝきの錦縁秀景見るより。とても盜まばあの刀エヽ欲しい事くヽ。喉

が乾くといひければテヽあれこそは此方の侍。自ら盗むも易けれど湯入の御剣を掠めじと。薬師堂の常燈あり。案内せんと夕月夜更け行く空をぞ三重〽待ちゐたる。フシ夜半の鐘の　地落葉山颪寂しく吹く風に。湯口の燈明森々と フシ眠れば人も寝入るらん。地夫婦は時分と三階の襖戸障子開け過ぎて。此の間こそと指して妻戸の此方に松が枝は。お客様。〳〵と呼べども夢の浮橋や。鍔外しそつと入り夜着引被く枕許。秀景もやゝ涙ぐみ顔は見ねども此の刀。差す程の人體如何様由ある勇士なれど。今夜刀を盗まれて昨日は朽ち行く武士の道。我が侍を立てんとて人を捨つるあさましさよ。猶はしの身の上と思へば氣も落ち手も顫ひ。ふるひ〳〵取る刀三枚鍔の寛ぎは。錫杖振るが如くにて。盗を知らぬ本心の フシそつと差置くばかりなり。地松が枝急いてア、氣の弱い。早う早うと制すれば秀景も胸を撫でる。此の上は是非もなしもし目を覺さば一討と。又押取つて立たんとすれば。夜着押退けて寝返りに。すはやと鍔元寛げて。討たんとすればすや〳〵と フシ元の寝顔ぞ危けれ　地秀景寝顔をよく見屆け持つたる刀からりと捨て。やれよその人かと思ひしに我が父府内の太夫殿。勘當受けしは八年前御病後といひ年といひ。御容顔は變れども矢車の家の紋。満見が關の合戰の向疵が印ぞや。懐しの父上やと寄つては見退いては泣き。聲をも立てず平伏してスヱテ不覺の涙に。沈みしが フシ冥加に。盡きたる我が身かな。地人こそ多きに親の刀を盗むといひ。只一討にと抜きかけて眞似にも親を討たんとせし。天罰の怖しや死して地獄に墮つるとも。此の罪に相應の地獄はなどかあるべきぞ。起き給はゞ思はずも御首落すは必定。御目の覺めぬ故にこそせめても刀を抜放さず。是も親の慈悲ぞとて。親の寝姿伏拝み〳〵 フシ消え入る。ばかりに泣きゐたり。松が枝も涙にくれ此の頃朝夕お側にゐて。知られず知らず フシ暮せしが。我故の御勘當親子の御縁を切らせたる。科人は外になし慈悲の上から御免あれと。拜みつ泣いつ身を口説き。御無事な親御の顔ばせを八年振りで見る事は。子の身では十分もしお目覺めて夫婦連。此の體が目にかゝらば スヱテ二度の勘當何とせん。地まづお歸りと手を引けば。詞尤と頷き立歸らんとはしけれども。いや待て弟の市郎丸家に無きは心得ず。是も君の御供して討死と覺えたり。父は老體誰あつて養うる別府を討つべきぞ。罪に罪を重ねば重ね御刀を盗み取り。主親の欝憤を散ぜんものをと木綿つけ鳥の。八聲と共に泣く〳〵も刀押取り次の間に。出づれば父は起上りこりや待て〳〵と咎められ。南無三寶と秀景は持つたる刀投出し フシ屏風の陰に隠れる。地松が枝わつと泣き出し。さもしい事を致したるお恥かしやあさましや。女のはかなき出來心沙汰遊ばして下されなと。我

が身の科に取直しフシ涙を。流しゐたりけり。父も涙をはら〱と流し。詞チヽ見上げた〱。さすが侍の妻の氣質備つて。夫の科を身に受くる殊勝千萬さりながら。地老の寢覺の目も合はず始終をよつく見屆けた。詞我が刀を盜んだは獅子惡文次秀景よ。斯くいうても盜人を咎むるでは更になし。弟の市郎丸も武道の勇みに勘當し。地子を持たぬ身となり果て某は病中。親子三人軍の御供に外れし故。君も討死まし〱國も別府に奪取られ。皆これ我がフシ越度なり。地若き時分は氣も強く義を重んじて勘當し今七旬の老が身は。子より外の力はなくスヱテ閉籠後悔するばかり。地時しも盜人入つたるぞ遁すまじきと空寢入し。よく〱見れば我が子なり嬉しやと起上り。勘當宥すといはんとせしが待て暫時。詞先年彼めに誓文立て侍冥利勘當と。佛神の誓詞されず躊躇ふ內に刀を盜む。ヤア嬉しや枕の刀盜まれては我が侍は廢つたり。武士を立てぬ上からは侍冥利の誓文は反古なり。地勘當宥し亡君の御敵を討たせんと。思ふ心に早まつて氣疎く聲を掛けたれば。紛れて何所へ駈出でしぞ刀惜むと思ふべき。心の內も面目なや。干將莫耶が劍でも我が子に何か惜しからん。呼び返して此の刀奪取れ奪取れ。我が身の恥辱は思はぬと聲をばかりに泣き給へば。松が枝も伏沈み。秀景は屏風の陰。親の慈悲心身に應へフシ理過ぎて歎きしが。地何時の時を期すべきと御刀盜人。惡文次秀景是にありとつゝと出で。刀を取つて戴けば。チヽ出來したり〱。勘當は宥したり寶刀を盜まれて。我は町人お事は武士。詞も禮儀も違ふぞや嬉御前共上座へと。我が身は下座に手をついてフシ咽入りたる嬉し泣き。夫婦は冥加恐しと。二人目と目を見合せてエヽ泣く。この外の事ぞなき。地嘸弟が傳へ聞き羨しくも思ふべしと。人の噂我が身の上。年頃積る物語ナヲ夜はしら〱と フシ明けにけり。地友達の小湯女どもなう〱松が枝。詞茅の坊の御客樣今日お歸とて。今お幕が懸つた湯口まで來て暇乞しておきや。筑紫大名別府殿御。地廻つて損は行くまいと フシ口々いうてぞ歸りける。地サア〱天道明らけく親孝行の德にて。主君の忠義此の時と親子身構へ鉢卷締め。我は今日より町人なり初太刀は汝仕れ。女ながらも松が枝は。武士の妻ぞと差圖讓り。其の身は下人が錆刀に換へフシ忍び勇んで出でにけり。地案の如く別府の雲住若黨數多打連れ。逆湯までの名殘ぞと皆々幕に入る所を。三人左右に一の湯二の湯。戶をはた〱と差詰め大音揚げ。詞百合若が家臣府內の惡文次秀景。如何に雲住主君の國を横領の惡逆首を渡して。五逆罪を冥途にたせとぞ呼ばはつたる。地內には驚き膽を消し。たゞ騒ぐばかりにて。フシ出合ふ者こそなかりけれ。地一の湯を早破り。二の湯の方へ追出せと呼ばはる聲に詮方なく。出づる所を戶口に支へ丁ど切つ

ては引出し。礑と打つては切並べ。暗く、闇に十餘人 フシ茄子を切るが如くなり。地其の間に雲住屋根切破り丸裸。飛ばん降りんと窺ゆる三人四方に立廻り。寄らば斬らんと附纏り爭ふ所に雲住が雜兵ども。斷隔つて三人を防ぎ支ゆる其の隙に。裸身輕く迷足も早ての風に雲住は。山に飛入り谷を分け行方知らず落ちてけり。親子夫婦はこれ迄と群る大勢追散し。湯口を清め勇み行く實に有難や忠孝の。誠の驗有馬山松になりたや萬代の親子の。縁こそ久しけれ。

宮島八景　三段目

夜雨 夢路も通ひて渡の上。〳〵。立居や堪なろらん 詞へ是は百合若殿に仕へ申す。市郎秀虎と申す者にて候。扨も頼み奉りし百合若殿は。蒙古の軍に討死と申し。又遠き島に存へ御座候とも申し候。爰に厳島の明神は。海を守る御神と承り候へば。一先づ参詣申し夫より海路に赴き。百合若の生死を窺ねばやと存じ候。地會稽山の埋木も花咲く春のあるぞとて。香を尋ね行く篙の縫ふてふ領の笠置。さても我が身かる人も。フシ我が身の外は友とても。フシ浪にしをるゝ小夜千鳥。沖の鷗を知邊にて。島ある方へと迷ひ行く シオリ。憂身の〳〵。末ぞ。便なき ハルフシ伴も元は。若草の。馬草刈り飼ふ雲雀の。舍人が漁夫の盡きぬ名殘は中々に。人を導く フシ標となり。地後世の道は隔せども。我が身に晴き秋霧や秋の浦々見渡せば。雲と浪との色々に。影も美し厳島。誰が教へねど自ら實ぞと思ひ白浪の。夜の鳥居や樂殿の和光の影はあり〳〵と スヱテいとゞ殊勝さ勝りける。地播磨市郎丸秀虎は。安藝の國厳島に着きしかば。鰐口鳴し幣を取り。スヱテ神慮を清め奉り。白木綿襷や懸け奉る。祝詞をこそは捧げけれ。謹上引。再拜引。再拜。敬つて白さく。抑神慮を清むる事。和歌よりも猶宜しきはなし。其の中にも神樂を奏し。少女の フシ袂。返す〳〵も面白や。殊更当社の御神は。沙竭羅龍王の第三の姫宮にて。海上を愛で給ひ此の厳島に跡を垂れ。衆生濟度ましますなり。扨此の厳島は。三國に譬ある。八景を表したり。先づ雨は御山山。巌嶋高く聳え。嵐迷の夢を破り。儀に人家列つて。世渡る業の品々は。宛然山市の。晴嵐なり引。西は海上漫々たり。沖に泛べる釣小舟入日の。影と諸共に。搖られ搖らるゝ波の上。實に漁村の夕照やと。靜に西かぬ海の商風ぞよ〳〵と吹來れば。我も我もと帆を上げて フシ歸る。釣舟磯近ければ。聞の女童遠浦の歸帆と フシ打眺め。心澄む折からに。はや寺々の鐘の聲。今日も暮れぬと聞ゆれば。造りし罪も、微々に晩で遠寺の晩鐘と。聞くにつけても殊勝さよ。フシいとゞ凉しき秋の山。地古木巌の肩にかゝりしも。東南に滿ち〳〵て。霞かゝらぬ夕暮に。フシ月ほの〴〵と。明らけく フシ千里の外迄。隈もなく。迷を照らす洞庭の秋の月こそ眺めあれ。既に夜も更け靜りて。さも冷々と降る雨に。寛

の水も音添ひて。滴る聲の妙なるに。流に泛ぶ樂の船。蓬窓雨滴りしかの瀟湘の。夜の雨も是にはいかでか優るべき。右手は長濱渺々たり。フシ渚に平沙の落雁は。寄來る浪に驚きてぱつと立つてはさつと下り。群れゐて遊ぶ風情は海の面もいと凄じし。夕の空を見渡せば。雲かとばかり疑はれし。江天の暮雪これなりきかゝる靈地に フシ垂跡し。和光同塵ましまして。本高迹下の秋の月照さずといふ所なく。化俗結縁の春の花匂はぬといふ袖もなし。殊に丹精恭しく。渇仰の志などか納受なからんや。神正に忠臣に與して。感應の手を伸べ擁護の眸を廻らし。主従の對面を一旬の内に得せしめ給へ。敬つて申すと願文既に〽納まりぬ フシ拝其の後に。地秀虎は神前を立去りても。猶丹精を擢んでて頼む徴を汀なる。蜑の小舟や神風に。任せて奥津白浪にこがれ。出つるぞ 三重〽 哀なりし。詞昔は巌窟の洞に籠められて。三春の愁歎を送り。今は曠田の隴に棄てられて。胡狄の一足と恨みしも。スヱテ雁に故郷の便あり。地痛はしや百合若は。蒙古の大敵悉く攻滅し。玄海が島に凱陣あり。岩が根枕長陣に心身疲れかう／＼と。深く寢入り給ひしを別府兄弟情なくも捨て置きて。百合若は討死と上を霞の離れ島。船の渡海を曾てスヱテ世界の便絶えぬれば フシ冥途も。同じ浪の上。地一歳出陣に。詞山崎關戸の院の拜殿の假寢の夢。思へば神の告なりし。地彼奴ばら討つて棄つべきものをとて。悔むにかひも荒磯の藻屑にかゝる露の身も。あればある世の習かや。所は遙か此の島に。草木だにも稀なればまして五穀の種もなし。朝の日も海より出で。夕も海に入るなれば。月の出づべき フシ山もなし。地夜の聲雨の音。春の嵐秋風夏冬をだに分かざれども。指に日數を數ふれば。四歳と明し暮さるゝ フシ憂き命こそつれなけれ。詞されば盡きせぬは夫婦の縁一夜を添はぬ立花も。百合若を戀ひ慕ひ海中に焦れ寄り給へば。げにも結ぶの神風にや此の島に吹寄せ。不思議に夫婦對面あり憂を語らふ苔莚。早若君を誕生あり還城丸と名を呼び。日數許りにいつしかも フシ節分知らぬ三歳なり。地殊に立花女工の手利。柳の皮を叩いて紡み續ぎ。木の根を。掘り色々に。絲を染めて機を織り。木の葉を綴りて織物し。親子の肌を隱すにぞ ハルフシ身は習はしの。汐風や。尾花の袖も寒からず。妻子に慰む折々は。フシ故郷忘るゝ便なり。地扨鷹の羽の鏑矢を庵の内は恐ありと。洲崎の山の松蔭に手づから黒木の宮居を結び。鷹八幡と勸請し。我が子の武運長久とオクリ今日も〽祈りて歸らるゝ。地待ちかねて還城丸父よ／＼と走り出で。丸をも連れず父ばかり何方へお趣しぞや。母上は機織りて忙しいとて抱かれもせずスヱテ寂しさよとて縋りつく。詞オヽ母が機も父が宮に詣づるも。聊か我が身の爲ならず。八幡宮の御蔭にて

追付け暮に立歸り。イ本領に安堵し錦を飾につけ。地木の葉の手織を脱がせたき念願なりとありければ。いや部とやらんは恐ししなう母様。錦部といふ様な穢い物は着ともない。この様に赤いや青いや美しい。木の葉が着たいと泣きゐたる フシ身のそだちこそ哀なれ。地母は膝の上ながら蘆の葉を押付けて。チ、愛しの者やな泣いそよ。島より外を知らぬ子の。フシ 理や道理やな。和御前に織りて着せんとて磯山陰の吹寄を。搔集め置きたる袖に根從織交ぜ。櫨の照葉を縦横に。紅い着物織りて着せうの。歌今織るはまた。父の殿御の晴衣。肩に紅葉の 地濃き淡き朽葉を交せて。フシ織重ね。フシ萩と芒を。織違へ〳〵。織亂したる其の中に 歌秋鹿が。妻戀ひかねてかいろと。鳴くはしをらしや。鹿さへも妻故死するに我が身は。何と楢の葉の 合ノ手 地露より仇の契かや梭を投ぐる間の世の業も。子故の闇と。哀なれ。地立花織より下り給ひ今朝鶯を聞くにつけ。詞つくづく日數を數ふれば世は正月の頭ほひなり。地若が生先初春の儀式を祝ひ給へとあれば。ヲ、我もさは思へども何を祝はん樣もなし。遷城丸が武道のため。歌退治の事始 弓始せばやとて。地山櫨の丸木の弓に藤蔓懸け。汐風に節荒れし五寸周の野面竹。鯨の鬚を三羽に矧ぎ。矢先を焦して引削ぎに切つたる矢。取つてからりと打番ひ暦なければ當年の。惠方は知らねども椀飯も流徳も。本國こそは惠方なれときり〳〵と引絞り。暫し固めてかつきと放し。千秋萬歳ゑい〳〵おう。チ、目出度し〳〵とフシ三度矢聲を擧げ給ふ。地北の方も喜び遷城丸。御身も父御の弓勢に肖る樣に。八幡樣へいざ參らう留守を頼み參らする。サア起しやと搔負ひてヲクリ磯邊へ〳〵づたひに出でらるゝフシ思ひもよらぬ。地島陰に小舟漕寄せ大聲あげ。詞此の島に百合若殿と申す大將の生存らへてや在します。市郎丸秀虎 地參り候と。呼ばはれば百合若浪打際に走り出で。やれ秀虎が我が君か上る間遅しと舟引寄せ。手を取り給へば秀虎も變り果てたる御姿。夢かと見上げ見下して フシ只潸々と泣きけるが。地別府兄弟君討死と奏聞し。御本國を横領し。奢十分に餘り候所に。詞實に天に口なし人を以ていはしむとかや。百合若大臣は存命にて。遠き島にまします由 誰がいふともなき風説。そこはかとなく尋ね出で鬼島にて蠻人の。小舟を奪ひ命を鯨鯢の鰓に懸け。地二千里の波に漂ひしに。遙の沖にて此の矢一筋飛び來り。詞御覽候へ舟の舳先にはつしと立つ。遖れ此の大矢遠飛びさせて射んずる射手。我が君ならで日本に覺なし。此の矢の來る方にこそと南を指して漕ぎ行けば。霞の隙に物こそ見ゆれ。雲か山かやあれこそ島よ懐しや。地見外すまじと櫓櫂を早め。押せども〳〵楫子楫取の身ならねば心ばかりは憧れ船尋ね寄りたる有難さ。思へば此の矢は正八幡主從の緣を示しの矢。

不思議にも御容顔拝み奉る嬉しさは。未だ誠と存ぜずと スヱテ只涙にぞ咽びける。詞實にも此の矢は百合若が今日弓始に放ちし矢。さらば海へも落ちずして御分が斯に立つたる事。地詞の心寄付の。竹も哀を知るかとて フシ御落涙は限りなし。地扨立花の御身の上若君儲け給ふ事。夏が中の霜と。語り給へば秀虎横手を拍つて。詞其の立花の御方は。我が君の御事戀慕ひ憧れ死と承り及びしが地扨は人の噂にて若君迄御誕生は。御出世の瑞相一日も此の島に御逗留無益の事。殊に海上日和も良しあの御船に秀虎が。櫓を押切る程ならば九國の地迄は一瀬に押付けん。先づ若君に御目見え申し度し。チヽたつた今八幡へ母が連れて參りた。押返して日の中に歸國を思立つべしと。勇み〳〵て出で給ふ秀虎顔を見遣して。鬼神をも取拉ぐ兩國の大將の。四年三年の御住居さぞ口惜しう思すらんと。傷言して立つたる所に。妻慕ふ雉子の伸羽して暫し還る、命の露 フシ小笹が陰にぞ隠れける。地扨は此の島にも獵人のありけるよ。日頃の殺生助けやらんとせしうちに身には木の葉の色ある女黄なる觜に尖る爪。雉子を追蒐け此處彼處在處を捜すその勢。さしもの秀虎ぞつとして。軒端の松に攀登り フシ息を詰めたるばかりなり。地雉子は命を遁れんとばつと立つてはかつぱと落ち。亂れ讚岐の花薄、シ蹲轉の、へ押分けて。悲む聲はけん〳〵けん〳〵喰鳥を追斷け。〳〵。追詰めて。引寄せ摑んで觜に銜り。引裂き喰ふ其の勢秀虎も身の毛立ち。扨は此の島大魔所にて是ぞ天狗の女房なら木の葉天狗といふものか。なう母樣母樣とんと フシ鼻に目を附け居たりしが。詞三才許りの天狗の子。是も木の葉を身に着たる跡を慕ひて泣き叫び。母の顔を一目見てあれ母樣の怖い顔。爪も長うなつた怖い〳〵と泣く聲に。母も驚く諸鳥の一念醒めて容顔も フシ柔和の姉とぞなりにける。詞ヤアあの子は何が怖しい構へて構へて父樣につがもない事いやんなや。地いざ添乳して寝ねせうぞ。近付けば振切つて。ナヽ母樣丸ゑ喰はうといふ事か。もう堪へて下されと庵の内へ駆け入つて。フシ拔折戸。はたと押立つる。あさましや悲しやな年月包みしかひもなく仇なる形を フシ見せけるかや。雉子は妻故身を果す我は引換へ雉子ゆゑの。郷に妻を見付けられ妻子の縁の切目となる。父御の斯くと聞き給はゞ今迄交せし契をも。さぞや悔しう口惜しう愛相つかしとなりやせん。包まるゝだけは包んでたもせめてま一度抱締て。我が子よ母よといひたいが七つ下れば目が見えず。歸るさも悪はしく父御のお歸りなきうちに。母はこれ迄さらばやと。ま一度顔を見せてたもと妻戸を敲き取付いてさらば〳〵の涙ながら磯山陰の木隱に フシ泣く〳〵。隠れ失せにけり。地かくとも知らず百合若は尋ねかねて立歸り。秀虎々々と召さるれども。ヤア男の天狗殿。

我をして遣る合點かと返事をもせず居たりしが、よく〱見れば鼻に胡散な所なし。地秀虎これに候と飛下りて色を變へ。詞扨も〱凄じや北の方と思しきが爪は鳥類眼は猿、雛子を一つ詰め引裂き喰ふ面魂、若君は寄へ寄せ給へば母も嘆く風情にて行方知れず候。地世を隠れたる鳥、鬼女山姥にも懐かたに々委しく語りければ。詞百合若大きに驚き、扨は此の島の魔怪立花を拔く取殺し、幼き者をも心懸け母が姿に變化して、年月我を誑す思へば不便口惜しや、地世に出でゝ後の此島の天狗にもあれ悪魔にもせよ。妻の仇は取るべきぞ方を逗留無益なり、身に要らん遠城丸郡へ行かんと宣へば、若君わつと泣出し母様に抱かすれば、郡もいや舟もいや木の母様返やしやいのとスエテどうど坐りて泣き給ふ。詞嘆し奮て秀虎申し若君様、都へ上れば母上様に御對面。是非に迎ないやなれば此の島に捨て置いて、地今の様な怖い物に喰ませ申すと威せども。

いや噛まれても大事ない母様置いては行くまいと聲を上げてぞ泣き給ふ。聞分けもない。ーし泣しゝ置け構ふなと秀虎に目配して、主従急ぎ船に乗りたりし怖い事それ其處へとフシ船漕ぐ眞似して威しけり。地母も木陰に隠れゐて。見遣り見送り嘆きしが今は堪へかね走り出で。母は爰にとばかりにて、抱上げ抱付き抱締めてフシ涙に咽ぶ出でやらず。稍あつて百合若様。詞全く自ら魔障にあらず。ありし昔の立花なるが。地一夜も添はぬ思に臥し、此の宿を空しく去りながら。鷹の羽の不思議にて。魂は香具山の、寶の鷹が宿衣へ。地これ御寶ぞと脈ぎ騒ぐる。姉は黄の羽を重ね、女姿と緑丸フシ日も當じられず不便なり。地ア、果敢なやな三年の間符牒に我が子左羽に殿御を寝せし睦言も。今日といふ今日顕れ、仇となりたる鷹の雌、鳥類は相さる鷹に三枝の禮儀あれ身に反哺のすあれとし。鳥さへ[illegible]百日に[illegible]小鳥もあ

るぞかし。鷹は如何なる因果にや友を殺して餌食とし、雛の時より親鷹を摑みスエテ食はんと狙ふゆゑ。地父母巣には寄付かずフシ枝の上より落餌の、地不孝の鳥殺生鳥鷹は死ねども穢はつきぬと。人は褒めても悪業は落穂を拾ふ群雀に。劣つて辛くあさましき、鷹になつたる此の母が罪科が子に報い、和御前が出世の妨かと思の上の思となる。一人の後までも小鳥一つ蟲一つ。無益の殺生せぬ事ぞや、鳥類畜と思へども命の惜しいばかりかは、妻を思ひ子を思ふは人間にも勝るとは。今身になりて知つたるぞや母には最早逢はれぬぞ。母戀しとばし思ふなよ夜も父御と寝ねしやゝ。父の意見を能う聽いて大人しう成人し。世間を知らぬ島育とスエテ人に笑はれ。譏られな。フシ名殘惜しいとはしや、地藤の難なや此方寄れし。涙に濡れし寶にて、搔寄せ〱搔撫でし。羽交の下の濡鳥、思愛こそは哀なれ。地百合若泣く〱聲を上げ扨は此の世

にたきんの。生を變へて契りしかすかに斷くと知らせなば。今更何を嘆くべき。其の日の本の皇孫も御母方は龍女にて。鱗のありし帝あり寶公太子といふ智者は。鳥の巢より生れ出て其の外例はあるものを。此も獸等も更になし契は忘れず此の儘にし。本國へ伴はんと船飛上り。縋り付かんとし給へばす。恥しや天界の。契は是が限ぞと翼を立てゝばつと立ちなう。今暫し〱とて彼方。此方へ追鳥の狩場の時雨の雨。巖の方に飛上り鳴き。交したる敏鷹の野守の鏡目にま見て。手には止らぬ妹背の中思ひ遣るにら哀なり。地秀虎淚を押拭ひ神の力をきりと見て。詞急ぎ陸に駈上り擲れ御油斷候。あれ磯間近く漕ぎ來るは蒙古が船と覺えたり。地一支仕らんといひもあへぬに異國船の鬨を作つて漕寄せ。矢先を揃へて射掛けしは霰を撒くが 三重へ 如くなりフシ母は我が子を。地射ころせしと來る矢を翼に打拂ひ〱羽交の下に遣抱き。ヲシ林の内へぞ忍びける。地其の隙に百合若例の一所取り〱。詞たゞ討ちも通じぬ畜類に詞を掛くるは費なり。其を百合若大臣とは矢先に思知れやとて。しつはと保つて放つ矢が。船腹に發矢と立ち船板二枚頭と割れ。地潮煙り立てたり秀虎得たり賢しと。大手を伸べて雜兵ども引摑んでかつは投げ。引寄せてはとうと投げ浮きぬ沈みぬ漁るゝ間に。大將と思しき後の岸より這上り。百合若目掛けて打つてかかる秀虎隔てゝむんずと組み。詞一締締めて面を見れば別府が弟雲住なり。汝が無用の唐人笠蒙古にあらでひつくりよと。上帶解いて括上げ。我が手に掛くるは易けれども君出船の御祝。サア遊せと引出す。いや我ばかりは大人氣なし。敵は一人味方は二人腰を持て秀虎と。細首をしかと把り。兩方一度にゑいやつと。地首と胴とを引裂いて。海へざんぶと投込みしフシ力の程ぞ頼なき。地時刻移さず船出せん還城丸は何處にと。詞今の空に綠丸。寶の鷹の羽交の下。若君抱一遍さ雲井遙に照る日の。翼の力。羽を伸して飛ぶを日高の船の中。追ひ縋りたぬ百合若の名も上ぐる鷹は隼や。出世は千里一躍の仕合。丸とぞ名付けける

第四

地人に從ふ者は存し天に逆ふ者は亡ぶとかや。別府の舊臣武者雲足に主君の本領を横領し。權柄九州に蔓り自ら別府親王と名乘り。賤人の衣冠を身に纏ひ。簾に金銀珠玉を鏤め。相從ふ者ども五島大納言百貫猛中納言石風。其の外田夫無道の郎等迄。或は中將宰相と官位を許し召使ふ。實物の程も憚しぬ。身の奢こそ危けれ。地されども弟雲住を百合若退治に差向けし。まだ其の便なく殊に府内親子の者。行方安否知れざれば四方に敵を持つたる心。起臥立居食物迄に用心し。門より外に他行せず。形は榮華に誇れどもフシ心は牢舍の苦みなり。詞百貫大納言罷出で。御武運強き我が君へ申すも恐に候へども。人の身の榮華と申すは月見花

丑寅。操は野島川迄遙。浦山の風景こそ堅とし申す。されば御身の御用心と御門外へも出で給はぬ如何にしてもいたはしく。大國數多御持ちながら國を取らぬも同然と仰せ有る所に豊國小倉の町に。櫻葉と申す女の盲目。五音に通じ鳥獸の聲をも占ひ。人の胸中に包み隠す事も一點も違はぬ指巫子と承る。彼の女を御側に置かれなば何處へお出で候ても。御用心に於ては氣遣あらじと申しける。地別府聞きもあへずムゝそれは重寶々々疾く〳〵召せとオダやへ使を立てにける。地もとより古老の別府なれば如何に方々。其の女とて油斷ならず定めて作盲ならん。心を付けて試して見よ。敵の廻者ならば一刻に責殺せと。廊下一間切離させ下に炭火を貯へ。用意様々なる所へ松が枝は夫のため。敵に近付く謀。身を盲目に杖つきのフシ逃れ難なく見えにけり。地櫻葉參り候と手を引き御前に出でければ。各一度に押取廻し兩眼に目をつけて。少しも開かば捻伏せんと心を許す隙間もなく。鼻の先へ握拳をぬつと出し。面を張る眞似をしつ懐身の劔を閃めかす。松が枝細目に見けれども爰ぞ大事と堪忍の。心は消ゆるばかりなり。稍あつて。別府大聲上げ。ヤアあへ〳〵櫻葉。汝五音呂律に通じなば。我が身の上をも知るかといへば。アアさればこそ。陰陽師身の上知らず妾は元四國の者。七歳の時産山の天狗に掴まれ天狗殿より授りし正直の占。眼が明いては面々の身の悪に穢されて。心曲りて占に私がある故に。眼の光を消すぞとてそれよりふつゝに目も見えず。地我が身の占は聾程もえきかず。人の上の善悪は人相相性生れ性。心の中にある事失せ物待人走者。望み事願ひ事夢判夢合。鳥の鳴高鳴雀の小鳴鶯の道切。厨の鼎の鯉鮒鳴き。夫の長嘯お寵の長欠伸。釜の鳴る穢音のきつしよ。豆腐のぐつ煮豆殻のばら〳〵泣。五音は悪句臭いても。一分一點違なしとフシ有りさうにこそ申しけれ。地別府重ねてナ、さもあらん。櫻葉が人相は何と〳〵。地櫻葉細目に一寸見て小首を傾け考へし。詞只今のお聲は五音の内の宮の音。喉に響いて土性の調子しかも深山の土。甞にちと苦味あり。土に苦味のあるものは草鞋の性。其の面の内にはしやくしやと。髭がたんとある筈フシ違ひはせまいと言ひければ。地是は奇妙と一同に手を打つてこそ感じけれ。すは日拍子に乗せて來た是からは我が情と。ナ、お目出たや草鞋は仙人の持物。御壽命は千年。さり乍ら仙人はところを棲り。地盤とす。碁は敵味方の爭ひ人の地を取り濱を取る。十分に勝誇つても只一目の手違ひにて勝が負に打かへ手。傾く運の廻鳥にかゝり。四つ目殺の四方の敵に取巻かれ。生石なしの目は白黑との占形フシ御用心と言ひければ。地別府も思ひ當りしがなほ試さんと太刀押取つて詞サア爰に一人あり。男か女か氣質は如何に。聲を聞かずに香をきいても知ると

いふ。ほや占へと言ひければ。ハヽ此の人は誰かは知らねども。身には金銀着飾つて心の中は恐しい。人を殺さう〳〵といふ念絶えず 地お側に近う斯様の人入らぬ物と合すれば。皆々感じ呼く中より酒樽一つ取出し。詞サア爰へ出た人心ばへを指して見よ。樓葉一寸見さて〳〵此方は結構者。上人にも下人にも。爰へにも悦びにも此方無うては叶はぬ人。さりながら一つの瑕。地附合ふ人に金遣はせつひ氣逸にしてのけつと。言へば各我を折つて フシ奇妙々々と驚けども。詞別府未だ疑晴れず。侍分の者どもは生心あるゆゑに向ふの心に徹するなり。無念無想の下部ども 地占はせよ承ると。下臺所の仲間ども 銅の茶瓶を提げ。サア 此の人の年恰好心だてはと問ひければ。ヲヽ其方は好い年なればこそ。頭は禿頭人體は良けれども。口が在出て朝夕に。ちやは〳〵〳〵と喧しい フシ癖があるとぞ申しける。地さあらば此の人占へと擂鉢に擂粉木を添へ。二人か二人か如何に〳〵と言ひければ。詞ムヽ是は兩人しかも女夫男と女子。お月様は嬉しうから〳〵から〳〵聲高に。亭主は御前へ丸裸で慙無い 地形やと言ひければ扨も見通し名人と上から下に感ずる聲。詞揃ひも揃つた呆氣者 フシ可笑さ堪へ兼ねにけり。地されども別府は只兩眼に心をつけ。なほ尋ねたき事どもありと奥座敷に座を變へて。是へ〳〵と呼びかくるあいと答へてそつと立ち。微かに見れば廊下の板敷切落し。下には燻燃え上る南無三寶。よけて通らば目明きなりと咎められ。巧みし事のかひあるまじ落ちば忽ち燒け死ぬべしと。心も後れ足許も跡へ〳〵と引戻す。エヽ我ながら卑怯なり。夫に逢つたる一命我が身體も我が物ならず。骨も皮も焦げ付いて炭ともなれ灰ともなれ。夫に代つてお主の忠義此の時なり。我は眞の盲ぞと思ひ切つて行く足の右をかつぱと踏み外しどうど落つれは悲しやと。呼ばはる聲も咽に咽び兩手をかけて上らん。〳〵とすれども足は踏みはたおす。詞おゝ〳〵と喚く聲 フシ地獄の呵責と聞ゆべし。地別府手を取り引上ぐれば。水を灑ぎ藥を與へ スエテ漸く息を繼ぎけるが。地さりとは慘き殿様や目が見えぬ女の身。詞あらば一思ひの殺しやうもあるべきに。苦痛を見せて嬲殺す御情しみは何故と フシ恨み怨みて泣き居たり。地さしもの別府疑晴れ。ヲヽ誤つたり〳〵。百合若一家に用心し若しは作り盲かと。疑の念面目なし麁言するぞ恨むるな。今より側に引つ添うて人の心を見通せば天下も廣く氣遣なし別府が寶は汝ぞと。地心許して打解くれば仕濟したりと嬉しさに。熱さ痛さも打忘れ懐持つたる御身からは。疑も晴れ自らお側にあるからは。臺の壊郭に籠つたと思召し。何方へも御出なされても。氣遣なしと偽れば。ヲヽ詞忝い〳〵。地直に明日は領内へ遊山に出でんと喜びしを。アヽ申しさり作ら。詞先程五音を聞い

た內。人の心を亂らかし氣違にする人など。必ずお供に御無用といへば、別府打笑ひ。いやそれは人では無い酒樽ぢや。遊山に是は詞外されぬ。明日早々迎ひをやらん歸つて休息々々と、我が身の敵を我が手引く運の末とぞ三重へ見えにける　地惡次改秀景は　妻の松が枝身を碎きやう／＼別府を誑りつけ。今日に敵が領內の遊山に出づると聞きければ。扨こそ本懷時到れりさもあれ廣き園の中。岩がへ出づるぞと、景よき浦々山々をヲクリ忍びて／＼漂ね廻りしが。地花火山の麓二三町が間に。大幕打たせ場取つたり。嬉しや爰に控へたり未だ別府は來らぬ體。道にて討つて棄つべきか。いや／＼妻の松が枝合圖あり。せくまい／＼と思ふ程。なほせきかけて立ちけるが後の方に聲あつて。詞暫し／＼と呼びかけ父の秀主追つかけ來り。ヤア後れたるか秀景、君御歸國あつて密に軍勢を催し。近日別府誅伐の御用意あり。弟の秀虎は雲住を討つて君の御供申したる。働によつて勘當を赦したり。己れに刀を盜まれて我町人となつたるは。地己れが武士を立てん爲今迄のめ／＼と手をあけて。軍の場にて別府が首人手にかけさせ。其の方は見事生きて居まいか。よし其の方は兎も角も刀を指さぬ此の親が。人に面が合されうか。生拔の町人にしてくるるが口惜しや。サア刀を取返す己れには科が似合うた。刀を返せと嘩りくる。兩眼にはら／＼とスヱテ無念涙を流しける。秀景至極し御尤々々。我等も左樣に存ずる故。今朝我が君の御目にかゝり。今日中に別府が首實檢に入れずんば。秀景夫に首提げられんと申し切つて候。地今日一日とも申すまじ今一時が間に。本望を遂げずんば御存分に成り申さん。詞ナナ然らは一時相待つて首を見ずば刀を捻ち杵を指さするが合點か　地如何にも／＼刀を返進仕らん。ムヽ頼もしし／＼刀は一腰指し手は二人。親が指すか子か指すか今一時の勝負ごと。詞を番うて別れける親子の。義理こそ三重へゆゝしけれフシ斷くとも知らず。地雲足は櫻菓を積みに。供も僅かに悠々と。花火山の遊山とてフシ幕の內にぞ入りにける。地やがて果物酒肴別府盃傾け。詞これ櫻葉我酌を取つて四年目に、始めて心休まつたり。これといふもお事が陰。地今日の調子に氣遣ひ。さか心にかゝる事あらば。知らせてくれと言ひければ。詞いや／＼今日は呂律時にあひ。百里四方に敵も無き目出たき調子。殊に蓬萊山の松風の。響聞え候は殿樣の御壽命祝ひ仙人の來迎と覺え候。地お悅び遊ばせと諫しさうに申すにぞ。別府ほとんど悅び。詞此の日本に今も仙人ある事か。來迎とはどれどこへ一目拜み申し度し。いや／＼心に不淨の穢あれば爰にはあれども目に見えず。あの百連殿猛殿心底に疑あり。地御兩人を退けられば仙人來迎候べし。はや退け給へと言ひければ兩人怒つて。詞ヤア占が違つた。我々心に疑なしさいふ己れが氣遣は

し　翁、お側は退かじといふ。別府氣色を損じ神同然の櫻葉を疑ふは奇怪なり。地はや立去れと睨めつけられ　フシ是非なく。立つてご歸りける。地時分は好しと女房さあらは清めの香を焼き。仙人を待ち申さんと　ヲクリ合圖の〳〵香は　ほの〴〵と　フシ梢に落つる。山風の。木の葉衣や頭の雪。翁姿に燒の被。　スヱテ仙人顯れ出で給へば。　地別府は頭を地に着けて　フシあつと禮するばかりなり。地面白や人も今。心和らぐ折を得て。國は常磐の時つ風。ハシ民の草木も靡き合ふ世ぞ久しかれ長かれと　地月宮殿を立出でし。翁が千秋萬歳の齡を後に讓るぞや。面白や嬉しやと立ち舞ふ樣に見えけるが。髭も鬘もかなぐり捨て。つつと寄つて別府が胸ぐらしつかと取り。詞隱せし刀を胸元に差當て　百合若が執權府内の太夫が嫡子、惡次秀景見知つつらんと呼ばはれば。地櫻葉雨眼くわつと開き同じく女房智惠も有馬の鼓の枝とは我が事。よくも騙をさせをつたと　フシ頭をはるぞ心地よき。詞エヽ別府恨めしい　譜代御恩の我が君をよくも島に棄て置きて。三年四年の御物思ひ。己れは綺羅錦繡を身に纏ひ　土には木の葉を着せたるな。今我が着たる木の葉こそ島にて君の御裝束。是にて己れを討たんため申し受けて着したり。地我が君の御憤　我々親子夫婦が鬱憤　御家中上下萬騎の一恨の念力此の切先に覺えよと。刺通さんとする所を暫し〳〵惡文次。詞此の別府が十惡五逆天道よりの縛め　自業自得は今思ひ當つて人が憎いす。驚かさ　さりながらとしもの事　別府が胸を我が君の御足にかけ踏ませ申し　地此の後代の御手にかけ首を召され候はば。少しの罪も遁るべし情には我が君の御手にかゝり死なせてくれと　フシ手を合せてぞ歎きける。ムヽ詞せめても殊勝の言ひ分ながら。我も親子の義に漏り我が手にかけねば叶はぬぞと。地突通さんとせし所に父秀主飛んで出で。詞やれ待て秀景御分が武勇は見屆けたり。彼奴が願ひも殊勝なり御憎惡せに計らはん。地暫く待てと言ひ捨てて。フシ飛ぶが如くに馳戻り。地百合若の御供して秀虎諸共馳來る。サア願ひ叶うた有難しと罷り出で。首討たれよと突放せば別府ひらりと飛びしさり。詞アヽ愚かなりとても死なん別府が。おめ〳〵と首さし伸べて討たれんや。最期に百合若己れを一目睨んで死なんと思ひしに。よくも是へ出でたるな。猛百連下り合へやつとどよめけば。詞二人の郎黨山蔭より一文字に切りかゝる。地別府は百合若組留めんと。大手を擴げてかゝりけるをつつと入つて左手を伸べて。頤摑んで差上げ　二三遍引廻しかつら〳〵と笑ひ。詞日本無雙の百合若が目の覺めたを知らざるか。己れを切る刀は無し。先祖鎌足入鹿を討たれし例に任せ。只今山の草刈に借つたる鎌の錆見よと。ゑいやと引かけしゝきれば。地さすがに鈍き錆鎌も大力の腕先にて　フシ首は前へ

ぞ落ちてけり。ウメ刃に血ぬらず戦はず勝つは誠の勝鬨や。誉あり高の松が枝が智恵の首は千人前。目明きの力も千人前千人萬人萬々人の。人々引連れ國入の御大。騎とぞ仰ぎける。

第五

地 棒弓に相島根は押並べて。君に靡きの民草や百合若再び歸洛あり。冬嗣公の御執奏。遅城丸を先に立て。府内親子松が枝をも相具して一先づ参内ありければ。堂上堂下同音に。さながら蘇生の如くなりと フシ御悦びは限りなし。地 百合若庭上に跪き。詞 蒙古退治の軍の次第書付を以て奏聞し。切取る所の彼の國の財宝悉く。御前に積ませ献上ある。異國の軍に勝利を得。それより下人別府が逆心によつて。玄海が島に漂泊せし所に。不思議に歸國仕る事偏に非ず。鷹の羽の矢の擁護の奇瑞。死したる立花生を變へし妹背の中。此の子を譜け候と一々言上ありければ。叡感殊に浅からず。則ち遅城丸を。太宰の大貳に任じ。九州二島を司り。併せ花は宇佐の宮の末社に貴び。鎌の宮と崇むべしとの綸言。フシ世に稀なき面目なり。地 かねて叡聞に達せし府内親子が忠節。叡感浅からず思召し。各五位六位に補せられ。詞 有馬の瞳の女松が枝とやらんには。猪名野といふ呼名を賜はり。地 女に稀なる志有馬の者とあるからは。世上の女の鑑ぞと フシ御感なれ有難き。地 百合若重ねて。緑丸の御死骸を宇佐の宮に奉納し。毎年恒例の祭を定め山鉾を飾り。都より俳優の藝者を呼び下し神慮をいさめ候。あはれ宣命下されば。生前の本懐と恐れ入つてぞ奏せらる。地 叡慮殊に麗はしく神は人の敬ふによつて威を増し。人は神の恵みによつて運を添ふといへり。神神の大願天下太平の勅願のため。宣命使を立てらるべし早やとく〳〵との勅諚にて。大外記少外記史生の官百合若と打連れて。花の都を發向ある是ぞ稀なる御見物とて。近國他國京田舎老若男女の参詣や諸願かけ奉り寄鼓太鼓の響。笛のこゑごゑひやりひやり遊樂。ちやんぎり四季の花紅葉。所望所望群集をなし。悦び勇む有様は日出度き御代の。三重へ しるしなり フシ神輿をいさめ。地 奉れば宛然神ら納受の。心を氏子に告げ白羽の鳩。八幡の御神體あり〳〵と拝まれ給ふさてこそ。國土安穏に五穀豊饒の春永に。猶行末の御吉慶と民は。悦び重ねけり。

右此本我等かたり本の通直させ進じ申候ふし章とてさのみむつかしき事は無之候文句。ほど。拍手をよく〳〵心がけ。たゞ人の心をなぐさむるが絵事口傳とや

竹本筑後掾

大坂高麗橋壹町目
御堂筋 正本屋仁兵衛

心中刃は氷の朔日

近松門左衛門作

フン さりとても戀は曲物。皆人の。地金をへらす燒釘は。敲き直いて意見して燒直いても惡性の。酒と色との鎹や。煮ても燒いても フシ 嚙まれぬは。地 鐵橋炙床鐵火箸。其のくせ細工は器用にて精さへ出せば二人前。せねば釘拔ぬけていく讀書假名文鍛鉄。とかく萬能一れん物鐵鎚こたへぬ糠釘で。後は吹あげ鞴ふく 歌 鍛冶屋の。てこの衆てつからり。ころり。てん〳〵からりちんからり。ちん〳〵からりと。フシ 打上げて。帳面ばかり。あひに合鎚。いかな打出の小槌なりとも。フシ 續くべきやうなかりけり。地 弟子子大勢使ふ身は油斷させじと旦那から。灰まぶれなる灰猫の顔振り上げて。詞 ヤア虎が涙のしるしが見えて空が曇つた。五月廿八日雨三粒でも降らねばおかぬ。嚊や子供が不動参り氣の毒や雨に逢はう。地 仁介でも長三でもちやつと傘持つて走れ。大降がするならばお妻が帷子濡さうより。八分位で襦袢を借れ。歸にも足袋を脱ぎやといへ。雪踏を腰に挾むとも新しい紙使ふまい。釘包んだ古反古一二枚持つて行けと。そこ〳〵氣の付く職人の フシ 金出來す氣ぞ格別なる。地 弟子どもは不承顔。詞 雨が降らうが雪が降らうが。平兵衛の供からは氣遣はござらぬ。地 堂島新地蜆川茶屋闇屋煮賣屋で。鍛冶屋の大壺平樣と誰知らぬ者もない。平兵衛殿傘の五本や十本を借り兼ねはしやるまい。私等が持つた傘では。お山衆の濡れかけは堪るまいとて動かねば。詞 親方利右衛門やいこりや〳〵。又しては己れ等が。誂りはしりに兄弟子の中言をいひをるか。アノ平兵衛めは此の店を任する程の久しい者。なんぼうでも身をうつて仕損ふ者でない。地 平兵衛が眞似したら汝等當が違はうぞ。同じ樣に己れ等が文の使も仕をるげな。連立つたも知つてゐるあの遊は人を釣る。甘い餌にくひ付きお山の味を喰ひ覺えたら。それ限りに遣出すと苦々しく言ひければ。詞 いえ〳〵私や文持つてたつた一度。仁介は先度も連立つてお山喰うて來たげな。エヽあの人の嘘つきやる。俺がどこに喰うたぞ。ナ ナわが身先度いやらぬか。本山寺の開帳から平兵衛殿と新地へいて。喰うて來たとサアなんと言やらぬか。わあいそれはの。平兵衛の茶屋へ連れていて。旦那樣にいふまいなら甘い物くはせうとて。地 主は奥の座敷でお山を喰やつたさうなれど。私は端り上り口で鰻の蒲燒ばつかり。お山は口へも寄せなんだが面妖な鰻といふものは。喰へば喰ふ程お山がくひ度うなつて來る。ど

んな者ぢやと笑ひける。親方も返答を傍へ外れたる鎚の音、てんてん天氣も照降り雨「五十餘りの女房の。取つて置きをば濡らさじと嬉しや此方さうなとて。走り込みしは誰でござるぞ何方からぞや。詞ハア、御見なりませう。大文字屋の利右衛門様とは此方か。北野鐵鎚煎餅三郎兵衛と申す者の女房、此方の若い衆平兵衛殿ちよつと呼出して下されませ。ハア、なか／＼や。平兵衛は今日嬶や娘が不動參りの供をして。此方の近所へ行つたが今に戻らう。煙草でも喫んで待たつしやれ茶進ぜやと言ひければ。ア、お構ひなされますな。平兵衛殿とは不圖した縁で懇に致し合ひ。今では親子同然。疾うにも内方へもお禮に參る筈なれども。地女夫の手ばつかりの商賣。手があけば口があくで自らの御無沙汰。今日は平兵衛殿に用ついで。御家様にもお目にかゝらうと存じ參りました。詞是はとゝの手燒の鐵鎚煎餅。様に進ぜて下さりませ、皆平

兵衛殿の傍輩衆か暑い時分にあつい仕事。地御大儀でござんする、あれ／＼辻迄平兵衛殿お供して見えまする。お家様さうなといふ所へ内儀娘平兵衛が、差掛傘の印にも新地の平野屋墨黒に、櫻の丸の花の露フシ花の雫もなまめきて。地人々歸ればヤア戻つたか。詞雨に逢うて氣がせかうなあ、いや／＼平兵衛の近付多うて。傘も借つたり休んだり。地ゆるり／＼と蜆川の新地を。お妻に始めて見せましたと。語ればお妻もなう父様。詞平兵衛の案内で。美しいお山衆をたんと見て來ました。ヲヽそりや能い慰み一段／＼。北野の煎餅屋のおかた平兵衛に逢ひ度いと。先にから待つてぢや嬶土産がある禮をいや。煎餅屋殿も先づ内へとフシ亭主は奥に入りければ。地ア、お家様で御座りますか今日は宿に居りましたら、澁いお茶でも上げましよものお袋の多やと挨拶す。詞されば の事平兵衛の懇と、かね／＼話し家も知つてゐまする、重

ねてから寄りませう地あれ皆お賓飯の時分ぢや。サア先づ内へそれ平兵衛。馳走しやと人あひよくオクリ皆々奥へぞフシ入りにける。地平兵衛四邊を見廻し側へ寄つて小聲になり。詞なんとして御座つたぞ今日立ちながら平野屋で。小かんにちよつと逢うたれば物案じ顔して今夜中に。地是非ともちよつと來て下されひよんな事が出來ましたと。跡先もなう言うたれども供の事なりや二言と聞かず、おうと言うて戻つたがどうした曰くぢや氣遣な。萬事此方を頼んで置く、何事が出來たぞとフシ恨み、顔にぞ見えにける。地女房もはや涙ぐみ、道理さりながら。つい言うて濟まぬ事せかすと様子を聞かつしやれ。詞今迄は私が身を小かんの肝煎取次のと此方へも隱したが。眞實は私が姉の子現在の叔母姪。地父親は播州で鷹匠頭の奉公人。五十石に五人扶持、二本指いた人の子なれども、親御前が殿様の御秘藏の鷹を外らし お氣に違うて浪

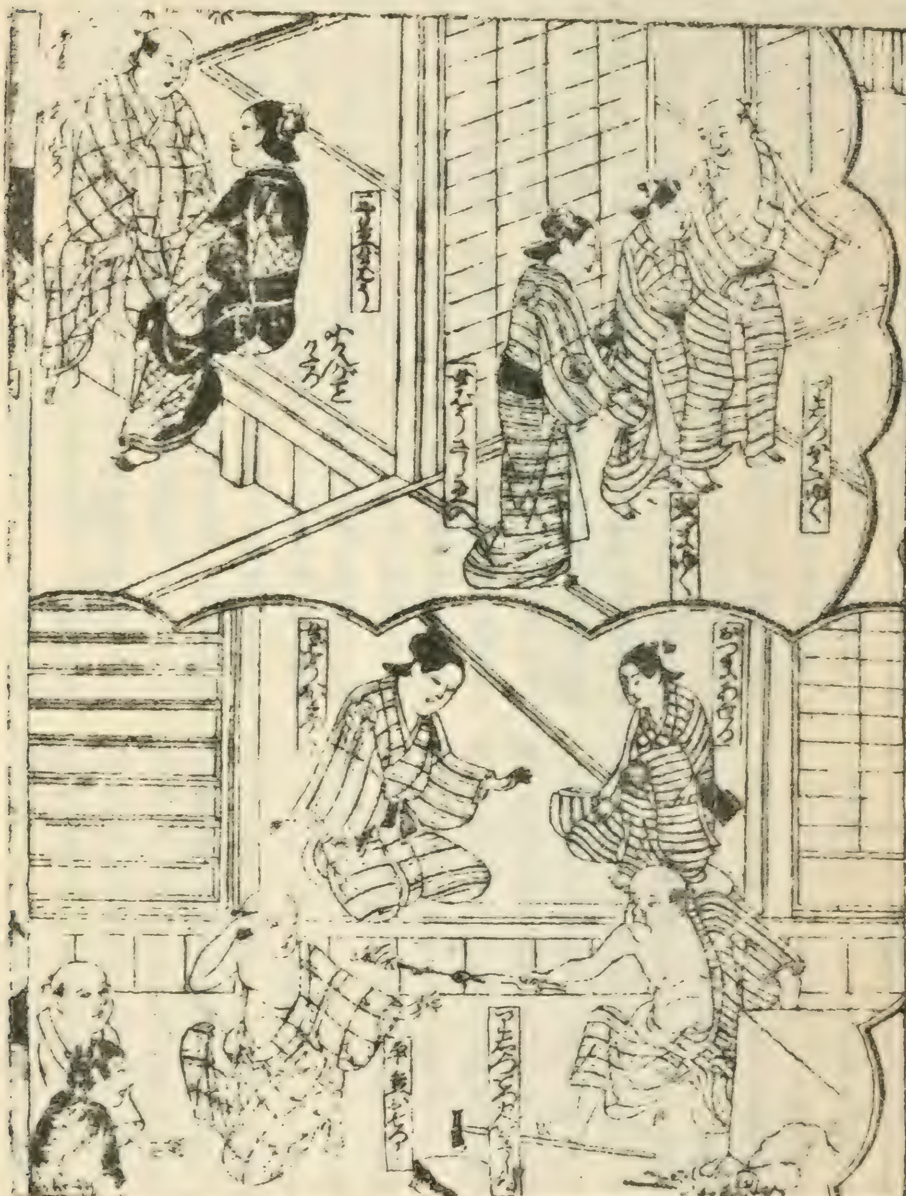
人しあの子ばかりを大阪へ。叔母を便りに何方へもしつけてくれとて上されしが。折節惡う不仕合こちの夫の長煩ひ。やう／＼本腹めさつたりや一昨年の大地震。私は氣癪で床に就き身代どうも立ち兼ね。既に竈を破る處。あの子が私等に隱して。肝煎頼み堀江の茶屋へ。三年を十二兩に身を賣つてくれました。私は聞いて目をまはす夫は男の腹を立て。身こそ貧なれ大阪三鄕隱れもない。鐵鎚煎餅三郎兵衛が嗅が氣色が本腹して。千年百年生きようが大福長者にならうが。女房の姪に身を賣らせ其の金取つて立つものか。腹を切るとて喚かれたを可愛やあの子が淚を流し。叔母樣許して下さりませ國の父樣母樣が。浪人でなければこな樣達へみつぎの筈。其のならぬが悲しさに私が身を捨てました。他人でもある事か叔母は親の片割。こな樣達計ぢやない國にござる母樣への。孝行と思ひます。叔母樣を母樣と私や思うて居まするると。病みほうけた叔母に抱付いて聲を上げて泣きやつた顏。今に忘るゝ事もない其の陰で人參の。百服餘りも飮んだ故。病の根を拔き此の樣に身代の尾も見せず。暮すは小かんの孝行ゆゑ。こな樣元は知らぬ人小かんがいとしがる人と。いうて互の懇あひ命を助け身を助け。姪ではなうて親ぢやもの如在にせいと言やつても私等は如在はないものを。恨みが結句で聞えぬと。四邊を忍びしく／＼と泣きくどきてぞ語りける。平兵衛手を合せ。餘り氣遣ひなさに恨みらしい詞つき。眞平々々御免し。此方を叔母御といふ事も。小かんが言うて知つて居る。先づ此の度ひよんな事出來たといふが氣遣な。落付かせて下されと。なほ氣をせくこそ道理なれ。ヲヽさればいの。内々國の親御前へ茶屋奉公は隱して。大阪の歷々の奧樣へ預けた分。所に今度小かんの兄御。殿樣より呼返され御奉公にありつかれ。それ故あの子を國で緣に付けるとて。乳母の息子の乳兄弟が。昨日の朝おつや樣迎に來ましたと。幼名いうて上つて。安治川に宿を取つて居る。こちと女夫は當惑して。樣々思案して見ても。今で請出すあだてはなし。恥を捨てて言うたらば國の迎か藏屋敷で。つい金を調へ國へ連れて歸らうし。時には此方と緣切れるどうしたものであらうと小かんに問うて見たれば。いとしやあの子も泣入つて。國へ歸つて親達の顏も見度うはござれども。平さまに一寸も離れうとは得言ひますまい。叶はぬ首尾に極つて國へ下るが定ならば。私は見事に死にまする叔母樣を賴みます。國へやらずに平樣と永う添はせて下されと歎くもいとしゝ道理なり。恩を受けた大事の姪こゝは一つと思うても。手業にいかぬは金事國の迎は早うといふ。あの子はどうぢやと氣をせきやる詮方つきてこな樣と談合に來ました。三年を十二兩一年半は勤める。殘つて半金六兩なれど。ひき日の

なんのとてつきり七兩は入りませう。私が方で二兩二分は身の皮剝いでも調へましよ。まあ四兩二分あればあの子をしやんと請出して。こなさまと添うから夫婦にしたと言ひなし。國へやるとも女夫づれ聟入させて濟ませども。其の四兩が見えぬ故大事の娘が望も遂げず。死生も出來かねまいと思へば胸も塞つて。今朝は重湯ばつかりで何も喉が通らぬ。是程しきでこな樣へ身代打明け語す事。恥かしい口惜しい。無念にござると手拭もつシ絞る。ばかりに泣き居たり。平兵衛はあと吐息をつきはて按思案に行當つた 私も近年彼女故に旦那の懸も何も彼も。しやちらさんばう近付中に痛手を負ほせ。動かれぬ身になりし故。ちと借錢を輕めんため味な商賣からくんで。三兩餘りは今日明日に請取る筈の約束。はて頰は面此の金請取り次第遣りませう。二分や三分の足らぬ口それは其の時どうもなる。何とぞ首尾して小かんを手に入れる樣に頼みます。國へ下るに極れば此の平兵衛から死にますする。二人の命を助ける慈悲本の後生になりませう。叔母様へ偏に頼みますとフシ双手を合せ泣きければ。いや頼む事ではござらぬ私が身にかゝつた事。其の金さへ調へば何の案ずる事も無いちつと胸が開いた平野屋へも立寄つて。小かんに言うて落付かせうそんなら早う歸りましよ。内方へも宜いやうにと出づればこれ〳〵此の傘。小かんに返して下さりませなう〳〵是は幸と。さいて出でたる傘や虎が涙も引替へて。丑天神の野邊の露消ゆる間。近き三重へ命なり フシ見送る道も。しみづきし。草鞋に編笠の田舍商人二人連。ヤア平兵衛殿いかい暑さでござるの。誂物どもも出來ませう。今日請取つて金も濟し明日下りたうござるといふ。如何にも〳〵上物は皆出來たが。急な細工がつかへて中から下の並物が揃ひにくい。金を先づ請取つて出來次第に後から下しませう。金を持つてござつたか何程持つてござつた。四兩あしもござるかとフシそゞろに高をぞ聞きたがる。いや上物さへ出來たれば並は遅うて大事ない。誂への分算用は今日濟らす。仕切つてと。腰の打飼取出し。先度手附に一貫文渡し。今三兩三分相場は金六十目。錢十五匁合せて二百四十目。仕かけの代に引かない此方の方には是が得。ちよつと一筆請取して出來た分下されと。言ひも了はぬ半分聞き三兩三分に摑みつき是でござつと濟みまするまあ二分や一分は叔母がどうぞしやりましよと我許り合點の數も讀むやら讀まぬやら懷に押入れ。請取でも手形でも起請でも仰付けられと硯紙取出しこれ旦那衆。上物の裏金二千尾戸棚にあらう。取出し下さりませ フシとぞいきりける。亭主は裏倉兼ね乍ら持つて出で。平兵衛が話で聞きました。大和の雪踏屋殿は各でござるか。是はあはぬ細工私が聞けば請取るまいに。平兵衛が在所から懇

仲ぢやと申して何處でやら請取つた。地重ねてからは成りませぬそれお妻お茶運じや。あいと返事も色づきし赤繪の茶碗手に据ゑて。出端一つあげましよと差出せばこれは〳〵。忝いと取らんとせしがいや〳〵。お茶はたべますまい。御無用になされといふお前はいやならお連樣。いや私も御免なれ。平に一つ上りませ。何しに御辭儀申しましよ兩人ながらお茶はえたべませぬ。そんなら素湯でも上げましよか。詞いやいや所望にござらぬと。地言へばお妻も打笑ひハア愛想もない事や。こりや仁介煙草盆持つて來いとて入りにけり。仁介が奥より煙草盆鍛冶屋炭火のおこり立て。ある火は置いて懷中より火打に火口打出し。煙草のむ身は石の火の。光の間をも待兼ねて フシ身の程知らるゝ果敢なさよ。地亭主是に心付き。詞いづれも大和のお衆とある。奈良郡山左手右手。吉野郡の奥迄も尋踏居衆は皆存じた。地御兩人の御在所は何處と問へど聞かぬ顔。あちらへすべらし紛らかし只名所を隱すにぞ。平兵衛も親方に根問ひさせては悪しかりなんと。サア請取は了うたり渡して早う戻しましよと。取らんとすれば亭主抑へて。詞イヤ此の商賣はせまいわい。詞請取つたら早戻せ始め聞けば請取らぬ。地あの衆は大和の金銀たんと持つた村の。牛馬迄持つた樣あの衆の譜物。此の利右衛門は請取らぬ。我等が家職に瑕が付く。勿體ないと掻き渡へひん抱へて奥へ入る。先づ待たつしやれそれでは私が立ちませぬ。損の行く細工でなし金に一厘不足なし。手附取つて手形して渡す段に變改して。職人が立ちよすか樣子があらばある迄。それなら私が内證の自分仕事にしませう。時には家に難付かず瑕がつけば平兵衛が瑕。讓さねばならぬと取付く所を突きこかし。はつたと睨んでうつけ者。詞瑕が付けば平兵衛が瑕とはどの口でぬかした。此の利右衛門が目代にして、弟子手間取をも引廻す己れに瑕を付けまい爲よ。京御所方の御普請の下細工の釘請取り。火水を濟める最中に正しうもない金を取り。伴ひつき合ふ己れが先いきせうと思ふか冥加があらうと思ふか。地五兩に足らぬ腐り金寶の山と惜しみ居る。根性のかひなさで世がならうか。地結句丁稚の時分には人にもならうと思うたが。エヽごくに立たぬ根性と涙を浮め齒ぎしみし。向ひ隣へ聞えぬ中金を戻して往なせをれと フシ怒り。けるこそ尤なれ。地平兵衛至極に詰れども懷の金に離れ難く。ようござる今の間に私が打つてやる。地職は跡で算用と横座に直つて居續。地鞴打ちくべ吹き立て〳〵丁稚ども。傍輩の好みに相鎚一つ打つてくれ。平兵衛が一生の恩に受けうと頼めども。親方の顔色見て。誰か詞の相鎚さへ フシ打つ者とてはなかりけり。地平兵衛恨み泣き。エヽさうはせぬもの聞えぬな。〳〵ぬ等が草臥れ眠たがる。時には俺が代りをして一人前を働

いて、背から寝せたり休ませた恩徳を忘れたな。よい頼まぬ置きをれ裏金下足や二千足平兵衛が片腕。半日の仕事に足らぬ親方傍輩一つになつて此の平兵衛が一分すてさせ。此の首尾なら死なうも知れぬ死んだらば此の[illegible]念 己れが首引抜いしとて[illegible]につて[illegible]ら[illegible]として[illegible]と打つ鎚[illegible]落[illegible]ら涙も[illegible]ほれ[illegible]湯[illegible]るば[illegible]地混[illegible]間[illegible]飛[illegible]てし[illegible]鎚[illegible]鉄取い[illegible]拾[illegible]朝[illegible]

溺める鐵床に涙をかけん詞當りよ　鐵の槌を押取直し胴骨四ゝ五つ。叩付けくゝこれが敵は此の金と懐に手を押入れこれ金を返せば言ひ分ない　此方には請取らぬどこぞ外で詠やニ。投返せば二人の者詮議無益と思ふ顔ニ　詞手附の一貫覺えたか。地平兵衛重ねて取りに來ると　フシ言ひ捨ててこそ踊りけれ　地　平兵衛わつニ大聲あげ、スヱテ四邊も恥ぢず。歎きしが。さりとては旦那殿鈍功なした飼立を。



弟子冥加が悪いが定か只今のお詞は　弟子不便な言ひ樣で又此の仕方は平兵衛に。首縊れとのなされ樣鍛冶の道一通。火を清めるといふ事は商賣なれば知つてゐて。其の上でする商一旦はさもあれ。一生主に逆はず胴一つ返さぬ此の平兵衛が是程迄。逆うて申すからは。身ぬけのならぬ フシ譯ありと。大目に見て下されて。其の御恩を忘れる平兵衛めでは無きものを。但し金を引込んで損かけうとの氣遣か。（詞）年の切は去年明け。身を質に置くからはお氣遣は無い事。平兵衛が身一生いきる瀬か死ぬる瀬ゆ。大事の金に行詰りやう／＼大和の宿村か。（地）藏物を天の奥。時の間を合せたく奉公して十八年目。始めて旦那に叱られ能はぬ身には能はぬ金。命を捨つるも世の習ひそれに悔みは殘らねども。額に毛抜も當てるも飯店のさきで晝日中。町の衆道行く人友衛輩も見るぞかし。丁稚小者をするやうに歯もない摸ち叩き。背骨は折れうが砕けうが。打たるゝ鎚は痛うない。哀れを知らぬ親方殿。見て居て打たするお家樣やお妻樣の情ない。お心の金鎚が身節にこたへ浸み渡り。痛い悲しい恨めしいと。泣いては恨み恨みては フシ我が身の。科を悔み泣き。色に迷ひの心の闇 フシ推し量られて不便なり。（地）親方いよ／＼腹を立て。（詞）鹿を追ふ獵師は山を見ずとは己れが事よ。お山狂ひに眼が眩み。人の理非も身の上も一寸脇が見えぬよな。己れが身の立つ事ならば彼等に商する迄なく。五百匁や六百匁は此の利右衛門が出し兼ねぬ。使うても／＼止りの知れぬ悪性金。氣儘にさするは己が身に違嗣といふものよ。（地）内外の者も町衆も三人寄れば己れが評判。聞いて無念な親方の心の内を推量せよ。（詞）先にも仁介長三めが。噂をするを叱りつけ今で彼等に面目ない。去年の春から際々に。或は百匁八十匁懸の算用不埒にて。いつの際か帳面のさつばり濟んだ事がある。それのみならず堺筋の絹屋から。紺繻子の女子帯五十六匁。緋縮緬八尺三十五匁といふ書出。覺えが無いとて返せども跡からは持つて來る。不思議な事と思うたに今日といふ今日内の嬶が。緋縮緬の正體を見届けて歸つた（地ナヽシ）勿體ない冥加ない灰まぶれの鍛冶屋の仁藏。身にさへ着にくい緋縮緬に。足を四本踏込んで其の銅は何とせう。身の行末が可愛やと スヱテ 聲を上げて泣きければ。女房娘諸共に。惡う聞きやるな平兵衛と フシ共に袖をぞ絞りける。（詞）罰利生ある親方にて涙を止め。（詞）こりや平兵衛。言うて居ては果しがない今迄の事皆赦す。是から魂入換へ世帯を持つて出る迄は。茶屋の見世へも上るまいお山と詞も交すまいと。きつと誓文立てうならば此度の金たとへ四兩が五兩でも。今出して取らするがサア何とと言ひければ。（地）平兵衛飛びしさり兩手をついて頭を下げ。申しお家樣お妻樣。旦那樣へ詫言してお詫申して下さりませ。道

知らず恩知らず大悪人の私に。金を出して此の難儀お救ひに預る事。親も及はぬ主の慈悲今日は祝ひ月。廿八日御縁日不動の劔に喉吭を突通され身の家職の鍛床に。打ちみしやがる〻法もあれ又や再び悪性事。ふつつと思ひ切りましたと フシ 涙を流し言ひければ。地 チヽ出來しやつた〱それが其方の身の果報と。皆々悦び褒めにけり親方は鍛冶を直し。詞 さすが男ぢや滿足した。此の上ながら此方の心の落付くため。地 誓文の證據にと三尺許りの樟鐵の。夕日の如く燒けたるを鐵鋏にて引出し。鐵床にどうと直し。詞 是は此の度禁中樣御内侍所の釘下地。此の内侍所には日本の神々御番ある。八萬餘座の神の司の御寶殿。地 其の釘になる黒金。今の誓文僞らないと見る前で鐵火を握れ。心に誠ある者は氷よりも冷かなり。少しも僞ある者は腕燒け爛れ落つるといふ。 佛神に嘘はない其の方も發起しての。今の誓文立つるからは無い事はあるまいサア。握れと言ひければ。平兵衛色變り。只は〱とばかりにて ヲクリ 歎しきりにぞ成りにける。地 女房笑止がりハテこ〻な人狼狽やる。思ひ切つたが定なれば鐵火に怖い事は無い。但しは當座まかなひに金取り騙しの空誓文か。さりとは惡い合點一生の病を拔き。身の上の固まる事さつぱりと思ひ切りや。思ひ合うた馴染の仲離れ難ない筈なれど。それは一度の皮切なんぼいとしい戀しいも。身が立たねば叶はぬ事但し思ひ切られぬか。サア否應の返事しや。どうぞどうぞと手詰になれば平兵衛。顔も心もうろ〱と否と言へば主人の意外。應と言へば年月の。小かんが情仇となる。思案涙に胸つまりなう旦那樣お家樣お妻樣も頼みます。其の御返事は私が身に成り代つてどうなりとも。思ひわけて下さりませ。鐵火は御免とばかりにて スヱテ かつぱと伏して泣きければ。地 親方も是迄と鐵槌おつ取り大地へどうど投付け。詞 エヽだまされた罵られた。十八年以來たとへ犬猫飼うたりとも是程にはよもあるまい。地 半時も内には叶はぬ叩き出せと飛びかゝ〻い。闘骨をどうと踏む情なき丁稚ども。柄長の金鎚手んでに押取り目鼻も分かず打ち出す。平兵衛大聲あげたとへ撲たうが叩かうが。此の平兵衛はこれの内より外行き處は無い所にない。死ぬるとも此の内から直に死ぬると。跪入るを叩き出し迯げ入れば叩き出し。雖なく泣へ打出し打つて濟めの鐵水や。跡は火をかへ水を替へ妻もかゆる備後町。へりも切れ果て縁切れてとこばな。れ行く 三重 戀路なり。

中　之　卷

へ戀草の。フシ 種植ゑんとて。地 園めしは。神か佛の寶島を來て見よとてや田蓑橋。夜々を重ねて大江橋。情のゆき析當ならば。幾度袖を拂はまし。スヱテ 花の吹雪の櫻橋。梅田の線香根崎の。青葉隱れの鳥の音も。法華長屋の名を立てて。地 神祇釋教戀無常。

中。あたる中町や其〳〵家々の上野川た〳〵遊興の多ければ妓が情の花の團扇に取りれぬ人もなし。色里に誰が身の業で身を捨つる人はなけれど取りわきて。地平野屋小かん一まきは。語るも聞くもフシあはれなり地今日は六月朔日の正月納めの紋日ぞと。思ひ〳〵の揚の客小かんは田舍の侍に。初手は内にて二つ目は濱筋の和泉屋。さがが許へと出かけたる。女子亭主のわけよしが穗長の楪を打拂ひ。人に情を掛鯛のむしり肴と春めかす。其の缺餅の水より。涙の氷とけやらぬ。フシ憂き身の上こそ無慚なれ。地あれ〳〵勝曼參りの妓樣たち。駕籠が戻るといふ中に。はや表迄舁き寄せて簾打上げコレさが樣。詞今下向しました小かん樣こゝにか。こなさンま參ると言はんしたが道寄りせずにおとなしう。早う下向さんしたそれも合點。地早う逢ひ度い人があると。ざゞめき戻る駕籠の數々。衆人愛敬愛染の。威德も見えてヽッ賴もしゝい。地さがもそれ〳〵。挨拶して。松屋丸尾河内屋の。妓樣達もこちの揚で參らせましたが遲い事やといふ所へ。程なく駕籠を舁き入るゝ皆樣ゆるりとやらしやんす。道頓堀でござんしよの。詞よい推〳〵二十郎の初日見て。芝居では大酒戻りは駕籠で蒸し立てる。暑い事〳〵。地此の暑さでは霍亂して信田森の恨み葛水。一つ飮ましやと喚きしが。ヤア小かん樣。詞こなさんは參らすか定めし夕べ平樣と。手を引合うてでござんせう。小憎い事やと言ひければ。地小かんはつと肝に染みさうした事ではないわいな。今日の客は一見の田舍の侍。日が暮れて見える筈。それ迄は愛染樣へ參らうとまゝなれども。心に大願ある故に提灯二つ紋付けて。今日の間に合ふやうにして一昨日から誂へ。今にも提灯出來次第參り度うござんすが。提灯の出來ぬも氣にかゝりますといふ所へ。地提灯屋の息子走つて來て　小かん樣こゝちやけな提灯が出來ました。二つで四匁四分ぢやとフシ言ひ捨てゝこそ歸りけれ。地嬉しや〳〵さが樣つい參つて來ませう。むつかしながら四郎兵衞殿詞此の提灯の紋の脇に。書付して下さんせと言ひければ。料理人はお易い事目出度う。筆みしらせうと。提灯あぐれば紋無しに。眞白四郎兵衞興さましこりやどうぢや。地四匁四分で白提灯氣轉の惡い提灯屋。ちやつと紋を書かせて來うと。走出づればこれ〳〵。もうよいわいの提灯屋に科は無い。私が佛に受けられず。願の叶はぬ知らしめさうして置いて下さんせ。やがて梅田へ行く時にどうで入らねば叶はぬと。浮世を拗ねし言葉の端。一座の妓や下女久三仕直しにやつたらば。詞多分晩の時分にならう。歸らぬ事は悔まぬもの言うて歸らぬ〳〵。歌いうてな。歸らぬ死出の旅。サア飮みかけうと祝うても。定まる前世の約束をフシ遁れさることあはれなれ。地平野屋の小女郎が風呂敷包打ちかた

げ。ア、あつやとて走り入り。詞さが様ちとお目借ろと耳に口寄せ。内儀様の言はしやんす。アノ小かん様には。鍛冶屋の平様といふ間夫のお客がござんすが。様子あつて逢はせませぬ。晝からちらりへ此の邊で見えまする。門より外へ出しませず。行水も其處で頼みます。地氣を付けて下さんせとフシ呼き散らし歸りけり。地小かんはしぐ聞付けてさが様今のは何の事。平様の事であらうぞりとては氣の毒な。先の人は親方持浮名が立つては職人の。身の爲によからぬ噂人のいふは皆惡口。間夫の何のといふやうな深いわけでは更々なし。今でもふつと見えたらば何處ぞでそつと逢はせしや。こちらからとんと埒明けて手を切つて退けましよと。口には言ひて眼は涙さがは五音で推量し。詞アヽそんな事氣にかけて此の勤がなるものか。世間の口に戸を立てて錠を卸す其の鍵は。いかな鍛冶屋の平様に誂へてもなるま

いと。地夕暮近き人目かけお客様達見ゆる。や。行燈の用意しや甜瓜も冷しや。湯も取つてたも小かん様もお行水。わしも汗な流さうと奥に入れば一座の色。わし等も行水して來うとオクリ皆々へ表に出でにける。フシ空も涼しき。夕風に。流行る今年の紙鳶に無縫書いふ。から風招く唐團扇鬼の頭も色里の。上に揚がれば。ハルフシよよとしなだれ揚がる藤の花。たかふみいかの一結其の思はくの紋付けて。快涼しき小袖いか。盃いかの品もよく。菊や牡丹の花いかあ。頂き揚ぐるフシ太鼓いか。鍛瓢箪露いか。吹かぬ風持つ燭いか。雲を繪どるに異らず。ハシ往き來の。人も立留まる。地此の内に彼の人の見えよかしと紙鳶見る顏で表に出で。上下に氣をつくれば梅田橋の西詰に。淺黄縞に古編笠。ア、あれさうながタ顏の。たそがれたどる覺束なさ。先にも見付けて編笠の下目遣ひ居かねば。心の内に招きあひ目はいかのぼり爪先は。其

方の方へ行くゝ水の橋の詰近くへ。跡いこはさし身も縮んで側へ寄りに寄れど。も。人目にせかれだき付かれず文を見てたら私が氣は。死んで居たとばかりにいう泣くにも涙落ち次第スエテ拭ふも人目つゝましや男は笠のうちしをれ。詞親方も道理の勘當是もつて恨みなし。其方を國へ下さねば親に不孝の冥罰。地行末よからうやうもなし下し度いも一ぱいなり。別るゝは猶つらし此の下兵衞が胸一つでさ。本國の親達さで歎きをかけ苦をかける死しにも惡緣なわとフシ笠を。傾け泣居たり。詞あれやうくと忘れて居たもの。親の事又言ひ出して泣かさしやんす。地打たるゝ杖も床しいといふものを。拳一ツあてられず。可愛がられた現在の親。是は懺悔ぢや忘られぬ迎ひに來たは乳兄弟顏恰好は覺えねども親達と思うて見たけれども。町方に居る分に言ひなした私が身が。ばしやれた形で逢はれもせず親の事を思ふやら。こなさん

の事思ふやら心を推して下んせと又さめ。〴〵と泣きけるが。是ではすはといふ時に國へ心が引かされて。未練の出來まいフシものでもなし。こな樣に逢ひ次第死んでのけうと覺悟なさるゝ。剃刀は身を放さぬこれ見さんせと袖口から手を引入れて懐の。剃刀の柄包みながら。男の手に確と持たせ持添へて、南無阿彌陀佛と我が腹に突き立つるを挽ぎ取つて。引もたくればこりや何故に。もう逢ふ事は

優曇華。こなさんの手で死に度いと フシ嘆き。口説くぞあはれなる。詞はて悪い合點な未だ人立もある中にゃ。思ふやうに死なさうか其の心底に極らば。まそつと此處に彷徨うて日の暮るゝに程は無い。人顔見えぬ時分に足を限りに何處でも。見事に體を竝べたい平に待ちやと制すれば。地同じくば今茲でちつとも早うと死神の フシ誘ふ命の果敢なさよ。地和泉屋には小かん樣〳〵と呼ばはるこゑごゑ

南無二寶最期の邪魔さらばとばかり平兵衛。堤を下りて身をなんとフシ茄子畠に隱れけり。地和泉屋の男ども門に出で、そこに何してぞ。屋内がお前を尋ねて太鼓鉦が入らうとしたと言ひければ。アヽ仰山な涼みがてらに紙鳶見に出た。太鼓鉦が入らうとは、朔日さう／＼祝うてもらうて忝い。地太鼓鉦も鐃鈸も饒て入らうと淚ぐみ、跡に心は殘る日のかけと入りつゝ〽暮れにけり。地空に棚引く紙鳶次第々々に引下ろす。中に小袖の絹の紙鳶風を含みて下り衆ねしが、絲巻中よりふつつと切れ、和泉屋の小座敷のフシ軒にひらめき落ちたりけり。地あれよあれよといふ程こそあれ紙鳶主大勢引連れて貰ひませ、と驅け入れば。四邊近所の血氣の者それやるものかと走り込む。道行く人は是ついでにお山見べしに込入るを。内の者とも押へても我人差別あらばこそ。天の與と平兵衛群衆に紛れ奧座敷の。庭迄どや／＼入りにける小かんは見付け氣をあせる。とかうする間にやう／＼と扱ひ詫言たら／＼にて。紙鳶をもらうて立歸れば皆々込入の大勢も、フシ殘らず表に出でて行く。地小かんは男を招きあげ違棚の厨子戸を明け。夫を押入れすはといふならこちらから。南無阿彌陀佛と聲かけつ。それを合圖に其の剃刀で。わしが肋骨を復越しに、ぐい／＼と抉つて、うんというたらこなさんも尋常に死んで下んせと。戸を引立てて、寄りかゝる日に鼻歎心には彌陀の名號一筋の紙鳶の絲よりも細さ、切れかかり。たる玉の緒の結びにかかれぬ二人が命フシ危くも亦無慚なり。地はや家々に行燈あけ面々約束／＼の。客も見ゆれば酒肴暖物にする親川、フシ水も色めき賑へり。地小かんが揚の侍も、一僕つれて何とおさが遅かつたか。詞小かんは爰じやと腰掛くる。是はノ＼小かん樣は今朝から待兼ねて、地たんと腹を立てゝござや振られさんすな怖い事ぢや。フシいうち先へ〽奧へと伴ひければ。詞小かんは色を悟られじと此の長い日をうつかりと、地よう待ちほうけにさんした。南か堀江か乾度吟味もしたけれど。馴染が無いだけ許してやる。其の代に酒呑ますと挨拶もお仕着の。フシ袂を戸棚に打掩ふ。地北野の叔母は二三日夜も寢ぬ目許とほ／＼と。詞和泉屋殿は此方か。平野屋の小かん殿をちと呼び立てて下され。北野鐵鎚煎餅といへば合點。頼みますと言ひければ、地さがら日頃はうす知りの座敷に出でてしな／＼呼き。ちよつと立つて逢はしやんせと。言へども跡の氣遣に棚の側も離れ難く、座敷叔母も呼び難くどうかかうかと思ふ顔容は見しよりア、これ／＼。詞我等は一見明日は國へ下る者、お客衆でも苦しうない是へお呼びなされといふ。いや私が叔母樣話し度い事がある。自由なから其の間端へ立つて下さんすか。地何が扨々話の時分は立ちませう、近付になるため。早う是へと言ひければ、詞ちか打笑ひ悴かな／＼。

當世は田舎衆ほど氣が通ると走り出て。こた叔母樣お客へ斷り申した奧の間へ通らんせ。地それならかう通りましよいづれも御免なりませと フシ奧の座敷に通りしが。地客といふは國許の迎の人叔母ははつとばかりにて。詞小かんはあの人見知らずかあれこそ其方の乳母の子乳兄弟。こんどの迎に上つた人よい。地ヤア知らなんだ恥かしや。いや其方より叔母が恥。此の勤めさする事國の人に見付けられ。最早言譯ないわいのと。叔母姪ひしと抱き付き フシ聲も。惜まず泣き居たり。地侍 靜めて。詞アヽこれ〳〵ちつとも苦しからぬ事。親御達御浪人とは申せども。國では賤しき業もならず大阪は誰知らずいかなる身すぎなされても。名字に瑕は付かぬとて覺悟の前で 上されし。それ故他人は差措いて乳兄弟の拙者が參る事。地御内證の恥恥辱承つてよいやうに。 計らへとのお迎ひ如何にしても此の間。詞叔母樣の言葉といひ萬事合點參らぬ

故。客と詐り方々を間合すれば。平野屋の小かんは鐵鎚煎餅の姪の由。聞届け猶念のため。昨日表向きの御一座。幼顏疑なしと藏屋敷にて金調へ今日晝の間に堀江とやらんの前の親ケ平野屋亭主も對談し。本金十二兩相濟し。札取つて今宵から。自由の御身に致したり。地最早氣遣遊ばすな私は乳母が倅。 和田傳内と申して家中に若黨仕る。おつや樣と御同年。幼名は若松五つの頃迄は。夜晝お側に附添ひ。詞一所に遊び育てられ七歳より男の身は大身小身隔てなく。奧へ參らぬ武家の作法。互の顏は見忘れても。地乳兄弟なり主從なり私迎ひとあるならば。恥も恥辱も振捨てゝ。御息災な顏ばせ見せて下さる筈なるに。お心迄變つたはちとお恨に存ずると。スヱテ侍 泣きにぞ泣き居たる。地叔母涙にくれながらさりとては面目なや。何もかも叔母が科。あの人ばし恨みやんな身を賣らせたも我ゆゑ。詞此の度國の出世につき下るは其の身の仕

合なれど。あの人も大阪に思ひ合うた方ありて。深い約束遁れぬ仲。そなたに隱して金調へ叔母が力で彼の男と。地夫婦になして年月の望を遂げてやりたさに。身をはたいても煎餅屋押せば砕ける身代の。底を見せたる フシ恥かしや。地此の上其方が心入國へはよしなに言ひやつて。あの子が大坂で彼の男と。 添はるゝやうには成るまいか。逢々上つた乳兄弟。よからぬ事を聞かするも皆此の叔母が身の因果。世の中の浮き沈み子を賣る親は多けれど。 姪を賣る叔母は我ばかり。 恨めしの娑婆の境涯やと スヱテ聲を。ばかりに泣きければ。地小かんも共に涙に咽び。 知つての通り胤腹一つの兄もあり。妹もあれど如何なる緣にか母樣の。私一人が祕藏子で。海にも山にも譬へられぬ。 御恩を受けた此の身なれば。明暮逢ひ度さおゆかしさ身體は大阪に殘つても。 魂は母樣の 懐に入つてゐる。 是程に思へども生中武士の娘とは。

薄知りに人も知る。遁れぬ義理にからまつて。大塩の土とならねばならぬ。其方に任する兎も角も。煩ひとなりともいつそつやは死んだとも。どうなりとも言うてたも。其方を頼む此の儘に。大阪に置いてたも國へはいやぢやと手を合せ フシ拜み。口説くもあはれなり。地傳内わつと聲をあげ。とかうも言はず歎きしが拐も〳〵あさましや。詞口と心が皆違うた氏より育ちが恥かしい。華美はすはなる身に染まりうはの空なる世にならひ。親の事も故郷の事も忘るゝ程のお心には。何時なり果てた情なや。心なき畜類も鳥は古巣を慕ひ。北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか。地鳥獸もさらはない親無い者は身を樂に。旅他國致せども親の墓へ參るとて。百里二百里戻るもあり此度お國の兄御様。御知行拜領親御達は御隱居。髮をおろして樂々と御法體の言なれども。おいとしや。お袋様つやが戻つて二人の親が法體の。顏見たらばなんぼう殘り多からう。まう一度愛のある顏をつやに見せ度いばつかりに。惜しからぬ頭の雪解ぐも撫でるも子の可愛さ。早う連れて歸つてたも傳内様頼みますと。家來の我等に樣つけて待焦るゝ親心。私ばかり悄々と戻つて生きてござらうか。手を出して兩親を殺すも同じ不孝人。堅牢地神の頂に釘を打つとの教あり。釘は鍛冶屋が細工にて打きねはなされまい。曲もないお心や。我等が母はお前の乳母。養ひ君の顏見んと日を數へ指を折り。待ち憧るゝ母が心思ひやられてお袋様の。御心底の痛はしや則ち母の御文と懷中より取出し。地此の直筆を御覽ありとつくと御思案遊ばせ。私が腹立も皆おいとしさ故なりと。泣いつ叱つつ樣々に詞をつくし諫めしは フシ奇特にも亦。あはれなり。地小かんも母の文と聞き押戴き上書見れば。おつや殿參る母より此方無事と書かれしが。お筆に年の寄つた事十五の年此處へ來て。八年拜まぬ親の顏見たうなうて何とせう。生き身は死に身若しひよつと死病受けたりとも。かゝる樣の懷しさに臨終も仕損ひ。如何なる恥も曝さうかと案じ過しする程に。親の事は忘れぬ餘り叱つてたもんなと。文を顏に押當てて フシ消え入り。絶え入り。泣きけるが。地封目切つて見たけれども。文體見たらば氣も落ちて。いよ〳〵心が引かれうず本様に談合したけれども。襖一重が七重の關。一人の思案に落ち兼ねて フシ暫し案じて居たりしが。地いや〳〵口で言ふは易い事どうなりとも間に合せ。今宵の所を遁れんと涙拭うてアアさうぢや。詞今とつくと合點した親には思ひかへられぬ。こちらをふつつと思ひ切り成程國へ下りましよ。地叔母様も傳内も。今宵は歸つて明日早々といふ中にも。起請文を取られじと守袋を後手に。襖の戸を細目にあけそつと入るれば。男も心得受取りしが フシ二人の心の危さよ。詞叔母傳内も悦び御承引忝し。とてもの事に彼の男の誓

紙を。只今破つてお見せなされよと言はせも果てず。ハヽ思ひ切るからは起請はあつても反古なり。其の上誓紙に男の方へ責して。茲には無いとぞ陳じける。いや／＼今迄懐に守袋が見えました。地是非にお隠しなさるれば慮外ながら手をかけますと。言へば男は懐の中。見付けられては悪しかりなんと。守袋を戸の間より小かんが袖に。奪ひ／＼返せしは フシいよいよ危き契りなり。地アヽ待ちや／＼粗略に破らうと。守袋を解く内にも。サア二世の固めの起請文。破るは佛神三寶の守り目も切れ果てた。片時も生きて何にせん合圖の最期はこゝなりし。障戸棚に肋骨を寄せ誓紙をひらき。南無阿彌陀佛と合圖の詞。さつと引裂き身をすり付け待てども内より音もせず。南無阿彌陀佛と引裂いては身を付け。引裂き／＼男の刃今や／＼と最期を待てども。内には彌よ恨みにや。静つて音もせずエヽ死ぬる事さへ叶はぬは。是が誓紙の罰でとて。ずん／＼に引裂きてこそどうど伏して。泣きければ。地ヲヽ尤理りやつれなきはふたりの母と フシ皆々袖をぞ絞りける。詞涙をとゞめやう／＼と。アヽ氣がつかれて頭がいたい。叔母様のお文も見廢しちと此處で休みたい。誰も人の來ぬやうに。障子も閉いて皆立つて下さんせ。地ヲヽ道理々々傳内も奥へおじやと出でければ。詞申し叔母様不野原へござんしたら。女夫のお家係累等。内外の者へも隱さいに。是から直に遠い國へ行きまする。もう此の世では逢ひますまい。年月の懇忘れはせぬと。地つど／＼に頼みます叔母様もさらばとて。餘所にいひさす詞さす。さすや障子の薄紙一重。フシ見えざる事こそ是非なけれ。地はや臺所も仕舞ひ頭丁稚起して。詞こりや／＼安治川の宿へいいて。明日明け六つに乘る舩に舩の用意せよといへ。内衆彌衍七ッ過ぎに駕籠一挺。地安治川迄約束して置けうぞ。叔母様は氣が竜きよう夜食でも上りませ。いやなうこれ程胸が痞へて。夜食は思ひも寄らぬ事。歸つて夫にも悦ばせ明日見立に來ませう。それなら酒がよい。こちへ。ハヽなんの禮儀があるものぞ。酒もなんにもほしもない フシ闇を辿りて歸りけり。地傳内も氣草臥れ内衆酒の燗しやれ。一つ飲んで休み度し。臺所も片付あるならば代物遣らんと言ひければ。心得たんほをつけ生薑鹽貝に花鰹。書出いたし算用に フシ嘆く時こそ侍りけれ。地叔母も宿へ行き着く頃門をあけて立歸り。詞なう／＼曾根崎の際迄行つたれば。中町の方が騷がしう。屋根へ上れのなんのといふ。地手過ちが氣遣でそれ故に戻つた。ヤア心許ないと内の男は追々に走つて出る。傳内刀おつ取つて鉢巻引締め褄からげ身拵へしつかと固めげに侍の心掛。奥へ入らんとする所へ内の者ども走り歸つて。詞アヽ氣遣ない／＼。盜人さうなが一人連。濱筋の屋根傳ひ中町の辻へ下りて。扇島の方へ走つたを

道通りが見付けて。聲を立てて騒いだ分。お騒ぎなさるゝ事でないと、言へども叔母も傳内も先づおつや様起しませうと。連立ち奥に入りけるが案の如く小かんはなし。是は〳〵と戸棚をあけつゝ。縁の隅々詮索すれば。着替の帷子引きほどき庇の垂木に結び下げ。屋根へ越したに疑なし。なう悲しや小かんがゐやらぬと。叔母が泣く〳〵聲落人ありといふ聲に。家内の男女驚き騒ぎ。扨は今のぢや程はない隨分追つかけ死なぬ先つれて北野はあんまり近い。死んだら身體を梅田はこゝぢや。町衆迄に御厄介近頃御無心長柄へ走れ。八つの太鼓がでん〳〵でんほあとが屋とやの伊丹へ淵田、茶屋中組中駕籠の衆國の侍交りしは。鬼に鐵鎚煎餅屋の。叔母は小橋へ 三重 急ぎける。

平兵衞小かん夜の朝顏 下之巻

フシ餘所のつらねも、我が命も。一節切なろうきふしや。憂き身の果は主親のばちにかゝりし三味線の。廿二三の絃切れて。殘る一期もしばしぞや。いかに今年のから梅雨もあはれ袂の五月雨に。ハル心は今も五月闇。木の下闇にとまくれて。覺えし道も幾度か。ノシオクリ同じ。ところに。まひ戻る跡に尋ぬる。願立に。神や佛の拝へ綱小オクリのばす。命と知らばこそ。アヽ是又元の道なるわ。是も今來たフシ道ぞかし。此の世からさへ。踏み迷ふ。六道の辻覺束な。迷ふまいぞや迷ふなと泣くぞ迷ひの種ならしあれ寺町の鐘の聲。一二九十は七々の。七つの知死期最期もはや（さいごばや イ）ギンオクリときに。けらし狼狽へし白妙くゞる眉頭。あだの聲への朝顏も。本フシ今咲きかゝる花の露。それより先に凋む身は。明日の朝日に此の身體下さん讃さんあさましと。よかる涙の龍骨車にフシあひの水さへまかすらん。世の中に。絶えて心中なかりせば。世の。頼みもなからまし。誰かしそめし此の契り。スエテ音に聞きしは生玉の。それが始めのだい市之丞つれて男も名の高き、大和の國や三笠山。笠屋三勝 フシ舞の袖。褄と褄とみ引寄せて。結ぶ無常の。薄煙千日寺の。フシはかなしや。別れしあとの寢姿は。夜半の鐘に目をさまし。かゝよ〳〵と乳呑子の歎きを捨てし修羅の道。魂は冥途に到れども魄となりたる今の世の。おつうは母のフシ形見ぞや、此の曾根崎に。埋れぬ。大阪三十三番に。名を殘したる。補陀落や大慈大悲の。誓ひにて逢には兜率天滿屋の。お初も佛仲間かや。道具屋おかめ與兵衞とは思へば近き町つゞき。世は何事も難波橋。ワキよしとあしとの一人境筋中に立ちたる曉が身は。不便と思へ備後町。それのみならす呉服屋の。手代半兵衞は彼の池田屋の。小菊にたんと金入なれば。心どんすな者でもないに。身のしゆすごしに氣は縮緬の、見世の帳面皆綸綸子。らしやも無い事。いはしやりんすの。

はや人魂もとび紗綾抜いて。共に及の諸羽二重の。同じ枕に。ノシふしつむぎ。重井筒の戀の水。掬び汲む手は多けれど色はさまざまに紺屋染。胸は藤黄に紅ひはだ。さやけき色は。これぞ此の。土賊に染めてさしもげに。心中みがく所縁かや。花紫に薄淺黄。精便セツユリ花色地。白がた。スエテ紺屋ののりの道ひろく。到り先立つ此の人々をオクリ今身の。上の知識ぞと頼む外には菩提をも。若きは別ちあら人神の。天満の方に見ゆる火は。フシ我を尋ぬる提灯か野邊の螢か。神の御燈か神垣や。神明宮にお暇の後世は鳥居の二柱。二人離れず立添へどこぼす涙の雨にさへ千代の。老松つれなくて地水火風の若草は。因果の嵐無常のわけスエテ時を別たず。時ならぬ夏の枯野に迷ひたる。地曉露に身もひたれ。帷子褥にまつはれて。オクリ歩みへ兼ねたるフシ二人がさま。是なう十里も來たるやうなれど。まだ此處にさまよふは此處で死ねとの神明様の。スエテ数へならめと泣きければ。詞アヽあの町は老松町。叔母様の家も二三町。地叔母様の近くで死したらば緣に引かれて後の世は。親にもあひに藍畑藍より出でて藍より青く。罪より罪の重からん來世を待つこそフシ果敢なけれ。

地男剃刀取出し摑も因果な身の果やな。人は高きも賤しきも。死しては出家の剃刀を頂くものに極るに。其の剃刀で死ぬるかや生國は大和田原本。詞幼少で二親に離れ今は在所の兄より外。一門眷族一人もなし。地鍛冶屋の鎚の一本立親兄弟とも頼みたる。親方には勘當うけ我が身ばかりか其方迄。殺して一家に愁をなくる此の科は。地獄の火焔に鞴かけ。無間の底の鐵床に載せられ。呵責の鎚に骨々を打碎かれんは今の事。よしそれは厭はねども其方は國の弔受け。六道の辻の憂き別れ是が今から悲しいとフシ縋り。ついてぞ泣き居たる。地アア辛い事云うて下さんすな。私とても親叔母の心を背き歎きをかけ。幾瀬の罪を作りし身が。善い所へはよも往くまい無間奈落の底迄も。此の手は放さぬこな様もわしが手放して下さんすなと。互に引寄せ寄せられてフシ抱合ひ。てこそ口説きけれ。地母様のお文を。未來で讀まんと肌につけ。封目も切らねども親子は一世冥途にて。呵責に逢はば目も眩み妄執の雲に文字消えて。讀むも此の世の名殘ぞと親子の緣も封目も。切つて開きし文の中。詞これなう熨斗と昆布とに節分の。まめで下れの祝ひごと。地今が冥途の門出と。御存じないかフシいたはしや。母様常が血の道持ち長文書く事お嫌ひが。子の可愛さかこまごまと舟の中息災に。はやばや下り待ち祝ひり〳〵こ遊ばせし。詞父様今年は丁七十の賀の祝儀。一門衆の振舞もそもじ下りを待受けて。生御魂の祝ひ一所にと。盆迄延ばすと書かれしが。地盆には我も新精靈親子の盃濡萩の。露の手向と引替へて。果敢く我は草

葉の傷さで女房のお歎きを。思遣られて情なや何事も〳〵。退付け目出たくもじにて。申しわけ無べく極めで恥かしくとあられし。是が何の目出たい事子を讀ふ親心。無下になしたる身の罪科は。先の世からの約束か二枚重ねの御文を金水引にて綴ぢられし水引の紅落ちて。おつやといふ字は血に染みたり子の血は親の血の別れ血筋が數へて此の如く。先へ知らせのあるからは今の最期を何の昔。さぞや夢見が悪からう明日は六十六部道へ。違へても斬りても逃らぬ後の俤。いとほしの父母や名殘惜しの叔母様やと。文を抱きしめ肌につけ フシ悶へ。こがれて泣きければ。地男も共に伏し沈み昔日の嘆きは我故と。二人が縁にふたれ合ひ。フシ嘆せ返りて乞歎きける。それ〳〵時刻。親様も満々と喧方に程は無い。此の文口にくへて未來迄も持ちまする。最期の苦患に離れた合せて下さんせ。念佛も心で申すこな様口で高々と。すゝめて殺して下さんせと。地文ひん巻いて確かとくはへ南手は合掌心に念佛。顔で剃刀數へつつ早うと急ぐ目許にも。可愛男を見をさめの涙は玉を列ねたり。夫も今を限りの詞さあとはかりに振上げて。見れば目もくれ二目とも塞ぎ俯向き南無阿彌陀。南無阿彌陀佛を力にて標引寄せて剃刀の。柄までぐつと一刀突かれてうんと仰反り 三重のたうつ靈の〽曲の フシ息苦しむ體に。地氣も迷ひ可愛〳〵ヤ、可愛と共に苦しむ胸の心。南無三寶彼れじと落ちたる文をくる〳〵巻き。口押割つて含ませ。剃刀おつとり喉の笛圍を切りさき切りさき。續くは首の骨ばかり フシ刀で切つたる如くなり。地ヲメその剃刀の返す刃を。我が咽喉につく息も入る息もはや絶え〳〵の。同じ枕に死出の田長か（のイ）時鳥聞きに北野の鸚鵡 藍に染めたる魂魄に。悶絶に色をぞあけにける。

右之本令吟覺頭句音節墨譜
等不殘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾 〔竹本〕〔筑後〕

寶丽予以著述之本令校合候
畢全篇正本者誉

近松門左衛門

大阪高麗橋壹丁目
正本屋 山本九兵衛版
山本九右衛門版

編輯後記

一 この近松名作集は、黒木勘藏氏が二十年不斷の專門的研鑽の總合的結果であると申せば、最もよく眞實を語つてゐます。編輯部の私共の仕事は、全體の價値から申せばまことに微かなものであります。

一 この本の校訂上の責任は全然黒木氏にありますが、その校訂原稿を活字にする上に就いての校正上の責任は、全然私共編輯部が負はねばなりません。そして、それが如何に至難の業であつたかは、今日かうして振返つてみるだけでも息苦しさを感ずるばかりであります。近松の淨瑠璃が文字づかひも、詞づかひも、全く別格の特殊文學であることは今更申すまでもありませんが、その特別さが、普通の文章とは隨分かけ離れた特別さであるので、誤植であるか、誤植でないかどうしても分らぬ場合が生じ、原本と對抗するか、校訂者の黒木氏にたゞすかせねば安心のいかぬ箇所が隨所に出て來るには弱りました。それらの一例は、書物愛第四號に「誤植の如くして誤植でない實例」として掲載致しますから御一覧を願ひます。

一 尤も、淨瑠璃研究の專門家から見れば、さういふことはバカ〱しいことかも知れませんが、私共の頭には常に大多數の會員が浮んで居ります、事實おそらくその大多數の會員は淨瑠璃に關して、さやうに專門的知識を持たるゝものと推定することが出來ないからであります。さういふ頭から申しますと、例へば有朋堂文庫や國民文庫等が、すでに致してゐるやうに、これを音曲藝術としての淨瑠璃の臺本として取扱はず、「フシ」とか、

「地」とかいふものをヌキにした、一種の讀本としてしまつた方がなどとも、實は少しニゲを打つ下心もあつて、黒木氏に持掛けてみたこともありましたが、それは一言のもとに却下されて、さて、かうして苦しんで來てみると、やはり骨が折れただけ、それだけ奥行のあるところよさを覺えます。と同時にまた免れがたきは校正上のおちで、或は後になつて發見さるゝ誤植があらうかと、その公の審判を受くることの怖しさをも感ぜずにはゐられませぬ。極めて些細のことでも、お氣つきのところは嚴達下さるやうお願いたします。何等かの方法で是正いたします。

一 近松物には挿繪の材料が、いかにも稀有なので困りました。これは黒木氏にお願して、あらん限り、いれさしていたゞくやうに致したのですが、思はしい材料はないさうで、結局御覧のごときものにとゞめました。それでも從來の覆刻本から見たら、かなりの豐富さであります。第一回配本の「黄表紙廿五種」には色刷の口繪も二枚も入れたことであり、これにもぜヒと思つたのですが、これも然るべき材料がないので、かへつて無理に縁遠いものを持込むよりはといふので省くことに致しました。決して勞費を惜んだのではありません。止むを得なかつたのです。序に申上げますが、第七卷、第八卷の「淨瑠璃名作集」には、挿繪の材料も澤山ありますから、かなり賑かになります。

一 「堀河波の鼓」に丸本全部そつくり原形で收錄して、これに校訂組を頭註にしたごときに見ても、勞費を惜まず、何事も進んで難事を仕遂げて見ようとする私共の熱心さを御了解下さることと存じます。

一 丸本三十種そのーつを切放しても一冊子をな

すべきものを、まるごなしに此一冊に收めたといふことも、またそろ／＼自慢になりますが、黑木氏の校訂の御骨折は申すまでもなく、組版、校正その他いろ／＼の點で大變な仕事ではありましたが、そこにまた一冊を以て他書の三冊四冊分もの內容を盛らうとする私共の根本の方針から來る特色がありますので、從つて文字が小さいといふことや、天地左右の餘白が少いといふやうなことは、どうしても免れません。率直に申せば、近松物のやうな、むづかしい、どちらかといへば專門的な文學は、いくら活字を大きくしても、今日大多數の人に必ず通讀さるゝ性質のものではないかとも思ひます。或る機會の興味にひかれ、また或る時の必要に迫つて、はじめて精讀され、しかも精讀するに從つていよ／＼深きあじはひを見出すといふ風のものであらうといふやうなことから、多少文字は小さくも、凡そ近松の名作と稱せらるるものは、悉くこの上下二卷に收錄しておく方が、結局多くの人に多くの便利を與へるであらうといふことになつて、强ひて黑木氏の勞をわづらはし、その尊き研究の收穫を、かくの如く、いはゞ虐待してつめ込んだ次第であります。こゝに校訂者並に近松研究の同好者に陳謝すると同時に、大多數の會員諸氏の御滿足を期待祈念して、この筆を擱きます。

日本名著全集刊行會

編輯部謹記

大正十五年十一月十五日印刷
大正十五年十一月十八日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第四卷
近松名作集上
（非賣品）

編輯兼發行者
印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿六巻及追加篇二巻 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懷硯 ○近代艶隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土產 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

正篇 ○芭蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座鋪 ○續猿蓑

附篇 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四巻 第五巻 近松名作集 上 下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蝉丸 ○最明寺殿百人上臈 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月の紅葉 ○堀河波の鼓 ○卯月潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○艶狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴門 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○鑓權三重帷子 ○壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎浪枕 ○平家女護島 ○雙生隅田川

○心中天網島 ○攝津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繋馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上下

○雪女 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○お染久松袂の白しぼり ○八百屋お七 ○笠屋三勝廿五年忌 ○心中二つ腹帯 ○傾城思升屋 ○愛護若塒箱 ○富仁親王嵯峨錦 ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大内鑑 ○苅萱桑門筑紫𨏍 ○敵討襤褸錦 ○御所櫻堀川夜討 ○釜淵雙級巴 ○ひらがな盛衰記 ○鶊山姫捨松 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋 ○兵根元曾我 ○源平雷傳記 ○百夜小町 ○傾城淺間嶽 ○成田山分身不動 ○中將姫京雛 ○丹波與作手綱帶 ○傾城壬生大念佛 ○鳥邊山心中 ○嫗景歌仙櫻 ○心中鬼門角 ○伊勢頭戀寢刃 ○漢人韓文手管始 ○五大力戀緘 ○金門五三桐 ○四谷怪談 ○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○傾城色三味線 ○傾城曲三味線 ○傾城歌三味線 ○世間息子氣質 ○浮世親仁氣質 ○世間娘氣質 ○咲分五人娘 ○傾城禁短氣 ○商人軍配團 ○棠大門屋敷 ○鎌倉諸藝袖日記 ○日本新永代藏 ○御前義經記 ○好色萬金丹

第十巻 怪談名作集

○御伽婢子 ○狗張子 ○玉帚木 ○虚實雑談集 ○怪談登志男 ○近世百物語 ○西播怪談實記 ○茅屋物語 化物判取帖 ○豐年珍話集 ○實物語 ○怪談實錄 ○英草紙 ○繁々野話 ○雨月物語 ○垣根草 ○莠句冊 ○近代百物語 ○怪談記野狐名玉 ○怪談名香富貴玉 ○清誠談 ○臥遊奇談 ○深山草 ○怪異前席物語 ○古加良志草紙

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記

○噓多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本　○江戸生艶氣樺燒　○莫切自根金生木　○文武二道万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○即席耳學問　○廬生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語　○世上酒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間萬事吹矢的(草稿)

第十二卷　酒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の卷　○嫖客三體誌　○娼妓絹籭　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林　○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園　○和唐珍解、　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房　○寸南破良意　○仕懸文庫　○惜別案子　○道中粹語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○三教色　○契國策　○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　婦美車紫野　○起承轉合　○粹町甲閨　○古契三娼　○濟都　酒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問　○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟煙の卷　○女郎買糠味噌汁　○美地の蠣殼

第十三卷　讀本集

○昔話稻妻表紙　○本朝醉菩提　○日本水滸傳　○旬殿實々記　○三七全傳南柯夢　○飛彈匠物語　○天羽衣

第十四卷　滑稽本集

○浮世風呂　○浮世床　○花暦八笑人　○四十八癖　○妙竹林話七偏人　○古朽木　○奇妙圖彙　○小紋雅話　○和歌始衣抄　○客者評判記　○無駄砂子等。○附錄に落語本を添ふ。

第十五卷　人情本集

○春色梅暦　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用　○八萬鐘

第十六卷　第十七卷　第十八卷　南總里見八犬傳　上中下

第十九卷　膝栗毛其他

○東海道中膝栗毛　○木曾街道膝栗毛　○六阿彌陀詣

第廿卷　第廿一卷　修紫田舍源氏　上下

第廿二卷　第廿三卷　和文和歌集　上下

○眞淵歌文集　○蘆庵六帖詠草　○桂園一枝(景樹)

○うけらが花（千蔭） ○琴後集（春海） ○宗武歌集 ○曙覽歌集 ○藤簍冊子（秋成） ○言道歌集 ○良寬歌集 ○女流歌文集

第廿四卷 俳文俳句集

○五元集（其角） ○五元集拾遺（同） ○五元集脫漏（同） ○雜談集（同） ○類柑子（同） ○玄峰集（嵐雪） ○其袋（同） ○去來文章發句集 ○ひとりごと（鬼貫） ○鬼貫句選（鬼貫） ○七車（同） ○とくとくの句合（素堂） ○韻塞（許六） ○風俗文選（同） ○葛の松原（支考） ○笈日記（同） ○業文消息（許六・野坡） ○蛙合（仙化） ○俳諧職人盡（寥和） ○鶉衣（也有） ○蕪村句集（蕪村） ○蕪村文集（同） ○新花摘（蕪村） ○寫經社集（同） ○十番左右句合（同） ○明鴉（几董） ○續明烏（同） ○新雜談集（同） ○井華集（同） ○太祇句集（太祇） ○春泥句集（春泥） ○三春日記（蓼太） ○芙蓉文集（耳得） ○白雄句集（白雄） ○骨書（樗良） ○俳ざんげ（大江丸） ○はいかい袋（同） ○曉臺句集（曉臺） ○佐渡日記（同） ○おらが春（一茶） ○一茶句集（同） ○鼠の道行（成美） ○成美家集（同） ○蒼眼集（道彥） ○鶴芝（士朗） ○斧の柄（乙二） ○續綺歌仙（宜麥） ○屠龍の技（抱一）

第廿五卷 狂文狂歌集

○古今夷曲集 ○萬葉狂歌集 ○萬代狂歌集 ○四方のあか ○四方の留糟 ○千紫萬紅 ○萬紫千紅 ○めでた百首 ○かくれ里の記 ○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり ○吉原十二時 ○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇） ○風來山人六々部集（後篇） ○風流志道軒 ○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿六卷 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十篇 ○誹風柳多留拾遺四篇 ○川傍柳五篇

追加篇 第廿七卷 歌謠音曲集

○義　太　夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段） ○艶容女舞衣（下の卷・酒屋の段） ○戀娘昔八丈（下の卷・鈴ケ森の段） ○桂川連理柵（下の卷・帶屋の段） ○廓文章（吉田屋の段） ○傾城戀飛脚（下の卷・新口村の段） ○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段） ○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段） ○木下蔭狹間合戰（七つ目 竹中陣屋の段） ○蝶花形名歌島臺（八の切，小坂部館の段） ○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段） ○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段） ○八陣守護城（八の切・正清本城の段） ○生寫朝顏日記（宿屋の段） ○壺坂靈驗記（澤市内の段） ○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段） ○

鎌倉三代記(七の切・三浦別れの段)　○加々見山舊錦繪(六の切・草履打の段)　○太平記忠臣講釋(七つ目・喜内住家の段)　○祇園祭禮信仰記(四の切・碁立の段)

○河東節

○松の内　○神樂獅子　○隅田川舟の内　○兎萬歳　○炎すゑ緞の疊夜着　○酒中花(水調子)　○うかぶ瀬　○ぬれ扇　○亂髪夜編笠　○助六所縁江戸櫻　○常陸帯花櫛　○道成寺　○淨瑠璃供養　○都鳥　○熊野　○泰平住吉踊　○浮世傀儡師(外記物)　○小鍛冶名劍卷(半大夫物)

○一中節

○辰巳の四季　○松づくし　○泰平船づくし　○高砂松の段　○神樂高砂　○[illegible]の島臺　○萬屋助六心中　○自然居士過去物語　○源氏妹が宿　○夕霞淺間嶽　○尾上雲賤機帯　○源氏十二段　○頼光大江山入　○鉢の木　○與作小萬夢路の駒　○道行三度笠　○鵜飼石和川　○お夏笠物狂　○競牡丹　○源平妹脊の鳥合

○常磐津節

○老松　○子寶三番叟　○蜘蛛絲梓弦(仙臺淨瑠璃)　○積戀雪關扉(關の戸)　○四天王大江山入(古山姥)　○兩顔月姿繪(慈寶)　○戻駕色相肩(戻駕)　○帯文桂川水(お半)　○倭假名色七文字(源太)　○[illegible]　○松色操高砂(太神樂)　○再夕暮雨の鉢木(雨の鉢木)　○寺貢姫釣瓮(釣狐)　○後之月酒宴島臺(角兵衛獅子)　○恩愛瞔關守(宗清)　○願絲縁苧環(おみわ)　○忍夜戀曲者(將門)　○花舞臺霞猿曳(新うつぼ)　○新曲雲間の市川(新山姥)　○乘合船惠方萬歳(乘合船)　○其扇屋浮名戀風(夕霧)　○景清　○勢獅子劇花籠(勢獅子)　○釣女　○戻り橋　○三保の松　○松の島　○三世相錦繍文章(おその六三)　○大森彦七

○富本節

○年朝寒例壽(長生)　○四十八手戀所譯(相撲をし島)　○百夜菊色の世中(關寺)　○夫婦酒替ぬ中仲(鞍馬獅子)　○其俤淺間嶽(淺間)　○道行戀飛脚(梅川忠兵衛)　○[illegible]達理模(鳥賣)　○新曲高尾懺悔(高尾懺悔)　○花川戸身替の段(身替お俊)　○春夜障子梅(夕霧)　○新曲かぐら獅子(神樂獅子)　○徒夢戀曲物(松風)　○茂懐悔謎昔(扇賣高尾)　○道行念玉章(長作)　○菊蝶初音道行(忠信)　○掛筆力七以呂波(乙姫)　○草枕露の玉歌和(玉川)　○奈須野　○御代榮益穰富穰(豐の前)　○高砂女夫

○清元節

○梅の春　○業能栞延壽(長生)　○北州千歳壽(北州)　○四季三葉草　○其小唄夢廓(權八)　○鐵の五月雨(小舞千兵衛)　○深山櫻及兼樹振(保名)　○傷名殘押繪交叢(鳥羽繪)　○月雪花名殘文臺(玉兎)　○詠梅松清元(茶筅賣)　○色山廓深川(待人)　○大和い手向五字(子守)　○色彩間刈豆(かさね)　○法

花姿色同（山歸り）〇月花技女鳥（山姥）〇催花手
向橋（吉原雀）〇復新三組盞（大山參り）〇道行浮
時鳥〇道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）〇
六歌仙容彩「文屋・喜撰」〇獨生の花淺草祭（惡玉）
〇おどけ俄煮珠取（玉屋）〇道行旅路の花聟（落人）
〇再春菘種蒔（舌出し三番）〇初霞淺間嶽（淺間）
〇〆能色相圖（神田祭）〇逆鉄菊睦言（菊畑三菊）
〇術懸間睦言（お若）〇傀儡名色七文字（手古舞）〇
〇重褄間の小夜衣（白拍）〇明鳥花濡衣（浦里）
梅柳中宵月（清心）〇日月星晝夜の襲分（夜這星）
〇初櫓噂高島（三人三吉）〇貸浴衣汗雷（夕立）〇
忍逢春雪解（三千歳）〇色彩艶夕映（紅金）〇花雲〇
助相傘（禿助）〇青海波〇助六曲輪菊（助六）

〇新内節

〇二重衣戀占（花咲綱五郎）〇若木仇名草（蘭蝶）
〇千日寺名殘鐘（三勝半七）〇眞夢血染旭桔（花菖
平三）〇歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）〇傾城音
彩籠（おとは七郎兵衛）〇膝栗毛（赤坂の段）〇膝
栗毛「市子の段」〇明鳥夢泡雪（浦里）〇明鳥後眞
夢〇果身貴の段〇千日寺名殘鐘（三勝半七）

〇薗八節

〇道行相合巨燵（梅川）〇桂川戀の柵（お半）〇鳥
邊山〇花街の色糸（植木屋）〇道行菜種の亂咲（お花
〇江戸の檜姿（おひな吉三郎）〇道行緑花房（お花
半七）〇口舌八景（小いな半兵衛）〇小春治兵衛巨
燵の段〇夕霧

〇江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

〇矢の根五郎〇無間の鐘〇傾城道成寺〇風流
相生獅子（相生獅子）〇二人椀久〇英獅子亂曲（枕
獅子）〇百千鳥娘道成寺（きなきだ道成寺）〇高
尾さんげの段（高尾懺悔）〇天人羽衣〇京鹿子娘
道成寺（娘道成寺）〇英執着獅子（執着獅子）〇風
流妹背の杜建（杜建）〇門出京人形（水抱丹前）〇
亂菊枕慈童（菊慈童）〇鐘入解脱衣（解脱）〇劔鳥
帽子照葉遊（劔鳥帽子）〇柳雛諸鳥囀（寶娘・うしろ
面）〇初咲法樂舞（法樂舞）〇ねこのつま〇乘掛情
の夏小立（與作）〇根櫻宇佐幣〇百夜車〇姿の
鸚關寺小町（關寺）〇春調娘七種（七種）〇童子敷
面技（めんかぶり）〇衣かづき戀破車（やれ車）〇
責獅子〇教草吉原雀（吉原雀）〇相生獅子〇撤
染分紅葉（うはなり）〇隈取安宅松（安宅）〇御代
松子日初懸（小松曳）〇其容形七枚起請（こもそう）
〇関東小六後雛形（淡島）〇其面形二人椀久〇黒か
み〇女夫松高砂丹前（高砂丹前）〇菊壽の草摺
〇勢五大力〇吹雪の雛形（雛形狂亂）〇三重霞嬉
歡喜鳥（三重霞傀儡師）〇舞扇園生春（舞扇）〇濱
松風戀歌（濱松風）〇ゆかりの月〇美面より〇七枚
續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）〇遲櫻手爾葉七字
（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲盃）〇戀
男舞松風（調松風）〇再春菘種蒔（舌出し三番叟）〇戀
異奇掛合（犬神）〇四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）
〇閏妓姿八景（節季候・心猿・晒女）〇正札附根元草
摺（正札附）〇寄三津再十二支（小原女・乙姫・四
つ竹）〇其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）〇

新獅子　○三升猿曲舞(猿舞)　○石橋(外記の石橋)　○老松　○不動　○七所御語初鰹燦(西王母・献入娘)　○大和い、手向五字(官女・牛若)　○外記猿　○復新三組盃(初雁の傾城)　○廓三番叟(廓三番)　○歌へすく〳〵餘大津畫(時頼・關三の座頭・關三の奴)　○月雪花蒔繪の庭(月の巻)　○拙者力七以呂波(芝説の傾城・供奴・浦島・羅筆繪)　○八重霞賤機帶(賤機)　○後の月酒宴島臺(角兵衛獅子)　○御濱玉海老手逆(とんび奴)　○吾妻八けい(八景)　○六歌仙容彩(業平小町)　○姿花後雛形(小鍛冶)　○初子日　○俄獅子・　○外記の傀儡師　○初しぐれ　○巽八景　○花籠濡色所八景(助六・景清・新累帳)　○勸進帳　○花兄弟十二月所作(若菜摘・鍾馗・雨)　○島臺　○軒端松　○士農工商　○秋色種　○種蒔三番叟　○花見車　○手習子　○織どの　○常磐庭　○鶴龜　○五色の絲　○今様小鍛冶　○柳糸引御攝(操三番叟)　○壽　○鞍馬山　○翁千歳三番叟　○廓丹前　○菖蒲ゆかた　○寒三之睡　○紀州道成寺　○連獅子　○時雨西行

○歌澤

寶派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雑曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雑曲三百餘を收む。

追加議 廿八卷　謠曲三百番集

○脇能物

○高砂　○弓八幡　○志賀　○淡路　○御裳濯　○代主　○佐保山　○松尾　○養老　○老松　○白樂天　○放生川　○鶴龜　○東方朔　○白髭　○大社　○寝覺　○源太夫　○道明寺　○難波　○鵜祭　○輪藏　○富士山　○江島　○賀茂　○嵐山　○氷室　○逆矛　○要石　○和布刈　○竹生島　○九世戸　○岩船　○金札　○呉服　○西王母　○右近　○繪馬　○鱗形　○玉井　○内外詣

○修羅物

○田村　○八島　○箙　○忠度　○俊成忠度　○經政　○通盛　○兼平　○賴政　○實盛　○巴　○清經　○朝長　○敦盛　○生田敦盛

○三番目物

○野宮　○井筒　○芭蕉　○采女　○東北　○梅　○佛原　○墨染櫻　○身延　○半蔀　○夕顏　○定家　○江口　○楊貴妃　○雪　○二人靜　○千手　○六浦　○藤　○杜若　○羽衣　○誓願寺　○小鹽　○雲林院　○遊行柳　○西行櫻　○陀羅尼落葉　○源氏供養　○大原御幸　○吉野靜　○住吉詣　○松風　○熊野　○草紙洗小町　○山姫　○祇王　○胡蝶　○吉野天人　○[illegible]　○葛城　○龍田　○三輪　○卷絹　○檜垣　○關寺小町　○鸚鵡小町　○姨捨

○四番目物

○三井寺　○櫻川　○柏崎　○百萬　○飛鳥川

[illegible]

五番目物

[illegible]

以上日本名著全集、第一期出版、「江戸文藝之部」一至廿六卷及追加編二冊は、この卷黄表紙廿五種を第一回配本として今後毎月一冊乃至二冊づゝを刊行するもので、豫約申込は、今年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に伴ふ多量製產の利得を以て、益々安い本を作らんがため、おそらく當分は將來も、その後も、また現在も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別、從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。（廣）